

整備工作兵が提督になるまで

らーらん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

舞鶴第二鎮守府に所属する【宍戸龍城】（ししど・たつき）海軍大尉は元々、海軍軍人だった祖父の強い願望で海軍へ入隊する。海軍兵学校を主席で卒業し、その後は鎮守府で整備工員として働く。男達や艦娘達と共に鎮守府を支えるエンジニアとして戦況に対応し続け、大変ながらも充実した日常を送っていた。

そんなある日、大規模作戦で提督の補佐をする事となった彼はその後、作戦司令官から提督にならないかと誘われる。

11／11 海軍大学校編「時雨達の姉」と「ゲーセン」の間に抜けていた「大抵ギャンブルをするやつは負ける」を追加しました。

目次

プロローグ	1
誘われるまで大規模作戦手伝います編	
休日は金曜日は終業から始まる	7
世界は混沌に包まれている	17
大規模作戦の会議	25
休日出勤、アイアンマン	33
補佐官となる、祖父からの手紙	38
補佐官仕事	44
大規模作戦、補佐官として	50
小さな打ち上げ	57
やらないか？	68
提督育成プログラム始動編	
勧誘仕事	75
ストーリー1	83
ストーリー2	88
村雨ちゃんとデート	98
陸軍さん1	107
陸軍さん2	115
陸軍さん3	122
新たな仲間、散らされる後輩	136
クソジジイ、そして決意	148
海軍大学校編	
いざ行かん、東京へ	158

時雨達の姉	166
大抵ギャンブルするやつは負ける	178
ゲーセン	186
デイフェンスシステムについてのデイベイト	196
合コン、人類皆チーター	204
教官経験、そしてデジャブ	221
大戦時代の若かりし記憶	237
お久しぶり舞鶴	245
舞鶴 何やってるんですかね？	255
舞鶴 vs 秋津洲	265
柱島 Welcome	274
柱島 イギリスの料理はUnwelcome	283
柱島 予想外の成果に浮かれるのはバカがする事だ	289
横須賀第四鎮守府 難しい問題だな	300
横須賀第四鎮守府 川内型の中で好みは神通	314
俺は	324
卒業式	333
新地点	341
鴨川要港部編	
yaggy	351
血が付着したコールドームを拾った時のおどましさは、口では形容し	
難い	359
最初の大きな戦闘	369
作戦のあとは	380
スワップ	391

官僚襲撃事件	405
密談は学校の屋上にて	419
もうフランス語は喋らない	427
未来見すぎ	437
艦娘との出会いは同人誌の導入のような	446
ナンパde難破	458
アンチグループ	471
久しぶりの仕事	480
ゴーヤはよくモテる	490
どうせ死ぬなら	499
将校会議（同期のみ）	505
なぜこうもうまく行かんのだ？	512
お見合い大合戦	519
お見合い大合戦2	526
大洗演習	534
大洗演習 vs 同僚	542
大洗演習 もう一つのミッション	551
極秘作戦失敗してた	559
大規模作戦会議ー八号作戦ー	565
彼女は淀、軍令部次長	578
アカシトアタシ	589
医務室で	598
シークレットビジット	608
八号作戦成功	616
八号作戦八丈島	629

八号作戦その後

酌

八号作戦その後のその後

帰ってきたぞ

テレビは食堂で

どういう事ですか!?

お見合い (ガチ)

お見合い (ガチ) 2

お見合い (ガチ) 3

お見合い (ガチ) 4

お見合い (ガチ) 5

長崎警備府編

覆面ボス

覆面ボス 2

覆面ボス 3

白露型全員集合

長崎警備府幕僚会議

佐世保 (仕事をするフリ) 会議

ネタバラシ

ネタバラシ 2 キュイン!

記者さんキシヤサン

イケメン○ね

艦娘が陸で活躍してる……

C○stc○

コンビニ強盗

636

648

662

672

685

696

706

716

729

746

755

766

773

778

785

791

801

806

815

821

830

838

848

855

何言ってるんだコイツ？

警備府の屋上でMIKKAI

警備府の屋上でMIKKAI2

警備府の屋上でMIKKAI3

なんだと？

明石次官が、来たゾ

阿久根でアクメ

長崎駐屯地

僕だけがない警備府

何言ってるか分からないけどこれでようやく解放される

元部下、艦隊に加わる

ホリデー

舞鶴参謀時代 その名は天龍

舞鶴参謀時代 人と関わりなさい！

舞鶴参謀時代 料理大会、もしかして幽霊？

舞鶴参謀時代 初霜ふもふ

そして現代へ

沖縄作戦編

Progressive

バトルの前談

外国の方々が集まる由緒正しきティータイム

彼女はサラトガ、股間に来る

まだ慌てるような時間じゃない

緊急会議

ギアアップ

861

871

879

886

893

905

917

925

942

953

962

969

980

990

995

1004

1014

1021

1032

1039

1048

1056

1061

1070

1070

ギアアップ2

ギアアップ3

九州防衛作戦

九州防衛作戦2

九州防衛作戦3

九州防衛作戦4

防衛終わり

我々は今度こそ勝つ。それを見せてやる。

超緊急会議

第二次沖繩作戦 み、みんな！ 進軍激しくしないで！

深海棲艦のボス

コイツらと関わるとロクな事が起きない

Bringing Work Home

これぞ通常業務

マジ卍

戦勝祝

俺の正体も見破れなかったくせによく言うよ

俺はやつと提督に……

事なかれ主義とは、先手を打てる者に与えられた称号だ

後日談番外編

デート大作戦！

デート大作戦！2

デート大作戦！3

デート大作戦！4

デート大作戦！5

13131303129312861277

1266125912501240122712151207119111831170116111521139113311261114110210961080

デート大作戦！6

デート大作戦！7

デート大作戦！8

デート大作戦！9

1346133613251317

プロローグ

京都府の舞鶴市は海面に沿っている。カモメの鳴き声と潮風なんかは正に海の街を彷彿とさせる。

影の薄い歴史を持つ八万規模の舞鶴は、日本が大規模な海軍を作った時に四大鎮守府として名を馳せ、日露戦争の時は殆どの船がこの舞鶴湾から出港した。

この舞鶴第二鎮守府は、日本海方面の海軍基地である。この鎮守府同様、『艦娘』と言う女性兵士の起用で劇的に変わった深海棲艦との戦線は、人類に『優勢』の二文字をもたらした。その艦娘が集う基地を鎮守府と呼び、提督と言う指導者の元で、国を守る事を義務付けられている。

従来 of 艦船に比べ遥かに出撃コストが安く、小回りが効き、そして何より強い。特に深海棲艦のような人形のバケモノに対しては効果的であり、イ級一隻に対していちいちイージスの出動、あるいはミサイルを撃たなくても良くなったのは、国にとっても海軍兵士にとっても負担が減る。

当然ながら、こういう新技術をサポートするためにはそれ専用のサポート集団が必要だ。それは妖精と呼ばれる謎の生物だけではなく、俺たちみたいな人間の手も借りなくてはならない。

それが俺たち『整備工作班』だ。

艀装、装備品のメンテナンス及び修理

、施設の点検、資材の運搬、改修改造、etc...

これらをほぼ全てを管理するのはとてもじゃないが妖精だけではできない。

妖精は、凄く細かい所を修復、細かい場所を掃除、個々の艦載機の搭乗等をしてくれて、必要な事には変わりないけど、やっぱり人間の手で作られた物を維持するには人間の手を使わなきゃいけない。

例を挙げれば……そうだ、ガン〇ムだ。あのクソデカイモビルスー

ツを起動する為だけにせっせと走り回ってる作業員達がいなくて、そもそも戦えない。それなのにデカイ顔してる操縦者や主要人物の描写しか映さない所なんて、正に今の艦娘と俺達に似ている。

そんなせっせと働く作業員の一人である俺、「穴戸龍城（ししど・たつき）」大尉は、30人以上を束ねる整備工作班の副班長をしている。兵学校で習った事を理解してさえすれば後はマニュアル通り……と言う訳にもいかないけど、凄いプレッシャーを感じてるわけでもない。舞鶴に来て早三年、主席で兵大学卒業したお陰で大尉に昇進もしたし、普通に気楽で順調な人生を送っていると自負できる。

ー工房。

「……ゴシゴシッ、ビュッン！ドカーン！ドドドドオッン！」

「……艦載機を片手になにをやってるんだい穴戸くん？」

「ほら、よく昔小さいときにやっただろ？飛行機のおもちやをズジャジャジャジャーン！って」

「僕はお人形さんを買ってもらってたから、そういう事はやらなかったかな？」

叫んだら山彦が返ってくるぐらい大きな工房。そこで同僚と二人きりで空母の艦載機を拭き続ける行為はどことなく、子供頃に作った飛行機のプラモデルを彷彿とさせる。

日本男児なら零戦が定番だが、みんなが同じものを持っているは面白くない。まあB-29を選ぶやつは、多分愛国心が欠けているんだろうと子供ながらに思った事もあるけど。

因みに俺はスピッツファイアを推していた。理由は単純に、初めて買ってもらったやつだから愛着が芽生えた。

今ゴシゴシしてるやつも結構愛着がある。何故なら、これは俺が何度も何度も修理しているヤツだからな。

「時雨は人形か……人形って言うことは、ジーアイジョーとか？遊ぶときは悲壮系のストーリーを作りあげて死ぬシーンだけやるタイプかな？」

「ぼく女の子なんだけど？ぼくが男の子だって言いたいのかな？」

「だって僕っ子なんて今時流行らないだろ？キャラ付けも良い所だぞ時雨」

俺の頭上にレンチを叩き込もうとしている彼女は【時雨（しぐれ）】中尉。同じ頃に入隊した同期で、艦娘であるにも関わらず、俺達と同じ整備工作班の仕事をしている。

裏方をこなす理由は、多分戦わなくてもいいからだと思う。時雨を含め戦闘に直接出ない、工作艦明石や補給艦間宮のような艦娘は多く居る。

ツナギ姿の時雨は、三つ編みがトレードマークな美少女なのだが……正直、リアルで僕っ子とか少し引いたのが第一印象だった。

「うお！危ねえだろクソガア！そんなモン振り回してんじやねえよ！」

「だったら僕みたいな美少女にそんな事言うもんじやないよツ。次僕が男だとか言ったらガチで武器持ってくるから」

「武器って何だよ？時雨だけに、燐火円礫刀！とか？」

「……はツ？」

「な、なんだよ……あのフラフープクソカッコいいだろうがア……」

「……正直、僕はローズウィップの方が好きかな」

艦娘になったからと言って戦う道しかないって訳ではなく、戦闘班を支援する目的で働いて俺達と同じように給料を貰う事が可能であり、中には清掃員のような役割で艦隊、ないしは鎮守府を支えている娘もいる。選択肢は多い。

「相変わらず姉さんと宍戸さんは仲がいいですねっ。村雨、ちよつと妬いちゃいますっ」

「嫉妬なんかしなくても、呼ばれれば何時でも村雨ちゃんの部屋に行くよ」

「その時は僕が止めるね」

「ふふっ、二人が残業していると聞いたので、おにぎり持ってきちゃいました」

「「ありがとう村雨！」」

工房に食事を持ってきてくれた彼女が、清掃員の一人として鎮守府

を支える【村雨（むらさめ）】ちゃん。時雨の妹で、胸がデカイ。そして見ての通り、出るところ出て締まるところは締まってるー男受けする事間違いない身体付き。

しかし思わせぶりぶりな態度を取っておきながら、ガードが固い事で知られている小悪魔系女子は、野郎共のアイドル的存在。

俺はそんな娘に、工房で残業してるっただけでおにぎりを持ってきてもらえる……たぶん姉の時雨が居るからだろうけど、俺にも持ってきてくれたって思うだけで明日頑張れる。

「それで……これは何をしているんですか？」

「艦載機を補充しているんだ。でもただ補充するだけじゃ妖精のモチベーション上がらないから、一つ一つ綺麗にしてるんだ」

「こ、これ全部ですか……？」

「そうだよ村雨ちゃん。妖精たちにどくどくしてもって頼まれたからさ。もうすぐ終わるけど」

ワリと大きい艦載機を見せて言う。

妖精たちが乗る艦載機は日々使われている痕跡が所々あり、傷や色の剥れ等は専用の洗浄機に入れても直らない。洗浄機より俺たちの手で綺麗にしてほしいと、妖精たつての願いを叶えるために時雨と二人で残業に乗り出したのだ。

本来なら妖精たちだけでもできるが、時計は夜の十時を回って、妖精たちにとってはお眠の時間だ。明日も空母を使う作戦がある分、無茶はさせたくない。

油臭い手を手拭いで軽く拭き、村雨ちゃんが作ってくれたおにぎりを頬張る。

「うん、おいしいーシャケと油と村雨ちゃんの手の味がするー！」

「ちゃんと手を洗わないから油が混ざるんだよ。穴戸くんはホントそういうところ適当だねツ、本来なら村雨のおにぎりを食べる資格すらないのに」

「なんだとキサマ……ッ」

「ま、まあまあ……美味しいって言ってもらえて、なによりですっ」

天使とは村雨ちゃんの事だ。

時雨はボトルの水と油用のペーパーソープを使い丁寧に手を洗っている。きつちり三十秒洗ってから乾かし、「いただきます」を言うから口に運ぶ。

「ん〜おいしいよ村雨！やっぱり僕の妹だね！」

「ふふつ、ありがとう時雨姉さん」

「やっぱりって何？顔が似てるどころとか？」

「疲れた僕に濃い目の味付けをしてくれたことさ。昆布の塩が疲れた身体に効いて、村雨の気も利いてる……なんちゃってっ」

「は？」

上手いこと言ったつもりか。

「い、いや、今のは忘れてほしいかな……」

「え、なんで？恥ずかしがる事はないぞ。塩が効いて、気も利いてる

……BY. SIGURE」

「姉さんそれは……」

「〜〜〜っ！」

自分で言った言葉に悶えている時雨。まあまあと村雨ちゃんが宥め、俺は自分のを完食する。

そのすぐ後に村雨ちゃんが時雨におにぎりを食べさせているところを見て、とても羨ましいと思った。口をぐいぐい拭いてもらった所を見て、俺は何故自分の手を使って食べてしまったのかと後悔する。

「宍戸さんに時雨姉さん、もうフタフタマルマルでしょ？早めに切り上げた方が……」

「ああそう言えばそうだね、じゃあ宍戸くん後は頼めるかな？」

「なんで俺が残りやる的な流れにしようとしているの？あとちよつとなんだから俺とお前でさっさと済ませようぜ？」

「女の子はこれ以上働くとお肌に良くないんだ。頼れる男の子なら、僕の代わりを頼めるかと思ってっ……だめ、かな……っ？」

「上目遣いをしてもだめだぞ。それにこの男女平等社会に男も女もない」

「だからモテないんだよ」

「ハア!？」

「グルルツ……！」

「お、落ち着いて二人共」

とはいえ、既に夜なのは確かだ。俺たちが磨いているのは補充用の艦載機であり、一度や二度空母が大破したぐらいじゃないと乗せてもられない言わば野球の補欠。

残り10機程度は綺麗にしなくても大丈夫か。

「残りは磨かなくても大丈夫なんじゃね？かすり跡が少し残ってるだし、明日出撃するのも分からないんだからほつといってもバレないバレない」

「え、いいんですか？」

「宍戸くんの言うとおりこれは日頃頑張ってくれている妖精さんたちへの感謝みたいなものだから必須じゃないんだ。多少汚くても問題なく動くし」

「そうだったの……じゃあもう上がれるんですねっ」

「そうだな。じゃあ上がるか……お疲れ〜ツス」

「お疲れさま〜」

「お疲れ様ですっ！」

大量にあつた艦載機は格納庫へとしまい、掃除道具や塗料等を道具箱へと戻す。

手拭いで汗を拭き、時雨と村雨ちゃんを連れ工房を後にする。村雨ちゃんの胸が歩く度に揺れる様をチラ見するが、時雨の眼光で牽制される。いつの時代も、女子は男子の視線に敏感である。

誘われるまで大規模作戦手伝います編
休日は金曜日は終業から始まる

「急げ急げエ！モタモタしてると入渠した艦娘を待たせる事になるぞオー！」

「「はい!!」」

― 出撃所近くの修理場。

班長の言葉を受けながら艀装の調整、装備の修理を妖精と共にこなしていく。入渠している間の艦娘達にとっては一見、魔法に掛かったかのように艀装と装備が直っているようにも見えらるだろうが、裏では俺達が職人技と連携を駆使してそれを用意している事に少しはスポットライトを当てて欲しい。

今回提督が立案した作戦の一つである、「空母組が大破したら高速修復して再度スクランブル発進する」と言う無茶な要求を丸呑みしたせいで、レンチ等の道具や部品を投げながら仲間に渡す現状がここにあった。

(※本来は近くに置いて渡します、絶対真似をしないで下さい)

「おいなにやってんだッ!?もう両足に付ける艀装は直したぞ!!」

「そんな早く終わるわけないでしょ!?コツチは大鳳の艦載機全部補充しなきゃいけないんだよ!?バカかなキミは!?!」

「コツチは腕の部分終わったぜ!何でもいいけどさっさとしねえと大鳳ちゃん出撃できねえまま作戦終わっちゃうぞオー！」

全てが全てマニュアル通りになっている訳じゃないけど、ある程度マニュアルに従っていれば後はあつちこつちを直して、終わり!とうまくいくはずも無い。こう言う作戦の時は大抵数回は誰かの罵声を聞く事になるが、別に仲が悪いって訳でもない。

直している間に部品が壊れた、使ってる道具を間違えた、朝から腹の調子が悪いなど、どうしようもなく溜まる鬱憤を仲間同士にぶつけ

て相殺しているだけだ。

仕事が終わったら飲みに行つて、細かい事全て忘れるまでがテンプレである。

『遅れて申し訳ありません！大鳳、いつでも出撃可能です！』

「了解！大鳳型装甲空母、大鳳の艦装を展開する！」

出撃パッドに乗っている大鳳を確認した後、みんなで一斉に修理し終わった両腕両足の艦装等を出撃所へと繋ぐハッチに押し込む。

『大鳳、出撃します！』

アニメで良く見る変身シーンのようにガチャーン、ガチャーン！んと、脚には俺が修理した艦装、腕には同僚が修理した艦装、カッコよく手でキャッチしたボウガン型の艦載機発射機……プリ〇ユアに凄く似てる。変身は男のロマンだつてこれ一番言われてるから。二つとも女の子だけど。

「ハア……何時になったら終わんだよ作戦？もうかれこれ10人分は直してるぞ？一時間で」

「確かに今日の大破ペースは凄い。でもこれ以上は資源の問題もあるし、もうそろそろ終わるんじゃないか？」

「僕はもう疲れたよ……早く身体拭きたい」

俺や時雨を含めた同僚たちの感情が班長にも伝わったのか、「俺もアサヒ飲んでえ」と親近感を覚える嘆息を発する。

30人程いるこの工房の精鋭こと俺達と妖精たちはみんな肩を落としながら修理場の上に取り付けられているスピーカーに目線を移す。『早く作戦終われ』と言わんばかりに。

『こちら提督、みんなよく頑張ってくれた。作戦は終了だ』

『『よおおおっしやあああ!!!』』

天の一声を聞いた民衆は踊り狂う、そんな表現があつてる。ツナギの漢達の汗やスパナが飛び交う。今日が地球最後の日でも物は絶対に投げるなど注意したところだけど、無事に終わった喜びから俺も踊り狂う。

「ツシヤアオラア!!これで明日から待望の給料日十休日だクソがア!!
見てなかった冬アニ完走するぞオ!!」

「不健康そうな休日の過ごし方だね」

「社会人になるとなあ、休日はどうしてもジャンキーに過ごしたくなるもんなんだよ。不健康な食生活、不健康なタイムスケジュール、不健康な姿勢、全てが最高級の至福なんだよ」

「まあ気持ちは分かるけどね……じゃあその不健康な食事に移る前に
食堂で健康な物を食べようか」

「おう!でもその前にシャワーからだな」

「そうだね、じゃあ食堂で待ってるよ」

「え?一緒に入らないの?」

「殺すよ?」

「冗談だつてツ、ハハハ。じゃあ後でな、時雨中尉」

颯爽と手を振りながら修理場を出て行く時雨中尉。俺も遅れまい
と作業服のままシャワー室に急ぐ。

―寮の廊下、夜。

シャワー室から出て、廊下を歩いているときつき出撃していた艦娘
から工房で汗を流した整備工作班のメンバーなど様々なメンツとす
れ違う。

普通仕事の後は食堂に直行してディナーを貰いに行くが、必ずと言
うわけでもない。この日のためにと取っておいたスナック菓子やら
ツマミやらを隠し持っていて、仕事が終わり次第に部屋に行つて一晚
中映画鑑賞するやつなどがある。

大抵の場合は夕食を部屋に持って行って、ベッドに閉じこもつたま
ま朝まで食器を出さない。

『大鳳さん、大丈夫でしたか?結構攻撃受けてたみたいだけど……』

『あれぐらいなら平気です翔鶴さん。翔鶴さんや瑞鶴さんには度々作
戦のフォローを入れて下さった事、心よりお礼申し上げます……そし
て、本当に申し訳ありません……』

『良いって良いって！翔鶴姉えも私も大鳳が居なかつたらヤバい状況あつたし、これでおあいこって事で！』

『本当に何時もありがとうございます……整備工作班の方々や妖精さん達も、何時も迷惑を掛けて……』

『それこそいいってことよお！』

『それが俺達の仕事何だからな！』

『そうそう。班長や副班長だけじゃなく、みんな有能で優しいしな！』

嘘付け、俺なんて今日は最低三人に罵声を浴びせた記憶があるぞ？と俺の前方から来てる六人の団体にツツコミを入れる。メンバーは翔瑞姉妹と大鳳、そして三人の男子だ。

徐々に近づいてる故に俺の存在に気付いたのか、その集団は俺の方へと近付いてくる。

「穴戸さん、お疲れ様です！」

「「お疲れ様です!!」」

「みんなお疲れイ！これから夕食と就寝セットか？」

「明日は休日なのにそんなイイ子ちゃんできるわけ無いじゃくん！これからみんなで見えたかったドラマを一から一気に見るつもりなの」

「穴戸副班長もどうですか？」

「ドラマか……ご一緒したいのは山々だけど、俺には部屋に籠城して足を一步も動かさずにアニメ完走と言う重大な使命があるんだ」

「そ、そうなんですか……」

元気のあるここ舞鶴第二鎮守府は、休日突入と給料日ということでの休みの時は高校生よりもはっちゃける（※はっちゃけ具合は人それぞれです）。

隣の舞鶴第一鎮守府からは、夏休み突入時の学生寮の如くと言われている。

とは言っても軍隊なので、有事にはどんな状況に居ようが駆けつけて対処する事を強いられる。シ〇つてたときに呼び出された奴は本当にかわいそうだと思う。

「じゃあお肌を悪くしない程度に見てどうぞー」

「はーい！」

話していた大鳳達の後ろ姿を見送り、俺も自分の部屋に入ろうとしたその時、

「こんなところでなくにしてんのっ！」

「うお！……って、鈴熊かよ」

「それは失礼じゃありませんこと？ 穴戸副班長」

町の中を歩いていたら明らかに浮きそうな緑髪と、今時流行らないお嬢様口調は鈴谷と熊野だ。鎮守府のエースである攻撃型軽空母の鈴谷とその妹であり、現在の日本海軍でこの艦種なのは鈴谷一人と言う待遇ぶりながらも、それを鼻に掛けようとしなくても良い子。

「ごめんごめん。二人はこれから夕食？」

「私たちはそれスキップして映画見るトコ。提督とか誘おうと思ったんだけど用事あるって。やっぱリア充は違うねえくチラチラッ」

「ん？もしかして誰かと比べてる？俺は冬アニメコンプって言う重大なミッションがあるんだッ、モテなくても全然余裕だしッ？二作品同時に見ないと終わらないかも知れないほど娯楽に溢れていてリアル充実し過ぎワロタだしッ？」

「ほ、本気にしないでって、悪かったから……」

「まったく……モテない殿方は余裕がないんですの？」

俺は余裕がある漢だから、コイツの顔にストレートを打ち込む手前でその手を抑えた。

「俺だって一生懸命頑張ってるんだよ？人並みにモテる為に何が必要かってさ……香水も変えたし、一日数回は風呂に入るし、コミュニケーションも取ってるし……提督みたいにモテるには何が必要なんだ……？」

「年収ですわね」

「カタガキ？」

現実と言う名のボディブローを受ける。特に軍隊でトップって

のは目立つし、実際うちの提督は普通にカツコイイからな。まあ提督ほどじゃないけど、実は俺も歳のワリには年収高いんだぞ。

「つて言うから穴戸っちは結構悪くない方だと鈴谷的に思うんだけどな」

「確かにわたくしも悪くはないとは思いますがわよ？やればできる方と知っていますのに、常日頃から何をするにも適当な感じですので……」

「あく確かに！今も仕事は早いけど、本気を出したら誰も敵わないだけだッ……みたいない？」

「失敬なッ、確かに適当な性格だとは認めるけど、本気は結構出してるぞ。ほら、前の肝試しなんて俺がどれだけ死に物狂いだっただか分かるだろ？」

「あ、あく……確かにあの時は……ね？」

結構前にあった肝試し大会の話だ。隠しカメラと盗聴器で、仲間が恐怖に怯える姿が映像として残される肝試しを男子実行、女子は鑑賞でする事になった。勿論、只々みんなに何かを取らせに行くだけでは大人の野郎共は恐怖に怯えない。

そこで出てきたのは、鎮守府にいる屈強な男子達三人（ガチホモ）、通称ゲイ三人衆がオバケ役となるルールだった。俺は食べられたくないので、ブツを死ンツツに物狂いで探したし、オバケ♂に見つかった時は足の健が切れるかと思うぐらい走った。

このとき、「ハア……ハア……女共はいいよなあ!?掘られる恐怖も知らないでただ笑ってるだけでよオああん!？」と叫んだ事で俺の株が下がった事を思い出した。

「でも、ありがとうな二人共。二人が褒めてくれると、あー俺もまだまだ行けるんだなって嘘でも思えるわ」

「べ、別に、う、嘘じゃないし……本当にっ」

「ふ、ふん……」

照れくさそうに首を擦る鈴谷とプイツつと振り向く熊野。可愛らしい仕草に対して、ああ男ってこうやって落ちるんだなーっと思っ

た。

「じゃあ俺はこれから時雨達と夕食食べてくる。大鳳たちにも言ったけど、あまり夜更かしするなよ?」

「うん、分かったっ!」

「では、ごきげんようっ」

大鳳同様に別れの挨拶をして後ろ姿を見送る。鈴谷たちや大鳳たちはドラマとか映画を見るけど、どんな作品を見ているのか興味があった。また今度の機会に聞いてみよう。

―食堂の端っこ。

「あ、お疲れ様です!」

「おう吹雪ちゃん、お疲れ様。俺が調整した艦装はどうだった?」

「はい、とても良かったです! MVP取って司令官に褒めてもらえました!」

「そいつは良かったよ」

「……あ、司令官だ! 私お話しってきます! しれいかーん!」

「……いつの時代も、提督はモテモテだなあ」

『提督』、または司令官とも呼ばれる人物は、ここ舞鶴第二鎮守府の統率者だ。舞鶴だけでなく、他のあらゆる鎮守府には提督と言う立場に着いている者がいる。

艦隊とそれが守る地方一帯を管理し、守護する立場にある彼らはエリートであり、選ばれた人しかなれない。

地元に帰れば英雄扱い、転職は思うがままの明るい未来、そして艦娘からはモテモテだ。

いま食堂の中央で艦娘に囲まれている色黒のおっさんがそうだ。あんなにモテて有能とかチートキャラも良いところだが、それが俺たちの提督だ。艦種問わず囲まれてて少し困っているみたいだけど、羨ましい事この上ない。

「相変わらずモテるね提督は」

「羨ましいのかい時雨さん？確かに女の子にモテるのは男にとっての至高の喜びだけど……」

「ん？また僕のこと男って言ったかな？死にたい？」

「前にも言ったけど僕っ子は良好なキャラ付けには……ってゴメンゴメン！悪かったから食堂でだけはやめてくれ!!」

レンチと怒りを治めるように言う。

風呂上がりかと思われる時雨の髪の毛は若干濡れていて、若干ソープの匂いがテーブル越しに鼻腔を刺激し、ボーイツシユながらも女の子らしさがあるのは確かだ。

「……あれ〜？穴戸くん、僕を男とかバカにしておいて、お風呂上がりの僕の色っぽさに悩殺されてるようだけど？あれ？口ではどうこう言っても体は正直って感じなのかな？」

「んツ？」

凝視しすぎていたらしい。

女子は男子の視線に敏感であり、何処を何秒間、そしてその本能的な意図が分かると言うのだから女の人は怖い。

俺が見ていたのはタンクトップからチラチラ見えるスポーツブラであり、まるで男を意識していない感じがして魅力を台無しにしていると伝えたかったが、やめた。いずれ自分で気付くだろう。

『穴戸と時雨は相変わらず仲がいいぴよんね〜』

『羨ましい……あ、いや、別に怒ってる訳じゃ……』

『同期らしいからな、微笑ましい』

時雨との日常会話を楽しそうに見てくれる駆逐艦達にクスクスと笑われた。軍隊が使うカフェテリアでありながらも、女子率が多いせいか和気あいあいとした空気は鎮守府特有で、他では見られない光景である。

体育館のように巨大なエリアのワリには少人数。駆逐艦の他には

空母級の艦娘や俺ら以外のエンジニア達の存在が確認できる。

空母級を見るたびに思うのが、彼女たちの腹はブラックホールで出来ているのかというぐらい大きい食事は一体何処に消えているのだろうか？気がきでならない。

「こんにちわ〜」

「村雨、僕の隣に座って。穴戸くんは女の子の谷間を凝視する変態らしいから、村雨のを見ると多分お猿さんになっちゃう」

「男なんてみんな猿さ、肝心なのは紳士的かどうかだろ？」

「あ、あははっ、そうですね」

学校で自然とグループが作られるように、ここでもある程度決まった人と食事を取る文化がある。俺の場合、大抵はこの二人と取ることが多い。

村雨ちゃんはカレーのプレートを机に置き、自分も座る。

俺たちは全員でいただきますを言ったあとに一口だけカレーを頬張り、村雨ちゃんの発言に注目する。

「ふう……そして、相変わらず提督もカッコイイですね」

艦娘や鎮守府所属の女の子達に囲まれている提督の事を言っているのは言うまでもない。

「女の子として提督は、ダーツで言うブルズアイだからね。穴戸くんなんかよりもよ〜おっぽどツ！優良物件だから、みんなこぞって話し掛けようとするんだろうねッ！」

「なんで俺と比較するんですかねえ時雨さん……大体俺だって大尉、そして整備工作班を取り仕切る副班長って言う凄く立派な地位を獲得してるんだよ！君からしたら上司なんだ！礼儀をわきまえたまえ時雨くん!!」

「グルルルッ………！」

「まあまあ二人とも座って……お行儀悪いですよッ？」

「はあーい………」

村雨ちゃんに注意を受けたのでちよびちよびカレーにスプーンを入れる。その横にある茄子の漬物や納豆といった健康食はカレーと合わないが、健康の為に時雨が無理矢理俺の食卓に投げ込んだ食べ

物にも触れ、口の中で新しい食感を堪能するのも毎日の楽しみだ。

一方時雨と村雨はお互いの口を拭き合うと言うなんとも仲睦まじい光景を見せつけてくれる。羨ましい。村雨ちゃん俺にもやってみて。

『提督！今日比叡は初めて料理を作りました！気合！入れて！作りました！ので、今晚お部屋と一緒に食べましょう！』

『あ、ズルいですよ比叡さん！鹿島も一緒にしたくないのに!!』

『ははは、喧嘩はいけないよ。でもそうだな、女性が初めて作る料理を頂けるのは光栄な事だ。今日の夜は用事があるの申し訳ないが、明日ならいいだろう……しかし、本当に私で良いのかな？』

『も、勿論です!!』

視線を横にずらせば紳士的な提督の言葉に悶絶している艦娘達。俺にとつちや日常風景だけど、外の世界ではこう言う光景も滅多に見れた物じゃない。

これが全てのキツカケになろうとは、夢にもおもわなかった。

世界は混沌に包まれている

世界は混沌の渦に巻き込まれている。

深海棲艦と呼ばれる謎の敵を相手に、艦娘と言う兵器を駆使して戦い続ける各国は苦戦を強いられ、多大な被害を出しながら一進一退を繰り返す。艦娘はその間、提督による独裁的な暴挙を受けながら、逆らえない相手にその身を差し出し続け、御国の為に日々海戦に明け暮れる毎日。国民も、艦娘も、誰もが慈悲深く聡明なヒーローの登場を待ち望んでいた。

そんな中、突如出現したスーパーイケメンヒーローこそが――この俺、という訳だ。

提督は俺の計略で左遷され、ソイツの暴挙に嘆き悲しんでいた艦娘達は俺の手により救われる。終戦直後の如き待遇は俺が定めた制度で艦娘達の暮らしぶりは一気に改善された。お陰で、艦娘全員から少なからず恋心のような感情を寄せられる。モテるって言うのも大変だな。

大規模作戦では、俺が自ら出撃して次々と島を奪い返し、軍上層部から目を掛けられる一方で目障りにな存在となってしまった。

只々仕事をクールにこなしていた俺は、暗殺やらあられもない罪やらを被せられ、遂には堪忍袋の緒が切れた。俺を怒らせるとどうなるか……そして、艦娘達に手を出そうとしたらどうなるか……じっくりと教えてやる為にな。

腐りきった海軍上層部を叩きのめす為、ハーレム状態の艦娘達とイチヤ付きながらクーデターを起こし、俺はこの国の支配者となった。

……俺はただCOOLに仕事をこなしていただけだ。別に凄い事じゃない。俺にしかできない事をしようとしただけさ。でも、今ももうそんな事を言ってもらえない。海軍を改革し、深海棲艦を倒し、より良い国を作る……そして、艦娘達が笑って暮らせる世の中を作っていくだけさ……

「……どうだった？」

「ゴミ」

「はあ!?俺の最高傑作なんだぞオ!!?」

―舞鶴鎮守府付近、飲食店。

同僚の書いたファンコミックへ批判したと同時に怒り見せ、立ち上がりながらレストラン中に憤怒の声を放ってきた。ウェイトレスが来る前に座れと宥め、少し落ち着きを見せた所で批判への詳細に移る。

「後にも先にも絵がひどい。これじゃ夏コミで売上ゼロは固い。あとストーリーが無駄に壮大だし無駄に長い。なんで60ページも無駄で壮大なストーリーを作ってるんだよ?普通にイチヤついてろよ」

「は?普通にしたら面白くねえじゃん!!」

「じゃあなんでもいいからこのクソ長いページ数を減らしてその分をエロで補うとか」

「俺はこそばゆいラブがいいのおおおツツツ!!!」

ADHDなのかと尋ねたいほどテーブルをバンバン叩き、冷めた珈琲が器から何滴か零れ落ちる。こちらの落ち度であるにも関わらず拭こうとしてくれる店員に感謝と謝罪を述べ、追加で珈琲を二人分注文する。

社会人にとって貴重な休暇に呼び出され何を頼まれるかと思えば……コミマに出す物への採点と言う天井のシミほどどうでもいい案件だった事ほど落胆する物はないよ。「正直な感想が欲しい!」と言われ素直に言ったらこれだ。成人式を一緒に迎えた同士とはとても思いたくない。

お天道様が程よく差し込み、それにより美味しそうに照らされるパフェ、そしてこの同人作品、なんだこの組み合わせは?

「大体な、艦娘がそんなクソみたいな待遇受けるわけないんだよなあ？艦娘になる人達は普通の人間な訳だし。イヤな上司はいるかもしれないけど」

「あれだけ可愛い子ばっかだったら普通提督なら試して見たいとか思わねえか？コスプレ見たいな格好してエロい身体、美人揃いと来たら文句無いだろお!?すげえペロペロしてえ……!!」

「そうだな。分かったから声抑えてくれよ公共の場だし。それに、艦娘にモテたいとか思ってたら自分を磨け……俺みたいにな」

「モテないお前の方向性は見習いたくないけど、失敗談として聞きたいぜ！」

「は？」

俺の第二鎮守府とは違う、舞鶴第一鎮守府所属で、俺と同じく整備工員員の【結城（ゆうき）】中尉。

俺は昨日、見逃した冬アニメをコンプしようと今日の朝から臨戦態勢だった。給料でジャーキーやスルメ等を取り揃え、寮から一歩も出ない覚悟で居たにも関わらず、朝八時のモーニングコール。

100人に一人と言う微妙な確率で妖精が見える特別体質を授かる奴が、全員が御国の為に！とか言える奴じゃないのはコイツを見れば一目瞭然だと思う。

ちなみに、汚職に手を出したクソ提督は相応の処分を受けてるの
で、浮かれる⇨重いステイグマを背負うとの事で誠実な振る舞いを強
いられる風潮があるらしい。俺達の提督が言ってた。

「あのさあ……お前の言うニヤンニヤンがしたいっていうんだったら
口トでも買え」

「人生は運で決まるって言うのかよ……おつと！噂をすればだぞ」

「ん？ああ……時雨と村雨ちゃんじゃんか」

このレストランは特に近くて旨く、第一第二鎮守府関係なく訪れる。

管理する提督は勿論、艦娘や海軍軍人達が立ち寄る憩いの場として有名所となった。俺達よりここに来る人はメニューを言わずとも品が出されるほど。

入ってきた二人の人影は俺達の存在を確認しながら店員と相槌を打ち、こちらへと足を運んでくる。鎮守府内で毎日目にしている姿はどことなく新鮮に感じるの、鎮守府外ではあまり会わないからか。「こんにちわっつ」

「時雨ちゃんに村雨ちゃんじゃん！今日は二人でお買い物？」

時雨はキャミソールワンピースと村雨ちゃんは縦セーターと言う私服仕様。これ絶対ナンパされたよね？というぐらい似合ってた。

「うん、昨日二人で行こうって事になって……それで、そっちの穴戸大尉はアニメコンプするために部屋に籠もるとか言っておいてレストラン？」

「モーニングコールを貰って案の定小一時間ここに居るよ……」

「知ってる。知り合いだったら相席して欲しいって店員さんに頼まれた所だよ」

「ンンツ……こりや店員さんへのチップ増しとかねえと示しつかねえぞ？」

「美人に使う金はプライスレス！」

そう言う奴は大抵カモにされるって、それ一番言われてるから。まあ一時間もテーブル占拠とか悪行すぎるので、最低でもチップは出しとく。

「時雨ちゃんに村雨ちゃんと相席なんて感激だなア！」

「お前これから用事あるとか言ってなかったか？」

「え？あ、そう言えばそうだったア!! 出会い系で会った女の子とのデートオオ!!ごめんね二人ともオオオ!!」

「あ、全然大丈夫です」

「気にしないでいいよ」

「え……っ」

本当にどうでもいいって顔されると悲しそうな顔をする、これが男の性か。財布から三千円を取り出した結城は流れるように店内を後にする。

……後から聞いた話だと、結城はそのデートしていた女にメシを奢らされ、高級なプレゼントまで買わされた挙句、一夜を過ごせないま

ま逃げられたそうだな。可哀想なやつ（笑）。

「それで穴戸大尉？こんな美少女二人を独占できるんだから、ここは勿論奢りだよな？」

「今の時代女性に奢るとか何言ってるの？男女平等社会は何処行ったよ？」

「海外では女性に奢るのは基本中の基本だよ？知らなかったかい？」

「でもここはJAPANなんだよね。男みたいに働いて男みたいに出世して、それでいてデートで最終的にやらせてくれるかどうかを決めるのは女……平等とはこれいかに？あ、分かった！Byoudouって奴だね！」

「キミのほうが給料高いんだし今日ぐらいは奢ってもらっても良いんじゃないかなア!？」

「グルルルツ!!」

「二人共おすわりして！みんな見てますよ！」

「ごめん村雨（ちゃん）」

店を見渡すとかなり注目を集めていたらしい。

まあ見てるつつつても、大半は俺等を知ってる海軍の奴らで、そうでなくても住民とは顔合わせてるから大きな問題にはならないと思う。

鎮守府にも色々クセの強い奴らがいるからなあ……村雨ちゃんと時雨がメニュー決めてる間に周囲のメンツを確認する。

『睦月ちゃんは誰がいいと思う？わたし的には……やっぱり蘇我提督がカッコイイと思うわっ。提督なのにあの屈強な上腕二頭筋を見せつけてくる所なんて凄くってえ……イっちゃう』

『ええ、睦月的には斎藤提督の方がいいと思うにやしく。頭良さそうなメガネで顔もカッコイイのがポイント高いぞよっ！』

『私はそう言うのには興味ないな……』

あそこに居るのは睦月と如月、それに長月か。次女はかなりエロい事でも有名で、これまたガードが固い。長月と睦月は別の睦月型と一緒に居ることが多いから珍しい。

因みに長月は俺達みたいな整備士の一人で、とにかくボルトを締めるのが早い。

『うわあ〜可愛い！このオムライスうさぎさんですよ〜！』

『ホントだ可愛いですね！私のはカエルさんですよ！どうやって描いたんだろ……？』

『念願のステーキ……ステーキ……美味しすぎますううう……！』

鹿島に吹雪ちゃんに秋月か……これまた不思議な組み合わせ。

『なあ……この前可愛い男の子見つけてよ、受けですか？って冗談で言ってみたワケよ。そしたら「は、はい、そうですっ」って返ってきたわけ。最高過ぎて掘ったゾ』

『ナイスデース、今度俺も誘えよ』

『たまたま見つけた男の子とやれるなんて……これって勲章ですよ……？』

あの人たちはゲイ三人衆（部下）。休日は目を合わせないようにするのが、貞操を守る一番の策だ。あと、一人にならない事かな？

再度言うが、肝試しの時に三人がオバケ担当だったと聞いた時ほど怖いものは無かった。

「お待ちせしました！スペシャルジャンポストロベリーパフェです！」

「お、時雨デカイの頼んだな。給料日だからって金払い良すぎじゃないか？」

「あれ？穴戸くんが払ってくれるんじゃないの？」

「だから払わねえつつてんだロオがアこのアマア!!」

「姉さんの冗談ですから！おちついてくださいあくいっ！」

「あ〜、村雨ちゃんの可愛いお口でそんなこといわれちゃったから、ぼくちんの怒りが治まっちゃったあっ！」

「キモッ」

「グルグルルツ！」

再び村雨ちゃんに宥められ、席に座る。追加できたコーヒーを飲みながら、時雨がガブるストロベリーパフェと言う糖分の塊を眺める。ジャンボストロベリーに続くのは村雨ちゃんのマンゴーパフェ。パツと見地味だが、食べる前にナプキンをお膝に広げるなんて女子力高杉。

なにより一口一口が小さい……流石は鎮守府のマドンナ的存在、可愛らしい。

「あむっ……んんー！おいしいよこれ！」

「良かったな」

「うんっ！」

時雨の返事は満面の笑みにて返される。時雨の頬には大きな一口で付いたクリームが残り、それを取って舐める。

「ほら付いてたぞここ」

「ん、ありがとっ」

「……………」

「……？村雨ちゃんどうかした？」

「あ、い、いいえ、なんでもないです」

村雨ちゃんは俯いて再度パフェを食べ始める。

時雨の頬についていたパフェを食って思ったが、流石は女性に人気はパフェだけあって甘さがかなり控え目だ。

客の事を考えながら作ってくれるなんて、優しいレシピだなと心の中で思ったりもした。

見渡せば女性客が多い。そして可愛い娘が多い。二人を置いてナンプアしてこようかな……と思っていた時。

『た、大変ですー!!』

「「ん？」」

扉から一声を放った女性は、スカートをひらひらと靡かせながらこちらへ走ってくる。

店員を含め、店内にいる客全員が彼女の行き先を凝視する。セー

ラー服っぽい衣装に、オツドアイ。うちの提督の秘書艦、古鷹に似ている……て言うか本人だ。

「ふ、古鷹さん……?」

「ハア……ハア……ハア……ハア……穴戸さん!!重大なご用件があります!!」

「な、なになかな?愛の告白ならオツケーするけど……」

「提督の代理を頼めませんかツ!?!」

「「……え?」」

告白云々は無視かよ?!

大規模作戦の会議

―舞鶴第一鎮守府、会議室。

「やあ、よく来てくれたね」

「このような場所に自分のような若輩者には些か場違いかと存じますが、ご指導ご鞭撻の程、宜しく願いますッ！」

「ははは、そう固くなることはない、好きな席に座ってくれたまえ」

「は、ハ！失礼しますッ！」

ドキッ！提督みたいな上級将校だらけの会議室。そこで超緊張している俺は、准将でも大佐でもない、大尉の整備士だ。

何故こんな所にいるのか、このVTRを見てくれれば分かるだろう。

――

―レストラン。

「なるほどなるほど。古鷹の説明が分かりやすかったからすぐ理解できちゃった。ありがとう古鷹」

「えへへっ、ありがとうございませすっ！」

比叡のカレーを食べた提督が突然倒れたらしい。どうしてカレーを食べてそうなるかは定かじゃないけど、兎に角そういう事らしい。食中毒か？

「じゃあ俺達の班長が指揮権を継承するんじゃないの？班長は少佐で、俺は副班長で大尉だから……」

「少佐さんは緊急入院する事になったらいいです……」

「ハア!?なんで？」

「打ち上げで飲みすぎて……そ、その……腰を……」

若くないのに無茶する人は大抵そうなるけど、そんなこと聞いてないな……あ、そう言えば俺昨日アニメ見てて外の世界とは干渉だったな。

「だとしても今日は休日で、指揮は有事以外しないんだろ？指揮するぐらいだったらお隣の第一鎮守府にいる大佐さん借りればいいし……」

「て、提督は、班長が駄目なら穴戸さんが良いと……」

何故指名するし？指名できる体力あるんだったら腹壊してねえでさっさと仕事しろって言いたい。

「腹壊したぐらいで指揮権継承とか……少し寝てれば治るだろ」

「そ、それが結構酷くて今も寝てるんです……それに、今日は来週辺りから実施される大規模作戦の会議がありますし……」

「え、そんなの聞いてないんだけど？」

「提督が、みんなが毎週待ち望んでいる休みに水を差すような事は言いたくないと……休みが明けてから発表する予定だったそうです」

前言撤回、提督マジ天使。上司の鑑、人間の鑑。自分、涙いいつつか？

「んでその会議に、提督の代わりに出ると？」

「はい……そ、その、すみません！」

「いいじゃないか、穴戸くんにはいい経験だよ」

「時雨……お前他人事だと思ってるッ」

「穴戸さんが会議に出ると思うと……村雨、ちよつと興奮しちゃいますっ。困ってる女の子の頼みを断れない男の人って、カッコイイですよねっ！」

「で、でもさ村雨ちゃん……」

「もし出たら……村雨の、ちよつとイイところ……見せて、あ、げ、るっ」

「古鷹、俺会議に出るよ」

「本当ですかっ!？」

「単純すぎるよキミは……」

――

―舞鶴第一鎮守府、会議室。

魔性の女、村雨ちゃん。前世は貂蟬だな。

フランスパン形状のテーブルに、その先端にはモニターがある。多分モニター越しに話す人が居るんだろう……偉い人だと思う。それに、日光が入ってこない部屋は人工的な光で覆われている。部屋の色は全体的に白い。

そしてとにかくそれを囲む椅子に座るスゲー偉そうな将校の人達。肩章を見るに左から准将、少将、大佐……やべえ腹痛くなってきた。カレー食べたぐらいで腹壊すのよりよっぽど健康に悪いタイプの腹の痛みが俺を襲う。

物腰柔らかく出迎えてくれたメガネの中将さん……好きな席に座れとか何抜かしてんだよ？大抵こう言う場面では座る順番とかあるんだよなあ……そう言うの手取り足取り教えてくれないと分からないんだよオ！

「……………」

偉い人たちが俺を睨む、視線が痛い。さつさと座れということなんだろう。

とりあえず、あとから来る人の事考えて階級順で行こう。当然、そうなる俺はモニターから一番遠い席になる。

「んっしょつと……」

「……………ん？君は第二鎮守府の提督代理だったと思うが？」

「え、あ、はい！そうですね……」

「だったら君はもう少し近い方がいい。私の隣に來なさい」

「だった最初からそう言ってくれよおおおおお!!!」

「し、失礼しますー!」

何回も何回も頭下げたり敬礼したりして、しかも恥ずい事やっちゃまったじゃねえか。しかもフランスパンの先端から二番目とかッ。

「そう言えば自己紹介がまだだったね、私は舞鶴第一鎮守府の齋藤だ、よろしく」

「自分は舞鶴第二鎮守府所属、整備工作班副班長の穴戸龍城大尉です！よろしくお願ひします、齋藤中将!」

レストランで睦月が言っていたメガネでカッコいいナイスミドルな斎藤提督とは、彼の事である。

「穴戸くん……だね。実は私が今回の大規模作戦の司令官を任されているね。君達の提督である蘇我准将には私の参謀を務めてもらいたかったのだが……見かけによらず、お腹が弱点だったとはね。あ、こんな事を言つては失礼か！今は忘れてくれ」

俺もそう思っていました。レストランで如月の言っていた上腕二頭筋、そして俺が言っていた人格者で理想の上司こと俺たちの蘇我准将。初めて作った比叡のカレーで腹を壊すなんて彼の腹が弱いのか比叡のカレーが強力なのか。

まあとにかくメモとペンは用意したし、胸ポケットのボイスレコーダーも万全。何か聞き逃しても心配することは無い筈。安心して覚えて、提督に会議の内容渡しして、終わり！簡単じゃないか。

――

全員集まり終える頃には残りの将校さん達と挨拶し終わり、話すと案外普通の人たちだ。俺が声を掛けるまでの間睨みつけていたのは何だったのだろうか？ 圧迫面接みたく俺を試そうとしていたのか？ やめてほしいんですけど。

「改めて、今日お集まり頂き感謝する。今回の大規模作戦は、日本海を中心に言う深海棲艦の掃討作戦だ。横須賀鎮守府の大将もお聞きになつている故、ここでの発言には気を配ってくれると助かるが、不明な点、意見や案があれば物申してくれて構わない」

案……腹ブツ壊れたので帰っていいっすか？ 多分採用されないな。

『……ではこれより、第三次日本海掃討作戦の計画を始める……大将閣下に、敬礼！』

中將がボタンを押すと、後ろのモニターにおっさんが写つて喋つた。皆が立って敬礼するので、俺も慌てて敬礼する。

ネタバレを見ると、モニターのおっさんは東京らへんの大将で作戦の行き先を見届けているそうだけど、すべての提案に「分かった、そ

うしろ」としか返事しない。幕末のそうせい侯かよ。

「ではまず、私の作戦案から提示して行こう」

中將がこと細かく丁寧な作戦を説明していく。会議の流れは、中將が予め用意している作戦をテンプレートにして話し合うらしい。

他の鎮守府、そして従来のイージスやらなんやらを使う海軍基地を使つて深海棲艦の本拠地と予想される三箇所を同時攻撃すると言うもの。頻繁に行動している為、総合で二倍の戦力と言う情報以外は分からず、片方だけを攻撃すれば他二箇所も守備を固める。ロシアと韓国の海軍が失敗した作戦を日本が継承、及び成功させる事で今後の貿易を有利に運ばせる、と言うものらしい。

つていうか第三次つて……もう既に二回失敗してんじやねえかよッ。前にも一度三国共同で負けてたし。

「ここまででは予想通りだとは思うが、今回は出来るだけ空母の出撃を抑えたいと思う。今回の作戦時刻をフタフタマルマルとし、夜襲でケリを付けようと思う」

「ふむ……本来ならば、夜戦であれば韓国海軍の必勝戦術。ロシア海軍の航空隊連携もななど聞いたが、流石にもう一度共同作戦を実行すること叶わぬか……」

「確かに、ただでさえ戦力が二倍と予想される日本海域の上、航空戦力はあちらの方が俄然優位……夜戦に特化した艦隊を編成し、三拠点に居る空母を叩けば……」

「だが相手もそれだけ言う訳ではないでしょう。もしも空母が居なく、あちらも夜戦特化の艦隊がいたとしたら……最悪、轟沈者が出るかも知れません」

「確かに死人は出たくない……消極的な作戦で成功できるとは言い難い。多少リスクがありとも……」

「突撃じゃア！突撃あるのみじゃア!!」

色々案を出し合つてる将校達に対して感じる事は、来週からかなりハードな事やらされるんだなって言う虚無感だけ。会議は踊る、そして結局一番最初か二番目の案が良かったと思うまでがテンプレなのに。

「だから空母と駆逐艦では戦力が違いすぎる訳で……」

「夜戦ならばまず勝てる、それに軽巡や重巡も編成する故戦力的な問題は夜戦にて解消される筈だが？」

「だが、深海棲艦に重巡、軽空母の類がいた場合それでは劣勢の殴り合いとなつて重大なリスクを伴う、どうしたものか……」

「突撃一番じゃア！」

極力ローリスクを理想とする人と、多少のリスクがあつても！と考える人と、コンドームか……考えなんてまとまらないよ。

飛び交う言葉の中、隣の中将殿が俺に話しかけてくる。

「君は、どうすれば作戦をよくできると思うかね？」

「整備作業員で、しかも大尉の自分がこの場で発言するなど……」

「立場などに囚われなくてもいい、将校たちはあのように話し合つてる最中だ。私に君の案をこっそり教えてくれればいい」

出た、大抵下っ端の案なんて通らないし、通つたとしても俺の手柄にならないから結局俺にとって何の意味のない進言を要求しようとする人。

「ではッ……ごによごによ」

「ふむふむ……なるほど、面白いな。ありがとう」

「はっ！」

「皆聞いてくれ！少し作戦に変更点がある」

――

――鎮守府近くの病院。

「と言うのが、今回の大規模作戦の計画内容となります、蘇我提督」

「……………」

綺麗だろ？腹壊して寝てんだぜ、これ。

「ひぐ……えつぐ……ひ、比叡のガレーをだべだばつがりにい……!!」

「落ち着くデース比叡！提督はきつと帰ってきマース!!」

「勝手に提督を殺さないでくれるか？もし提督が目を覚まさなかったら俺が大規模作戦の指揮を取ることになるんだぞ？」

「そうなたら穴戸提督って呼んであげるよ。臨時就任記念に僕達
の、ちよつとイイとこ、見せて、あ・げ・るっ」

「ふふつ、俺は君の妹の奸計にまんまと引つかかったバカ野郎さ。でももう騙されないからな……ッ」

「奸計なんてひどいですう……」

病室には俺、時雨、村雨、金剛、そして元凶である比叡が蘇我提督のベットを囲っていた。この病室の隣には班長が寝ていて、ゲイ三人衆に囲まれながら腰の治療を受けていた。

比叡のカレーが不味くて倒れたって聞いたときほどじゃないけど、驚く事に俺の案が採用された。作戦は、『何とか韓露に頼んでもう一度三国協力の元、日本海への補給線を断つ』と言うものになった。

三箇所の根城つっても深海棲艦の物資が大量にあるって訳じゃないし、そもそも日韓露海軍のバミューダトライアングルでそんなに粘れるものじゃないし。ただ補給艦を倒せば良いって話なんだけど、そんな簡単に行くんだつたら苦労しないし。

だから多分すごく強い主力艦隊と補給艦隊が居るんだろうから、一旦主力艦隊を放置して北か南から来てる補給艦隊に集中するとかどうかなと伝えた。その後、色々戦術的な言葉を聞いたような気がするけど、そこは提督達におまかせ。

正直貿易を有利に進めるとか日本には居るはずのない有能な政治家らしい考え方で、多分無理じゃないかもしれないけど、あまり無茶をするとかえって損するし俺達の仕事が増えるからやめてほしい。結局一番最初の三国合同作戦がいい案だったんだ。

とかもつともらしい事言つて、これを眠ってる蘇我提督に伝えた。そもそも整備作業員は戦って壊れた物修理したりメンテしたりするのが仕事だし、そんな下っ端の案を採用するなんて斎藤中将もとんだ

野郎だぜ。

「ハア……結局起きるまで休みの書類とか片付ける羽目になったし、アニメ見れなかったじゃんか……どうしてくれるんですか蘇我提督ウ……？」

「提督を悪く言うのはノー！デース！」

「冗談だよ金剛……あ、そうだ！比叡、俺にもカレーを作ってくれないか？」

「……え？」

みんなは一斉に俺を見る。

「え、だ、駄目です!!提督をこんな風にしてしまった比叡に、料理をする資格はありませんツ!!ふええええん!!」

……クソオ！俺も提督みたく眠りたかったのにイ！

休日出勤、アイアンマン

―執務室。

「……………シンツ」

休日だと言うのに、舞鶴第二鎮守府の資料は俺が片付けていた。建築物と本等から漂う木質の匂いと、シンプルだが緊張感を煽る広い間取りは正に大統領執務室。横にはクソでつかい通信機みたいなヤツと、その他作戦中に使うようなものがあらかた揃ってた。

鎮守府にはあまり人は残ってないし、普段の油臭い作業服を着ながらの書類仕事なので実質俺がやってる資材チエツクの執務と雰囲気は変わらない。内心、休日入る前にやつとけよ……と悪態をつきながら古鷹に教えてもらった通りに事務を進め、紙の上でペンを走らせていた。

古鷹に教えてもらっているので、提督代理である俺の秘書艦は彼女である。

「ど、どうかしましたか……?」

紙を擦る音以外何もなかった執務室に唸り声を放ったらしい。無意識に昨日の悪夢を思い出していたのだろうか？

「いや実はさ、昨日……」

――

―昨日の病室。

「じゃあ俺はちよつと班長の所に行つてくるわ。ただのギツクリ腰だからって、副班長の俺が行かねえって言うのも失礼だしな」

「うん分かった。僕もこのお花を変えたら行くよ」

部屋を出て、隣の部屋に行く。提督と班長少佐の部屋は個室で、使われていなかったのを理由に快適な環境で同時入院が可能となって

いた。鎮守府にも一応医療室と病院があるけど、二人共外で倒れたから何とも言えない偶然である。

時代の発展と共に、病室の音は隣に聞こえない防音仕様となつているのに感心しながらドアを開ける。

「班長、穴戸です。具合はどうですー」

『やめてください……やめてください……イヤア……怖い……怖い……！』

『縛っちゃったよ……イヤらしい身体に食い込んじやうよ？』

『班長怖いとか言っておきながらコツチは……やっぱ好きなんすねえ』

『ほら言ってみてくださいよお……僕のイヤらしい穴いっぱい犯してくださいって』

『やめてください……アイアンマンツ』

「……………」

……そつ閉つてこう言う時にやるもんなんだな。キモい女声で亀甲縛りの太つちよオヤジは、俺が最低でも週1?で顔を会わせてる上司で、本来ならあんな格好絶対にする筈が無い。それが、お見舞いに来ていたはずのゲイ三人衆に捕まってなにかされてた。多分、あれはDREAMなんだ。

今日は酷い日だな……酒はあまり飲まないけど、今の悪夢を忘れさせてくれるなら、帰りにウオツカでも買ってくるか。

「穴戸くんどうしたの?班長とはもう会った?」

「……お目々に毒を盛られた後の時雨は眼福眼福……今日も可愛いよ時雨」

「な、なんだい急にっ!?て、照れる前に何とも言えない気持ち悪さが込み上げてくるよ……っ」

――

―執務室。

「と言うことがあったんだ。俺は明日からどんな顔であの人たちに会えばいいの?」

「わ、私に聞かれても……」

「そうだよね……ごめん、自分で考えるよ。丁度俺の所は終わったし」

「も、もうですか!?!は、早いですね……」

「前に一度やった事あるし、それにさっさと終わらせて残りの十数時間の休日を満喫したいんだ。日曜日にこんな所で執務してさ……明日起きたらあと5日は休日を見られないとか……ひぐっ」

「な、なな泣かないで下さい!きつと大丈夫ですからっ!提督にも今日の分の休日を作ってもらえるようにおねがいますから!」

優しいしな古鷹ちゃんは……偶に俺達の為に差し入れとか持ってきてくれるし、優しい声で報告とか読んでくれるし、可愛いし、提督が秘書艦として選ぶ理由も分かる。

古鷹も執務を終えたつばいし、後はこれらを大本営に送って終わることが出来る。

コンコンコンツ

「……入りたまえツ……なんつって!」

『コホンツ……失礼します、穴戸提督代理』

「おう……って、蘇我提督じゃないですか!?!」

ノックなんてしたから誰かと思ったら提督本人じゃないかよ!?!俺と古鷹は慌てて敬礼する。

「お身体の方は……」

「この通り、すっかり良くなったよ。けれど……まさか比叡が使った料理の中に間違えて化粧用のクリームが入っていたとか夢にも思わなかったよ。ははは」

それを笑って済ませる辺りがスゲー。化粧用のクリームを混ぜた

料理か……心臓悪くするし、吐き気とかも酷かったはずだし、そんなの作ったら比叡も二度と料理なんてする気なくすし（※提督は特別な訓練を受けています、間違っても料理に異物を入れないようにして下さい）。

「しかし……折角の休日だと言うのに、君に私の残業を任せてしまい申し訳ない……」

「いいえ、不測の事態と言うものは誰にでも訪れるものです。班長のぎっくり腰は流石に注意してほしいですが……」

「ははは、羽を休めようと羽を酷使し過ぎた、と言う所か」

班長の羽……生えてたらそれも亀甲縛りになっていっぱい犯……ああいけないいけないツ!! 忘れなきやいけないのに、考えるほど面白くなつてきやがるツ!!

「古鷹、君もすまなかつたね、本来ならば私一人で残りを片付けようとしていたのだが……」

「いいえとんでもないです！ 提督が仕事をするのでしたら、休日でも古鷹はお仕事をお手伝いします！」

「ありがたいな……君のような部下を持って、私は恵まれていると改めて思い知らされるよ……本当にありがとう、古鷹」

「い、いいえ……秘書艦として、当然ですっ！」

「古鷹……」

「提督……」

……ん、何だ？こいつらがお互いにぶつけ合う熱い目線は？まるで運命の糸が通じ合ったカップルじゃないか。デキてんのか？あるある、カップルと部外者がいる場合にのみ起こる、二人だけの世界に入った途端その部外者が置いてきぼりにされる現象。

「穴戸くくん、もう提督に……会ったね」

「こんにちわ〜」

「時雨に村雨ちゃん」

扉から顔をひよっこり覗かせた後、提督に敬礼してこっちに寄って

くる。私服の時雨たちは普通の女子だが、実直な敬礼は紛れもない軍人であると実感させられる。

「一日だけだったとは言え、一日提督になった気分はどうだった穴戸く〜ん？」

「一日署長みたいに言わないでくれるか？立場だけそういう事になってただ適当にカメラにニッコリするだけのクソアイドルと違って、コッチはミスが許されないんだぞ」

「執務室に座る穴戸さん、カツコイイですっ！」

「ありがとう村雨ちゃん、その言葉を頼りに生きていくよ」

「さ、流石にそこまで背負えないかも……」

俺が提督だったら絶対村雨ちゃんの傀儡になっちゃうな。

「まあとにかく提督もこうして帰ってきてくれたことだし、俺の仕事はおしまいだ。蘇我提督、大規模作戦の内容はここにある資料にまとめておきましたので読んで下さい……それでは自分はー」

「あー待ってくれ穴戸くん！」

「え？ど、どうかしましたか？」

「そ、そのー……大規模作戦についてなんだが……少し言い難いのだが……」

「はい……？」

「大規模作戦で私の補佐をして欲しいのだが……頼めるかな？」

補佐官となる、祖父からの手紙

「……え？」

「は？」

「すまない……突然で驚くのも無理はないな」

「い、いいえ！自分こそ失礼な返答をしまい、申し訳ありません！」

思わず素で、は？と返してしまった。多分俺の脳が全力でその質問の詳細を聞きたがってるんだろう。三人の女の子たちは目を見開きながら俺と提督を交互に見ていた。

「ですが、何故ですか？大規模作戦を実行するに当たって、鎮守府に補佐官が居ない場合は、それを埋める為に臨時補佐官として大本営から将官或いは佐官が送られるはずでは？」

「そうなんだが、斎藤中将が君を補佐官に推薦していてね……中将の言う事なので無下にはできんのだよ」

「そうなんですか」

「穴戸くん何かしたの？」

「会議で座ってただけ」

たしか新しいルールでは、作戦中の臨時補佐官は少尉以上の将校なら誰でもいいらしい。艦隊運用の実務経験や試験、そして資格等から判断される事によって自然と人材が絞られるが、提督が指名すれば決められる。

期間限定のマイナーな補佐官の仕事を多くに経験させることができ、大本営からの補佐官が不足している時に経験のある人がいると役立つ。上位の将校を目指す時に一度でも経験していると大きなメリットになる。

この実務をクリアして、提督に認められれば海軍大学校での科目を数日分飛ばせる豪華特典付き。

一度俺たちの班長が、来る筈だった補佐官が急病で倒れて代理をする事になった。しかし班長は、頭を回すよりボルトを回す方が性に

合ってるらしい。それ以降、急な事が無い限りはやらないらしい。そう考えると、どつちにしろ順番的に俺がやる事になるんだろう。

バイト研修みたく、先人から教えてもらえばいいのにと思っただけ、ほぼオペ仕事みたいなもんだから練習と本番以外上達の目処はない。

第二鎮守府だし、第一鎮守府みたいに三、四人も必要としない小さな場所では、練習として最適だろうけど。

「補佐なんて初めてですし……このような大事な作戦に自分が出しゃばる訳にも……」

「何を言うんだ、君はまだ若いんだからこう言う経験はチャンスがある時に積んでおいた方がいい……それに、この作戦の立案には君が協力したと聞いている。私なんかより余程この作戦を理解しているはずだ」

「で、ですが……」

「それに、この鎮守府に所属している君なら大本営から来る補佐官よりここ艦娘の事を熟知している……君ほど作戦補佐としての適任者は居ないはずだが？」

んくそんな事言われたらイエスしか言えないよ。それに断る口実も見つからないし、確かに補佐官の仕事を経験しておいた方が後々有利かも知れない。

そう、そうやっていい人材と化したヤツは大抵コキ使われるのが関の山だ。優等生がいつも先生に当てられたり、面倒ごと任せられたりするのと同じだ。

……よくよく考えてみたら、蘇我提督に限ってそれは無いはずだし。

「……そう押し切られてしまったからには、やらない訳にはいかないですね。分かりました、今回の作戦では提督の補佐をさせて頂きませ

「よく言ってくれたね。大規模作戦の発令は韓国海軍とロシア海軍の返答次第だ、本作戰までは補佐官としての仕事を教えるから、それまで副班長の仕事は時雨中尉に任せなさい」

「ぼ、僕ですか!?!」

「なにか不満かな?」

「い、いいえ……時雨中尉、謹んで整備工作班副班長をさせて頂きます」

「よし決まりだ!明日から穴戸くんは工房での仕事を済ませた後、この執務室に通いなさい」

「ハ!」

「それでは、解散!」

――

―部屋。

「やったじゃないですか!提督の補佐ですよ補佐!しかも大規模作戦の時によ!?!時雨姉さんもそう思うわよね!?!」

「そうだね、そのお陰で副班長に任命されてこつちとしては仕事が増えたとしか感じないんだよね、どうしてくれるの穴戸くん?パフエ奢るだけじゃ済まさないよ?」

「クソ……折角の休みが、仕事量倍に大変身しちゃったじゃないか……」

執務室を出たあと、俺は時雨と村雨ちゃんと一緒に俺の部屋に來ていた。部屋はこれと言って特徴はなく、木質の床と天井、そして機械類は主に机の上のパソコンと言うシンプル仕様。

机の上で倒れ込んでいる俺と、ベッドの上で跳ねたり背伸びしたりする二人は楽しそうに今日の事を話してた。

休めなかった分の有給を取ろうと思っただら今度はこれかよ。

「ノーと言える日本人になるんじゃないの?」

「あれは流石にN.Oとは言えないでしょおお……なんで俺なんだ

よおおお……!」

「ほらっ、穴戸くんカッコイイって村雨が言ってるよ! ほら見て村雨の女豹のポーズっ」

「うっふう〜ん」

横目でも見えるド迫力な谷間は圧巻の一言。真ん丸としたケツを突き出してる村雨ちゃんに飛び付きたいけど、エロい身体しておいてそれを許してくれない。

無駄に艶めかしい誘い方しておいて許してくれないと思うとムカムカして来て、再度頭をテーブルに伏せる。

コンコンコンッ

「入ってどうぞおお……」

「ちーっす! 穴戸っち元気して……ないっぽいね」

「鈴熊!」

「時雨さんに村雨さんまでその呼び方……多分鎮守府中に定着してしまっただけかもしれないわね。ハア……」

ピースサインを出しながら入ってきた鈴谷と、溜息を出しながら入ってきた熊野。

「一体どうかしましたの?いつもの元気は何処へゆかれたんですの?」

「実は穴戸くん、大規模作戦で提督の補佐をする事になったんだ」

「大規模作戦で提督の補佐!? 凄いじゃん穴戸っち!……えっと、でもなんで机に伏せてんの?」

「あまり乗り気じゃないみたいなんですよ……カッコイイ穴戸さんの姿、見てみたいの……」

「書類仕事で疲れて流石に力でねえ……」

「根性がないですわね」

「ナんだとコラア!」

「あ、あるじゃありませんの……」

そう勢い良く立ち上がった後、糸が切れた人形のように机に伏せる。目の前にあるノートパソコンでアニメを見る気も起きないぐら

い疲れ、休日を逃したと思うと気が滅入る。

だが折角来てくれた珍客をそのままにしておくって言うのも何なので身体を起こす。よく考えれば、女子四人が俺の部屋に来てくれるなんて男としては光栄な事なんじゃないか？

そうポジティブに考えると人間は力が湧くから不思議な生き物だな。

「んしょつと……それでどうしたんだ鈴谷たち？滅多に滅多に部屋に来ないお前たちがココの来るって事は俺に何か用があるんじゃないのか？」

「ああそうそう！危うく忘れそうになるトコだったよ！はいっ、お手紙届いてたよ！」

「手紙？」

鈴谷が差し出してくる手紙を取る。領収書か？それともラブレター？

「……って、これ俺のジジイからじゃん」

「「ジジイ……？」「」」

「じじー……って事は、穴戸つちのおじいさんだよね!?イマドキ手紙とか渋いねえ〜」

「即時無料で伝書を届ける事を可能とした万能機器、スマホがこの時代にはあるってのに未だにまどろっこしい事してるんだよああのジジイ……これだからオールドタイマーは」

「そこまで言わなくても……私だって、両親には手紙を書きますよ？」

「村雨に続いて僕もだね。何でかはわからないけど、手紙ってなんか良くない？」

「分かりますわその気持ち！わたくしは書いたものを写メにとってラインで送ったりしてましたわね。まどろっこしいと言われて、直接ラインにしましたが」

「ここにもオールドタイマーがいる。

「それよりも早く読んであげたら穴戸くん？」

「ああ」

『龍城よ、如何お過ごしだろうか？提督にはもう成れたか？海軍中尉だったワシを見習い、これからも精一杯御国の為に尽くせよ。できることなら帰ってきてワシを労え。お前の顔を久しぶりに見たい。返信期待しているぞ。』

追伸、ワシは今年で88なんじやが、どうやったらまた股にある眠った龍を勃たせることができるか、できれば教えて欲しいぞ。現代の技術進歩に肖って見ようとおもつての、それも不可能じゃないと聞くぞ。キャバクラで会ったミサキちゃん(33)が頑張ってくれたんじやがー』

「持ってきてくれてありがとうがとうな鈴谷たち……ふんツ！」

「あ！なんで破るんですか!？」

「本文より追伸の下ネタの方が文量多いとかちよつと引いたから、ついで……」

それに提督になるのがそんなに早かったら誰も苦労しねえと思うんだけど。つーか、最終階級が俺より下なくせに見習えとはどういう見だ？88歳なら大人しくしてろって感じなんだけど。

あと、名前の後に生々しい数字入れるのやめろ。

「ハア……分かった。まあ明日から全力で頑張る感じなんで、いい加減にベッドから退いてくれませんかね時雨さんに村雨ちゃん」

「嫌だ、動きたくない」

「イ・ヤ・ですっ！ふふふっ」

「じゃあ一緒に寝る?」

「退くよ(きます)ッ」

……そんなに強く言わなくてもいいのに。

補佐官仕事

―工房。

「よし！今日の出撃はこれで終わりらしい！片付ける準備しろよお〜！」

「はい！」

次の日、今日は哨戒任務だけで済んだので修理の頻度はそれほど激しくなく、次回破損した時にスクランブル発進する為の予備の艀装や、弾薬等の作成は完了していた。後は補充と動作のチェック等を済ませたら何と二時半で切り上げられると言うスーパーホワイト仕様。

これも、この後補佐官の仕事を覚える俺への配慮なのか？提督のお陰ではあるけど、この工房に居る奴等には俺に感謝して欲しい。

班長の号令後、皆が片付けている間に班長へ接近する。

「あ、あの……班長」

「ん？どうしたんだ穴戸そんなに余所余所しくして？ああそう言えば補佐官の仕事を覚えてくるんだったな。副班長の仕事は俺が時雨に教えておくから気にするな！」

「あ、いや、そうなんですが……そ、その……腰の方は……」

「ん？ああそれならもうすっかり治ったよ！悪かったな心配させて」

「い、いいえとんでもない！こちらこそすいません部屋にもお邪魔せず……代わりにあの三人が見舞いに来られたと聞いたので、安心してしまつて……」

と、さり気なくゲイ三人衆の存在を話題に出す。

「ああ佐藤と鈴木に高橋か。あの三人は来てくれたんだが……どうも記憶が曖昧で、何をしてくれたか覚えてないんだ。見舞いに来てくれたと言うのに失礼な奴だな俺は……ああでもこのことは俺とお前だけの秘密にしてくれよな！」

「……も、勿論です！これからもよろしくお願いします班長!!」

「えッ、あ、ああ！なんか大げさな気がするが……」

――

―廊下。

「ふ、ふふくん、ふんふふくんツ！」

「あ、宍戸さんこんにちわっ！ごきげんですねっ」

「村雨ちゃんそうなんだよ！人間関係の崩壊を覚悟してたのに、それがどんな形であれ壊れなかったのがこんなにも嬉しいなんてな！」

「あ、そ、そうなんですか……」

「村雨ちゃんはまだ掃除？」

「はい、今は執務室近くの廊下全般ですね」

茶色の長く大きめなスカートに、三角頭巾から出ているツインテールがまた可愛らしく、似合っている。清掃服と言うのは少し地味だが、村雨ちゃんが着ているのは中流階級に従えていたメイドのような格好である。

「うんしょ、うんしょつと……ふんふふくんっ」

鼻歌交じりに楽しそうに掃除してくれる姿は愛らしく、四つん這いになる時に出来る曲線美は現代美学の象徴と同等である。

『あ、村雨ちゃんおつかれー！村雨ちゃんが磨く窓の為に俺達生きてるんだなくって感じちやうよくー！』

『いつも頑張ってるね！可愛くて俺達もつと頑張っちゃうよ！』

『村雨ちゃんは僕達のアイドル！清掃員村雨ちゃんブヒいいいい！！』

『みなさんお疲れ様です〜！』

『『あ、副班長もおつかれーツス』』

『おう、おつかれ』

当然とも言える扱いの差だが、少し腹が立つ。いつも村雨ちゃんと食事を取ってるのは俺なんだぞ、テメエらはお呼びじゃないって言い散らかしたい。

「ハア……じゃあ俺も執務室入ってくるわ」

「はい！補佐官の仕事頑張ってくださいねっ」

「もちろんさ〜」

――

―執務室。

「では早速教えていくよ」

「ハッ！本日、蘇我提督直々にご指導下さり、ありがとうございます！」

「緊張しなくてもいいよ。それじゃあ最初は古鷹から作戦中の仕事や、本部への通信の仕方等を教わってくれ」

「了解しました！よろしく古鷹」

「はい、こちらこそ！」

とは言っても、兵学校で無線通信の方法や機械の操作は教わった事があるから簡単だけど、やっぱりこう言うのは実践してからじゃないと分からない事の方が多いと思う。

「ではまずは補佐官さんが？やる事からですね。補佐官さんは秘書艦である私と同じように、作戦の詳細を提督に随時報告したりするのが仕事の一つなのですが、大規模作戦時は他の鎮守府や大本営との連携を保つ為にそちら方面の無線情報を更新する形になります」

つまり普段補佐官は要らないわけだ。大規模作戦中にしか補佐官が来ない理由は多分それか。

無線情報をただそのまま提督に伝えるんじゃないやなくて、状況に合わせて提督に言う頃合いを判断したりして、作戦と提督による判断を円滑に進める。

そして他の艦隊と混雑しないように、他の鎮守府に現在状況を伝える。後、マップを見ながら提督と細かな指示について助言したりと、結構な喉労働だ。要するにオペレーター仕事。

聞いているだけで喋りっぱなしの現場になりそうな指令室に水を三本も置く理由も分かる。

その一方で、古鷹は艦娘からの現在状況を事細かに報告する義務が

ある。艦娘が艦隊とのやり取りをする理由は、オペの練度にもよるが艦娘同士との通信相互性がより優れているからだと言ふ。

「最後に、このボタンは優先的に提督へ情報を言いたいときに使ってください。そうすれば私が発言を譲りますので」

「バッチリだ、ありがとう」

古鷹が懇切丁寧に教えてくれるオペ仕事。

正直、連コラみたいボタンを全部一瞬で覚えられるわけねえだろうがとも思った。

重要なものだけ覚えて、あとはメモしたヤツをできるだけ覚えてマニュアル通りに動いてまた覚えるのが基本だ。

「ありがとう古鷹。では宍戸くん、今度は会話の記録の付け方や大本営に送る資料などを教えるからこちらに來なさい……とは言っても、執務の方は粗方知っているようだからかなり教えやすいよ」

「ハッ！ 恐縮であります！」

「ではこちらに座ってくれたまえ」

提督に誘導され鎮守府の玉座とも呼べる提督の椅子を提督の前で座る……何故か背徳感がある。

相変わらず座り心地のいい椅子に尻を落とし、提督の指先を目で追いながらその説明を聞き始める。

「リアルタイムで作る大本営への伝令は必ず資料として残さなければならぬ。これは補佐官の伝令内容を本部とここで照らし合わせるためだ。故に、迅速な手書きスキルが必要となるのだ」

照らし合わせて、何か問題があれば責任問題追求の時はかなり役立ってくれるそうだ。

やる事はシンプルに、裁判の記録係みたいなものである——自分と大本営のを記録する係だけだ。

書き記す紙にはテンプレートがあるが、補佐官の中には真っ白な紙の上に書いたり、スマホを使う人までいるらしい。音声入力には質が悪い上に、修正が必要な時にクソ時間食って面倒だからしない。

もちろん俺が最初に使用するのはテンプレート用紙だ。

「では実際に何か書いてみようか。私からの言葉は提督と言う文字に

丸を書いて、それからここに言動を書くんだ……いいね？」

そう言いながら後ろに寄りかかってくる提督は、俺の甲に手を重ねてくる。

「トウクン！」

「ん？どうかしたかな？」

「い、いいえ……な、何故手を……」

「こうしないと上手く教えられないじゃないか。ほら、丸を書くところは……ここだよ」

耳元で囁かれる。上腕二頭筋を当てながらのウイスポーボイスで、更に顔を近づけてくる。

「……んんっ」

そして、側にいる古鷹は少し恥ずかしがっているように見える。視線を逸れそうとしても目が勝手に……って感じた。古鷹には何か、いかがわしい行為にでも見えたのかな？

「では大本営に……我ハ提督ヲ尊敬セリ、とここに書くのだ。ははっ、我ながら少し、ナルシストだったかな？」

「ワ、我ハ提督ヲ尊敬♂セリ……」

「ん？何故かここに男性を示すマークがあるのだが……」

「パパがそんなに密着するからでしょーっ!!」

……パパ？古鷹は顔を真っ赤にしながら叫ぶ。もちろん、パパとは俺の事じゃない。

「こ、こら古鷹！ここでは提督と呼べとあれほど言ったと言うのに……」

「あ……そ、そのこれは！」

「えーつと……蘇我提督の、お子さん？」

「えつと……は、はい……」

そりや知らなかった。最低一回は結婚してるとは思ったけど、まさかこんな美味しそーじゃなくて、可愛らしいお子さんがいたとはね。しかも秘書艦。

「古鷹が他人のように接してたから気付かなかったよ」

「君を含め、ここのみんなは優しい。だから隠す必要はないのだが、おっぴらにこの事を言うのは控えてもらえると助かる」

「もちろんですよ」

「い、言っておきますけど、フリじゃないですからね！」

「わ、分かっているよ古鷹」

んん……提督って立場にいる人間の娘が、優しい人間に囲まれていないとその正体を明かせない理由？きつと何か昔あったんだろうけど、踏み込まないのがジェントルマンの努めだ。

パパくなんて言うから、一瞬だけいかがわしい関係かと思った。あの大天使古鷹が。パパ活してるなんて聞いた日には、生きていけない。

「コホン……少し無駄話が過ぎたようだ。さあ、指導を開始するよ」

「了解しました」

そしてまた手を重ねてくる。

「だから密着しすぎです!!」

大規模作戦、補佐官として

―食堂。

「はあ……疲れた」

「時雨姉さんお疲れ様っ、はいお茶」

「ありがとう、相変わらず美味しいね村雨のお茶は。お茶菓子を追加してもいいかな?」

「は〜い、お茶菓子のクッキー入りま〜す! 穴戸さんのご注文は?」

「お茶とクッキー、それから村雨ちゃんをテイクアウトで」

「申し訳ございませんお客様あ〜。本店の村雨ちゃんは非売品ですっ」

「この店訴える」

村雨ちゃんの店員口調からそんな茶番が始まった。持ってきてくれた物はそれだけなので、メニューもクソもないけど。

「それでどうだい補佐官様の仕事の方は? 楽しんでる」

「部下に茶化される、そして疲れる、その二言に限る。時雨こそどうなんだよ? 仕事の量は増したか?」

「まあ僕も同じようなものさ、僕の仕事に加えて君の仕事を代わりにしているんだから当然だよ。これはジャンボパフェ三個分は固いね」
「奢らねえし太るぞ」

「女の子に無粋な事を言うもんじゃないよ?」

女の子だったらカロリー制限しろ。

食堂の周りは19時を回る時間帯のせいか、かなり人が多い。鎮守府の全員が集まっても席は余るほどの食堂も、普段より人数が多いと混んでいるように見える。

卯月みたいな駆逐艦はいつも通り元気よく頬張り、瑞鶴みたいな空母はいつも通りに大盛りを腹に流し込む。

数日間の補佐官実習はとて順調であり、俺は順調すぎるあまりに張り切りすぎて疲れ果てていた。

今日は隣に座ってくれる村雨ちゃんの横乳を見ながらお茶菓子を口にして英気を養わせてもらう事にする。

「私も相席していいだろうか？」

「僕の隣で良ければ座つてよ長月。でも珍しいね、僕たちと相席するなんて」

「姉さん達の色話についていけないので逃げてきたただけだ。暫く避難させてほしい」

俺たちと同じ整備士の長月。彼女は作業服姿で紅茶とお茶菓子のセットを持ってきた。幼い顔をしているのに口調が厳格な上に男前、と言う睦月姉妹には珍しいタイプである。

「お疲れだな副班長……いや、補佐官殿。随分と気張っていたようだが」

「あれだけ休暇が必要って言ったのにこれだけ頑張れるなんて、人間って案外働けるものなんだね」

「そりゃ働けるよ……特に、男の視線を釘付けにするもののためだったら尚更……フヒヒ」

テーブルに顔を着きながら村雨ちゃんのロケットおっぱいを見る。隣の男子共は羨ましがっているが、テメエらなんかに渡さねえと眼力を強くする。

「……って、ど、どこを見てるんですかもうっ！」

村雨ちゃんは、本当に敏感だねえ……（視線が）。少し頬を染めながらも、彼女は自分のハーブティーを口に含む。

「んっ……あちっ！」

「だ、大丈夫村雨っ？」

「へ、へいひ……ちよつと熱かったかもお……」

「そ、それは大変だ!!火傷はお、俺がな、舐めて癒やしてあげるからねえ……!ハア……ハア……!」

「さり気なくキス宣言したぞ副班長」

「成敗!」

「痛い!叩かなくてもいいだろうがア!!」

「ふふっ、残念ですねっ」

「残念どころの話じゃないよお村雨ちゃんツツ」

……仲間と交わす雑談、笑い合い、そして絆。そのどれもが大切に、

掛け替えのない思い出へと繋がる。

時雨、村雨ちゃん、途中参加の長月と共にお茶を楽しむこの至福は充実した俺の人生の一部だ。

これから始まる大規模作戦の成功、そしてみんなの無事を何よりも祈りながら、

補佐官としての仕事を全うする、
その思いを胸に秘める。

―数日後の執務室。

全うとかどうでもいいからさっさと終われカス。

「空母瑞鶴大破！そして敵主力艦隊は壊滅です！」

「何をやってる穴戸補佐官！伝令を！」

「は、はい！えっと、第二舞鶴翔鶴艦隊、空母瑞鶴大破！及び敵主力艦隊壊滅セリ！」

『敵艦隊へノ追撃命令ヲ下ス』

「敵主力艦隊へ追撃しろとの命です！」

「よし、瑞鶴はこのまま撤退させるつもりだがどうすればいいと思う？」

「ど、どうすればとは……あ、そうかつ、練度の高い睦月を護衛に付けて撤退させるのがいいかと！古鷹！」

「分かりました！睦月さんは瑞鶴さんの護衛、そして両名撤退を開始してください！」

古鷹の顔を見てようやく瑞鶴達に命令が承諾された事を確認する。これだけ早く大規模作戦が実施されるとは思わなかった。もう既に6時間近く座りっぱなしだ。

韓露の返事が早く、ロシア海軍が打撃を与えていた日本海周辺の深海棲艦を素早い同時攻撃で劣勢へと追い込んでいく。日本側による数日間の補給艦攻撃が功を奏したようだと言っていた。

大量のボタンが付いている通信機器を前にして大本営との通信とそのレコード作りに勤しむ（書くものはスマホにした）。

伝令役として話しっぱなしだし、ミスが許されない緊迫した空気のせいかな、言葉が詰まったりする事が多々あった。初めてなんだから仕方がないと言いつけながらなんとか補う。

その上、艦隊指揮の判断に行き詰まったら助言したりしなければならぬ責任感——正に最前線と言う感じで、下の方で艤装装備を弄ってる時とはまた別の緊張感があつて、帰りたくなる。

提督もタブレットやらなんやらを使って他の鎮守府と連携を取ってるところを見ると、ただ命令を下すだけの仕事じゃない事は明白だ。

『こちら第二佐世保、ウルルン島付近に敵艦隊を発見した。我々が先に攻撃を仕掛けるので、援護を頼む』

「第二舞鶴了解した。古鷹、弥生の艦隊は佐世保に続かせろ！」

「了解です提督！」

『あ、えつと……柱島鎮守府です……そ、その……お、隠岐の島周辺に敵がいるので、そこは僕たちに任せてください……』

「えー第二舞鶴了解ですーすーえつと、その近くの艦隊は……古鷹、金剛の艦隊は隠岐の島周辺にいる深海棲艦を無視してもいいって」

「了解ですー！」

まあ、他の鎮守府との連絡も、半分ぐらいは俺に任されているのが現状だ。柱島から聞こえるひ弱な声は多分俺と同じルーキーなんだろうと勝手に予測し、同類がいる事にテンションが少し上がった。

他の鎮守府との現在状況を取り合うのはいいのだが、英語が喋れると言う理由で俺は海外の艦隊との通信も任されている。

『This is Vostochny Port! F*ck off Kasatka!（こちらポストチヌイ港！退けよ単冠湾！）』

『ジス、イズ、マイツル！ノット、カサツカ！』

『Oops! Почти!（わりい！）HAHAHA!』

間違い電話感覚で平然と通信を切るクソ野郎。

「穴戸くん！竹島に向かった敵艦隊はどうなってるか聞いてくれない

か?」

「分かりました!ここを押して……ジスイズ、マイヅル!竹島ズ、ヘルプ、ニーデツド?」

『タケジマ、ノーノオー!!』

「う、ワット!?え、なに、どういうこと!?!」

『ノオー!ノット、タケジマア!!イツツ、独島!独島オ、イエエス!ドクト、ドクトオツケーツ!?ドクトオ〜ヌ〜ン〜ウリタア〜』

「えーアツチは心配ないそうです!」

「分かった、では弥生艦隊はその後一旦戻らせると伝えてくれ!弥生達の次の目標は佐渡島周辺だったか……じゃあ瑞鶴を弥生の艦隊に編成して行かせる!」

「蘇我提督、できればその後は札幌に向かわせてください。待ち構えている単冠湾に援護要請が来ていました!」

「ではそうしよう!」

大規模作戦だけに、すげー長い作戦時間だ。とは言っても、短期決戦ということだけで決める電撃作戦である。大規模作戦と言えば他の鎮守府と連携、及び数日間掛けて行う作戦なので一日と言うのはかなり急ピッチだ。

補給線を断って弱体化した敵艦隊に短期決戦を目論むと言っても、まる一日掛けるほど大きな作戦だ。

前の大規模作戦も確かに機装とかクツソ早く直さなきやいけなかったけど、今回の作戦は多分あの時以上に早い修復スピードを要すると思う。

それを考えると、今回補佐官の仕事受けて良かったかも。慣れれば案外悪くないしな。

「そろそろヒトキユウマルマルを回る頃だが……作戦の終了命令はまだ出ないのか?」

「ないですね……大本営からも他鎮守府からも何も言っていないので、こうなると地味に暇ですね……喉を休めるにはいいですけど」

「はっはっは、たしかにね。今のうちに休めておきたまえ」

テーブルにあったボトルで喉を癒やす。同時に古鷹も喉の乾きを

癒やししながら、艦隊からの報告を待っていた。

大破する艦娘がかなり多いが、今のところ第一第二含めて舞鶴の轟沈者はいないらしい。

従来の船であるイージス艦や航空機なども損傷を負う事なくミサイルを発射できたらしい。

最初からミサイルとか片っ端から撃つとけよ、とか思ったけど深海棲艦には通用しないらしい。通用しないって言うのは、誘導ミサイルでも振り切るとか、撃ち過ぎると環境破壊を生むとか、実際やったらミサイルが空中で破壊されたとか。

ミサイル撃たれる前に破壊とか怖すぎ……俺が政治家なら、軍事費半端ねえイージスとか航空機とか絶対出動させたくない。最近ではロシア空軍の編隊が数機撃ち落とされた事件があったり……良く考えればすげー奴らと戦ってるのな俺ら。

まあでも、今回は敵艦隊をその手で撃滅することに成功したらしい、やったねイージス。

『こちら舞鶴第一鎮守府の斎藤、本作戦はこれにて終了とする。繰り返す、今回の大規模作戦は成功した。よって、本作戦は終了とする。各鎮守府は速やかに艦隊を帰還させ、今後の情報を待つように』

「斎藤中将からの作戦成功、及び艦隊帰還命令です！今後の情報を待つようにとー！」

「やっとかぁ……！」

「ハア……疲れましたあ……！」

俺を含めた三人が一齐にテーブルの上になだれる。提督はすぐさま工房に繋がるマイクへ作戦完了、そして劳いの言葉を述べた。

修理所や工房とは結構距離のある執務室からも、「よっしゃアア!!」と重音が聞こえる。俺があそこに居たら倒れるだろうな。

「いやぁ無事に終わって良かった！初めてにしてはかなり良かったぞ！」

「あ、ど、どうも……！」

「古鷹もそう思います！最初以外は殆どスムーズに言えるようになってましたものね！」

「な、なんか照れるなあ……はは」

「これはボーナスを弾ませないといけない……とは言ったものの、君は休暇の方がいいと言っていたね。古鷹から聞いているよ」

「くれるんですか!？」

「ああ。まあ休暇を渡すとは言っても、大規模作戦後は休む事にしてるので、君だけ特別に、と言う訳じゃないのだが」

推定でもかなり資材使ったはずだし、作戦司令官である斎藤中将からの報告を待たなきゃいけないから明日の金曜日は休みになるらしい。

「ありがとうございます！大規模作戦後の連休は有り難みが違いますねエ!!」

「そうだな。しかし、まだ大規模作戦関連の書類や消費資材のレポートと出撃記録、そして大本营司令書の処理もある。連休前に申し訳ないが、手伝ってくれると助かる」

「勿論です蘇我提督。片付けましょう!」

無事補佐官としての義務を終えた俺は、その後も数時間執務室に居座ることとなった。正直目が悪くなるのは避けたいんだけど、仕事だから仕方がない。

明日は給料日で休日だし、今度こそ部屋から出ないようにする決心をしながら、書類の横で見るアニメの順番をメモしていた。

本命の奴を見ながら萌豚系見て、テンプレ系を二画面同時鑑賞しよう。

「……ん？ご注文はリゼ○ヤロですか……聖剣の戦乱姫……無能剣士の鎮魂歌……穴戸くん、これは何かね？」

「へっ!?あ、い、いやこれはそのですね……」

「アニメを見るのはいいのだが、健康のためにも程々にしなさい」

「は、はっ!」

覗き込んできた提督がそう忠告してくる、優しいな……でもなんでアニメだって分かったんだろ？

小さな打ち上げ

―自室。

コンコンコンツ

「……………」

コンコンコン

「いませんよお〜……………」

コンツッ!コンコンツッ!コンコンコン!!!

「チツ、うるせえよ!!!誰だよクソがア!!!ご注文はオレですかってんだよオ!?!」

「僕だよ」

「村雨もいまあくすつ」

「グレートですよオ……………」

朝日が登つても一人部屋のカーテンを開ける人がいない俺の自室は完全に外の世界から遮断されていた。ベッドの上で匍匐状態を作つて、ノートパソコンでかわいい女の子達を見ながらあくすつしたのにこの始末。

朝五時ぐらいから見始めていた萌豚系アニメはもう既に最終回まで見終わつて、次はテンプレ系を見ていた。

時雨はカーテンに近付きながら両手を開けるポジションへと構え、

「ほら、もう9時なんだからいい加減起きて!」

「うお、まぶしっ」

「もう駄目ですよ〜!早く起きてくださあくい!」

「む、村雨ちゃん……………」

「え、どうしたんですか穴戸さん?」

腰を曲げ、毛布を引っ張っていた村雨ちゃんがすぐくデカイ谷間を見せてくる。足を少し動かせば触れるぐらい近くて…………たゆんたゆんしてて柔らかかそう。

あれだけデカイんだ、足を動かして少し触るぐらいどうってこと無いだろう。

「……ギロツ」

と思っただけど、時雨が怖いからパス。あの目は既に俺をぶっ飛ばすための攻撃ルートを3通りぐらい考えている目だ。

素直に身体を起こし、村雨ちゃんや時雨に見られないため、ノートパソコンに映っていたちよつとエッチなシーンの動画を止める。

……ん？おかしいぞ？ちよつと焦ると何故か家族に見せろとばかりにフリーズする現象はよくある。本当に腹立つけど。

こういう時は強制終了するボタンを押すと消えるはずだ、ポチッと。

『荒木和也……このモニカ・フュードリヒは貴様に決闘で敗れた……』

今日から私は貴様の奴隷だ、早く私を犯せえ!!』

『『ええええええ——!!』』』

「……………」

強制終了しようとしたのに、このクソノーパソが俺の言うことを聞かずに音量を爆上げした。

当然、部屋に来てくれた時雨と村雨ちゃんはドン引き。ヒロイン達とのハーレムモテモテを大音量で見せてくるアニメをようやく止めて、二人を見る。

「……コホン、それで今日はどんなご用件かな？整備工作班の副班長はとっても大事な任務に勤しんでいたところなんだ」

「今日はその危ない任務にドクターストップを掛けに来たんだ。穴戸くんの健康のためにも、お天道様の下を歩いて僕たちにパフェを奢る事を勧めにね」

「奢らねえつつつてんだろオ!？」

相変わらずのパフェ好きである。

「じよ、冗談ですからっ、落ち着いてください穴戸さん」

「冗談?」

「……えーつとそ、その……穴戸くん頑張ったみたいだし!今日は僕の奢りで、ファミレスとか……どう、かな?」

「え?」

「時雨姉さん、昨日から穴戸さんと食事する事ばかり話していたんですよっ？明日どこ行くこうとか」

「む、村雨!!」

「……時雨が、奢り……？しかも、昨日から……？意外すぎてドツキリを疑う所だが、時雨の赤面ぶりを見て多分本当の事だろう。」

「なんだよ、すげーいい娘じゃん。夜10時まで執務室出れず、その後直行で就寝したから時雨たちとも会ってないんだよなあ。」

「分かった、そういう事だったら今すぐ行く」

「ま、まあ穴戸くんがどうしてもって言うんだっただけど……」

「可愛くねえな」

「ふふふっ」

「フアミレス。」

「まあ良いんだけどさ、なんで鈴熊がここにいるの？」

「シグシグに呼ばれて！」

「同じく」

時村が俺の隣で、鈴熊が対面に座っていた。ここフアミレスの雰囲気はいつもより混んでいるようにも感じる理由は多分金曜日だからと、鎮守府がおやすみだからだと思う。

「オーダーを頼み終えた俺たちは、おしゃべりやストローのゴミを畳んだりして時間を潰していた。」

「今日は穴戸くんが無事に補佐官の仕事を終えて、僕が副班長の仕事を全うできたことを祝うために呼んだんだ。流星に僕と穴戸くんと村雨だけじゃ物足りないからねっ」

「一理あるが、どうせこのあとはみんなで大規模の成功を鎮守府で祝うんだ。これはその前座みたいな物らしい。」

「そ、その……ゴージャもここに来てよかったでちか……？」

「いや寧ろお前は休めよ。息抜きの仕方、忘れたんだっただらここで学ぶチャンスだぜ」

「副班長……わ、分かったでち！」

ジャージ服と作業服しか着ない事で有名なショートヘア美少女の名前はゴーヤ。俺と同じ整備工作班。

元ブラック企業の平社員としてこき使われた結果、自分を追い込む事にやり甲斐に目覚めてしまったらしい。その上、仕事をしていないと何故か罪悪感に苛まれると言うことで、提督からは適度にストップを掛けられている。

着任早々の挨拶で、ゴーヤは丁稚でち！よろしく丁稚！と分かりにくい自虐を放つてた事もいい思い出。

確か15連勤12時間以上と言う苦行を成し遂げており、整備工作班としては非常に役立ってくれている。

だからたまに俺たちが彼女の病気を治すために、こうして強引にでも外へと連れ出して遊ばせる必要があるのだ。

「今回の作戦結構やりやすかったよ！結構連携取れてたし、誤射とか少なかったし！」

「誤射はいけないだろ……まあみんな無事で帰ってきたんだから結果オーライなんだろうけど」

他国との合同作戦ではそういうことも少くない。日本じゃ無いけど、アフリカ西海岸方面で誤射による死人が出た事あるって聞いたことがある。こつちでもあり得る事だから、笑い事では済まされない。

提督は、大きな艦隊なら補佐官と共に指揮する海戦の責任を取らなきゃいけないかったりするから、大変な仕事なんだなと思ったりもする。

「わたくし達がなるべく被害に遭わないように配慮してくれたと古鷹さんに聞きましたわよ？ちよつと……見直しましたわっ」

「え？あ、ああ！誰も傷ついて欲しくないからな！」

「すごい……すごいです穴戸さん！」

「穴戸さんのクセにカッコいい事してる……」

「流石副班長でち！私ももつと頑張るでち！」

「ゴーヤはもうちよつと休んだ方がいいと思うけど……それよりも穴

戸っち、本当に……ありがとうねっ」

「あ、ああ」

俺のカルマを上げてくれる古鷹ちゃんに、謝謝。

確かあの時、周辺の海域にかなり多くの深海棲艦が出没していたので俺たち以外の艦隊にやらせて一時撤退を提督に進言した事があった。

整備工作班、そして艦娘達に休み時間を与えられて俺カッコイイ。

嘘です、本当は俺が少し休みたかっただけです。半ば強引にでもそっちの方向に持っていけないと休めなかったので、変動的な攻撃目標は他の鎮守府に任せて一時撤退させた。

特に柱島鎮守府の人たちが舞鶴に迫っていた敵艦隊を倒してくれただお陰で、休み時間が増えたのだ。本当に有り難い、今度会った時は必ずお礼しよう。

そして、素直にお礼をしている鈴谷達可愛い。

「あ、あくー！いま照れている鈴谷達を見て可愛いって思ったでしょ？ やっぱ穴戸っちは相変わらずチョロいね〜」

「チョロくねえよ?」

「いつも村雨さんの前ではデレデレしている方が何を言い出すのかと思えば……」

「俺は例え相手が村雨ちゃんでも奢らないでしょ？女の子には謙虚で慎ましくして欲しいから、敢えて奢らないんだ。一旦男を手玉に取った感覚を知った女はこれ以上ないぐらい我儘と化すからな」

みんなが「うわあ……」と言いながらジト目で後ずさる。昔ならまだ奢るのも良いかもしれないけど、今は奢る事を義務付けられるほどの給料の格差は無いしな。それともなにか、艦娘は女だけしかなれないからって女性優遇社会突入か？

「こっくんなに可愛い僕達みたいな美少女軍団に囲まれて、奢らない方が不平等ってものだよ」

なるほど。村雨ちゃんと時雨を両手に、そして向かいには鈴谷と熊野とゴーヤが座っている。確かに、この状況は男からしたらハーレム

天国であり、これを実現するために男子はあらゆる手を尽くすだろう。ダチの結城なんて合コンでしか比率を稼ぐ事ができないからな。

でも俺は、オトナのオトコノコなんだー君たちが平等の言葉を履き間違えている事を教えないとな。

「分かった、じゃあ時雨達と平等になるために裸になるよ」

「……………え?」

「うん、だからね? さっさと裸になって? 一緒にすっぽんぽんになればお互いのイイトコロ見せ合えるからビョウドウだね? ほら早く」

「な、なにを言っているのかなきみは?! 変態かなきみは?!」

「平等ってのはね、一人に一つの物を与えたら、全員に一つの物を与えらるって意味なの。つまり俺が服を脱げば時雨も脱いで、全裸になれば時雨もそうなるって意味なの。ここじゃんだからトイレで平等になろうか、ほら早く」

「わ、わかったよわかったよ! ごめんてば!」

分かれればいいんだよ。少し可愛いからって調子に乗るなよ。

『お待たせしました〜』

色々な物が運ばれてくる中、俺は自分の注文したコーヒーと備えられた2つのクリームパケットと2つの角砂糖。時雨と村雨ちゃんは王道のパフェとコーヒーで、他はカフェオレや紅茶やダブルエスプレッソ入りのブラックコーヒーを取る。

ゴーヤにはちゃんと、デューカフのエスプレッソコーヒーを頼ませておいた。

「それじゃあちよつとした音頭として……………今回の作戦の無事を祝して乾杯しようか」

「それ音頭というより提案よ姉さん……………」

「し、しようがないでしょ! こう言うの慣れてないんだよ!」

「時雨流は嫌いじゃない。祝して乾杯。要はそうなんだから、こう言う時ぐらいコンパクトにまとめてればいいんだよ」

「確かに、パーティー等で長々とお話をされるのは少し気が滅入りますわね。料理を目の前に出されたと言うのに、スピーチの間は先に食べたいけない暗黙のルールがありますし……………」

「料理出された瞬間にしゃべるのはカンベンしてほしーよねー」

「ゴホンツ……それじゃあ、乾杯！」

「「かんぱーい！」」

お互いのグラスをぶつけ合い、一口だけ含む。ゆったりとした時間を過ごす事を目標としたお茶会ーみんなそれぞれ口に飲み物を含みながら、談笑に花を咲かせるのが定番である。

「うえ……このカフェオレほとんどブラックじゃん、ニガい……」

「What the fck did u call me ni ga!?!」

「宍戸くん、鈴谷はそっちの意味で言ったんじゃないと思うけど……しかも妙にネイティブなのが腹立つツ」

「ラップ系の音響マネすれば、みんなホーミイの仲間入りイ、イイエ、イイエ」

チンピラ的な動きをすれば完璧。

「鈴谷の舌はまだまだ子供ですわね……」

「とか言って熊野は砂糖入れてるじゃん！しかも紅茶にだよ!？」

「まあまあ、私達なんてパフェと一緒にコーヒーを飲んでるんですから、砂糖ぐらいはいいいんじゃないですか?」

「村雨の言うとおりでち。別に砂糖の有無なんて好みの問題だから気にする必要ないでち、ずるるっ……」

「「ぼけー……」」

と言っておきながら平然とエスプレッソダブル入りコーヒーをそのまま飲むゴーヤ。その領域に踏み入れる事ができない鈴谷たちは、呆けた顔でゴーヤの大人スタイルを凝視する。

とても人柄のいい娘たちだから、上辺だけの会話で心にもない言葉を使って褒め合う事はしない。本当にそう思っているゴーヤは、ごく当たり前のようにあの泥水を飲む。そんなオトナのゴーヤへ賞賛の言葉を送りたくなる。

「ゴーヤスゴイ……私たちなんて砂糖なしじゃコーヒーも飲めないんだよ?すごくくない?」

「これが本当の淑女……」

「鈴熊、ゴーヤの言うとおりの味なんて人それぞれだぜ……まあ俺は？ダブルエスプレッソを？ダブルで？直で飲まないと？物足りないっつーか？フフンツ」

「宍戸さんかっこのいいですね！」

「フフ、村雨ちゃんへの愛も、ダブルになっちゃったよ」

「ありがとうございませうっ！」

「そんなコトだろうと思って、宍戸くんにはエスプレッソダブル用意しておいたよっ」

「は？」

パフェの後ろから出てくるコーヒーカップに入った濁り泥水を、時雨から手渡される。

「欲しかったんでしょ？あげる。本当は軽い罰ゲームに使おうと思ってたんだけど、普通のコーヒーじゃ満足しないんでしょ？」

「え、あ、そ、その、も、もち、ろん、です、はい、あ」

「じゃあ宍戸くんの一気見たい人々！」

「二はあ〜い！」

満場一致とはこのことだ。

「ま、まあ、カフェイン上等っつーか？なんっつーか？美味しいから普通に飲めるっつーか？て、てててて手とか震えてねえし？」

「思つきし震えてるんだけど……」

「どうしたの？さっきの威勢はどうしたのかにや〜？」

「副班長、無理だったらゴーヤが……」

「駄目だア！俺が飲めると言ったんだから飲めるに決まってるんだッ！誰の助けも必要ないッ！」

「何を熱くなってるのやら……」

俺はこの泥水を喉に流し込む。味を例えるとそうだな……クソ不味いコーヒーの苦味成分三倍ぐらいにした奴かな。もつと言えれば今の俺みたいに、顔を無意識にしかめるぐらい苦い。

イタリア人め、なんてものを作ってくれるんだ。

「クウウウ……！」

「変にカッコつけるからだよ。これに懲りたら大人しく自分のコー

ヒ―を飲むことっ」

教訓を得た。

女の子の前では無駄にカッコをつけると痛い目を見る。

ただ、男はいつ何時でも女にいい顔したいものなんだ。例えそれが通りすがりの、俺の人生に全く関係の無い美人だったとしても、少しでもいい顔したくなるのが男の性なんだよッ。

ほら、あっちのテーブル付近で転んだOLに手を差し伸べてるあの人居るでしょ？あんな自然に助けられて、誰にでも紳士的な笑顔を振りまく事ができれば俺もきつとモテるのに。

特にあの人は中年のメガネって言うのがポイントだな。女性的って訳じゃないけど、邪気がない感じだからある程度身体に触っても、この人触りましたーって痴漢冤罪にはならなさそう。

そして何事もなかったかのように手を振りながら女性とバイバイするなんてすげー。

そんな人が俺達のテーブル付近に近寄ってきて、

「……………、斎藤中将じゃないツスカ!?!」

「「え!?」」

休日にも上司の上司に会う気分はどういう感じだろうか。例えどんな状況でも礼節を重んじる日本人の心は素晴らしい。だからストレス溜まるんだよ。

俺達は斎藤中将に敬礼する。さっきまでのちよつとしたパーティー気分は消し飛んだ。

「おお、こんな所で会うなんて奇遇だね。皆さんは第二舞鶴の所属かな?」

「「はっ!!」」

「そう固くならないでくれ。ここには君達以外にも居るんだから、警戒させては申し訳ない。ほら座って座って」

確かに他の鎮守府所属の軍人も気が休まらないだろう。大人しく座る。

店内で敬礼してしまったので、注目を集めてしまった中将はテーブル際を歩いたびに堅苦しい挨拶を受ける事になるだろう。

「宍戸くん、補佐官の仕事は見事だったと聞いているのだが……やってみてどうだったかな？」

「ハ！やりごたえがあり、いい経験になったと自負しております！このような機会をお与え下さった中將には感謝の言葉もございません！」

「お、大袈裟だね、コホンツ。そう言ってくれるんだったら私からも話しやすいだろう……ここで会ったのも何かの縁だ、宍戸くん、少し屋上のラウンジで話してもいいかね？」

……えツ？

「なに、少し話がしたいだけだよ。私のオフアーを受けてくれた事への感謝、と言う簡易的な物だけだね……君たちから宍戸大尉を借りていくけど、いいかね？」

「はい！勿論！」

「では行こうか、こちらについてきてくれ」

「はっ！」

は？なに攫おうとしてんねん。誰か止めてよ。

ーレストラン二階。

俺なんかしたか？大規模作戦で何かしでかしたとか？クビを宣告されるとか？

風が吹き抜ける屋上のラウンジは広く、誰も使っていない。完全に一対一の状況である。

「お茶の邪魔をしましてすまないね宍戸くん……それにしても、君も隅には置けないね」

「か、彼女たちは自分の友人のような関係であり決して不純な関係では」

「ハッハッハ、君にそのような心配をするつもりは無いよ。それに男女の関係にとやかく言うつもりもない……そんな事より、大規模作戦は本当に見事だったと蘇我准将から聞いているよ。受けてくれてありがとう」

そう言いながら、頭を下げてる。

「頭を上げてください中將！自分は最善を尽くしただけです！この程度の事ならば、これからも補佐官を兼任しても良いと思っています！」

「そう言われると、私の人を見る目は間違っていなかったと、つい嬉しくなってしまうよ」

上司にいい目で見られようと、余計なことを言うのは日常的な光景だ。こうやって自分を追い込むのに、後々他人のせいにするまでがテンプレ。大丈夫だ、俺なら補佐官をこれからも続けられると思う。

中將が俺の目の前に移動する。

「そこで折り入って相談があるのだが、いいかな？」

「勿論です、何なりとお申し付けください」

「君は、提督になる気はあるかな？」

「……は？」

やらないか？

「はっ？」

「いきなりですまないね。本当は週が明けてから話そうと思ったのだが」

「い、いいえー！こちらこそ無礼な物言いを」

「うちの提督とのデジヤブを感じる。提督たちの間でサプライズが流行ってるのか？」

それにしても今度は提督か、俺も偉くなったもんだな！

「て、提督……い、いやこれまた何故……」

「君は、提督育成プログラムを知っているかね？」

提督育成プログラム……って、全然聞いたことないです。なんだそれ？

「東京の荒木大將が立案なされた育成プログラムでね。各鎮守府から一人、提督になる素質のある人材を見つけて教育しよう！と言うものなんだ」

「聞いたことありませんでした……」

「まあ、この事はまだ発表していないからね」

「じゃあ知ってるわけねえじゃん。なんだよ提督育成プログラムって。育成ゲームかと思ったぞ？」

「それで、そのプログラムとやらに自分を？畏れ多くも自分以外に多くの適合者が居ると思えますが……」

「何を言うんだ！大規模作戦の作戦立案に協力し、しかもそれが成功した。補佐官の時には艦隊運用に必要な判断力を見せ、功を焦らず艦娘達を休ませる機会を作り、初めての大规模作戦を海外との連携で円滑に進める程の技量を持っている。これほど提督に相応しい者は居ないと思うが？」

「んーそんなこと言われたらやるしか……って、その手には乗らないぞ。蘇我提督もそうやって褒めてきて、俺を補佐官に任命したんだ。それに作戦立案は完全に斎藤中將の技量だと思う。」

「……実は、数を増やしている鎮守府、港湾、基地の数に対応すべく提督になってくれる人が必要なのだよ」

海外にも鎮守府作ろうとしてるもんな、ブルネイ鎮守府みたいに。北方領土まだ取り返せてないのに何処取ってるんだって感じだけど（※侵略ではなくあくまで保護です）。

「確かに数は増えているらしいですね……ですが尚更、その育成プログラムとやらに参加する事はできません。自分より上位階級の面子もあるので」

「ふむ……」

大尉より上の階級なんていくらでも居るし、その中から提督になりたがっている人をすっ飛ばして俺が提督になるなんて畏れ多すぎて刺されそう。

提督、その職業は敬われ、モテモテになる代わりはかなりハードである。鎮守府同士のコミュニケーションは勿論、部下の統率、大本営のノルマをこなし、それをスムーズにこなす必要がある。その上、常に冷静沈着でいなくちゃいけない、殆どの責任を背負わなきゃいけない。

上に立つ者はみんなそうだけど、それが深海棲艦との最前線ってなるとこれがまた厳しい。常に変動する戦況に対応し続けるのだから、ストレスはマックスアウト状態になってもおかしくない。戦況に対応するのは俺達整備作業員もだけど。

着任する鎮守府は上層部が決めるから海外とか行った日には、最低一年は帰ってこれねえし、提督やってそれ以降はやらないって人も多い。

大人になれば俺みたく整備工作を目指す人も居て、舞鶴港湾基地のように従来の艦船の乗組員を目指す人も居れば、提督のような立場を目指す人もいる。

子供達のなりたい職業ランキングが、大人のなりたい職業ランキングと比例するとは限らないのと同じだ。すげー立場だからって大人の視点で見ると、やっぱり整備作業員の方が良いと思う事も沢山

ある。

提督になりたいやつは減少してるらしいけど、なりたいては絶対居るし。

「提督になりたい者が居ればその者達がなればいいのだが……元帥や荒木大将がその者達を提督にしたがらないのだよ」

「そうやって落とすくせに人材不足とか言ってるのは、現代の会社と全く同じツスね。でも会社みたく倒産とかできないツスから、そんなことしてると海軍やベーツスよ？」

「確かに提督となるには相当な人材でなければいけないですが、劣った人物が志願してくるとは思えなく……」

「荒木大将は慧眼の持ち主ゆえ、本質を見抜く。案の定当たるから困るが、だからこそ今の日本海軍がある訳なんだ」
「なるほど」

「他は知らないけど、たしかに提督になる人って良い人ばかりな気がする。」

「相手が下っ端の二等兵だろうと心配したりするような心を持っていて、国と部下を第一に考えられる思考を持ち、それでいて優秀な人たちだから説得力がある。」

「人選を誤らないとか超能力者かよその大将は、すげー人もいるもんだ。」

「一度だけガリ勉で学歴だけの将校さんが鎮守府に着任した事あるけど、アイツホント使えねえから。傲慢な性格もあって、二ヶ月で辞めて頂いたよ。」

「この提督育成プログラムはお試しのようなものでね。各鎮守府から一人提督候補生となる人物を、各現役の提督が直接選んで、大将が指示したミッションをこなしていくと言うものだ」

「海軍大学の教育を受けて、大将の任務をクリアしていくのが基本的な流れなんだそうさ。」

「それは、鎮守府の資材管理とか艦隊運用とか提督の代わりにやった

りする任務らしい。任務というより試験みたいなの？

なにをするかは分からないけど、集中的に提督の仕事とその心構えを叩き込まれるらしい。

心構えか……何をするか非常に気になる。

「と、最終的に認められれば一艦隊を指揮する司令官、延いては提督となれる訳だ。君にとっても悪い話ではないだろう?」

「そう思います」

「包み隠さず話せば、君みたいな有力な提督候補生が参加してくれば私と蘇我提督の顔が立つのだよ。勿論、今すぐに決めなければいけないことじゃない。時間はたっぷりあるから、君のお爺さんとも相談して、ゆっくり考えてくれていい」

「んん……分かりました」

「話を聞いてくれてありがとう。では、私はこれで失礼するよ」

数々の疑問が残るも、中將が下へ続く扉に手を掛け、そのまま扉の下へと消えていく。

少し温かい風を全身で受けながら余暇に浸る。

「……提督、ね」

何故だろう、鎮守府の提督と言う大きなポストが、比較的楽に手に入るチャンスが今日の前にある。この歳でこれほどのチャンスが巡ってきた。

だけどそれと同時に、恐怖があった。

今の鎮守府での生活が変わろうとしている。人間は変化を嫌う生き物だ、自分が満足している状態が変わるのを嫌う。

それに伴うリスク、そして必要な努力を考えたらこのままの方がいいと考えてしまう。

下で俺とお茶をしてくれるみんなの顔が通り、その一步が踏み出せない。失いたくないと、このままがいいと、本能的に思ってしまうのだ。

だから、俺の本心が分からなくなる。

今の満足してる生活を続けたいのか？

提督になりたいのか？

仲間は、俺の背中を押してくれるのか？

「……俺は」

ーレストラン

「あ、帰ってきた、遅かったじゃないか」

「もうコーヒー冷めちゃってるよ〜？」

「……………」

「……………ん？どうしたの穴戸くんそんな顔して？」

神妙な顔立ちで帰ってきた俺を気にしているみんなに、俺は質問をぶつける。

「……………なあ、もし俺が提督になったら、どう思う？」

「……………は？なに言い出すのいきなり？」

「ええつと……………村雨は、穴戸提督かつこいいと思います!!」

「えーつと……………ゴーヤもそう思うでちー！副班長が補佐官の時の大規模作戦はスムーズにいったでちー！」

「提督になったら鈴谷たち穴戸つちのトコロ行っちゃうかも!!熊野んもそうだよね？」

「わ、わたくしは……………まあどうしてもって言うのでしたら、行って差し上げなくもないですよ？」

「面白い事言うね。まあ穴戸くんが提督になったら、僕の妹たちと村雨はゾツコンだろうね……………まあ、提督になればの話だけど？」

「ちよ、ちよつと姉さん！ゾツコンとまでは言っ……………」

ゾツコン……………村雨ちゃん……………ゾツコン……………モテモテ……………ゾツコン

……………村雨ちゃん……………みんなから……………モテモテ……………時雨の妹たちで

……………ハーレム作れる……………モテモテ。

「みんな、俺提督になるよ」

―舞鶴第一鎮守府

つーわけで来ました、この第一鎮守府に。いや、別に女の子達が
ゾッコンするからなる訳じゃないよ？ただほら、提督達の顔を立てる
漢？にならなきゃだし？

あれだけ言われたやるしかないッ。デメリットも無さそうだしこ
りややるしかないっシヨ！

「よく決断してくれたね君達。寧ろもう少し考えた方がとも思ったく
らい早いのだが……まあ、活躍を期待しているよ」

「ハっ！」

返事と敬礼をより強固にさせるのは、齋藤中將が言っていた荒木大
將であり、提督育成プログラムを立案した人でもある。

大規模作戦の立案をモニター越しに見ていたそうせい侯とは、彼の
事だ。

舞鶴第一鎮守府の執務室はかなり広い。第二の1.5倍ぐらい広
く、設備もより整っている。その中心であり玉座に座っているのは
齋藤中將……と言うのが本来の流れだが、今は荒木大將が座ってい
て、中將は横に立っている。

顔の傷が深くて、とにかく軍人って感じの人だ。横でじっと見てい
る上にさつきから何も喋ってないんスけど大丈夫ツスか？

俺と、出会い系女に散々金雀り取られてそのまま連絡取ってなかつ
た友人の結城は、ビクビクしながら荒木大將の前に立つ。

正直、舞鶴では俺だけかと思ってたけど、第一と第二で提督候補生
がそれぞれ別なのね、納得。

「……結城真司」

「は、はい!!」

「……期待している」

「あ、ありがとうございますー！」

斎藤中将が言うには慧眼の持ち主らしいけど、話しているだけで本質を見抜かれるとか言われていた人だ。

第三の目を持っている訳じゃないんだから心までは読めないと思うけど、提督になる人の身边情報や過去の履歴とか色々調べるんだろう……と言うか調べてるんだろうな。じゃなかったら俺や結城を候補生にしないし。

でも出会い系で金溶かすような奴を提督にするなんて、案外目が節穴なのか？

「……穴戸龍城」

「ハッ！」

「……大いに、期待している」

「ご期待に添えるよう、尽力致します！」

かなり無口な人のようだ。野獣の眼光とは正にこの事。

「良い返事を貰った事で、荒木大将はとてもお喜びだ。だから君達達には特別、他の候補生よりも早く最初の試験をしてもらいたいが、良いかね？」

「ハ！」

「いい返事だ。では、してほしい試験の内容を説明する……それは」

「そ、それは……」

提督育成プログラム始動編 勧誘仕事

―舞鶴市内。

「か、海軍ツ！今を輝く海軍に入りませんかア!？」

「やりがいのある重労働！罵倒する毎日！最高に素敵な職場があなたを待っていますよオオ！」

舞鶴にある商店街。そこには海軍勧誘を呼びかける二人の男が居た。それは執務室に呼ばれ、提督候補生として正式に育成プログラムに参加する事を表明した、第二鎮守府俺と、第一鎮守府の結城だった。「全然集まんねー！どういう事なの!？」

「重労働と罵倒し合う毎日とか絶対欲しくないよな？そういう事だ馬鹿野郎。あと女の子だけに話しかけるのやめろ」

「だって欲しいの！女の子欲しいの！艦娘にならなくてもいいから海軍入隊して欲しいし少しでもチャンス作ればって思うじゃん!？」

最初の任務はなんと、海軍への勧誘仕事だった。ノルマは一週間以内に最低3人の有望な人材を自分の鎮守府に招き入れる……まあそのついでとして海軍入隊の勧誘もやってくれ、と言われた。

舞鶴第一、第二鎮守府に配属される新人は次舞鶴に来たとき荒木大将から呼び出されて、何故この鎮守府に配属されたかを聞かれるからその時に俺の名前を出せばオツケーらしい。いつ戻ってくるか分からないけど。

『有望な人材』とはなんの事か聞いたら、自分で考えろと言われた。まあプログラムの発表前から、その任務をヘッドスタート出来たのは幸運中の幸運だ。これで誰よりも先に終わらせれる。

なんでえく海軍の勧誘仕事プログラムに入ってるのく？

知るかよ、大将に聞け。

「そこの麗しのお嬢さん！海軍に入りませんか！」

「い、いや、私はもう転職先決まっているので……」

「そんなこと言わずに！ほら！お安くしときますから！」

「は、はあ……？」

何を安くするんだよ、商売じゃねえんだぞ？

結城は軽くあしらわれ肩を落す。この動作を今日何回見ただろうか？

後ろには古い師が使うようなテーブルがあり、そこには海軍への入隊応募書が積まれている。

これは用意してもらったものではなく自前である。海軍の勧誘をしているかどうかなんてどうやって確かめるんだと思うけど、これ絶対見ている人居るよね？ポケットティッシュ渡す人が本当に渡しているか見張る係みたいに。少し妄想しすぎかも知れないけど。

応募書以外は全部自前で、手書きのポスターを掲げながら、海軍への入隊する為の簡単な3ステップメモを渡していく。

「今なら優先的に採用されますよオオ！」

「あ、あの！それ本当ですか!?今はまだ学生なんですけど……」

「学生上等！近いうちに採用試験が行われるから、そこで海軍に入るための簡単な身体検査をクリアすれば学生でも大丈夫だ！卒業してからでも大丈夫！」

「ほ、本当ツスカ!?ありがとうございます！」

多分ね、兵学校卒業したから高卒入隊となると詳しい事は分からないんだ。ただ、正式採用の訓練は三ヶ月掛かるのは知ってる。そこで落ちないよう祈るよ。

「試験場では小さなアンケートが募集されるから、海軍に誘ったのは俺だっけ書いてね……重要だから、忘レナイデネッツ」

「わ、わわわわかりましたア!!」

やり方自由で、兎に角3人もってこいとこの事だ。俺たちの鑑識眼を試しているのか、近いうちに行われる身体試験でアンケートがあつて、俺に誘われてって名前を書いてくれてもオツケーなんだそうさ。

だから入隊希望者に徹底的に話し掛けて、見つけたら俺の名前入れ

てくれて頼めば任務達成!

今を時めく海軍だしカバレッジとかの条件もいいから難しくはないし、こんなんで提督になれるとか、簡単過ぎて顔がニヤけてくるぜえ!

なんて思えない。また休日を潰されてる。

入りませんかーしか言っていなかったら、流石に通りすぎりの人達はマナーりするだろうし、正直俺がなる。

たまに趣向を変えたりするが、それで引つかかっているのかは分からないが効果はある。

「海軍!海軍は今未曾有の危機に晒されているツ!!大和魂を胸に秘め、大いなる敵と戦う時は今だア!!海軍ンンは……キミを待っているぞオオオ!!」

「そうなんですか?でもうちらはもう海軍所属なんで入隊書要らないっすよ、副班長」

「って、お前等かよ……」

三人で群がっていたのは第二鎮守府所属の整備工作員だ。

「なんでこんな事やってるんスか?」

「んと……大本営本部から、直属の命を賜ってな……ツ」

「はははッ!何っすかそれ!」

「でも副班長と結城中尉も居るとすると……ガチですか?」

「んーまあ合ってるっちゃ合ってるな!」

「マジっすか」

いや合ってるだろうが。俺は何も違う事言っていないし。

どうやら彼らは買い物に来ていただけのようだ。数回ほどまた茶化されながらこの場を後にする部下達。

「ハア……お前ももうちょつと仕事しろよ、俺ばっかだぞ順調に勧誘できてるの」

「仕方ねえじゃん!!そもそも本当にこんなんでプログラム達成できるのかよ!?!」

「お前斎藤中將に誘われたって言われたよな?どうやって誘われたんだよ……」

「提督になれる奴は俺しか居ねえ!!モテモテになれるのは俺だけエ!
あ、そのお嬢さん!俺と言う将来の提督から、海軍入隊の勧めは如何ですか!」

「間に合ってるよ、僕達も舞鶴鎮守府所属だからね」

「最近よく会うな俺たち」

「こんにちわ穴戸さんっ、結城さん」

時雨と村雨ちゃんだ。私服だ。右手にソフトクリームだ。

俺が汗を流している時に自分達はのうのうと休日の商店街を楽しんでるなんて……と、一瞬だけ思った。

「時雨ちゃんに村雨ちゃんじゃないか!こんな美少女達と遭遇できるなんて俺はなんてついているんだ!良かったらこれからお茶でも……」

「まだ勧誘の仕事あるんですよ!お前は。さっさと持ち場に戻って一人ぐらい勧誘成功してこいよッ」

「これって穴戸くんの提督になる発言となにか関係あるの?」

「あー……後で説明する。今は海軍に入ってくれる人を集めなくちゃいけないんだ」

「そうなんですかあ……」

レストランのお茶会で最初は冗談だと思われていたが、その後舞鶴鎮守府に顔を出し、迅速に行動に移る様も我ながら軍人らしいと思う。

ともあれ時雨達はまだ知らない。結城と俺だけが今知っている事だ。

「それで、あのパフェの次はソフトクリームかよ?姉妹だからって村雨ちゃんみたくボンツキユツボオオン!になれる訳じゃないんだから、カロリー制限はしとけよ?いつも俺の食事に健康食品ぶち込んでくるくせに」

「ソフトクリームみたいなクリーミーな肌になるにはクリーミーな物を食べないと駄目なんだよ?」

肥満のアメリカン見たことある?あれはお前の言うクリーミーなボディを目指した結果なんだぞ。

「まあまあ！ソフトクリームを頬張る時雨ちゃんも、かわいいぜ！」

「ありがとう結城くん。これが模範解答って言うんだよ穴戸くん？」

「皮下脂肪をクリーミー増しましにするって教えるのが優しさなんじゃないか普通？」

「ふふっ」

時雨は残っていたコーンも一口で平らげ、指を舐める。ソフトクリーム自体小さかったものの、パフェ食ったあとバナラアイスを食べるのは流石に夕飯の食事でカロリーオーバーする。

太った時雨とか見たくない。

「女の子の扱いが成ってないからモテないんだぞッ」

「お前にだけは言われたくない」

「じゃあ見とけみとけよく！時雨ちゃんと村雨ちゃんの前で、俺様が軽くく女の子を勧誘してみせるからよオ！」

そう言いながら結城は通り過ぎようとした二人組の女子学生へと近づいて行った。

『ねえ君たち！海軍に興味はないかな？』

『え、興味はないですけど、艦娘とかマジヤバそうでヤバイ！』

『そうそう、そのヤバイ艦娘達ってさ、君たちみたいな可愛い娘にしかなれないんだ！君達ならマジヤバって感じ？』

（※美人じゃなきや駄目と言うルールはありません）

『うわイケメンのイケメンセリフマジヤバイ！確かに海軍とかカツコイイと思ってたけど！』

『俺の名前は結城真司って言って、海軍じゃそこそ偉いだ。俺が教官を務めると、新人の女の子とかに精神混入棒を振り回したりするんだよ』

『せ、セーシン……？』

『俺の黒くて太くて逞しい棒で、ホラホラもうおしまいなの？僕の棒はまだ物足りないよっつてね。あ、言っておくけど全然いやらしい事じゃないから』

「やべえぞアイツ、勧誘から最低なナンパに移行したぞ？」

「ネタに走らなかつたらポイント高いはずなんだけどね結城くん……」

『なんだい君達？まさか海軍に逆らうつもりじゃないだろうね!?海軍将校の俺がどんな権限を持つてるかその身体に教え込むのも俺の仕事なんだぜ!』

『……………』

『その瑞々しい身体を使うのは今だぞ二人共！俺と言う暴れん坊ロデオマシーンに乗って、俺の主砲の清掃任務に取り掛かりなさい!』

『キモイ、通報しよッ』

『NOOOOOOOOOOO!!!』

阿鼻叫喚。結城がこちらにハンドシグナルで救援のジェスチャーを送ってくる。『当然だ』と返したら『救い料一万円』と帰ってくる。凄く必死そうに。

その瞬間、正直助けてもメリットは論吉だけ……とも思ったが、助けなかつたら通報、海軍将校セクハラ事件、リツイート数四万超え、舞鶴の株が暴落下がるという事でデメリットが非常に大きい。提督の監督不足で辞任とか、連帯責任で俺も切られるとか。

「た、多分助けてって意味だと思いますけど、宍戸さん……」

「宍戸くん行ってあげなよ、友達でしょ?」

「自ら地雷原を作っておいて自分でそこに突っ込む馬鹿ほど呆れる物ってないよね?ハア……じゃあ行くか」

スマホを取り出し、カメラを回しながら前進する。少し髪の毛もアホみたいにながらイアホンをマイクみたいにして近づく。

「どうもどうもちわちわデクスウ!ウチ、海軍兼チューバーのシシキンでええええす!うえいうえい(笑)」

「え?な、なにこれ?」

「実はー、海軍へ勧誘する時ー、女の子がー、どれだけ入るかー、実験してたんですよー(笑)。可愛い女の子君達ぐらいしかないからー、ついチヨーシに乗っちゃったらしくてー(笑)あ、これウチのチャン

ネル」

「わくそうだったのくマジヤバー！ホントに海軍のヒト？」

「そうそう！実は今本当にカンチューしてるスよー、だからーもしよ
かったら艦娘じゃなくてもいいんでよろしくお願いしまーす」

「マジヤバツ！」

ちよつとチャラく見せて、社会舐めてます的な感じでカメラ回せば
チューバーの出来上がり。便利な世の中になったな。

暫く女の子達をおだてながら海軍への入隊もちやつかりして、俺の
名前を渡してアンケートに協力するよう指示する。

まだセクハラへの感情が強く、悪い噂を流させないように出来るだ
け、君達可愛いからとか超美人だからとかおだてておく。

「君達みたいな可愛い女の子を見る機会とか無いからさ！俺なんて仕
事がなかったら今でも君達を食事にでも誘いたい気分だよ。勿論、
俺が全部もってね……ははは」

「えくそうなんですか？……顔の偏差値的にどうこの人たち？」

「んん……右が5で、左が……ぐふふ！」

ヒソヒソしているところ悪いけど、聞こえてんだよなあ……右つて
俺の事だよな？俺から見て右が俺だから左は結城だよな？

俺のこと見て笑うとか殺すぞこのクソアマ共。

「じゃあ誤解も解けたことだし！一緒に写メでも取る!!」

「イイじゃんイイじゃん！じゃーはい、チョイヤバ〜！」

意味不明でクソみたいな合図がフラッシュを呼んで写メを取った
後、その勢いでまたねくと手を振っていく。

上からのフレイムショットじゃないと取らせてくれないのは、クソ
みたいな容姿に自身が無いのかなツツツ？

最近のJKなんてこんなクソアマ揃いなんだぞと自分に言い聞か
せながら時雨たちの所へ戻っていく。

「ハア……最近のJKクソヤバイな……ん？どうしたの？」

「むう……」

「ゴホンツ……穴戸くんはああいうのが良いんだ？」

「は？何言って……」

「ふんっ!!」

「痛エー!何すんだクソがア!」

足のスネを蹴ってくる時雨は顔をふんっ!と横に振り、村雨ちゃんも同様に首を振る。

時雨はともかく、村雨ちゃんが怒っているのは珍しい。怒らせるような事はしていないはずだ、ただあのJK共の礼儀がクソなっていない事を嘆いただけ、ただそれだけなのに。

「普段あんなに褒めないくせに……」

「それで心から喜ぶようなタイプじゃないだろお前。他人からの賞賛は本能的に嬉しくなるものが人間だから、ああ言っとけば全部丸くおさまるんだ。そう思うよね村雨ちゃんは!」

「ふんっ!」

俺の方を向いてくれない。

「まったく……そんなんだから、いつまで経っても駄目なんだよ穴戸くんは!そんなんじゃないや春雨もいつかは嫌いになるに決まって……」

「はるさめ……ちゃん?」

「穴戸くん聞いているのっ?」

「……その手があったのか」

ストーリー

―大阪警備府、廊下。

「んんん、未だに信じられないけど、その提督になる為にはしなきゃいけないって言う必死さは分かったさ。でも穴戸くん、事情は分かっただけど春雨本人に言ってもあまり意味は……」

「ある、本人が頼み込めば大丈夫なはず」

昨日のビラ配りの仕事から一変、時雨と俺は大阪警備府の廊下を歩く。

海軍兵学校の機関には艦娘を教育、及び育成する場所がある。しかし練習場所は様々で、横須賀で教育する時もあれば名古屋基地周辺での実務をする時もある―必ずする事には変わりないらしいけど。

『艦娘科』と呼ばれている彼女たちは言わば特殊部隊のような教育を受け、訓練や実務やチームワークを物凄く仕込まれると時雨に聞いている。

早ければ二年で前線に出れる艦娘への変身だ。勿論これらは艦娘に適正していなければ、教育すら受けられない。

そんな艦娘科の娘たちは近々横須賀に戻り、卒業式を経て、鎮守府を割り当てられる。

その一人がこの大阪警備府で最後の試験を受けている、時雨達の妹で村雨ちゃんの妹に当たる春雨ちゃんがいる。

春雨ちゃんはかなり昔からの知り合いで、実家に遊びに行った事もあるぐらい知り合ってる仲だ。時雨と村雨ちゃんの実家でもあるんだけどね。

舞鶴で実務訓練を受けている時期もあり、半年ぐらいは一緒だったかな。

時に励まし、時に遊びに行かせ、時に部屋で一緒に遊んだりしてた。時雨たちがいて仲が良かった分、鎮守府を去る時は凄く名残惜しそうだった。

昔は遠くから会いに来てたけど。

ともあれ本題としては、春雨ちゃんをうちの鎮守府に入れて、その有望な人材その一に数えさせるといふ作戦だ。

よくよく考えるとその有望な人材ってわざわざ一般人から集めなくても良いよね？海軍兵学校の卒業生も艦娘達と一緒に居るし卒業近いし、こいつ等からスカウトしろって事だよ？説明だと一般人からの入隊者の事しか言っていなかったからてっきりそうだと思ってた。

まあそのために、舞鶴第二鎮守府へ行くようにお願いさせる必要があるんだけどね。それが上層部に届くかは分からないが、提督になる訳じゃないんだし多分届くだろう。

時雨達が居るからこつち選ぶと思うけど、念には念を入れる。

「と云うかなんで僕まで大阪に来てるの!?!用事があるんだった春雨に電話とか携帯とかで……」

「こつち言う大事なことは面と向かわなきや失礼でしょ？それに、俺だけ春雨ちゃんに会いに来たなんて、すげー不自然じゃん」

知り合っている仲だとしても、最近忙しいのか会ってないし。姉の同僚だからって一人で会いに来たとか馴れ馴れしくない？って思われるかも知れないし、姉が居た方が安心するだろう。それに春雨ちゃんの友達とかにストーカーだと勘違いされたら面倒ごとになるし、社会的に抹殺されそう。

どうしようもないブサイクがそう言って来たら殴るけど、春雨ちゃんとは逆ですげー可愛い。男に付きまとわれてるとして納得出来るぐらい。

「でも……」

「帰りに大阪の名物品買ってやるから」

「急ぎっ！」

即物的なやつだな……ま、いいか。

警備府の提督にハローして、春雨ちゃんをルックしてるんだけどって言ったらパスしてくれた。

警備府の内装は流石にでかい。大阪を守るだけあって、第一鎮守府

みたいなデカさだ。白く塗られた内装、所々に点在する観葉植物……
そして、

「ここがあの女の子のハウスね」

「……彼を返して！あとお金返セヤアアーツ！」

「そんなに強くは言わないけど……じゃ、気張っていくか。いぎ春雨
ちゃんの部屋へ！」

春雨ちゃんの部屋を前にしてノックする。それに反応してか、中か
ら物音がした後、ドアが開く。

「……あの、どちら様でしょうか？」

「あ、すみません。ここに春雨ちゃんが居るって聞いたんですけど
……」

「……貴方、もしかして春雨のストーカーですか？」

「……え？」

え？ストーカーとかガチでいるの？でも出てきた緑髪ポニーテ
ールの眼は俺を凝視している。

見極めるかのようにー言い変えれば鋭く睨め付けられるが、横に
いる時雨を見てなにかを察したのか、眼力は和らいだ。奥にいるポ
ニーテール……じゃなくて、サイドポニーの女の子も同じく鋭かった
眼力を和らげてくれる。

「はじめまして、俺は穴戸龍城です。こっちは同寮の時雨で、春雨ちや
んの姉なんです」

「初めまして、春雨の姉だよ」

「あ、そうだったの!?私は春雨のルームメイトで夕張です。ごめんな
さい、いきなり変な事言っ……」

「いいよいいよ。それより春雨ちゃんがどこに居るか知ってるかな
？」

「今は最終実務試験中です！私達はもう終わって先に部屋に戻って来
たんです。あつ、綾波は綾波って言います！」

と言いなながら、洗うのが面倒そうなサイドポニーテールの綾波が近
づいてくる。何というか美少女揃いと言うか、流星は春雨ちゃんの
ルームメイト。

最終試験に呼ばれている春雨ちゃんは時雨によると実務……つまりは、砲雷撃戦や編成等をちゃんとできているかどうかを確かめる試験らしい。

廊下で疲れ切ったが、達成感を思わせる顔で歩いていた艦娘達を見ればその試験内容が大変なものだと理解できる。

「……ぎゅ」

「うおーだ、だれだ!?……って、春雨ちゃんじゃん!？」

「お久しぶりです、お兄さん……っ!」

突然後ろから抱きついてきた娘こそ、俺が探し求めていた春雨ちゃんだ。

プリンのように柔らかそうなほっぺのついた童顔、淑やかな桃色の髪、華奢な身体に、小動物的な雰囲気を感じた印象を受ける春雨ちゃん。

その容姿からか度々目を離すと声を掛けられる事の多かった春雨ちゃんは、暫くぶりに会う人間には抱き着く事が多い。

そしてお兄さんとは、俺の事である。

「お兄さん……本当に久しぶりです……すりすりっ」

「あ、そ、そうだね!本当に久しぶり!だ、だよね時雨!」

「そ、そうだね!ほら、久しぶりに会う姉に言う事はないの?」

「実物のお兄さんだ……」

「……は、春雨ちゃん?」

小声を放つ春雨ちゃんは抱きついたまま、そして時雨の言葉を無視したまま、頬ずりしたり深呼吸したりする。

試験が余程疲れたのか、じゃあ俺の胸を貸そう……と思いつつも、いくらなんでも長すぎる抱き付きに少し不穏な空気が巻き始める。

「は、春雨?どうかしたの?」

「お兄さんだ……」

「春雨ちゃんッ!お姉さんの言葉を無視したらだめだぞッ!」

「え、あ、あの、す、すみません!!ごめんね時雨姉さん……」

「い、いや良いんだけど、そんなに宍戸くんに寄りかかって……試験そんなハードだった?」

「だって……久しぶりのお兄さんだったから……」

この発言によりルームメイトの二人は少しの間絶句する。

「そうだったんだ……良く頑張ったね春雨。ほら、僕の胸にも飛び込んでおいで」

「うん………とここで、なんで二人はここに……？」

「最終試験がてらに少しお願いがあつてさ」

実務は合格したらしい。筆記の期末も既に終え、思う所は卒業式のみとなった艦娘勢は、これから打ち上げムードに入るらしい。

そんな三人に事情を説明して舞鶴第二鎮守府へ入るよう頼み込むようにお願いする。

本来ならそれだけで済む話なのだが、その前に、

「そのお願いの前に春雨ちゃん、それと二人共。遠回しに言うの慣れてないから直球に言うけど、春雨ちゃんってストーリーカーに狙われているの？」

「「っ………」」

「……春雨、それって本当なの？」

「良ければだけど、聞かせてくれない？」

ストーカー2

「……と言っことなんです」

「なるへそ」

初対面でストーカーとか言われたから聞いてみたけど、やるやつ実際いるんだな。

誰かは分からないけどストーキングしているヤツは、街を出る度に尾行されて付け回して、挙句の果には春雨ちゃんへ脅迫と愛(偏愛)の手紙を送りつけて来たらしい。時には春雨ちゃんの隠し撮り写真を送りつけてきたり、時には髪の毛を送ってきたり、時には電話を変えなきゃいけない事態にもなったが、それでもストーカーがやる行為チエツクリストは埋まり続けている。キモイ。

ルームメイトの夕張、綾波はなんとかソイツを突き止めようとしたが、未だに正体すら見つけられず。

ただ警備府に居る限り被害がないので、ここの提督は外を出ないようにする事を勧めてきたらしい。その事もあってか、最近は外出もしていないく、精神的に追い詰められていたらしい。そんな状況で良く試験合格出来たな春雨ちゃん。

言う必要もないが、警察は無意味だ。

「これっていつから始まったの?」

「えっと……確か数ヶ月頃からです。ただそれも春雨さんが気付いただけなので、実質的な期間は……」

「なるほど……でも毎回出るたびに必ずし遭う訳じゃ……」

「それが必ず出るらしいのよ、何故かは分からないけれど……だから、警備府の外を一人で出歩く事もできないの。捕まえようとしてもすぐに逃げられちゃうし……」

「んん……」

俯く春雨ちゃんの隣に座る横の二人がそう証言し、暫くの間は沈黙が部屋を包む。急に抱き着いてきたのは、やっぱりそういう事への心細さもあるのか。そういう事だったら納得。

部屋に留まる沈黙が耐えられなかった……って感じ、じゃないな。時雨は握りこぶしを作りながら、言うべくして言う。

「穴戸くん、僕さッ」

「わかってるよ、とりあえず落ち着けて」

「……穴戸くん、今ふざけてるほど余裕ないんだけどッ?」

「大丈夫だから、時雨」

妹を害する者が陰湿な行動でその身を今でも潜めている、その事を聞いて落ち着けるほど時雨は薄情じゃない。

俺もお兄さんと慕ってくれる春雨ちゃんがこんな目に遭っっていて、腹が立つ。でも現状を打破する有効な手立ても無い訳だ。

「……とりあえずさ、レストランにでも行かない?」

「っ!穴戸くん!!?」

「夕張や綾波も一緒に行ってもらえると嬉しいけど、どうかな?」

「春雨が行くなら勿論行くわ。でも、この話を聞いた後で出てくる提案としては、少し複雑ね……」

「気持ちは分かる。でもこのまま外に出れなくなるのは、今後の春雨ちゃんにとってダメージがでかい。荒療治かも知れないけど、もうすぐ艦娘として配属されるんだから、このまま引きこもってちゃ駄目だ。もし見つけたら俺が捕まえてやるから」

「ほ、本当ですかあ……?」

「勿論。俺の大切な春雨ちゃんをここまで追い詰めた罪はでかいぞ?」

「穴戸くんのじゃないけど、春雨にそんな事するヤツは僕達が張り倒すからッ」

「姉さん……お兄さん……!」

「そうと決まれば外食だ。俺たちは後から行くから先に行つてて」
「え……?」

一緒に行つてくれるんじゃないの? って顔してる。時雨もどんでん返しを食らったような顔でこちらを睥睨する。

「時雨行こうか。じゃあみんなまたレストランでね」

「は、はい……」

「ちよ、穴戸くん!？」

ーレストラン

『ハア……あの人って本当に春雨が言っていたあの優しいお兄さんなの?』

『確かに少し素っ気なかったですね……あ、で、でもきつと何か考えるに違いなすよ春雨さん!』

『大丈夫、姉さんもお兄さんも良い人だから……信じてる』

そんな会話をしていそうな春雨ちゃん達は、レストランの二階の窓側にいる。そういう所からストーカーは写真を取るのに懲りていないのか?とか普通は思うだろうが、多分春雨ちゃん達が何処にいるかを一目で分らせるためだと思う。

配慮の仕方が優しい、故に文字通り一目で座ってる位置が分かった。そんな春雨ちゃん達をレストランの外から見る俺たちは、丁度そこに続く車道を渡ろうとしていた所だった。

「穴戸くんってさ、少し妄想が豊かすぎる所あるよね?」

「は?なんでだよ?」

「春雨の部屋に盗聴器があるかもとか、普通の人は考えないよね?」

必ず何かしらの形でストーカーに遭うんだったら、まず警備府内の人間を疑うだろ?あの部屋の会話盗聴されてたらと思うと気持ち悪くてさ。確かに、長い期間を一緒に過ごした仲間を裏切りたくはないとは思うけど。

だから先立って警備府内の人間に声掛けて、舞鶴第二鎮守府への勧誘も兼ねてストーカーの事も聞いていたんだ。

べ、別に勧誘がメインって訳じゃないさ。春雨ちゃんの方が大事だし?提督になるために春雨の糞ストーカーを野放しにするほどゴミじゃないし?

「まあ結局、盗聴器なんてなかったから只の穴戸くんの妄言になっちゃったわけだけど」

「言つてろや！想像力は知識より大事なんだぞ！」

「はいはいアインシュタインアインシュタイン」

「まったく……ん？なんだあれ？」

ふと目についたのは、歩き回る人の中で唯一立ち止まっている者だった。そんなのは普通見逃すだろうが、少し怪しさを持った人間の動きと言うのは、説明出来なくとも怪しいと断言できてしまうものである。

時雨の腕を引っ張って一緒に近づくと、その人物は建物の間のスペースに隠れるような動きをしている。

「ハア〜、相変わらず可愛いなあ〜〜！」

「お努めご苦労様！」

「うお、びくったア!?だ、誰ですか貴方？」

「俺は海軍所属の者なんだけど、君も海軍だよな？その腕章って確か憲兵団の……」

「あ、はいそうです。憲兵もですが、海軍士官学校の学生でもあって、あの大阪警備府の所属です」

「そうなんだ、こんな時間までお努めとか本当にご苦労だな」

「まあこれが仕事なんで、文句は言えないですけど〜ははは」

後ろに付いてきてる時雨の目線は憲兵の手元にあるカメラにあり、俺もそのカメラが気になって仕方がなかった。

「所でそのカメラは大阪の街を写すための？」

「はいそうなんです。治安等の確認もありますが、ちゃんと憲兵としての仕事をしていると言う意思表示みたいな物なんですよね。いい写真が撮れたらホームページの画像として使われたりするので、無駄ではないんですけどね」

数打てば当たるとはその事なのか、憲兵達が撮る写真にはたまにとっても芸術的な物が紛れ込んでいる事もある。

最近では憲兵達だけの写真コンテストまで出てくるほど、モラルが高まっているらしい。なのでフォトグラフィーを学んでいる人は憲兵団に入る時ちよつと有利になる、と言う不思議現象が起きている。「なるほど。確かに憲兵さん達の撮った写真って結構多いもんね。夜

景とか日常風景とか……でもやつぱり一番撮りたい写真って言った
ら、可愛い女の子だよな！ほら、あのレストランの二階の桃色女子と
かすげー可愛くない？」

「あ、わかります!?あれ実はうちの彼女なんですよ！本当は彼女だけ
を被写体にしたいのにな仕事で出来ないんですよ。まったく困つ
ちやいますよね〜」

……ん？

「彼女なら被写体になんて幾らでも立候補してくれるんじゃないの？
連絡とかちゃんと入れた？」

「それが駄目なんです……電話をしても何故か怖がられて切られる
し、愛の言葉を書いた手紙はポイされて……自分の髪の毛を送ったり
して、愛を確かめたいて送ったのに返事がなくて……」

「なるほど……と言うか、春雨ちゃんと君の仲をもう一度確認する
けど、彼氏彼女の関係なんだよね？」

「当たり前です!!あんなに可愛い笑顔を俺に向けて挨拶もしてくれる
んですよ?だから俺たちは相思相愛なんです。ただ、今ストーカーを
してるクズ野郎がいます、それで最近はず元気がないんです……」

「ほうほう」

「ストーカーとか最低ですよね!そんなヤツは俺がぶっ飛ばします、
俺の春雨ですから。それなのに、春雨は何故か彼氏である俺の胸に飛
び込んで来てくれませんか……おかしくないですか?」

「うん、なにかもおかしいねツ。時雨、こつち路地裏だつて」

「わかったよ穴戸くんツ」

「え、ちょ、うあああああ!!!」

―路地裏

コイツが挟まっていた細道の先には路地裏があり、一坪、二坪程度
の開いた面積があった。こう言う入り乱れて建てられた建築物の真
ん中には必ずあるようなスペースだ。

そこへ時雨が奥へと引つ張り、俺もその後をついていく。レストラ

ンに入ったばかりで申し訳ないが春雨ちゃん達には俺達の場所に来るようにメールで指示する。

「まさかこんな早く変態ストーカー野郎に出くわすとは思わなかったよ……僕の妹にこんなクレイジーなサイコでクソみたいな事するなんてね、覚悟できてる?」

「い、いもうと……って事は、お義姉さん!?!」

「君にお義姉さんとか吐き気がするよッ!」

「あウンッ!」

既に倒れてるストーカーくんの腹に、痛そうなサッカーキックが入る。気持ちは痛いほど分かるが時雨は今にも殺しそうな勢いなので、自制させなきや春雨ちゃん達が来る前にコイツが肉片になっちゃう。

「落ち着けよ時雨」

「落ち着いていられるように見える……ッ?」

あ、怖い。

「春雨ちゃん達がここに来るからさ、それまで逃げられないようにしておくのもお姉ちゃんとして大事な事だと思っ」

「……命拾いしたねエツツ」

「ひ、ひいいいい!!」

普段暴力的ではないけど、やる時はやるって感じの時雨は女子力低くて男子力高い。俺的にはとてもポイントが高いが、自制を忘れる時のストッパーが必要なのは難点だ。

「お兄さん!!」

「おお春雨ちゃん来たか。ストーカーくん、ちよつとした裁判ごっこするから、証言とかするんだつたら今だぞ」

「あ、え、あ、その、えっと……」

「……………」

到着した三人はストーカーを睨みつけ、春雨ちゃんは一步近づきながらしゃがみ込む。

「…………あの、憲兵さんですよね」

「…………はい」

「なんで…………こんな事を?」

「え、えつと……は、春雨さんが……そ、その……えつと……とてもみ、魅力的で、その……」

さつきとは打って変わって滑舌が悪くなり、座り込みながら後退りする。例えクレイジーサイコストーリーカー野郎であっても、好きな娘を前にすると動揺するんだな。

「そう、ですか……」

「春雨さん、この人……」

「どうする？ 私達にしてほしい事があれば言ってね」

「多少暴力振るっても不可抗力で事で許してもらえと思うよ？ 警備府に広まつてるストーリーカーの犯人としては許容範囲のはずだよ」

少し目を瞑る春雨ちゃん。暫くしてその口を開く。

「……いい大丈夫です。この人を警察へは連れていきません。誰か分かっただけでも嬉しいです」

「「え!？」」

「正気なの春雨!?! コイツに散々付け回されて辛い思いしたの忘れたの!?!」

「春雨が暴力を振るえないって言うんだったら僕が……」

「待てよ時雨、少しは妹を信用しろよ」

春雨ちゃんは考え込んだ末に出した答えは、許す事。ストーリーカー行為をしていた憲兵くんをこれ以上咎めず、今後何もしなければ今まで通り接するとの事だった。

「気持ちばかりりますし、春雨の好きな人にも多分、少しだけ過剰な愛情表現で引かせちゃうかも知れません……だから、これ以上私は貴方を咎めたくはありません」

「は、春雨……さん……うう……!!」

そして最後に見せた聖母のような笑顔。その顔だけで、心の清らかさが身に沁みてくるような感じがする。

感動した綾波は同じく涙し、物足り無さを感じながらも親友の慈悲にやれやれと言いながら納得する夕張、そして物足りなさ過ぎて空いてる場所でシャドーボクシングを繰り返す時雨。これが本当の三者

三様である。

そんな事を考えていると、春雨達が俺の前に立つ。

「穴戸さんはもしかして、ストーカーさんを見つけるために別行動を？」

「え？」

「綾波が聞いた通りよ。穴戸さんが先にレストランに行つてろつて言つたのつて、突き止めるためじゃなかったの？」

「え、あ、いや」

「お兄さん……本当、なんですか……？」

「……ああ。春雨ちゃんもそうだけど、こう言う問題は卒業する前に片付けておかないと大なり小なり、記憶に一生残り続けるからね。春雨ちゃんの事を思つたら体が勝手に……ね？」

嘘です、たまたま見つけただけです。

「お兄さん……!!」

「うおっとー!」

「お兄さん大好き……!!」

大袈裟な事を言う春雨ちゃんは俺の胸に抱きつく。俺は優しく頭を撫でながら、こっそりと頭の匂いを嗅ぐ。

思つたけど、匂い自体は普通のシャンプーなのに、女の子の身体から匂ってくるなんてこんなな興奮するんだろう？

「お兄さん……!!」

「ちよ、苦しい」

「……それにしても、春雨が男の人に抱きつくなんて相当ね。まあ彼なら、分からないでもないかな？」

「見直しましたか夕張さん？」

「ふふっ、結構ね」

なるほど、俺は今イケメンモードなんだ。春雨ちゃんへの邪念を察知されないように、イケメン系の平然を装う俺であった。

ーレストラン。

「舞鶴第二鎮守府へ？」

だが、ストーリーカーとの事件があっても俺は仕事はきっちりこなす男だ。レストランに再度足を運ばせ、本題である舞鶴へ来るように頼む。

憲兵ストーリーカーをあのまま放置していても大丈夫なのかって？時雨が鬱憤を晴らすのに使ったから、多分二度と抗えないだろう。

それに、ストーリーカー事件つてのは腹を割って話せなかったり、話さなかったりするのが一番の原因だと思う。まともに話せないからストーリーカーになるのは分かるけど、第三者を巻き込んだの話し合いも大事だと思う。

「行きます」

春雨ちゃんは即答である。

「まあ行きたい鎮守府なんて無いし、私も良いわよ」

「綾波もオツケーです！既に知り合ってる人がいれば心細くないですしー！」

「ありがとうみんな！俺もできるだけそこへ配属されるように手配しとくから」

「はい！よろしくお願いしますね、お兄さん！」
「おうー！」

声を掛けた候補生たちの分も合わせると、とりあえず第一関門は突破できたはずだ。育成プログラムでは海軍大学校とかの教育も受けるとか聞いたから、ある程度の予習はしておく必要がある。

出される大將や中將の無茶振り……じゃなくて試練に対応するべく、心構えはしつかりと。まだ公表されていないこの育成プログラム……どんな事が待ち受けているのか、わくわくと気ダルさが入り交じる。

さて、次は何が来るのやら……気が滅入る。

ふふふつ……やっぱりお兄さんは優しいですね。

「……？どうしたの春雨ちゃん？俺の顔がカッコ良すぎて見惚れちゃってた？」

「宍戸くんに虫がついてると思ったらデフォルトだった」

「テメエに聞いてねえんだよ時雨オラア!!これ虫じゃなくてホクロですウー！」

「ふふふつ、素敵ですよ？お兄さん……」

私が困ってる時は何時も助けてくれて、いつも優しい笑顔を振りまいてくれて、いつもいつも春雨を笑顔にしてくれる……そんなお兄さんの顔が、どうしようもなく頭に残ってしまふんですつ。

もしもお兄さんが鈍感じゃなかったら……もしもお兄さんが、少しでも春雨を女の子として見てくれるチャンスがあるんだったら、春雨もストーリーみたいな事をしていたかも知れません。

私がされていた事が、まさかあんなに不快感を覚えるなんて……私がお兄さんにしたい事が、まさかストーリーカー扱いになるなんて。

だから私はしない、やるとしてもお兄さんに迷惑をかけないようにする。

お兄さんの使ったハンカチ、

お兄さんの使ったジャージ、

お兄さんの使ったタオル、

……舞鶴に行ったら、毎日春雨の宝物が増えていくんですよねつ。
楽しみです！ふふふつ。

村雨ちゃんとデート

―舞鶴第二鎮守府、玄関。

「ハア〜いっぱいお土産買ったんですよ！穴戸くんって太っ腹な所あったんだね！」

「ひぐつ……おれえのお……っ……ありがね……ぜんぶ……はたいて……えつぐ……！」

「そ、そこまで泣かなくても……」

手に持ちきれない量の手土産は、舞鶴に日帰りを持ち込んだ大阪限定の品々だ。勿論これら全部を買ったのは、泣いているこの俺である。

時刻は空に燦然と輝く星を見て夜、正確な時間は9時を回っている。春雨ちゃんたちの人事担当者の一人に、なんとかして舞鶴へ配属してもらおうように説得して『最善を尽くす』と言う実のない言葉を手に入れた。一応良しとしよう。

土曜日の夜は相変わらず少しだけ騒がしく、陸軍の人達が居たら嫉妬で罵声と嫌味を浴びせられる所だ。

「あ、穴戸さんに時雨さん。今日は二人でデートですか？」

「違います」

「ふふっ、お似合いだと思いますけどねっ」

鎮守府の大和撫子こと翔鶴が立っていた。妹の瑞鶴と並んで、五航戦と呼ばれる空母機動部隊の主力である。

その立ち振舞いから街で人気を博しており、特に年上好きの男子学生達が翔鶴の姿を拝見した場合大抵は墜ちる。

この前はドラマを見ていたのに今日は打って変わって、村雨ちゃんみたいに重そうな洗濯物を持っている。手伝っているのか？重い物を持っていても一礼する姿は崩れず、颯爽と去っていく姿はどこぞのお姫様の如く美しい。

「相変わらず綺麗だね翔鶴って」

「ああ、見てるだけで心が洗われそうだ」

「あんな翔鶴だけど昔はレディースの総長だったらどう思う?」

.....??

「冗談だから、そんな羅生門みたいな顔しないで……第一、翔鶴とはこの鎮守府で知り合ったんだから分かるわけないじゃん」

「それもそうだな、ははは!」

―鈴熊部屋。

「つくわけでえ〜!二人してドコに行ってたのかなあ〜?鈴谷にも教えて欲しいなあ〜」

「う、うぜえ!大阪に行ってきた、それで春雨ちゃんっていう時雨と春雨ちゃんの妹の最終試験合格を祝ってただけだって!」

「ほんと〜かなあ〜?こくんにお土産買ってくれちゃって〜?」

「ちよつとこの量は怪しいですわね……」

「ほ、本当だって!穴戸くんとは何もなかったって!ね、春雨?」

「ふんだつ!知らない!」

「む、春雨ちゃん……」

口をぷくつと膨らませながらプイっとする春雨ちゃんは、少々ご立腹のようだった。

多分その理由は、俺が時雨だけ誘ったからなんだろう。春雨ちゃんも誘おうかと迷ったが、必要だったのは春雨ちゃんの姉だったので無闇に同行させるのはちよつと気が引けたのだ。

でもそうなると除け者扱いになる。配慮が足らなかった俺が間違っていた。

「春雨……さん?」

「プイ!」

「む、春雨ちゃん……」

「プイ!」

「ちちん」

「プイプイ!」

ノってくれる村雨ちゃん好き。

しかし怒りのボルテージは下がる様子を見せない。俺は男だ、村雨ちゃんみたいな美少女を悲しませた責任の取り方を知らないほど、クソ野郎になるつもりはない。

「本当に悪かった村雨ちゃん！俺にできることがあれば、なんでも言ってくれ！」

コンコンコンツ

「ん、誰だろ？どーぞー」

「夜分遅くに失礼。副班長のなんでもする宣言が聞こえたんだけど……ああ〜くいいツスね〜」

「副班長の土下座姿、アツハ、なんか芸術的」

「尻突き出してるなんて歪みねえな♂」

「先にお願ひした方が勝ちっスよね？」

「あ、村雨ちゃん、早くお願い言っつて俺を助けると思っつてお願い早く速く疾くツツ!!」

「必死すぎ」

「……ハア、分かりました。では穴戸さんは私と一日デートして下さい
い」

「そういう事だ。失せろゲイ共」

「二腹立ちますよ〜」

突然やってきた神出鬼没なゲイ共を追い払い、村雨ちゃんはやっと俺の方に顔を向けてくれる。

……ん？待てよ？デートだと？

「村雨ちゃん？デートだった？」

「はい、デートです！日曜日に私とデートして下さい！勿論、二人きりでっー」

「……え？」

「Seriously?」

一翌日、舞鶴市。

舞鶴市八今日モ晴天ナリ。

空は青く、太陽光が身体を焼きつつも、港ならではの微風はかなり気持ちがいい。クソ蒸し暑いし虫がムシムシしてるから最高のデート日和とはいかないものの、雨が降るよりよっぽどマシだ。

まあ、個人的に雨は好きで、その中でデートつてのも悪くないと思っている。

さて本題だ。

ついに野郎共のアイドル、村雨ちゃんとデートをする事になった。理由は置いてきぼりにして、時雨や春雨と一緒に楽しいコトをしたからその埋め合わせをしろとのこと。

デートに誘われたのは初めてであり、そう意識し始めると青坊主みたいに緊張し始める。

メンズ香水は大丈夫？髪型崩れてない？うん、いいな。服装変じやない？いや大丈夫、デートで調子乗ってるヤツは大抵こんなの着てるから大丈夫、うん。グラサンはカツコイイのつけた？バッチリだ。

小まめなチェックをコンビニの前でしながらデートの待ち合わせ時刻を確認する。

「ごめんなさあ〜い！遅くなりましたあ〜！」

「全然いいよ〜……おおお」

小走りで走ってきた村雨ちゃんは、ピンクのキャミソールは胸を強調し、短く全体的に茶色掛かったボックスプリーツスカートは生足を美しく見せてる。ヒール……じゃないな、底が高いサンダル型の靴を完備して、完全に夏って感じの女の子だ。

可愛すぎて抱きつきたいぜ。

「ど、どうですか……？」

「天使様が舞い降りてきたと思ったよ」

「あ、ありがとうございますっ……ふふふっ」

褒められて本当に嬉しそうだ。ただ、この後のデートプランは完全にブラフなので、罵声を浴びせられないように気をつけなきゃいけない。

村雨ちゃんを楽しませなきゃいけない責任感は大きい。今のうち

に頭の中で進行ルートを選択、及び整理する。

『……楽しそうだね穴戸くん達ッ』

『んん〜まあ埋め合わせデートみたいなもんなんだから、鈴谷達がついていく必要はないっ?』

『欲しい本があったのでついでに街に出るのはいいのですが……流石にこう言う形での尾行は淑女としてどうかと……』

『甘いよ鈴熊。穴戸くんはああ見えてやる時はやる男なんだ。だからこうやって尾行して妹が襲われなにか見ないと……ね?春雨』

『村雨姉さんとお兄さんがデート村雨姉さんとお兄さんがデート村雨姉さんとお兄さんがデート村雨姉さんとお兄さんがデート村雨姉さんとお兄さんがデートあは、あはは……っ』

『だ、誰?!』

ー映画館。

一つ目からベタな選択だ。だけど、一切嫌な顔せずに喜んで付いてきてくれる女子はとてもポイント高い。

ポップコーンのシユワシユワドリンクは映画の定番の付き物で、寧ろそつちが主な収入源じゃないか?と思うぐらい必ず買うべしと言う風潮がある。アメリカの映画館だったら一日分のカロリーがそこで手に入る。

「今話題の新作……楽しみですねっ!」

「そうだね。ジャンルはラブロマンス映画だから、村雨ちゃんの手を途中で握っちゃうかもな、あはは」

「あ、そ、その……握っても……」

「……っ?」

「あ、い、いいえ!なんでもないですっ」

映画館って微妙に声が聞き取りづらいよね?やっぱり空間が大きいと音が行きづらいのかな?

それはともかくとして、さつきから微妙に背中が痒いのは何故だろ

うか？村雨ちゃんみたいな美少女とデートしてる俺への嫉妬の視線か、或いは昨日背中洗わなかったからか。

『あむウ!!あむあむあむあむツ……！何なのさあのいちやつき方ア！出来立ての中坊カップルかってんだよオ……！』

『シグシグ口調変わってる……』

『お兄さんと村雨姉さんがあんな関係だったなんて……あは、ああああああああああああ』

『は、春雨さん違いますわよ？ポップコーンでもお食べになつて落ちて下さいますしっ？』

「あ、あの……」

「どうしたの村雨ちゃん？」

「よければその……あの……ポップコーン……あ、あくんって食べさせー」

『カ、カラダガ、イレカワツテルー!?キミトゼンゼンゼンゼン』

「お、始まったみたいだね。それでなんか言つたかな？」

「あ、い、いいえ、なんでもありません……っ」

俯いてモジモジしてる。トイレにでも行きたかつたのかな？タイミング悪いな。でもぱぱつと覗ちまえば尿意なんて消えるだろ(※消えません)。トイレを勧めたけど違つたみたいだ。

流石は映画館と広々とした空間を眺め始める……すると、遠くの席に見慣れた顔があつた。

『この映画すつごく見たかつたんだよパパ!』

『そうなのか？普段映画を見ない私でも楽しめるといいが……』

『大丈夫！凄く好評なのだから!』

古鷹と蘇我提督……つまり同僚と上司がいる。仲のいい親子だなく。なに気に休日の上司つてのは少し気まずい。上映が終わり次第、速やかに退散するでしょう。

ー公園。

「映画面白かったな」

「はいー村雨、最後泣いちゃいました……あむっ」

映画見終わった後は公園で甘味を買って散歩する。買ったクレールを頬張る村雨ちゃんの口元にはクリームが付く。

それに気付かずクレールで口を隠しながら舌で舐め回している村雨ちゃん、妙に艶めかしい。

底が高い靴を履いてる村雨ちゃんは当然歩くのは遅いので、そのペースに合わせて歩く必要がある。たまに無意識で歩くの速くなっちゃってても、急いで付いて来ようとする所がまた魅力的だ。

「村雨ちゃん、ほっぺにクリームついてるよ」

「え？どこですか？」

「ここだよほら……ペロ」

「あ、ありがとうございますっ！そ、その……少し照れちゃいますねっ！」

「よしてくれよ！俺まで少し意識しちゃうじゃん！デートの定番って言ったら、クレールのクリームを取って舐める事だよね」

「そう言う定番でしたらっ、今度は村雨がナンパされて、カッコよく助けに来てくれるのが良いですー」

「できればされて欲しくはないけど、村雨ちゃんは可愛いから絶対にナンパされちゃうよ」

「ふふっ」

『『グルルルルルッ!!』』

『し、シグシグ？ハルちゃんも、もう少し抑えないと勘付かれるよ？』

いや、もう勘付かれてるんだよなあ……村雨ちゃんとのデートがそんなに気になるのか、ずっと茂みの陰から時雨たちにコソコソ付け回されてる。

あの四人は目立つし、あんな殺気みたいな波動をぶつけられたら首

が痛くなるわ。でも何かして来るわけでもないし、必要だったら声をかけてくるだろう。

とは言え、思わぬ視線をぶつけられるのは緊張感を掻き立てられ、尿意を催す。

「村雨ちゃん、ちよつとトイレ行ってきていいかな？」

「勿論です！私は外で待ってますねっ」

「ありがとう」

ートイレ。

「ふう……」

トイレの所にある固形洗剤みたいな丸いあれ……消臭剤っぽいから狙ってシヨンベンすると、やってる事やってみたいでなんか優越感。

手を洗う際には水で軽く洗ってからソープで三十秒以上擦り、再度水で洗い流す。清潔感ある男性つて言うのは、例え見えない所でもその努力を怠らないものだ。村雨ちゃんを待たせない程度に髪の毛や臭いをチェックしておく。

……ん？なんか後ろから声が、

『あ、こんなに大きく……！』

『おいおい、声出しちゃだめだろ？俺様のデカマ○に怯えてブルツちまったのかウリセンちゃんよお？』

『おいコイツ乳首まで立たせてんぜ、マジおもしれえ！』

『じゃあ即○○○○と行きますか！』

ー公園。

俺はトイレから出たあと、自分が出てきた公衆便所をマジマジと眺めた。もう二度と来ないので見納めに。

この比較的平和な港町で、見たくもない社会の闇を全身で感じていた

まあ学校時代にも、多少なりとも居たので初めての事じゃない。勿

論誇れる事でもない。

最後に一度だけ合掌し、俺は辺りに居るはずの村雨ちゃん搜索する。

辺りには出来立て二週間ぐらいの無駄にイチャつくカップルや、三ヶ月ぐらいで冷やし中華みたいに冷え切ったビジネスライクな男女まで様々だった。

案外人は多いので、ひと目で見つけられないのは遺憾だが、丁度目印になるストーカー四人組（時雨達）がいた。その目線の先には、

『よおお姉さん可愛いね!どこの娘?』

『お前どこの娘ってここの娘に決まってる?ハハハハハ!』

『うわあくでもすげー可愛いわ。なんてナマエですか?』

『あ、あの……』

……H o l l y s h i t。定番ナンパ野郎だ。

陸軍さん1

「あ、あの……」

「いいじゃんいいじゃん！彼氏とかどうせうんこみたいな顔のヤツなんだろ？」

「そうだったらマジ受けるんだけどお。そんな彼氏より俺たちの方が格好いいって！な？」

「わ、私の彼氏の方がカツコイイですっ！」

「そう言う一途な娘マジテンション上がりング」

「じゃあこれヒミツなだけど……実は俺たち、今をトキメク陸軍所属なんだよね。君の彼氏より偉いかもね」

「り、陸軍……それって……」

「じゃあ俺の方が偉いかもね陸軍さん」

「し、宍戸さん！」

小走りで駆け寄ってきて、リスみたいに俺の後ろへと隠れる村雨ちゃん。

三人のチャラ男にナンパされてる美少女村雨ちゃん、そしてそのイケメン彼氏こと俺が颯爽と現れて「やめろ」と守りに入るシーン。正に王道展開そのものだ。

でも王道じゃない事が一つあって、それは、

『運が良かったねあのナンパクソ野郎共……もう少し遅かったら宍戸くんも含めて男ども全員スパナで殴り殺してた所だよツツ？』

『ま、まあまあ止めに入ったんだしいいじゃん！宍戸っちが軽くヤッてくれるって！』

『できない場合は……分かってますわね？』

『はい、お兄さんと村雨姉さんに触ったらあの汚物共をここに埋めますっ』

俺があと少し早く出てこなかったら、時雨にボコボコにされてたの

で保身のためでもある。あの四人はこの状況で最大の保険だと言える……現役の艦娘は伊達じゃない。そう思うと安心感からか、話す余裕もできる。

「君たち陸軍って言ったよね？階級は？」

「伍長だけど？」

「少尉」

「軍曹でいゝス！」

「バラバラじゃん……まあでも、階級で区別せずに友情を育めるのは良いことだよ。因みに俺は大尉だから、俺に敬礼してみ？」

「た、たいい!？」

「しかも舞鶴第二鎮守府所属の海軍大尉。この娘も俺と同じで少尉なんだ。因みに海軍では、「だいい」って言うんだ。いいうんちくになつたね君たち」

「う、嘘つけ！証拠見せる証拠！」

チツ……うるせエハエ共だな。だが、俺は証拠として生徒手帳ならぬIDカードを見せつけると黙り込む。

「で、でも、うちの先輩の方が階級上だぞ！」

「そりや上限つけなきやそうだろ……大将閣下だって俺の立派な先輩だぜ？」

「で、でもよお！」

『何の騒ぎだ騒々しい』

「ち、中佐!？」

出てきたのは、休日なのに軍服を着たメガネ。雰囲気から妙に滲み出る彼の場への不一致感が、俺の後ろで隠れる村雨ちゃんの手を強く握り締めさせる。

「聞いてくださいよ中佐！コイツが俺たちの邪魔したんですよ？」

「おいお前ら！大尉だか少尉だか知らねえけど、この人は陸軍中佐なんだぞ！しかも軍人家庭のエリートで、将来元帥も夢じゃないって言われてるんだぞ！すげー人なんだぞ！」

「よせよせ、本当の事を言うな」

確かにそういうエリート的な顔してる。顔は結構イケメンだし、確

かにその歳で中佐つてのは魅力的だろう。

「君は海軍大尉とか言ったな？この私にかかれば、貴様の昇進など鶴の一声で止められるのは、承知しているな？」

だが、聞いての通り嫌味つたらしい性格をお持ちのようだ。村雨ちゃんも後ろで隠れながら、俺に抱きつくような動作で牽制している。それ胸当たるからやめて。おうち帰つたらいっぱいいいよ。

「陸軍中佐殿……確かに、レスキュー隊の重要ポスト任されの身は、相当なる権力を有しているかと推測します」

「……なに？」

今は深海棲艦との戦いに勤しんでいる世界情勢。陸軍の仕事と言ったら、被害にあった地域や他国への派遣任務とか、その体力作りとか――要するに、今の海軍陸軍を比較すると、完全に海軍の方が目立ってる訳だ。

いい意味での目立ってるって言うのは、主導権はこっちにあるってことだ。昔の言葉を借りて、少し改変するのであれば、今は海主陸従の時代。

「中佐殿……でしたっけ？陸軍中佐殿ともなれば、いち救急隊の隊長と言うところでしょうか？敬意を払いますッ」

「なるほど……貴様は分かかって無いらしいなこの私の権力をツ？私は陸軍だが身内に海軍将校がいなくても限らないのだぞツ？しかも将クラスのツ」

「ほっほ〜親頼みですかナツ？七光りとは正にこの事！親の栄光にかすがれないクソガキを幾度か見たことがありますか、然り然り！」
「……貴様調子に乗るなよツ？親は本当に海軍将校だし、お前の上司かもしれないんだぞこのクソ野郎！礼儀をわきまえろオ！」

「てめえクソ調子に乗ってんじやねえよタコがア！俺は親の栄光にするクソ野郎は大嫌いなんだよ！」

「グルルルツ!!」

「あ、あの……！」

村雨ちゃんの介入も虚しく、罵倒の連鎖が続く。そのヒートアップは村雨ちゃんはおろか、ナンパ三人衆でさえも黙らせていた。

手からグーパンが出そうになっても抑えたところは誰かに褒めてもらいたい。

そして暫くすると今まで高みの見物だった時雨達が仲介してくる。

「し、時雨姉さん!？」

「やめなつて二人共! 問題の本人達は君たちの気迫で声すら出せていないじゃん! 公園のみんな怖がってるよ!」

「黙ってるこの野郎!」

「あ?」

次の瞬間、頬に拳打が炸裂し、身体が吹っ飛ぶ。同じく陸軍中佐も殴られ、同じように宙を舞う。

見上げたら、般若みたいな顔をした時雨の姿があった。

「……君たちい、僕は野郎じゃないよオオオ?」

「ごめん時雨さん、全面的に謝るから許して……すごく痛い」

「クツ……良くもこの私を……! これは軍法会議ものだぞ! クソアマ!!」

「……なんか言つたアツツ?」

「ひ、ひいいい! お、覚えておけええ!!」

「ま、待ってくださいよ斎藤さん!」

テンプレ的な奴らは退散した。これでこの件は一見落着だ……と思つたら、時雨は未だに落ち着きを見せない。

「全く何なのさあの人たちッ! ナンパしておいてこっちに非があるみたいにー!」

「落ち着け……なんて言えねえ、確かに嫌な連中だ」

「ま、まあまあ! 悪は去つていったんだし! これでいいつしよ!」

後ろで傍観していた鈴熊や春雨ちゃんも近づいてきて、俺を気遣う言葉を掛けてくる。

「村雨姉さん……」

「つて、春雨じゃない!? な、なんでこんな所に……」

「最終試験が終わった後だし、卒業を待っただけからそれまでは少し自由なんだよ」

「村雨姉さん……お兄さんとデートしてたッ」

「ご、ごめんなさい！そ、その、時雨姉さんと二人きりで大阪に行ったのが羨ましくて……」

「村雨ちゃん。せがんで来たらカルフォルニアにでもロンドンにでも行くよ」

春雨ちゃんと時雨の鋭い眼光を宥めー当然だとは思いますが、何故ここに居るのかと質問をぶつけたら、案の定四人は偶然と答えてくる。そう、尾行していた事を誤魔化す時に最適な、奇遇偶然たまたまと言う簡易な言葉。

そして、鈴谷の言葉が発端となり、四人が加わって合計六人でカラオケに行く事となり、村雨ちゃんとのデートは事実上終わった。

終始納得のいかなそうな顔をしていた時雨に、全ての遊び金を持つていかれ、貯金をする漢で良かったなと終盤文句を付けるも、戦艦並の眼力を放つ時雨に勝ち目なし。

明日は月曜なのに呑気にしている暇はあるのかと聞かれば、答えはイエス。

大規模作戦後、月曜の鎮守府は休みを取る事にしたからだ。

俺を含む整備工作班の数人は、デイリーな点検等をこなす為に残らなきやいけないのだが、出撃がない分は早めに終わらせられるので、昼までには終わるかもしれない。

陸軍の人たちはそんな時でも厳しい鍛錬が待っていると哀れだと思う。

二度言うが、今は陸主海従ならぬ、海主陸従の時代なのだ。そのせいか、昔ほどではないが仲は良くなり、水面下では疎まれ口を叩きあう。俺たちと村雨ちゃんに引っかけたナンパ野郎どもの一件を見れば一目瞭然。

だから二度と会いたくねえって心で願い、レンチを主にした工具を使いこなしながら、艦載機と15.5cm連装砲を修理していた月曜の昼頃ーー心の願望は、瞬く間に消え失せた。

―第二鎮守府、食堂。

『第一、第二舞鶴鎮守府……そして第16師団、歩兵第二十連隊の方々の交流を祝して、乾杯!』

「か、乾杯!」

齋藤中將による乾杯の合図で、大きな食事会が開かれていた。

入り口を開けると、右は海軍、左は陸軍ときっぱり別れた陣形で手に持った飲み物を両陣営は口に含む。

「いやはや!まさか中佐殿がああ20連の連隊長殿だったとは!運命には抗えないものですね!」

「そのようで。私もまさか、このような形で再会を果たすとは夢にも思いませんでした」

「おお、穴戸くんはせがれと知り合いだったのかね?これはいい傾向じゃないか!」

「ク……そうですねッ」

まさかあの中佐野郎が齋藤中將の息子だったなんて……本当にエリートじゃねえかよ!しかも親が海軍なら何で陸軍に行くんだよ?

今日は晴れてて、深海棲艦も出てこないし、とてもいい日だ。

それが仕事をした直後に呼び出されてみれば陸軍様との交流会かよ。

近年、陸軍と海軍の仲を憂っていた海将達はこの社会的風潮をどうにかしようと思っていた所だったと言う。

急すぎて思ったけど、どうやら大阪に行ってる間に決まった事らしい。大規模作戦後が一番お互いに余裕が出来るのに、作戦の事ですっかり忘れてたとか。

でも、俺にとっては只の交流会じゃない。実は齋藤中將から直々に、この交流を円滑に進めるように頼まれてきたのだ。頼まれちゃ仕方ない事だけど、これはちよつと難しいな……何故なら、

「……………」

交流会つってんの陸軍は陸軍と馴れ合ってるし、海軍は海軍と一緒に交流してるし、お互いに関わり合おうとしてない。

面倒事押し付けるの勘弁してほしいツス。アニメでも見ようと

思ってたのに、仕事が終わって食堂へ来てみれば不純物が混ざってんじゃないか。

何あの制服？うんこみたいな色じゃん？俺たちの純白の制服に掛かるから近づかないで欲しいなッ！

とも言つてられないか……引き受けちまった以上は、陸海が仲良く話し合うぐらいの雰囲気を作らないと。

「……………」

『…………フフー！』

遠くの席から鼻で笑う時雨。そして隣で座る鈴熊、村雨ちゃん達や、昨日お泊りした春雨ちゃんも一緒に俺の方を見ている。

ここには第一鎮守府の大佐や蘇我提督や中將も座るVIPな席で、俺がここに居るのは珍しいのだろう。

ただ、時雨は知っている。俺がクソ共とのクソみたいな面倒事を頼まれてる事に。

ん〜どうしたもんなんだろうか？

「20連の方々には人見知りが多いようですね！どれ、ここは自分たちで盛り上げるとしましょうか！」

「……宍戸大尉、余計なマネはしないで頂き」

「テメエの部下達への監督不行届でこっちの村雨ちゃんがすげー不快な思いしたのを中將にバラすぞコラア……？」

「な……ッ!？」

「お前の親父の前でいい顔したかったら俺に協力しろよ？中將から直々にお前らとの仲取り持つよう頼まれてんだからよオ……？」

「な、何故貴様などに……？」

「いいからッ！部下の件は黙ってやるからよ、その代わりに陸軍の人達にもつと海軍と話すように言ってくれよお。これで俺たちウインウインな関係じゃんか？な？」

「クツ……まあ確かに、交流会の意を成り立たせるには、今のままで少し間が悪い……致し方がないか」

俺が海軍へ、コイツが陸軍へお互い交流を持つように説得する段取りとなった。クソメガネが七光り野郎のお陰で助かったわ。

……よしッ。個人的には気乗りしない事だけど、なんとかするか！

陸軍さん2

「と言う訳でさ、あそこの陸軍軍人さん達に話しかけない？」

「え？私はちよつと……」

「私も少し……」

我が鎮守府切つてのエース翔鶴姉妹は露骨なNOを出す。隣で、同じくバツ印を指で作る大鳳も出来れば辞退したいとの事。

「え、なんですか？！救助活動でイケてる成果を出してる20連隊だぞ！交友の輪を広げるのに最適じゃん！」

「穴戸さんだつて知ってるでしょ？陸の人って、私達がいるとちよつと嫌な感じ出してくるの」

「まあまあそこをなんとか！」

「ちよつと無理、翔鶴姉も駄目でしょ？」

「無理とは言わないけれど……私も出来れば……」

「私も遠慮したい気持ちが大きいです……」

「大鳳まで……んんん分かった。でも気が変わったら遠慮なんか必要ないからな！」

「は、はあ……？」

と言う具合に、こちら側も気持ち的には乗り気じゃない。これはいい例題だ。

陸軍と海軍の亀裂には日本軍創設の歴史を辿らなくてはいけない。その代々先輩方から受け継がれてきたヘイトの伝統と、海軍に準ずる立ち位置となつてしまった劣等感が、両陣営への嫌悪感を煽るのだから。

元々は海軍の立場が強くなつたせいで、陸軍よりも偉いみたいな風潮が何処かしら生まれたのが原因だ。そこからライバル心を燃やし、海軍も「変に突つかかってくる人達」と言う悪循環が生まれた。

まあこれは少し大袈裟な言い方なんだろう。

陸海問題は総合的に見て重大ではなく、普通に連携は取れてる辺り

気にするのも無駄なのかもしれないが、わだかまりはできるだけ取り除きたい様子。

そう考えると、ナンパの一件はそう言う因果関係から来た、運命なのかも知れない（※ただの偶然です）。

何はともあれ俺は、飲み会で仲の悪いグループ同士を取り持つ為に雇われた、幹事みたいなものだ。

こういう時は大抵話す口火を切ってくれる、勇敢でお調子者でコミュ力の高い人が話してくれば良いのだが、

『出会い系サイトクソみたいな女しかないからやめとけつて！ソース俺だから！』

『マジッスか！そんなことあるんスね！すげえッス！』

『ナンパする時はな？チャラければ良いつてもんじやないんだぜ？エッチまで持って行きたかったらな……「俺、前戯が本番だから」つてオーラ出しとけよ？それで三割行ける……ドヤアア』

『『さっすが結城さんッス!!』』

海軍から既に一人で独走中の奴いるんだよな。アイツも頼まれた口なんだろうけど、完全にヤリチ○トークで盛り上がってる。しかも話し相手は昨日ナンパしてた奴らだ。因みに三割つて少ないようでも結構凄いー本当だった場合に限るが。

ああ言うやつがいると「アイツは特別だから」みたいな雰囲気になるし、口火役の効果も薄くなる。

陸軍側の中佐さんもさり気なく頑張ってくれてるみたいだが、これも効果なし。

コイツらの師団長は何やってんだ？とも思ったが、実は舞鶴海軍基地と言う別の海軍さん達と談笑中らしい。

つたくよオ……うちらだけトツプが階級釣り合ってねえんだよ。中将と中佐つてすげえギャップだから。

「つて言う訳でさ、折角の交流会なんだからあそこの陸軍の人達と話さない？」

「ミーはあまり乗り気じゃナイネー。比叡が行ってきたらどうデース

？」

「わ、私もちよつと……つていうか私に振らないでくださいよー！」

「分かった分かった気が変わったらでいいから！……じゃあ、鹿島はどう？」

「鹿島ですかあ？私が行くと、しつこくチャホヤされそうで怖いですう……」

お前がここの主役になるってこと？確かに問答無用で可愛い娘をトイレに連れていきそうなゴロツキ感あるけど、自分がチャホヤされること前提で話すのうぜえんだけど。一旦学校で孤立したら絶対イジメられるタイプだわ。

「じゃ、あそこの中佐さんいるじゃん？」

「はい、それがなにか……」

「あれ斎藤提督の息子さんなんだって。エリートで将来の元帥候補なんだとか」

「あ、そ、そうなんですか！ふ、ふくん……あ、鹿島ちよつと失礼しますっ！」

うん、随分と失礼だね。お金と権力にしか興味はないのかね君達は！いや、鹿島の気持ちも分からんでもない。俺だって最近ビッグな提督達とお話する機会が非常に多いのは、周りからすれば狐野郎とも陰口を叩かれかねない。

でも俺には使命がある。提督になると言う使命が……半分ぐらいは勢いだけだ。

その使命を果たすためだったら、いろんな事に消極的な俺でも、時には大胆に行動するもんなんだ。

提督達からマイクを貰い受け、飲み会的なノリで食堂を宴会雰囲気巻き込む。

「さあ〜てさてさて皆さん盛り上がりすぎてきた所横から申し訳ありやーせん！自分は舞鶴第二鎮守府、整備工作班副班長の穴戸龍城と申します！つい先程メンテの仕事から上がったばかりでいかり肩となりますがご了承くださいい！」

自分が場を仕切らせてもらおうと明言する。「何やってんの？」みた

いな顔でこちらを見てくる時雨姉妹と鈴熊。当然だ、思い付きのノープランだもんね。

俺は、聞いてて疲れない程度の口調と長さのスピーチをした後に、今からやる事の説明に移る。

「では今から、マジカルバナナと言う連想ゲームを、陸軍海軍の皆さんと交互にやっていきたいと思えます！勿論全員参加で」

「なッ」

「私もやるのか……」

提督達も驚きの様子。

でも仕方がない、そう言わないと盛り上がらないんだから。今更ルールを言う必要はないが、万が一知らない人は隣の人に聞いてくれと伝え、早速ゲームを始めようとするが、

『何勝手に決めてんだ！交友会なのに強制参加かよ！』

「あ、いや、別に強制参加ってわけじゃ……」

『俺に命令しようつてのかア!?アアン!?』

「ちよ、ちよつと陸軍の皆さん落ち着いて……」

『おい！テメエら副班長に偉そうな事言っつてんじゃねえぞクソ野郎共！』

『何だとオ!?いつも高学歴で偉そうな顔しやがってエ海軍のくせにイ!!』

『何だとオ!』

クツ……アニメだったらこんな事にはならないのに。和やかムードが一変して殺戮ムードと化す。

物を投げ合うほど常識を持っていないわけじゃないが、流石に見過ぎせない事態だ。隣にいる提督たちの方を向いたら「自分で撒いた種だ、どうにかしろ」的な視線を向けてくる。一喝するしかないか。

「お静かに願いますツツ!!」

「そうだ！静かにしろお前ら！」

『『………』』

「ありがとうございます中佐殿……分かりました。ではこうしましよ、連隊長殿と自分が率先してやります。あとに続きたい者は手を上

げて叫んで下さい」

「致し方ないか……では皆の衆、私は大尉殿に必ず勝ってみせよう。海の者をこの手で倒す、交流会のいい切り口になるだろう!!これは陸軍と海軍の戦いと心得よッ!!」

『『お、おおおお!!行けえ連隊長おお!!』』

同じようにマイクを持つ中佐が俺と共に中央に向かう。乗せられやすい奴らだなあの人達。

『副班長も頑張れええ!!』

『穴戸くん!班長として応援してるぞ!』

『勝ったら副班長のケツ可愛がってあげますよお!』

「ありがとうみんな!最後のはいらないぜ!」

なんだかんだで、関わり合おうとするムードは作れた。この中佐の口利きのお陰もあるけど、そのせいで負けられない戦いになってる。車の中で暇だったらやるような連想ゲームだぞこれ?なにムキになってんだお前ら……と思いつつも俺も楽しくなってきた、そんな事どうでも良くなってきた!

『……どうなってるのこれ?鈴谷たちが居るのってただの交流会だよね?なんでマジカルバナナ?』

『血の気が多い殿方が多いとこうなりますのね……血気盛んな方は嫌いではないけど、好みでもないですわよ?』

『右に同じく。ハア……穴戸くん、あれ楽しんでるね、村雨も参加したら?』

『わ、私はちよつと遠慮したい……』

『場を盛り上げようとするお兄さん……カツコイイです……ふっふっ』

おお、見てるな時雨達。皆がいる中でカツコイイところ見せて、俺の男気見せてやるぜ!

「では参りますよ、中佐殿!(ただのゲームとは言え、部下達やテメエの親父さんの前でその嫌味ツ面アに泥オ塗らせテエもらうぜエ……

へっへっへ！」

「はい、では行きますよ（そんな事はさせん……泥を被るのは貴様の方だッ！）」

海軍代表 v s 陸軍代表の頂上決戦が幕を開く（※ただのマジカルバナナです）。

「マジカルバナナアゝバナナと言ったら滑る！」

「滑ると言ったらスキー」

「スキーと言ったら寒い！」

『『『おおおお！！』』』

何もなかった所で馬鹿なゲームをするとやけに盛り上がるのは、やっぱり馬鹿騒ぎが好きだからだろうか？

序盤は定番な物からスタートし、徐々に難しい言葉で相手を崩す戦いへと移行する。それに連れ食堂も盛り上がる。

「ウイリアム・ギルバードと言った羅針盤」

「羅針盤と言ったら航海！」

「汚らしい海を渡る航海と言ったら十五世紀」

「ッ!? 15世紀と言ったら戦国時代！」

「戦国時代と言ったら戦争」

「戦争と言った歩兵！」

「歩兵と言ったら輝かしい陸軍」

「陸軍と言ったらチンピラの集まり！」

「チンピラと言えば貴様」

「貴様の前にいる貴様と言えば部下の躰もできない七光りクソガキ！」

「アアン!? 何だと貴様ア!?!」

「うるせエ!! テメエとテメエの部下達見てれば偏見も生まれるっちゅーんだアよオ!! 何が汚らしい海だアアン!? 母なる海に謝れエ!!」
「貴様こそ訂正してもらおうかア!! 陸に住む国民の救助を行っている

のは陸軍なんだぞ!？」

「へえ、そうなんだあゝ？ただのレスキュー隊兼剣道部かと思いましたがあゝ」

「ググウウウウツツ!!」

「お、落ち着いて下さい副班長!ドードー」

「連隊長も落ち着き下さい!それじゃあ本当にチンピラにチンピラですよ!？」

割って入ってくる部下達に促されて一旦落ち着きを取り戻す。

コイツも斎藤中將や部下達に宥められ一息つくが、敵対心はその瞳に宿している。

「クツ……貴様に侮辱されたままではメンツが立たん……決闘を申し込む!!」

「け、決闘おおお!?って、男に言われてもあまり……それに、決闘するのは違法なの分かってます?結構マイナーな法律ですけど」

「では勝負だア!父上、種目をお決め下さい!!」

「ふむ……では剣道などだろうか?」

いや止めるよ。

こうして急遽、俺と中佐の一騎打ちが始まるのであった。

To be continued.

陸軍さん3

―舞鶴、道場。

To be continuedじゃなくて、To be decidedだろうが。俺は一回も了承してないぞ、決断ぐらいはさせろよ……まあ受けるつもりだったので、待つ必要はないけど。クソ七光り野郎にはともかく、提督達にはかなり迷惑を掛けたと思っただけど、『流石は穴戸くん、割り切れない関係を勝負事に持ち込んで分かり合おうとするとは……』とか、何処かしら勘違いをしてくれているようだ。

蘇我提督も、『私達の時代は、気に入らない事があると殴り合って解決していったんだ。そしてそうやって……仲間を作るんだ……』とか言ってた。

今の時代はそんな事すると必ず警察、親、裁判に持ち込もうとするから、番長時代を懐かしんでいたの……とも言っていた。殴り合って解決するとか海外かよ？ほら、よく動画で見るヤツ。

確かペルーには喧嘩祭りなるものがあるらしいけど、素手で顔を殴り合うのよりかは剣道の方が寸分マシか。

「ハア……なんで僕まで？僕関係ないよね？」

「剣道やった事がある奴、少ねえんだよこっちは。お前と熊野以外は俺しかないって……だから特別ルールの3on3なんだろうが」

「わたくしも多少かじっている程度なのですが……それに、淑女であればこんな野蛮なスポーツはー」

「おいおい、フェンシングは野蛮だったのか？」

「ふえ、フェンシングは全く違うスポーツですよ!？」

「違わない。東洋か西洋の違いだけだぞ」

海外ではな、ジャパニーズフェンシングって言えば大抵通るんだよ。貴族がフェンシングするイメージがあつて、剣道は庶民が汗を吹き回しながらするって風潮があるから高級感が薄れるのだ。

そんな汗を飛ばしまくる剣道は、団体戦と言うものが存在する。基

本5 on 5だが、やれる人が時雨と熊野と俺しかいないので、3 on 3のルールとなつている。後のルールは同じだ。

誰かもう一人ぐらい剣道してる奴居るだろうが、出てこいよ。

そんなジョーカーも、この試合を一目見ようとする敷き詰められる道場の人混みに隠れているんだらうな。

まあ出たくない気持ちは分からなくもない、なにせ陸軍と警察は毎回全国大会を独占する奴らだからな。

……大抵は警察の人に持っていかれるけどね。言ったら怒るだろうから控えておく。

何はともあれ、この試合は今後の威厳に関わる。

「あんな強い人達と戦いたくないよお……穴戸くん、これ終わったら」

「ああ奢つてやるよ、一品だけだぞ?」

「当然だよ、僕にこんな汗臭い事させて」

「整備の仕事はこれよりマシだったのか?」

「あーそう考えるとこつちのほうが楽かも」

「シツ! 始まりますわよ」

防具を着て、あら方用意して、対戦相手の前に整列する。

『両者、前!』

「……………」

「貴様はこの私が潰す……」

「フラグですよそれ」

「フラグ……なんだそれは?」

「知らないならいいです……」

『正面に、礼! お互いに、礼!』

「よろしくお願ひします」

『時雨姉さん! 穴戸さん! 頑張つてえ〜!』

『お兄さんあとでその手ぬぐい下さい!!』

『くまのんがんば〜!』

礼して解散した直後に湧き上がる歓声と共に、いつの間にか譲れない海軍 vs 陸軍の戦いがスタートを切る。

俺も胴を手で叩きながら後ろへと下がり、次の試合を待つ。

先方は面を着けている熊野が行く。ウォーミングアップを済ませた時雨は次に備え面を取り、熊野は蹲踞した後に立ち、始めの合図で剣道恒例の威嚇（気合）をする。

「では、始め！」

「とおおおおおおうおうおう!!」

「……ブフツ！」

「なんだあの叫び方……」

時雨を含め、野次馬共も大半は笑いを堪えている。笑わせて油断させようとしているのか？ いい作戦だ俺もやりたい。

……後に鈴谷から、これは出撃の時でも発する熊野特有の雄叫びだと知る事となるが、それは後ほど。

とにかく、いま分かった事は、

「一本！勝負あり！」

「ひ、ひええ……強ええ……流石、社会人」

熊野が一瞬のうちに二本取られた事だ。相手は大会上位に行っただけえ人だから、そりゃ負けるわ。

「申し訳ありませんわ……」

「いいよ！熊野すげえ頑張った」

「そうだよ熊野、僕がアイツラアから敵取ってくるからア……!」

「お、おおおう……」

時雨の気迫に圧倒される。やっぱり仲間思いだな時雨は、絶対敵には回したくない。

熊野と同じように蹲踞、そして構えて、

「メエエエエエエエエエエ!!!ドオオオオオ!!コエエエエエエエエエエエ!!!」

「一本！」

すげー……小手からパツシーンって音がした。中々鳴らないぞあんな音。

「メエエエエエエエエエエ!!!」

「一本！勝負あり！」

一瞬にして勝利した。面を打たれた相手選手が一瞬だけグラついたのが気になったけど、大丈夫かあれ？その犠牲の上に君臨する時雨さんが帰ってくる。

「ハア……ハア……勝ったよオ……？穴戸くんも勝たないと……殺すから……ハア……」

「あ、ああ！楽勝だし！」

プレッシャーかけてる自覚ある？両者とも一瞬にして勝敗を決した故に来た大将戦。

普段剣道何てしない女の子に打ちのめされた相手は、深い傷を負わ無いことを願い、俺は中佐と対面する。

「……………」

騒ぎ立てていた道場は一瞬にして静まり返る。これができるのは、集団意識の高い日本人だからこそできる事だ。

剣道では反則になる勝利後のガッツポーズも控える事を頭に入れておき、審判からの始めの合図を待つ。

呆気なく終わった二戦とは打って変わり、どう転ぶか分からない緊迫した雰囲気か辺りを包み込む。

「……………」

「では、始めエ!!」

「ヤアアアアアアアアツツ!!」

——陸軍第一六師団二十連隊隊長——

斎藤 中佐

「メエエエエエエエエエエ!!」

初撃は双方頭上の面に竹刀を振り下ろすが、案の定有効打にはならず鏢迫り合いへと発展。衝突するお互いの小手、そして鏢を交互に打ち合い、一旦離れる。

『頑張れ穴戸くん!』

『負けるなよ副班長オ!!』

『やってやれ隊長ー!』

間合いを詰める。竹刀の先が当たるか当たらないかぐらいの、遠い距離。指先一つ詰めるだけで変わる状況、それが剣道だ。

「突きイイイイイ!!」

「うお!!」

顎下の打突部を強襲する攻撃「突き」は、無理な距離もあってか首の下をすり抜けていく。しかし、万が一避けていなければ確実に一本取られてた。

「ふう……アブねえツすよお中佐ア……」

「試合中だ、口を慎め」

「うるせエー!ドラゴ○ボールだつて三分つて言つておきながら何時間掛けてんだつてぐらい戦つてたじゃねえか!」

「その間の会話はサ○ヤ人にしかできない超高速お喋り……我々とは桁違いだ」

「人間でもその戦闘過程を実況してる時あるじゃねえか」

「クリ○ンの事かああ!」

「止め!二人共、反則一回!」

「すいません……」

(※剣道では試合中に会話しても反則となります、間違つても会話はお控え下さい)

「では、始め!」

「ウラアアアア!!」

やり直して、再度間合いを詰め始める。初撃同様、面で交わる竹刀は当たるも有効打には成らず。思い切つて面から小手を振り下ろし、再び面狙いで刺し面を食らわす。

竹刀で交わされ、面返し胴は近すぎる距離で当たらず、再度鏢迫り合いに戻る。

『『………』』

接戦は見る者を魅了し、道場内の雰囲気が一気に静まり返り、空気が振るわれる竹刀へと集中する。

「……フツ、面エエエン!!!」

「ウ……」

「一本!」

身を一ミリ引いた一瞬を突く、大きく振りかぶられた引き面が頭上に炸裂し、すり足でありながらの高速移動。音よし、痛みはない、対応できなかった……完全な一本だ。

『まだ大丈夫だア!二本取ったら巻き返せるぜ!』

『お兄さん頑張って下さい!そして私の事も巻いてください!』

『勝ったら俺たちがすげえエロい事ゝしてやりますから!』

結城か、アイツも剣道やってたと思っただけど、すっかり忘れてた。春雨ちゃんのを巻くってどういう意味だろう?まあ後で布団にでも巻いて遊んであげよう。最後のはすごくいらぬ。

「二本目、始め!」

「オラアアアア!!つて、痛エエエエエ!!」

二戦目は両者共に、逆胴を繰り出す。しかし奇しくも当たらなかつた竹刀は45度の角度で脇下を強打する。

相手もそうだと思うけど、痛い。ボラのフルスイングを受けたみたいなの脇痛が腹にまで浸透する。

立て直し構え、突き面の後に再び胴を繰り出すが、一本にはならず。相手も鋭い突きを穿ち、面へと連鎖させるがそれを交わす。

時が進むに連れて、突きの挙動が多くなって来たその頃、俺は前の結城の言葉によりあるひらめきが頭を過る。

「ハア……突きイイイ!!」

「待ってたそれを!フンツ!」

「な、なに!?!」

「止め!反則一回!一本!」

『よし!やったな穴戸!』

『穴戸さんカツコイイです!!』

『この接戦、実にいい……そうは思いませんか蘇我提督?』

『はい、我々が切磋琢磨していた時期を思い出しますな中将』

劍筋を大きく回し、竹刀を宙に舞わせるこの攻撃は巻き上げと言
う。

先程の反則と合わせて二回となり、一本へと繋がる。しかし奇襲技
とも言えるこれはもう出来ず、俺はあと一回反則になったら一本にな
るから事実上あつちが有利だ。

「三本目、始め！」

「コロオオオスツツツ!!!」

気合ってそれっぽかったら何言っても良いんだよね。その言葉に
連なり、俺も中佐も殺す気で行く。

双方、突きを穿つ。小手面に続き、鏢迫り合いを経て引き面。突き
面、そしてフェイントで胴を打ち込むが交わされ、後ろから迫る面を
上にかざし防御。

互いが持つ全技をラッシュで与え続ける。その連撃、打突、大技の
一挙手一投足に誰もが息を呑む。

飛び散る汗は床を塗らし、舞わされる竹刀が辺りに疾風を巻き起こ
す。

残り時間が30秒を切り、お互いの攻勢は加速する。睨み合い、一
歩も譲らぬと牽制して構えのポジションで膠着する。三分とは短い
試合時間かとも思えるが、この緊張感の中でそれだけ暴れ続けられる
奴はハッキリ言つて人外だ。だから今みたいに息切れも起こす。

……見ている女の子達はすげー心配そうな顔で俺を見つめている。
クウく可愛いなもう！俺が負けちゃわないか心配なんだな。大丈夫
！このクソメガネなんて今すぐブツ殺してやるから！

「フウ……胴オオオ!!!」

「っ！」

迫り来る動作は一旦面を思わせるかと思いきや、勢いに乗った逆胴
が脇腹を通過する。外し、そのまま後ろを見せたまま残心で逃げよう
とする中佐を追いかける。

少し距離を開けてから振り向き様に秘技、飛び込み面を浴びせよ
う。

「ふー……うおオー！」

「締めた！」

中佐は振り向きに勢いを付け過ぎたせいか、身体がよろける。最後の最後でコイツは足元をすくわれた、やるなら今だと、頭上に開いた面が語りかけているように思えた。

悪いな中佐ア……この勝負、勝たせてもらうぜ！

そう胸の中で呟き、最適な距離から会心の飛び込み面をしようとした、その時だった、

脳内に、俺の爺さんとのある思い出がフラッシュバックする。

『ジジイ、何見てるの〜？』

『おお龍城か！いやなに、バードウォッチングならぬ、人間観察じやよ。見よあの尻、そして胸を！マツコトけしからんわい』

『嫌な顔してるよ〜？』

『分かつたらんなガキンチョが、あんな胸元開けさせたエツロイ格好しておきながら見られるのが嫌だなどと、矛盾してるにも程があるワイ。そうは思わんか？』

『でも嫌な顔してるよ〜？いい加減看板の後ろでコソコソ見るのやめようよお……』

『いいかクソガキ！オナゴの胸は男を吸い寄せるバキュームなんじゃ！ツガイを引き寄せて交尾するための、言わば客引き道具。その性、その本能故に、男はこれに抗えない……』

『おっぱいってそんなに凄い物なの〜？』

『そうじゃ。あの乳首が隠れたデツカイプリンには、男を惑わす特殊能力が秘められておるのだ。お前も大人になれば何れ分かるだろう……デツカイおっぱいが揺れば、お前は嫌でも目で追わざるを得なくなる。例え一瞬でも、ゴルゴンの目を向けられたかの如く、男なら誰もが持つ股の龍が膠着するように……な』

『わかったよジジイ！おっぱいが大きな女の子はみんなメデューサなんだね！』

『フム……まあそういう解釈も、悪はないな——』

面を打つ瞬間、視界の端に、

『宍戸さあくん！頑張れっ、頑張れっ！』

村雨ちゃんの大きなプリンが、ぼよんっ！ぼよんっ！と揺れていたのだ。

チアリーダーのみたいに俺を応援してくれてた村雨ちゃんの胸が、見たことないぐらいの上下運動で、ぼよんっ！だせ？

いやさ……そりや見るでしょ？

「うおっ！」

「ン……胴オオオオオ!!」

「一本！勝負あり！」

体勢を立て直され、見事な逆胴勝ち。湧き上がる歓喜の声、そして敗北した俺が残された。一瞬の不覚が、相手の一瞬の不覚により逆転すると言う正に主人公的な勝ち方をされた瞬間だった。

再度お互いに礼をして、戻って防具を外すと、

「僕、言ったよね？負けたらどうなるかって」

「負けたらブツ……じゃなくて、メシ奢るとかだっけ？分かってるって！だからその木刀で俺をブツ殺すのだけはやめてくださいお願いしますお願いしますオネガイイイ!!」

竹刀はいいけど木刀はやめて。どっから出したのそれ？

でも楽勝と言った手前、負けているのは本当に申し訳なく思っている。特に、彼女の責任では無いとは言え、村雨ちゃんの胸が視界に入ったから動作が止まった……なんてクソみたいな敗因を、事実として作ってしまった事に負い目を感じる。

「大丈夫ですかお兄さん!?!」

「おいおい！副班長様の土下座だぜ皆！撮れ撮れ！」

「やめろオー！でもマジでゴメンみんな」

気づいたら俺の仲間に囲まれている……とは言っても、大半は試合の口論で夢中だけ。普段剣道しない副班長勝ちだ！いや、試合の結

果が全てだ！とか色々言ってるな。

時雨には土下座して、みんなにも謝る。鬼の形相で見下してくる時雨圧倒されて顔を上げられないけど、横から春雨ちゃんが手ぬぐい持っていたこうとしたのと、村雨ちゃんがそれを止めてるのが見えた。

確かに洗うのは村雨ちゃんだから村雨ちゃんに渡しとけばいいか。それにしても、クソジジイとの思い出がこんな形で俺を害するは思わなかった。

そして勝ち組である陸軍中佐様がこちらへ歩み寄られる。

「……穴戸大尉」

「このク、コホンツ……いやはや、流石は中佐殿。文武両道とは正にこの事、自分の完敗です」

「何故、あの時少し留まったのだ？技を外して体勢を崩した私に情けをかけたつもりか？」

「え」

「それは私も気になった所だ。何故、穴戸くんの動作が遅れたのか……部下が負けたとは言え、その敗因を徹底して追求するのもヤボかとも思うが……」

「え、いやその……」

「君が私の自慢の息子に手を抜いた……とは到底思いたくはないが、やはり気になる。何処か体の調子が悪いのかな？」

「そうなの穴戸くん？」

……そんなの決まってるんだろ？

「む、村雨ちゃんのおっぱいがチラツツと視界に入ったからです！」

「何!?海軍の片隅にも置けない奴だな君は！」

「提督候補から除外するか……」

「ひ、ひどい……！村雨……なにもしてないのに……うう……！」

「村雨を泣かせたね？穴戸くんには失望したよ……これはもう冗談抜きで殺すしかないね。出番だよゲイ三人衆」

「「いただきます」」

「Noooooooooooooooo! Help! Help meeeeeeee
eeee!俺のテイソウがアアア!!!」

そして俺は便器になって、性癖も改造されて、ウリセン一本で生きていくことになったとき。

などの展開は冗談抜きで避けたい。

正直に言ったら殺されるし、下手な言い訳は通用しない。提督や時雨達に睨まれる中で出す答えは……ファイナルアンサー？

答えのないクイズは嫌いなんだけど？

「……中佐達へ華を持たせたかったからです」

「……では君は、息子に手を抜いたと言うのかね？」

「それも違います」

「どういうコト穴戸くん？」

「皮肉にも深海棲艦のお陰で、海軍ってのは陸軍より武功で目立つ。それは本来持ちつ持たれつの両軍にとって、偏りを生む。自然と出来た海主陸従の雰囲気は中々消せない。だから、ここは陸の方々に今一度勝利を取ってもらい、バランスを取ってもらおうかどうか……そんな思考が一瞬なりとも頭を過り、一瞬の不覚へと繋がってしまったのです。もし中佐殿の反応がもう少し遅れていたら自分は勝ちに行っていたので、普通ならあり得ない失態です」

「なるほど、あくまで一瞬の気の迷いが敗因を生んだ、と言うのか

……」

「優柔不断な自分を責めるばかりです」

「うむ。まああそこで話している部下達は、君の思惑にまんまと引つかかったみたいだぞ？」

「なんやかんやで話し合わない方向から、喧嘩腰でも会話をしようになっているのは事実だ。この後打ち解けるかはさておき、俺は自分の役目を一応果たした漢として、そして意図せずだが相手を立てた漢として印象を残す……のか？残ってほしいけど。」

あ、あぶねえ……何も浮かばなかったらガチで本音を答える所だっ

た。ほら、米国初代大統領ワシントンが子供の頃、桜の木を間違えて切って素直に話したら許してくれたみたいな話あるじゃん！所詮は作り話だけど。

「……フンッ」

「あ、ちょー！」

「すまん、せがれは負けず嫌いなのだよ。私があとで話しておくから、君はシャワーでも浴びてくるといい……良くやってくれたね、このまま引き続き頼むよ」

「は、はい……」

斎藤親子が退出。ついでに蘇我親子や他の仲間達も道場を出て行く。俺と時雨姉妹はポツンと道場の隅に残された。

「お兄さん大丈夫でしたか？頭痛くないですか？スンスン……っ」

「ああ痛みとかないから全然大丈夫だよ。それより今汗臭いからあんまりくっつかない方がいいと思う」

「そうですか……」

とか言つて離れようとしなないんだけど。

「ハア……初めから負けるつもりで楽勝とか言ったの？」

「……フツ、さあーてどうだろうなあ？」

「何スカしてんのムカつくんだけどシネ」

「あ、あははっ、流石にそれは言い過ぎだと思うけど……でも、剣道してる穴戸さんも凄くカッコよかったですよ？素敵ですっ」

「そんな事言ったら俺毎日剣道しちやおうかな？」

「仕事の後にやる体力があつたらやってもいいよ」

「じゃあ結構です」

どんな仕事も終わった後はキツイ。休めと訴えてくる体には逆らえない。それは人間が身体という器に支配されているからだ。だから三大欲求である飲み物や食べ物一つで発狂したり、殺し合ったりする所もあるんだー身体が欲しがってるものだから。

だから春雨ちゃんはもうちょっと俺から離れたほうがいいと思う。胸とか脚とか当たってさ、柔らかくて俺イキそう。

『おいおい、俺たちの副班長舐めてもらったら困るぜ？ルービツク

キューブ2分で解けるの、あの人しかいねえんだぞ?」

『バカ言え、こっちはルービックキューブ回しながら円周率100桁以上言える凄腕がいるんだぜ?』

『そんな円周率なんて覚えてもなんの得もねえぜ。まあ俺は300桁まで覚えてるけど?』

『テメエお勉強箱のくせにチヨージこいてんじやねえぞオ!!』

『ハア!?なんだそれ意味わかんねえぞ!』

『おい、お前ちよつといいケツしすぎじゃねえか?流石陸軍で鍛えてるだけあるな。後で貸せよ』

『え、ちよつとそれは……』

「……戦いが終わって、いい試合だったねで終われるほど楽しやねえか」

その後、20連隊との間を取り持つ役としてひとり一人順番に話しかけまくったのだった。

可愛い艦娘達が話しかけると目の色変えるのは、少し即物的すぎとも思ってたけど、案外それで順調に事を運ばせることができた。

あの娘の好きなものなに?あの娘って彼氏いるの?とかの情報を男に聞くので更に話題が増え、いい傾向を見せる。

俺はこの試練を乗り切った事でその疲れが一気に来て、部屋に帰ったらベッドにぶつ倒れる。

因みに一番人気があつたのは、海陸両方から話しかけられていた春雨ちゃんだった。次いで村雨ちゃん、そして如月と順を追っていく。ランキング基準は単純に話しかけられていた人数で決めた。

春雨ちゃんはまだこの所属ではないので、明日には帰らなくてはいけないのが悔やまれる。

でも大丈夫。

この二週間後、春雨ちゃん達が晴れて卒業式を迎えて、俺たちの鎮守府に配属となる事が正式に決定されたのだ！わぁ〜い！

新たな仲間、散らされる後輩

―執務室。

「君たちは今日より、この舞鶴第二鎮守府の所属となる。最初は色々戸惑う事もあるだろうが、そういう事を全て引つくるめて、君たちの今後の活躍を期待しているよ」

「ハッ！」

「……そして、君たちは穴戸大尉からの誘いでこの鎮守府を志願した、と言う事で間違いないね？」

「ハイッ！」

「……ウムッ」

深く頷いた荒木大將は、各鎮守府を転々と周りながらプログラムへの候補者を見極め、育成へのルーティーンやのなんやのチェックと指示をしていたとの事もあり、かなりお疲れであると蘇我提督は言う。

無口だと思っていたけど、そりゃ疲れるだろうな。

俺だったら疲れてお地蔵さん状態。帽子深く被って、寝てる事を悟られないようにして、一瞬でもいいから仮眠する。

俺は春雨ちゃんと夕張、そして綾波ちゃんを集らせ執務室へと出向き、荒木大將からはオツケーを貰ってとりあえず第一関門突破らしい。

他にも鎮守府に所属してきた人がいるけど、全員整備工作班入りの野郎共。

こう言う時期の入隊者、転属、卒業生の割合って実は、主に舞鶴港湾基地に偏る事になる。

当然だ。ビッグな船動かすにはラージなアマウントなピープルが必要だもんね。

深海棲艦倒すのは艦娘が効果的ってだけで、集まってる群衆を見つけたら即原子空母とかイージス艦とか動かして、ミサイル集中砲火で軽く100隻消し飛ばすもんね（※100隻は本当に上手くいけばの話です）。

陸で言えば艦娘が兵士で、艦船が戦車やヘリコプターみたいな物と言えば分かりやすいだろう。もっとも、実際は戦車一台の方が100倍安い。船は動く要塞だから、当然と言えば当然か。

―工房。

「俺がここの班長だ！そしてそれに続く愉快的仲間達！以上！」

「班長そりゃないツスよ〜！」

愉快的な笑いを見せる整備工作班はいつもの和気あいあいとして雰囲気です。新入社員ならぬ、新入隊員のみんなを歓迎する。

和気あいあいとした雰囲気の本番となると、一瞬にして殺伐としたキリングマシーンなアトモスフィアとなるのは後に分かるだろうな。新人諸君。

「じゃあ穴戸、新人の面倒任せたぞ」

「了解です……俺はここの副班長だ。学校でもう行程は習ったと思うけど、ぶっちゃけこれが本番だからミスがないように復習しながら、工房内を案内するぞ」

「二はい！よろしくお願いします！」

班への入隊者は全部で7人。臭い男が殆どだが、その中には知っている顔もある。

「貴方が副班長だったなんてね」

「俺、結構偉いぜ？惚れちゃった？」

「ふふっ、それでおちる娘は少なくともね？これから宜しくお願いますわね、副班長」

夕張、彼女は整備工作班へ志望した。学校では既に軽巡クラスを獲得し、整備工作課程をも手にした彼女は、正にエリート。

綾波ちゃんは実力テストでトップクラスを取った優秀な艦娘らしい。効率的な砲撃と爆撃による攻撃力が強みだとか。勿論新人ではあるものの、このまま行けばエースも夢ではないとか。

春雨ちゃんは……極々平均的であるらしい。でも春雨ちゃんはあの時雨の妹であり、村雨ちゃんの妹でもある。勇気を持って艦娘として志願してくれた事を、部外者ではあるものの、彼女を誇りに思う。

「つーわけで、余って使わなかった弾薬はここに置く。書かれてある装備別に入れておいて、次の出撃には優先的に使うこと。出撃はいつも忙しいから新しい弾薬を平行して作るといういぞ」

「はいー」

「あ、そこのお前たち！出撃所の片付けは後でやってもいいぞ、この後も少しだけ出撃する予定入ってるから」

「了解です」

新人の教育も兼ねて、班へアドバイスを平行してやる。みんながそうやってお互いを支え合う事で、仕事場が初めて円滑になる。

演習場では、春雨ちゃん綾波ちゃんが他の駆逐艦勢に指導されるのが見える。

鎮守府に配属された新人の中には転属した人とかも居る。でも、一人でも卒業生とかがいると全員に教えなきゃならないので、決して教えるのが楽とかは無い。

そして、ある程度の中には場所とか仕事場の流れの云々を教えたあと、

「着任早々悪いんだけど……一つ君たち仕事を頼みたいんだけど、いかな？」

「ハッ!!」

「いい返事だ、実はつい最近改二になった娘がいるんだ。名前は熊野で、攻撃型軽空母って言う最新式の装備で戦うんだ。彼女の出撃までの整備を行ってほしいんだ」

「え!?!」

「あ、あの……それって私達新人が行っても大丈夫なのかしら……?」
「攻撃型軽空母って日本海軍でも本当に新しいんだよね。だから君たちが学校で習った普通の重巡とか空母とは構造が微妙に違ったりするから、整備の基本も兼ねてちよつと新しい事にも挑戦してもらいたいんだ」

「は、はあ……」

「まあ彼女も一回ぐらいしか装備したこと無いし、出撃と言っても演習だから彼女の練習も兼ねてって所が強い」

「なるほど……新しい装備……新しい艦種……燃えてきた！」

夕張に続いて、他の野郎共も振るい上がってる。やつぱり整備する人ってそういう事に興味なくちゃやってられないよね。

俺も初めて鈴谷の装備整える時ちよつと興奮したもんね。

あ、そういえばあの時、

『穴戸っちくもう出来た〜?』

『まだできてなくい。あと少し〜』

『とかなんとか言つて、鈴谷の甲板二ーソを堪能してるんじゃないの〜?にひひ〜』

『ば、ばか!そんな事ねえし!』

『まくたまたく!素直になつた方がいいんじゃないかにや〜?』

『お、俺はただ!鈴谷のパンツの中がどうなってるか想像しながら見てただけだ!』

『ちよ、それ最悪じゃん!何やってんの!?!』

『うるせエ!クツソ短けえスカートが鼻先10センチの所にあつたら、漢は屈まずにはいられねえんだよオ!ホラホラ、とつととおパンツの中のメンテナンスさせろよオラアア!!』

『良く聞いたらスカートじゃなくてパンツの中!?!い、いやあああああ!!助けてえええ!!』

『何事だ!?!』

『し、時雨!?シャワー中じゃねえのかよ!?!』

『浴び終わった所さ!鈴谷へのセクハラ行為で有罪!前○腺ぱーんち!』

『あ、おれ死んだわ』

二人きりの出撃所で、あんなこと言われたらそりや襲うでしょ?いや冗談だったけどさ。

それよりも、時雨のパンチすげー痛かった。ケツの中に食い込むつーか、内部通り越して股間にまで浸透して、なんか今まで味わったことが無い感覚だった。

この事は絆により闇へと葬り去られたが、鈴谷は相変わらず間近でのメンテナンスをさせてくれない。いつもは普通に話しかけてくれるのに。

「腕の装備は軽空母というよりかは軽巡とかその辺のと似てるわね……」

「流石は夕張。元々は重巡だからそうなのかもね。しっかしこの武器、ベルギーのP90を彷彿とさせるなあ……」

「脚の艤装の弾薬はどうするんですか長月さん？」

「後ろにあるハッチにぶち込むといい」

「こ、こちらはこれでいいんでしょうか時雨さん……？」

「大丈夫だよ、あとそのシオルダーバッグみたいなやつは艦載機放つから、特に注意してね」

「シオルダーバッグではなくカタパルトですわよ！そんなこと言われたらシオルダーバッグにしか見えないじゃありませんの!？」

「お前も少なからずそう思ってたって事だぞ。ああでも、戦闘しながらシオルダーバッグなんて超イケてると思わない？正に、何時でも礼節を弁え、優雅で可憐な振る舞いを心掛けるご令嬢みたいに……」

「とおおおおおぜんでしてよおおお！おっほっほっほ！そう考えると、シオルダーバッグの表現は中々でしてよお！」

チヨロイヤツだな。

ここは工房から出撃所に場所を移し、熊野の艤装と装備を備える一から出撃までの行程を時雨、長月と一緒に見ながら間違ったことをしていないかをチェックする。

新しい武器、あるいは既存の艤装の整備に関して変更点がある場合は大本営から詳細が書かれた指示、説明書が班長へ送られる。

こう言うのを瞬時に理解するのも整備の基本だ。

因みに、熊野の艤装を改二にしたのは俺たちである。鈴谷とほぼ同じなので、別段難しいとは思わなかった。

俺たちには関係ないけど、家事を担当する村雨ちゃん達の班によると……その……胸がね、鈴谷と同じって訳じゃないらしくてね？新調

する制服を鈴谷のデータで作ろうとしたので、村雨ちゃんがストップをかけたと昨日話題の一つで出してた。

え、そんなの見てわかるだろって？姉妹艦で身長が同じなのに、なんで一部のステータスに差があるのかって？そういうの暗黙の了解って言うんだお？

「ど、どう、でしょうか？」

「うん、見てて特に問題は無かった。後は熊野が外にいる鈴谷と実践訓練するから、そこで支障が無かったらクリアだ、お疲れさん」

「二はいーご指導ありがとうございます！」

「よし、鈴谷が待ってるぞ、出撃してこい！」

「了解ですわー！とおおおおおう！」

みんなが見守る中、奇声をあげながら出撃する熊野はいつも通りカッコよく海面へと不時着する。

あの様子なら本当に問題なさそうだな。そしてあの変な掛け声って人を笑かす為のものじゃなかったのか。

「じゃあ今日は大変お疲れ様！言い忘れてたけど、みんなようこそ舞鶴第二鎮守府へ。教えるのは明日に続けてやるから、今日は終わっていいよ。食堂の場所とかシャワー室の場所も上がってる先輩達に続くといい」

「二「ありがとうございます！！明日も宜しくお願いします！！」」

そして散開する。新人の時は自分で話しかけて、先輩達から教わる鎮守府での日常生活を身に付けさせる。だからある程度コミュニケーション力が高くないとやってられないんだ。

肉体的な指導をする軍隊ではイジメも少くないから、下手に出つつもある程度は自分を保った状態で自分の仲間内を作らなきゃいけない。

まあウチの鎮守府に限ってそんなクソみたいな事するヤツはいない。

昔、「真つ当、正当、誠実を心掛ける軍隊にイジメなんてあるわけ無いだろ！」とか言ってたヤツいるけどー今では、深海棲艦であれ地震であれ、地域の災害に遭った子供が学校でイジメられると言う

ニュースを聞いたことがある。同情されるどころか、それを利用して金銭を巻き上げるなんて前代未聞な事が起こる。

世の中、何があるか分からない。

それは生きている全ての人間に対する言葉だ……今の俺の状況みたいに。

―食堂。

「つーわけでここが食堂だ」

「スゴイですね……」

「ああ、総人数の割には大したスペースだろう？ つっても、陸軍や舞鶴港湾基地は人数が倍はいくだけあって、あつちはこの数倍は大きいだろうけど」

「大阪警備府も結構凄かったです」

「そうだろうな」

一人仲間外れな奴を連れてシャワー室や食堂への案内をさせる。電光石火で仲良くさせないといけないから、趣味が合いそうな奴らとさっさと食事させる算段だが……新人の目線の先には、時雨たちの方を見てる。

村雨ちゃんや春雨ちゃんも居て、いつものって感じの食卓だ。

「あの娘達がどうかしたか？」

「いいえ、とても美しいお嬢様方が居たもので……」

「だろうな？……おい teme エこのクソ野郎ツ、まだア懲りてねエのかア……」

「い、いいいいいい!! も、もう彼女には一切触れませんからああ!!」

元春雨ちゃんの憲兵ストーカー、そして現舞鶴第二鎮守府整備工作班所属、名前は……【月魔（つきま）】とか言ったか？

妄想型迷惑クレイジーサイコヤンデレクソザコカスナメクジのくせにやけにかっこいい名前付けてんじゃねえかよ？ あん？

「つーかなんでこの鎮守府に配属されたわけ？ 憲兵団から整備工作班に入るための課程はしていたのは分かったけど、なんでここなん？ あ

ン？死にたいの？」

「お、落ち着いて下さい！！お、俺はもう心を入れ替えたんです！それにこの鎮守府を志願したのは、兄貴と姐さんから色々と学ぶ為なんです！」

「兄貴って俺のこと？」

「はい！」

そして、姉貴とは時雨の事らしい。義姉さんの意味じゃなくて、姐さん。

こいつの目には俺たちがかなりカツコよく映ったのか、あくまで春雨ちゃんじゃなくて、俺たち狙いで来たという。

男でありながら春雨ちゃんからあれほど慕われる人望、あの状況でも春雨ちゃんの意見を尊重する所、そして時雨の姐さんの仲間思いな所……そんな魅力に、ただ一人の人間として惹かれた。

そう、供述しており。

「春雨さんへの未練は断ち切りました！これからは、未熟な自分を漢として成長させるために、姐さんや兄貴を見ながら勉強していきたいと思えます！」

「お前頭でも打ったの？」

「はい！両親にあの時の事を素直に話したら頭、ボコボコにされました！」

「ああ……」

素直に話すほど馬鹿正直って事は、本当に心入れ替えてるの？こういう奴ほどストーリーとかにハマり易いからな。

純粹にストーリーカー行為をした、とかすげー質が悪いけど。

「俺は兄貴に言われた事、時雨の姐さんに殴られた事、そして春雨さんの優しさに当てられ、陰湿だった俺自身が嫌になったんです……漢としての美しくなるため、これからも宜しくお願いします！兄貴！」

「まあ（問題起こしたら即切ればいい）宜しく。それよりお前、今度は時雨の事好きなの？」

「いい、いいえそんな！俺なんかが好きになれるレベルじゃないですって！それに、姐さんは兄貴の女性じゃないんですか？」

「俺？ないってそんなこと。それにさ、たしかに美少女かもしれないけど、今は顔が良くても股に付いてるかも知れない世の中なんだぜ？」

「付いてる方がお得じゃないですか！」

ん？ああ、君ってそっちもオツケーなのか……ハハハ。じゃ、あそこの紳士達と食事させて、特別な稽古付けてもらうか！

「それじゃあ、あそこにいる人達と食事してこい。俺が、お前の言う男♂と認めている三人衆だ」

「あ、兄貴が認める、漢……！」

「そう、男♂だ。あの人たちと楽しく食事して、まずは自分の中にある男♂の何たるかを、自分自身で見極めてこい」

「わ、分かりました！自分、漢になってきます！」

そうだそうだ、そうやって勘違いするような事言いながら走って、散ってこい。

鬼畜だと思っただろう、でも俺は春雨ちゃんにした事を許したわけじゃない。あと、「ちよつと襲われた」ぐらいの制裁を先に受けさせないと、時雨が暴行ラツシユで殺すかも知れないからさ、これも優しさの内だと思ってくれ月魔くん。

「っーわけなんだ。だから時雨はその拳とランチを手から落として、感情をフワフワさせようか。ほら、パフエの上にあるホイップクリームみたいなさ」

「大袈裟だよ穴戸くん。僕はあと一発ぐらいサンドバッグになってくれてもいいと思っただけだよ」

「その沸上がってる感情、に、落ち着けと言ってるのだ時雨くん、頼むから。あと村雨ちゃんもその得体の知れない粉を隠すんだ、いつものように俺に微笑んでくれ、いやマジで頼む」

「む、村雨姉さんに時雨姉さん！わ、私はもう大丈夫だから、ね！」

「……春雨がそう言うなら」

と、相席する時雨と村雨ちゃんは矛をしまう。村雨ちゃんは食いもんに洗剤でも入れようとしたのか？やっぱり怒らせると怖いぜ。

時雨はまた俺のために、レタスとキャベツと言う、水道水とミネラ

ルウオーターみたいな組み合わせの一品を用意してくる。正直肉が食いたいけど、昨日大きなハンバーグ食べたから今日は菜食中心にして時雨が言うんだ。

卵も栄養バランスガイドでは肉類に分類されると聞いた時は、腹が挟られる思いだった。力仕事してるんだからもつと食べてもバチ当たらねえだろうが。

それはともかく。

『や、やめてください！漢を教えてくださいるんじやなかったんですか!?!』
『ジタバタするんじやねえよこのカワイコちゃんがよくオツツ!』

すげー事になってるな。でもこれで月魔との憂いは払われた筈だ。

それより、ハムスターみたいにパンを頬張る春雨ちゃんは可愛いな。小動物的な可愛さは隠そうとしても滲み出るもんなんだ。

一生懸命りんご飴を舐める幼女を見た事があるだろうか? あらゆる方向からペロペロペロペロ……まったく、無垢って最高だぜ!

「ご馳走さん、じゃあ俺部屋に戻るわ」

「また例の勉強ですか?」

「そうそう」

結構前に提督から、海軍大学の予習及び入試合格のためにとかなり分厚い本を渡されたのだ。中はぎっしり色々な知識が詰まっていた。

憲法、勅令や高級将校の心構え、大隊や連隊の運用法など、クソみたいなお勉強タイム。でも意外に読みやすく、興味のあるものが多いから読んで特に苦になる事は無い。東京大学に行くわけじゃないんだから、気楽に考えばいいだろう。

本気で考えると死にたくなるからな。

「提督になるとか言ってるよ? 医務室につれて行ったほうが……」

「は? ふぎけんなし? 兵学校主席舐めんじやねえぞ?」

「突然の提督になる宣言は流石に草を禁じ得なかったんだけど? あのレストラン入るときいつも思い出し笑いしちゃうんだけど、どうしてくれるの?」

「常に笑ってるキャラで通せばいいじゃん」

「宍戸くんがりんご飴を一生懸命舐めてる幼女を見てる時じゃあるまいし……」

「な、なんだと!? て、ててテメエ俺がロリコンだとしても言いてえのか!?!」

「お、お兄さんが……ペドフィリアだったなんて……!」

「「そこまでは言っていないです」」

春雨ちゃんが……そんな汚い言葉を知っていたなんて……! (※医学用語でもあるので、必ずしも汚いとは限りません)。

「でも本当にどうしちやつたの宍戸くん? 何かあつたの?」

「んく正直に言うとなスカウトされた。そして、なるかならないかって言われたら成るって答えただけ」

「は? 答えになってないよボケカス?」

「時雨くんそんな暴言吐きまくったら本当に男の子になっちゃおうよ?」

そして、頭上にまたスパナが。

「だからアブねえつつつてんだろぅがクソアマア!!」

「女の子にそんなこと言うもんじゃないっていつも言ってるでしょ! ふんー!」

「ま、まあまあ……でも、流石宍戸さんですね!」

「お兄さんスカウトされたんですね……素敵です」

「ありがとうね春雨ちゃんに春雨ちゃん。提督になったら二人には毎日特別ボーナスだあ!」

「わあーい!」

「僕の傀儡は本当に優秀だね。傀儡らしく給料を僕に全額渡す準備はできたかな?」

「草でも食ってろ」

「「グルルルル!!」」

春雨ちゃん達が着任しても、いつも通りの鎮守府だ。

その後は綾波ちゃんや夕張が相席してきて、個々の談義に花を咲かせる。勿論今日は出撃はしなかったが、二人の練度はかなり上々らし

い。

特に綾波ちゃんが有能らしく、攻撃に特化した優秀さを兼ね備えた彼女は、練度と功績によつては近いうちの改二実装も夢ではないと言ふ。改二にするならば、攻撃力特化の艦装が付いてくるだろうな。おっとり感溢れる彼女からは想像つかないけど。

出撃やらなんやら、相変わらず忙しくも仲間同士の友情を絆が確認できる職場でスパナを投げ合つ中、あつと言う間に二週間が過ぎた頃だった。

クソジジイ、そして決意

―中庭。

『新たに設置される課程、提督育成プログラムには既に数人が採用されており、従来とは異なり集中的な司令官育成を目標とした――』

「『ポカーン……』」

超絶スーパー万能機器、スマホ。アプリとかの機能を含めると、あの程度の事はこの端末でどうにかなる時代。

古い弾薬を丁度使い切れて、結構気持ちよく仕事を終わらせられ、のんびりベンチでようつべでも見ようとしたらニュースで、「日本海軍は新たな課程を設けた！」と発表された動画を見つける。

特別注目を集めたわけでもなく、人気動画ランキングを見てもランク外。でも再生回数はそれなりに多く、内容もその課程でどんな事をするのか大まかな説明を含めながら大将さんが話していた。

「……まさか本場に提督になるつもりだったなんて」

「どうだ時雨くん？俺様の心に嘘偽りはなかっただろ？散々俺を侮辱してきた事への謝弁を聞こうじゃないか」

「ソーリーアポロジードオロジード」

「しばくぞ」

すっかりと馴染んだ春雨ちゃんに加え、村雨ちゃんと時雨が座るベンチで談笑をしていた頃だ。

ベンチには流石に四人は狭すぎると言う事で、俺は立ちながら時雨のスマホを覗き込む。

「いや、てつきり村雨を立場で誘惑してるのかと思ったよ」

「私そんな事で男の人を選んだりしないわ！」

「そうだよ何言ってくれちゃってんの時雨くん。もし村雨ちゃんがそんな女の子だったら俺自害するぞ」

「し、死んじやだめですお兄さん！」

「うん、命かけ過ぎ」

よくよく考えてみれば、まだ発表もされてなかった内から切磋琢磨

してたのか。そう思うと気だるさが更に増す。

今までののは序の口だったんだぜ？まだ本番始まってないからさ……みたいな？

そう、本番……俺はその本番に向かうために、一度深呼吸を入れて、ゆっくりベンチから立ち上がる。

「それで、今日から海軍大学校へ通うんですよね？穴戸さん……早く戻って、これますよね？」

「春雨、すごく寂しくなります……」

「すぐに戻るよ……もうそろそろ時間だ、行かないと」

「……持っていくものは準備してあるよね？シャーペンとか消しゴムとか色々持った？」

「おいおい小学生じゃあるまいし、ちゃんと持ってるって……でも、ありがとうな」

「うん……早く帰ってきてね？村雨や春雨が寂しくて心配するんだよ？」

「ああ、きつと早く帰ってくるからな……じゃ、行ってくるぜ！」

「はい……気をつけて下さいね！」

「おうー」

そして、俺は提督になるために、海軍大学校へと足を進める。暫し……今しばらくの別れを惜しんで、鎮守府の扉をくぐり抜けるのだった。

―自室。

「おかえり」

「ただいま。君たちは俺の部屋で何をやってるのかな？」

「穴戸さんの超高性能パソコン使ってるんだよ。次の休みに何を買うか迷ってる」

「ごめんなさい穴戸さん……」

「モーメントだよ村雨ちゃん」

学校から日帰りで帰ってくる。正確には海軍兵学校からだけど。蘇我提督に言われて行った海軍兵学校は、鎮守府からタクシーで10分の所にある。日本海軍創設ぐらいからあるので、かなり由緒正しい学校であり、軍事基地としての機能も備えてあるハイブリッド学校。

そこで新人の勧誘に成功したらしい結城と一緒に、大学校の授業内容と教科書を渡され、読み終わった瞬間にテストが出ると言う極めて酷い目にあつた。しかも読んでいた教科書とは内容が異なるとはこれいかに？

まあテストの内容は勅令と憲法に関する簡易的な問題だった為、初っ端からつまづくことはなかったけど、とんだサプライズだぜ。

授業を監督してた人は「悪いわるい、驚かせてしまったね！」とか抜かしやがる。血管の弱いヤツだったら緊張による高血圧で脳出血不可避。

ともあれ、抜き打ちにも程があるテストで80点以上取れたのは確かだ。既存の教科書から上乘せする形で貰ったクツソ分厚い教科書を元に、法律や軍法関連も始めるらしい。

因みに授業の監督……一応先生は、提督経験のある校長先生だった。

後に、東京にある海軍大学校へ通う事になるが、それはまだ先になるらしい。

何故かつて？そんなにすぐ始まるわけねえだろ、とのことだった。まあ何の前触れもなしに東京行きが決定したら、それこそサプライズだけ。

その間は入試を上位合格レベルにして、大学校で学ぶ事になる科目を平行して覚えていく。

軍学校と言えぱり身体測定や運動能力の有無、そしてそれらを維持するための訓練が強いられるけど、その辺は働きながら勉強してるから省かれるらしい（後に、俺は体力試験に行かせられ、山を35分間を目標に登り降りすると言う地獄を味わった）。

学校に入れば勉学に集中するために、元いた仕事を離れて勉強、及び体力作りと精神鍛えまくる訓練に勤しめる上、給料まで貰えて学費はタダ。条件が良いように聞こえるけど、入るまではただの海軍軍人なので、そんな凄い優遇を受けるのはまだ先の話。

例え有望な提督として認められていても、やる事やるまでは特別扱いはしない……と言う事だろうか？既に結構色々やってるんですけど俺？詐欺に遭ってる気分だ。

「プログラムに参加させてもらったのは光栄だけど……それより村雨ちゃんと春雨ちゃんはなんでベッドの中にいるの？」

「ちよつと遊んでてっ、つい入っちゃいました。だめ……でしたかあ……？」

「は？いいに決まってるでしょ」

俺の布団をクルクル二人で体に巻きつけながら、春巻きみたいになってる。頭だけ出してる二人めっちゃ可愛い。二人共ヨシヨシしたいぐらい可愛いけど、そんなことしたら流石に事案となるので心を沈めて衝動を抑える。

そう、今の世の中何があるか分からないんだ。二人をそんなクソアマだとは到底思わないけど、中には「くん」付けで呼ぶだけでセクハラ扱いするアバズレがいると聞く。お金持ちを目の前にしたら例え肉奴隷と言われても笑っていられるくせにな。

疲れ切り、寝転がる村雨ちゃんと春雨ちゃんの隣にどっしり座り込んだその時だった。

「……？穴戸くん、ノーパソにメール届いてるよ」

「誰からー？」

「……病院からなんだけど」

「え？」

座った瞬間に立たされる気持ちは一言で表すと、ダルい。

しかし、唐突であり意外な言葉を聞いたからには立ち上がりにはいられない。見たいけど起きるのダルい……と言う矛盾だが理に適ってる感情の間は誰しも経験した事があるはずだ。

その時雨の言葉に興味を示した妹二人も立ち上がり、みんなで机に

向かう時雨の後ろから覗き込む。

「メール開けていいの？」

「うん、架空請求のメールとかあるけど無視してそれ開けて」

「なんでこんなに架空請求が……どっか変な所に登録したの？」

「は？ テメエ俺がエロいサイトでも見てると思っただか？ ば、ばばか言うんじゃないぞ貴様ア！」

「……………」

「じゃあ、こっちの登録確認メールのリンク先、クリックしてもいいんだよね？」

「え、あ、その、それは違うからッ」

「えいー」

無修正動画まとめサイト！主に清纯派女優から〇りまで、幅広く取り揃えております！1位、〇りすぎる処〇が隣のおじさんにお誕生日プレゼントと言いながら部屋に連れ込まれ……2位、あの大人気清纯派美少女アイドルがついにビデオ出演!? フィニッシュは大量中、

「……………」

「……違うんだよ。ほら、結城がさ、勝手にさ」

「なんでもかんでも人のせいにするのはいけないことだって、教えたのは穴戸くんだよな？」

「……うん、ごめん。ただ一つ断つとくけど、俺にも一応性欲はあるんだ。疲れた漢の心のリラクゼーションに最適な効率を図ってくれるのがこれだ。ほら、俺タバコとかお酒とかギャンブルとかやらないじゃん。心の抛り所って誰にでもあつてさ、これまでにない心地よさを覚えたら依存してしまうのが人間なんだ。俺はただ、人間が抗えない三大欲求の一つである性欲を、その抛り所の『一つ』にしているだけで、これは水面下で全ての漢が経験する至って正常な行動、行為であり……」

「じゃあ病院からのメール開けるよ」

「あ、はい」

三人が……それはもう雪女みたいな目で俺を、かたーくかたあーく、凍らせるのだった。性癖が暴かれたってわけじゃないけど、そう

いうサイトに行っただけではなく登録までした事が、一番引かれる原因なんだろう。

いや、消される前にさ、保存とかさ、した方がいいしき。

「……私なら」

「え、ど、どうかしたのかな春雨ちゃん？」

「あ、いいえ！なんでもないです！」

こんな可愛い娘達の前であんなサイトを見せてしまうとは……今度からは素直にエロサイト登録しましたと言っておこう。

「これなんだけど」

「ん？これって結構近くの病院じゃん」

「福井県の病院だね、京都府内にいる僕達が奈良に行くより近いかも」

「それで、内容は……」

「えつとね……え」

「……え」

俺のジジイが、病院に運ばれた。

―病院。

「って決まり文句でぎっくり腰報告させるのやめろ」

「ほっほっほー！これぐらいのドツキリは勘弁せんかい！ワシに孝行もせんで仕事ばかりしている罰じゃ」

「ハア？年金貰って、それで給料もそっちに入れてんだから大人しく家政婦でも雇え」

「五月蠅いわい！ワシはまだ現役じゃ、自分で動けるうちは自分で動くのが道理じゃわい、のう春雨ちゃん？」

「え？は、はい！とても素敵な考え方だと思えます！」

俺の爺さんはとても元気だ、なんでかわからないけど。バアちゃんが他界してからはジジイ一人で家を管理している状態だが、この通り元気だ。昔は海軍軍人だったらしく、80後半の長寿の秘訣なんな

のだろうか？日本人ってこういう長寿な人結構多いんだよな。

でもジジイが軍人って事は、俺も一応軍人家庭って事になるのかな？

「本当にめんこいのう〜ワシとチ〇チ〇遊びどうじゃ？」

「死ねよ」

「育て親に向かってなんと言う口を聞くんじゃ!!」

いや、春雨ちゃんじゃなかったら誰でもそう返すと思うけど。

春雨ちゃんは、出撃がないので一緒に付いていく！と聞かなかつたので連れてきた。ご挨拶したいと言ってたけど、いやしくなくていいから。

「それで龍城よ、今はどうなんじゃ？ちゃんとやってるか？提督になれるか？」

「ちゃんとやってるけど、提督になるにしてもまだ先の話だぞ。そんなにすぐなれるわけねえだろ、何歳だと思ってんだよ俺を」

「これだから半人前なんじゃ」

「クソお祖父様よりかは階級上でしてよ？逝けば二階級特進で追いつけるかもしれないぞクソジジイ、試してみる？」

「グルルルルツ!!」

「あ、あわわ、お兄さん！他の患者さんもいるので二人共お静かに！」
「すまねえ……」

ジジイによると、舞鶴まで来ようとしたが、流石に長時間の移動は体に無理をさせたのかぎっくり腰で入院する羽目になった。

少しでも良くなったら家に帰ってもらおうと思う。ナスさんが結構嫌な思いをしていたらしい……エロ爺とナスさんの組み合わせで起こる現象は、だれでも想像付くだろう？

「それよりナスさんにセクハラするの本当やめて、俺まで変な目で見られるからさ」

「五月蠅いわい、セクシャルヴァイオレットミコミコナスじゃわい」
なんでテメエが知ってるんだよ。

ナスさん達には、案の定凄いセクハラしていたらしい。いきなり気持ち悪く抱きついたり、「わし、イ〇ポじゃからそのエツロイ身体で

建て直してくれんかのう……この眠れる龍をツ」とかほざく。

最終的に、「わし、まだ子供作れるんじゃないよ?」とか言いいながら若くて可愛い患者さん達にもちよっかい出す、典型的なクソジジイだぜ。

「まあいいや、行くよ春雨ちゃん」

「え、あ、はい!」

「ちよつと待たんかい!久しぶりに会った祖父へもうちよつと孝行してくれてもバチは当たらんだろう!」

「んくそうだね、でもほらナースさん達居るじゃん。俺からのサービスと美人ナースさんからのサービス、どっちがいい?」

「ナース一択じゃろうがい」

「だよね、じゃあお大事にな」

「おいしいいいいい!!」

―街。

「疲れたわい」

「本当に大丈夫なんですか?」

「近いんだし急用があればまた呼んでくるだろ、今はちよつと忙しいんだからジジイに気力使ってる場合じゃない」

「そう……ですよね」

「……………」

惜しみげな春雨ちゃんの目線の先には、カップルがいる。イチヤイちゃしながらクレープ一つを分けて食べてる。

ふむ……長くてあと5ヶ月って所かな。何が5ヶ月かは言わずもがな。

「……クレープ、食べる?」

「え、いいんですか……?お勉強の方は……」

「息抜きも大事だろ?何事も効率とタイミングだし、今からプチデートって……俺とじゃだめかな?」

「い、いいえ!そんな事!全く!全然!問題ないです!嬉しいですよ!!!」
「そ、そう?そう言われると嬉しいけど……じゃあ食うか」

「はい!!」

本当に嬉しそうだな。前々から一緒に二人で行こうって言ったので、これはそれまでの埋め合わせ見たいなものだ。

勉強で忙しかった俺に気遣ってくれたのだろう。

ジジイの見舞いのついでに感が半端ないけど、喜んでくれている春雨ちゃんを見ると救われる……流石は天使村雨ちゃんの妹だな。天使の妹も天使なんだ。

「あむっ……んくく!!おいしいです!」

「そりゃ良かったよ。おれも春雨ちゃんと一緒に食べるとより美味しく感じるよ」

「も、もうお兄さんたら……」

「ハハハ、おれも少しは臭いセリフとか言ってみたりしてな。こうしてると、色んな事忘れられるぜ」

「……………」

「……………どうしたの?」

「いいえ……………」

会話にインターバルを挟み、俯く顔をこちらへ向けて口を開く春雨ちゃん。

「お兄さんは……本当に東京へ行かれるんですか……?」

「ああ、行くよ」

「そ、そんな……………」

「まだ少し先の話だよ。うちの提督もそろそろ変わって、新入りたちの先輩……俺たちも転属する頃だから、丁度いいんじゃないか?新しい世界も開けるかもだし、一人のキャリアとしては十分だと思うけど」

「……………春雨は、お兄さんと離れたくありません」

「俺もさ。ここの奴らはすげーいい奴らだし、鎮守府の奴らも後に黄金期って呼ばれるかも知れないほどのモノを持っている。俺は、東京で提督になって、きつとまた春雨ちゃんたちに会いに来るから。それまでは、なっ!」

「……………はい……………」

少し泣いてる。俺と離れるのがそんなに嫌なのか……本当に可愛いな春雨ちゃんは。時雨や村雨ちゃんの事もここにきて、記憶がぶり甦る。

でも、一度やると決めた事は意地でも貫く。それが例え勢いまかせがキツカケだったとしても、そしてどれほど過酷な道のものであるとしてもだ。

「……そろそろ戻ろうか春雨ちゃん」

「はい……」

そう言っつて、俺たちは鎮守府へと足を運ぶのだった。

「……付いていきます、みんな」

海軍大学校編

いざ行かん、東京へ

数ヶ月、或いはそれ以上が経った。現役である俺は地獄の体力試験をクリアし、筆記試験も一応合格した。プログラムへ参加するとは言っても、入試もできないほどの学力では拒否せざるを得ないので、入試は普通に受けなくてはいけなかったのだ。

学生の意表を突く難しい問題が多かったのでかなり苦戦はしたが、それ以外は別段問題なかった。因みに、海軍大学校は英訳されるとネーヴァル・カレッジ、そして大学と付くが、実質的には大学院レベルなんだぜ？

フツ……まあ、俺なら当然さ……なんて言わねえ素直に嬉しいイイ！兵学校時代の同期に一斉送信で「俺様、あの海軍大学校に行くけどなにか質問ある？」ってスレタイみたいなメール送って茶化してやるぜ。

平行してやった授業内容は既に頭に入っているため、きっと普通の生徒と比べれば圧倒的な優位性を誇る。

俺は晴れて、東京へと足を進める準備が整ったのだ。

「元気でやって下さい副班長……いいえ、宍戸大尉！」

「寂しくなるが、元気でやれよー！」

「おうーみんなも元気でなー！」

見送りに来た数人は班長を含め、俺がよく知る数名の古株だ。新たに入ってきた新人達――そして新しい提督とは違う、俺のことをよく知る戦友たち。

その中には、

「元気でいて下さい兄貴！」

「おう……漢のなんたるか、すっかり俺の背中で学んだか？」

「はいー俺もいつか兄貴や姐さんみたく、大きくなって見せますー！」

正直あの後どうなったか分からねえけど、元気にしてるんだったら

大丈夫か。問題はもうないだろうし、この鎮守府の新しくなった副班長の補佐も完璧にできるだろう。

「おうー……それじゃ、言ってくるぜお前ら!!必ずビッグになるからよオ!!」

「はい!!」

そして、俺はいよいよ本格的に東京、ひいては海軍大学校へと足を踏み入れる。

―学校付近。

入学式が盛大なものだった。数年の軍事的教育を受けた音楽隊はかなり精密な動きを見せた。そして緊張感の中ぐり抜け、お決まりの軍隊歩きで壇上に向かった先にはあの大将様がいた。

斎藤中将やこの国のお偉いさんや海外の将校とかもいらっしやつて、それはとても……なんて言うか、その、やべえ!って感じだった。俺、胃が仰天しそうだったゾ。

でも、全て終わった(まだ何も始まってない)。これで俺は晴れて、育成プログラムへと参加できる。

目の前にあるデツカイ建物は、横須賀第四鎮守府……ではなく、第四横鎮のとなりに建設されている、ピカピカの校舎。

海軍大学校の一部ではあるらしいけど、東京じゃなくて神奈川県なんだよねここ。

提督育成プログラムに参加する数十名がここで大将と中将たちが定めた、提督に必要な確たる教育を受ける……らしいのだが、ここには誰もいない。みんなは一体どこへ……?

「おに……さあ……んっ!!」

「ゴフツ!!って、春雨ちゃん!?異動先ってここだったの!」

「はいそうなんですっ!…会いたかったですっ!!」

猛烈なタツクルのあと、胸元に頬を擦り付ける春雨ちゃんを必死に剥がそうとするが、この強靱な腕力はどこから出てくるのだろうかと

問いたくなるほど強い力で束縛されてる。

そして、よく見るとここは俺が隣にあると言っていた横須賀第四鎮守府そのものだった。始めてくる所でお隣さんと間違えることなんて良くあるよね。

「ししどきあゝゝんっ!!」

「ゴフツ!!」

そして豊満なモノでタツクルしてくるのは、よく見慣れたツインテールととびつきりの笑顔を振りまく鎮守府のアイドル的存在――その名は村雨ちゃん。

春雨ちゃんもタツクルの衝撃を受けたのか、少し白目になっていた。そして、多分俺もなつてた。

「おやゝ？ 僕のお財布はやつと持ち主の所に帰ってきたんだね？ 手土産は勿論持ってきてくれたよね？」

「はげろ」

「グルルルル!!」

時雨までいる。

舞鶴第一、第二鎮守府、そして港湾では異動が実装された。

新人も入って、それ等がまた新たに入ってきた隊員達の先輩となり、導いていく……組織は永遠にトップを置いていくわけではなく、昇進とか左遷によって地位や役職が変わることがあるのだ。それが大本営の希望であれ、本人の意志であれ。

時雨たちは、俺が海軍大学校へ行く前に、村雨春雨ちゃんと共に異動したのだ。どうせ俺は東京行きだし、離れ離れになっちゃうのは同じなので止めはしなかった。

俺たちの提督だった蘇我提督は少将へと昇進して、異動人事命令を受けて古鷹と一緒に他の鎮守府に行ったが、

「おお穴戸くん！もう時雨くんたちと会っているとは……」

「お久しぶりです穴戸さん！」

「て、提督！それに、古鷹まで……」

多分偶然じゃないけど、運命的なものを感じる。蘇我提督は大規模作戦の功績を認められ、精鋭集う横須賀鎮守府に配属された。

時雨たちは別件で配属されたと思うけど、舞鶴のOBがこれほどまでに集うのは俺も嬉しい。それが、これから俺が勉強と汗と執念を掛けて過ごす事になる海軍大学校（の一部）の隣ともなれば、俄然テンションが上がりまくる。

感覚で言う和学校が家から凄に近いみたいないな気持ちだ。正式にはこここの所属ではないので、横須賀第四鎮守府からは部外者扱いだけだ。

「それで、そちらの方は……」

「古鷹の妹、加古ってんだー！よろしくうー！」

「おりや穴戸ってんだ、よろしくなあ！つて事は、蘇我提督の……」

「ああ、その通りだよ」

なんてこった、まさか二人目がいたとは。

彼女は加古と言って、重巡クラスのビッグな艦娘だ。古鷹とは打って変わって……そして見ての通り、とてもファンキーな女性らしい。

長い前髪、全体的に細い身体と、それにより目立つ高身長……メタルバンドとかにいる女性ギタリストかボーカリストのそれっぽい。ライブハウスに居たら典型的過ぎて逆に目立たなくなるタイプ。

しかし、これほどの美人だったらライブハウスへ行く価値あり。

元々この鎮守府に配属されており、提督たちが追う形で合流されたらしい。

「再会を惜しむ気持ちは分かるが……穴戸くんは先に学校へ行かなくてはならないのではないか？」

「ああそうだった！じゃあみんなまた後で！」

「穴戸くん！僕のお土産は!?」

「俺の顔を拝めただけでもお土産でしょ！」

「殺すぞー！」

時雨たちと別れ、俺は、今度こそッ、大学校への一步を歩むのだった。

ー海軍大学校。

「ぜえ……ぜえ……道は間違えるもんじゃねえなオイ！」

「おいおいどうしたんだ穴戸！待ちくたびれたぜ！」

「俺のこと、待っててくれたのか……？ホモカップルだと思われたくないからいいのに……」

「待っているだけでホモオ……とはたまげたなあ……つーか、集合時間にはまだ5分あるだけだア!!」

今度こそ本当の学校だ。

見渡してみると数十名……目の前に置かれたら結構な数だと認識できる将校たちが、お互いに談笑を交わしていた。

これからプログラムを共に歩みを進める人達なんだろうけど、変な緊張感のせいか何だか話しかけづらい。階級は准尉、中佐など、かなりバラけた人選となっている。

これ等をどうやって提督にするのかは発案者様に任せるとして、これらが全員提督になると考えるとちよつとゾツとするかも。

筋肉マンみたいなやつから、ルシファーに選ばれし鮮血の指導者……みたいな髪型したやつもいる。髪切れよ。

そして中には、

「こんにちわ、もしかして君もこの大学校に？」

「あ、そうなの！グーテンモーゲン！」

うっほ、金髪碧眼のロリ巨乳じゃねえか！正に日本人男性が憧れるが大抵は手の届かない星であり、同人誌の格好の的みたいな人がそこにいた。

グーテン……って事は英語じゃないのか。なんだっけ、オランダ語？

「おいおい抜け駆けはよしお君だぜこのムツツリ野郎！すげー可愛い金髪碧眼の美少女がいるからって速攻口説きに行っちゃアなあ？」

「ば、ばか！俺はただ美人に目がないだけだ！」

「素直じゃねえか……」

「ふふっ、私の名前はプリンツ・オイゲン、よろしくねー！」

「タツキ・シシドだ。学友として、これからよろしくな、プリンツさん」

「俺はシンジ！ユウキ・シンジ！ナイスツウーミートユー！」

「あ、あはは……できればオイゲンでお願いします」

欧米流の俺の挨拶パクんじゃねえよ。

プリンツ……じゃなくて、オイゲンさんは、どうやらドイツから来た艦娘らしい。

彼女のような海外からの艦娘は通称で「外国艦」と呼ばれている。日本海軍には、外国艦の所属率が極めて高い所があつて、呉鎮守府近くの柱島泊地がそれに当たる。これを通称「外国艦鎮守府」と呼ばれて、凄い成果を上げていたりする。

その凄い成果の例として、俺が補佐した大規模作戦時に圧倒な撃破数並びに、強化兵的なエリートシップをバンバン蹴散らした事によつて営業成績ダントツ一位に輝いた鎮守府である。

それ故に、外国人部隊とか最強多国籍軍とか言われてるけど、俺はそこまでしか知らない。

そして、そんな化物艦隊の艦娘だと言うのだから、驚きである。

「それでね、私達の提督……ああそれとみんながすごく優しくてねー」
「……………」

そしてスゲー話してくる。主に話す相手が居なかつたらしく、その反動なんだろう。

外人をなんとなく疎外してしまう日本人の集団的意識は良く話題にあがるだろう。これは特色ではなく、保守的な国なら誰しもが持つものである。海外との貿易が盛んとなりグローバル、オープン思考を根強くする経済的な観点から見た日本としては、少し矛盾する所もあるけど。

でもオイゲンさんが話すのつて、主に自分の提督と……あと同僚の艦娘達が優しいとかそう言う話で、話すペースにちよつぴりダルさを感じる。みんな話しかけないのは多分これが理由だろう。

でも、話すたびの揺れるプリンを拝めないとは可哀想だな。エリート思考なのか？それとも俺は金髪美女に興味ないからの空振りアピール？

なんにせよ、オイゲンさんは色々あざといな。春雨ちゃんといい勝負じゃねえか。

『皆良く集まってくれた。まずは入試合格おめでとう、流石は我々が
見込んだ海軍軍人だ……と言っておこう』

唐突に表れた荒木大将、そして齋藤中将のお二人方。俺たちは一斉
に並んで、背筋をピン！と伸ばす。これは上官が来た時の、軍人特有
の条件反射である。

話しているのは齋藤中将ではなく、大将である。饒舌で話していま
すけど、目に隈ができてるってことはお変わり無さそうですね大将閣
下。良かったよかった。

でも話す内容は学校で必要な事や、これから受ける教育、学生時で
の禁止事項など、要点を押さえた事だけなので、話し終えるまでに五
分もかからなかった。

運動会とか始めるときに、先生達のクソ長い挨拶のせいで膨大な時
間立たされると聞いたことがある。これから身体動かそうって時に
さ、立たされながら長話されると凄くストレス溜まるよね。

「……話しは以上だ、齋藤中将」

「はいッ……ではこれより、学内を案内しよう」

中将自らが案内をしてくれると言う凄い待遇を受けて校舎内に入
る。

中は、かなり新築感ある作りとなってる。子供が入ればその清潔感
からはしやぎ回って、親からゲンコツを喰らうまでがテンプレ。

今の時代でそんな事をすれば、ドメスティックバイオレンスで訴え
られるけどね。子供は責任を逃れるために、政治家みたいに言葉を巧
みに選んだりするからなーそれが悪い事だと知らないし、事実上教
えられないのが難点だけだ。

そんな現代社会への異議を唱える会話を、結城やオイゲンさんと共
にしながら歩き、そしてとある一室へと誘導される。

「最初の二ヶ月は基本的に大学校の生徒と同じ教育を受けてもらう
よ。しかし、身体を動かすような事は最小限に留める代わりに、彼ら
よりも早いペースで物事を覚えてもらうが、いいかね？」

「ハッー」

なんで質問系なんだよ？今更断れるわけないじゃん。一応断って

おいた、と言う口実が必要なのだろうか。オイゲンさんなんてブルッてるじゃん。

こうして、数十人の同志達と共に歩む提督となる道へのレースが、切って落とされたのだった。

時雨達の姉

「タダイマ」

「おかえりなさい」

「頑張ってるみたいだけど、提督への道は掴めそう？」

「海軍刑法第二編ダイサンショウ、ダイサンジュウゴジョウ、シレイカ
ンガヘイジセンジトワズ、シヨクムヲトウヒ、イキスルコトハ、キン
コケイガイイワタサレル」

「……頑張ったみたいだね。うん」

また数ヶ月が過ぎた。

横須賀第四鎮守府の寮内を使用する俺たち生徒は、学校が終わると
すぐに帰ってきて、食事の暇を惜しんで勉強に打ち込む。

軍事刑法、戦時特別刑法、戦時刑訴規則、日本法典、事実報告、秘
密保持、下士官・兵士戦時昇進規定などを勉強して研究する。

金曜日には期末テストを行って、雪だるま式にその知識を埋めて
いった。

他にも、指揮官の心得、教育者・教練者心得、対下士官・対兵士勤
務計画作成、将校および一般社会における将校の態度、部下に対する
指揮官としての将校心得、国民に対する将校心得等など、様々なライ
ンナップとなっております。

お陰で俺の覚えた事が口から勝手に垂れ流しとなっている状態
である。

提督候補たちの全員が順調に追いついているわけじゃないけど、大
将の鑑識眼が正常に運行しているのか、テストで良い点を出せなかつ
た生徒はさらにペースを上げて打ち込んだ。

でもそれは、地獄を乗り越えた証であると言える。ここからお勉強
のペースは少し下がって、研究重視と研修などに偏る事となる……と
言っていた。確か次にやるのは安全保障学だったな。

期末テストを終えた俺は、時雨春雨ちゃん村雨ちゃんの三人が遊び

に来ている自室のベッドにダイブする。

「……よし！これで多分もう終わりだろ!?もう終わってる！（伝説）クソがア！なんで俺がこんなお勉強箱にならなきゃいけないんだよオ……もう何かする気力も起きねえよオ……！」

「宍戸くんがやるって言っただんでしょ。あ、このドレスとか可愛くない？」

「私はこっちのほうが好きかも。スカートが短すぎるのはあまり……」

「え、なんで？ああ、でも確かにそうかもね。村雨ちゃんがそんなクソエロいミニスカニーソ履いてたら、サキュバスかと思って俺っち催淫されちゃうかも……」

「僕の妹を汚そうとする汚物は成敗!!」

「うお！いつもながらアブねえぞ時雨！健全な成人男性の反応に対して汚物とはなんだア!!俺に詫びろ！」

「どうせ胸しか見ていない宍戸くんに、そんなこと言われる筋合いはないよオ！」

「パイパイ、下らない喧嘩はそこまでだ」

「ああん？」

有名だが下らなすぎるセリフで場を和ませようとした結城には悪いが、そのセリフ凄くアホだと思う。

村雨ちゃんは、自分（胸）の話題となつて盛り上がった事が恥ずかしかつたのか、俯いて顔を赤くしている。

「……まあ、それだけ元気なら何よりだよ。二人共本当にご苦労様」
「時雨から労いの言葉を授かるとは光栄だな。まあ今ミイラになるわけにはいかないからな」

「ミイラって、アレの事ですかあ？」

学生である身分、一人一部屋と言う待遇は受けず、大抵は二人で部屋を共有したりするのが一般的である。しかし、俺たちの課程では何故かスリーマンセルで行くらしい。俺のルームメイトは結城……：…：…：…
してもう一人、意外な人物が俺たちと苦楽を共にする事となった。

そう、それは正に春雨ちゃんが指す先にある、ヤツだ……：…：…一応まだ

生きてるから指さすのはやめてあげようね春雨ちゃん。

「大丈夫ツスか中佐？」

「ア……ダ、ダイジヨウダアア……」

なんかゾンビみたいツスね。

元陸軍第16師団第20連隊隊長、斎藤中佐。部屋隅っこで垂れかかっているこの人は、最初来た時は話し掛けられるまでは存在自体気付かなかったけど、居たんだなこれが。

深海棲艦の到来や時代の煽りを受けて、陸海空を跨いでシフトチェンジする人も増えたので、今じゃ所属を変えることは珍しい事じゃない。だけど中佐及び連隊長って立派な役職を得て変えるのはかなり珍しい。

俺との戦いの後、突然後天的に妖精が見えるようになり、意思疎通もできるようになった彼はすぐに提督への道を歩み始めたのだとか。

中佐ってポストだけに、一から試験やらなんやらを受けて、詳しくはわからないけど面倒くさい事色々して、自力でプログラム参加に合わせたのは最早敬意を通り越したドン引きレベル。主人公かよコイツ。

実は海軍へ行きかけたのだが、妖精が見えなかったので断念したとのサイドエピソードも本人から聞いた。普通の海軍に行けば良かったのに。

でも、そんな彼に劳いの言葉を掛けるのは俺だけと言う不遇ぶり流石に可哀想……ああいや、部下を躰けられないようなお勉強箱には、丁度いい薬なのかも。

「本当に大丈夫ツスか？この指何本に見えます？」

「ア……ソ、ソレハ、コクボウリネン、ノ、ホンジヤナイカ……ハ、ハハハ、ヨシユウハ、キサマヨリ、ハヤク、スマセタゾ……ハハ」

あ、これはもう大丈夫ですね。うん。まあ本気でヤバイなら誰かに看病頼もう。

「明日は休みだし、久しぶりの東京見学でも行こうか……」

「え、休まなくてもいいの？」

「今はちよつとしたインターバルだよ。休める時には休むけど、俺は

少し遊ぶ事を選ぶね。体力は消耗品じゃないんだし、寧ろ俺はダラケる事に慣れる方が余程怖いぜ」

「凄くカッコいいです！宍戸さん（お兄さん）！」

「ああ、いや、それほどでもないけど？むふ、むふふふふ」

「キモ。あ、でもカッコイイからお願ひ一つ聞いてくれる？」

キモいけどカッコイイ（哲学的オクシモロン）。

「また脂肪増幅薬が欲しいの？」

「違うよ！ほ、ほら、あれだよアレ！村雨や春雨はもう行ったからさ」

「ん？ダイエットブーツキャンプ？」

「デリカシーのカケラも無いの君ハア!!？」

「痛テエエツ!!！」

斜め45度は、日本刀が最も威力を出す角度である。時雨さんのシグレチョップは、動脈が波打つ鎖骨の上の辺りに命中して……痛い。

これで気絶できたらいいんだけど、漫画みたいに気絶しないんだよこれが。首チョップで気絶って神話は何処から出てきたんだろう？

「東京！病院！僕達！これで分かるでしょ！とにかく明日行くからね！」

強引にも、明日の予定は時雨によって決められてしまったのだった。行くつもりではあったので、別にいいけどね。

ー病院の一室。

日本の中心地として、あらゆる分野の最高峰の集結地ーそれが東京。

東京にあるとある病院。古い歴史だけじゃなく、人の命を救うための最高峰の技術が取り揃えられている場所、それがここだ。

国が定めている超高額な治療代で金銭的な潤いを保ち続ける病院ー特に、癌治療などは金銭的にかなり病院側に利益を与えていると聞くが、そう言う金が税金として徴収されてそれが海軍の活動源だと言われると、複雑な気持ちになった事がある。

そんな時は大抵、国会で寝て温泉旅行するだけ俺の数十倍は貰って

る政治家達と比べれば、国防つて役目を果たしている海軍として寧ろ誇らしく思う。

俺はここに数回来ている。来坊の理由は様々だけど、今回は時雨の姉妹絡みで来ている。

窓際にて、姉妹達に囲まれながら和気あいあいとした雰囲気を作り出す、一人の女性がいた。

「ほらほらみてみて！あたしがいつちばあくくくん！姉妹の中で背が高いんだから！」

「ははは、そうだね、うん」

「ん？なに笑ってるのかなく時雨？あたしの審査基準に何か文句でもあるのかなく？」

「いや、姉さんは相変わらずおバカだなんて思ってる」

「はいクロスからそこ横になつて〜」

「はは、ははは」

俺、村雨ちゃんと春雨ちゃんは、ベッドの上でいつちばーん強いチヨークスリーパーをかけられている時雨を助けられず、ただ苦笑いするだけだった。確かに白露さんだけ爪先立ちオツケーなのは異議を唱えざるを得ない。

白露さん……彼女は時雨達姉妹の長女であり、俺としては一応先輩に当たる人だ。時雨の姉妹だけあつて美人だが、凄く取っ付きやすく人懐っこくて、周りをとつても和やかな雰囲気にしてくれる人だ。

時雨はあんな事を言つても、彼女を姉として深く尊敬している。

それは春雨ちゃんや村雨ちゃんも、そして、

「相変わらず元気っぼくて何よりっぼい〜！」

「本当に元気が尽きない人ですね……あ、こ、これは別に、元気なのが駄目つてわけじゃー！」

「分かつてるよ五月雨ちゃん。それにしても、暫く会わないうちに横須賀に配属されてたんだね二人共。特に夕立ちちゃんの活躍は色々耳にしているよ」

「一軍っぼいー！」

「あ、って言うことは、私は三軍……」

「ぽい、これでジューズ全員分買ってこいっぽい」

「え、で、でも、これ10円……」

「は？それぐらい自分で考えろっぽい、だから三軍扱いなんだっぽい。はよ行かんと弾薬にするぞっぽい」

「ひ、ひえええええ……!!!」

などと、茶番を繰り返しているのは四女の夕立ちちゃん、そして六女の五月雨ちゃん。二人共、今は横須賀第二鎮守府所属だ。

夕立ちちゃんは駆逐艦としてはかなり凄い成果を上げている。正確には何が強みなのか云々はあまり聞かされていないが、夕立ちちゃん自身の口実では「重巡クラスの火力はお手の物っぽいっ！」と言っていたので、ゲーム風に言うのと攻撃力が強いのかな？

そんな夕立ちちゃんと同じ釜の飯を食う五月雨ちゃんは、艦娘としては特に目立った所はない。

少しドジっ子だが、そんな彼女でも秘書艦として立派に業務を成し遂げているのだ。

「それにしても穴戸くんが来てくれるなんてね〜！妹たちからは何時も話題に上がるスーパースター！隅に置けないね〜、よ！色男！」

「白露さんにそんな事言われたら、俺本気でそう思っちゃいますけど？」

「本当の事だからいいのいいの！」

結構前からの知り合いでもある白露さんは説明不要の元気体質。そんな彼女との待ち合わせ場所は何時もここの病院だ。

理由は、彼女の右脚と右腕にあった。

艦娘として活躍されていた彼女は、深海棲艦との戦闘の最中に大怪我を負うーそう、右腕と右脚を失う程の大きな怪我だ。

奇跡的に一命を取り留めた彼女は、もう艦娘として復帰できないかとも思われたが、国によってチャンスを与えられたのだ。

そのチャンスこそ、いま白露さんの体の一部として機能している義手と義足である。

従来 of 義手義足より遥かに柔軟な動作を可能としたバイオエレクト

トロニクスの最先端——胚性幹細胞を遺伝子操作して作り出した人間の手足と同一の生体部品を神経と繋ぎ合わせ、欠損前と変わらない操作性の実現を現実の物とした。

と、専門的な言葉を述べられた事があるけど、全然分からなかった。まだ試験段階らしいのだが……いや、であるからこそ、テストパイロットが必要なのだと言う。元々艦娘だった事もあり、これらの維持費、治療費等などは全額国が負担して、特定のレストランやゲームセンターなどの施設が無料で使用できる白露さん。

ある意味羨ましいと言う奴らも居たが、流石に不謹慎だ。時雨たちは、姉がこう言う経験をしているから、艦娘になって戦うことは消極的なんだろう。

でも、今の白露さんを見れば、あまり暗い気持ちにはならない。ただほんの少しきこちなさがあるけど、全然元気に動いてるもんなこれが。

「時雨く？姉は労るものだよく？なんで穴戸くんみたいにお土産を買って会いに来るって選択肢を省いたのかなく？」

「い、痛い痛い痛い！よ、横須賀に来たときもあげたじゃん！そんなに必要ないでしょ太るよ!？」

「上納品は病人の唯一の楽しみなんだよオ!?!コオブラアツイストオ!！」

「痛タタタタア!!助けて穴戸くん!!」

「アーイタソー」

「後で覚えてろオオ!!」

甘いものが好きなのは女の子の特権!とかいいながら東京BANANAを食った白露さんには「そんなに食べると糖尿病になりますよ」って言ったのだが、一睨みされて、目を逸らしてしまった事がある。

俺はそんな彼女に糖尿病の恐ろしさを伝えるアメリカのドキュメンタリー番組「ダイアベティックシンドローム」を見せた所、糖を制限し始めたのだ。

コーラはオリジナルからゼロへ、おやつは甘味から煎餅へとシフト

チェンジした。まあ病院からメニューを強制される事がほとんどらしいので、実際に食べる物と言うよりは、病院食へのモラルを保つ為の教養を与えたのだ。

「チツ……歯ごたえのないヤツだア……」

「大丈夫か時雨？」

「アツ……サーロインステーキになりそうだった……」

「どんな例えだよ？つーかサーロインステーキってどんなのだった？」

「脂身と弾力の多いお肉の事です！」

「ありがとうサミペディア。いい弾力と脂肪分ね……」

と、ベッドで死んでる時雨より、村雨ちゃんの胸の方に視線が行く。

「きや！ど、どこ見てるんですか！」

「あ、ご、ごめん！わ、悪いお目々だなあく！こ、この！このオ！」

「ニヤけながらやっても反省してないの丸分かりだよ？」

「仕方ねえだろ!?俺は漢だぞ!?素直じゃない男なんて漢って言えるかよオ!?!」

「男の子は素直にならないとイケナイのは私も同意見かな！素直な男の子なのに理性を保っていられるなんて、とつても素敵じゃない?」

「そうですよね！白露姉さん！」

「白露さん……春雨ちゃん……俺という漢を分かってくれるんだね……!」

「じゃあそんな素直な穴戸くんへ質問！この中でいっちなばん好きな女の子は誰!?!」

「はっ。」

The F*ck?

「誰なの？だれなの!?教えて教えて！」

「そ、それは友達として、ですか？」

「カノジョにしたい子に決まってるじゃん！ほら、男の子なんだっただらっつきり言っちゃって！」

「……………」

白露姉妹一同、一斉にこちらを凝視してくる。宴会で「誰が好きな

の？」的な質問はかなりいい感じに場を盛り上げてくれる。でも御見舞に来きた人へぶつける質問としては、少しダメかもですね。

俺は漢だ、別に答えるのはいいのだが、すげー答えづらいのだ。なんか、本気で気になってる的なオーラを出してきてるヤツがいると、何故か素直に答えられなくなるのが人間だ。時雨なんか、下手に答えたら殺す的な眼光を浴びせて来てるぜ？

ハーレム系アニメだと結構ありがちな質問なんだなこれが。こういう時、邪魔が入るのが定番だけど……来ねえな。まあいいか。

「俺は全員を幸せにしたいんだよ！みんな！俺の性欲処理ペットになる事を許してやらない事もないぞ！」

「最ツツツ低」

「夕立、準備できた？」

「オツケーっばい、肉片にしてやるっばい」

「許して」

って展開はなるべく避けるべきだ。漢らしさ、潔さ、そして素直さを履き違えると、例えそれがどれほど心に素直だろうと初代大統領ジョージ・ワシントンと桜の木みたいに行かない。

言葉を選べって事もあるんだろうけど。

っーわけで、

「村雨ちゃんかな？」

「え、ええ!？」

「やつぱり身体目当てじゃん……穴戸くん、覚悟はできてるね!!？」

「ア、オニイサンガトオクニナツチャツタアア」

「ま、待つてくれ！これには事情があるんだ!!」

ヤバイ目を向けられて釘を刺された感覚を覚えた俺は正に、蛇に睨まれたカエル状態。だが、好感度が上昇した理由を、回想と共に説明していく。

そう、あれは俺が、スカラシップを得る為に死者狂いで受験勉強するアメリカの大学生の如く、頑張りすぎて机にひれ伏してしまった時

だった。

『宍戸さあくん？居ますかあ〜？』

『グウー…………』

『つて、机で寝ると風邪引きますよ〜！もうっ…………最近、頑張りすぎですよっ』

『……………』

『…………男の人の背中つて、やっぱり大きいですね…………ふふっ、お勉強が終わったらあ…………私達のこと、いっぱいかまってくださいね…………もちろん、村雨のこともっ』

『……………』

『…………ちよつとぐらいだったら…………村雨に頼っていいですよっ？わたしじゃ、少し足りないかも知れませんが、ふふっ、村雨ちゃんに頼りたくなあ〜る〜、村雨ちゃんに頼りたくなあ〜る…………ふふふっ！』

『…………ツ』

ぐうカワ。

「まあそういう事なんだ。今は村雨ちゃんの催眠術に掛かってるから、俺は頼りたくなる村雨ちゃんとしか回答権がないのだ」

「む、村雨？本当なの？」

「…………!!あ、あの時起きてたんですか!？」

「ああ、半分ぐらい意識がなかったから、うろ覚えではあるけど」
「うろ…………!!」

激しく悶始めた村雨ちゃん。顔が林檎のように紅く染まり、手で顔を隠さずにはいられないと訴えるかのようにうづくまる。

その直後眠ったので、それまでしか知らないけど。あと正確には気絶だな。気絶するタイミングはかなり重要で、寝過ごしを防止する為に必ずこの時間に寝るって規則を自分の中で作るのだ。

軍隊ではあるあるの規則だけど、学生だと勉強しなきゃいけないの

で、破って勉強に勤しんだりしなきゃやってられないのだ。

「んん、確かに村雨は男受け良いもんね〜！完敗、私の負け！」

「やったぜ。これぞS勝利」

「いや、村雨に恥ずかしい思いをさせた事でCマイナスだね。でも代わりに穴戸くんの恥ずかしい過去を僕達に暴露してくれたらAまで上げてもいいよ」

「俺、好きだったアニメキャラに結婚してくださいって、クラスの前で告白した事がある」

「……………」

「引くなよ!!今や性的マイノリティや異常性癖を持つ大人も少なくな
いこの世の中、俺はそう言うちよつと恥ずかしい過去があるだけ！た
だそれだけ！可愛いを通り越して普通すぎるって言われても過言
じゃないだろうがア！」

「じゃあもう一つ言えば僕の図らいでSにしてあげるよ」

「俺、昔デス〇ートが好きで、半年ぐらいLさんになりきって過ごして
た頃がある。そこからテニス初めて、試合の時に長いジーンズとダボ
ダボなYシャツ着てダルそうに出場した事ある」

「……………」

「分かったから…………もう、痛いから…………」

おい、本気で引くんじゃない。ジャパニーズ男子は誰しもこれぐら
い恥ずかしい過去を持つてるもんだぞ。君たちだって恥ずかしい過
去の一つや二つあるだろうが…………それを棚に上げて引くとは、それこ
そ恥ずかしい行為ではないのかね!?

『白露さーん、そろそろお願いしまーす』

「あ、はーい！いつもの事ながらごめんねみんな！」

「大丈夫だよ姉さん、がんばってきて」

「うん、みんなも私を見習って頑張るんだぞ〜！」

「……………」

白露さんは駆け足で別の病室へと行く。病室と言うよりは研究所
みたいな所で、義手義足の具合と使用頻度、そしてそれに伴う破損や
修理の必要性を懸念したりする場所がある。

データを取って、修正点や問題点をどんどん洗っていくのだそうだ。

「よし、じゃあ俺たちも行くか……俺は久しぶりに東京見学するけど、時雨たちはどうする？」

「僕は丁度行きたい場所があったから姉さんに会ったあと行こうとしてたんだ、宍戸くんも来るかい？」

「邪魔じゃなかったらお邪魔させてもらおうかな」

「夕立達も来るかい？」

「行くつぽーい！」

「行きます行きます！」

「じゃあ早速行くか！白露艦隊、出発進行！」

「なんで君が旗艦みたいになってるの？」

大抵ギャンブルするやつは負ける

―街。

東京は凄い、色々な物が沢山ある。

『お嬢様に、ご主人様！心のオアシス、執事カフェは如何でしょうか？』

『はいと言う訳で東京ニヤンニヤンにやって参りましたーパチパチー！……ああ、ここ編集で音入れるよ？』

『テメエカ!? テメエカヨ!? エエソノクサツタコンジヨウ!?』

世界最高と名高い接客サービス、超大企業の収益システムに肖る次世代のエンターテイナー、そして一步外を歩けばキチガイに出会う確率も秘めているここは、世界経済を支えている重要拠点でもあり、世界の都市部のGDPで第一位に輝く日本の事実上の首都。

素晴らしく汚い空気と人混み、そして夜になると輝かしい程に煌めきを帯びるオトナのセカイ。

東京を出ないのに、世界の全てを知ってるみたいに見える舞う人は多い。でも無理はない、ここになんでも揃ってるからな。

「すげえーやっぱ東京すげえーやべえー！」

「ちよつと静かにしてつて！田舎者みたいで変な目で見られるでしょ!？」

「うるせえ！田舎者で結構！都会に当てられすぎて自分を捨てるよりはよっぽどいいと思うー！」

「そうですねー歩く無機物になるよりはよっぽどいいですー！」

「あ、村雨ちゃん、それはちよつと言い過ぎだと思っ……」

俺たちが立ち寄った場所は案の定ショッピングモール内の服屋さなんだ。今時ファッションに見を包んだ店員さんから声をかけられながら、悩みに悩んで選び抜く時雨たちの姿が見える。これは、女、服、のコンボが合わさった時に起こる自然現象であり、男が同行すれば軽く二時間は待たされる羽目になるので注意しよう。

ただ、いつもの三人に加えて夕立ちちゃんと五月雨ちゃん……五人は

とても綺麗で、街を歩いていても、この姉妹と歩いている俺は結構注目を浴びた。

それほどの娘たち達が、今この服屋さんにご来場なされている。店員さんもその美人ぶりに驚愕、または阿鼻叫喚している事だろうさ。変な偏見を買わなきゃいいけど。

「穴戸くん穴戸くん！このピンクのと青の、どっちが僕に似合うかな？」

「どっちも似合ってるよ」

「そう言う徹底した中立主義者みたいな意見が一番ダメなのは、言わなくてもわかるよね？」

「じゃあ青のやつなんていいんじゃないかな？」

「え〜でも僕的にはピンクのジャケットの方がいいと思うんだけど〜」

「腹ア決まってるんだったら聞くんじゃアねエヨツ!!なんで俺に聞いたア!？」

「買うモンは決まってるのに、なんで聞くのお〜？」

「ハア……」

「え、どっか行くの？」

「俺もちよつと見て回るわ、終わりそうになったら携帯鳴らせば戻ってくるからさ」

「あ、うん、分かった……」

そして、俺は時雨たちと別れ、適当にブラブラする。

ーショッピングモール。

しっかし凄い人混みだな。流石は東京と言った所か……勉強ばっかで全然来てなかったから、どんな風になってるか実は気になってたんだよね。

有名所、チェーン店以外は結構風変わりな店が多く、ここだけでも娯楽に尽きないのが、東京の良いところだ。色々な物が交わる事で多種多様な風物詩を拝めるが、逆に言えば個性を失う事となる。

犠牲の果に得た物は多く……失う物も、また多い。

例えば、

『深海棲艦は敵ではありません!! 人間に似た姿形をした、我々とルーツを同じくする同胞なのです!!』

『我々はきつと彼等と話し合えます!! にも関わらず!! 我が国は話し合えいより、皆さんが納める膨大な血税を浪費し、大義を偽りながら戦争を起こしています!!』

『真に世界平和を望むのならば、我々一同にご協力をツ!!』

常識を最も必要とする環境にいるだけあり、ごく偶に自分見失い、モラルを失う。

一言で彼らを表現しよう、彼らは動物愛護団体みたいなものだ。

どんな時代にもこう言う輩が居るんだよなあ……世界規模で起こっている深海棲艦との戦い、その中で滅びた国もあるつてのに、そんな奴らに真つ先に味方しようとするヤツが。

舞鶴にはいなかったから、実際に見てみると変な気持ちになるな。あーいうカルト教団は、今は抗議活動程度で済んでるけど、過激派と化したら日本赤軍みたいな事にもなりかけないから真つ先に潰すかしないとダメなのよね。

でも日本だって馬鹿じゃない……多分だけど。反対派の中には、ちやんとデモ程度で抑えるように内通者みたいなのを送ってるはずだし……ああ、そもそも海軍軍人の俺が心配する事でもないか。

でも面白いから動画撮つところ。

「相変わらずだな、あの輩は」

「あ、斎藤中佐! 休まなくてもいいんですか? 昨日までゾンビだったのに」

「バカ者。確かに知恵熱こそ出はしたが、一日経てば治る。体力は消耗品ではないと言ったのは貴様ではないか」

「話し聞いてたんすね。流石は元陸軍、フィジカルがバケモンですな」
突然後ろから話しかけ来ないでくださいよ。ほら、なんか野次馬みたいに動画撮ってるのを凝視されると凄く恥ずかしいじゃないツスカ。変な事はしてないのに。

最初の出会い方がクソでも、二ヶ月間以上の苦行を共に乗り越えた

仲だ。今では気楽に話し掛ける事も珍しくはない——最初ルームメイトになったときは色々あったけど、漢は大体殴り合えば分かり合えるのだ。

「そこのお二人も、今の国の在り方に疑問があるのではないですか!? どうか!」

「え、俺たち?」

「そう貴方達! お兄さん方、今は悩みがあるのではないですか!? そしてそれはずばり、人間関係!」

現代人の悩みなんて九分九厘そうだろうが。なんで占い師みたいな事言ってるの? 深海棲艦教なの?

はた迷惑な宗教活動的な勧誘をしまくる輩に、どこから現れたリーマンっぽい一人の勇者が声を上げる。

「何時も何時もウルセエんだよお前ら! 宗教活動なら余所でやれよ!」

「あなた、悩みがあるんですね?」

「そんなの人間なんだからあるに決まってる!! それに、今一番腹が立ってるのはテムエラのせいだろうがア!!」

いいぞ、言ってみてやれ。

「その怒りはどこから来るんだい?」

「は?」

「君には、拭いきれない過去があるはずだ。それが、今と言う関係のない場面であったとしても、ずっと君を追い続けて、ずっと君の心を蝕むのだ……その怒りは、どこから来るんだい?」

「な、何言ってるんだおま」

「そこ怒りは……どこから来るんだい?」

両頬に手を備えられたリーマンさんは、とても要らない自分語りをした。

「……子供の頃、俺は夏休みに兄貴と一緒に昆虫採集をしに行ったんだ。まだ俺が小学生ぐらいの頃だったんだ……」

「うんうん、それで?」

「それで……裏山で兄貴と二人つきりになった俺は……俺は……っ

……俺は草むらの中で……女みたいにされちまつたんだ……女にされちまつたんだアア!!うああああああん!!!」

普通のリーマンのくせに闇深すぎだろ。

『うんうん、その心の中にある毒を、私達と共に解消していこうじゃないか?先ずは我々の支援から始めないかい?』

『……ズズツ、はい!!』

ああ、こうやって仲間を増やしていったのか。細菌と同レベルじゃないか。

でもあの人はサクラって線もあるし、これももうわかんねえな。

「宍戸大尉、女にされた……とはどういう意味なのだ?」

「えつとですね……俗に言う『掘られた』みたいなものです」

「初等教育の時に……業が深いな」

傷口が深すぎて埋めれないと思う。だから、それと向き合って生きていく事をおすすめするわ。

その後は警備の人に止められて、退散したのはいいのだが、ここらでは有名な常習犯達なんだとか。

検索したらホームページまで出てきた。無駄に凝ってるな。

「それで中佐、今日はここへ何をしに?」

「気晴らしだ。ようやく山場を乗り越えたのだからな」

「そうっすね。でもまだ終わったわけじゃないんですから、気張ってかないと足すくわれますぞ?」

「ふん、貴様に言われずとも私に抜かりはない」

「宍戸さあくん!お待たせしましたあ〜!」

小走りで走ってくる美少女軍団は、村雨ちゃんを先頭にした時雨たちだ。両手にはバッグ、あのお店の衣類が敷き詰められてそうなゴージャスな紙袋が皆の手元にあった……と思ったら、みんな買った服をそのまま着て帰って来てる。

うん、やっぱり何着ても似合うなみんな。

「どうですかこの服?村雨、似合ってますか?」

「ああ、眩しすぎて浄化されそうだよ」

「ふふっ、ありがとうございます!」

「お、お兄さん！私！春雨はどうですか!？」

「春雨ちゃんも、凄く似合ってるよ……ただ、スカートが少し短すぎかな？その上袖の方はぶかぶかとか、そんなに可愛いコーデすると俺襲っちゃうかもよ?。」

「お願いします!!」

いや、そこは断つてくれ春雨ちゃん。本当に襲いたくなるからさ。

「……………」

「ん?どうしました中佐殿?」

「いや、気張れと抜かしていた者が休日は何をしているかと思えば……………」

「え?うらやましいんですか?気持ちわかりますけど」

「自己管理が行き届いてるのなら良いのだ、ではな」

邪魔者は退散する、と言いたげな雰囲気での場から退場していく。

「それで行きたい場所へ行けた?」

「特に行きたい場所があったわけじゃないんだ。でも適当にブラブラしてたら、結構変わったお店とか人とかに遭って面白かったぜ」

「これから急遽ゲーセンに行くことになったっぼい！穴戸さんは付いてくるっぼい?」

「勿論！ゲーセンなんて久しぶりだな!」

娯楽の少なかった時代の80年代に爆発的な人気を博し、家庭用ゲーム機どころかスマホのアプリやパソコンで遊べる基本無料ゲームが盛んなこの時代でも、未だに店舗の生存競争を勝ち抜いてるゲームセンター。

学校帰り、或いは仕事帰りで鬱憤を晴らす為に、帰宅道中にいやらしく設置されているゲーセン……仕事帰りにする事が、ゲーセンからパチンコに変わる人の事を、大人と呼んでいいのだろうか?そんな事を考えていた学生時代の秋。

「…………でも行く前に、ちょっとあの人たちに挨拶させて」

「「?」?」

ゲーセンに行く前にさ、知り合いが居たから挨拶ぐらいはしなきゃ

な。しかもあの人たちね、外に出てる煙を吸ってオドオドしてるんだよね。

そうやって説明したら警察呼ばれるかも知れないしね、ちよつと知り合いとして放っておけないよねこれ。

なので、一端そとに出る。

「こんにちわ二人共、奇遇だねこんな所で会うなんて」

「あ、こんにちわ宍戸さん！それに皆さんもお揃いで！」

「貴方達も東京まで来てたのか、凄い偶然だね」

「本当だよ。それで、なんで外で煙の近くに居るのかな？」

「焼肉の匂いを嗅ぐために！」

じゃあ店に入れよ、とツツコミを入れざるを得ない彼女達は照月と初月。二人共、第四鎮守府の所属だ。舞鶴第一鎮守府所属、秋月の妹達でもある。

まさか東京で会うなんてとてつもない偶然なのだが、匂いを嗅ぐためにと豪語するので、その詳細が聞きたくて仕方がない。

「といますと？」

「焼肉なんて滅多に食べないし……あんなに美味しいもの、今日食べていいのかって思って……」

「僕は鎮守府のでも満足してるのに、今日だけそんな贅沢をする必要は本当にあるのか……そんなことばかり考えてしまうんだ。そんな事を考えているうちに、子供の頃からずっとしていた『おいしい匂いを嗅いでお腹いっぱいになる』作戦を知らずのうちにしていったんだ……」

「「……………」」

Wow……なんてこった。

二人……秋月を入れれば三人は、昔から貧乏で、その極度の貧乏性が災いしているのだとか。子供の頃からずっと辛い体験しかしていなかった彼女達は、そんな生活がすっかり性分となつてしまったらしいのだ。

家の事情にはなるべく踏み入らないようにしているけど、確か借金がいつぱいあるらしい。その返済をするために、三人とも一生懸命働

いているのだとか。艦娘とは言え、流石に国はそこまで面倒見てくれないのだろう。

同人誌でそう言うネタ、沢山ありますよね？とつてもエッチな身体した美少女達が借金背負ってて、そのクツソエロい身体使って接客業……するみたいな展開。この美人姉妹には正にその条件が揃っている！

だが、仲間を見捨てはしない。

「……なあ時雨、ゲーセン行く前にさ、腹減らない？」

「僕もいま丁度言おうとしていた所だよ。美味しいもの食べてからゲーセンてのも悪くないからね。あ、因みに二人は強制参加ね」

「え!?そ、そんな駄目です駄目です!お金いま持ってないです!」

「俺たちの奢りだから。な?みんな」

「もちろん!」

「あ、ありがとうございます!!」

いや、そりゃ奢るしかないでしょ?この美少女姉妹は奢られる価値がある。それが仲間だったら、尚更さ。

などと、涙している二人へイケメンセリフ、またの名をクツサイセリフを吐く。

……若干思った事があるんだ。これってもし俺が一人で食事に誘って奢ってたら、超絶イケメン行動したメシア系主人公的な俺に惚れる貧困少女的な展開が待っていたのではないか?

夢見すぎだつて?何言ってるんだ、この世の中は夢物語以上に奇怪な出来事が起きるんだ。現実には小説よりも奇なりつて言葉を知っているよな?そういうことだ。

決していい方向へ行くとは限らないけど、少しぐらいそっちに向かう事に賭けてもいいんじゃないかな?そうすれば、俺は美少女二人を手込めにするヤリちゃん男になれる!

……大体こういうギャンブルするヤツは、宝くじで大負けするんだよね。俺のことだけだ。

ゲーセン

ーゲームセンター。

普段からカロリーの高いもの脂っこいものを食べない二人へ細心の注意を払いながら、できるだけ体調を壊さないものを選ばせた。

二人は素で、ご飯に焼肉のタレを少しだけかけて、それだけで満足しようとしていた所を見て泣いた。

その後照月たちと別れ、夕立ちちゃんが提案したゲームセンターへと脚を運んだ。

焼肉のあとで行く場所としては少し体臭を気にするところだけど、大丈夫。こんな美人揃いの女の子達から焼肉の匂いがするなんて興奮しない？いや、しないか（※彼女たちはちゃんと消臭対策をします）。

「すげえ！舞鶴のゲームセンターなんて目じゃねえ！」

「これは完全に田舎者ですね分かります」

「は？それがどうしたんだよ？都会人よりはお金持ちだから俺、海軍だし」

「お金で人間の価値が分ける考え方は間違っているって豪語していた人が何か言ってるけど？」

いやいや時雨さん、違うんだよ。俺は別にね？そういう考え方の持ち主じゃないんだよ。だけどね？都会の人は田舎から来た、イコール知識が浅い、イコール出世できない、イコール稼ぎが悪い……って、最終的には何でもかんでもお金に繋げて考える人が十割なんだよ。

都会はなんでも揃ってるから、お金さえあればなんでも出来ちゃう、イコールお金に集中しちゃうーこれは当たり前前の法則なので。

そう、このゲームセンターでもそうだ。

『うおおお!!すげえええ!!こんな編成見たことねえええ!!』

『俺は神だ、崇メロン』

ゲーム業界に元気が無い時は、課金で活気ーン！課金系ゲームは、大抵の場合は他のプレイヤーと連携して戦うスタイルを取っている理由は、対戦系にするとお金の力でパワーバランスが崩壊させられるからだ。基本そんな奴らと戦いたくなくなつてやめるのを阻止しているのだ。

え、じゃあおかねのつかいかたをせいげんすればいいのに、なんでやらないのおく？と聞いてきたガキンチョに、俺は答えた……その方がいっぱいお金使ってもらえるからだよ。それがどんなにその人へ悪影響だろうと、どれだけ子供の金銭感覚を狂わせようと、大事なのは、オ・カ・ネ、だからねッ。

まああの人怖い〜！だつてさ。自分から聞いてきた質問への答えを素直に受け止められないなんて、今矯正しないと将来ろくな大人にならないぞ。

「大人げないなく将来の提督様は」

「ほっとけ。上ツ面だけで全てに無関心な大人になるより、まだ色々な事に興味を持てる子供な大人でいる方が100倍いい」

「で、ですよね!!私も色々な事に興味を持ちちゃいますから……少し子供っぽい性格って思っていましたけど……」

なんだよモジモジしやがって可愛いなコンチクシヨウ。

「村雨ちゃんはかわいいな。そのままの君でいて」

「もちろんです!で、では!早速興味を示してしまったあのゲーム、一緒にしませんか!?!」

「ん?あれ?」

「はい!」

指差した先には、4つのパネルを踏み倒す事によりダンスを演出するゲーム、ダンスダンスレボリューションズがあつた。一時期はインベーダーゲーム並の流行りを見せたこのゲームは、今でも根強い人気を博しており、少なくともこの手の遊戯がゲームセンターから消える事はまず無いだろう。

「え、俺でいいの?時雨とかじゃなくて?」

「穴戸さんがいいんです!最近お勉強ばかりで村雨、ちよつと寂し

「かつたんですから……」

「でも……」

「だめ……ですかあ……?」

「やるに決まってるでしょ?」

「やったあ!」

そんなにさ、上目遣いで不安そうな顔されたら、やるしかないみたいな?

時雨も同意して、春雨ちゃん達も俺たちのプレイを見たいらしいので、他の客と順番を待つ。

『ウワーマケチャッター』

『マコちゃんハホントウニゲームがヘタダナー……ソナトコロモカワイイヨー』

『タケシマジサイコーナンダケドゥゲキクラブ!』

早く台から降りろブサイク共。

社会でたまに見るウザい存在が台から消えると、俺と村雨ちゃんは台の上に乗ってお互いにコインを入れる。

「せっかくだから何か賭けない?」

「まったく、時雨は本当に賭け事が好きだなあ……」

「まるで日頃からギャンブルしてるみたいに言わないで!そうじゃないと、村雨がスコアで勝ったら何でも言うことを聞くとか……」

「ね、姉さん!」

「それって逆を言えば村雨ちゃんに何でもできるって解釈でいいの?」

「あ、穴戸くんが勝ったら、一品奢られるか次遊ぶゲームのコインを貰うかのどっちかね」

やばい、純粹に食い物奢られる方が利益が高いと思ってしまった。今の時代の性別における理不尽さは、こうやってドンドン一般常識として植え付けられていくんだな。

なんでもされるのが村雨ちゃんじゃなかったらこのまま辞退して去り際に「クソアマアア!」と罵声を浴びせる所だった。

『難易度を選択するドン!ルナティックでオツケー?ニコの魅力を伝

えるのん……』

混ぜるな。

「それじゃあ始めるか！」

「はいっ！」

そして曲がスタートした。ちよつとイジワルして、結構難しい曲と難易度を選択してやったぜ。

俺の華麗なる反射神経と運動能力でならば、例え普段やっていなくてもそこそこの上位に行ける！

村雨ちゃん、この勝負貰……ん？

「あつーい、意外と難しいですねっ……よつと！ん！はっ！」

「……………」

『『……ゴクリッ』』

見るな野次馬共。貴様らが見ていい代物ではないのだぞ。

ただでさえ柔らかかそうな身体してるのに、さらに柔らかかそうな胸部装甲がぷるんぷるん揺れてる。

それは、激しく動くと起こる自然現象で、理論的に考えれば予想できる事だ。漢の悲しい性……雄の宿命……俺はさつきから横で揺れるスペースシヨットに、目が釘付けなんや。正面の意味不明な矢印なんて目じやないんや。

クソ！なアんで物理学だア！学校の物理学の授業は、訳の分からない長方形なんて使わずに、おっぱいを使えばいいと思う。そしたら楽にA+取れたのに。

これが君の狙いだと言うのか村雨ちゃん、卑怯だぞ！

「はあ……はあ……や、やりましたあ！穴戸さんに勝ちましたあ！」

「やったね村雨！お金が増えるよ！」

「おいやめろ」

マジでやめてくれ時雨。女は金を筆記取る快感を覚えるとおぼあちゃんになるまで消えないんだぞ。村雨ちゃんがそんなクソ女だとは微塵も思わないけど……ほら、万が一、兆が……って事もあるじゃん？

「じゃあ素直に従おう……村雨ちゃんのお願いは何かな？」

「それじゃあ、春雨達とも一緒に遊んで下さい！」

「え？なんでも言うこと聞くんだよ？流石にもっと他にあるでしょ？」

「春雨も穴戸さんと一緒に遊びたいと思いますし、村雨は穴戸さんと遊べて、それだけで満足ですからっ」

「村雨姉さん……！」

優しい世界……いや、村雨ちゃんが天使なだけか。はは、村雨ちゃんの優しさを世界中にバラ撒けば戦争の一つぐらいは終わらせられるんじゃないか？

そんな娘のさ、物理学を見れた野次馬連中は本当に幸運だったな。お前らは今後の人生、嫌なことはあった時にこれを思い出すといい。

「で、でもわたし、どんなゲームがいいかわからなくて……」

「それなら安心するっばい、丁度あそこがいいゲームがあるっばい！」
ゲーセンではお馴染みのガンシユを指差す夕立ちちゃん。

名前は、der haus des untoten……翻訳すると、ゾンビ達のザ・ハウス。今でも一部から絶大な人気を誇る、凄く懐かしいアーケード用ファーストパーソンガンシューティングゲームのシリーズ二作目。銃を持って、画面に出てくるゾンビを倒しまくるシンプルなコンセプトは、大体慣れてくると大抵の場合、死なない事よりもスコアアタックを目指す事になる。

「夕立は五月雨と一緒にタッグを組んでやるから、タッグ同士でスコアを競うっばい！」

「つまりは、2on2のスコアアタックです！五月雨、負けませんよ！」

二台同じゲームが隣同士にあるのは、そう言う競い方ができるからか。なるほど……面白そうだな。

二台を占領し、俺は初心者春雨ちゃんに、ゲームのやり方を説明しながら二人分のコインを入れて、夕立ちちゃんと五月雨ちゃんペアを迎え撃つ準備をする。

「だ、大丈夫でしようかあ……」

「大丈夫だよ春雨ちゃん、俺に任せてくれればいいから」

「なに俺かつこいいオーラ出してるのキモ」

「流石にそれは酷いぞ！いいじゃんかこういうときぐらいカツコついても！！」

「そうやって僕の妹を落とそうとするのは流石に頂けないんだけど……」

「この百円玉から始まる恋があったっていいじゃないか」

「素敵な考え方です！春雨もそう思います！」

「やれやれ、俺は色々といケメン過ぎるな」

時雨が嘔吐するジェスチャーをしたのはともかく、相手はこのゲームやってそうだし、初心者を抱える俺は少しぐらい本気でやってもいいだろう。

「始めますよ〜！」

「「応！」」

五月雨ちゃんの合図で、スコアアタックの火蓋が切って落とされる。

最初のボスから最終局面まで一気に進み、倒さなくてもいいゾンビを倒しながら春雨ちゃんの分までスコアを刻む。

「あ、春雨ちゃん！アイツのふともも弱点だから撃って！」

「はい！あ、きやあ！」

「危ない春雨ちゃん！！」

『I a m . . . I a m . . . 』

「ふう、なんとか乗り切ったな！」

「お兄さん……助けてくれて、ありがとうございますっ！」

「フツ……こんな可愛い女の子を助けられないなんて、漢って言えないだろ？春雨ちゃんぐらい可愛かったら、なおさら、さ」

「お兄さん……ぎゅー！」

「春雨ちゃん……キリッ」

「オロロロロロロ！」

時雨はその嘔吐ジェスチャーはやめたほうがいいと思う。一応女の子なんだしき。

「いっぱい殺しましたね夕立！」

「素敵なブツ殺パーティーっぽい！」

汚い言葉を使うのもやめたまえ君たち、春雨ちゃんや村雨ちゃんにその言葉遣いが移ったらどうするのかね？

ゲームの結果は果然、あっちの夕立五月雨ちゃんペアが勝利する。まあ当然だよな。でも高がゲームなのに、しょんぼりしながら謝る春雨ちゃん可愛い。ヨシヨシと頭を撫でてやるゾイ。

「なに気安く春雨に触ってるの？殺されたいの？」

「なんで!？」

「本当に仕方がない人だね穴戸くんは、じゃあ僕にあのゲームで勝ったら許してあげるよ」

時雨が指したのはあれだ、定番中の定番であるレースゲームだ。何気に回るペースが早いなオイ。

「お前がやりたいだけじゃないのか？」

「べ、別にいいでしょ!?!せつかくゲーセンに来てるんだし!悪い!？」

「わ、分かったから!ドードー」

そんなにカッコしなくてもいいのに。なんだ、あの日か？

俺たちはそのレースゲームの方に移動するが、そこには先客が居たようだ。暫くその人たちのドリフトを見ながら、俺は待っていた。

『あ……そんなに速く……ああ!』

『ホラホラどうした？俺のが速すぎてもうイツちまったか?』

『い、意地悪するなよ……ほら、仲良く一緒にイこうぜえ……?』

『つたく、相変わらず物好きな野郎だな……ほら、俺のオシリの匂いを嗅げる位置から、しつかりついてきな』

『おう……ああ! イツた!俺たち今イツたぞ!』

『よーし、レースゲームはこれで終了だな。あそこのプリクラでも撮って帰るか』

『な、なあ……本当に帰っちゃうのか?もつと一緒に……』

『……さつきヤツたばかりだったのに、しょうがねえヤツなあ。じゃあもう一回宿に寄り道するぞ……あ、俺たちはもう終わったんで、こいこいですよ』

「ありがとうございます。ほら穴戸くん、僕達の番だよ?」

「……………」

「どうしたの?」

あのさあ……さつき「ヤツた」ホモカプたちが座った汚らしい場所に座れってか? 時雨はHIVの心配はしていないのか……いや大丈夫、彼らは衛生概念まではネジ曲がってないはずだ。

時雨と同じようにワンコインを入れて、車の選択画面に移る。

俺はGTシリーズと言うレースゲームで定番の車を選んだ一方時雨は……INFERNO? な、なんだあの車すげエカッコエ! 後で検査してみよ!

「……宍戸くん、村雨ともやった賭け、僕ともやってみない?」

「いいぜ、金が関わる事だった場合千円未満にしてくれれば後はなんでもいいぜ」

「漢に二言はないね? じゃ始めるよ!」

——日本海軍艦娘中尉——

時 雨

『スウリイ、ツウウ、ウワン、グオオオオオ!!』

「うおおおおお!! 負けるかあア!!」

3秒カウントと共に、スクランブル発進した両者の車は順調なスタートを切る。

目にも見た妹たちは歓声をあげながら勝ってほしい相手を応援する。フツ……こつちには、「頑張れっ、頑張れ!」と応援してくれる村雨ちゃんと春雨ちゃんがいるのだ。

彼女たちの応援さえあれば、例えば世界最高のレーサーが相手でもぶつかって行くぞ。

「宍戸くん邪魔ア! 車体を相手にぶつけるなんて卑怯だよオ!?! 交通安全全法知らないの!?!」

「うるせエ! やったときのペナルティが無いって事は、やってもいいって事だろうが! 大体、時速200超えてる時点で安全法的にアウトだろ!?!」

チートやイカサマを使わないだけ有り難いと思ってほしい、勝負の世界は思っている以上に残酷なのだ。やるかやられるかの弱肉強食の世界、自然界の掟である。

家庭用FPSゲームだって、オンラインサービスを開始すると大抵そこには上級者がいて、負けたら雑魚扱い、勝ったら回線悪いと口実を作ろうと努力するが、結局のところ辿り着くのが「自分が弱かった」という真実だけである。

そう、言い訳をしても、そこまで頭が回らなかった貴様が悪いのだ。

「ドリフトの境地……見せてやる!」

「抜かせえ!僕に勝てると思ってる!!?」

「次の第三コーナーの後の高速で、エンジンをバリバリ吹かせて、突き放してやる!」

「なっ!?多角形ブレーキング!?そんなの僕だってできるよ!」

「お前もできるって何気にすごいな。実際やってるとかないよな?」

「そんなわけ無いでしょ。って、そんな事言ってる間に追いついちやったよ!」

怒涛の追い上げ……ホースパワーはあっちの方が上なのか。

「な、なに〜!?……仕方がない、お前には特別、とっておきの技を仕込んでやる」

「な……そ、それは……?」

「秘技!溝落とし!!」

「「あ……」」

コーナーの溝にタイヤを入れてドリフトするよりも早くカーブを曲がれるこの技……カーブの所に当たって、車体がスピンする失敗に終わった。時雨の車の道を遮ろうとするが、華麗なドリフトで追い越される。

ゴール直前で起きたこの出来事、一言申せば……萎え。

『ゴオオオオル!!』

「流石は時雨っぽい!やっぱり車関係なら整備作業員の時雨に任せるのが一番っぽい!!」

「はは、別に車に興味があるわけじゃないけどね。でも、これで穴戸く

んは僕のお願いを聞かざるを得ないのだ。やったねみんな！奴隷が増えるよー！」

「やめてえ……」

俺、よく考えたら負けてばっかりじゃないか、クソオ！これが同人誌だったら俺が勝つてこのままアへ顔ダブルまで持つていけたのによオ……！

「じゃあちよつと面倒くさいお願いだけど、聞いてくれる？」

「なんやねん？下ろした芋をち〇こに付けるとかだったら、例え漢の約束でも平気で反故にするぞ」

「なんでそんな拷問みたなアイデアがサラリと出るのかな君は……でも、多分穴戸くんなら喜んで食いつくと思うよ。実はね……」

「「……えっ」「」」

なんやてツ？

ディフェンスシステムについてのディベート

ー海軍大学校。

時雨との約束は先なので、今は学業に集中させてもらう。

そういうわけで、俺は今学校に来ています。比較的、そして一見すると簡単なようだが、実はとてもレベルの高い会話を繰り広げる事となるのが、今日の議題である『安全保障学』についてだ。

提督って立場は最前線の指揮官であり、国と国民を守る使命を持ち、それが仕事の本質である。

東京の海軍大学校でもやる事だが、意見をぶつけてディベートして、特別コースの俺たちが普通の学生等との差を見せつけてやるのが、今回の課題の本質である。

安全保障学は国際政治学、軍事学などにも近い関係性を持つ。それと並びに、士官学校で学ぶ国防理念との関係性はかなり近いものであるが……ぶっちゃけまとめてみると、ちよつとしたニュアンスが違うだけで後は一緒だ。こつちがちよつと上級なだけで。

国を守るって一番重要な点は一緒だからね。少なくとも今の政治家みたいな、自分さえ良ければ何でもいい的な徹底した保身派には、正直違いが分からないと思う。

さてと……よくアニメで見るとは思うけど、デカ過ぎる権力を持つ生徒会が机を長方形に並べて会議の様は、誰しも一度は目にした事があると思う。

一番真ん中に生徒会長が座ってて、横に副会長と書紀を備えて学園を良くしよう的なあれ。多分あれと同じようなモンだ。スケールが国を守るってデカイ話なだけで。

「それでは、これより君たちの見解を聞かせてもらおうか」

「ハー！」

はい！と言うわけで始まりました。第一回、日本を守るためにはどうしたらいいでしょうか弁論大会くわあーパチパチパチくー！

斎藤中將は舞鶴に戻って、他の中將先生が俺たちを指導してくれる

らしいゾイ。話を聞いてるだけだけど。

「留学生も見学に来ているので、我が国の恥とならぬようにな！」

「Nice to meet you guys！」

「?????????」

「?????」

この学校はなにを隠そう、留学生も受け入れているのだ。日本も多民族国家になってきたな。っていうかさ……英語以外、何言ってるかさッパリ分かんねえんだけど。なんて返せばいいの？

そんなG A I J I Nは後ろにでもおいといて……この話し合いを先導してくれるのは、いま真ん中に座ってる学年首位が相応しい。

そう、肉体労働もできて、それでいて楽々学年の首位も獲得出来ちゃう将来のスーパーイケメン提督であり完璧超人ことこの俺、

「では、今日の議題である国家安全保障理念の欠点について語りたいと思う。穴戸大尉、資料を」

「はい」

……のルームメイトの斎藤中佐です、はい。ゾンビがまさかの学年首位とは驚いたなあ！やっぱりエリート家庭は一般人とは格がア違いますねエ！

俺はクラスで三位だが、運が良かった事が多い。俺が忘れてる所がテストに出なかった事多かったし、小論文では突然ひらめく事が多かったし、何より体調崩さなかったもんね。どんな学校でも体調はとても重要なフアクターなんですよ。

因みに二位は、

「では今度は歴史的な観点から見た国防理念の概要を説明していこう、秋津洲大尉」

「はいかも！昔から国を守る事はとつても大事かも！いろんな考え方が存在し続けているかもだけど、世界の政治の基礎体、シビリアンコントロールとの歴史を辿っていかなきゃダメかも！」

かもかもうるせえ。でも美人だから許す（ある意味、世界の真理）。彼女は秋津洲さん、艦娘だ。目がチカチカするほど全体的に眩しい

色合いを持つ。白い肌に、シルバーブロンドの髪、学生用の白い制服……艦娘時の服はたしかそれ以上にハイカラだったような気がする。オイゲンさんと、あと大鯨さんだっけ？その二人とのルームメイトで、この三人はとても美人だ。なんか、時雨たちとは別の方向性で美人だ。

それにしても理解しやすい喋り方をするなこの人。教師とか教官とはに向いてるかも、かもかも。ああやばい、かもかもが移ってきたかも。

「もつと国民のみんなを守る意識を高めるために、現状をいつぱいみんなに知らせるのが適切かも！」

「……………」

俺の学友諸君は、俺や結城みたいな整備工員はもちろん、通信部、情報部、イージス艦の元副艦長、提督の元補佐官―陸軍、空軍、艦娘など、ある意味日本軍の全てみたいなのクラスなので、色んな意見が聞ける反面思想もバラけるのは至極当然である。

この人達は全員、安全保障学を兵学校の時に学んだので、この弁会でそれをファイナライズできるだろう。

どうやって国を守る？文字にすれば簡単だけど、シンプルな質問ほど難しいとも受け止められる。多分複数の明確な回答があるだろうけど、それを実現する事が容易ではないので、もつともつと簡単に、そして確実に実現できる国防を追求しようとするんだろう。

例えを言おう、政治家にもつと政治に親身になってもらって、平和を保つために毎日それについての会議を行わせる。多分これが最低限のラインだとは思うだろうけど、実現がほぼ不可能じゃん？そういう事だよ。

どんな国だって100%納得できるような政策がないわけだし、完璧な政治って人間の永遠のテーマだと思うんだよね。

あつ、関係ないけど、海軍大学の生徒だった人がその課程で早々「大規模作戦時のイージス艦と艦娘による電撃戦法」を説いた事で脚光を浴びたと聞く。

国防と言うよりは戦術じゃないのかそれ？とも思ってたけど、そうい

う奇抜だがいいアイデアがあれば例外的が外れていても合格点なのだ。的に当てろと言われただけで、どの的に当てろとは言われてないもんねくみたいいな？

天才は何をしても許されるのか、これももうわかんねえな。

「海軍の仕事は、今や陸軍を遙かに上回る。当然海軍は相応の軍資金を必要すると言うのに。海軍へもつと軍資金を寄越してくれさえすれば……」

「陸軍へのバジェットカットを執行したからと言って何も変わるまい。それに、これらは金で解決できる問題じゃないんだぞ？」

「クソ……陸軍を消せば……」

「……………」

斎藤中佐は陸軍出身ですよく……それを知ってるのは、今はルームメイトの結城と俺だけである。

だから陸軍へのヘイトの話題を持ち上げられるとちよつと入りづらい。こういう話題になるとき空軍が置いてきぼりになるのはテンプレ。

『陸軍と空軍に行くバジェットを海軍へ回せば、新たなディフェンスシステムへのイニシアティブとなる！』

『陸軍へのバジェットは既にボトムラインだ。ポリテイクスのセキュリティポリシーへのマインドセットをチェンジしなければ何もかもがインポッシブルだ！』

『深海棲艦をディフェイトすればオールライトだろうが！』

「……穴戸、なんて言ってるか分かるか？分かんだったら説明してくレメンス？」

「え？ああ、まだ何にも決まってないって事だよ。あと15分ぐらいこのままじゃないかな？」

「ありがとう！流石俺のダチだな！」

いやいや、どういたしまして。

でもすごい！君たちは、意識高い系フレンズなんだね！日本語と英語にあんな風に交互に使うなんて、俺だったらできないよ！

「Hey……hey！ Why are they using

nglish and Japanese at same time? (おい……おい! なんてあの人は日本語と英語を同時に使ってるんだ?)」

「えーあーうん……ニューボーン、ジャパニーズカルチャー?」

「Wow! Awesome!」

新しい文化、新しい言葉、新しい発見、新しい性欲……そうやって、人間は進化していったのだ。

「??」

「え、な、なんて?」

「??」

「……め、メシー! デーツ! デーツ! アイラブデーツ!」

「??」

お前は話しかけてくるな、何言ってるかわからないから。あと、ラブじゃなくて、アイラブだから。

クソ……外国人勢がみんな俺の後ろに座つてるとかマジ勘弁や。発展途上国の人達はホント階級高いな。こう見えて少将だぞこのターバンヘッド。

討論は続き、結局話が逸れたり、大規模作戦の時の将校たちみたいになつたりしてまとまらない。俺の知ってる人たちは最低限一回はあくびをしている。

艦娘の人たちがアクビする所を見るとちよつと可愛くて興奮する。むさい男たちしかいないここでは、貴重な可愛らしさの要素なのだ。

……つて、討論に加われよ。なんでみんなと一緒にアクティブなトークにジョインしないの?」

「凄いかもー! みんな徹底的に討論してるかも! やっぱ元気なのが一番かも!」

「そうだね……秋津洲さんは参加しなくてもいいの?」

「あ、秋津洲は大丈夫かも! 大鯨とか参加したらどうかかも?」

「おー名案だな! 大鯨さんみたいな可愛いゆるふわ系に、『み、みなさん落ち着いてくださあ〜い!』みたいな事言われたら、俺っち、落ち着かずには居られないぜエ!」

「あ、あわわっ……」

落ち着けつつつてんに落ち着かずには居られない。男子の視線が釘付けにされる代わりに、大鯨さんの巨乳に目線が行く……あ、でも確かに名案かも！学業が全部おっぱいで満たされているなんて、すげーぜ！物理学の授業で球体の面積求めるの全部おっぱいにしてくれねえかなー。

何はともあれ、結局国防なんて生涯をかけて構築された先人たちのシステムが最適だと判断されているから、今の海軍もこうしているわけだし、国民から大きな反感がない限りはシステムを変えても、このままで良かったと肩を落とすのが関の山だと思っぜ。

そして最終的には科学部門の人達がもっと強力な兵器を作って、その都度システムを変える。それこそが、近代軍事史における真実である。

と、何処かの偉人が話していたのを思い出した。

俺が話しても軽くあしらわれるし、ハア……今頃時雨たちは何してんのかな？

ートレーニングルーム。

「ハア……ハア……!!」

「大丈夫時雨姉さん？そんなに汗かかなくても……」

「それじゃダメなんだ村雨！僕が維持していたと思っていた体重が、今日乗ったら軽くオーバーしてるなんてありえないんだ！僕は落とす！最低でも50までエ!!」

「今のままでも十分引き締まっててスタイルいいのに……春雨なんて、すぐに太っちゃうのに！時雨姉さん、ズルい！」

「職員はある意味現役の艦娘よりも身体を動かすから……ハア、ハア……毎日身体を動かしていても体重が増えるのは納得いかないんだアア！」

「今の女の子は60台でも気にしない人がいるんだし、あまり気にし

すぎるとダメだと思うわよっ?」

「でも村雨は最低でも50超えてるでしょ?」

「え?あ、それは……あ、当たり前でしょ?!?で、でも女性の平均体重は日に増加してるって聞いてるし!む、村雨の背は平均身長より少し高いと思うし!わ、私……わたしデブじゃないしッ!!」

「分かったから落ち着いて。でも、僕はいつでもトレーニングに付き合うから、ね!」

「う、うう〜!」

「大丈夫だよ!村雨姉さんはとつても魅力的で……魅力的で……ああ、お兄さん……村雨姉さんに取りられちゃう……もつとパフェを食べさせなきゃッ!」

「春雨、太った原因がパフェにあるみたいと言わないでくれるかい?ちゃんと低カロリーなメニューと、太らないように栄養バランスのある食事を取っているんだ……僕は潔白だああ!」

「知ってるか時雨たち諸君……脂肪は筋肉より重いんだぜ?」

「あ、穴戸くんおかえり。よくここが分かったね。あと今ぼくの事を筋肉マンって言ったね殺すよ?」

「そんな事言つてねえよキン肉マンレディー」

フィットネスウェアに身を包んだ時雨は汗をかいていて、作業服のまま汗だくになるのとは違って露出度もある。

妹二人と一緒にベンチに座って休憩していたらしい。

「学校はどうでしたか?」

「下手な討論番組みたいで面白かったよ」

「そういう楽しみ方ができるお兄さん素敵です!お兄さあ〜ん!」

「おいおい、あんまり近づいたらだめだぞ?今日いろんな人種とハグしたから少しキツくなってるんだ」

「ササッ」

目にも止まらぬスピードで抱きついていた身体を放し、俺の後ろへ位置を変える。春雨ちゃん、位置を変えろって意味じゃなくてね?

結局あと数日ぐらい意見を交わして、それから論文を書くって流れとなつているけど……大した意見は貰えそうにないので、国民の安全

を第一とする国家政策と深海棲艦打倒を目的とした軍拡、で行こうと思う。

兵学校で一度書いた論文をまた書くのは、長い年月海軍軍人として努めてきた視点で何が変わったかを見るのが結構面白い。

学校では艦隊運用術、艦娘運用術など、他にも学ぶ事が色々ある。それから今度は各地で研修を行ったりするって言ってた。まだまだ長いな。

……それはそうと、時雨がこうして汗をかく理由は、言うまでもなく脂肪分だ。女と脂肪分……あとはわかるな？要するに三日坊主のダイエットをするって事だ。

「つーかお前、ダイエットする必要なんであるのか？50台なんてかなり痩せてる方だと思うぜ？アメリカ人なんて60パー以上がオーバウエイトで、30パーが超肥満なんだぜ？レッドネックって言われるのが嫌で首をなくしたんじゃないかってぐらい肉の塊だからな」
「それは流石に言いすぎ……でも少しは緊張も解けたよ。これで合コンは楽して行けるね」

「なんだよ合コンのためかよ？お前は身体測定当日に朝飯抜くって無駄な行為をする女子かよ」

「いや合コンのためじゃなくて、たまたま体重計乗ったら増えてたから始めただけだよ。そもそも合コンには乗り気じゃないの、知ってるでしょ？」

「ごめんなさい時雨姉さん、代わりに行けなくて……」

「いいのいいの、僕が勝手に引き受けちゃった事だから」

そう、俺は時雨と合コンへ行く事になったのでゴザル。

合コン、人類皆チーター

―料亭。

簡単に説明しよう、人数合わせ兼サポート役として合コンに仕方がなく行くことを頼まれた時雨。人数は足りているが、時雨が強引に誘われないようにするための抜け道となるのが、今回時雨が頼んできた俺のミツシヨンである。

元々俺か、俺がだめなら結城に頼みたかったらしいので、ゲームに勝っても勝たなくてもどっちにしろ行っていただろうが……6対5の合コンはかなり異様だと思う。しかし案外男性側が多ければ良い陣形だと言われているらしい。

別に男をゲットしたいわけじゃないのに来た時雨を誘ったのは、どうしても男をゲットしたい行き遅ーではなく、現役バリバリの艦娘であり教官も努めている、女子が憧れるキャリアウーマンこと足柄さんだ。

彼女は一度目にしたが、ひと目で分かるぐらいに優秀な艦娘であり頭脳明晰な女性だ。ここまで成績を積み重ねてきた彼女のような人物こそ、海軍に欠かせない人材である。

だが、そんな海軍からの評価も、女性としての魅力とは全く関係ない上、結婚できるかどうかともなれば尚更別問題である。

「それでは自己紹介から始めちゃいます！こう見えても現役バリバリの海軍さんこと、足柄でーす！」

「よろしくでーす！」

いや、足柄さんは普通に美人だぞ？どっからか来る飢えた狼みたいなオーラがなければ尚いいのだが。

主格の足柄さん、補佐役の時雨、そして後の三人は所謂……死兵だ。合コンでの女性側の戦略を知らない良い子の為に説明すれば、要するに自らを引き立たせるために、自分より遥かに容姿の劣る女子を布陣させる事によって勝率を上げる戦法である。

こう言う女性の賢さ（失笑）を、もう少し政治方面で活かしてくれば、この国もちよっとはマシになるかも知れないのに。

ほら、女性活躍って言葉あるじゃん？

「俺はちよつとネットの会社をやつててー」

「え、それつてつまり社長さんつて事ですかー？」

「あ、一応、そういうことになりまッスね」

「二「うわーすごいー！マジヤバーイ！」」

ハイハイ盛り上がってきましたねー。男側に凄くお金持ちそうな肩書の人が合コンにいたらさ、今度は男性側の勝率が偏るからやめてほしいね。

あと、社長つてことスカしながら、一応つて言うの腹立たない？こういうやつに限つて中身スッカスカなんだよな。

お、死兵共が早速食いついる食いついてる、やっぱり世の中金なんすね〜。

「ウチは鉄鋼業やつてます！よろしくつす！」

「二「よろしく〜」」

食いつき悪いけど、鉄鋼企業を一代で立ち上げた凄い人で……あ、一応ね、一応社長さんだぞ？又開けよビツチ共。

足柄さんが話す機会を与えられる度に時雨が適切なサポートで彼女を立てる。「足柄さん無しじゃ鎮守府はやっていけないんだよー」とか「足柄さんの料理、凄く美味しいんだ！」とか、安直だが効果的な言葉で彼女をスーパーキャリアウーマンに加え、女子力溢れる美女……との称号を付加させる。

自己紹介が順に終わり、いよいよ真打ち登場つて感じで俺の番がやつてきた。

「ええつとー最後はー……」

「デュ、デュフフ！お、オチ○ポザムライでゴザル、ブ、ブヒィ！
ジヨ、冗談でござる、デュ、デュフフ！」

「二「……………」」

ハチマキ、丸いメガネ、チエックのYシャツ、リュックを常備し、ロン毛の鬘、そしてキョドリと鼻息を荒くして俺が演出できる最大限のキモさをここに用意した。

彼女をゲットするわけじゃあるまいし、最近ちよつと立て込んでた

からさ……少しぐらい、遊んでもいいよね？ただでさえ少ない自由時間を消費してんだからさ、それぐらい許してくれよ。

俺はこの合コンで……コンパ界の伝説となるのだ。

「ほ、本名は……デュフー！し、宍戸と言うでゴザりんこ」

「え、ええつと……宍戸さんは、なにをされている方ですか？」

「せ、拙者は、デュフー！デュフフフ！が、学生ですタイ」

今は軍人よりかは学生ですよ、はい。

でも見てくださいよあの女性陣の顔、明らかに軽蔑の眼差しを向けていらつしやる。まるで社会カーストにおけるピラミッドにすら入っていないゴミクズを目の当たりにして、視界にすら入れたくない的なオーラをね、ビリビリ放ってくるんですよ。

いや、俺は違うぜ？俺はオタクって人種を尊敬しているんだ。たださ、実際こういう人って合コンに出ないじゃん？だから試したかったって面もあるんだよ。もしオタクの典型みたいなやつが来たらどうなるのかってのをな。

時雨もね……なんか、凄く軽蔑した視線を送ってくる。いや、俺は時雨が足柄さんのサポートを全うできた後、すんなり帰れるようになる為の内通者つてだけで、実際どうするかなんて何にも決めてないもんね。

案の定変な空気を作ったのはお察し。

『お待たせしました〜』

「あーき、来たみたいねー！じゃ、じゃあ頂きましようか！」

「二うええええい！二」

うええええい！とは大学生が随時発する奇声である。意味は……謎です。

一説によれば、メリケンのイエーイ！のそれだが、発音のクソさ、そしてそもそもちゃんと発音しようとしていない事から、こういう形で日本に残ってしまい、先人たちから引き継いでしまった悲しい言葉らしい。

料理が順番に運ばれ、俺が頼んだカレーうどんも運ばれてきた。みんなはなんか和食だけど、俺空気読めない系だからこう言う料理にし

たのだ。

「俺が働く飲食店でもこう言うの出しててー……ああこのフグは天然物じゃないですね」

「え！分かるんですか!？」

「ええ、これでも7年間寿司屋で働いてますからね!」

「ヤバイー!」

足柄さんや死兵ビッチ共もかなりイイ感じに会話の相槌が成立している。国会もこれぐらい順調に進めばいいと思う、本当に。

俺は一人でカレーうどんを食いながら、スマホで今期のアニメ情報を徹底的に洗っていた。見る時間こういうときにしかないし、変装している俺は今堂々と見れるから安心なのだ。

時雨が俺を見るたびに能面フェイスとなるのは、何故この姿でコンパ参加を実行したのか？と聞きたくて仕方がないのでろう。

スマホのメールでその理由を説くと、「死ね」と帰ってきた。ちよつとオフザケでやったにも関わらず辛辣すぎない？

それに俺は男性側の死兵であつて、男を引き立たせる役目を担っているんだ。キモいやツがいれば他が面立つじやん。そして足柄さんが男を選び易くなって万々歳じゃないか。

予想はしていたけど、

「時雨ちゃん……だっけ？俺って結構筋肉あるんだよ？ホラホラ」

「あ、あははっ、そ、そうだね」

「俺慶応大学出身なんだよね！しかも主席で医学部卒業！結構エリートだと思っただけどなー?」

「え、あ、うん、そうだね……」

時雨を狙い始めたチンチ○共。確かに容姿は合コンで絶対にお目にかかれないタイプの美少女だ。人数合わせで連れてきた娘の方が自分より人気出ちゃうなんて、お決まりの地雷パターンじゃないか。でも、足柄さんはムンムンの色気を出しながら雄を寄せ付けている上容姿でも引けを取らないので沼に落ちることはないだろう。

それにしても、詐称じゃなかったら何気に凄い経歴と地位を手している奴らばかりだな。街コンでも巡り会えないような奴らが集結

しているここはまさに合コン界のロイヤルストレートフラッシュだ。今のうちの拜んでおこう。

あと俺が言うのもなんだけど、時雨のあのダルそうな顔を見てほしい。今すぐにも帰りたいたいと訴えてきているかのように思えるぞ。

「えーつと……し、宍戸くんの趣味は何なのかな？」

「せ、拙者のシュ、趣味はア……ハア……ハア……ファイ、フィギュアを集めてペロペロ祭りをする事でござーリンツ、キリツ」

「キモツ、あ、コホン！へ、へえ……そうなんだあ……」

時雨とは知らない同士って設定なので、初対面を演じきるのだ。時雨が俺と二人きりで二次会行く流れを作ってそのまま鎮守府へ帰る手はずなのだが……それ故に、時間がすぎるのが遅いと感じているようだ。

要するに足柄さんさつきと適当な社長さん選んでくれないかなあ……ってのが、時雨と俺双方の本音である。

「……ん？」

「あ、あれ？どうしたのかな宍戸くん？」

「あ、いや、あれ……」

襖の隙間から見える向こうにいる人物は、俺たちも見覚えがあると思う……今でも時雨たちの提督をしている蘇我提督と、荒木大将じゃないか。

なーんだ、ただの少将に大将か……って、全然なーんだで済む話じゃないんだよなあ。

『いやはや、最近の若者は元気はないとは耳にしますが、私の部下達を見るとそうも思えない……両極端とは正にこの事！』

『ウム……』

『所謂、コンパ……とやらにうつつを抜かし、自分を磨く事を疎かにする者も、最近は増加傾向にあると聞きます……いやあ、娘達がそのように育たなくて本当に良かった！』

『ウム……確かに、下らんな』

ヤ、ヤベエ！さつきから女共の台詞の大半を占める言葉、ヤバーイじゃなくて、ガチでヤバイタイプのヤバイ。俺もそうだし、海軍の時

雨や足柄さんが合コンなんかに来てるって知られたら、死ぬウ！

「「ヤバーイー！」」

「も、もう少し静かするでゴザルウツツ!!」

「「え?」」

「あ、い、いや、コホンツ！コチョコチョコ……」

「え?あ、あー！僕も静かにした方がいいと思う！ほ、ほら！この料亭って和式で声が通りやすいし！他のお客さんの迷惑にならないから！」

足柄さんも時雨の伝言でその真意を知るが、他は頭にはなマークを付けてながら、最後まで宥めた理由を知る事はないだろう。

クソオ……なんで料亭にあんな大物達がひよっこりいるんだよオ！

あの人達がここにいる……この分だと他にも海軍の人来そうだな。足柄さんも能天気にしてる場合じゃねえぞおい！サツサと恒例の席替えて手とか握りまくって既成事実作りやがれエ!!これ以上海軍関係者が来る前にツツ!!

『美味しー！うめー！ホラホラ！ここでイッチバーン高いお刺身持つてきてー!』

『んく確かに新鮮だけど、少し脂が乗り過ぎかなあ?あ、春雨つ、穴戸さん達はどうかしら?』

『はい！足柄さんと時雨姉さん以外は死兵なのでお兄さんを取られる心配はありません！よかつたあ……』

『いや、そういう事じゃなくてね?でもその分だと、上手くいつてるらしいわねっ』

『それにしても偶然居るんだからびつくりだよねー！合コン会場がまさかここだったとはねー！ムツフツフゝいい肴ですなあ〜!』

『え?あ、そ、そうね！偶然よね偶然！偶然ここに来て、偶然いたから、偶然見てるだけよね！うん！うんっ!』

『そんなに強く肯定する必要はないと思うけど……あ、でもでも！もしかしたら穴戸くん、どさくさに紛れてさく本当に時雨と朝帰りし

ちやつたりねー!』

『はいッツツ?』』

『あ、なんでもないです、はい……』

『それでは、ドキッ!イケメン海軍軍人ダラケの合コンパーティー!ワーパーパチパチパチパチイ!!』

『『うえええええい!』』

『結城中尉、私はこのような場所で親睦会を開いている場合では……』
『何言ってるんすか!?若い時に青春を謳歌し、今しか学べない事を学ぶ……それでこそ、希代の名将となるに相応しい軍人としての行動ではないんですか!?ドヤア』

『結城さん素敵ー!』

『ダルルルルルルオオオオ!?俺ツチは希代のスーパー提督だからさア〜』

『ワアー、ワタシモウヨツテキチャッター』

『酔っちゃった?俺もだよ……君の瞳にさ。ほら見てご覧?君と言う美しさが心に攻め入ってきたせいで、俺の下半身は軍拡を余儀なくしたんだよ?これはもう戦争だね、第一次ズゴバコ戦争』

『キモツ、セクハラで通報してやる』

『N O O O O O O O O O O O!!』

『大鯨もつと食べるかも!』

『い、いいえ、私はもう結構ですからあ〜!』

『うるせえカモオ!身体が細いのに胸だけ大きいとか腹立つかもツ!食べて太れかもオー!』

『や、やめてくださあ〜い〜!オイゲンさんも見ていないで助けてえ〜!』

『あ、あはは……でも日本食ってカロリーが高くないからあまり太らないと思うよ?』

『た、確かに……くう〜!悔しいかも〜!』

『……でも、秋津洲の脚って、凄くスラーってしてるよね?ちよつと羨

ましくない?』

『あ……たしかに、私はむっちりしてるのにッ』

『え?あ、ちよ、た、大鯨?さっきのは冗談かも!だ、だからそのハンバーガー置いてかも?って言うかドコから取り出したかもやめてやめてやめてかモオオーツ!!』

『ええつと……こういう時って、インガオーホー?って言うんだだけ?』

クツ!他の客の声が気になって仕方がねエ!会議でもやってんのか?もし知り合いがいたら合コン行つてたなんて説明できねえぞ?

……あ、でもよく考えたら俺はある意味変装してるから俺だけセーフなんだ。見つかってどうしようもなかったら逃げよう。

「まづうちさあ……80インチのテレビがあんだけど、よってかない?」

「「えー!良いんですかー!ヤバーイ!」」

「た、だ、しー俺が選んだ子だけ、特別にね。俺、一途な男だから、さ」

「えー!じゃあ誰なんですかー?」

「それはまだナイショ、これが終わってからメールするからね……俺が選んだ女の子にだけ、ね」

「「キヤーツ!」」

……え?いま叫ぶほどの事言つた?それとも女性特有の黄色い歓声はこれほどまでに安いものだったと言うのか?

日本人女性特有の「キヤー!」は、お金持ちと言うステータスと、ちよつとした言葉で手に入るような、簡単なものだったと言うのか……!?

「ご、ゴホン!み、みんなもう好み相手は見つかったかな?」

いぞ時雨!流石は俺たちの特攻隊長!

色々な人に気を使わなきゃいけない環境は凄くストレスになるから、これぐらいで切り上げるのが丁度いいのだろうって言う時雨からの優しさだぞみんな!

「わ、私はもう見つかったかな……チラッ」

「あ、あはは……俺も、見つかったかな……」

足柄さんはその成熟された熱い目で、鉄鋼業の社長さんに目を付けていた。いい観測眼だな、俺もかなりいい人だと思うし、このまま既成事実を作れば万事オツケーだな。

死兵共も、ウンコみたいな顔してないで自分から率先して行かないと行つちまうぞ。

「……俺たち」

「二人で行くよ……うん」

「なっ？」

もう一つのカップル成立！意外！それは男同士の奇跡の出会いッ！横に女がいるのに、まさか男を取るといふ前代未聞の出来事発生！ブログに載せとくぜ。

「え、え〜つと、じゃあここは一先ず解散つて事で！みんなお疲れ様！」

「「ヤバイー！」」

ー外。

気に入った男子へメールを送る事もできる女子だったが、案の定俺には一通もなかった。

足柄さんは男を一人ゲットし二次会へ。時雨は外で待ち、そのまま俺を待つて帰ろうとしたその時だった。

「ちよつと待つてつて！時雨ちゃん！」

「え？あ、僕？」

「君しかいないでしょ……俺のミューズ」

一度は女の子に言つてみたい台詞であり、これを電車の中で聞いた俺吹き出しちゃうと思う。

「俺のメール、見てくれたよね？80インチのテレビで、甘酸っぱいロマンス映画を、君だけと見たいって」

「うん、行けないってちゃんと断つたはずだけど？」

「それでも、諦められなくてさ」

「……僕は穴戸くんに行く約束があるんだ。だから行けないよ」

「何であんなオタク野郎を選ぶの？俺はあんな社会のゴミよりよっぽ

ど、君を満足させられると思うよ？ほら、俺お金あるし、結構イケメンな方だと思うし……経験豊富だし、さ？」

とてもいやらしい手で時雨に触る。

「い、いや！離してえ！」

「いいから！絶対に後悔させないから！早く来いよオラア！」

「イヤあ！助けてえ穴戸くん!!」

「や、やめろお！ブ、ブヒイ！」

「あ？テメエ俺様に指図するつもりかこのキモオタク野郎」

「せ、拙者は知ってるでござるよオ！き、貴殿には、カ、彼女がいる身の上だと言う事をオ!?フェイスブックで見たでゴザルウ！」

「は？それがなんだよ？どうせ彼女とは別れるんだし、今新しい彼女見つけても問題ないでしょ？」

「はい倫理的にアウトだね、時雨」

「そうだね……もう出てきていいよ」

時雨が促すと、一人の女性が店内から出てきた。

「あ、アケミ？」

「何やってるのよツ、タクヤ？」

はい、意味がわかってない傍観者様（野次馬）に説明すると、俺たちの合コンは足柄さんとイイオトコをくつつけると言う使命の他に、もう一つの使命があったのだ。

このアケミとか言う俺たちと同じ海軍軍人は、浮気をされているかもしれない……女の勘で割り当てた疑惑だけで本当に浮気をしている事を突き止めたのだ。足柄さんのついでに、時雨に頼んで誘き寄せてもらおうよう仕向けたのだ。

そして、

「「私達もいるわよ」」

「ひ、ヒナ、サクラ、アオイ、ハナコまで……な、なんで……!?!」

後ずさるのも無理はない、なぜならこの四人もコイツに浮気されていた、可哀想なビッチ共だからである。

何故ビッチかって？話を聞けば、こいつらもこのヤリチンと付き合いのために前の彼氏と別れた口らしく、一見すると被害者のようにも思

えるが……明らかにお金で彼氏を変えたような後ろめたさを感じた。
それを勇気を出して問うとね、俺がゴミみたいな目で見られたんだっ。俺、なにも悪いことしてないのにねっ。

でも浮気は悪だ。男女ともに、とても悪いことだ。やってはいけな
いぞ……うん、教科書に載せたいぐらい悪いことだっ。世の中の男女
に知らせたいぜ。あ、でもそうになると日本文化の代表格である源氏物
語とか燃やしたほうが良いかもな。

何はともあれ、このスカツと一部始終を見せつけられている俺はこ
う思った……俺、要らなくね？

「穴戸くん、路地裏」

「あいよ」

「は、離せテメエ!!このクソオタク野郎!!殺してやるツツ!!」

「拙者はこれでも凄く鍛えているでゴサル。あとさ……テメエオタク
舐めてんじゃねえぞツ、時雨に殺されるぞツ」

「ヒツ……」

シャツを引っ張って、時雨に頼まれた通りに路地裏行きを決行す
る。月魔にやった時と同じだな。

コイツがいきなり静かになった理由を後ろを見て確認すると、時雨
を含めて複数の般若顔が居た。ホラーゲームで出てくる後ろを付け
狙うタイプの奴だ。

連れ出した先に団地があつて……って、やっぱりストーリーカー野郎の
時と同じじゃないか!デジャブ。

「さてと……このままじゃボコられるぞ?」

「そろそろ本心で喋ったらどうだい?浮気者です、ごめんなさいって」
「フンッ!俺は謝らないぞ……金に釣られるクソ女共になんかにツ!!
JAFGMエンバーの名にかけてツ!!」

「「JA、FG……?」」

「えっと……穴戸くん、じえーなんとかって、なにか分かる?なんかの
団体みたいだけど……」

「んん〜なんだろう?経済関連の団体かな?でもなんか聞いたことがあ
るんだよなあ……あ、思い出した。思い出したけどその前に一つ質

問。金に釣られるクソ女とか言っておきながら、なんで時雨をあんな強引に誘おうとしたんだよ？あのまま行けばお前が死んでたぞ？」

「僕の心配は？」

「時雨ちゃんはこの女共みたいに自分のことしか考えてない奴らとは違ったからだよオ！ちゃんと足柄さんとか言う先輩立ててたし、自分を構わず他の娘たちにもバツチリフォロー入れてたし、普通に可愛いし……なんか久しぶりに、すげー好印象持ったから、つい……」

「……………」

仮にも自分の彼女つつつた女たちを「この女」呼ばわりしてるぜコイツ。

そしてこの中で唯一褒められた時雨を少しだけ凝視していた女共。こんなクズの格付けをまだ真に受けて嫉妬してるのかよ？と言いたるところだが、女性つてのは目立ちたがりやな生き物であり、他と比較する時自分より優ってるのがあると、なんとなくでもムカつくのだ。

「コッホン……それで穴戸くん？この人が名前をかけているJAF Gってなに？」

「ニュースで名前出てきたから知ってるだけなんだけど、反フェミニスト団体らしい」

Japanese Anti Feminism Groupの略称で、女性を優遇しすぎる社会に不満を持ち、男女平等化に反して昔ながらのスタイルを理想として目指す政治活動を主とした団体。

ネットとかで載ってる話だと、主な構成員は女のためにした横領で逮捕された人とか、痴漢冤罪に遭った人とか、お金を貢がせた拳句に浮気されて切られた人とか……まあ要するに、そういう人たちです。

日本の若者は凄くやる気がないとか言ってたけど……あるじゃんいっぱい！日々のストレスに不満を持つ日本国民が行動力を持ったら、日本なんて革命ラッシュで即滅びるぜ？国防ってレベルじゃねえぞこれ！？

ご存知かとは思いますが、日本国民に革命なんて起こすほどの行動力もなければ、そこまで行く決定的な理由もないわけだし、だからこそ俺

たち海軍はああやって外敵駆除に専念できるんだけどね。

……あ、そうだ！外敵って言ったら、仮想敵国の中国とロシアに對しての対策案考慮とかも安全保障学の論文に加えておこう。

敵は常に一人しかいないとは限らないッ……そう、今の俺のように。

『んんッ、ここらも物騒になって来ましたな』

『そうだな……』

や、ヤベエ目立ちすぎたか？蘇我提督と荒木大將がこっち見てる。こっちみんなBaby。

『あ！蘇我提督！ぐ、偶然ですねっ！』

『ササッ……』

『おお、村雨くんは春雨くんじゃないか』

、外で会うのは本当に偶然だな。ああでも今はプライベートだ、敬礼はよしてくれ』

『『いいえ！』』

おお！あの規律正しい敬礼の中に愛らしさを交差させるのは、正に鎮守府のアイドルこと村雨ちゃんと春雨ちゃんじゃないか！なんでもこんな所にいるのかはさておき、偶然にもあの人達の注意を釣ってくれている奇跡的なサポートは正に神がかってる！これは勝つる！

そしてこっちでは時雨がシャドーボクシング始めやがった。明確な殺意はどんな男でも本能的に震え上がらせる所だが、まだ意識を保っているところを見るとコイツは結構肝が座ってるらしい。

そして観念したついでに、話す必要のない蛇足までベラベラ話し始めた。

「……俺は今までのIT企業の社長って看板を使ってかなりの数の女と付き合ってきたが、少しでも金にケチつけるとすぐに雰囲気悪くする典型的な金目当て女共ばかりだった……相性が合わなくても人脈狙いで思わせぶりな態度取ってきやがって結局進展無しとかアツ！俺の中身をちっとも見ねえクソ女ばかりかこの世はア！」

「それアタシ達のコト言ってるの？」

「だってそうだろ！ああの布陣で俺が普通のサラリーマンだったらお前

ら俺のこと見向きもしなかっただろ!？」

「ナニそれ逆ギレ? イミワカンナイ」

「馬鹿馬鹿しい……穴戸くんもなんか言ってるよ?」

「……………」

「穴戸くん?」

「え、あ、うん、そうだね、うん……」

「……………」

時雨、言い返せないからってバカボ○ドみたいな顔で俺を見ないでくれ。

いやさ……知らないかも知れないけど、俺はオタク状態でも普通に話してたんだぞ? しかも女子が好きそうなスイーツの話題とかさ、色々話しかけてんのにさ、気持ち悪がってたじゃん。

確かに色々遊んだ感は認めよう。でもイケメン度だったら端にいた医学生の方が凄かったし、話の盛り上げ方は鉄鋼社長の方が良かったし……コイツはなんか、臭い台詞を突然横から入れるしか能がなさそうだったのに一番盛り上がってたし……要するに金で相手を決めるのと同じみたいなの? 俺の弁護士じゃ言い返せないよお!

「俺はこう言うレベルの低い金だけクソ女達をやり捨てしたり、浮気して屈辱を味合わせる事が俺の復讐なんだ……一切クソ女に金を使わずにな」

「「最ツツツ低!!」」

超短期間のお付き合いをする場合はちやんと写真とかに撮ったりして、ラブラブ感を演出しながらインスタグラムにアップ……そうする事により「お酒飲まされてレ○プされた」と言われないよう証拠を作る。

「俺の同志の中には……痴漢冤罪で捕まったその日に仕事、家族、後に裁判で使うための財産……すべてを失った人もいる。俺も合意の上だったのに数回も強姦罪に掛けられた事がある。金持ちなのに貢がないと分かれば騙されたと思って逆ギレしたんだろうなア? ハハハ……………」

「アタシ達そんなことまだしてないじゃん。被害者ヅラしてんじや

ねえよ才変な団体に入ってるくせに!!」

「痛え!うるせえクソアマJAFGの悪口言うんじゃねえ!女の法治権力の陰で、法律では見向きもされない俺たちみたいな心の被害者は、互いに助け合って立ち向かい、戦う他に選択肢はないんだア!」

「アホくさ……穴戸くんは学校で凄い事について討論してたって言っただよね?こんな余裕でしょ?言っただよって穴戸くん!」

「……………」

「さつきからその沈黙は何かな?かかと落として頭パカンされたいの?」

「わかったよオ!ええつとき、今は強姦じゃなくて、強制猥褻罪だから。あと、海外でお金持ちだつてことを隠して嫁探ししてた富豪さんがいるから、アンタもそうやって女探ししたらどうだ?」

「それも考えたさ……でも、そうなるの見向きもされない……俺みたいな特色の無い男でも結婚できるような時代は、もう帰ってこないのか……………」

「穴戸くん、僕は女性への侮辱を撤回する言葉を探してたんだけど……………」

「分かった分かった……アンタ等の言うことは最もだけど、極端だ。こいつ等の半分がクソ女だとして、もう半分がいい女だでしょう。いい女までもを犠牲にして、それでなんになるの?お前を襲ったクソ女への復讐は、果たされるわけ無いでしょ?」

「クツ……………」

握りしめられる拳、股を掛けられた女性たちの形相、そして手をコキコキ言わせる時雨つち。いやあ……俺つちまで標的になつてるパティーンですか?いや、俺なにも悪いこと言っていないでしょ?」

この様子を気にしていた野次馬もことごとく退散して行き、周囲の目を気にせずボコリタイムが始まろうとする……かに思えたその時だった。

細い一本道から、複数の男性がこちらへ近寄ってくる。最初警察かとも思っただけど違ったわい。

「アケミ?こんな所でなにしてたよ?」

「カ、カズキ!? え、なんでここに!？」

「ヒナ、お前病院で病気のおばあさん御見舞に行ってたんじやなかったの? 遅いから探してたんだぞ?」

「え? あ、そ、そうよ! 今帰えろうとしてたところよ!」

女どもが親しそうに……しかし、家族のようにではなく、一時的な恋愛関係特有の雰囲気醸し出しながら話す様を見た瞬間、ハッキリ次の展開が脳裏に浮かぶ。

「私達はただこの浮気男を肅清してたのよ! 悪いツ!？」

「「え!?!」」

「アケミ……こいつが浮気してるのって、この娘達にだよな?」

「え、そ、そうよ! 私是可哀想だと思って仕返しを手伝」

「いや!! 俺はこの場にいる女共と全員寝たことあるんだぜえ!?! 彼氏がいるなんて一言も言わなかったからなア!?!」

「……おい、どういう事だよオイツ!!」

「「え? あ、ち、違うのこれは!」」

唯一浮気していなかった女がそう叫び、事態は混沌と化す。

そして憶測が真実を呼び、浮気されていた女どもの復讐劇は、まさかマサカのドンデン返しッ! 自分たちの浮気を柵に上げながら逆上していた本当のアバズレ共でしたとさア!

確か紹介された時に前の彼氏と別れたって言ったので、実質三股していたのか、或いはこの彼氏軍団こそが「別れた」男共なのか。

なんでこいつらの彼氏がここに居るのはともかく……なんだこれ、スゲースカツとするぜエ!

つーか、どれだけ股掛けてんだよ? 人類全員が全員の彼氏彼女って事でもうよくね? そうすると、人類皆チーター(浮気者)って事になるか。

「時雨、流石にこの惨事への弁護はできない。ごめん」

「いやこつちこそごめんね穴戸くん。流石にこれは……まさか彼女たちがこんな……うん、ごめん」

「……おい、今のうちに逃げる事をおすすめるけど、どうするう?」

「あ、ああ……逃げる。そしてこのクソアマ共に復讐を誓うツ!!」

誰に誓ってんのか分かんねえけど、とりあえず逃げるのが得策だな。

浮気はとんでもない悪だ。そして浮気が浮気を呼ぶ……その教訓を覚えてくれたら幸いだが、なんにしても金に関わる事ともなれば恋愛事情が変わっちゃう世の中に異議を唱えたいのは俺も同じだ。

富か、それに属する付価値か、それで人を決めるのは、人間の本能なのだろうか？

「人間は……いつまで経っても醜い争いを自ら生み続けてしまう……そんないつまでも進展しない、愚かな生き物なのだろうか？」

「カッコ付けてるところ悪いけど穴戸くん」

「ん？」

「その格好だと、凄くカッコ悪い」

「……………」

そういえばオタク装備来たままだった。典型的オタクがカッコイイと言われる時代は、来るのだろうか？

教官経験、そしてデジヤブ

―駆逐艦、艦上。

更に数ヶ月後。

安全保障学についての論文ではなんと、またもや齋藤中佐が「現代の日本における教育方針の問題点と解決法」で最優秀賞を取りやがった。他は災害対策とか緊急時の対策とか……いや、日本の災害対策はこれ以上ないぐらい良いから。

俺は仮想敵国との交戦も考えろって論文で優秀賞を取ったが、最優秀賞取られた悔しさのあまりに持ってきた将棋盤を使つてボロ勝ちしてやったぜ。

出る釘は打たれる文化舐めんじゃねえぞオラアア!! って感じで二度三度と連戦してやった。

スカツとした所で順調に提督への道を歩んでいく過程の一つとして、現在俺はイージスシステム搭載した駆逐艦の上に乗っている。

「それでは訓練を始めるー俺は宍戸龍城大尉! 数週間だが君達新米に海軍兵教育の基礎中の基礎を叩き込む事を閣下から直々に御命令を賜った者だ! 貴様らはこれから俺の指導を経て、一人前の海兵となるのだア!」

「サー! イエツサアアー!」

「ここはアメ公のネイビーか貴様らア!? 日本海軍の日本男児だったらもっとマシな言葉があるだろう!? 入る際に習わなかったか貴様ラアア!!」

「あ、そうだった! 宍戸大尉に対しイイ……敬礼ツ!」

「ツ!!」

コロンブスは大航海へ向かう前、この景色を見たのだろうか? 目の前に広がる大海原は、猛暑時の道路に浮かぶ陽炎のように波を立て続けー母なる海が、艦上から30メートルぐらい下にある。

そして敬礼する30人のムサイ男達の正体は、言うなれば水兵であ

る。

階級は低いが……いや、低いからこそ最初の半年ぐらいは付けられる教官や上官の手足みたいない扱いを受ける羽目になる。幹部への候補生だからと言っても、上官しかいない環境にいれば教育を受けていない奴らと同じ目に遭う。

しかし、普通なら准尉か熟練軍曹あたりに指導してもらおう所を、大尉と言うすごい上位階級の俺様から直々に指導を受けられるコイツ等は後で誇って良いと思う。

なぜ指導をするのかと言うと、これもプログラムの一部だからだ。新米の教官つてのは誰もが辿る道であり、当然ウンコみたいな教え方で新兵達のヘッドスタートが崩されても、責めるものは誰もいない。こういう所は普通の学校と変わらないと思う。

学校の頃、クソみたいな先生に教わった事あるからよく分かるわ。ただ、今回は訓練と指導の様子を見られているので、適当に済ませどころか本気でやらないと首が飛ぶレベルなのだ。

でも俺は舞鶴にいた時は副班長つて言う面倒くさい事を肩代わりする役を仰せつかっていたので、新米への教官経験は豊富な方なのだ。

あ、軍曹つて言えばあれだ、よく映画とかで見る新兵に怒鳴りつけて軍の恐ろしさをその身体に染み込ませるあれ。あれやってみよう(※海軍と陸軍では多少新兵への扱いが異なります)。

「じゃあテメエらの自己紹介から始めるぞオラア!! オイそのテメエ!! 何しにここに来たア!?!」

「サー! 海軍に入るのが夢だったからです! サー!」

「よオオし威勢がいいなア? テメエのフェチズムを言ってみやがれコラア!!」

「さ、サー! 裸にニーソが最高であります! サー!!」

「(いや、本当に暴露しなくても良かったんだけど……) 良く言ったア!! 中々マニアックだが俺も良いと思う!! 実際にやってもらいたい同僚も俺の所にいるしなア!」

「「え……そ、それって……」」

「勘違いするな女だ女ア!!男のそれを見るとか拷問でしか無いぞ!!」

いやさ……怪我して太腿に包帯巻いてる整備工員を見て、あ、これちよつとニーソじゃね?あ、キモ、オロオロオオ!!って思った事もあるけどさ。

「じゃあ次お前のフェチはア!?」

「サー!萌え袖でブカブカなガーディアン着てるのにスカート履いてなくて超ミニスカワンピみたいになってるのも最高だと思えます!サー!」

「心がピョンピョンするよなアアレはよオ!?スカートは履いてるけどあれみたいなア!」

「……おお!」

あつちの方で艦上訓練に勤しんでいたのは春雨ちゃん。身長小さく脚細くて、スラツとしてても身体自体が小さいためどうしても服の幅がブカブカになる。

そんな小動物のように愛らしく、動きも何もかもが可愛いに特化した春雨ちゃんがガチムチ海軍の中にいたら……目と心を奪われるのは至極当然である。

そんな男の生理現象とも言える凝視に気付いたのか、春雨ちゃんの整備をしていた整備工員の暴力お姉ちゃんがレンチ持ったまま近づいてくる。

「宍戸くん、僕の妹を士気向上の餌にするのやめてくれる?嫌がってるじゃないか」

「うん、ごめんね。でもさ仕方がないじゃない!?話題に上がったんだからさあああ!」

「……ッ」

「分かったからごめんて、レンチそういう使い方するのやめろ」

「次邪魔したら脳天ぶち抜くから」

邪魔してないんですけど。

「フウウ……ああ言う海軍過激派もいるから気を付けろよ?俺たちは規律正しき、由緒正しき海軍であり、そして国民を守る立場にある軍人であるが故に、常に死と隣り合わせだと言う意識を向けなければな

らないのだ」

「は、ハッ!!」

……ん？時雨が手話でなにか言ってるぞ？なにになに。

後で 殺す 絶対。

ごめん。

手話は某アニメ映画に影響されて覚えたものである。殺すなんてどこで覚えたんだろう？

「まずは砲術辺りの訓練からだア！近年技術の進歩が加速しすぎて、駆逐艦はプレデターミサイル発射機みたいな考え方をしているやつがいるかも知れない！しかしそんなプレデターに砲台がまだ付いてるのはただ昔の名残だからでは断じてないッ！」

……そして教官としての義務を果たしてゆくのだ。もちろんマニユアルには従うけど、俺なりにできるだけ分かりやすい教え方言葉と実践を混ぜ合わせて新兵達に基礎を叩き込む。

砲術とは、要するに大砲に関すること全部である。そう説明した方が早い。

まず補充の仕方から始まり、実際の撃ち方、命令の種類から……弾道予測、撃沈時の報告の仕方と報告の種類、暗号まで様々な事を教えていく。

まだまだ新米のアマちゃんには砲術士専用の礼節やら海軍の敬礼やら色々教えるのだが……正直、喉乾くぜ。

これさあ……無駄に教えること多すぎね？絶対安全の精神と知識は最優先で教えるけど、礼儀は教えても意味ないと思

う。新兵訓練所と軍学校は、礼節と敬礼を身に付けるのがその生活の大半締めてるから砲術士の礼儀作法とかマジでいらなと思う。

艦の中でも着く職で上下関係決まったり、例えば砲術士の中にも先輩後輩の差があつたりと……まあ一言物申せば、ヤベエ！あとメンドクセエ！

みんな平等でいいじゃん。みんな国に仕える兵士なんだし、陸も空も海も関係ない。みんな平等で、現代日本の小学校の体育祭みたいに、みんな一緒にゴールすればいいじゃない！

……とか言ってるると共産主義者とかマルクス主義者と罵られるので、口に出さないように気をつけよう！

「ここで砲雷長が砲術長に『右弦の敵を大砲で撃て！』みたいな事を言ったら砲術長と連携して撃つんだ。撃つタイミングや照準を指示してくるから、それ等のやり方も説明する」

「大尉！質問があります！」

「何だ言ってみろ」

「女の子達が戦艦や重巡に乗って戦うアニメを見たのですが、あれぐらい容易に運行させる事は可能なのでしょうか!?!」

「……その分だと、『ぱんつああふおおお！』って言いながら戦車ブチかます可愛い女の子のアニメも見てるな？質問で返させてもらうが、従来戦車ってのはあんな高速移動しながら撃つたりするモノじゃないし、車長が常に頭上に出してたり、戦車が転がって無傷で済む訳がない」

「た、確かに……自分は陸軍ではないので、戦車の常識などは分かりませんが……」

「海上も一緒だ。たかだが、高一の女子が、ミハイル・ヴィットマンやホラーシオ・ネルソンの真似事をするのもどうかと思うが、俺の推測だと彼女達は俺たちより余程実戦慣れしている事が挙げられる」

「……と、言うとは……?」

「お前たちに伝えなきゃいけない事の一つだが、現実的な資金の問題で本気の演習は年に数度しかやらない」

艦船同士が実戦を想定した戦闘演習的な意味で。動かすのにも一苦労であり何千人って数の将校とバックアップが必要な上許可も降ろさなきゃいけないので、軍務上やらなきゃいけない事だけど本当に面倒なのだ。

艦娘の訓練はすごくお財布に優しいし、6隻vs6隻だったら鎮守府内でもできるから楽なんだよなあホント。提督の決断で決められるし。

戦車はとても上手くシステムを作ればまだスポーツレベルの許容範囲かも知れないが、戦艦がバンバン毎日撃ちまくるとか何処の大富

豪達が金動かしてんだよ？　つてぐらい見てて金の動きが心配だった。あれぐらいバカバカ撃てるんだったら、今頃その練度で日本海軍は世界征服してるぞ。

そもそもあの程度の人数しかいない女子高生が大型戦艦動かせるのか？　出来るんだったら彼女達に世界大戦を任せたい、そう思ったのは俺だけじゃないはず。

「だからなるべく演習なしで立派に仕事を果たせるようにするのが俺の役目だし、そういうシステムが既にあるのだ」

「特に現在では深海棲艦と言う全く新しき敵が加わった事により、今まで通りの戦術では通用しないと……」

「そうだ裸ニーソ。まあ、だからこそその艦娘なんだがな？　でも普通にこのイージス艦は通用するし、艦船が軍縮の名の元に厄介払いされる心配はないと思うが……ミサイルとか一本で一億ぐらいするんだよ。それ無駄撃ちするとか腹立つだろ？」

「た、確かに……」

「無駄撃ちして、常に超高性能AIレベルの完璧さを求めてくる国民から『金無駄にする海軍要らねえ！』とか言われないうちに、しつかり俺の背中を見て一人前になりやがれエ!!」

「ハッ!!」

ー自室。

「つて事があつたんだよ。そこで時雨の意見を聞かせてほしい」

「正直に言うと、フィクションの世界の出来事を訓練の話と混ぜて説明するのはやめたほうが良いと思う……」

「ローファンタジーならオツケー何だよ時雨くん。別に戦艦は魔法で動いてるつて説明してる訳じゃないんだし。あ、そこ王手です」

「クツ……！　父上にも負けた事がないこの私が……何故……！」

斎藤中佐、それ間接的に俺が中将閣下勝ってる事になるんですけど。

自室に戻って、教育指導の文を書き終えた後に来るのは将棋の挑戦

状だった。中佐を将棋盤の上でボコボコにしてからと言うもの、事あるごとに勝負を挑んでくるのは流石に疲れるでゴザル。でもボコボコに出来るからいつでも相手してやる。

「キツイー！ プログラムマジキツイッスウウー！ ドキッ！ クサイ男だらけのムサイ海軍生活ッウウー！！」

「テメエは黙ってレポート書いてろ。あと本来軍隊なんて男しかないもんだぞ」

「でも女の子いるじゃん！！ いるのに最近男ばかり教育してて苦しいんだよオオ！！ マジ可愛い娘と即ハメしてええ！！ 秋津洲さんとか大鯨さんとかダンケとかマジソクソク（出し入れ）ムサペクペク（マ○コに）モオオオ！！」

「今の発言秋津洲さんたちに報告して時雨」

「オツケ」

「超マジメックスになるからやめて」

結城や斎藤中佐も俺と同じく新人たちの指導に当たり、マニュアル通りの指導法を実践してみても改善点をそれぞれが見つけてレポートに提出するんだ。俺たちにとっては教官経験の延長みたいなものである。

これはとても小さい事で、一見するとあまり意味を成さないかも知れないが、例え幼児が立てる提案でもそれが理にかなっているかも知れない事もあるんだーと、大将閣下が言っていた。

アブラハム・リンカーンはグレース・ビリングズって11歳の少女に、髭を生やせば存在感が出るって言われて本当にやったら大統領になったからな。そういうアイデアを大切にするため、例え幼稚園児が言ってることでも聞き入れたりするのが荒木大将のポリシーらしい。

日本だったら子供の戯言、或いは大人に命令するクソガキだと言われて叱られるのが関の山だ。

みんなが固くて硬い日本社会に、ピッタリ適合するようなロボットを生み続ける教育方針に危篤を感じるとも言っていた。『飛び抜けた才は、日本社会では必ず引きずり降ろされる。出る杭は打たれる……哀れよッ』とかも言っていた。

日本海軍は功績とかも考慮し始めたけど、昔は学歴とキャリアでしか昇進はあり得なかったから、珍しい国だよな。

「数週間後には地方への研修もあるし、スゴイ！提督が実際やってる事より遥かに色んな事勉強しなきゃいけない俺、スゴオオオオイ！！」

「分かったから黙って斎藤さんと一緒に将棋でもしてたら？よそ見しながらだと失礼だよ？」

「よそ見してようが何してようが、勝てばいいですよオ……ねエ？斎藤中佐？」

「ン、ンムウ……」

「じゃあここ空いてますよ、王手。金銀勝ちです」

「ク、クソオオオ!!」

「すごいね穴戸くん。斎藤さんが弱いのか穴戸くんが強いのかかわからないけど」

「え？まあなんて言うのかな……タダタダ、俺が強いだけ、みたいな？尊敬……って言うのかな？そういう目で見始めても、何もおかしくなだと思うけど？ムフフフ」

「はいキモイね、うん。春雨と村雨がないから褒めてくれる娘は何処にもいないよ、残念だったね！」

「ハ、ハワア〜！穴戸さんカツコイイデスウ〜！」

「黙ってレポート書いてろツ」

「はいすいません」

俺たちは数週間に及ぶ教官訓練と、教育方針及び教育法の問題点を集めた論文をまた書かされる。

マニュアルに対しての問題点は見当たらなかったからので苦労した。世界に誇れる日本海軍であるからこそ、下士官や兵卒の訓練法には隙がない。

だけど、この前プログラムメンバーとして特別に見せてもらった大佐以上の高級将校達が行く学校では、また安全保障学と防衛学を学んでいた。こんななんばっかだなオイ。

と思っただけど、日本海軍だけでなく日本全体の歴史的を振り返り、

総じて自虐史観で話していた事が分かった。下の者には愛国心を謳うのに対して、それとは真逆……そして論理ロボットみたいな考え方をしていたので、そこを不思議に思った。

これだったら技術大国日本は国防を管理するAIでも作って全部任せたらいいじゃんって思った。どうせ上の連中なんて保身と口ポットみたいにしかならないからな。

あ、でもあの場でそれ言ったら殺されるか。ここでも出る杭打たれる文化……つかこんな独裁国家と変わんねえじゃねえか。社会的風潮そのものがスターリンみたいな？強く自分の意見を断言する政治家もいたけど（社会的に）抹殺されたからなあ。

「失礼しまあ〜すっ……あ、宍戸さん戻っていたんですねっ！」

「そう、君たちの元にね。ロマンチックだとは思わないか？」

「素敵ですお兄さんっ！私の部屋にも来て下さい！」

「お、春雨ちゃんに誘われちゃったなく。仕方がない、漢としてイクしかないだろう」

「やったあ〜！」

「オイ卑怯だぞ宍戸オ！まだレポート終わってねえのにテメエ春雨ちゃんの部屋行く気かよオ!?もし春雨ちゃんのトコ行ったらオレも行くからナア!？」

「断念……」

「残念……みたいな感じに言うんじゃねエ!!」

煩い学友はともかくとして、時雨はまた俺のノーパソ、そして村雨ちゃんと一緒に色々な事を調べてる。貰ってる給料で問題なく買えるはずなのに俺のパソコンばかり使うのは、カスタムメイドのスーパーノートパソコンだからだ。とにかく早く、スピードが落ちない。

自作PCは広く認知されているだろうが、自作ノーパソはとて高度な技術が必要なのだ。あ、これでビジネス始められるかも。元海軍技術将校による自作ノーパソが量産体制を整備！みたいな？

「……あれ、宍戸くん。またメール来てるんだけど」

「もしかしてまたクソジジイからとか？んな訳ないよな、ハハハ」

「病院からだから多分そうなんだと思うけど……宍戸くん、まだ懲り

「てないの?」

「何が?」

「ポチツと」

購入明細。

この度は、EROをご利用いただき、誠にありがとうございます。誠にありがとうございます。ご購入の明細を送りますので、内容をご確認ください。

雌猫教師4くドスケベな保健体育を熟成ボディーで英才教育!もちろん、○○し以外は認めません!く・2, 980。

調教乱舞2く○リ?人妻?関係ねえ!全部俺の○奴隷だア!く・9, 80。

肉弾正く女体化戦国武将達との床外交!拙者の魔○で天下統一の巻くダウンロード版・6, 980。

「……………」

「……穴戸大尉。学友としてメガネは外していた事にする」

「ありがとうございます、斎藤中佐」

あのさあ……すごく軽蔑した目で見るのホントやめて。お金をちゃんと使ってあげるー経済ってそうやって回るんだよ?ちよつと使いどころを間違えただけじゃん。

春雨ちゃんや村雨ちゃんの頬が凄く赤く染まってるじゃねえかよオ!!プライベートってものは無いんですかねえ俺には!!

「穴戸くん、二次元ものに移行すればいいってもんじゃないんだよ?しかも趣向はドンドン酷くなってるように感じるんだけど……」

「いやさ、天下統一の方は純粋にどれほどのクソゲーなのか見たかつただけで、SLGストラテジーゲームとしての機能があるからそういう面でも楽しめるんだよね。その他は結城が勧めたのだから」

「オレかよ!?!しかもこんなゲーム知らねえから!!」

「でも肉の唄を抜き要素って言いながら買ってるからまだお前よりマシだし」

「アレは純愛ゲームだろうがア!?!エロ抜いたら芥川賞モンだぞオイオ!?!テメエこそクソゲー集めてなにやってんだ!?!」

「雌猫教師4は傑作だから!大抵のゲームはナンバリング4まで行く

と化けるんだぞ！抜き度80舐めんよオコラア!？」

「二人共ゴミだから。じゃあメール開けるよ」

「はいすいません」

でも、二人はなんだかんだで興味有りげですよ？やっぱむつつりな
んですかねえ……！

「メールにはなんて？」

「東京の病院からだって。内容は……うん、案の定ってヤツだと思う」
やっぱりか。

ー病院。

「龍城イ！なぜ来るのが遅かったア!?そのせいでワシはドスケベナー
スさん達と一緒にウハウハするしか楽しみ方が無かったんじゃぞい
！」

「最高じゃねえか、できれば残り少ない一生をそこで費やして欲し
かった」

「そういう事は言うもんじゃないよ穴戸くん！穴戸くんのたった一人
のおじいさんなんでしょ？」

「たしかにそうですけど……」

「流石はあの春雨ちゃんのお姉ちゃんじゃわい！めんこい上に優しい
と来た！」

「お褒めに預かり、コーエーです！」

ふふんつと威張る白露さんの隣には爺さん。ジジイが個人証明書
とか全部家において金だけ持ち東京のキャバクラに行つて、テーブル
の上でリンボーダンスとわけの分からない遊びをした事でぎっくり
腰確定。

病院に搬送されるも身元証明書がない上金がないので、俺が迎えに
行く羽目になった。これをクソジジイと言わずになんと申すか？ま
だ海軍大学校カリキュラムが残ってる俺は教官を終えてから来てる
けど、まだまだ国際法の授業が残ってるんだ。

そんな忙しい俺が外出許可を貰って来てやってんのにもっと早く

来いだと？ちよつとキツイ愚痴ぐらい勘弁しろよ。

「それで龍城よ、提督にはなれたか？生きてる内に見たいのに、待ちくたびれちゃうのおくワシは〜！」

「俺の覇道は絶賛邁進中なんでね、こうやって無闇に呼び出されると提督になるの遅くなるから……そこんとこヨロシクウツ〜！」

「大尉程度で浮かれておるから足をすくわれるんじやい。まだまだ半人前よのう……」

「ナースきーン、睡眠薬の投与お願いしまーす」

「おい待ていイ！そんななんなくともグツスリ眠れるワイ!!」

「じゃあ眠つてて、そして三日経ったらさっさとお家帰ろうねクソジジイ。」

「でも本当に面白いお爺さんなんだよ！セクハラはやめてほしいけど……」

「何を言うか！セクハラしてこそ女子が輝くのではなからうてに！それにワシがこう言う風になったのは、キャバクラで下ネタを連発しても喜んでくれる女子がいるからジヤイ！ワシはキャバクラに育てられた」

「その上お値段がクソ高いと来た。もう行くんじやねえぞ」

「それは無理じやわい。ワシの心からの下ネタとセクハラを喜んでくれるのは彼女達しかおらん！龍城、貴様は間違えるでないぞ？女子は下ネタを嫌う……卑猥なゲームなんぞはもってのほかじや！」

「ああ、この前身を持って体感したよ」

白露さんが爺さんの話し相手になつてくれたお陰でクソみたいなセクハララツシユは起きなかつたものの、迷惑なのは変わらない。

「今日は穴戸くんだけ？」

「後で時雨も来るらしいですよ。病院が許容する範囲でお菓子を持ってくるそうです」

「それってすつごく小さいって意味じやーん！ちえー」

「仕方がないですよ、ここは病院ですから」

「私にとつたら研究施設みたいなものだもん！正直食事を制限する意味ないと思うけどー！」

「もつともですけど、ここは時雨が持つてくる一番おいしいお菓子を……つて、どうしたんだジジイそんなぼーつとして？眠いのか？」

「時雨、ちゃんとは……めんこいのかのう？」

「それしかねえのかクソジジイ」

「私の妹で、生意気だけどいつちばーん私に近い妹なの！可愛さも保証するよ！もちろん、いつちばーん可愛いのは私だけど！ね、穴戸くん！」

「可愛さで言えばそれに全フリしている春雨ちゃんなどそれに当たるのでは？」

「客観的な意見だけど、要するに姉さんじゃないって言ってるのは変わらないよね？」

なるべく言うことを避けてきた酷い真実を吐き捨てたミセス三つ編み。手には合計50円以下ぐらいのうまい棒。

作る側にとってはコスパは最悪なはずなのに未だにこの低価格。最高においしく、ガキンチョでも大人買いが可能な庶民的でとても財布に優しい駄菓子の一つ。最早文化遺産にしてもいいと思うけど、流石に別の物を持ってこようよ。名目上はお見舞いに来てるんだし。

「ありがとう時雨！すっごくおいしいお菓子なのは知ってるけど、なんでこれなの？しかも全部明太子味って？」

「（最近うまい棒を食べてないでしょ？たまにはこう言うのもどうかかって思っつて）姉さんは健康な病院食だけで十分だからね、お金がもつたないよ」

「……んツ？」

「あ、しまった！建前と本音が……僕にとって、姉さんは世界一のお姉ちゃんだよ」

「そんなこと世界でいつちばーん分かってるもんね〜！」

白露さんの指コキコキ……あつ、これはコブラツイスト決定ですね。なぜコブラツイストかと言うと、狭い病院内でジタバタせずに決められるから。

狭い場所、少ない動作で、最大限のダメージ！痛そうだけど、俺には時雨を助ける術がない。あと、時雨は白露さんしか姉がないので

強制的に世界一である事をツツコみたいのだが、その隙もないとは恐れ入る。

「ハア……ハア……もう、常人より身体能力上なんじゃないの……？
ハア……」

「いやいやあ！私の全盛期はこんなものじゃないよ！パルクールで全国行けるレベルになったら上々かな？」

「フランスの外国人部隊入れますね。俺が提督になったら白露さん送りますよ」

「あ、それはちよくと勘弁してほしいかなあ……」

「冗談ですよハハハ」

「君が……時雨かね？」

「あ、はいっ、初めまして」

何気に初対面の時雨とジジイが話し始めている。時雨は護身が成ってるからセクハラされても大丈夫か……あ、でも間違ったら時雨が殺人の罪に問われるかも。時雨が俺の爺さんの仇になるってのはできるだけ避けたい。

目線入ってテレビで『日頃から暴力的だったんですよお』みたいな。

「はは、流石は白露ちゃんの妹じゃわい……めんこいのう！」

「は、はあ……ありがとうございます」

「おいジジイ、時雨にはセクハラするなよ？」

「おおっと！宍戸くんがまさか時雨の守りに入ったああ！これは時雨に脈アリかにや〜？」

「時雨はセクハラされたら問答無用で極み技フルコースだから。テメエの自業自得でも、同僚を殺人犯にしたくない」

「一応僕の心配してるって事にしてあげるよ」

「心配せんでもやらんわい、タワケが」

「ジジイの日頃の行いのせいでこんな苦勞する羽目になってんですけど？」

「すまんかったのう、ホッホッホ」

「ったく……じゃあ俺たちそろそろいくわ。下の方で手続きとか全部

済ませてくつから」

「うん」

眠いのか分からないけど時雨にはあんまり興味無さそうだな。或いは時雨の暴力的な性格を一発で見抜いたとか？本当だったら凄い。戻って勉強しないといけないのに、ジジイのせいで散々な目に遭うのだ。これで、『わあく！不幸だあく！ちゃんちゃんっ』って終わらせるのはシヤクなので、時雨にセクハラしてもらって、ある程度制裁を受けてもらってもいいと思う。

そうだな……ジャーマンスープレックスからのジャイアントスイングぐらいが丁度いいか？

「ちよつとエツチなお爺さんだつて聞いてたけど、そんな風には見えないよね？」

「ホツホツホ、ワシはTPOを守つとるだけじゃよ」

「うつそだあく！お爺さん事あるごとに私のおしり触ろうとするじゃん！」

「そこに尻があるから悪いんじゃない」

「はははっ、腰の方はどうですか？すっかり治りましたか？」

「応よ、時雨ちゃんの顔を見たら、まるで昔に戻った気分じゃわい」

「あ、あははっ、そうですか」

「そう、昔ワシを救ってくれためんこい女子が居てのう……あの娘は婆さんに似ていて、時雨ちゃんにも似とるわい。ありや美しかったあゝ」

「そうなんですか……」

名前も似て、容姿も似ている。これは、残り短き生を意味するのだろうか？

偶然にも程が過ぎる。

時雨……なるのほどな、彼女の名前だったのか。
若かりし頃の記憶が蘇る。

大戦時代の若かりし記憶

祖国では色見桜が舞い散る前の季節、大戦の最中で思いにふける、あの若かりし時代。

幾度の大戦を生き抜いた歴戦勇士は一瞬にしてその身を海に沈め、誉れ高き第一航空戦隊は愚直なまでに沈み落ち――その瞬間から早くも自分の中で、この戦争の勝敗が決定づけられていた。

大本営の発表では損害の事実を隠蔽している事は明らかであった。だが事実は変わらない、少なくとも大多数を占める航空隊が母なる海へと消えて行く様を目の当たりにした私にとって、あの現状が真実である。

『本日より駆逐艦時雨に配属された、穴戸龍源少尉であります。御国の為、この身を閣下に捧げる所存』

『応、共に怨敵を打ち砕こうッ！』

何処を見渡しても大海原。

港町で育った自分にとって造作もない。しかし船酔いをする余所者は多い。元々同胞達も御国の為にと、或いは金が無いので軍学校へ、はたまた最も出世が望める道を選びここに居る。様々な思惑を賭してここにいる。

私自身はその三つ全てに当てはまる。御国のために学問へと身を投じ、どうせ徴兵されるならば保身と立身の為にと努力は惜しまなかった。

国民皆兵から徴兵されし殆どは大陸へと赴き、海軍では不愉快ながらも各地の陸軍の輸送を担当し、幾度となく大国と交戦した。

戦慄、恐怖、叫喚。

雪の季はまだ先だぞ？そう言われても震えは止まらない。私が放った最初の弾道は見事に命中し、艦の司令塔を潰した。彼らにも家族はあるだろうに、その家族に顔向けできない姿で対面を果たす事となるのだろうか？

撃沈された船から泳いでくる海兵が味方ならば救い、敵ならば殺

す。

双方が憎しみを露にし、日付を捲る度に不幸を増していく大戦の先には終わりが見えない。

数ヶ月、一年……時が過ぎ去るのをただ祈る事しかできない、途方もなく遅い経過。

甲板の片隅。

日々を死神に頬ずりされながら、何時この命を落としてもおかしくない状況に、私はとうとう涙を零してしまふ。

男児としてあるまじきである。

海へ落ち鮫に食われるか、病を患うか、飢饉で墮ちるか、砲弾で死ぬか、捕まって死ぬか……或いは、自決するか。実際に味方が、それ等すべての要因を背負い朽ち果てた姿を目の当たりにした私には、絶望しかなかった。

絶望的な選択肢と、それ等を変えられない私の無力さと、明らかに不益な争いに興じる御国とその旗印への苛立ち――泣くぐらひは許してほしい。

頭上に輝く三千の夜空には、織姫と彦星が見ているのだろうか？二人は自国の成れを、どう見るのだろうか？

『綺麗な夜空だね』

『あ、な、何故女子がここに!?!』

『いちやだめなの?!』

『あ、い、いいえ、そんな事は――!』

彼女は突然現れ、泣いていた私の隣を取っていた。軍へ行く過程で女性との交流は皆無に等しい男児にとって、視界に入っただけでも心臓が飛躍し、体中を電流が駆け抜ける感覚を覚える。

それが、これほどまでに端正な顔立ちと華奢な身体付きをしているともなれば、世の男共は放っておかないだろう。膝上より高く、腿が露わとなる服装に艶やかさを感じ、地平線を見続ける事でしか視界を外す術を持たなかった。

『涙は止まった?』

『え、あ……』

事実は酷である。しかし現実の過酷さを嘆いていた私が、劣情を掻き立てられたからと言うなんとも不純な理由で涙を止めた等と素直に認められず、答えを出さないまま再び俯く。恥ずかしさからか、頬も熱くなっていた。

だが彼女は察してか、クスクスと笑っていた。その笑みの前では、彼女への疑問など些細な事に感じたのだから、真つ事不思議である。『……名も無き牡丹さん、少し自分の愚痴を聞いてはくれませんか?』『さつきまで泣いてた人が随分と臭いセリフを吐くね……でも、言わなくても分かるよ。でも、話してみて』

『自分は独り身であり、ここまで育ててくれた養父は病で没し、兄弟もいません。天涯孤独の身でありながら、故郷に家を残しながら次々と倒れていく同胞達に申し訳無さを感じているのです……私は、のうとうと生きていて良いのでしょうか?』

『いいんじゃない?』

『え、そんな短絡な……』

『君は真面目すぎると思うんだ。だからそうやってすぐに色んな事を真に受けちゃうんだ。だって戦争は、どうやっても止められないでしょう?地震と同じだよ』

『地震と戦争は……大いに異なるとは思いますが』

戦争は予知できる、仕掛ける側ならば勃発も自在に操作できる。だが止められない点では、彼女に軍配が上がるだろう。

『もっと気楽に考えないと、こんなこと耐えられないよ?ほら、この戦争終わらせて早く遊郭にでも行きたい!みたいな』

『気楽……』

『そうそう。海上の任務を終わらせて、ちゃっちゃと街とかで綺麗な人と出会って、家族を作りたい!とかね』

『海軍軍人として毎日女性を目的に出歩くなどと、そんな滅茶苦茶な』
『この世の中がめっちゃくちゃなんだから、それぐらい気楽でもいいんじゃないかな?それに、海軍が嫌ならやめちゃえばいいし』
『……………』

滅茶苦茶な世の中には、滅茶苦茶な人間……まあ、これほど可憐な

女性が居るのならば、いつか出会うその女性と添い遂げる目標を生きる糧とするのも、悪くはないのだろう。

生きる、か。先程まで生死への意義を唱えていた者がこれほど容易く説得されるなど……まだまだ子供なのだろうか、私は。

『それとも海軍を続けて、提督になる？それぐらい偉くなれば、戦争をなるべく早く終わらせる事ができると思うけど？』

『益暗の私として、それは流石に恐れ多い……それに内閣の人員として、戦の行く末を見据えているでしょうが、止める事は叶いません。この国は一度大きな敗北を経て、初めて改革の必要性が理解されるでしょう』

『それじゃあ、次の世代に託すしかないんだ……』

『そうなります。まあ欲を言えば、私の子孫辺りにその役目が回ってきたらば感無量と言うところでしょう』

『お子さんが提督になるってこと？随分大きく出たね……でも、大成する男にはいい奥さんがいないとダメなんだよ？』

『参考までに好みをお聞きしても？』

『え、僕の？……うんとね、浮気しない誠実さを持つてて、一緒に居ると楽しくて、時々結構頼りになって、安心感を与えてくれて、なんだからだで仲間思いな、素直な人がいいな』

『範囲は広そうで、実はかなり限定されていますね？』

『僕には縁のない話だけどね』

そんな事はないと言いたい気持ちは、謙遜や自虐から来ていない——言わば、本当に縁のないのだと訴えるような彼女の顔を見て引っ込んだ。

……でもそうか、未来か。この日々、この瞬間は絶望の限りであろうとも、その先に見える太平の世は、いつか必ず訪れる。

そこで御国を守り、仲間を守り……そして愛すべき人々を守る漢を、育てる者が必要となってくるだろう。

次世代へと繋ぐ大和の魂。

二度と悲劇を起こさせない堅き志。

この私も、それに尽力するべきなのだろう。島国である日ノ本を、

真に守れる提督となるその人を。

しかし先ずは、乗り越えてみようではないか。まだ戦の果ては暗雲だが、人一倍気張ろう……気楽にな。

『……自分の言葉を聞いて頂き、ありがとうございました。あ、所で貴女のお名前をまだ聞いていませんでしたね……つて、あれ？あの娘はどこへ……？』

『おい何処だ穴戸！もう交代時間は過ぎてるぞ！それとも俺の代わりに一徹したいのか!?!』

『あ、申し訳ありませんッ！』

気づけば隣には誰もいなかった。

今思えば俄然、私の方が可笑しかったのだろう。

勤務中の甲板の上……増しては女子学生程であり、あれほど麗しい容姿を持った少女がここ居るなどあり得なかったからだ。

国外にいる私の言葉が通じ、駆逐艦の上で突然現れ、異様な服装を身に纏って……どれを取っても、狸に化かされたのではないかと仲間には信じて疑わなかった。

ハツキリとした白昼夢を見たのだと説かれ、私は現実へと身を戻していった。

しかし記憶は正直である。辛く、または悲しく、鬱憤を溜め込む日々を送るたびに蘇るは……あの気楽の一言。

気楽に……現状、酒を浴びるように飲めない私にできる事は、気楽に身構え道楽的に考える事だった。

祖国に生きて帰ったら遊郭にでも行こう。いい女が居たら買ってやろう。海軍の経験を活かして貿易などに手を差し伸べては如何だろうか。

戦争とその後を軍人としてあるまじき態度で見ていた私は決していい顔はされなかったが、後悔はしていない。

このような天涯孤独の唐変木はその信条を抱え、最終的には生き残ったのだからな。

故郷に帰り、色々な事も始め、経験し——生涯妻とする人も見つけ、激動の荒波を征きながらも、導く立場にある者は決して悲劇を起こし

てはならない大切さを教えながら、この国を支える若人共の行く末を老て見届ける事とした。

悲劇は、起こしてはならない。

次世代を担う我が子らよ、駆けよ。

―自室。

「って感じの映画みたいな設定だったら許してやるけど、銀座を歩いてみたいから金よこせて言ってきたんだよ。あのクソジジイ次会ったら挨拶の前に張り倒すぜ」

「妄想しすぎ」

「いや、流石にしすぎてレベルじゃなかったですよっ！村雨ちよつと見てみたいと思っちゃったじゃないですかあ！私映画監督さんに売り込んできますー！」

「ごめんね村雨ちゃん。でもこれ映画監督に売り込んでも実現はしないと思う」

「はいお兄さん！お兄さんのハンカチです！」

「お、ありがとう春雨ちゃん！あれ？でもこれ洗ってある……洗ってくれたの？」

「あ、はい！春雨がお兄さんのために、一生懸命洗いましたっ！」

「ありがとうなあ〜春雨ちゃ〜ん！ヨオーシヨシヨシ」

「えへへっ〜」

本当に嬉しそうに目を細めてくれるな春雨ちゃんは。

その後、春雨ちゃんが実際に自分の手で洗っていた事が判明したのだ。てっきり洗濯物に入れたのかと思った。

「あと、これも忘れないでくださいね？」

「忘れるわけないだろ村雨ちゃん。手作りのお守りは日本の伝統文化

であり、村雨ちゃんや春雨ちゃんみたいな美少女が作ったともなれば何でもできそう。何れはこれを持って、世界征服しちゃうかもな」

「僕達は世界征服に尽力したとして世界中に恨まれそう……」

「逆だ逆！崇高な俺様に尽力した崇高な存在として名を残すのだ！」

時雨達が作ってくれたのは手作りのお守りで、言葉は無病息災。旅の安全を祈りたいって作ってくれた特注品は、今俺の胸ポケットの中にしまわれた。

旅……そう、俺はこれから全国を旅するツアーに送られるのだ。全
国の日本軍基地を回って、そこにある数々の陸海空将校達との交流を
経て一人前となるのだ！

東京の海軍大学校とも一緒に回って色々な施設、組織、人員とそれ
ぞれの職業を見て軍隊の全体像を改めて認識し、現状を見て、理解す
るのが今回の目的である。

子供が大人に求めるように下の者から、上級将校なんだったら軍隊
の事はなんでも知ってなきや可笑しいだろと言われないように、俺は
危険が沢山伴う研修を行うのだ。

危険な理由はな、途中で陸軍大学校の将校達とも鉢合わせするの
で、そこでどんなサプライズが待っているのか分からないのだ。

最近設立したと聞く空軍大学校の人達と比べても、陸大の方が圧倒
的に好戦的な人多そう（※あくまで個人的な意見です）。

長旅の研修が終わればいよいよ待ちに待った本番、現役の提督の下
で働いてサポート及びその仕事内容を伺うのだ。

なるべくだったら村雨ちゃん達の近場が良いな……って、そこま
では決められないか。まあ研修がまた帰ってこれるだろうから、あま
り気にする事もないんだろうけど。

……よし、あとは洗濯物から服とか畳んで終わりだな。

移動するときにはあつちが用意する服を着るのが常識だけど、俺たち
は学生だからそれぐらいは優遇されて当然だ。他人が来た服を着る
なんて御免蒙る。

「結城大尉、宍戸大尉、私の方は準備が整った」

「俺ツチも準備万端だ！ほら見てくれよこのコンドームの数！もうな

んも困る事ねえわ」

「そう言えば昇進おめでとう結城。だけどお前明日どこへ向かうか知ってる？石油王ツラして銀座を歩き回るわけじゃないんだぞ？」

「は？コンドームの事？お前はもう少しコンドームの利便性に気付くべきだぞ……コンパクトにバナナを入れる事もできるし、固いビンの蓋を開けたり、小さな電子機器を水から守ったり、傷口を塞ぐために巻く緊急用の包帯としても活用できる……ドヤア？」

「凄いね結城くん！コンドームに関しては君の右に出る人はいないね！」

「フッフッフ……まあこれぐらい、オフコースだよ時雨チユワアン！今日から俺の事をコンドーム博士って呼んでくれたまえエ!!」

コンドームの豆知識を女子の前で披露するとなんでもない失態を犯しただけでなく、自分をコンドーム博士と呼べなんて罰ゲームを自ら提案するのか……首を自分で締めに行く男とはこの事である。

「それで、みんなは先ずはどこへ行くんだっけ？」

「えーつとな、まずは……」

お久しぶり舞鶴

―舞鶴第一鎮守府。

空は晴れてて、グラウンドは熱されている。そこで整列する多くの将校達は俺と同じ事を考えているだろうか？こうやって並んでると、まるで入隊時を思い出す事を。

『海軍と教育を受けるのは誠に不本意ではあるが、致し方あるまい』
『そうですね。土臭さの多少残る場ではありますが、ここは大人になり穏便に……』

『まあまあ、空を見てください……青いでしよう？』

ビリビリしてるんですね、これが。やっぱり海軍と陸軍は一度死ななきや仲は良くならないのかな。

第三勢力の空軍はまるで自分の頭の中はお空のようにまっさらですよ〜って感じだし。

別に好敵手みたいな見方をしてもいいワケよ？国に属する軍隊として、軍資金を取り合う仲なんだからある程度は問題があってもいいワケ。

陸軍の気持ちも分かる。限りある資金を海軍に回すために軍縮を行った事で、色々と気苦労があるんだろう。

でもそれを決定したのは政府だ。多少海軍側にそれを説得できる交渉術の凄い人がいたんだろうけど、この世は弱肉強食であり、みんなが毎日焼肉定食を食べれるような生活を送っているわけじゃない。弱き、誰かが苦しみ、強き誰かが肥える……これぞ資本主義の真実なのだ。

『昨日も話したが、私がこの舞鶴第一鎮守府の提督を努める斎藤だ。君たちみたいな、明日を背負う者への教育に、少しでも助力できればと思うよ』

『この駐屯軍は、鎮守府と航空隊との間で密接なコミュニケーションを取っており、日々国民をどうやって守っていかけるかを話し合い、訓練を共にして緊急時に高度な連携が取れる練度を保っております』

『また地域とのコミュニケーションも忘れずに規律正しく、そして日本海方面の守護を授かる者共として恥じぬように、精進しております』

『数日間、よろしく頼むよ』

「ハッ!!」

舞鶴の陸海空統率者三名のクツソ長つたらしい言葉を聞いて、いよいよ内部へと足を踏み入れる事ができた。これをあと十回ぐらいやらなきやとなるとどうなる? 気が滅入る。

でも、ここだけは違った。

そう! ここは、舞鶴鎮守府! 久しぶりに帰ってきたとなるとテンションが上がるこの故郷に戻った感じ! スゲエ!

懐かしさ溢れる鎮守府の内装は変わっていない。他の鎮守府と同じように作ってあるはずなのに、これほどまノスタルジアを感じれる人間って生き物は凄い。

ただ、俺の所属はあくまで第二鎮守府だったから、懐かしさにふけるのは後回しだ。

それに俺を提督育成プログラムに誘ってくれた斎藤中将の手前変に目立つような真似は避けたい。

「やっぱり初めの研修は緊張するかも!」

「俺も緊張するよ。もし必要だったら俺の手を握ってもいいからね?」

「あ、遠慮するかも」

手厳しいよ秋津洲さん。

「ここってマイヅル……って言うんだよね? 日本のどの辺りなの?」

「地図で言ったら日本の背中みたいなお所にある場所だよ」

「そうなんだあ〜! 電車で来ると分からないから……ダンケっ!」

「シーウエルコーメン、オイゲンさん」

「あ、テメエオイゲンさんとお近付きになるためにドイツ語辞典開いてたのか! 卑怯だぞオ!」

「ば、馬鹿! そ、そんなんじゃねえよ! 俺はただ美少女と話して、できればカッコイイと思われてモテモテになりたいだけだ!」

「素直ではないか宍戸大尉。だが確かに二カ国語以上を話せるのは魅力ではあるな……私があまり得意としていない分野だが」

それはともかくとして、食堂に案内されるがちよつと狭いと感じるのは俺だけだろうか？ いや、陸海空の未来を背負う将校達がこれだけ集まってるんだ。ムリもないだろう。

多分舞鶴が終わったら陸空大の奴らと顔合わせるのは卒業式だけだと思ふし……舞鶴にいた頃は陸軍との仲を取り持った事もあったな。今回もクソみたいな役回りに投じられるのかな？ 今回は辞退してもいいですか。

「あの……もしかして貴方はあの齋藤中佐ですか？」

「ああそうだが？」

「やっぱり！ 自分はこの齋藤中将に憧れてこの海軍に入隊した者です！ 握手して下さい！」

「自分も次期軍令部総長候補の齋藤中将のような軍人を目指し、海軍大学校に入学した者です！ 握手を！」

「お、おう……」

「オイお前荒木大将派じゃなかったのかよ!?!」

普通科のやつが話してくる。そしてみんな食堂に向かう道のり、話しかけられた齋藤中佐へ注目が行く。

「ウォ！ ビックリ！ まさか舞鶴提督の息子さんがここに居るなんてエエ！ カッコイイイイ!! みたいな？」

中将に憧れてるんだったら息子との握手になんの意味があるのだろうか？ 本人あそこにいるんだからあっちに行つて来いよ。つーか荒木大将派ってなんだよ？ お前らにとってのアイドルかなんかなのか？

あ、でも現役將軍のオッサンたちがアイドルみたいに歌って踊ってるのちよつと見たいかも。食事してる時以外で。

社長や政治家の息子とかが来て騒ぐのは中、高校だったら当たり前だろうけど、生憎ここはそんな生易しいもんじゃないんだよね。

「ほお……貴様があの陸軍から海軍へと寝返った裏切者と言う訳だな？ よくぞ参られた」

「裏切りとは耳に悪い。転官の言葉を知らないのか？」

「テメエ海軍に入ったからってチョーシこいてんじやねえぞオオラア!!」

「貴様、言葉を謹めよ？私は一応陸大を卒業しているんだぞ？先輩への礼儀は言わずとも分かっているだろうな……？」

「「な、なにいいい!」」

……え、そうだったの？

よく考えてみれば中佐って結構高いよね階級。そうなんだろうけど、海大と陸大を通るなんてすげー人だな。この人が提督になれば陸海の架け橋になるかも。

「このお勉強野郎ガア!!」

「なんだと貴様ア!?!」

「まあまあ落ち着いて、上を見てください、空が青いでしょ?」

空軍はそれしか言えんのか。それに上は天井から茶色だぞ。

海軍と陸軍の仲が悪いのは言わずもがな。裏切者がいるとなると更に険悪になるのは、態度が悪い陸軍とプライド高い海軍、そしてともに仲裁に入らない空軍の皆様のお陰である。

「ちよつとやめるかも!」

「お、おいついてくださあ〜い!」

「みんなやめないと、ふあいあー!しちやうよつ?」

「「あ、は、はい……!」」

そしてこの女性に弱い軍人諸君。流石は海大の三人娘、その愛らしさですべてを征服できる。歴史の影に、女あり……いま俺は、この世の真理を見てしまったのかも知れない。

見てくれよあの鼻伸ばしたモンキーフェイス。むしろ、ふあいあーしてほしいとか頭の中で思ってたんじやねえのかこいつら?

美少女の麗しさに心を打たれた野郎共は食堂で素直に席に座る。

それと同時に中央に座ってマイクを持ちながら話し始める中將の姿が居た。

『舞鶴鎮守府は古い歴史を持つのだが、現在でもその役目は変わらな
い。日本海方面軍の司令塔としても機能している舞鶴第一鎮守府で

は、第二第三及び港湾と共に連帯した防衛を常とし、非常に重要な―』

話す内容は他の鎮守府と同じく、その鎮守府が存在する重要性と信念。性質や他の鎮守府と比較して様々な点での違い、そして舞鶴での問題点や解決策など、組織の理解と国防の大切さに重きを置いた講話で、深く領き続ける将校達。

こう言うのは舞鶴だけ研修に行っても意味がなく、次は呉、次は佐世保か鹿屋と、地方を回らなきゃ色々な観点から見ると日本軍の全体像が浮かび上がって来ないのだ。

そうやって鑑識眼を養って中立的且つ論理的な思考力を身に付けた結果が、日本の政治家と言う政治に関しては亀みたくに遅く、決断力のない悲しいモンスターを生み出したのだ。中立的過ぎるからどっこいどっこいな選択肢が来ると真っ先に選べない、リーダーとしては褒められない烏合の衆をな。

それに比べて斎藤中将とか一部の将校は凄い。日本海方面の総司令官つてだけじゃなくて、大規模作戦発令も必要となったら即座に決断できる実行力を持っている。

軍隊だから当たり前だろって言われるけど、中々できるもんじゃない。そんな人達が政治家に顎で使われているのが皮肉だと思ったこの頃、やっと話が終わると思いきや。

『私の長話はこれで終わりにするとして……次は連隊の方々の意見も聞いてもらおうか』

『ハッ！陸軍では、斎藤中将が話していた通り、高度な連携と意思疎通の重要性を懸念しており―』

ああ、そう言えばそうだったね。

連隊長や空軍少将がなんで隣に座っているのかとか思ったりもしたけど……うん、あの人たち話さなきゃ居る意味ないもんね。

―舞鶴第二鎮守府。

もちろんお話して、俺たちフレッシュな将校の意見を聞くだけでは済まないんだなこれが。

整備工作員や憲兵団の仕事とその動き方、指揮官としてスムーズな管理をするのには何が必要かを話に話し尽くす。

慣れ親しんだところから新たな側面で舞鶴と言う組織を見るのも一興であり、面白さもあるが……正直、話している事の大半は既に知っていることであり、舞鶴第二鎮守府に来て整備工作班の仕事を見ても、殆ど熟知してるんだよ。OBの名は伊達じゃない、キリッ。

フリータイムとして設けられた、自由に舞鶴を見学できる間を使っ
て第二鎮守府に来てみたはいいものの……すげエ！ノスタルジ
アアア！

俺に近づいてきたミス甲高い声こと鹿島が「帰ってきたんだウエす
かあ〜!?」って話しかけてきたり、あまり知らない奴らもいるけど、聞
かされている筈の海軍大学の生徒さんとして一応敬意を払いなが
ら俺に接している。

第二鎮守府のエース達である翔鶴、瑞鶴、大鳳の装甲空母トリオは
現在出撃中らしく、色々歩き回りながら次々と俺の元同僚達に会
う。

中には、俺が思い入れのある仲間達の姿もいた。

「え、え!? 穴戸っち!?」

「お久しぶりんこ。元気にしてたか?」

「元氣元氣!! え、ウソ!? 帰ってきたの!? 穴戸っち〜!!」

「うお! ちよ、抱きつくなこんな所で!」

「これぐらいいいでしょ〜! それともナニナニ〜? 鈴谷に抱きつかれ
て恥ずかしいの〜? にひひっ〜!」

「ば、馬鹿! そんなんじやねえよ! 俺の股間が勃起して鈴谷を襲って
メチャクチャにする前に離れろって言ってるんだ!」

「キモッ!? 久しぶりに会った美少女同僚にそれはないでしょ!」

いや、男は大きな胸押し付けられたらそうなるから必然と。俺が真
の漢じゃなかったら今頃鈴谷あられもない姿なって、日本海軍将校が
艦娘に強制わいせつ! って記事が全国に出回る事となるだろう。

俺と長らくを共にした鈴谷はちつとも変わっておらず、それに安心
感を覚えると、廊下の角から次々と俺のカワイコちゃんが出てくる。

「鈴谷ここで何をやって……って、宍戸さん!」

「今日は凄い人が来たわね……」

「兄貴! お久しぶりです!」

「クマノンに夕張もお久しぶり。ついでに月魔も」

「俺は次いでですか!? そりやないですよ!」

ふふふと女子から笑顔を取り、久しぶりに会った元同僚と早くも和気あいあいとした雰囲気を作り出す。

やっぱりこう言うのは良いな! 舞鶴を出たあとの代わり様とかも結構見れるし、来て良かったと思える。

「今日は三つの軍大学生徒が同時に来ると聞いていたのですが……まさか兄貴にこれほど早く会えるとは感激です!!」

「おう、苦しゆうない」

「そうだったの!? あ、でも確かに数人ぐらい工房見に来てたわね……」

「いやでも宍戸っちと会えて嬉しい! ね? くまのん」

「え!? あ、べ、別にわたくしは……」

「私も会えて嬉しいわ副班長……じゃなくて、宍戸さん」

「副班長呼び久しぶりだな……こうなると後は綾波ちゃんだけだけ、今は出撃?」

「いや、もう入渠も済んで終わってるはずだけど……」

『ふええええええええ!!』

噂をすればなんとやら、廊下の角から走ってきた美少女はまさしく綾波ちゃんその人だった。

春雨ちゃんと同じくサイドテールで決めてる彼女の髪の毛はリュウグウノツカイかよってぐらい長い。

「オッス! 綾波ちゃんどうした!」

「な、なんで宍戸さんがあ!? た、助けて下さい宍戸さあんっ!! 綾波もうお嫁に行けませんっ!!」

「お嫁に行けないから助けてって、結婚して貰ってほしいって事? 参ったな、火力の高い綾波ちゃんだとは言え、まさかこれほどまでに苛烈なアタックを仕掛けてくるとは……」

「あ、違います」

冷静に否定してんじやねえよ自分から胸に飛び込んで来たくせに
よオオオ!!

「どうしたの綾波?ど、同性婚はまだ認められてないけど、事情が事情
なら親友として私が力になってもいいわよ……?」

「ちくがくまくすつ!あ、あつちの倉庫の所です、すすすすごいもの
を見てしまっただけで……」

「じゃあ俺が見に行く、皆はここで待機な」

「即決!?凄い行動力だね穴戸つち……事情も聞かないまま行くな
て」

「綾波ちゃんが見て怯えてる、そして原因はすぐそこにある、やらな
きゃいけない事やどつちにしろやる事はすぐに実行に移さなきゃ一
人前とは言えない」

「流石兄貴ツス!言われた通りここで待機していますが、必要な時は
必ずお呼び下さい」

「おう」

綾波ちゃんがこれほど怯えるものとは何なのか……俺はその真相
を辿るべく、言われていた倉庫に足を踏み入れに行く。

倉庫で女子が怯えるモノなんて大抵はゴキブリとかその類だろう。

虫は俺も嫌いだけど、潰すぐらいだったら造作もない。

確かこの倉庫って資材とそれで作った部品とかの旧式の物を置
いておく所だったはず。整備工作班はこういう所もきちんと掃除と
手入れをして、何処からも害虫が湧かないように衛生的な状態を維持
するべきなのだが、Gが湧いてるのはあまり良くないな。

OB兼先輩として、もしそんな所も今の連中にちゃんと班の連中に
注意しないとな。

いい感じに古いドアを開け、中に入る。

「さてと……ん?」

そして、この世の迷宮にも入ってしまう。

『F・C・O・H!』

『入っちゃ……たあ!』

『女の子みたいにチクビ気持ちよくシテエツ!!』

『凄い脆弱おま〇ここすってこすって』

『アツアアイクイクイクイクアツアツ班長は基本イク』

『これもう女の子になっちゃってるよ』

『……あ、もう一人男の子はっけーん』

『迷い込んだ子犬ちゃんに、特別な稽古つけてやろっか! うん、そうしよう、うん』

―廊下。

「あ、穴戸つちおかえり! 多分ゴキブリとかだと思っただけ、大丈夫だった?」

「私達も清潔を保っているつもりだけど、害虫が湧くなんて……」

「兄貴、どうしたんですか? それになんで服が破けてー」

「綾波ちゃん」

「は、はひい!」

「ゲイ三人衆が、いい歳して女の子みたいになって、銭湯に入ってる時みたいな快感を覚えた顔で縛られて、あああああだめだめだめつとか言ってる、尚且つお前には太い、ち〇ぽ、おまん〇の単語しかないのかってぐらい語彙不足に悩まされていた、40代半ばぐらいでサンタクローズみたいな腹した班長似のおっさんと遊んでるところ、見た?」

「え、あ、あの、えっと……!」

「それ、全部幻覚だから」

「え……」

「この土地の……多分、あそこの倉庫辺りかな? 大昔にキツネさんとタヌキさんって言う、人間に幻覚を見せて遊ぶとっても困ったさんな

動物がいたんだ。ある日なんやかんやで人間に捕まって、そうやって人間を騙して遊んでた動物さん達がね、ナザレのイエスみたいに吊るし上げられてね……まあ要するに、そう言う妖気みたいなのが今でも残ってるんだ。だから、あれは、ぜーんぶ、ま・ぼ・ろ・し！気になくても、モーメンタイだよっ！」

「そ、そうだったんですかあ!?!」

「「「そうだったの!?!」」」

「科学的じゃないわね……でも興味が湧いちゃったかも！私、ちよつと見て来ていいかしらー」

「駄目エエエイ!!」

「え……」

俺の気迫に驚き、目を見開く夕張。

「あれは……幻覚なんだ……LSDにも似た幻聴、幻覚……ただの、白昼夢だツ……そういう事にしておいてくれ」

「「「……………」」」

彼に、一体なにがあつたのだろうか？問いたくても、問えない、問わせない……その身に包んだアンビアンスは、鈴谷達を黙らせ、そしてこの一件は忘れようと言う事で決着をつけさせる。

そう、襲われた時にチクビ触られて、ちよつとだけ感じてしまったなんて、末代までの恥だ。この事は、相変わらずエロい身体付きをしてる鈴谷に触られたって脳内変換して、さっぱり忘れよう。

……だがこの時知らなかった。

何故かあれを発端に、綾波ちゃんが密かに腐女子への道を歩み始める事となるのだが、それはまた別のお話。

舞鶴 何やってるんですかね？

よくよく考えてみればそうそう変わる事なんてないけど、舞鶴鎮守府は相変わらず俺がいた時と同じだ。少し静かになった程度で、整備工作班、憲兵団、経理部とかの面々にも大した変化はないらしい。

鈴熊も鎮守府のエースとして戦果を上げ続けており、夕張が整備工作班の副班長補佐を努めていて、月魔は教育係らしい。綾波ちゃんは専用の改二艦装の作成懸念されているらしいが、懸念って事はまだ当分先の話だ。綾波ちゃんも結構頑張っていて、順調に成果を上げているとのこと。

旗艦の経験も結構したらしく、俺の知るメンバーは鎮守府での地位を現在絶賛上昇させているのだ。提督が蘇我少将から他の誰かに変わったが、特別問題もないらしい。

それはともかく、研修で次の面倒事……じゃなくて重要となるのが、舞鶴のOB勢である俺たちの存在だ。

第一鎮守府のOBこと結城、第二鎮守府のOBこと俺、そして20連隊の元隊長こと斎藤中佐。

現職の副班長や連隊長とその先代達との比較は、他の指揮官のタマゴ達にいい教育となるだろう！と言って斎藤中将が講話を指名してきたのだ。またもや面倒くさい役を押し付けてくれたな？と思うだろうが、事前に教えてもらっていた事なので今回はスムーズに話せる。

陸軍さん達も講話に参加するが、相変わらずヤクザみたいな顔で睨めつけてくる。仲を取り持てって明確な指示は貰ってないけど、なるべく陸軍さんとはなるべく仲良くして欲しいとの事。

「整備工作班は全面的な艦娘のバックアップを主とし、資材を如何に効率よく使えるか、艦娘達の安全を確保する為にどう自分たちは貢献できるかを常としており、それを可能とする組織一体の連帯感に主眼を置きー」

「高が整備班のくせに偉そうな事言ってるじゃねえぞオ！」

「おい陸軍！幾ら目上だからって元副班長の悪口は許さねえぞオイ

！」

「まあまあ落ち着いて。あの艦爆を見てください、迷彩が若干削れているでしょう？」

やばい纏まんねえ。

前職の話しをしようと思っただけどちつとも纏まらねえ……クソ！これだから陸軍と空軍は。

よし、ここは少し陸軍と空軍を褒めながら話そう。

「……国民の安全のため、自分たち海軍が全力でその任を全うできるのは陸軍の協力無しではありえない事なのです」

「「え……」」

「古来より陸で戦うべき生き物である我々にとって、陸軍とは日本軍の誉れであり主力、そして無くて成せぬものであります。今は深海棲艦と言う敵と渡り合うべく、国の未来を背負わせていただいている身ではありませんが、民無くして国無しとあるように、緊急時の人命救済が覚束ない我々を支えてくれている陸軍は、紛れもなく主役と言ってもいいでしょう！」

「「お、おう……」」

お、黙ったな。正論ぶちかましなからおだてておけば大抵は、おう、なんだイヤツじゃんみたいな雰囲気を持つていける。

俺の作戦計画能力は、A+に御座います。

「空軍は？」

「え？あ、うんと……この舞鶴を含み、海軍基地にはレーダー及び対空砲が存在しますが、敵を察知したからと言っただけ何も出来なければ仏を作って魂入れず……深海棲艦の空母部隊であろうが、隣国からの侵入であろうが航空戦力の撃退を可能としなければ、誠に軍隊として成り立たなずー」

「うんうん」

急に振ってくるんじゃねえよ。

でも空軍の存在意義はありますか？例えば国内旅客機で移動している時に偶然深海棲艦が居たらヤバイもんね。前に一度だけ起こったことがあるから、空の事情には特に敏感にならないといけない。

海外に行くにも旅客機は戦闘機の護衛付きなんだよね。輸送機もそうだし……アメリカのB-2も帰還時に深海棲艦が居て壊されたんだよね。俺はそれ聞いたとき、同重量の金と同等の価格の爆撃機がぶっ壊れた事より、パイロットが無傷で生還した事に驚いた。

あ、旅客機って言えば。

『お兄さんーこれ見てくださいー!』

『ん?北海道で温泉旅行の旅、家族カップル社員旅行一人旅、誰でも楽しめる涼しく暖かい旅行……なんだこりゃ、涼しくて暖かいとかモロにオクシモロンじゃねえか』

『でもでもー春雨、こういうみんなで行ける温泉旅行って、凄くあこがれます!』

『外出は比較的自由な方だけど、旅行ってなるとなあ……それに、最近は航空機代が高い上に危ないと来た。現地の人じゃないと難しいかも知れないよ?』

『あ……そ、そうですね……』

あ、しまった、春雨ちゃんがしょんぼりしてる。俯いてて、犬の耳があれば垂れそうなくらい残念そうな顔だ。

そんな春雨ちゃんの頭を優しく撫でる

『あつ……』

『心配ないよ、いつかみんなで行ける日が来る。んくでも春雨ちゃんが風呂に入ってたら覗き込んじゃうかも知れないね。俺は行けないかもな……』

『そ、そんな事はありません!!私だったら、いつでもお兄さんに見せますー!』

『ハハハ、春雨ちゃんにそんなこと言われるなんて光荣だなあ!でも女の子なんだから、身体は大事にしてな?』

『はい、大事にします!』

『って言うっておきながらまた……ほら、よーしよしよしー!』

『んっく……おにいさあくんっ!』

『春雨ちゃん……』

『おにいさん……!』

『フンッ!』

『痛エ!時雨かオイ!?……って、村雨ちゃん?』

『さつきから話しかけてたのに、村雨を放置ですか、そうですか、ふん』

『あ、あの……村雨姉さん?』

『ふうふうん!』

『その……村雨、さん?』

『ふうふうふうんだ!』

―廊下。

「って事があったのを、講話中に思い出しながら国防や日本の安全について語っていた俺は、ちゃんと話せてただろうか?」

「立派な事をお話になられていたのかと思えば、頭の中ではそんな事を……変わっていませんのね、穴戸さんは」

「ニンゲンそんなすぐに変わっちゃダメでしょ!鈴谷はどういう立場に居ても変わらない穴戸っち、すごく好きだよ!」

「これほどストレートに好意をぶつけられるなんて、隅には置けないわね?ふふふつ」

「え、コイー?え、あ、そ、その違うの!今のは色々違うからあ!」

夕張に指摘された事に頬を赤らめて反応する鈴谷達と一緒に廊下を歩いていた。村雨ちゃんが話しかけてくれたつてのに、それを無視した代償として暫く拗ねられたけど、それぐらいだったら寧ろ軽い方なんだよなあ……拗ねてる顔可愛いかったしさ?

次の研修場所での地理や歴史、そして何故そこにあるか等の重要性を予習した上、斎藤中将からも仲間との交流時間を貰ったので、鈴谷達と一緒に歩き回って様子を見ている所だ。

俺はそこらへんで「も、もし俺様がて、提督になったらア……ハア、ハア、こんな可愛い女の子に命令出来るんだア……ブヒ」みたいな妄想しているうんこみたいな提督候補とは違い、舞鶴は俺が去つてもう

まくやってるかをチェックして回ってるんだ。

睦月たちも相変わらずにやしーだし、金剛もバーニングラブだし、弥生はあの顔で怒ってないし。

ゴーヤに会ったけど、ちゃんと遊ぶ事を覚えたらしい。休む、そして働く。このリズムがうまくできてるので結構労働効率上がったとも言っていた。

あ、時雨たちの鎮守府にいる初月と照月の事も秋月に話さなきゃな。海軍軍人として焼肉の匂い嗅いで満足感に浸ろうと努力するのは明らかにおかしいから。秋月からもなんか言っただけ。

「あっちではなんかいいことあったー？シグシグたちと一緒にいるって聞いたけど……」

「色々あるぜ？白露さんって言う時雨たちの姉貴にも会ったし、あそこに居る海大の奴らがファンタステイックなディスプレイでコンバレーションのドッチボールしていたし……あ、合コンに行ったときの二股三股どんでん返し劇も楽しかったなあ。東京ってどこっても飽きねえのがいいよね」

「ひ、一言では表せない経験をなされたと……？」

「そゆこと。もう腹いっぱいだよ……ん？」

「どうかしましたか兄貴？」

「いや、あっちから少し声がしなかったか？」

廊下を歩く途中で聞こえたのは、微かだが聞こえる音高い囁り。

休憩室から聞こえる。あそこの部屋はかなり大きくて、小さな更衣室ぐらいのスペースが確保されている。通常はあんま使わないけど、今は生徒達がいるのでそいつらが寛ぐ場所として提供しているのかも知れない。

話し声って感じじゃない、少し違和感を覚えた程度だけど……こりや聞き耳立てるしかないな。

「え、ちよ、穴戸っち何やってるの？休憩室のドアに聞き耳立てるとかキモいんだけど」

「素直にお入りなればよろしいのに……」

「おキツネ様の幻覚に誑かされる訳には行かないからさ、偵察は戦略

の基本でしょ？」

「う、うくん……あまりそう言うのに詳しいタイプじゃないけれど、ドアに耳を当ててどうにかなるのもののかしら……？」

夕張さん、なるんですよ。

俺だってS O A (そんなオカルトありえませんが) 派だけど、また班長が班長じゃなくて課長になってるみたいなおチがあつたら困るから突撃は控えてんだよ。

分かってくれよ……同性愛は本人たちさえ良くてこつちに被害なかつたらいい派の俺は、できるだけ穏便にコトを済ませたいんだよ。

だが、そんな俺でもこれは予想していなかった。

『んっ……んあっーそ、そこはあ……！』

『大鯨、ちよつと弱すぎるかも……そんな所も大鯨らしいし、可愛いけど。秋津洲のテクニク、堪能したかも？』

『はいっ……はいっ……！だ、だからあもう……！ああん！』

「……………」

なに、

やってん、

ですかね、

あなた達は？

俺、

聞こえ、

ちやい、

ましたよ (歓喜) ？

え、まさか秋津洲さんと大鯨さんは……えつと、その、そういう関係って事つすか？

え、いや、その……女同士つてのも、いいもんですね。

『あれ？抵抗するかも？あーダメ、そんな事させないかも……大鯨は、秋津洲の手の中で回されるかも！』

『はあう!!あ、そ、そんなあ……！た、大鯨……そんな事されたらあ……………！』

『ほーら、これで……と・ど・め・か・もっ』

『くじらさんになっちゃいますううう!!!』

「大鯨さんはもうクジラですよツ!？」

「「え……?」」

勢い良く開けてしまったドアの先には、秋津洲さんと大鯨さんがく
んずほぐれつ……いや、普通にチエスしてただけでした。

二人を囲む十数人の野郎共も、突然開けられた事に驚いている様子
だった。オイゲンさんはいないな……トイレか？

「いきなりどうしたかも穴戸さん? あ! まさか大鯨の可愛い声に釣ら
れて入ってきちゃったかも?」

「え? そりやそうだよ?」

「ひ、否定してくれないんですかあ……?」

「あんな男の劣情を掻き立てるような声をして、てつきりマツサージ
でもしてるのかと思えば……まさかチエスだとは。いやあく世の中
分からないもんですな! いやいや、マツサージだったら俺も参加した
いとかそんな事思ってませんから」

「穴戸っち最低」

「ゲスですわね」

「酷いです穴戸さん! 女性だったら誰でもいいんですかあ!？」

「流石の兄貴でも誰でもいいのはちよつと……」

「おい月魔、テメエの方がよっぽど酷いからな?」

ストーリーカー野郎のとんでも発言はともかく、チエスの台を見てわ
かった。秋津洲さんの圧勝で終わってる。

秋津洲さんの後手の黒が10駒残ってて、大鯨さんが王様一人と言
うなんとも情けない結果である。その数字を盤を見ればわかるけど、
なぶり殺しに遭ったのは言わずもがな。

これが無双系のゲームだったら総大将一人で戦況ひっくり返せる
のに……残念だったな。

「秋津洲さんすげーッス! 陸軍へ来ませんか!？」

「なに勝手に誘ってるんですか? 秋津洲大尉、空軍はあなたのような
人材を歓迎しますよ?」

「あははっ、秋津洲は艦娘だから遠慮するかも!」

多分容姿だけでも誘われそうなのに、この強さ。提督育成プログラムにて発揮されている戦略眼は見事なもので、大鯨さんもそれ相応の戦術眼を持っている。指導の能力も抜群（ついでにスタイルも抜群）で、今から提督になってもおかしくないほど優れた能力の持ち主である。

これほど凄い人たちなんだ、艦娘としても凄く有能なんだろう。

「穴戸さんもやって見るかも？」

「え、あ、いや俺は別に……」

「試してみなよ穴戸っち！穴戸っちのカッコイイ所見てみたい！」

「え、でもなあ」

「もし勝ったら……鈴谷の甲板ニーソ、好きなだけ触らせてあげてもいいよん？」

「し、ししし仕方ねえなあ!!まったく、今日は特別なんだからなあ！」

「このニヤけ顔が私の上司だったなんて思いたくないわ」

酷い言われようだ。俺はただ建前っていう自分の本心をひた隠しにする失礼すぎる文化を取り除いているだけなのに。

「おいマジでやるのか？俺たちだって勝てなかったのに……」

「ここにいる陸海空は全滅しました」

「え……それマジ？」

野郎ども全員が頷く。

強いとは言え、それほど勝ち続けるのは流石に限界が近いはず……って事は、勝機は俺にも十分あるって事なんだろう。勝っても負けてもデメリットはないだろうし。

……それにしても秋津洲さんが、屈強なオトコ達を10人抜き！うわ、なんかエロ。

「でもなあ……チエスってちよつと苦手なんだよなあ……」

「穴戸さんならできます！綾波が保証します！」

「その度胸は何処から来るんだ」

「兄貴は頭がいい！できますって！」

「う、うくん……」

チエスは正直あまり好きじゃない。将棋は取った駒を使えるから

戦略性が上がるが、チェスでは使えない。

これを現実世界に例えようと、捕虜として取った人材に相応な職を与えて再び戦場に出せる一方、チェスは捕らえたままにする――事実上殺したも同然だ。

まあ現実路線で行くと、好きな場所にリスポンさせられるなんてありえないから、再利用する点についてはそもそも現実的じゃないので気持ちも分かるが。

「秋津洲はインターバルが短いほうがいいタイプかも！つまり待つのは嫌いなほうかも！やるんだつたらやる、やらないんだつたらやらない！これが海軍軍人としてあるべき姿かも！」

「よく言った、秋津洲大尉は有望だね」

「「さ、斎藤中将!？」」

突然入ってきたやがった中年男性はナイスミドル斎藤中将。それに続いて息子斎藤中佐の他にスケベ結城、オイゲンダンケ、エトセトラエトセトラ……なんてこった、急に人数増えすぎ。まるでファストフード店に客が突然いつぺんに来る謎現象みたいだ。

「学年次席の秋津洲大尉と三位の宍戸大尉の対決か……これは、どうなるか見者だな。宍戸大尉、私に倒されるまで負けは許さないぞ」

「おお！学年一位に言われるなんて誉れだぜ宍戸！こりや名勝負になりそうだぜエー！」

「え、宍戸っちって学年三位だったの!?!スゴイスゴイ!!」

なに勝手に盛り上げてんだ teme エら!?!俺は普通に勝負して買っても負けてもって感じで終わらせたかったのに、なんか負けられない対決的なみたいになってる。

特に斎藤中将の手前、この勝敗へのプレッシャーはかなり重くのかかっている。

「盛り上がって来たかも！宍戸さんの実力……どれほどの物か見たいかも！」

「え、あ、いや俺はそんなに……」

「確かに興味があるね。この私自らが見出した人材にどれだけの実力が備わっているか……信じてはいるのだが、実際に一度、この目でそ

れを見てみたいと思うのは我儘かな？」

「ち、中将……」

「もちろん私のメガネが曇っているなんて事はないよ？週に一度の点検は欠かさないからね」

「H A H A H A！会場に笑いが渦巻いてますねえ……こりや、本気で行くしかないのか。」

「これほどの観客の前でやるなんて初めてかも！いつも本気だけど、脳のウォーミングアップが済んだ秋津洲は更にパワー出していくかも！」

「お手柔らかにお願いします」

テーブルに並べられた駒、それを見守る観客、そして勝敗の行方に釘付けられる緊張感、そしてこの雰囲気……それら全てが合わさった時、負けられない戦いが幕を開ける。

舞鶴 VS 秋津洲

―休憩室。

二人零和有限確定完全情報ゲーム。スムーズに言えたら褒められるよ。

これは運の要素がない、完全に自分と相手との駆け引きだけでゲームが進行するタイプのゲームで、基本的に上手い人は頭が良くてIQが高い。

将棋の20駒に対しチェスは16駒で、ルールは王様を積ませれば勝ち。シンプルなルールは逆に戦略性の幅を広げさせ、膨大な数の通りから生まれた五万と言う戦術と定石は、世界大会の場でもよく見かけられる。

賞金が将棋戦とは桁違いなのもまた世界レベルならではである。

ちなみに起源は古代インドのチャトランガって有力な説らしいけど、どんな国にも戦争の歴史さえあれば戦をモチーフにしたゲームはある。

「準備はいいかも?」

「いいよ、先手は秋津洲さんでいいよ」

「本当かも?後手だったからって後で吠え面かいても知らないかも!」

「そんな情けないこと言わないって……じゃあ始めようか」

「よろしくお願いします (かも!)」

――日本海軍艦娘大尉――

秋津洲

先手白の秋津洲さんは早速ポーンをニマス真ん中のE―4に突っ込ませてきた。続いて俺もそれに対抗するようにポーンを目の前に置く。

そして案の定ナイトを飛ばしてきた秋津洲さんに同じくナイトを

……なんてヘマはしない、同じ手で打つてたら先手が圧倒的優位である故に、俺はビショップを斜めにズラアア！って出す。

「いい手かもーならこれを出すかもー！」

と言つて来ながらこれだよ、ビショップを目の前に置かれた。お互いの角がにらめっこ状態。

続いて俺もナイトを出して秋津洲さんと同じような配置にして戦う。そして秋津洲さんは左側にキャットリングと言う、飛車のルークとキングを入れ替える特殊技をやつて防御も鉄壁にする。

ポーンを斜めに配置した所で俺は二つ目のビショップを一気に盤面を突っ切らせて最初に出されたナイトの斜めに置く。

一見するとそれで駒を蹂躪できるみたいに見えるだろうが、ポーンと言う将棋の歩がその後ろにある以上攻める事はできない。後ろを守るポーンの実在は相変わらずうざい。

しかもあちらもこつちに比例して斜めに駒を配置しており、俺と同様一気にビショップを動かせる配置となっている。

「……なら、これならどうかも？」

「ウウゝ痛い、これは痛い」

盤面の左側に配置したビショップの斜め右にはナイト、左には進めてきたポーンと言う逃げないとビショップが取られる配置となっていた。

チェスで駒を逃がすのは手を一つ奪われる事に相当するので、それが嫌なら取られる覚悟でナイトを取るかしか選択肢はない。

「では、これから」

「この手は意外かも……」

ビショップの斜め下に一番端のポーンを設置して守りに入る。将棋の角に相当したビショップは当然取られ、それを倒したポーンを取り、秋津洲さんはナイトをキングから四マスの上まで進める。

ここで意外な戦略を取った俺に会場みんなも度肝を抜いただろう。

「「な？！」」

「配置ミスしたかも？ミスだったら撤回してもいいかも」

「いいえ、ミスじゃないですよ」

「そ、そうかも?」

桂馬ナイトは王の目前。

秋津洲さんがナイトを動かした事でポーンを一つ失い、その上キングの斜め左上と言う、配置的には秋津洲さんのナイトで最強のクイーンかルークを取れる彼女にとって超優位な状況にある。

止める方法は彼女のナイトを倒す以外ないのだが、俺はあえて斜めにあつた自分のナイトを前に進めると言う愚行にも思える手を打つ。

「宍戸さん本当にチエス得意じゃなかったんですね……」

「宍戸っちカッコワルー」

「うるせえ!これでも本気だ本気!」

「でもコマも配置も圧倒的に秋津洲さんの方が上よね?どう挽回するつもりなのかしら?」

「大丈夫、俺は王様一人になっても戦い続けるから」

「口だけは一人前ですわね……」

まあ予想通りって感じでブーイングの嵐。そしてまたもや予想通りでクイーンが奪われた。白のナイトと黒のキングが隣接してる現状では倒される心配はないが、何か手を打たないとどっちにしろ死ぬ。

だが、この俺様は何も策がないまま突っ込んでいたほどアホじゃない。いい。

「……なるほど、そういう事かも」

最初の小競り合いで俺のビショップを倒したポーンに報復攻撃を仕掛けた黒いポーンはポツンとキングが隠れる城の前で待機していた。

俺はそれで壁となっていた相手ポーンを倒し、ルークとポーンに守られているキングを斜めからチエックを入れる。

「……あ、し、しまったかも!!」

「気付いたんですね、でももう遅いですよ、はいチエック」

もちろん歩が裸で王に近づいたからと言って倒されるのがオチなんだけど、愚行と思われて進めたナイトによって俺のポーンは守ら

れ、一番左側の逃路は俺のルークが待ち構えているので、事実上秋津洲さんは自分のルークで攻めてきたポーンを倒すしかない。

そしてそのルークを倒すのはもちろん守っていたナイト……ではなく、膠着状態だったもう一つの俺のビショップだ。

秋津洲さんはキングをビショップの前に置いて逃げることしかできなく、逃路を塞いでいた俺のルークが一気に盤の端から端へと移動し、チェックを入れる。

まだ最後の逃げ道がある彼女はキングを避難させるが、ここで動かすのは秋津洲さんと同じように配置して外に出してたもう一つのナイトを動かす、

「チェックメイト、ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます、かも……」

「「うおおおおお!!」」

駒が横に多くあったお陰で詰ませる事ができた。結論としては短期決戦はどんな戦況下でも有効な手段である。歴史上で有能な戦術家と呼ばれる人たちはせつかちな人が多いからな。

「穴戸っち凄い凄い!! てつきり弱いからソツコーで負けちゃうんだと思ってた!」

「それも戦略の一つだよ。ズルいとは思うけど、そうでもしないと秋津洲さんに勝てないと思ったかな」

「全然ズルくないかも! 負けは負けはかも、いつ何時も油断大敵……手を抜いたつもりはないけど、秋津洲の心の中に少しだけ余裕を持ちすぎたのが敗因かも……」

「その通りだよ穴戸くん。流石は私が見込んだ男だ」

「恐れ入ります!」

「流石は私を将棋で倒し続けているだけはあるな。まさか秋津洲大尉まで破るとは」

「盘面の上にある情報だけが勝負所ではないと言うことですよ」

チェスは苦手だけど、不得意とは言っていない。10人抜きとか話してたからガチで強いんだなあ……って思ってた。やっぱり将棋でもなんでも、相手を油断させるのはいい手だな。

視野の広い戦略は戦況を左右する。

まるで左右のおっぱいのように。

「良いものを見せてもらった。チェスや将棋を娯楽の一つとして強く推奨する事は、有能な将校への育成に大きく役立つかも知れない」
そうですか。それより勝ったんで鈴谷の甲板ニーソを触りまくってもいいんですよね？多分それぐらいの事は成し遂げたはずなんだけども？

しかし、大勢いる中でそんな約束を掘り返せるわけもなく、チェスにブームが付いたのか次々と対戦したいと申し出てくる将校達。おい何しにここに来たと思ってるんだ仕事しろお前ら。あと鈴谷は後で絶対約束守ってもらうからな。

チェスや将棋って言えば春雨ちゃんがかなりうまかつたと思う。直接対決した事はないけど姉妹中では無敗のレコードを持つらしい。可愛い上に頭がいいなんて、神様は能の分配の仕方を間違えたんだらうな。

ー時雨ルーム。

『……ハッ!いい、いまお兄さんが私の事を思っていました!私の気持ち
が伝わったんですかね〜えへ〜!くんかくんか、すーはーすうー
はあー』

『姉の部屋に汚物を持ってこないでくれるかい?股に着けてたそれで
HIVに感染したらどうするの?』

『まるで病気を持っているみたいなきい草……穴戸さんかわいそう
……』

ー舞鶴第二鎮守府、食堂。

なるほど、服を洗濯する時はここでやるのか。舞鶴に数年も所属し
ていたのに忘れるなんて俺はお間抜けさんだなあ!

いや、単に俺が当番を任されていた時代から随分と時間が立っ
ただけなんだけども。

因みに俺はたまに服をシャワー室に持って行って自分で洗ったり

してる。やれって言われると面倒くさい事だけど、極々たまにそう言う事を自分でやってみたくなるもんなんだ。こまめな事は嫌いじゃないしね。

横須賀を出る時も自分の洗濯物全部手洗いしてきた。清潔感のあるデブの方が汚いイケメンよりモテるって、これ常識だから。

「清潔感が重要。精錬感は必須。精強感は大事。これら三つ揃ってないと軍隊って成り立たないからな」

「泥臭さの塊みたいなのが何言ってるんだ、清潔感なんか必要ねえんだよオ！」

「結城はそれで落とされるよな。女からの評価も」

「違う違う、俺ツチの魅力に気付いてないだけ。チン○ンでけえつつってんのにさあ、釣られてくれないっつーか？身固い女ばっかだよなあ〜今の世の中！」

「冗談でもそれはないと思うぞ」

「それ女の人にスツゴク失礼だし！鈴谷達だってガード固いんですけどお〜！」

「うん知ってる。でもね？何人もの女が何人もの男と股掛けてた現場をこの俺は目撃しているんだよ。心に受けた爆撃はまだ修復段階だったんだ。その上約束通りと言って洗濯物から取り出した甲板ニーソを好きだけ触っていいなんて裏切り行為……俺はもうだめかも知れない」

うん、俺はな、鈴谷の脚を触って、すきあらばお股のほうまで手を伸ばそうとしてたんだよ。鈴谷もそれを承知で言ってたのかと思えば、それがまさかの洗濯物と一緒にでてきたやつだなんてさ。

こんなの誰が履いたか分かんねーじゃん。同じようなヤツ履いてるんだから熊野のやつかも知れないじゃん。別に嫌ってわけじゃないけどさ。

最悪なパターンとして汚くしてみすばらしいおっさんが、鈴谷の脚の感触を味わいたくてコツソリ履いたあとかも知れないし、無闇にそんなの触れないよお！本音としては脱ぎたてじゃないと意味ないよお！

「それじゃあワタシのを触るデース！」

「あ、イイツす」

「ソレってNO? or YESデース？」

ノーに決まってるだろうが。

突如として現れた英国気取りの帰国子女は金剛デース！現在でも舞鶴第二鎮守府で有望な活躍ブリを見せ、戦艦クラスは伊達じゃないその圧倒的な火力とそれに見合わない消費の良さは、正にハイブリッド戦艦。

旗艦を任される事が多い彼女は、名前から全体像を想像するとアマゾネスが浮かび上がってくるだろうが、俺の感性がイカれていない限りはれっきとした美人である。

「どうしたんいきなり？提督になるかも知れない将来有望な海軍大尉を今から落としに来てるのか？俺の同期達の方が出世すると思うからそっちに行った方が……」

「違いマアース！ワタシそんなBITCHじゃないデース！ちよつと気になったコトがあつたのデース」

「気になること？」

「ハイ、あのプリンツ・オイゲンとかなり密接に話していたようですが、彼女も提督になるデース？」

密接に話してたつて訳じゃなくて、単に秋津洲さんに勝ったから凄いつて言われてただけなただけ。

それよりもすごい凄いつて言いながら上下におっぱいぶよんぶよん揺らしてた事の方が、俺のチエス何かよりよっぽど凄いつて突っ込みたくなつた。野郎どもが相変わらず目のやりどころに困つていた様子だったのでな！

「多分そうだと思うよ？」

「ワアアオ……あのMassacre艦隊の旗艦が提督になるだなんて……」

「虐殺は言いすぎだと思っけど……え？ガチでそんなに強いのか？」

「大規模作戦で敵艦隊全員取られマシタ……」

「まあ鈴谷としては代わりに倒してくれるほうが楽でいいんだけどね

く。でも確かに凄く強かった！やばい！流石は外国艦って感じ？」
「へえ……」

やっぱり都市伝説じゃなかったんだな。世の中分らないもんだなあ。だって見てくれよあれを。

『荒木大将が陸空から見ても明らかなる名将。確かに斎藤中將も名将であるが、国の導き手としては大将が先鋒をつとめる事となるだろう』

『何を抜かすんだ貴様等ア？斎藤中將のお膝元にて日本海方面の安定が成せたのではないか。今や我が国が日本海を主導出来ているのは中將のお陰と言わずして他ならない』

『テメエ中將と大将の格差を理解しやがれエ!!』

『テメエこそレスキュー隊のくせに大きな事言ってんじやねえぞオラア!!』

『だめー！みんな仲良くしないと、ふあいあー！しちゃうよ？』

『オナシヤスツ!!』

即落ちニコマ漫画かよって思うぐらいスムーズな落とし方ですな。オイゲンさんの「ぶんぶん！」って言いながらぴよんぴよん跳ねるのは色々と股間に悪いのは言わずもがな。

まったく……本陣である呉鎮守府の諸港を差し置いて戦果をあげていたのはやっぱり彼女の凄い指揮能力からなのか、或いは練度の高さなのだろうか？

あんなクソエツツロイ外国艦ばかりだったら、いつか柱島に立ち寄ってみたい。英語を流暢に話して、ワオスゴイ！って言われて惚れられたりして、そして最終的には……グツへへへエイ!!

「……穴戸っち、えっちな事考えてる」

「え、そんなことありませんわよ？」

「わたくしの真似ですの!?ブツ殺されたいんか!?トオオオオ!!」

「あ、ごめん、ほんとごめん、だからいつものクマノンに戻ってマジ頼む」

「え、あ、ゴッホン……し、穴戸さんが悪いのでしてよっ！」

くまのんは怒らせるな、これは家訓となるだろう。みんなも熊野の

豹変ぶりを見て肝に銘じた事だろう……怒らせるとどえりやー目に
遭うゆーことが。

「穴戸さん達はその後どこへ行かれるんですかあ？」

「えーつとね、大阪警備府から呉鎮守府に行つて、それから佐世保
……つて感じでドンドン地方に行く感じ」

「なるほど……研修で全国を旅する感じね？」

「そういうコト。ハア……いつになったら提督になれるのやら……」

全国の基地を研修し終わったあとは確か港湾や鎮守府に属する提
督の元で補佐を務める事になるんだっけか。

一人の元に留まらず、最低三人の提督のを回って補佐する事になる
ので、膨大な経験値を得ることとなるのだ。

最初はどんな人の補佐をするんだろう？楽しみすぎてホッピング
ピーポーマックスだぜ（※この言葉に特に意味はありません）。

柱島 Welcome

大阪、呉、佐世保、鹿屋、単冠湾、そして諸港の要塞部などなど、数々の鎮守府を体験して回った俺は、いよいよ提督の補佐をして、あわよくば代行して実践経験を存分に積める段階にあった。

それぞれの鎮守府は敏感な視線で見ると確かに違った性質を持っている。特に佐世保鎮守府は凄かった……舞鶴以上に大陸からの輸送を護衛する立場にあるので、艦娘の所属数だけでなく設備とかも横須賀に引けを取らないほど優れていた。

旅の終わりの論文ではそれぞれ基地の重要性を考慮し、それに沿う将校育成方針と言う物を書いた。みんなは結論としてもっと軍拡をしないと国民守れないとか言ってたけど、おいおいそんなの子供でも分かるぜ？

そうさ、軍隊ってのは何時の時代も何かしらの理由で慢性的な金銭トラブルに見舞われているもんさ。あ、これは世の中全てに言える事か……やっぱ世の中金つすよ金。

「ですよねえ提督？」

「え!?あ、う、うん、そうだと思う、うん……」

「H A H A H A ! M o n e y なんてあっちの方から降ってくるのよ! そんな事より A d m i r a l もシンドも踊りましょう! 出撃がない日なんて最高だわ!」

「深海棲艦が出現したら行かなきゃいけないのは知ってるわよねメリケン? それともテニスボールより小さな脳味噌の容量はもうマツクスかしら?」

「何か言ったかしら? この H O T D O G S U C K E R !」

「E s i s t F r a n k f u r t e r A m e r i k a n e r !
(フランクフルトだぞアメリカ人!)」

「I D O N , T F U C K E N C A R E ! (どうでもいいだろう
がアそんな事オ!)」

執務室にて、左側にドイツおっぱいがゆくらゆら、右側にアメリカンおっぱいがゆくらゆら。そして何故か無駄に縮こまるここの統率

者である提督。誠に異様である。

この光景を見れるのは柱島泊地だけ！皆さんも是非お立ち寄り下さい！

そしてここまでの過程もどうぞ！

―海軍大学校。

「……君は合格だ。君のような人材こそが、提督となるべきだろう」

「ハッ！お褒めに預かり光栄に御座います！」

面接を経て補佐をする提督が選ばれていた。面接官の提督は合格と言ったが、別に落とされる訳じゃないので、失格だとは言われない……はず。

落とされてるヤツって居るのか？

「君は少佐に昇進させる。知っているとと思うが、これは日本国内各地にある最下級の要塞部を任す事ができる最低階級だ。これで事実上指揮官としても働く事ができる。大本営に立ち寄ったり、鎮守府の補佐をするに当たって、助けとなるだろう」

「ありがとうございます！」

「……まあ、君の最初の勤務先は呉の近くにある泊地なのだが」

「……え、それって」

「そう、あの外国艦鎮守府と呼ばれる場所だ。何かとクセの強い娘が多いと聞く。あそこの提督も少し変わっていると言うかなんとか……まあ、いい経験にはなるだろう。普通の海軍基地としては見ず、あくまで例外があるのだと言う認識で勤務に臨んでくれ」

「は、はあ……う？」

少佐に昇進し、柱島泊地……通称『外国艦鎮守府』と呼ばれるオイゲンさんの所属だった場所であり、圧倒的な戦果を出し続ける鎮守府はさぞ強い外国艦と優秀な提督がいるんだろうと、胸が高鳴っていた。

行きたかった場所に行けるなんて正に奇跡！この幸運を無駄にしない為にも、一生懸命有能な提督から学ぼう！そして俺も、一流の提督となる準備をするのだ！

呉を經由して柱島へはボートで行く。ボートでは数人の艦娘達が護衛してくれてたので心配は無用だ。

ただ強い深海棲艦に運悪く出くわしたら俺は確実に死ぬので、胸のバクバクを止めようと必死に平然を装ってた。

護衛してくれてた艦娘達からは「怖くないんですか？」と聞かれたが、「俺はこれから、これより危ない経験を何回もする事になる。この程度で怯えてたら、君達みたいなカワイイコちゃんを守れないだろう？」ドヤアア……って言ったら黄色い声を貰った。

イケメンは辛いぜ。しかし彼女たちが帰る途中で、あんな臭いセリフ初めてえくキモく！とか言ってたので、その辺にあつた石をフルスイングで投げた。当たらなかつたけど。

そしていよいよ待ちに待った柱島泊地！かなり小さい島は農産業と漁業で成り立っている。もちろん呉より小さく、一見すると少し大きめの市役所ぐらいの建物だけが、出撃所を含めると海軍要塞としての機能をちゃんと果たしているように見えた。

建物の内部へ中に入ろうと……する前にまずここにいる事を伝えねばならない。つまりはインターホンか電話をかけて知らせる必要があるのだ。

普通は玄関の前に門番的な憲兵がいる筈なんだけど、居ないんだよこれが。確かにここは孤島で侵入するようなヤツはいないし、モニターとレーダーで深海棲艦を察知できるからそんなに気張る必要はないんだろう。

この規模だつたら多分憲兵一人と海兵二人ぐらいでこの情報部はやっていける。

「あ、あの……」

「あ、はい！なんででしょうか？」

「貴方が今日から提督の補佐となる、シシードさん……ですか？」

「あ、はいそうです、初めまして」

「私はここで提督の第二秘書を務めさせて頂いています、Zaraです！よろしくお願ひします！」

「穴戸龍城です、短い間ですがこちらこそよろしくお願ひします」

誰か呼ぼうかと思った矢先に顔をドアから覗かせひよっこり出てきたのが、重巡のZaraさん。名前、そして容姿を見ての通り……とつても外国人です。しかも金髪ロリ巨乳……うわ、エロ。

この国に生まれた人間の殆どはそんな属性を持って生まれてこないが、逆に道端でナンパするかと言われれば躊躇してしまう。

完璧すぎると逆に手が出しにくいっての……あるでしょ？

鎮守府内に案内して貰ってるときもクソエロい体して尻ゆらしてんだよ、これマジ？こんなのと毎日イチャイチャ（してるとは限らないけど）できるなんてマジここファンタジーの世界じゃね？

最強と名高い鎮守府、最高にエロ可愛い艦娘、そしてそれを統率する提督……どんな人なんだろう？

執務室に案内されて、いよいよ本人と出会う。勿論ノックして返事来てから入って、クツソ覚えるのが面倒くさい敬礼の礼儀を踏んでいきながら近づいて手を上げる。

「本日マルナマルマルより補佐官として着任しました、穴戸龍城少佐であります！短い間ですが、ご指導御鞭撻の程、よろしく願います！」

「……よく来たね、歓迎するよ。僕は荒木連龍で、ここの提督をしている者だよ。これからよろしくね」

「ハッ！」

「Meは今日のAdmiralのsecretary shipのIowaよ……あ、AdmiralそこはMeの書類と一緒にするのよ？何回も言ってるのに……」

「あ、ご、ごめんアイオワ……」

「あ、提督！またポーラを執務室で寝かせて！こう言う時はしっかり叱ってくれないと駄目じゃないですかあ！」

「ご、ごめんー！い、いやさ、飲まないと出撃できないって言うからさ、そ、その、あの……」

「……提督ツ？」

「ひ、ひいいい！！ご、ごめんなさいごめんなさい！！」

なんだこの人達は？

―柱島執務室。

って事がありましたよ、今では提督の隣に座って補佐をする事となりましたのですが……思いもしませんでしたねえ、まさか最強鎮守府の提督が、こんなのだったとは。

「ビスマルクさんとアイオワさんのキャットファイトはさせておき……提督、この出撃報告書と資材消費録は右側にまとめておいて、一旦放置しておきましょう。書類は一度優先度を決めて、順に終わらせて行ったほうがいいですよ」

「な、なるほど……君、頭いいね！」

逆に頭よくなりちや提督なんて出来ねえだろうがア!?

と、突っ込みを入れさせる彼の名前は「荒木連龍（あらき・れんりゅう）」大佐。

えーつとな、この人は……まあなんて言うかその……あれだ、オドオドしてる人だ。そして仕事が凄く出来ない人だ。聞いているけどこの人なんで提督になったんだって聞きたいけど、多分同じ名字からして荒木大将の息子さん……かな？まだ聞いていないけど。

ここに来てもう一週間。

出撃の様子を見てみたけどこの人が諸葛孔明みたいな策士策略の将ってわけでもないし、特に難しい戦略を立てている訳でもない。

ただ素質が全くないってわけじゃない。バブル世代で甘すぎる時代を堪能した無能集団とは違いプライドが高くなく、誰に対しても低姿勢なのは人としては好印象である。そして寛容に接しているからか、鎮守府内の人望はやたら厚い。

「グルルルルツツ!!」

「あの〜アイオワさんにビスマルクさん……もうそろそろやめてもらっても良いですかね？」

「黙ってるニホンジン!!」

「すみませんした」

「あ、あの、二人共、喧嘩はだめだよ?」

「Sorry Admiral!」

荒木大佐もニホンジンなんですけど……いや、もしかしてニホンジンじゃない可能性が微粒子レベルで存在している……?」

この柱島鎮守府……最強と名高き物にも条件が付いていた。

この鎮守府は陽気な艦娘達が多く、整備工員たちも海外から来ている為色々、その……撫でらかな性格の持ち主が多いのだ。

舞鶴第二鎮守府も比較的陽気と言う点では近いが、ここは戦果に影響が出るほどらしいのだ。しかし土壇場ではかなりの暴走っぷりを見せてくれる……らしい。

要するに呉鎮守府の海上警備で目立つ程の活躍の場がない上、危機感がない状況だと本気を出せず、普段はうんこみたいな戦闘記録しか出していないとの事。

実際、今日のリザルトはDを付けてもいいと思う。イ級の3隻に大破されるとかちよつとあり得ない。

この柱島鎮守府は俺の言葉で表現するならば、正しく昼行灯。通常時は全くもってDランクリザルトなのに、緊急時の火事場の馬鹿力だけは世界一と言う……なんかこう、もの凄く扱いづらい艦隊っすね。

彼女たちも手を抜いてるわけじゃないと思うけど、あの時のように何故か本気を出せないみたいなの？いるいる、瀬戸際と本場に極端なまでに強いやつ。

その逆がほとんどなので……まあ、軍隊全体のバランスが取れて案外いいんじゃないツスか？

艦娘は15人しかいない。その上全員が戦闘員じゃないので泊地としてもかなり少ない戦力数だが、それに見合わない戦果を大規模作戦中に上げているのも事実。過去に防衛戦で20隻以上の精鋭を無傷で撃破していた経歴を持つ。

そして化物鎮守府は何より個性的な艦娘が揃っている。

目の前で女子プロレスワールドチャンピオンシップを繰り広げているビスマルクさんとアイオワさんに加えて、酒乱のポーラとか。

紅茶をこよなく愛し英国淑女と自称しながら発音は完全に米語寄りのウォースパイトさん、陽気でほわわんなとした雰囲気で基本的に

優しいが付き合いが悪いとマフィア化するイタリアンファミリー達、祖国の誇りを重んじて何かとドイツ絡みの事に訂正を呼びかけるクツソ面倒くさいドイツ組。

あ、少し前に知り合ったのはパイプを燻らしながらこの立地的に見えないはずの祖国ロシアを向き続けるオクチャビ……いや、オクチャブリツジ……すまねえ、ロシア語はさっぱりなんだア。

可愛くない名前だけど、元々カツコイイ系の彼女は基本的にガングートさんと呼んでいる。

こんな個性的で手を焼く羽目になるんだつたら正直異動か提督をやめたくなるかも知れない。少なくとも原子力潜水艦の艦長とかの方が安定感はあるそうだ。

執務仕事も既に代行させてもらってるようなものだし、もう俺提督でいいんじゃないかな？

「って事があったんだよ、すごくないこの鎮守府？ここの仕事全部代行できるようになったら俺将官に昇進されてもいいと思う」

『提督に相応しいのかはともかく、凄いい鎮守府に当たったね穴戸くん』『こつちも補佐官の人が来てますよ！あまり話してないですけど』

『こつちの補佐官の人は気が利く人でね？みんなの為に名物を買って来てくれたんだよ。つまり僕が頼んだモミジ饅頭送ってくれるよね？お金もちゃんと渡したはずだけど』

「輸送料とか貰ってないんですけど……」

『これが送料だよ。投げキス……んまっ！』

「はっ。」

お土産の情報を渡すためにスカップチャットでの映像通話だ。

どうやらコイツはまだ知らないらしい……そうやってポンポンお金を貢いでくれるバブル世代のミツグクンは、既にこの世から(多分)消えているのだと。

しかも時代は深海棲艦がいる故に輸送費が高揚しているので、ただでさえ高かった送料は更に高くなっている。

あと、別に欲しかったわけじゃないけど、映像がカクついてて投げキスがまともに見えなかった。

『お兄さんそつちで大丈夫ですか!? 異世界人みたいな身体した外国艦に唆されていませんか!? 春雨も行きますしょうか!?』

「ははは、大丈夫だよ。ここに来るのはいい経験になるからみんなにも来てほしいけど、横須賀を守る春雨ちゃんが居なくなったらみんな困るだろうからね」

『う、うううう……』

「心配しなくてもいいよ。春雨ちゃんと村雨ちゃんには名物のケーキ送るから……勿論、俺の投げキス入りでね」

『わあーい! ありがとうございます!』

『僕には?』

「呉の職人さんが作ってくれたスパナを饅頭と一緒に送ってやる、喜べ」

『わーい。一番高そうなのに嬉しくなーい』

柱島と呉を毎回行き来できるわけじゃないんだよ。特に俺みたいな余所者は、長い勤務を終えて次の鎮守府に移る時か、呉市に立ち寄る正当な理由でもないしと買物なんて出来ねえんだよ。

『まったく……そんなだからモテないっていつも言ってるのに』

「知らないだろうけど、俺は外国人とも気軽に話せる性格だし? 結構ここでの評判はいいほうなんだぜ?」

『そう思ってるならそうなんだろうね……君の頭の中では』

「は? 机の下に一人ジユボジユボはべらせてるかも知れねえじゃねえか! 情熱的な愛情表現は外国人美人の特権!」

『え、いるんですか? 今から行っていいですか?』

「あ、ごめん春雨ちゃん。冗談だから」

久しぶりに時雨達と談笑に浸り、ノーパソを閉じ終わった後にやる事と言えば、勉強である。

実際には復習(と言うなの実務)みたいなもので、艦隊運用法や艦娘海戦運用術などと来る前に覚えた事のおさらいと、提督目線からの鎮守府運営術と照らし合わせながらの研修兼補佐官なのだ。

勿論、マニュアル通りではない海軍要塞柱島泊地はちつとも参考にならないのはお察しである。

しかし俺は、仕事に関しては現実主義を貫いている。例えググってそう書いてあっても、非効率だったり実質必要なかつたりすればそれに沿うような事はしない。

それに実際に起こす深海棲艦との攻防戦では、邪険にされたり役に立たないって言われる物も数多くある。実践すればマニユアル人間と言われかねないので、思考力からの判断力と、それを実際に行動へと起こして円滑に進める技術が必要になってくる。

緊急時の対処ってのは、もっとも対処が難しいからな。

柱島 イギリスの料理はUnwelcome

ー工房。

「えーつとですね……ジス、キャン、ビー、イージーアー、ライク、ジス」

「HOLY SHIT!」

聖なる糞と叫ぶのは外国人整備工作班。意味合いはスゲーとか、マジかよ!?!とか驚いた時によく使う言葉なので、直訳した物にあまり意味はない。

整備工作班のガチムチ男性三人衆（ゲイ）には、舞鶴で俺が整備を行っていた時によく使っていたショートカットを伝授して効率よく仕事ができるように教えていたのだ。

執務の方は速攻で終わらせる。そして提督に褒められたが、出撃で成果が今ひとつないので嬉しくないのはお察しである。

ガチムチの人たちは英語を喋っているので祖国はアメリカなんだろうと思うけど、この人たちの整備工作班の班長がこの人なんだよね。

「とつても、勉強になります！Merci!」

「Bienvenue!」

「え、あ、ええ?」

……あれ?なんか間違ったか?なんだよ、思いっきりスカしてたのに凄く恥ずかしいじゃん。

こちらが柱島の整備工作班班長の、コマンダン・テストさん。俺の人生の中で一人称がわたくし呼ばわりな人を見たのは熊野に次いで二人目である。しかしこつちの方が品がありそう……いや、絶対にある!熊野人には失礼だけごめんね!

美しい人だア……そして髪が物凄くトリコロールな人だア……この人への告白の言葉は、あなたの髪の毛で毎日俺の歯を磨かせてください!!で決まりだな。

「ふふふっ、上手くやっているようね」

「あ、オフコースですよオフコース！ウォースパイトさんも相変わらず美しい……Beautiful eyes, just like my romantic past old days memory! (まるで我がロマンチックな過去のようー!)」

「How could myself determine a beautiful past with beauty? (あなたの過去が美しさに満ち溢れているとどう確認すれば?)」

「今の俺を一心不乱に見てくれれば、嫌でも分かりますよ……んまー!」
俺の投げキスを笑うウォースパイトさんは、脚を組みながら優雅にテーブルで紅茶を飲んでいいる。上には数人分のカップとティーポットが用意されている、誰かと飲むつもりだったのだろうか？

「English pronunciation (発音) が相変わらず上手いわね」

「いえいえ、ウォースパイトさんほどではないですって! 流石本場の米語は違いますなア!」

「私はイギリス生まれなのだけれど?」

「ごめん、発音がアメリカ人っぽくてつい……でも本当に上手いっすよ? アイオワさんとか見てくださいって」

『Meのプディングツツグ!!』

『名前書いとけメリケンサククウツ!!』

あそこで叫ばれた少ない情報でもう何が原因の喧嘩なのか分かる。そして見なくてもその喧嘩相手が分かる所を見ると、もうこの環境に慣れてきてしまった俺がいる。

状況適応能力とか、軍から賞賛されてもいいと思うんですけど。

それにしても、アイオワさんは相変わらず凄く流暢な英語だなあ

……!

「あれはともかく、Shishidoは何処かでEnglishを習ったのかしら?」

「え? まあ……昔、ね?」

「言えない過去でも?」

「フツ……まあ、いい漢には言いにくい過去の一つや二つあるものさ……ドヤアアア！」

「ハツハツハ！それもまたカツコイイではないか補佐官！ハツハツハ！」

時雨がいたら、キモオオオッ！つて奇声を上げてるところだけど、今回はパイプを啜えた愛国者ガングートさんが褒めながら来てくれた！キリツとした顔なのにちよつと童顔で、それなのに性格は女前とか惹かれませんかねエ！

「G a n g u t、いかがかしら？」

「紅茶か！我が祖国では良くコーヒーと共に体を温めていたな！頂こう！ゴクゴクゴクツッ！」

熱湯をそんな勢い良く飲んじゃだめだと思う。

「どうかしら？British本場のTeaの味は？」

「うむ！よく分らん！しかし美味いぞ、x o p o Ⅲ o ！」

「煙草なんて吸ってるからよ……」

「ブリタニヤは煙草の本場のような物だろう！？現に私の吸っているのはダンヒルだぞ！」

「愛国者ならせめて祖国のを吸ったほうが……」

煙草はあまり知らないけど、あの流れだとダンヒルってのはイギリスの煙草なのだろう。

「まったく、風味に敏感なんだな……味蕾はからつきしなくせに」

「わ、私たちの料理はまずくないもん!!」

「だ、大丈夫ですから、俺は知ってます！本当のイギリス料理は美味しいのがあるんっすよね!？」

「わたくしも知ってます！イギリス料理は美味しいです！」

「日本食とフランス料理に言われても嫌味にしか聞こえないわ……」

ガツクリと肩を落とすウオースパイトさん。いや、イギリスって行ったこと無いけどさ、帰ってきた奴らの統一した意見が「不味い」だからどうしてもそのレビューを信じちゃうんだよ。

でも最近、英国とはそもそも美食意識がなく、一定以上腹が膨れて栄養価が蓄えられればそれでいいと思える効率的な思考を持つ文

化なのかも知れないと、専門家は言ってた。

ロシア料理は美味しいのもあるけど、他のと比べて人気が無いのもそれ相応の理由があるって事だ。

「だが私はイギリスの24時間レーションを食べた事はあるぞ」

「ど、どうだったかしら？」

「控えめに言えばとても不味かった。オートミールが特に不味い」

「じゃあ控え目に言わなかったら？」

「犬も食わない。これなら我が祖国が出しているちよつと高級そうな犬の餌っぽいカーシヤの方がまだマシだぞ」

どっちにしろ犬の餌じゃねえか。

話聞いててもクソまずい飯出されたら戦意喪失するわボケ。戦闘糧食は日本が一番！他の国ではアメリカ、フランス、イタリア辺りが他国から好評だ。

何ていうか、味蕾のレベルが違うみたいなの？

しかし勘違いするなかれ。戦闘糧食というのは、あくまでジャングルとか砂漠地帯みたいな兵站が困難な状況下で人を飢え死にさせない為に作られた「生き永らえさせる」食い物なのだ。

一日中動き回りながら何も食べずに我慢してたら、味に文句なんて言つてられないでしょ？

「Buon Giorno！なんの話かしら？」

「特に大した話はしてませんよ、ただイタリアの料理は美味しいな〜って話をしていただけです」

「それはそれは！嬉しいわね〜」

この人はアキラさんで、イタリアンファミリーの構成員。まったく……なんで外国艦はこうもボンボン！な人は多いんだ……おっぱいがそこら中にあるぜえ……？

こんな南国のパラダイスみたいな鎮守府はここだけ！それを体感できるのは今ここに居る俺だけ！

大学の同期はみんなはどうしてるのかな？まあ、俺ほど鎮守府の研修を楽しんでるやつはいないと思うけど？ハッハッハ！

『まさか呉鎮守府に当たるなんて思わなかったかも！提督とまた一緒に仕事できて嬉しいかも！』

『大鯨もですっ！短い間ですが、一生懸命学ばせていただきます！』

『はは、そう言ってくれて嬉しいよ。確かあの柱島鎮守府へ君達の同期を送ったのだが……彼は大丈夫なのだろうか？』

『誰かはわからないけど、提督育成プログラムの人たちはみんな凄く濃いかも！だから大丈夫かも！多分！』

『た、たぶんって……』

『……それですね？合コンの勝率を上げるには年収を言うのが最も確実な方法なんですって！巷で言う年収一千万、実は税金や受けられる社会保障がかなり激減する一方で海軍は寧ろ手当がついて実質3割増し！その事を言えば最早その場の主人公ですって！』

『それじゃあ金で釣られるアバズレしか釣れないじゃないか……俺を誠に見てくれる、大和撫子を……』

『なにナマ言ってるんすかア!?しかもいつの時代の常識掲げてんですかア!?今の世の中はフリーセックス社会！最初はおマ○コとおチ○コが握手して、そこから始まるロマンス！それが男女の挨拶みたいなもんじゃないですかア!?』

『し、しかし……』

『ああ焦れたいイ！じゃあ試しにここの艦娘でお手本を見せます……おい！そのロリがかったカーノジョー。俺、年収は実質一千万、未婚、イケメン。はいこれで股間同士の握手決定ね』

『はい通報決定ね』

『Nooooo!!あゝ(通報は)だめだめだめだめマジでヤメテイ』

『では今日もよろしく頼むよ』

『『ハッ！』』

『あ、あの！私はどうすれば……』

『オイゲンくんには大和と武蔵の書類の手伝いをしてほしいんだ。彼女達から学んでくれた方がいいと思ってね、教えるのは得意じゃない』

し』

『わ、分かりました！だ、ダンケです！グロースアドミラルさん！』

……しかしだな、一つ思った事がある。

これから提督と成りうる有望な提督候補は、今までの歴史の中で……いや、かなり早いスピードで将校への道が切り開かれている。

共に学業をこなし、個々の才能を肌で感じていて俺は理解していた。提督候補生達はみんな優秀であり、指揮官となる権利を誰もが所有していたと断言していいほどの裁量を持っている彼らは、俺なんかよりもずつと資格がある。

普通ならば安全に、そして安定を求めて無理に出世街道を駆け登るような真似はしない。常務の忙しさに加えて、それ以上にストレスや努力を必要とし、もしかしたら失敗するかも知れないリスクも背負っているからだ。

若き指導者の卵は、それ故に今ひとつ目立たない。最初に開けた卵パックからは、勿論手前の方を選ぶだろう。だがもしも、一つだけ茶色のがあつたらどうだろうか？最初に割られるかはともかく、他のやつよりは明らかに良さそうに見えるのではないだろうか？

つまりあれだ。あまり目立たない俺が滅多に得られない経験体験をして実績を得たら、海軍内での名声も上がるかもってこと！

「両艦隊、呉艦隊を確認できたようです！」

「じゃあ穴戸少佐の作戦通りに砲雷撃戦開始……でいいのかな？」

「はい。念のため再出撃及び補給の準備をするようにと整備工作班にお伝え下さい。自分は大本営に本作戦内容の説明文等を予めしておきますので」

「う、うん、分かった……始めていいよ！」

『『Goooooooooohheeeelll!!』』』

……防衛戦ってさ、突然やってくるもんなんだよ？冗談抜きでさ。

柱島 予想外の成果に浮かれるのはバカがする事だ

そう、あれはファミリーと会話に華を咲かせていた時だった。

「それですね〜？イタアーリアのピッツア！はとも美味しくてえ〜日本のあれも美味しいのですけどお〜、故郷も味が〜」

「へえ〜そうなんですか〜」

「日本のアレは美味しいけど、手作り感がないのよね。母なる味を噛みしめるには、母なる人々による、母なるレシピ、そして母なる素材によって作られる事で本当の美味しさが楽しめるのよ」

「へえ〜なるほど、へえ〜」

「そうなんですつ。あ、でも日本のアレも美味しくて、リットリオは好きですつ」

「リベも大好きー！」

「へえ〜それはどうも、へえ〜なるほど〜」

「ポーラも白ワインを飲んでピッツアを食べるのはとお〜つても好きですー！」

「へえ〜なるほどなるほど！へえ〜へえ〜へえ〜！満へえ。あとポーラさんのは没収ですね」

なに昼間っから飲んでるんだ、酒保だつて無制限にワインを備蓄できけるわけじゃないんだぞ？自分で作ったワインだつたら別にいいけど……いや、それ全然良くないから。結構重いタイプの犯罪だから。アブねえ、イタリアンファミリーのおつとりした雰囲気からなるピザ……じゃなくて、ピッツア！の話題に流されて色々と緩くなつてきやがる。

今の俺なら、小学生時代に手に持っていたマシユマロを奪い取ったクソザコナメクジを許せるかもしれない。

あ、思い出したらやつぱり許せねえわ。もしも会うことがあるとしたら、助走からの顔面ドロップキック確定だな。

『た、大変ですう〜!!』

「おお、どうしたんですか!?そんなに走ると危ないですよ!」

ザラさんがその胸部装甲をこれでもかかってぐらいに揺らしながら全力疾走してきた。後から遅れるようにして、経理少尉や憲兵達も一緒に出てきた。

「そ、それどころじゃないんです！ハア……ハア……！」

「大丈夫さZara？」

「息切れしてるみたいなんで代わりに野郎共が説明してくれませんか？」

「ハッ！ たった今深海棲艦の群れを発見し、安芸灘と瀬戸内方面から迫っている様子ツ！」

「直ちに防衛体制の準備を初めて下さいツ！」

「二、な、なんだってー！？」

ー執務室。

「あーどうしようどうしよう!!」

「落ち着いて下さいよ荒木提督。防衛戦は幾度か経験済みでしょう？自分は初体験ですが」

「……」

「ん？どうかしましたかザラさん？」

「い、いいえ！なんでもないです……」

今の会話で、頬を赤らめるような内容は含まれていただろうか？いや、ない。

と思ったやつが殆どだろう。だが俺は知っている……ザラさんがネットで同人誌タイトル『海軍実録さ漢達の攻防戦』を興味津々な感じで見ていた事を。

それから導き出される答えは一つ……彼女は俺たちの会話から、その磨き上げた想像力（腐）で、鎮守府泊地の存亡をかけた海戦が始まろうとしている最中にまさかの801とは……ザラさんはムツツリ質ですねえ！

「ええと……サラたちはどうすればよいのでしょうか？」

「ええつと……、こういう時どうするんだっけ？」

提督は慌ただしく、浮かび上がるのかもわからない打開策を考えて

いるようだが、敵艦が鎮守府に向かって接近している時の対処なんて出撃しかねえだろ。

こういう時、鎮守府全体が協力してやらなければならない事は大まかにーまず敵艦情報を手に入れてそれと並行して出撃準備、状況を見て作戦を立てる、皆に編成と作戦内容を伝えて出撃させる。

もし敵の進行スピードが早かったり、直ぐそこまで迫ってたら出撃を最優先する形を取る。

「これはもうsortieするしかないでしょ！Let's go！」
「待ちなさいよメリケン、敵艦隊はまだそこまで迫ってないわ。少し様子を見てそこから作戦を練るのが得策よ」

「ジャーマンシップは臆病風に吹かれたようね！最強戦艦ことこのM eが、戦艦たる由縁を教えてあげるわ！」

「脳味噌分けないと少しは落ち着いていられないのかしらア!？」

深海棲艦はまだ遠くにいるし、別にスクランブル発進の必要はない。だが、きちんとした計画なんてこの外国艦連中に必要なのか疑問に思う。これが順序でありルールなんだから仕方がないけど。

安芸灘方面から約20隻と瀬戸内から約20隻。エリート艦がいるらしく、結構早いスピードでこっちに来てる。合計40隻は、かなり数だ。しかもいつぺんに来てるとなれば最早大規模作戦レベルだ。

呉の前を陣取る俺たちは一早く索敵できたが、今頃はあっちの方も敵艦隊に気づいてるはず。既に呉には最新の情報を入れた為、呉鎮守府も出撃準備は出来てると思う。

鎮守府自体を防衛するために数名ほど艦娘を残す必要があるんだけど……呉の進行ルートの防衛組は必要ないだろう。

「直ちに第一艦隊として旗艦アイオワ、アクイラ、リベッチオ、ウォースパイト、リットリオとローマを……第二艦隊では旗艦ビスマルク、U-511、ガングート、サラトガ、グラーフ、ポーラを編成し、それぞれに安芸灘と瀬戸内方面への出撃を補佐官として進言しますッ！」

「え、それじゃあ柱島の戦力殆どガラ空きじゃ……って言うかももう少し作戦考えてからでも……」

「そうよそうよ！しかもよりにもよってこのアメリカニツヒに賛成するの!？」

「即出撃って点では賛成ですけど作戦があるんですって！なので提督、ご決断を！」

「んんん……確かに何時までもクヨクヨしてられないか。じゃあ宍戸少佐が言ってくれた通りの編成で直ちに出撃されタシ！作戦は追って伝える！」

「ハッ!!」

こんな柱島鎮守府の艦娘でも、軍人特有のお固い敬礼はできる模様。

とても立派な敬礼をして即座に執務室を後にし、残された提督とザラさんと俺で司令塔となる準備を行う。提督には整備工作班にスクランブル出撃を行う事を伝えるように指示して、ザラさんには無線やマップの準備を行わせて、俺もその他に必要な事を自分でやる。

提督と秘書艦に平気で指示している俺は最早この鎮守府の統率者と言われてもいいと思う。

憲兵兼警備兵達、経理科の連中、整備工作班も築いた交流関係の影で最早この鎮守府は俺の手中にある……この鎮守府を使って、日本海軍にクーデターを起こすツ！みたいな展開結構見たことあるけど、大抵は中世か魔法の世界の話になる。

通信機器が出て、プロジェクターからのマップも表示完了。マップピングはFPSゲームほどリアルタイムには映してくれないし、少しズレてたりして精度は今ひとつ覚束ない所もあるけど、大抵は大丈夫だ。交戦すんのは艦娘だし。

……これで司令塔の準備は整った。まずは第一艦隊第二艦隊に分けた奴らをそれぞれ安芸灘と瀬戸内方面に行かせて、敵艦を発見して空母がいるとしたら航空戦力をできるだけ削る。そして後退しながら呉艦隊と合流する形でクロスファイアー。

速攻で攻撃して、民間エリアに近づかないように誘導する事で迅速かつ最小限の被害で留める。

という作戦を取りたいのだが、これが映画みたいに上手く行かない

んだよ。指揮官が試されるのは、部下の精練度を含んだ常日頃からの準備と、指揮のタイミング、そして的確な司令を出してなるべく混乱を起こさないようにする能力だ。

無謀な作戦でも、これらが揃ってれば大体うまく行くって事を習った。

本当は凄く無謀な作戦で、柱島艦隊を崖っぷちの状況まで追い込んだ方が本領を発揮するとは思うけど、そんな独裁者みたいな事はしない。俺が提督の立場だったらどうするかを、今できる最善の策で切り抜いていく。

「まずは情報を最優先して索敵から初めさせ、整備工作班には予め艦載機が無くなるので補充の準備をする事を指示してくださいザラさんと提督。自分は佐伯湾泊地にも援軍要請を送ってみます」

「はい！」

「わ、分かった……」

「あとザラさん、両艦隊には砲雷撃戦が始まる前に必ず撤退するように念を押して下さい」

「分かりました！」

『第一艦隊、Enemyの反応をCaptureしたわ！作戦通りAirforceを使うわね！』

当たり前だが命令無視はしないらしい。

ビスマルク率いる第二艦隊も同じく敵艦隊を発見し、空母が二隻いるから若干優勢を誇っているらしい。20隻に対してこれって事は敵航空戦力は大したことが無いのか？

早急な結論だがその情報を佐伯湾泊地にも伝えて、既に伝わっているかもしれないが呉第二鎮守府にも援軍要請を出そう。

「こちら柱島泊地、現在約20隻以上の敵連合艦隊が安芸灘、瀬戸内から来ているのでー」

『あ、ああ。し、知ってる……ああ、すぐに援軍を、うっ、で、出そう……』

「……うぐ助力感謝します？」

『あ、ああ……お、おとおおお！そのバキュームウ腰浮いちやうウ

「腰浮いちやうウウ!!」

「……………」

彼は仕事を満喫している様子だ。

よし、気持ち切り替えてマップを見よう。俺の指示通り、順調なま
でに後退しながら艦隊かなりいいタイミングで呉艦隊と合流を果た
せそうだ。

突然横からの強襲はどんな戦いにも役に立つはず。

「両艦隊、呉艦隊を確認できたようです!」

「じゃあ宍戸少佐の作戦通りに砲雷撃戦開始……でいいのかな?」

「はい。念のため再出撃及び補給の準備をするようにと整備工作班に
お伝え下さい。自分は大本営に送る本作戦内容の説明文等を予めし
ておきますので」

「う、うん、分かった……始めていいよ!」

『『G o o o t o h e e e e l l ! !』』』

しかし流石は呉の艦隊、柱島に負けずとも劣らぬ練度で敵を蹴散ら
していく様は正に精鋭。横から攻撃してるからか敵艦隊の減り方が
凄い。チート使ったシミュレーションゲームみたいだ。

砲雷撃の末に敵艦が壊滅状態なり、それらは全部瀬戸海へと逃げて
いったらしい。海軍側の被害は小破数隻とかなりいい感じに撃退で
きた。

「け、結構あっさり終わったね……」

「寧ろこれぐらい早く撃退を可能としなければ駄目です。今回は特に
他鎮守府への援軍を頼んだお陰で、大艦隊の速攻撃破が可能となつた
訳ですが、いつもこれほど円滑に事が進むとは限りません」

つまり、俺様の対処がマジ神ってるから崇メロンの意味だ。大本営
にレポート送って書類整理してそれからそれから部屋に帰って
寝る!今日のプランはこれで決まりだな。

「だよね……うん……」

「あ、て、提督!宍戸さん!大変です!伊予灘から凄くいっぱい敵が来
ているみたいなんです!」

「「え?」」

……終わりちゃうん？

『こちら佐伯湾泊地！無力ながら我々の艦隊は撃破された！約25隻ほどの艦隊がこちらに迫ってるぞ!!その約半数はエリートだ!!』

「え、ええ!?!ど、どうしようどうしよう!?!」

「ど、どうしましょう……!?!」

『Huh?なにが起こってるの!?!』

……ヤヴァイ、予想してなかった。

佐伯湾の援軍が妙に遅れていたと思っただらそのせい?まだ距離はあるけど確実にこちらに迫っていると……そして強いつて事か。

どうする?地域に被害が及ぶ可能性があっても、準備時間を取って艦隊を一度戻して補給と艀装の修理をした方がいいか?それともこのまま向かわせるか……佐伯湾艦隊を撃退したエリート艦隊は相当強い。足止めをする意味もあまり意味を成さないだろう……しかも考える時間はない……どうすればいいんだ?

「し、宍戸少佐!ど、どうすれば!」

「宍戸さん!どうすればいいんですか!」

「え、あ、ど、どうしましょうかね……」

「そ、それじゃあ困るよ!ザラや僕だって君に掛けてたんだから!ね?ザラ!」

「そうですそうです!!今更丸投げなんて酷いです!」

なんだこれ、まるで俺が悪いみたい……いや、確かに指揮を取ったのは俺だけだ。

そして罵倒とも思える艦娘達のセリフ耳に入る。

『そうよそうよ!それともMe達を指揮しておいて弄んでたって言うの!?!』

『まったく度し難い人ね!』

『最低!』

『少佐のくせに偉そうにするからよ……』

「し、宍戸少佐、ど、どうするつもりだい!?!」

……大人げないとは思うけど、少しちよつとヤケクソになった。

「……じゃあそのエリートなんちやらに柱島艦隊の総力を突っ込ませろよオオラア!!はよせいやザラ公テメエヨオ!!?」

「あ、は、はいいいい!!」

「さつき倒した残党は呉第一に任せて、机下でフ○ラさせてたせいで作戦に間に合わなかったクソチ○カス呉第二チ○チン鎮守府に、さつさと追いつかねえとブツ殺すって大佐から直々に言っつてやれヨオコラア!!」

「は、はひいひい!!」

「オラ聞こえたか柱島艦隊の皆さんヨオオ!?さつきと向かって倒さねえとテメエ等が帰ってきてから一人ずつ尻が富士リンゴみてエになるまで魚雷使つてケツバツトするぞコラアアア!!」

『『S, SIR YES SIRrr!!』』

ハア……ハア……これぐらい許せ、指揮官は時に心を鬼にして部下と接しなければならぬのだ。

話し終わった後でポケットからピピ音が鳴り、ボルテージの上があったテンションのまま通話ボタンを押す。

「ああん!?もしもしイ!」

『あ、穴戸くん?僕やっぱリスパナよりケーキの方がいいなっ!』

「クタバレエ!!」

なんでこんな時に電話入れてくるんだ時雨エ!?テメエもケツバツトの餌食になりてえのか!?

クソこのままじゃ埒が明かねえ!!俺が直々に指揮して敵艦隊ブツ潰すツ!!

「今夜はパーティーだぜえく!?素敵なパーティーぶつかますぜく!?ホラ直接海戦の指揮するからマイク貸せえ!!今日の俺様はアとことんバトルジャンキータイムだぜエイヤツツハアアア!!」

『おおお!柱島泊地は凄く強いかも!秋津洲達が居たときより倍強くなってるかも!』

『いやあれは強くなつてると言うよりかは、戦闘スタイルが変わって

いるな……』

『たとえばどんな風にですかあ?』

『そうだな……戦略シミュレーションゲームにおけるAIがプレイヤーに変わった感じだな。あの様子であれば呉第二鎮守府の援軍は必要ないだろうが、一応作戦は継続させておこう』

『はいっ! あ、お二人共お茶のおかわりはどうですかあ?』

『頂こう』

『秋津洲頂くかも!』

―柱島、食堂。

「本当に……本当に申し訳ありませんでした」

「い、いやもう土下座はいいから! 大丈夫だから! みんなもそう思うよね!」

「WOW!これがニポーンのDOGENZA!素晴らしいわ!写メ写メ……」

撮るな。と言いたいが、流石に暴走し過ぎたのは弁護できない。食堂にて精一杯の謝罪を日本の伝統文化であるDOGENZAで誠意を表す。

このJapanese DOGENZAにアイオワさんみたいに写メを撮るものもいれば、ビスマルクさんやグラーフさんみたいにもう結構だと慈悲を見せる者もいる。

作戦は、柱島だけでエリート艦隊を倒すと言う誉れ高き快挙を成し遂げた。近隣地域への被害は最小限に留められたのも、何時もながら柱島の迅速な行動あつてのことだと大本営の荒木大将から直々に褒め言葉を貰った。

書類処理がまだ残っているこの頃、俺は作戦時の非礼を詫びるために、こうして身体を張り、その意を示す。

「本当に申し訳ありませんでした」

「いいのいいの!それにシシードが最後に指揮をしてくれたからこそ私達は勝てたのよ?」

「ビスマルクの言う通りだ。私はむしろ、貴様の指揮力を提督に分け

てやりたいと思ったぐらいだぞ」

「が、ガツクシ……」

「ガングートさん……ビスマルクさん……!」

あれ程の失態を犯してしまった俺に、これほど慈悲深くなれるものだろうか? いや、普通の鎮守府だったら悪即斬、俺は死んでいたかもしれない。

俺は海戦指揮でうまくエリート艦隊を撃破した功績を荒木提督に評価してもらい、海軍大学校提督育成プログラムの生徒が華麗な指揮力にて最高の結果を出したと、期待以上且つ予想外な成果で一躍このプログラム自体が脚光を浴びるようになった。

指揮能力の高い将校を育成するプログラム、海軍大学校の生徒以上に優秀なエリート育成、日本海軍の将来を担うべき者達……このプログラムを提案し、設立した荒木大將は海軍内部での評判が更に高まったと言われている。ついでに柱島の株もかなり上がったとか何とか提督から聞いた。

そして、数ヶ月に及ぶ柱島での補佐官仕事は満了し、その後また別の鎮守府で提督の傍らで指揮官のなんたるかを学ぶ。

柱島の荒木提督よりかは余程提督としての心構えや、管理と放任の差、部下の使い方など最もらしい事を勉強できたが、柱島の方が色々な事を学んだ気がする……柱島でやった実務は勿論のこと、防衛戦での活躍が認められて、俺はその名を人並みに轟かせている。

しかし俺は本当の自分と向き合わなければいけない。巷で騒がれている過去の栄光や成功は、俺にとっては同時に失態である事に。

結果的には良かったが、これは運による勝利なのだ。寛容な仲間、慈悲深き提督に出会えたからこそ、俺はこうして今でも提督としての教育を受けられるのだ。

ラッキーだったと高をくくらず、寧ろ今後はこれ以上の成果を上げられるように尽力すべきだと、俺は常日頃からその意を仕事へ費やしている。

海軍大学校の論文、そして並行して多分書かされる事になる卒業論

文も含めて色々と模索しながら、俺が最後に辿り着いた鎮守府で提督としてイロハを学び続けている。

そう、舞鶴所属時の俺の提督だった蘇我少将の元で。

「なるほど、それがあの瀬戸内海防衛戦の真実だったのか……しかし、それはまた凄い事をしたね。あれ以来、柱島の株は大いに上がったらしいのだが……いやあ、元上司としてはかなり鼻が高いよ！」

「すみません」

「いや、褒めているんだが……」

「提督に宍戸さん、お茶のおかわりはいかがですか？」

「ああいただくよ、ありがとう古鷹」

「すみません」

「し、宍戸さん、大丈夫ですか？」

「すみません」

「ハッハッハ！素直に謝れるのは若い内か、老いを知ったときだけだよ。ハッハッハ！」

「はいすみません」

下手したら元上司と言うことで、提督の顔に泥を塗りがねなかった俺は、執務を手伝いながら謝り続けた。

横須賀第四鎮守府 難しい問題だな

柱島泊地、竹敷要塞部を渡り歩いた俺はついに、横須賀第四鎮守府へと足を運ぶ事となった。

それは恐れ多くも俺の旧上司である蘇我提督が統括する場所であり、時雨達もいる。

到着が早く、予定日の前夜についてしまった俺は真っ先に蘇我提督の執務室へと足を運び、到着した事を伝えた。夜なのにまだ執務をしていたので、俺も手伝う事を志願したのだ。

そこで執務をしている途中、話題の拍子に俺は柱島の瀬戸内海防衛戦の事を包み隠さず話したら、提督はそれがとても大きな出来事として取り上げられている事を話してくれたのだ。

そう、俺は正直海軍内部でどれだけ大きな出来事だったのかを把握していなかった為、ほんのちよつとだけブチ切れて勢い任せに指揮を取った事を馬鹿正直に伝えてしまったのだ。

実質大規模作戦時の司令長官のような立場になつていた補佐官が居たことが、かなりの噂となつていた事を知らされたのだ。

作戦で勝つ自信はあつたものの、俺は一步間違えば酷い失態として見られていたかも知れない。迷惑を掛け損ねた事を謝り続け、蘇我提督も俺に非心を見せてくれた。

というのも、提督が「私も昔は似たような事をしてね、それが運良く昇進への決定打となつたわけだが、ハハハ！」と言つてくれたので、気に病む必要性は無いとも教えてくれた。

よく考えればそうだな。俺はやつた。学生の身分でありながらこれほど大きな功績を立てた人物は俺を置いて他にいないはず！

これはもう昇進する準備万端的な？ つい最近昇進したばかりだけだ。

そして、時雨達の部屋にもお邪魔させてもらったところ、

「よつ、元気だったかみんな？」

「「えい！」」

「か、帰ってきてくれたんですかあ!？」

「ああ、明日からここの補佐官になるらしいんだ。みんなまたよろしくねん」

「お兄さあ〜〜ん!!」

「穴戸さあ〜〜ん!!」

おつとつと、こんなに抱きついてきちゃって。モテる男は辛いぜ。

「ありや?そこで物欲しそうに見てくる子猫ちゃんは誰かと思えば時雨じゃないか。なーんだ、抱きつかれて羨ましいのか?ほら、抱きつくんだったら俺の背中が、あ・い・て・る・よ」

「じゃあその社会の窓閉めて。竿が見えてるよ」

「きやああああ!!」

「驚かないで春雨ちゃんと村雨ちゃん!!見えてないから!ただ開いてるだけだから!」

「び、びつくりしましたあ……」

「しめてくれたから抱きついてあげるよ。ほくら、だきつ」

「い、痛いイタイイタイイタイイイ!!白露さん直伝のコブライタイイイ!!な、ナンデエエ!!」

「ケーキがいいって言ったのに送ってきたのが呪われそうな人形だったからだよオ!!僕が純粹無垢な少女みたいに待ってていざ開いたらう〇こ顔の恐怖人形だったなんて許せなアアアイ!!!」

「い、イタイイタイ!!あ、あれは呪いの人形じゃなくて!真夜中になつたらひとりでに動いたり髪が何故か伸びたりする人形だって!!」

「そうなんだア!?即効で捨てた甲斐があつたよオ!!」

広島の街で見つけた人形があつて、謎の技術で髪を一定数伸ばしたり、明暗センサーに反応してちよつと動いたりするなんちゃって呪い人形だ。

友達にドツキリとして大好評な反面、本物を冒読していると批判の声も見られた一品だが、本物を冒読しているってお前達本物見た事があるのかって話だよ。無神論者でありSOA(そんなオカルトありえませんか)な俺には分からねえ話だ。

「ハア……ハア……ほら、長崎のカステラ買ってきたからさ」

「あ、やるね穴戸くん!僕は君が期待を裏切らない男の人だつて知っ

てたよ！」

「現金なヤツだな……」

「でも嬉しいですよ兄さんっ！またお兄さんと一緒にお仕事ができるんですねっ！」

「村雨も嬉しいですっ！ふふふっ」

「俺もだよ……俺のミューズたち」

「オロロロロロオオ!!!」

吐くなテメエオラ。

変わりようのない時雨達に俺も安心感を覚える。

横須賀第四鎮守府とは実はあまり交流がないものの、知っている人が多いので別段困るわけでもない。

結構雰囲気もいいし、横須賀みたいな鎮守府の最先端は、てつきりエリート精鋭至上主義みたいな奴らの集まりかとばかりかと思った。

何かとここでは日常的な雰囲気を感じている理由は多分、横須賀第一鎮守府の存在があるからだろう。

今まではあまり触れなかったが、横須賀第一鎮守府は同時に元帥府もあり、あそこの元帥さんは連合艦隊司令長官でもあって、艦隊が滅茶苦茶強いのだ。

第四鎮守府まで必要なのか？って思うぐらい強い。まあ海軍要塞の要点ってのは国土を守る事であってどれだけ深海棲艦をオーバーキルできるかに注目しているわけじゃない。関東全域を守るには、鎮守府一つじゃ足りないからな。

哨戒任務と警備警護任務を主にする第四鎮守府は、必要だが超絶忙しい鎮守府ってほどでもなく、蘇我提督に分からない所とかを聞いたりして指揮官としての教訓、そして教示を得る。

―廊下。

「古鷹、酒保と食料の在庫表は……」

「あ、はい！今すぐに！」

「では穴戸少佐、今日の鎮守府の資材収支を取りに行くのだが……」

「修理、出撃、製造の資材収支の統計は既に確認済みです。ついでに食糧在庫も確認が終わりましたので、後は必要量の要請を送るだけです」

「も、もうですかあ!? 相変わらず早いですね……」

「流石……と言いたいたいところだが、本当にスムーズだな。さぞ教えるのがうまい提督がいたのだろう、私が教える事などもう無いかな? ハハ」

「いいえ、蘇我提督の元で学ぶ事はこれから山ほどあるでしょう。改めて、よろしくお願いします……」

いやあ反面教師って結構いいですねえ! 柱島は、殆どの執務を秘書艦無しで担えるまでに成長させてくれた。

一番基礎的な事は、緊急時じやなくても鎮守府中をダツシユで走り回って執務を終わらせる事だ。お陰で俺の肺活量はすごく上がった気がする。

「と言う事は今日の仕事は終わったも同然じやないか……」

「それらの書類を一日分としてまとめるまでは終われない……のです。折角なので二人はおくつろぎ下さい」

「え、いいのかい?」

「勿論です。日頃のお礼と言うに少し

物足りないとは思いますが……」

「そんなことは全然ありません! ありがとうございます宍戸さん!」

「ゆつくり貰った時間を使わせてもらおうよ」

そして俺は気遣いも忘れないのだ。凄く大きなプレゼントを渡すよりかは、こう言うちよつとした心遣いをする方が印象に残りやすいし、人脈の糧となる。

提督としての実務に特化した育成プログラムの中で、俺は特にそうなんだろうな。

しかし、俺が気遣うのは目上の者だけじゃない。

―工房。

「宍戸少佐！ご苦労さんツス！」

「おい、そりや目下の者に言う言葉だぞ！」

「も、申し訳ありません宍戸少佐！」

「そんなに気張らなくてもいいってみんな！俺はただの補佐官様。もしかしたら君たちの上司になって、何れは日本海軍を牛耳る事になる将来有望な提督候補ってだけだから！」

「いや滅茶苦茶ヤベエじゃないツスカ!?ゴマすらせて下さいよオ〜」

「何時でもゴマすってもいいゾイ……あ、古くなってた工具とか修理用品とか明日には届くよ」

「マジツスカ!?アザツス！班長に言っても中々早く届かないンスよね、提督に直談判ってのも難しいツスし」

「そういうのは早く言ったほうがいいぞ。案外提督に直談判した方がいい事もある」

「二「そりや流石にムズいツスよ〜!」二」

流石に提督へ直談判は気が引けるか。

工房では大量の男どもが汗を流しながら整備と工作の限りを尽くす、この職場。今は哨戒の最中なので張り詰めた感はない——この人数を見ると舞鶴を思い出す。

その他にも主計部や軍医部との交流も欠かさない。

舞鶴の第一鎮守府や港湾みたいに大きくないので、参謀部はない。横須賀第二鎮守府まで行ってどんな感じか見てきたけど、決断力とリーダーシップのある提督の前ではあまり意味を成さない。

「君たち心の中では、うちの仕事の過酷さを知らないくせに何言ってるんだこの新人補佐官?とか思ってると思うけど、宍戸くんは元整備工作班の副班長だよ?」

「「え?」」

「しかも舞鶴で一度提督の元で働いた事があるんです!すごいですよね!」

「マジツスカ!?」

ひよっこり現れたのは村雨ちゃんと時雨は、隠しに隠していた俺の正直をサラッとバラした。後で「俺、実は……」みたな展開でみんな

を驚かせたかったのに。

「つて事は、お二人も補佐官殿とはお知り合い……つて事ツスか？」

「そうだね。僕達の元同僚なんだ」

「は？部下だろ？仮にも所属してた班の副班長だったんだから上司だろ？」

「こういう細かいところを気にする小さい男は出世できても女の子にモテないから気を付けようねみんなー」

「グルルルルツ!!!」

「ま、まあまあ！お、落ち着いて下さいふたりともー！」

「「あ、く」」

村雨ちゃんによる癒やしASMRを作ってほしい、そうすればどんなストレスフルな日常でも明るく変えられる。

新兵じゃないだし、整備工作班の人たちには手ほどきは必要ないが、ある程度のアドバイスを与える事、そして密接なコミュニケーションを取る事によって円滑な鎮守府運営が成立するのだ。

どんな鎮守府でも、仲間とのコミュニケーションを大事にする大切さを教えてくれた提督に感謝の念を込めながら、兵器の整備を一緒手伝っていた頃。

「照月艦隊、帰還しました！」

「おー照月達帰還確認。哨戒はどうだった？」

「あ、お兄さん！異状はなかったです！」

「春雨ちゃんもお疲れ様！でもそうか、異状がなかったのか……」

「深海棲艦を発見しなかったのはいい事だね、平和な海を保てる証拠だよ」

「そうっすね初月さん。あ、提督への報告書は俺がやっつくから、大まかな情報だけ俺に教えて……シャワーは早い方がいいでしょ？」

「本当ですか！ありがとうございますー！」

気遣いのできる男はモテる。

しかしやりすぎるとつきあがるし奴隷として認識されるので、アメとムチの一進一退で関係と言うなのリードの主導権を握るのだ。

「……なにか気がかりな事でもあるの？」

「鋭いな時雨、まるでお前が俺にかますパンチの様だよ、H A H H A」

「H A H H A、何時も殴ってるみたいに言わないでくれるかいラツシュするよこのデコスケ野郎」

「すまないな、でも悪い印象つてのは残りやすいもんなんだよ。」

みんなの前では言わなかったが、最近気がかりになっていたのが撃破率だ。

横須賀第四鎮守府は関東の海軍要塞の中でも末端であり、割り当てられている海域への哨戒や他鎮守府のバックアップなどがあるのだが、出撃回数割にはあまり深海棲艦を倒せていないのだ。

つまりは平和そのものであり、誰も傷つく必要も無ければそもそも問題が起きてないと言う実に素晴らしい状態なのだ。哨戒任務は敵を倒しに行くんじゃないやなくて、海域を警備する役割を持つ。設置される機関は役割を持つことでその存在価値を保てる。

故に、鎮守府は撃破数や積み上げている功績で差値を分けるような評論基準は建前上ないのだ。

しかし一週間で10隻程度の撃沈は書類上あまり芳しいものとは言えない。この情報を一般に公開するような真似はまずないが、下の奴らの口から大まかにだが漏らす事もある。

それを聞いて膨張させたり、改変したりするジャーナリストのせいで「横須賀第四鎮守府、先月の深海棲艦撃退数ゼロ！税金により稼働しているこの要塞の撤去はいつだあ!？」とか言われる可能性もあるんだ。

海軍軍人としては、こっちの苦勞も知らないカス共へ問答無用の腹パンをかます所だけど、報道の自由と発言の自由を尊重する日本国はそんな人の不幸を食い物にするメディアに敵わない。

ペンは剣よりも強し。

「……どこ見てるんだい？水の上の居たからって照月達のブラは見えないよ?」

「え、やだっ！エッチ！」

「ち、チゲえよ！ちよつと考え事してただけだし!?!なあみんなあ!?!」

「「う、ウツス！その通りツス！」」

とか言つて短いスカート凝視視点じゃねえよ殺すぞ脇役共。なんて文句は付けられない、何故なら照月達は本当にクツソ短いスカートを履いてるのだから。ちよつと前倒すればパンツ見えるとかコスプレかよ？

「いまコスプレかよとか思ったでしょ？」

「は？全然そんなことねえし。ただみんな軽装でエロいなって思っただけ」

「より悪いじゃないかあ！」

「クアア！痛いじゃないか！別に悪い指摘じゃないだろうがア!?ゲームとかでも男は重装備なのに女はビキニアーマーとかザラだぜエ!」

「「確かに……」」

「これは男女差別だね、全然公平じゃないよね穴戸くん？訴訟だよ訴訟」

あれ？前に公平の話とかしなかったつけ時雨？こういうときはお決まりの返しがあるんだよ？

「確かに、じゃあ男もビキニアーマーで戦闘させるように促そう」

「村雨そんなの見たくないですっ！」

「僕も見たくない、訴訟」

「どつちにしろ訴訟するのか……」

難しい問題だな。

だけど海軍とは国を守る戦士達の集まりである。その国を守ると言う使命があるからには、それ相応の意識を持ってもらわないと困るなあ？

一々着る服に文句を付ける輩は、有能な教官様によって再教育させてもらおう！

あ、でもここの教官様も女性だからそつちの肩を持つ事になるのか。

―食堂。

「なるほど、足柄さんは教官になってたんですか……いやあ、足柄先生

が俺の教官だったららすげー捗ると思いますねエ！」

「お褒めに預かり光栄だわ！ 穴戸大尉も元気にやつてるかしら？」

「大尉？ チツチツチー……甘いですよ足柄さん、俺はもう大尉ではなく少佐です」

「「え!? そうだったの（んですかあ）!?!」」

あれ、言っただけじゃなかったわけ？ 時雨達はかなり大きく目を見開きながら驚いてる。

「凄いです穴戸さんっ！」

「やっぱりお兄さんは未来の提督ですっ！」

「僕はまだ昇進まだなのに、生意気だね」

「ん？ なんか言ったかね時雨くん？ まあなんて言うのかな……未来の將軍様のツメの垢が飲みたいんだったら、飲ませてやらん事もなげど？」

「これは暗殺不可避だね！ 送ってくれたスパナが役に立つよ！」

「「グルルルル……!!」」

「時雨さんと穴戸さんは相変わらず仲がいいですねっ、ふふふっ。あつ、ここ座つてもいいですか？」

天使のような笑顔で舞い降りたフルタカエルが同席を希望する。

心良く受け入れ、美女に囲まれながらの食事を楽しむ……つもりだったが、

『なんだあのハーレム!?!』

『お、オラのフルタカエルに、な、何気なく話しかけてんだブヒイ!』

『ああ……俺達の村雨ちゃんが……!』

野郎どもの視線が刺さる。

鎮守府で働く男どもの醜い嫉妬から出る言葉の中には、同席する女の子の名前が最低一回は聞こえる。村雨ちゃん、春雨ちゃん、古鷹……まあ当然だな。ただし足柄さんの名前が聞こえない、なんでもろー？

『ナツカチャンダヨー！ ナツカチャンダヨー！ ナツカチャンダヨー！ ナツカチャンダヨー！』

「あ、すみませんっ！ わ、私の携帯ですっ！ すみませんすみません！」

「モーメントだよ古鷹」

「あ、その声知ってます！今人気のアイドル那珂ちゃんですよねっ！」

「村雨さん知ってるんですかっ！そうなんですそうなんです！ちよつとファンになっちゃって！」

携帯の着メロにしてる時点でちよつとどころじゃないんだよなあ。

「……時雨、Naka・Changって誰？香港にそんなアイドル居たっけ？」

「ブツ!?……ちゆ、中国人じゃないよ！吹き出しそうになっちゃったじゃないか！」

「いや、ナカ・チャンさんって言うからてつきりそうなんだと思って……」

「これですよ兄さん！」

春雨ちゃんがテーブルの中央に置いたスマホに映ってたのは、三人の女性が踊ってる姿だった。

その中央を陣取るのが、古鷹達が言ってた那珂ちゃんさんなる者らしい。チューブの動画に上がってる彼女達の踊りは既に百万再生突破しており、チャンネル登録者数もかなり多い。

踊りの練度も結構高く、動画も相当上げてるらしいのでこれだけでかなりの収入が見込めるだろうと内心思っていたが、それよりも驚きなのが彼女達は艦娘だと言う事だ。

つまり彼女達は現役の海軍である。最初の動画も「日本海軍の艦娘がビーマイセルフを踊ってみた」って題名で投稿されているのが確認できる。

「那珂ちゃんかわいいですよねっ！古鷹も踊ってみたいですっ！」

おまかわ。

「村雨も一緒に踊ってみたいですっ！」

おまおど。

「今では海軍のイメージガールみたいな感じになってるよね？いいんだけど、夏の猛暑の中でナカチャンサマーライフとかふざけたフレーズは、僕はNGかなっ」

おまひびど。

「宍戸少佐は那珂ちゃんを見てどう思うかしら？」

「ビジュアル的にはバックダンサーの長髪の娘が結構好みかな」

「え、お兄さんこう言うのがいいんですかッ？」

「この中で、的な意味でね。それより春雨ちゃん、フオークが複雑骨折してるから変えてこようね」

「はいっ！」

那珂ちゃんさんか……AKB69みたいな顔面が庶民派な子たちと比べたら、俺は確かにこつちを選ぶけどさ。

後ろで踊ってるバックダンサーの子達が凄く人気あるんだよね。コメント欄には「神通ちゃん！俺と結婚して陣痛を経験してほしい！」とか「川内ちゃアアア！俺と夜戦してくれえええ！」とか那珂ちゃん以外の名前も出てるんだよ。

俺の感性が間違ってたなら、俺は間違いなく神通ちゃん派か川内ちゃん派だな。

コメント欄には「川内三姉妹は荒木大将派！異論は認めん！」とか「こんな可愛い娘たちが斎藤中将派じゃないわけ無いだろ!？」とか書かれており、海軍内部の人間にしかわからないネタは遠慮してほしい。

……川内三姉妹って、この娘達は姉妹同士だったのか。

「でもそんなに踊りたいんだったら踊ればいいじゃん。踊るだけなら。動画を撮るにしても那珂ちゃんさん達は許可出てるはずだし、古鷹達ができない理由はないはずだけど？」

「そ、そうですね！で、できる……と思うんですけど……提督の許可が……」

実の親父、しかも海軍軍人に踊ってみたを踊ってみたなんて直談判する光景は見たい気もするし、すごく難しいけど、やりたい事に關して踏み切るのにも勇氣は付き物だと思っぞい。

「許可は出るんじゃない？僕が前にコンビニに行ったら海軍の艦娘が作ったおにぎり型のチャーハン売ってたし」

「それは関係ないような……」

「時雨姉さんそれ買った?」

「興味本位で買ったけど、味は結構美味しかったかな。でも那珂ちゃんそれが試してみたらもつと売れると思わない?」

「甘いな時雨、俺は買わんど。確かにあれは結構美味かった。だが大抵ああいうコンビニで売られるものは大量生産型の工場が無機質に作られていて、後は那珂ちゃんスマイルを入れたらはい終わり。まるで那珂ちゃんのおててで作られた手作りおにぎり割高200円弱とか……」

「美味しかったって、買ってるじゃん」

「興味湧いたんだからいいじゃん!!」

「で、でも機械じゃなくて本当に手で作られているかも知れませんし!」

「古鷹も甘いよ、スプレndaーみたいに甘い。手作りだとしてもリストラされた4, 50代のおっさんかパートのおばちゃんが、過酷な労働と渗む努力によって作られている努力の結晶だ。俺は寧ろ、可愛いだけで契約金ガツポシ貰うヤツのためより、その十分の一にも満たない金のために必死に働いて、毎日コンビニに来る客のために握り続けている人たちを応援する意思で買いたい」

「そ、そこまで語らなくても……」

「ここまでアイドルの手作りおにぎりを言う言い訳を考えた穴戸くんに拍手したいよ。でもさ、もし春雨か村雨の手作りおにぎりが発売されたらどうするの?おじさんたちの為に買うの?」

「二人のために買い占めるに決まってるだろうがア!？」

「……………」

ジト目が痛い。

でもさ、那珂ちゃんさん達には失礼かもしれないけど、村雨ちゃん達が踊った方が断然可愛いと思うのは俺だけじゃないはずだ。

同時期に出てたら絶対こっちが人気出てたはずなのにさ、世の中最初にやったもん勝ちってか?」

「海軍所属で、しかもこれほど有名だったら公認のはず、何処の艦娘なんだろう?」

「この娘達は確か横須賀第三鎮守府で見かけたような気がするな……」

「「あ、提督……」」

びっくりするので後ろからサプライズはやめてくださいよオ……！

「ハッハッハ、すまなかつたね。だが古鷹がこの娘たちに興味を持つなんてな」

「あ、そ、その……これは……」

「現代、そして歴史上類を見ないほどの需要を持つ海軍は、まだ多くの若き入隊希望者を集めています。海軍のアピールに一役かっている彼女達を見て尊敬の意を持つのは不思議ではないでしょう」

「ん、穴戸少佐の言うとおりだ。彼女達もただ踊っているわけではなく、海軍の為を思っただけでやっているんだぞ古鷹」

「は、はい……」

提督が言うには彼女を第三鎮守府所属である。

那珂ちゃんはたまにひよっこり街に現れて路上ライブをするらしいのだが、出現ポイントが日本中バラバラで、現在何処にいるのかは分からない設定だ。

察するに、所属する鎮守府に迷惑をかけないために暗ましてるはずなんだけど、提督はあっさり俺たちにバラした。海軍内部だけだったら別にいいけどさ、那珂ちゃんの情報を金で売るような奴がいないと限らないじゃん？

「……古鷹、彼女達に会いに行きたいのか？」

「え、い、いいえ！わ、私は、大丈夫……です！」

凄く会いたいらしい。隠そうとしているのだろうけどバレバレのバレンティヌスだ。

そして時雨が何故か手話で呼びかけてくる。

行かせて あげて 可哀想。

は？ なに 無茶 振り してんだ？

パソコン 中身 妹達に バラス。

もうバレてるし。

ドM巨乳田舎娘デラックス版4800円。

わかったから やめて。

俺はもう、時雨にパソコンは使わせねえ。そう心に誓った。

「提督、どのような艦娘であれそれぞれの役職についている以上はそれに集中するべきかと思いますが、ある程度余分な教養や経験を受けなくても差し支えないのではないのでしょうか？」

「確かに」

「明日、第三鎮守府で行われる鎮守府間での資材輸送任務を見学に行きたいのですが……古鷹を同行させてもよろしいでしょうか？」

「ハツハツハ、構わないよ」

「ほ、本当ですか提督っ！」

「ああ、あまり羽目を外し過ぎない程度に見学してきてくれ」

「あ、ありがとうございますっ！ありがとうございますっ！」

提督に対してのありがとう、俺に対してのありがとうを分けて頭を下げ、キラキラした目で遠くを見つめる古鷹は輝いて見えた。

正直に言えば見学はしなくてもいいし、何より那珂ちゃんがいるかどうか分からないので確認の無い外回りなのだ。

でも、今人気のアイドル的存在を目の前に見えるのであれば光栄だろう……神通ちゃんがいればサインを要求しよう。

横須賀第四鎮守府 川内型の中で好みは神通

―横須賀第三鎮守府。

「クオクオが噂の第三鎮守府か。来たことは……流石にあるよね？お隣さん同士なんだし」

「はいーでも来るときは大抵、ここの提督へ資料を渡すだけだったの
で……」

こちらの提督とは既に話は付けてあるので、資材輸送を行う部隊を見つけて後は行くだけなのだが、俺は初めてきたので何処に、なにがあるのかチンプンカンプンだ。

部隊の居場所はその辺で走り回ってた憲兵に聞いたが、中庭辺りツスよ？とか言われてもそんなの分からねえから。初めて来た人に辛辣な海兵はともかく、古鷹はその場所を知ってるそうなので付いていく。

「あ、あ、あああれ!!あれあれあれ!!」

「ALE?ビールがほしいの?」

「なに馬鹿な事言ってるんですかあ!?!あれですってあれ!!」

何気に傷ついたの古鷹の言葉に従い、あれの方向を見てみると、ここには一見するとコスプレイヤーにも見える橙色の衣装を身に纏った三人娘と、それを囲む男どもが居た。

俺達が探し求めていた彼女達であり、お決まりのフレーズでお馴染みの、

『那珂ちゃんスマイル!キラーンっ』

『『うおおおおお!!』』

「ほ、本物だあ……!」

キラキラと目を開き、まるで童心に帰ったかのような古鷹の瞳を見れば分かるーあれは正しく、俺が香港の何処かに居るであろうNaka・Changさんと間違えていた艦隊のアイドル那珂ちゃんさんそのものだ。

そのご尊顔を再確認する目的もあり、俺と古鷹は集まりに近づく

……するとあら不思議！画面の中だけの存在だったあの娘が今、目の前に！

「お楽しみのところ失礼します！自分等は本日、輸送任務の見学に来ました穴戸少佐であります。こちらは古鷹第四鎮守府秘書艦です。よろしくお願いします」

「あ！あなた達がそうなんだ！初めまして！艦隊のアイドルこと、ナツカちゃんです！そして那珂ちゃんのファンたちだよー！」

「神通です、そしてこちらが……」

「Z z z z . . .」

「あ、姉の川内ですっ……姉さん起きて！お客様の前だから！」

「むあ……もう夜……？いつもより早いよう……」

「那珂ちゃんが輝き過ぎたせいでお姉ちゃんは眠ったくなくなったよー！みんな那珂ちゃんの魅力に酔いしれちゃってー仕事が手につかなくなるんだよねー！」

「「ウツスー」」

いや仕事の害になつちや駄目だろ那珂ちゃんさん？それとお前らも軽々しく同意するな。

どうやら彼女は言われていた通り、ナルシズムとカリスマチツスクを組み合わせたような人らしい。

自他共の認める、または自賛的な言動を貫いているせいか、それに嫌悪感を抱くどころか愛着すら湧かせる人柄こそが、彼女を成功へと導いた由縁なのだろう。

「あ、あわわわわわ」

「古鷹、ほら」

「んー？どうしたのかな？」

「あ、あのあの一わ、私那珂ちゃんのファンで！さ、さささサイン下さい！！」

「もっちろんだよー！いつも応援ありがとうねー！」

「は、はい！！うああ！！すごいですすごいです那珂ちゃんのサインです！この古鷹、家宝にします！！」

「よ、良かったな古鷹」

これほどはしゃぐ古鷹は初めて見た。凄く可愛いと思った。小学生並みの感想だけど、それでしか言い表せないって言うか？うん、流石はフルタカエル。

「じゃあ俺も貰っちゃおうかな……神通さん、お願いできるかな？」

「え、わ、私ですか……？那珂ちゃんじゃなくて……？」

「俺是那珂ちゃんより神通ちゃん派なんだよね」

「何気にグサーって来るんだけどー！」

「そ、その……混乱、しちやいますっ……」

クウウウ!!カウウイイ!!

ペンとサインボードを渡したら神通ちゃんは一息入れ、そして軽い疾風を巻き起こしながらボードに名前を刻んでいく。そんなに張り切らなくてもいいのに。

そして完成したのが、書道七段ぐらいが書いたのかと思うぐらい超達筆なサインボードだった。凄い、古鷹の普通に那珂ちゃんって書いて小学校低学年程度の絵を貼り付けただけの物とは訳が違う。

この俺は、これを家宝にすると心に誓ったのだった。

「では川内さんのもお願いします。同僚が川内さんのファンです……」

「んあ……うん……」

やせん だ い。

リアルでそう書かれた。サインボードに、ひらがなで、そう書かれたのだ。俺は持ってきたボードのうち一つを無駄にした気分になった。

「す、すいません、姉さんは朝に弱くて……」

「そうなんですか……」

もう明らかに昼ですけどそこは置いていきましょう。

俺が見る輸送任務は、あくまで提督としての事務処理などを考慮した上での見学であり、舞鶴にいた頃散々やった雑用の復習などせずとも良かったのだが……まあ得たものは大きかった。サインは部屋に飾っておこう。

川内三姉妹が他の海兵と輸送任務を担当する事は珍しくないらしい。平和を守る艦娘である以上は平等に任務を与えるのが提督の役目である故に、踊ってみたをしている事でこれと言ったボーナスや特典はないらしい。

普段は任務を他と同じようにこなしながら踊りの練習をする毎日であり、プライベートはほぼそれにつき込んでいると見た。

実はあの昼間っから寝不足気味だった川内さんは夜戦部隊を率いる旗艦であり、神通さんは数々の精鋭艦娘を輩出した教官として有名なのだそうだ。

だが那珂ちゃんだけはイマイチぱっとしなかったので、エリート三姉妹の仲間はずれとならないように、彼女が興味を持っていたアイドルと人を魅了するダンスで、那珂ちゃんさんと共に動画投稿をするようになったらしいのだ。

そのお陰で、今では知名度と人気で那珂ちゃんが中心となり、三姉妹は今でも仲良く海軍の看板を担っているわけだ。那珂だけに。

イイハナシダナー……絶対に村雨ちゃん達や古鷹の方が再生数稼げるとか言つてごめんね。

―廊下。

「提督の言うとおり、那珂ちゃんは第三鎮守府に居たよ。ついでに川内ちゃんのサインも貰ってきたよ」

「何これ？子供が書いたやつでしょ？」

「いや、確かに川内ちゃんのお手てで書いたのをこの目でちゃんと見たから川内ちゃんのだぞ」

「は？僕は認めないよ？絵日記帳の表紙にある名前欄に、三歳児が初めて名前を書いたときみたいな五文字列が、あの川内さんのサインだなんて。それよりその達人級に凄い達筆なサイン僕にちょうだい。そっちが川内ちゃんでしょ？」

「は？あげねえしこれ俺だしこれ神通ちゃんのだし？」

「これが神通ちゃんの……すごいですね……」

時雨達三人が凝視するこのサイン二組、それぞれの感想に明らか差

があるのは言うまでもない。

「それより神通ちゃん可愛かったなあ。凄く控えめな感じでき、オドオドしてるけど、結構素直な所があつてさ。清楚可憐、正にYAMA TO NADESHIKOそのもの……って、みんなどうしたん？」

「え、別になんでもないですけどツ？」

「お兄さんはやっぱりああ言うのがいいんですかツ？」

……え、ちよ、怖いんだけど。え、何か悪いこと言った？

「い、いやさー！踊ってる姿が凄くそういう感じっていうの!?!凄く可愛かったからさ！いやあもし村雨ちゃんや春雨ちゃんが踊ってくれたらあれより更に凄いんだろうな！あはは！」

「そ、そうですよね！あ、じゃあもし春雨が人気一位になったら、春雨といっしょにデートしてくれませんか!?!」

「勿論だよー……え？」

「じゃあお兄さんのために踊ります！」

ートレーニングジム。

そして唐突な春雨ちゃんの踊ります宣言から一週間が経過する。彼女の真意は、五人からなる某有名な気まぐれダンケダンスを披露し、動画サイトに投稿する。

その中でクリック投票を設け、五人のダンスの中で春雨ちゃんが一番人気であればデートするという、至って単純な勝負である。

普通にお願ひすればいいのに「何かを成し遂げないままご褒美なんでもらえませんか！」と言ってくれたのだ。お金を落とすような馬鹿男ではない俺とのデートは、巷で罰ゲーム扱いされたこともある為、春雨ちゃんは天使か何かかなと思った。

もし他の娘が一位となったら、その娘に譲るというのだ。まるで俺が景品みたいになってるけど、男が一度味わえるかどうかのシチュエーションなので、俺は楽しんでる。

ジムの様子を見るために更に仕事のスピードを上げ、鎮守府のサポートをしながら成功する幸運を祈り続ける。

「ハッ……ハッ……！」

「ぜえ……ぜえ……もうクタクタだよ……」

「ご苦労、スポドリだぞ、ときあめ」

「僕の名前は時雨だよツツ!!」

勢い良くスポドリを手から奪ったので、ちよつと痛かったし傷付いた（乙女的感性）。

メンバーは時雨、春雨ちゃん、村雨ちゃんの他に、興味津々だった古鷹を誘い、足柄さんも入れたらしい。ミセス足柄に場違いとか言っていた日には、グラウンドを何週させられるか分からないので今は言わないでおく。

因みにときあめとは、とあるゲーム配信で登場人物の一人に同じく時雨とハンドルネームを付けていた人がいたのと、配信者本人が漢字が読めないのか、その人の事をときあめと呼んだ事から始まった……ネットでネタとなつてしまった、可哀想な無形文化遺産の一つだ。

時雨がハンドルネーム無しで名前を出せば、よいこのみんなから「ときあめ」と呼ばれかねないのでな。

多分そんな勇者みたいな事はしないだろう。それはホモビにリアルフルネーム、しかも男性経験無しで出演するようなもので、異世界から来る勇者連中よりかは余程勇気があると思う。

もつとも異世界召喚される勇者は大体世界を救うので、誰も幸せにならないホモビ出演より余程役には立ってる筈だ。

異世界経験者がいれば俺も連れて行ってくれ、軽トラに轆かれる以外の方法でな。

「どうでしたかお兄さんっ!」

「可愛かったぜみんな。春雨ちゃん達の動画を上げられる那珂ちゃんさんが可哀想になってくるほど可愛いぜ……勿論、川内三姉妹もかなり可愛いけどさ」

「ふふふっ、嬉しいです宍戸さんっ!」

「ハァー疲れた」

「まさか一番乗り気じゃなかった時雨が踊るなんてな……」

「べ、別に君のためにしてる訳じゃないんだからねっ!!」

ほおー、お決まりのツンデレセリフとか時雨分かってるな。これ

は俺に脈アリ決定って感じ？俺って本当に罪な漢だな。

「じゃあ春雨、踊りに参加する報酬として今週のパフェ代ちよーだい」

「はいっ！時雨姉さん！」

「現金かよッ!?っーか本当に俺の為じゃねえのかよオ!?」

「え、そういつたじゃん、耳悪いの?」

クウウウ……!!微妙にドヤツとしてるのが腹立つウウ!!!

「まあまあ、いいじゃないの!あ、因みに私はお金の為じゃないわよ?」

「え、じゃあ足柄さんは何のために?もう彼氏はいるでしょ?」

「「あ」」

俺がそう発言した瞬間、室内気温が一気に下がったような寒気がした。

「だ、駄目です穴戸さん!それは禁句です!!」

「え、なんでだよ古鷹?だって彼氏見つけたんでしょ?俺はあの合コンの話なら何から何まで知ってるんですよ」

「グサー!」

「い、いいえ違うんです穴戸さん!その……ええつと……」

「言わなくてもわかってるって、足柄さんは今まで男運がなかった分、急に来た幸福を素直に受け止められないんだよね?」

「ぐ、グサ——!!」

「お、お兄さん!も、もうその辺にしてあげてください!!」

「春雨ちゃん……分かってるよ。でも何時までも恥ずかしがっているなんて事できないだろ?合コンって確か凄く前だったよな?そろそろ入籍とかも考える頃じゃ……」

「ブギヤアアア——ッ!!!」

「ど、どうしたんですか足柄さん!?女性が放つていい叫び声ではないですよ!」

「少しは空気読めないの君はア!」

「痛エー!脳天はやめろオ!!」

相変わらずフィストでも痛いじゃないか時雨パンチは。今度殴り掛かってきたら俺はコイツにシグレンチのあだ名を付けてやる。

「あ、足柄さんにはすこし話しづらい理由があつて……そ、その……」
「待つて、私が話すわ」

「いいの足柄さん？このデリカシーゼロ男はまた足柄を傷つけるかもしれないのに」

「いいのよ……時雨にも、宍戸少佐にも、あの時お世話になつたから……その機会を台無しにしたのは私、だから……」

お通夜の空気を身に纏つた足柄さんは、政治家の腰ぐらい重い口を開き始めた。

そして要約すると、フラれた。なぜこれほどの美人をふるのかと言えば、やはり男性の経済的劣等感からか？それともやっぱり現役バリバリ海軍系女子は気に入らないからか？或いは単に会える機会が少なく、男子優勢の男女比社会に慣れた彼女が気に食わなかつたのか？そんな安直なものじゃない。

正解は彼が足柄さんみたいな優良株より、故郷にいる幼馴染を選んだからにほかならない。何故そんな回りくどく、面倒くさい事になつたのか……それは恋愛小説を見れば分かると思うが、大体こんな感じで面倒くさい。

そんなラブドラマを繰り広げた末、フリーに逆戻りと言う足柄さんにとつてはかなり痛い結果となつたのだ。

足柄さんは自分の過去の決別（と言うなの憂さ晴らし）をするために踊りに参加してきたのは言うまでもない。憂さ晴らしには、普段自分が踏み入れない世界に入るのが一番だと言う、とても論理的な観点からの行動だつたのだが……結果的に俺はほじるに穿り返してしまつていたのだ。

可哀想に……海軍所属のやつ、誰か貰つてやれよ。

と言いたい所だが、軍隊では彼女持ちや世帯持ちが多いのは言うまでもない。海軍軍人だけでなく陸軍軍人や空軍など、軍隊に属する男子とは現代女性にとつてはとても魅力的に映るのだ。

何故かつて？まず手当てが厚いでしょ？給料結構貰うでしょ？体育会系で直球な人柄は人気でしょ？結婚したら大体家開けてるから浮気し放題でしょ？これほどの優良株はお見合いでは引っぱりだこ

だろう。

少子高齢化と言われる民族的病気の解消法は、今でも軍隊お見合いパーティーなどで道を開いている。

……え、じゃあ俺が足柄さんをもらってやればいいのにつて？ HA
H A H A !?」

「事情は分かったよ足柄さん、教えてくれてありがとう。でもこの動画投稿をする上でみんなが見たいのは、笑顔です。過去は忘れて、輝かしい未来を見ようじゃん！もしかしたら付き合っつてほしいっていう問い合わせが来るかもよ!？」

「そ、そうよね！過去のことは終わったこと！今更くよくよしても仕方がないわよね！うん！」

「じゃあもう一回練習しとく？その後いよいよ本番として踊りを収録して……」

「え？別にカメラ回しっぱなしでもいいだろ？ライブじゃないんだから編集とかできるし、一番出来栄えが良かったのを動画として上げれば……」

「「あっ」」

なにが、あ、だよ？気づいてなかったのか？普通一週間もやってれば気づくだろうに。

でもこの感じ初々しくて好きだな。本当に慣れてない感じの女の子って、なんか可愛くない？だが女はみんな女優だから本当に初めてでもやりまくってても見抜けない。見抜く方法は、初めてだと言う事をやたら強調する事と、自分の事を可愛いと思ってるかどうかだ。

「あ、あの……お兄さん？」

「え？」

「その、動画の編集とかよく分からなくて……おねがい、できますかあ……？」

「しようがないなあ。じゃあ編集は俺に任せておいてくれていいから」

「ありがとうございます！えへへっ、やっぱりお兄さんは頼りになっちゃいます！これでお兄さんのデータが決定しちゃいますねっ

……ふふふふっ」

それはいいんだが、まるで自分が一位となるみたいなきらい草……春雨ちゃんも真ん中になるので一番目立つのは彼女なので仕方ないが。

万人受け……って言葉を使ったら失礼かも知れないが、春雨ちゃんは可愛いしネットの大きなお友達もみんな彼女に投票してくれることだろう。

↓訓練所。

「そんなことやってたんだ。照月も踊りは好きだからやってみたかったな……」

「ごめんな。でも足柄さんがどうしてもって聞かなくて……」

「私!?!別にそこまで頼んでないわよ!?!」

「まあ……そ、その……照月さんが入っていたとしても……」

「どっちにしろ春雨の願いは叶わなかっただろうね」

「ぶええええええええん!!」

「時雨、テメエが言える事じゃない」

更に一週間後の踊ってみた動画の結果、再生数30万、いいね一万、そして人気投票の結果……三つ編みの娘が一番可愛い。

俺は

艦娘達の訓練所は今日も訓練弾と模擬戦で盛り上がっている。休んでいた照月も入れて、踊ってみた動画の結果を話し合っていた。「ご、ごめんね？僕も凄く驚いているんだ。僕は予想以上に可愛いだなんて……」

「は？」
「ひぐつ……いいです、春雨は時雨姉さんに女として負けてしまっただけなんです……っ」

時雨の勝因は、最後の「会いに来て〜」のところでセンターを飾って、終始凄く照れくさくやってたのがとても好評だったらしく、村雨ちゃんが二位、春雨ちゃんが三位と上位を独占する姉妹に俺はある種の恐怖心を懐きつつあった。

当然の結果だと胸を張っていえるが、世間から見たら俺はこれほど囁かれる女の子達と一緒にいるのかと思うと改めて感じるものがあるな。

「で、でもほら！春雨ちゃん達の動画こんなに伸びてんだよ！三人の投票は僅差だしこんなにみんなから可愛いって言われてんだよ！」

「そんなのどうでもいいですッ!!」

「そうだよ穴戸くん。会ったら180度回転して逃げたいようなキモイ男がコメント書いてるかもしれないじゃん」

「それは言い過ぎよ……でも、村雨達のことを何も知らない上、顔も合わせていない不特定多数の人たちに可愛いなんて言われてもあまり……」

おい、俺たちの遊びにわざわざ投票してくれた視聴者様方になんて言い草だ。そして人気投票一位を獲得した時雨に待っているのは、俺とのデート権である。

「デート……い、いくう……?」

「何で妙に高い声出して女の子ぶってんの？キモいよ」

「で、でもオ……こんなに暴力ガチムチ系でえ、お金糞取りそうな女の子を目の前にしたら誰だってたまヒョンものだお……」

「照月、この人を見てどう思う?」

「ちよつと気持ち悪いかも……」

「私は可愛いと思います!ほくら、春雨ままでちゅよお」

「わぁーい!春雨まだまだあ!」

ハニカミながらも、笑顔で俺の抱きつきを受け入れてくれる春雨ちゃん。童顔で可愛くて、それでいて母性力の高い女性が俺の目の前にツ!

近年では年下ー或いは小さな女の子に対して母性を求めるダメな大人が増えてると聞くが、のめり込むのも無理はない気がする。

春雨ちゃんの肌の感触がとても心地よく、逆に撫でてもらう感覚は……まるで赤ん坊に戻ったようだ。

多分あれだ、無条件な愛であるアガペーを司ってくれる母親の言動や行動を放つ可愛い女の子と言う、スーパーハイブリッド属性こそが、男の癒やしとなるロリママジャンルなのだろう。

見てくれよこの春雨ちゃんの顔を、これは俺を妊娠しているな。

「だから見てよ村雨!僕はこれとデート行くんだよ!」

「あ、あははっ」

「は?行くの?」

「行かないとは言っていないでしょ!か、勘違いしないでよね!僕はただ買ひ物の荷物係が必要ってだけだし!べ、別に一緒に行きたいなんて、お、思っていないんだからね!」

お、またまたお決まりのツンデレ決め台詞来ましたね。時雨は大体こういう時つて建前なしなんだよなあ。

「荷物がかりつて、新しいパソコンのことかしら?」

「そうそう!村雨と春雨で共有するハイスペックなヤツをねっ」

「知ってた」

「元はと言えば穴戸くんが悪いんだよ?僕にパソコン使わせてくれなくなつたから……あ、でも一緒に行きたくないっていうのは本当じゃないよ?良かったね穴戸くん!」

「わーい嬉しくねー」

悔しげだった春雨ちゃんが持つはずだったデート権は時雨の元に

舞い降り、丁度いいと言わしめんタイミングでパソコンの購入を考えていたと豪語する時雨との楽しい楽しいデートをする事となった。

一緒に街へ繰り出すこと自体久しぶりなのだが、論文の作成時間や提督から仕事を学ぶ機会を逃してまで行きたくはない。特に時雨が言うデートは、俺に飯代を奢らせたり、今回のように荷物を運ぶ下僕の扱いを強要する事にある。

酷いだろう？だがしかし、思わせぶりな態度をとっておいて、切りのいいところではいさよならするようなクソアバズレ女より、最初から明言されている方が寸分マシだと思える。

ー街。

「ふ〜ふふ〜ふ〜んっ、楽しいね穴戸くん！ふふふんっ」

「フザケロテメエ……ッ！なんでノートパソコンにしなかったアアア……!?!」

「そっちの方が性能がいいって店員さん言ってたじゃん。だったら買うに決まってるし、そもそもそっちの大きなやつ買うつもりだったし？」

大型パソコンセットを両手に持ちながらも街中をうろつける理由は、やはりこの鍛え抜かれた軍人特有の精強な肉体にある。この異様な光景に道行く人々の殆どが目を凝らす……海軍大学の入試で体験した山登りを、35分以下で切り抜けたこの俺を舐めるなよ……？

行きたくなかったなら、はつきりと断ればいいですよ！などと整備工員たちからアドバイスを貰ったが、彼らは知らなかった。まさか時雨が既に提督へ、俺の外出届を勝手に出していたと言う巧妙極まりない手回しをした事で……執務室で「デートかい？いいね」と提督に冷やかされまくった。

いや、ポジティブに考えよう。これはリフレッシュ……そう、TD Nリフレッシュだ。日頃の提督としての勉強をアプレンターシップにて精を出してる俺は、久しぶりに街に出た。

僅かでも息抜きのために、時雨はわざと俺を強引に誘ったんだろう

……なアアんで優しい子なんだあ！その上クツソ重たい荷物を持たせることで、最近やってなかった肉体労働も兼ねてくれて、余計に疲れとストレスを溜めてくれるなんていい子なんだ時雨はア!?

「ん〜クレープ美味しい〜!」

「そりや良かったなアツ」

「なにその物欲しそうな顔？あ、げ、な、い、よっ」

「い、ら、な、い、よツツツ。あと、お、も、い、よツツツ」

「そうだね、根性なしくんにはそろそろ休息を入れてあげないとねっ」

「投げるぞこのクソアマアツ!!」

と言いつつも心の中で何故か感謝している自分がいるのは、俺の手が全治一日程度に腫れ上がりそうなら悲鳴を上げていたからに他ならない。

どんな理不尽な状況に居ても体という器に支配されている精神は、納得のいかなさよりも苦しみから開放される快感の方は勝ると言う事を今知った。

そう、こうやって色々と思考を鈍らせて、従順にしていくだけのかんたんなおしごと。これを、調教という。

「ん〜っ〜このクレープ美味しいね穴戸くん!」

「そうだな〜このたこ焼きまじで美味いぜ!流石は本場のオツサンが焼いたたこ焼きだぜ!」

「美味しいって、そっちのたこ焼きは食べてないから味分かんないし……」

「ブルーメランだぜ。そっちのクレープを食べてないこの俺がその味なんて分かるわけねえだろ？なにが美味しいだよ？っ〜かまた食べるとか糖尿病真っ盛りだな」

移動販売店が立ち並ぶこの公園では、いま俺たちが座ってる外席テーブルが用意されており、たこ焼きとクレープという両極端な品を出している。

この組み合わせを見る辺り両店はグルだな。メシとデザートを両方用意するとかセコいぜ。甘味とメシと甘味の連鎖を抜けられないじゃないか……こうやって体重は加速するッ!

クソでかいパソコンのセットを持っているからなのか、或いは時雨の効果なのか、妙にジロジロ見てくる奴らがいる。見ることも自体はいいのだが、あまり時雨を見つめてやらないでほしい……隣の彼女さんがお前等を睨んでるぞ。

「しようがないな……そこまで言うんだったら、ぼ、僕のクレープ……恥ずかしいけど……あ、あげるよっ」

「お、おう……」

「は、はい……あーんっ」

「あーん……」

「ど、どう?……僕のクレープ、おいしい……?」

「ああ……まるで残されたピザの耳を食わされてる気分だよ」

「うん、でも美味しいでしょ?」

「テメエ一番下の端の部分とか渡して来てんじゃねえよオ!?!これただの丸めた生地だろうがア!」

「じゃあ穴戸くんも嫌いだからって紅生姜こっちに置くのやめてくれるかいツ!?!食べちゃったらクレープもう一つ欲しくなっちゃうじゃないか!?!」

「紅生姜舌がイガイガしてやなんだよオ!俺っちマジ吐きそうになるウー!」

時雨は呆れた表情だが、嫌っていた紅生姜を口に入れてくれた。優しいのか鬼畜なのかこれももう分かんねえな……でも、飴と鞭を使い分ける女子は間接的のだが何度も見たことがある。交互に使う女子は男を落とす為の計算として……いや、時雨に限ってそれはないだろう。

そして、慣れ親しんだ日常的な会話でも、外野からはかなり異様に見えるらしい。今度はみんなこっちを見る。

俺と時雨は恥ずかしさに駆られ、一時的な静寂が発生する。

しかしそんな恥ずかしさはなんとやら、すぐに顔を上げた時雨は難しそうな顔でこちらを見つめてくる。

まるで何か言いたげな……或いは、俺から口火を切り、その話題に便乗して自分の発言を入れたい……みたいな顔してる。

長い付き合いになると、これほどその人の心理が分かってくる辺り、人は想像以上に怖い生き物なのかも知れない。

しかし俺は彼女を知っている。時雨は自分の発言を他人に委ねるような真似はしない。

「ねえ……穴戸くん」

「どうした？」

「……もしその大学校を卒業したら……また何処か行っちゃうんだよね？」

「は？当たり前だろ？」

「もう少しデリカシーのある言い方できないのかい君はツ!? フンツ!!」

「痛テエ!!」

い、痛い……! 時雨のパンチは相変わらず鉄でも入ってたのかってぐらい痛い。メリケンサックといい勝負だ。

そんなメリケンサックパンチ系女子が意外な発言をしたので、驚き過ぎて冷静だったのだ。

「ほ、ほら! 春雨や村雨がすつごく寂しがってたし! もうすぐ、卒業だから……」

「確かに……お前たちが俺の鎮守府に来れたらいいんだけど……でもそうすると、今度は白露さんが一人になっちゃうな……」

「あ」

「あ、ってなんだよ。まさか白露さんの事まったく頭に入ってたかかったとか？」

「え、あ、その……」

「これは、白露さんに報告ですね」

「やめてええ! スパナで殴るよおお!」

「そつちがヤメテエエ!!」

だが今日はスパナを持っていない。ははっ、スパナを街中で振り回す女子とかどんだけやべえ奴だよ。

「それは置いといてだ……まあ、なんて言うかその……俺と一緒に来るか?」

「え……？」

「何処に配属されるかは分からねえけど、どつちにしろこの横須賀鎮守府とはおさらばするんだ……村雨ちゃんや春雨ちゃんはともかく、お前はどうしたい？」

「……どうもこうもないでしょ？好き勝手に所属を変えられる訳じゃないんだから……」

「……現役の艦娘として復帰するんだったら、所属は変えられるぞ」
「艦娘……」

艦娘の素質は、かなり狭い適合率がある。未だに多くの艦娘を必要としている海軍ではその人たちを重宝する……重宝し、人権を守る為に前線に立たせることを強要しない。

艦娘は手当てや昇進を含めた様々な面でプラスとなり、時雨みたいに前線で戦わず整備工員になる者も居れば、古鷹のように秘書艦として働く者も居て、中には艦娘専用の教官となる者もいる。

前線に立ちたいと志願すれば、整備工員としての役職が解かれ、艦娘として活動できる。

たしか、艦娘が足りない鎮守府であればそこへの配属を願えると、海軍のルールブックにあったはず。

要は、時雨は俺と一緒に、俺の指揮する鎮守府で実際に戦闘を行う艦娘として着任することができる。村雨ちゃんもそうだし、春雨ちゃん……前線の艦娘だし、提督に頼めば大丈夫か……多分。

「……俺も正直な話、みんな俺と一緒に来てほしいとは思って、だけど、それは同時に俺の下で艦娘として前線で戦う事にもなるから、来てほしくないとも思う」

「どつちなのだ!？」

「来てほしいけど、来てほしくない。やっぱり現状維持が一番……なんだろうけど、進む時間は止められないよ」
「……………」

時雨達には、本当に来てほしいとは思って。長年一緒にいた仲間……小つ恥ずかしいことを言えば家族みたいな感覚で話し合える味方に、これから歩む事になるとデカイ街道と一緒に歩いて、見て欲しいと思

うのは必然だろう。

だが、危険が伴うのを知って来てほしいとは思えない。前線で戦う艦娘は、大きなリターンもあれば、大きなリスクも背負う事になる。

提督になれば会える機会は相当少なくなるだろう。地方の海軍要塞に配属されれば、困難を極める。俺が異動を決定できるぐらいに出世できればいいが、何十年かかるか分からない……何より、三人がそんな事をしてまで俺と一緒に来たいかだ。

今までは、また会えるからと高をくくっていたが、今回ばかりは今生の別れのような気がしてならない。何れこの話を持ち出そうと思っていたが……まさか、時雨の方から話してくれるなんてな。

「……考えてみるよ」

「え？」

「だから、考えてみるって言ってるの！穴戸くんがあまりにも情けない顔してるから、やっぱり僕達がいないと駄目なんだなーって思ったから、ほんの少しだけ、ついていく事を考えてあげてもいいよっ！」

「ほんの少し!?俺の鎮守府に来るのはその程度の事ってことかよ!? さっきまでの湿っぽい空気はどこだよ!？」

「知らないよそんなの!?!穴戸くんの鎮守府に行くことより次はどんなクレープ食べるかの方が大事だし!」

「ハア!?また糖分の塊取る気かよ!?!糖尿病へようこそオオ!!」

「紅生姜食べると次食べたくなるって言ってなかったっけ!?!でも僕は代謝がいいから太らないもんね〜!」

「世界中の女性陣に謝れエエ!」

時雨はその時、クスリと笑う。そして……まるで今までの不安から開放されたような顔つきで、再度クレープ屋さんに足を運んでいった。

……時雨達が来ようと来まいと、俺はどちらにしろ提督への歩みを止めない。

一度決めた事を成し遂げられない男は、漢ではない。チャンス、能力、向上心、環境が全て揃っているこの俺は、今更整備工員に戻る

事は許されない。

兎にも角にも、先ずは提督となる……それが今の俺の目的であり、その餌は俺のすぐ目の前にある。

時雨の後ろ姿を見て、呟く。

「俺は……」

提督になる。

卒業式

―海軍大学校、数ヶ月後の卒業式。

『……大鯨!』

「は、はひい!」

『……秋津洲!』

「はいかも!」

『Prinz Eugen!』

「ハッ!」

『……結城真司!』

「ハッ!」

『……穴戸龍城!』

「ハッ!」

卒業証書を順に貰い、着席し、代表がスピーチを行う手順はどこも変わらない。

『私達海軍軍人は、日本の平和と、国民の安全を守り続け、未来へ繋げる意思と希望を――!』

卒業式の張り詰める空気の中、壇上にいる將軍クラスを物ともせず、に大きな声でスピーチを行っている、凛々しく逞しき海軍軍人の姿があった。

海軍大学校を首席で卒業した上、将来の超絶スーパー提督であり、多大な人徳と圧倒的な戦略眼を持ちながら、街に出ればその視線を独占し――どんなヤツでも子宮か股間を唸らせること間違い無しの、ア

ルテイメツト提督ことこの俺、

『以上！卒業生代表、秋津洲！かも！』

……の同期である秋津洲さんです。

海軍大学校普通科の生徒よりも早い段階で卒業式を行っている俺たちは、提督育成プログラムの完走した段階にいる。

卒業論文、再三に渡る海軍将校からの圧迫面接、補佐した提督達からの評と、そこで得た実績……実は、結構脱落した者が居たらしい。

そいつらとは話していないのでノータッチだったが、あまり可哀想とは思わない。育成プログラムから脱落した者は海軍大学校の普通科へと移り、数ヶ月に及ぶ練習航海をする事になったのだとか。

受け皿も用意されてる所を見ると、ちゃんとシステムがうまく作られているんだなど、改めて感心した。

上の階には、最終的に15人ぐらいになった卒業生達の関係者が居る。列席者の殆どは海軍軍人だけだ。

お、あの金髪は柱島のジャーマンスープレックスことビスマルクさんだな？

お、何故か三方を持つてるあの変な人は多分秋津洲さんの関係者だな？

お、あの可愛くあざとい容姿を持つピンクヘアは春雨ちゃんだな？
みんな真剣な眼差しで卒業式を見送ってるけど、観客席の人たちが滅茶苦茶濃い人ばかりで、そんな人たちが無言で俺たちを見てるって思うとニヤけるんだけど。笑いを堪えるのがやっとなぞ。

そのせいで軍人すら滅多にお目にかかれない軍令部総長、荒木大将閣下が壇上で一生懸命話してるのに、その有り難い御言葉がお耳に入らない。

大将が終わって、続いて出てきたのが斎藤中将だ。思えば彼が、俺を大学校に引き込んだ張本人だったんだよな。

『荒木大将閣下の育成プランは大きな成功を収めてくれました。これほど有能な将校を育成するに物足りず、ついには研修中に大成果を上げる将校まで出てくるとは……これは、前世代に対する辱めのおつもりかな？』

『『H A H A H A !』』

昔の将校には英雄的な人が30年に一人ぐらいのペースで輩出されたが、それ以外がクソだったみたいなき事を何度も聞いたことがあるな。

国を一種のカルト的な信仰心で崇め過ぎたのか、或いは真面目に働くのが面倒になったのか……何にせよ、日本軍にとっては今が一番いい時なんだろう。

俺的に、先人たちは悪い人ばかりじゃなかったとは思っけど。

それより、俺の話題を持つてくるのはやめてほしい。柱島の事はミスだと思っっているから、そのことを賛美されるのは無性に恥ずかしいんだ。

ただ俺はあの作戦のお陰か、成績で優等を貰った。優等とは、次席のことである。

え、秋津洲さんが首席で俺が次席……首位を独占してた七光り糞メガネこと齋藤中佐はどこへ行ったかって？三席まで落とされたんだよ。

悔しそうだったけど、ここでの首席つてのはテストで点数を取ったからと言っつて一位になれる訳じゃないんだ。

俺を含めた三人の元々実力が僅差だったし、こっちは柱島で凄い成果を上げたけど、秋津洲さんの方はコンスタントその上々な指揮能力を見せつけていたので、それが首席となった要因だろう。

卒業論文と面接で追い抜いた可能性もあるが、それは置いておこう。

ー外。

卒業証書とか言う紙切れと、集合写真撮っつて、終わり！そして何か涙適当に流してフリータイム突入っつて訳には、残念ながらいかないんだ。

外に出て軍隊歩きをしながら威風堂々と海軍の威厳を見せつける卒業生達の前には大量のカメラフラッシュ。

テレビも来てて、歴史的瞬間を手元の機械に撮影しようと思死に押

しかける姿は正にマスゴミ。こいつ等が潰した人生は数しれず……でも必要だからムカつく。

「では御三方、ここに並んでくれるかな？」

「ハッ！」

「この三人が、提督育成プログラムの代表的な生徒達です。現在航海練習を行っている海軍大学校の生徒達を成績、実績で上回っているにも関わらず、これから地域の要塞を統括して提督になろうと言う者達です。この提督達に守られる地域住民は、さぞ幸運な事でしょう」

「……受け取れ」

「……ッ！」

海軍大学校を卒業した……ってだけで名誉以外にも様々な特典とかバツジとかが付いてくる。

しかし軍学校の成績優秀者には、恩賜の軍刀と言われるJAPAN ESE KATANAがもらえるのだ。首席次席だけでなく、成績が優秀だった者がもらう事となるこの軍刀は、事実上トップ3位を争ってた秋津洲さん、斎藤中佐と俺の三人が手にする事になった。

これは陛下から直接受け取る事もある……というかそれがデフォルトなのだが、今回は代役である大将と中将がくれた。因みに陸軍大学校では世紀末のモヒカンみたいな頭飾りを付けることになる……陸軍じゃなくて良かったー！

そしてポーズを取った瞬間パチパチパチパチパチイイイ!!カメラフラッシュの集中砲火！目に被弾！大破しましたアア!!

でも目を開けてないと駄目ってカメラマンにダメ出しされた！殺すぞハゲ。

身長で秋津洲さんが凄く目立って見えるせいか、秋津洲さんにフラッシュが集中する。

そして終わった後は国歌とか海軍の歌とか歌って、自由な行動が可能となるフリータイムへと突入する……と言うなのマスゴミインタビュータイム突入。

卒業生のおもむきで行くはずのインタビュは、まず最初は目玉からと言わんばかりに成績優秀者の元に押し寄せた。

「貴方は次席の穴戸龍城海軍少佐ですよね!?この度、歴史上異例な課程設立と言われている提督育成プログラムへと参加し、次席の座を手に入れた心境をお聞かせください!」

「国民の平和と安全を守る日本海軍へと半ば憧れを持って入隊したこの自分が、まさかこれほどの大役を仰せつかるなど、夢にも思いませんでした」

「事実上海軍大学校の上位相互ではないかと言われていますが、その点についてはどう思いますか!」

「現在艦隊運用練習航海に赴いている同胞は、海軍省や大本営など中核を保つポストに付きやすいと聞きます。我々は各海軍要塞を統括し、最前線で戦う軍人です」

「あの安芸灘と瀬戸内を防衛した海戦で重役を担った研修補佐官が居たと聞きましたが、それはあなたの事でしょうか!」

「あの海戦で誰が柱島の補佐をしていたかは関係ありません。どれほどの敵が来ようとも、打ちのめすのが我々の役目……しかし私言を放たせていただきますと、あれは柱島の提督による管理能力が、最良の結果に繋がったのでしょうか」

「昔は同性の恋人が居たと聞きますが、本当でしょうか!」
「いません。自分はノーマルビーイングです」

ウゼエ……カメラフラッシュもウゼエ……!話しかけてくるなよもう……うなだれた顔で斎藤中佐や秋津洲さん達の顔を見つめ合う。

この後も大将主催のパーティーがあるみたいだし、参加自由とか言ってるけど行かないと失礼だし、その後は提督同士の二次会とか行きそうだし、これらは多分全部強制参加だし……ダルいッ!

「お兄さん、大丈夫ですかあ……?」

「ああ大丈夫だよ春雨ちゃん。ただ答える必要のない質問までズカズカ聞いてきて来るもんだから、疲れちゃって……」

「ハハハッ!柱島にいた時の気迫はどうしたのよ!もつとしつかりしなさいって!」

「そうだぞ。君はこれから私の同僚となるのだから、これより疲れる事など山ほどあるんだぞ。その時は、私が力になるう」

「ビスマルクさん……蘇我提督……」

うわあ……これから提督になるに連れて、人脈も大事になってくるだろう。スタートオフにこんなにも頼もしい人たちが俺の後ろを支えてくれるなんて……！

蘇我提督は第四鎮守府の提督として強制参加だが、ビスマルクさんはオイゲンさんの関係者として参列していたのだが、

『大学校では異例である女生徒であり、艦娘としても外国人としても初の卒業生であるプリンツ・オイゲンさん！一言お願いします！』

『ダンケ！』

『現在彼氏は居るんですか!?』

『き、キエンこめんたーるです!』

『首席の座を勝ち取った秘訣をお聞かせください!』

『と、とにかく頑張ることかも!頑張ればなんとかなるかも!』

『提督候補から落ちた方々に対して一言お願いします!』

『お気のど……って、そんな事聞かないで欲しいかも!』

『大鯨大尉、卒業おめでとうございます!現在彼氏はいらっしやいますか!?いないのなら私などどうですか!?』

『は、はう……』

『おい退けよお前エ!!ではせめてスリーサイズをお聞かせ願えませんか!?俺にだけこっそり教えてくれればいいので!』

『……っっ!』

見ての通り、オイゲンさんを含めて三人の艦娘は色々な人に絡まれていてとてもじゃないが話せる機会など無い。

大鯨さんを見てくれ、恥ずかしくて指に罰マーク作って駄目ですサインを送ってるぞ。クソかわいい彼女の仕草に、轟沈者が続出している。そのまま死んでろおチン○ン共。

ようやく少し人数が減り、ビスマルクさんや蘇我提督が他の卒業生達の所に行けるようになり、入れ替わるように近寄ってきたのが、多分提督として一番相応しくない結城だった。

見る限りでは、コイツの周りにだけ取材班や将校が取り囲んでなかつたっぽい。羨ましいな。

「よ！春雨ちゃんに穴戸じゃねえか！どうしたんだよ疲れた顔しちゃってよオ！」

「次席の座を持つ人間から言葉を引き出した奴が多くてな？取材班や将校達に絡まれないお前が羨ましいぜ……」

「え？俺の所にも来たぞ？ただ挨拶がてらソイツらの後ろに立って、俺はレ○プとゲイの合体版ゲイプマンだ、お前の顔とケツのカタチは覚えたぞツ……って言ったら近寄って来なくなつてな」

「そうなんだ。じゃあまず俺に近寄るのやめてくれる？そのゲイプマンのおホモダチだと思われるのマジ勘弁って感じだから」

「はア!?なんだよダチ公!?ただ取材の追手を逃れるためにやった作戦だろうがア!」

「じゃあもう少しマシな回避方法考えろよオ!?海軍の重役がお前みたいな変態ばかりだと思われたらどうするんだよオ!」

「変態でいいじゃん!!使えない常識人より有能な変態！国がちやんと回ってればそれでいいじゃん!!」

……クツ！倫理的に凄く問題があるのだが、総合的に見て的を射抜いてる辺り反論できねえ……！

「倫理的な問題だが、総合的には的を射抜いているぞ結城大尉」

「おお斎藤中佐！群がりたがりの輪から抜けてきたんスねエ!」

「ああ、報道陣だけに飽き足らず海軍将校や陸軍将校までもが私に寄ってくるとは……ここは高校の卒業式ではないのだぞ?」

元陸軍将校であり提督となる男であり、その上父も現役提督ともなればゴマ擦りに行くのは当然だしな！

「へ、へへッ……さ、斎藤中佐ア……か、肩を、お、お揉みしましょうかア……!?!」

「貴様もか……言い忘れていたな、次席おめでとう。まあ、貴様ならば当然だろう」

「え、ど、どうしたんスカいきなり?」

「あれほどの実績と海軍内部の評価を得ている貴様であれば当然だろ

うと思つてな。流石は私を負かした男だけはある……」

「剣道の時と、毎日やらされたチエスを相殺したら引き分けですけど」
「それでもだ。それに舞鶴の地域研修の際に、宍戸少佐は大勢居る中、チエスで秋津洲少佐に勝つたではないか……首席を打ち破り、現役提督からの信頼も厚い無名の次席として有名だぞ」

そんなに目立つてるのか俺？悪い気はしないけどさ、悪目立ちする
とどうしても不利になっちゃう事であるからさ、そんな超絶目立ち
たくない。

「まあこれでハンモックナンバーは手に入れたな。今後の活躍が楽しみだ」

「やっぱりお兄さんは最強です！」

「もちろんさ！でもハンモックナンバーとかどの時代の話しですか……」

ハンモックナンバー……それは平たく言えば、出世する順番である。単純に成績の良し悪しで決まるため、昔の日本海軍が掲げていた学歴至上主義を代表する言葉の一つである。

今は学歴差別だから言わないし、学校の成績が優秀だったからって同期よりも早く出世できるわけじゃないので、所謂死語の一種でもある。

「今は無いとはいえ、優秀な者にしか与えられない称号でもあるのも事実だ。恥じぬように、気張れよ」

「中佐も頑張つて下さい、一応結城もな」

「俺はついでかよ!?!……んん〜?」

「どうした?」

「いやサア、時雨ちゃんや村雨ちゃんも居るんじゃないかと思ってたけど……来てないん?」

「あ、姉さん達は……」

新地点

―軍令部総長室。

海軍の要と謳われる軍令部の長、軍令部総長様のお部屋は殺風景で、てつきり虎の下敷きでも置いてあるかとも思ったけど、案外普通の執務室みたいだ。

小さな警備府とかの提督がやるならともかく、荒木大将みたいな軍令部総長が部屋を私物化するのは権力も私物化する行為に等しい……と、偉い人に教わった事がある。だから少し安心したけど、流石にこれほど片付いてると逆に落ち着かねえわ。

「さてと……しつこいようだが、改めておめでどう穴戸君。君みたいな優秀な将校が提督となってくれるのは、推薦した私としても鼻が高いよ」

「……期待以上だッ」

「ハッ！ありがとうございます!!」

「これから君が向かう所は新設された要港部でね、ようやく戦力を設置できて嬉しく思うよ」

「……期待しているぞッ」

「ハッ！荒木大将閣下、斎藤中将閣下のお計らい、誠に有難く思います!!」

「こちらこそありがとうございます。本当は君であれば大きな鎮守府にでも配属したいぐらいなのだが……まあ、ルールだから仕方がないね。代わりと言ってはなんだが、あの三人に関する申し入れも手配する予定だよ」

あの三人とは、時雨達の事である。

「！ありがとうございますッ!!」

「……頼んだぞッ」

「この穴戸龍城、必ずやお役目を果たして見せます!」

―鴨川要港部、執務室。

「そして俺の人脈、話術、功績……それからそれ等を余す事なく利用する根回しの上手さが、君達を正式にこの要港部に招き入れる事が出来た要因だと言える……フツ」

「流石ですお兄さんっ！」

「ありがとうございます宍戸さん！」

「じゃあ僕達戦闘員になる必要あったかな!?僕達が兵学校に戻ったのって只の無駄足だったんじゃないの!？」

「いやいや、時雨達が艦娘として戦う決意を胸に秘めてくれたからこそ異動願いが届いたんじゃないか。俺の根回しなんて補足みたいなもんだよ……まあ、俺様のサポートが無かったら、届いていたかどうか分からないけど?フツ……」

「そのドヤ顔ハラタツウウ!!」

戦闘を行う艦娘に復帰するためには、短期間だが兵学校での試験と訓練を再度通らなくてはならない。

時雨と村雨ちゃんはそれが理由で卒業式に出来なかったが、春雨ちゃんを含めて無事に配属させる事ができた。

着任日の一日前だが、これから提督として働く事になる要港部の観察も兼ね早く来ており、こうして執務室を借りて小さなお茶会を開いている。

この鎮守府……ではなく要港部は、中將が言っていた通り新設された海軍要塞の一つである『鴨川要港部』。太平洋を見る千葉県に位置し、横須賀鎮守府のバックアップもある為比較的安全かと思われるが、『東京湾の盾』とも言われる千葉の地理的にちよつと危険である。艦娘を取り扱う海軍基地の大きさの順が鎮守府、警備府、要港部なのでここは所謂末端の基地だけど、新人提督さんだから仕方がない。基地そのものを受け持つのは初めてだし。

海軍が提督育成プログラム修了と共に発表した、海域防衛ライン強化計画の主点である海軍要塞増設の一部がここだ。

元々これは海軍上層部では大きな話題だったけど、まさか海外まで

防衛ラインを伸ばすとは思わなかった……まあ予算があるんだっただらいんだけどき。

鴨川要港部の内装はピッカピカで、木質感ある作りに、新築特有のヒノキみみたいな香りが漂い……特に執務室の壁は純白で、顔をくつつけたりしてその新築感を味わっている所を時雨達に見られたのは……忘れたい過去リストに登録済みだ。

そして、ここには既に約数人ぐらい役員がいる。

軍医、主計、整備工作班の人たちが雑談を交えて屯している所を目撃したので、多分あれが俺の部下となる人たちなんだろう。

俺のピッカピカのスーパーウルトラ提督服を見て敬礼をしてきたり、頭を下げてきたので……あ、俺って神になっちゃったんだな、って思った。

そう、頭を下げてきたのが定年間近のオッサンとか、一昔前は俺の同僚になってたかも知れない人達だった事に、改めて提督と言う立場の重さを実感する。

部下たちにこうやってもてはやされて、そして墮落していくのがお決まりのテンプレクス上司だが、もちろん俺はそうならない……部下に対しては常に誠実な言葉で語りかけ、上に立つものとして傲慢に振る舞わず、罰など以外の外だ。

「なんだその口の聞き方はアこの野郎オ!?この俺様がこの要港部の提督だと知っての狼藉かね!?罰としてお前をサンバ踊りで大本営の報告任務に行かせることもできるのだよ!」

「パワハラで有罪確定だねこのクソ提督さんはア!」

「ふふふっ」

「そう言えば聞いていませんでしたが、お兄さんはどうして提督なろうと思っただんですかあ?舞鶴にいたときはそんな事言っただけだったのに……」

「ん?ああそれはね、うちの提督とか、色々とトップな人たちを間近で見ている内に……海の男として深海棲艦に立ち向かうビッグウェーブに乗っ」

「モテモテになるからってみんなが言ったら突然なるって言ったんだ

よ。ビッグウェーブとか関係ないから」

「……そんなにモテモテになりたいんですかッ？」

「え、あ、そ、その……ち、違うんだよ!!確かに本能としてモテモテにはなりたい願望はあるよ!?でも俺はあくまで提督になって高みを目指したいって理由だから!そんな性欲魔神みたいな理由でこんな大層な事出来る訳ないじゃんもうイヤだなあ〜時雨きゅんはア〜ハハハッ!」

「じゃあ今日着任する予定の人たちに聞いてみような？」

「え……う？」

時雨がそう言うと、ドアの向こうからノック音が聞こえた。

え、まさかあの時あの場合にいた艦娘の誰かが、今日着任するの……?確か俺が提督になる発言をしたレストラン内では時雨と村雨ちゃんその他に鈴熊とゴーヤが居たが……そう思考を巡らせている内に、ドアの向こうにいた三人が姿を現す。

「失礼します!本日、整備工作班に着任する事となりました、軽巡夕張です!」

「同じく着任する事となりました、駆逐艦の綾波ですっ!」

「整備工作班として着任する事となりました月魔です!お久しぶりでず兄貴!姐さん!」

「つてお前たちかよおお……!びつくりさせるなつてえええ……!」

「初っ端から随分とご挨拶ね……」

「お久しぶりです!」

「お久しぶりんこ!夕張に綾波ちゃんはホント久しぶりだな!月魔はついでに」

「ヒドイっすよ兄貴!」

俺はこの時、結城と一緒に勧誘の仕事をしていた頃を思い出す。

大将が言うには、俺が提督になった時、自分が誘った海軍軍人は自分の元で働く事となるのが決定事項なのだとか。

つまり、夕張綾波春雨ちゃんのチームは最初から俺の所に異動する事となっていたのだ!

ワアオ！だからあんな無駄とも思える勧誘の仕事させてたんだな？半分は本当に人が必要だからなのかも知れないけど。でも人を見る目がないまま選ぶといい成果は出せないの、案外いいシステムなのかも知れない。

月魔くんは何かの間違いなのだろうか？コイツは別に誘ったわけじゃないんだけど……別にいいか。春雨ちゃんとのストーカー事件以降はマジメックスになってるからな。

まあ、何にせよ。

「オツホンツ……それで？夕張達に何を聞くんだったって？夕張達には既に、俺の高貴な志を伝えてあるから、別に掘り下げてもいいけど？ムフツ？」

「あれ？おかしいな……？」

「村雨さん、穴戸さん何の話をしてるの？」

「あ、あくええつと……なんで提督を目指したかの理由を聞こうとしていたらしいのだけどつ……」

「ああ、前にレストランで、もし提督になったら女の子にチャホヤされて、みんな穴戸さんの元に集まってハーレム作れるから、とか安直な理由でしょ？」

「「エツ!!」」

「な、何で知ってるしツ!!」

え、何故だツ!!俺は確か夕張達に、『漢としての高みを目指す事に、意味などない……キリツ』って言ったのに……!?

再度思考を循環させていると、これまた三人が姿を見せる。

「ちーっす！鈴谷だよっ！」

「こら鈴谷！最初ぐらいちゃんとか挨拶しなさい！……コホンツ、本日より着任致しました、重巡熊野ですわっ」

「同じく、本日より整備工作班として着任しました伊58です！提督には、気軽にゴーヤって呼んでほしいでち！」

「……………」

「んんん？…どうしたの？穴戸っち？…久しぶりの鈴谷に、見とれちやっつた？にししっ！」

「鈴谷、お前俺の提督を目指した理由、話しただろ？」

「え、うん話したよ？」

「な、何でそんなにあっさり!？」

「だって、どんな理由でも穴戸っち提督になれたじゃん!みんながで
きない事を、どんな理由でも成し遂げる……それって、すつごくカッ
コイイ事じゃん!鈴谷、穴戸っちのそういうカッコイイトコ……す、
好きかも……え、えへへっ」

「ガアアアアア!!」

可愛い!

時雨と俺はその眩いばかりの笑顔に打たれる。ギャルっぽいのに
純粹な笑顔と可愛い台詞……これが、ダブルスタンダードだと言うの
か(※正しくはギャツプ萌えです)。

なるほど、そういう事だったのか……鈴谷って変な所にかっこよさ
を感じるタイプなんだな。さて……じゃあ身体の方は何処が感じや
すいのかな?そんな事言ったらバリバリセクハラだけど。

「可愛いですわ鈴谷!」

「え、そ、そうなの?そうかな……っ?」

「可愛いぞ鈴谷!」

「え、あ、き、キモツ!!」

これが、ダブルスタンダードだと言うのか(※そうです)。

突然の来訪者であるにも関わらず既に順応しているのは、やはり知
り合いだからだろうか?柱島でのハッピーピーポーマックスな日々
は、俺の順応能力を強くしてくれたみたいだ。

「まあ先ずは、みんな歓迎するよ。でも鈴谷達はなんでここに居るの
?」

「何だっけ……ええっとく防衛ラインをおつきくする?するためにセ
ンリヨクを……バーンってバラまく感じ?そんなこと言ってたよ!」

「翻訳してクマのん」

「分かりましたわ」

「ヒドッ!」

熊野の翻訳からすれば要するに、防衛ライン拡大計画の重点とし

て、既存の戦力を分散させる事を目的として異動であるらしい。
良く見たら時雨が手にいしている資料にはその詳細が書かれてい
る。

「ま、まあなんにせよおめでどう穴戸っち！今日から立派な提督だ
ねっ！」

「おめでとおおおおおおうおうおうございませわっ！」

「おめでどうでち！提督の元でなら、24時間労働もバツチリでち！
綾波からも、おめでどうございませ！！穴戸さんの元で、一生懸命衆道
をおべんきようをさせてもらいますね！」

「おめでどうございませ兄貴……いいえ、提督！」

「私からもおめでどう穴戸さん。元整備工作班の副班長が提督だなん
て、すごく頼もしいわー！」

「おめでどうございませお兄さん！ぎゅ〜！」

「ふふっ、おめでどうございませ、穴戸さんっ」

「おめでとさん穴戸くん」

「……！ありがとうございます！」

提督達にありがとう。

学校にさようなら。

そして全ての親愛なる部下達に、
俺にとって都合の良い手足

おめでどう」

「穴戸くん、口から漏れてるよ。そして都合のいい手足って誰の事か
な殺すよ？」

テテテテーンテーン！終わり。

某有名アニメのエンディングそっくりな展開だったので、これはや
らざるを得なかった。

しかし……まあ、こういうの、悪い気はしない。

「あ、穴戸っち、ちよつと感極まつちやった感じ？」

「は？クーラー効きすぎて眼が痛いだけだし」

「ふふふっ」

「村雨ちゃん笑わないで……」

「じゃあこれを見ても堪えてられる？ほら穴戸っち、下を見て」

「え？なんかあるの？」

「いいからいいから！」

鈴谷や他のみんなに背中を支えられながら、執務室の窓際まで押される。

開かれていた窓外には太陽の反射を受け、キラキラと輝く海が波打ち、脇に挟むようにして工房と倉庫がそびえ立つ。

そして見下ろしてみると、

『『穴戸少佐!!着任おめでとうございます!!』』

大勢の野郎共が俺を見上げながら、耳が張り裂けそうなほど大きな声で叫んでいる。

そのほとんどが見覚えのある顔で、一生懸命手を降っているのが分かる。

あそこにいるのは舞鶴にいた頃仕事をした奴だ。

あつちは俺が訓練した新兵だ。

お、ゲイ三人衆までいるぞ。

……みんな、俺を追いかけてきてくれたのか？クツ……そう思うと、涙だ堪えきれねえじやねえか馬鹿野郎共……!!

叫んでいる言葉に、耳を傾ける。

『俺今穴広がりそうです。アソコソコソコソコ……』

『提督はホモオ！提督はホモオ!!』

『今日から提督になるンスよねえ!?ちよつとキャバクラで溶かしたんで金貸して下さいよオ!?!』

『おーい！やっぱり俺！裸ニーツよりもクツソエロい民族衣装の方が萌えますツ!!』

『俺は逆にブカブカセーターにニーツが無いと魅力が半減する事に気付きましたアア!!』

『こつち来てくださいよオ！鴨川のみんなに、俺たちのセ〇クス見せつけてやりましょうよオ!?!』

「……………」

そして俺は、無言で窓を閉めた。

「……ど、どうだった!?か、感動的だったつしよっ!?」

「感動しすぎて目から涙が消えたゾ」

「し、辛気臭いのは宍戸さんには似合いませんっ!だからその……」
「こんなもんでいいんじゃない?見知ってる人達が堅苦しい挨拶してくるよりよっぽどいいと思うけど?」

「……確かに。ハア……」

時雨の台詞に同意しながら席に座り、肩を落とす。

そう言えばこの椅子って、提督専用の椅子何だよな……考え始めれば重くのしかかる、提督と言う座の重み。

皆が見ている中で思うのは、ここまで辿り着くのに掛かった膨大な努力と、仲間との時間……そして絆だ。

この中で沈黙は辛気臭さを増加させるし好きじゃないけど、最初ぐらいはいいだろう。

発端を辿れば、下らない理由だと吹き出すだろう。

だがどれほど小さな火種でも、成し遂げた事には変わりない。

数々の出会いと、数々の教訓を得て、俺は今ここにいる。

俺の長い旅は、終わりを迎えようとしている。

この海軍基地で、自分自身が目指していた……提督となるのだ。

「俺……やっとな提督になったんだな……」

……俺たちの戦いはこれからだ!完!

「え、宍戸くんは提督じゃなくて、司令官でしょ?」

「「え?」」

「は?テメエ村雨ちゃんと春雨ちゃんを渡したくないからってイチヤ

モンつけんのかア？あ？」

「そうじゃなくて……提督の本来の意味って、知ってる？ここに載っているんだけど……」

「……ん？」

時雨が見せたのは、軍事用の用語辞典である。軍事用語辞典は、特殊部隊、哨戒、全滅など主に軍に関わる用語を事細かく教えてくれる、軍人にとっての必須アイテムだ。

何故コイツが棚からこんなモノを取り出したのかはさておき、指された場所を見てみると、『提綱監督』と言う見慣れない文字があった。

これは提督の本来の言葉で、元来清国の武官に付けられた役職、及び総称であると書かれており、こんな古くからあるのかくと単純に新しい知識を頭に入れて新鮮感を味わう。

そして、その下には『厳密には大将を指す言葉だが、艦隊の司令官として准将、少将、中将にも与えられる称号である。または海軍将官の称号である』と、書かれていた。

「……つまり、俺はまだ提督になれてないって言いたいのか？」

「その通りだよ」

「は？」

「……まだ出世しろって事ッスか？」

俺はキラヤ○トかよ？

鴨川要港部編

y a g g y

海軍要港部の増設により、日本国土は更なる安定を物とした。

増設された海軍要塞の一つであるここ鴨川要港部は、人口こそ大したものではないが、日本国土を守る重要地点の一つとして新たに稼働し始め、一週間足らずで既に深海棲艦の撃破数が10隻以上を誇る。

五つある軍区の主格である横須賀方面の最前線と言う立地的な事もあるが、これは日本国要港部の平均的な数値を倍を上回り、無傷で任務を終える艦隊の資材消費も最小限に留まっている。

そして海軍内部で注目されるのが、有能な指揮官として着任した新人司令官である。

優秀な人材を輩出し始めた提督育成プログラムの第一期生であり、諸港の存続をも危ぶまれた安芸灘海戦で大いに貢献し、現在では自らの要港部を指揮する提督となった人物である。

そう、現在その手に電話を持ちながら、遠くの鎮守府に所属する先輩提督と談笑を交わすのは、現在でも成果を出し続けている提督の鑑ことこの俺様である。

「アハハ！そんなですよはい！それで昔出会ったその外国艦にこう言いました……私はブリティッシュ滲みたシユガーよりも、メープルシロップの方が好みです、ってね？ハハハッ！」

「ねえ穴戸くん、この書類なんだけど……」

「あーはいはい……ああそうですねえ！では今度そちらにオススメのメープルシロップを送りましょう！純度の高いメープルシロップとベーキングソーダを混ぜた水を飲むと、癌の予防にもなるらしいですよ？」

「ねえってばー！」

「チョッ、ジャマー……ああいいいえー！自分の部下が『寂しいから構ってえー！』と駄々をこねておりました……犬のようで可愛いと？アハ

ハ！常にスパナを手にした狂犬では恐怖のほうが勝ります」

「フンツ!!」

「グアアアアア!!」

そして当然の如く、俺は時雨のハンマーパンチを食らう。艦娘だからか、或いは砲撃よりも殴った回数がか上回るからか、はたまたその怒リングゲージがマックスまで到達したからか、その威力は戦艦並に強いと感じた。いや、実際戦艦に殴られた事はないけど。

……砲撃よりも殴った回数が多い女って凄い称号だな。今度時雨を呼ぶ時に使ってみよう。

「何すんだテメエ!?俺がここの司令官様だと知つての狼藉かね!?つーか俺様が他の提督様と通話している途中で殴るのやめろオー!」

「ごめんワンツ！僕は狂犬だから自分の拳を制御できないんだワンツ！」

「村雨ちゃんツ！この狂犬に狂犬病ワクチンを打ってくれエ!!」

「狂犬なのと狂犬病は違うような……じゃあはい、時雨姉さんっ」

「わあーい！超高級なクッキーだワン！」

お茶無しで糖分と香料の集大成を頬張る時雨は、さながら本当の犬のようにケツを振っている。

着任日から一週間ぐらいが過ぎる。

時雨と村雨ちゃんは艦娘として出撃しているが、俺の秘書艦となった村雨ちゃんは一度目以降の出港はない。

しかしちゃんと演習と訓練には参加しており、いつでも出撃が可能な状態にしたいとの事。当然と言えば当然なのだが、責任感があるのは村雨ちゃんらしいな。

春雨ちゃんは時雨と同じく要港部の第一艦隊に配属したけど、この娘がメツチャ強いんだよね。特化した能力は無いと思ってたけど、練度以上の活躍を見せてくれるんだなこれが！旗艦は鈴谷にしているけど、この分だったら第二艦隊旗艦とかも任せてもいいぐらいだ。

今日は県内の海域に限らせた哨戒任務を行い、時雨が出撃報告書を持って来てくれたのだ。

因みに時雨が「流石高級なクッキーは一味違うね!」と美味しそう

に食べているそれは、中身をすり替えたTDN安物クッキー！である。

ではモノホンはどこかって？俺と村雨ちゃん^トが食ったんだよッ。

「ハアア〜後でまた提督に掛け直さないといけなくなつたじゃないか！どうしてくれるのかね!!」

「知らないよそんな事……ていうかなんでそっちの提督さんと話してたの？」

「人脈構成って、知ってる？そ、れ、だ、よっ！上を目指すには仲間を作る必要があるし、提督になれって言ったからには、せ、責任……とつてもらうんだからねっ！」

「は？提督になれなんて言っていないしキモキモキモッ！」

そしてこの返しである。あと女子にキモって言われるの何氣にくるからやめろ。

現在のメツツツツチャ遠い目的は、提督になる事である。

確かに時雨の指摘は鋭く、提督とは将官……陸で言う將軍クラスを指す言葉だが、艦娘を起用するようになってからの海軍は、艦娘を艦隊として扱うが故に『艦隊の司令官』……つまりは、提督だな！みたいな感じで艦娘の司令官を提督と呼ぶようになったのだ。

感覚としては社長でもないのに、シャチヨさんシャチヨさんって呼ばれるようなモノなのだろうか？

元々正式な役職ではない上、称号的な意味合いが強く、何より呼びやすい……その結果、年々そう呼ばれる階級が下がって行き、ついに俺みたいな少佐が提督と名乗れる時代が来たのだ！

……名残りと時代の移行は恐ろしいと感じながらも、そんな屁理屈は許されない。一応この若さで提督になるなんて、前代未聞だと思っぜ？俺の同期全員そうだけど。

なのにこれ以上行けて……シ〇アにでもなれって言うのかよ。

俺の爺さんにも一応報告はしたさ。俺を一番提督にさせたがってたの、あのクソジジイだからな。

しかし「少佐風情が何を提督だのと……将官になってこそ、提督じゃわい!!のおサヤカちゃん？」「エ、チヨ！ムズカシイハナシワ

カーラーナーイ〜！」などと電話越しに聞いた瞬間通話を切った。

まったく……自分より階級が上の孫に威張るクソジジイやら、そんなオールドタイマーと同じ思考回路を持つ眼前のクツキーモンスターやら、クツソ適当な台詞しか吐かないクソビッチババアサヤカ(35)やら……まともな人は居ないのかねこの世の中に!?

「もう、そんなこと言っちゃ駄目よ姉さん！穴戸さんも一生懸命頑張ってるんですから、ちゃんとみんなで支えないと……あつ、村雨の、ちよつといいお茶、おかわりしますっ?」

「すりゆううううううう!!」

「ふふふつ、了解ですっ」

いや、居たぞここに。しかもとびきり天使の。あれだ、俺の周りにはろくな奴がない分、バランス悪くこつちに振られてるんだ。

こんなに腕が細いのに一応軍人で、相応の体力を持つてる上に巨乳なんてアンビリバボーだぞ。

この要港部でも、村雨ちゃんは皆の心のアイドルであり、人気者である。因み俺も人気者だぞ、男共から。奴らによると、ケツの形が良いのだとか。

嬉しくねえよ。

ノーマルには重りにしかならない『同性に好かれる理由』を思い出し、口直しと言わんばかりに村雨ちゃんのお茶を飲む。

うん、実に美味である。あのお手で作られた傑作が……しかも村雨ちゃんが手に持つティーポットは、この俺様だけのために作られた、

「はいっ、これ時雨姉さんの。甘いものにはお茶は欠かせないものねっ」

「ありがとう村雨っ！戦闘でのアシストもうまい上にこの奥ゆかしさ……流石は僕の妹だね！僕達の司令官にはもったいないねホント！」
「何だとゴラア!?!村雨ちゃんには俺みたいない出世頭が一番似合うだろうがア!?!」

「はい、普段は肩書で男を決める女はクソとか言ってるのに、落とす時はここぞとばかりに自分のステータスをアピールしようするなんて

……とんだブーメランスネークだよー」

ブーメランスネークって、回りくどいって意味なのか？

確かに一理あるし、俺だけのために作ってくれたとかちよつと思いやがりも良いところだけどき……司令官の座を手に入れて舞い上がるぐらいは許してほしい。

「ハア……で？僕達とこんな風に話していいの？書類仕事の方は……」

「もう終わらせてあるぞ」

「え、もう!？」

「とは言っても、整備工作班の報告書と資材在庫、そして経理科の人達のレポートとか、それらがないとまとめられないから今は待つてる事しかできないし」

「そ、それにしても相変わらず早いですね……」

「惚れた？うん、分かる。村雨ちゃんの次の台詞は『私と言う書類を捌いてくださいっ！』でしょ？あーこれはもう辛抱たまらん」

「上層部に訴えようか村雨っ！」

「ノーノーダメダメらめらめえ!」

「こ、こほんっ！きよ、今日は新しい艦娘さん達が来るのだから、シヤキツとしてくださいっ!」

「……あれ？そうだったっけ?」

「わ、忘れてたんですかあ!？」

村雨ちゃんが驚くのも無理はない。すぐさま捌き終わってない書類の中を探索して出てきたのが、今日の昼……つまり今着任予定の艦娘達のデータだった。

一応流れでとぼけてみたけど、時雨はガチで忘れていたらしい。

三人の艦娘が着任するらしく、ある程度他の鎮守府で海戦を経験し、練度もそこそこあると見た。

彼女たちのプロフィールには経歴、艤装のタイプや艦種他に、個人情報も書かれており……あ、スリーサイズが載ってない、つつツツかえ。

こんな不純な提督さんを目の前にする事となる……いや、超イケメ

ン提督ことこの俺を目にする事となるラツキーガール達による、恒例のドアを叩きと元気のいい挨拶が扉の向こうから聞こえた。

時雨はほぼ空になってたクツキーボックスを忍者みたいなバク宙を繰り返して勢い良く隠し、村雨ちゃんも粗相の無いようにと俺の光り輝く提督服を直してくれて、自分の服装のチェックも欠かさない。

第一印象が大事だし、最初に迎え入れる事になる艦娘達だからこつちも緊張が走るし、何よりカツコよく見られたい!

女性にいい印象を与えると何処かのブログで見た、少し声を低くする事と、常にクールでいる事、そして優しそうな笑顔を常時作ること……よしッ、これで彼女たちの心は奪ったも同然だ。

大きく息を吸って……入れ。

「失礼しますッ!本日、ヒトヨンマルマルより、鴨川要港部へと配属された駆逐艦不知火ですッ!」

「同じく、駆逐艦黒潮です!」

「同じく、駆逐艦陽炎です!」

「私はこの要港部を指揮する、穴戸龍城だ。初めて指揮を行う身として至らない点もあるだろうが、君達の真価を發揮できるように最善を尽くさせて欲しい。これからよろしく頼む」

「ハッ!」

「ブフッ!」

ん?何吹き出してんだ時雨テメエ?何か俺の口調に変な所でもあったのかなアツ?お前が吹き出したせいで三人とも目を見開いてるじゃないか?

「し、時雨姉さんっ」

「コホンッ……どうかしたのかな時雨くん?」

「クハハ!し、司令官の、く、口調が!お、面白くて!!アハハハ!!」

「コホンッ、すまない君達。時雨中尉は統合失調症を患っていてね、急に笑い出す事があるのだよ。君達の先輩だが、暖かい目で見守って上げてくれ」

「フンッ!!」

「痛エエエ!!なに気軽に手を上げてんだテメエオラア!?!俺はボクシン

グサツクじゃねえんだぞ!？」

「あーごめんね。僕は病気だから、司令官さんを急に殴らないと気がすまないんだあ……あ、でも司令官以外には手を上げないから安心してねっ!」

「さっきまでクッキーモンスターだったクセによオ!？」

「「ポカーン……」」

「あ、あははっ……ここ、これは何時もの事だから大丈夫ですよっ?」

はい時雨のせいで威厳ガタ落ち。司令官として女の子達にだけはいい顔しようと思つたのを神様が許してくれなかったのか?何時もはそんなキャラじゃないのにつて? KARMA ってのは侮れないな。

「……フフツ」

「不知火?」

「いいえ……面白い司令官ですね」

「たしかに、気楽な感じの方が好印象かも……」

「え、そう? 照れるなあ〜気さく系頭脳明晰成績優秀スーパーイケメン提督だなんて……君達が良ければ、気さくに話してくれていいんだぜ?」

「このように、僕達の司令官は勘違いを直そうともしない系司令官だから、言い寄られないようにとことん避けてあげようね!」

「やめろ、自刃するぞ」

え、司令官を辞めるの? と聞いてきた時雨が口で「うるうるっ」と言いながら口に手を添えてきた。その行動が何を意味するかはさておき、そのぶりっ子ポーズはあまり好感持てねえぞ。

「でも良かったわ〜。おっ固い人あんま好かんから、これぐらいが丁度ええと思うけどっ」

「そこまで言うんだったら俺、本気で気さく系イケメン目指してみようかな……フツ」

「宍戸……司令官は十分イケメンですよ! 村雨が保証しますっ! ぶい!」

「あー村雨ちゃんがそうやって甘やかすから俺の心もぶいぶいしちゃうんじゃあ〜」

村雨ちゃん……男は女の子の言葉本気で信じちゃうからそうやって甘やかすのは……あゝ俺赤ちゃんになっちゃう。

「では改めて……駆逐艦不知火です、ご指導ご鞭撻、よろしくです」

「駆逐艦黒潮や！よろしゅうな！」

「やつと会えた！陽炎よ、よろしくねっ！」

「改めて、俺はここの司令官様だ！みんなよろしくウ……っで、やつと会えたってなに」

「え、そう言われるのってロマン感じない!？」

「……え、あ、うん」

前世からの恋人で、彼女の方だけ覚えてる的なあれ？今は流行らないと思う。

血が付着したコロドームを拾った時のおぞましさは、口では形容し難い

―出撃所前。

「ああもうめちやくちやだよ、どうしてくれるのこれ」

「センセンシャル！許してください！何でもしますから！」

「チツ、しょうがねえな……しゃぶれよ」

「え、それは……」

「分かってんだろオ？もうヨツンヴァインになってんだから……しゃぶらなきや撃つぞゴラア！」

「仕事でだつてのに、雄マン（カリフ）を求めてくる子犬ちゃんの猛攻は止まらなかった。」

「スパナをまるで銃のように見立てながらケツに突きつけ、巷で評判の喉ジメストロークを急かす。」

「工業用アルコールとハンドローションもバッチリ用意していて、これから体中の穴と言う穴を未曾有の快感と刺激が通るとなると、マジたまらねえ！」

「ストップ。お前達はなにをしてるのかな？」

「あ、副班長、じゃなくて司令官ですか？今、ヨツンヴァインになってる変態整備工員が入り込んでるんですけど、（快感への）不法侵入ですよ不法侵入」

「すいやせんすいませえん……」

「クツソ汚いカマ声ですいませんはNG。ああ、何処を工作してるかと思ったらソツチを整備していたのか……いや、或いは開発か……いやあ、まったく仕事熱心な整備士も居たものだなあ！」

「ちよつと何やってるの！あつちの整備はまだ済んでないでしょ!？」

「いや、アッチのはもう済ませてありますよ？見てくださいよあの顔、あんないやらしい顔になっちゃってるよ」

『あ……あ……（愉悦）』

「早く行ケエお前ラアア!!」

「UBR姉貴オツスオツス!」

夕張の豪傑さながらの発声を聞き、ゲイ共は仕事に戻った。

「ふう……」

「どうだ班長さん、こつちの仕事はうまくやれてるか? 勿論お尻の整備をしていたアンポンタンの件を除いて」

「ええ……ではなく、はい提督。班長に任命してもらい、仕事にやりがいを感じています!」

「そんな固くならなくてもいいって、春雨ちゃんや綾波ちゃんだって何時も通りじゃん」

「コホンッ、なら遠慮はいらないわね!」

「切り替え早えな、もうちよつと戸惑ってくれてもいいのに……」

「だって立ち位置的には部下と上司で、舞鶴にいた頃とあまり変わらないもの……昔から変わらない、それってとても良いことなんじゃないかしら?」

「そうですよ! 昔も今もその良さは変わらないんです! あの方々のように!」

「え……?」

突然会話に入り込んできた綾波ちゃんが指す場所には、ゲイ共がとても分かりやすく後輩連中に整備の仕方を教えている光景だった。

あわよくばケツの具合を確かめようとする所を見て、俺もより一層気を引き締める。

夕張は整備工作班の班長となり、適任だったのかとても優秀である。レポートはとても読みやすく、仕事が早い上に皆を纏めるリーダーシップもある。階級上問題もなかった為、俺が抜擢した。

その同期であり、出撃から帰ってきた綾波ちゃんは舞鶴にいた頃と変わらない、つまりは要港部のエースの一人である。一つ気がかりなのが……彼女は所謂、BLに目覚めてしまった事だ。

なんと言うかその、凄く勉強したらしくて……空海が日本に衆道を持ち込んだのが日本BL文化の序章だったりと、戦国時代でのBLは寧ろステータスだったりと、大正時代に何故か男色文化が復活し

たりとか、パン袋を挟むアレの名称がバッグクロージャーだつてのと同じぐらいどうでもいい事ばかり話してくるんだ。

男色話題に発展したら逃げる……なんて手もあるが、あんな純粹で恋する乙女のようにキラキラした目で見つめてくると、どうにも切り離せない。これが、一人ひとりを大事にする役目を持つ司令官の定めだというのか……！

あ、同期といえば春雨ちゃんもそうだな。陽炎、不知火、黒潮の指導を努めており、卒業した年が一つ上なので若干先輩と言うこともあり、新たな後輩を持ってウキウキしていた所を見かけた。

「ぎゅ〜！」

「お、おホホホオ〜！じゃなくて春雨ちゃん、少し離れようね」

「はあく〜い！あつ、報告書はこちらです！」

話していた隙に抱きつかれてたから驚いた……春雨ちゃんはスニーキング能力でもあるのかな？しかも出撃から帰ってきてこの元気づくり、ふう……若い娘は最高だぜ！

陽炎姉妹も俺たちに一礼してスタコラサツサと入渠しに行き、あの様子だともう三回ほど出撃できそうかな？と心に思ったが、予定は全部済ませたので行く必要はない。

ハア〜こんな元気っ娘ばっかりだと、俺も夜の方が元気になっちゃうなあ〜！それを言ったら確実にセクハラなので、言葉は飲んでおくけど。

「相変わらず仲がいいでちー！」

「ふふふつ……春雨はもう司令官以外の人には従わないのですっ！」

「春雨、それは色々駄目だと思うわ……」

「ははは、そうだぞ春雨ちゃん。そんな事を言うと、他の提督達が嫉妬しちゃうからな」

「他の提督なんてどうでもいいです！」

他の提督涙目。俺も彼女のようにキツパリと自分の意見を言える人間になりたい。

「ええつとそれで提督、なんでここに居るの？」

「え……ま、まるで居ちゃいけないみたいない方……あ、俺泣きそ

う」

「大の大人が泣かないでよ……っっていうか普通は聞くでしょ？こんな油臭い場所に突然提督が降りてきたら」

「一昔前の俺もこの油臭い場所でお前らと同じ仕事をしてたんだから、改めてBIGになった感傷に浸ってもいいでしょ？今回は視察も含めるけど……これ、今度発令される作戦で主に必要になりそうな物資を予測した一覧表だ」

「作戦って、まだそんな話聞いてないけど……」

「まだ予定の中の予定って所だけど、発令されていざとなつた時に必要なもん無いと慌ただしくなるからな。一応作っておいてくれ」

「了解したわ、作ってくれてありがとう……舞鶴にいたときは急ピッチで仕上げたにも関わらず燃料が足りないとか余裕であつたものね」
それが常識です。

どこの国でもある程度行つてることだけど、資材は軍事基地に必要な以上の量を送る事はない。書類を捏造して資材を横領したり出来るからな。

日本海軍ではそういう話は聞いたことがないけど、企業の重役は平気でやってたり、隣国の軍幹部がやった部品横領事件も記憶にある。起きてからでは遅い！出来ないようにシステムを組まなければ！などと、ご最もなスタンスのお陰で、俺みたいな横領する気ゼロのヤツが、先を見越して準備すると言つたことが容易に出来なくなつてるんだ。

警察も憲兵隊もこういう意気込みだったら事件が減るのだが、暇過ぎる状態を作ると今度は職を追われる可能性も出るので、どの道難しい問題なのは変わらない。

「お兄……じゃなくて、司令官はこれからこのあと何処へ行くんですかあ？」

「要港部内をパトロールだよ。鎮守府ならともかく、ここは俺自身で視察できる範囲だから歩き回って再度トイレの場所とか確認するんだ」

「なるほどお……っつて、な、なんでトイレ限定なんですか司令官!?!た、

確かにばったり出会った男性とのハッテン場を設けようとするのはいい事なのですが……流石にトイレは露骨すぎますっ！せ、せめて中庭とかだったら……」

「綾波ちゃん、俺はね、一ツツツツツ言もね、そんなこと、言っていないから、ね?」

「は、はい、すみません……っ」

もうなんかね、酷い。

「春雨も一緒に行きます!」

「行ってもいいけど、その前に入渠しようね。出撃後の、お、や、く、そ、く!だからね!」

「はい!あ、では中庭で待ってて下さい!そこから要港部の探索へと行きましようっ!」

「う、うん」

なんで集合場所を指定してるんだ?

「ではまた後で!行きましよう綾波ちゃん!」

「はいっ!ではまた!」

手を振る春雨ちゃんと、綾波ペコツと一礼する綾波ちゃんはそのまま入渠所がある場所に向かった。

「ハアア疲れた……」

「ご苦労、大儀であった」

「は?」

「うお!!い、いきなり殴るとは何事かね時雨中尉!?抗命罪かね!」

「いや僕は逆らっていないから、ムカついて殴ってるだけだから」

「ええ……」

そして入れ替わるように時雨が到来。春雨ちゃんと同じ艦隊に居たにも関わらず会話に入ってこなかったのは、整備工作班達を指導していたからだろう。

艦娘だが先輩でもある時雨は、俺と同じくちよくちよくとショートカットをアドバイスしたり、手間取っている所を助けたりしている。

俺は司令官だし、部下の心を掴むために親しみやすさなど演出して手助けをしていた。でも時雨はしなくてもいいのにする所、やっぱり

世話焼きなんだろうな。

「で、なんの話してたの？」

「我らが提督が要港部を直々に視察して回るらしいの」

「視察って、これまたなんで？地雷原でも見つかった？」

不発弾ならともかく地雷はないだろうが。つか地雷原ってお前……足柄さんの過去じゃあるまいしさ。

「生憎時雨が望んでいる地雷はないけど、この前コンドームを見つけ
てさ……」

「え、ええ!?ま、まさか、もうそんな関係になった人がいるって言うの
!?ど、どうしよう私……」

「あはは、夕張って案外純情なんだな！」

「あ、案外ってなによ案外って！」

顔を軽く覆った夕張の頬は紅潮しており、普段のクールさとは一変
して、珍しく恥じらいを見せている。

凄く可愛くて、いいと思います。

「……あ」

「ん?どうした時雨？」

「あ、え、ええつとー!あ、や、きゃくー!ぼ、僕も恥ずかしい……」

「は?それやってて恥ずかしくないの?」

「フンツ!!」

ゴフツ——!!強烈な一撃が俺の腹部を襲う。

あ、コンドームの話で恥ずかしがらなきや僕女じゃない!って思っ
て咄嗟の行動を起こしたのは分かるが、すげーわざとらしいのでN
G。そして上官への攻撃はNG。

「痛エ……」

「ふん、女の子は丁重に扱うべきだよって何回も言ってるじゃん!僕
は忠告を聞かない人には容赦しないんだよっ!」

「ま、まあまあ……」

痛みが収まるまでに2分を要したのは、やはり見事なボディイ
ンクだったからか……見ていた整備工作班の連中も拍手してたく
らいすごかったらしい。

「ふう……いや、コンドームの話にはまだまだ続きがあつてさ、どうやらそれ、使用済みらしいんだ」

「それさつき言わなかった？つて言うか未使用のヤツだったら別に面白くなー」

「血がついてたんだ」

「っ」

二人は絶句した。

ああ、俺も拾ったあの時は、ホラー映画のクライマックスを見ているような顔をしたさ……いや、怖過ぎんだろこれ。

「そ、そそそそれつてつつつつまりつまりつたりつたりつたり!!」

「ああ、班の連中の一人が怪我をして、出撃中だったから急いで応急処置をしたのが、落ちてその辺に寝転がってたそうさ。紛らわしいにも程があるよな？」

「……………」

ははは、落胆するのも無理ねえわ。俺もクソ紛らわしいゴミはゴミ箱に……できればカモフラージュして入れてくれれば助かる。

俺も触った瞬間考えちゃったよ……あ、俺、変なモノに感染しちゃうのかなつて。そしてあの血の量……相当酷い形で入れられたんだなつて。

緊急用の絆創膏がすぐ側にあつたのにそれを使わなかった事、軍医さんにちやんと叱つて貰わなきゃな。

「そういえば司令官は行く場所があるんじゃないやなかつたっけ？」

「あ、いっけねエそうだったア!!俺ちよつくら行つてくるぞ!あとお前ら!今日はもう上がつていいぞオ!!」

「「お疲れ様ですツ!!」」

ー中庭。

上がつていいつて言つた瞬間、その敬礼の速さに感無量。立場と言うのはこれほど人に格差を付けるものなのかと、一々小さい事でその身に実感する。

中庭は広く、普段は海兵が走り回つてゐるここも、任務が終われば社

交場へと早変わりだ。ビルや学校の屋上みたいに、人がいない時は何故かテンションが上がって、誰がいると残念な気分になるとても神秘的な所だ。

こういう感情を持つことを人は人嫌いと言うが別にそうではなく、ただ誰もいない場所に自分だけがいたら、何か自分だけの場所みたいで優越感があるじゃん。

『あ、提督じゃん！チーツス！』

『ごきげんようですわ』

そして中庭のベンチから提督呼びで声を掛けてくる甲板ニーツシスターズ。

鈴谷達は今日非番なので、出撃はしていない。片手でスマホをイジる鈴谷と、良家のお嬢様みたくスイカをフォークで食べる熊野は、若干シユールかとも思うだろうが、何でもフォークで食べるスタイルは彼女にとってデフォルトである。

「美味しそうなスイカだな。じゃ、いただきますーす」

「え、ちよ、なに鈴谷の頭かじってんのっ!？」

「あくごめん、美味しそうなスイカだなと思って」

「鈴谷の頭のドコがスイカっぽいワケっ!？」

瑞々しい緑色の球体って言えば大体はスイカ、或いは鈴谷の頭を連想する筈だ。

「はしたないですわよ提督」

「スキンシップだスキンシップ。別にやましい事なんてしてないだろ？」

「でも鈴谷を食べましたわ！」

そう言われると確かに如何わしく聞こえるな。

「確かにそういうと誰しも耳を傾けるかも知れない。だがよく考えてくれ。俺は、わぁーい！美味しそうなスイカが二つもあるくぱふぱふ！とかの行為にも及べたんだぞ？」

「鈴谷、携帯」

「はいどうぞ！たしか憲兵隊の番号は……」

「ヤメテヤメテ、オレハタダナカヨクシタカツタダケ」

そうやってすぐ通報するのやめろ。イマドキ女子のトレンドなのか？

だがしかし、漢として自分が発した言葉は取り下げない。

あの縦セーターみたいな鈴谷の制服には、名前の由縁となっている縦線が入っている。巨乳が着ると大きいと面白い具合にこの線が左右に広がって、形がより分かりやすくなるんだなこれが。

熊野は……いや、凄く貧乳って訳じゃないんだけど、格差のある姉妹間で比べるのは酷だ。兄弟姉妹を扱う格差のせいで起こった戦争もあると思う。

結論、姉妹同士でおっぱいは比べちゃだめだ。

「まったく……司令官としての意識を持つてもらいたいものですわ」

「調子乗ってましたすんません」

「いいじゃんいいじゃん！フランクな提督の方が鈴谷は好きだなくっ！」

鈴谷は……俺のことが、好き……だと？

「鈴谷さんは司令官の事が好き……なんですかあッ？」

「二うわあ!!!」

そしてまた気配なしで俺の背後から現れる春雨ちゃん。こんなにうまく誰かの背中を取れるものなんだな……時代が時代だったら忍者になって暗殺も楽勝だっただろうな。いや、忍者じゃなくてくのか……いやはや、ニンニン春雨にハニートラップされたいで御座る。「そ、その好きはどういうカンジの好き……っていうか、なんでここに居るの!？」

「司令官とこれから要港部内のお散歩デートです！」

「いや普通に歩き回るから待ち合わせここにしてください」

「むう〜！デートって言うってくれてもいいじゃないですかあ！」

「いや、俺まだ勤務中だし一応だからね？勤務中にデートとかとんだクソ野郎が居たもんだあ！って上層部の耳に届いて首チョンパされるまでがテンプレだから」

「どこのテンプレですよそれは……？」

しかし、自分が何も悪い事をしていないのにいきなりクビ宣言され

る事だつてあるんだ。それが悪い事をしていたともなれば尚更だ。電光石火……女子が聞いた人の悪評が、学校中に知れ渡る速度と同じぐらい早い情報伝達により、知らずの内に吊るし者とされるのだ。

そう、再三言われてきた事だが、人生とは何が起るのか分からない。……あれ？これを悟る度に、何か悪い事が起るような予感がするんだけど……デジャブってやつか？

『き、緊急警報！緊急警報！東より大きな深海棲艦の機動部隊の反応を察知！繰り返す！東より大規模な機動部隊の群衆を察知！要港部内にいる者は直ちに出勤態勢ヲ取ラレタシ！』

「「……え？」「」
「……え？」

三人はアナウンスがおわると、スピーカーから俺の顔へと視線を移した。

深海棲艦がいきなり来た。

……いや、そんなこと言われても、俺の頭いまポカーンってなってるし。

最初の大きな戦闘

なんて言ってる場合じゃねえだろ!?

また大規模な数の深海棲艦!?!なんで俺の所ばかり来るんだよオ!

いや、大丈夫だ。俺は大規模艦隊と戦った経験のある、言わば強くてニューゲーム派提督なんだ……って、敵も開始ハードモードじゃねえか。

俺たちは艦娘の海軍要塞では最弱の要港部であり、物量にまかせて勝利を刻む鎮守府の艦隊とは違って、少数で敵を撃退する必要がある。

まだ正確な数は分からないが、予想だと合計30隻以上かもしれない。俺たちだけでこの状況をなんとかするなんて、無理ゲーにも程がある。

敵前逃亡も銃殺刑、少数艦隊での玉砕は必須……この日本軍において、人道の二文字は存在しないのかア……!

というのは、全て昔の話である。

俺たちの主な役目をざっくり説明すると、小さな深海棲艦は自分達で撃退、そして大きな艦隊が来れば鎮守府から応援を呼ぶ。

さつき村雨ちゃんが可愛い声でやったように、俺たちを管轄する立場にある横須賀鎮守府へすぐ大規模艦隊見ユの電報を入れるのが規則である。

これが連動して空軍基地、陸軍のレスキュー隊まで行って、最終的には番組放送とかで避難要請や警報を発令し、国民に必要な情報を与えるんだ。

……今日はもう上がっていい予定だったのに、深海棲艦がどこからとも無く現れたせいで、ここは今執務室と言う名の緊急会議へと変態を遂げる。

俺が執務室にあるパソコンを使って、村雨ちゃんの隣でX動画をを見て変態的な優越感に浸ろうとした計画も、深海棲艦様のお陰でこの

ザマである。

非番だった鈴熊、上がろうとしていた夕張、そして経理科や軍医部など各種のリーダーを取り揃えての作戦樹立を凶る俺……理不尽だけど、国民を守る使命を背負う俺たちの一挙手一投足が、平穩に暮らす人々の命と安全を守ってるんだから仕方がない。

「作戦はどうなさいますか、穴戸司令官？」

「経理部の自分が言うのもなんですが、もう少し敵艦隊の情報を待ってもいいのではないでしょうか？」

「いや、経理部の言うとおりだ。本来それが海軍のマニュアルなんだよな……でも、早く動く準備は整えておいた方がいい」

実際の進行方向が予想と違っていたり、敵艦隊規模が小さかったりすると、折角立てた作戦が最悪パーになるからな。

一応作戦中に作戦内容を変えたりもできるけど、じつくり立てたプランの場合は大きな混乱を招いたりするので基本的には禁じ手である。陸ではプランEまで作るのが鉄則らしいけど海軍では違うからな。

現在進行中なのに、企画内容をコロコロ変えるお偉いさんとか……想像しただけで暗殺したくなる。

「深海棲艦が、来たゾ」

「なにクレヨンし〇ちゃんのタイトルコールみたいに言ってるんだお前。つーか余裕すぎだろオお前!! 大規模艦隊来てんだぞこっちにツ!？」

「ふーんそうなんだー、僕はもう定時だから、作戦に参加しなくてもいいんだよねっ！」

「シグレチャンデナクチャダメシグレチャンデナクチャダメシグレチャンデナクチャダメシグレチャンシグレチャンシグレチャンッ」

「ごめんごめんって！冗談だから！それ凄く気持ち悪いから！それにリラックスしてないといけないこともできないでしょー！」

みんな平然と冷静を装ってるけど、当然ながら緊張もしている。ジョークを言うことで、みんなの肝を解そうとしたんだろう、俺のストレスゲージと引き換えに。

「ん〜でもさあ、鈴谷達は作戦なんて考えなくてもいいんじゃない？もうこつちに來てるってジョーホーはおつきな鎮守府に渡してるんじゃない？」

「鈴谷の言うとおりだ。でもある程度行動を固めておかないといざつて時に柔軟に動けなくなるからな」

と言うなの、俺はできる男ですアピールだ。新人なのにこんな非常事態を巧みに指揮してるなんて、うわあく今からでもこの有能君を將軍にしたい！って思わせたい気持ちには誰にでもある。その行動力があるかどうかの話なんだが。

軍人としてなんたる心構えかア!?と言われかねないけどさ……正直、軍人になった理由聞かれて、この大海原と日本国民を守る事です！なんてガチで思ってる奴が一人でも居たらスゲーと思うぞ。

とりあえず、定年まで仕事頑張れるようなやつを採用してるからな。

「銚子要港部より通達！敵の艦隊総数は34隻らしいです！横須賀方面……つまり、こちらに向かっているらしいです！」

「ありがとう村雨ちゃん。よしッ、お前ら逃げる準備はいいな！」

「司令官!?!」

「なに馬鹿なこと言ってるんだい君は!?!敵前逃亡だよそれッ!?!昔だったら銃殺刑だよ!?!」

「それ陸軍の話だし……だってあんなバカデカイ艦隊相手に何ができるんだよ？俺たちの戦力は指で数えられるんだぞ？まるで、ソビエト相手にしてる気分だぜ」

「相手にしたことないくせに……」

うるさい、そんなに言うんだったらテメエが変わりに指揮しろ。俺は逃げるぞ。

「頼むから作戦考えて〜！も、もしも、いい作戦を立ててくれたら……す、鈴谷の胸、揉ませてあげるからさ……」

「鈴谷君……俺を誰だと思ってるんだい？その手に何回も何回も何回も何回も騙されてきたこの司令官さんが、そんな安直なハニートラップには引つかかるとでも思っていたのかね？恥を知らない！」

鈴谷、俺はお前の甲板ニースに釣られた事がある。その時の騙された感、今でも昨日の事のように覚えてるぞ。

それに、今の俺様はこの鴨川要港部の司令官様だぞ？ JCは雌の顔を作り、JKは無意識にスカートを上げ、JDは出会って30秒で股を開く、そんな神人間司令官様サマ summerだ。メス豚をはばらせるなんてちよちよいのちよいやで？ おぞましい脅迫をされない限りは動かんぜよ。

「じゃあ作戦立てなかったら、日本中のゲイに宍戸司令官の名前とかお電話番号をポスターで晒して、『僕のお尻を可愛がってくれるケツアナ精〇フロート製造員募集中！』って書いて肉体及び社会的制裁を受けてもらうからっ」

「では君たち、今から言う作戦を頭に入れてくれ」

「はあっ!? 鈴谷の時と比べて切り替え早すぎでしょ!？」

―執務室。

逃げるなんて冗談だったのに、時雨本気にしちゃうんだもん。つーかお前も笑えない冗談言ってただろうがア、何が非番だから参加しねえだ殺すぞ。

「じゃあ鈴谷艦隊と春雨艦隊、頼んだぞ！」

『ウイーっす！』

『はい！いってきますー！』

「聞こえますか蘇我提督？これより鴨川両艦隊は戦闘海域に入りま
す」

『了解だ。期待してるぞ』

横須賀は第三、第四鎮守府を筆頭に大洗や銚子との連携して、他の所でバトってる第一艦隊が来るまでに阻止、或いは撃破するのが目的である。

作戦は俺が考えたものじゃないけど、戦術的な指南ならできる。後は鈴谷たちの武運を祈るしかない。

まだ艦隊は近くにいたので、俺自身で注意事項を説いておく。

「聞こえる艦隊のみんな？ちゃんと迂回して、クロスファイアー陣形

が決まるようにしてな！」

『聞こえてるって！何回同じこと言うのバカなの!?!』

「大事な事なので二百回言いましたアってエヤツだよオ！あと撤退と攻撃を二つの艦隊で交互にするの、ゼエエツタイに！忘れないでね！難しいかもしれないけど、これはとおくつても重要な戦い方だからな!?!」

『何時も練習してたヒットアンドアウェイ戦法ってヤツでしょ？説明するときには僕のほうがうまかったよな？』

『あー確かにシグシグの説明の仕方の方がアタマに入ったかもー！教えるのうまいよね!』

「チツ……さつきからチャチャ入れやがってテメエ……」

日頃からの訓練鍛錬は戦場では結果となる。二つの艦隊を別の方向から使ったヒットアンドアウェイ戦法……俺が艦隊に練習させた戦術の一つだけど、流石に大きな艦隊だと難しいか？

人が相手だったら心理を突く、バケモノ相手だったら戦術で補う。後は気合と、隙あらばこちらの被害が最小限になるように仕向けられればいいだけだ。

要は早く他の要港部が来てくれればいいんだけど、敵艦隊と交戦中？とか言ってるから、ダメ？らしいんだよね。肝心な時に駄目になるとか陰謀を感じざるを得ない。

「あつ、宍戸さん！鈴谷さんの艦隊が敵艦隊を察知したらしいです！」

「え、もう!?!」

「はい！敵は連合艦隊編成の機動部隊が二個艦隊で、合計24隻らしいです！」

村雨ちゃんが教えてくれた通りであれば24隻は固まってるのか？……見つけるの早エえ……それにすぐ見つかって事は、すげー近いってことだ。そして後の一個連合艦隊は、予想だけど大洗方面へ向かったって事でもいいのか？

大洗の通信を受け、その予想が当たっていた事が確定する。

『こちら大洗要港部の結城！こつちにいるのって、そつちに向かった連合艦隊から分立して来ている様子なんだ！予想外の強さに手こ

ずっているゾ!!なんてハードモードだコリャ!?!」

「そうなんだあア!?!そっちは十隻程度なのにこっちは24隻居てるんですよ結城司令官!?!さっさと倒して俺の艦隊と血祭りキリングタイム入りましょうヨオ!?!」

『お、穴戸じやんか!お前のそっちの提督だったんだな!ヤツホオオウ!』

あそこの管轄は結城だったのか……じゃあ大洗要港部は役に立たない。

よし、鈴谷の艦隊は既に艦載機同士のジヤブと言うなの開幕航空攻撃が済んだみたいだし、そろそろ近づいて砲雷撃戦準備辺りか。

海軍大学校で学んだ艦隊同士の主な海戦の流れは、艦隊が敵を察知して、近づいて行きながらドカドカ撃ちまくる。

近づけば近づくほど命中率も上がるし、攻撃手段も増える。仕上げの高火力最終兵器酸素魚雷を撃てる段階まで来ると、ある程度は勝敗が決まっている。なので接近は諸刃の剣であり、危険が伴う。

だから艦船本体にダメージを受けることなく一方的な攻撃を可能とする空母を重宝するのだが、艦載機がない空母は海に浮かぶただの浮遊物なので、艦載機の残りには気をつけたほうがいい。今のうちに整備工作班へ補充の準備を勧めておくか。

「ど、どうしましょう!?!守りが固くて近づけないみたいなんです!」

「焦らない焦らない。まずは俺様が考えた超必殺技、遠距離鶴翼包囲殲滅クロスファイアー陣形でー」

「あ、す、鈴谷さんが小破!陽炎が小破です!」

「な、なにイツ!?!」

「敵は輪形陣で、こちらの集中砲火から空母を防御しているとの事です!」

「クツ……」

なるほど、鈴谷艦隊には6人しかいないのに対して深海棲艦は24隻ですか。だから数合わせるために鎮守府の本隊を待つのがセオリーなんだよな。いや、既に近海付近にいるとは露知らず交戦を許可したのが誤りなのかも知れない。

俺たちが撤退したらこの地域そのものが損害を受ける可能性を常に懸念するべきであり、海軍が定めた通りの行動だが、そのせいで艦隊が危険に見舞われている。

やっぱり俺が最初に提案した『逃げるが勝ち』が最善の作戦だったのかな？

ほら、だから言ったじゃん。会議をする時、最初辺りに出てくる案が一番いいって。

鈴谷と熊野は既に艦載機を多数損失し、小破した艦娘も出してる。弾薬と燃料はまだ全然有り余ってるはずだけど、輪形陣に対して鶴翼の陣と言う現在できる最善を尽くしている今、俺がやれることはただ祈るのみ、か。

フツ……まるで将棋だな。

「た、大変です!!綾波が小破!続いて不知火は中破だそうです!!」

……あくでもこれってそういう事か。これは正に、ヤバイパターンだ。

「撤退」

「えっ?」

「じゃあ全軍撤退イ!!そんなヤバイの相手にしてられつかよオ!?撤退撤退イ!あ、でも真っ直ぐ南に向かって撤退してエ!」

「は、はい!」

村雨ちゃんが艦隊へと命令を入れると、時雨から「じゃあ今までの作戦云々は何だったの!」と返ってきたらしい。

知るカツ。ゲームみたいにもうまく行かなかったんだから、こうするしかないじゃん!!

ただし、逃げるのはこの要港部じゃなく、要港部を通り過ぎて南の海域へ戦略的撤退をさせる。そうする事で、俺たちの本質的な役目である『深海棲艦を陸に近づけない』が実現できる。

それにこちらに逃げてきても、戦闘員の居ない要港部へと敵を誘導するだけなので、海軍が定めたマニュアルには従ってる。

そして現在ガチで助けが必要なので、他の鎮守府や要港部へ連絡して要請、及び正確な現在地を貰う。何で遅れてんだ?と聞いたら東京

付近の敵に手こずっているらしい。

「あつ、春雨の艦隊が合流したようです！側面をうまく取れたので、砲雷撃戦を開始しますとの事です！」

「よし…よくやった春雨ちゃん…これはボーナス案件だぞオ！」

『ありがとうございますっ！』

春雨ちゃんの艦隊を計画的に遅らせながら合流させる事で、より効率的な側面砲撃を行える……が、第一艦隊が既に負傷しているため、結果として思った以上の打撃は与えられずに、仲良く一緒に撤退する事となった。

数自体は減らせたらしいが、艦装の消耗も結構激しい。次の作を練らなければ……ん？今、春雨ちゃんの声が、頭の中に直接……？

「ど、どどどどどどうすれば!!」

「こういう場合は全力で逃げるしかないよ村雨ちゃん！ノット自体はそこまで早くないんでしょ？だったらドンドンドン南下して！」

「み、南の方に何があるんですか!？」

それはね……お、通信が入った。

『こちら横須賀第一鎮守府。宿毛湾泊地及び鴨川要港部への援護を行う』

「こちら鴨川了解！ありがとうございますっ!!」

「し、穴戸さん？ね、姉さんたちは……」

「助かった……」

「え、えっ?」

村雨ちゃんは混乱している様子だけど、横須賀第一鎮守府の艦隊の居場所は、俺たちの海域の南部辺りと言う情報だけ貰っていたので、そこへ向かわせたってこと。

運良くうちの艦隊が壊滅状態になる前に横須賀艦隊に合流できた。これぞ、他力本願……いや悪い意味じゃないから、元々他力本願って仏教用語だから。

でもまあ、これならドサクサに紛れて、俺たちの艦隊だけを出来るだけ安全に逃がすことができる。

「村雨ちゃん、横須賀艦隊と合流したと思うから、横須賀艦隊を支援す

るように言つて。そしてできれば、交戦のドサクサに紛れて逃げてくるように」

「分かりまし……つて、えっ!?に、にげるんですかあ!?」

村雨ちゃんは驚きの積み重ねで、目がすごい大きく見開いている。いや、だつてそうでしょ?俺の目的は部下を名誉の下で死なせる事じゃない。確かに功績を積むのは大事だが、仲間を死なせて得る功績ほど苦痛なものはない。

え、じゃあ横須賀第一鎮守府の人たちがどうなつてもいいのかわつて?いや、別にそういう訳じゃないけど、会つたことないし。

「し、穴戸さんっ!大変です!!」

「ど、どうしたの!?また何かやばいこと!?」

「て、敵艦隊が壊滅しましたあ!!我々の勝利です!!」

「え、も、もう!?!」

『『よっしやあああああ!!』』

今のセリフが漏れていたのか、整備工作班が狂喜乱舞する。だから展開早すぎ。

流石は横須賀第一艦隊、通称『もうこいつらだけでいいんじゃない?』艦隊である。

確か元帥が指揮しているんだよな?やべーそんな人と通信してたのか!しかも宿毛湾泊地とか言つてたからそんな所にまで援軍出すとか、マジ日本海軍のジャンヌ・ダルク……いや、男の人だからサラディンか。

「や、やりましたね穴戸さんっ!!」

「うん!おれうれちい!村雨ちゃんおっぱいハグしてえく!」

「まだ仕事が残ってるんですからっ、ダメですよっ?ふふふっ」

「っーことは、終わったら出来るってこと?今から楽しみ〜!」

「だ、ダメですダメです!もう……っ」

は?自分の発言に責任を取れ。まあ、その可愛い照れ顔に免じて許してあげるか。

俺たちの艦隊も、深海棲艦に遭遇する前に撤退するように仕向け、整備工作班へその旨を知らせる。

ハア……それにしても、横須賀第三、第四鎮守府にも救援要請出してたのに、大洗と同じようにクソ遅いせいでピンチになったじゃんか……本当に何やってんだ？

『こ、こちら第四鎮守府！救援を求ム!!』

『こちら第三鎮守府にも援軍を!』

……は？

俺たちの半分もない深海棲艦の数に圧倒されてるの？まさかエリート艦がいるとか？俺がいたときはもつと強かったはずだぞ。

まあいいや。圧倒的な強さを誇る我らが横須賀第一艦隊様が、また深海棲艦を蹴散らしてくれるんだろ？チートが後ろにいるところも強気で居られるのか……改めて、士気的重要性が理解できた。

「ど、どうしたんですかつ？」

「蘇我提督の第四鎮守府の一行がピンチなんだつてさ。10隻程度だと思ふのにへばってやがんの！ハハハ！」

「えっ、援軍は出さないんですか？」

「そんなの出すわけがない。俺たちの艦隊クソダメージ受けてんじゃん！後は横須賀第一鎮守府の人たちがなんとかしてくれるって」「で、でも……」

「仕事終わりにして、報告書かいて、終わり！余程偉い人に命令されない限り、俺はこのまま艦隊機能不全を装って、今日の仕事を切り上げるね」

『こちら第一鎮守府。すまないが第四鎮守府への援軍要請は鴨川要港部に任せてもいいだろうか？』

「元帥様のお言葉とあらば喜んで!……聞こえるかテメエ等ア!!仕事アまだまだ続くぞオツ!!」

「え、えええ!?!」

「村雨ちゃん、今から言う艦娘は第一艦隊として再編成してそのまま救援へ向かわせて!旗艦は暴力艦である時雨にするから!」

『『ええー!』』

整備工作班と艦娘達から不満の声が聞こえた。

いやさ……元帥様のご命令とあらば、聞かぬわけには行きませぬの

でなア？助けてもらった艦隊ではあるものの、第四第三鎮守府を助ければとびきりイイ功績を残せる事はまず間違いない。

辛ければ即撤退、できるのであれば深海棲艦を蹂躪する。

負傷していない艦娘で編成した艦隊は、傷んだ艤装に目を瞑れば新品同然だあ！それに、すぐに救援に向かわせるなんて、おれつてあたまいいなー！

（※装備の新調、疲労状態などを考慮しない上司は最低です。良い子は絶対に真似をしないでください）

これで俺の出世間違いなし！ドンドンドンドンドン出世して上に行く俺は、正に現代の豊臣秀吉よオ！ハツハツハ！！

……ん？艦隊の無線が直接俺の所に……誰からだろ？

『帰ツタラハリ倒ス、シグレヨリ』

……あ、やばい、逃げなきや。

作戦のあとは

―執務室。

「ふおおふあふいあ、フオフガンヴァツテクレア！フアフアフアフア
フア!!」

「……………」

「えつとつ、要するに昨日のご活躍へのボーナスを贈りたいらしいん
です」

「ムアフアメジャン、アリフアフオウ」

「ごめん穴戸司令官、何言ってるか多分誰も分かってない」

「クツツツツ……テメエが俺の顔に甘栗拳し打ち込まなかつたら口
内が切れる事も無かつたんですけどねエ!?お陰で10箇所ぐらい口
内炎になりそうだよ!?ただでさえなりやすい体質なのにイ!!」

「わ、悪かったから、ごめんごめん！流石にやり過ぎたとは思うけど、
今は普通に喋ってるじゃん！」

昨日、東京湾に接近していた深海棲艦は俺たちの支援の下、確実に
殲滅せしめた。その活躍の裏には、自分の上司である筈の俺に『ハリ
倒ス』の電報を入れてきた時雨、そしてスクランブル往復アタックを
した鈴熊部隊の力もあって、見事に救出、及び勝利を収めた。

そして帰ってきた時の時雨の顔は言わば般若の擬人化であり、有言
実行の下、鈴谷や村雨ちゃん達の前で散々殴られた挙句、俺がエロサ
イトで買ったモノを公開するなど、末代までの辱めを受けた。

部下へ無理難題を押し付けるところなる、と言っている見本だった。
色々頑張ってくれたみんなにはボーナスも弾まなきやいけないのだ
が……生憎、すぐに支給できるほどの権力はない。

精々、俺の自腹で現金を渡すのが限界……なのだが、これは賄賂行
為でありれつきとした犯罪なのでパス。

以上を持ち、日頃のお礼も含めて、行けるときに和菓子セットとか
簡単なプレゼント等を買う事を約束するのと、昨日のお礼を言うため
に今日執務室に馳せ参じさせたのだ。

「以上だ、静聴ありがとう」

「ご厚意ありがたく思います！お兄さん！」

「……………」

「あ、あの、鈴熊さん方？」

「ふんッ！」

顔を背けるのも無理はない……時雨は肉弾正5（・6980）の電子レシートを見せたとき、過去にも同じシリーズを買っている事を鈴熊に暴露し、更にはホームページまで行ってこのゲームの事を隅から隅まで教え込んで、俺はその魔乳女が目的で買ってるんだと間違った解釈で伝えた為、ちよつと怒られているんだ。

「なあ機嫌治してエイ？俺、なんでもするぞ」

「司令官がなんでもすると聞いて」

「やあ、我らのゲイ達じゃないか。次ノックなしで来たら銃殺刑にするぞ」

「ウイース！」

出ていった。

早きこと、島風の如くとは正にこのことである。ああ言ったら出てくのか……今度からそうしよう。

「おっぱい魔神になんでもするとか言われたくないっ」

「だからそう言うなって！って言うか俺、女性はおっぱいより、中身を見る方だからさ」

「す、鈴谷はまだおっぱい出ないもん!!こ、この変態！」

「これは事案ですわね、所属の憲兵に連絡を」

「ラジャー」

「ラジャー、じゃなくてネガティブだろうガア!!時雨まで乗ルナア!つーか鈴谷、お前中身って言って普通おチチの事考えるかよッ!?恥を知れエ!!」

「いや、話の流れからしてそうでしょ!」

「これは事案ですわね、憲兵に連絡を」

「Roger」

なんていい発音なんだ……あ、そういえばこの前二等兵ライアン見

てたんだけ？

しっかし、何を言ってもループとはたまげたなあ……肉弾正の初代は致命的なバグの宝庫だっていうから買ってみて試したのに。あと、歴史の知識も入れるためにな。

え、信○の野望でもやれつて？最新作はバグの宝庫だったし値段がクソ高かったからペケで。

「鈴熊、俺はただ日本の歴史を知るために買っただけなんだ。ゲームで歴史を知る……いい事じゃないか」

「ん？穴戸くんの言ってる歴史つてこれ？」

『はああくん！拙者イクでござる！ヒデヨシの薨が鶴翼の陣形でイクでござるううう！』

『ああああんっ！こ、この武田シンゲンの風林火山でも、貴様の槍術には叶わないのかあ……っ！』

『ぶつてええ!!お家再興とかあ！どうでもいいからあつ！シカノスケのいやらしいお尻に七難八苦してええええっ!!』

「……………」

「うん、これ、違うんだあつ。君たちが見てるこれはね？ゆ・め、なんだよっ？」

いや違うだろ。

村雨ちゃんや春雨ちゃんまでジト目で見てるんだけど……あ、そうか、セーブデータから見てるから、このハーレムエンドまでプレイしたってみんなに分からせちやつたんだな。

そしてこの空気。まるで会社の課長に就任した上司が、当日話している途中にみんなの前でズボンがずり落ちて、履いてたパンツが女性物の熊さんパンツだった時みたいなりアクションと顔だ。

あーあ、俺死んだな。日頃の行いっつーかなんっつーか……あーあ、もう切腹しようかなあ。

「あれ、それって結城くんを買えつてせがまれたやつでしょ？」

「へっ？」

「あ、あなたは……!」

談義中の執務室、閉じられていたドアは開き、突然と声を上げたシヨートヘア美少女……その名を、

「白露さん!」

「そうだよ!それにしても宍戸くんも優しいね〜!お付き合いとは言え、結城くんが勧めたゲームをやらなくちゃいけないだもんね〜うんうん」

「え、そうだったの宍戸っち?」

「あ、ああ!そうそうそうなんだよ!結城の趣味に付き合ってやれるのって、俺だけだしさ……」

「そ、そうでしたの……申し訳ありませんわ」

「かつこ悪いけどカツコイイですよっ!」

「チツ……パソコンのパスワードクラックしてまでやったのに……」

「いやあくあっはっは!時雨は滅棒な」

「ヤメテヤメテ」

突然ながら出てきた白露さんの唐突かつ完璧なアシストのお陰で難を逃れることができた。

白露さんありがとう……この人にはお菓子を買ってあげないと。そつと白露さんに近づいて、

「白露さん、ありがとうございます」

「貸し一つだねっ!ひっひっひっ!」

はははっ……まったく、白露さんには敵わねえわ……はっはっはっはっ!

「じゃなくて何でここにいるんですかア!」

「え、姉さんなんできてんの!?宍戸くんどういう事なの!」

「知らねえから聞いてんだろがア!あ、でもこういう資料って村雨ちゃんがいつも管理してたような……?」

「ご、ごめんなさい、白露姉さんがサプライズにしたいって言って……」

「姉さんに口止めされたの?」

「そうなのよ春雨……」

「ネーサン……って事は、シグシグのお姉さんって事!?わあお！」

「初めましてですわっ」

「はっじめましてー！あたしは白露！この三人のお姉さんだよっ！
よっろしくー！」

なるほど、それなら全部合点がいく。

村雨ちゃんに資料を渡され、その中身を確認する。えーつとなるほどなるほど。

現役の中で海戦を行った回数はかなり多い艦娘であり、無茶な作戦も引き受けようとする所もあるが、それに見合った技術を備えている事もまた事実である。バイオエレクトロニクス部門で最先端の義手と義足を試験者でもあり、

「……なるほど、じゃあ足と手の具合はもう大丈夫なんですね！」

「うん！まだ数回ぐらい東京の病院に帰らなきゃいけないのと、こっちの軍医さんに定期的な報告入れなきゃいけないのぐらいかな？
あとはみんなと同じように前線に出せるから、気兼ねなくねー！」

「「おおおお！」」

時雨姉妹達と一緒に服を着ている白露さんの肌はある程度露出している。故に腕や脚が見える状態のだが、右の手足には皮膚みたくないのがついていて、人間のモノ殆ど区別が付かないほど綺麗になっていた。動きも完璧だ。

鈴熊は首を傾げているけど、白露さんの手足は義手であり、あれだけ動けるなんて凄い。まあ、いきなり前線投入とか俺はそんな鬼畜じゃないから、訓練演習に集中させよう。

さてと、白露さんのプロフィールの下に、あと四人分の紙が見える。あれ？この娘達は明日着任予定なのか？

あ、よく見たら白露さんも同じ日に着任する予定らしい。

「白露さん、着任予定日って明日じゃないですか」

「え、そうなの？あははっ！まあいいじゃんいいじゃん！それに予定日より前に来るなんて当たり前だし！ほら、十分前行動みたいなの？」

「姉さんそれだと一日前行動だよ。あ、でも良かったあ……腕に皮膚が付てるから姉さんじゃないと思ったよ……」

「そうでしょそうでしょ!? 時雨も凄いと思うよねこれ! まあ偽物だったとしても、お姉さんが発するスウィ〜トボデエイ〜の色気で、すぐにお姉ちゃんだって分かっちゃうかつ!」

「うん! 10分と一日の区別もできないお姉ちゃんなんて、世界でたった一人だからね! 昔から算数の授業は、今姉さんがしてるセクシーポーズみたいに壊滅だったもんねっ!」

「みんなそっちの二人のことお願い!」

「……………」

白露さんがコキコキ手を鳴らしながら時雨に近づく行為は、最早姉妹間の恒例行事である。

白露さんの言葉を察した春雨ちゃんと村雨ちゃんは、なにがなんだか分からない鈴熊を壁まで寄せ、俺もテーブルの後ろにある壁まで下がる。

「え、あ、その、ご、ごめんなさー!」

「お姉ちゃんシャープシューターツ!」

「ぎゃあああああああ!! 助けてええええ!!」

おお! 一応スカートだけど、鉄壁が故に見えない! すげー痛そうだなあ!!

フンツ、この俺の肉弾正で公開処刑なんてするからだ。カルマ、インスタントカルマだ。

「た、助けてええええ!!」

「ホラホラ! お姉ちゃんクロスフェイスツ!」

「ガアアアガガアア!! た、助けてええ!!」

「おおつとつとつ、逃さないよオ! お姉ちゃんアンクルロック!」

「イタイイタイイタイとおおおおとおおおおとおおおおとおおおお!!!」

「ははは! 熊野の真似かよオ!」

「どおとおおおうおうおう言う事ですてエ!」

「そういう事だよ」

まさか今の叫び方が似てないとは言わせないぞ。

「今日は調子がいい! だからとことんやっちゃうからね!」

「ま、まだやるの!?や、やめてええええ!!」

――

「はあくさつぱりした!やつぱり姉妹のスキンシップは大事だよねっ!」

「シクシク……僕もうお嫁にいけない……」

「おいおい!肉弾正のヒロイン救出編のバッドエンドみたいになってるぞー!」

「フンツ!!」

「痛い!!なんでお前はそんなに食らっても元気なんだア!」

「じゃないと軍隊なんてやってられないでしょ!」

なに正論抜かしてんだ腹立たしい。

「まあまあ!と、いうわけで、です!駆逐艦白露、着任しました!他の四人を差し置いて、いっちばーん乗りい!」

「よろしくお願いします白露さん」

「よつろしく〜!」

ハア……それにしても、ほぼ身内とは言え、要港部のトップに貸しを作るなんて大したもんだなあ白露さん。

鈴谷と熊野とも相性がいいみたいだし、姉妹もいるし、俺も大歓迎なんだけどさ。

みんなが雑談を交わし始めた頃に、黒電話が鳴った。

「こちら鴨川要港部の穴戸です」

『あの、すみません、今、忙しいですか?』

「ん?はい、大丈夫ですけど?」

『良かったあ……いやあ、とつても私的な事なんですけど、いいですか?』

「はい」

『実は、今僕の友達の家遊びに来てて、いま下にいるんです。三人ぐらいです』

「はい」

『三人とも、実は僕と、その、みんなでベッドを、その……共にするつもり、らしくて』

「はい♂」

『僕は嫌なんですけど、もし逃げたら追いかけて無理やりして、良さを分からせるとか言ってる』

「はい♂」

『ど、どうすればいいと思いますか？助けてくれますか？』

そして俺は、ゆっくりと電話を定位置に戻した。

「ん、どうしたの穴戸くん？」

「いや、お前がお嫁にいけないとか抜かしてた頃、ガチでお婿に行けなくなっちゃう状況を作っちゃった、可哀想な男の子からの、TDNメッセージだ」

「何言ってるの穴戸くん？」

いや、リアルでこんなコールが来たの初めてだからさ。しかも仕事中にだぞ？

電話するだけで料金かかる事もあるんだから、態々海軍なんかに電話すんな。それに誰だよホームページに番号公開したの殺すぞ。

あの可哀想な男の子にできることは、ただ祈るのみだ。十字架をポンポンと書き、お尻への加護を……とか思ってる間にまた電話が鳴った。またかよ、一回切られたら、世間はそんなことで助けてくれないんだって自覚しろ。

「鳴ってるよ穴戸っちっ」

「ああ……はい、もしもし」

『……上司の声を忘れたか？』

「あ、す、すいません蘇我提督！」

『ハツハツハー！いやいや冗談だよ。今日は、先日の作成において君の艦隊によって助けられた事にお礼を言いたくてね。それと、すまなかった……たった数隻に手を拱くとは……』

「新型の強化深海棲艦、フラッグシップが各艦種いるとなれば話は別でしょう。むしろ、艦隊に大した怪我を負わせずに済んだのが何よりの功績です」

『そう言ってくれると助かる。元帥閣下もいい采配だと言っていたよ……ああ、ところで白露くんの事はー』

「あ、既に着任しています」

『おお、それは何よりだ。一日前行動とは正にこの事だな』

この人は10分前と一日の違いが分かる人だ……って、そんなこと思ったらニヤけるだろうがア俺エ！

『白露くんの件なんだが、知つての通り日本が誇るバイオエレクトロニクス部門の最先端であり、まだ試験段階。更なるデータの追求のため、度々研究者達が訪れたり、白露くん自らが出向いたりしなければなら無いことを承知してくれると助かる』

「もちろんです。ええっと、自分がする事は……」

『特にならないが、できれば彼女の体調などには特に注意してほしい。それさえ良ければ後は同じように艦娘として起用しても良いとの方針だ。とは言っても、今朝海軍省から私に向けて送られた司令なので、今後彼女の取り扱いが変化するかも知れないけれどな』

え、なんで俺には送ってこないんですか？とか思ったけど、海軍の極秘事項とかも含まれるかも知れぬから、相当階級の高い人じゃないと渡せないのかな？

白露さんを扱う事が恐ろしくなってきた。

『因みに彼女の腕の事は他言無用で頼む。何と言っても、極秘事項だからね。何かあったらまた連絡を入れるよ』

「了解です、ありがとうございます」

極秘事項か……危うく鈴熊に話す所だった。

身内だけの秘密みたいでいいかも知れない。まあもし知られでもしたら、見たことのない新技術に目を光らせる、整備工作班の班長さんが黙っていないかも知れないしな。

『……ふえ、ふえ、ふえつくしゅん!!』

『ど、どうしたんですか夕張さん!?そ、そんな……ふあ、ふあつくゆーだなんて……ひ、卑猥すぎます!あ、綾波、じ、女性同士はちよつと……』

『言っていないからア!!』

『そのネタ、前に一回ゲイ三人衆さんの前で言ったら、俺の貞操がガチでヤバイ所までイキそうになって……』

『あ、あははっ、あなたも苦労してるのね月魔……』

『ははは！これぐらい、司令官のような真の漢になるためだったら、乗り越えて見せます！……あ、ちよつと失礼』

『携帯？今日はあまり仕事は無いけれど、一応任務中だから程々にしておきなさいね』

『了解です！あ、これ弟からです、なにになに……ん？ダチに ガチでホラれる ヤバイ オレ タスケつどきおええええええ……なんだこのメール？』

『お、男同士の愛の確かめ合いですかあ!?わあああいつ！』

『いや綾波さん、流星にそれは無いと思うんですけど……』

「さてと……今日の執務は終わってるし、明日来るカワイコちゃんのために身だしなみでも整えようかなつと……」

「ああ、なんか陽炎のときは無駄に格好つけようとして失敗したやつね」

「ああ、お前がいなかったらクールハンサム司令官として最高の印象植え付けられたのによお!」

「でもフランクな提督は凄く好評でしたけど……」

「うん……でも分からないじゃん。陽炎たちは違うとは思うけど、普通だったら心の中で『どうせ運とお金とコネでのし上がってチョーシ乗ってるんでしょ?まあでも、お金の匂いが寄ってきたら股開くわ』とか思うのが常識なんだよ」

「カゲローたちに失礼だしそれ!」

「宍戸くんの中の常識歪みすぎ……」

「だから陽炎たちは違うつつつてんだろオ!?少なくともダチがそういう被害にあってんだよオ!」

『失礼します。着任予定の者ですが、入ってもよろしいでしょうか?』

「「えっ!?!」」

……君たちも一日前行動ツスカ？

スワツプ

「ッ！ッッ！ッッ!!……入りたまえ」

「「早ッ!?!」」

引き出しにあるコロンを体にコーティング、村雨ちゃんの後ろにある全身鏡で身だしなみチェック、椅子に座ってテーブルに肘をつけて指を絡めて、大物のポーズ。

「入ってもいいですか？」から「入りたまえ」の返事まで、僅か5秒。これぞ軍隊名物、早動き。一瞬が命取りになる軍隊では必須のスキルである。今みたいな状況においてもそれは変わらない。

明日着任予定の娘達が今来る理由はともかくとして、言わなきゃいけないセリフとさえ言えばカツコイイセリフを組み合わせる台本を構築する。

そして、ようやく顔を見せた4人の艦娘。

「お初にお目にかかります！本日より、この鴨川要港部に配属された、駆逐艦浜風と申します！」

「駆逐艦の磯風だ」

「同じく、駆逐艦浦風じゃっ！」

「おなじくう！駆逐艦谷風です！」

書類を見る限り、俺の前で整列するこの四人は第十七駆逐隊。彼女たちは卒業したてのルーキーらしく、艦娘としての良い点は連携に優れているらしい。

そして入ってきた瞬間の自己紹介は、陽炎たち見たいな統一感のあるものとは異なり、とても个性的でバラバラだ。しかも敬語なしのやつがいるな。

ムサイ男だったら張り倒す所だが、有能な艦娘として、そして戦線に赴き日本の国土を守る現世の大和撫子として、その個性を尊重しようではないか。

え、男女差別？今更なにを……電車の中に女性優遇車両が作られた時からそんなモンこの国にはないんですよ!!

「俺はここの司令官を努めている、宍戸龍城だ。君たちはどうやら兵学校卒業したてらしいね？」

「はいっー」

えーつと……陽炎姉妹のときは、フランクに接するのがイイ感じに好感もてるのか言ってたな……よしッ。

「……実は俺も卒業したてのルーキーなんだ。司令官歴一ヶ月、大作戦指揮回数11回、腕立て伏せ公式記録111回、好きなドラゴン○ールのキャラはチ○。イチイチチチチチ……と、一番が一番似合う漢だ。これからみんなアヨロオチクビイ！」

「……………」

スベった。

「宍戸司令官？」

「どうしたのかな時雨中尉？」

「今の、録画しておいたからっ。分かってるよね？君はこれから一生、僕達の傀儡だねっ！」

「Noooooooooooo!!!」

……危ないあぶない。提督服勢い良く脱いで、乳首を摘みながらのヨロチクビイ！という明らかな軍法会議案件をやらかす所だった。やっぱり普通が一番なんだ。

「俺も実は卒業したてなんだ。だけど、司令官としての全力を君たちと国民のために尽くすつもりだ。これからよろしくな」

「よろしくお願いしますー」

「……………どうしたん？提督さんっ？」

「ああいや、磯風くんがマジマジとこちらを見ているもんだから、何か質問があるのかと思ってね」

浦風と紹介した艦娘が聞いてくる。黒髪ロングヘアの磯風が妙に尖い眼光を向けてくるので……と言うのは本心を隠す為、咄嗟に機転を効かせて放った建前である。

本音は、あぁーこれ多分第二次性徴期に相当エストロゲン分泌したんだなぁーってぐらい、母性とフェロモンの塊であるSUPERB

IG—OPP AIを凝視していたんだ。

この第十七駆逐隊には、男を惑わせる要素が沢山備わっている。見てくれよあの甘そうな果実を。右から、

ボオインッ！ボオイン！ボン！ペた

……だせ？

なんだろうこの不公平さは。だが、不公平であろうがなんだろうが、特にあの浜風とかいうドスケベ黒ストデカパイは確実に同人誌案件だな。

「鋭いな司令、この磯風の視線に気付くとは。私的な質問は控えようとしていたのだが……」

「え？……ま、まあな。司令官の立場を背負ったからには、それ相応の苦労とそれ等乗り越える為の度量も磨いてきたってことさ」

「なるほどお……流石はあの提督育成なんちやらを卒業しただけあるけえねえ……」

「は、ははっ、それほどでもないけれど！ははは！」

『村雨、これ絶対に勘違いされてるパターンだよね？』

『う、うん……でもいいんじゃないかしら？』

『どうせあの憎き脂肪を見てたに違いありませんわッ！』

『あ、あははっ、熊野、目がヤバイってっ』

『……ッ』

『は、春雨っ？持ってたペンが壊れてるよ？』

後ろにいる艦娘達はどうかやら俺に聞こえないとでも思ってるんだろうが、こんな近距離で聞こえないわけねえだろ。

「それで、どんな疑問を持っているのかな磯風くん？」

「実は後ろの……先輩？方はどのような経由でここにいるのか……少し疑問だったので」

「ああ、前の防衛戦で素晴らしい活躍ぶりを見せてくれた武功艦へ、お礼を言おうと思ってね」

「へえ〜そうなんだあ〜！てつきり提督のハーレムかと思ったよお

！」

「「へっ?」」

白露さん以外は度肝を抜かれたような顔をしている。ハーレムか……俺も結構前は、そんなハーレム王に成りたがってたクセに、あわよくば他人のハーレムの崩壊を心の隅で望んでたノマドだったんだよなあ。いや、俺はそんな職権乱用沙汰になるような事はしてないけど。

「俺がそんなジャーニーズ風イケメンに見える?」

「見えんけど……浜風はどう思う? 彼氏にしたい思う?」

「え、わ、私はこの手の話題には……」

ほっほおっ顔真っ赤っかにしてかわうい! 浜風は身体とは対象的に、純粹なんだな。あと浦風、日本が世界に誇れる素晴らしい文化、建前って知ってる?

「ハア……まあ、春雨ちゃんや村雨ちゃんが俺のハーレムに入ってくれば、俺はそれだけで満足なんだけどさ」

「も、もう! またそんなこと言ってっ」

「私なら大歓迎ですよっ! ハア……ハア……!」

「ね、ねえねえ! す、鈴谷はっ?」

「鈴谷と熊野も入ってるよ」

「え、えへへっ、そうなんだ……じゃ、じゃなくて! わ、私は別にどうでもいいんだけどね!」

「何故わたくしも加わっているのか……」

「そして僕は影でハーレムを操る神様—GOD—ってわけだねっ」

「そしてこの白露お姉さんは、司令官くんのハーレム支えてあげる女神サマだね〜!」

「それは助かります、邪神時雨を退治するのにご協力を」

「「ハハハッ!!!」」

おお、本当にハーレムっぽいぞこれ! 第七駆逐隊は、はあ? みたいな顔してるけど、時期に慣れるだろう。

何れは夕張や綾波も俺の超ハーレムに取り入れ、俺の、俺による、俺だけの王国を作る。

そして変わらぬ平穩を愛し続ける為に、俺は今日もこの仕事を続けていく。

ヴィヴァ艦娘、ヴィヴァ海軍ツ！

―横須賀第四鎮守府、執務室。

「などと、近頃の要港部はだいたいこんな感じですよ」

「なるほど、中学生の作文のようだね」

「すいません……しかしそれぐらい分かりやすく纏めなければ、熟年校長の卒業スピーチのように頭に入らないでしょう？」

「ハハハ！確かにな」

「宍戸さん、お茶は」

「大丈夫だよ古鷹」

横須賀第四鎮守府の執務室……今ではあの学生の頃を思い出し、もう既にノスタルジーに浸れる場所となっている。補佐をしてた頃が懐かしい……執務室は特に色々学んだ所だから、愛着がある。

蘇我提督の所に来ているのは防衛戦での作戦後処理を手伝うのと、データではセキュリティ上送れない要港部の情報などを手渡しするためだ。

定期的にしなきゃいけないで、普段は経理科の大尉さんが行ってくれたりするんだが、あの大きな防衛戦の作戦内容の事もあるので、どうせ来るんだったら俺が直接……って訳だ。

少将や古鷹の顔も見なかったし、好都合だ。上司と部下という立場は今も変わらず「順調か？」など質問されるほど、良好な関係を築いている。

「それにしてもハーレムとは、いやはや……」

「あ、違いますよッ!?ただ新任の艦娘が言っただけで……」

「ハッハッハ！構わん構わん、若いのはいい事だ。それに功労者は多少の褒美を受け取っても差し支えないと私は思っているが」

「そうですそうです！古鷹も要港部のご活躍は耳にしましたあ！」

「あ、あはは……」

俺たちがやった防衛戦は、横須賀方面の殆どを動かしたほど大きな防衛戦……と、ニュースで話題となっている。

四国、及び関東全域に及ぶ巨大深海棲艦を打ちのめした海軍！迅速は軍需行動により被害は最小限に！

こう報道されてるけど、実際は俺たちが倒した大艦隊以外は各海域の深海棲艦が偶然多くその日に居合わせただけであり、関東に出た大艦隊との関連性はない……と、上層部は密かな見解を述べているらしい。

ただこう報道した方がかつこよく見えるから、プロパガンダ的これ一択である。普段は海軍マジ税金取りみたいな記事しか書かない奴らでも、今度ばかりは黙り込むだろう。

「関東を襲った深海棲艦の動向について、なにか君なりの見解はあるか？」

「率直な意見としては、やはり計画性には乏しいかと」

「やはり君もそう言うか……」

作戦後の処理に関しては、作戦に不備はなかったか？改善点はあったか？などを各提督が述べて、それ等をアナライズする事で今後の行動に役立てる事ができる。

深海棲艦はまだ謎に包まれた存在なので、どういう行動原理で動いているか？俺たちのように指揮官をおいているか？作戦を練りながら行動しているのか？大きな戦いでそれらの情報を少しでも増やして行くのも、俺たちの役目なんだ。

特に俺は最前線なので、より一層働かなくちゃいけない。だから俺にとつては気苦労が増える以外の何ものでもない。

「後はこの作戦計画内容とその結果と消費資材です」

「よし、後はこの書類を元帥に渡すだけなのだが……穴戸司令、行っては貰えないだろうか？」

「え、自分がですか!？」

元帥……つまりは、第一鎮守府に赴くからって事だ。第三鎮守府とかの他の要港部の書類も一度に手渡ししに行ったりするらしい。その役目は大体將軍クラスに偉い提督達かその補佐官が努めるのだが、

何故か俺におつかいを頼んできた。

え、まさか仲が悪いとか？分かる。嫌いだったら顔も見たくないもんな。

「いやなに、元帥閣下が鴨川の働きをお喜びになられていた様子らしいんだ。君も、一度ぐらい顔を合わせていくといいと思ってるね」

キラーンツと男前ウイंकを放つ少将。あ、これ100%の善意でやってるときの顔だ。古鷹も少し失笑してる。なんてありがた迷惑な話……いや、元帥に会えるってことは顔を覚えてもらえることで、そして俺の出世に繋がるかも知れないわけで……よしッ。

「おお！なんと有り難いお気遣いッ！是非自分にお任せ下さい！」

「ハッハッハ！頑張りたまえ！」

「はい！……ええっと、元帥がおられる第一鎮守府って、どこにあるんですったっけ？」

「あららっ」

昔の漫画かコントみたいなリアクションだな二人共。しかも息ぴったり。

でも行く機会なかったし、そもそも関係のない俺が無闇に入れるような場所じゃないっつーか……なんていうの？敷居が高い系っつーか（※本来は不義理や迷惑を働いて行きにくいという意味です）？

「ではこちらに來なさい、この私が地図で示してあげよう」

「ハッ！よろしく願います！」

「ウム、ではまずはここからこうだな……」

「んっん！」

近くまで寄り添って地図を指された瞬間、少将の上腕三頭筋と俺の三角筋が急接近した。

「どうしたのかな？」

ムキムキ。

「い、いいえ……」

「ほら、次に曲がる場所は……ここだよっ」

「キュンッ!!」

囁きドラマCD系ウイスパーボイス。

「うん、上出来だ……次はここにバツ印を付けてみなさい。ここが、元帥がいる部屋だ……」

「は、はい。」

「ん？バツ印をそんなに重ねてちやだめじゃないかあ……はははっ、これじゃあまるでお尻の穴ー」

「ぱあくぱあくツ!!」

「な、ど、どうしたんだ古鷹!?私はなににも変な事はしていないだろう!?し、穴戸くんもそう思うだろう?」

「は、はい……堪能させて頂きましたあ……」

「何をツ!」

―横須賀第一鎮守府。

「つて言う事がありましたね?!いやあく危うく新しい扉開いちやう所でしたよくははは!あの歳であのムキムキ感は相当ないですよホントツ!」

「そうですか」

「そ、そうなんですよくはははあく!あ、磯波さんも筋肉好きツスか!?俺も案外鍛えてますので、触ってもいいツスよ!」

「……………」

「すんません」

空気が重い。

いやあ元帥に会えるなんて楽しみだなあく。少将からは貴重な体験を頂いてばかりだあ!もちろんソツチの意味じゃない。

横須賀第一鎮守府……規模はデカく、部屋の数も多い。艦娘もいっぱいいる。

流石は横須賀方面軍の総司令官、兼連合艦隊司令長官がおわす本拠地だ。連合艦隊司令長官とは、艦娘と艦船のトップに君臨する人であり、言わば指揮官の最高位……うわ、腹にミキサーかけられたみたいな腹痛が過ってきた。

しかも案内人の娘、メツツツチャ暗い。暗いと言うか、俺に全く興味が無いみたい……確かにジャニーズ系と比べたら俺は平凡フェ

イスだし？元帥と少佐の差を見てみれば？月とすっぽんに付着した潮水みたいな？俺さつきからヤリちんみたいなノリで盛り上げようとしてのし？あ、泣けてきたわ。

「……………」が提督の執務室です、それでは」

「あ、あざっした……………」

…………いや、確かに執務室どこか分からないから案内してつて言ったの俺だけど、そんなに嫌な感じ出さなくてもいいじゃん…………彼女はきつと女の子の日だったんだ。

女の子に近づく時期を間違えると最悪引つ搔かかれる事もあるからな。

さて、ここが海軍のトップがいる執務室のドアか…………大本営の方がやっぱり豪華ではある。そして舞鶴と比べても大きさに大差がないのが驚きだ。

閣下の居る城…………とは聞こえがいいが、実際に来てみると想像とは事離れている事もある。

元帥閣下は何故かあまり外を出歩かないので、会う機会はここしかない。外に出たら暗殺されるみたいなの？いやまさかね。

「ひっひっふーひっひっふー…………よしッ」

腸煮えくり返りそうなほど緊張するけど、それを切り替えて乗り越えられるのがこの俺だ。

いよいよ、元帥閣下とご対面するときだ。

ドアノブに手をかけ、中に入る。

『や、やまとままく！ムフンツムフムフ…………』

『ちよ、ちよつとやめてくださいってばあ！今日はお客さんがお見えにー』

「……………」

バタンツ！！

あつヤバイ、俺ノックしてなかった。

大丈夫だ、落ち着け、もう一回だけ開けよう。人生に何度でもチャンスがあるように、このドアだって何回でも開けられるんだ。

今度はノックしてみよう。

「自分は鴨川要港部からきました穴戸です」

『入りなさい』

「失礼します」

中に入ってみると、そこには提督服の男性と、後ろに二人の長身美女がいた。内装は質素で、例えるものもない、普通の執務室。

「お初にお目にかかります。自分は鴨川要港部司令官の穴戸龍城です」

「この鎮守府の提督を任されている永原だ、以後お見知り置きを」

凜々とた顔立ちに、立場と比較しても若々しい男性。そして、自分を飾る事のない自己紹介。永原元帥閣下……まさに、この日本海軍を任せるべき人物と言っても差し支えないだろう。

さつきチラって見えた、ポニーテールの女の人に「やまとままゝ！」って言いながら抱きついていたのは、TDN—MAYAKASHI—IDA。

そうだよな、こんな威風堂々と構えてる海軍三長官の一人が、5秒前はバブみ天国とかありえないもんな。

「今日は……」

「蘇我提督から聞いてるよ。書類を届けに来てくれたんだよね。ありがとう」

「ハッ、勿体なき御言葉……」

「いや、そんなに身構えなくてもいいのに……鴨川要港部はすごく強いつて聞いているよ。しかもこちらの艦隊に深海棲艦を引っ張ってきてくれたのは手間が省けて助かったよ」

「いいえ。自分の力が及ばず、我らだけでは対象仕切れなかったもので、無礼ながらお力に肖らせて貰った所存」

「それでも横須賀鎮守府に接近してたエリート艦隊を倒した功績は大きい。いい機転だった」

「お褒めに御預かり、恐悦至極に候」

海軍の威厳の塊を目の前にし、言葉も頭もドンドン下がっていく。これは偉い人を見たときに起こる生理現象みたいなもので、大抵の日

本人には備わってるスキルである。

「ボーナスでもあげたいところだけど、みんなも頑張った以上は君たちだけを優遇する事はできないんだ。ごめんね」

「いえいえ！自分等は只々努めを果たしただけです。閣下からの褒めの言葉こそが最大のボーナスです」

「はははっ、そう言ってくれると助かるよ」

「提督、そろそろっ」

「ああそうだったね大和……すまない、近いうちにある大きな会議に向けての打ち合わせを控えていてね」

「いいえ！こちらこそ貴重な時間をお取りし、申し訳ありません！」

「……本当は、こんな面倒くさい会議には出たくないんだけどね」

と、小声を発した元帥閣下は、本当に面倒臭がっている雰囲気を感じさせた。

両脇にいた女性二人も、何処か乗り気ではない感じだったのを覚えている。

鎮守府の雰囲気も全体的に暗かったし、かと言ってなにか険悪さを感じる事もなかった。

多分、俺たちの場所が明る過ぎるからそう見えるのだろう。この時はそういう事にしておいた。

この時は、まさか人生を大きく揺るがす事になるほどドデカイ事件が、これほど身近に起きようとは思ってもいなかった。

ー鴨川要港部。

「つてことがあって、今ここなんだ」

「忙しいね僕達の司令官様は……あ、レディーファーストだからこのデザートは貰ってもいいよねっ？あむっ」

「お、出たぞ時雨が一口とか言って半分以上持っていく系のアレ。太れ」

「んツ？」

元帥に会ってきたという自慢話を陽炎達と時雨にしながら中庭でリラックス。よく中庭でフリーダムな談笑を交わしていた柱島時代を思い出す。あの外国艦連中は元気にやってるかな……物とか壊してないか心配だ。

「つーか俺、結構実務こなしてる方だと思っただけど？肩でも揉んで崇メロや」

「うんわかった！もみもみ……」

「痛、痛タタタ痛い痛い!!!アイアンクロー痛い!!!」

「あ、ごめんねっ、僕って肩と頭の区別がつかないんだあ」

「明らかに一つ出っ張ってる頭部ってエモンがあるダロオ!?そんなことしてたら俺の頭が中年オジサンのバーコードヘアみたいになっちゃうだろうがア!?!」

「……黒潮、アイアンクローを受ける人は皆頭皮は薄くなってしまったのでしょうか?」

「いやいやそんなことあらへんから。時雨さんが通常より数倍強く掴んでるだけやから」

「その歳で禿げるんだっいたらいつその事丸坊主にして若いお坊さんみたいにした方がいいかもね!」

「確かに、禿げてもイケメンオーラを放ち続ける事には変わらないからな」

「「え?」」

みんな、そこは失笑でもいいからガチな反応は控えてくるか?こういうリアクションされるとガチで泣きそうになるからさ。或いはストレートにキモって言うてくれた方がダメージ少なくていいかも。

「……………」

「どうしたんだ時雨?そんなに黄昏て」

「いや、あの作戦以降なんか平和だねって思っただけ」

「ああ、確かに!陽炎も出撃回数減ったと思います!」

深海棲艦の数自体が減ったような気がする。出撃しても一隻も出ずに帰ってきてほぼ遠征みたいになってるし。だから出撃を抑えてなるべく資材を使わないようにする方針で要港部を回しているのだ

が。

「だからと言って平和ボケするなよ？いつ来るか分からないのが深海クソ野郎だからな？」

「穴戸司令官だって、ここでリラックスしてるじゃん」

「まあ、これだけ静かな海なんだから、静かな内に楽しみたいだろ？」

みんな、潮風の靡く母なる海を向く。

戦争のない平和な海。昔ならばあり得なかっただろう、この大海原が静かに波音を立てる事に感謝するなんて。

ありふれた平穏な日常の中で、自分が身を置く平和に感謝する事のできる人間は少ない。だから深海棲艦が出てきたとき、人は初めて平和の上に成り立つ生活と言うものが理解できただろう。

だが気付いた時、もうそこにはない。平和ボケしていた世界には丁度いい薬になったと、みんな心の何処かで理解してると思う。

だからこそ、全力でその平和を保とうと、そして全身全霊をかけて取り戻そうとするのが、俺たち海軍の役目であり……同時に、一致団結して戦うのが世界中の人間の役目でもある。

まあ、それでも色々な国で仲間割れが発生したり、クーデターが起こったり、紛争戦争が起こったりするけどな。俺たちの陸軍と海軍問題も、紛争に比べたら可愛いもんだけどその内に入るのかも知れない。

この平穏が、いつまでも続きますように。

……って、こんな事言ってる時って大抵思惑通りに行かないって思うの、俺だけ？

『た、大変です大変です大変ですーッ!!!』

ほらな？

古鷹が駆け寄ってきたときは確か比叡のカレーで腹壊したんだっけ？柱島の時はザラさんから泊地防衛戦のスタートダッシュだったな。

懐かしい……俺はこういうクソみたいなサプライズを何回も経験してるんだ。そう簡単には驚かないぞ。

「落ち着いてよ村雨、せつかく黄昏れてたのに」

「そ、それが！こ、これを見てください!!」

手持ちスマホでニュースサイトのトップページを見せてくれる村雨ちゃん。

横の小さな記事には政治家の不祥事や、通販サイトの新しい機能等が載っている一方、海外ニュースではテロやドクターペッパーを飲み続けて百歳以上生きた女性が『飲むなど忠告した医者はみんな死んだ』というとんでもないパワーワードを生み出した事まで色々な情報が世間を賑わせていた。

相変わらず日本のニュースはつまんねえもんばつかだなくってツツコミはさておきー俺を含め、陽炎達や時雨の目を奪った一際大きな記事に書かれてあった文字列を、最初理解する事ができなかつた。

「首相と大臣と……」

「元帥が、消えた……？」

官僚襲撃事件

『総理を含めた国務大臣、及び海軍元帥が先日の攻撃により行方不明となつている事についてなのですが、本当なのでしょうかね!?』

『えーまだ調査中ですので、えー』

『何故あの旅館に一同が集まっていたのでしょうか!?世間では先月の党のスキャンダルに付いての密会だったと憶測されていますがどうなのでしょうかね!?』

『えーその件については、えー現時点では、えー調査中ですので、えー申し上げますできません』

『一部では深海棲艦ではなく軍部からのクーデターではないかという憶測も広まっていますが本当でしょうか!?』

『えーその件につきましても、えーまだ調査中ですので、えー』

『海軍はこの状況で正常に動けるのでしょうか!?』

『えーはい、えーその件につきましても、えー軍令部総長からの、えー会見があるので、えーその時に、えー詳細を、えー……』

― 鴨川要港部、執務室。

この人凄く動揺しているな。こういう人がよく使う『えー』をカウントしながら同じニュースを何回も見ている気がする。今のだけで16回だぞ? 輪廻の如く同じ出来事を繰り返す理由、それは番組が同じ事件を何回も報道しているからだ。そしてそれだけ大きな事件が起ここつたって事だ。

事件は、変わらぬ日常の中で突然起きた。大抵事件てのは唐突なものだろ、ってツツコミはさておき……事件がこれほど大きなスケールで起こつたのは、深海棲艦登場以来だろうか?

事は静かな夜、早朝に移り変わる間に起こつた。

総理大臣を初めとする、副総理、陸軍大臣、海軍大臣、防衛大臣、総務大臣、外務大臣……その他、次官達や政治家、終いには大企業の社長が集まる場所で、深海棲艦の航空機の群による襲撃を受ける。

密会をしていたのかどうか分からないが、予定から外れた名もない

旅館に集まっていたらしい。しかも海岸からかけ離れているのにも関わらず、かなりの飛行距離で飛んできて、爆撃を受けた。その間、襲撃で命を落としたのを確認されているのは今のところ陸海大臣達と、外務大臣だけらしい。

民間人の被害は今のところ家が数軒壊れた程度で、東京は厳戒態勢を取っている。民間人を襲わない深海棲艦様に敬意を払いそうになる……人間より礼儀が成つてるとかこれもう笑えてくるぜ。

そして、なぜかあの元帥閣下もない。彼らの死体は見つかっていない。まるで消えたように……神隠しに遭ったかのように、綺麗サツパリと。

ここまでは報道されている通りの出来事で、4W1Hが成り立っていない事件に海軍省や軍令部も混乱している。

軍部からは正確な詳細こそ得られなかったものの、何故突然姿を消したのか、他の事件との関連性はあるのか……今までとは違い、何がなんだか分からない状況に、俺は立たされている。

この状況において、各要塞に配置された提督ができる「最善」は一つしかない。

それは、通常通りの執務である。

多分、他の提督もみんなやっている事だとは思うけど、突然のサブライズに動じず、司令官としてただ平常心を保ちながらいつも通りの執務仕事をやる事が、今の俺たちにできる最良の行動である。

この大事件は鴨川要港部の連中にも衝撃を与えており、俺は彼らの高ぶった興奮混乱を抑える事に専念する事にした。同期達が指揮する九州ら辺ではあまり衝撃を受けることはなかったらしいが、それでもドデカイニュースではある。

その同期が「俺たちは多分問題ないんだからそっちも問題はないだろ？」とか言ってきたのですかさず、「田舎に居るやつにはこの文明的な衝撃が伝わらないんだろうなア!？」と差別的な発言をしてしまった。

「ごめんね、東京バナナ10箱ぐらい送るから許して」と後でライン送ったら「うんっ、許すっ(はあとっ、はあとっ、おつきいはあとっ)」

と帰ってきて寒気がしたのは記憶に新しい。ガテン系がこれ書いてる所を想像すると更にキモい。

因みに、横須賀方面の前線基地だからって俺へ責任があるわけじゃない……事を信じたい。

警報もないし、艦娘たちには夜間警備を配置してたし、その記録もある。それは横須賀鎮守府も同じ事だろう……いや、もしかして警戒してなかったから深海棲艦が東京湾に侵入したとか？

ああ、だから逃げたのか元帥さん。と

、冗談は置いておこう。あの最強の元帥さんに限ってそんなこと……まあ、リアルタイムで進んでる調査結果を待たない限りはどうにもならないんだけど。

一組織の大将とは、どんな状況でもドツシリと構えて、待つてるもんだ。

そしてこれまた同期の人物に、仕事をすると同時に電話を首に挟みながら、意識の高い話題を振る。

「……執務室って、エロいツスよね？」

『と、突然なんだ？』

「いえその……この机の下って、人がスツポリ入れるぐらい大きくて、隠れる場所としては最適なんですよ。まずそれだけで無限のシチュを生み出します。次点として、人が来るかどうか、人が居るのに、仕事場なのに……と、背徳感を催す環境が整ってるんです。しかも、秘書艦と二人きりになっている時間が非常に多い……これはもうセツ」

『穴戸少佐。気は確かか？今の状況を見て混乱するのも分かるが、気をしっかり持て。一日程度ならば休暇を取る手助けをしてもいいんだぞ？』

「結構です中佐！休みつてのはゴールなんですよ。長い道を歩きに歩いて時には走って……そしてようやく辿り着くのが、休みです。そのゴールを動かすのは妥協でも措置でもない、ただの負けです」

『よく分からん……』

達成感の問題だと、同期の斎藤中佐に付け加えておく。

彼は現在白浜要港部で司令官として指揮を振るっている。大阪警備府の後方支援艦隊としての機能を備えている上、東と西日本の行き来が容易な場所でもある。

「それよりイイ加減にしてくださいよオ陸軍!?これ多分陸軍が仕掛けたんでしょ!?そうに違いはない!何回同じようなクーデターを起こせば気が済むんですかア!?!」

『いや海軍にも五・一五事件という暗いクーデターの歴史があるではないか』

「ありやいいんツスよオ!現に反逆罪の割にはほぼお咎めなし見たいな物だったじゃないツスかア!」

『確かにそう言われてみると……って、いやいや駄目だろう。陸軍差別は良くない。そう言ったのは貴様ではないか』

差別だと?差別があるからこそ人は成長するツ!完全に差別を無くした世の中に待っているのは、衰退だア!

鈴谷達が見てた戦争映画で、過激派アナキストに対する名言だ。

『ハア……しかしマズいことになったな。陸軍海軍の大臣だけにはあきたらず、防衛大臣や総務、その次官等までもが行方不明だと?ふざけた状況だ、政治はどうなるんだ?』

「臨時の総理とかツスカね?」

『まあ何にせよ我々が何を言おうがしようが、労多くして功少し、だ』
「そうツスね。俺は東京に居ないので、こっちに火の粉が掛からなければどうでもいいんですけどね」

『何だ?案外冷静ではないか。下劣すぎる挨拶のせいで一瞬本気で心配したぞ……』

「いやね?部下の中に俺をホモセツ〇スと言う名の人生のグランドキャニオンへと導こうとしている啓蒙主義者が居ましてね?クーデターより俺のケツの方が大臣より大事なんですよ。しかも一般人まで狙ってきたりするんですよ?まったくゾンビ映画にいるみたいですよハハハッ」

あと、毎日豆〇ばみたいに教えてくれるゲイ用語のせいで、ドンドンソツチの世界に詳しくなってる俺がいる。イケメンって、本来は男

受けするオトコって意味だゾ、とかどうでもいい知識ばかり。

『そ、そうだったのか……ああ、今行く！悪い穴戸少佐、また連絡させてもらうッ』

「はい、ではまた……ふう」

電話を置いて、紙の上を走らせたペンも休ませて一息つく。

「はい、どうぞ」

「ありがとうね村雨ちゃん」

何時も笑顔で、行ったことはないけどまるでエデンにいるみたいな気持ちにさせてくれる村雨ちゃん。豊満、そして俺の気持ちも放漫にする、あの忌まわしくも揉みしだきたいオツパイは正に母性の塊。

だが、そんな彼女も今日は元気がない。というより、落ち着きがないというかなんというか……まさか、今日は女の子の、

「あ、あの……だ、大丈夫、ですよねっ……？く、クーデター……とか……」

「ないないそんなの。それに時期に戻ってくるでしょ大臣達なんて。戻ってこなかったとしても変えがいるし……それに、どうせ先月の横領スキャンダルで炎上してるから、これを機に3日間ぐらい逃げてるんでしょ？俺もやった事あるよ、晩御飯のおかず全部つまみ食いしてさ」

「そ、そういう話じゃないと思うんですけど……」

「クーデターの可能性とか言ってるのはネタに困ってるマスコミが膨張してるだけで、本当はまだ何の確信もないから」

「で、でも……」

「……まあもしもの事があつたら、俺がみんなを守るからさ……危険な目には遭わせないよ」

「し、穴戸さん……っ」

照れて頬を染めながらもはにかみを見せる村雨ちゃん。お茶を乗せてたプレートで口元を隠す仕草、正に女子力の塊……そして俺カツケエエエ!!女を守護れる漢、それが俺。

こりや惚れるのも時間の問題だな。

「司令官いる？作戦報告書持ってきたよ」

「おう時雨、今日もご苦労さん。あ、これ中身がパチパチの粉菓子になってる餡なんだけど、どう？」

「わぁーい」

「つて、なんで二人共そんなに落ち着いてるんですかぁ！あんなに凄いことが起こってるのにい！」

「いや、僕達が焦っても仕方がないでしょ？僕達がやらなきやいけない事が増えてるわけでもないんだし」

「そ、それはそうだけど……っ」

「ハハハ、いやぁーそれにしても物騒な世の中だなあ！横須賀鎮守府の皆さんは深海棲艦の侵入を許して一体何をしていたんでしょうね？」

「僕的には深海棲艦の方が百倍物騒なんだけど？」

そりやそうだろ。

人間が深海棲艦より危ないとか……いや、解釈の仕方を変えればあの意味そうなんだろうけど。

「最新のニュースでやってたよ？臨時の総理が今いないんだつて」

「どういうことなの姉さん？」

「なんでも、予め指定してた代理になる人たちが事件で消えてるからナイカクホウジョウ？できないんだつて」

内閣を作る時とかに予め5人ぐらい臨時総理する人を選ぶんだけど、要はその五人が事件に巻き込まれた、つて事らしい。残った国務達で協議と国会も開いてないし、国会を開くとウンコみたいな話し合いをするだけで数十億もの税金が吹っ飛ばし、散々だぜ。

なんで国のリーダーをすぐに用意できないのかを子供がわかるように説明すると、日本国憲法っていうのが蜂の巣みたいに穴だらけだからだよつて言えば納得はしないけど大体この世の真理が理解してもらえないはずだろう。

だから俺たちちみたいな下っ端が苦労する羽目になるんだ。

でも俺たちは軍人。政治の事は税金で温泉旅行に向かうお茶目さんに、そして官僚共の行方は警察さんが全力で探してくれるだろ。

海軍が直面する問題と言えば、横須賀第一鎮守府の元帥の不在だ。

それでも補佐官、或いは大本営、または第二鎮守府の提督が代理をする事になるから焦る必要はない。海軍大臣とかも代理が……いや、いなくても正常に機能してるし別にいいだろ。

指揮や作戦は今までどおりやっていいと既に軍令部から通知が来てるので、俺はこういう混沌とした状況でこそ信用されるカス共のフェイクニュースによつて人心が掻き乱される方が心配だ。

「ねえねえ穴戸くん」

「どした？」

「陸軍と海軍の大臣がいるのはわかるけど、なんで防衛大臣がいるの？陸海だけで良くない？」

「俺にもよく分からん」

「は？ 大学卒業したんでしょ？ 三歳児でも分かるように説明してよ」

三歳児でも理解できるんだつたら苦労しないんだよなあ？ しかもこの理論で行くと、一心不乱な愛国心を持つガキが政治やっても差し支えないんだよなあ？ どつかの頭のいい愛国者探してこいよ。日本にはほぼ存在しないけど。

「んくまあアメリカ副大統領みたいなもんだよ」

「は？ 三歳児でも分かるように説明してって言わなかった？」

「あ、そうだったねしぐれちゃんツ!! つまりねエツ!! いらぬのオツ!! 分かったかア時雨(3)ゴラア!!」

陸海を纏めるための職で、本来は軍隊のトップを統合したアメリカ合衆国防長官相当の存在であり、その後陸海大臣は廃止される……予定だったが、両軍から猛反対されて廃止は実現はしなかった。

陸海空のトップが居なくなるわけじゃなかったけど、内閣から外されるか留めるかの選択だったから仕方がないかな？

俺が理解している中では閑職だから早めに廃止するか、さつさと全部統合するかしたほうがいいと思うのは俺だけじゃないはず。上に行けば行くほどフットワークが遅くなる日本では仕方がない事なんだけだ。

この大臣達は陸海空軍のトップ扱いなのが腹立つ。陸海軍大臣は

ともかく、防衛大臣なんて殆どが軍隊出身者じゃないクセに。これを『シビリアンコントロール』約してシビコンという。

「へえ〜そうだったんだー」

「お、これだけ簡単に説明しても頭に入っていないって顔してるぞオ〜」
「うん！今はブドウ糖が無くなってるって頭が回らないんだあ！だから今日も深海棲艦を倒しまくった功労者に、日頃のお礼として提督権限でデザート大盛り持ってきてくれても、バチは当たらないと思うんだけどなあ〜……チラチラっ」

「は？・テメエさつき食い物つまんでただろ？もう栄養がなくなったのか、或いはそもそも時雨に知識を入れる脳が無いのか……」
「できる女の燃料はそれだけ高いってコトだ……よオツ！」

持ち前の反射神経で、間一髪飛び込んだ顔面ストレートを避ける。躲す必要があったのかどうか疑問が残る程の距離だったにも関わらず、顔面に疾風を帯びた。

「殺す気か!？」

「当然だよ。女の子を侮辱する奴は大抵これぐらいの罰を受ける事になるからねッ」

「つまり女の子を侮辱すると死ぬってことなのか……」

「穴戸さんっ、そろそろ……」

「あ、ごめんごめんもう食事の時間だったね。今日は金曜だからカレーだったっけ?」

「そうだね。カレーは好きだけど、僕はデザートの方が好きかな?カレーって脂肪分多そうだし」

コイツ言ってる事が矛盾してるんだけど。村雨ちゃんも「ふふっ」と天使の顔を浮かばせている。

―食堂。

確かに食事の量は基本多くて高カロリーって点では合ってるけど、栄養を考えてるこちらとは違って、その辺で買うデザートは健康に悪いものばかりだ。

海軍みたいに体を動かす仕事場では、供給されるエネルギー以上の

消費を求められる事がある。だから体が休めずダルい、体調が悪い、もつと元気を分けてくれエエエ……！ってなった時、ご飯だけでは助けてくれない時がある。

そういう時は（今持つてないけど）これ！エナジードリンクだあ！まるでエンジンにハイドロポンプを食らったかと思うぐらい元気が出るぞ！

兵学校時代、普通に買いに行けないので友人（闇市場）を使ってドーピングまがいのな事をした経歴がある。

兵学校か……懐かしいな。大昔の話だけど、卒業がてら嫌いな教官や教師を張り倒す風習に従ってやっても良いものかと思ったけど、案の定止められたのは言うまでもない。

だって教官さん食事の作法にも煩いんぞ？俺達は将来政治家になる訳でもあるまいし。

「ねえねえ提督提督！どうなってんのこれ!？」

「はしたないぞ鈴谷。女性はもつとお淑やかさを磨くべきだ」

「珍しく意見が合いますわねっ。レディーは優雅に、ですわ」

「は？熊野はともかく提督に言われたくないんだけど。いつも鈴谷のオツパイにエツちな目を向けてきてセクハラで訴えたいってカンジ？」

「どおおおおおおおうおうおう言うことでして!?!女性の価値は胸で決まらないのではなかったんですの!?!」

「はいお兄さんっ、あくんっ」

「うん！あくん。うん、おいちー!」

「キモッ」

口にカレーを運びながら昔を懐かしんでた横で唐突な「どうなってるの!?!」宣言。多分あの襲撃事件の事だろうけど、隣に座る春雨ちゃんはその事を気にせず俺にカレーを運んでくれる。

鈴谷、俺は寛容な姿勢で接しているけど、もし俺がああ兵学校の教官だったら、食事中に立ったお前を厳罰処分にする所だぞ。

官僚襲撃事件は話題にはなっているものの、マイペースな要港部は表面上変わらない景色を見せてくれる。

辺りを見渡せば、ワサビ大盛りロシアンルーレットに興じる第十七駆逐隊と陽炎三姉妹とか、時雨達はと夕張率いる整備工作班が昔を思い出しながら談笑してる所とか、綾波ちゃんと例の三人が俺の隣で男娼の実態について……って、おかしいだろそれ。

「ああダメダメダメ（話してる内容が常軌）イキスギイ！」

「え、教養つすよ教養？」

「はいっ！いっぱい教えてもらっちゃってますっ！」

「「ええ……」」

満面スマイルと状況が状況だったら若干エロスを感じる言い回しにも関わらず、汚染された腐の意思が、ドン引きの二文字を掻き立てる。

鈴熊と春雨ちゃんも、俺が隠し持ってた陵辱物のThin Book薄本を見つけた時みたいにドン引き。

そして綾波ちゃんの隣にいる陽炎も大当たりのワサビを喰らいながらドン引き。

更にはその隣で不知火が「それ私のスパッツ!?」と、とんでもない事実を漏らしてドン引き。

まるでドミノ倒し、あるいはピタゴラスイッチのように連鎖している謎の現象は、美しい人生の中で一度は起こる奇跡と言っていっただろ。

後に陽炎は、妹のパンツを盗んで履く変態ではなく、単に訓練で汚してしまったから密かにお借りしてただけだと言う結論に至った。訓練中は大抵汚れるし、余分に支給されているはずだけど、足りなくなるほど汚していたのか……いや、考えないようにならう。

このぷよ〇よみたくないリズムで起こる連鎖は見てたらきりが無いので目を背けて、再びカレーを召し上がる事にする。

「あつ、はい司令官！あくん」

「あ、いや流石にもう大丈夫だよ。ありがとうね春雨ちゃん」

「わ、わかりました……しゅんっ」

今度は春雨ちゃんの無垢なおててを使わずに、自らのゴツい手で食べる。これ以上やると春雨ちゃんが穢れるような気がしてならない

し、俺も墮落する司令官の典型みたいにはなりたくない。

芳醇な香りを漂わせるガラムマサラとクーミンシードが鼻腔を通る……その旨さを再度確かめるべく口に運ぼうとした途端、きまぐれメルシイという電話の着メロにしてはハイテンポすぎる音楽が鳴り響く。

ただし小音量にしていた為、ギャーギャーウルセエ鴨川要港部の愉快な仲間達の耳には届いていない。

一応注意しておこう、電話に出るのは例え軍隊じゃなくても完全なるマナー違反です。お茶の間を囲う良い子のみんなに、このとんでもない無礼さを認知して周りたい。

俺は出るけど。

「はいもしもし」

『あ、シシード？私わたし！』

「そのイントネーションはオイゲンさん！久しぶりだね！元気してた？」

『うん！そっちも変わってないみたいでよかったあ〜！』

席を外しながらこっそりと食堂を抜ける。夕暮れの元、外の空気を吸いながら中にいる連中を確認する。よしッ、食堂抜け出したのバレてないな。

今は何処にいるか分からないけど、声を聞く限りでは元気でやってるみたいなので一旦保留しておく。

「今日はどのようなご用件で？」

『あ、そうだった！プリミアミニスターさん達もそうなんだけど、グロースアドミラルさんがユクエフメイ？になってるって聞いて、そっちは大丈夫かな〜って……』

「その為にわざわざ……ありがとうねオイゲンさん。何がなんだか分からない奇怪現象だし、たしかにこっちの要港部でも大きな話題にはなってるけど、直接仕事に影響が出てるわけじゃないし。そっちもあんまり気にしなくてもいいと思うよ」

『そうなんだあ……私の所でも結構話題になってるから凄く心配しちゃった。でも大した事がなくて良かった！』

「本当にそれだけのために連絡くれたの？」

『事件の事でシシードなら何か知ってるかなーって思ったんだけど……』

「そういう事か。いや、俺はなにも聞かされてないよ」

『だよね！急にごめんね電話かけてっ、じゃあ私は仕事が残ってるから、ビスバクルっ！』

「チユースー！」

辛うじて覚えていたドイツ語を絞り出して通話を終えた。彼女も事件を気にしていた様子、

ピロロロッ！

「うおーあ、同時に電話掛かってきてたのか……はい、もしもし」

『あつ、繋がったかも？秋津洲かも！』

「久しぶりですね秋津洲さん！調子はどうですか？」

『かなりいいかも！と言いたところだけど、こっちでは結構な騒動になってるかも……穴戸少佐の所はどうかも？』

「え、うちらはいつも通りですけど」

『そうかも……こっちは襲撃事件の質問について問い詰められて要港部がふんぞり返ってるかも！秋津洲はなにも知らないかも！』

「そうですよね……」

みんな心配してるんだな……まさか楽観的に考えてるのって俺だけ？

それはともかく、退屈な鎮守府とかだったら例え芸能人の別れ話程どうでもいいニュースでも、それだけで丸一日ぐらい話題に尽きないだろうな。それがこれほど大きなものとなると、秋津洲さんは暫く騒がしきに見舞われるだろうな。

『あ、いまいきまちゆよー……ごめんかも少佐！またあとでかも！』

……ん？ちよつと待って、何だ今の返事は？明らかに軍人に対する返事じゃないぞ？

ま、まさか子供!?や、やべえ気付かなかったッ……出産祝いとか今からでも間に合、

ピロロロッ！

「え、またア!?……はい、もしもし」

『よお穴戸!元氣元氣?俺ツチの結城提督様の要港部は大変な事になつててさ?助けてくれよオ〜!』

次々とかかってくる電話に手を追われて食堂に戻る時間もないですけど。俺

まだカレー食つてた途中なんだよね。

これは食事中に立った罰だ。子供でも分かるインスタントカルマツて奴だな。

コイツの話長くなりそう……ええつと、中国系の妙に高い声を出してつと。

「エエ、ア、コチラ中華人民デリバリヘルアル。ゴチュモンドウゾ、いい女のコ揃テルアル」

『え、俺ツチ番号間違つたのか?』

「エエ、ゴチュモン」

『あくじゃあチャーシュー麺一つ!大洗要港部まで!お代は鴨川要港部宛に付けといて!』

「ゴチュモンは50代ブス専、アブラミン系熟女アルネ。一時間デ到着スルアル」

『あ、違うウツ!!待つてツ!!Noooooooo!!!キャンセル!!キャンセルして!!いやできれば中○しオツケイ系今井○奈似の女のコにチエー』

黙れ。

あと、せめて現実にいる女のコにしろ。二次元を対象に似とか言われても本業の人が困るだろ。

ったく、なんで俺ばつかに連絡してくるんだよコイツ等?静かに考える暇も、

ピロロツツ。

「はいイもしもしイ!?何なんだよさつきからドンドコドンドコ電話かけてきヤがつてよオ!」

『す、すまない。やはり要港部の電話を使ったほうが良かったか……』

「あ、し、少将!?す、すいませんツ!!少将とは露知らず……」

『ああいやいいんだ、少しばかり個人的な用事なのでな。』

「と、言いますと……?」

『一度兵学校の方に出向いてはくれないか?』

「……え」

……なんで?

密談は学校の屋上にて

―海軍兵学校。

レンガ色、黒、そして白のコントラストという、ドット絵のポケモン一体に使われる色の数より少ない配色で覆われる、東京の『海軍兵学校』。

一見すると出撃所のないクソでかい鎮守府のようなスタイルだ。何を隠そう、これは海軍大学校よりも大きく、ここだけで最早一つの国って思えるぐらい何でも揃ってる……娯楽以外。

俺の遠い後輩に当たる学生達や教官、更には艦娘と思わしき女性たちが歩き回っており、窓の中には教育を受けているムサ苦しい男達の姿があった。あれは整備工作班で習った建築の授業かな？

俺を通り過ぎ際に見る人たちが多い……提督服はそんなに目立つものなのか？俺が学生の時は校長とか、或いは訪問してきた現役提督しか着てなかったけど……あ、じゃあ目立つわこれ。

このいつ見ても美しいフォルムと偉大さを感じさせてくれる建物……何を隠そう、俺が通っていた兵学校である。その証拠に、あそこの芝生には特殊な構造で作られている穴がある。

コツコツと短い時間と巧みなスニーキングスキルを駆使し、プリペイドカード、そして持ち込み禁止のスマホ、卒業前にはパソコンなどを用意し、DOMサイトに行つて3Dのエロを検索、購入、そして『実施』した記憶はまだ新鮮に残ってる。

同期は運が悪かったらオバタリアンが写った雑誌を貰うことになる一方、俺はネットと言う技術を使う事が出来た。その背徳感から、実施が捗る捗る、フフフツ。

「ねえねえ穴戸っち、なんでシバフ搔いてるの？」

「いやさ、俺つてここのOBなんだよ。ここにタイムカプセルを埋めといたはずなんだけど……ああ、やっぱり埋められてるわ」

「え、取っちゃったの？ヒドーイ！残してくれても良かったのにつ」

思い出と言うなのタイムカプセルは、既に取り出したからな。

「じゃあさじやあさ！ナニ入れてたの？鈴谷知りたいつ！」

「え？あくんとく……未来の俺へのメッセージを書いたんだ。俺は前を向いて生きる漢だけど、前を見詰め過ぎて昔を忘れないようにする為に……な」

「そうなんだ……あれ？でもそれってただ日記に書くだけでも良くない？わざわざここに隠すヒツヨウセイ？はないと思うんだけど」

「い、いいんだよオ！思い出が日本中に転がってるとかカツコイイだろうがア！」

「あ、あははっ、そうだね」

はい見事なまでの失笑。

これだからロマンを知らないヤツはア……あれ？もう穴が塞がれてると思つたら、その裏に何か埋められてる……なんだろ？タイムカプセルはでつち上げなんだけど。

「ん？なにこれ？まさかタイムカプセル!？」

「いや、明らかに俺のじゃないんだけど……」

「なーんだ」

と言いつつ肩に頭を乗せて覗き込んでくる鈴谷、そしてのしかかって来るオツパイ。

平常心を保ちつつ、配色が明らかに違う物を引っ張り出して見ると、中からは折りたたまれた紙が出てきた。

丁寧に入れたのか、土塗れになっているもののグチャグチャにはなっておらず、辛うじて開けて読むことができる。

ええつと、どれどれ。

高城亮太、統率67、武勇56、知略78、政治87。

近衛竜也、統率87、武勇89、知略40、政治54。

御手洗健二、統率65、武勇27、知略5、政治8。

田中晃司（俺）、統率88、武勇79、知略83、政治84。

「……穴戸っち、なにこれ？」

「っ、まあ、なんていうの？その……うん……」

「ねえねえなにこれ穴戸っち！何かの暗号!？」

「ええつとね、あの、その……うん、ゲームの暗号、みたいなの？」
「へえ〜」

……とりあえず、これを書いた晃司とやらは健二くんから殴られるべきだ。あと自分に対するステータスに『謙遜』って言葉を感じないのが腹立つ。

罰として、埋め直さずに包めてその辺にポイしておこう。

「そんな事より早く行こーよ！ 鈴谷さっさと面倒くさいコト終わらせて帰りたい〜！」

「分かった分かった！ 分かったからア！ 腕にしがみつくなア！」

「こ、これぐらいいいでしょ！ そ、その……な、ナンパとかされるの、コワイし……」

俺はそんな事より提督が艦娘と不純異性交遊しているって思われる方がコワイんだけど。あ、でも学生じゃないからいいのか。

あまり乗り気じゃなかった鈴谷を兵学校に連れてきた理由は、日本が誇る最新鋭の攻撃型軽空母である鈴谷に、現在活動中の艦娘として講話……と言うあの検体模倣型役として、学生達に見せる為だ。

実際にどんな風に艦装を付けているか、どうやって戦うか、航空巡洋艦の艦装と比べて扱いやすさや使用者からの要望、アドバイスなどをクラス毎に話さなきゃいけない。その間に研究者達からの定期検診も受けるなど、鈴谷にとっては面倒くさい一日だろう。

だけど我慢してほしい。上層部が鈴谷の戦歴が攻撃型軽空母の中で日本一凄いつて言うからさ、まあ断れないよね。因みに二番目は熊野である。それ以降のランキングはない、つまり彼女達が日本でたった二人しかいない攻撃型軽空母なんだ。

前には同僚に「おい、お前羨ましいぞ！ 攻撃型軽空母の二人ぶんどつてるとかよオ!？」と言われたので「じゃあそっちに居る航空戦艦とトレードとかどうツスカア!？」つて返事したら電話を切られた。架空請求業者並のスピードで切るもんだから、どうしたのかと思っただぞ。

「うう〜……なんかジロジロ見られてるんですけどお……穴戸っち、ナニか知らない？」

「お前がそのデカパイ押し付けながら腕組んでるからだろうがア！普通の学校でもそんな事して堂々と廊下歩いてたら注目も浴びルウア！」

「だ、だって講話とか初めてだし！き、緊張するんだもんっ！そ、それにて、デカパ……き、キモッ！むう〜！」

と言いつつ腕を組む力が強まってる。眉毛をハの字にして、口をプクツと膨らませながら上目遣いとか……犯されてえのかア!?

こんなやり取りをしている故に、当然通り過ぎる度に注目を浴びながら目的地である教室に到着する。

中には俺の前職である整備工作兵となるべき優秀な人材がコロコロいる。教えている教官さんもこっちに気づいたみたいだし、俺は鈴谷を剥がす。

「じゃ俺は行くところがあるから」

「え、ちよ、一緒に来てくれないの!？」

「え、だって俺は元々別に用事があるから途中まで来ただけで、授業参観に来たわけじゃないぞ?」

「で、でもお……」

「大丈夫、鈴谷ならチョチョイってやれる、少しは俺を信じろよ」

「わかった……じゃあ行つてくるね?」

鈴谷は教室内に入り、俺は外からその勇姿を見守る。教官に手を振り、それを敬礼で返してくれた所でもう俺は行つてもいいのだが、鈴谷がどういう感じで授業に貢献するのか見たい。

若干導入までが長いが、ようやく鈴谷を紹介してくれる様だ。

『そしてこちらが鴨川要港部から来てくれた、攻撃型軽空母の鈴谷さんだ』

『す、鈴谷です、よろしくお願いします』

『『よろしくお願いしますッ!!』』

おお！鈴谷が入るまでは死んだ魚みたいな顔をしていた学生くん達は、鈴谷が話した途端この代わりよう！

もう彼らを見ているだけで分かる。攻撃型軽空母のなんたるかよ、鈴谷さんのスリーサイズを教えて下さい！って聞きたいんだろ？

そしてそのエロい数字を耳にして、主砲を実施したいんだろ？
分かってる、だが百年早い帰って勉強して寝ろ猿ども。

―屋上。

「おお、やっと来てくれたか穴戸少佐！待ちわびてたぞー！」

「遅くなってすいません蘇我少将」

「????」

「????」

鈴谷が士官達に視姦されている間、俺は自分の目的を果たすため屋上に来る。蘇我提督は屋上に作られている小さなスペース、そして僅かな場所取りを使って作られた不格好ながらも丈夫そうなベンチに座っていた。

俺が呼び出されたのは他でもない、あの小規模ながらも日本軍と国に大打撃を与えた襲撃事件。大臣達が死亡、及び行方不明となっている現状……そして消えた元帥閣下。

こう言う事は面と向かって話す主義を持つ少将は、どうしても俺に話しておきたかったらしい。俺が特別……と言うのもあるだろうが、結城みたいな提督や馴染み深い軍人にも機会があれば話すつもりらしい。こと細かなコミュニケーションが人間関係の円滑さ維持に影響してるって、それ一番言われてるから。

「すまないね……流石にこれほどの事件ともなると、私でも子供のように動揺してしまうのだよ」

「少将が子供です、か……ならば他はさしずめ、赤ん坊と言うところで
すか。いや実を射抜いています、親がいなければ泣くばかりで」
「???」
「????」
「????」

落ち着きのない連中はこう言うニュースが来れば騒ぐこと以外しないのは、それしかできないからだと言うが、それなら赤ん坊と変わらない。少将もそれを理解してくれて笑っている。

「ハハハ、まあ私もこの事件の精算に貢献しているわけじゃないんだがな。しかし、一週間以上経っている今でも行方不明の大臣の真相は分からず終い、か……内閣だけならばともかく、海軍大臣と連合艦隊司令長官であった元帥閣下の行方が分からないともなると、我らにも

多少痛手を感じるがな……ふう〜」

「元帥閣下の不在……つまみ食いをやらかし、叱られ逃げている。それぐらいに簡単なシナリオであれば、苦勞もヘツタクレもないんです」

「あ……?」

「あのちよつとイイ?」

「なんだ?」

「あの、なんていうか、こちらのもつても御立派なターバンをお持ちになられている方々は……」

「ああ、彼はサウジアラビアから来られた少将殿とその補佐官殿だ。君も大学校で面識があるとは思うが……」

思い……出した……!」

どう考えても日本語に聞こえない言葉で日本人（主に俺）に話しかけまくってたターバンヘッドか。アラビア語を専攻してるヤツ居ないのかよ!?!と愚痴を吐いたのはいい思い出だ。

そして俺の視線には、三人が口に啞えているホースみたい物体に行く。

「……………」

「……………あこれか。これはシーシヤと言うらしくてな、アラビア発祥のタバコらしいんだ。中々なモノだなこれは……あ、古鷹と加古には黙っていてくれると助かる。例え交友であつてもうるさいからな」

そりやそうだろ。

でも古鷹みたいな娘が居たら「もう、パパったらあ!」みたいな感じで叱らりたい。そして最終的に、身体を心配しての事だと言いながら抱きつかれたら最高。

この少将がここにいる理由は兵学校の視察だ。あそこはアラビア圏の中でも屈指の海面積を誇るから、日本とも海軍関係で強い国交を続けている。学校を視察って事は、彼は教育部門の関係者かな?」

どちらにしろ偉い人だ、腰を低くして歓迎しよう。アメリカ風に言ううと、あの超絶軍事独裁王国から来た頭がボンバーマンになつて

デスクヘッド？ハハッ！国に強制送還してやるッ！

しつかし凄いベリー臭だな……甘さを持つ煙が辺りを散乱し、非常に香り高く、逆に気持ち悪い。タバコとか言ってたけど、タバコのクソみたいな匂いとは違うので俺でも耐えられる。

「H A H A H A！アナタモドウ？」

「え、あーその……自分は、仏陀シントーイストなので、喫煙ができません」

「エ、ソウナノ？」

「え？あ、ああはいそうなんですよ！彼の宗派では特に喫煙にはうるさいようでした……それに彼は忙しいので、ゆっくりと話す時間はないでしょう」

「オオー、ザンネンザンネン！」

（※神道自体が喫煙を禁じていると言う記事はありません）

あと喋れンだったら日本語話せ。

「話が逸れたな、本題に戻そう。君は元帥の失踪について何かわかっている事はあるかい？」

「え、な、な、ななあああなぜ自分にそのような事をお聞きにッ!?!、じじ自分が何かをしたとおおおおおうおう!?!」

「熊野くんか君は……それにその動揺ぶりだと、それこそ怪しまれるぞ。もつと堂々と構えていてくれたまえ」

「そうですよねすいません……」

「いや、別に君を怪しんでいるわけじゃないんだがな。ただ元帥閣下にお会いになった君だったら、事件が起こる前の彼の様子を知っているんじゃないかと思ってな。何か、変わった様子はなかったかな？意味深な発言をしていたとか、体調が優れなかったとか」

「いや、特には……」

「そうか……」

「本当にそれだけの為に俺を？」

「……まあそうなんだが、私達の鎮守府で、もう一つ気がかりな事があつてな」

「と、言うこと？」

「第一鎮守府所属の艦娘達が居ないんだ」

もうフランス語は喋らない

兵学校廊下の木質感に包まれた空気を大きく肺へと導きながら、少将の発言を再度頭で洗い直す。道行く人が敬礼していても無視しうになるぐらい、彼の情報は衝撃的……と言うよりかは、一層謎が深まる。

『第一鎮守府の艦娘……通称「もうアイツラだけでいいんじやね艦隊」が、いない、と……?』

『誰がそのネームを付けたのか非常に興味深いのだが、そうだ。この事はまだ知り渡っていないのだが、横須賀鎮守府の提督達や大本営は既にこのことを知っている……あ、私が言ったという事実は伏せておいてくれると助かる』

『もちろんです。しかし、言葉を返せば元帥府直属の艦娘が消えた……またこれもまた奇怪ですね。しかし元帥府の艦娘がいなくなるのは、強さ云々より先に海軍編成構造に支障が出るのでは?』

『ダイジョウブ。元帥府、モトモト、タダノ軍事顧問ミタイナ』
『(なんでテメエが知ってんだよってツツコミを胸に秘め)なるほど……しかし蘇我少将、なぜこの事を俺に?』

『上層部はまだ知られたくないらしいのだが、君が口の固い男だ、情報は伝えておいた方がいい。それに他の要港部と同様に鴨川要港部は横須賀の刃先であり、今後前の防衛戦の如く元帥閣下の軍に頼る事ができない……それを伝えるのが本命だな』

『なるほど……分かりました、ありがとうございます。では自分はこちらで……』

『あ、宍戸君!……タバコの事は古鷹に……』

『言いませんって!いま口の固い男って言ってくれたじゃないツスカ!』

『ハッハッハ!ヤーバーンノダンセイ、ムスメニヨワイ!ハッハッハ!』

元帥閣下だけならともかく、第一鎮守府の艦娘も失踪……しかも事件と同時期に起こった。

状況証拠だけだったら横須賀第一鎮守府が大臣を暗殺した、そう予測するのが普通なんだろうけど、仲が悪いとか聞かないし……あそこら辺と親密って訳じゃないから、本当にそうなのは分からないけど。

何れにせよ今の状況では元帥閣下の艦娘、以下第一鎮守府の艦隊は動かせないって事だ。

つまり解釈としては、もしも防衛戦で前みたいな大軍勢を相手にするんだったら、今度こそ兵法三十六計逃げるに如かずを実践してもいいって事だよな。

相手しても死ぬ運命しかない敵は駄目！それでも立ち向かうのは只のカミカゼ！そして国の為に戦死しなかったコトを責めるヤツは死ぬエツ！ただでさえ国を守ってくれてる軍隊様に対して税金泥棒とか罵るクセによオ！

などと、軍人らしからぬ愚痴ラツシュで兵学校を渡り歩く俺はかなり目立つ。見ない顔ってだけじゃないく、司令官専用の微妙に形状の違う服を着ているので、明らかに生徒には見えない。

だから肩章を見た瞬間、無条件で敬礼してくるのは当たり前前の事である。俺みたいなイケメン提督が来るとメスの顔になって、ハンサム芸能人が居ると黄色い声を上げて喜ぶのは、どこも同じだな。

ただ男の方が圧倒的に多い……いや、軍隊ではそれが普通か。俺が感じている違和感はそれだけに留まらず、人がやたら多いように見える。学校の定員数を増やしたのか？

助走を付けて走ってもぶつからなそうな長い廊下、その突き当りにあるのは確か会議室だ。更に抜けて真っ直ぐ行くと鈴谷が話している場所に着くのだが、通り際に聞こえる会議室の中から、とても会議しているように聞こえないほど騒々しい音が聞こえる。

事件について話しているのか？確かに今世間は混乱を極めている。テロかも知れない、司令長官がいなくなった、政治はどうなる？そんな疑問を抱くのは時間の無駄であるーが、愛国心のある軍人ほど、

国の行く末を心配する。

当たり前前の事だ、国を愛して、そして未来へと繋ごうとする意思を持つのは、軍人として当然なんだ。

さてと……俺もそんな愛国者の端くれであり、興味も十分ある。議論に参加とまでは行かないが、部屋を覗こうか。

「だーかーら！Bang Bang Bang！Then they will understand it!!（バンバンバンって説明しとけば理解出来るはずよ！）」

「ハア!?現に今の説明で私が理解できなかったんだからダメに決まってるでしょう!？」

「OH・ジャーマンはアメリカニツヒのブレーンが小さいとかなんとか言ってたけど、どうやらそれはタダの同族嫌悪だったようねえ!」

「グルルルツ!!」

「気楽にお話すればいいのに……」

「ま、まあまあ!このWarspiteがみんなにexplainするから、ね?。」

「黙れ三枚舌、ティーバッグでも食ってろ」

「ハツ?Wana Go Hot Dog?（表出たいかホットドック?）」

「ハイハイハイハイ!ノック・イット・オフ!プリーイズ!!」

「Oh、シシード!」

電気が部屋の隅々まで照らし、観葉植物くんと古き良きチョコレートボードくんが威圧感のせいで若干色がしょぼんつとしているこの会議室。

部屋で愉快的な騒音を立てていたのは、俺が予想していた愛国者でも、生理中同士のキャットファイトでも、はたまた兵学校の関係者ですらない……ただの柱島艦隊の日常風景だった。

「Oh!久しぶりねシシード!」

「ロングタイムアイオワ!ほら、抱きついてきてもいいツスよ!」

「あ、あははっ」

何が「あはは」だよ。そんな外見して中身は完全に感覚がジャパニ

ライズされてンじゃねえか。アイオワさんのぷにぷにオツパイに挨拶ハグできねえなんて死んで詫びろ日本文化。

「それで、どうしてここに？」

「海外の戦艦について色々お話する為ですっ！」

リットリオさんが胸を揺らしながら満面の笑みを浮かべる。要は鈴谷と同じって事か……しかし鈴谷だけではなく、この五人までもが学校に来るとは今日は博覧会か何かがあるのか？よく考えれば学校にしては人が多い気がするのも、彼女達を見学する為なのか？俺には関係ないんだけどさ。

それにしても流石は外国艦。この五人のボインボインっのド迫力と来たら、日本艦との違いは歴然。ガタイが良くて、ボン！キュ、

「ボン！」

「「え？」」

あ、口に出しちゃった。

「Bon……なにが、イイのかしら？」

「あ、あなたは……」

「Je suis vraiment ravi de vous rencontrer。リシユリユーよ、お会いできて光栄だわ」
「Mon nom est Shishido！」

「あら、フランス語も堪能なのね」

「Stacose t'es ben chix……格好付けたくなっってね」

「え、あ、S、Stactoo……えっ？」

リシユリユーさんは首を傾げてハテナマークを浮かべている。確か前にもコマندان・テストさんが同じような反応をしてたな。

そっかあ……どうやら俺の知ってるフランス語は、本場のフランス人には通用しないらしい。俺の顔、カチコチ山みたいに真っ赤っかでカッチコチやで？もう二度とフランス人の前でフランス語話さない。

凜々とした佇まいに、やはり目につく外国人特有の美貌はもちろん、彼女自身の冷艶さがその魅力を引き立たせているんだろう。そして何より日本人にグッとこさせるのが、このリシユリユーさんの低身

長さである。

俺が知る限りここの全員戦艦だから、彼女もそうなのだろう。

「よろしく李・朱龍さん」

「ちよつと待って、今のアクセントおかしくなかったかしら？」

「分かった、じゃあ手短に李さんで」

「それなら悪くないわね」

「NoNoNo!リシユリユあなたチャイニーズにされてるわよ!？」

「えっ？」

帰化した場合当て字は禁物だな。

「Shishido、もし良ければあなたから一つアドバイスを頼めないかしら？外国の戦艦をよく知ってもらうために、どうすればperfectにできるか」

「普通にしてたらいいんじゃない？」

「普通にした結果がさっきのアレよ」

ああ、確かにあれはヤバイツスね。

ザ・英国淑女のウォースパイトさんですら、気の強いアメリカ小娘になつてたし。

米英仏独伊が揃つてるんだつたらウォースパイトさんとかだけに喋らせるのも駄目だし……っつか何喋るかぐらい台本用意しとけ海軍。

「じゃあインタビューの気分で自分を最大限にアドバタイズする。その間で日本艦との比較も忘れずにして、後は教官か生徒が聞いてくるだろ」

「日本艦と比較……でも、みんながそれを言うトレイシストと思われるかも……」

「よく気づいたねビスマルクさん。そういう時は逆に自分が日本艦より劣つてると思う場所を見つけて、褒めるといいと思う」

「ミーが劣つてるトコロなんて無いわ!ハツハツハ!Bang Bang Bang Bangkoko!」

「あははッ、ビスマルクさんとの連携プレイと消費資材の事がなければ

ば随一ですけどねえ!」

あと英語で説明するんだっただらせめてちゃんと英語喋ろ。アイオワさんの英語だとネイティブでも分からないぞ。

日本語だと地域によって結構違う所もあるのは知っている。でも英方弁にはあまり違うがないと思っただけ、アイオワ弁がまさかジャマイカ英語ほど理解し難いものだとは思ってもいなかった。

「あ、やベツ、ちよつと連れが居るからこの辺で失礼するね」

「あのAttacker Type CVLの事かしら?」

「え、知ってるの?」

「っかその翻訳で合ってるの?」

「ええ、みんなの前でお話するのに頑張ってたわよ」

「じゃあ尚更行かなきゃ、鈴谷はあまりこういうの好きじゃないからさ」

「ふふつ、まるで保護者みたいね。See you later」

「See ya ladyss!」

―教室。

教室は多くの白制服を着た生徒で埋め尽くされ、白主体のコントラストが余計に純白をイメージさせる。

精錬潔白な海軍生徒達の前で話すのは、ダークブラウンの色彩からチラチラ見え隠れするいやらしいほど白い肌、そしてギヤルと言う現代社会が産んだ劣情製造機の二つを兼ね備える鈴谷。

そんなセクシーギヤルがクラスの前で話しているんだ、退屈な授業だと鉛筆の消しゴムをイジらず、男性陣がオツパイや太ももに視線の集中砲火を浴びせるのは、自然の摂理なのだ。

そんな鈴谷に質問ができるとなると、今度は言葉の集中砲火を受ける。

『では最後に、こちらの鈴谷さんに質問はあるか?』

『はい……攻撃型軽空母と航空巡洋艦、一見すれば航空巡洋艦の方が多様に優れているように見えますが、その点については』

『えっ?ええつとく装備によってなんだけど、要するにコッチの方

が砲雷撃戦の時にズバーツ！つてやってドカーンツ！つてできるの』
『鈴谷さん！携帯の番号教えてもらってもいいですか!?!』

『え!?!えつと……だ、だめ?』

『じゃあせめてバストサイズだけでも!』

『それもつとダメだよつだからあ!』

『『おおおおお!!』』

腕を勢い良く振りながらぶくーつと顔を作る鈴谷の胸はボインボインっ!

それじゃあチンチ○共を喜ばせるだけなのに。

教官っぽい人と生徒達が敬礼する。緊張からか、鈴谷はつま先立ちからカカトを落としてから手を額に当てるといふ、正に5歳児が真似をしてやるような敬礼で返す。

そのときに胸が弾けたのは言うまでもないが、何をしても揺れる鈴谷のオツパイは情欲を掻き乱す。

「あ、ていとくううう〜!」

「『な!?!』」

「だから腕組むなつて……」

「いいじゃんいいじゃん!!待つててくれたんでしょ?行こつ!」

鈴谷の胸に挟まれて兵学校から引つ張り出されそうになる。その姿に目を丸くする生徒達からは「誰だよアイツ?」「彼氏?」「チツ……男持ちかよツ」と悲憤慷慨の雨、そして射るような視線で見送られる。「ちよ、引つ張るなつて!」

「これぐらいイイでしょ!?!凄く心細かつたんだし!……それとも、鈴谷じゃイヤ?」

「そんな事言つてない」

「じゃあいいじゃん!むう〜!」

そんなむくれつ面しても駄目なものはだめだぞ。俺は誇り高き海軍軍人であり、ここのOBでもある。ただでさえ他の所で白露さん姉妹を侍らせてるなんて噂が立ってんのに、ここで鈴谷を侍らせたら相乗効果で俺の評判ガタ落ちやぞ?

特に俺は、王道（出世街道）を征く者なんだ。こんな所誰か偉い人

に見られたら、

「おや、奇遇だねこのような場所で」

「さ、斎藤中将?!」

「え、ちゆ、中将さん?!」

「仲が睦まじいようで何よりだよ、色々と元気でやっているみたいだね」

「え、こ、これは違いますって!俺と鈴谷はただの上司と部下ですから!」

「……ムツ」

敬礼を下ろし際に足を踏んでくる。殴られるよりはいいけど、ヒーッぽい靴履いてるから凄く痛い。

その様子に気づいたのか、中将は笑みを浮かべる。

「宍戸少佐、丁度君に話しておきたい事があったんだ。もしよければ、少し話さないか?なに、時間は取らせないさ」

「はあ……こちらの鈴谷は」

「少し立て込んだ内容でね、聞いていてもつまらないだろう」

「って事だから、鈴谷は先に行つていいよ」

「ええ、いいよ別に、鈴谷もお話聞きたいです!」

「ハハハ」

と笑っているが、中将は少し困っているみたいだ。要は鈴谷には席を外して欲しいってことなんだろうけど。

「そういえばこの辺にデザート専門店があったな……モンブランとか」

「え、どこどこ?!」

「ほら、ここのすぐ近く。今余分にお金持つてるから、みんなのお土産にー」

「行つてきまーす!!」

ア○レちゃん走りで出口に直行する。こういうの、花より団子っていうんだっけ?まあなんの話かも分からないからそっちを優先するのが普通か。

「部下の扱いに長けているね」

「いや、彼女が単純なだけかと……」

「ハッハッハ。謙遜しなくてもいいんだよ。それよりも早く中に入るうか」

「ハッ！」

おい、少将や柱島艦隊だけじゃなくて中将まで来てるのかよ……マジなんだコレ？スーパーヒーローマンの博覧会か？今兵学校を陸軍に襲われたら溜まったもんじゃねえぞ。

斎藤中将が俺を誘導したのは、俺たちが鉢合わせた場所のすぐ横にあつた一室。あまり使われていないようで、こんな所あつたのかすら覚えていないほど影の薄い場所だ。

薄暗い雰囲気を作り出すのは、閉められたカーテンと電気のないセッティングであり、まるで刑事ドラマで見る取調室みたいな雰囲気だ。

中将も何故か定番のカーテンをチラツと開ける動作で窓の外を見ている。

「君は元帥閣下の艦娘達が居ないことを知っているかな？」

はいって言ったら少将が教えてくれたって事実をバラす事になるかも……でも、かと言って知らなかったら阿呆みたいに見られるかも……どうすればいいんだ？

「薄々知っていました」

「どこから聞いたんだね？」

「誰からも聞いていません。しかし近日の全体的な深海棲艦撃退率が下がっている事に気付きました。元帥閣下が不在だからという理由で、第一鎮守府の艦娘達の戦力がこれほど衰えるとは思えず……」

「なるほど……では誰からもその事実を聞いていないと？」

「はい」

「……穴戸君、先程私が偶然だと言ったのを覚えているかな？」

「はい」

「……あれは嘘だ」

「え」

「……本当は、君を待っていたんだ」

「……え」

そう言いながら、中將は振り向く。
俺の目を見つめながら、目止めが逢うくシユンカくンく好きだあくと、

「いや、そういうのではない」

「そ、そうですか……」

てつきり「私の小姓となってくれ♂」とか言われるかと思った。心臓が一瞬だけ止まった気がしたぞ。

「蘇我提督の言うことを守ってくれるなんて、君は本当に口が固いだね」

「し、知ってたんですか……」

「ああ、ここに連れてきてもらおうように指示したのは私だしね」

「は、はあ……」

「……そんな君に、頼み事があるんだ。とても大きなね」

「はい、なんなりと」

「派閥争いを鎮める手助けをしてもらえないかね？」

……え、なんて？

未見すぎ

いきなり何言っただコイツ？

5歳児でも分かるように説明しろ。

「よろしければご説明いただけませんか？」

「君も知っている通り、海軍内部には派閥がある」

「……あの二つの派閥ですか」

「そう、革新派と保守派だ」

革新派を簡単に説明すると、ブルネイ鎮守府でやったようにもっと海外へと進出して、もっと強い日本を実現しよう！との事らしい。要はマイルドな過激派海軍将校団つてことか（オクシモロン）。

国際的な政治力に乏しく、今や海軍と艦娘技術と言う優れた材料があるにも関わらずその優位性を活かさないのに苛立ちを見せている将校も確かにいる。立身出世を望む部下や、各方面の提督達もそんな事を口走ってたのを目にしたので少なくとも傾向があるのは間違いない。

保守派は日本国土を第一に考えて要港を作り、国の守りを固めようと言う思想から、革新派とは相反している。弱腰志向などと蔑称される事もあるらしい。

「保守派を象徴するのは荒木大将だ。彼が作った日本の要港部は、今や港町を復活させる勢いで好評を受けているのは知っているね」

「はい、自分が指揮する鴨川も好調ですし、何より魚の物価が下がったのは嬉しいですね」

「ハハハ、私も寿司は好きだよ」

俺は機会がないからあまり食えないけど。

この二つの派閥。

今まであまり話題に出なかった理由を上げると、道行く将校たちはみんな「荒木大将派」と「斎藤中将派」という二つに区切っていたからだ。

俺はてつきり、上級将校のオッサンをアイドル化するのが流行って

んのかと思って見過ごしたが、まさか保守派と革新派なんて派閥に別れて存在してるとはね。

いや、実は全く知らなかったツス。つい雰囲気出して「なるほど」とか言っただけど、まさかそんな昔の日本軍みたな思想があったとは。

あんなの数ある話題や持っている思想のトークに過ぎないし、その裏に組織の企みがあるとしたら、何かカツコイイ（中二感）。

……ん、待てよ？

「大将派と中将派を、現在中将閣下が仰った保守革新と言い換えると……中将が革新派って事ですか？」

「そういう事だね」

ワアオ、びっくり！派閥の元凶が目の前にいるぞ！捕まえてとつちめなきや、そんな使命感が脳を過る。

「しかし私は派閥のどちらにも存在し得る、というのが本心でね。私がかもつとも懸念している教育を変えろと言う点では合致しているからね」

「教育、ですか……」

「ああ。競争は推奨しても、私はそんなことの為に戦争を事を起こしてほしくないのだよ」

「では派閥など存在しないのでは？各々が考えるより良き日本の方向性を除き」

「私がイヤでも勝手に推してくるのだよ、主に部下たちが」

いやどういう事だよ？抑えられないのか。

「では何故中将がそのように別れた派閥の首領たる大将となったのですか？」

「それはだね、数十年……いや十数年前だったかな？私の著書『日本の可能性』というのがあってね、日本のあるべき姿と、日本は更に強国になれる！と言う論点を書いたいかにも愛国心燦る物なのだが……」

中将によれば、本が今では読みやすく再出版され、それが今では革新派のバイブル的な存在になっている。

発売から何年かは全く売られてなかったのに、突然爆発的に売られるようになって、印税の量に驚愕したと個人的な話も聞いた。

本には、経済的な豊かさを得るためにはどうすればいいのか、今の教育をどう正せばいいのか、行動を起こすのに躊躇うな—と、人生教訓のような事まで書いてあり、好評を受けるのは必須だと感じる。そんな事できるんだったら政治家に転身しろと思ったのは言うまでもない。

そしてこの御方は冗談抜きで全ての。元凶であると言わざるを得ない。過激派が膨張した理由をこの人、一人の責任にしたいくはないけど、首位に立っているんだからせめて抑える努力はしろと言いたい。それが叶わないから俺にこの事を話しているんだらうけど。提督へと推薦してくれた恩もあるわけだし、尚更その気持ちが強いの。

まだ目に見えない未来に、もしも革新派と保守派が衝突する場面があったら、俺は斎藤中将側だろうな。他の提督達もそうだろう。

もしも仮に中将がその衝突を止めるつもりがなく、すべて中将の計算だったら、底が計り知れない。

バイブルは爆発的に売れたのも束の間、名前を隠していたにも関わらず彼の著書だとバレてしまう。内閣の政府見解に反するとの事で、辞任も覚悟したのだが、

「しかし、一部の海軍将校が猛反発してくれたお陰で、現在私はこうして君と話す事ができるんだ……日本海軍の中将としてね」

カリスマ性だけで勝手に付いてくるものが多く、その人たちが強き日本と強きリーダーをテーマにはやし立てている。つまり中将は実際には威厳であり、実質的な動きは他の人間たちが勝手にやっている……と言う事なんだろうか？

生憎、中将も何処で誰がこの布教活動にも思える行為を始めたのかは定かではないそうだ。この本が俺の家にあったら、即刻便所紙にしてその上で薄い本を読む。これが現代日本が誇る若者のライフスタイルであり、これが普通だ。

それをさあ、良くもまあそんなに感化されたもんだなあ？ 元気すぎるのも困り物だと思うんだけど？

今や並のエンターテイメントのレベルが上がりつつある時代、娯楽に飢える人心を突き動かすのは一風変わった革新的な物だ。それは

ホモビデオ然り、電車のキチガイシリーズ然り、拳で語る二重一碎（カツコイイ）然り。

エンターテイメント気分で国の方針を変えようとするのはどうかと思うが、どちらに転んでも日本の安泰は多分約束されるだろう……内戦でも起こらなきや。

まだ派閥争いが始まったわけじゃないが、彼の思想に感化された海軍将校は良かれ悪かれ日本のために、斎藤中将を大将にして元帥の称号を陛下から賜り、軍令部総長……そして最終的には海軍大臣の座を同時に取らせる事が目的なんだそうだ。

特に今、陸海大臣達や総理が空席になってる今なら絶好のチャンスであり、海軍首脳会議、そして海軍将官会議にて陛下へ自分達の声を届ける状況も揃ってる。この状況こそが、派閥争いへと発展する引き金になると予知しているらしい。

流石は中将、多分過去にも醜い争いを経験してるんだろうな……いやあ、人は見かけによらず知識豊富ツスね！

荒木大将を現職から連合艦隊総司令官に付け、そして海軍大臣の役職と軍令部総長、あわよくば三軍の統合、或いは上位職を作って、権力を集中させたいとのこと。

権力集中は過激派的な思想だと思われがちだけど、俺は賛成だ。日本は昔から権力を分散させて、更には威厳まで別々にしようとする傾向にあるので、予め決まった事はできても新しい事は限定される。なんだよ海軍三長官って、同等の権力持つてるトップが何人いると思っ
てんだよ。

「僭越ながら、中将の説明を聞く限り革新派とやらは、文民統制を否定しているように思えるのですが……」

「別にそういうわけではない……とりたい」

彼の言葉を聞いて思った、この人はガチでただの神輿なんだと。それほど裁量のある野心家で、しかも日本の未来を見ているヤツが海軍内に居るのか？居るとしたら今すぐ政治家になってくれ頼む。協力は惜しまないぞ。

「これは中将にとっては軍令部総長、海軍大臣はたまた元帥への歩み

を期待できる絶好の状況であります……」

「実際に争いが起きてからでは遅いんだ。もしも争いが起き、敗れるような事になれば、末代までの晒し者となるのは必須なのだよ……それに、争ってまで地位を獲得したいとも思えないしね」

「では中将、気がお乗りにならないのであれば、ハッキリと革新派に仰ればいいのでは？」

「それはそうなんだが……まあ、なんというかその……免職を頑張つて打ち消してくれた恩もあるので、その、なんだ……強くは言えないのだよ……」

「なるほど……うんしょつと」

「あ、ちよ、座つてくれ少佐！何故立とうとする!？」

だつてさ、要はタネマシガンみたいに撒かれた火種を拾うの手伝つてゝつて意味でしょ？あと下手に否定して部下たちから反発受けて免職になるのいやなんでしょ？こつちが嫌だよ。

それにまだ始まってもない争いを鎮めるとかどうすればいいんだよ？行き当たりバッタリな日本の政治とは相反して、こつちは未来見すぎだろ。

「それに私自身が降りた所で、私の替えはいくらでもいる。そこでまた争いが起きれば、更にややこしくなる」

「なるほど……何故自分なのでしょうか？自分より適任者が居るはずですが」

「君が色々な提督や将校と繋がりがある事は知っている。行く先々で君の名前を聞くほど、君の人脈は広い。そして思想や国の方針に拘らないからこそ適任だと思つたからだよ」

「失礼を承知で聞きますが、荒木大将閣下には……」

「好きにやらせておけばいい……と仰られていた」

君たちを信頼している、日本海軍軍人として、未来に目を向ける君たちだからこそ、この背を託せるのだ（もうワシやる事やったし、起きるとも限らないし、どっちに転んでも悪い事は起きないつしよ）。

大将閣下のお言葉は丸投げ以外の何者でもない。

「そして私直々にスカウトした君だからこそ、話せるんだ」

「ク……提督に仕立て上げてくれた恩は感じます。しかし派閥を止めるなど自分だけではどうにも……」

「いや、別に特別すごいことをしてほしいってわけではないよ。ただ鴨川要港部の諸君にできるだけ中立でいて貰えばいいだけなんだ。付け加えて他の提督達にも口利きをしてもらえれば、それでいい」

あ、なんだ……別にスパイ的な事をしろってワケじゃないんだ。そんなに簡単だったらやってみいかも。

「君以外にも動いてくれる人はいる。それにもしもうまく行けば、君が望む出世は約束しよう」

「そのような事が可能なんですか？」

「約束しよう、君は必ず『提督』になれる」

「……承知しました。中将閣下のご意向に添えるよう、全力を尽くします。要は争いがあつたとしても競争程度に収めればいい話ですので」

「そういう事だ。助かるよ」

「……一つお聞きしても？」

「何かな？」

「閣下の懸念は、襲撃事件と元帥閣下の行方によって引き金となったかと思っています。しかし、今なお事件の詳細はありません。中将はこの事について、どうお見受けしますか？」

「……事実確認は大事だが、起きてしまった事はどうしようもない。私達は、今できる最善を尽くし、待っている事しかできないよ」

中将の言葉には意味深さを感じられた。何かの陰謀臭さを感じつつも、彼の言った通り、俺にもどうする事もできない。

たとえ知っていたとしても、行動を起こすほどの勇気と努力を惜しむ可能性がある。

しかし、目的ができた。

今の俺にできる、平穏と日常を守る唯一の行動。俺にもできる、防衛手段。迫り来る乱の、見えるか見えないかぐらいの小さな火種を押し潰す。それが俺を守ってくれるんだったら、やってやろうじゃないか。

中将がくれた極秘任務を胸に秘め、部屋を退出する。

―鴨川要港部、執務室。

「そ、そそそれでその派閥争いはッ!」

「大丈夫大丈夫、何もしないから」

「つていうか、こんな大事なこと、私なんか話していいんですか?」
「……?」

村雨ちゃんが一肌脱いだら、軍の機密事項だろうが背中中のホクロの数だろうが、口全開にして漏らすぞ?と本物の口はおちよこ口にしてティーカップに付ける。

「だって、クーデター?内戦?バトるの?そんなの起こりっこ無いじゃん。代理の政治家が多方面に反感を買うような事をするとか、海軍派閥が煽ってファイトするような事が起こらない限りはなにもないって」

「で、でも……」

「もう、心配性だな村雨ちゃんは……よしよし」

「あつ……」

驚いた顔で見つめてくる村雨ちゃんの頭を優しく撫でる。頬を赤くしながらも俯きながらはにかみ、モジモジと体を揺らしながら俺の服を細い指で摘んでくる。

「……えへへっ」

気持ちよさそうに顔をほごばせ、頭をこちらに預けてくる。とても無防備な体勢で体を寄せてくるので、おっぱいが俺の腹に触れそうだった。

しようがないな、と暫く頭を撫でていると、火照っりあがった上目遣いで俺を見つめ直す。

「……何やってんの?」

「うわあ!」

オッパイの名残惜しさを感じつつも、時雨が茶々を入れてきたせいで条件反射で離れてしまう。

「ほっほくやりますなあ〜うちの提督様は〜ヌッフ!」

「い、いやこれはですね白露さん、最近疲れていたみたいだから、俺と
いうマイナスイオンで村雨ちゃんの体を解してあげようと思つて
……」

「……ッ」

「春雨、落ち着いて、顔が」

「ジャアハルサメモ司令官トジャレアイマス！」

「お、おっほ！春雨ちゃん大胆だねエ！ハッハッハアアアああ痛い
痛い痛い!!!」

村雨ちゃんの頭から漂ったシャンプーと同じ物を使っているのは
分かるが、春雨ちゃんからまた違った妖艶さを感じる香りが鼻腔を刺
激する。その上これほど顔に接近していると、死んでもいい。
しかし抱きつく力がかなり強い。いやマジで強い。かわい顔か
ら想像できないほどの強さで抱きしめられているのは、やはりが時雨
の妹と言わざるを得ない。

「おおーこれはベアハッグ！私が春雨にいつちばーん！最初に教えた
プロレス技ですッ！浮気者にはまだ生ぬるい裁きだと言わざるを得
ませんが、解説の時雨さん」

「そうですね、とりあえず穴戸選手には私刑よりも、妹を誑かしたので
死刑がいいと思います」

「では実況の村雨さん！今のご感想は!?」

「べ、別に特別なことはなんにもないですつてばあ！つていうか私実
況だったんですかあ!?白露姉さんは何なんですかじゃあー！」

「おおつとオー！そんな事を言っている間にも、春雨選手が次の手に出
たぞオー！続いては12番目に教えたクリンチだア！」

「痛い痛い痛いイイ!!!」

「お兄さんお兄さんお兄さんお兄さんお兄さんお兄さんお兄さんお兄さんお兄
さんクンカクンカクンカクンカクンカクンカクンカ……」

痛い痛いしかも何か言ってる怖いイ!!クリンチって相手を止める
技だよなあ!?!ほぼ攻撃技なだけけどオ!?

コアラ抱きで上半身が支配されているせいで前がまともに見えな

い。代わりに春雨ちゃんの細やかなオツパイが鼻に付く……けど、さっきの村雨ちゃんのに比べたら……痛い痛い痛い!!!何故か強まるウ!?こんな所を誰かに見られたら、それこそ末代までの恥だぞオ!」

「は、春雨ちゃんいい加減降りて……」

「嫌です!ぎゅく!!」

「い、いや、そろそろ降りないと……うああ!!」

「きゃっ!」

重りにより体制が崩れ、痛たた……と古典的なセリフを言いながら倒れた体を起こす。

「お、お兄さん……っ」

「は、春雨ちゃん……」

目の前には上向きに倒れている春雨ちゃんと、うつ伏せで倒れていた俺。漢の劣情を掻き巻くような、幼いながらも端正な顔立ちが鼻10センチ間近にあり、何故か顔にはほころびがある春雨ちゃん。

正に今の状況は、無垢な赤ずきんちゃんを襲う、ケモノの本性を見せた狼さん。

横で村雨ちゃんと時雨が笑っているように見えるけど、「……フッフツ」と魔女のように笑うあれは明らかに微笑ましきから来てる笑いじゃない。シグレフィストが来る前に退かなきゃ。

「し、失礼します!本日より舞鶴第一鎮守府から、この鴨川鎮守府に着任することとなりました、駆逐艦親潮です!!ど、どうぞよろし……く……?」

「「あ……」」

「し、ししし失礼しましたああ!!」

バタン!

は?新しい艦娘来すぎやろ?

と、冷静にツツコミを入れた所で席に座り、そして新人艦娘『親潮』が帰ってくるまでに、カツコイイ提督を演出するための準備に取り掛かる。

……カイゼル髭ってあったかな?

艦娘との出会いは同人誌の導入のような

「あ、改めまして……舞鶴第一鎮守府から来ました、駆逐艦親潮、です……」

「ほっほっほお……よく来てくれたのお……ワシが、この要港部の司令官じゃよお……おっほっほー……」

「なにお爺さん気取ってんの実年齢バレバレだよオ！」

「グアアッ！オイ時雨エそれ返せエ!!俺の大事なカイゼル髭だぞオ!!」

「……………」

春雨ちゃんを押し倒してしまった自分の行いを恥、心の底で眠る清き魂と右引きの左脳をフル稼働させ『この世で最も性欲からかけ離れ、心の清らかさを持った人物像』を求めた結果、古典的一般提督老爺が脳裏を過る。

映画でよく見る好々爺系提督風にすれば、この親潮ちゃんも「あーこの人は悪い人じゃないー」で済ませてくれる筈……だったのだが、その野望はいとも容易く深海の底へと沈んでいく。

頭わになった俺の醜い素顔を見て、親潮はもちろん、白露姉妹までもがジト目を向けてくる。

しかし親潮に限っては、出口のドアに触れてるぐらい俺から距離を離してるので、声が聞き取りづらい。

「挨拶するんだったらちゃんとお挨拶！ほらっ、やり直して！」

「わ、分かったよシグレママア……」

「ッ」

「あ、ヤメロ暴力反対イ!!……ええコホンッ、俺がここの司令官だ。よろしくな」

「……ハっ」

「おりよオ？警戒されちゃってリユウ？いやいや大丈夫だから。俺、信じられないぐらい天使だから、ほおくらー！うふふーうふふー」

「オロロロロロロ！」

そのゲロジエスチャーやめろ。

「いいいい大丈夫です！司令の趣味は、この親潮には関係ありませんので！」

再度敬礼し、更に一步後ろへ後退する親潮の顔は、警戒心レベルがMAXまで達したと言ってるようなものである。

確かに不純な行為だったかもしれない。でも当の春雨ちゃんの優しさもあり、通報されてないでしょ？俺は女の子に手を出すような性欲魔人セイヨークじゃないし、部下にも寛大すぎるぐらいの優しさで迫ってるぞ？

ほら、あそこで歩いてる憲兵さんだって本当は門前にいるはずなのに、何か艦娘と話してるじゃん。それをお咎め無しにしようとしているオレKAKKEE。

あれ、艦娘側が何か渡してる？ラブレターか？もしかして不純異性交友か？ん？ん？

規律を破る奴は嚴重注意からの全裸で町内一周させるぞ（※そのような規則は存在しません）。

「えーコホンツ、これは真面目に聞きたいんだけどさ、着任って本当に鴨川で合ってる？」

「ど、どういうことでしょうか？」

「この資料には君のプロフィールもないし、新しく着任する艦娘がいるなんて大本営からも聞いてないし……ま、まさか、また俺だけが知らされてないとか!?提督なのに!？」

「い、いいいいえーこちらにも資料は届いていませんー！」

「じゃあなんで……」

敬礼を解かない親潮と顎に指を当てる俺達が考えている中、執務室に電話の騒音が鳴り響く。なんだよこんな時に？

「はいこちら鴨川要港部の穴戸です」

『私は舞鶴第一鎮守府の斎藤という者なのだが』

「か、閣下！」

急に立ち上がった俺にびっくりしたのか、みんな目を丸くする。かく言う俺も、目を見開きながら危うく敬礼しそうだった。日本人特有のお辞儀しながら電話するヤツ、これ何度やっても改善しないよね。

『もう親潮くんが着いている頃だと思つてね、今は大丈夫かな?』

「はいもちろん!……つて、え?」

『秘書艦経験の豊富な艦娘でね、何かと役に立つてくれると思うよ』

「あ、ありがとうございます!」

『それで、状況の方はどうだい?何か掴めたかな?』

「今のところは何も」

何もしてないし。

中将は俺に誰がどの派閥に、或いはどっち寄りなのかを調べてほし
いって言つてるんだが、そんなの一朝一夕で分かるわけねえだろ。

なんてツツコミを目上に入れるのは野暮だ。彼がそうだとは言わ
ないが、何時も自分ができる以上の事を押し付けてくる者を上司と呼
ぶ。

そして自分自身が上手にできて、それを継承させようとする者を、
指導者と呼ぶ。

それより人事に関わつてもいいのだろうか?なんでこんなに早く
着任させることができるんだ?と問い詰めた所だったが、実は前から
ら決まっていたらしい。そしてどうやら陽炎達の姉妹なんだそうだ。

彼女に関しての資料はどっかに紛失したと推測するが、秘書艦経験
のある艦娘は頼もしい。

村雨ちゃんを秘書艦にするのはいいんだが、そろそろ本格的に演習
や前線に出さなきゃいけない頃合いでもあるからな。

『ではまた連絡するよ』

「ハ!」

「……あ、あの」

「ん、どうしたの?」

モジモジしながら聞いてくる親潮。

「か、閣下は、私のことを何と……」

「経験豊富な娘だつて聞いたけど」

「け、経験豊富っ!」

なに私清纯ですアピールしてんだお前アア?そんな細いのに引き
締まつてる体して、その上スカートなんだそれ?短すぎだろ!みんな

もそうだけど、エつつつロツ。

「艦娘として多数の経歴を積んできた有能な人材だって聞いてるよ。ここには陽炎達も居るからね、居心地は悪くはないとは思うけど、ゆっくりしてってね」

「は、はあ……で、では、親潮は待機任務に入ります！」

「おう。もしよければ案内するけど……」

「け、結構ですツツツ!!」

足から目視で疾風が見えるほど、素早く執務室を後にした親潮のスカーツが一瞬だけ、ヒラリつと上がったので見えるかと思っただけ、見えなかった。

見えなかったものの、健康な太腿がパンツが見える直前まで見え、肌面積を最大限まで露出させた。

見えなかったのに、見えた時よりエロい。俺はその一瞬で、チラリズムの何たるかを知るための、崇高な学問の窓を開いてしまったのかも知れない。

親潮ちゃん、俺はこんなんだけど決して同人誌に出る中年小太り竿提督じゃないって事を、いつか彼女に理解してもらいたいな。

「ははは！親潮に同人誌の竿だと思われてるよあの反応！春雨を押し倒した罰だよ！」

「は？あんな経験豊富でしかも大人にしか分からないエロさしてる女の子がさ、薄本の導入みたいな感じで来たらさ、そりやそうなるっしょ？それに俺が最初にのしかかられたんですけど？ねえ春雨ちゃん？」

「反省してますっ……」

「いやいや、いいんだよ春雨ちゃん。俺は全然気にしてないからねっ」

「どっちだし」

「は？俺は今、春雨ちゃんだから許したんだぞ。もしこれが私かわいい系勘違い不細工だったらどうだ？うん？蹴り上げて整形するところだぞ」

「宍戸くん、襖に耳あり障子に目あり、だよ」

「時雨さん最近IQ上がった？そんなことわざつかえるなんて、すご

「いあたまよくなつたね！」

「言つた瞬間後ろを取り、耳元に拳を近づけてきてコキコキ鳴らしてくる時雨は「丁度グリグリ攻撃試したかつたんだよねくうふふつ」と、満面の笑みを浮かべてフィストポジションの再確認。

「フツ……時雨、もう遠征の時間じゃなかつたつけ？」

「「あ」」

時刻はヒトサンマルマル。時計を見てみんなとの時間を惜しむ暇が多少ある。しかし、刻一刻と進む針は止められない、次の出撃へのカウントダウンが始まる。

「残念だつたねっ」

「僕のマネ……つて事でいいんだよね？あとで私刑ね」

「フ……逃げ伸びて見せるさ」

普段の雰囲気とは異なり、出撃する時は真面目モードの白露姉妹。今日の遠征を終える為にスプリントし、執務室から出撃所へとスクラブル発進する。

後に時雨から逃げ回つたが、結果的に捕まって、そして脳汁が骨の隙間から出るかと思うぐらい激しい痛みに見舞われる事となる。それを見た鈴熊は現代人特有の、写真を撮るだけ撮って助けない薄情おマ○コになるのだが、これはまた別のお話。

遠征している間、こちらも中将からの大事なお遣いを済ませる事とする。とても大きなミッション……この国の命運を掛けた、一大ミッション。

―休憩室。

それは中将の言つた捜査だ。

最近深海棲艦の数が増えたり、兵学校に出向く埋め合わせをするために仕事詰めで苦しかったんだ。

それにボランテアでの残業みたいなもんだし、これぐらいは良い息抜きとして考えておこう。

さて、廊下では丁度、屋上でタバコを吸い終わったと思われる整備工作班に出くわした。

「タバコの臭いがするな……」

「あ、し、宍戸司令官！申し訳ありません!!」

「今度からはするなよ。したとしても隠れて……な?」

「は、ハイッ!!アザッス!!」

と、誰だよこのイケメン的なセリフで頭を下げさせた。

チツ……アイコスなんだからいいじゃねえかよ……なんて毒を吐くクソザコにも理解を示し、懐の深すぎる俺カッコイイして高揚感が冷めない間に、休憩室と手書きで書かれてあるドアを開ける。

「お、なんじや提督さんやない。どーしたん、こないな所に来て?」

「いや、第十七駆逐隊はどうしているか気になってね」

「ほう?この磯風達が気になるとは……まあ、これだけの美少女が揃っているとなれば、仕方のない事ではあるが」

「ま、まさか私達に何かご不満な点が……」

「へっへー!浜風そんなネガティブな思考はダメダメえ!それより提督う!谷風のこの前の活躍見たっしょ!」

「見た見た、これはご褒美モンだと思っただぐらいすげーわ」

「ご、ご褒美とは……ま、まさか……!」

おもむろに胸隠しながら睨んでんじゃねえよ。また同人誌の導入みたいな感じになってんじゃねえか。

誰もがシコ○コシコドピュドピュドクドクフキフキ!じゃないんだぞ。あれは全部フィクションだから。

休憩室にはこの子達の他にも整備工作兵や経理科の連中とかも居る。

この前アイコス買ったんだけどよお?タバコ感バリバリ!とか言いながらその鍛えられた上腕二頭筋をピキピキ言わせてる。しかし話し相手のカレはアイコスよりも筋肉に目が行っている様子だ。お、今クセでその辺に捨てようとしたな?吸い殻がその辺に落っこちてたら今度こそ全面禁煙にするぞ。

「いやいや、別になにもやましい事はないよ。それに純粹に歩き回ってるだけだよ、各地の第一鎮守府みたいにスタッフが百人単位で集まってる訳じゃないんだし、小さな要港部なりにコミュニケーション

をね」

「うちらとお話したいん？」

「うん！うらかぜたちとおはなししたい！」

「ふふふっ、いい返事じゃっ」

ポヨヨンっ。

「し、しかし、私達は提督と艦娘……そのように親しく接しすぎて……」

ポヨヨンっ！

「フッフ、いいじゃないか。私達の仲に加えてやろう」

ぽゆんっ。

「ホラホラー！そんなところで立ってるよりこっちに来て座りなっ！谷風の隣だよ！ラッキーだね！につしっし！」

「おう」

スカっ。

身体的特徴というのは、どう足掻いても超えることはできない。

生まれ持ったものなのか、或いは育ちの差なのか……なんにしても、残酷極まりない物だ。揉みしだきテエツ！！

「磯風が持つてるそれって……」

「スマホだが？」

「いや、そのアプリってまさか……」

「知ってるのか、最近の流行りらしくてな」

その名は、アズー○レーン。

擬人化系シューティングであり、ゲーム性はもちろんだが女の子も可愛い。そしてなにより面白い。そして、面白い。大事な事なので二回申した。

制作国は中国なんだが、ボイスが日本語であり、クオリティーも申し分ない。

「まあまあ面白いんだが、パソコンを持ってきてハートオブア○アンができない以上はこれで我慢するしかない」

「廃人……いや、仙人ゲーマーかよ」

このゲームに対しての、俺が花丸を付けたい点としては、日本より

も圧倒的に安い推定必要課金額。

日本発のソシャゲはお決まりの10連で糞しか出ない上、3000円を要する。それもあって、中には周年記念として10連を期間限定で毎日一回無料にしたゲームもある。

中にはドツクを開く等の開放要素、ケツコンやアイテムなど、課金する以外に選択肢を与えないゲームも存在する。

しかしこのゲームは三千元で、20連とランダムなアイテムがもらえる良心設計。もつと課金しなきゃ。

「みんなもソシャゲやるの?」

「うちはグラ〇ル」

「谷風はモン〇ト!」

「わ、私はなにも……」

「ウソつきなさんな〜!この前恋愛ドラマアプリうちに見せたやないかい!」

「あ、あれは別に!」

「やったのか……俺以外のヤツと」

着任して一ヶ月、大好きだった司令官に再会してしまった浜風。

ゲームを一緒にやるのは……俺だと思ってた。

「いやいや違いますから!再会って、会ったことないですよね!」

「実は会ったことあるみたいな設定だったら面白くない?昔イジメられっこから助けられたんだけど顔覚えてなくて、十年間その人だけを想い続けたみたいなの」

「いや、流石にそれはキモいです」

「……え、どこが?」

「その妄想がキモい言うてるんじゃない。だからその真顔やめい」

「司令、今度は悲しそうな顔をするな、流石の私も反応に困る」

「は?悲しくねえし」

女の子にキモいとか言われるの慣れてるし、あ、ヤバ、そんな悲惨な人生送ってきたとか涙出そう。

「ほくら、うちがヨシヨシしたるけえ、元気だしいな?」

「あ……」

普通は頭を撫でる方なのに、逆に撫でられると気持チイ。

「よしよし、良い子じゃね〜っ」

……あ、でもこれで分かっちゃった。

浦風って俺のオカンだったんだ。

こんなにロリ顔で、体華奢なのにエロすぎる体してるし、何よりこの母性。肉欲に溺れる！溺れるウ！

「あ〜くうらかぜままあ〜！」

「もう、うちの方が年下じゃけえ！」

「ハハハ。年下でも関係ないよ」

「いや関係あるじゃろ」

いや、食い下がらせてもらうけど関係ないから。母性がある女性、童心に帰れる男性、お互いが認め合う、このプロセスが成立するだけでそこには既に理想の親子関係が生まれるんだ。

じゃあなんでロリママ系が多いのか？と谷風が聞いてきた。それに俺は、ただの日本人の趣味に決まってるだろ、と淡泊ながらも要点をついた回答で納得させられた。

「年下でも年上でも共通の趣味を持ったりするし、ニュースに興味を持ったりする。年齢なんて関係ないよ」

「ニュース……話は変わるが、東京の事件は何ら進展も無いらしいな」

「ああ確かに！殺人事件とかすぐに容疑者割り出すのにね！」

「いや殺人事件と比べるのはちよつと……」

「何週間か前は俺たち鴨川が見張ってないから悪いとか、クーデターだとか、とにかくすごい騒ぎだったんだよなあ……」

「それって提督さんにとつてまづくないん？」

「海域警備した記録残ってるし、鴨川の海域はちゃんど警護させてたから、モーメンタイだよ。それでも文句があるって言われたら査問でも軍法会議でも持って来いつてんだよ。俺は国家権力にもめげないぞ、民主主義バンザイッ!!」

「では出撃を減らしてほしい人は拳手しろ」

「「はあ〜い！」」

「「ハアーイ！」」

男どもまで手を上げるな。

「人間社会において規律は必要だろ？有能かつ寛大なカシラが居るからこそ、多くを守り、効率が良くなるんだ。システム化をすれば尚更だ。だから君たちは黙って俺が出撃と言ったら出撃なんだよ？専制君主制バンサアイツ!!」

「最悪の民主は最悪の独裁に勝ると、私は思います」

「自分もそう思うツス」

「ほほう。第十七駆逐隊も、整工班のお前らもそう思うんだな？でもな、時には独裁的に成らざるを得ない状況だつて、中には存在したんだよ。だからケースバイケース、何事にも臨機応変にね」

「ウチもそう思うツス！だから女子にはブカブカセーターニーソを履く事を義務付けてほしいツス！」

「それはいいけど、代わりに駆逐漢として出撃してほしいって言ったら？」

「断固拒否ツス!!」

「だよな？俺もお前のエロい格好なんて見たくねえんだよ。俺が教官してた時代から全然変わらねえじゃんかコイツ。自分を曲げないのはいいことだけど。」

もう一度俺のハードな教官時代を味合わせてやろうかテメエ？みんなに着せ替えるんだつたら裸エプロンだろうが。

「軍服とかは完全に海軍省の決定で動いてるから、異議申し立てがあればそつちに……と言いたいところだけど、今は正式な海軍大臣がない状況だし……」

「次の元帥や大臣は誰になるのでしょうか？」

「俺に聞かれても……逆に聞くけど、みんなは誰が大臣で誰が総長になつてほしい？」

「荒木大将一択ですね」

「私もだ」

「そーやな、保守的で国内第一やし。でも、物騒にもこの状況やと、誰が頭取るかでえらい騒ぎになると思うんじや」

浦風ママ……なんて先見の目を持っているんだ……この御方を海

軍元帥にするのへ一票。

「大丈夫大丈夫。たとえそうなくても、ノータッチだったら火の粉は降りかからないから。触らぬ神に祟りなし、みんなもそれ覚えといてね……覚えておいてねツツツ」

「は、はい……」

よし、これで中将からのお役目は果たした、帰ろう。

「まあそんな事はさておいてですね、教官……じゃなくて、司令官は明日辺り鴨川行くんツスよね？」

「え？ああうん、市長との面談にね」

港町を守る要港部は、市町との連携を重視する。その理由はもちろん、武装なんかしていない漁師さんが漁業をしている間に、深海棲艦から守る役割を持つ艦娘達を統率する司令官と市との打ち合わせの為である。

一ヶ月に一回程度だが、深海棲艦が邪魔する以上、艦娘との連携は産業に大きく影響する。海軍が設けた必要科目の一つであり、前に一度大きな深海棲艦が現れてその瞬間から5分以内に戻るのを強要された事がある。ホント深海棲艦クソだと思った。

「そこでお土産買ってきて欲しいんスよ……簪売ってる店なんですけどオ……」

「なんで簪を買うのかはともかく、納得できるような正当な理由がないきゃ駄目だぞ」

「そんな事言わないで！ほら、自分の手、厚いでしょ？」

そう言いながらゴツゴツした手を低い位置から伸ばし、俺の手と重ねてくる。感覚で分かる、札束つてほどじゃないが、数枚程度の紙幣特有の厚みを持った紙が脳裏に高揚感をもたらす。

「チツ……しようがねえな！まあ欲しいっていうのは正当な理由だと思おうし？まあ仕方がないとは思うんだけどさア？」

「じゃあ谷風新型のタブレット欲しい！」

「国家機関情報漏洩防止の為、貴官の申し立てを却下スル。日本海軍の誇りと、この勲章の数々に掛け、我は清廉潔白の大和魂を心掛ける」
「ええ〜！ブーブー！」

「その誇りが私達の前で平然と賄賂行為をしていたのだが、咎めてもいいのだろうか？」

「は？これ簪買うための代金だし、それにお前たちも欲しいモンがあれば買うぞ、だからこの事は黙ってて（日頃のお礼としてな）」

「口封じか……まあ黙っているにしても、パソコンを持ってこれない以上私はなにももらえない。それに欲しければルートがあるしな」

「俺の前で平然とそんなこと言ってもいいの……？」

「その代わり、私達第十七駆の今度のボーナスは弾んでくれ。もちろん、谷風の活躍とはまた別に、な？」

チツ……ちやつかりしてやがんなあ。

簪の件だが、実は隠れた名店があるので、母への誕生日プレゼントにしたいのだとか。素直にそういえばいいのに……それに、袖の下を確認したら千円札が20枚分なんだけど。

つまりお代はピッタリこれで……って意味だよな？

騙された感が半端ないのは何故だろう？仕返しとして、俺がセーターワンピニーソ着てる所を食事中にラインで送ってやる。

ナンパde難破

―商店街。

「わあ〜！すごいですっ〜！」

「いろんなお店がありますねっ〜！」

鴨川の商店街は魚産に重点を置いていながらも、特別魚店が多い訳ではなく、街並みや店揃いも至って普通である。

普通にマックやデニーズもあるし、神社やお寺もある、凄く普通だ。東京みたいな高層ビルが無いところを見ると、田舎だと言わざるを得ないが。

簷屋がどこにあるか確認しながら、大通りを歩いていく。

「お兄さんお兄さん！素敵なお魚屋さんがいっぱいありますよ！」

「そうだね〜。今日は日頃のお礼だから、今日は俺の奢りだよ！好きだけ好きなものを買ってってね〜村雨ちゃんに春雨ちゃん〜」

「わあ〜！ありがとうございますっ〜！」

白露さんは現在出撃中であり、彼女だけに休日が重ならなかったのは何かの陰謀か？等と文句を垂れていたのを思い出す。経理科の大尉くんが俺の指揮の下作戦を指示してくれているので、俺は安心して市長に合う任務が果たせるといふものだ。

とは言え、時雨たちと遊んでいるのかと聞かれれば否定はできない。罪悪感に押しつぶされないために、自分の給料から何か彼にプレゼントする事を心の中で決めた。

「ねえねえ、僕は僕は？僕も好きだけ超高級スイーツ食べてもいいんだよねっ〜！」

「あのポイ捨てされたゼリーの容器のこと？はははっ、もちろんだよ時雨ちゃん！好きだけ食べておいでっ〜」

「はははっ、面白い冗談だね！また顔に百烈拳喰らいたいのかなっ？」

「は？誰がスイーツバイキングなんてここには無えんだからもっと俺の財布を労れ。それにこれ以上やったら整形しなきゃならねえぞ俺。まあ？そんな事になったら？流行りのジャニーズ系にするんだだけさ……例えばあんなのとか」

「「あれ？」」

『最近新しい海軍の要港部が置かれたようできてえ〜！海軍の兵隊さん達に守られてるオ・カ・ゲ・か！とおくつてもニギイワツテマア〜ツス！』

テレビ局特有のクソでかいカメラと、胸に付けてるマイク要らないんじゃないかってぐらいクソでかいマイクを持つスタッフ……間違いない、なんかのテレビのロケ中だ。

深海棲艦のせいで魚が取れないこのご時世で、要港部の艦娘に守られながらここで漁獲を再開できるようになったのは、この港町にとつてはとてつもない助けになるらしい。これによって人が集まり、経済も潤い始める。

俺達の要港部のお陰って解釈で間違いないのだが、恩着せがましい上に海軍の方針なので、別段威張れる事でもない。

俺ら海軍と言う防壁のお膝元、安全安心を持ってこの地へ来れるようになった為、 ज्याニーズ系のへつぴり腰までもが、この港町まで足を運んでいる。観光客はあんまないけど、ここの人の笑顔を見ると俺たちがやっている事の重大さを実感できる。

正直テレビってあまり見ないから、あれが誰だかさっぱりわからなけれど、結構なイケメンなのは確かだ。合コンに居たら顔だけで場を圧巻できるレベルだな。

『では参りましょ〜YOUは何しにここへ!?!』

『カレシと旅行?にキチャツテマア〜ス!ゲキヤバ』

『ウンウン、ポのリンと海つて、マジゲキヤバ、つて感じだよね?ウンウン。あ、うちらモザイク結構コケツコー派なんで』

『あ、はい、そうですね……』

アレはモザイク物だな、地上波で映したら苦情来るぞ。イケメンさんも動揺してんじやねえか。

「ハア……でもああ言うのって中身もイケメンだったら、ほぼ俺みたいなので太刀打ちできないんだよなあ……ね?村雨ちゃん」

「え?あ、はい、そうですね……」

「っ」

え、そんなことないです！つて言つて……くれないの……？

あ、ヤバ、顔隠さないとツ、泣いちゃだめだぞ俺。

「村雨はああ言う全然興味ないもんね」

「興味ないもの……」

「女性をおやつとしか見ていなさそうな感じがします……あんなのお兄さんと比較にもなりませんッ！」

「春雨ちゃんありがとう！俺嬉しい！でも見かけだけで人を貶すのはやめよう！例えそれが良くても悪くてもだよ！」

見かけで惑わされる理由は、有能な遺伝子を残すつて本能の表れである。男は健康な身体の女性を欲し、女は有能な男を欲する。

でもこれ、結婚つて言う人間が社会に秩序を確立するためにつたサンデイカとは相性が悪いから、結局は随所拗れる事になるんだ。

特にこの平等社会の風潮では、外見的優劣を付けるのが悪とされる、とてもいい世の中となっている。だが、本能には逆らえない……春雨ちゃんや村雨ちゃんが、あのヤリメン系イケメンを否定してくれた事を心の中で少し喜ぶ。

ママ〜！あの人クルクルーラーみたいな髪型してる〜！なんてガキ特有の素直さに感服し、それでも爽やかな笑顔を絶やさない所だけは敬意を払つてやる。

でもフレンチクルーラーはお兄さん流石に吹き出しちゃうからやめようね。

テレビの集団は取材をしているのかどうか分からないけど、段々こつちに近づいてくる。この配置で分かる、次は絶対に俺たちに声をかける。

「じゃあ俺ちよつと用事あるから」

「ちよつと待つて下さいお兄さん！」

「痛テテテ!!引つ張らないでえ！」

「ん？なんで行こうとするの？明らかにあのヤリチンとAV撮影用カメラマンみたいなのが来るの見越してどっか行こうとしてるよね？」
「いやだつて、時雨たちと居たら全国のお茶の間フレンズが『なんでア

イツあんな可愛い娘たちと居るんだよ？金か？』とか言われかねない。それに俺があの子のイケメンさんだったら、うわツナンカキモイノイルゾオ……ってなるぞ」

「それはないでしょ……」

「それに私怖いですっ！アレ絶対に調子乗って長時間話すタイプの人ですっ！」

「春雨はお兄さんと一緒じゃなきや嫌です！」

「アハハ〜可愛いなあ春雨ちゃんは〜ってか離れてエ!!俺カメラに映りたくないのオ！やめてえ!!」

「あのおく少しお時間よろしいでしょうか？」

「「あ……はい」」

結局こうなるのか。

取材だろうが仕事だろうが、ノーとは言えない日本人。流れについていく系の民族性ながらも、独立性を保ち続けているのは素晴らしい事だと思う。だからその個々の独立性を尊重して俺はさっさと簷屋と市長の所に……って、痛い痛い！体のあっちこち掴むのやめて！春雨ちゃんどこ触つとるんじやい!?

「すいませくん。今取材しているんですけどおく、あ、顔大丈夫ですか？」

「「モザイクで」」

「え〜可愛いのに勿体無いですって！これ、全国放送なんですよ！いやあ〜こんなに可愛い女の子相当いな」

「「モザイクでお願いします」」

「あ、はい……」

一応軍人なので顔出しはペケで。そしておだてて顔映そうと必死なカス〇ね。

人気バラエティーの取材が聞きまわっているのは、この街の活性化した現状と調べているらしい。

要港部設立以来、一度も被害を受けていないこともあり、海に面しているながらも安全な市としてPRされている。稼げる仕事が多いとも書かれている、現実的だな。

その事について現地で住民に話を聞いているのだそう。そして無論、指揮官であり当事者である俺は一言も喋らない。

「君達は学生ですか？」

「学生ですね、はい」

「大学生？でもこの辺に大学ってあったかな……」

「ありますけど、僕たちは四人とも中学生です」

「あ、そうだったの!? 凄く綺麗だし、大人びてるからついね、ごめんごめん!」

ちよつと待て、俺も中学生ってどういうコト? 明らかに俺スーツ着てるんだけど。ていうか、この三人は普通に中学生で通れるのか。こども料金利用できるのかな?

しかしそんな事を考えている内に取材が終わるので、案外早いと思つた。

「いやあくありがとうね君たち! じゃあこれは僕からのお礼」

と言いながら時雨に渡したのは、電話番号が書いてあると推測する小さな紙。渡した後にはチョリーツスポーズで退散する。お前マジで中学生にそれ渡したのか?

「これって……」

「まあ、そういう事なんじゃないかな。マイルドなナンパだから良い方じゃない?」

「ブブーツ!……うん、あの人案外いい人なのかも。僕が丁度お鼻かみたい時に紙を出してくれるなんて。穴戸くんも見習ったほうがいいよっ!」

「おう、ついでにお前の他人への敬意も見習っておくよ。じゃあ俺は市長と例の簪屋んトコ行くから適当に回ってて」

「一人で行ける? 迷子にならない? 知らないお姉さんについていちや駄目だよ?」

「うん、分かった! だから時雨ママ小遣いちようだい」

「どつと行ってキモい」

みんなア時雨がいじめるウ!

―市役所。

ここの雰囲気は、なんとというかこう……さっぱりした感じだ。

使い古されたカウンターや椅子、デスクや観葉植物を除いたら全体的に白い色彩で建物内を包み込む。所々にゆるキャラらしき物もあるが、どこの街にも存在する妖精みたいな物であり、特に気を使う必要はないだろう。

要港部の出撃風景を見続けた俺にとっては、リラックスした風景そのものである。

市長執務室は特にサツパリしている。書斎をバックにパソコンを弄くり回すのは、仕事を十分にこなしている証拠だ。

「お忙しい所をすいません、妙高さん」

「いいえっ、むしろこちらこそすいません。提督としての義務もあるのにワザワザ……」

「これも立派な提督の義務ですよ」

「ふふふっ、そうでしたね。私の妹は元気になっていますか？」

「え……あ、はい、元気にしていますよ」

引退した艦娘であり、その名を活かして当選し現在の立場で華を咲かせている彼女は妙高さん。なんとあの合コングこと足柄さんの姉である。

足柄さんと同じく美人であり、何事にもおおらかで笑顔を絶やさない人柄ではあるものの……現役時代は仲間からも恐れられたほど強かったという伝説がある。そんなに強かったらアンタが現場指揮官やってよ、なんて言うのは野暮だ。彼女は軍人ではなく、政治家なのだから。

あと、足柄さんは俺の要港部に居ねえから会ってないし。

「ではこれが護衛作戦のスケジュール、並びに作戦指揮の詳細です」

「え、作ってきたんですか!?話し合ってからスケジュールを考慮するはずですが……」

「既に漁業組合と直背話し合ったので、護衛のスケジュールに変更が必要な時はご連絡下さい」

「す、凄いですね……確認をするために態々？」

「そうですね、スケジュールの変更と作成をより効率的にするために、今度からは要港部へ直接ご連絡を入れるようにと頼んできました」

護衛警備をするに当たって、役所を通じて連絡を入れてから俺たち要港部に伝えられるので、緊急でない限り何日かのラグが生じる時がある。

市からの連絡事項をまとめて伝えるため仕方がないのだが、一説では組織が軍隊への依存性による軍の独立性が高まる事を阻止する為……という説もあるらしい。

信じるか信じないかは、あなた次第。

でも直接連絡してもらった方が早いし、妙高さんの負担も減るーー確実にこつちの方がいい。それでも市との連携の為に来なくちゃいけないので、俺たちがやる事はあまり変わらない。

「あ、あの……」

「どうかしましたか?」

「そ、その……時間が結構空いたので、勧めてもらったSF小説を感想……聞いてくれますか?」

「え、あ、はいもちろんですよ!」

さて来ました、本日のメインディッシュ。

恥ずかしながらも出したのは、俺が勧めたSF小説、と言うなのライトノベルだ。交友の為にライトノベルを勧めたらハマってくれたらしく、来ては彼女の感想を聞くのが一ヶ月に一度のお決まりである。

今回読まれたのは、遠い昔の軍人たちを女体化して現代に呼んだ設定の、抜錨ナグモくん!

罰当たりな事をしてとは思わないのか?なんでマニュアル本の生き写しみたいなヤツを主人公にしたんだ?と作者に問い詰めたぐらい酷い内容だが、イラストが可愛いからどうでもいい。

そしてここに出てくる国はかなり特殊で、自衛しかできない!と言うまともな軍隊を持っていないのに加え、防衛を他の大国に任せている滅亡間近な国だ。

そこでハゲ親父から美少女に転生して、何故か一人だけ男として転

生した主人公一行で、御国の威光と栄光を取り戻すために改革を迫るドタバタラブコメディ。堅苦しそうなストーリーと、明らか合っていないジャンルは正にファンタジーの域を超えたSFである。

「それでですね！このヤマモトちゃんが無双する所がスゴクて凄いですよ！」

「へえ〜そうなんですか〜！」

「イノウエちゃんがマスコツトみたいでして！とてもスゴイんです！」

「なるほど〜へえ〜！」

実は俺自身ウイキでしか見たことがないが、とにかく「スゴイ」らしい。そして聞けば聞くほどヘンテコな内容であり、逆に読みたくなってくる。

そして仕事してください妙高さん。熱心に語ってくれるのは有り難いんですが、ラノベなんて読んでたら色んな方々からドヤされますし。

「これにはなんと！外伝もあるですよ！ワタシポンコツムタグチロイドっていうんですけど！」

「は、はあ……」

何それ、どっかの曲のタイトルみたいですよ！読みたいんですけど！
と言いたい所だが、そっちは既に朗読済みだ。なんで外伝から先に読むんだ？なんて馬鹿らしい質問は野暮だ。タイトルを見て読んだ俺が、実は海軍編もあってそっちが本編なんだよ〜なんて知ってるわけがないだろ。帰ったら読もう。

一街。

三十分以上に長いくせに小学生並の感想しか言わない妙高さんの所からようやく開放されて、交番の前で大きく息を吐く。何時もあそこ行く時は必ずラノベの感想を聞く事に上、良作ならいざ知らずクソしか読まないの、軽い罰ゲームを受けてる気分だった。

でも俺自身が勧めた世界なので無碍にはできないし、何より目をキラキラさせながら話してくれるから嬉しいんだけどさ……人脈構成

は成功しているとは言え、もつと他のモノを勧めるべきだったと少し後悔する。

黒制服とセーラーを着た学生達が帰宅する時間、時雨達との合流と並行してお目当ての簪も購入する。

簪屋、ではなく呉服屋と言うらしい。京都にいた時も一応それらの伝統的な店に立ち寄った事はある。だいぶ前だから、呉服屋ってタイプの店だとすっかり忘れていた俺は、「ここら辺に簪屋ありますか？」って聞いて恥をかいたのはお察し。

呉服屋なら呉服屋って看板に書いとけよ……あ、でもよく考えたらファーストフード店にレストランみたいな馬鹿正直な名前つけるヤツはいないか。

それにしても時雨達はどこに居るんだ？特徴的な髪型してるし、春雨ちゃんの凄いい色した髪の毛で一発で見抜ける筈なんだけど。

少し歩いて合流場所だった海岸沿いに出る。辺りには老後を楽しんでいるババアや、深海棲艦が居るつてのに呑気に遊んでるクソガキがいても、時雨達の姿はない。

海沿いの街には、公共の場所を含めて地下シエルターがあるから、よっぽど早いか奇襲でもされない限りは大丈夫だろうけど。

また一息ついてのどかな海を見る。
陽炎型の艦装が小破したので遠くの海域にいる艦隊を撤退するよう指示し、経理科の大尉くんがそれを承諾したのを聞いて電話を切る。

海はあんなに広いのに……時雨達はどこに居るんだろうなあ……学生みたいに、安全海域のビーチで真夏の海を楽しむことが出来たら、俺もエツロいネエちゃん侍らせてたのになあ。

そしてそれをビーチでなくても実現するのがナンパだ。ハイカーノジョーから始まるヤリクス野郎セリフは何時の時代も普遍的だが、ビーチでナンパってシチュエーションは定番中の定番中だろう。

例えばあんな感じに。

『ハイカーノジョー、オレタチと遊ばなくい？』

『なんか奢るからさく最近カワイイコ見なかったから今スツゴクドツキドキでサア!』

『ハア……ハア……!』

『ええくどうしようかなあ〜っ? うふふふっ』

『あわわわわわわわ……!』

男三人にナンパされる女の子三人つて凶は親の顔より見た。後ろで怯える可愛い二人と、クネクネ体を捻りながら思わせぶりブリンコな態度を取る先頭の女子。

大抵は不細工が褒められてチョーシに乗ってる的なシチュで片付けるが、あの三人は本当に美人だな。

そりやそうだ、あれは時雨達だ。春雨村雨ちゃんは嫌がつているが、時雨は寧ろ上等的な態度を取っている。

だが時雨あんな態度を取る理由は決して男どもに乗せられているからではなく「もしどうしても連れて行くんだったら、奢れるだけ奢ってもらって帰り、何かしてきたらサンドバックにする」って魂胆なのは、長年の付き合いから分かる。

それを可能にする時雨。

それを知らない、只々股間に正直な野郎共。

それを知ってれば男の方を助けるのが筋なのかも知れないが、嫌がつている娘が居たらそつちを助けるのが漢つてもんだ。

「やめろ!」

「「あ、あなたは!?」」

「なんだテメエ! フンツ!」

「フツ」

飛んできたパンチを華麗に躲し、超カツコよく腹へとカウンターを返す。

「グアア——ツ!!」

「やったなアこの野郎ツ!! オリヤアア!!」

「フ……パンチが遅く見えるぜ? フンツ!」

「グアアア!!」

「な、なんだコイツ!? に、逃げろおお!!」

「フツ……また子猫ちゃんを救っちまったな」

「「カツコいい!!抱いてえ!」」

「おっと!そしてまた美少女を落としちゃった……完璧すぎるつても、罪なもんだな……フツ、フツ」

『おいあの男ナンパ野郎から女の子を救ったぞ!』

『凄いかっこいいわ!あんな漢にマク破られたい!』

『何者だろうあの人は……』

「おっといけね、目立ち過ぎちまった!目立つのは嫌いなものよ……」

「お名前は……」

「名乗るほどじゃないさ、じゃあな」

「「KAKKOOII!!」」

……よしつ、ツツコミどころしかなかったけど、とりあえず頭の中の準備体操は整った。

メガネを取り出して、ビジネスバッグを肩にかけて……これでどつからどう見ても一般通行青年にしか見えない、完璧な変装だな。

そしてなるべく殴らないようにしよう。ナンパキモクソゴミクスとはいえ、一般人だから死なれちゃ困る。

「や、やめ……やめた方がいいと思います」

「「あ?」」

威の無い一声に呆れている時雨から、俺の背中へとシフトチェンジして隠れる二人。小声で「怖かったです……!」と春雨ちゃんの声が聞こえる。

ナンパくん達はゴロツキってほどでもないけど、ある程度は体が整っている様だな。

「あ?なに君?殺されたいの?」

「あツ?ンだと青坊……ではなく、彼女達は嫌がっているみたいですよ」

「カワイイコ助けてオレカツコいいしたいんだ?舐めてんじやネエぞオー!」

「これチョーつと痛い目に見てもらおう必要あるね、ウンウン」

「アツ？テメエら全員俺に勝てるよ……じゃなくて、お、おれと平和的な解決を……」

「うるせえんだよオ!!海軍候補生舐めてんじゃねえぞオオラア!!」

「ツ！あ、結構痛い」

「痛えええええ!!」

殴ってきたのでそのストレートへと頭を突っ込む。石頭が炸裂した事で殴ったほうが痛がつてる状況に、時雨も肩をすくめる自称海軍候補生くん。

……ん？海軍候補生？

「テメエ！俺たちの兄ちゃん海軍軍人なんだぞオ!!しかもこの鴨川要港部に居て、スゲえ喧嘩強エンだぞオ!!俺が電話すれば駆けつけてくれるんだぞオ!!」

「じゃあ今呼んで来いよ。但し俺が駆けつけてくれたことに感謝しながら電話しろよ？もしお前たちがここに御わす黒髪三つ編みの奸計にまんまと引つかかっていたら、今頃海にバラされてたんだからな？つて、それタダのメスの化物やないかい！」

「そうだよ君たち。じゃあ本当にできるかどうか今この人で試すから見ててねっ！」

「あくダメダメダメプリンオゴルカラダメダメ」

「フツ……電話で呼ぶまでもなかったみたいだぜ？」

「二へ？」

クソ野郎が顔を向けた先には、道路から渡ってくる一人の青年。ダックドコートで身を包み、いいガタイを持つているその人物の風貌は、正しく軍人と言っても差し支えなかった。他にも男はいたが、彼ほど特徴に合う人は周りにいないので、近づいてくるソイツを兄だと断定する。

「ん？こんな所で会うなんて奇遇だな」

「き、聞いてくれよ兄ちゃん！この変なヤツにボコられたんだよ!!助けてくれよオ！」

まだボコってないんですけど。

「ソイツは許せ……って、兄貴達じゃないですか!?!なぜこんな場所に

弟と?」

「「……え?」」

ナンパ男海軍軍人で喧嘩が強いこの人こそ、我らが整工班副班長の月魔のその人である。

まだ正体を明かしてないんだが、尊敬していたお兄さんがペコペコ頭を下げる相手に突っかかってたーその事実を理解するだけで、ナンパくんたちの顔はドンドン青ざめていくのが分かる。

「こいつらがね、俺の可愛い村雨ちゃんと春雨ちゃんをナンパしてたんだよ強引に。そして割に入ったら殴られたんだ、どういう躰してんだよお前?」

「すいませんッ!!」

「僕もされたんだけど?え、無視?」

「あ、兄貴……?」

「おい、どういう事かア知らねえけど、なんでこんな事した?確かにナンパは悪くはねえけど無理やりは良くねえな?」

「す、すまねえ兄ちゃん!!お、俺ら知らなくて!」

海軍候補生であり、兵学校に行く予定だと供述する将来の明るい若人等が弁解を始めるが、お説教タイムへのカウントダウンは止まらない。痛い目を見て初めて人は学ぶ、熱を持っている内に叩いておいたほうが人としての仕上がりがよくなる。コイツラも、まさかナンパで難破する羽目になるとは思わなかっただろうな……なんつって!

格好良く弟とその連れを叱る月魔だが、コイツもストーカーをしていたうんこ憲兵だったんだよな。

「こ、これには訳があるんだ!聞いてくれエ!」

「あ?」

「お、俺たち実は脅されてたんです!!」

アンチグループ

「J A F G???」

「穴戸くんそれって……なんだっけ?」

「フェミニズムをヘイトするグループのこと」

海岸沿いの道路の端で正座させられているナンパ三人組が供述する。太陽でコンクリートが熱される程の季節じゃないとはいえ、流石にキツイんじゃないか?構わないならいいけど。

彼らが言うには、実はとあるグループに脅されて、無差別に女性へと声をかけるように仕向けられていた事が判明する。

そのグループこそ、合コンの時に散々お世話になったクソ野郎ども
の巣窟、アンチフェミニスト団体の“J A F G”。

市役所に行つて帰つてきたら連れがナンパされて、ナンパ野郎が部下の身内で、実はそれが脅されてやってたなんて……これは宝くじを当てるよりも低い確率だが、いざ当たった時は大抵面倒ごとなのは
何故だろうか?

あと通りすがりのガキが「ままゝあれなくく?」と聞いてきたら「お父さんが何時も会社でやってることよ」と返していたのを聞いて、この世の終わりかと思つた。

「ナンパしてどうすんの?どつか暗い場所に連れてくの?俺の連れにそんな危ない事しようとしたんだけ?」

「い、いいえ!決して司令官様が思っているような事にはならないと思ひますッ!!」

頭を深く下げる。鴨川の司令官だと知られてしまえば、こうなるのは仕方がない事だけだ。

脅された内容は簡単だ。

とある日に弟くんの家に友達とその友達に来て、ナンパで一定人数の女子をとある場所に連れて行かないと犯す♂と言われたらしい。女子をじゃなくて、弟くんのケツを犯す……と。人体の後方に見え隠れする?(アスタリスク)に、デカフトマラが炸裂するらしい。

女子が嫌いな集団なだけあつて、趣は男性の方へと移つてしまつて

いるのだろうか？絶対近づきたくない。

それを弟くんの連れ二人にもされて、今に至る……つまり厳密には被害者なのだろう。本来は警察に通報するべきなんだろうけど、言ったところでそもそも動いてくれるか分からない。

と言うかあの鴨川要港部への意味不明な俺掘られるコールはコイツだったのか？

「じゃあその、J A F G っただけ？ソイツらのアジトと違って、知ってる？」

「え、行くつもりなんですか!？」

「そうだよ村雨ちゃん、君たちをこんな目に遭わせるようなうんこなんて消すに限るからね」

「そうそう、僕達みたいな可愛くてか弱い女の子に、乱暴な事しようとしたんだもん」

「ワンパンチワンキルのお前を倒せる気がしないんだけど」

睨むな、大抵の男子はそれだけでおシッコもんだぞ。

「お兄さんが行くなら春雨も行きます！今後の憂いは断つべきです！」

「いや流石に来なくても……」

「で、でも殴り込みは……」

「いや、話に行くだけだよ？そんな事一回も言っていないからね？」

普通は話し合いで解決しようって発送なるでしょ？村雨ちゃんって案外時雨みたいな拳で語るタイプなのかな。流石は妹、春雨ちゃんに伝染しないように守護らねば。

「じゃあゴロツキ共くん？その、ええくつとホモ集団の所にさつさと案内してくれる？お前たちと違って、俺たちの第四次元は限られているんだよね」

「は、ハッ!!」

―古びた倉庫。

寂れた外れにあるガレージ風の倉庫。

海岸からは離れている上、要港部に近い位置にあるここは、確か土

地の所有権で揉めている最中だと聞いている。

誰も来なさそうな場所にこそ、秘密基地みたいなものを作りたがるのが中坊というものだ。俺も昔はよくやった……家の中のベースメントだったけど。

錆びたドラム缶やコンクリートのブロックなど、座る場所には困らなさそうだ。隠れる為の青いビニールシートもある。こりやヤクザ映画だったらドンパチ待ったなし。

ここで数十人の男が、二人の男女を引き裂こうとしている。

「キヤー!!ダーリントスケター!」

「や、やめろお!ぼのりんを離せえ!!」

「ウツキヤツキヤツキヤー!どつかのパズルでドラゴンするゲームに出て来そうな雑魚みたいな名前しやがってよお!?!ほおくらちよこちよこちよこ」

「キヤー!ヤメター!」

「や、やめろお!な、なにが目的だ!?金か!?ケツか!?!」

「なんで金の次にケツが出てくるんですかねえ……俺たちの目的はただ一つ、男と金を食い物にするこの世の女共にも、啓蒙し、裁きを下す事だツ!!」

「その通り」

「お、お前は!」

J A F Gが開いた道から来たのは、合コン事件から見た事がある男性だった。隣にいる小物風の男を連れ、捕えられている男性に近づく。

この男性こそが、合コンの時にクツサイセリフとお金で時雨を落とそうとしていたチン○スことタクヤシンだ。

「俺はJ A F Gのタクヤだ。こっちのが言った通り、俺たちの思想を啓蒙し、正しく生きる方法を伝授するために俺たちは活動している」
「なんて強引なやり方なんだ……これじゃあまるで洗脳じゃないか!」

若干J A F Gの中にも頷いているヤツがいる為、自覚はしている様である。「そしてなんて細やかな活動なんだ……」と呟いた時も頷いて

いた。この組織はその内終わるだろうと、内心哀れむ。

「テメエチヨーシこいてんじやねえぞオラア！タクヤさんが下手に出てりヤアいい気になりやがってエ!!こっちはお前のカノジヨに他人棒でNとTとRしてもイインだぞオ!!」

「あ、いや、そこまでするつもりは……つかお前誰？」

小物風の男を牽制するタクヤだったが、彼の勢いは止まらない。

「や、やめろお！ぼのりーん！」

「キヤー！」

「グへへへエ！彼氏の大砲しか味わったことの無い境界線にイ……境界線イイイ……この名刀、肉球二重備醜肉刀（ただのチ○コ）をオ……!!」

「キヤー！ヤメテー！100人目はアラブの大金持ちにアゲルって決めてたのにー！」

「……は？」

そして放たれた唐突な言葉に彼氏はおろか、取り囲んでいた男全員がドン引きする。アブねえなアバ○レ、危うくバイ菌移されるトコだったぞ。

「でもゴム持ってきたから安心だもんネー！オラア股開けやアこのゴールドディッガーがア!!」

「ふんツツ!!」

「ぐあああああ——ツツ!!!」

「だ、誰だお前たち!!」

小物風男性が壁の方へと飛んでいく。周囲の男どもが目を向けた先に立っていたのは、一斉に殴りかかった三人の美少女である。可愛い見た目からは想像もつかない威力で悪を破壊し尽し、特に時雨は痛い。

「ふうく危なかった。危うく穴戸くんを性犯罪にする所だったよ」

「いいえ、兄貴だったら大丈夫です。少しやり過ぎてる感は否めません……」

「き、君はあの時の時雨ちゃん!?ってことは……」

「痛ツテエ……そう、俺だよ」

「あのオタク野郎かよツ!!」

吹き飛ばされた小物風男性つてのは俺の事だ。偵察がてらに侵入し、雰囲気でグループに溶け込む。これぞ社会で生きていく為の術であり、俺の得意分野だ。

「覚えてくれてたとは感激ツスわ。つてことは、あの時逃してやった恩も忘れてないよな？」

「クツ……俺を嵌めたやつが抜け抜けとオ！お前らコイツを捕まえろ!!」

「「ウツスー」」

羽交い締めにかかる。

駆けつけてくれた他四人も動揺した様子を見せ、男共に拘束される。時雨はそれほど危ない状況だとは思っていない様だ。

一方で、ナンパ三人組は影でコソコソこちらを覗き、カメラで一部始終を撮影してくれている。事態は起こる前に準備しておき、証拠提出をスムーズに行えるように後の事も考えられる俺カツコイイ。どんな事でも準備するスキルを持つてれば大抵の事はうまく行く。

タクヤサンが近づいてくる。

「テメエらだけは許せねえ……俺の覇道を邪魔した奴アどんなヤツでも張り倒すツ!!」

「霸道？三国志に影響されてんの？」

「ウルセエ殺すぞオ!!」

「あ、痛い」

「「穴戸さん!!」」

顔に一発殴られた。

「今の痛いんだけど」

「テメエチョーシこいてんじゃねえぞオラア!!」

「痛」

俺を羽交い締めに行っているヤツからも頭を殴られる。

手加減したのか、或いは俺の体が日々時雨のせいで強靱化してるのか、あまり痛みを感じない。

「「ツ——!!!」」

「…………え？」

次の瞬間、時雨と春雨ちゃんを拘束していた男達が、目の前にいたタクヤサンと共にガレージの外へと吹き飛ばされる。目をパチパチさせている全員の視線は、それを追うようにジャンプして飛び出した時雨達にある。

なんで吹き飛ばされたか分からないって顔をする男達に近付く彼女達からは、殺気が滲み出ている。

『あぁーやっちゃったね君たち。僕が許せない事第二位、仲間を傷付ける、やっちゃったね。あと僕の胸ドサクサに触ったよね？うん、うん。コキコキ言ってるの分かる？言わせた数だけ体をコキコキしてもらおうからっ』

『お兄さんを傷付けた人は悪です。多分殴られて凄く痛いと思います。だから心の傷を埋めるお手伝いしてもらいます。百回ぐらい殴ったら許されると思うので、それまで黙って殴られてください害悪さんッ』

『『ひ、ひいいいい!!』』』

『な、なにやっつてんだア!!早く俺たちを助け——ゴフツ！ゴフツツ!!』

「な、なんだあの女達!!に、人間かよあれ……ギヤアアアア——ッ!!!」

俺を羽交い締めにしてたヤツも背負投げで地面に叩きつける。普通は時雨達を止めるが、今の俺にリミッターはない。後頭部を殴られた被害者なんだから、仕方がないさ。護身のために暴力を振るう必要性が出たんだ。

え、過剰防衛?なにそれ?その言葉学校で習った事ないんだけど。マウント取って一発殴る。

「グアア!!い、痛い!!」

「え、痛い?うん痛い?うん痛いね?俺のほうが痛かったんだよオツ!!オラアこうか!?ナンパしてみるよオラア!!!ケツ晒せエオラア!!俺は男でもイケるんだぞオいいケツしやがってエツ (嘘)!!」

「ひ、ひいいいい!!ゆ、許して!許して!許しテイ!!」

「し、宍戸さん！も、もうその辺で……」

「ダメダメエ村雨ちゃんツツ！鴨川の海にブチ込んで藻屑になるのを確認するまで、ダメダメエ!!」

「兄貴ーいくら何でも流石に可哀想になってくる自分がいます!……オラア何してんだよお前ら!?お前らの味方だろ!?割り込んで助けようとはしないのかよ!?!」

「ム、無理ツス……」

男達は武器を持たない。思いつきの政治団体みたいな奴らが軍人に敵わないし、怖気づくのも無理はない。ボコボコにされて無残な姿を晒している奴らを見て『割り込んだら殺す』という俺らの殺意が伝わったんだろう。

春雨ちゃんみたく小動物的な女子にボコボコにされ、辱めを受けている姿は滑稽そのものだが、俺に殴られた所で恥ずかしくも何ともない。

執務中に考えてた辱め殺法を、コイツ試すとするか……ヘツヘツへ。

――

「ひつぐ……えつぐ……も、もうおれお婿にいけない……っ!」

「あ……あ……」

「ハア……ハア……お、お前らア……ハア……ハア……こんなことして、ただで済むと思ってるのかア!?!」

たった三人に押されたコイツらのリーダーさんが何か言ってるな。誰が今正座させられてるか分かってんのか?情けねえ男達だな?

「お仕置きが足らなかつた見たいだな、今度は三人でこの人ボコつて○そうか」

「はいー」

「出撃より楽しいねー!」

「ま、待ってくれ待ってくれ!!ち、違うそういう意味じゃない!!話を聞いてくれ!!」

「10秒でまとめられるなら聞くぞ」

「クツ……俺たちは、頼まれてやってただけなんだよ……」

「あそこでビデオ撮影してるチンピラ達もそう言ってたぞ？逃げようしている気満々ですね」

指差した方にいた弟くん達が申し訳なさそうに手を振る。

「違うんだ!!俺たちは海軍の人たちに頼まれてやっただけなんだ!信じてください!!」

「……なにツ?どういう事だ?」

「先輩達から言われただけなんだよ!!確かく保守派とか何とか言ってたけど、そいつ等がJAFGに頼んできたって!」

「『保守派?』」

保守派?

俺も聞き返しそうになった。しかしこの場にいる殆どが、単純にその単語の意味を理解せずに頭を傾げている。理解しているのは村雨ちゃんと俺だけだ。

秘密を共有しているみたいでなんかワクワクする。

同時に身が震えた。

関係のないと思ってた所で、まさか海軍規模で問題になると予測されている『保守派』の単語が出て来るとは。

街で偶然出くわしたナンパから、日本海軍の命運を握る派閥争いの陰謀の片鱗が見えて……中将に頭を下げて頼まれた以上は、無視できなくなった。

なんでアンチグループと保守派が結託してるんだよ?いや、どうやらこのタクヤとか言うヤ○チン幹部でさえ知らない様子だから、結託と言うよりは契約?なのか?

現代日本を代表する文化である援助交際よろしく、その場限りの金銭的に繋がった協力関係にあるだけだろう……そう俺は予測する。

……メンドクセエ……!これほど面倒くさい事は滅多にねえよ。これで残業も増えて、疲れも溜まって、ストレス溜まって万々歳ってこつたあ。これ以上俺が働く事になったら俺が海軍でクーデター起こすぞ。要求は週休8日、世界一グロリアスなレポリューションだ

な。

……クソツ！できれば事故つてコツチに転生してきた中高生に、正義感の三文字を掲げさせて海軍の壮絶な陰謀と戦わせたい。どっかに居ないかな、そういうチート系男子。

「……おい」

「ん？」

「お前は、何者なんだよ……時雨ちゃんとも仲が良いみたいだし、海軍の関係者か？」

え、言つてなかつたっけ？

「あの要港部あるでしょ？アレの司令官」

「「……へ？」」

久しぶりの仕事

あのクソザコアンチグループを鴨川に残るのを許したが、その代わりに保守派との事を知るJAFGメンバーと引き合わせるように頼んだ。

カルト的な布教活動も『普通に』やってれば、“俺の方は”目を瞑る事になると約束した。取り締まるのは俺の仕事じゃないし、何よりこれ以上アイツ等には関わりたくない触りたくない面倒くさい。

しかし海軍が関わっているともなれば別だ。トップと話した所でクライアントの秘密情報なんて話してくれないだろうけど、その保守派が関わっている事実だけ知りたい。まだ全体像が見えない組織的な動き……見る必要の無いものに興味を持ってしまうのは心理状態を、通称で冒険心、または漢の性というんだ。

……さて。

「クリルタイしよつかっ」

「突然どうしたの？」

「白露さんがご存知の通り、この鴨川要港部で内部告発がありました」「な、なんとおっ！そ、それはいかようなものなのでしょうかっ!?」「それを今聞こうとしているんです。さてと……これで何故ここに呼ばれたか、お前も十分に分かってくれたと思う」

「ゴーヤは何もしてないでち!!ただ勤務アワー24時間ブツ通しをやってみたかっただけでち!!」

「それが問題ダツツツてんだロオガア!!ナニ毎度毎度同じこと言わせてンダア!?このハゲエエエエエ!!」

「あははっ！穴戸くんどっかの政治家みたい！あはははっ！」

「はあああツツ……!!」

ゴーヤの隣で頭を抱える夕張には同情する。

元ブラック企業に居たゴーヤ……何処ぞのクソ会社が彼女を、自分を追い込む事に生き甲斐を感じてしまう変態へと変えてしまったのは、今に知った事じゃない。要港部には更に人員を追加して、多数の

整備工作班及び艦娘が加わった事で要港部そのものが力を得ている状況だ。

ここに限ったことではなく、他の要港部でも同じように増員が施されている。逆に鎮守府みたいな主要海軍基地は少し減ったと聞いたけど、最前線で戦う俺達と比べてもまだまだ鎮守府の方が多いで、ケチらないでもっと寄越して欲しい気もする。

しかし、増加する要港部の規模に伴って個々の仕事の量が減る訳ではないが、初めはドタバタする事が多い。

特にルーキーの入隊で指導係としてゴーヤが抜擢されたせいなのか、前より忙しさを感じるようになったゴーヤ。その肉体と精神への負担が、彼女の内なる能力（病気）を発動させてしまったのである。「ごめんさい、私が付いていながら……」

「いや、監督責任は俺にもある。夕張が気に病む事じゃない」

「そーだよ夕張！ゴーヤより疲れた顔してどうするの！」

「提督……白露さん……」

そうだ、監督問題は先ず俺に来る。それが連鎖して横須賀方面軍の司令官に行って、最終的には海軍大臣か軍令部総長に行くんだ。小説の話だが、軍内部でイジメが発覚して、結果的に陸海空軍のトップが辞任する羽目になったストーリーを思い出した。

責任感が強い夕張は、部下思いな故に罪の重さを感じやすいのだろう。

「ゴーヤ、この指は何本だ？」

「二本でちー」

「違う、一本だ。久しぶりにそんなふざけた事するから、こんな距離でもまともに見えないじゃないか」

「えっ、あ、そ、そうじゃないでち！提督の腕が日本の地図みたいだったからあ！に、日本でちっ！」

まさか見えないどころか質問すらまとも理解出来てないとは。

「とりあえず今日は休め、お前をその状況で出勤させる訳には行かない」

「ご、ゴーヤはまだ働けるでち！みんなに迷惑かけるわけにはいかな

いでち!!」

「ゴーヤ、休んで」

「あう……はい」

「よろしい。夕張、部屋まで頼める?」

「もちろん、ほら行くわよゴーヤ」

退出していくゴーヤと夕張の後ろ姿は正に良い上司と、良い部下って感じた。夕張の方が後輩だけど、年功序列とか学歴に比べたら関係ないよね。ゴーヤの方が幼く見えるし。

「ハアあゝ……」

「あれれ?今日は本当に元気が無いだねっくどうしたの?」

「いやそれがですね?時雨たちとお出かけした時に、変なカルト集団と会いましてね?ソイツ等のボスと話すっていうこの世の終わりみたいに面倒くさい予定入ってるのに、上乗せしてゴーヤが病気を発症ですってエ?こりや俺に追い打ちをかけて、行動意欲を無くそうとする組織的な陰謀ですね、って思いまして。ハアゝ……」

「そうだったんだあゝふくん」

「そうなんですよく。え、な、なんで指をコキコキさせてるんですか?」

「カルトだか組織の陰謀だか知らないけど、あたしまだ穴戸くんのコト、許してる訳じゃないんだよね?あたしだけ除け者にして四人で街を歩いてきたなんて、滅多にできる事じゃないのにく、あたしだけ居ない時にとかね。あとお菓子がポップガムだったのが腹立っただけどつ、あははっ」

怖い、本能的な怖さだ。肩を回してきた白露さんから漂う甘い香りを堪能する余裕がないほど、浮かべている笑顔の奥にある般若と怒りが大きい事を示しているんだろう。

一人ぼつちは、寂しいもんな……あとポップガムは時雨の提案だ。持ち合わせがそれしかなかったから、らしい。ガキ大将みたいに献上品を常に所望しているのもどうかと思うが、それに対抗するようにチンケな物しか買わない時雨も大概だな。

いや、別にポップガムがクソって訳じゃない。俺は好きだ。

「でも美味しかったでしょう?」

「うん!それでねそれでね?あたしが風船にして破裂させたら『姉さんの脳細胞も、そんな風に……』言っただよ?ひどくない?」

「どうしようもないほど余計な事を言いましたねえアイツ。それでコブラツイストの刑ですか?」

「うーん、少し違うかな?今朝は白露バスターだったかな?忘れちゃったっ!」

テヘペロと舌を出す白露さん。

彼女の奥義がキン肉バスターのような技なのかはともかく、時雨は現在その技を食らった身体で出撃している事になる。

なるほど、だから全身にダメージを食らった様な顔をして出勤してきたんだな。今日は村雨ちゃんも同行しているので、心配は要らないと思うけど。

「宍戸くんは紳士だから、こういう時にどうやって女の子を慰めるか分かるよねっ?お姉さん信じてるからっ!」

「もちろんです!はいどうぞ!」

「いや、現金が欲しいんじゃない?」

ナマじやダメなのか。俺は直球な漢だからさ、何でもかんでも回りくどくギフトカードとかプレゼントとかにして渡すのって面倒だと思っただよな。

それじゃあ手間が掛かってないから感謝罪愛が伝わらないとか抜かす奴いるけど、結局欲しいのは、値段でしょ?俺は知ってるぞ、海軍で知り合いの女にプレゼント渡した時に、受け取ったモノの値段を事細かにチェックしてたのを。

その上、高かった順からランキング形式にして男の価値を定めてたのが本当に腹立った。

白露さんの場合はマニーじゃなくて、除け者にした埋め合わせを要求しているのだろうが、正直に言うとは忙しいからあまり出かけられないんだよなあ?

「もうっ……こういう時はね?……俺の心を奪った罪深きミュージズ、君の為なら天から授かりし休暇という名の一日を、君の為に捧げよ

う』って言うべきなんだよっ?」

「それ一言一句合つてなくちや駄目ですかね?」

「ああもう! スベコベ言わずに、あたしと一緒に休暇を過ごしてくれればいいの! 女の子から言わせない!」

「す、すいません。そのお誘い、有難く頂戴しますよ……俺のミュージズ」

「う……やっぱそれ無しでお願い、ちよつとキモいかも」

これを理不尽と言うのだ。

―出撃所。

翌日の工房は、湿り気のある潮風を帯び空気が荒い。この環境だけを理由にボーナスが欲しくなる程だと、毎日愚痴っていた記憶が蘇る。

「提督?」

「なんででしょうか白露さん」

「いやね? 普通休日を過ぎすつてね? お外でらんでぶくの的なヤツなの。なのに、なんで工房にいるのかな? って思つて」

「そりや決まってますよ、この俺様が久しぶりに、直々にこのブーツキャンプレベル10みたいな仕事を手伝つて、仕事ぶりを見せてあげようと思つたんです、見たいつて言つてましたよね?」

「う、うーんそうだけど……」

「それに日頃から重労働をこなす彼らに、囁かな恩返しも兼ねてますので……ほら素敵だろオオマエ等ア!!」

「「ウツス!!」」

整列する集団の応声は、体育館並にデカイ工房から、演奏中のバンドを応援するファン並に煩いエコーで返ってくる。

俺はこの休日を使い、白露さんへの埋め合わせをしようとは思つていたのは事実だ。だがこれ以上の外出はできない。提督として最低限の外出に留めなければいけないのを理由にして、白露さんには仕方なく俺の整備工作班としての働きぶりを見せつける事にした。前に話題で、俺が整工班として働いてる所を見てみたいと聞いたので、そ

の言質を利用してもらった。

その他にも、なんで働きぶりを見せるかには幾つかの理由がある。一つは俺が運動も兼ねて久しぶりにやりたかったから。そしてもう一つは、部下への示し付けである。新人も多くなり、やったことが無い、或いはできない事を上からとやかく言う上司は嫌だ！なんて本当にガチクツツソ生意気にも程がある話題を、この地獄耳が拾い上げたので。殆どの場合は事実だし無視が鉄則だが、できる能力があれば使わない選択肢は無い。

『提督が直々に班の手伝いするのか……？』

『ウツソやろお前』

『かなりの重労働やさかい、何考えとるんや？舐め取ったらあきまへんえ？』

地獄耳故に、無知な新人達の話が聞こえてくる。高校の時はコレとブサイククソアマファツキンJKのせいで、散々な学園生活を送ったもんだ。

今日は俺の休みなので指揮は一応するものの、遠征や出撃などはかなり大雑把な内容だ。だからと言って班の仕事が減る訳じゃないのは、俺が現役だった頃と全く変わらない。

「じゃあ今日はどうしようかしら？提督が班長になります？」

「そうだな、久しぶりにやってみるか……一時的に夕張は副班長に降格、そして月魔は副班長補佐とする！」

班が作る列の中から「副班長補佐なんてあったか？」なんてツツコミが聞こえた。いやあるんだよ、うん、大きな鎮守府に限ってだけど。

「了解しました！」

「了解ッスー！」

「て、てーとくう……今日ゴーヤは」

「座つてろゴーヤ、作業服を着ようとするな」

休憩用のベンチで足をぶらぶらさせてる白露さんの隣には、ゴーヤが居た。彼女は俺とは逆に平日だが、敢えて休ませている。

その理由はもちろん、ゴーヤのシンプトムへのデトクシケーションにある。彼女のクソみたいな重度のワークホリックは、外に連れ出す

だけじゃ駄目だと鈴谷たちに聞いたので、荒治療だが今日は何もせず
に俺達の働く姿を見るだけ……と言う訳だ。軍医さんから聞いた話
だと、そうする事で欲求を制御する能力を会得させる事ができるらし
い。

軍医さんは精神科じゃないのであまり役に立つかは分からないが、
少なくとも効果はあるだろう。これがデトックスじゃなかったら、エ
サを見せつけておきながら敢えて届かないようにするなんて、DS以
外の何ものでもないと思った。

うまく行けば、今後のゴーヤの心境にも影響が出るだろう。

「これは休養、デトックス。そのふざけた体質をぶち壊す為の治療な
んだ。普通の格好して、今日は俺達が働いている所を見ているだけ。
それだけだ」

「そうよゴーヤ、あなたの為にも頑張るのよ、みんなも了承してくれて
るんだから」

「で、でも申し訳な」

「申し訳ねエのはこっちだコラア!!起床して仕事場に来てみればもう
朝の準備が何故か終わってるとか規律に関わるんだよオオラア!!」

「ご、ごめんでち……」

班の朝は俺より遅いが、一般的には早い部類である。個人でやる朝
の準備運動から朝食の早食い、そこから指定されている仕事場に向か
い、出撃の為に準備する。今現在、準備は大方終わっているのは既に
確認済だし、今日は哨戒と遠征だけなので、この程度で問題は無いだ
ろう。

後は艦娘達が来るのを待ち、艀装の整備を万全にしてスムーズな出
撃が出来るように心掛ける事が重要だ。ここから始まるモーニング
ラッシュを考えれば、この間は正に、つかの間の休息と言えるだろう。
「よしお前らア……提督直々にシゴかれる準備は出来たかア!?出来て
るに決まってるよなア!」

『『はいッー!』』

『『はいッー!』』

「あ、ゲイ共さり気に近づかないでっ」

「「は？」」

怖い。コイツ等のせいで、早くも俺という存在を統括するヤル気メーターが暴落してる。

「新入りの子たちもっ！ 私達の経験練度エキスぺリエンスを見せつけるわよ！ 失望させないでね！」

『『は、はいッ！』』

夕張と月魔は激励を浴びせ、士気も高まる。綾波ちゃんがこの場に居れば『シゴク』という単語だけで悶絶してたこと請け合いだ。

「今日の任務は遠征と哨戒だ！ 簡単に聞こえるだろうが、哨戒にて強力な艦隊と鉢合わせる可能性もあるッ！ くれぐれも慢心しないように！」

これは本来艦娘達に言うことだが、班に伝えるのも重要である。

「参加するのは昨日の第一艦隊と、あと第二艦隊からは……」

今日出撃する艦娘の名前を伝え、どんな作戦内容なのかを伝えるのが班長の仕事だ。今読み上げてる名前には、新人の親潮やエースの鈴熊が載っており、攻撃型軽空母の整備と言う事もあつて項垂れるヤツ等がいる。

そりやそうだ、軽巡とか駆逐艦より難解な構造をしているからな。いい装備や最新鋭技術には、時間と資材と高度な整備技術を要するーこれは正に、つい最近新調された鈴熊の装備に当てはまる。

そして最新装備の使用は必要事項でも無いのにも関わらず、折角だからという理由で装備させているのが、この俺である。

申し訳ないと思うけど、面倒くさい仕事をしてる研究機関のピーポー達の事も汲み取ってあげろ。本来なら俺も、成果を上げる為に全部を新装備にしたいって気持ちがあるんだけど、慣れた艤装で仕事が出来るようにって班や皆に配慮しながら新装備を大本営に要請するので、俺への感謝も忘れずになッ？

まあ急に装備を新調したいと大本営に言った所で、直ぐに手配されるかどうかは疑問だけど。

「し、司令!?!なにをやっているんですかこんな所で!?!」

「今日は休日だったのではなくて?」

「一日班長だ」

「穴戸っち、そんな一日署長みたいなコトして休日過ごし方がいいのっ？」

早速入ってきた5人の艦娘は鈴熊親潮を含め、陽炎と浦風もいる。少し動揺するのは無理もないが、まるで御年100歳のベテランドライバーが40年ぶりに運転する車に乗せられる思春期のガキみたいな顔をするのはやめてくれ。俺はまだまだ現役だぞ？

いや、現役っていうセリフ自体がジジ臭いのか？そんなにジジイだと思っただったらさっさと俺を定年させてくれ。まだ遙か先の話だけども。

日本軍の定年は階級によって違い、階級が上がっていく度に定年が先延ばしにされるので、期が近づいてきたら昇進させられる事実を同期に聞いたことがある。

65歳で引退したい大将さんは、例え元帥のオフィアがあっても丁重に断る口実を作っておくのが鉄則である。

「俺は元々整備工作班だったから、コイツ等を手伝えらると思っただまには動かしてなかった体を動かすのも良いもんだと思うし」

「それって迷惑にらん？」

「フツ……元整工班の俺には、Nothing is impossible 能だからさ。知っ

てたか？俺のオールマイティーさはデスクワークに留まらないんだぜ？」

「ヒューー！カッコイイよ穴戸テイトくん！そのカタコト無くせば更にカッコイイー！」

フツ……万能型高性能な俺カッコよすぎイワロタアって感じですね？分かります。例え異世界に召喚されたり、中世並みの軍事力しか持たない異世界帝国に日本軍のORSTITUTEまではできないとしても、これぐらいは可能である。

……よし、そろそろ七時ピツタリだ。先程まで雑談を交わしながら朝のテンションを高め合い、出撃準備を整えていた出撃所も、作戦遂行時刻から一分を切った所で静寂に包まれる。

一般社会が仰天する軍隊の要素の一つとして、徹底した時間厳守主義が挙げられる。作戦遂行は、一秒を刻む針が12を通り過ぎてからと……宛ら年越しのようにカウントダウンをするのが、班長の仕事だ。

「これより第一艦隊の遠征任務始めエ！出撃！」

「はい！！！！」

こうして久しぶりに味わう、班長としての長い一日が始まる。

俺の体力と根性……ここで見せてやるぜ。

ゴーヤはよくモテる

「ぜえ……ぜえ……！」

「だ、大丈夫でち!? やっぱりゴーヤが代わったほうが……」

「来るなアゴーヤア!! この俺様アア……ニイ……! ハア……ハア……! デキナイコトオハアアアアアイ!!」

開始から3時間が経過した。

哨戒での弾薬消費が予想以上に激しく、帰ってきては補給、また艦装が壊れれば修復、の繰り返しである。

昔の俺なら問題なかっただろう。しかしデスクワークだけで、適度な肉体労働と両立しない仕事をしてる現代日本人の鑑ごと俺様は、慣れていない運動を突然する事への肉体への負担が想像以上にデカイことを改めて認識する。

分かるか?

装甲のボルトのネジを絞める時にレンチが上手く入らないとムカつく、

12センチ砲塔が替えるかそこで直すか迷うほど微妙な曲がり方をしている時にムカつく。

流星を置いてあるはずの保管庫に瑞雲が置いてある時にムカつく。小さな事を一々ムカついていたら発狂するので、そこは司令官としての威厳も考慮し優しく部下に教え、それでもなお同じミスを繰り返しすヤツへ特別、パワハラにならない程度にキツイオシオキを考えていたら時間が更に一時間進んでいた。

「息切れこそしているものの、久しぶりにやったと言うのにこれほどスムーズにできるなんて大したものです。仕事速度も部下たちからは好評を得ていますよ、兄貴」

「ゴクツ……当たり前だよなア?」

常に重視する仕事の速度は幸いにも落ちていない。

決められた仕事をする場所で最も求められるのはずばり、速さだ。

特に軍隊では完璧にこなす事が前提だが、どんな仕事でも早さと人脈構成を行えば、大抵は何とかなる。

舞鶴とは違った新鮮感溢れる白い壁の塗装と、鉄に触れる度に思い出す仕事の感覚は、脳内をリフレッシュさせてくれる。

「一日班長提督、こっちは……」

「ああ、これの弾薬はもう使わないから倉庫にぶち込んでくれ。それから倉庫からついでに古い燃料も持ってきてくれ、鈴谷達が戻ったら艦載機に使おうと思う」

「ハッー」

下つ端連中も、やっと俺の素晴らしさが分かってきたらしい。前から知っているヤツからはあまり驚きを得られないが、新人達からは大いに喜ばれている。ただ勉強が出来るからって何時も上でベラベラと偉そうにしてるチ○コ頭ディックヘッドの汚名は、ある程度だが拭う事ができた。

女々しく俺の陰口叩きやがってヨオ？何が成り上がり小僧だアア？テメエ等は艦娘の身体触れてサルウみたいに性欲沸き立たせてるくせによオ？

『こ、これで大丈夫ですか鈴谷さん？』

『うんバッチリ！ありがとうねっ！』

『『は、はいッ！』』

ハッ、まったくこれだから下つ端連中はダメだな、自分の下半身すら制御できないとは。

コスプレかと思うぐらいエツロい格好しておきながら、平然と着こなしてるなんて性欲泡立て機にも程があるのは同感だが、少しは俺を見習って欲しいもんだ。

「ふう……全くスケベだなあ……」

「提督、スケベって本来男の人に使う言葉よね？助平って、漢字で書く
と男性調だし」

「分かってないな夕張。今は男女平等化社会だぞ？その風潮と言うなの突風に煽られて、改変を余儀なくされた言葉は看護婦やOLだけじゃないんだぜ？」

看護婦は看護師へ、そして最近ではOLはなるべく女性社員や女性事務員として言うようにと風潮ができている現代だし。あと、スケベは別に男だけに使うもんじゃないしな。

「それに鈴谷は別に何もしてないじゃない。私から見ても、男性を惑わす行為をしていたようには思えないんだけど……」

「簡単に説明するとな？男側が凄くサカってる原因のそもそもは、エッチな服と身体してる女性側にあるんじゃないかって論理がある。男を引き寄せる為にあんな身体になるなんて、どっちがエッチでスケベエなんだよ!? ってことだ」

「意味が分からないわ……」

「じゃあアレを見てみる」

『あははっ！鈴谷はこう見えて身軽だからね！あんな砲撃へっちゃや
らへっっちゃら！あははっ！』

たゆんっ、たゆん。

『『お、俺達のは、砲台が……へっっちゃアア……！』』

「な？見た通りだとは思うけど、あんなエロい身体してるせいで、野郎共が砲撃と砲台の違いが分からなくなってる、前かがみになってるじゃんか。これじゃあどっちが悪質な潜在的助平なのかはお察しだよな？」

「あ、うん、そうね」

これ以上はないほど適当な返事が帰ってくる。しかし目線はおもむろに下を向き、僅かながら顔に悔しさを浮かべる夕張。格差社会とはこの事か……平等化を謳うのならば、まずこっちの格差も無くさないとな？

「浜風、出撃します！」

「陽炎も出撃するわよ！」

「ほら早うこっちの整備せんかあ！遅れるじやろ！」

「ヤベツ、ダベってる場合じゃねエ！」

……クソオ！やはり肉体労働というのはハードだあ！やるんじやなかったア!!軍隊では精密な技術を常に要求される、一秒も無駄にできないハキハキした空間……海外では同じ仕事量なのに平均年収が倍なんだよな。それに加えて仕事がズサンでも笑って流すから腹立

つ。

艦娘達が出撃し終わったあとも、帰ってきた時の準備を急ぐ必要がある。その間に弾薬の製造とかもやって……これほど色んな事をやっていると、例え陸軍でも音を上げるだろう。

「ハア……ハア……ハア……ツ！お、オレ……ノ……ケツハア……ラベンダ……ノ……カオリ……」

「きたないわよ」

「え、班長提督のケツってラベンダーなんですか!? やりたくなくなりますよ」

「やめて」

息が切れ、運動によって疲れてるときに、ワケの分からない言動を言いたくなる発作が起こる。

みんなもそろそろ疲れが見えてきてる、切りのいいところで休憩を提案するのも、また班長の仕事である。これは決して俺が休みたいからじゃなくて、あくまで指揮官としての義務である。

――

「いやすげえッスよ宍戸司令官！俺、自分がボルト絞めるのスゲー早いと思ってたのに、俺より早えんですから！」

「提督のおかげで早く仕事が終わりました。ありがとうございます」

「てつきり少佐は金とコネとお勉強だけでノシ上がったクソチ○カス野郎だと思ってたのに！実力もあるんすね！」

「ハハハ、よせよせ。あと誰がクソチ○カスだ？お前減給な」

新米共と一緒に、一時の休息。

共に何かを頑張れば、大抵は分かり合えると言う事を、道德の授業で習わせるべきだと思ふ。

でも辺りを見渡せば変化はその程度であり、それ以外に目立った変化はない。

「この俺様にかかればどうって事無いんだよ。でもこんな俺でも、下っ端時代からコキ使われててな？何度音を上げそうになったこと

か……」

「今の俺たちと同じじゃないツスか……俺なんてもうヘトヘトっすよ
〜!」

俺も今の本音は“死ぬほど疲れてる”なんだが、それでも格好つけてる辺り、俺の体力はまだまだ落ちる所まで落ちてないと感じる。休憩している艦娘達はクツソ元気有り余りで、実際の戦闘と航海を行ってる奴らより体力の消耗が激しいとか……情けねえわ俺。

まあバテるのもいれば、艦娘との会話に花を咲かせる野郎もいるわけだから、疲れ具合なんて人それぞれってことだな。

「ハツハツハ、まったく最近の若者はこれだから困りますなあ。私の若い頃など……」

「黙れバブル世代ツ！就職活動無し！サービス残業無し！ボーナス増し増し！なのに給料が今の倍は貰えるユートピアで生きてきたアマちゃんクソハゲオヤジの若い頃なんて聞く必要ナシイッ!!」
「っ……」

あ、ごめん、そんな泣きそうな顔しないで。ただ、俺のほうが辛い時代を歩んで俺マジ歴戦の兵士だわ的なアピールはやめてくださいよオツサン。そんなことは分かっていますから。

「すいません、失言でした」

「いや言い過ぎてレベルじゃねえツスよ?というかオツサンさん、真顔で涙目にならないでくださいよ。そんな職業軍人フェイスだから嫁さんに逃げられるんツスよ?」

これを追い打ちと呼ぶ。

「……ブワアあ」

「オツホンツ……馬鹿正直に働くのが美德とされてきた時代はありますが、それを実際に実行して受ける恩恵が極めて少ない時代となつてしまった以上、則るべき訓は他にあると自然と考えてしまうのです……なあ?そう思うよなあゴーヤア!!」

「……え、な、なんでこっちを見るでち!?!」

「つまりな、ただだけ頑張っても結局が上の利益にしかならないんだよ。それを踏まえた上で、ゴーヤは無意識に仕事をするのをやめよ

う」

「あ……」

休憩中に同僚から声を掛けられつつも、ゴーヤは横にある艦載機を次々と磨き、微修正を施していた。

働くなどという一日限りの戒律を破り、そして周りには以外にも若いチャラ男系将校。美貌もそうだが、何故か他の娘よりも男を引き寄せてしまうゴーヤの体質はモテ女の典型である。

「ゴーヤさん働きすぎッスよ？そのワークホリック……俺で癒やしたり、とか？どうッスか？」

「あ、あははっ、遠慮するでち」

「でも働きすぎってのは本当ですよ。それだけ頑張ってるんだから、例えその日が出勤日でも、バツクレても許されると思うッス」

「俺は優しい司令官様だから笑顔でいるけど、他の司令官さんの目の前で言ったら即左遷だぞっ」

「し、失礼しましたア！」

『おい馬鹿野郎！宍戸司令官はこういう時でも謝られるより褒められる方が嬉しい人なんだよ！』

『そ、そうなんですか先輩……？』

「おうよ、じゃあ実践するから見てろよ……いやあく流石は司令官！教官時代で直々に手ほどきを受けた自分を誇らしく思います！宍戸司令官は神イ！He is GODDDX！」

「この鴨川要港部が安泰なもの、宍戸司令官あってこそですよ！やっぱり俺の教官だった人は伊達じゃない、ってやつッスよオ！」

「フツ……中々喋れるじゃないか、俺様自前の菓子をやろう」

「あ、これM&Mとか言う海外のクソマズ菓子じゃん、やっぱイカれてんの頭だけじゃなかったんか（これ海外のお菓子ッスよね!?海外にも精通しているなんて流石は司令官ッス!!）」

「っ？」

「あ、ヤベッ」

遅いッ。

その刹那、俺の身体は既にヤツの身体と密着していた。無意識にコ

イツが犯した罪への裁判が心の中で行われているのが実感できる。罪状は侮辱罪、判決、コブラツイストの刑。

「ああああああッッ!!」

出撃所に鳴り響く叫喚。痛そうに響めを利かす顔芸。誰も助けようともせず、花見感覚で余興を楽しむ彼の同僚たち。

「綺麗なフォームですね兄貴！」

「なになにマジ!?コブラツイストとかナマで初めて見たかも、ヤバー!」
コイツにとってこの上ない苦しみだろうが、俺は止まる事を知らない。なに心配は要らないさ、海軍大学の教官時代で伊達に俺のシゴキに耐えた訳じゃない。

俺が酷い司令官に見えるかもしれないが、酷いのは仕掛けてる俺よりも、隠そうともせずに「いい酒の肴だ」と言い張る同僚達の方だぞ。誰か止めてくれよ止め時が分からないじゃん。

「はあーさっぱりした」

「づお……パワハラア……」

「いや、どつちかって言うのアサルトハラスメントですけど」

寛いでいる彼らも余興に満足し、残っていた飯を頬張る。そして残り八分と三十七秒の休息を楽しみ、更なるハードワークへの英気を養う。

この後はもちろん片付け、掃除、点検などを入れ、そしてようやく食い物に浸れるのが最低でも7時からであり、これを周五日、週二日の休暇を挟みサイクルするのがテンプレートである。

これにパターンを未だ見い出せていない、出現した深海棲艦を撃破するというゲリラミッションが最低一週間に一度は入る。

――

前にもあったが、今みたいに食堂で補給していたとしても例外はない。

これをいい仕事場か悪い仕事場かと決めるのは個人の判断だが、どんな職場でも死ぬまで働くだろうゴーヤにとって、何処もそうは変わ

らないだろう。

少なくとも俺の下では例外であつてほしいが、モテるといふ点ではどうする事もできないだろう。

『つて、またゴーヤさん艦載機直してるツスよ！食事ちゃんと取ってくださいつて！』

『あつ、ごめんでち！どうしても気になちやつて……』

『まったく、あとさつきからその可愛いお尻フリフリしてるせいで、ウチの12・7センチ砲がこんな事になつてるンすけど……どうしてくれるんスか先輩？』

『え、あ、ごごごごめんでち！そ、そその、あの……！』

『ははは！お前それただのレンチだろうが！……でもゴーヤパイセン、俺の12センチはガチツスよ？試してみますか？』

『あ、あわわわ……!!』

下ネタに慌てふためいて赤面するゴーヤ可愛い。こりやモテるのも当然か。

「時雨、あれどう思う？」

「……………」

時雨は静かに首を横に振る。

「決まりだな、あの短小野郎達を潰しに行くぞ」

「うん」

「白露も、いつきまーす！」

「ちよ、ちよつとちよつと！姉さんたち落ち着いて！」

「お兄さんも落ち着いて下さい！あんな原始人みたいな口説き方でゴーヤさんは堕ちません！落ちても、落ちたら落ちたでいいじゃないですか！どうせ成功率ゼロ%なんですし！」

「良くないよ！邪念がゴーヤの近くにあるだけで駄目なんだよ！」

「どーどー、まあ落ち着いて穴戸っち！ほら、座つて座つて！そんな事よりも大事な話があるんだけど」

「お、おお鈴谷？」

ゴーヤが短小共に下ネタ連発されてるよりも大事な話がこの世にあるのか？唐突にやってきた鈴谷、そして熊野の姉妹は堂々とスマホ

を片手に持ちながら、そのしいたけシエイプの瞳をキラキラさせて興味津々そうに身を乗り出してくる。

時を同じくして後ろから浦風磯風ペアが現れ、白露姉妹が話す内容を聞くと一言だけ俺に聞いてきた。

「こほんっ、それでどつちに付くの?」

「え?」

「どちらに付きますの!」

「は? 一体なんの話なの鈴熊?」

「鈴谷と熊野オ! ここで定着したらどうする(んです)のっ!」

いいじゃん呼びやすいし……それに酷い名前じゃないからダメージはないと思う。俺なんて子供の頃スーパー戦隊物を真似した、そして少し女顔だったってだけで、パワパフレンジヤーとかネーミングセンス零な渾名付けられたんだぞ。しかも女子に。

幼少期をふざけたニックネームで過ごす事ほど性格を歪ませる理由は無いと思う。

そう思ってる間にも、何故かドンドン部下達が集まって押し詰めてくる。

「だから何の話ツ!? あ、分かった! 子供の頃、クリスマスプレゼントに片方だけ羽を下さいって書いた時に、どつちに付けるか悩んだけど結局右にしたぞ!!」

「「え……そんなことしてたんですか……?」」

本気で引くな。

「そんな死ぬほど似合わんせ○イロスコスプレの話なんてしとらんけえ!」

「私たちの同期から聞いてるぞ司令。全国の提督は荒木大将に付くか、斎藤中将に付くかを決めているらしい」

どうせ死ぬなら

俺の名前は宍戸龍城！

高校に入って一年ぐらいの、元気でオ○ニーのことしか考えてない、ごくごく普通の男の子だ！

日課にスニツカーズを食べながらアダルトサイトでオカズを漁ってる思春期真っ盛りの俺は、政治的思想？大人同士の醜い争い？派閥？

なにそれってかんじ？

「宍戸くん、現実から目を逸らそうとしない」

「はいすいません」

海軍派閥の保守派と革新派。

将校、海兵らの集合的無意識が心内の炎を燻らせていた。

磯風の内容によれば、幼年学校から鎮守府勤務の将校に至るまでの軍人たちに、保守派と革新派という二つの派閥が認知されたのと。

これはつまり、二つ派閥が存在していることがついに海軍中に知れ渡る事を意味していた。原則的に派閥は争いを避けられない性質であるがため、どれに属するのかを決める奴らが早くも出ているらしい。

これは今後の海軍の行く末、しいては日本軍と日本政府の国家方針に関わる問題な為、関心を持つのはもちろんだが、これに加わる理由は昇進に繋がるかもしれないーという、とても安直なデマが広がっているのが原因かと思われる。

元気に食堂で将校艦娘達が補給を行う中で、俺は先延ばしにした案件が直に迫って来ていることに対してムズ痒さを覚えていた。

簡易的な状況説明で行くと、海外の積極進出を目論む革新派が台頭し始め、それ以外の将校が保守派に位置し、明確な仕分けがされそうになっている。

「……まさかたあとには思うけど、知らなかった、ってわけじゃないじゃ

ろ？まさか提督さんが時勢も読めんアホなわけないもんな？」

「いや、知ってたは知ってたんだけど」

「あははっ！そうだよね！鈴谷たちの提督がそんな空気の読めないおバカさんなワケないって！提督はいつも一歩先を見てるって言うってたじゃん！ね、綾波！」

「そ、そうですよね！司令官さんがそんなポジ仕込まれた雄豚さんの脳味噌以下だなんて、そんなのありえないですもんねっ！」

「ああ、俺は常に時代を一歩先に進むインテリをハンサムナイスガイさ。だから見すぎてたまに近くにある事を見落としたりちゃうんだ。だから、まさか綾波ちゃんのそのフレーズを口にするとは思わなかったよあははは、綾波ちゃんは今後BL読むの禁止だあ！！」

「やばい、綾波ちゃんの趣向がマイルドからハードになりかけてる。そうやってしがみついてもだめだよ綾波ちゃん、デトックスのためなんだから。」

自由と権利はとても大事だけど、規制の大切さも改めて理解してしまった。

「それでどうなの!?あっち!?それともそっちのほう!？」

「鈴谷は派閥の名前すら覚えてないじゃん」

「私は覚えてますわよ！」

「変な所で張り合うなよはしたない……俺は誰にも属さないよ」

「「ええくつまんなくいっ！」」

「お前たちさ、派閥とか争い事に首突っ込むなって、誰でもいいから教わらなかつた？ねえ？」

「僕は面白いことには全力で突っ込めって教わったよ」

「お、それ誰に習ったか知ってるぞ！白露さんだろ!？」

「あつたりー！」

よし、今度からは言論、自由、そして権利を統制しよう。一時的な独裁は劇薬だが重病を治すことができる薬にもなる。

「そんな派閥争いがあるのなら、その方面の指導者の意見がグループの総意になるのがセオリーだけど、整工班の私達はそれでいいわよ」
「おいおいユウバリー、丸投げかよ？」

「でもみんな賛成しているわよ?ね?」

「兄貴の征く道は我らが征く道ですッ!」

「そうでっち!・ゴージャは24時間いつでも何処でも働けるでっち!」

頼む、お前は休んでくれ。

「自分ら経理科……じゃなくて、主計部にはあまり関心の無い話なので、特に押しとかはないですね……」

「補給班からもです」

「軍医部も同じく。強いていけば給料を増やしてくれる方を選びますが」

「当たり前だよなあ?ハア……で、艦娘の皆さんは?」

「中将がいいです。革新的な思想をお持ちの中将を推します」

「えー?不知火あのメガネの人がいいの?あのカイリユームみたいなお腹してる大将さんの方がいいと思うけど……」

「うちはハッキリ言っようわからんけど、どっちも同じとちゃうん?」

ものの見事にバラバラなんだけど。

「で、どうするんですか!?あっち!?それともこっち!?」

「大か中かを選ぶだけじゃないですか!なにをそんなにクヨクヨしてるんですかあ!」

「え・ら・べー!・え・ら・べー!」

提督ならどっちにするか、早くも大統領選挙みたいな雰囲気になっている。男女共にキラキラ目を光らせている以上、提督として答えないワケにはいかないけど、こういうことが起きたら宥めるように中将が直接話してまで言われたんだから、俺の答えは一つしかない。

「派閥には入らない中立路線です。この要港部の司令官としてお前たちに命令する、これ以上この話題を持ち上げるな」

「「ええ〜!!」」

「俺に任せるッて言ッたの誰だおいッ!?この司令官様に逆らう者はア酒池肉林の餌食にするぞオ!!」

「し、しゅち……っには反対ですけど!司令の言うことは正しいと思います!!」

あれ、あの親潮が珍しく賛同してくれてるぞ？

「派閥争いなんてだめです！首を突っ込んだところで返り討ちに遭うだけです！そもそもそんなデタラメな派閥あるわけないじゃないですかあー！」

「親潮の言うとおりだア！派閥なんてない！だからこの話はやめ！終わり！閉廷！みんな解散ッ！」

「まだ食ってるんだから解散はだめでしょ？」

「そうだった、ごめんちよ」

親潮と俺の簡潔な名演説により将校達は自分の席に戻っていく。まだ若干不満げのある顔立ちだが、これ以上コトを荒立てるクソ野郎にはファイナルデステイネーション・ネービーダウン（ハリウッド）見せるぞ。あれめっちゃ怖いんだぞ。

「頼むから事を荒立てないでくれよお前らア。ただでさえ親潮ちゃんっていう中将からのお目付け役が居るんだしき……」

「な、ななななで分かったんですかああ!!？」

親潮のオーバーリアクションに、再び俺に注目が集まる。黒潮が「なんや、親潮もそんなおもしろいリアクションできるようになったんやな」とほざく。そして依然として親潮はショックを受けたような顔をしている。

「え、な、なんで分かったんですか……？ま、まさか定時連絡を忘れたから中将が私のことを売って……こ、こんなケダモノに、この親潮をお!!」

「あの、ケダモノってなに？俺は女性に対しては世界一優しいし、別に中将が君を売ってなんかないよ」

「「え？」」

時雨たちさ、頼むから俺のことを否定するのやめない？

「理論的に考えて？中将と一緒に話しました、承諾しました、すると突然親潮が着任しました。この流れで思う事は、ああこれは目的達成のために俺の弱みを握るためのハニートラップなんだなくって、普通思っうじゃん」

「は、はははハニートラップ……っ！」

日本人好みの清楚そうな顔で若干エロい女の子横してくるのってそういうことだと思うのって俺だけ？そう思ってたって危うく親潮の部屋に行きそうだったじゃん、危ないあぶない。

「穴戸くんだけだと思おうよ。あとハニートラップに自分から引つかかろうとしたね殺すよ?」

「うるせえ!!エロい女の子がハニートラップしますうく!とか誘い受けしてきたらそりや食べるでしょ!」

「サイテーです穴戸さん!見損ないました!ふんっ」

「春雨も怒り?ますよ!?!どうせだったら春雨を食べてくれればいいのにいー!」

「なんでそうなる!?!」

「バレてしまった以上は……死ぬしかありません」

「あ、じゃあ一回やらせて。どうせ死ぬんだったら妊娠とか関係ないでしょ?こう!バックで!こうやらせて!」

「……………」

時雨はトンカチ、村雨ちゃんは謎の粉、そして春雨ちゃんはナイフを取り出していた。臨戦態勢もできないまま俺は蹂躪され、艦娘たちに精液を吸い取られる毎日を送るのだった。

勿論、俺がこんな暴言を言うはずがない。

「いや、そうじゃない。親潮はそのまま中将の仕事が続けていいんだ」

「で、ですが……」

「別にお目付け役でもいいじゃん!現に俺の役に立ってくれたし!スパイだろうがなんだろうが、親潮がいれば安心なんだよ!」

「で、でもお……!」

「黙っててあげるから。それに、君の仕事はうちの要港部ではなくてはならないものになってるんだ。君がいないと困る……だから、これからもよろしくな?頼むよ」

「……優しいんですね、司令はっ」

「当たり前前だろ?お前の司令だぞ?」

「司令……」

「親潮……とりあえず、このあと俺の私室まで来なさい。いろいろと、蜂蜜罨の事まで、手とり足取り胸取り、教えてあげるからさ……グヘヘエ……！」

「……」

時雨はトンカチ、村雨ちゃんは謎の粉、そして春雨ちゃんはナイフを取り出していた。

……あれ、何を間違ったんだろう？ 違う選択肢を選んだのに、え、やめて時雨——

将校会議（同期のみ）

―執務室。

「ふあふあふあふあ」

『あの、なに言ってるか全然分かんないかも……』

「ン……聞いてくださいよ秋津洲さん。ここにいる秘書艦の村雨ちゃんのお姉さんがですね？あ、時雨中尉って言うんですけど、めっちゃパワハラされてですね？あ、この村雨ちゃんにも少しされたけど、そのあとおっぱいでばふばふされたから許しましてね？まあその、結論からいうと、口内炎が痛いんですよ」

『そ、それはたいへんです……あ、あのお！はちみつを舐めると治るってよくききますけどお』

「ハチミツ？ハニー……ハニーはもうコリゴリなんスよ大鯨さん。そもそもハニーを舐めようとしたらこんな風になったんですよ？リツフジーンツ！」

『は、はあ……？』

二週間後の現在でも絶賛稼働中の鴨川要港部。なんとか仲のいい提督たちに声を掛けたり同期に「派閥には入るな、入ったら掘る」と電文を送ったりしたが、実際にどれほどの効果があったかはわからない。

執務を終わらせた後、まだ使ってなかった新品のタブレットを使いながら、ビデオチャットで遠くにいる同期達と話す。

現在繋がってるのは、斎藤中佐や結城を含め、オイゲンさん、秋津洲さん、大鯨さんがいる。既に執務と指揮を終わらせる辺りは流石と言うしかない。

これほど経っても官僚襲撃事件の事は分からず終いであり、本当にこの状況で乗り切らない可能性が懸念されている。

そこでやはり気になるのが、派閥の問題だ。本当にそこまで膨張されているのか？それともサッカーを見ているような感覚で決めているのか？

色々と曖昧な情報を再度整理するために、こちらでも将校会議を開いている。

“こちらでも”というのは、実は現在大本営にて参謀本部及び軍令部合同首脳会議が実施されている。

軍令部首脳会議とは、要するに海軍の超絶トップの人たちが帝の下で会議を開くというものだ。

そこに参謀本部という陸軍の超絶トップを加えて、合同首脳会議となるのだ。空軍は一応参加しているが、未だに独立した組織というよりは、陸海のサポート色の強い故に、航空省空軍会議の名前すら入れてもらえない始末には流石に同情した。

参加者は勿論偉い奴等ばかりだが、海軍大臣を始め多くの重役が代行されている今、参加者自体が激減しているのは明白である。

そう予想するって言ったほうが正しい。首脳会議と言う名のプレジデントコンファレンスの詳細なんて、本人等以外は誰にも知られちゃいけないトップシークレットだからだ。

「で、そんなに騒ぎになってたの？それとも俺の鎮守府がお祭り好きの巣窟だけなの？サッカー気分で軍閥決めなきやならんの？ん？んッ？」

『お、落ち着いてってシシード！べつに私達もそれほど気にしてるわけじゃないから！』

『そうかも！ちよつと焦り過ぎかも！機を見なきやいい戦略は立てられないんだよっ？』

『あ、あわわっ……』

『相変わらずアワワツスねエ大鯨さアんッ！俺と夜間演習なんてどうツスカ!』

『『しね』』

『ヒドオオオイ……』

「言われて当然だと思う」

ビデオチャットで各地のリーダーと繋ぐなんて、政治的な密会して見たいでちよつとウキウキする。ネット接続だからセキュリティガバガバだけど。

『しかしこちらでも話題にはなっていたのは確かだ。因みにサッカーが引き金となった戦争があるのはご存知かな？ 時に娯楽は、人を狂わせるんだ』

なるほど、知識量半端ないっすねえ中佐ア！ ついでにそのサッカー戦争を終結させた、米州機構みたいなのが日本海軍にあればいいんですけどネエ!? 無いから問題なんスよッ!?

『こつちでも話題になってるぜ！ まあ俺ツチはそんな事より合コンの成功率を100%にする方法を模索しててそれどころじゃなかったけどな！』

「多分それ少子化解消にも繋がるからこのウンコみたいな事件よりそつち優先してッ、マジでッ」

『お、おう、珍しくガチ目なトーンじゃねえか……』

『あ、こ、こちらにも、たぶん大丈夫……だと思えますっ』

「あゝ大鯨さん怖がらなくてもモーメンタイだよおうん。俺がそつちに行つてよしよししてあげようか？」

『あ、け、結構です！』

『『ハハハ！ フラれたザマア！』』

お前等ア、俺がなにを言われても傷つかない鉄の男だと思つたら大間違いだぞオ……？ 久しぶりに話す同期、或いは友人だからか会話が賑やかだ。随分とフランクに接するなあ……と疑問の思う者も居るだろうが、軍学校で出来た友人つてのは大抵こんな感じだ。

シリアスな話じゃない限りは、本題の話と並行しながら茶化し合つたりするのが定番である。本当にヤバイ話は文字数が最小限となる。

『まあ大丈夫かも！ 秋津洲たち提督の仕事は深海棲艦を倒して、みんなを守る事かも！ 突然政治家が居なくなつてハーレーしたからつて別になんともないかも！ それで起こる跡目争いなんて上層部に任せとおけばいいかも！』

『それにこういうの何ていうんだっけ？ たしか、触れぬ神に祟りなし……だっけ？』

「上手いねオイゲンさん、ちよつと使い方違うけど」

『ダクンケっ!』

『まあ俺は斎藤中将派だけどなあ〜』

『なんだ? 私が居るからと言って、遠慮をする必要はないぞ?』

『してませんって中佐! 俺をスカウトしてくれたのは中将なんでね! 大将よりかは中将ってだけツスよ! それに、海外へと進もうとしてるってカツコイイじゃないツスカ!』

『カツコイイって理由で決めるの?』

大将が目指した国内を補強して安定、それは要港部の設置で既に完了されている。J A F G が言っていた古き良き日本に戻す、という政治的な思想はともかくとして、一番現状維持で保守的である。

でも革新派の政治力や資源的な問題も含めて、それらを海外進出により解決しようとする姿勢は好戦的だとは思う。

一見して要港部を作ってもう保守派の勝利じゃないかと思ったが、革新派が海外進出へと方針を変えれば、国土を守るために作られた要港部は一変して体のいい攻撃拠点となる。

「秋津洲さんの言うとおり、軍人は中立で居なきゃいけないと思う。海軍大臣は辛うじて政治に口出しできる日本海軍、唯一の軍人であつて、陸軍大臣も同じだけど、どっちにしろそれ等を決めるのでさえ、御上なんだから」

『でもでもでもぼくう……どつちかつていうとお……ちゆうじよう派? みたいなあ〜?』

「結城、頼むから派閥の内戦を煽らないで、あとめっちゃキモいから、横にいる村雨ちゃんが軽く引いてるから」

「司令! この親潮も引いてますっ!」

親潮の声を聞いて「新しい娘!」と喜声を上げる。

何故かこの結城大尉殿は派閥争いにノリノリなので、面倒くさいがここは正論でみんなを収める事にしよう。喋り方も変えたほうがいいか。

「当然ご存知かと思うが、これは我が国の1936年当時の状況に似ている、所謂、皇道派と統制派のようなものだ」

『『『『皇道派……』』』』

『え、なにそれ?』

みんなの顔は指して驚いたようには見えなかったけど、一番しつくりくる例えとして上げてみたが、ある程度それで納得はしている様子だ。結城が外国人であるオイゲンさんよりも自国の歴史に疎い事を再確認した所で、話を続けた。

「皇道派の歴史は浅いけど、今でも海軍軍人としては知っておかなければいけない事件トップ3に入る。もちろん国を想い、華々しく散った栄名の戦士たちとしてではなく、暴力革命的手段とテロリズムに陶醉した軍史的汚点としてだ。勿論その後、統制派も同じように悪名高いファシズム的な道を歩む事になる……今、俺たちがやらなくちゃいけない事、先人が踏んだ轍を踏まないことだ。どう思う?」

『穴戸少佐のいう通りかも!』

『カツコイイです穴戸さんっ! 大鯨、みなおしちやいましたあく!』

「え、あ、そう? グツフフウー!」

「むっ……気持ち悪いですその顔」

村雨ちゃんの「気持ち悪い」、頂きました。後で魚雷に突っ込んで死んできます。

おいおい、

『何はともあれ、首脳会議が終わるまでは今後の方針は定まらない。我々は司令官という立場を任せられたが、文字通りそれ以上の事柄は指を咥えて待つ以外なにもできないのだ』

『中佐の言うとおり! 俺ツチ寝るわ』

『『寝るな』』

その言葉を最後に彼らとの通信が切られた。

親潮は村雨ちゃんと同じく秘書艦兼主計部という立場らしいが、本当に正直な事を言うと、いらぬ。

酷い言い方だからオブラートに包むと、執務仕事は滞るほど押し寄せているわけじゃないし、村雨ちゃんがとても有能なので、必要性を感じないが、主計部がいて欲しいと言うんだったらこのままにしておくと思う。

でもそれでどこかの要港部が人材不足にでもなるんだったら、真っ

先にこの娘を送り返す。俺や中将のワガママで一人の美少女を独占するわけにはいかない。食堂の一件では最低級の失言を連発したのにも関わらず、何故か警戒心が和らいだような気がする。

「ハア……気が滅入るよ。君もそう思うよねー妖精ちゃん」
「っ！っ！」

妖精はハンドシグナルを送っている。

セイビ、ブヒン、タリナクナル、チュウモン、シロ、ゴミ。

「え、あ、ごめんねえくすっかり忘れてたアハハハハ踏み潰すぞムシケラ」

驚いた顔をしながら出ていった。

「ハア……将兵や艦娘の人数が多くなったから一応改築もしてるし、あまり変なところで路線変更されたくないんだよね」

「しかも首脳会議で方針が決まったら今日連絡が入る予定なんですよね？方針が今までどおりだったら……」

「荒木大将を担いでる人たちの声は強かった、そして何事もなく今までどおりに要港部を運営できる。めでたしめでたし」

「穴戸さん……村雨、怖いですっ」

「よしよし、こつちへおいで、今日は俺のベッドで寝ていいからね？」

「え、そうなの？僕って寝相悪いから、朝死んでないか心配だけど、村雨を守るためだもん！仕方がないよねッ！」

「ごめん村雨ちゃん、やっぱり今の無しで。いやさ、君と寝ると、いつの間にか執務室に侵入してくるようなドンキーコングがさ、おまけで付いてくるなんて思いもしなかったからさ」

「フンツ!!」

「うおッ！反逆罪！反逆罪！」

「何をやってるんだか……」

呆れる親潮と微笑みながら書類を片付ける村雨ちゃん。時雨はパUNCHングスタイルで近づいてくるが、椅子から立ち上がり、ボクサー直伝のシャドーボクシングを行う。

この異様な光景を誰かに見られたらマズイとは思いながらもやめられないのが現実。勿論その理由は、首脳会議が終わるまで待てな

かったからである。

重大すぎる海軍方針の決定は予想もつかない方向に行くことがある。それを願わずとも、反則的に降り掛かってくるのが現状である。

その予想もしなかった反則的な『2つの』方針が、村雨ちゃんの後ろにあるFAXからガラガラ音と共にプリントアウトされていた事に、時雨とじやれていた俺はまだ気づかなかった。

「し、しししし穴戸さん!!こ、これ!!」

「「え?」」

親潮、時雨と俺が村雨ちゃんとの間合いを詰めて、彼女の肩越しに印刷されたFAXの文面を読んだ時、混乱しているのか衝撃を受けてるのか分からない感覚が全身を襲う。

文面はエッセイでもない、パラグラフでもない、一行で済む内容であり、衝撃的な二つの内容の文字列は並行していた。

日本海軍東亜ノ開放ヲ視野ニ入レタシ

穴戸少佐ハ大洗要港部ノ『今をときめく日本軍将校!まさかの独身!?ドキッ!エリート揃いのお見合いパーティー!』ニ参加サレタシ

なぜこころもうまく行かんのだ？

鴨川要港部、執務室。

「中将！これはいったいどういうことですかア!?海軍首脳会議で何があつたんですかア!?」

『……非常に申し訳ない』

「なんで俺がお見合いパーティーなんかに行かなきゃいけないんですかア!?」

『そ、そつちなのか?!いいいや、結城大尉が目玉として出るというので、君も出てはどうかかな?と……』

「なんであいつが出ると俺が出るんですか!?!」

執務室には俺の怒涛の怒鳴り声が響いた。村雨ちゃんも、あららつ、と困った顔をしながら書類を渡してくれた。戦闘詳報についての書類は比較的簡単なので、喋りながらも処理できる。

でも中将との案件は早々には処理できない。

それはもちろん大洗要港部の地で開催されるお見合いパーティーのせいである。

彼の言い分は、階級の高い者が結婚していないのもどうかと思う……という、「なあ、お前もそろそろいい歳なんだし、結婚するつもりないか?」と会社の上司に言われるような定番セリフである。ふざけるな、俺はまだ若い。

結城みたいに股間握手を常に求めている発情期なら分からなくもないし、番組にイケメンが出るだけで海軍のイメージが上がる。でも階級だけで言ったらアンタの息子も独身だぞ、連れてこいよ。

とは言えないのもまたむず痒い話なんだ。

実は、お見合いパーティーのある大洗要港部には、前々から精鋭を編成した演習艦隊で、演習をしに行く予定だったんだ。

俺の本目的はそれなんだが、「ついでに」というマジカルワードを使って、短時間だが終わるまで自分も参加しろってことらしい。あと小声で「男女比……」とも言ってたので、なるほど、軍人側が集まりきらなかったんですな?」

要は、両方消化してこい、ということだ。

海軍要塞つてのは一応、命の危機に晒されているんだし、そう簡単に配偶者を決めることはできないし、できればしたいとは思わない。育成プログラムの既婚者同期Aさんがな？司令官になるために一生懸命勉強して、過酷なトレーニングをこなし、ついには卒業して、更には要港部の司令官まで勤めてな？久しぶりに帰宅したら家が嫁の無双乱交の場となっていたらしいんだ。

まだ要港部の司令官を続けているあたり、精神は崩壊してない様子だったが、かわいすぎるし、そもそも結婚のリスク高すぎるんだが。今度彼に会ったときは一杯奢ろう。

同情でもおごらない俺が奢るんだ。彼に祝福があらん事を。

「それは百歩譲っていいでしょう。しかし、流石に東亜開放という状況が、好ましい方向に行ってるとは解釈し

難いのですが……」

『クツ……すまない、私の不甲斐なさが招いた結果だ……』

日本海軍が東亜開放を視野にいれたし、とは言葉のまま、日本軍による東アジアの進行を意味する。それはまさに、現在の方針を変える、という面で革新派は揺るぎない勝利を手にした事となる。

日本軍は常に言葉では謙遜する。

だから今すぐ突撃イイ!!なんて言わないけど、遠回しだったり、あの程度こんな感じにする、的ない回しだったりするが、今回の視野に入れるというのは事実上、進軍侵攻を近い将来に行う事を示していた。

俺の予想だと、少なくとも日本国土の小笠原諸島、沖縄方面、尖閣諸島はもちろん、フィリピンやマレー等にも手を伸ばすつもりなんだろう。

まだ俺たちには指示が下ってないが、少なくとも横須賀第三鎮守府などは、進軍の用意はしているらしい。第三鎮守府の提督へは遠回しに、革新派はやめたほうがいいように促したが、彼は熱狂的な革新派だったのでやめておいた。

俺は他にも色々な人と話したんだよ。

大湊警備府の加賀提督とか、柱島の無能提督とかさ。色々根回ししておいて結局これかよ。

けっこう偉い人にも話し合って、あまりコトを荒立てないのが先決だと口を酸っぱくして言ったんだけどなあ……。

『革新派の方針となるのは、保守派の士官を怒らせる結果となるんだ。これが悪い結果を及ぼさなければいいのだが……』

『もういいんじゃないですか？別に怖いことが起こるとは限りませんよ？』

『そう願うよ……いや、こうなってしまった以上は、いい方向へと向かわせる努力をするしかない。』

保守派の過激派の心情を荒立てるような真似は支度はないのだけれどね……』

保守派も革新派も、集合的無意識が働いているように、全員がその思想に賛同しているのだが、これを裏から操っているヤツが必ずやるはずなんだ。

その両派閥の暫定トップは、裏で密かに行われていたであろう暗躍劇を、表の顔として出すことはない。が、流石に候補は絞ってほしい。

この人は、軍令部や海軍省にも絶大な影響力を持つ人が、裏で暗躍している睨んでいるのだが、そんなの片手で数えられるぐらいしかないんだよなあ……まあ、それはさておき。

『安心してください、こうなった以上やることは各提督、将校の感情を抑えることにあります。引き続き、中將のご意向に添えるよう尽力いたしますので』

『君がいてくれて本当に助かるよ……方針が決まったことも問題だが、軍令部がすでに作戦準備に取り掛かっているのも気がかりなのだよ……ハア、では私はこれで失礼させてもらおうよ』

「ハッ……は？おいちよつと待てよオー！」

言葉が中將に届く前に、電話が切れてしまった。

すでに作戦準備を始めているだと……？その作戦準備してるのが革新派の首謀者じゃないのか？とも思ったが、後に色々なところで準備をすすめていたのが明らかとなったので、絞り出すのは容易ではな

いと悟った。

ちようど書類の整理が終わったところで、村雨ちゃんと親潮に書類を渡す。

「司令！司令は本当にお見合いに参加するのでしょうか？」

「命令だったら参加しなきゃいけないんじゃない？そんなものに本気で参加するつもりないし、ちゃっちゃと切り上げて、あそこの司令官と一緒に演習して終わり！でいいんじゃない？」

「なるほど……」

「姉さんたちも張り切っていましたよ！穴戸さんのお見合い姿を撮るために、憲兵さんたちに色々写真の上手な撮り方とか教わってるところ見ちゃいましたあ！」

「なるほど！そんなことに時間費やす暇があるんだったら、他港との演習に備えろって言ってきたりしてくれないかな？ただでさえテレビに映って醜態を晒すんだからさア!？」

時雨の宣伝力は絶大だった。

俺が気づいた時にはすでに、その噂は要港部中に広がっていて、まさになすすべのない状態だった。

なにがそんなに酷いかと言えば、艦娘たちの陰口だった。

順に、艦娘KRさん、艦娘SZさん、艦娘UKさんの語録。

『やつと結婚相手に会えるんだね！顔はともかく若くて偉いんだから、ヒット率高いんじゃない？』

『お、お見合いに浮かれていますか、キモツ！キモいんですけどお！ふんツ』

『結婚？婚約者ぐらいおらんの？じゃあせめてカノジヨぐらい……ああくいそうにないけえねえ』

将校らからも色々と言われた。

『マジっすか！最高ツス！祝にボーナスほしいから金くれツスツ！』

『結婚相手にはブカブカセーターワンピニーソオオ！』

『提督はホモオ！提督はホモオ！』

思い出したら、なんか涙でてきた。

「でも、やはり気がかりなのは海軍方針の東亜ノ開放……」

「親潮ちゃんは気にしなくてもいいよ、少なくとも内部での闘争は起きないし……起こさせないから」

ドヤア……！

「っ！司令！親潮は司令を全力で補佐します！」

「よく言った！ところで親潮、整工班が提出した報告書に不備があった事を伝えてきてくれない？出撃回数と資材の消費量が合っていないからさ」

「ハッ！直ちに！」

小走りで退出する親潮の黒パン。

いや、黒パン……親潮、黒パンツ履いてるんだ。

スケベっ。

「あの、宍戸さん……本当に村雨が演習に行ってもいいんですか？力不足でみんなの足を引っ張るんじゃない……」

「大丈夫だよ村雨ちゃん。不安なときは、俺の袖を引っ張ってくれてもいいからさ」

「ふふふっ、ありがとうございますっ」

クウウ！頬赤らめちゃってかわうい！

連れて行くメンバーは総勢で6名。通常艦隊編成で鈴熊と四人の白露姉妹を連れて行く。

演習とは所属の違う艦娘と戦うことにあるが、その中身は非常に奥深く、伝統に溢れている。

表面上重要事項なのは、他の艦娘との交流と、練度上昇である。深海棲艦だけでしか得られない経験と、実際に艦娘と戦って得るものは全然違うので、体験としてはマイナスにならないのがまず2つ。

だが、司令官の目線で行けば他の司令官との力量を見せつける場でもある。だから単純に実績と練度の高い艦娘だけを連れて行く人もいる。

特にあそこにいるのは、同期の結城大尉である。同期との差は学歴もあるが、積み上げた実績と、世渡り上手かどうかをすべて重ねたもので、総合的に判断される。それを考慮して、俺様の軍法戦略を見せ

つけてやる……!と、司令官が考えることなんてこんなものだ。

村雨ちゃんを編成に入れる理由はけっして秘書艦だからじゃない。村雨ちゃんは、みんなが前線に出ているのに、自分は秘書艦として働いているだけで、練度が低いことを気にしているんだ。

もちろん気にするようないたでもないため、気にしないように言ったのだが、艦娘には艦娘なりの悩みやプライドがある。だから練度向上もあるけど、仲間外れにしないためでもある。

私的な理由以外でも、村雨ちゃんは練度こそ低いけど、技術的な面ではマニュアルと基礎訓練に沿った忠実なものである。鈴谷、白露さん、時雨のお三方のような、運動神経と持ち前の勘だけでイけるようなやつらとは違い、唯々諾々と物事をこなすので、こういう娘は一人ぐらい入ってくれてもいいと思う。

もちろん行きたくないというのであれば、話は別だが。村雨ちゃんは頭を上下に振って、行きます行きます!と元気よく了承してくれたので、大洗への演習艦隊に組み込む事を、正式に書類に書いておこう。

村雨ちゃんがだめだったら磯風辺りを指名していただろう。

磯風は凛々しい風貌とマッチして、艦娘としての裁量は随一である。実績もあるけど、なによりすべてをそつなくこなす辺りがまた要領の良さを最大限に発揮している。横須賀第四鎮守府の蘇我少将かも名指しで称賛されたぐらいだ。磯風は出世するだろうなあ……と、臨時設立の演習艦隊に関する書類にサインしながら思った。

「穴戸さん」

「どうしたの?」

「結婚……は、まだしないですよねっ?」

「逆になんてしなくちゃいけないんですか?」

一生独身でも構わない。

独身税なんてどんでもない制度が作られでもしない限りは、焦る必要はないだろう。だからそんな心配そうな顔をしないでくれ村雨ちゃん。俺は独身だからって、生物的劣等感をもようすような軟な人間じゃないよ。

それよりも演習艦隊の経路が気になる。

海路からやて？司令官であるこの俺様が？

嘘やろお前。

俺たちの港には艦船が数隻ほどある。

その更に数隻ほどは、人を移動させるために作られたポートサイズの艦船であり、俺はこれに乗艦して、艦娘に引つ張られながら大洗要港部まで行くらしい。

確かにそのほうが早い。陸で行けば数時間にところを、最低でも30分まで縮められるのだ。

この輸送艦船はコンパクトなだけに、ある程度、深海棲艦の攻撃を凌いでくれる技術が詰まっている。だから遭ったら即死ってわけじゃないし、艦隊に守られているから問題はないだろう。

内心はバクバクして演習に行く夜は眠れなくて、胸に十字架を書きながらベッドでぜえーハアーぜえーハアーしていたのは、時雨や鈴谷たちには内緒だよつ。

しかしなにより許せないのが、俺の休日と被せてきたことだ。

よく考えたらここ数週間の間は忙しくてまともに休暇をとっていなかったのに、更にめんどくさい事が続くのか。

演習バツクレたい。

お見合い大合戦

大洗要港部はとても活気に溢れていた。漁業はもちろん、伝統のある町並みは観光客が多く、深海棲艦は港から百キロの領域へは侵入していない言わば、鉄壁の異名を持つ要港部である。

提督育成プログラムを卒業した結城大尉副司令の下、リーダーシップ溢れる指揮で武勲を重ねている。何れ少佐になる時も近いだろう。そんな大洗で、とても異様な行事が行われようとしていた。

『それでは皆さアアアン！オトコ欲しいかアアアつあ!!』

『『アアアアアツツ———!!』』

とてもオシヤレな女性たちが、海軍男児達に負けない気迫で喝を放つ。野生の咆哮は俺を始め、多くの番組スタッフを戦慄させるものだった。

そう、今回は時雨に頼まれたようなチンケな合コンではなく、テレビ絡みの大規模なお見合い大合戦なのである。

この発情したマントヒヒのような姿を、参加者の海軍将校に見せていいのかと疑問に思ったが……もういいや、どうせ本気で参加するつもりないし。

要港部から数キロほど離れた所には広場があり、野球をするには最適な場所である。そこに数十脚もの椅子が向かい合わせに並べられ、回転寿司みたいにして一人ひとりとお喋りするのだが、最初のテーマらしい。

テレビの趣旨は分かるけど、ハッキリ言ってくツツツだらねえからさっさと切り上げたい。

「コンドーム持ってきて良かったあ」

「結城提督……いや副司令、静粛に願いたい」

「お、宍戸気合入ってんじゃねえかくおいおいオイ！分かる、結婚は分かかんねえけどマジテンション上げまくりんゴー！」

「結城副司令、沈着冷静は武人の真髄でありますぞ」

「え、さつきからなにナニナニ？結婚できるチャンスだからって気張

リング的な!？」

「結城副司令……いやこの腐れマントヒビ、ウホウホウホホ」

翻訳すると、お口にチャックして副司令らしくしろって意味。

官僚襲撃事件の波乱による混乱が東京であつてもう幾ヶ月……いや、半年以上経つてるのかあれから?とにかく、こいつらの元氣さには驚かされるわ。

俺がいま目になっている婚活と言う名の混沌には色々な人がいるが、艦娘たちの顔に慣れて目が肥えているのか、顔面偏差値は低いと思う。

お留守番をする鴨川要港部のみんなには注意したが、俺たちはこのお見合いなんちゃらに来るためだけに、遠路遙々海を渡ってきたわけじゃないんだぞ。演習が目的なんだからな。

「穴戸くんたちは行かなくていいの?」

「あれ何人いるんだ?明らかにクラス2つ分ぐらいの女の人もいるよね?チ○カスオタクザムライはテレビの都合上できないしさ……」

「あれをしようとしていたんですかお兄さん……でも、春雨的にはオツケーです!」

「村雨もテレビの都合を考えない方向に一票でーすっ!」

「いっちばーん気持ち悪かったオタクザムライカムバーック!」

「よし、やるかオタクザムライ」

「ダメでしょ」

演習艦隊である鈴熊と白露姉妹。

司令官クラスが二人も参加しているともなると、海軍の評判は更になる。多分この先で起こる大東亜開放とかなんとかで一気に下がるから無駄だと思うけど。

開催されているコレはただ時期を被らせて一気に面倒ごとを消化しようとする海軍の陰謀である。そう俺は解釈することにした。

『う、ウホホーワタシ、アレコノミ!』

『うっふう〜んっ。バツハチのミリヨク?でノウサツしちやうわあ〜。うふ、ふふふ』

『一人ぐらい食つても、バレへんか』

「穴戸くん！出番だよ！」

「いやだつ、小生いやだ、いやだ、いやだヤダヤダツ!!コワイ!あの集団コワイ!!話したらバイドク伝染る絶対ツ!!」

「大丈夫だよ穴戸つち！海軍のイリヨウ？は世界一つて白露が言つてたから！」

「私の右腕と右脚にかけていいよ！」

「伝染る前提で話進めんのか!?女の子になつちやう！暗い所に連れ込まれてシヨタになるウ！ヤアア！ヤアア!!」

「その叫び方剣道の気合みたい」

「とおおおとおおお!!」

「わたくしの事をバカにしてますの!？」

参加者は海軍に偏っているが、陸海空が揃っている。近くの陸軍基地、空軍基地、海軍大洗要港部からランダムに選出された……ってわけじゃないが、もちろん独身で、なおかつコミュ力の高い人たちを集めたのだ。

そんなヤツいるのかとは思ったけど、良くもまあ30人も集めたもんだよ。

男女比が圧倒的に足りないから、気休め程度の人数合わせとして参加しろつてのもあるのだろう。

或いは結城みたいな暴走列車が海軍の威信を落とすような行為に走る前に止めろと言うことなのか。

『さて、では今回目玉をご紹介しましょううう……女性人気ナンバー1は、この人ダアアア!!』

『……結城真司です！ぼくたちが守るすてきな海といっしょに、みなさんを守れたらな、と思います！ラーケティティコですっ！』

『ウキヤアアアア!!ウヒヤヒヤヒヤハヤアアアア!!』

おもむろにスカートを上げ始める女性たち。コイツら絶対女子高出身だな。

猫を被る結城副司令殿は腹が立つがイケメン、大尉兼プログラマー業者であり、そして開催地の副司令なので、女性陣からすれば目玉で

ある。

ちなみに副司令官とは、司令官の補佐である……なんて今更だが、俺の要港部にはその立場は置いてない。主計部の大尉が兼任しているからその所は少しあやふやなだけだ。

まあ、鴨川要港部は俺という有能提督がいるからさ……なんて言ったら罵声の嵐だろうから言わない。

それに副司令を置いてる司令は無能だと言ってるようなものなので、それこそ本心ではない。例えばあちらにいる那智さんのように。

『あなたは参加者ですか!?!』

『いや、私は大洗要港の司令官だ』

『部下の結婚について一言ありますか!?!』

『守るものが増えるのは、それだけ彼らをやる気にさせるといふことだ。こういう場でないと巡り合わせがないのが現状。彼らには、素敵な出会いに恵まれてほしいものだ』

マントヒビ一行は更にスカートをめくり上げた。違う、彼は女性だ。あの長い髪を見て分からののか猿ウ!?!

大洗要港部の那智司令官とは彼女のことだ。プログラム出身ではなく、海軍大学校出身のエリートであり、階級は中佐である。

結城も流石に手が出しづらいのか、この人の話題はあまり出してこない。番組は本番へと差し掛かり、企画であるお見合いなんちゃらを、無駄に待たされた15分の末ようやく実行する事となった。席に座り、調子の良くないパイプ椅子のギーギー音で居心地の悪さを感じるが、我慢しよう。

『ではみなさん席に座ってください！お見合いルーレットオクスタートオオ!!』

『穴戸くん頑張つて、できれば面白いことして〜』

『頑張つちやだめでしょ!?!穴戸つちが本当に結婚したらどうするの!?!』

『っ!?!お兄さーん!?!面白いことしてくださいーい!?!できれば気持ち悪いサムライやってくださいーいッ!!』

『穴戸さんが結婚……ケツコン……』

遠くのベンチに座る六人には演習相手との交流を深めるか、演習の準備でもしておけと言っているのだが、俺の失態を見る方を選ぶらしい。みたいなら後で動画とかテレビとかで見れるのに、生放送じゃあるまいし。

「さやかでえーす、よろしくお願いしまーす」

「デュフツ、よ、よろしくま〇こ蕎麦ツ」

「……………」

俺が独身な理由が分かったか、あん？わざとでもなんでも、おりや結婚なんてまだしたくねえんだよオ!?

回転寿司ルーレットは続いていき、そのたびにキャラを変える俺のバライティーは時雨達を驚愕させることとなるだろう。しかし時雨たちは俺よりも、数席ほど離れた椅子で一発芸の目隠しルービツクキューブをしている陸軍中尉を見ていた。

その他にも、わざと胸ポケットから数百万レベルの札束を落とす実業家の息子や、女子と同じように服を脱いだりして鍛えられたマツスルを露出させる筋肉馬鹿、並びに学歴は高いくせに「彼女いない歴〓年齢です!」と言わんばかりに学歴と階級を押しってくるメガネがいる。

人間サーカスかここは。実家が金持ちなヤツ以外は結婚できていない理由は明白である。

え、俺もその一人かって？いや、だから違うから。ただ結婚したくないだけだから。

「宍戸お……………さん？参加者の中では見かけませんでしたけどお？アレ笑？もしかしてワタシ忘れちゃったみたいな笑笑？」

「あ、いや、違いますよ笑。飛び入り参加笑？みたいな笑？ほら、隠しキャラ的な笑、ベガみたいな笑」

「そ、そうですか……………」

「こんにちわあー」

「今日マツスル!!今日も！元気に！体動かしてマアアアスル!!」

「宍戸さんはどこ出身ですかー?」

「遙か東にある……極東から更に、東の、東の、東です。フツ、これ以上言ってしまうては、サタン様にお叱りを受けてしまいますね……フツ、見下しのポーズツ!!」

「カツコイイ軍服ですね!」

「分かります?ア○ゾンジャパンってなんでも揃ってますよね。あ、これ6980円。今月貯金ゼロ円達成く人生終了系く」

「17歳ですつ!」

「じゃあお見合いに参加できませんね、スタッフさんに言ってきましたね」

「う、嘘です!本当はピチピチの33歳ですつ!」
「知つとるわ小ジワババア」

俺の心情が奈落到到達したので、スタッフからも少し愛想よくしてください!とのテロップが出た。愛想はいい、ただ最高に変態で失礼なだけだと念を押したが「空気読めよカス」って顔をしていた。危うく殴りそうになるが、大人は依然として平常心を保っているものだ。

って、俺だけじゃないだろ女子からドン引きされてるのは。

『ゆ、結城さんってここの副司令だったんですかあ!?!』

『そうそう!まあ大尉なんだけど、結構早くに昇進くるかもだからさ!』

『スゴーい!あ、やだ私、ちよつと汗かいてきちゃったかもつ……!』

『あーこれ多分感じちゃったんだと思うよ、俺ツチのオーラ。隠しても隠せないんだよねエ。分かるよ、うん。階級は大尉なのに、コツチの方は元帥なんだもん。欲しいよね?うん、拙者即席理解系俺ツチ、大艦射砲展開準備良好発射精』

『汗引つ込んだわ、あと通報』

『キャアアアア!!』

ハハ、深海棲艦のような叫び方だな。女子連中からは白い目で見られる回転寿司の男性人気最下位は今のところ、俺だが、結城も大抵である。

この二人が友人であるという情報が拡散されており、更にその敗北色を強めていく俺たちは言い換えれば、結婚したくない男のナンバーワンツーK.O.

ハハ、俺はともかく結城は本当に彼女欲しいだろうから、そりや泣けてくるわな。

『あなた達は参加者ですか!?!』

『あ、僕たちは違います。あそこの穴戸っていう人の付き添いです』

『あ、良かったー……そりやこんな可愛い子が居たら勝ち目ないし……』

『あ、あのっ！あの人はホモホモの実を食べたホモホモのポジ種付き変態ゲイロードですからあー！あの人に近づくとほもほものおしヨット!!食らうので注意してくださいっ！』

『え、マジ？あれってそんな変態だったの!?!そんなのがお見合いパーティーに……まああの人はリストから外そつと、顔もあんまり良くないし』

『そ、そうですねっ！ぶ、ぶぶぶサイクなんですっ！それに変なことばかりしゃべる人なんですっ！だからあの人は絶対にだめですッ!!』

『村雨たち、流石の僕でも引くよその罵詈雑言……』

あとから時雨から聞いた話だが、春雨ちゃんや村雨ちゃんが俺の名譽を再起不能レベルでボコボコにしていた事が判明した。

なるほど、村雨ちゃんと、春雨ちゃんがね。

俺、絶対そんなこと信じないから。

お見合い大合戦2

「ふうええええん！ふええええん！」

「こらこら、大の男が泣いてはだめじゃないか。どうしたんだ？この那智に話してみなさい」

「うん……えぐつ、ぼくね？ちよつと遊んでただけなの、そしたらね？ぼくの部下がね？ぼくのめいよをね？まるでマイク・タ○ソンがかじり取った耳みたいにボコボコのボヘミアン・ラプソディにしたの」

「それは……すまない、私じゃ手に負えんが、とりあえず元気を出せ」
「ぶええええええん！」

「ご、ごめんなさいお兄さん!!お、お兄さんが結婚したくないって言うてたので、つい……」

「村雨もやりすぎてしまいました……ごめんなさいですっ」

「ふええええええん！」

「ああもうウ！君はそれでも一応は司令官なんだからいい加減きげん直してオラアあ!!」

「いっつつツアアアア！何すんだクソアマコラア!!?ケツがああマントヒヒ共と同じぐらい真つ黒になったらどうすんだ!?!アアア!?!」

「良かったあくいつもの司令官だあく!」

那智司令官にすいませんでしたと礼をしてたあと、「気にするな」と手をふりながら去っていく。颯爽と立ち去る美しさは相変わらずの美貌であり、彼女も実は独身。

実はといえば、那智さんは鴨川にいる我らが市長、妙高さんの妹であり、つまりは足柄さんの姉である。本人を崖つぶちと評する足柄さんがいうには、那智司令官は男勝りなイケメン提督と言う事だったので、どんな人物かと思つたら……なんだ、マジでカツコイイじゃん。

あの人になら掘られてもいいわよ。

「那智司令官カツコよかつたね」

「ああ、人間的にも尊敬できそうな人だ。でも足柄さんが言うとおり、現代の日本男性が好みそうなタイプではないだろう。あ、言うておく

けどこれは褒め言葉だぞ」

「穴戸くんが女性を貶したの初めて聞いたかも！暫定でいっちはーんひどい貶し方だったけど、白露さんは嫌いじゃないよ！」

「違いますって。ただ依存的な小動物系可愛女子を好む人が我が国には多いので、逆に言えば海外だったらモテモテですよあれ」

「つまりわたくし共の司令官様は、小動物系可愛女子を好む輩とは別……と仰っしゃりたいのですわね？春雨さん、村雨さん、鈴谷、残念ですわね！ふふん！」

「なんで得意げ!?鈴谷はそれに入っていないよね!?入っていたとしても穴戸っちは好きだよねそういうの!？」

「穴戸さん……うるうるっ」

「お兄さん……うるうるっ」

「は？大好き」

「「わぁーいー!」」

「ほら、バカやってる間に次の企画始まつちやうよ。自分のことをボードに描いてPRするんだって」

時雨が言うように、番組は早くもフリータイムに差し掛かっていった。男性側がボードに自分の事を描いて、来た女性に対して色々自分の事を教えていくというコーナーである。

フリーと呼んでるが、俺はFREE TIME女の品定めと呼ぶ。

捻くれてようがなんと言われようが、これが俺だ。そして、そんなひねくれ物はもちろんボードなんて持ってない。フリートークタイムなんだから、そんなのはいらず、普通に声をかければいいんだ。

「じゃあ行ってくるわ」

「「いってらっしゃいー!」」

猛獣の檻に放り込まれるような感覚で会場に参入する。

色々な人種がいる中、偏りがあるのはお察しだが、男性一番人気の副司令官殿が予想より少ないのは色々とやらかしたからか、それでも来てくれる人は多いようだ。

『うつふくん。アタシ八回離婚してるの』

く。でも病気になってないのおく』

『その八回を、一回の本気に変えてみる気はないですか!? 残りの40種類の位を試すとか! ソクソクっ的な!』

最ツツツ低。

『あの、話す機会なかったとは思うんですけど、よかったら俺と結婚しませんか!?!』

『え、僕たちは別に参加者じゃないんで……』

『う、うちはお金持ちだから……はあ……はあ……結婚とか……おっぱいとかが……はあ……ハアア……!!』

『い、いいえ! ま、まにあってますからあ!』

参加者じゃねえつつつてのにさ、自分から話しかけにくくヤツが多いのはなぜだろう。嫉妬の目が俺の艦隊に差し向けられたらどうすんだよ? 女の嫉妬は妖刀村雨 (KATANA) より鋭いんだぞ。

少し巡回していると、案外出会いの場としては悪くないとは思った。さり気なく並べられた椅子は休憩と書いてあるが、こういうところで恋は生まれる。

すでに占拠されている椅子の中には男性×男性、女性×女性など、同性同士の組み合わせもあったが、どんな形であれ恋は生まれているのは確かだろう。

それを否定することはできない。

「あのお……すこしお話してもよろしいでしょうかあ……?」
「え」

歩き回ってたら、突然三人ぐらいに囲まれていた。体と顔をくねくねさせながら寄ってくる様はまさに雌。こりやなにか裏があるな……この疑り深い性格が、幾度となく俺を救ってきた。その手には乗らないぞ。

「あのお……お名前わあ……?」

「え? ああ、穴戸です」

「あ、そうだったんですかあ! すごくかっこいい人なのに、なんで覚えてなかったんだろ? うふふ!」

「マジ激ヤバイケメンって感じですよね? チョーやばい!」

「こんなにイケメンなひと見たことないかも……!」

.....。

「え、そう？グフツ！」

『ムツ……鈴谷たちのシレイカン？すぐくだらない顔してるんですけど？』

『あきれますわ……』

『あれ絶対おだてられて喜んじやってるよ……しょうがないなあ』

『時雨姉さん！ハンドサインハンドサイン！』

『分かったわかった』

なるほど、うん、へえーすごい。

普段はモテない俺でも、お見合いにくるような奴らにとっては、若くてかっこいいイケメンってコトなのかな？グフツ。まあ、なんだ。話を聞いてやるぐらいならまだいいか。苦しゅうない、苦しゅうないぞい！

受けごたえしかしてないのに、スゲー話しかけてくる。こりや演習なんてもう……ん？時雨が俺になにかメッセージを送ってる。

その人たち 肩章 見てる

え どういう こと？

階級 見てる

「……お嬢さん方、すいませんが自分は、心に決めた人がいるので、これで失礼させてもらいます」

イケメンすぎる理由をつけて、颯爽と立ち去る。

あ、残念ですう……と、明らかにしょぼんとした顔で、拳を作りながら口を隠し、「でもそういうところがかっこいいです！」とつけ加えてくれたお嬢さん方のもとを離れるのは心苦しいが、心を鬼にして、時雨のいう階級 みる、の真意を確かめに、我が艦隊に近づいた頃、

『……ねえ！全然堕ちないじゃない！どういうコトオ!?!』

『あの若さで一番階級が高いヤツ狙ったのに……』

『モテなさそうな顔してるし、独身だからイケると思ったんだけど……やっぱりワケアリ？それともホモ？ココロに決めた人がいると

かマジキモいんですけど』

「……………」

「穴戸くん、ハンドシグナルの意味なんだけど……」

「いや、もういい。鈴谷も村雨ちゃんも、熊野みたいに呆れてくれてもいい。もう十分報いは受けたし、俺はもうなにも信じないからさ」

そう言って再び、幽霊のように会場を彷徨い始めた。後ろからなにか聞こえたような気がしたけど、ワケアリの俺の地獄耳はうまく言葉を受信できなかった。

しかし悲しきかな、筋肉自慢や学歴絶対主義者が蔓延る中、数人ほど女が近寄ってこない可哀想な男性らがいる。

俺は演習以外でも、一つ個人的な理由を持ってここに来ている。春雨ちゃんを束縛していたゴミに近づいた。

「それでさそれでさ！俺は兵学校卒のエリートなのにさ!?メスがね？よってこないの分かるウウウ!?分かるウウウ〜！」

「は、はあ……」

「おいおい、女性が近づいてこないからって俺の女に手を出すんじゃないよ」

女が近づいてこないからって春雨ちゃんに話しかけているこのゴキウズ、俺があと五階級上だったら消してるぞ。

「お、お兄さんの、お、お、おんなあ……っ!!あああ〜っ!!」

「チツ、ヒレ付きかよツ。かわいい顔して思わせぶりな態度取りやがってエ！これだから女は……」

「いつ春雨ちゃんがお前みたいなのに思わせぶりな態度を取ったかは非知りたいけど、それよりも優先的に知りたい事がある」

「ああ？なんだよりア充？」

「おいおい、J A F Gの幹部がそんな態度とっていいのか？増してや上官に」

「ジヨウカン？……お、お、おま、ま、まさか!？」

「そうだよ田中晃司くん、こんな若いのが幹部なんて思いもしなかつ

たけどき、まさか海軍にまで手が及んでたとは……」

フェミアンチグループの幹部であり、海軍兵学校卒フレッツシユ新人の田中晃司（統率88、武勇79、知略83、政治84）だ。

引き合わせるようにとは言ったが、まさか海軍軍人として紛れ込んでいるとは思いつかなかった……しかもエリート揃いの整工班にさ？

「早速で悪いんだけど、保守派について教えてくれない？なんか大きな事になってるのは承知のことだろうけど、問題がこれほど大きくなりすぎると流石に知りたくなっちゃうんだよね。っていうか、君に引き合わせるようにってあの自称お金持ち○ぼに頼んだ理由ってそれだし」

「お、俺はただ指示されただけなんス!!」

「は？・テムエ今なんて言った？」

胸ぐらを掴んだ。

「その言葉聞いたの何回目だと思ってるのオオ!?何枚重ねにして指示受けてんだテムエらはアア!?麻薬密売組織かよッ!?いい加減にしなйтとお前らが掲げている古き良き日本に従って衆道男色ゲイセ○クスをお前の政治84のケツに叩き込むぞオ!!」

「ひ、ひひいいい!!お、俺はただ古き良き日本を目指している加賀提督のご意向に賛同しているだけッス!!ほ、本当ッス!!」

「加賀提督?え、あの人が保守派なの?」

「そ、そう言った方が彼女に貢献できるかと思って!」

加賀提督とは、大湊警備府の艦娘提督である。何度か会ったこともある人だし、話もしたことがある。初めてあったときの感想を表現するならばミニスカ弓道着姿のクールビューティー。

那智司令官もクールだが、加賀提督はどこか冷たさを持った印象だ。それだけに表情からは読み取れず、いっさい海軍派閥的な言動や素振りを見せていなかったーというより、言葉の総数が少なかった。

「え、でもあの人は女だぞ?」

「J A F Gは元々アンチなんちゃってフェミニストだったんス!那智

司令官や加賀提督のような尊敬できる女性、そして女性しかなれない艦娘を掲げて、自分たちが楽をするために女の利権を最大限に利用しようとするクソアマに対して攻撃していただけなんツス!!」

古き良き日本に戻すためのJAFG……その活動を知らしめる行為と共に仲間を増やしていった、そして十分な影響力を持った時に保守派支援を公開する。というのがシナリオだったらしいが、とある集団の牽制を受けて勢いが停滞してしまっただけらしい。

とある集団……そんなの俺たちに決まってるだろ。

「そんな崇高な組織がなんでタクヤさんみたいなやり捨てレ○プ組織になったんだ？」

「え!? あいつらそんなことしてたんすか!？」

やっぱり俺の見解は正しかった。コイツらは近いうちに瓦解する。こんな12センチ単装砲よりも使えない組織を利用するなんて、保守派も存外アホなのか……いや、もしかしたら保守派にも内部派閥があつて、過激派と穏健派に別れていて、過激派が別の思想を持ち始めた故に暴走して起きた、制御不可能な悲しい闘争劇だったのかもしれない。

これはどんな組織でも起きることで、中東のテロリスト集団の中にも過激派が破門された話は有名だろう。それが建国して騒乱へ……あ、そう考えると、保守派に過激派がいるんだったらガチで戦争起こりそう。

「とにかく加賀提督が、大将が乗り気でもないのに保守派を斡旋して、お前はフェミアンチなくせにこのかわいいかわいい春雨ちゃんに話しかけてたって事でオツケー?」

「お、俺だって本当はカノジョ欲しいんツス!! 挿れたいんツス!!」

「春雨ちゃんみたいな純粹無垢なフェイスの前で何言ってるんだオラア!!」

「OUCH!」

「ほら、春雨ちゃん行くよ」

「お兄さんのオンナあ……ぐへ、ぐへへへへえくっつ!」

だめだこりゃ。

このあと演習があるつてのに、俺の体力はシユレツダーにかけられてるみたいな感覚に襲われてる。そう、すげー擦り削られているの。今頃、俺の要港部は何してるのかな。

『わあ〜!』

『どうしたの綾波?』

『夕張っ!見てください見てください!!司令官の引き出しからサムソンとバディーが出てきましたあ〜!』

『え、そ、そ、それってお、男の人同士の……は、破廉恥ですっ!!』

『あれえ〜?なんで親潮さんは知ってるんですかあ〜?』

『え、あ、その!べ、別にいいじゃないですか知っていったって!!』

『でも知ってるつて事は、興味があるつてことですよねえ〜?』

『あ、ああつ、はうう……』

『兄貴がそんな物を読むわけがない。三人衆の差金でしょう。まったく……』

『どうでもいいけど、なんでみんな司令の部屋に集まつとるんじや?』

大洗演習

「ねえなんで!?俺ツチ素直だったじゃん!!これまでにないほど誠実な男性見たことないよ!?なんで一人も落とせなかったの!?!」

「お前わざとじゃないよな」

大洗のお見合いは次の日に持ち越しとなり番組は一旦、休息に入る。

俺たちがここに来た本当の目的である演習をようやく実行できてワクワクしているのに対して、大洗要港部の副司令は御立腹の様子である。

必要以上に下ネタで攻めすぎるのは当然ペケだが、なにより自分の給料は風俗とアニメキャラに使っていると豪語していた事が悪い。ここまで来ると”正直なのはいいことだ”という昔からの言葉が、本当にそうなのかと疑いたくなってくる。

大洗要港部、演習場。

大洗の艦娘たちもかなりかわいい娘が多いが、俺の艦隊には敵わない。これからよろしく、と握手を交わしてお互いの健闘を祈りながら、お互いに自分の勝利を信じ切っているフシのある両陣営。

この演習で学ぶ事は2つ。

それは前半後半で違うが、前半は前線に出ている艦娘同士の違い。違う要港部で、戦い方が異なる艦娘同士の技術を交換し合う場としては、今日の演習は最高に実のあるものとなる。

違う性質を持った司令官の艦隊もそれだけでガラリと変わるが、艦隊旗艦による指揮と、司令官の指揮でどれだけ戦況、戦果が変わるかを検証する場でもある。

もちろん100%正確で、完璧なデータなど原則的に取れないのが現状の中、半実戦的なシミュレーションとしての演習が艦娘の練度向上、そして検証の場として最適である。それに、他の艦娘との交流を繋げる場でもあるので、個人的には練度向上と同じぐらい重要な行事だと思っている。

「それでは那智司令官、本日はよろしくお願いします」

「ああ、こちらこそよろし……ん？君は泣いていたあの坊やではないか。どうしたんだ？……ここは部外者以外は立ち入り禁止だぞ」

「おぼえててくれたんですね！ぼくね、なちさんに、ありがとつていいにきたの！」

「そうだったのか。よしよし、いい子だ」

「ううう那智お姉ちゃん！」

「うお、はははっ、こらこらだめだぞ？男の子がいきなり女性に抱きついては」

「ばぶうー！ばぶうー！」

「なにやってるんですか司令官!?」

春雨村雨熊野が俺を連れ戻しに来了。那智さんの腰にしがみつきのながら、三人は俺の腰にしがみついている。我ながら何だこの絵面は。

「いやだあ！那智お姉ちゃんと離れたくない！母性ムンムンっツ！バブウツ！」

「あなたはわたくしたちの司令官なのですからちゃんとしてくださいませ!!」

「村雨のおっぱいを見ていいですから!!那智司令官に懐かないでください!!」

「お兄さんお願いですから春雨を見てください!!」

「いやだあ！バブウ！バブウ!!」

「みんな穴戸くんの使い方がなってないな。穴戸くんを黙らすにはこうするんだ、よオ——!!」

「っ——!!!」

……吊り人形の糸が切れたかのように落ち、その首を掴まれて、ズルズルと引つ張られた司令官殿は、鴨川要港部の陣地へと戻つていった。

「あれが鴨川要港部の司令官、穴戸龍城少佐か。柱島泊地では例の艦隊をもの見事に統率し、既に多くの戦果を上げながらプログラムを次席卒業したという……思っていたのとは違うな」

「え、それだけツスか……」

「結城、艦隊の指揮はお前がやれ」

「え、いいんっすか!? ていうかなんでえ!？」

「前線指揮官としての経験も積ませるために副司令官となったのだから、それにお前の同期なのだから、お前が相手をするのが妥当だと思うが……」

「ああなるほどー……了解っす！大洗の力、見せつけてやるっす！」

十五分後に意識を取り戻したとき、その惨事を傍観していた白露さんに「時雨がね？首のところをピコーンってカラテチョップしたんだあ！そしてね？気絶したの。この白露さんでも、リアルで映画みたいにチョップで気絶する人初めてみたなー！」と聞かされた。

(※首チョップで人は気絶しません、絶対に真似しないでください)

「小官は鴨川司令長官である。小官の麾下にて武勇を奮うは武人としての誇りと心得よ。艦隊編成の程は如何なものか？」

「ほらあ！時雨姉さんが首チョップなんてするから穴戸さんが変な喋り方になってるじゃないですかあ!!」

「貴官等の胸部装甲は敵艦隊に対して有効打を加えるが、司令長官たる小官の砲塔火力発電にもなり得ると見受ける。小官直々の指揮下にて、小官の大和砲塔の上下整備任務に従事せよ」

「言ってるコトわけ分かんないけど、なんか目がいやらしいんですけどー！」

「よつと——!!」

「ツ——!? あ、時雨、痛いって分かる？わかるね？ファ○クツユウウウ!!」

「良かったあ〜！いつもの司令官だあ〜！」

いつの間にか演習準備が整っていたこの頃、快晴は要港部と隣海を悠々と照らしていた。

深海棲艦の反応は薄く、要港部前の海域で演習をするには絶好の日和であると、那智司令官や俺も晴天に感謝しながら出撃所の外を眺める。

那智司令官は、所謂ホスト的なポジションとして壇上に立ち、そし

てマイクを持ちながらその大きな胸を張って簡潔な挨拶をかます。

『諸君、那智だ。知らない者はいないと思うが、今日は鴨川要港部から宍戸司令官とその主力艦隊が来港して下さった。もちろんその目的は、貴様らとの演習である。彼らの来航を無駄にしないためにも、予定されている通りに演習を進めるように。以上、大洗対鴨川の演習は二分後とする』

『『よろしくお願ひしますー』』

お互いに再度、挨拶をして演習に取り掛かる。

演習の予定は三段階に別れており、後の2つは通常通りに艦隊同士がドンパチするもので、二段目は鈴谷の指揮下で、三段目は俺の指揮下でするものだ。

初段階はもちろんウォーミングアップである。既にやり終えた準備運動じゃなくて、海上にある的を撃つたり、障害物を避けたりするー所謂、陸軍でやっているピットランみたいなものだ。特殊部隊は特にタイムとスコアを気にしながら競ったりして、お互いを高め合うのが基本なんだそうだ。

演習前のこれは正にお互いの實力を見せつけ合う行為である。演習は手の内がわからない相手とするのが基本的に最良とされているが、最低限こうやって見せ合わないと駄目だっというレギュレーションが存在する。

そりゃ初っ端から柱島の外国艦隊と戦うなんてしたら、初見殺しにも程があるからな。そんな敵が実戦で出ないことを願おう。

『では最初は大洗から行かせてもらおう』

『ハッ！』

行きますー！の掛け声で大洗の艦娘が行ったのは挨拶から丁度二分が経過した頃だった。

的を外したり転びそうになったりもしたが、誠実さを感じる走りです。悪くはなかった。緊張して本調子じゃなかったと思えば尚更だ。

特にこれといった感想もないまま次は俺たちの番だ。

「白露、いっちばーん！」

「村雨、いっつきまーす！」

「春雨！行きますすつツツツ!!」

白露さんの右腕、右脚の調子は悪くない……と。こういうデータを取るのは提督としても重要だが、軍医さんにちゃんと見張るようにと言われたから仕方がない。成績は流石と言う他ないけど、的はもう少し中心に当ててほしい。かすればいいってもんじゃないぞ。

村雨ちゃんは逆に、とても忠実に的を射抜いていったが、他のみなどと比べれば比較的タイムは遅い方である。あくまで自分の艦隊との比較なので、これと言った支障はない。ただいい所だけを褒めて終わり、というわけにもいかず、最低でも各々の長所と短所を一つずつ覚えていく工程が、提督としてどうしても必要だからそれを上げただけだが、実戦となれば村雨ちゃんは本当にいい艦娘となるだろう。

春雨ちゃんは……すごい、データで見るステータス的には自信がなかったけど、本番に強いタイプなのか。防衛戦のときの強さは、やっぱり紛れじゃないと言うことか。

『ほう、鴨川の艦隊は流石と言ったところか』

「ありがとうございます！那智司令官！那智司令官にそう言われるのは光栄の極みです!!」

『これは負けてられないぞ！伊19！エースの力を見せてやれエ！』
『はいなの！』

なんだあのクソエロスク水。

『イツケエエイクちゃん！いい成績出したら俺ツチもソクソクツツとイクからア！』

『死ねなの』

その暴言は結城副司令を凍らせたが、大きな魚雷と一緒に海水へダイブする姿は圧巻の一言だった。あのフォームの美しさもさる事ながら、海上艦ではない珍しさからくる感情でもある。

俺の要港部、潜水艦いねえんだよなあ。

『へっくちん！』

『どうしたのゴージャ？働きすぎて風邪引いちやっただったら、陽炎の方から班長に言っただげるわよ！』

『あ、だ、大丈夫でち！誰かに噂されてたような……あ！もしかして労働神、デウス・デア・アルバイターがゴーヤに囁いてるでち!?』

『デウス、デア、アルバイター……!』

『不知火、反応せんでええから』

続いて鈴熊が出撃した。

予想通り掛け声にみんな笑った。え、成績の方はどうだったかって？まあまあじゃないんですかね。

こつちしか軽空母いないだし、第一、攻撃型軽空母の良し悪しの基準が鈴熊のデータだけで、しかも二人のステータスそのものがほぼ平行だから仕方がない。

強いて言えば熊野は防御型で、鈴谷は攻撃型みたいな感じである。成績も若干鈴谷が勝ってるが、ほぼ誤差。

あちらの潜水艦はかなり強力で、艦種によつての数やルート云々はかなり異なる場合があるが、潜っている事に加えて、使っているのが魚雷だけだから破壊力がある。

知らない間に接近されて近距離魚雷発射されれば正に一撃必殺だ。普段は爆雷投射機で即KOだけど、今回はもってきてないし、こりゃヤバイわ。

なにがヤバイかって、艦娘海戦指南や海軍兵学校の艦娘科では水上艦と潜水艦が両立したときに、潜水艦の方を倒せてルールがあるんだ。執拗に潜水艦にだけ集中したせいで轟沈した艦娘がいたため、現在では改正を検討されている。

一概に変えられない要因として、接近されたらヤバイ上に開幕爆撃を仕掛けてくるから、これで恐怖感を覚える艦娘もいる。これに対抗できるのが、艦娘の中で最も小回りが効き、ステータス上は比較的に劣っているとされる「駆逐艦」なんだ。彼女らには対潜能力が備わっている上、爆雷や水中探信を装備できるので、潜水艦だらけの海域だったら無双できる。

整工班出身の提督として、爆雷つてのは小さな爆弾が何百個もジャラジャラしてる装備で、つける時にヒヤヒヤするから、対潜だったら

水探をつけてくれた方がこちらとしては気が楽である。

「最後は僕だね」

「うん」

「これってもしもいい成績とつたら極上カルビとかボーナス支給とかされちゃうのかな？チラツ、チラツ？」

「は？テメエな……いや、もしもこの成績と、演習で勝てたら考えんでもない」

「時雨、行くよッ!!」

初めて時雨を手玉に取れたように思えた。

水飛沫を浴びながら華麗に水面へと着水する。開始の合図と共に背後がスタートダッシュのブーストで、一瞬だけ大波を作る。

初撃で出てくる的を見事に命中させ、白露さんや鈴谷同様に走行砲撃という、走りながら撃つ芸達者な技を駆使して次々と的を射抜いていく。

置きミサイルならぬ、置き魚雷で遠くの的に着弾するのを確認もせずに最後は飛脚しながらのキックで的を蹴り上げた。

その走りは、各々を戦慄させるものである。

『な、なんだあのデタラメな走りは……』

『時雨さんって言ってたわよね？ファンになっちゃうかも……』

『しゅごい！いいいい！』

成績は見事に駆逐艦トップである。その強さは知つてのとおりだが、あんな危ない走りはどこで覚えたのか……実戦でやらないように釘を刺さなければ。

「ハア……！ハア……！やったあ……！一位い！」

「ねえ時雨え、そのお、どこでえ、その走行砲撃とかあ、蹴り上げるとかあ、野蛮な技術を覚えたのかなあ？うん？まにゆあるどおりにしなくてもいいけどお、ふりーだむわあだめえだお？」

「そ、その……いいじゃん別に！ほら成績一位だよ!?だからその気持ち悪い声やめて！夕立がこうするといっぽいぽいぽいって言ったから真似してみたただだよ！」

「あの置き魚雷はなに」

「え、あれ？ たまたま撃つたら当たっただけ」

要するに運つてことか、確かに運いいもんな……今度スマホゲームのガチャ引かせよう。

『走り終えたところで、これより実戦演習に取り掛かる。双方準備せよ！』

準備をするために、一旦出撃所で整備する必要がある。本格的なドnpachiが始まる前に、各々の司令官が海上を安全な場所から見渡せる所に行かなくてはならない。

俺は先立つて、その司令塔へと向かう。

「穴戸司令官の艦隊は流石だと言えるな。正直、我らの艦隊で太刀打ちできるかどうか不安だ」

「自分の力ではありませんよ那智司令官、彼女たちが本当に強いので、こちらとしては仕事を奪われている気分です……」

「ハハハ、何を言うんだ。君の指揮下にいるからこそ、本気を出せるのだと、私は思う。司令官の人徳とは案外、実績と作戦の成功にも関わっているんだぞ？」

「そういうものでしょうか……」

「ああ、だから自信を持って、な？」

「うう、那智お姉ちゃあくん!!」

「うお、はははっ、本当に困ったヤツだなあお前は」

「……………」

「あ、あれ、みんな、なんで、ここに居るのかな？ し、出撃所はあっち

——」

大洗演習 VS 同僚

……ここは、どこだ？

ああ、これ多分、俺の故郷だ。

一步出れば都会で、住んでた所はど辺境。雰囲気はのどかで、ふわふわしてるくせに時々、銃声が聞こえたりしたけど、不思議と違和感がなかった、そんな場所である。

つまりここは、天国か……フツ、短い人生だったな。一回ぐらいは故郷に戻りたかった……。

——ください！
ん？

——起きてください！

ああはいはい、分かってますよ。どうせ、俺の可愛い天使たちが「死なないでえ！」とか涙を流しながら俺の死体（暫定）を囲ってるんですよ？わかってる分かってる。

結局みんな、俺がいないとだめなんだよなあ……俺は、自分の頬を抓って目を覚ます。

「大丈夫ツスカア!?起きてクダサイツスウ！」

「……………」

目を覚ませば、俺は筋肉マンに抱えられていた。

「良かったツスツ！アザツス！」

「……………」

「つて、二度寝は駄目デスってエ！ほらほらウエイクアップ！」

「……………」

無言で起き上がる。

俺がいるのは司令塔である。

鴨川要港部にもあるが、普段は上官がここに来て、海上演習を直に見ながら訓練指導している。

防弾ガラスで砲弾を弾けるかはわからないが、今回は生身の司令官が前線指揮官として、幾何学的なボタンとスピーカーに向かって艦隊

に指示を送るのが、演習の最終段階となる。

この司令官塔の向かいにあるのはもう一つの司令塔であり、結城が手と那智司令官が手を振っている。よく見ると小せえ。

俺の司令塔もそうだけど、犬小屋かよってぐらい小せえ。そこにムサ苦しい海軍男児が三人ぐらい俺の後ろにいる。クセえ。

演習場を見下ろすと両艦隊が波に揺らされ、ふわふわつとしながら談笑を楽しんでいる様子が伺える。とりあえずスピーカーをオンにした。

『蹴り上げ攻撃って結構体力消費するし、あまり破壊力ないから実戦では使わないんだよね』

『え、そうなの？カッコイイと思ったのに〜』

『お前ら司令官が寝ている間に良くもそんな呑気で居られるなア!?』

『あ、起きたんだ、僕たちの演習もう終わってるよ。負けちゃった、てへっ』

『あちらのほうが有利とはいえ、悔しいですわ……』

『ハア!?なに寝ている間に終わらせてんだ貴様ア!?』

『だって司令官の指揮なしでやる艦隊同士の戦いなんだから、司令官が見ててもあんまり意味ないし』

『待つのが常識だろうが、アア!?ふざけんよコラア!!』

『ひ、ひどい！ぼ、ぼく、ただしれいかんがつかれてるからやすませてあげようとおもっただけなのに……ひぐ、ふえええんっ』

『穴戸っちサイテー』

『女の子泣かすのサイテー！白露さん許せないな！そういうの！』

『お、お兄さん！嘘泣きですから、ね!?!』

『え、あっちの司令官、時雨さんを泣かしてるの？ありえないんだけど』

『うわあ、あの人やつぱり怪しいと思ったんだよねー。多分、学歴がいから司令官になったんだよあの人』

『頭いいとか言って中身クズじゃん』

『だから絶対ブラック要港部だってあそこ！絶対艦娘に何か言えない

ことしてるから!」

『ゴミなの!』

「こっちも泣いていいっすか」

「だ、大丈夫ですって!自分らは信じてます!少佐は学歴だけのボンボンじゃないって!」

「そうですね!実は催眠アプリで艦娘のハーレム作ってるとか、全然思ってませんから!」

「自分は穴戸少佐のケツに興味があるので、そんなのはどうでもいいッスね」

俺はボンボンでもないし、催眠アプリなんてあつたら是非ほしいし、ケツだったらその二人とシてお願いだから。

コンツツツなに早く悪評って広まるもんなの?もう別にいいよ、慣れてるから。瞳から流れるこれは、ただの……血液から赤い色素を抜いたアレだ。

先決、なんであろうと今は指揮を取らなくちゃいけない。頑張れ、俺の精神、負けるな、俺のプライド。

「……では、よろしく願います、那智司令官」

『は、初めてもいいのか?』

「え、なんで聞く必要があるんですか?」

那智司令官は目がいいのだろうか、反対側の司令塔から俺の顔を伺うような表情で聞いてくる。

スピーカーの音が虚しく響く室内は、四人も入ってるだけあって狭い上に湿度が高く、そう簡単にはこの涙を乾かしてくれない。

『今回は俺が指揮するぜ!』

「え、那智司令官ではなく?」

『同期なのだろう?それに、こういう経験は本格的に要港部を預かる前にさせておいた方がいいと思ってるな』

那智司令官は聡明な方である。

しかし実は、那智司令官は結城に演習で負けたことがあるらしい。情報は事前にこの要港部の知り合いから聞き入れたものである。

艦隊運用能力では副司令官の方が上なのだが、他の要港部や鎮守府との演習をしたことがないので、その経験を積ませようとしているのか、あるいは鴨川要港部VS大洗要港部の戦いに勝とうとしているのか。何れにしても、その真意の程はどうかわからない。

「なるほど……聞いたか我が艦隊の諸君よ。相手の司令官は若輩者であるとは言え、私は貴様らの指揮に手を抜く事はないぞ」

『え、お前も若輩者じゃー』

「お前たちがどれほど苦しかろうと、最後の最後まで戦わせる。ポケオンがライフゼロになるまで戦闘を強要するクソカストレーナー同様、俺もブラック鎮守府のクソカス提督だからな……ハ、ハハッ、ハハハハハッ!!」

『……時雨姉さんっ!!あとでぜつつつたい穴戸さんに謝って下さいね!!じゃないと村雨でも容赦しないわよっ!!』

『時雨姉さん……ッ』

『大丈夫だっ……多分』

『……シグレエ!!』

『わ、分かった!!わ、わかったよ村雨、春雨!お願いだからそのアンカーと魚雷しまっ!!』

晴天がガラス越しに照らされる中、自分の中である程度の準備をしながら、息を整え、上着を脱ぐ。

両艦隊も同じく臨戦態勢をとり、状態としては“何時でもぶつかり合える”。

最後に頬を三回ほど叩き、緊張感を締めつける。

『双方、準備はよろしいか?』

『はいッス司令官!』

「準備整いました」

『では、これより大洗要港結城指揮下、鴨川要港穴戸指揮下による演習を始める!両陣、戦闘開始!』

——大洗要港部副司令官——

結城 大尉

那智司令官の号令以降、あちらとの無線は途絶えた。

見下ろしていた両艦隊は最初、所定の場所まで移動してから戻ってきて、それから砲雷撃戦が始まる。

これは大海原で実際に海戦を行う時は、更に広いスペースを空けた状態で戦闘が始まるので、『敵が接近している状況』を作り出し、なるべく実戦に近づけるようにするためである。

「鈴谷熊野は出せる時になったら偵察機を出せ！艦攻の随行も忘れるなよ！」

相手の艦隊編成も確か空母を入れている。あちらは艦種に軽空母2隻、軽巡、駆逐艦2隻、そして潜水艦も入れているのに対して、こちらは同じく元重巡の軽空母2隻と駆逐艦4隻という編成がぶつかりあう辺りフェアじゃないと思った。始まって早々負けるかもしれないと思い始めた。

相手の編成はわかっているけども偵察機を出す理由はずばり、実戦で出すのが基本であり、演習をするときはそれがルールだからだ。

基本は大事なので、こちらも基本的なアプローチをとらせてもらう。深海棲艦でも艦娘でも、砲撃距離まで近づいていない以上やることは一つだ。

「ありったけの艦戦と艦攻をぶつけてやれえ!!」

『やっってるって!』

航空戦隊は当然演習用である。

艦装装備はともかく、航空戦隊の戦闘能力は練度が影響する部分が大きく、普段通りのコントロールができないこと考慮に入れながら、ようやく見えた航空戦隊の制空権争いが始まる。

ガラス越しでも分かる迫力は身体の至るところに疾風を受けるような幻覚を感じさせる。

大洗はあの様子だと複縦陣だろう。

オーソドックスな単縦陣より対空戦に優れている上、二分しているだけあって砲戦命中率にも優れている。

一方こちらは軽空母2隻と駆逐艦4隻という編成ならば単縦陣が

最も効果的だろう。それを読んで大洗側はそれに対抗するために、二手に別れてクロスファイアーして優位に立つ……というのが、敵が考え得る大まかな予想である。

艦載機の動きもなんとなくだが、防衛的な気がする。演習は旗艦を大破させれば勝ちだが、あそここの旗艦も軽空母だから簡単には倒れてくれないんだよなあ。

航空戦の結果としては痛み分けといったところだが、艦攻が放った唯一の魚雷がこちらの駆逐艦を小破させたらしい。つまりは、事実上の制空権確保である。ーだからといって手を抜くわけではない。

「全艦止まり、輪形陣を取りながら全速後退！鈴谷、熊野！艦戦を急遽戻してスクランブル発進しさせてくれ！」

『へえ!?ま、まだ砲撃戦始まってないよ!?』

「いいから頼む!!」

『わ、分かった!』

素直に聞いてくれるのは助かる。

この行動は実戦での記録は限りなく少ないものの、するべき時とするべきでない時がある。

友人相手だからか性格的にその手の内が読める事もあるが、大洗艦隊がしようとしているのは艦娘相手の意表をつく攻撃なので、まともに食らったら大打撃だっただろう。ーガラスの前を通る艦載機を見てそう思った。

『て、敵艦爆接近ツ!!』

「な、なに!!?」

お前たちが驚いてどうするんだよ、お前たちの副司令官だぞ……と、後ろの三人にツツコミを入れた。

砲撃戦の支援艦載機として有名な艦爆が活躍する場面はそこに限られている。

通常、手持ちの戦力を最大限に活かすために接近してからの発進させるが、結城はあえて艦隊同士が接近する一歩手前のーまさか艦爆が来るとは思いもしないだろうその瞬間と、航空戦力が手薄になる、艦戦が一旦戻る瞬間を見計らい、その決断を下した。

フフツ、見事に予想が命中したのか、あちらの司令塔では無様に地団駄しているのがいるぞ、ざまあみろ。

実際に俺がやろうとしていたから、もしやってたらそれこそ痛み分けて、双方ボロボロの状態になってただろうな。

たとえ艦爆を発進させてなくても、コチラの艦戦が戻ってきて体制を立て直す時間と、敵艦隊に接触するまでの時間を稼げたからどの道いったん撤退は正しい選択だった。

艦隊を後退させたせいで見えない場所での航空戦だが、対空準備を最大限整えたので、例えば攻撃を受けたとしてもそれ以上損害を抑えることはできなかつただろう。

『村雨と白露が小破したけど、艦載機の数はかなり減らしたよ！艦載機はケーサンしたら艦爆が無傷なこつちが有利だよ！』

『よし、それじゃあ先頭は時雨、白露さんが変わって単縦陣にしてくれ』

『僕が先頭？階級は姉さんは上だから姉さんを先頭にしたほうが……』

『もうこの際どつちでもいいよオ!!それに言ったよねえ我輩はブラツクなブラブラチンチ○提督だつて!?提督に口答えするのはだめなのお。分かるのお?ばかなのお?!アハツツハツハハハアアアア!!』

『こ、これは本当に謝らなきゃいけないかもよ時雨……』
『う、うん……』

後ろの海軍男児もドン引きしているところ悪いが、聡明かつ偉大な提督として指揮に戻らせていただく。

砲撃戦が始まりそうになった頃、敵の艦隊は予想通り複縦陣でやってきた。これまた予想通り、2つ敵艦隊の距離は“離れようとしている”と伝えているかのように微妙な距離感だった。

「相手の複縦陣が見えると思うが、おそらく二方面攻撃を仕掛けて来るだろう。単縦陣を複縦陣の分裂と共に横縦陣に変える準備をしておけ！間にいる時雨と春雨ちゃんは潜水艦イクを探してくれ、その間に村雨ちゃんと白露さんは鈴熊の航空戦を使って全力で包囲しよう

とする艦隊を叩けえ!!あと例のフォーメーションもやるかもしれない!」

『注文多いなあ……』

「えッ?そうッ?分かる!?俺ってばマジブラブラブラチ○カスー」

『ああもう分かったってば!とりあえずあの潜水艦は全力で叩かなきゃ……!』

司令塔からドヤ顔で艦隊分裂を指示した結城。読まれてんのも知らずに馬鹿でやんの!

読まれていたとおり、こちらの陣形は双頭の蛇状態となる。

『ハア、え、ちよ、なんでえ!?お前なんて手の内よめてんの!?俺の声ずっと駄々漏れだったとか!?不正!』

「そういう不正がないようにって意味で、わざわざ三人も屈強な男児が俺のケツ見張ってんだろうが。つか演習中に通話すんな」

あちらへのスピーカーを切った。

「俺が少佐のケツを見張るのは、個人的な理由ですけどね♂おつといけない、本格的♂公私混同」

「黙れ♀」

しかし、ここで予想外なことが起こる。

『す、鈴谷が中破しましたわ!』

「え」

『潜水艦にやられた!あっちを大破させたけど、旗艦がヤバイよ穴戸くん!!』

『ハハハ!お前はすげー戦術家だけどなあ!?俺はすげー奇術家なんだよオ!イクちゃんは演習開始でスタート地点に到達した時から、ずっとお前の艦隊の背後に回るように迂回させてたんだよオ!まんまと引つかかったなあ!チエエツクメイトオ!』

一杯だけだが、これは食わされたと言うべきなのか……旗艦中破であと一発でも喰らえば負けるという緊張感からか、命中率は低くなつた気がする。

だが鈴谷も中破したからと言って、飛び回ってる艦載機を操れない

わけじゃない。鈴谷のか熊野のか分からないが、続いて艦爆を受けた駆逐艦2隻は確実に中破させている。

このままじゃだめだという危機感からか、一旦艦隊の編成を戻そうとする大洗……敵前でそれをするのは正にギブアップ行為だが、華麗にトドメを刺そう。

「みんなあー！例の半輪形陣を取れ！鈴谷を全力で守りながら事実上の残存戦力の軽巡！次いで航空予備戦力なしの旗艦軽空母だ！一気に叩けエ!!」

「半輪形陣……？」

「お前、聞いたことあるか？」

「ないな……」

そりやそうだ、要港部練習させてるのは俺だけだもんな。

考案した陣形の一つである半輪形陣は、正面にしか敵がいらないと想定して、ボーリングのピンのように旗艦が一番先頭に立ち、3隻が並んでいる方を敵に向けながら戦う、超防御型の戦法である。

一回試してみたかったんだ。この状況だったら旗艦の安全が最も遵守されて、万が一にも沈むことはないだろうからな。

『とおおおおおおうおう!!』

神戸ベア主導の猛攻により、なし崩しになった大洗艦隊の旗艦がホワイトフラッグを掲げたところで、演習が終了した。

大洗要港部はその目に誰が格上かを、改めて見せつけられた感覚に襲われただろう。こういうのを、正に“度肝を抜かれた”というのだ。報告書に書くならそうだな、

勝者、鴨川要港部遠征艦隊。

(殲滅できなかったので) B勝利である。

大洗演習 もう一つのミツシヨン

「凄いつすよ穴戸少佐！やっぱりこの人は質が違うわって思ってた！」

「少佐！握手してください！」

「少佐！自分は少佐をロールモデルとして掲げる事に決めました！」

「ハハハ、でも俺なんかを見本だめぞ！俺はブラック要港部の提督で催眠アプリでハーレム作って艦娘にいやらしい事して女の子泣かせて金あんまり持ってないのに金持ちボンボンでなぜか男からケツを狙われてる学歴と頭がいいだけの中身がクズ、ゴミ、サイテーな司令官だからな、アハハハ」

「ご、ごめんって！本当にごめんね穴戸司令官！お、お詫びに僕のセクシーポーズ見せてあげるから！う、うつつうくんっ」

「アハハハハハ！」

「ほ、ほら！村雨や春雨もやって！」

「お兄さん！ちゅーっ！」

「時雨ねえさんがそもそも悪いんだからもっと謝って……って、きや！なにやってるの時雨ねえさん！スカートめくりあげないでえっ！」

「ありがとう、すげー元気が出た」

大洗要港部の広場で別れる前に、お互いの全力を出し切ったことへの敬意として、軽い挨拶をしていた。夕暮れが橙色に照らす要港部もまた美しく、また眩しくもある。

人気なのはやっぱり主力艦の鈴熊、そして時雨である。頬に春雨ちゃんの柔けえ唇を感じながら、辺りにいた海軍将兵らの羨望の眼差しを独占していた。

正に勝ち組。

俺は貴様らとは違うんだと言わんばかりにこのモテ男の秘訣あれやこれやとさらけ出し、チツ……コイツがイケてる男の基準なんて鼻で笑うわ、と舌打ちをかましたあちらの将校は、俺直伝のジャイアントスイングを受ける資格を得た。

だがそんなモテ男タイムは結局数分の命であり、話題と注目の的は鴨川艦隊のみんなのもとに帰る。

俺らが征く艦隊の帰り道は、鈴熊と軽空母らと那智司令官の談笑、村雨ちゃんは海軍男児諸君に囲まれ、春雨ちゃんは潜水艦イクや軽巡らとの技術交換の場となっていた。

「仲良くなつてよかったね」

「他人事みたいに言うなあ時雨？お前もその一人なんだぞ」

「たしかに……って、宍戸くんどこに行くの？」

「最後は副司令官殿に挨拶しに行くのさ」

「結城のところへ？そういうえばここにいないね、どこにいるんだろ？」

「あつちの方に行ったのを見たんだけど……まあお前ならいいか、じゃあ別れの挨拶をしに行くぞ」

「うん」

・
・
・

大洗要港の玄関からはそう遠くない。

自分が所属していない建物内を歩くのは常に違和感を覚えさせる。匂いに大差はないはずだが、それでも違いを嗅ぎ分けられる人間の敏感さが、違和感を生み出す要因の一つなのだろうか。

時雨の「ココ臭い」の一言は聞いていたら那智司令官が悲しむだろうから、聞かなかつた事にしよう。

小学校の頃、夕方の学校に忍び込んだ経験のある俺だからか、日の暮れた白い建物つてのはどこか懐かしさを呼び起こす。

結城の部屋なのか、扉が開いたままになっているため、電話声が駄々漏れである。

「シゲ、シゲ、パーアラムーハア……パブにでも行こうかな……」

「電話終わった？」

「うお!!?あ、お前かよおくびつくりさせるんじゃないやねえよ!!俺ツチ、サブ

「ライズあんまり好きじゃないんだぜえ〜?」

「ドア開けてるお前が悪い。あと時雨連れてきたぞ」

「やっほー」

「コホンツ……時雨ちゃんを連れて来てくれるなんて、俺ツチサプライズ大好き侍」

「そうかそうか、サプライズ好きじゃないのにサプライズ大好き侍さんホントゴミイツ!」

時雨は部屋の中にズカズカ入っていったが、これと言って嫌悪感を見せてる様子はない。反面、俺も無言で中に入るが「あ、靴脱いで、あと靴下も脱いで足洗ってから出直して来てっちょ」と言ってきたので、軽く殴りそうになった。

「へえ〜ここ結城くんの部屋なんだ。意外に片付いてるね」

「そうそう!俺ツチの部屋マジ清楚系だし!時雨ちゃんさえよかったら、今夜は鴨川じゃなくて、ベッド空母俺ツチに帰還してくれてもいいんだよ……?」

「うん、遠慮しておくねっ」

「クツ……!ガードが鉄壁スギイ!ハア……」

「ため息つきたいのはこっちだ馬鹿野郎」

お見合いは次回に持ち越されたが、友人として一応そこでの奮闘に期待し、応援しよう。

「さっきお前が話してたのって本国の人か?」

「え、ホンゴク?何言ってるの宍戸くん?」

「バンコクの間違いだよきつと!」

「フィリピンからの電話だったんだろ?隠さなくてもいいんだぜ」
「え」

一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに戻る。時雨も同様に驚いたが「未だに開いた口は塞がらない」状態である。

俺はもう一つのミッションをこなす為にここに来た。それは斎藤中将からの直々のお願いで、結城に『釘を刺しに』来たのだ。

斎藤中将がどこで手に入れたかは分からないが、コイツはフィリピンの人のハーフである事を電話で伝えられた。友人としてそのことを

薄々気付いてはいたが、どこの国からなのかは定かじゃなかった。

それだけなら「そうだったの!？」で済む話だが、結城の愛国心がこの国よりも、現在深海棲艦に苦しめられている他国に向けられていることが問題だった。

押し留めれば、俺も中将も、それだけなら全く……とは言わないが、問題として取り上げるのにはバカバカしいと思っている。だが、革新派という台頭馬が過激的な海外の……送られてきたファックスの言葉を飾れば、東亜開放、そしてそれに対抗する保守派との激突を呼ぶのであれば、黙ってはおけないのだ。

「え、分かつちやつたか〜!」

「え、宍戸くん、どういうこと? 結城くんは日本人じゃなかったってこと?」

「半分は正解。コイツは海軍に入つてのし上がり、何れは海軍を乗っ取って、軍隊を統合して、日本政府を牛耳って、世界征服を目論む売国奴ドコロの話じゃないクソチ○カス野郎なんだ。今ぶつ殺しておかないと……村雨ちゃんや春雨ちゃん、それだけじゃない、白露さんや夕立ちゃん、ついにはあの純粋無垢な五月雨ちゃんまで……膜を破られる事になる」

「穴開き手袋もつてきてよかつたあ〜!……よしッ」

「ちよ、ちよおーっつと待つてエ!!俺ツチそんな危ない野望持つてない!!破らない!!先っぼだけだから!」

「フンっツツツ!!」

「キヤアアアアア!!今の死ぬ攻撃!!今の絶対死ぬウ!!」

時雨が繰り出す死ぬ攻撃とは、空振りした拳の衝撃波がカーテンをふわつとさせたぐらい疾風を巻き起こす一撃の事である。

「お、俺ツチは別に乗っ取ろうとかそんなこと一回も考えてない!!ただ祖国の技術発展と国の開放のために、ちよお〜つと色々和日本海軍の内部状況を教えてアツチの海軍の足しにしてもらおうと……」

コイツは詐欺師に向いていると思った。本当に一瞬だけ、海軍の漏洩法を忘れるところだった。

「聞いたか時雨? 技術漏洩、及び海軍気密情報漏洩。別に黙つてりや

いい事をベラベラベラベラとき、まるで自殺願望があるかのようにさ、こりやたまげたなあ？こつちはお前が革新派をこれ以上煽らなきやいいのにさあ……」

「え、そ、そつちイ!?漏洩つつつても教育方法とか訓練法とかの技術でさあ!?!別にすごく重大な事は喋ってないしい!?第一、俺ツチなにもやってない侍なんだけど!?!」

「嘘つけボケカスウ!お前すげーノリノリだったじゃん!あと十分技術漏洩として処理できるからな!?!……まあいい、お前の言い分はわかった。時雨、ごめん勘違いだった、だからもう殺さなくてもいいよ」
「もちろん本気じゃなかったさ、僕は加減ができて、正に“できる女”だからね」

うまいと思ってるのか。

あとあのパンチ避けなかったらどうなってたんですかねえ。頭蓋骨からナニかが飛び出して、とか……いや、考えないようにしよう。

「お前は別に日本を裏切ろうとか売ろうとか、そんなやつじゃないのは分かってるし、お前の家庭事情もある程度は承知している。だから国を救いたいと思う気持ちも誇っていいと思うし、俺はお前がする事に邪魔をしない」

「し、宍戸……!」

「だけど内部闘争を煽るのは別だ。中将も俺も、お前を見逃す代わりに、そのクソみたいな革新派を指導しているを教えてほしいんだ」

いい加減中将も俺も全貌が見たいんだけど。明らかに目立ってるやつがいるならまだしも、集団的無意識みてえに「あ、ぼく実は海外進出賛成派です」みてえなこと言うやつが首脳会議で何人も居たのは聞いた。

暗躍の暗が強すぎて黒幕さんがいるかも怪しいと思い始めたこの頃でしたア!!

「え、革新派って斎藤中将派のこと宍戸くん?」

「そうそう!あのイケてるメガネがカリスマ的すぎるあまりに内部闘争の火種にさせられそうな可哀想な人でもあるんだ!」

「そうだったのかあゝ俺ツチ知りませんでしたゝ」

「は？」

「すんません。でも俺ツチの見解だと中将メガネよりかは少将メガネなんだよなあ……」

「は？少将？あの人降格した？」

「ちがうちがう！あの人じゃなくて、大淀少将のことだって！あの人に、斎藤中将は素晴らしい人で、いま以上の実権を握れば絶対海外進出できて、何れは東アジアを日本の庇護化においてくれるって言うってたんだもん！」

「たんだもん！じゃねえよクソがあ！！中将はそんなことお望みじゃないんですけどオ！？なに！？あの一とって大淀少将とかいう人の野望を果たすためのスケープゴートかなにかなの!？」

「そ、そこまでは知らないッス！」

大淀少将……軍令部次長のエリート官僚で、直接あった事がないけど見たことはある。あれが少将かよってぐらい華奢なメガネの艦娘だった。

軍令部次長……って事は、保守派の荒木大将のすぐそばに居る人だ。

「分かったわかった、穴戸や時雨ちゃんには特別に話してもいいか！結城副司令官からの最新情報を教えてやるからさ！それで許してつちよ!？お前たちの所にも送られたとは思うけど、実は東亜開放に先立って、大淀少将の立てた作戦でソッコウ的に八丈島を攻略しにくいらしいぜエ!？すげーだろ!？今頃は攻略の真つ最中だろうなー」

え、そんな迅速な軍事行動できるの……？と口に出しそうだったが、ずっと前から準備していたと言われれば納得がいく。

「八丈島？あの新種のエリート艦ばかりが集まる？」

「そうそう！革新派のモメンタムを見せつけてやる！って感じだったらしい」

「ねえねえ穴戸くん、モメンタムってなに？」

勢いって意味だよ、と簡単な説明を加えたあと追い打ちに「八丈島ってなに？そこを攻略してなんになるの？」と聞いてきたので、さ

がなら子供に教えるように個人的な見解を述べた。

八丈島とは、東京都内の伊豆諸島に組み込まれている島の一つである。

早い話が、多分だが、日本国土回復により海外進出への支持力の強化。しかしエリート艦を撃滅する行為は、国土回復による国民の支持だけではなく、海軍、いや日本軍内部でも、その存在感と力を示す事になる。

それでも、？みたいな顔してた。

日本海軍は失った国土を取り戻せるぐらいすごいんだよ？だからもつとアグレッツシブに行こうじゃないかあゝ！ってことだ。

結城はヘラヘラしている様子を見るに、これ以上に詳細な情報を聞くことはできないだろうが、今それ以外の情報への必要性は感じなかった。

要はその大淀少将とかいうメガネ小娘をブツ〇せばいいんでしょ？八丈島攻略なんて変な作戦立てやがってよお？

気になるじゃねえか……エリート艦はたまに出現したりするけど、それが八丈島からのものかは定かではない。あそこまで行けないし、敵の艦隊編成の中に一隻だけとかだからまだ大丈夫な方だったが、20隻が一気に来たりしたらヤバイとヒヤヒヤしていた。

もし数を減らしてくれるらんだつたら、少なくとも要港部的には嬉しいことこの上ない。でも東亜開放が実行されれば海外へも着々と巡回海域を広めることになる。少なくとも、いま実行されている作戦は成功するだろうとは思いますが、哨戒海域を広げられたやらだなあ……と思っていた。

現実には常に無情である。

無常とは、予想よりもひどい結果をもたらしたことである。

その結果に、ただただ呆然と、ノートパソコンの画面を眺めるしかなかった。

『こちら横須賀第四鎮守府からお送りしております!!現在、多数の負傷者を抱えて艦隊が戻ってきました!負傷者の数は数え切れません

「！出港した護衛艦なども戻ってくる気配がありません!!情報が入り次第ー」

「……………」

「え、結城くんラップトップなんてあるんだ。いいなあー、ぼくの部屋にも欲しいなー…………チラツ、チラツ?」

「おいおい穴戸 おく艦娘さんにねだられてんぜえく?しかも時雨ちゃんみたいな娘にさあくこりや買うしかないッ!」

「…………おい、お前の言ってた八丈島の作戦、今ニュースでやってるこれじゃないの?」

「んく?ああそうそう!これこれ!うっほおくイージス艦ボロツボロなんですけどおくウケるウ!作戦前からこんなボロボロとかどうすんだよ、アハハハ!!!」

「怪我してる艦娘もいるみたいだけど、そんな状態で作戦なんて大丈夫かな…………?僕たちみたいに、作戦前の演習でもしてたのかな?」

「現実逃避してんじゃねえぞお前らア!ボロツボロのイージス艦、あれ戦後だから!作戦あとの光景があれだから!!」

演習の最中に行われていた八丈島奪還作戦の結果は、D敗北である。

極秘作戦失敗してた

『どういうことですか!?説明してください!!』

『遺憾である』

『数十隻の深海棲艦は新種であると噂されていますが、撃破のためには命を脅かされねばならないほど強力な敵なのでしょうか!?』

『誠に遺憾である』

『大半の海軍将校はこの作戦のことを知らされていなかったと聞きますが、このことについて一言お願いします!!』

『……誠に、遺憾であるッ』

誠に遺憾である連語するのは愚策だと思います大将。

ニユースで取り上げられていたのは、八丈島出兵と蔑称されている、結城の口ぶりからすれば大淀少将の作戦である。

昔、陸軍のクソみたいな出兵と多くの犠牲者を出していたのが、今になって掘り返され、主に海軍だが、今回みたいな無謀な戦いー見た目的には無残な結果を陸戦でなくても”出兵”と付ける伝統がある。なので、八丈島出兵ーと揶揄するものは多いが、新種の深海棲艦が現れた事により起こった、いわゆる事故であると解釈する将校も多かった。

要するに、失敗はしたが、艦隊出動そのものの意義は正しいと思う奴らも中にはいるということだ。

方針が変わる前から容認され、準備が整えられていた作戦の結果は惨敗。

詳細を言えば、少なくとも合計で50隻以上の連合大艦隊だったのにも関わらず、1隻が中破、1隻が轟沈した。

この1隻と1隻は、艦娘ではなく、イージス艦と護衛艦の事である。50隻は新設横須賀第一鎮守府の並び、第二、第三、横須賀鎮守府の艦娘が主体となっており、多数が大破と中小破した。

艦船に乗艦していた将校らも含めて、奇跡というべきか、死者は出なかった……が、重軽傷者も合わせるとその結果は好ましくない。行

方不明者は暫定として100人辺りいるが、それも伊豆諸島の島々に取り残されており、救助活動は深海棲艦の攻撃をちよくちよく受けて混雑している。

新型の自立走行型のロボットーいわゆるドローンのような無人兵器が導入された形跡もあり、惨敗という結果を見るに、あまり役に立たなかった様子だ。

個人的に無人兵器の開発と運用は推していたんだが、無人の兵器が深海棲艦に通用しないと分かれば話は別だ。どれぐらいかは分からないが、多分これほど大規模なものとなる実戦投入は初めてだろう。

税金の無駄、そして艦娘使ってたほうがコスト面でも効率面でも、遙かにパフォーマンスいい……が、轟沈の可能性がある以上、原則的に俺は無人兵器を推し続けるだろう。

犠牲者を出さずに帰ってこれたのも、相対的に言え無人機が代わりにぶっ壊れてくれたから……と解釈して、感謝するべきなのだろうか。そのこのへんがどう記録に残るかは調査団に任せる。

俺たち鴨川要港部は、大島に取り残された可哀想な士官らの救助活動に従事しながら、周辺の護衛任務に当たっていた。

原住民は本州へ総撤退しているため、つまりは食料などが無い。迅速な救助が求められる。

白露姉妹は第二鎮守府の夕立五月雨ちゃんペアが参加していないかと肝を冷やしていたが、幸いなことに参加はしていなかったらしい。

『穴戸くん！もう深海棲艦はいないよ！予定通り横須賀まで護衛するね！』

「頼んだ時雨……ふう」

「お疲れ様ですっ」

お茶がテーブルの上に置かれた。
「ありがとう村雨ちゃん、マジ泣きたくなるわあの少将のしていることと」

「ま、まだ分からないじゃないですか!!この親潮、大淀次長がこの作戦を遂行した等とは信じません!」

「おりよ？あのメガネ信じちやう？信じちやうんだあ？分かった、じゃけん目の前にいる少佐さんだけにじゆうじゆんなおんなのこにするために、いろいろエツチことをしちやおう」

「い、いやあああああ!!」

脚を滑らせ、まるで殺人鬼を見たような顔で執務室を退出する親潮。いい加減慣れるよと言いかけたことがあるが、推理力（妄想）の強い俺様はアレが実は演技で、初なワタシを演じているだけなのでは？と考えたことがある。

ほんとうにそうなら彼女のプライドを傷つけることになるので、言わないでおこう。

「村雨ちゃん、そんなムクって顔しないの。村雨ちゃんさえ良ければ……執務室で、村雨ちゃんだけに、個人訓練とか……どう？」

「そ、そういうことばかり言うから、親潮さんも出ていつちやうんですよ!……そ、そんなこと言われて出ていけないの、村雨だけなんですからねっ!」

ぷくつと顔を膨らませてプイつとそっぽ向かれた……ムクつ、静まれ俺の性。

鴨川艦隊のほとんどが護衛、及び救助任務に従軍している中で、鴨川は手薄。ただでさえ損害の激しい今作戦によつてこれ以上の損害は許されない!と上層部から直接言われたので、深海棲艦がいたら他に被害が及ばないように倒すか、強い敵だったら防衛陣形を張つて逃げるか大軍を持って倒せとまで言われている。

逃げるか倒すかどっちだよ……なんて愚痴は、ナンセンスだ。要は損害を受けるなつて言われているんだ。各々の判断と各海軍要塞との連携でなんとなしろ、と言われて一流の仕事をするのが、提督育成プログラム卒業者に課せられた義務でもある。

「穴戸くーん!執務室にいつちばーん乗りたい!」

「白露さんどうしたんですか?」

「ヒマー!」

現状ほとんどの艦隊が出撃してる中、この要港部で最強と讃えられる白露さんが“暇”の一字を掲げて入ってくる。

あのですね、それだったら艦娘の訓練とか、鴨川艦隊に欠如が出たときに備えるとか、手薄な要港部が深海棲艦の襲撃を受けたときに備えて臨戦態勢とか、色々仕事はあるんですよ？

特に要港部の防衛は大事で、ある意味彼女は臨時的だが要港部の、いわば防衛司令官なんだぞ。

あ、それいいかも。

「白露さん……いいえ、鴨川要港防衛司令官殿」

「お、およろしい、いきなりナニ？」

「鴨川要港防衛司令長官殿は、今なすべきことは何か……それは、二個艦隊が防衛すべき要港、延いては関東を、少数の手勢で守護することにあります」

「う、うん……」

「ですので、残存艦隊と共に臨戦態勢を取ることこそ望ましいと自分は考えます……これは、防衛司令長官にしかできないことなんです」「私にしか……できない……!」

村雨ちゃんは詐欺師を見るような目で俺を見るが、それと同時に「姉さん乗せられやすすぎ……」と、哀れみの表情を浮かべていた。

「白露さん……いいえ、鴨川要港防衛司令長官、白露大尉！貴女が今できることは、なんですかア!？」

「……フフ、そんなの決まってるじゃん！この司令長官の白露さんにしかできない！それは襲ってくる敵艦隊を倒すことだよ!」

「そうですね！じゃあ襲ってくる敵艦隊を倒すために、最大限の準備をしなければなりません！それはなんででしょうかア!？」

「訓練と防衛態勢、ハツツドオウ!!」

神出鬼没に執務室に来て、出ていく白露さん。あの元気で短絡的な所が、可愛らしく魅力的ではあるけど、こんな時に暇だからって理由で執務室にドカドカ入ってくるんじゃない!!

「あのひとチョロSUGIRU」

「他の提督方も白露姉さんをああやって使ってくれてたら……」

「でも村雨ちゃんは全然チョロくないよね？俺がこんなにモーアピールしてるのじゃ」

「へ!?あ、あの……あつ」

彼女の頬は温かい。

白雪のようなきめ細やかさなのに、こんなにぷにぷにしてる。それでいて、紅潮する肌下は血色よく、撫でていても、見つめていても可愛らしい。気持ち良さそうに目を細める村雨ちゃん……食べたいたい。

執務室はまさに二人だけの世界。俺とこの天使を妨げる者は誰もいない。やるなら今だ、このマシユマロのように柔らかかそうな唇を奪うのは、ここにおいて他にない。

「村雨ちゃん……」

「穴戸さん……」

「あのお、親潮ですけどお、もうそろそろやめてもらっても……っついていか、破廉恥です!!」

本気で悲鳴を上げるといふ、ある意味では罵詈雑言よりもひどい形で退出していった親潮が戻ってきた。

チツ……何がそんなに破廉恥なんだよああ?そのミニスカと、黒パンツのほうがよっぽど破廉恥なのわかる?

こういうのをムッツリスケベっていうんだよ。映画のキスシーンとかで一番はしゃぐタイプだぞ絶対。

「ど、どうかしたんですか親潮さん!?な、ななななにか問題でもお!」「落ち着いて村雨ちゃん。親潮ちゃんはまだあまり焦ってないでしょ?この黒くろおパンツさんが言う『破廉恥』に目が行くほどのことだから、そんな大した用事でもないはずだよ」

「な、なななな、なんで知ってるんですかあ!?も、もしかして司令は私の下着をみ、みて……こ、このえっち!!」

貴様が逃げたときにふわってスカートが浮いたんだよ。ただでさえ短けえんだから、見えるに決まってるんだろこのスケベ。俺がブラックじゃなくて良かったなあ?

もしそうだったら今頃、貴様の格納庫は俺様の建造ミルクで満たされていたぞ?

このセリフ一回でもいいから言ってみたい。

「た、たしかに大した用事じゃないですけど……二人とも、これ見てく

ださいっ」

「この電文は……」

「は？クツツツツツツツ大事じゃねえか。日本海軍の行く末決めるかも知れないぞこれ」

「え、ええ!?!こ、これがですか!?!」

軍令部次長からの……いや、軍令部からのお呼び出しだった。

大規模作戦会議―八号作戦―

軍令部。

俺は常々思うんだが、どこへ行くにも呼び出しを食らっている気がする。そしてイチヤイチヤを邪魔される。

この軍令部に見れば、一介の海軍軍人としては異例なほど脚を運んでおり、案内も地図もいらぬほど親しんだ場所になっていた。

軍令部の職員の顔ぶれも変わらず、普通に挨拶しても顔パスでいける。

でも何度来ても緊張するし、何度来てもエリート官僚、将校揃いの空間はあまり好かない。なんか嫌味つたらしい感じがしてマジ好かん。

でも来るだけなら、まだマシなのよ。

「イヤッハアアアア!! ついに戦いの時がキタズウエエ!! 深海棲艦は消毒ダアアア!!」

「横須賀鎮守府が成し得なかった作戦を、我らが引き受け、華麗に全うする……これはまさに千載一遇の好機ッ!」

「お見合い失敗したああああ!!」

軍令部、会議室。

軍令部にはもちろんというべきか、その性質上、会議室が設けられている。内装はまさに白一色であり、これと言つて会議室について上げる点はない。舞鶴の会議に参加したときもこうだった。相変わらずキャラの濃い人たちが集まる。

「大鯨司令官、止めなくてもいいかしら?」

「あ、あわわわ、み、皆さん落ち着いたほうが……す、すいません!!」
「すいません! じゃないでしょ!? 部下もしつけれないなんて……こんなんだから下田要港部でも舐められるのよ」

「ご、ごめんなさい……」

久しぶりに会った大鯨さんは彼女の秘書艦、初風に怒られてしょん

ぼりしている。相変わらずかわいいな大鯨さんは。

初風の言うことは当然だが、それでも統率できている彼女には彼女なりのやり方があるんだ……と述べたら「だれアンタ？ 邪魔しないでいただけるかしら？」と言ってきたので、そのツチノコみたいな頭を軽く引つ叩きそうになった。

今回、軍令部に集められている提督、及び各要港部の司令官は、俺を含めて那智中佐、大鯨少佐、そして蘇我少将である。

そしてその副司令官や参謀、そして秘書艦がいるが、俺は村雨ちゃんしか連れてきていない。ランデブーに男は必要ねエからだ。本当は主計部だから来なくてもいいって言われたんだけど、村雨ちゃんにそう言ったら、えへへつと笑ってくれたので言葉選びは正しかった。

そして本日ここに呼び出された理由だが、もちろん横須賀鎮守府の大敗を挽回するためである。政府としても、海軍行事で黒点をつけられるのは現政権の信頼にも、海軍の威信にもダメージを与えたため、その塗り薬を所望しているのだ。要は、伊豆諸島を取り戻す作戦を練るのが、今回の命題なのだ。

政府は、あの襲撃事件以降、ある程度立て直しを見せている。外交機能が一時期だけど、著しく低下しただけで、少なくとも俺たちの感覚としては平常運行であった。もうある程度失われた職は取って代わられてるが、幕僚や海軍の高級将校が一時外交的な政治機能を補うことで、現役よりもむしろ海外からは好感を持たれた。

というのも、選ばれた将校はどれも頭脳明晰で、前線に出た経験もあるとても崇高な人たちだ。それだけなら金でのし上がったお土産献上系の政治家と差し引いて大差はないが、彼らが相手にしていたのはこれまた高級幕僚の海外提督だったので、話が合ったのだろう。海外では政治家と提督を兼任してるスーパーマンもいる。

まあ政府はともかく、海軍の威信は俺たちにとって大きな課題となる。今後の予算分配への心情にも影響するし、そうなると必然と俺の給料やボーナスが出なくなる可能性もある。俺が出ないってことは、艦娘、将校にも出さない可能性があるから、かなり士気に影響す

る。

しかし作戦は急すぎる。

そして要港部3箇所と鎮守府一箇所だけで戦うなんて無謀で蛮勇で阿呆。

さて、なんでなんで横須賀鎮守府の失敗を挽回する作戦会議なのか分かるかって？

大淀次長から直々にそう言われてるんだよ。

「それでは八丈島攻略作戦……八号作戦について話していききたいと思
います」

「「ハッ！」」

大きなテーブルを囲う将校の中でも、突出した存在感を持つ大淀次長……艦娘であり、たぶん中将派の黒幕であり、彼女を表す言葉は多々あるも、インテリメガネ秘書娘がいかに適当な言葉は見つからない。

その次長が今は……記者会見で「誠に遺憾である」を連語して、そのまま予定してた海外に行ったことで不在となつている総長にうつつかわり、代理として作戦を共に練ろうとしている。

軍令部は作戦の失敗で、各提督と打ち合わせをしたほうがいいのでは？という決断を下した結果、報復作戦として関連する司令官が招集される。もちろん本来大きな作戦を立てるときは軍令部主導でやるのが一般的だが、会議室には軍令部所属の幕僚が何人もいるので、当然俺たちみたいな司令官や提督だけで決着をつけられる話ではない。つまり、この作戦自体を俺の手腕で破棄することはできない。

クソ……斎藤中将すいません。俺、東亜開放に加担するかもしれない。せん……いや、どうせ軍令部の指示を断ることなんてできない。

そう言つて吹っ切れれば、一番イラつきを覚えるのは、やつぱり面倒くささだろう。

いちいち来るのホント面倒くせえ。会議なんて来たくねえのに。

「うう……」

「緊張する村雨ちゃん？俺の手、握つてもいいからさ」

「あ、ありがとうございますっ！ぎゅ……えへっ、意外にゴツゴツ

してるんですねっ……村雨、こういう手、好きですっ」

会議マジ最高なんですけど。

「早速だが本題に入らせてもらいたい。この作戦は東亜開……コホン、失礼。この作戦はそれほど早急に実行しなければいけないようなものなのでしょうか？」

「作戦への不満は十分に承知しております。しかし、先の作戦は失敗というよりは、実験段階にあった無人兵器やロボットの実戦投入です。たまたまエリート艦の機動部隊が襲来してくるのは予想外でしたが……作戦は、マスコミによって失敗であると膨張されているけど、予め忠告しておきます」

言い分としては、できればそれを使って一気に八丈島を攻略するつもりだったんだろうけど、生憎それは叶わず、むしろ随伴したイージス艦などを轟沈させられたことで、人的損害はなくても、多大な被害を出した。問題は壊された事実よりも、それほど強い深海棲艦がいるのか、あるいはただのミスだったのかがわからないことにある。

大淀次長は蘇我少将率いる第四鎮守府を主力とした、俺たち鴨川要港部、大鯨さんの下田要港部、そして那智さんや、会議中なのにおすめの風俗店の話に没頭している結城の大洗要港部。八号作戦での立ち回りなどを決める重大な会議であるため、欠席はできなかったのは事実だ。

作戦は八丈島及び伊豆諸島全体と周辺海域の攻略。

急いでいるのか、決行は二週間後ぐらいらしい。

今のところ決まってるのは、蘇我提督が作戦総指揮官になるってだけ。

斎藤中将のメンツもあるし、できればこの作戦自体破棄してくれませんかね……俺の元上司である蘇我提督はとても聡明ながら、この作戦に対して同階級である大淀少将に異議申し立てできる唯一の人だ。「軍令部がお立てになる作戦には賛同しますが、横須賀第一、第二、第三鎮守府がある程度回復してからでも遅くはないかと思えます。急な作戦立案により将兵の士気が衰え、更には横須賀鎮守府がなし得なかつた作戦として揶揄されている以上は、減少はしても、向上はしな

いでしよう」

お、流石は俺たちの蘇我提督！もつと言つてやれ！

古鷹も軽く、うんうん！と頭を上下に振ってる。

「提督の意見にも一理あります。しかし、最強と謳われる横須賀鎮守府の敗北は、たとえ敗北でなくとも名前は地に落ちる寸前です。これを食べ止めたいと思われているのは、軍令部総長も、蘇我提督も意見は同じはずです」

「た、たしかに名前は大事だが、それよりも重大なことがあるだろう。横須賀鎮守府の名誉などこの際おいておき、また挽回の機会を得ればいいではないか」

「新種のエリート艦の出現は通常哨戒任務でも支障をきたします。もしも待つている間にそれが増大し、各要港部でも負傷を負うような自体となれば、それこそ海軍そのものの威信に関わります。それを阻止する機会とは、先の戦闘によって負傷した深海棲艦を追撃し、憂いを叩くことにあります！」

「し、しかし……」

「もちろん横須賀鎮守府だけであればなにもできなかつたでしょう。しかし、今は増設された要港部と育成プログラム出身の優秀な指揮官が三人もいるんです。その一人は次席卒業生であり、指揮官としてはかなり期待できるはずですが」

「おお！た、たしかに穴戸くん達ならば……！」

「穴戸少佐いけえええエイ!!!」

「突撃じゃああああ!!!」

なぜ軍令部総長荒木大將はこんな作戦を容認したんだろう。

そしてなぜ俺たちがいれば作戦がうまくいくみたいな雰囲気になってるの？

「まだまだ若輩者である我々をお認めになつてくださること、恐縮至極に存じます。僭越なる進言としては、この作戦については蘇我提督のお考えに同調するのが最良かと」

「なるほど、では次に移ります」

その聞きたくない意見を無視するスタイルきらい。

「作戦参謀を決めていない状況ですが実績を考慮し、下田要港部を後方艦隊参謀を大鯨少佐に任命します」

「ふえ!?わ、わたしですかあ……?」

「頼みましたよ?」

「は、はひい!ぜ、全力でお答えしますっ!」

「「おお……!!」」

ぷるんっ。

提督服の上からでも見えるデツカイおっぱい。上に着てるブカブカな提督服もさることながら、下はクツソ短い蒼色のスカートと、クツソエロい黒タイツ。こりゃこつちが後方支援したくなるわ……イテテテ!!村雨ちゃんって意外と腕力強い。

続いて上がったのが、前線指揮官の名前だ。

大規模作戦でもそうだが、場合によっては指揮官を連れて行く必要がある。八丈島までの距離だったら、長距離だから無線通信がダメになる可能性なども考慮して、司令官が前線に出る……必要があるらしい。そのためのボートなどもあるが、正直死にたくないだろうから、多分将官以上の人は使わない。

というより、そもそも使う機会がない。

舞鶴にいたときは辛うじて距離が近かったから良いけど……まあ、前線指揮官なんて戦場の花形はベテランの、特に艦娘だった那智さん辺りがやってくれるだろう。

それにしても参謀長まだなのに、もう前線艦隊の指揮官任命とかおかしくない?

いや、誰もやりたがらないから先に決めておこうって魂胆か?

「前線指揮官ですが、穴戸少佐が良いかと思えます」

なにッ……!?

「妙案だ、この那智からも異存はない。我が副司令官である結城大尉は私よりも艦隊運用と指揮がうまいが、彼はそれ以上にうまい。直接演習を見たので、間違いはない」

「なるほど、それは期待できますね。その演習の結果も軍令部に届いています。流石は次席だというべきでしょうか」

ダメッ……!!

「それでさア、俺ツチ言つてやったんだよ!……俺の主砲から放たれる連合艦隊は、お前の子宮要塞に入港する……ってね!」

「ハハハ!そりやお見合い失敗しますつて!つか、危険日じやなきや届く前に全艦轟沈しちゃうじやないですか!」

死ね……!!

「ま、待つてください!自分のような若輩者に作戦指揮を任せるなど、正気ですか!?下手をすれば、事態はこれ以上に残酷なものとなるのは明白かと、僭越ながら申し上げたいと思う所存!」

「これ以上、残酷……なるほど、流石は穴戸くんだ。流石は私の部下だっただけはある。下手をしても、深海棲艦をこれ以上惨たらしい姿にできると、その自信があるんだな?ハツハツハ!実に結構!作戦が撤回できない以上は、小官は元部下!である穴戸を押しします」

「そ、蘇我提督、お、俺は……」

「君しかいないんだよ!私が信頼できる中で最もこの作戦を成功させてくれそうな人物が!」

そう言いながら、隣に座っていた蘇我提督がその逞しい上腕二頭筋を近づけてくる。

相変わらず逞しい二の腕は俺を抱きかかえる事ができるだろう。

デカイ、色々な意味でデカイ……そして、厚い。

「それとも……私の頼みが聞けないというのかな……?」

「て、提督……ち、近いです♂」

「いいじゃないか、男同士なのだから……それとも、顔を近づけられてなにか困ることがあるのかな……?」

「お、男♂同士……!」

「パパッ!!穴戸さんッ!!おすわり!!」

「はいしません」

古鷹に助けられて、一旦座る。

大淀次長は俺の名前を上げたが、断固として拒否する。

死にたくないし、前線なんて怖い場所には行きたくもない。もしも俺が直接行かなきゃいけないような事態になったら、死んじやう。

村雨ちゃんも怖がった様子を見せてる。よしよし、いいこいいこ。大丈夫だよ村雨ちゃん、大淀次長はただ名前を上げただけで、俺に任命したわけじゃないから。本当は任命すればこちらから拒否する権限はないはずなのに……まあ、流石に前線に出すときは強引に誰かに押し付けるんじゃないやなくて、ある程度持ち上げてから任命しないとその気にならないし。

ただでさえ前線勤務なんだしこれ以上リスキーな仕事は嫌だ。

会議は案外スムーズに進んだが、未だに作戦参謀長、前線指揮官、情報参謀などの座がきまつていない。

卓上に置かれたお茶や水で口を潤わせたり、長い間すわっていた椅子の調子を直したり、背伸びやあくびを出す者までいる。

俺はといえ、村雨ちゃんと一緒にコーラを飲んでる。会議室にコーラはどうなんだ？という人もいるが、これは透明なコーラであるため、みんなからは水だと思われている。

2つ離れた席から古鷹が両手を内腿辺りにおき、赤面してもじもじしてる姿が見えた。

——俺の慧眼はこう言っている、古鷹はオシッコを我慢してると——

早く行けばいいのに……なんて空気の読めないアホは一生彼女できない。

会議室は顔の知れた仲……少なくとも俺は全員知ってるけど、そのせいか雰囲気はあたかも高校の生徒会程度の厳格さしかないが、作戦内容は言わば日本の領土を取り返すための、歴史に載るかも知れない重大な作戦会議なのだ。

そんな会議で「トイレいつてきていいですかあ……？」なんて言えるわけねえだろ。

日本人特有のテーマ空気読めよ的な視線を、集合的無意識によつて全員から砲雷撃されるに決まってる。

こういうときはどうするべきか、イケメンなら分かるだろう。

作戦内容の詳細について話し終えたところで、数分の休息を提案する。

「大淀次長、僭越ながらここらで休息を入れてはどうでしょうか？」
「……しかし、すでに大部分は話し終えましたよ？」

「残りは濃密な討論のもと決めるほどの内容ではないですが、昼夜兼行は時として判断を鈍らせます。切りもよく、一息を入れるには最適かと」

「……なるほど、分かりました。では15分程度休憩を入れましょう」
え、そんなあっさり決めて良いのか？

まあ大淀次長は良いんだっつら……と、古鷹は早速トイレに行くらしい。

軽くウイंकとサムズアップして、俺がフォローを入れたことを確認した古鷹は軽く頭を下げてトイレに直行するために退出する。

「あ、あの……穴戸さんに、村雨さんっ……」

「あ、大鯨司令官」

「どうしたの大鯨さん」

「この作戦について、どう思いますかあ……？」

上目遣いで心配そうな顔を浮かべながら訪ねてくる大鯨さん。

その小動物的な可愛さに、思わずがぶり……ではなく、頭を撫でそうになったが、彼女は同僚である。

プログラムを卒業したエリート中のエリートであり、前線指揮官としての力量だけではなく、組織運営学では群を抜いて名が通るほどの秀才である。兵站のことだったら彼女に聞け、というぐらい後方支援がうまいのだ。故に、何れは海軍省に入ること間違いなしと言われている。

ようするにそんな人に対して、頭を撫でながら「だいじょうぶだよお〜」なんて言うてはいけないのだ。

でもそのクツソエロい黒ストなんかしろ犯すぞ。

「作戦としては多分成功するとは思うけど、この作戦自体がどうなのかっていうと、あまり良くは思えないな」

「な、なぜ、そうおもうんですかあ……？」

「横須賀鎮守府が負けたって点でもそうだけど、それ以上に腑に落ちないのがやっぱり事前に知らされていなかったことだよ。いつの

間にか作戦が発令されて、失敗して、その尻拭いみたいに報復作戦立てるのって、大抵は失敗するか、いい結果を生み出さないんだよね」

作戦が極秘に発令されているのは、ある種の宣伝効果を狙っていたのだろうか？

見捨てていた八丈島を海軍が、体感的には一瞬で取り返して、それが無人機を使った無傷での勝利だと公表すれば、現政権の支持率はともかくとして、海軍への好感度は上がるだろう。あるいは反対を受け、ることを恐れたのか……何れにしても、これは個人的な感情であり、軍人には必要とされていけないものである。

「やっぱり宍戸さんもそう思いますかあ……」

「まあどんな感情を持つのが、俺たちには進言しかできないからね。やれと言われたら全身全霊をもってやるしかない」

「やっぱり……そうですねっ」

くうくう！しょんぼりしてる大鯨さんかわうい！

「流石は宍戸少佐ですね。このような作戦でも私情を挟まない辺りは流石というべきです」

「「お、大淀次長!」」

大鯨さんと俺の間に顔を覗かせた大淀次長に対して敬礼する。

近くで見れば美人だが、まだ革新派として海軍を斡旋している……という容疑があるため、好感と悪印象が相殺された感情がある。

フフフと笑った大淀次長はいたずらっ子のように「緊張しなくても大丈夫ですよ」と言っつて、詰まった息を吐き出し、敬礼を下ろす。村雨ちゃんもぶるぶるしてて、流石に緊張しているようだ。

「早速ですが宍戸少佐、二人だけで少々お話があるのですが、ついてきてもらってもいいでしょうか？」

「「……え」」

「じ、自分の秘書艦である村雨は……」

「申し訳ありません。すこし個人的な話となりますので……」

「し、宍戸さん……」

……いったいなにをしてしまったのか、無知な俺に教えてほしい。

軍令部次長から個人的なオハナシ……ま、まさか愛の告白!?

そんな呑気なこと言ってられねえよ。様子からすると次長はちよつと重大なことを話そうとしている雰囲気がある。なんだろう、会議を一旦止めたのを怒ってるのだろうか?もしそうだったら俺のキャリアに……いや、この際そのぐらいだったら軽症だろう。

大鯨さんと村雨ちゃん「これどういうこと!?!」って目線で送ったが、首を横に振っている。

良くも邪魔してくれてたな、殺してやる……みたな感じのお呼び出しだったら、あそこに開いてる窓から飛び降りても逃げるぞ。三階だから死ぬかも知れないけど、確実に死ぬよりはマジだからな。

大丈夫だよ、と村雨ちゃんのを柔らかい頭をポンポンと叩き、俺と離れるのが名残惜しそうにお互いを見つめながらついてきて、と促されるまま次長室までついていった。

あとから村雨ちゃんの熱い視線は、その排泄欲をどこにぶつけなければいいのかわからないから……という理由からだたと聞かされた。要するに、村雨ちゃんもトイレに行きたかったから、どこにあるのかわからないので俺に聞こうとしていたんだとか。大鯨さんと一緒に連れションしたことで、軍令部の階級がずば抜けて高い人たちの中でも緊張せずにトイレに行けたことを、あとで本人の口から聞くことになる。

分かってたさ……俺と離れるのが嫌だったわけじゃなかったことぐらい……クソ。

・
・
・

そしてもう一つわかったことがある。

次長の部屋に入った時点で、俺の人生は積んできた。

「あの、鴨川に帰参してもよろしいでしょうか?」

「だめです」

「ッ……大淀次長殿とお会いできたこと、身に余る我が幸甚の極みと存じます。この度の経験を活かすべくは武人の役目。然らば、急遽要港部への帰還が望ましいかと、知恵浅き自分の見解……」

「言い方を変えてもだめです」

「はいすいません」

現在、手を後ろに回して部屋を歩き回る大淀少将は、紛れもなくエリート官僚の塊。

かれこれ数分ぐらい黙って部屋をゆつくりと行ったり来たりして
るんだけど、緊張してんの？帰っていいかどうか聞いたらだめだつて
いうし、立ってるの疲れたし、いったい何がしたいのだろうか。

驚くことに、窓がない。

だから銃を突きつけられたら映画みたいに窓を突き破って飛び降
りるシーンの再現ができない。

隣のとなりぐらいには荒木軍令部総長の部屋があり、部屋に防音加
工を施してあるのか、叫んでも彼の部屋どころか、隣の部屋、扉の外
にも声は届かない……と、大淀次長はなぜかそのことを教えてくれ
た。

叫ぶ、とはまた物騒だけど、別に本当に銃を向けられているわけ
じゃない。

ただ後ろにボディガードみたいに屈強な二人が、出口を塞ぎなが
ら佇んでいるだけだ。

「…………ムキムキッ」

「ひええ…………」

とても怖い。

なにか本能的なものなのか、あるいは遺伝子的なものが働いている
のか、恐怖感が拭えないんですけど。

なんでもしますから許してください。

「次長……小官のような若輩者が、おこがましくも休息を申し入れた
こと、これ以上はない無礼であると、謹んでお詫び申し上げます」

「休息？ああ、別にいいんですよ。むしろ私の方から休息を入れよう
かと思ったのでちょうど良かったです」

「なんとお優しいお言葉！この穴戸、不躰な自分の行動の数々を悔やむばかりです！」

「フフフ、良いんですよ。でも……もし非があると思うのであれば……」

「……一つだけ、頼みがあります」

「自分のできる限りであれば、何なりと！」

「では単刀直入にお伝えします。この作戦の前線指揮官として戦場に出てください」

次長は俺に死ぬと言ってるのか……ハハハ、なーんだ、やっぱり怒ってるんじゃない。

優しいかと思っただらやっぱ鬼畜メガネやんけ。

「……そして、八丈島に亡命した元帥を討ってください」

なんでもない、ただのイカレだったか。

彼女は大淀、軍令部次長

元帥……を……討て……？

「なるほど、ゲームの話ですね。ではこれで失礼します」
「だめです」

出口はムキムキツに固められており、後ろの扉以外に退路はない。

「……大淀少将からのお言葉、一言一句、不肖なる自分の脳内に叩き込んでみせましょう」

「フッフ、そういう言い回しは嫌いではありませんよ」

でもそのあざ笑う感じ俺すきじゃないです。

クスクスと笑う大淀次長の目は笑ってはいなかった。

これだからエリート幕僚は……と、本人の前では絶対に言わない暴言を、今のうちに心の中で吐いておこう。

大淀次長はとんでもないことを話していた。

元帥は艦娘と八丈島で生きていた。

そしてこの元帥をうてという命令だ。

うてとは……討伐の『討』の字を使って、討てである。

「元帥を討伐……とは、どういうことでしょうか？」

「だから言ったとおりですよ。八丈島に亡命した海軍元帥及び艦娘を撃破してほしいんです」

このように、その理由そのものを素直に白状してくれない。

しかし現時点で分かることは、大淀次長が立てた作戦……八丈島出兵は多分、その元帥を倒すためのものだったのだろう。そしてそれほど大きなことをするのは、個人的な理由だけでは済まされないし、ここまでできない。

そして変なところで有能なマスコミがこの情報を得ておらず、未だに元帥が行方不明で、官僚襲撃事件の真相は捜索中であると報道している中で、彼女がこれを知っているということとは……彼女は海軍を大きく揺るがす革新派の先鋒である可能性は高い。

「……大淀次長のおっしゃることが本当であることを仮定しても、鴨川要港部だけで、あの前線艦隊の花形と呼ばれた連合艦隊司令長官及

び、麾下の艦隊に太刀打ちできるはずがありません。それに――」

「別にあなたの要港部一つで撃破しろ、とはっていませんよ？ふふふっ」

「……………」

いまわかつちやつた、俺って自分のことこねくり回す人あまり好きじゃないんだ。

「あなたにこの極秘事項を申し上げた理由をお教えしますが、もちろん元帥が生きていることを含めて、このことは他言無用でおねがいします」

「聞きたくないので断ってもよろしいでしょうか？」

「ダメです」

チツ……クソ。

このことを世間に公表しない理由は単純に考えれば分かる話だが、そんなことをしたら国民からも海軍内部でも反発が起こり、なおかつ士気の低下に繋がるからだ。

もちろん通常は、こんな反乱が起きていれば自然と知り渡るし、仲間を集ったり、それによつて起こるこちら側のデメリットを最大限まで引き伸ばす努力をするだろう。

つまり反乱の首謀である元帥さえ布告しておらず、できるもんだつたら、一部が知る事項として処理できることとなる。追い出されたのか、自分から出ていったのか、そもそもなぜ元帥は反乱していると布告をせずにいるのか……なぜかはわからないが、あの官僚襲撃事件がおこつた直後に逃げたと考えると、とてもじゃないが好ましいとは言えない。

普通元帥が、自分の最強艦隊を引つ張つて八丈島で構えてるなんて、恐ろしすぎて行きたくない。

そんなのに太刀打ちする命知らずは誰になるんだろう？本土を襲撃するのだろうか？最悪、艦娘同士の戦いになるのだろうか？と、不安が将兵の頭を過ることになる。このことはもちろん海軍内部の誰も……少なくとも、ベラベラ喋ったり騒ぎ立てるようなヤツがないのであれば、このまま上手く黙っておくのがいい選択だろう。

そしてできれば黙ったまま消す……ああなるほど！論理的に考えると、人に頼んでひつそりと深海棲艦として殺してもらうのが、実は一番いいんだ……うわ、俺マジ最低。

そしてそんなこと理論上はできるけど、かなり無理がある。うん、やっぱり辞退しようーなんて言われたら脅迫されるかも知れないから、この時点でおれ詰んでる？

「なぜ少官にそのような不名誉ながらの大役を？聡明叡智なる大淀軍令部次長のお目に掛かるに至った経由を、見識浅き身にお教え頂ければと思います」

「結城大尉から、あなたは私たち革新派と、保守派を取り持とうとしていることを聞きました」

あのクソ野郎、あそこで殺しておくんだった。

だがその後、「嘘です、彼に盗聴器をつけていた部下が、私に教えてくれました」と付け加えてくれたので、友人殺しから救ってくれたことは感謝しておいてやる。

「だからと言ってあなたをどうしようなどとは思っていません。私はあなたと取引がしたいだけなんです」

「小官は多少は学のある身だと自負しているつもりですが、取引とは互いに利のある両者がそれに同意して初めて成立するものだと思えております」

無闇やたらに利を押し付けて利を得るのは押し売りというのです……と言おうとしたがやめておいた。

「ずいぶんと反抗的ですネ……しかし提督、将官になりたいと思うほどの向上心のある方なら、それぐらい気概と強気がある人でなくてはならないですからね」

「っ!?な、なぜそれを……」

「それは結城大尉の口から聞きました」

あの売国奴、処刑決定。

大淀少将は俺にこのことを話した理由は複数ある。

まず、立身出世を狙っている俺の援助をする名目で、その代わりに元帥を討て……と、ある意味、体のいい道具として利用できる人材だ

と思われたんだろう。

幸いにも、元帥艦隊は失敗した深海棲艦の迷彩を被っている。

失敗した深海棲艦迷彩とは、深海棲艦と同じような格好で欺こうと開発部が試み、失敗に終わった迷彩のことである。つまり、深海棲艦にはまったく役に立たなかったが、艦娘や人間の目だったら欺ける。

なんでそれを着ているかは定かじゃないが、艦娘たちが戦っても、元帥の艦娘と戦う意識はなく、その辺は問題はない。

大淀次長は横須賀第一鎮守府所属の艦娘のデータを持っており、それぞれの艦娘の弱点を知っているのだから、俺にはそれを使って倒してほしいとのこと。

鴨川要港部は規模はともかく、戦果が上々であり、俺の戦略眼と、士気を富んだ艦娘たち、何より演習で参加していなかったので無傷である事を含めれば、期待値が高いらしい。ついでにというと、鴨川が一番立地的に近いからと言うことも含めているのだろうか。

革新派という言葉が聞けた以上は大淀少将は派閥に絡んでるのは間違いないが、独立した意思と野望を持っている。その態度や冷静さからみて、なんとなくそう思っただけだが、「ちなみに、中将はこのことを知りませんよ」と言われたので、彼の知らないことを知っている時点でより疑心が増した。

彼女の考えが革新派の考えと合致しているのかどうかと言われるれば本人にしか分からないが、何れにしても、中将へ信仰心があるようには見えない。

でも中将を元帥にして海軍大臣にしたいのはほんとうかもしれない。計算上、自分の出世に繋がるかもかく、忠実な部下という名目で押し上げれば、少なくとも彼女に損はない。

中枢部を自分が所属する閥に侵食させる……日本軍もアメリカ軍も中国軍も、いつだって内部闘争中に行っているのは変わらないのだろう。「あなたの鴨川要港部を中心とした艦隊を編成するに辺り、他の要港部司令官の麾下の艦娘も使えるようにするため、那智司令官を作戰参謀に、そして前線に出る代わりに、あなたを中佐に任命してさしあげます。作戰が成功すれば、近々行われる海軍将官会議であなたをその

ままにすることを約束します。その前に将官を納得させる実績としても、引き受けるのが懸命かと思いますが」

「中佐に……しかし自分の同僚には、自分より優れた才能と力量を持つ方が大勢います。これらを見無視して自分だけが昇進を受けるなど……」

「前線指揮官として立つのですから、別に不思議なことでは無いはずですよ？それに舞鶴方面の秋津洲司令官は中佐になっています」

え、あの人なにしたんだ？

齋藤中将よりも、よっぽど早い段階で昇進できるのか……しかもこの作戦一発で。

日本軍にはクソみたいな進級実役年齢というものがあつた。進級するのに必要な在籍期間のことを指しているんだが、俺が軍人になる頃はすでにそれは廃止されてた。

深海棲艦の出現時の混乱で死者は多く出たのもあつたが、これの廃止には齋藤中将や、荒木大将と言つた著名な軍人の働きが強い。だから今までよりも早く昇進する人も増えているし、その分その二人に尊敬と敬意を払う青年士官、将校が多いのは必然である。

めっちゃ早く昇進できるチャンスを目の前に、武者震いを起こしそうだったが、よく考えたら昇進しても最年少記録じゃない。

つまり、前にもそうやって昇進したクソ野郎がいたことになる。そう、たとえ俺が今回の申し出を受けたとしても、それより早く昇進したクソ野郎が過去にいたのだ。

そう考えると、別に大したことじゃないと思ひ、急にクールダウンし始めた。

しかし同時に、考える冷静さを与えた。

もしも大淀次長の要望を引き受けたら、今後秘密を握られて大淀次長の言いなりとなる可能性がある。

おれ、誰にも手綱を握られないように頑張ってきたのに……俺、孤高の戦士で、立派な提督になりたかつただけなのに……こんなメガネの言いなりになるのか……っ。

「秘密を握られ、手綱をも握られるのは嫌、というところですか？」

「……………」

「フッフ、私はそんなことはしませんよ。取引だと言ったでしょう？これは一度の取引であり、契約でも協定でも、ましてや隷属でもありません。だから涙を拭いてください気持ち悪いです」

「大淀次長、本当に何が目的なんでしょう？小官がこの制服を着ている以上は、この制服の純白に則り、清廉潔白な軍人を心がけています。元帥が生きていらっしやるならば、討伐作戦として再立案をしたほうが良いかと思えます」

「軍令部も海軍省も、それを望んではないでしょう。それに、誰かがやらなければならぬことでもあります……謀反者ではありませんが、彼のような人物に、反逆者として不名誉な死はなるべく遂げさせたくはないのです」

「やっぱり元帥ってあの襲撃事件に関わってるのか……マジ怖え。」

「それでも、部下に危険な任務を……増しては、元帥及びその麾下の艦娘に対して攻撃を仕掛けるだけでも心苦しいのに……」

「もちろん、このことを他言無用という条件付きですが、考える時間は十分に与えます。幸い作戦で残っているのは作戦参謀長と前線指揮官だけであり、他のことを全て決めてしまえば、前線指揮官の仕事は後日から決めることも可能です。あなたがこれを成功させてくれれば、麾下の艦娘にも一階級昇進を与えるつもりです。それ以上を望むのならば、できる限りは検討しましょう」

「齋藤中将も大淀次長もそうだけど、この人たち海軍省へのコネクションすげーな。他言無用で済ますんだったらさっさと断らせて俺のこと、この軽い軟禁から開放してくれませんか？」

「……自分がこの作戦を引き受けるかどうかはともかく、革新派と保守派はまだ健在。保守派主流だった方針が一気に逆転してしまつた以上、できている亀裂に好ましい影響を与えようとは考えにくく思います。しいては、大淀次長には闘争の火種を消していただければと思います」

「これ以上の内争の危険性があると思うんですか？」

「派閥ができるとき、まずは二手に分かれます。片方が少数派で、もう

片方は多数派です。現状で多数派を打ち破る術として、少数派はしばしば荒立った手を使うことは、歴史が証明しています。成功と失敗が混雑する事実が、少なくとも彼らにそのチャンスを盲信させます。もちろん内戦で国は滅びません。しかし、どの派閥が主導権を握ろうが、両閥共に疲労し、国全体の益を考えれば明らかに損となるのは先人らが示しています。犯した轍を踏むことを、中將はおろか、総長も望んでおられないでしょう。つきましては、スムーズに責務を全うする為にはなにが適切か、聡明な大淀次長ならば判断を誤らないと、小官は思います」

「なるほど……まあ、考えておきましょう」

よし、クツソ面倒くさい中將への面目が立つ。

まあどのみち軍令部の作戦を否定する権限はない。俺が考えなくちゃいけないのは、受けるか受けないかよりも、元帥艦隊の弱点があるデータをどう有効活用して、どう被害を最小限に留めるかだ。できればみんな軽傷で帰ってきて「失敗しちゃいましたあ〜！てへ」的なノリで他の誰かにあとのことを押し付けたい。無能だと言われてもなんでも構わねえ、柱島にいる最強無敵外国艦隊もってこい。

反乱軍の討伐なんて誰がやりたがるかボケ。この時点で大淀次長に対する答えは「考えておきます」でいいだろう。そもそも東亜開放なんて方針があるから問題なんだ。

世間では新種深海棲艦の登場ーと言う名の元帥艦隊のせい半分は不安を募っているが、もう半分はまだ税金数千億（イージス）を吹き飛ばした事によりバッシングの嵐だ。

この際、海軍が税金泥棒か、陸空軍の存在が税金の無駄遣いかなんて議論は、軍令部次長テーブルの上にある作業服ほど、どうでもいい。いや、その作業服めっちゃ気になって仕方がないんだけど、よく見たら俺が前に着てたような整備工作兵の服だ。

「こほん……一つ聞きたいのですが、海軍首脳会議で一体何があったのですか？参加できなかった身としては、急遽方針が変わったことへの疑問の念を持ちます」

「海軍首脳会議……ですか。いま思い出しても、笑いが止まりません

よ……フフフ」

俺が作戦の受諾したことで、自分の思い通りになったことがそんなに嬉しいのか、思い出し笑いをしているのか、本気で楽しそうに口元を押さえる大淀次長。

『どういうことだね君たち!?みんなはともかく、大淀次長まで海外進出に……』

『何がいけないのですか斎藤中将!?あなたが教えてくださった素晴らしい日本を再生し、創り、国際的な権力を高める事に繋げるのは、今しかないんですよ!?ねっ、明石くっ?』

『そのとおりです!もっといっぱい資材がほしいです!』

『明石少将まで……これでは相違ある思想の衝突が……』

『まあまあ落ち着いてください!ご安心を!中將が思っているようなことは起こさせませんから!』

『し、しかし……』

『確かに言い分は間違っていないな!部外者が口を挟むのもなんですが、この子達は斎藤くん思想に感化されてそう言ってるだけだし、第一、素晴らしい思想を作った本人がそれを否定してどうすんだよ』

『クツ……で、ですが』

『……海外進出には、賛同できぬッ』

『荒木大將……!』

『は?なにを言ってるんですか?もうやりたいことはやったでしょう!?今度は斎藤中将のしたいことをやらせてあげましょうよ!?ねっ
明石くっ?』

『そうですそうです!』

『いや、別に私はしたいなどは……』

『斎藤中將、荒木大將、実は私達、軍令部と海軍省のとても屈強な方々が、あなた達を狙っているのを阻止していたんですよ?彼らを放てば今頃あなたがた英雄は……ちなみに、彼もその一人です』

『元舞鶴第二鎮守府所属の整備工作班班長、現在は海軍省第二課所属の中佐です。好みは、スレンダーな中年男性か、くまさんみたいな

人ですつ』

『!?!』

『まあ、分かってももらえましたか?』

『……脅しには、応じぬッ』

『因みにご子息である荒木連龍大佐にも魔の手が』

『許可するッ』

『あ、荒木大将オツツ!?!』

「は、班長……まさか海軍省にいるなんて……!!ようやく出世したんですね……!!うううう……!!」

「反応するのはそっちなんですか……」

「え、じゃあ軍令部総長つていま隣の部屋にいますか?ちよつと殴つてきてもいいですか?」

「彼はいま海外にいます。というより、そんなことをしたら不敬罪どころではないですよ?」

「法律の罪よりも、人間としての罪に耐えられるか心配なのです」

大淀次長は膨張しているのだろう。そんなことで俺たちが尊敬するカリスマ中将、大将が屈するわけがない。

多分アレだ、賛同する将官が多すぎて制御のかけようがなかったんだ。

もし俺が熱狂的革新派であり、弁論で敵手をねじ伏せる場合、荒木大将の日本要港部設置は成し遂げ、国防概念をある程度満たせたがその維持が大変であることを話題に上げる。

資源資材の運用は、未だに資源枯渇に悩むこの国が、これ以上ただただ防衛をし続けるわけにもいかない。大陸国が流通をストップすればたちまち危ない状況になる。もちろんそれが起こらないように、防衛を支援する代わりに、資源を分けてもらうという、防衛経済協定を確立しているのは事実である。

だが協定とは所詮、本気で信頼し合えない国同士が、お互いに利があるからするものであり、片方に必要性がなくなれば破棄される可能性も出てくる。

国際的に弱腰な政治家たちに取って代わって、情勢が悪化する前に、少なくとも“交渉材料”は集めておこう……といえ、多分黙らせられるし、少なくとも聡明な大淀次長ならこのことを首脳会議で上げただろう。

それに八丈島とその先にある島々には艦娘稼働を担う資源が眠っている。その点を突かれれば、今回の作戦実行は失敗を避難はできるが、攻略作戦そのものに文句は言えないだろう。

わかったことが二つある。

それは革新派が海軍の中枢を握り、ないしは大淀次長が革新派が中枢を握っている事になる。これに対抗できるのは、事実上カリスマ性のある加賀提督とかいう保守派であり、それが異を唱えて内部闘争が過激化すれば……中将の慧眼通り、とてもまずいことになる事は明らかだ。

もう一つは元帥艦隊は今は絶賛反乱中で、しかもごく一部しかそのことを知らない状態にあること。

しかし疑問も残る。

大淀次長をここまでさせるものは何なのか？この人にとって中将はただの飾りだけど、そもそも何が目的かはさっぱりだ。

そんな情報の得ようもない疑問から逃れるように、俺は部屋を見渡す。部屋には殺風景さが残るが、テーブルには異様な場違い感を放つ整工班の作業服と、その隣にポツンと置かれた写真立て。

写ってるのは大淀少将と……もう一人は誰だろう？

「……なにを見ているんですか？」

「も、申し訳ありません」

「この写真が気になりますか？」

「実直に申し上げれば……大淀次長の隣に写っている女性も、美人ですわね」

「美人？……フツ」

「え」

鼻で笑われた。

「この娘は美人って言葉だけで表現できる娘じゃないんですつつつつ

!!!

「っ!？」

突然感情を荒げた大淀次長は、手にとった写真立てに写っていた女性を撫で始め、軽く唇を当てた。

行為そのものにもゾツとしたが、ねっとりとした動きで、まるで自分の世界に入ったかのような表情でニヘラ笑いをする大淀次長が、なんとも言えない不気味さを醸し出す。

そして早く帰りたいのに、頼んでもいない事をベラベラと喋り始めた大淀次長の目は、ここから遠い所を見てるように、薄っすらと濁っていた――。

アカシトアタシ

明石とは昔からの親友だった。
彼女の純粹で、キラキラした笑顔を見るたびに、私の心は癒やされていた。

『主席卒業おめでとう！これからもよろしくね、大淀っ！』
『うん、よろしくねっ！』

過去の記憶が甦る。

色々な人を蹴落として、彼女までもを踏み台にして主席になった私を、明石は優しく迎え入れてくれた。

嫉妬と羨望もあった。

闘争と馴れ合いもあった。

協力も謀略もあった。

海軍の中枢で働くのはとても大変だったし、秘書艦としても働いて、周りの人があまり受け入れてくれない状況に、私の精神力は次第に疲労していった。

だけど、そんなの疲れる私の寂しい心は、明石声を聞くと不思議と癒やされた。

いつも寝るときはこれを聴きながら寝る。

ねえ明石？私のこと、好き？

——うん！大好き！

……………

——うん！大好き！

——うん！大好き！

——うん！大好き！

『…………ぐへへエ！明石の催眠ボイスヤベえマジサイコオオオ……………！』

一日最低でも十回はメールした。

『…………十分経つても返事が来ない…………ま、まさか浮気!? いや、もしかしたら何かあったのかも…………！』

ごめん大淀！・仕事中だった！

『なんだ仕事かー！フフフ！驚かせちゃって〜このこのお！』

『……あれ、大淀大尉じゃね？』

『なんかやばい雰囲気マジコワ……』

明石の事になると顔がニヤけると周りからは言われてたし、陰口で気持ち悪いとも言われたことがある。

でも、そんなのは気にならなかった。明石の事を考えると元気が出て、周りの事なんて気にならなかったからだ。

人はストレスを感じたときにお酒を飲む、遊ぶ、ゲームをする……私にとって、明石のことを考えるのはそれと同じぐらい大切で、自分を奮い立たせる精神安定剤だった。

明石とは今でも、そしてこれからも親友でありたいと思った。明石いがいの友達はいらない、明石さえいればいい、私達を邪魔するモノは殺す。

明石の邪魔になるモノは徹底的に叩くし、それが親友の務めだと思ってる。

だって、友達だもん。

友達を想うなんて、当たり前でしょ？

そう言ったら、明石も賛同してくれた。これはもうケツコンカツコセツク……いや、明石との関係はそんな淫らなものじゃない。

明石との関係そんな薄っぺらい、コンテツツの流行が終わったら靴替えされるような下劣で短命なモノじゃない。

もつと崇高で、純粹で、清らかで、愛らしくて、素敵で、永遠でなくってはならない。

だから私は明石の事を勉強していた。そのせいで海軍大学時代での成績は次席だったけど、代わりに明石が主席になってくれたからむしろ嬉しかった。

明石は、私が彼女よりも頭がいいと思っている。

だからあのときは本当に心配された。

明石に心配させた、その事だけを悔やむ。

だけど実りはあった。

『結構前に、公園で女の子にもらったものなんだけど、すつごくためになるからっ！読み返してみたら結構いまの日本に当てはまっててさあー！』

『……うん、確かに面白いかも』

『うん！この国も、こんな風になつたらいいのになあ』

私が明石の言葉を聞いたとき、まるで電撃が体中を走るような感覚に襲われた。

『……こういう国にしたいの？』

『うん！そうすれば私の方も、もつと資材が取れるし、もつと開発ができてきるもんね！』

『……明石、こういう国を作るために、頑張ろうねっ』

『うんっ！』

本の内容はかなりの射抜いてて、私も興味をそそったけど、明石のあのキラキラした目と、可愛い声がなければ、やる気なんて微塵も起きなかっただろう。

彼女は工作艦として活躍していて、彼女の興味は技術開発にある。明石がしたと思っただことはなんでもやらせる。たとえ世界征服でもなんでも、明石のためだと思つて不思議なぐらい力と行動力が湧き上がる。

あのぷにぷにのほっぺと、マシユマロのように柔らかそうな唇が『ありがとう！大好きだよ大淀！』と微笑みかけてくれるだけで、私のやる気スイッチに火がつくんだ。

そう、すべては明石のため。

そのためだったらどんなことも正当化されるんだ。

『今は、本国の防衛を集中したほうがいいと思うよ』

『は？永原元帥、正気ですか？』

『うん』

私に……いや、私たちに逆らうモノは、なんとしても容赦しない。本に影響を受けた烏合の衆……革新派のリーダーが誰であろうと、誰が敵であろうと、明石がそうしたいんだつたら、私は容赦なく潰すし、利用する。

た…海軍もまだまだ捨てたモンじゃないんですねっ！ いやっほお
おおおおおお!!! 私には明石ちゃんがいる!! ううっううう!! 私
の想いよ明石へ届け!! ナニか届いて腹め! 妊め! 孕めえー!」
「……………」

気づいたら、大淀次長は作業服を顔に被せながら、上記の字列を連
語していた。ぐによくによした動きがとつても気持ち悪かった。

明石って、整備工作班の母と呼ばれた、あの明石少将の事か？

実は軍令部にも元部下たちが居て、海軍省軍務局長であり、最近
では軍需局が事実上傘下に入ってる状態で、更には日本統合造船つて
いう造船の社長に就任している、あのスーパーウルトラ艦娘の明石少
将なら、裏で操ることも十分可能だと思っただけけど。

大淀次長が黒幕っぽいから、予想は外れたか。

「……………あのお、このひと大丈夫ですか？」

「ムキムキ」

「あ、それしか喋れないんですね。あの、これ見てるのも流石にアレな
んで、自分はこれで失礼させていただきます」

・
・
・

あのボディビルダーみたいな二人も流石に察したのか、俺を部屋
から退室させてくれた。

結局会議はそれで解散させ、後日に完成された計画書が送られるこ
とになるが、たぶん大淀次長は俺の返事を待っているんだろう。

元帥を討伐……………か。

鴨川要港部の執務室。

「その大淀少将ってやばくない? あの敏腕文官で有名な人でしょ?」

「そうそう、流石の時雨でも知ってるか」

「いやだなあ、まるで僕が馬鹿みたいじゃないか」

「白露お姉さんに比べたらそうかもね!」

「え？H A H A H A！」

「え、なに笑ってるのツ？」

時雨がまたドジを踏み、白露さんの甲からコキコキ音と共に、床に叩き伏せられたのを余興に、春雨ちゃんが淹れたコーヒーを一口。

うん、砂糖入れたくらい苦い。

でも春雨ちゃんが横にいる手前、かつこよくブラックを飲み干した
い。

「ブラックのコーヒーを飲めるお兄さん、カッコイイですっ！あ、コツ
プは春雨が片付けますねっ」

「ありがとう春雨ちゃん」

「えへへっ、撫でられちゃいましたあ〜！」

クウウウ！春雨ちゃんのニヘラ笑いかわいいなおい。

コツプを大事そうに持っていった春雨ちゃんが部屋を退出する頃、
時雨をボロ雑巾にした白露さんが肩を伸ばしながら机に腰をかける。

白露さんケツでかいな。

「それで、前線指揮官を引き受けた穴戸司令官様は、どんな作戦を立て
るのかなー？」

「それが、なにも浮かばないんですよ」

「は？成功する自信もないのに受けたの？殺そっか？」

白露さんのはガチで洒落にならないからパスで。しかしそれを
言ったら「こくんな弱い乙女に向かってなんてこと言うの！」とか
言い出すに決まってる。

そんなことを言われたら笑うしかないので、俺もボロ雑巾にされな
いように黙っておこう。

混乱を招かないように、元帥のことは話してはいない……というよ
り、話しどころが掴めない。このまま話さずに戦闘させて艦隊を倒す
か、当日になって一人ひとりに話すか。

未だに優柔不断となっている。

「作戦については、おおかた目星はつけてあります。大鯨さんや結城
の要港部、並びに新種とは言っても、戦力的な差で埋められる数まで
減っているとは聞いていますし、エリート艦撃破の経験がある白露さ

んを含めた数隻がいるならば、この作戦への不安要素は拭えている計算となります。ある意味、俺を中佐にしてまでこの作戦を遂行するところが引っかけかりますが……まあ、大丈夫でしょう」

「そうかなあ……」

意外に頭いいのかなあ……なんて言ったら冗談抜きで張り倒されるから、それこそ禁句である。

複数の作戦案を白露さんと、ボディープレスから立ち直った時雨に説明するが、疑問を抱いたような顔をされる。

ニユースで報道されているように、横須賀鎮守府はかなりダメージを受けた様子だったので、その手前、再度横須賀鎮守府が主導でトンボ返りするようには作戦を執行するのは、いくら要港部の支援があるからと言って軍部からも国民からも目映りが悪い。

元帥艦隊のデータはもらってあるから、すでに作戦構想は大方決まっているが、どれも完璧ではない。マニュアルに従って、弱点を知って、その上で立てた作戦をこれ以上完璧なものにするのは不可能だった。

特に、この大和とかいう戦艦はほぼ一撃即死攻撃を仕掛けてくるので、深海棲艦以上の化物と対峙することとなる不安感はどうしても拭えない。

そもそも元帥艦隊の事はみんなに知らせていない手前、なんで弱点知ってんだ？っていう不信感を募ることとなる。

「どんな状況にも対応できるように、四角になって移動する陣形を編んで見たらどうか？僕たちだけじゃ人数的に到底無理だけど、他のところからも艦娘が来るんだったら、ある程度は可能なんじゃないかな？」

時雨の陣形に対して「あ、それいいかも！」と太鼓判を叩く白露さんをいったん牽制する。

時雨が言ってるのは、通常6隻、最高12隻で編成する連合艦隊を更に超える、30、40隻以上の艦娘が作る巨大な輪形陣で密集しながら移動する陣形のことを話しているらしい。

自分が整工班だったということを忘れていいのか、密集しすぎで起

こる司令室との電波障害とか、総司令官がいても各司令官の麾下にいる艦娘たちが一箇所に集中して指揮系統が混雑することとか、少なくとも最低限の改善がなされれば採用されるだろうけど。

俺たち三人が頭を悩ませ、村雨ちゃんが出ていく前に置いていった最後のお餅を巡ってお互いに睨みを効かせていた頃、黒電話が鳴り響いた。

「はいもしもし」

『1, 12, 19, 13, 5, 5』

「……?」

「あ、時雨え！お姉ちゃんと半分こするって発想はないの!？」

「ないない、それに姉さん太るよ？ただでさえおしり大きいのに……まあ、僕は大丈夫だけどっ」

「このお姉ちゃんがいつちばーん！嫌いな単語だねそれ！うん！白露さんの最終奥義……ギロチンチョップ、いつきまーす！」

「あ、ぼく死んだかもっ」

『7, 23, 25, 11, 19, 3』

「……」

『5, 6, 2, 3ー』

「……は、はい?」

医務室で

電文の内容は次の通りだ。

発令時刻0500、八号作戦、鴨川要港部。

本作戦は機密である。

本作戦は横須賀第四鎮守府、及び複数の要港部が任務に当たる。

本作戦は、御蔵島、八丈島、周辺海域を攻略するものである。青ヶ島、小笠原などの攻略は八丈島攻略後に始めるものとする。

また、周辺の海域に生息すると思われる新種、エリート深海棲艦、及びフラッグシップを殲滅するものである。

本作戦で鴨川要港部に必要とされる物資は、最新鋭の装備を人数分並びに、司令艦船一隻である。

前線総指揮官を宍戸龍城中佐、麾下艦隊総旗艦を攻撃型軽空母の鈴谷大尉とする。

なお、艦隊は後方艦隊を組み込み、柔軟的に連合艦隊を編成する予定であるが、原則的に総旗艦は鈴谷大尉であるものとする。

以上。

「いや、以上じゃないでしょ!?!何やってるの宍戸っち!?!あそこ鈴谷たちだけじゃ攻略なんてできっこないよッ!?!」

「大丈夫だから!俺に考えがあるんだって!」

「八丈島まで行かなくても、わたくしたちだけで御蔵島と八丈島を攻略しろと言うんですの!?!」

「いや、あとから連合艦隊組もうとしてるんですけど……」

俺が立ち寄っている医務室まで抗議しに来た鈴熊は、まだ納得のいかないという顔をしている。もちろんだ、こんな無茶ぶり俺も納得していない。

内容は端的に、八号作戦は公表する前に決行する。鴨川要港部が前線艦隊として――詳細としては精鋭の第一艦隊だけで攻略作戦を実行する。もちろん最新鋭の艦装、装備を手配してもらおうつもりだ。

機密と言ってもあの八丈島の作戦がニュースに取り上げられたように、どのみちバレるんだからさ、機密にしなくてもよくない？

「鈴谷たちだけ作戦するのはともかく！穴戸っちまでなんで前線にくるの!?!必要なくない!?!」

「作戦指揮は司令室でやるなんてとおおおおおおうおうおうぜんのセオリーですよ!?!なんでわざわざ司令艦船まで出して司令官が来る必要があるんですのお!?!」

「指揮官自ら前線に出なくてどうすんだアア!?!」

「お三方、医務室なのでお静かにお願いします」

「すいませんでした……」

軍医さんに促され、静かに鈴熊へ退出を願ったが、やはり納得の行かない顔で部屋を出ていく。

今作戦は俺も同行するために、司令艦船という最新兵器を導入する作戦でもある。

これは司令官など、艦娘として戦えなかったり、海上を移動できない人のために用意される指揮官専用のポートみたいなもので、言ってしまうと移動用の輸送艦船とほぼ同じである。

しかし若干小さくなっており、通信機器を常備し、防御力もあがっており、スピードが超特急で、なにより揺れが少ない。多少攻撃能力もあるらしいが、弾丸を陽炎、不知火、黒潮に弾き飛ばされたため、まったく期待できない。

使う理由はもちろん、元帥艦隊の弱点を知る俺が指揮を取るため、鴨川艦隊とは言っても助っ人として他の要港部と鎮守府の艦娘に入ってもらわねえだし、最低でも戦闘編成の合計は24隻以上にはないと予定している。

最新鋭でコストがかさむが、実戦投入段階にあるものにも関わらずリアルで使う人がいないのは、単純に死にたくない人が多いって理由と、そもそもこれが必要になるような作戦がまだ実行されていないからだ。

これから海外進出を行うのなら、これからドンドン使われる事になるだろう。

つまりこの俺が先駆けとなるのだ。

海軍上層部よ、俺を崇めろ。

「穴戸くん、本当に司令艦船なんかに乗るの？危険じゃないの？」

「大丈夫、心配するな。ほら、窓の外を見てみる。砲弾弾き飛ばしてるだろ？」

『クツ……壊せないですけど！』

『私にも、まだまだ倒せない敵がいるということですね……いや、この不知火の砲撃技術に落ち度でも……？』

『バンバン打つでえ！中に人おるけど、どうせ死んなら普段の鬱憤晴らさせてもらうでえ！』

『怖いいいいい!!!助けてええええ!!!』

「中の人すごく叫んでるんだけど」

「でも大丈夫だろ？流石は俺の訓練生。興味本位つてのもあるし、作戦実行の口実でもない限り最新鋭の司令艦船なんて持つてけないしさ。それに司令部だとなにかと不便なんだよね、何十隻も指揮して戦況が100パー掴めてないと致命的だしさ。俺を軍神つて崇めて？艦娘でもないのに砲台ばかばか打たれる中で司令官が最前線にいるんだしさあ……！」

「軍神つて、死んでるじゃん……」

作戦遂行にあたって、本当について程度にだけど、とある電話の真意を突き詰める意味も含まれている。

電話は八丈島からのもので、その相手は……元帥からのものだった。

行方不明の元帥からのメッセージなんてわけがわからないけど、電話から無造作に番号が発信されていた。一瞬ただのいたずらかと思っただけど、一応すべてメモをとっておいた。

そのあと受け取ったFAXの電文の内容がこれまた番号の数列だったが、電話の発信した数字とは異なった。個人的にこういう数列暗号の解読が好きで、よく兵学校時代にやっていたんだけど、流石に

これは初めて見るタイプの暗号だった。

番号を使った暗号の解説書を読み漁ってたら、ワンタイムパッドと
いうのが目につく。

旧ソ連が使ってた暗号で、メッセージを伝えるための発信数字と手
元にある鍵の数字を合わせて出来上がる数字を、アルファベットに照
らし合わせるものだ。

ぐうぜん字列が意味のある文字を浮かべるなんてことは、確率的に
不可能な領域を超えない限りは、絶対に出ない。つまり俺が導き出し
た答えは合っているはずだ。

そのアルファベットを日本語に訳すと、衝撃的な字列が浮かびあ
がった。

永原、艦娘と一緒に八丈島にいる、だれかたすけにきて。

元帥が、俺にメッセージ……？

なるほど、これはただのイタズラだな。

うちのところ以外にも近くの基地に来てたりしたが、暗号は解け
なかった上、イタズラだと思っただけで放置しておいたらいい。しかし幸い
にもそれだけで、上層部へ届けるほどでもないと判断した。

俺はあちらに向かってモールス信号で数列を送った。鍵の番号を
同様のものにして、そして自分のメッセージとして数字を作り、答え
としては、

こちらは鴨川要港部。助けてほしくばこちらに艦隊を寄越された
し。

と耳が痛くなるほど送ってやった。

つまりは生きてる証拠、そして本当に元帥からのメッセージなのか
見せろ、という意味だ。

もしも生きて艦娘がいるとしても艤装があるか、資材はあるか、そ
もそも信号が届いているか云々の話になるが、正直それは俺の知った
ことではない。

大淀次長のこともあるんだし、これ自体が大淀次長からの奸計で、

もしも元帥と手を組むようなことがあれば殺すーみたいな陰謀が渦巻いたメッセージかもしれない。

このことをさり気なくみんなに話したら「アニメの話？」とか言われてシヨツクを受けた俺は、現実はいくシヨンよりも奇なりという言葉を座右の銘にしてるんだ。

まんまと殺されなかったためにも、作戦内容は偵察機をバンバン常に張って、兵站を細心と慎重な行動で、最初のターゲットである御蔵島までの経路を作る。

参加する要港部の指揮官が結城や大鯨さんとかの同期だから、バツクスタツプされる心配はないだろう。

まず御蔵島攻略は、嵐か台風でもない限りは、成功するだろうー俺の勘はそう読んでいる。たいてい勘とはスピリチュアル的なものではなく、無意識に信用を置ける経験上の要素と、言葉では言い表しきれない状況が自分にとって益をもたらす条件が、なんとなくそろっているときに、ふと起るものなのだ。

それでも色々と考えなきやいけない面倒臭さを感じながら、また休暇を潰されたことへの怒りが込み上げてきた。

「そんなことより大丈夫かよ？お前の首にアザついてんぜ？」

「心配してくれるんだ、ありがとうね！僕がこうなる前に姉さんを止めてくれたらもつと良かったんだけどツ？」

「う、うう……」

「ごめんよお〜時雨え〜？でも俺にこの人止められると思う？」

「司令官でしょ!?!止めてよ穴戸司令官コラア!?!」

「ま、まあまあ！穴戸くんも悪気はなかったんだし！お姉ちゃんも悪気はなかったんだよっ？」

妹が餅を分けなかったからって、殺人級のチョップをかますのは流石に悪気どころじゃ済まされないんだよなあ？

それに、白露さんケツでかいんだからさ、もうちよつとカロリー気をつけたほうが……って、摂取カロリーと本来の体つきは関係なかった。つまり、尻がでかいのは骨盤の問題で、生活習慣を見直しても到底なおしようなものだっただ。

「……って、さつきから何みてるの穴戸くん！はは〜んっ、さてはお姉さんのおしりがそんなにきになるのかなあ〜？うふふっ！このえっちっ」

「いや、デケエなっ……ハッ!?」

「穴戸くんも処刑決定だねっ！」

時雨のベッドの隣でメガトンフィストを食らわされたあと、背中に馬乗りされて、ハンマーロックという公式プロレスでは禁止されている技をかけられる。

しかも両腕にかけられているので、感想をいうと、死ぬほど痛い。

「イタイイタイイタイイタイ!!!」

「穴戸司令官、白露大尉の右腕と右脚の定時報告を医務局に送る必要があるのですが、彼女の右半身の調子はいかがですか？」

「軍医大尉くん！これ見える!?書類なんていいから少しこっちみて！明らかに調子を心配するような動きじゃないんだけどねえ!?これ兵器開発局の奴らいるよねこの腕と脚の製作者にッ!？」

黙々と書類に詳細を書き込むメガネの軍医さんマジ日本人。まさにパッション気質とは正反対の位置にいる。

人の命なんてどうでもいいと思ってるのか、患者の目を見ず、紙切れを凝視し続けている町医者ヤみたいな奴だ。

腕がコキつと鳴ったところで白露さんは馬のりをやめる。しばらく立ち上がれなかった俺が身を起こしたのは数分後のことだった。

「穴戸くんはこの作戦って成功すると思ってるの?」

「御蔵島はともかく、八丈島は問題だけど、信頼できる作戦は一応立てた」

「でも完璧じゃないんでしょ?」

「この世に完璧なんて無エツ!!しばくぞゴラア!!」

「なんか言った?」

なんだよ時雨、椅子なんて持ち上げやがって……結構元気じゃねえか……その元氣、作戦遂行当日まで、止まるんじゃないぞ……!」

「決行当日は御蔵島攻略後に、艦隊を再編成して八丈島を偵察しにくい。もしも巨大な艦隊がいたら引き返し、引き寄せて釣り野伏せのプ

ランA、少なく、敵がある程度倒せる範囲だったらプランB。もちろん、双方は万全な情報網を敷いていることを条件としている。な、簡単だろ?」

「司令官っていうお荷物が居なかったらもつと楽なんだけどねッ!」
「すんませんね……それにしても、春雨ちゃんはどうしたの?こつちに来ると思ってたんだけど」

「宍戸くんの部屋にいるんじゃない?」

……ん?

「だから宍戸くんの部屋にいるんじゃない?」

……?

「あの、宍戸くん?冗談で言ってみただけだから。そのオスカー・ワールドみたいな顔とポーズやめて」

俺の部屋には入れてはまずいものがある。

だから鍵、暗証番号、そしてドアノブに細工して、一旦下まで降ろさなきゃ開けられない三重ロックをかけているんだ。

そんな容易に開けられるものか、バカモン。

あそこには、スマイリングガールズセツ○ステイバルという、やられているときは終始笑顔でやり遂げ、最後はもちろん溢れるぐらい中……コホンッ、そういうタイプの芸術作品が置いてある。

机の引き出しの底を二重にして隠してあり、もちろん細工を施した机の中にはスマイリング以外のも多くのお宝が眠っている。

下賤妊法、孕ませ○クスの術。

大開通、スマックフ○ツカーズH。

ナマイキ罵倒連語ギャル、後にごめんなさい連語エ○チ2。
名作揃いだ。

「兄貴!電話ですよ!中将からです!」

「シー、静かにしろ月魔。病人がいるんだぞ」

「病人と言っても姐さんだけじゃないですか!そんなの姐さんのバケモノじみた回復能力ですぐ治りますって!」

「え、ぼくのことバケモノって言ったかなこのストーリーカー野郎くんツ?」

「あ、しまったー……た、たすけてください兄貴!!」
「電話ありがとうな」

電話を怯える月魔からぶん取り、時雨に譲った。

時雨のレッグツイストは相変わらず痛そうだが白露さん同様、時雨の首の調子は心配するほどでもなかったようだ。

「穴戸です」

『少佐これはどういう事だね!? 八丈島作戦に加担するとは一言も聞いていないのだが!』

……この人機密情報得るの早すぎい!

「八丈島攻略への先駆けとして自分の名前が上がりましたが、その代わりに軍令部、大淀次長に内争を緩和するようにと直々に感嘆しました」

『あ、そ、そうだったのか……』

「安心してください、実際当日に深海棲艦がいるとは限りませんし、そもそも軍令部からの命令を辞退することはできません。同期らには、念を押して騒がないようにと連絡を入れておきますので」

『そうか……すまない、早とちりが過ぎたようだ』

『いいえ、心配をおかけしてしまい申し訳ありません』

『ああ……ところで、親潮は君のもとでうまくやっているかな?』

「はい、このように有能な部下を送ってくださるなど、齋藤中将には感謝してもしきれません」

『それは少し大げさな気がするが……まあ、それならいいんだ。それより親潮は、そちらで風邪など引いていないかね? 出撃などの回数もできれば教えてほしい』

やけに親潮の事を気にするんですね。

齋藤中將も大淀次長も、海軍省に影響力があるのは分かるけど、スゲーなと思うわ。

あ、俺も海軍省に班長がいるんだった。

今度それを切り口に海軍省内の人脈構成でも……と、俺もとんだ野心家だな、ハハハ。

そんな野心家の部屋が、時雨の戯言が現実のものとなったのか、春

雨ちゃんの手によってすでに開放されていることに気付いたのは、俺の輝名がどん底まで落ち、正式に中佐階級をもらい、作戦を実行する当日である……が、それもまた別の話である。

『お兄さんなんでロリ物がないんですかねんで巨乳ものばかりなんですかねんでですかねんで春雨を見てくれないんですかねんで春雨とは真逆の女の人のビデオがあるんですかねんで春雨が置いた写真がないんですかどうしてどうしてどうして』

『お、落ち着きましよう春雨っ？ほら、ベッドから降りて？ね？ほら、もう少しで出撃だし、私も班長として準備とかあるからっ。ねっ？』

『さ、サムソンとバディーの表紙の中身がまさかの巨乳グラビア……司令官はノンケだったんですかあ……!?』

『普通にあのノーマルだからあ！頼むから二人とも兵学校時代に戻ってえ！同期がこんな変態ばかりなのはいやなのよおおお!!』

「さてと、じゃあ今度はあの司令艦船に直接俺が乗るとするか……本番で操作を間違わないように、体で覚えさせるのも必要だからな」

「わかった……月魔くん、大丈夫？」

「ア……ア……」

すでに虫の息のようだ。

しかしすぐ立ち上がるところは流石だと思う。

「うんしょつと……兄貴。言い忘れてましたけど、出撃所に他の要港部からの艦娘が来てましたよ？司令官に用事があるんだとか言っていましたけど……」

「そんな予定は入ってないと思うけど……とすると、負傷した艦娘が立ち寄ってるのか？どちらにしてもこっちには連絡が入ってないけど」

「いいえ、それが無傷なんです……かなり巨大な艦装を付けてて、所属と名前を名乗ろうとしないんですよ。不審だったので、今は要港部の出撃所にとめてますけど」

「名前を名乗らない……誰だろ？俺が直接行くけど、なに、記憶喪失と

か？」

「そんな感じはしかなかったですね」

入港連絡もない、その上名乗らない。

誰だよ。

明らかに怪しい感じの艦娘に対して不安感が募る。こっちは元帥やら大淀少将やらのせいで、散々めんどうな作戦を考えがなくちやいけないのにこれ以上俺にストレス溜めさせるな。

「穴戸くんでもストレス溜まるんだね」

「おりよ？分かつちやう？つか声に出てたのか……人間ストレスが溜まると、人格も行動もおかしくなつちやうもんだよなあ……とりあえずそのケツのデカイ艦娘とやらの場所に案内させて」

「ケツがデカイとまでは言ってますが……」

「じゃあ太ってるのか……」

「艦装が大きいってだけだから。穴戸くん、艦娘を貶めるとろくなことにならないよ？」

「フン、規則ルールもろくに守れないヤツに遠慮することはない……俺様の司令官としての威厳、海軍のルールに則って、再度みんなに知らしめてやる」

シークレットビジット

「とか、僕たちの前では色々とはざいていたんですよこの人？お尻がでかいとか太つてるとかルールを無視するとか艦娘として使えないとか勝手に入ってくるの凄く迷惑ザムライだとかなんとか」

「す、すみません……」

「小官こそ非礼をお詫び申し上げたく存じます。なので何卒、何卒、何卒、元帥にはこのことをお申しにならないよう、お願い申し上げます。捏造大好きっ子なこの時雨なる道化の戯言とはいえ、部下の非礼は上官の責任……この宍戸、改めて部下の失言に、お詫び申し上げます」「はッ？」

本当に言ったことと言わなかったこと混ぜて口撃力倍増させるのやめろ。

執務室。俺の目の前で整列しているのは、なんと元帥にあのモース信号が届いたのか、向かわせろと言った元帥艦隊として来たのは副官であり秘書艦だった戦艦大和。

並びに軽巡阿武隈、そして水上機母艦瑞穂がいる。

長身の黒髪ロングが可愛さよりも美麗さが先にくる印象である。他の二人は端的に、凄く和風な人と、セットがクソ面倒そうな髪型してる人。

元帥の高級副官だと記憶してるので、戦艦大和の階級は書類上では大佐である。つまり俺よりも偉い。だから俺も普段は座ったまま話すが、今回は立っている。敬礼するときも俺が先だ。

「提督からこちらに来るようにとの命令を受けたので、大和以下二名、鴨川要港部に参上した次第です」

「ありがとうございます……あの、ぶっちゃけ聞きますけど、なんでここに来るように命令されたのかは……」

「はい、提督からはすでに聞き及んでいます」

「ねえ、これはどういうことか説明してくれるよね？」

「宍戸さん……っ」

時雨と村雨ちゃんは驚いた顔をしている様子は見せなかったが、真

剣な面立ちで聞いてくる。正直、いつ話すか迷っていたけど、話すなら今しかないな。信頼できる部下といえば、この二人と……あとは春雨ちゃんと白露さんと、鈴熊ぐらいか。

作戦前に正式に話すが、二人が先に知っておいても損はないだろう。

「……というのが、俺と大淀次長と元帥の間で交わされている水面下での戦いだ、理解したか？」

「急すぎるよオ!？」

「急すぎますっ!」

当然ながら、俺の話を100%信じることはできないと二人は首を横に振ったが、信用はするという雰囲気でもあった。

「コホンッ……大和さん、まずは元帥が置かれている状況についてお話ししてもらえませんか？」

大和さんは暗い顔をしながら言いくそうにしていたので、隣の阿武隈さんが直入すぎる状況説明で彼の現状と経由を話してくれた。

第一鎮守府が健在だった頃、元帥が大淀次長に反発して殺されそうになっていたので、麾下の艦娘らがその前に大淀次長を抹殺しようとして、彼女に協力していた官僚連中と集まる会談中に襲撃した。

その後、提督と一緒に八丈島まで逃げて、今に至る。もちろん大淀次長は一昨日見たとおり健在であり、大淀次長……いや、日本海軍V S元帥艦隊の構図が水面下で出来上がっていることを知っているのは、本当にごくわずかな人物だけである。

八丈島出兵も、第一次大淀V S元帥との戦いだったそうだ。要は、元帥艦隊は今、絶賛反乱中だということか。

……は？

「はっ..」

「……なにっ?これが全貌よ!提督がイジメられそうになってたから、阿武隈たちが守ったの!悪い!」

「いいえ、忠義心があるのがいいことです」

いや全然よくねえよ?何人死んだと思ってんだあの襲撃事件で?正直無能ゴミだけ殺されたから、フラッシュアウトしてくれてラッ

キー的な感じだったんだけど、そんなこと言ったら俺こそが非人道的な過激派になる。

「なるほどね……穴戸くん、これって大和さんたちに同情したほうがいいのか、いくらなんでも行き過ぎだから批判したほうがいいのか、どっちなんだろ?」

「結果論としては同情だ。もし、一般市民を巻き込んだり、有望な海軍将兵の命を摘むようなことはあれば確実な批判対象だが」

「瑞穂たちの敵は大淀ただ一人です! 仮にも仲間だった将兵のみなさんを……増しては大淀の命令で騙され、攻撃するように仕向けられている人たちを傷つけるような真似はしません!」

「まあ……もしも阿武隈たちの提督を本気で殺そうとしてたら、ぜったい許さないけど……」

「ひ……」

村雨ちゃんがおもむろに服を掴みながら俺の後ろに隠れる。それはもう胸が当たるぐらいの距離まで抱きついてくるから、俺の主砲にも血液が流れちゃうんだよねえ。

でも阿武隈さんの気迫で相殺されて、結果的に股の龍はまだ下を向いている。瞳の奥が黒く濼んでいるのは気のせいだろうか?

「現状を話してくれてありがとうございます。そして、大淀次長の罠かもしれない……という、危ない橋を渡ってくれたことに、深く感謝します。実はこちらとしてお呼びだしたのは、再度行われる八丈島攻略作戦についてです……自分は次長より、元帥討伐の任を直接受けた身で——」

バン!!

「……え」

「提督のことを殺そうとしてるんだあ……あは、アハハハ! オモシロイ! エモノガメノマエニイルツ!」

「瑞穂、ちょうど刃物を持参してるんですつ、持ってきてよかったあ……!」

「穴戸くんツツ!!」

時雨が目の前に立つ。

喋ってる途中で俺の横を掠めた、阿武隈さんの髪を留めていたペアピン。後ろの壁に突き刺さっていて、凄く食い込んでる。銃でも撃つたかのような爆音は、単純に阿武隈さんの手から発せられた風切り音だったのか。あのお、投げた動作が見えなかったんですけどお……？瑞穂さんはニコリと刃物を胸から取り出そうとしている。そして大和さんは戦艦の眼力を使って、俺を蛇に睨まれたカエルのようにカチコチにしている。まさにメデューサ……ジジイ、幼い頃の見解は正しかった。おっぱいのおつきな女性は、メデューサだったんだ。

「あ、あの、まままままま待ってください!!誤解です!!俺は受けただけでやるとは言ってます!!受けるんだったらわざわざ話さないでしょう!?!よく考えてお願い!!」

「なあーんだそうだったんだ!もうっ、驚かせないでよね!っっていうか、ヘアピン使わせないでよもうっ、髪の毛セットするの大変なんだからねっ!」

「こちらの早とちりでした、申し訳ありません」

「べ、べべべべべ別に大丈夫です、ハイ」

時雨も一旦下がって、あまりの迫力に白化した村雨ちゃんを介護している。俺も冷静になるため、息を整えた。

「ハアあー……ハアアアア……!大淀次長からは命令を受けましたが、自分も一応は横須賀第四鎮守府の管轄下にある身です。その上官の上官に対峙するは不敬以上の極刑、武人としては未代きつての恥であると感じます。それがあの尊敬すべき永原海軍元帥であれば、尚更といえるでしょう」

「反乱している事実を知ってもなお、そう言ってもらえる人が海軍にいるなんて、とてもありがたいことですっ」

この際どちらに正当性があるかなんて、軍部の中枢を握る人物が決める。

元帥とは戦いたくないし、戦ったとしても、この強さの艦隊に太刀打ちなんてできない。考えていた作戦の一つで、もしも協力が得られるんだったら、作戦中にわざと艤装を小破させて帰ってきて、無事にミッシヨン失敗すればいいのでは?とも思ったけど、それだとの道

また討伐の手を伸ばして、他の要港部の連中が危ない役目を背負わせることとなる。

この人たちを見るに、元帥のことになると気が触れるし、ぜったい手加減できないだろうな—と思つて、少なくとも轟沈が出る可能性がある。

「しかし現状、元帥反乱の状態は隠されてはいるものの、このままであるわけにもいかないでしょう？ 整工班が補う艦娘全般についての点検や修理……それだけじゃありません、補給全般に関しての不備を補うのは、八丈島だけでは物理的にも不可能に近いんです。今までどうしていたのか聞きたいぐらいですよ？」

「それはこの大和も承知の上です……艦装は私達自身が点検したり装備できますし、資材は北にある未開の地からある程度遠征で補えますし、食料とかも最初は仲間から密かに送ってもらっていたんですが、自給自足の基盤は築き始めています……それでも傷んだ艦装などは設備の問題で完璧には直せないのが現状なので、こと足りないところはたくさんあります」

横須賀第一鎮守府が最強と言われる所以が分かったわ。まさにこのチートぶり、コマンドーだよホント。多数の艦隊がその武勇と陣風のような艦隊運用を目の当たりにし、その海域にいたら敵が轟沈している、まさに疾風、あるいはかまいたちのような艦隊である。

しかも自給自足している状態でイージス艦を潰したとなると、余計に元帥への対峙心が薄れる。

もちろん海軍総力戦だったら勝てるぞ？ 日本全国の艦娘集めたら、絶対数も補給も何もかもがこちらが勝ってるんだから、勝てるんだけど……そんなことになったら派閥で内乱起こされるより早く、日本が終わる。

「もつと設備が整つてて大きな島があれば、提督と阿武隈たちはそつちに逃げて、これ以上この国に執着しないんだけど……しつこいんだもん、大淀さん」

「提督と幸せに暮らせれば、それで……」

「提督……」

大和さんの握力はどれぐらいなんだろう。

彼女の持っていたペンが粉々になっていた。ほかの二人も握りしめていたけど、それだけで血が出ている。怖い、ただただ怖い。なにが怖いって？爪は深爪かってぐらい切られているはずなのに、血が出てるって、ちよつとおかしくない？

目に光を宿していないとこんなに怖いものなのか。

時雨が村雨ちゃんを椅子に寝かせて、俺の襟を掴みながら部屋の角に連れて行く。

「ねえ穴戸くん、あの人たちやつぱり変だよ!？」

「おいおい状況を理解しろよ、平和ボケしている時代は既に過去のものってことだよ。ハハハ、深海棲艦が出現した時代とどっちが平和なんだろうな……」

「なんでそんなに冷静なんだい!?!いや、事前に大淀さんに言われていたから驚きはないんだろうけど……それでもなにアレ!?!握ってるだけで手から血が出るよ!?!僕ですらあんなことできないよ!?!」

「見ただろあの阿武隈さんの動きを。あんなのが百鬼夜行みたいに蔓延ってるのが元帥艦隊なんだよツ。大淀次長には悪いけど、この作戦辞退したい……」

「でも辞退したら今度は穴戸くんが始末されちゃうかも……僕たち、できれば元帥さんたちみたいな状況になりたくないなツ」

「俺だっけしたくないよオ!!でもあの人たちやると殺されるし!やらないと殺されるし!八方塞がりなんだよオボケエ!!」

「二「あの、何かツ?」」

「なんでもありませんよつ、大和さん、瑞穂さん、阿武隈さん、ハハハ」
クソオ!どうすればいいんだ俺は……一介の少佐には荷が重すぎる。

大淀次長の命令に従えば、前線に出る昇進も含めて無事に二階級特進して准将へ。

逆らえば不名誉かつ謎の殉職を遂げた裏切りクソチ○ポとして永久に名前が教科書に残る。教科書にラクガキされるのは嫌だ。

どうすればいいのか……と、思っていたその時、俺の椅子にもたれ

かかり、半分気絶している村雨ちゃんの顔が目に入った。

「し、ししど、しゃん……んっ……ああっ……」

「……………」

エツツツツ。

駆逐艦は、なぜこうもエロいのだろうか。現実逃避が俺を呆然とさせる。村雨ちゃんマジ妖艶。わざとやってるんじゃないだろうか？

いや、たぶんわざとだ……そうだ。

俺の脳裏を走馬灯のようにフラツシユバック、想起、海馬の奥にある記憶との邂逅が、俺にそう呼びかける。

『ジジイなんで屋上にくるの?』

『ほう?そんな初歩的なことも分からんのかこのクソガキは?あそこを見てみイ』

『あ、あれ、女の人の銭湯!?だめだよジジイ!道徳的にだめだよ!』

『五月蠅いわい!!どうでもいい事ばかり覚えおつてからにイ……女というものは、常に男を意識してるんじゃない。だからほれ、風呂の中でもエツロイ仕草、エツロイ動作、エツロイアガペー醸し出しとるじゃろ?これはチ○チン遊びへの誘い受けに決まっとるわいボケ』

『ただ女の人のはだかなだけだと思っけど……』

『いいかクソ坊主ツ!!女は誘い受けしていても裸体を容易に見せんモンなのじゃ。見られたい願望があるクセに身持ちが高い。だからこそ、漢のほうから見てやるのじゃ。ワシマジ聖人』

『で、でも裸みられるのは普通に恥ずかしいし……』

『でももへったくれもあるかア!?こっちは見たくてもみたくて股にある龍が喚いてるんじゃないアボケエ!!』

『結局ジジイがみたいだけじゃん……』

『いいか龍城よ!?金でも権力でも女でも、自分から前に進み、取りに行かねばならんのじゃ!!消極的になっていたら、ろくな成果なんぞ出せんゾオ!』

『と、取りに行く……』

『そうじゃ。取りに行くために、消極的に考えず、常に前進的な考え

を持つのじゃ。女がエツロイ格好していれば交尾申請！風俗に行けば前渡しで中〇し許可をもらおう！キャバクラでも先手必勝で胸を触るウー！そうすれば、予想以上の結果が生まれるんじゃ……」

「わかったよジジイ！じゃあとりあえず、これ以上ジジイが迷惑かけないように、いろんな介護施設とおまわりさんに連絡入れておくね！」

『ふ、成長したではないか……まあ、警察などに捕まるワシでやないわい』

『大丈夫だよ！ここに来たときもうおまわりさんは呼んでたから！先手必勝だね！』

『Noooooooooooooooo!!!』

前進的な考え方か。

……あ、じゃあいいこと考えた。

成功するかわからないし、直接元帥の了承が必要だけど、彼女たちの協力があれば大丈夫だろう。

「未熟な身ながら、作戦案……というよりも、双方が得をする取引を思いつきました。もしも永原海軍元帥から承諾を得ることができれば、すべてを丸く収められる可能性があります」

「ほ、本当ですか!? あ、あの、その作戦というのは……!?」

「もちろん元帥が自分を信じてくれれば、ですが……」

八号作戦成功

作戦当日の御蔵島付近。

天気は晴天、波低し。

絶好の艦隊運行日和に、自ら艦隊を率いてる司令官は誰かとみんなは噂していた。その正体はまさに、自分から最前線に赴く司令官の鑑こと俺である。

俺の前線艦隊は演習した時と同じで、この6隻である。横須賀第四鎮守府主導のもと、総司令官の蘇我少将、並びに作戦参謀の那智中佐、情報参謀には結城大尉、後方支援艦隊の指揮官として大鯨少佐。

作戦の規模は明記されてないが、大規模作戦として実行するものである。

知り合いの提督や鎮守府から、無謀な作戦ではないかという連絡を頂いたにも関わらず実行する俺は、正に現代のアタシポンコツムタグチちゃんのモデルとなつている將軍の写し鏡である。いや、この大規模作戦そのものは俺が考案したわけじゃないから。

目標である御蔵島、八丈島、青ヶ島、小笠原諸島を攻略するものであり、一ヶ月以内の制圧が期待されている。この期間は理想であり、これよりかかる可能性は十分にあると、上層部は考えている。

敵の数は単体が強力なエリート艦に加えて、フラッグシップと呼ばれる深海棲艦もいると言われた。それが20隻以上となり、更に八丈島という要塞が深海棲艦側にある以上、攻略は最短で二週間はかかるとも言及される。

指揮する前線艦隊はすでに目標の一つである御蔵島にいたエリート艦を艦載機の流星雨でボコつて、そこに拠点を作り、いよいよ本格的に目的である八丈島まで出港しようとしていた直後のことだった。

「ぶええええん！ぶええええん！」

『ど、どうしたんですかあ…!?!』

「ひっぐー！いやね大鯨さん？ぼくね、ふつうにね、漢なの。なのにね、えっちなビデオとか持ってただけで、変態扱いされるの、すごく、名

誉？プライド？傷ついたので。わかる？」

『あ、あのっ……す、すいませんっ！ちよつとよく状況が……』

「じゃあ聞いててください……こちら前線総指揮官の宍戸中佐である。御蔵島からは無事出港し、ささやかな波を仰ぐ。三宅、大島、御蔵島の後方艦隊の兵站は順調か？」

『三宅から旗艦陽炎オツケーです、だからさっさと行ってくださいー
い妊法提督さーん』

『大島から旗艦磯風も問題はない。安心して深海棲艦をスマックして
ファックしてくるといい』

『御蔵島はさきほど確認した通り、支援、及び臨時補給態勢に落ち度は
ありません。なので無闇に話しかけないでください、ナマイキごめん
なさいが伝染ります』

「大鯨さん無線ちゃんと伝わったかな？あと俺の悲しみもちゃんと伝
わったかな？うん？」

『あ、あのお……ご、ごめんなさいっ!!』

「ふえええええん!!」

仲間からの罵詈雑言に、随伴する艦隊もドン引きである。流失した
お宝は俺のものだと判明した主な理由は、単純に宛先のところを剥が
し忘れていたからである。

大鯨さんや結城から作戦は順調かと聞かれた。

え、作戦？うん、順調なんじゃないですかね？

通り際に撃破した艦隊は合計10隻、内数2隻ほどがエリート艦で
ある。かなり多いほうだし、ここにくるまで無傷だから褒められても
いい。

資材を取りに行く遠征ではなく、攻略を主体とした遠征のときー
特に、今回のように長距離を大艦隊と移動するときは、花形の前線艦
隊が哨戒や敵艦隊の撃破をして、後方支援艦隊がドラム缶や艦船など
で資材や食料を運び、整工班、並びにそれに従軍する部隊を輸送する
のが一般的である。

艦娘以外を海域周辺の島に配置する理由はもちろん、臨時的な補給
修理をするためである。陸よりは断然少ない数で、まさに少数精鋭だ

が、それでも1000人、2000人単位を修理機器、道具、資材と共に管理しながら効率よく動かすのは至難の業である。

進めるタイミング、情報伝達の効率と速さ、現状把握とそれに伴った適切な判断力、それらを押さえれば一流の艦隊運用を成す指揮官として名を馳せるだろう。

つまり幹事役がうまい会社の社畜は、すぐにでも海軍に志願して、提督育成プログラムを受けてくるといい。会社にいるより断然活躍できるからさ。

ある程度その島で準備を終えたら再び前線艦隊が次の島、あるいは泊地か拠点を制圧して、そこに後方支援を輸送する。その繰り返しで、移動、泊り、移動で目的地までたどり着き、万全の状態を迎え撃つ。

兵力も大事だが、事前準備と兵站はそれ以上に大事だし、作戦を実際に指揮すると色々忘れることが多い。多々ある重大な補給を見逃してしまうと、大きな失敗に繋がり、歴史的な大敗北をきした例は1つや2つじゃない。

いつでも増援を呼べるように、後方艦隊を警戒態勢のまま待機させて、後ろからの攻撃も安全。

八丈島に向かう際は、鈴熊に艦載機をブンブン飛ばすように指示している。

「艦載機足りないよ！もつと張って！」

「これが限界だって！熊野のと合わせてテイサツ系のやつ20個しかないじゃん！」

「それより穴戸くん、もうちよつと操縦なんとかならないの？さつきからそのボートから水しぶきすごく飛んでるんだけど」

「ごめんねえ!?俺様、ついこのあいだ覚えたばかりなんだよこれの操縦！オラアチンタラ走ってつとオレース始めんぞゴラア!!」

「や、やめてくださいお兄さん！春雨で良ければ、いつでもスマイリングセツ○ステイバルしますからっ！」

「春雨ちゃんそんな卑猥なこと言っちゃダメエイ！でも帰ったらオシオキだぞっ。俺の名誉をスタスタにしやがってこいつめ」

「お、おしおき……お兄さんの、おしおき……！」

恍惚のポーズで水上走行するのは前方不注意になるのでやめるように言った。

御蔵島から八丈島は遠い。

でも小笠原と比べれば大したことはない。

船の中は良好で、乱暴な動きをしても内部の揺れが軽減されているあたり、技術的な加工は興味をそそる。そしてなにより速い！全速力の艦娘に追いついてるこの速度、マジすげえ！

「みんなは知つてのとおりだけど、これはかなり異様な作戦になるから、注意してほしいんだ」

「元帥と宍戸さんの極秘作戦……かつこいいですけど……」
「……………」

みんなは不安そうな顔を見せるが、大丈夫だと念を押す。

「心配するな！必ずうまく行く！」

「で、でもお……」

「大丈夫です鈴谷さん！春雨は、お兄さんを信じます！」

「私も信じちやう！」

「姉さんは話の規模が大きすぎて考えるのやめてるだけでしょ？」
「んッ？」

頼む時雨、作戦中に白露さんを挑発するのはやめてくれ。

作戦開始から4時間ぐらいか、あまり経過はしてない。トントン拍子とはまさにこのことか……でも、油断は禁物である。どんな状況にも適切に対応できるように、みんなには常に心を警戒態勢にするようにと口を酸っぱくして言っている。

こうすることで不安感は煽るが、なにが起こっても随時対処できる。

『こちら総司令部だ。君が直接行くなんて、本当に大丈夫なのか？ やっぱり後方支援艦隊とともに行ったほうが……』

「大丈夫ですって！何度目ですか蘇我少将……」

『いや、君たちの裁量は私も承知しているところだが、流石に6隻だけで八丈島周辺のエリート艦隊を偵察など……』

本当はそんなクツソチンケなへなちよこ艦隊じゃねえんだよなあ……多分、その100倍は強いぞ。ガチでやり合ったら確実なる死ゾ。

ほら、あそこに見えるでしょ？大和さんに、多分武蔵さん？それに、その他諸々。あの数十隻が全員阿武隈さんや瑞穂さんみたいな強さだったら末恐ろしいのだが、それ以上に目を引いたのが、大和さんと武蔵さんがメツツツツチャデカイ砲台である。

一撃即死攻撃とかどんな大砲かとワクワクしてたけど、目の前にすると怖過ぎるんだけど。

「では作戦に戻ります。それでは蘇我総司令官、戦果にご期待ください」

—————

第四鎮守府、作戦本部。

「あ、ちよ……まったく、本当に大丈夫なのだろうか？」

作戦総司令であるというのに、この落ち着きのなさ。彼は常に勝利を自負しているわけではない。ただ事務的に、そして忠実に、その任をこなそうとする姿勢が、部下たちを惹く要因だろう。

「心配ないですよ、私は彼を信じます」

作戦参謀の那智も蘇我と同じように心配はしていた。総司令官が席の立ち座りを繰り返す一方で、那智も横に結んだ長髪を弄り倒していたが、それでも彼を信じる事にした。

どこの馬の骨とも分からない者を前線に出すのは愚策であり、それを二事返事で承諾するのを蛮勇と呼ぶ。しかし彼がただの蛮勇でないことは知っている。

この作戦を成功させる何かを持っている。那智も、作戦進行の更新を待つ事にした。

「那智参謀長……そうだな、総司令官たるもの、どっしりと構えていなければ……念の為、宍戸中佐の後方支援艦隊がいつでも出撃できるかどうか、予め確かめておいてくれ結城参謀、古鷹」

「わ、分かりましたあ！」

「ハイツス！……古鷹ちゃん、緊張してる？」

「え、あ、あの、はいっ……穴戸さん、大丈夫かなあつて……」

「わかる、分かるぜえ？まったく、古鷹ちゃんみたいな娘を怖がらせちゃつて、ダチながらワルイ奴だぜえ……いつでも、俺たちの胸、貸すからさ」

「結城さん……」

「もちろん、タダでは言わないさ。実は俺たち、今朝から自分の第一砲塔が、血を欲しがる妖刀ムラマサみたいにウズウズしているのを感じてるんだよねえ……古鷹ちゃん、俺にスジ切りされないように、気をつけような……？ウツヒヒヒイ！」

「結城大尉ツツツ、ちよつと話があるのだがツツツ？」

「あ、あの、総司令官？え、あ、え、あの、その、俺の声きこえて——
アアアアアアアア!!!」

「やれやれ……」

—————

御蔵島。

「補給準備、及び緊急出撃準備の再確認完了！何れも支障はありません」

「ありがとうございます親潮。私個人としても準備は万全です」

「はい……」

私の顔はそんなに不安そうだったのだろうか、不知火が顔を覗かせてきた。

なんでもないと振り払い、私自身の艦装も整工班の人につけてもらう。

大淀次長の作戦……あれは、本当にただの深海棲艦からの奇襲だったのだろうか。本当にそうだったらどれだけ安心できるか、私は言いようのない不安と、何かとてつもなく大きなことが起ころうとしている胸騒ぎが、脳裏を掻き乱す。

悪いことが起こるとは限らない、いい事も時には起こる。でも、怖い。

「それにしても司令はん、ホンマ凄いやなく。普通これだけ大規模な作戦だったら、ここまで辿り着くのになんか少なくても倍は時間食ったで？」

「司令だけじゃありませんよ。後方支援艦隊には

あの大鯨少佐もいます。情報参謀にも結城大尉など、秀才が揃っているからこそ、成せた技でしょう」

しかし、みんなも驚いている。

迅速な行動もそうだが、なにより直接前線に行って指揮を取ってこの島にいた深海棲艦を制圧した手腕……その姿は、まさに武刃者。されど効果的だ。ある程度ラグが生じる司令室での前線指揮は、一歩間違えば大勝利と大敗北につながる。

それを嫌がってやっているのか、あるいはただ自分を大きく見せたいだけなのか……あるいは、自ら指揮を取ることでの勝利を確信できるから、そうしているのだろうか。

「まあなんにしても、このまま前線がゼーんぶ倒してくれば、うちらも楽でええんやけどお……って、うちらも一応前線やないかい！アハハハ！」

「ハア……」

「笑ってくれへんの親潮……？」

だから心配……いや、私はなにを考えてるんだろう。このまま、たった6隻で八丈島をも制圧してしまう……なんて、そんなはずはない。

それは無理にも程がある。きっと無事に偵察してきて、帰ってくるはずだ。

司令は何かと私に心配をさせる。司令のバカ。

「親潮ちゃん、ちよい動かさないで」

「あ、す、すいません!!あ、あの……」

「ん？」

「あまり上を見られると……その……」

整工班の人が私の艤装を付けにくれてるのはいいのだけれど、脚の部分をつけながら上を覗かれると……そ、その、スカートの中が見え、

「ああ大丈夫大丈夫。俺が狙ってるのは、あそこの人だから」
「え……？」

『ウツソだろお前！ホントに男かよ!?こんな腕ヘナヘナしててよお？』

『いいじゃないですか別に……』

『おにいさんねえ！君みたいな可愛いねえ！子の苦痛に悶える顔が大好きなんだよオー！』

『や、やめてください！小生やだ、ヤダ、ヤダヤダヤダヤダア!!』

抵抗する美青年の顔にパシーンと叩かれたような音がした。

『ザっけんなよオイ誰が大声出していいつつたア!?うん!?整工班の先輩おこらしちゃったねえ!?スパナ痛いのがかってんだよおいオラア!!』

『やめちくり〜!』

唐突に脱がされる作業服から露出する茶色かがった肌。鍛え抜かれた肉体は見た目細く、若い男の子が好きな男性にはうってつけの体だった。

弱肉強食に則り、屈強な体を持つ男性に蹂躪される自然界の法則は、強引すぎる交配を肯定させる……って、何やってるんですかあの人たち!?

「何やってるんですかアレ!？」

「見ればわかるでしょ？串刺しだよ串刺し、千本刺しだよ」

「千本も刺さったら死ぬで……」

「じゃああの処女ケツに、特別な稽古をつけてきますので」

そうやって彼は半裸になり始めた。

『お兄さんなんて言った?』

『キモティヨクシロツテ……』

『できましたか?できなかつたね……じゃあお前来いよお前コラア

!!!

『せ、先輩……実は俺、先輩、好きッス!』

「と、唐突過ぎる告白はホモホモ特権ですっ!綾波、応援しますっ!」
『オレモオマエガスキダ』

「きやああああああ!!!これはもうしゃぶり合いしかありませんっ!!
ああでも綾波ビデオ持ってきてませんっ!!憎い!ビデオを持って
これない大規模作戦が憎いイツ!」

「クソオ!なんで他の鎮守府から艦娘が来てんにエロい格好して
ねえんだよクソガア!!縦セタワンピニーソ着てキテキテイ!」

「どうでもいいですが、早く給料上がんないかな……」

「司令……早く帰ってきてください……色々と耐えられそうにないで
す」

・
・
・

八丈島、出撃所。

昼から夕方に差し掛かり、あたりは黄昏れていた。出撃所とは名ばかりであり、非常にお粗末だったが、最低でも機能はしていたようだ。

八丈島あたりにいたエリート艦隊と思しき大艦隊は……現在では無残な姿で海に浮いていた。しかも相当な数である。

予定通りに大和さん、褐色肌のアネゴ系妹の武蔵さん、それに深海棲艦に偽装した艦娘が複数人いた。大和さんと並んで立ってなかったら危うく砲撃して全速後退を呼びかけるところだった。

馬小屋サイズの古びた建物は司令室。

内部には通信機器などの電子機器が取り揃えてあるが、それもほんの最小限である。食料や資材などを優先的に保管してあるところを見ると、まあよくもここまで取り揃えたもんだと、密かに感心していた。

中に入っただけでじつくりとここの生活を見てみたい、とは思ったけど、それはまた後ほど。

偵察として八丈島に来た手前、あまり長い間戻ってこないと総司令官らに心配をかけるので、話している時間そのものは少ない。

俺はボートから降りずに、元帥が荷物とともに姿を表すのを、艦隊と一緒に整列して待つ。30秒もしない内に姿を表したのは、第一鎮守府でみたよりも若干細身となった、連合艦隊司令長官殿その人である。一斉に敬礼した俺の艦隊のみんなも、初めて間近で見る元海軍トップには緊張感を覚えるらしい。

「あれが元帥……」

「ほ、ほんとうだったあの話!?冗談かと思ってた……」

「なんだか普通の人だねっ」

「お前階級が上がったら角でも生えると思ってるのか?人間のままなのが普通だと思うんですけど……まあいいや」

一度停めたボートから陸に降りて敬礼する。この際足が濡れるとかは気にしないぞ……クソ冷たえ。

「元連合艦隊司令長官の永原元日本海軍元帥であるとお見受けします」

「は、はい……あ、君はあのときの……」

「元帥からの覚ええ良しとは武人の誇りに存じます。」

自分は今回の作戦である、八号作戦の前線総指揮官である穴戸龍城中佐です。大和太左からは話しを伺っているかと思いますが、つきましては、元帥には今ここでイエスカノーで答えて頂きたいと思……作戦に乗るか、乗らないかを

「その……うん……」

「……提督ツ?」

「あ、い、イエス!!イエスです!」

「では行きましょう、自分の艦船にお乗り下さい」

一瞬迷っていたような素振りを見せた元帥。

そして、彼の艦娘に威圧されて強引にイエスと言ったような気がしたが、そんなこと気にしていられるほど、今はお時間が尊い。元帥を

艦船に入れて、艦船の中から大発を取り出して、阿武隈さんに渡した。そしてみんな食料やら資材やらを入れたドラム缶を持って、元帥の艦隊が編成される。

「……暗号を解読してくれたことも含めて、ありがとう穴戸中佐。ほんとうに助かったよ」

「かの元帥からお褒めのお言葉を授かるなど、恐悦至極」

「その……やっぱりの作戦やめー」

「では行きましよう提督！」

言葉を遮られた元帥の艦隊は合計で20隻程度だろうか？元帥艦隊が八丈島から出港していった。

俺と元帥の密約、それは彼が逃げるための司令艦船と新鋭装備を渡す代わりに、目的地であるグアムに行くまでの道のりにある諸島の深海棲艦を撃滅してほしいというものだった。

グアムとは、アメリカの準州として組み込まれていた島であり、絶海の観光地であり、海軍の基地としても名を馳せた、太平洋の要所である。

しかしアメリカ軍は今でもハワイに夢中になっているので、消去法で捨てられたゴーストタウン……いや、ゴーストポート、グアムくん。億ドル単位で費やされた艦娘設備はどうなってるかわからないけど、少なくとも軍事基地としての機能は整ってあるだろう。インフラもかなり充実しているーと思う。

正直そこまで責任は持てないので、あくまで個人的な見解だが、こよりは充実しているはずだ。

当然こちらのメリットとしては、グアムまでの道のり……つまり、通ることとなる青ヶ島や小笠原諸島などを制圧しながら進むので、こちらの手柄にできるってのが大きな要素である。なにより八丈島の無血開城はとて面白い。

元帥の存在がバレずにグアムまで到達する道のりは前線艦隊の伸び方にも影響するが、前線指揮官として俺の艦隊を常に最前線に出していれば問題はない。

うん、我ながら完璧な作戦だ！自分では何もしていないけど、初め

てすごいことした気分になった。

「海軍元帥が離反しているというのも驚きましたけど……その元帥と結託してこんな作戦を思いつくなんて、宍戸さんも隅には置けませんわね?」

「くまのん惚れ直しちゃった? いやあ……かつこよすぎて知略もあるなんて俺まじ神なんだけど」

「宍戸くんみたいなのっていつか絶対後悔するんだよね」

「そうそう! 策士、策に溺れる? っていうやつだっけ?」

「溺れてから言つてください……それにしても、船を元帥に明け渡したこと、なんて言えばいいんだろう……まあいいや、とりあえずあの人を逃がすのには成功したぜ。これであるバケモノと戦わなくても済むし、八丈島は攻略したし、親潮と不知火に連絡して後方艦隊をこつちに移動させるように言つてくれる?」

「はい!」

村雨ちゃんが送った通信はすぐに御蔵島の艦隊から作戦本部へと送られる。

内容はもちろん、我レ八丈島制圧セリ。

偵察艦隊として送られた前線艦隊の6隻を指揮した司令官は、何日かかるのかと不安を過ぎらせていた大規模作戦の主目的を、電光石火の早業で制圧したとして革新派の目に大きく止まることとなるが、それはまた後のほど。

今は、後方の艦隊を呼び寄せることが先決だ。

……それにしても、よくできてるなこの八丈島。

要塞、要港としては申し分ないけど、流石に深海棲艦がこの生活環境を整えられるなんてありえないしな。人は見たところ元帥以外は住んで居なかつたようだし、ここだけでも片付けたほうが良いか。

「鈴谷たち、この八丈島爆撃してくれない?」

「え、なんで!? 宍戸っちトチ狂った!」

「きつとアレですわ。戦略的完勝を勝ち取ったので、かの有名な戦上手、ナポレオンにならつて焦土作戦を取ろうとしているとか……ひ、卑劣ですわあ!」

は？ナポレオンはどっちかといえれば戦術家だったんですけど……
あとそれ歴史的な大失敗してんじゃねえか、縁起悪いぞ。

懇切丁寧にギャルとお嬢様にその理由を説明したのだが、今度は
「この人ときどきサイコパスな所あるよね」と言われた。

サイコパス？ハッ！合理性に基づいた行為であり、なおかつ人を傷
つけないのに、なにをためらう必要がある（極悪面）！？こっちは命か
かってんだ。文句言うやつは死刑。

「お兄さんの言うとおりです！せっかく作ったのに心苦しいですけ
ど、やらないと元帥さんがいたってバレちゃいますっ！」

「そうだお？だから弾道観測射撃と一点集中砲火の準備しろお？」

「弾道観測射撃ってどうやるんだっけ？」

ハハハ、白露さんちよつと、弾道学を学ばせるためにまた兵学校に
ぶち込みますよ？

「観測準備完了！一点集中砲火始めえ！」

よし、海岸沿いに雑に作られた家屋とその司令室は最低でも破壊し
たはずだ。八丈島の奥にも家はあるけど、人はいないけど民間のもの
だし壊すのは遠慮しておこう。

「通信、親潮さんに繋がりました！こちら前線偵察艦隊の村雨です、八
丈島は制圧しました！」

『『……えっ？』』

ええええええええええ
!!!!??

なんて古典的な驚き方をするんだお前らは。

古典的すぎて様式美だぞ？

八号作戦八丈島

八丈島、臨時拠点。

「司令っ!!」

「おう親潮……うおーど、どうしたんだいきなり?」

「よかった……!ほんとうに、無事でよかった……っ!」

破壊された出撃所近くの、夜の海岸沿い。

砂浜でつけたままの艀装も気にせずに服にしがみついてきた親潮と、掴まれている俺に注目が集まる。全身が乗りかかっているわけじゃないけど、物理的圧力を感じるのは、単に艀装が重いからか。視線が痛い。

八丈島の戦いは前哨艦隊のみで終息するという快挙的な結末で終わる。その報は総司令部を驚かせたが、虚報ではなく制圧したのが事実である以上、やることは後方艦隊及び支援部隊の移動である。

今日だけで100人程度が到着した八丈島はすっかりと暗くなつて、連戦のあとにすることと言えば、食事である。

磯の香りが靡く中で感じたのはカレーと、白飯が炊けた時に発する特有の温かい匂い。だからと言って夜に濡れた服を着るのはとても体に悪いし、そんな服を俺の体に押し付けられたらクツソ寒いんですけど。

海岸近くと、もう少し奥にある野営地を司令室として、臨時出撃所の準備や通信施設の設置、島の探索部隊編成と必要な寢床の確保など、拠点として最低限の設備を急ピッチで作っていた。

俺も拠点作りを手伝おうとしたのに、秘書艦が邪魔してくる。それもそのはず、俺は自分が乗っていた船がどこに行ったかという言い訳も含めて、「船は沈んだ」と時雨が割り込んで伝えたものだから、俺が戦死したと思われていた。

「故障して」と急遽、村雨ちゃんが付け加えたが、それが作戦全員に伝わったかどうかは分からなかった。少なくとも親潮は、俺になにかあったのではないか、と思っただけ。

「分かったから親潮、離れて!……みんな見てるからさ」

「ひぐつ……もう、司令!心配させないで下さい!!村雨さんと時雨さんから通信もらったとき、本気で心配したんですからねっ!!」

「ごめんな親潮……時雨の情報伝達能力がEランクなばかりに」

「ごめんごめん、親潮なら笑い飛ばすかと思つて」

「そんなことするわけありません!!」

「まあいいじゃないですか、結果良ければすべて良しつてことですよ。それより穴戸司令官、この資材はどっちにやるんでしたっけ?」

「ボーキでも鉄でも、全ての資材はまず保管庫に置いてくれ。どの道、本州に持ち帰るものなんだから一箇所にまとめておいてくれ。ただしアブラだけは別のところにおいて。引火したら怖いから」

鴨川の整工班は精錬された手付きで各々の任務を進めていく。チームワークというのは大事であり、いくらシ訓練されシステム化されてるとはいえ、突然ほかの知らない人と仕事をすると、どう足掻いてもこの速さには追いつけない。だから補給担当は下田要港部に全面的に任せている。

「親潮、もう泣き止んだか?」

「むっ……こ、子供じゃないんですから、そんなにいっぱい泣きません!」

「ははは、ごめんごめん……つい、嬉しくなっちゃつてさ。俺のこと、そんなに心配してくれてたなんて思つたら……」

「あ……」

親潮の柔らかい頬に手を当てる。

俺の足がまだ夜のクツソ寒い水に浸っているのはこの際気にせず……月光に照らされた親潮の白い肌は、真珠のようだった。

真珠はピンクかがつた色を徐々に赤く染め上げ、俯いて恥ずかしがる様子を見せるも、不思議と嫌悪感は見せなかった。

映画のクライマックス的なこの場面では、キスをするのが定跡だが、いったん距離を置いた。理由はこんなことをしている場合じゃない事と、他の艦娘たち……具体的には、陽炎、不知火、黒潮、村雨ちゃん、白露さんがジト目で凝視していたので、この人たちがこれ以上お

これの名誉を傷つけるような言動を起こす材料を作らないためにも、ここまでしておこう。

あまり問題にはならなかったのだから、だいぶ後になって分かったことだが、俺たちを写真に撮った月魔が海軍の掲示板に載せていて、谷風が『韓流ドラマの撮影』と命名したことから密かな話題となっていた。

あまりに綺麗に取れたため、ガチで映画のワンシーンのような風景になり、『作戦中の光景やで』『いや、作戦中にこんなことするわけないやろ』『日本海軍の制服じゃん』『男の方がいいケツしすぎィ！』などと反響を呼んだ。濡れてるから服がケツにびつちりくつついてんだよなあ？頼むから俺じゃなくて、透けて黒下着がチラチラ見え隠れしてる親潮の方を見てくれ。

「提督、島の探索作業が終わったようですよ！軽い探索では完全な詳細をお伝えすることはできませんが、少なくとも野営地を設置するには問題ないかと思われまます！」

「ありがとう浜風。つか気合入ってんな？」

「い、いつもはだらけているみたいと言わないで下さい！それに……」「ん、どうした？」

言いにくそうな顔をしながら、いやらしい身体をモジモジさせながら、腕を強張らせ、胸を寄せている。

「まさか、改めて俺の提督としての能力を見直しちゃったとか？」

「い、いや、そんなこと……くっくっ！」

凶星だったのか、顔が一気に火照り上がった浜風。悔しいし、認めたくないけど、改めて有能チ○ポ提督を目の前にして、子宮が疼いているつてところか。

長年の経験で培った知識から言い換えさせてもらえば……こいつは、俺の子種を欲しがっている。

「ありがとう浜風。引き続きの探索は明日に持ち越してもいいが、一応あるだけの詳細は報告はしてもらおう。準備ができ次第、俺の臨時司令室に來い」

「ま、ま、まさか！わ、私が提督のことを見直したからって……司令室で、く、口では言えないことを……っ！」

「……気づかれたか。では今から来い。野営地で補給する前に、俺のシーフード風ソーセージで、貴様を補給してやろう」

「い、いやあああああ!!」

浜風は、陽炎や不知火のいる場所に逃げていった。後ろに隠れる姿は庇護欲をそそのめるのか、艦娘たちと士官らは汚物を見るような目で俺を見ていた。

『大丈夫だった浜風!?何もされてない!?妊法とかされてないツ!!?』

『きつとアレです。任務に落ち度があったと口実を付けて、ナマイキなこの脂肪の塊をゴメンナサイさせてやるとでも言われたのでしょうか。卑劣です』

『ヒドイ目にあつたなー浜風?スマックされんように、うちの後ろに隠れとき?』

『あ、ありがとうございます!』

「俺、自分では一言もタイトル言っていないのに、まるで俺の語録みたいになつてるんだけど」

「あんなマニアックなモノが流出したら……ていうか穴戸くんって、絶対に自分の名誉を自分で落としかかっているよね?春雨が名誉をズタズタにしたとか村雨が悪い噂流してたとか言ってるくせに」

「俺マジで今日のメニューの中に魚肉ソーセージがあつたから、司令室で振る舞おうとしただけなんだけど……」

あ、なるほど。確かにイカ臭いソーセージなんて誰も食いたくないもん。俺の名声、終わったかも。

よく考えたら、メインの八丈島を神速制圧した前線指揮官への羨望の眼差しはどうした?これだけやって俺を見直すヤツとまだ軽蔑してるヤツが半々とか泣けてくるわ。何やったら名誉挽回できるの?世界征服?

「いっちばんのりー!夜の哨戒と警備艦隊の編成終わったよー!」

「ありがとうございます白露さん。前線艦隊の出撃準備も……」

「もつちろんだよ!でもいいの?総司令官さんに報告しないまま出撃準備なんてして」

「別に今日独断で出撃するわけじゃないんですし、準備だけならいいんですよ。それに迅速な行動の秘訣には、上官の命令を先取りすることにあります。行けと命令されたときにはすでに交戦開始しているぐらいが丁度いいんです。どうせ行くんですし」

「なるほどー……フフフー！なんかこういうのって、先生に見つかったやイケないことしてるみたいでワクワクしない!？」

「え？あ、うん、生徒指導中の指導室でエッチな動画の音声流したり、兵学校では先生たちの萌えキャラを書いて掲示板に張ったり、12センチ単装砲と35センチ砲の砲弾を卑猥な形にして演習場に置いたり……」

「それ、時雨がやってたことと私がやったこと混ぜてるね？まるで全部お姉ちゃんがやったみたいに言うの、良くないと思うなっ！」

「え……う？ぼ、ほく、そんなことしらない……っ」

「はっ？A H H A H H A いい加減にしないとお姉ちゃん時雨に砲弾当てちゃうかもねえッ!？」

「ごめんごめんごめんごめん!!！」

どっちが時雨でどっちが白露さんの悪行なのかはぜひ知りたいところだけど、軽口を叩いている暇があるんだったらさっさと補給してこい。なんて言ったら砲弾はごっちに飛んでくるだろう。

「あ、し、司令！どちらに行かれるのですか!？」

「仮眠してくる。先に食べてて」

「り、了解しました!!」

野営地の中のテント。

ここには、当然ながら野営用のベッドが備えられている。空気式のベッドだからギシギシ言うし、ベッドの上で女の子と遊べば、たちまち島中にその音が響き渡るだろう。

大袈裟かもしれないけど、黙ってても音は大きく、50キロ先のテントで既にギシギシ音が聞こえるので、ナニをしているのか分からないけど、とにかく静かにしてほしいもんだ。あるいは俺の耳が良すぎるのか。

元帥との密約に成功した今、どちらにしる成功する手筈となつてしまつた。あとは通常どおりの攻略法としてアイランドホッピングをマラソンのように繰り返して行けば、一週間で終わるだろう。できることといえれば大事な休息をとつて、何事もないようにみんなの無事を祈るのみだ。

潜り込んだベッド内の寝心地は、弾力が強すぎるソファアの上にいるみたいな感じで、寝づらくはないけど、音の件も含めて、女の子を誘うにはあまり適してはない。

目を瞑ろうとした途端、後ろから可愛い声が聞こえた。

「……お兄さんっ」

「春雨……ちゃん？」

甘い春雨ちゃんボイスが、後ろを振り向く前に毛布内に入つてきた。俺の背中に感じた温もりが、同じ毛布の中でモゾモゾと動いていた。

女性が、毛布の中に入ってくる。これは、日本の素晴らしい伝統文化の一つ、Y O B A I。これを実行するには勇気が必要で、みんなに聴こえちゃうかも！という極限状態の中、それでも俺に食べられたい、あるいは食べたいと思う気持ちを、これでもかどぶつけてきているのを感じる。

俺は振り向かず、日本人らしく最初は断りを入れ、淡々と司令官らしく振る舞う。

「……だめだぞ。俺は司令官で、君は部下。淫らな関係には……」

「……食べてくださいっ」

「春雨ちゃん……」

これでもかと、切実な想いを乗せた声が、耳元で囁かれた。ここで食べないのは、男としての恥。

「……食べちゃうよ？」

「……っ！」

一度の了承が、これほどまで人を喜ばせるものなのか。何も言わずに俺の脇下へと手を伸ばし、抱きついてきた。

強く抱きしめてきた腕は、その力強さを象徴するかのようゴツゴ

ツとして、太く、遅しく、男臭さ溢れるものだった。

屈強な肋骨を背中に押しつけられながらホールドされた腹、そして首には……。

「ちよつと待って、え、なんか違うんだけど？」

後ろを振り向いた瞬間、俺の脳内は半ば脳死状態に陥った。

「「オツスお願いしまーす」」

。

八号作戦その後

横須賀第四鎮守府、作戦本部（司令室）。

俺と麾下の前線艦隊六隻が、総司令官の前に整列し、敬礼している。心配していたが、どこかホツとした微笑を浮かべる古鷹。珍しく直立不動でいる結城。緊迫した空気にオドオドしている大鯨さん。髪を弄りながら、クールに佇む那智さん。

八号作戦の主役でありトップが、この司令室と化した執務室に集結している。

八号作戦はもちろん成功した。

八丈島攻略後、そこで一日だけ野営し、翌日に速攻で青ヶ島と小笠原の攻略を実行に移し、八号作戦開始から最後の島制圧までにかかった時間は、僅か5日。

一ヶ月以上の猶予を与えられたにも関わらず、事後処理が残っているが、それも2日で終わる予定なので、一週間という短期間での攻略。それに加えて、前線艦隊は常にこの6隻であり、残骸として浮いていた深海棲艦の一部を撃破数としてカウントした上、コチラの損害なし。

傍から見ればこの艦隊はまさに無双。

もちろん本当は、元帥艦隊からボコボコにやられた大量の深海棲艦の死骸とその残党刈りをしていただけであり、彼らが通った海を素通りしていただけである。大鯨さんの後方支援の手腕が良かったとは言え、いくらなんでも早すぎたか……元帥は今頃、グアムなのかな？無事に着いて、陸上型深海なんちゃら倒して、元気でやっていると良いんだけど。

作戦本部兼総司令部となっている第四鎮守府に戻ってきたのは、5日目の夜のことだ。

八丈島で野営していた時、春雨ちゃんが布団の中には入ってきたと思ったら、俺のおしりを執拗に狙うゲイ三人衆の声真似だったことを思い出し、この作戦は一生忘れないものとなるだろうと俺は確信し

た。

「前線艦隊帰還しました。これが戦闘詳報です。前線の事後処理はもうしばらくかかるかと思えますので、終わり次第那智参謀へと提出します」

「う、うむ……」

神妙な顔で俺たちを凝視する少将。

時雨たちには口裏を合わせるように言ったが、緊張している様子は見せなかった。

総司令官になんていうか、というよりも、作戦が無事に完了したことの安心感が、彼女たちを多少、落ち着かせるのだろう。

「……宍戸中佐、八丈島の攻略に際し、なぜ後方艦隊と連合を編成せずに攻略しに行ったのか、具体的な説明を求めろ」

万が一、元帥艦隊の進行が遅かったら他の奴らにバれるからに決まってるんだろ、なんて当然言えない。

功を焦る男みたいなレツテルを貼られたらたまらないから、どう答えようかと一日中悩んだ質問だ。

「慎重な哨戒と偵察を重点的に行おうと、6隻艦隊編成で行った結果、一隻二隻と、大した数ではなかったので撃破して行った結果、思わぬ事に殲滅していた……というのが全貌です」

前線で同時に指揮した艦娘の総数は最大で24隻。その理由は深海棲艦が12隻ぐらいまだ青ヶ島にいたためだが、なんとか軽巡を小破させただけで済んだ。

できればあのまま鈴谷に前線の指揮を任せて、後ろでのんびりしていたかったんだけど、俺が指揮しないと損害増えそうで怖いんだよなあ……まあ何十隻も運用するなんて、戦わず指揮に集中する人にやらせるのが一番効率的かつ効果的なんだけど、なんか複雑だ。

「ふむ……新しい軍服を頼んできたのはまだいいが、君が乗っていた船が破壊された件は……」

船は元帥に、服はゲイ三人衆に。

「申し訳ありません、事故で沈めてしまいました。司令艦船はまだまだ実験段階だったようです。当分は、現在自分が使っている輸送艦船

に頼るのが得策かと思えます」

「ん〜ツ……」

いや、こんな説明じゃだめだったか。流石に事故って沈んだとかマジやばい状況だけど、壊れたのが八丈島周辺の艦隊を撃破した後です！と付け加えたので、辻褄は合わせることは一応できる。

でもこの人まだ怪しんでるよ……一世一代の大勝負、大博打にこんなピンチに遭遇するとは……やばい、これ以上、弁解はできねえわ。誰か助けて！

「まあ、結果オーライというヤツじゃないですか？八丈島にはそれほど強い敵がいたのだろうが、穴戸中佐は運よくそれを偵察艦隊だけで倒せた……と解釈してはどうだろうか？」

な、那智お姉ちゃん……！

「私もそう思いますっ！穴戸さんは、秋津洲ちゃんもチエスで倒しちゃうぐらい強いんですからっ！そ、それに、御蔵島だってあんなに早く取りましたし……」

大鯨さん……！

「まああれツスよ！女の子落としたら、また次の女の子が寄ってきて、それも落とす。それ繰り返したらちよつとディープすぎる二桁股しちやうみたいな？そんな感じですかねえ！」

なんかわかるような分からないような例えしてんじやねえぞでめえ。

「一応周辺海域に深海棲艦がないかなど、哨戒は怠っていません……が、この様子だと、我々で撃破した深海棲艦が全てだと思います」

「パパ……」

「……私は別に怒っているわけではないんだ。ただ穴戸が心配だったんだ……」

強靱な肉体が席を立ち、近づいてきた上腕二頭筋へと繋がるゴツゴツとした手が頬に当たる。綾波ちゃんがいたら完全に発狂ものであり、艦娘はみんな、その無自覚にもいやらしい動作に対して赤面する。「たしかに君は実力がある。だが、無茶はしないでくれ……所属が違っても、君は私の部下なのだから」

「そ、蘇我提督……！」

熱を帯びた視線が、互いの瞳を見つめ合う。

横にいる時雨は「は？」みたいな顔をしてるし、白露さんも興味津々のご様子。

那智さんですら赤面を余儀なくする男同士♂のカンケイは、女性陣にとつて、理解に苦しむものとなるだろう。いや、だからこそ興味が湧くのだが。

「ぱあ〜ぱあ〜っ!!!」

「ふ、古鷹！どうしたんだいきなり!?!」

痺れを切らした古鷹の牽制により、俺と蘇我少将の仲は、まるでロミオとジュリエットみたいになり。っておい、なに言ってるんだ俺？ロミオとロミオだろこれじゃ？同じモンテギュー家なんだから、引き裂かれる理由なんて何も……いや、モンテギューとキャピュレットを派閥に置き換えれば、その内部でも過激派と穏健派がいるからな。

ところでモンテギューとキャピュレットなら、どっちが保守派なんだろう？

やっぱりスラっとしている美系の男性ってことで斎藤中将の革新派と、フリフリ円形カボチャドレスが荒木大将の腹みたいだから、キャピュレットが保守派かな？

それ言ったら絶対に軍法会議だろうな。

「ゴホンッ……まあ分かってくれたならいい。一ヶ月を予定していた作戦を、まさか一週間にまで縮めてくれた。その上、犠牲者どころか損害もないとは……この点には、非常に感謝しなければいけない。まづは、よく帰ってきてくれた」

「「ハッ！」」

「書類仕事はまだ沢山残ってはいるが、穴戸中佐が言うように2日もかければ終わるだろう。明日からでも初めてもらって良いが、それまでの猶予を有意義に過ごすのも、悪くはないと思う……得に今回、一番の功労者である君たちには、それを得る資格があると思う」

軽いウインクをする蘇我提督の意は会社でいう「先にあがっていいぞ」って意味だ。流石は俺の元上司である、そして理想の上司でもあ

る。

昔比叡のカレーを食べて病院送りにされた経験を持ち、人間的な道徳をわきまえ、部下への配慮も怠らず、柔軟な思考の持ち主。その上、粋な計らいができる、まさに上司の鑑やで。

この人になら掘られてもいいわよ。

「よし、では鴨川前線艦隊！ここからは自由に行動してもよし！作戦命令は追って連絡を伝えよう！」

「ハッ！……っしやお前ら今から焼き肉ダアアアアア！！」

「わあーい！！」

勢いよく出ていった鴨川艦隊を見て「相変わらず元気な艦隊だな」と古鷹は思った。空になっていた湯呑におかわりを注ごうとしたが、彼女の父はすでに胸がいっぱいだったので、注ぐのをやめる。

「いいなアー羨まし過ぎるツスよ！提督！俺ツチも作戦終わったので、休暇オナシヤスッ！」

「だめだぞ結城、貴様は何もしていないじゃないか」

「しましたって！ほら、心配そうな古鷹ちゃんの心を癒やしてあげる……とか？ドヤア……！」

「思い出したぞ結城大尉ツツツ、それについてもうちよつと話をしようじゃないかツツツ」

「あ、お、オレっち、情報参謀として、ちよつと情報精算しないといけないので、これで失礼しやッス！」

駆け足で退出する結城を見て、直属の上官である那智は呆れ顔を見せた。古鷹はそれほど嫌悪感を抱いていたわけではないが、そこから特別な感情が芽生えることもなかった。もちろん父親の手前、それを言うことすら許されなかったが、すでに意中の男性が別にいる事に、彼女の父親は気づくはずもなかった。

「で、ではわたしも、書類の作成をしてきますねっ！」

「あ、大鯨さん！わたしも手伝います！」

「ありがとうございます、古鷹さんっ！」

後方支援担当の大鯨少佐の任務はまだ終わってはいなかった。伊豆諸島に駐屯する艦隊の補給をするに連れて、足りなくなる物資の要請を行わなくてはならず、最終的には蘇我提督の承諾と共に大本営へと送られるプロセスがある以上、総司令官が就寝する前にそれらを渡しておきたいと思っただからである。

もちろん物資は、実質的に作戦の終了が叶っているのだから、これ以上の物資は供給過多であると推測されるが、大鯨の「念のため」というポリシーが彼女を動かしていた。

作戦は事後処理が終わり、一般的には公表されてから初めて作戦終了であると認識されることが多い。故に「おうちにかえるまでが遠足」と言われるように、大鯨や総司令官は最後まで気を引き締める。

「……那智作戦参謀、流石に早すぎるのではないか？ 彼が攻略したのは別の島々だったり」

「既に確認はとっておりますので、島を間違えた……などは、まずないかと思えます」

「そうか……クツ、あつさり過ぎるだろう!? どんな手品を使ったんだ……」

握りしめた蘇我総司令官の気持ちは複雑であった。

彼は別に部下の功績に嫉妬する一増して、功績の横取りや、出世の妨げをするような人物ではない。むしろ部下の昇華に喜びの笑みを浮かべるような人格の持ち主であり、今回の作戦は被害をこれ以上ないほど最小限にとどめている点、作戦の出来栄そのものは褒めてしかるべきである。

自分の功績などではなく、部下に命令しただけであり、それでもこの大規模作戦の出来はこれ以上ない成功である。近々行われる海軍将官会議にて、自分が作戦の成功により勲章や昇進を受ける事があれば、断るべきなのか、あるいは心苦しくも上司としては喜んで受けるべきなのか、早くも迷っている状況である。

那智も同じく穴戸の功績について考えていた。

しかし蘇我総司令官とは違い、彼女が黙考していたのは、過大すぎる功績についての危険性である。

柱島防衛戦、関東防衛戦、大洗演習、そして今回の八号作戦。少なくとも名前の通る戦いでは無敗であり、今までならばともかく、今回のような作戦であれば、穴戸の名前が全国に上がる可能性は大いにある。

英名は榮譽を極めるが、トラブルに見舞われる種ともなり、それ以上利用されやすい立場となるのは必定。

もつとも那智は、自分がどうにかして良くなることもなければ、口出しするにはおこがましい問題であるとも思っていた。

同じ司令官として、まずは武運長久と、彼を取り巻く環境が平和であり続けることを祈る。

「イージス艦を轟沈させられ、奇襲を受けたとはいえ大きな損害を代償として払った横須賀鎮守府が、要港部の、しかも一艦隊に功績において負けるなど……」

「それでいいのではないでしょうか？穴戸中佐の実力でそれを勝ち取った以上、実力相応の功績だと思えますが」

何れにしても二人は、世間からみる要港部への認識の変動を、僅かながら予感していた。

「まあ考えても仕方がないか……我々は軍人、今できることをするしかない。ハア、執務のせいで肩が凝るな……ああ、この書類は結城大尉が集めた撃破情報と艦種などを照らし合わせなきゃいけないのか。それにしても、結城はいつもあんな感じなのか？危うく娘を誑かす者として私直々に刑罰を与えるところだったぞ？」

「申し訳ありません、私の教育が行き届いていないばかりに……」

「いや、那智中佐のせいではない。まあ、あの程度で誑かされる娘ではないがな。なにせ、私の！娘なのだから、ハハハ！好きになる相手は、やはり誠実な日本男児でなければならぬと、私は思う！うむ！」

「なるほど……でしたら、心配はないですね。古鷹秘書艦も、男性の見る目はあるようで……」

「……ん？那智中佐、どういうことかねッ？」

蘇我少将の目の色が変わる。

それにあまり注意していなかったのか、那智は抱いていた持論を

言ってしまった。

「古鷹秘書艦は、宍戸中佐に好意を抱いているのではないかと思いましたが……あ、そ、蘇我総司令官？」

「……その話、詳しく聞かせてもらおうかつつ」

顔が死ぬほど怖かったので、那智は「他の男性に話す時の目と、彼と話すときの目が少し違ったと思った」と付け加えた。目ざとい……言い換えれば、鋭い那智の推測は正しいのだが、それを頑なに信じようとしないう総司令官。

「な、何を言っているんだ那智作戦参謀!? ふ、古鷹はまだそういうのは早い！ 宍戸は確かに良いやつだし、有能だし、誠実……かは分からんが、結城よりはいいとは思っている！ だ、だがな!？」

「……………」

この慌てぶりを見て那智は確信した。この人は例え誰であろうと娘が嫁に行くのを許さないタイプの父親だと。

古鷹は娘としても一人の女性としても魅力的だが、この父がおまけとしてついてくるのは、将来のパートナーに何かとストレスを与えるであろうと、那智は思った。

・
・
・
横須賀、鎮守府周辺の寿司屋。

この寿司屋は豪華である。寿司屋、というよりは半ば料亭のような感じで、個室が設けられている。畳には座布団が人数分用意されていて、広さが感じられる和風な空間はまさに料亭である。ただしメニューがほぼ寿司系統なので、レビューに料亭と書かれてあってもオレはここを寿司屋と呼ぶことにした。

「なあ、俺たしか焼き肉って言ったよね？ なんで都内で一番高そうな寿司屋に来てんの？ 演習で約束した極上カルビ、漠然しく守ろうとしたんだお？」

「嘘つきイ!! 穴戸くんあの安物チェーン店に行こうとしてたじゃん!!」

「あ? え? なに言ってるんですか時雨さん? 肉ならなんでも極上でしよう?」

「僕の舌を舐めてもらっちゃ困るよ? 舌だけに」

「うまいと思ってるのか? クソオ! お前らア! 頼むからお会計は合計15万円以内に収めてくれエ!!」

「結構お金持つてるじゃん……」

俺の作戦を文句を言わずに決行して、元帥とのかを墓まで持っていつてくれるお礼なんだから、これぐらいは勘弁しておいてやる。と、さり気なく自分の財布の中をチェックする。

15万、丁度! ……念の為に持ってきておいて良かったけど、俺を含めずに、6人が2・5万円分食ったとして、丁度15万になる。チップはないから計算しなくてもいいけど、問題は白露さんと時雨だ。

鈴谷には寿司類の少食は美容に良いと言って、熊野には少食はレディーの嗜み! と言えば一万円以内に収められるだろう。

村雨ちゃんや春雨ちゃんが大食漢なわけがない。そんなこと、ありえない。

だから俺と一緒にくつちやべりながらチョコビチョコビ食べばいいとして……クツ! この白露姉妹のトップ2にはどう言ったら暴食を回避できるんだ……?

白露にまたケツがデカイとか言ったら、今度はこのクツソ高そうなテーブルの上でレスリング技されそうだし、無意味な破壊によって生じる損害賠償なんて払いたくもないし。

時雨は……だめだ、なに言ってもだめな気がする。

「し、穴戸さん! 村雨も半分払いますからっ!」

「春雨もお金もってきましたあ!」

「だめだア! 普段は奢らない……でも、今回ばかりは奢らなきゃいけない! ……一度決めたらやり通す、それがこの俺様ダア!!」

「か、カツコいいですっ!」

クソオ！村雨ちゃんと春雨ちゃんに気を使わせちまつたじやねえか……漢、失格。そもそも日本がカード払い主流じゃないのがイケないんだ。デビットカード持つてきてんのにさ、使えるか分からないから、使えなかつたら詰みである。

「ぼくたちのしれいかんカツコいい！だからぼくもいっぱい大トロたべていいんだよねっ？」

「あそこの外に生えてる草は大トロだおっ？食べておいでえっ？」

「そんなのに引つかからないおっ？おばかさんなのかなあっ？」

「じゃあこの俺様の逞しい腕が大トロだ、食え」

「がぶっ！」

「ギャアアアアアアア!!」

クソオ!!時雨のヤツ、ガチでかじりついて来やがったア!!ああ、俺の逞しい司令官アームが……肉削ぎ落とされてないかな？無くなつたかと思うぐらい痛かつたんだけど。

「お、お客様！だ、大丈夫ですか!？」

「ハハハ、心配いりませんよ。ただ飼い犬に噛まれただけなんで」

「グルルルル……!」

「は、はあ……?」

眉毛をへの字にして去っていく従業員さんから「ちよつとやばい客きた」と聞こえたので、提督服を脱いでおいて良かった。海軍軍人だつてバレたらネームバリューがダダ下がりだもんな。

「ハハハ！穴戸っちすごい声！」

「ハア……殿方たるもの、噛まれたとしても、食事をするレディーの前では堂々としてほしいものですわ？」

「これ甘噛みやと思つたら大間違いやでエ!?明らかに内出血してそうな紅さやで!?!鮮血やで鮮血ウ!?!」

「ほ、本当ですっ！お兄さん大丈夫ですかあ!?!」

「え、春雨ちゃん?もちろん大丈夫さ……クツツツツツ痛いとはいえ、白露さんとか時雨のボディープレスよりダメージないから」

「ひどい!こんな弱い女の子に対してっ!」

はっ。

「で、でも赤くなってます……早く消毒しないと、狂犬病が伝染っちゃいますっ！」

「え」

時雨も俺も口を合わせた。

自分の妹からどう思われているか、これでわかったか時雨エ！恨めしそうに、言い返す言葉を見失った時雨は、ただひたすら俺を睨み続けた。

やめてよ、まるで俺が悪いみたいじゃん。

「お兄さんの腕……！ハア……ハア……！な、舐めてもいいですかあ！？」

「だ、だめだよ……春雨ちゃんに感染したら……」

「し、姉妹なんだから大丈夫です！それに早く取り除かないと、お兄さんが姉さんみたいな暴力でしか言うことを聞かせられない世紀末鬼畜ド○キーコングさんみたいになっちゃいますっ！」

「っ——」

時雨そのスフィンクスみたいな顔やめろ。

「じゃ、じゃあ……あむっ」

「「あッ!!」」

うっとりさせた瞳で、春雨ちゃんが小さな舌をチコつと出して、噛まれた腕に舌を付けた。まるで子供のように夢中で舌を出し、唾液を分泌させながら、出てきた唾液を舐めとる。

そのあまりの夢中さに、やめさせるタイミングを失う。

「んっ……あむう……ちゆる……っ」

甘く艶のある声と、幼げな顔からは想像もつかない、潤んだ瞳が上目遣いで自分を映す。

え、今の春雨ちゃんはどうなのかって？

一言でいうと……エツツツツツツロカワ。

それをじっと見つめることしかできない俺、そして野次馬。見てんじやねえ見せもんじゃねえぞ。村雨ちゃんが間髪いれて止めようとした、その時だった。

「失礼、こちらに穴戸中佐がいると聞いたのですが……」

「「あ……………」」

「…………コホンツ、本当に失礼しました」
ボタン！

「今の誰？」

「……………」

大淀次長!?

酌

「あの、俺たち少しプライベートな食事を楽しんでいただけなんで、帰ってもいいですか？」

「だめです」

「コホンッ、小官らはー」

「だめです」

最後まで言わせろ。

ちよつと俺に用事がある、という要件で俺はみんなの席から剥がされてしまった。このプライベートまで干渉してくる日本社会の伝統ダイツキライ。

大淀次長が居座る部屋は俺たちとあまり変わらないが、どこことなく雰囲気VIP用っぽい。掛け軸や置物などの装飾品が、豪華さを演出しているのだろうか。

「いいではないですか、あの方々の分も、私が奢りますよ？」

「は、はあ……」

時雨たちの分の食事代も奢ってくれると言っていたので、その点はすごく助けるんだけど、こういう人がこういうことする時って、なんか裏がある。そもそもなんでここに來てるのかすら怪しいんだし……俺はなるべく慎重に、スミノフを彼女のおちよこに注いだ。

「私のお酌などせずに、あなたも飲んでいいんですよ？」

「お酒は嗜みませんので」

「フッフ、意外ですね。八号作戦を勇猛な前線指揮で成功に導いた立役者が、まさか下戸だったとは」

「な、なぜ八号作戦の結果のことをオ!？」

「いや、私は軍令部次長なのでから、知っているのは当然でしょう……」

あ、そういえばそうだった。

知らなくてもいいような情報とか、WIFIじゃなくてLIFIでも使ってたのかってぐらい超高速な伝達速度で知るから、信用ならねえんだよなあ。

「よくぞ例の艦隊を倒してくれました、まさかこれほどアツサリと成功するとは思っていませんでしたが……と言いたかったのですが、作戦結果の詳細を聞く限りだと、倒したというよりは逃した、に近いかも知れませんね」

「ッ!?!」

や、ヤバイ……殺されるッ……!?!

「いや別に殺しはしませんが……ですから涙を吹いてください気持ちが悪いです」

「ハッ、失礼しました」

そりやそうだよな。あの最強の艦隊を一瞬で蹴散らすなんて、要港部……その前線艦隊6隻だけじゃ到底無理だもんな。いや、束になっただけで無理だったさ、だから交渉したんだよ。

これが最善の策だった。誰も傷つかないし、作戦結果だけ見たら俺マジ被害を出さなかった英雄なんですけど？

「たしかにそうかもしれないですね。その点は、流石は穴戸中佐というべきでしょうか」

「次長からのお褒めに預かるとは身に余る光栄に存じます」

だったらなんで俺ここにいますかね。

作戦成功の祝とお礼とか？絶対そんなことないでしょ。

「心外ですね……私だって、部下を敬う気持ちぐらいはありますよ？」

「あの、さつきから人の心を読むのやめてもらってもいいですか？そんなオカルトありえないんで」

「人の心なんて読めるわけじゃないでしょう……表情に出過ぎですよ」

おれの今後の方針はP o k e r F a c eに決定した。

「ただ、元帥がどこに行ったかまでは分かりませんが、それをお伝えしてくれればと思います」

「我が国では短い間ですが、大宮の島と呼んでいた場所です」

「大宮の島……大宮島……なるほど、でもそこには陸上型が……いや、だから大発を……そして移動には司令艦船……」

一人で自問自答を続ける大淀次長は、少ない情報の中で理論的に、どう辻褃を合わせているかを計算している様子だった。

言葉そのものは少ないが、その端からは、ほぼ作戦の全貌を知り得たような言動がいくつもあった。

流石は海軍の頭脳……敵に回すのは、ダメ。

「付け加えさせてもらいますが、彼らは彼らの主の安全さえ確保できれば、この国に……ひいては、次長に執着することはないと伺っています……言い換えますと、わざわざ東の大海原を何千キロも横断ながらあそこまで攻略の手を伸ばさない限り、害となるか否かとしては、まったく問題ないでしょう」

「それは本当ですか？」

「はい」

瑞穂さんがなんとなくそう言ったのを使わせてもらおう。万が一これが元帥本人の意思であろうとなかろうと、俺には関係ない。

ついでに言えば、俺は次長と元帥の仲介役を担ったんだ。どれだけ壮絶な戦いが両陣で行われていたかはわからないけど、その修復不可能な関係が大淀次長の事実上の勝利という形で終わらせたんだ。ありがたいと思え。

「理論上、国力を持つ日本の海軍ですら太平洋の奥深くまで進出するのは困難な状況です。その国力を相手にする、まして我々以上の遠路を強要されるともあっては、あちらからの攻撃を仕掛けてくることはもちろん、感情が許しても、現実が許さないでしょう」

「それに、無事にあそこまで着いたとも限らない……そう言いたいのですね」

「え、あ、はい。しかし少なくとも、小笠原諸島周辺海域には、その影は見当たりませんでした」

「そうですか……」

あの絶対に生き残ってみせる的な雰囲気だったら、まず死んではないと思うけど。

あとこういう理論尽くしの人と理論的な会話するのヤダ。なんか論破されそうだもん。

論破されることは俺のプライドは許せるけど、かのアーネスト・キング提督が言ったように、日本人は他人の不利に容赦しない。

ちよつと間違つてただけで徹底的に叩いて存在を否定したり、微妙なラインでも屁理屈で強引に自分の理論が正しい事にして、叩き落としたり。言い返せないの？のあとは決まって、言うな、書くな、この世から消えろ、と言われるのが定跡みたいになつている。

プライドが無駄に高いのか、低能だと自覚しているのか、少しでも自分の方が偉いと思いたいのか、優位に立ちたがる姿勢が、そのクソみたいなハイエナ共の世界を生きづらくしているのはまだ分からないのか？

「私は理論的に考えるのを嫌つてはいませんが……それほど理屈っぽいでしょうか？」

「い、いいえ！大淀次長のような方ならば必然、理論で考えることを強要されます。むしろ、理論的な考えを持たざるものが軍令部次長の座に就くなど、天地がひっくり返ろうともあつてはならないこと……つて、やっぱり俺の頭の中を読んでませんか？」

「フッフ、さあ？どうでしょうか」

後で春雨ちゃんに聞いた話だが、俺の声つて時々漏れてたりするらしい。お口にチャツクだ。でも、そろそろ大淀次長に氣遣うのもダルくなつてきた。

「大淀次長、不躰ながらご質問させて頂いてもよろしいでしょうか？」

「もちろんいいですよ……ゴクッ」

「次長は単に作戦の詳細を聞くために、わざわざここまで脚をお運びになつたのですか？」

「そんなわけないでしょう。人と会う約束をしているだけです」

「なるほど……自分の予想であれば中将か、あるいは大将か」

「あなたには関係ありません」

きつぱり言うひとだこの人オ……まあ、ここまで来るのが仕事内容の内に入っているわけないし、プライベートな会談つてところか。

でもねえ？関係ないなんて言われたらあ、気になっちゃうのつ。誰だか気になる……それまでに出て行けつて言われるとは思うんだけど、大淀次長は俺の度数ゼロ酌を受け続け、特別焦っている様子もない。

推測するに、会う約束をした時間にはまだ早いんだろうか。10分前ぐらいに来たみたな感じ？

そう予想していたんだけど、またしても俺の予測は外れる。しかし大淀次長にとっても予想外だったらしく、突然あけられた襖の方を見て、次長も俺も大きく目を見開いていた。

「大淀っ！元氣だった？」

「あ、明石!?よ、予定より一時間早いんだけど……!？」

「いやあくそれがすぐに終わっちゃって！だから大淀を驚かせようと早く来たんだけど、大淀の方が早かったかく……も、もしかして、早く来すぎちゃったの、迷惑だった……？」

「は？むしろ息が合いすぎて私たち最高のセック……じゃなくて、最高なんですけど。やっぱり私たちって、一番の友達だよねっ！」

「うん！」

襖を開けたのは、まだ作業服に身を包んではいるが、少将の肩章……つばいものをストラップみたいに胸辺りにぶら下げてる、明石と呼ばれた桃色の長髪の麗しい美人だった。軍令部で次長の部屋にあった写真立ての中に写っていた人と同じであり、彼女があつた海軍省軍務局局长……明石少将。

テレビでみたことがあるぐらいすごい人だけど、クセの強い人だとも聞いたことがある。

「それで、こっちの人は？」

「あ、こ、こっちは私の部下で、宍戸中佐っていうの」

「宍戸……もしかして、あの宍戸中佐ですか!？」

「え」

いきなり手を握られた。

美女に急接近されるのは別に悪くはないけど、このキラキラした目の前では不思議と下心は芽生えない。

しかし大淀次長は「なんでテメエみてえな三下の名前を明石が覚えてんだよオ……」と、俺の耳が正しければそう聞こえた。その眼力は、ただの恐怖ではない。怖い、怖いし帰りたしいし、なんでこの人俺のこと知ってるのお？

「噂は聞いています！それで、あの司令艦船の出来栄はどうでしたか!?!」

あ、そういうことね。

「あ、あの船ですか……まさに輸送艦船の上位互換と言えるでしょう。沈めてしまいました。あの船ならば前線指揮を取るのにー」

「なにやっとなるんじゃオラア!?!明石さんがアセつかく作ったアモンなにシズメトンじゃい!?!アア!?!」

大淀次長の眼力は怖い、から殺気の波動へ昇格。

言動はインテリヤクザからヒロシマヤクザへ昇格。

ぼく、おしっこもらしてもいいですかあ……?

「ま、まあまあ大淀おちついて！沈んだっていうことは、まだまだ不完全だったってことで、むしろ良いデータが取れたってことなんだから！まだまだ艦装とか装備とか、いろいろ改良しなきゃなく。ありがとうございますね、宍戸中佐っ」

「は、ハッー」

「あかしたんがいいんだったらなんでもいいんだおー！」

あの大淀次長の顔がメスの顔に……ああ、やっぱりこのひとも、人の子だったんだんだな。

弱点なんてない。そんなオカルトありえない。誰だっって弱点はある。

それを知り得ただけでも、俺としては儲けものだ。

こんなことをする義理はないけど、俺もさっさと退出したいし、気を使って二人の時間を作ろう。

「では部下を待たせているので、小官はこれにて失礼します」

「はい、ご苦労さまです」

「また会いましょうね！宍戸中佐ー」

俺がここで大淀次長と会ったのは運が良かったのかも知れない。

自分の席に戻った時、お皿のタワーが積まれてあった。残骸を見るに、エビなどを食っていた。それだけで数万超えだろう……ただでさえ海鮮物は深海棲艦のせいで値が不安定なのに、あんなに平らげやがって。

大淀次長の懐にどう影響するかわからないが、彼女が奢ってくれるという言葉に甘えて、この場合は素直に全額を委ねることにした。

・
・
・
横須賀第四鎮守府、廊下。

大淀次長との取引は果たした。

あとは彼女が昇進させてくれればいいだけなんだけど、正直昇進はどうでもいい。ただこれ以上、俺に関わらないでもらいたい。

今はお酒が入ってないのに、まるで飲み会で飲みすぎたオツサンみたいになってる人たちを介抱しなきゃ。

「オロロロロロオ!!..うう...きもじわるい...」

「大丈夫ですか白露さん!?お腹の子どもパンパンですよッ!」

「宍戸くん、本物の妊婦さんの前では絶ツツツたいに言わないでね?失礼どころじゃないから」

「ハハハ、もちろん言わないさ。そんな冗談かませるのは、か弱い女の子を自称してんのに、そのレットルを無視して暴飲暴食に走るとつても愉快で奇天烈な人だけだよ。鈴谷と熊野もそうでしょ?うん?なんとか言ってみなさいよ」

「うう...」

彼女たちをそこまでさせるものは何だったのか。

久しぶりの食事にありついていっているわけでもないのに、まるで数日間飯抜いた犬みたいに餌を貪っていた鈴谷と熊野。

「春雨ちゃんを見て、この華奢で女の子らしい体。村雨ちゃんを見て、この女性らしいわがままな体。ボクサーの増量かよってぐらい大量の暴飲暴食は、全部アメリカとかメキシコみたいな肥満大国を見習ったスタイルなんだぞ?今から見直さないと、カラダ壊すぞ」

「大丈夫だいじょうぶ!ぼくたち艦娘だし」

その根拠ってどこから来るの？それで生活習慣病がなくなるんだったら今からタイに行って整形して、艦娘になるぞ俺は。

あと、カラダを壊すってのは風邪引くとかそんなレベルじゃないから。

カラダ壊すってのは、肝臓腎臓心臓とかの内蔵が修復不可能なレベルまでボコボコにやられて、この世にある全ての病気にかかって死ぬってことだぞ。

まったく……俺の艦隊ったら財布に糸目をつけないんだからあ！そんなに貯金しているわけでもないんだぞ？

腹八分目を弁えた娘たちが、弁えない娘たちをせっせと運ぶ姿は、傍から見れば負傷した艦隊の帰還風景である。

これを士官たちに見られたらアウトだ。

前線艦隊とその指揮官がこの体たらくなんて言われたら、末代までの恥になる。

幸いにも前方から来ているのは大鯨さんたちだけだから、見られても大丈夫だろう。

—————

「これで書類は全部ですか大鯨さん？」

「はいっ！ありがとうございます古鷹さん！」

「ふ、古鷹で良いですっ！一応上官ですし……」

「ご、ごめんなさいっ！まだ慣れなくて……でも、古鷹さんのおかげですっ！くはかどつちやいましたっ！」

「へえ〜？それじゃあまるで私だけじゃ力不足みたいじゃない？」

「あ、い、いいえ！そ、そんなことはあ……！」

「フーン！」

秘書艦の初風ちゃんにもあわふたする大鯨さんは、やっぱり可愛いしい。

後方参謀の任務はかなり大変だけど、それでも大鯨さんの手腕は流石だ。

私もいつかはこんな女の人になりたいと、パパに話している。パパはまだお嫁に行くには早すぎるとか言ってるけど、そんなこと言ったら、私は絶対に婚期を逃すだろうと、薄々思っていた。多分それでもパパは「一生独身でも良いじゃないか」って言うかも知れないけど……うん、まあ独身でもなんでも、幸せならそれでいいと思う。

「……あ、穴戸さん」

「お、大鯨さんと初風秘書艦と古鷹！まだ仕事があったの？」

「あ、別に明日でもいいと言われたんですけどお……やっておかなくちやいけないと思つて」

前方から来たのは7人の集団だった。

お酒は入っていないなさそうだけど、なんとなく食べ物の匂いがした。

少し生臭さのあるこの匂いは……お寿司かな？いいなあ……。

でも食べすぎたのかな？鈴谷さんと熊野さん、それにあの白露さんまで、姉妹に抱えられている。

「俺に言ってもらったら手伝ったのに……ねえ初風？」

「なぜ私に振るんですか？」

「いや、俺たちも手伝ったほうが、早かったんじゃないかと思つて」

「ふんー」

こんな態度をとっているけど、たぶん初風ちゃんはまんざらでもないと思う。他人同士の会話に入るのが苦手で、なんて言っていないからなくなるから、じつと会話を眺めているだけ。

……結構前の私も、そうだった。

秘書艦として仕事をしていても、やっているのは事務仕事だけで、秘書を務める相手が父親だということで偏見を買ったこともあった。

今みたいに、会話へ積極的に入れてくれるさりげない優しさは流石だと思う。

「古鷹も、あつ待つてください穴戸さあんっ！つて言ってくれたら俺、朝まで執務室に居続けたぜ」

「それは流石に邪魔だと思つて」

酷い！とツツコミを入れた穴戸さん。相変わらず時雨さんと仲がいい。

「前線艦隊だからって遠慮しないでさ……いつでも、俺を頼っていいんだぜ？」

「あっ……！」

彼が私の頭を撫でてくれている。

大きくてゴツゴツとした手……すごく優しく撫でてくれて、安心する。胸がすっごくドキドキしてるし、顔が赤くなってないかな……なっけてたら恥ずかしい。

髪の毛、ちゃんとサラサラしてるかな？身だしなみはいつも気にしているけど、汗でベトベトしていたらどうしよう……彼に不快な思いはさせたくない。

「フンッ！」

「グアアア!!な、何すんだ時雨エ!？」

「え、僕じゃないよ?」

「は?お前以外にその蹴り出せるの……は、春雨ちゃんに村雨ちゃん?」

「穴戸さんツ?」

「お兄さんツ?」

「め、めめめめんごおおお!!」

逃げていく穴戸さんを追いかけていく彼の艦隊。見ていて微笑ましく思える空間。彼の周りにいければ自然と笑顔になる。これが計算でやっているものなのか、彼の素なのか……そんなことは、長い間一緒にいる時雨さんや村雨さんを見ていて、すぐにわかる。

「……大鯨司令官、あの人って本当に最前線で指揮とつたあの穴戸中佐なの?あの八丈島と御蔵島を一日で攻略したつていう?信じられないわ」

「ま、まあ素の彼を見ればそう思いますよね……でも、彼はとっても信用できるんですよ!この大鯨が保証しますっ!」

「大鯨司令官の保証はアテにならないから別にいいわ」

「ひどいっ!」

「……」

彼はみんなに好かれる。

それは名声からとか、表面上の彼じゃなくて、本当の彼の人望、そして優しさが、私みたいな人も包み込んでくれる。

だからこそ、私は……いや、彼の周りには、私よりもかわいい女の子が大勢いる。

私は、ただ見ていられれば、それでいい。

それで、いいんだ。

—————

「だから……一回だけでもいいから、私を抱いて、あなたの女にしてエ……！」

「はッ？」

さつき会った古鷹の内心がどんな心情で固められているのかと談義してたら、その場の全員に引かれた。理解不能。

「は？ってなんだよ？漢は誰もそういう欲望に塗れた妄想を一度はするもんなんだよオ！」

「はあ？何いってんの穴戸くん？ゴミ？」

「そ、そこまでは言いませんけど……でも穴戸さん、反省してください！村雨、怒こつちやいますよっ！ぶんぶんっ！」

村雨ちゃんの胸がぶるんぶるん揺れた。

古鷹に対しての妄想でも、それぐらい入れた方が良かったかな……胸がドキドキして、ぶるんっ、ぶるんっ、とインナーから飛び出しそうなぐらい……みたいなの？グフツ！ああ見えて古鷹、かなり身体はエッチツッチーだからなあぐグヒヒヒヒホホへへエ！！

「穴戸つちキモオ……」

「海軍の恥ですわ……」

「白露お姉さん今ダウンしてるからあ……ボコボコにされたかったら後で言っつてえ……」

白露さんの蹴りが入ったら絶対死んでた。

「ひどすぎる、俺はただ古鷹みたいな純情な子である場面なら、内心はキュートでピユアなハートで、俺を想ってるかなーって思っただけな

のにやっ？」

「そこまで言うんだったら宍戸くんに現実を見せてあげるよ。VT
R、どうぞ」

「え」

—————

「……あ、宍戸さん」

うわ、なんかキモいの来た。

「俺に言ってもらったら手伝ったのに……ねえ初風？」

「なぜ私に振るんですか？」

うわあ、他の司令官の秘書艦をイジるとかマジないわ。なんなんコ
イツ？世界が自分だけで回ってると思ってるのか？

「古鷹も、あつ待っててください宍戸さあんっ！って言ってくれたら俺、
朝まで執務室に居続けたぜ」

キモすぎるッ。

言うわけないでしょそんなこと。

こんなのと一緒に仕事したら吐きそうになるし、邪魔以外の何者で
もない。執務室にいたら一分も持たない。

「それは流石に邪魔だと思う」

時雨さんは流石だ。

クールで、イケメンで、可愛くて、キュートで、セクシーで、人を
気遣えて、みんなのリーダーで、艦娘としては強くて、でもちやんと
女の子で、男を手玉に取れて、かつこよくて、頭がよくて、かつこよ
くて、かつこよくて、とっても優しい。

横にいる、ク粗大ごみとは大違い。

「前線艦隊だからって遠慮しないでさ……いつでも、俺を頼っていい
んだぜ？」

「あつ………！」

う………ヴォエエエエ——ッ!!!

頭がウジムシの手が!?うわ、臭いし、キモいし、何これ、地獄!?頭

が汚れるツ！触らないでエ！早く終わってエ！！

「フンツ！」

「グアアア!!な、何すんだ時雨エ!」

「え、僕じゃないよ?」

「は?お前以外にその蹴り出せるの……は、春雨ちゃんに村雨ちゃん?」

「宍戸さんツ?」

「お兄さんツ?」

「め、めめめめんごおおお!!!」

ハア……ハア……なんとか吐かずにいられたのは、時雨さんとその妹さんたちが、私をあのおーガーから助けてくれたからだ。

時雨さんにありがとう。

あの膿溜にさようなら。

そしてすべての鴨川要港部艦隊のみんなに、ありがとう。

—————

「人の妄想聞いているだけで泣いたの、初めてかもしれない」

「本当に泣かないで宍戸くん、それこそキモい」

「お兄さん泣かないください!春雨でいっぱい妄想していいですからー!」

「ありがとうね春雨ちゃん、君だけが俺の味方だよ」

「えへへっ、お兄さーんっ!んふふっ!」

「そんなに抱きついてくれるのって春雨だけだよ?少なくとも僕の予想は半分以上当たってたと思うけど?」

「冗談でもそんなこと言うなよ時雨?俺だからまだいいが、もしあの大天使古鷹の内面がお前の妄想した想像クソビッチだなんて言われたら、普通の男子なら拳銃自殺してるぞ」

まあいいさ、作戦を無事に、クールに、スマートに終わらせる事ができたこの俺が、そんなこと言われるはずがないし。

それに古鷹の赤面マジ可愛かったし……クソオ!あんなの嫁にし

たらマジ最高としか言えねえだろうが。

ケツコンしたいと本気で思ったことはないけど、こういう俺にだからこそ災難？チャンス？が降りかかることになるが、それはまた別のお話。

「ところで……俺たちの部屋ってどっちだっけ？」

「「……………え？」」

「宍戸くん、まさか知らないで歩いてたの？」

「……………へっ」

俺は聞き忘れた部屋番号を聞きに、再度少将のところに行くこととなった。

八号作戦その後のその後

割り当てられた部屋は総司令官の部屋に行く前に、廊下を歩いてた士官に教えてもらった。さつき古鷹とあつたばかりだし、二回顔を合わせるのもなんか変な感じだし丁度良かった気がする。

前線艦隊はいっぱい食べてお眠なのか、すぐに熟睡モードに入ったので、廊下を歩いているのは俺一人である。

横須賀第四鎮守府は俺にとっては懐かしい学校だ。

ここで提督育成プログラムを経て提督……と呼ばれるにはまだ早いと時雨は思っているらしいが、それでも俺はいち要港を守る司令官となったのだ。

廊下は新築の割にはギシギシ音がするところがあり、一瞬だけ欠陥建築じゃないかと思っただが、日本の建築技術を侮ってはいけない。整工班として建築技術は習ってはいたが、実際に携わった機会は少なかったから、個人的に経験のないことへあーだこーだ言いたくないんだ。

たまたま通りがかり廊下を歩く女性士官らに、イケメンぶりを見せるためにニコツと笑顔を向けたが、アハハ、と軽くあしらわれる。ハハハ、既婚者かもしかして？既婚者じゃないのに俺様へその態度だったら、恥辱罪にするぞ。

ミッシヨンコンプリートしたとして駐屯艦隊などが置かれ、みすみす島を取り返されないために防衛に専念しているとところだが、横須賀第四鎮守府に帰ってきた艦隊も大勢いる。

所属が混同しているのはいつものことだが、部屋あてには注意してほしい。

『いま夜だよね!?夜ってことは、夜戦でしょ!?早く行こうよーせーんっー!』

『ね、姉さん静かにして……!』

『お姉ちゃん静かにしてー!夜ちゃんと寝ないとお肌が悪いんだよ!?!』

『そんなこと関係ない！私は夜に生きるんだー！』

ドアが閉まってもクソうるせえ騒音が第四鎮守府の一室から聞こえていた。これは俺の仕事じゃないが、軽くノックして黙らせよう、

と思つた矢先。

『んっ……ん、あぁっ……！も、もうっ……がまんできないよお……っ！』

『はぁ……はぁ……ぼ、ぼく、もう……はぁ……！』

『し、舌が……びんかんになつて……いっばいかんじちやつてる……っ！』

WHAT THE FOCK?

この部屋に入るべきか、入らないべきか。俺この頃、決断と決断の重ねがさねで、頭がパンクしそうだよお……！

そもそもなんだこの空間は？夜戦とか静かにしろとかなんとか言つてて、急に夜戦始めちゃうとか……これもうわかんねえよな？しかもここ、大学校時代の俺の部屋だし。

ノックは入れた、だから俺は入ってもいいんだ。

「失礼します。床での夜戦はお控えください」

「二あ、す、すいません!!」

「つて、せ、川内三姉妹!?!どうしてここに!?!」

目の前に現れたのは、あの海軍の国民的顔とも言われるNAKA・CHANGを中心としたネイビーポップアイドルグループ……川内三姉妹！

しかし、あの妖艶で甘ったらしい声の発生源とは思えない立ち位置にいる。というのも、一人は普通に三段ベッドの前に立ってて、残りの二人はそれぞれのベッドでぺたん座りしている。

「それに照月と初月まで……つてか、なにしてんに二人共？」

「あ、し、宍戸さん！お久しぶりです！はぁ……はぁ……！」

だから何してんのかって聞いてんだよ。

二人は川内三姉妹とは反対側の三段ベッドで、同じベッドでこれまたぺたん座りしながらビーフジャーキーを睨んでいた。

「ぼ、僕たちはただ、極限の空腹状態でビーフジャーキーが目の前に置かれたとき、どれだけ耐えられるか我慢比べをしていたんだ……」

「照月のベロ、お腹減つてるときね、すごく敏感になるの!」

「神通さん、あの、医務室ってまだ空いてましたっけ?この二人ちよつと病気なので入れたほうが良いかと……」

「だ、だめえええ!おにく食べられなくなるううう!!!」

「僕たちは人間が自然に持つ快楽をただただうまく利用して楽しんでいただけなんだ!信じてくれ!」

とは言つてもな?極限状態つてどういうことなんだ?つて話なんだよ。食料支給されなかったの?そこまでブラックにするほど、海軍つてまだ落ちぶれていないと思うんだけど。

「……あつ!君つて第三鎮守府に古鷹ちゃんときたあの時の軍人さん!やつほー!」

「こんにちわ!つて、覚えててくれてたんですか……」

「もつちろんだよー!那珂ちゃんの前で神通お姉ちゃん派なんて言うひと初めてだったんだもん!」

素直ですまなかつたな那珂ちゃんさん。

那珂ちゃんのように眩しい笑顔を振りまく美少女は大好きだし、実際にフアンの顔を覚えている辺りは好印象だが、あまり自意識過剰すぎるのはNGなのだよ。

それでも……いや、だからこそ愛らしさが生まれるんだろうが、それでも個人の好みは変えられない。

「照月初月はともかく、第三鎮守府のお三方が何故ここに?」

「横須賀鎮守府を防衛するために、一時的に第四鎮守府にいるんです」

それなら逆に他の横須賀鎮守府に人員送ったほうがいいと思うんですけど……と思つたが、神通さんがいうには、一時的に第三鎮守府の機能を停止させて、その分で余つた艦娘や士官、並びに兵士を第二鎮守府や第四鎮守府に回して指揮を強化しているんだとか。

第四鎮守府は今回の作戦を絶対に成功させたいと言う念もあつて、密かに他の鎮守府からの助っ人を呼んで作戦に参加させていたとも言われた……が、俺のせいで無駄になつちやつたかな。

前線艦隊はほぼ要港部で固められていたから、あまり目立った活躍はなかったはずだけど。その所は、後方の艦隊の指揮官である大鯨さんや磯風に採点を任せておいたので、あとで機会があればこの5人の作戦貢献度を聞きに行こう。後方防衛しかしてないとは思うけど。「ねえねえ！あなた夜って好き!?!」

「え」

突然、見知らぬ美少女に手を握られた。

いや、消去法で川内さんだと思っただけど、前あつたときとテンションが違いすぎて別人みたいになってるし。

動画でみた川内ちゃんやんは元気に踊っていて、実際に見た川内ちゃんは来客があつても立ったまま寝てて、いまの川内ちゃんは夜なのにするせえんだけど。

「夜……まあ、嫌いじゃないですね」

「やっぱりそうでしょ!?夜っていいよね〜!」

「す、すいません中佐!ね、姉さんったら、みんなに迷惑だからお願いだから静かにして!」

「ええ〜……」

「神通さん、俺のこと覚えててくれたの?」

「は、はい……今回の作戦のことも聞いています。類を見ないほど素晴らしい采配を振るわれた艦隊指揮官、として有名ですよ?」

「あの神通ちゃんの褒められるなんて……気運向上のために、もらったサインにキスしておいて良かったわ」

「あ、そ、そんなことしてたんですか!?!こ……混乱、しちやいますっ」

可愛いな神通さん。

実際にやってないから完全なるお世辞だけど。サインはキツチリ個人ロッカーの中にしまつてある上、番号を忘れたので長い間だしてない。

でもそんな分かりやすいお世辞にも頬を赤らめる神通ちゃん!この人が巷の噂で聞くような鬼教官なわけがない。第四鎮守府の駆逐艦連中が鬼教官が来たと言つていたので、何事かと思つて聞いてみたら神通ちゃん来た!と言つていたので、俺は無条件に同名の艦娘だと

信じることにしたが、この愛らしい様子を見て、盲信を更に強固なものとした。

「神通が言ってた前線の艦隊の指揮官ってこの人のこと!?!」

その言葉に那珂ちゃんさんと初月照月が驚いていた。まさか知らなかったとか、あるいは俺が指揮官、司令官クラスにいるんなんて信じられないとか?

「じゃあ私を今から前線に出して!早く夜戦したい!」

「もう夜戦したじゃんお姉ちゃん……」

「まだ足りないの!あの程度で私の中の夜戦魂が鎮まると思ったのお!?!何年一緒にいるの!?!」

「それ自慢して言うことじゃないですし、推薦や進言はできませんが、異動の権限そのものは自分にはないので総司令官に……」

「総司令官に言えばいいんだね?!川内、出撃します!」

ちよいちよいちよい、何で出ていこうとしてんの!?!明らかに寝着の川内さんは察する所、就寝しなきゃいけないはずだし、防衛戦でも起こらない限りは出撃できないはずでしょ!?!しかももう作戦自体は終わってるんだから……いや、ここまで情報がまだ届いてないのか?そんなことはないと思うけど。

そろそろこの川内さんを黙らせないと、ガチで隣室から苦情が来そうな予感がしていたその瞬間、サイレンが鳴る。

『敵艦隊接近!数はおよそ二隻程度!迎撃部隊の艦は直ちに攻撃されたし!!』

「ヤッホオオオー!!!」

深海棲艦が来たって言われてこれほど嬉しそうに部屋を出る艦娘が他にいただろうか?

行動から推測するに、今日の夜間迎撃部隊である初月と照月は、軍人特有の早すぎる早着替えを俺の目の前でする。

下着として履いていたのがスポーツブラだから恥ずかしくないもん!ということなのだろうか?初月なんて全身タイツだぞ?逆に恥ずかしいだろ。

サイレンが鳴ってから部屋を出るまで僅か15秒。女性とは準備

に時間がかかるものだが、ここでは関係ないんだなそれが。合計12隻ぐらいの迎撃部隊がいるはずだから、たつた二隻の深海棲艦に手こずるとは思えないけど、一応武運を祈っておこう。

「……あれ？神通さんと那珂ちゃんさんは行かなくてもいいの？お姉さん行っちゃったよ？」

「私達は迎撃の任を受けていないので……」

「っていうか、お姉ちゃんも迎撃部隊じゃないよ？」

「つまりは無断出撃か……」

はい命令違反。

悪気ゼロだったし、清々しすぎて違和感を持てなかった。違反を目の当たりにした俺は総司令官へ、このことを報告するべきか悩んでいた。しかし二人の妹の冷静さを見るあたり「いつものこと」と思っ

て半ば諦めている印象が強く残る。

なので、放置することにした。

「ですが、何故前線指揮官がこんなところに？作戦は……」

「小笠原までいって全部終わらせて来たよ」

「も、もう……ですか!？」

「すごい！流石是那珂ちゃんファン！」

「いや、神通ちゃんのファンなんですけど……まあいいでしょう。俺は、川内三姉妹のファンというところで」

「ありがとー！キラリーン！」

可愛いんだけどさ、これが素なのか裏があるのか分かんねえから怖いんだよな。女には、常に裏の顔と表の顔があるもんなんだ。でも、できる女は、第三の顔を持っているもんなんだよ……そう昔、母から教わったことがある。

でも俺の艦娘たちは絶対じゃない。俺に見せてるキュートな顔が本性で、表の顔は俺には見せてないんだ。

それで思い出した、俺がこのことを話したときに夕張はこう言っていたんだ。「妄想も程々にね……」と。

は？村雨ちゃんや春雨ちゃんが俺の知らない別の顔があるってのか？そんなことあるわけえだろバキヤツ口オツ!!村雨春雨ちゃん最

高ッス。

妄信だろうが迷信だろうが関係ない。白露姉妹は純粋ピュアな女の子オ!!

「宍戸中佐、こんなところにいたのか……」

「な、那智中佐!?!いい、いつからそこに……」

「今きたばかりだ。警報が鳴ったので、迎撃の任に当たっている艦娘ではないが川内を呼ぼうと思ったのだが……もう出ていったのか。まったく……」

「上官の意を真つ先に感知する能力があるのは、軍人としては良きことかと」

「そうだな……まあ我々は非番だ。敵がどれほど少数であろうと油断は禁物だが、総司令官が起きている以上は多少の慢心は許してもえらだろう。入ってもいいか?」

「「ハッ!」」

突然、上官からの入ってもいいか宣言は、大抵お説教の類だが、どうやらそのつもりではないらしい。

那珂ちゃんさん、神通さんと俺は敬礼して、サイドテーブルを靡かせる那智さんを部屋へ迎え入れる。すぐにお茶を用意しようとした神通さんは「気を遣うな」と手を振りながら牽制され、代わりに那珂ちゃんさんと一緒に4人分の椅子を用意する。

那智さんの次に俺、そして神通さんと那珂ちゃんの順で座った理由としては、階級の違いである。プライベートであつてもここはれっきとした海軍要塞の一つである横須賀第四鎮守府。

この行動が自然にできるかどうかで、どれほど規則に厳しいか、どれほど真つ当な教育を受けたかが一発である程度見受けられる。

無論、俺の要港部なんて部下たちから「まあ座りな」と言われるほどフリーダムではあるが、口を酸っぱくして「俺が司令官のときだけだぞ」と言い聞かせているので、任務に支障が出ていない分、問題はないはずだ。

「那智中佐、神通さんや那珂さんに話があるのでしたら、自分は席を外しますが……」

「むしろ貴様に用があるんだ。というより、敬語は必要ないだろう？
もう同階級じゃないか」

「いいえ、これは一時的なものですので……それに、那智司令官に対し
ては、こちらの方が落ち着きます」

「ふむ……ならいいんだが」

那智さんの足組み……白ストがまた美脚を輝かせているな。もし
俺が海軍大臣になったらミニスカニーソ、あるいはストッキングを義
務付けよう。言わずもがなだが、女性限定だぞ。

「さてと……穴戸中佐は、どうやってあの八丈島を攻略したのか、詳し
く聞かせてはもらえないだろうか？ 私事ではあるが、同じ司令官とし
ては是非とも教養が欲しい所なんだが……」

え、無血開城でしたけど？なんて言えるわけねえし。書類上では無
傷ではありえないレベルの撃破数だったし、それにもう言い訳は済ん
だはずなんだけど……。

「穴戸中佐の艦隊指揮、艦隊運用能力は十分に承知の上だが、やはり無
傷で八丈島を……それもたった6隻では、流石に無理があるんじゃない
のか？ 事実であるのも承知だが、だからこそ気になってしまっ
ただ」

「は、八丈島を、たった6隻で……!？」

「す、スゴ……」

おい、驚かれる度に騙してるみたいでドンドン俺の良心が傷ついて
いくぞ。那珂ちゃんさんなんて素に戻ってるぜ。

「自画自賛をお許し頂ければ、確かに前線での指揮は得意です。しか
し、我が前線艦隊の6隻の練度は極めて高く、普段からプライベート
でも触れ合うなど結束力も強固であり、なにより我が艦隊の特性は各
個撃破を得意としている……それらが重なり、我々にとって最高の条
件とも言える戦いができたわけです」

「ふむ……普段からの結束と訓練がものを言ったわけか……」

「はい」

しかし、睨み顔をやめない那智さんに、俺はまだ納得の行つてなさ
を感じた。

「実は八丈島に到着した際に、敵の密集陣形が島の裏側に潜んでいた
ので、ありつたけの魚雷と艦載機を奇襲と言う形で使ったことで、大
部分を撃破することに成功したんです。蘇我総司令官の前では、格好
をつけるために各個撃破に成功と言いましたが、戦闘詳報には詳細を
記録しています」

「なるほど……それは運が良かったな。しかし、魚雷を一斉に使うと
は……采配と機転の良さと、普段の訓練から培った練度がモノを言っ
た、というわけか」

「あ、はいそうです」

なんかそれっぽいこと言って納得してもらおう。実際に報告書に
書いたことってそれと似たようなものだし。

「し、しかし凄いですね……八丈島は最低でも占拠までは2週間を予
定していたというのに……」

「神通さんに褒めてもらえるなんて光栄だなあ」

「中佐さんスゴイ！そんな中佐さんには、那珂ちゃんのサインをプ
レゼントしちゃおう！」

「ウツス、どうもツス」

「な、なんか那珂ちゃんだけ軽いですけどー……」

うなだれる那珂ちゃんだが、それぐらいではへこたれないのがアイ
ドルなんだと、三秒後に復活してお茶を入れた行った姿を見て思っ
た。この、どんな感情が彼女の中を掻き乱そうとも、立ち向かおうと
する根気の強さが、那珂ちゃんさんの真の魅力なんだろうな。

慌てて神通さんも同行しに行った。

一応深海棲艦が周辺海域にいるんだからもつと緊張感持つのが艦
娘じゃないのかよ？言えた義理じゃないけど、実際に戦う人たちも、
あれぐらいの冷静さを持つのが丁度いいんだろうな。

しかし二人きりにされるのは緊張する。

こりや、また那智お姉ちゃんが発動しちまうかもなあ？あのおっぱ
いに浸りたい。

「……宍戸中佐。言わなくても分かっているとは思いますが、貴様の功績
はかなり大きい。世間にも名前が行き渡るだろう。それを良しとす

るかどうかは、貴様が決めることだが、時に名声は煩わしさを呼ぶ事もある」

「と、いいますと……」

「有名人はトラブルに見舞われやすい、ということだ……まあ、なにが起こったわけでもない。気をつけていれば、きつと大丈夫さ」

クールに双瞳を閉じながら発してくれた警告の意味を、俺はこのときは軽んじていたのかもしれない。

理由はもうトラブルだらけで、これ以上のトラブルなんて起きようもないと思ってるし、作戦終了後に直行で食いに行つて帰ってきて今ここなんだから、普通に考えても眠いに決まってるんだろ。

しかし那智司令官の言つてたことは、的中した。

帰ってきたぞ

鴨川要港部、中庭。

「うう〜！トイレトイレ〜！」

作戦を終了させて鴨川に帰ってきて、トイレを求めて全力疾走している俺は、ここで提督をしているごく普通の男の子。強いて違うところをあげるとすれば、八号作戦っていう凄く困難だと思われた作戦を完勝に導いて、現在話題沸騰中のイケメン提督ってところかな？

そんなわけで、要港部内にある中庭にやって来たのだ。

ふと見るとベンチには、三つ編み、黒髪ロング、緑髪ポニーの、三人の若い女性が座っていた。

ウホッ！いい女たち。

そう思っていると突然その女共は俺のしている目の前で、胸ポケットに入っていた給料明細を出しはじめたのだ…。

パラッ、パラッ、パラッ。

「「くれないか（特大ボーナス）」

いい女に弱い俺は、言われるがままホイホイとベンチについて行っちゃったのだ。

「いいの穴戸くん？そんなにホイホイついてきちゃって」

「こんなこと初めて……でもないけど、いいんです…俺…時雨さんや、磯風さんや、夕張さんみたいな人好きですから……」

「うれしいこと言ってくれるじゃないの。それじゃあとことん、（財布から）搾り取ってあげるからね？」

「ああーっ！！だめです！！穴戸さんだめええええええ！！」

牽制に入った村雨ちゃん俺の腕にしがみついていた。相変わらずの胸部装甲がキunksンキunksンと当たるわい。

俺の手に持っていたのは現ナマ。オトナの世界という汚物の塊が使う用語を知らない良い子へ。現ナマとは、要するに現金のお札である。

封筒にしまわなかったのがいけなかったのか、傍から見ればJKに

お札を渡す怪しいヤツである。

「ごめんごめん、でも村雨ちゃんにもあげたでしょ？」

「別にお金なんていりませんっ！それに渡すんだったら封筒に入れてくださいっ！」

「何をカッパする事があるんだ村雨？この磯風は、現ナマでもまったく問題はないぞ」

「だ、だめです!!順序はちゃんと守らないとっ！」

「確かに村雨の言う通りね……じゃあ私の特大ボーナスはダイレクトデポジットでいいわよ」

「「え、なにそれ？」」

貴様らは自分の給料がどうやって支払われてるのかも知らんのか？

俺がこの三人に現ナマを渡す理由はもちろん、過大な功績を立ててくれたお礼だ。もちろん俺の一存、俺の気持ちだけでやっていることなので、これは全部、自分の金である。

(※これは仲間内でも賄賂行為となるので、やる際はご注意ください)

時雨は言わずもがな。しかし前線艦隊になってくれた6人の内、時雨にだけ渡していなかったのが、利子つけて渡してやった。本当に俺って寛大だよな？これで俺の口座、もう三桁やで？昨日給料日だったのに。

夕張は整工班班長として、物資が足りなくなった状況下で優れた手腕を発揮して、それぞれの艦娘に最良の組み合わせを付けたことが、結果的に防衛していた島々の艦娘の運用、戦闘効率を上げる結果となった。なによりリーダーと潜水探知機を余分に持ってきてたのが功して、潜水艦の撃破に成功していたのが大きかった。

そして磯風を旗艦にして良かった。

磯風の指揮官としての能力は良いのだが、彼女自身も3隻ほど撃破している。ここにいるときも、何かと機転の効いた艦隊運用をしているから助かっている。日々のお礼も含めて、というのもあるのかな。

流石に参加した全員にとはいかないが、もしも何か欲しいものがあつたら作戦のお礼に奢る、って形で勘弁してもらおう。

生憎、あれほどの作戦を成功させて早1週間一軍部からのボーナスはまったく出ていないので、俺が直々に、こうして労わないといけないんだ。

しかし英名を得た。

横須賀鎮守府勢が撃破された艦隊を倒し国土を回復させた、横須賀第四鎮守府と、その下で戦った3箇所の要港部。俺の鴨川要港部は常に最前線を突っ切り、超精鋭艦隊を少数の艦娘でしかも無傷で殲滅した……と、ニュースに載っていた。

その水面下でどんな事が行われていようとも、これが真実で、ニュースに載っていたことが、まん丸と中学校か高校の教科書に載るワケだ。

俺の所へもファンレターが送られてくるなど、この奪還作戦はかなり大事になっていると聞いてるけど、民間の場所には行ってないからどれだけのものかはあまり知らない。

ただ分かってるのは、蘇我提督はこのどでかい功績によって昇進させる声が上がってる事だけだが、それと共に俺の名前も上がっている。次長のおかげで俺のは内定されているけど、蘇我提督はどうなるんだろうか？

何れにせよ、俺はクールな提督としてインタビューなどはほとんど断っている。

だからボーナスぐらいくれよケチくせえな。

こっちは作戦のことで、断ってるのに連日取材が殺到してるんだぞ？まあ俺のところだけじゃないけどさ。

『蘇我提督はこの作戦を華麗に成功させ、しかも犠牲者なしであの八丈島を攻略したとして名前が上がっていますが、その点について一言！』

『私の部下が有能であっただけで、私個人が成した功績ではありません』

『しかし、前線に立ち指揮を取っていたのは、あの提督育成プログラ

ムの次席卒業生、宍戸司令官とお聞きしますが、有望であるとはいえ若年の司令官に前線を任せるのは抵抗があつたのではないでしょうか!？」

『やってみせ、言つて聞かせて、させてみせ……我々が尊敬したる先人の言葉に習い、同じ海軍軍人として信用し、決断をしたまです』

『八丈島の作戦が大成功した理由はなんだと思いますか大鯨司令官!？」

『み、みんなが頑張つてくれたからだと思いますっ!みんな無事に帰つてきてくれて良かったと思いますっ!』

ぷるるんっ!

『『『おお……!』』』

『結城副司令官は、八丈島の戦いで前線総指揮官として艦隊を指揮したあの宍戸司令官の同期だと聞いていますが、彼はどのような人物だと思えますか!？」

『そうですね、海軍軍人として申し分ない人物だと思います。一人っ子ですし、元海軍軍人だった高齢の祖父がいるので、一層活躍しなきゃって気持ちがあるんでしょうね』

『なるほど……』

『それよりアナウンサーさんいま何歳!?良かったら俺と今夜……どう?』

『え、い、いいえ、結構です!』

『ん?今おっぱい揺らしたね?おっぱい俺の前で揺らしたってことは、俺とえっちっちなことしなきゃいけないって事なんだよ?ほら、早く同人誌の時間停止みたいになりなよ、最近ハマってんだよ』

『い、いやああああああ!!』

手元の端末で、報道されている各要港部の司令官へのインタビュー映像を時雨たちと見ていた。なるほど、俺の名前が他の要港部で上がったということは、すげー名前が通るようになったってことだな。

クツソ恥ずかしいんですけど。

動画を見ていたらフォローしている誰かが呟いた。本名でアカウントを作った御年90を逝くか逝かないかの祖父が、恵比寿顔二重ピースでケバい女共に囲まれた画像は写った。

ワシ、孫に提督おるんだが、なんか島奪還してきたらしい。ワロタじゃ。

マジかよあのジジイ？

通りすがりの陽炎三人姉妹が、やつほーと挨拶してきたので返すが、俺はちやんと覚えてるぞ？ 奸法提督とかナマイキゴメンナサイが伝染るとか。

こんなに晴れバレした天気なのに、この晴天のせいで作戦当時のことを思い出しちまう。

「それよりも穴戸さん、いつまでその服を着てるのかしら？ 作戦の一環として、一時的なものだと思っただけれど……」

「多分あれだよ、穴戸くんは早く提督になりたいから、中佐になったのが忘れられないんじゃない？」

「向上心を持つのはいい事だが、流石にな……」

「悪かったなアツケアガリオチ○ポで!? でもあれだけ大規模な作戦成功を電光石火でさせたんだから、さっさと昇進させてもらってもいいと思うんだけどねエ!? 文句のあるヤツは俺様直伝の精神混入棒で格納庫爆破するぞオ!!」

「「キモい……」」

ひどい。

俺の実力……とは言いい切れないけど、半分ぐらいはそうだと豪語できる自信がある。無事にすべてを円滑に済ませるこの手腕は上層部の目にも止まっている。

上層部つてのは具体的にいうと大淀次長とか、総長の荒木大将とか、海軍省の明石少将とか、舞鶴提督で日本海方面の総監である斎藤中将とか——よく考えたら全員会って話したことがある人ばかりだ。

そして忘れてもらっては困る。俺と大淀次長の間で交わされた——

DEAL
取引——の——ことを。

俺の彼女だけが知る、水面下の密約。

今日ぐらいいったか、海軍将官会議の審議が行われている。その中で、俺をこの階級のままにするという取引DEALが行われたことは、当然ながら俺と大淀次長しか知らない。

時雨たちも昇進するとか言ってるけど、それはおまけ程度だろう。

「海軍将官会議……八丈島での作戦の後に開かれていた審議で、一体なにが語られるのか……フッフ、結果が楽しみだな。審議の結果のすべてが、一般公開されるわけでもないんだが」

磯風の言うとおり、海軍将官会議は改良、重大事項、将校の進級などを議論する。いつやるかなんてのはもちろんおおつぴらに公表されるわけでもないが、世間に知れ渡ったからと言って規制が施されるわけでもない。

規制がないのは、この制服の色に誓って清廉潔白な海軍イメージを守るためだが、だからといって話した内容がすべて明るみになるわけじゃない。ビデオで撮影しているわけでもない。話すとしても内容はごく一部、誰と何人が昇進されたかとか、どんな改良が成されたなどの大まかな説明だけである。

「そういえば掲示板でそんな言ってたわね。私はどっちかといえば、新種の装備が作られたことに興味をそそられるけど」

「それ僕も気になる！」

「村雨は……うう、スイーツ特集しか見てませんでしたっ……」

「村雨ちゃんはそのまま村雨ちゃんでもいいんだよオオオオオ!!」

「きゃっ！あ、そ、その……いきなり抱きつかれるのは……」

村雨ちゃんに抱きつき、頭をナデナデしている俺を見て時雨が「バイ菌が伝染るよ」と言ったので、心苦しくも村雨ちゃんのおっぱいを人質にしてバイ菌発言の撤回を要求した。

もちろん時雨は強行突入と鉄拳制裁を可能としたワンマンSWATなので、俺はやむを得ず投降する。

こうして村雨ちゃんおっぱい人質事件は、ものの5秒で解決した。

「時雨、お前はバイ菌とか言うけどなあ？バイ菌なんてみんな持っているんだぞ？バイ菌以上に汚い細菌……本当に汚いものが見たかったら、あれを見よ」

「「あれ？」」」

『しゃぶりTIMEキモティ…細菌…入っちゃう!』

『怖いねえ』

『細菌、穴に入っちゃう!キモティンティンな太いシーチキンが欲しい……!』

『違うだろ?どこがええんや?言ってみ?欲しいって言えば欲しいって!』

『完全合体合金おち○ちんください!!おっぱいが気持ちいいおま○こが気持ちいい!!我慢できない!』

「相変わらずだな彼らは。だが、幸せならいいのではないかな?」

「磯風、お前慣れすぎだぞ?」

「それを言えば村雨もそうじゃないか。抱きつかれても、嫌がっている様子は見せていないぞ?村雨も案外、まんざらでもないんじゃないか?」

「ふえ!?あ、あの、その……」

その上目遣いやめろ犯すぞ。

「ねえねえ司令!取材がまた来てるよ〜!」

「チツ……またかよ」

谷風が元気よく手を振りながら、テレビの取材が来ていることを知らせ、ついでに村雨ちゃんとのイチャいちゃを邪魔された。

磯風と夕張は「ふふふつ」と笑いながら、彼らに応えることを勧めてくる。どの道、今日は予定していたので、断って追い返すことはできない。

俺の名前は、総司令官であった蘇我少将よりかは通っていないが、前線指揮官として直接前に出た武刃者みたいな印象だから、それで定着してるんだったらなるべくそのままで行きたんだ。

功績を前線で立てた武人……フ、カツコ良すぎ。まるで俺じゃないみたい。

そう、実際俺に会ってみたら、はあ?なんだこいつ!?もつと呂布み

たいなやつかと思つたのにい！と叫ばれること間違いなしだ。

「行つてきたら？」

「はあ？時雨なにいつてー」

「もし行つたら村雨が、ちよつといいこと、してくれるかも知れないよ？」

「その手を使うの何回目だと思つてんの？すでに三回目ぐらいから数えるのやめたんだけど」

「でも行つたほうがいいと思います！海軍は海軍ですけど、あまり愛想が良くないのもどうかと……」

村雨ちゃんが言うことも一理ある。

鴨川要港部とその街自体の規模は、もちろん東京と比べればデカさや重要さは違つてくる。だからこそ、ローカルの司令官が「は？テレビに出れないとか、コミュ障がうちの街の司令官とか、もう一揆起こすしかないじゃん」とか言われて、俺は国を追われてアメリカへ……なんてことになったら、俺死んじやう。

いや、流石にそれはないと思うけど、あくまでローカル民へのアピールのために……別に鴨川にずっと居続ける訳でもないのに、こんなことをしなきゃいけないなんてマジめんどくせー。

「わかつた、じゃあ行つてくるよ村雨ちゃん」

「はいっ！」

「「いってらー」」

クククツ……お前らア？自分に取材の手が伸びないでも思つてるのかア？俺が直々に正面ドアを開けた瞬間、雪崩のようにやつてくるに決まつてるのによオ……？

そして鈴谷とかにも取材の手が回つて、慌てふためくギャルの赤面フェイスをパシヤリ！いやあくイイつすね〜！

要港部正面は海軍兵学校のようなレトロな煉瓦色の壁や古びた洋式ドアなどはない。

スライド式の扉と、内装はとにかく純白で、新しく建てられたんだから当然だけど、とつても現代的。それを開けると、50メートル先に門とそれを守る衛兵と、取材陣が見える。要港部の敷地はこれより

更に広いが、あの門を抜ければ、事実上要港部内に入った事となる。

もちろん取材をしたいと言ってきたスーツ姿の人たちは……あれ？10人以下じゃん、かなり少ない方だな。まあそれ以上が一気に来られたらたまらないから、こっちとしてはそれでいいんだけど。

衛兵と……ん？身長が小さいから見えなかったけど、綾波ちゃんがいる。俺が連日、応えるのは嫌だつて言ってたから、代りに取材にに応じてくれるのかな？いや、助かるわ綾波ちゃん。

やっぱ春雨ちゃんと夕張の……同期は……最高やなあ！

「そ、それで宍戸司令官とは個人的にはどんな人物なのでしょう？」「はいっ！いつも、おとこのおしりをつけ狙う人たちを厄介がるも、実は自分を常に誘い受け状態にしている策士さんなんですう！」

「な、なるほど。古来の武将らしく、男色には精通している……と」「でも司令官はあ、素敵な男の子を見ると、尻軽男になっちゃうんだそうですっ！」

「な、なるほど。英雄らしく、色を好む……と」

「綾波ちゃんお願いだから俺の名誉をシュレッダーにかけるのやめてもらえないかなア!?一度かけたら二度と戻らないんですけどオ!？」

「あ、あなたが宍戸龍城司令官ですね!?作戦では前線指揮官として最前線で艦娘とともに戦い、圧倒的な数を誇った精鋭の深海棲艦を撃滅したという、あの!？」

「ゴホンツ……はい、そうです。連日、取材に応じられず、申し訳ありませんでした」

スカした顔で「あ、一応、はい」とでも付けておいたほうが良かったか？俺的には、なんか騙してる気分であまり褒められている感じはしないんだけど……この人たち、なんか俺のことをタイムスリップしてきた戦国武将か何かと勘違いしている節があるな。

なんとかしてこれを取り除かなければ。

取り除く方法とは簡単に、大人気ラノベ俺ガ〇ルの葉〇くん系優男を演じつつ、自分がノーマルで意外のも恋愛には初だというギャップ萌えを付加させ、正に完璧なキャラ付けをすることにある。

「ははっ、そうなんです。自分は前線指揮には自信がありますが、少々

恋愛には奥手で……はい、バレンタインのチョコを貰うたびに、悶えてしまうほどで……」

「そ、そのチョコは男性からの物ですか!？」

「そんなワケねえだろ潰すぞハゲ」

「「え……」」

「……と！自分の同僚である結城副司令官が僕に言っただけですよ！アハハ！」

危ないあぶない……気を引き締めて行かないと。

衛兵の二人の会話が横から「おい、司令官ってあんなキャラだったか?」「いや、テレビの前だから自分がホモだって隠してるだけだよ」と耳に入る。

なるほど、綾波ちゃんは多分、俺の目が届かないほどとんでもない範囲で俺の名声をズタズタにしてくれたんだね?あとでオシオキだぞつ。

そういえば春雨ちゃんへのオシオキやってなかったな……何にしようか。

「お兄さあくん!ぎゅつ」

「「ッ!」」

「ハハハ、春雨ちゃん急に抱きついちゃ…ハッ!」

現在報道陣の手前、春雨ちゃんのような幼さの残る無垢な顔立ちをした美少女に、「お兄さん」と呼ばれながらぎゅつと腕を組まれている。

お兄さん、お兄さん……お兄さん許してえくおま〇こおくこわれるうく。こう言えば誤魔化せる……んなわけ無いやろ。

春雨ちゃんにお兄さんと言われる事の、なにがやばいかって?そんなの絵面を見れば一目瞭然だろ。

まずこの美少女とゴブリンが兄妹なワケねえだろ?それにあの結城が報道で漏らしてんだよなあ俺の家族構成。

『一人っ子ですし、元海軍軍人だった高齢の祖父がいるので、一層活躍しなきゃって気持ちがあるんでしょうね』
つてな?』

あ、でもあまり気持ち悪くなるとキャリアに支障が出るかも……どうしよう。

報道陣は「一体どういうことですかア!?」って言葉を繰り返しているので、いつそのこと銃でも撃ち上げて「じゃアカマシインジヤイボケエー!」とでも叫ぼうかと思っただけど、冷静になれ俺。

スーツ男たちの肩からゴーヤと月魔が通るのが見えた。

「お、おいゴーヤ!!月魔ア!!こっちに来て助けてエ!!」

「あ、提督でち。何やってるでち?」

「ゴーヤさん取材ですよ。ほら、作戦を成功させた武闘派提督としてニュースが上がってたじゃないですか?流石です兄貴……しかし助けてほしいとはどういう……ああ、なるほど。俺には無理なので、ゴーヤさんお願いします」

「え、なんでえ!?……は、春雨ちゃん?提督が嫌がつてるから退いてあげ」

「グルルルツルルウウ!!」

「ひ、ひい!!や、やつぱりゴーヤには無理でちい!!」

「あ、ちよ、資材落とさないでくださいよオー!」

ゴーヤが落とした資材を拾い上げた月魔は、その足でゴーヤの後を追っていった。再び孤立した俺は凛々しく直立する衛兵の二人に視線を送る。

しかし彼らは誇り高き海軍兵士。

彼らはどれだけメンチを切られようと、直立不動の視線は常に正面にあり、動かす事は許されない。

上官の速攻魔法「楽にしてよし!」を発動すれば、態度は銅像から人間へと変わるのだが、もちろん春雨ちゃんのフィールド魔法「威圧」を発動されているので、言うことを聞いてくれない。

「あ、あのーあなたは宍戸司令官とお付き合いですか?」

「あ、はいっーそうでー」

「妹です」

「え」

「だから妹です」

「し、しかし、宍戸司令官の家族構成は祖父と父だけー」

「妹です。な？春雨」

「え、あ、はい！……呼び捨てにされちゃったっ」

がつくり項垂れる報道陣は露骨に嫌な顔をしていたが、俺は春雨を妹だと突き通す。美味しいネタはそう簡単には釣れないということだ。

数度のインタビューの後には、案内役が要港部内部へと通す。案内する場所は限られた部分だけだが、艦娘や一般軍人らとの接触の機会は十分にあり、俺の秘蔵これくしょん流出事件が明るみになる可能性がある。

その点も踏まえて、予めみんなには口止めしておいたが、こればかりはどうなるか分からない。天に任せるしかない。

テレビは食堂で

「みんなー集まってー！鴨川要港部の醜態が晒されるよー！」

「「ひよおおお!!」」

食堂が賑わってる。

それはもちろん食事だからってのもあるけど、所属している全員が集まっているんじゃないかって思うぐらいの人口密度。

中央にはワイドスクリーンがあり、これはもちろんワイドショーを見るためのものではない。

出撃中の艦隊、要港部内の連絡事項、地図表示、ここや大本営からの緊急連絡など、状況を効率的に伝えるためのもので、司令室などからでも、要港部全体に情報を伝え、見られるようにしている。

それが今は、下らない夕方アニメを流している。

理由はもちろん、二分後に鴨川要港部が映されるからだ。みんなも気になってるし、俺もどうなってるか足をジタバタさせながらこの日を待っていた。

「ちよ、穴戸くん足邪魔ア！貧乏ゆすりやめてって言ったよね!!」

「ごめんね、テメエ等がなんて言ったのか気がきでならないんだよ」

「僕がなんか変なこと言うと思ったの？イヤだなあく流石に言わないうって！っていうか、ぼくの名誉もかかってるんだよ？」

時雨どころか、村雨ちゃんや春雨ちゃん、それにその他大勢がテレビに釘付けなのはもちろん、補給担当までこっちに出てるのはどういうことだ。飯作れ。

「穴戸くんの勇姿を、この私が見届けてあげるんだよ!?もつと喜びなってる！」

「そうは言われましても……っっていうか、白露さんの発言も気になるんですよね。前線艦隊としてインタビュアーになんて言ったのか。あと鈴谷、お前もだぞ」

「え、スズヤハナニモヘンナコトイツテナイヨ？」

「総旗艦鈴谷ツ!!君はこの鴨川……しいてはこの日本海軍の威信を背

負う立場であることを忘れてもらっては困るねエ!? 失言などがあれば軍法会議モノだとは百も承知だとは言わなくても分かるよねエ!? 君のその胸部装甲を揉みしだく私刑を今から行ってもいいのだよオ!!」

「き、キモー！鈴谷のおっぱい見ないでつてば！」

「その気迫と精神をふだんから纏っていただければ説得力がありますのに……」

知るかッ。

でも話題は減るところか膨れ上がる一方だぞ。国土復帰はかなり大きな話題を呼び、ナシヨナリズムを煽らせるいい材料なのはもちろんだが、いまだに島々へは陸軍の駐屯部隊などを置く程度にとどまっている。もちろん本州にいる人たちを故郷に返す事は到底できないとは思うけど、少なくとも取り返したニュースはその人たちにいい印象を与えるだろう。

御蔵島など、比較的に近い隣の海域には海軍要港部を作る予定らしいけど、メインは八丈島らしい。あの八丈島はそれほど日本海軍にとって、そして国にとって重要なものだったとは流石に知らなかったなあ？ 資源があるだけの諸島かと思ったぞ（※資源があるだけでも重要です）。

「お兄さん！テレビが始まりましたよ！」

「来たか……」

春雨ちゃんに腕を組まれているが、それが気にならなくなるほど、集中力はディスプレイへと向けられている。

陽炎、浦風たちがゲイ共と共同でスクリーンの設定をいじくり回している理由は画質が悪いからである。普段から地元テレビ用に使っていないとこういう不具合が出るのは当然だが、画質設定イジリ慣れないんだつたら無理にしなくてもいいのと思ったのは俺だけだろうか？

チャンネルを変えちまったのか、明らかに地上波では出ないような映像が映る。

『おおおおおおおうおうおうおう!!に、忍ば……に、妊ぽおおお

うおおおおおお!!』

「『……………』」

「…………いや、違うんすよ、これ多分司令官のですよ」

「いや、どっちかと言えば熊野だろ」

「どおおおおおおおおおいうことですのおおおお!!? わたくしがあのような卑猥淫乱ドスケベ作品に出ていたとでも言いたいのですのおおおおおおおお!!?」

それ以上喋るな熊野、声が似てるからガチでお前かと思ったぞ?

しかしジト目は全部俺の方向に集まり、時雨と白露さんは笑いそうになった口を抑えている。鴨川の英雄的な司令官として、俺は毅然とした態度で部下のミスを許す。

「ハハハ、まったくだめだなく次から気をつけなきや、アハハ。さて、と……気を取り直して、もう一度地上波にもどしてみようかつ!」

整工班がデツキをイジリ、モニターの映像が変わる。

『ごめんなさいごめんなさいっ! な、ナマイキなことってごめんなさいっ! あ、いやあつ! そ、そこはまだビンカンだからあつ: い、いくううううううう!!』

「気を取り直してって言ったよねお前らア!? さっさと鴨川の勇姿を見せるローカル番組に変えねえとテメエ等のオケツホジクリカエシテヤルゾオオオオラア!!!」

「オツスお願いしまーす!」

「お前らは石抱きだぞ」

「二頭に來ますよ〜」

結局は我らが夕張が修正に入って、30秒後やっとアンダーグラウンドからアツパーグラウンド(地上波)の映像に戻る。

最初に映ったのはどうでもいい……わけじゃないけど、ナレーションと共に紹介されるのはこの街の風景である。そしてここを守るのが、と繋げられながら映された鴨川要港部。

「『うおおおおお!!』」

「凄いよーHDで映ってるこい!!」

当たり前だろ。

「映ってますっ!! テレビにここ映ってますよっ!!」

村雨ちゃんが一番はしゃいでるとか……おっぱいがプルンプルン揺れる股間に悪い侍。鴨川要港部が作られた経由と、短い間に立てた功績の数々、そして平均的な要港部よりも戦力が多いことなど、情報的なことを数度に渡り伝えられ、「それじゃあいよいよ中に突入していきたいと思います」、とナレーションをしていたと思われる女性が内部に入っていく様子が映される。

ここはもちろん後から撮ったシーンであり、最初は門前に押しかけていたのは、遠くのテーブルで夕張と一緒にご飯を食べながらニコニコしている綾波ちゃんや、このあいだ行ったプーソウの話混ぜ込んで盛り上がっている門番兵士たちが知っている。

『ここが、奇跡の奪還を果たしたと言われている鴨川前線艦隊と前線指揮官の穴戸中佐のいる要港部です!世間で今、話題沸騰中のこの要港部!その事についてどう思っているのか、早速中に入り話を聞いてみましょう』

カメラが中に入って、内部の様子と更に適当な情報を流しながら、出会い頭に話を吹っかけて行くテレビ。実は俺のに限っては、門前で行われたインタビューの他に、演習場、そして執務室で行われたインタビューがある。どちらを採用するか、あるいはどう編集されるかはわからないので肝をひやしてたけど、今のところは問題ない。

そう、今のところは。

『前線指揮で大成功を成し遂げた艦隊として、今話題沸騰中ですが、その事について一言お願いします!』

歩いていた艦娘に突然その質問をふっかける、みたいなシチュエーションを演出したいんだろうけど、明らかに不自然な歩き方を見て全員が思ったと思う……これはヤラセだ。

そして横の文字で肩書が書かれている事から、ヤラセ説は更に信憑性を増す。

第三艦隊の艦娘。

『は、浜風です!』

『あ、はい、それで今の心境は……』

『は、ハハハ浜風です!』

その浜風の浜風コールに、この場の全員が笑い転げる。心境について質問してんのに、ハハハ浜風です!はないだろ流石に。

第三艦隊の艦娘。

『司令官はどのような人物ですか?』

『そうだね。色々なモノをスマックする人だと思う!』

『え……?』

当然俺は谷風を睨んだが、そっぽ向かれた。

陽炎たちにも睨みを効かせたが、同じくそっぽ向かれる。つまりこれは、鴨川要港部の娘たちは俺の名声を落とそうと陰謀を蠢かせている証拠である。

幸いにも「深海棲艦を叩く」という意味として捉えられたので、おしりペンペンで許してやろう。

第一艦隊の艦娘。

『あの前線の艦隊に所属していた6隻の内の一だ聞いていますが、本当でしょうか!』

『うん』

『八丈島奪還の勝因は何にあると思いますか!』

『味方の指揮と、固い絆から成る連携……かな?』

意外とは心外、と言われるだろうが、時雨の口からは俺の悪評が出ることはなかった。

キョトンとした顔を見る限り「アレ?あのシーンは使ってくれなかったんだ」みたいなことを思ってるんだろう。つまり悪いことは言ったけど、その部分はごっそりと編集で削られた事になる。

『時雨、お前の取材中ってどれぐらい長かったの?』

『え?多分、20分ぐらいかな……あまり覚えてないやつ』

あの数秒ほどのシーンのために、そんな無駄な時間を費やす事になるのはテレビ特有だが、NGになったところはなんて言ってたのかすごく気になる。

第一艦隊の旗艦。

『え?どうやってエリートカン倒したかって?そんなのパパーン!つ

てやってババーン！ドカーン！キュイキュイ！つてやったに決まってるじゃん！』

『あ、そ、そうなんですか……』

鈴谷の説明の仕方って柱島のアイオワさんに似てる気がする。こう、直感的に覚える的なの？教官には向いてないけど、でも一応この鴨川で一番指揮がうまいんだよな。

順調に紹介されていく中で、問題の俺と春雨ちゃんのツーショットロリコンシーンはまだ使われていない。少なくとも、現在HDスクリーンに流されている、俺が執務室でベラベラ話してるシーンまでは、春雨ちゃん個人のインタビュー映像しか流されていない。

春雨ちゃんと村雨ちゃんのキラキラしたお目々が写してるのは、映された執務室にて別人のように振る舞う司令官様である。

『小官はどのような状況にあらうとも、その任を最善と思われる形で遂行する事こそ、海軍軍人の使命であると思います。人のため、国のため』

「穴戸くんカツコ……ブフツ!!」

「ふはははは!!誰あれ!?笑い止まらないんですけどー!アハハハ!!」

「ハハハハハハハハ!!」

てめえら笑ってんじやねえよ。建前でも全国のお茶の間に報道されるんだからさ、かつこいいイケメン提督みたいな雰囲気を出しなきゃ海軍に抹殺されるだろうが。

でも俺が吐いてるテンプレセリフと仕草を真剣な眼差しで見る親潮やその他の少数派。真面目な性格からか、あの司令官（俺）からなにかを得ようとしているのだろうか？

それに比べて、カレーを口いっぱい頬張りながら画面に映る提督が発する一言一句へツツコミを入れる白露さん、そして浦風に黒潮。知るところ、誰もが注目を預けるこの俺は笑顔でそれを容認しているが、心内に秘めた握りこぶしの存在にも気づいてほしいと思うのは、ワガママだろうか？

その後テレビにナレーション付きで映ったのは、鴨川要港部が行った御蔵島、八丈島、小笠原諸島への遠征攻略作戦の全貌。要はやった

作戦のアナライズであり、まるで歴史の授業を見るような感覚である。これを俺がやったと思うと、偉大な功績を上げたとして威張ってもいいと思うけど、それ以上に他人がやった感が半端ない。

少数精鋭での前線指揮は間違っていないけど、所々、新型戦術や少数撃破の裏技など、明らかに盛ってる説明があり、他人事のように思えてくるのは必然だろう。

そのまま「今後の日本海軍の海外での活躍が期待されます！続いては、海軍将官会議から帰ってきた方々からの発表です！」と繋がったので、事実上、鴨川要港部がテレビに再登場することはないだろう。

……あれ？

「なんか普通だったな」

「そうですね……よく考えたら、あんなにスゴイ作戦を成功させたんですね」

村雨ちゃんは胸に手を当てながら感傷に浸る。

それもそのはずだと、後になってから思い出し、合点を突く事になる。このとき俺は出されたカレーの味のことしか考えてなかった上、元帥の艦隊との交渉に成功しただけであると言う事実から、誇れる功績としては微妙であると思っていた。

そもそも、やむを得ないとはいえ、前線で指揮を取るなんて古臭いことはしたくなかったことと、連日の鴨川への問い合わせやファンメール、並びに同僚からの通信や日常的な業務、そして終わったにも関わらず作戦について軍令部の連中から掘り下げられ続けたこと……それらの要素が重なって、俺の客観的思考を鈍らせていたが、落ち着いて考えれば分かることだ。

真相はどうであれ、横須賀鎮守府の諸港が打ちのめした深海棲艦の大群を、たった一つの要港部が制圧して、常に前線を指揮して一週間というスピード攻略によって、失われた島々を一瞬にして取り返した海軍の実力。

国民が見れば、みんな「SUGEEEE!!」と思うこと間違いないだろう。実際そうだし。

次のニュースが始まった。

内容は言つてたとおり、海軍将官会議の結果報告みたいな記者会見である。もちろん昔の日本海軍のように内々で処理していた時代と同様に、話す義務はない。増してや、発表する制約なんて条例にも憲法にも載つてないが、知らせるべきだと海軍側が思った場合は、むしろ日本海軍側から記者会見を開く事もある。

見る限りでは海軍側が開いた感じである。

もちろんこれも昔はやってなかったけど、知らせるべきとは、高級士官の一人が大将とか元帥に昇進したり、それと共に世間に渡るほど重大な職に就いたりする時に行く。そしてこれも、見る限りではそれについての内容らしい。

海軍中将クラスの人が壇上で喋ってる。

軽い咳払いと挨拶の後に「え〜」から始まる短いスピーチが始まった。

「「一！一！一！一！」

俺の部下たちがカウントアップは、この短いスピーチの中で発せられる「え〜」の回数を示している。「九！」で止まったので、一分にも満たない序盤演説に9回以上「え〜」を入れていた事になる。この人を壇上に立たせるぐらいだったら、二等兵でもいいからスムーズに喋れる人にしてほしい……というかするべきだと思う。

そしてお前ら、一応あの人は第三鎮守府の提督だからバカにすると痛い目に遭うぞ。

『先程行われた会議にて、えー、舞鶴第一鎮守府の、えー斎藤提督を、えー大将へと昇進させ、えー海軍大臣へと、えー任命された旨を、えーお伝えします』

パシャ！パシャ！パシャ！

カメラフラッシュの一点集中砲火が中将を襲う。

それもそのはず。提督から海軍大臣へと昇格するのは正に異例……ではまったくないけど、そんなにあるわけじゃない。それは問題ではなく、世間でも薄々ささやかれていた派閥争いのリーダーである彼が、内閣入りした事がスクープなんだ。

すでに分かりきつてたことだし、順当に行けば黙つてもこうなっ

てたし、文官としての才能もある斎藤中将……いや、大将が親任されるのは当然だろう。海軍の人格者であり、カリスマ性を見てもこの人選に相違はないだろう。

文官と武官を合わせて、正にこれは文武両道……なんちゃってっ。『えー引き続き荒木軍令部総長には、えー連合艦隊司令長官の職が親任され、えー並びに横須賀第一鎮守府の司令長官を兼任されることを……』

これでついに確定した。

保守派は、革新派に敗れたんだ。

これで暴徒になるのは、なるべく避けてほしいんだけど。

「あのビール腹のおじさんが僕たちの司令長官に……？」

「言っておくけどあの人は前線でも活躍したことがある偉い人なんです。あのパシャパシャカメラフラッシュ浴びせられているパシャとは大違いなんだぞ……なんちゃって」

「パシャ？」

パシャ……オスマントルコ時代の將軍クラスの人たち。

「やかましいよ」

時雨と俺はカレーは冷め始めたカレーを頼張る。

二度目にすくいあげたカレーは、しがみついている春雨ちゃんの口にねじ込んだ。正確にはねじ込もうとしたら、ぱくつと食べられた。

鈴谷のジト目が痛い。

磯風の面妖な眼差しが突き刺さる。

野郎連中の羨望の視線が俺に一点集中砲火。

もういいだろお前ら、いい加減に慣れろよ。

えーの連語が続く中で、テレビに映っていた提督は未だに人事の話しかしてない。話が遅いのもあるけど、海軍内部そのもので、かなり改革的な人事が行われている証拠でもある。

引き続き、明石少将は中将に昇進と共に海軍次官の座を手に入れた、大淀次長は中将への昇進と共に軍令部総長へ。この人たちは海軍のエース中のエースなので、人選も当然であると言える。むしろこれ以外に配置されることがあれば内部から苦情が来るだろう。

『えー、続いて前期に行われた大規模作戦において、えー多大な成果を上げた蘇我提督は、えー中將への昇進と、えー統合される横須賀第三鎮守府と第四鎮守府の司令長官となることをー』

「おい見てみるよアレー！昇進しちゃうし、こりゃー一等旭日も夢じゃないぞ蘇我提督?!?すごくないかアレ?!?」

「上司の手柄にされて悔しいとか羨ましいとか思わないの?」

「フン、そんなのは海軍軍人になる前に捨てた」

「口は立派ですわね……」

熊野の言う通り口だけは立派が、それで何とかなることもあるんだぞ。報道陣は「おおお!!」と唸り声を上げていたので、それだけ世間では名前が通り、それも英雄的である事が推測できる。

まあ人事に関してはこれぐらいだと思っただが、まだまだ続きがあった。

元帥に昇進した提督がいないのは少し驚いた。まだあの元帥行方不明扱いなのかな?見つけるまでは元帥の座はそのまましておく的な?現実みろもう死んでるぞあの人、表向きは。あるいは誰も昇進したくないから大將中將全員が辞退したのか。

「まだ続きが……もしかして穴戸さんの名前が出たりとかっ!」

「ないよ村雨ちゃん。別に作戦に関しての記者会見じゃないんだし、それにもうテレビに出たじゃん」

「いいえ、親潮も村雨さんと同意見です!司令の功績は甚大です!名前が出てきて当然かと思えます!」

いやないから、功績がどれほどあろうと、物事を成す為の、然るべき場がそれぞれあるんだよ。結婚式で就職報告するぐらい場違いだぞ。

『えー最後に、えー前期の作戦において過大な功績を立てた十数名を、えー、一階級昇進させる事が決定されました』

「やっぱりあの作戦って僕たちが思ってたよりスゴ作戦だったんだね……」

「そうだな。あと一階級昇進って多分お前らのことだと思うぞ」

「「え?!?」」

コイツらも自分のやった事をあまり気にしないタイプなのか……前線で活躍した6隻は必ず昇進されるはずだと思っていたので、そのことを打ち明ける日を待ち望んでいたんだが、先を越されたか。

まあいいや、これで大淀次長……いや、総長は約束を違えない崇高な精神の持ち主ってことで、全ての出来事にカタが付いたことになる。

俺はのんびりと、悠々自適な要港部運営生活に無事戻れるというわけだ。

『……え？あ、はい……えーその数名の中には、八丈島奪還の際に前線で活躍した艦隊と、えーその前線総指揮官として武勇を奮った穴戸龍城司令官も入っており、えー……あ、一年後に、大佐へと昇進させる旨を、お伝えしました』

『おおお!!あの穴戸司令官が!』

『これで海外への進出も安寧でしよう!』

テレビ内の画面端にいる数人の海軍士官が何やら騒ぎ立てている。

ん？

「穴戸くんが、二階級……特進?」

「縁起でもないこと言うなよ。多分、同姓同名の士官だって。おめでとうだな」

「明らかに君だよねエ!」

俺、死んでたの？

どういう事ですか!?

廊下を歩いている。

大本営であり、横須賀鎮守府に近いのは言うまでもない。少なくとも要港部からは遠い。

俺が立ち寄る部署は陸軍省？空軍省？そんな毎日天井のシミしか数えていないような暇な部署には立ち寄らない。できればお茶でも飲み合ってリラックスしたいけど「なんだよ海藻クセえのがよお？」とか言われたらブチ切れて、軍法会議となるので控えておく。

白ペンキの壁と茶色の自然な木質塗装とインテリ系の頭脳が交差する海軍省の内部は、軍令部とは少し勝手が違う。来たことがない場所だが、比較的に分かりやすい構造なので迷うことはない。

「……おい、あれって例の士官じゃないか？」

「あの要港部の司令官か……若いのに凄いな」

「うわ、武辺者」

行き交う士官……いや、言い換える必要はないが、あえて言い換えるなら文官や官僚連中の視線が痛い。お前らもすごく若い、は言い過ぎだけど、海軍省に務めることができるのはエリートだけなので、そっちのほうがすごいと思うぞ。

随所プリンターの印刷音と会話の端から、耳障りな声もあれば、照れさせるような歓声もあったが、いずれも肩をしょげさせる。それでも胸を張りながら堂々と地面を踏み、廊下での敬礼を返す。

早歩きで玄関から数分の経路。

目の前にあるは、海軍大臣ノ部屋。

大きく発声、ノック、そして了承を経て、

いぎ、中へ。

「失礼します斎藤長官。これはどういうことですかア!?あと海軍大臣への就任おめでとうございますウ!」

望んだことじゃないだろうが、社交辞令としておめでとうは言っておこう。

「正直に喜んだほうがいいのか微妙だが、一応ありがとう……どういう事と言われても、何に対して言ってるのかを言ってもらわなければ……」

「私の推測だと、昇進の件でしょう」

「ああ、そのことか」

斎藤大将と、何故かこの場にいる軍令部次長……じゃなくて、総長である大淀中将の御わす部屋は、彩色豊かなファンシーさがある。

装飾品があちらこちらにあり、飾るには小さめの写真立てだが、しっかりと顔が認識できるぐらいの大きさに留めてある歴代の海軍大臣の肖像画が入り口の真上にズラリ。

大小に分かれた机はどちらも豪華さを表す紺色が主体であり、カーテンで覆いかぶされた大ガラスと机の間には、日本海軍と日本国を象徴する国旗がバツ印に置かれていた。

直接ここへ赴いた建前としては、要港部並びに横須賀鎮守府の……強いて言えば、統合される横須賀第三、第四鎮守府——第一と第二も統合されるので、実質的には第二鎮守府の蘇我提督がやる筈だった定時連絡の使いっパシリだが、本命はこれを聞くことである。

「海軍大佐などと……自分にはまだ荷が重すぎますよ!!」

「しかし君は提督になりたいんだろう？なら少し早まっても、君としては願ったり叶ったりではないのかね？」

「そうですねよ穴戸大佐……あ、昇進は一年後に持ち越しでしたねっ」

「大淀次長……じゃなくて、大淀総長。納得の行くご説明をお願いします」

「世間の声は高まっていますよ？貴方を昇進させたほうがいいと……あれほどの武勲をお立てになった貴方なら、相応の待遇だと思いますけど？」

「どういふつもりだよオ総長オラア？」

いくら日本人の唯一神である世間様が言っつてようと、パツパと昇進させるような真似はできないだろがア。

「そうです、だから一年待ってほしいんです」

この人は超能力者かなにかかよ？出会ったときからずっと俺の思

考回路を読んでもおかしくないな。

「それに言ったはずですよ？前線では全員一階級昇進させると……理論的に考えて、前線に行つた貴方もそれに含まれるはずですよ？」

臨時昇進とは別、などは聞いていません。

斎藤長官も、は？つて顔になつてるし、紛れもなくこの昇進は大淀総長からの差金だろう。将官会議では、俺を昇進させる是非については語られなかったのか？一言返事なのか？あん？海軍大臣の元代理は何をやつてたんだか……俺と大淀さんの間にある密約を大将に露見させないためにも、作戦での話題は控えた方がいいか。

なぜこんなことをする必要があつたのか、探りを入れる前に大淀総長が話してくれた。

「海軍内部でも有名ですよ？貴方は革新派の期待の先鋒だつて……ふふっ」

「っ!?」

その瞬間、俺の脳裏には電流が駆け抜けた。

斎藤大将の顔を見るに、俺と同じ思考が駆け巡つたらしい。俺と大将は顔を見合わせる。

印象が極端なほど覚えやすく、扱いやすい。

八丈島を素早く、客観的には簡単に取り返せた。

つまり海外進出なんてのは容易に可能。

それをやつてのけた前線指揮官は俺だった。

俺がいれば簡単に海外領域に進出できる。

海外進出したいのは革新派。

つまり奪還した前線指揮官の俺は革新派で、持ち上げて海外進出の糧にしたい。

海外に進出する先駆けとなるヒーロー提督の誕生。と、一瞬で大まかだが、この理不尽な世界のラウンドアバウトが見えてきた。間違つていようが結果が良かったんだから、マジカルバナナの的にそう捉えられても仕方がない。

「……どうやら、理解したようですね」

「お、大淀総長!?!君が穴戸中佐を推していた理由はそれかね!」

「もちろんですツ!!彼にとつても悪いこととは思えません……我ら革新派には、モチベーションとなる新時代のロールモデル、シンボル!そう、シンボルが必要なんです!それも外面だけの提督ではなく、若く、勇敢で、そして実績と実力を兼ねた彼のような指導者を!」

大淀中将が、メガネが落つこちそうになるほど過剰な動きで演説したため、俺と大将はドン引きしていた。流石に恥ずかしかったのか、指定の位置までテコテコと赤面しながら戻る。

「ふむ……君は彼をスタハノフにするつもりなのかね?」

「あ、はい!それです!」

正にそれです!と笑顔で合点した。

スタハノフってのは、ソビエトで有名なチート労働者……ここ説明するなら、人間プロパガンダである。

彼が何をしたかと言えば、炭鉱採掘で普通のノルマの1.4倍を産出した事にある。これはすごいことだが、もちろんこれだけに留まらないのが、ここで名前が出た理由でもある。

極端な話だが、国が彼を過剰に英雄へと祭り上げて「全員こいつを見習うべきだ!」と国民を促して生産性を上げようとした事件……通称、スタハノフ運動と言われ、共産主義なのに競争みたいになってるですけどそれは……と言うツツコミは置いておこう。

彼にレーニン勲章、労働赤旗勲章などをメダルを授与させたり、最高会議の代議員にしたり、敬意として8月の最終日曜日を祝日にしたり、町が彼の名前に変わったりー賛否両論はあるけど、個人の名前を上げることで国の方針をサポートし、彼個人としては酷いどころか名誉と待遇に愛された人生だった事には変わりない。たとえそれが利用されていたとしてもだ。

中国ではそれに似た雷鋒という軍人がいるが、まあどの国でもこういう模範的でモラル、士気を上げる人は最低でも一人はいるもんだし、どの国でもやってることさ。雷さんの場合は死んで英雄になったけど。

と強がっているが、同時に理解した……大淀総長は俺を利用し、元

帥を撃破して八丈島を攻略させるのもそうだが、最初からそれを偉業に仕立てあげて、革新派のロールモデルを作るつもりだったんだ。

テレビで俺の昇進が名指しされたのも納得がいくし、なぜサクラミたいなのが俺の名前をあんなに叫んだのかも納得いくぜ。鴨川要港部がテレビに出たとき、編集で良いイメージだけが映されたのもこの人の仕業だろうか？

この世に英名を得た人間を世間様が扱う方法が2つのある。

特に日本の場合はそのだが、出る釘を打って平らにするー我が国の世間様はこれを形状が凹むまでやり続け、やってきたので、土台全体が固くなっているのは必定である。

しかし、柔らかい新世代である大淀総長が編み出したのが、持ち上げて、昇華させて、最大限にそれを利用するという第二の方法である。「と、言うことですよね大淀総長」

「いや、最初は蘇我提督が適任かと思ったのですが、予想以上に貴方の英名のほうが知れ渡っているので、貴方を使わせてもらいました。再度申し上げますが、これはあなたにとってはラッキーな事だと思いますよ？」

つまり、あのDEALが行われた時点で、俺個人の勝敗は決していた。フ、流石は大淀総長。伊達に海軍の知恵袋とは言われてませんね。使えるものは最大限に使いやがる。

もちろん、理論的に考えたら俺にとってはマイナスな事はない。ただ、俺の名前が利用されているというプライドの問題、そして早すぎる昇進によって受ける嫉妬の声さえ何とかすれば、俺の夢に一步步近づいた事となる。実役年齢なんてモノがあつた時代と比べて、俺みたいな士官が生まれる事で従来の常識を打ち破るのだ。

若い指導者の誕生だって、今では珍しくない。

ヨーロッパでは貴族でもないのに三十後半で大統領になったり、若干30歳で首相になったりする時代だ。若さには経験不足が付き物だが、最終的にいい方向へと誘えば結果論として若者の登用が正当化される。

それ利用されているなんて、海軍に入った時から既に士官として

撰取されていたようなもんだし、この世界、何かしら利用して利用されて、利害が一致した場合なんて逆に友愛関係が生まれるんだぞ。そう自身に言い聞かせ、斎藤長官が一時の沈黙を破る。

「……大淀総長。私が海軍大臣を親任された以上は、この国が良き方向へと行く努力をする。しかし外部だけを見て、内部を疎かにするのは愚行である事ぐらひは、言わなくてもわかるな?」

「もちろんです!相変わらず慎重ですね……まあ、とてもいいことなのですが」

「バアン!」

「失礼します!大淀いますか!?!」

「あゝ!明石こつちだおゝ!どうしたのおゝ?」

「実はちよつとやりたいたいことがあつて、軍令部と相談しなきゃいけないって聞いたから……」

「もちろんっ!私ならいつでも相談に乗るよオ!?!ほらほら、いこおゝ」

「うんっ!」

「……………」

明石と大淀という、二人の中将の後ろ姿を見送り、扉の閉まる音と共に、斎藤長官が微かな唸り声を上げて10度ほど前かがみになった。

大淀総長は多分、明石次官に会いに来たんだろうけど、友達とはいえ流石に長官の前でフランクすぎるのもどうかと思うのですが。

置いてきぼりの俺たちはアホ顔でお互いを見つめあった。

「相変わらずだなあの二人は……」

「そうなのですか?」

「ああ……ハア……すまないね、このような事に巻き込んでしまつて」

「いいえ!長官のご命令であれば、全力を持って身をなげうつ所存ッ」

「そう言つてくれると助かるよ……その長官から一つ頼ごことがあるんだが、いいかな?」

「ハッ!何なりとお申し付けください!!」

「昇進させるのは……たしか、一年後だったかな?その理由は分かるかい?」

組んだ手に顎を寝かせながら、海軍大臣はなぜ俺の昇進が一年後なのかという質問を投げかけてきた。人を試しているようなその鋭い瞳は、僅かながら申し訳なさそうに見えた。

「自分は過分な階級を、ささやかな申しようながら、かなり最近に昇進を受けた身です。おいそれと一つ飛ばしのように進級を受けるわけには……」

「君はそれを作戦時の一時的な昇進だと思ってたらしいね」

大淀中将がそう言ったんだよ!?

内定だと思ってたから戦時だろうがなんだろうが関係ないと勘違いしてたが、とんだ落とし穴だ。背中を椅子に寝かせながら、長官は足を組んだ。

「確かにそうだね。でも、もう一つ理由があるんだ……その間、君には今の階級のまま、色々ところで経験を積んでほしいんだ」

「な、なるほど。急な昇進を周りに納得させる程の武勲を立ててからでない、諸提督や士官らの面子が立たぬと……」

「それもあるのだけどね。君には何れ、建設中の長崎警備府の提督と成ってほしいんだ。そのための研修と思ってくれていい」

「……ん?」

長崎警備府の提督……?」

政府が作戦成功と共に発表した海外進出……過激に言えば東亜開放をするとすれば、絶対にその先鋒と主力は佐世保鎮守府を中心に活躍するだろう。長崎警備府は、警備府とはなばかりな攻撃拠点となるのは当り前なこと……つまり。

「つまり……自分に、海外侵攻の先駆けとして艦隊を指揮しろと?」

「そういうことになるね」

え。

「そんな不動明王のような顔をしないでくれ……今や我々の勢いは鎮まる所を知らない。私が退いたところで、革新派は歩みを止めないだろう。だからせめて、人事面だけでも、私が上手くやらなくてはならないんだ」

使命感に満ちた表情に、迷いはなかった。

長官は、そもそも保守派さえいなければ革新派のリーダーとして活躍していたかも知れない。大きな対立を呼ぶのなら、現状維持のままにしたい……それは逆を言えば、対立者がいなければ自分が信じている信念、思想を貫こうとする。

今はおとなしいが、いつ爆発するかもわからない保守派の連中を食い止める方法は、海軍上層部を自分のドリームチームで固めて抑制するか、ある程度譲歩して共に歩みを進めるべきかしかない。

近々選挙もあるし、八丈島奪還を現政権が成し遂げたとはいえ、もしも海軍支持派とかいう軍事力頼みの好戦タカ派政党が政権中枢を握るような事があれば、海軍は事実上国を振り回せる……正に軍国！独裁政権や軍閥化は流石にないとは思うけど、死んだ政治家たちの後埋めとして登場している有能な若き政治家たちには、理性的な程度に保守的でいてほしい。どちらにしる俺がどうこうできる問題じゃないので、天に任せます。

「分かりました……しかし自分の要港部は」

「君の部下たちなら心配はない。私は一応、海軍大臣を陛下より親任された身だ。異動させて欲しいのなら、力の限りを尽くそう……君の部下も、君の下にいる方が真価を発揮するようだしね。それが事実である以上は、やらざるを得ない」

「ありがとうございます」

でもまだ心配は尽きない。

この人だって、鴨川要港部全員を異動させるわけじゃないし、精々俺が指揮した6人を持っていく程度だと思うんだけど、6人以外の全員も色々と濃いからな……新しく着任する提督がどういう対応をされるか、楽しみだな。

あとあそこは東京に近いから注意してほしい、深海棲艦まじで襲ってきたりするから。

「建設中の長崎警備府への異動は何時になるのでしょうか？」

「一年後だよ」

……？

「建設終了予定日は」

「一年後だよ」

「自分の昇進は」

「一年後だ」
なるほど。

つまりは、すべて、計画の内、つてことツスね？

クソオ!!ハメられたア!!ここまでの経由を考えればどのみち避けられなかったんだが、俺はこの日本海軍改め、新生大日本ベリコース海軍イチの海上指揮官となるのか。白露さんが聞いたら「私のほうがいっちばーん!になりたかったのにい!」と地団駄を踏むだろう。それを言われた場合、海軍イチの駆逐艦と、お世辞にも聞こえるがそれで納得してもらおう。

再三言うが、どちらにしろ異動そのものは避けられないし、警備府でどんな命令を受けようとも、法律憲法にでも触れない限り、無条件で従うのが道理である。

もう少しあの要港部にいれると思ったけど、予想以上に早かった。「身勝手ながら、鴨川からの異動は何時になるのかをお尋ねしてもよろしいでしょうか?先程の口ぶりからすると、異動の件そのものは一年を待たないと推測しますが……」

「よく気づいたね。一ヶ月後に舞鶴第一鎮守府の参謀として着任させる予定なんだが……」

予想の斜め上を行って早かった。

第一鎮守府の参謀か……まあ、悪くはないかも。

「了解しました、ありがとうございますごさいます斎藤長官!それでは、自分は何で……」

「あ、ちよつとまってくれ!ついでにもう一つ、個人的な頼み事をしてもいいかな?」

これ以上俺に何をさせるつもりだこのオッサン!?

「自分でできることがあれば、何なりとお申し付け下さい!!」

「……その、本当に個人的なことなのだが……すまない、私としたことが、口ごもってしまった」

「い、いいえ……」

何を緊張する必要があるんですか？

さっさと全部吐き散らかして俺を苦しめてくださいよオ！

「是非、私の子と、お見合いをしてはくれないかな？」

「……………」

バットを打ち付けられたような衝撃が、俺の脳内を揺さぶった。彼が言う子……………つまりは子供、つまりは俺の同僚、同胞にしてあのイケメンメガネ、斎藤中佐の事か。

つまりは……………そういうことですかね。

お見合いネタはもうやったぞ。

お見合い（ガチ）

和座敷とは、なんとも風流である。

暈が我らの心を燻るのは、血液に流れるDNAが眠れる記憶を呼び起こしているからなのだろうか？

快晴の微風は室内へと誘われ、鹿おどしが奏でる音色は聴覚を楽しませてくれるー近くには池があり、錦鯉が泳ぐ姿を眺めながら一杯やるのも、また幻想的なまでに旨い肴となるだろう。

俺は酒飲まないけど。

「初めまして、穴戸です」

ニカッとイケメンスマイルをかました。

「司令、知ってます……っていうか、何度目ですかその挨拶!？」

「あはは、とても可憐な和服姿に目を奪われてしまいました……目を奪われたついでに、記憶まで奪われてしまったのかも知れませんか、あははは」

「か、可憐……って、それもさつきから何回も言ってるじゃないですかあ!」

「俺だって緊張してるんだ、悪いか親潮?」

この豪勢な和室と和風美人は、古来より日本人が想像するお見合いの場としては理想的だろう。

駆逐艦、親潮。

秘書艦、親潮。

黒下着艦、親潮。

桃色の着物を優麗に着こなすこの女性が、まさか俺の身近で何時も執務を手伝ってくれてる人だったとは思ひもしなかった。あの着物の中も黒下着かと思うと興奮してきたぞ。

よくよく思えば、斎藤長官の近親者であることなんてすぐにでも想像がついたはずだ。艦娘になりたての新米だったのに経験豊富な親潮が、ただ普通の艦娘であるはずがない。それに俺へのお目付け役として最初は馳せ参じたらしいけど、クソ真面目な性格だからな……バレルのも当たり前だろ。

当時中将だった長官からその任務を任せられるのは、なにかしらのコネクションがあるか、親族だから信頼できるのか、あるいは他人だけどこれまた何かしらの理由で仕方なくしているのかの三択だった。

バレたから死んでやるとか言ってたから、てつきり脅されているんだとばかり思ってたけど、ただの真面目な性格からきた愚行だったんだろう。

さて、この親潮とお見合いをする斎藤長官の真意だが、端的に言つて俺と結婚させたいからである。こんな有能な提督がいれば、そりや結婚させたいっしょ!?!あとお見合いなんだから、それ以外の理由ないっしょ!?!

と簡単な話ならまだいいんだけど、俺の将来性と、長官と親族になれば、扱いやくすなるだろうという、言わば政略結婚的な事をしたいんだろうと、俺は推測した。俺の推測はだいたい50%程度の確率で当たるから、正に丁半博打である。

そしてこの見慣れない風景を見て思うことが一つある。

東京の日本庭園、マジすげえ!

「あの……ゴホン!親潮、なんでお見合いに来てるのか分かる?つか、お見合い相手が俺だって知らされてなかったの?こっちは知らされてなかったんだけど……」

「知らされてなかったんですかあ!?!あ……」

その反応はつまり、俺は知ってなかったけど、親潮は少なくとも相手が俺だと知っていて、あえてお見合いに来た事になる。それに気づいたのか、親潮の柔らかそうな頬が紅潮し、火照り上がった顔を隠しながら俯く。

何時もとは違う親潮の姿に、思わず可愛いと思ってしまった。いや、普段も十分に可愛いんだけどさ。

いや、もちろん伝えられていたさ……『我が子』とだけ。俺はてつきりあのイキリメガネ……ではなく、学業優秀文武両道の斎藤中佐であると認識していたが、もちろんそれとお見合いなんて拷問みたいなことを長官がするはずない。

つまりあの人は……いや、もう同階級だから、アイツはお兄さんな

のか……フ、こりや傑作だ。

それに肝心の長官が来ていない。お忙しい身なのはわかるけど、流石に二人きりにするのはちょっと頂けないですねえ。鴨川に戻ったとき、仕事がしづらくなったりしたらどうするんですか？

当然、断るべきだ。

でもよく考えてみれば日本海軍の提督、将官の中で独身だった人っていないから……いや、歴史上一人ぐらいは知ってるけど、そんなのはただの言い訳だ。

本当は、個人的に身を固めた方がいいんじゃないかという固定概念と、この機を逃せば将来的に彼女はできても、結婚ができないという負のスパイラルにハマってしまうと錯覚してしまっているのが、親潮を否定できない理由である。

それに、ついに大将となり、何れは元帥になり得る齋藤長官の親族になれば、俺の地位も約束されたも同然。これはやるしかないのか、でも親潮の気持ちとかも考えないとだし、でも何故か否定的な態度は取られていないし……その脳内をかき乱す思考の循環停滞が、俺の判断を誤らせる。

「……親潮、なんでこのお見合いを受けたんだ？嫌だったら断ってもいいのにさ」

「べ、別に嫌じゃないですツ!!あつ……」

「……いつも見たいに否定して？恥ずいから」

「す、すいません!!」

「こりや帰ったら、俺様直絞・濃厚白濁の刑だな」

「……………」

まだ顔が紅く冗談を返す気力がないのか、再びその顔は俯きはじめた。これはいけない、結構ガチで恥ずかしいヤツだ。

「と、とりあえず、この激アツお茶、飲むね？お茶、飲むねツ？お茶飲むから見ててねツ？」

「なんで了承を取る必要があるんですか……」

「秘技……一気飲みイ！ゴクゴクゴクゴク——!!」

熱さに堪え忍べる日本男児を演出するための行動だ。これができ

なくては、漢としての恥である。

(※極度の緊張と混乱から来る奇行です。絶対に真似をしないでください)

「そ、そんなに勢いよく飲んだらっ！」

「——熱い、熱ツツ、熱ツツイネンツツ!!!」

当然、淹れたて3分のお茶は激アツであり、喉を火傷させるには十分な火力を秘めていた。畳の上の転げる俺を見て立ち上がり、介抱しようとする親潮の手にあつた水をバキュームのように一気飲みする。

親潮の迅速な行動は流石は艦娘というべきだが、着物衣装がはだけ、できたスリットから太腿が露出してゐる。しかしそれを気にしないのは、膝枕状態にあり首を動かさない限りは見えないからだ。

頭を抑えられ、上から覗き込む体制から彼女の顔を見る。凄く整っている顔立ちだ。こんな可愛い彼女……いや、奥さんがいれば、人生バラ色だろうな。おまけに優しく何気に嫁スキルが高い。

もう無条件で承諾しちゃおうかなあ……でも「ただお父さんに言われてただけです！勘違いしないでください気持ち悪い！」とか言われたら俺、死んじやうもんな。

親潮が無意識に置いてた手は、俺の前髪を撫でた。緊張から来る紅潮が残るも、一瞬だけにはかんだ笑顔は妖艶にも見えたが、親潮は頭を勢いよく横に振り、神妙な面立ちで俺を見詰め直した。

「し、司令は……今回のお、お、お見合い……私だと知って、どう思いましたか……？」

「可愛い女の子とお見合いなんて滅多にできないから凄く新鮮で、良いと思つたぜ？」

「か、かわ……じ、じゃあ私……じゃなくて！この親潮とのお見合いは、司令にとつては、嬉しいものだ……？」

「えっ、うん、まあそういうことかなー！」

俺の思考回路は、このときから運行停止状態に陥っていたのかもしれない。もしもこの膝枕状態から抜け出して、正式に縁談を断って、なおかつ長官の来場を待たずに帰ることが出来れば、あんなにこじれなかつたかも知れない。

親潮の顔は見る見るうちに笑顔を取り戻していき、やがてひまわりのような満面の笑みを隠そうともせずには浮かべた。

「……えへ、えへへっ。司令が私のことを……!」

自分の世界に入ったような言動の親潮は柔らかい頬に両手を当て「えへへっ」と笑っていた。つられて俺も笑ってしまう。

第三者がいれば狂気にしか見えないが、幸い誰もいない。部屋を構成する複数の襖とその奥の襖も開いており、風通しは最高に良いが、加えて俺たち以外誰もいない。店の人が通るかもしれないが、お見合いが上手く行っていると解釈してもらおう。

親潮との縁談……どうしよう。

「あむうツ!! 穴戸さん鼻の下伸ばしすぎですっ!! あむあむあむあむ!!!」

「あ、それお姉ちゃんのソーセージ!! あー食べられちゃった……」

お見合いの場から歩き一分。もう一軒ほどの庭園を挟んだ先にはビルがあり、ビルの屋上で白露がうなだれる。買ってきた地方限定版の、通称♂カリソーセージが、双眼鏡を覗き込みながら二人の様子を監視する村雨の手によって無残にも奪われたからである。

「姉さんなんでその名前からして買ってほしくないようなもの買ってきたの? 僕だったらタダでも遠慮するよ?」

「分かってないなく時雨は! 男の人の○○○○に見立てたこれを食べれば、男の人からモテモテになるってネットで書いてあったんだよっ! この白露お姉さんの魅力と♂カリソーセージが組み合わせば……私の見積もりだと、一秒で男の人をお猿さんにしちゃうこと間違いなし!」

「かわいそうだから否定はしないでおくけど、僕の見積もりだと、多分それ男の人の前で食べないと効果発揮しないと思うよ?」

「え、嘘っ」

白露は更にうなだれた。

こんなのがヒットするわけないが、商品は紛れもなくSNSやイン

スタグラムの餌食となっている。元々は日本全国で子宝を祈願する時に祀られる男性の男根に見立てた御神体を模したものであり、それを買う理由も、もちろんだが子宝祈願である。

一部の地域に限定し、年齢制限がある理由は説明不要だが、最近の流行りとしては女性がこれをエッチに食べ、それを配信、あるいは動画投稿することにある。

ただ、純粹に、ソーセージを、食べてるだけ。

「アグツツ!!」

村雨の般若の形相と、ワイルドにスライドさせながら噛み砕く食べ方は既に女性を捨てているが、あいにく屋上には身内しかいないので、気にはしなかった。

彼女は二人がイチャイチャする姿にも嫉妬に似た感覚を覚えていたが、憎たらしさを倍に高ぶらせるのは、彼がお見合いの事を『仕事』だと偽っていたことにある。

さらに村雨を苛立たせるのは、親潮が司令に好意を抱いている事実をわずかながらも承知していた事にある。それを知っている村雨の脳裏には、正にドラマで描かれるような意中の男性を奪われる図が出来る上がる。

一方で時雨は、買ったフライドチキンを白露に渡し、ジツと遠くの庭園を見つめる春雨にも渡そうとしたが、春雨が大きく目を見開きながら、信じられないほど小さくなっていった瞳孔を見てずり下がる。

「……あ、あの、春雨？ 双眼鏡ないけど、見えるの？」

「ミエマス」

艦娘は海上で戦うので、目がいいのは基本である。しかし今の春雨の目を表現するのなら、正に人間双眼鏡である。あるいは、殺人未遂現行犯の漆黒に満ちたヤンデレの眼光。

「あの、チキン、食べる？」

「イイデス」

「だ、大丈夫だよ春雨！ 私たちがいつちばーん穴戸くんのことを理解してるんだから！ 浮気なんてしないよ！」

「そうだよ春雨。穴戸くんは親潮のことを可愛いとは思ってるだろう

けど、結婚相手とはちよつとくって思ってるはずだから、ね？」

「モチロンデス」

無言の威圧と、色づいた蜃気楼を纏う春雨は、駆逐艦の枠を超えた働きをした英雄的な艦娘として名前が知れ渡った時雨や白露さえも黙らせる。

殺気の波動、愛ゆえの狂気、そして珍しく暴飲暴食を繰り返す村雨。

これらを見届けるのも、姉妹の愛なのだろうか？

「……………ん？あれは」

庭園外の路地。

「おつかしいなー！鈴谷のGPSだところらへんにいるはずなんですけどー」

「この塀の向こうではありませんこと？」

「でもガチのお見合いは関係者以外は立ち入り禁止だぜ？立ち寄れないヨボヨボの宿り木より…………オレっちみたいないケメンな宿り木と、あつちのエツチなホテルでお茶しない？」

「きもい（ですわ）」

「酷いん…………」

「貴様はなにも学ばんのか」

塀の向こうの約100メートル程度の場所には親潮たちがいる。立派な壁で覆われている日本庭園に入る事ができない事実は、鈴熊はともかく、実際に入ろうとした大洗要港部副司令の結城と、司令官の那智が知っていた。

もつとも那智も付き添っているだけで、庭園に入ろうとしたわけではない。本心としても、例えこの場に二人がいたとしても、その意思が尊重されれば、あとはどうでもいいとも思っている。

鈴熊が来た理由は時雨たちと同様だが、結城が那智と東京に来た理由としては、正式に結城を少佐にするためである。結城が指したビルの屋上には時雨たちがいるので、そちらに向かえば合流できたのだが、鈴熊は別働隊として動いているため、どちらにしろあちらへと赴

く理由はなかった。

「そういえば昇進するんだって？おめでとー」

「ありがとう鈴谷ちゃん！俺からも鈴谷ちゃんの昇進、おめでとー！熊野ちゃんも、おめでとー！」

「ありがとうございますわ」

鈴谷も少佐、そして熊野は大尉階級を得るが、艦娘であり司令官としての活躍は期待されなかったため、大本営には向かわなくてもいいのだが、正式な昇進はまだ先だ。

この四人は偶然居合わせただけが、共に行動している。

那智たちはすぐにでも大本営に赴くつもりだったが、時間的猶予が二人がこのビッグイベントへの関心を膨張させ、なんとかお見合いの様子を覗こうと、どこからか見える穴を探している。

当然ながら、お見合いの場を貸すような良質な料亭、庭園にそのような穴があれば大問題である。無いことも考慮に入れた上で、四人は覗き見る為の作戦を歩きながら論じ合う。

穴を探している最中、一般人からほぼ100%の確率ですれ違い際に振り向かれる。見慣れない美男美女の集団が通り過ぎる様は非日常的だが、そのうちの半分から声をかけられる理由は、大規模作戦の前線艦隊としてテレビに出ていた鈴谷と熊野の顔を覚えていた視聴者がサインを欲しがったことだった。

「ううーん！穴がないよおー！」

「なに言ってるの鈴谷ちゃん！穴ならいっぱいあるじゃん！」

そう言っただけで女性の下半身を見るのはセクハラ以外の何者でもない。

「通報」

「ヤメテヤメテ……でも、この壁の向こうを覗くだけだったら、俺に一つだけ奇策があるぜえ？」

「結城さんの奇策……なにか嫌な予感しませんがね」

「一応私の部下として庇っておくが、結城大尉は参謀としては有能であり、ただのバカではない。良ければ聞かせてくれないか？」

「はい那智司令官！あそこにある電気ショップ店……俺が知る限りでは、高性能カメラ付きのドローンを出していたはず。それを使えば

「……あとは分かるね？」

「あ、なるほど！流石は穴戸っちのお友達だねっ！」

「オレっちイケメンすぎる！ってことで早速行ってみよう！」

四人は向かいの番地にある電子機器製品店へと足を運んだ。大型ビルを持つ家電量販店とは異なる小さな店だが、弁論によるセールスと値段の特化とは異なり、少数精鋭を誇る店員の豊富な専門知識とマナー製品の販売、そして何より柔軟性と早急な修理、そして客一人ひとりに密着して満足させるフレンドリーな接客を行う戦略が、大企業との競争を生き残る最低条件である。

自動ドアを開いて目の前のレジ奥から、黒光り肉体系ングラスのイカツイ店員が出てきた。

「いらっしやいませ！」

結城はコイツを命名するなら“ボブ”にしようと思い、鈴谷は生理的に無理だと目をそらし、熊野は店員よりも最新鋭と書かれたカスタムメイドPCに目を奪われ、那智は店内に目的のドローンがあるかを見渡した。

「こんチワツス!!高性能カメラ付きのドローンの貸出ってできないツスか!？」

「ありますよ、これの事ですか？」

「そうそれぞれ！今ちよつとだけ借りたいんですけどイイツすか!?!ほんの一時間ぐらい!？」

「一時間だけってのはちよつと……一日分の料金を払ってくれるんですけど問題はないんですけどね」

「俺たち金ないツス！」

私用では当然出ないが、呼び出しを受けたときの交通費の支給は現金ではないので、結城と那智は一文無し状態である。肝心の鈴谷と熊野は……最新式のゲーム機を見るのに夢中になっている。

「そうは言われましてもね……」

「お願いー！なんでもするからー！」

「!?!?!」

鈴谷の発言はみんなを驚かせた。

それはもちろん、某有名作品にも出た交尾……ではなく、行為のイントロへと誘う名セリフである。また、すべてのアニメに一度は出ると言われるセリフでもある。なんでもするから……この言葉によって犠牲になった男女が数しれず。

この世界では、名セリフへの返事は決まっている。

イカツイ店員がサングラスを外しながら「ん？」と声を鳴らし、テーブルに広げた両腕を置きながら、一人ひとりを凝視した。

「……今なんでもするって言ったよね？」

「う、うん……」

「……貸してやる」

「ほ、ホント!？」

「その代わり……そこにいるイケメン、ちよつとこつち来い」

「え」

「俺は、いいケツした漢が大好きなんだよオ……!もしこのかわいい子ちゃん貸してくれたらア、一時間と言わず一日無料で貸してやるヨオ!!」

結城が命名したボブは日焼けしたタイプの東南アジア系男子が大好きであり、好きなプレイは調教プレイである（諸行無常）。

「……ホントオ？」

「では、お願いいたしますわ!」

「ちゃんと丁寧に扱ってくれるのであれば……」

「え、ウソ、嘘だよね? 鈴谷ちゃんたちがそんな薄情なわけないよね?」

オレっち、信じてるから!」

結城はもちろん逃げようとしたが、無残にも仲間には押し出され、黒光りしたグリーンベレー出身の強靱な肉体に捕まったが最後、どこまでも深そうな、奥の部屋へといざなわれた。

そもそも鈴谷たちは金を持っていたのだが、結城がそれを知るのはいざなわれ、翌日となる。

お見合い（ガチ） 2

「わあ〜！見てください司令！鯉が泳いでいますよ！かわいいっ……」

「ははは、そうだな……でも、親潮もかわいいよ」

「も、もう……司令ったらっ」

庭園の池の近く。

まずいぜこれ、やっぱり縁談は破棄しようって切り出すタイミング見失ってる。

しゃがみながら池に泳ぐ鯉を見て笑う親潮は、ひまわりのような笑顔で俺に微笑みかけてくれている。再三おれは、これが見合いの場であると言うことを、なんとなくだが意識させている。そうすれば親潮は「な、なにかんちがいしてるんですか！私は司令みたいな気持ち悪い人と結婚するつもりはありません！」と罵声を浴びせてくれて、「なんだとコラア!？」と縁談破棄を申し出るきっかけをくれるかと思っただが……この通り、ノリノリである。

この流れで破棄すると、親潮と楽しい一時を過ごしているのが嫌みたいに思われるから避けていたら、ダラダラと時間だけが過ぎていた。

「司令！あつちに盆栽がありますよ！見てみましょう！」

「おう」

選択肢は2つしかない。

きつちり断つて斎藤長官に土下座するか、親潮が俺をキザいセリフを吐きまくるクソカスと気持ち悪がるまで待つか。俺は歳相応とは思えないほど下品なおちん○ん仮面でもやろうかと思っただけど、さすがにやりすぎだと気が引けると、後の仕事に支障をきたすということをやめておいた。

ライフカードがあれば……いや、あっても2つの選択肢に“親潮とケツコンする”という第三のチョイスが追加されるだけだろう。親潮は俺と結婚するのはやぶさかではないとも思ってるのだろうか？困る、俺はまだ結婚したくないんだ。

親潮はかわいいし、しかも長官の娘だし、あそこでなんかドローン飛んでるし……って、ドローン？

鈴谷たちが立ち寄った製品店の外では。

「Meの祖国ではBest buyっていう家電量販店があるのよ！12月の前のBlack Fridayに必ず行くところなの！」
「は、はあ……」

祖国アメリカの素晴らしさを、数ある店を通る度に謳うアイオワに耳を貸す大鯨が歩道を歩いていた。大鯨は作戦の功績から金鷄勲章を得るために来てるが、目的地を同じくするアイオワが同行していたビスマルクとはぐれてしまったため、探すのを手伝っている。

大鯨は作戦では後方支援の指揮を行っていたため、前線指揮官より目立つことはなかったが、補給と戦闘支援の手腕は海軍上層部でも高い評価を受けており、この勲章授与は蘇我提督と斎藤長官が直々に薦めたものである。

当然、人々が時の人として覚えられる有名人の数は盛り見積もって三人程度であり、大鯨を覚えている人は少数派ではないが、道路を通り過ぎる通行人の目を奪ったのは、たわわで柔らかそうな可愛らしいおっぱいと、これまたデカくアメリカを体現した過激な衣装を着ている金髪碧眼の美女の姿である。

「あーもう！あのGermanどこに行ったのかしら!? Meを怒らせたらどうなるか分かってるはずよねえ!」

「あ、あわわ、わたしに言われてもお……!」

庭園近くの公園。

「これでいいかも?」

「ありがとうございます! 助かりました!」

「いいかもいいかも! 同じ艦娘が困ってるんだから、助けるのは当然かも!」

秋津洲がドローンを飛ばしている。

(※許可がない場合、飛ばしてはいけません)

「それにしてもすごい技術ね。流石は日本だと感心するわ……まあ、私の祖国も負けてないけどっ」

「ドイツも技術大国には違いない。この那智も、一度は行ってみたい国だ」

鈴谷、熊野、那智は公園でドローンを飛ばそうと奔走していたが、操作方法がいまいちつかめず、通り過ぎようとしていた秋津洲とビスマルクが彼女たちと接触する。

軍令部第1課の職員として異動するために来た秋津洲の処置は、提督となつてからの作戦立案能力に長け、優れた能力もさることながら人格的な要素を含めても、軍令部が欲しがるのは無理もない。同じ主席卒業者として目を付けていた大淀総長からの申し出を秋津洲が一言返事で承諾したのは、軍人たるもの命令を聞かなければならないという概念ではなく、軍令部で自分の実力を試せる機会であつたからに他ならない。

艶のある金髪をかきあげて天空の陽射しを仰ぐビスマルクは、ただただ呆然とドローンを見つめながら「なんでこの人たちはやたらとあそこの敷地内を覗こうとしてるんだろ？」と考えていた。

そもそも東京の多彩な街柄を物色していた故にはぐれたアイオワを見つけて、さつさと大本営に向かうべきなのだが、柱島鎮守府でも名前が通っていたあの秋津洲がなぜかドローンを飛ばしている光景が非常に異様で、相方のことをすっかりと忘れていた。

「慣れてるのね秋津洲。前線で戦っていた時代でもドローンを飛ばしていたのかしら？」

「ううん、確かに艦載機は飛ばしていたんだけど、ドローンじゃなくて、二式大艇ちゃんかも！」

聞き慣れない言葉に艦娘たちは頭上にはてなマークを付けた。

スマートフォンを連携させてみる高画質映像はかなりのクオリティーを誇り、鈴谷たちに時代の進歩を感じさせる。

ズームして見る庭園内には、一緒に鯉を見ていた親潮たちの姿を発

見できた。本人たちはどうであれ、このお見合いは第三者からしてみれば既に縁談が成立しているのでは無いかと思うほど仲睦まじい光景であり、鈴谷と熊野にとって微笑ましい状況とは言えなかった。

「あ、手握ってるッ!! 親潮なにやってるのアレ!? 穴戸っちも何デレデレしてるの!?! 爆撃するよオ!?!」

「とおおおおおおうおうおう!!!」

「一体なにを慌ててるんだ君たちは……別に由々しき事態でもあるまいし、むしろ微笑ましいではないか。と言うより、本当に見合いだつたんだな。うん、良きかな良きかな」

「良くないですツツ!!」

「お、おう……あ、結城大尉、帰ってきたのか」

ボロボロの服で帰ってきた結城はゲツソリとした顔で艦娘たちを見渡した。二人ぐらい増えているが、それを気にできないほど体力を消耗している。

「あ、帰ってきたんだー! 良かったよかった」

「良くねえよオツ!?! 危うく別の世界に連れて行かれるかと思ったよオ!?!」

「ごめんごめん! でもドローンも順調だし、結構役に立ってるよ?」

「ソイツは良かったア!……って、秋津洲さんじゃん。なんでここにいるの?」

「秋津洲は今日から大本営勤務かも! 結城大尉は?」

「オレっちついに昇進! 長かったア……」

「おめでどうかも! あといろいろ卒業おめでどうかも!」

「秋津洲さん? 勘違いしてるかも知れませんが、オレっちのしりはまだヴァージンですよ?」

「そう……」

分かった途端に無関心、あるいは残念にも見える顔を見せた秋津洲。結城はこの世に自分の尻が冷酷な黒光り御柱によって貫かれることを望んでいる人が存在することに3秒間絶望するも、3秒後に復活する。

鈴谷が指示して、秋津洲がドローンを操作しながら親潮たちがいる

日本庭園の他にも、ホテルビルの屋上にいる時雨たちの姿も確認し、再度カメラを移動させる際に、大鯨とアイオワの姿が映った。

「あれ、これ大鯨かも？それに隣にいる金髪は……」

「Amerikannerツツツ!!!」

アイオワが映された場所に猛邁進していったビスマルクは、止める暇も与えないほど素早いダッシュで公園を去る。

美脚から繰り出されるスプリントは疾風を起こし、先程までクールビューティー的な態度だったビスマルクの豹変ぶりは、皆を啞然とさせる。

「うお！な、なんだあれは、艦娘か？」

「あれはビスマルクくんだね。一度だけ話したことがある。確かあれは、プリンツ・オイゲンくんにあった時だったかな……」

「一度会っただけで名前まで覚えていたとは、流石です長官」

斎藤長官、並びに斎藤中佐が乗る車を追い越す程ではないが、明らかにその道の選手であるかのような猛スピードで歩道を走り抜けるビスマルクに一驚した。

彼らが向かうのはもちろん、親族のお見合いの場となる庭園である。

「知つての通り、この車内と行き先はともにプライベートだ。だからここでは父と呼んでくれていいんだよ。まったく親潮もお前も、真面目なのはいいが身内だけの場なら少しは肩を落とさないか」

「も、申し訳ありません、父上」

「……………」

わたしもいるんですけど……とツツコミを入れず、運転手として沈黙を守り続けるのは、妙高、那智、そして足柄の妹にして、妙高姉妹の末妹、重巡羽黒。

ほか三人の大人びた容姿とは異なり、まだあどけなさが残る童顔は彼女が所属する海軍省、そして兵学校の教官時代でも評判を持ち込むほどの美人であるp。人当たりの良さ、そして何事にも一生懸命な姿

を見て彼女を批判する者は、ただただ嫉妬深さの権化である。

後に穴戸をして八面玲瓏と称される羽黒が、そのまた後に元帥となる大将、斎藤海軍大臣の専属副官となるのは驚かれることではない。羽黒の能力からしても仕事上の付き合いから推測しても、彼女ほどの適任者はいない。

「それにしても親潮があゝの穴戸と結婚、ですか……」

斎藤中佐は神妙な顔立ちで瞳を閉じた。

両者の想いが一致すればめでたいことだと、不平不満があるわけではない。彼は自分の父が妹にお見合いをすすめた理由を探るべきなのかと迷っていたのだ。

穴戸の予想通り、斎藤長官の意図は親族にすることで結束力を強めることにあつた。今でこそ名前が通るようになった彼の英名は、今後の競争を激しくするとして、先手をとっておこうとしているのだ。しかしそんなことを言えば、長官は自分の娘を政略の道具として使う人格破綻者として心情を悪くするところだが、あいにく彼は家族を愛している。

親潮とのお見合いを執行するにあつた最低条件、そして何よりこのビッグイベントの発端は、親潮の気持ちにあつた。

定時連絡として入れられていた電話では彼のことばかり話し、声色はとても晴れやかであり、少なくとも嫌いな相手のことを話している印象はなかった。

斎藤中佐は、早とちりがすぎる、もしも勘違いだったらどうするんだ？と考えるところだが、人の本質を見通すほどの慧眼を持つ彼が身内のことを理解できないはずがない事も、無条件で信じるだろう。「なにか不満があるのかな？提督育成プログラムの時から彼と寝食を共にした仲なのだから、彼の人柄は私より分かっているはずだろう？」

「はい。ただ未熟ながら、時間の経過というのがこれほど早いものだったとは、と、改めて思い知らされた気分です」

「ハハハ、私の歳になってみるといい、時間は更に加速していくぞ？そうは思わないかね羽黒くん？」

「あ、は、はいっ！」

なんで今のわたしにフットたんだろ？と羽黒は思いつつも、なんとなくその気持ちが分かった気がしていた。細かいことだが、車を発進させて一時間近くが経っているのにもかかわらず、まるで数分間のように思えた感覚は、子供の頃には感じ得ないものだったからだ。

到着した日本風味な建物の前に、黒光りする車が停めてある。それだけでも通行人の目を、一瞬だけだが、奪う要素となるだろう。

運転手が外から後部座席まで回って開けるのは伝統のほであり、VIPが降りる際に敬礼するのは士官としての礼節である。これを敬礼ではなく、両膝に腕を携える形式の礼でやれば、ヤクザ風になる。羽黒は駆け足で長官が乗るドアを開けようとしたが、プライベートだからという理由で先に開けられていた。

同じく斎藤中佐も気にせず車を降りると、数十メートルほど離れた場所で数人の低身長な女性たちが屯する姿を目撃した。あれは舞鶴に行った時にいた艦娘——記憶力の面で長官を褒めていた斎藤中佐も、その才気を十分に受け継いでいる。

その一方で屯している艦娘の一人が、斎藤長官や羽黒の姿を見て驚いた。

「あ、あれって斎藤提督びょん!？」

「あら本当だわっ、相変わらずかっこいい……」

「もう東京にいるとは聞いていたが……まさかこんなところで見かけるとは」

舞鶴鎮守府に所属していた艦隊の三人である卯月、如月、長月が自分たちの元上司の存在を確認した。

コンビニで買ったフランクフルトをもぐもぐと頬張る三人は、さながら休日の女子高生のようだが、彼女たちははれつきとした艦娘である。姉妹はよく似ていると言われるが、その性格も容姿もフランクフルトの食べ方も千差万別。

卯月はパクりと、長月もガブリと、如月はしゃぶしゃぶと。

如月の食べ方は特に問題があり、麗しい容姿と妖艶な雰囲気、一般通行男性の股間と煩惱をこれでもかと揺さぶる。注視するために止まる者が多く、路上を滞らせるとして長月がやめるように促したが「女の子はどんなときでも、視線を浴び続けたいものなのよ」と反論してきたため、「このフランクフルトで長月のボルト締め技法を鼻の穴に叩き込む」と脅されたので、しゃぶしゃぶからチュパチュパへと変更された。

「一応上官だった人だし、挨拶したほうがいいのかしらあ？」

「いや、私たちの顔など覚えてはいないだろう。気にしないほうが一番だ」

「挨拶するしないはともかく、なんでここにいるのかすぐく気になるぴょん！」

卯月は食べ終わったフランクフルトの棒を10メートル離れたゴミ箱に投げ捨て、手をワシヤワシヤさせながら不敵な笑みを浮かべた。

姉妹二人は悟るーこれは卯月の悪戯心に火がついたと。流石の卯月でも、海軍上層部の頂点に対して足を引っ掛けるような真似はしないだろうが、少なくとも事の全貌を知りたいと思う気持ちは強く、それが艦娘界のロキを尾行モードにする。

「あ、あまりおふざけはしないほうがいいと思うの！だから卯月ちゃんおちついて！」

「うるせエぴょん！この駆逐艦卯月は、誰は相手でも狙った獲物はぜったいに逃さないぴょん！」

「大げさなセリフだが、ただ何をしているのかを覗き見ただけじゃないのか？」

「それでも大問題でしょう!?あ、ちよつと卯月ちゃん！」

卯月は腰を低く落とし、長官たちが入っていった玄関の門を、仲居や羽黒たちの目をかいくぐる。このとき既に如月と長月が止められない所まで来てしまったため、独断での行動となっていた。

「……ん？」

「！」

仲居のババアが卯月の入った茂みの中を見ている。薄い緑に囲まれた子供を見つけるのは困難だが、不可能というほどでもない。

早速侵入に失敗したかと思っただが、このお婆さんは近眼であり、目を細めても隠れ上手である卯月の姿を認識することはできなかつた。

去つていく仲居の姿に、思わず溜息を漏らした卯月。スニーキングスキルは天下一であり、その昔、あの春雨にもこのスニーキングスキルを習得させたほどの逸材である。

スパイ活動、破壊工作などのテクニカル、そしてタクティカルアクションにも優れる卯月は、時代が違えば、艦娘として戦うよりも活躍できただろうと、舞鶴時代から見えていた穴戸は思っていた。

見つかりそうな緊張感が全身を走り抜ける中庭の広々とした空間には通常、庭師や従業員が手入れをしているのだが、現在お見合いの場として使われている故に、当事者である二人しかない。

「あれは……穴戸びょん!? それにあの女の人は……そして……斎藤提督と羽黒さんと、例の陸軍メガネと……」

卯月の脳内は、限られた情報しかない状況下から、大まかだがいくつかの推測——それらの中から無意識に3択へと絞り込んだ。

一は、二人と長官一行は関係ない。

二は、あの少女は実は長官の娘である説。

三は、あれは穴戸の妹説で、同行していた陸軍クソメガネとのお見合いする説。

二番目が正しく、卯月もなんとなくそれを信じようとしていたのは、彼女が理論的な頭脳を持つ頭のいい艦娘だからではなく、その逆を行き、ただただ「面白そうだから」という単純明快かつ非論理的な理由からだつた。

距離にして、これまた10メートル範囲のところで笑い合う二人の男女。仲居さんの持ってきてくれた料理を見て、屋内に戻っていく二人の後ろ姿は、卯月の個人的な見解からすれば悪くないと感じていた。

しかし違和感を感じいた。

舞鶴時代から、長いあいだ名前を呼び合い、仲間として切磋琢磨し

ていた卯月だからこそ感じた疑問だろうー卯月は、これまた個人的な意見だが、時雨か村雨とくつつくと思っていたが故に、全く知らない美少女と仲良くお見合いをしている姿を見て、なんとなく違和感を感じたのだ。

だがそれは、決して悪い感情ではなく、むしろ面白そうな展開になりそうだという予感を胸にし、長官一行の尾行をやめ、穴戸のお見合いを見届ける事にした。

「あははっ、もう司令つたらっ！」

「アハハハ、ハア……」

緊張で出された料理の味が分からない。

「ど、どうかしましたか司令っ？ま、まさか、どこかお体の調子が……」
「えっいや、まあその……なにぶん多忙だったから疲れが中々取れないんだよなあ……」

「……すいません司令。司令が疲れてるのに、私だけはしゃいじゃつて……」

親潮は先程のニッコリ笑顔から一転、暗い表情で顔を俯かせた。

「い、いやいやそんなことない！親潮の元気な姿を見ると、元気が出るんだ」

「ほ、ほんとうですかっ？」

「ああ」

子供が向けてくるような、しかし両頬から鼻にかけて血色をよくし、安心感を得たように細くした目と、女性らしい仕草には麗艶さもある。

……クソオ！かわいいじゃねえか。

本当にケツコンしようか。

「楽しそうだね」

「さ、斎藤長官!？」

親潮とおいちー料理を食べているところに、突然の来訪者ー開けられた襖から出てきたのは、なんと海軍のトップ！そして後ろからズ

ラズラと続いてくるように斎藤中佐、そして……秘書艦？かどうかは分からないけど、黒髪ショートヘアの美人が入ってきた。

明らかに仲居さんではなく、海軍の艦娘的な格好をしてる美人さんが「上着持ちますっ！」と言ってきたのを「ありがとう羽黒」と長官が返したので、名前は羽黒さんと言うらしい。

長官と中佐という家族同伴なので、親潮の母かとも思ったが、若すぎるし、中佐も羽黒と呼んでいたので違う。

お見合いをしていたとは到底思えない動作で俺たちは立ち上がって敬礼するが「プライベートだから」という理由で敬礼は返してもらえず、楽にしろと言われた。

いや無理でしょ。

「久しぶりだな二人とも、元気にしていたか？」

「俺はいつも通りツス中佐」

「ハッ！斎藤司令も白浜要港部にて武勲を上げていると聞きますツッ！」

「さつき父上に敬礼をやめろと言われたばかりではないか……それに、プライベートなのだから私の事はお兄ちゃんトー」

「いいえツッ！結構ですツッ！」

「っ——」

中佐のローマ像みたいな顔はじめて見たかも。

親潮は少しキツめの言葉で突っぱねて、お兄さんである中佐をカチコチにしたがークソ真面目という言葉が何より似合う親潮だ。緊張からか、身内でも通常運行でいくのが彼女である。

「ハハハ、これほど真面目な娘は今どき珍しいとは思わなかね穴戸中佐？」

「は、ハ！可憐な御嬢さんとのお見合いの場を設けて頂き、この穴戸幸甚の至にございますー！」

「ハハハ、そう思ってもらえて娘も嬉しそうだよ」

横にいた親潮は本当に嬉しそうだった。

立ち直った斎藤中佐も「フツ……」と良さげな感じに鼻を鳴らし、羽黒さんも「ふふふつ」と微笑ましそうに笑った。

これ、普通に考えて結婚まっしぐらじゃないですかね？結婚したくないのに、この大団円的な雰囲気があるのをケツコンへと強制して、抗う力を抑制している。

「……うん、いいね。学業は二人共に優秀、健康な身体付きであり、もちろん離婚歴もなく、現在付き合っている異性はいないどころか、親潮に至っては知る限り、これが初めての経験……これはもう、ね」

斎藤長官が紙を取り出し、これはもう結婚まっしぐらだね、と言わんばかりの熱い視線を送って来る。

「そ、それって身上書ですか!？」

「ああそうだが……」

「貸してくださいッ!!」

長官から紙切れを強引に取り上げた親潮がジツと見つめるのは、身上書という、お見合いでの履歴書である。もちろんこれは俺が書いたわけじゃないし、親潮のも貰ってない。スリーサイズが書いてあるわけじゃないんだし、誰が来ても断る予定だったので意味がないと思ったからだ。

親潮の頭越しに覗くと、俺の個人情報がびっしり書かれてあったの、言うまでもない。もちろんこれらは海軍本部が保管してある膨大な情報のほんの一部であるが……親潮には見せてなかったのか。

海軍大学校の時に行った鎮守府研修って履歴のうちに入るのか。最近の八丈島のことまで書いてある……これが履歴に乗るとか……恥ずかしすぎる。

「というか親同伴とか……俺の爺さんに同伴頼む必要があるとしても、アレは絶対誘いたくない。」

「し、司令のご家族は、いらっしやらないのですか?」

「うん……ちよつと、無理だね」

「あつ……そ、その……す、すいません!」

何かを察してくれたようで、申し訳なさそうに謝る親潮。いや、こっちこそごめんね……俺の爺さんってちよつと特殊だからさ。

あのぬらりひよん絶対「チンチ○遊びしようかア……!」とか言い出すから、これでも親潮のことを守ってるつもりなんだぞ?アレとも

絶縁したら血縁者いなくなるからやらないけど、結婚引越し出産まではすべて俺に一任させてほしいもんだ。もう大人なんだし。

少し沈黙が流れそうなのこの空間に間髪入れず、斎藤長官が咳払いと共に本命本題、そして究極の選択肢……あるいは、答えを尋ねてきた。「……」コホンッ、単刀直入に聞いてもいいかな？ 親潮との、これからの向きについて」

「……………」

重力が倍になったかと思うほどズッシリとした重荷が全身を覆いかぶさり、沈黙と四人の視線が俺を刺す。

親潮は、上目遣いでこちらを見上げ、火照り帯びた瞳が潤みながら俺の顔を映す。親潮の気持ちはどうなるんだと聞きたかったところだが、そんな顔されたら、親潮の方の答えはもう決まってるみたいなものじゃないか……俺は作戦中の吊橋効果で親潮が「わ、わたし、もしかして司令のこと……すきい……？」みたいな展開になったらどうしようかと思っただが、案の定それは的中してしまったのか？

だとしたら、それは偽の感情だ。親潮には俺よりもっといい人が見つかるとは！

これをこの家族の前で言える覚悟がある海軍軍人が居るのだとしたら、ぜひともその人数を算出してほしい。

……ここでオチ○チン仮面を発動するか？

『その答え、少し待ってはくれないだろうかッ！』

「……………」

お見合い（ガチ） 3

「ぱ、パパあー！ハア……ハア……ちよつと……待ってつてばあ！」
「す、すまない古鷹、少し早かったか……」

「「そ、蘇我提督!」」

お見合い料亭にて、その場にいた全員が驚きの表情を隠せないでいた。何故なら、突然俺の上司が乗り込んできたのだから、無理もないだろう。

古鷹は走ってきたのか、息を整えている。

「そ、蘇我提督……どうしてここに？」

「ご聡明な斎藤長官ならば、この私と同じことをお考えになられているかと思ひまして……不躰ながら、乗り込ませて頂きました」

提督、お見合いの場に第三者が乗り込むのはガチで不躰です。提督はかなり直球なところがあり、しばしば考えたことと口に出す言葉が直結していることが多いが、それが逆に指揮と命令を簡潔にしており、更にそのサツパリとした人柄もあり、司令官としては理想的である。

古鷹の妹である加古も、その性質を受けているのではないかと思つた。

「斎藤長官……穴戸は小官の部下であり、小官にも娘がいる事をお忘れなきよう」

「……なるほど」

二人の間に火花が散った。

「穴戸オ！古鷹を嫁にしてくれエ！」

「……え？」

「な、ななななに言ってるのパパあつ!!」

「でも今を逃せば親潮さんと結婚してしまうぞ？それでもいいのか？」

「っ!!んっ……で、でも、その、あの、その……っ!」

古鷹は手を無造作に振りながら、バグったかと思うぐらい首を横に振っている。落ち着いた時には、顔をぷしゅーっと赤く染め、うつむ

きながらこちらを上目遣いで見上げてくる。

もじもじさせながら形のいい胸が細い二の腕に押しつぶされ、はみ出してしまっているところは、まさにおっぱい。

古鷹が嫁に行くどころか彼氏を作ることすら嫌っていた蘇我提督。一体どんな風の吹きまわしで俺と結婚なんて……俺個人としては、古鷹永久独身政策には賛成だったのに。大天使フルタカエルは不滅の生娘として君臨するべきなのだな。

「ふむ、では蘇我提督の娘さんと私の娘……どちらが彼と結婚するか、当事者である彼に決断してもらおうのは、如何でしょう?」

「!?」

横暴すぎる。

斎藤長官も俺を親族にしたいらしいけど、蘇我提督も同じ思惑なのか……この調子だと、全国の提督の娘さんと結婚させられるかもな、ハハハ。

いや、全然嬉しくねえよ?モテてる相手って娘さんからじゃなくて、提督たちみたいなおツサンからじゃないかッ!いい加減にしろ!俺は、これまた当事者である古鷹と親潮に救援シグナルを送るが、何故か応えてくれない。これはつまり、この二人ならどっちがいいのかという意見を、俺の口から聞きたがっているということとなる。

どんな状況下でも優劣を付けたいのは、女性の性だともいうのか?こんな状況で、しかも俺みたいな男の意見だぞ……?

羽黒さんは……あまり知らないから、斎藤中佐にシグナルを送ってみた。同期なんだ、助けてくれるよな我がライバルよ。

「……確かに親潮や古鷹とどちらが好みなのか、興味が湧きますね」
は?殺すぞクソ眼鏡。

「なにを言ってるんだ?妹が穴戸と結婚できなくてもいいのか?」

「確かに応えられないと言われるのは耐え難いものです。かと言って、嘘をついてまで問いに答える必要はないと思います……虚言による愛は、言い終えたあとは、ただただ虚しいだけです」

「……なるほど」

流石は七光り眼鏡!ポエムみたい!

要はその気がなくて、嘘つくぐらいだったら二人共フツてしまえということなんだろうけど。

「ではどちらを選ぶんだ？」

結局選択を迫られる。

親潮と古鷹を……特に古鷹、突然連れてこられたにも関わらず、いきなり結婚相手を確定される身になっているその古鷹。何も感じないのか？何も反論しないのか？超プライベートで個人的な事を親が決める時代は現代の中東周辺国家でもありえないと言ってやらんのか？

古鷹も反論するときには反論する娘だと分かっているが、熱を帯びた瞳は親への反論よりも俺の答えを聞きたがっている様子だ。親潮にもHELP！と目線を送るが、古鷹と同じく俺自身の答えを聞きたがっている様子だ。三者、わずか3秒間程度みつめ合っただけで、会話よりも早く確実な意思疎通を可能としたところで、俺の脳内は滞る。

「穴戸！」

大将、中將が詰め寄ってくる。

ダンディーナイスミドルな長官と、相変わらず屈強で歳の割にテカテカしたボディービルダー顔負けの上腕二頭筋な中將。こんな二人に詰め寄られるなんて、イケメンCEO社長系のネット小説でもない展開だぞ？

一度、誰かこの言い寄られてみてくれ。

気絶もんやで？

「ちよ、ちよつと待ってください！なに勝手に話をすすめてるんですかあー！」

「司令が困ってます！下がってください！」

両手を押し出すように、自分たちの親を牽制した。

「わたしの結婚とパパは関係ないじゃないですかあー！」

「そうです！司令にはお相手を選ぶ自由があるはずですよ！」

「し、しかしな……！」

「しかしもしもへったくれもありませんっ！！！」

驚いた顔で一步引いた二人のおっさんはこう見えても英雄的な提督であり、お偉いさんとして海軍の上層部を指揮する立場にあるのだが、この通り娘の前ではただの父親らしい。

「そ、それで司令は、親潮と古鷹さん、どちらいいのですか!？」

助けてもらって間一髪助かったと思つたら、二人はこちらに振り向いて父親たちの愚行を繰り返している。

「な、ちよ、待つて! だいたい古鷹は今回のお見合いとは関係ないじゃん! なんて俺の意見なんて知りたがるの!？」

「そ、それは……さ、察してください!!」

そんなこと言われたら選ぶか振るしかないだろポケエ!? 俺は自分で選択するのが一番嫌いなんだよオ!! もうやばい、ドンドン接近してくる二人を、俺は牽制なんてできない。

いつもながらクソ真面目そうな眼差しは真剣そのものである親潮と、つぶらな瞳で見上げてくる古鷹。息を飲み込む……どちらにしても幸せな人生が待っているんだ、何を躊躇する必要があるのか？

と、俺が半ば自分のプライドだのなんだのを諦めようとしていた、そのときだった。

かなり近くだと思われるが、突然バァーン! と爆破音がした。方角にして繁華街だ。

「な、なにごとですか!?! まさか深海棲艦!？」

「い、いや、そのような報告があれば私の方に来るはずだが……」

「そ、そんな事より司令です!……って、あれ?」

「き、消えちゃった……?」

消えたわけじゃない、床下にいる。

爆音と共にみんなの視線が俺から離れ、その隙を狙ったかのように引きずりこまれた。ジメジメした空間への突然の誘いは頭を強く打ちそうだったが、身体に当たったような柔らかい感触がそれを防いでくれた。

「ぶつぶつぶー! 穴戸すごい事になってたぴよん!」

「う、卯月!?! ど、どうしてここに……」

「説明は不要ぴよん！ここから12時方向に行けば、玄関まで一直線ぴよん」

「おい卯月イ……おりや別に助けてほしかったわけじゃ……」
「本当ぴよん？」

旧知の同僚の目は、すべてを見透かしているような鋭い瞳だったが、それと同時に感じる駆逐艦卯月というなのトリックスターの眼光。

卯月の本性は、もちろん業務では出さないが、プライベートではとことんイジったり騙したりして楽しんでる悪戯っ子なイメージだ。

ここで逃げることによって成る面白そうな展開というなの“エンターテインメント”を期待を膨らませているんだろうが……いや、今の俺には逃げるか答えるかの選択肢しかないんだ。

『たぶん司令は、あの爆破の真相を確かめるために急遽走っていったに違いありません！』

『軍事行動といい個人の素早さといい……流星は穴戸だ！』疾風の穴戸“と呼ぶに相応しい人物ですなあ！尚の事欲しくなりましたぞ！』
その二つ名やめろ。

あと欲しくなるのか……ウツろ。

勘違いに助けられて建物を退出していくみんなの足音が頭上から聞こえた。

「どうするぴよん？うーちゃんがいうのもアレだけど、今回のうーちゃんの忠告は聞いたほうがいいと思うぴよん！」

「二人を選びつもりがないんだったらってこと？」

「そうぴよん！副班長には色々とお世話になったぴよん！だから、個人的にも今はお礼がしたいんだぴよん」

「卯月……ありがとう」

すぐに卯月を背にして玄関に向かった。後ろから聞こえた「頑張れっ」という声が俺の心に火を付けたが、この頑張れという言葉の真意は「頑張って面白い展開にしてこい」という意味だったのを知ったのはずっと後のことになる。

繁華街。

人が一帯を囲むぐらい大騒ぎになっているが、それ故に親潮たちは俺の存在には気づかない。親潮たちへの気持ちに応えるのを逃げるとは言いが、勘違いを勘違いのままにしておかないのが、俺の流儀なのだ。いい勘違いは真理、真実にしてこそ漢の勲章が上がるというものなんだ。

だから繁華街での爆音の原因を突き止めようとする努力を見せる必要があるんだが……生憎、原因は人が囲む中にあるのが常識である。

「MeeeeeのChickenツツツ!!なんで取るのよオオオ!!」

「Weil es so aussieht, als würde Sie zu spät kommen, weil Sie sich verlaufen haben! Dummer Amerikaner (お前がはぐれたせいで遅れそうになってるからだろうがア!!単細胞アメリカ人ガア!!)」

「This is *cken Japan so speak English Cocker!! (ここは日本だぞ英語喋れクソアマガア!!)」

あの……日本なので、日本語喋ってくださいませんか？

まさに晴天の霹靂とはこのことか、あの外国人鎮守府……いや、泊地の艦娘であるビスマルクさんとアイオワさんが外国人喧嘩動画のように罵り合っている。親潮たちの手前なので見逃せないが、この人達を牽制できるのはあのあまり有能ではない提督である荒木大佐しかいない。

「ふ、ふたりともやめてくださあーいっ!」

「そうかもーみんな迷惑してるかもー!下がるかもー!」

「外野はア黙ってるオ!!!」

そしてなぜかいる大鯨さんと秋津洲さんの説得も虚しく、取っ組み合いが膠着状態のまま続行する。

野次馬の中にはスマホを取り出す者が多く、現代社会が誇る“面倒事には口を突っ込まないけど、動画だけは撮って帰ってネットで晒す”という醜悪かつ卑劣で無責任なゴミ文化、あるいはカス的集合的ク

ズ的無意識を行う者が多い。

それを牽制するよりは喧嘩をいち早く止めたほうがいいんだが、同じく野次馬の中で身を震ませる海軍三長官の一人がいる中、喧嘩を鎮めることができるはずだが、生憎出ていけないのは俺にこれを静めろという意味だろうか？なんという無茶振り。

Chickenってことは、あのコンビニのチキンを食ってたのか？あれは旨いから取り上げられるのは確かに痛いしムカつくだろう。仲直りの印として持っていくため、近くにあったコンビニに入り、チキンを8個分買い、お釣りは入りませんとイケメンフェイスで女性店員にウイंकしたところを戻ってきて二人の中に割って入る。

この間、わずか30秒。

「その喧嘩、少し待ってはくれないか!？」

「し、シシード!？」

「穴戸さん（かも）!？」

「ここにあるフ○ミチキ……これで喧嘩は手打ちにしてくれませんかねえ!?ここ人が入り組む場所なんです!ー迷惑なんですよオ!ホントマジで頼みます!!PLEASE IOWA BISMARCK!荒木大佐も泣いてますよオ!？」

「あ、荒木大佐ってどつちの……」

「あんなたちの上司の方に決まってるだろうがアアア!!」

「は、はいいいい!!」

仲裁され事件が終わると蜘蛛の子を散らすように散開していく野次馬共の中から親潮たちが現れた。

蘇我提督は、うんうん!と首を振りながら、やはり古鷹が嫁に行くなら穴戸以外ありえない!と言ってきた。

「ありがとうかも穴戸中佐!なんでここにいるかわからないけど、とにかく助かったかも!」

「ハハハ、いいってことですよ秋津洲さん、大鯨さん。それよりも、あそこの二人も含めて、どこへ行くつもりだったんですか?」

「だ、大本営ですう!皆さん全員、大本営に向かうとちゆうだったんですがあ……」

「では早急に向かってください。その間、このチキンを二人に渡しな
がら向かってくださいいね？そうすれば、暴れることはないでしょう
か」

本当はタクシー二台分呼べば済む話なんだが、それをすると後の二
人の関係に影響が出るんじゃないかという、ある種の固定概念が、四
人での同行を提案させた。幸いにも全員同じ方向なんだし。

手を振りながら大本営に向かう秋津洲さんは俺の指示通りにビス
マルクの手を握り、同じく大鯨さんもアイオワさんと腕を組んでい
る。一見すればレスカップルたちのダブルデートにも見えなくはな
いが、そんなことはさつきここで起こった外国艦暴走事件に比べれば
些細なもので、アレが長引けば絶対に海軍の威信を落としていたとこ
ろだろう。

帰ったら二度とやらないようにあの荒木大佐に釘を刺しておかな
いと。

「さ、流石です司令！あんな怖い人たちを一瞬で鎮めるなんて！」

「いや、あの人達は俺の知り合いだったからさ、偶々扱い方を知ってい
ただけで、俺がすごいとかじゃないよ」

「謙遜することはないよ。流石は穴戸中佐だね。これはもう……ね」
相変わらず親潮との縁談を視線と空気で勧めてくる長官。

蘇我提督も、上着を脱いでいるせいか露出している大胸筋をピクピ
クさせながら俺ヘアピールしてくる。いや、それ意味ないから。古鷹
の魅力と提督の筋肉は全く関係ないことを、提督は理解しているのだ
ろうか？

せっかく卯月が、問題をスムーズに回避してお見合い話をウヤムヤ
にする機会を与えてくれたっていうのに、また振り出しに戻ってし
まった。

なにか彼らの視線を逸らせるものはないのだろうか？

……ん？

「またドローン……？」

人々の目を奪ったのは、かなり正確かつロボットの動きをするド
ローンの姿である。

機会的で、人によって動かされてないような鋭い前進、後退、そして空中停止を繰り返すのはトンボにも似ているが、それが行き交う住人へ安心感を与えたのか、通報する者はいなかった。

かといって視線を奪わないわけではなく、ドローンのカメラがこちらを見続けているとなれば、自然と注目は俺たちの集まる。

ドローンが飛んでいる方向から、先程とは違う四人が走ってきた。

「鈴熊!？」

「ハア……ハア……!!き、探したよ穴戸っち!!」

「いきなりいなくなるかと思えば……ハア……ハア……やはりこちらに来ていらしたのですね……!？」

突然すぎる鈴熊の登場に、俺を含めたみんなは啞然とした顔を隠せずにいる。

後ろからせつせと走ってきたのは那智司令官と結城……結城からは進級の為に大本営に向かうと言われていたので東京にいることは知っていた。だから大方、鈴熊と合流してたまたま居合わせただけってシナリオは容易に想像できるけど……何故かここにいる鈴谷の手には、あのドローンを動かしていると思われるリモコンがガツシリと握られていた。

「穴戸っち大本営行くとか言って親潮とお見合いしてんじゃん!!なにしてんの!？」

「い、いやこれは……っていうか、なんでお見合いしてるって知ってるだよ!?俺が大本営行くとか普通だろ!?なんで今日だけエ!？」

「村雨さんが教えてくれたのですわ!」

む、村雨ちゃんが……っていうことは。

「村雨ちゃんがここに……ってこと?」

「そうだけど!そんな事よりなんで親潮とお見合いしてんの!?説明してよ!？」

「とおおおおおおうおう!!」

「お、お前たちには関係ないだろ!いい加減にしろ!」

「うううそうっていじわるいううう!!!」

さながら子供のようにはっぺをプクツと膨らませて地団駄を踏む

鈴谷。熊野は奇声の割には一見して冷静さを保っている。

俺を見ながら激おこする鈴谷たちとは違い、那智さんや結城は自分の新上司である蘇我提督と斎藤長官に慌てて敬礼する。まさかいるとは思わなかったと言わんばかりの表情だが、それはこちらとて同じことよ。

『え、アレってテレビに出てた穴戸さんじゃない!?ちよ、メイクメイク……』

『え、海軍の!?ヤバ!まだ若いのに、うわ、ヤバ濡れてきたんですけどグフフツッ!』

『あそこにいるのは一緒に戦った鈴谷さん!?ドスケベ艦娘の鈴谷さんじゃん!!俺の股間にサインほジイいい!!』

「鈴谷ア!!テメエがうるさくするから目立つちまったじゃねえかオオ!?どう落とし前つけてくれるつもりだアア!」

「え、だ……だって、穴戸っちが鈴谷に内緒でどっかいつちやうんだもん……っ!んんっ……!!」

「う……」

ウルウルした瞳が鈴谷の口をへの字にしている。

今にも泣きそうな顔であり、そんな顔にさせた俺を隣にいる熊野は般若の形相を浮かべている。

熊野は初めて右拳を握り締めたその瞬間、炸裂するは——くまのんFIST。縮地を使うことで詰められる一瞬の距離とその助走により、俺のアゴは粉碎されること間違いないだろう。

俺は、静かに目を閉じた。

「熊野、もういいよ」

「……、時雨?」

熊野昇竜拳が首に当たる前に、時雨が肩を叩いて止めてくれた。

その後ろをズラズラと移動してくるのは、白露軍団——ついに彼女たちまでもが、この繁華街に姿を現したのだ。さながら映画のラストシーンか、あるいはクライマックスで全員集合するアレか……ここの

街の歴史は知らないけど、歴史上トップ10に入るほど異様な光景なのは確かである。

これほど多くの司令官や海軍軍人が集まる……しかも、海軍の中心人物らや、現在話題沸騰中の俺たちなどが一箇所に集結するのは、もはやフラッシュユモブ。

「宍戸くん……お見合いしてたことをとやかく言うつもりはないよ。鈴谷を泣かせようとしたのは許せないけど、君の自由だしね」

「ひぐつ……ないてないっ!!」

鼻を赤くしても説得皆無なんですけど。

それに引き換え、村雨春雨ちゃんはガチで怒ってる感じがオーラかわかる。蜃気楼……っていうの？なんか禍々しいのが見えるんだよね。

着てる服、ブラウスとかエロツ。

「え、宍戸くんってホモじゃなかったの!?綾波から聞いててつきりそうかと思っただけ……」

「白露さん、公表の場でそれ言わないでください一言一言がガチでSNSに載る時代ですからお願いしますツツツ」

「ご、ごめん……」

野次馬がドンドン集まる中で、ぶち壊してやりたいスマホを天に掲げ、今のところ綺麗に纏まっている海軍の醜態を世界に晒そうとして奴らと、娘を結婚させたがってる親父たちの手前、予想外に冷静さのある時雨がハンドサインを出してきた。

俺と時雨しか知らないハンドサインは、至ってシンプルに纏められていた。

ここで 答えろ

時雨はそうとだけ言って、俺に全てを託した。

それは長年の友人の門出を見つめる目であり、時雨の瞳には「いま応えた方がいいと思う」という念がギンギシと伝わってきた。

野次馬の中から卯月……そして何故か長月や如月までいるが、もちろん那智さんたちや古鷹たちも俺に視線を集中させ、どっしりとしたプレッシャーが重くのしかかる。

「お兄さん……」

春雨ちゃんが今度は不安げな表情を見せる。

俺は決断をする時が来たのだ……人生で一世一代の、大きな決断を。日本人の三分の一、アメリカ人の半分が離婚してるこの世界、結婚しても合わなかったら離婚すればく？なんていうデイストピアが生まれつつある人間社会の中で、俺は清く真つ当な人生を歩んでいきたいと思っっている。

つまり一度結婚したら二度目はない事になるが、どちらを選んでも、俺の人生は薔薇色となるだろう。無論バラとはソツチの意味ではなく、華やかとなるだろうという意味だ。

結城が小声で「適当に選んで今からホテルに行くぐらいの事できねえのかよ」と囁いた瞬間、那智さんの平手打ちがペシッ！つと聞こえた。

誰に告白するか……という究極の選択肢に対して、古鷹と親潮という大変選びにくい選択肢を迫られているワケだが、二人のあの妖艶……いや、愛らしい困り顔を見せられたら、どちらかを振るなんてできない。これが俺の弱みというわけか。

文句を言えば、そもそも野次馬が多すぎるし、視線が邪魔ア！「なに？フラツシユモブ？」「海軍のフラツシユモブとか初めて見たスゲえ！」「オトコトオンナノシユラバア……」と、何かのストリートパフォーマンスだと思われるのは大変結構な事だ。これで海軍がお見合い騒動程度で動くような間抜けな集団だと勘違いされないで済む。

辺りを見渡せば360度人であり、提督と長官は神妙な面立ちでこちらを見つめている……この民衆の面前、覚悟を決めろということか。

脚が竦んだ。

息が整わない。

うまく言葉を整理できない。

そういう状況に陥った経験は誰にでもあるだろうが、俺ほど苛烈な状況下に置かれた人間は知らない。

単純なステータスで選ぶのは論外。

かといって気持ちで選べとは言っても、どちらも素敵な女性である――無理に答えを出すのは、中佐が言ったとおり彼女たちへの無礼である。

そんな時、ポケットの中の小人が俺を引っばる。

「っ！っ！」

整備服の妖精さんがこちらを覗いていた。

気づかなかったが、ずっと俺の側にいたのか？なんの用だ妖精さん、俺は今角砂糖なんて持ってないぞ？

しかし、他に伝えたい事があるらしい。

妖精さんのハンドシグナル……時雨のと類似するが、今出しているように、三、編む、などの手話を混ぜた直球的なサインが多いのが特徴である。囲まれている図――この距離からだ、俺としか意思疎通のできない妖精さんが、俺になにか言っている。

つまりこれは……普段真面目で、絶対に失敗するような事を言わない妖精さん、いや、妖精様からの啓示!? 解読するに、こう言っている。

“三つ目、編む、抱きつく”

3つ目、編む……つまりは、三つ編みってことか？

……俺は何も学んでいなかったんだ。

世の中は常に二択ではない。三番目の選択肢がいつもあるということ、決断の積み重ねで俺は学んでいたはずなのに。

ポケットの中から突き出てる頭を軽く撫でた。

妖精さん、俺、妖精さんを信じるよ。

アナタが……いや、貴方様の言うことが、多分正しいはずだと、俺は思います。スピリチュアルな存在として君臨し続けるフワフワの魂が言う事に、間違いなんてない。

俺は、ついに一步踏み出した。

「……すみません、長か……いいえ、親潮さん、古鷹さん。今の俺には、あなた方との縁談を進める資格はありません」

「え……」

「何故なら……俺は……ここに居る時雨と、清きお付き合いをしてい

るからです」

「「ッ!?!」」

「「おおおおお!!」」

その瞬間、繁華街の中で素性を知らない住人はオメデタ歓喜の声を上げ、海軍内の人間には絶対零度の衝撃が襲う。今日も太陽が眩しく射し込む中でも、屋根に隠された地面の陰は静けさと冷たさが囁いている……どんな状況にも、裏と表がある、そういうわけだ。

“付き合っている”当の本人は、一瞬だけポカンとした顔で俺を見つめ、俺が見つめ直すと、一気に顔が火照り上がり、目を大きく瞬きさせながら見開いた。

「な、なな、なな、な……っ!」

突然のこと過ぎてと言わんばかりに、言語感覚を失っている時雨。

「し、しかし付き合っているという情報は聞いてないぞ!」

むしろ何処から情報仕入れてくるんですか長官……その情報収集能力と処理能力もつといい事に使いましょうよ……。

「すいません……ずっと、隠していたんです」

「……まあ、確かにそう言われたら納得がいくか……斎藤ちよ……ではなく、斎藤さん。どうやら、彼らは本当にカップルのようです。元上司である私としたことが、とんだ早とちりだったようですな……ハッハッハ!!」

蘇我提督は俺たちが同期である事を知っている。

その頃からの付き合いとして、今もこうして一緒にいる以上、実は付き合っていましたと言われても納得がいくんだらう。いい具合に納得してくれたのか、すでに提督は諦めている。

「そ、そうだったんですね……き、き、きききキキキ、気が付いませんでした……っ」

「司令と……時雨さんが……」

「案ずることはないよ二人とも。穴戸中佐と時雨中尉は、付き合っているだけだからね。つまりは、結婚まで至っていないということだ」
「そ、そうですけどお……!」

古鷹は顔に絶望的な表情を浮かべて俯き、親潮は今にも泣きそうな

顔で父親にすがる。

「宍戸中佐、時雨中尉、君たちの仲を引き裂こうなどとは思わず、これからも良き仲である事を祈っている……もしも“何か”あれば、いつでも“相談に乗る”からね……行くよ、親潮、真」

「は、はい！」

「はい、父上」

颯爽と去る長官らの荷物を持つ羽黒さんが急いで後を追いかける。相談に乗る……とは、つまり時雨とトラブルがあれば、いつでも代わりとして娘を嫁がせてやるという意味なのだろうか？

「……宍戸オー！」

「は、はいいい!!」

「……待ってるぞッ」

「あ、ま、待ってパパあー！」

続いて、長官と同じく大本營の方角へ去っていく蘇我提督と、無理やり連れてこられた感が半端ない古鷹、そしてハッ！つと用事を思い出したかのように一緒に大本營へと向かう那智さんと結城。

海軍士官で行われたゲリラストリートミュージカルは、野次馬共の散開と共に幕を下ろす。

き、切り抜けられた……俺は、またもや運良く……いやそれ以上に、妖精さんの助けもあって、危機的状況をかいくぐったんだ。やっぱり妖精さんの言うことは正しい。

野次馬の中には、J a F Gのタクヤ……そして俺の肉棒に入れられる前から平伏していた田中くんの姿もあった。タクヤさんはフツ……と一笑したところで、二人一緒に怪しげなバーへと脚を踏み入れていった。あそこなんだろう？ゲイバー？

残った白露姉妹が時雨に事の真相を問い正すためワツセワツセと詰め寄っている。

「ど、どういうことなのかしらア!?う、嘘よねっ!?内緒で宍戸さんと付き合っていたとか!?う、う、う、う……」

「村雨言葉詰まってるよ!?う、お、お姉ちゃんも流石にこれはいつちばーん驚いたかも……人生でいつちばーん……」

「穴戸つちとシグシグが……穴戸つちとシグシグが……っ！」

「……あ、申し訳ありませんわっ……すこしめまいが」

「時雨ネエサンドウイウコトデスカ、オニイサンドウイウコトデスカ」
「……う」

時雨は顔を隠しながら誰の顔を見ようともせず、皆からの言葉をシャツトアウトしている。

殴られる覚悟で、俺は更に一方近づいた。

見下ろせば時雨の艶のある髪から漂うシャンプーの香りがくすめるぐらい、近距離まで。

姉妹たちは、真剣な眼差しで歩み寄る漠の空気に入ってこれそうもなく、ただただ一歩下がって、作られた重い沈黙を、誰かが破るのを待っていたのだ。それを実行したのが、以外にも時雨だった。

「……ぼ」

「ん？」

「ぼくたち……付き合ってた……の？」

綺麗な三つ編みを両手で支えるように持ちながら、これまでにないほど熱を帯びた瞳が目の前の男を見上げていた。雪のように白い肌の皮膚の下は血色のいい紅色で染め上げられている。

鼻にまで赤みを付けた時雨の乙女な表情は、普段見る彼女の顔を少し違い、世の男性の心拍数を無条件に上げるものだった。

潤んだ眼が、問への答えを求めているー時雨って、こんなに可愛かったっけ？

「ごめんな時雨……いきなりウソ言っちゃ」

「い、いや、別にいいよ……って、え？」

村雨ちゃんたちも、へ？って顔で俺の口から放たれる次の言葉を待っている。

「いや〜時雨が来たときはすげえビビったけどさー！よくよく考えれば時雨が俺と付き合ってる設定にすればお見合い断れんじゃね？って思ってたさ！？すげー作戦しょ！」

「「……はっ……」」

「でもごめんな時雨、お前の彼氏スポット取っちゃって。今からパ

フエでも奢るからさ、それで許し……アレ？時雨
「~~~~っ!!!」

パッションツ!!!

涙目で平手打ちされたの、初めてかもしれない。

お見合い（ガチ） 4

「なあ時雨！機嫌直して？ね？ほーら、ぞーさんですよ。あれれ、なんかぞーさんの先っぽから出てきちゃった。うん、これはカロリーの詰まったあまーいあまーい白いミルクの塊……って、ただのミルクキャンディーやないかーい！」

「……………」

今世紀最低級の下ネタにもそっぽ向いたまま、俺の隣をじつと歩く時雨。

顔はみえないが、ぷつくりと膨らませたほっぺは、華奢な後ろ姿からでも見える。

俺たちの後ろを歩く村雨ちゃんたちの誰もが声をかけられない状態の時雨。つまり、かなり怒っているということだ。自分が逃げたいばかりに時雨の彼氏ポジを世の男どもからぶん取るなんて、とても醜悪なことだと反省している。

妖精さんがポケットの中で暴れているのでヨシヨシと宥めようとすると、顔を覗かせた。

表情で「なんだよ？」と聞くが、妖精さんは腕で？を書きながら再度、三つ目、編む、抱きつくというメッセージを伝えてくる。分かった、分かったから……と宥めてもゴチャゴチャ駄々をこねるようにはめない。何を伝えたいんだろう……ん？

よく見たら、三つ目、編む、抱きつく……ではなく、三つ目、キス、愛すとも読み取れる。よくモノホンの手話と間違えるのが難点だが、それを読み分けてこそ俺たち整備工作班というものだ。

妖精さんは、チョツコリ生えた髪を頭上で結びながら、可愛らしいツインテールを作った。そして自分のことを指さしながら再度、三つ目、キス、愛すと繰り返し返している。ハハハ、私を愛せてるか？今はそれどころじゃ……。ツインテール……三つ目……三女を……愛せ。

村雨ちゃん……のこと言ってたの……？

うんうん！と首を振る妖精さん。

「知るかアポケエツツ!!」

「「っ?」」

妖精は俺のポケットの中に雲隠れした。

……いや、もとを辿れば、最初から素直に縁談をきつちりと断れない俺が全面的に悪い。一難去つてまた一難とはこのことか……いや、どちらかと言えば因果応報?それとも自業自得?無計画さから来た平手打ちだが、グープパンチの何倍も痛いと思えたのは気のせいじゃないと思う。

頼む、許してくれと時雨に30回以上言っており、お店に入るか?と言ったが「むっ……!」と一言、断られた。

おしっこちびりそうになった春雨ちゃんの般若フェイスが静まり、安堵の表情すら浮かべているようになったが、やっぱり時雨の事が心配なんだろうか、ずっと時雨の事を見ている。

「ほら、あそこの店ってスイーツ特集でやってたやつだろ?行こうぜ!」

「そ、そうですね!い、行きましょう……」

「「お、おー!」」

「……………」

洋菓子店。

ベーカリー特有の焼けたスポンジケーキの匂いとキャラメリイズされた砂糖の香りが支配する洋菓子店。並べられたケーキは、テーブルに座ってティータイムを楽しむ周りの客の反応もあってか、口から鼻に通り抜けるスポンジに染み込んだほのかなバニラの甘さが容易に想像できる。

「お、俺の奢りだから好きに頼んでくれ!!」

「「わ、わぁーい!」」

「……………」

いつもなら「財布空っぽにする勇気があるなんて、流石は僕たちの司令官だね!」とか言い出すのに、一向に振り向いてくれないし、重い沈黙が空気を停滞させる。

俺の諭吉2枚分をぶんどった白露さんと鈴谷が主導で盛り上げながらケーキを注文する中、俺は7人で座れる席を率先して探しに行く。

すると、6人用のソファアール付きテーブルをクソデカ荷物とクソデカイケツで占領していた、いかにもクソブスなダブルサイズなカップルを見つけた。

「あの、すみません、ちょっといいですか?」

「あん?なんだよ?」

「実は6人用の席を探しまして、もしよろしければこちらの席を譲っては貰えないでしょうか?」

「は?ナンデソンナコトシナキヤイケナイノウケル」

「タカシ、イキガツテル、デモソンナトコロガカツコイ!」

いつもの俺ならこのクソデブ黒ギャルとクソデブ黒男の非常なまでな無礼に対しても寛大な処置を取るところだが、今の俺は時雨の事もあり、ガチで蹴り飛ばしそうだった。

だが漢は依然として、そしてクールに事を済ませる物だ。こんな状況下でも、冷静さは変わらない。だから恐喝に近い暴言の連鎖で許してやるか……と思った矢先。

「も、もしかして、あの八丈島の穴戸さんですかあ!?!」

「え、あ、はいそうですけど……」

「わあーやっぱり!ファンです!サインしてください!」

三人の女子高校生にサインを求められ、こんなブスカップルでもテレビを見るほどの教養はあるのか、三下同然の態度を取っていた相手が誰だったのか理解しているようだった。粗悪な二重アゴからみるみる内に青くなっていくカップルは、豚とは思えないほど素早い動きで荷物を退かして席を譲ってくれた。

その間、俺はプリティーなイマドキギャルが渡してきたノート帳にサインして、人気者である事実を噛みしめる余暇に浸る。

店を出ていくブスカップルや女子高生は俺の印象を「イケメン風」だと言っていたが、騙されないぞ。学んだんだ……風とは雰囲気のこと、そんなのは立場と功績と顔を合わせた合計数値に過ぎないと。

合コンの時にキモいとかイケメンじゃないとか散々言われてブチ殺しそうになった経験をしてみれば、自然と見につく冷静さである。

白露さんたちが帰ってきたが、付いてきている時雨は俺と目を合わせない。

着席して、俺と隣り合わせになっても顔をプクツと膨らませたまま腕を組んでいる状態が数分続いた。

洋菓子店の中にいる女子たちは、八丈島で活躍した英雄的な前線艦隊がこの店に一同に会していることに驚きを隠せず、盛り上げようとしている鈴谷と白露さんの勢いに押されて逆に話しかけづらい空気ができている。

「そ、それじゃいっちなばーん白露！一発芸やりまーす…このケーキ、三秒で食べまーす！よーい！アグアグアグウ！」

「うわー！美味しそー！」

それ絶対味わからないでしょ。

「……ほらー！村雨もなにか一発芸やって！」

「え、ええ!?む、村雨！あ、あの、えつと、モンブランを解体しますっ！」

「「ッ!」「」

村雨ちゃんは繊細なおててを使い、麺のように次々とモンブランを解体していき、最後はグルグル巻にしてスパゲッティ状にしたのは俺たちだけじゃなく店内全員を驚かせた。

イッターに載せてもいいですか!?!と聞かれた村雨ちゃんは、アハハと可愛く笑いながら申し出を断った。春雨ちゃんはむくうーつとした顔で「お兄さん！春雨もできます！」と見せてきたが、流石に最初の衝撃と比べれば物足りなさがある。よしよしと頭を撫でられ気持ち良さそうにする春雨ちゃんに對抗するように、今度は村雨ちゃんも頭を寄せてきた。

しかし、時雨は俺と目を合わせてくれないどころか、誰とも話そうとしない。

覚悟を決めて、俺は時雨の手を引っ張る。

「時雨、ちよつと来い」

「あ、ちょっ!!」

店内に村雨ちゃんたちを置いて、時雨を外に引つ張り出した。

近くの公園。

「ねえ、ちょ、痛い!分かったつてば!離して!」

「離さねえよ……!」

「フンツ!!」

時雨の護身術は俺の体を投げるほど強いのは言わずもなだが、滅茶苦茶カッコ悪い体制なので、どちらかと言えば精神的ダメージがデカイ。

それでも肉体にはなんら影響がないため、すぐに立ち上がることができた。

いつもみたいに殴って、俺を罵倒してくれればこつちも「なんだとお!」と返すことができるんだがーいや、これが俺の悪い所だ。他人の行動とそれに伴う結果へと誘導し、そして起こることを期待するのは人として悪いクセだ。こうやって逃げてばつかだから、時雨は怒っているんだ。

今こそ精一杯、ごめんなさいを伝える番だ。

「時雨……ごめん。本当にごめん。冗談でも、サプライズでもなくて、ただただ純粹に人を欺くための嘘を……しかも、お前を利用してついた嘘は、決して許されることじゃないのは分かってる。だから、本当に、すみませんでした」

「……やめてよ穴戸くん。もういいよ、僕も、少し大人気なかったかも」

「大人げないのは何時もの事だつてツツコミを控えて、ごめんな!」

「君ほんとうに謝る気あるのツ?」

でも三つ編みをクルクルとイジらせる時雨は、俺を寛大な心で許してくれた。流石は大天使時雨、やはりあの村雨ちゃんの姉なだけはある。

そしていつものように、笑顔で俺を殴ってくれる。

できれば殴ってほしくはないけど、暴力よりも痛いものがこの世の

中にあることを知った今となつては、むしろ快感とも取れる。

いや、俺ドMじゃなんですけど。

でも、ほのかな時雨の微笑みが俺を癒やしてくれた。やっぱり可愛いな。

「ねえ……やっぱり、行くの?」

「え、なに突然」

「司令官、やめちゃうんでしょ?」

俺はあと二週間という短い時間で要港部を去ることとなるが、そのことを時雨は気にしているんだろう。みんな一緒だぞと言つて一安心させるが、やっぱり心配なんだろう。

元々鴨川までついてくること自体が俺のワガママだったんだから、これ以上無理に付き合わせることはなく、整工班に戻す事も進言しようかとも思つたが……時雨はこのままでいいと言つてくれた。

一年後に大佐になるんだから、この歳でそれは正に快拳である。流石にシヤア・アズナ〇ルの20歳は無理だけど、世界から見ても、この歳でこの昇進スピードは約数人しかいない。つて、数人もいるのか……いや、ヨーロッパ貴族を抜いたらもつと少ないだろうから、結局は異例の快拳なんだ。

そしてこれは事実、俺は死なない限りは提督となる事を意味する。つまり、時雨たちの妹を蹂躪しても、時雨は文句を言えないという事となり、俺様のハーレム提督鎮守府運営生活の開幕を意味するのだ。

「そうですよ!つていうか、中佐はもう立派な提督じゃないですか!」
「あ、明石中将?!」

ふと横には、空き地となつた公園でまさかの明石次官が後ろに手を組んで前かがみになりながら、俺たちの前に立ちはだかる。クルクルつと廻りながらたちどまりこちらを見つめ、俺たちが敬礼しようとした瞬間「いやいや、プライベートですから!」と手を降ろさせた。

なんでここにいるんだ!?なんてもう驚かないぞ……どれだけの海軍連中を見たと思つてるだ。と、よく周囲を見れば、大本営にかなり近い。

よくよく考えれば不思議な人だ。

明石中将はその立場からは想像も付かないほど物腰柔らかかく、威圧感を感じさせず、あの大淀総長ですら全面的な信頼を置く艦娘——この人の素性が未だにつかめないし、なぜ彼女が革新派なのかも知りたい。

その元気で陽気だがどこか立ち入らせない雰囲気、彼女を質問の嵐から守っているんだろうか？

「……この人って、やっぱり例の革新派の……」

時雨は耳元で小言を囁き、一回だけ頷いて確認した。彼女に対しては大まかだが、海軍内部派閥の事実上のトップである大淀総長の友人である事は時雨も知るところである。

これまた大まかだが、明石次官が実質的なトップではないかという事も斉藤長官から予測されている以上、この人に対して無闇に心を開く事はできないのだ。

「あ、明石次官はなぜここに……」

「休憩です！ちようど駆逐艦第二改装の開発のキリが良かったので……あ、そういうえば聞きましたよ！舞鶴への転属、おめでとうございます！あと昇進も！あ、一年後でしたっけ？」

「は、はい！」

「フッフッフ、資材いっぱい持ってきてくれ……ではなく、長崎警備府でのご活躍、期待してますよ！」

「は——ご期待に添えるよう、尽力致します！」

「前線艦隊の一人だった時雨さんも、期待してますよ！」

「は、はいっ！」

明石次官は背伸びしながら、太陽と、それに照らされる空き地のドラム缶を見つめていた。

「まだここにあったんですねーこれ。結構昔からあるですよ、このドラム缶」

「え、明石次官もここに来たことがあるんですか？」

時雨の突然の質問に対して惜しげもなく「はい！」と答えた明石次官は、過去の自分の姿を見ていたのだろうか。

座るのに丁度いいサイズの木箱を懐かしげに見ていた。

「実は私、嫌な事があつたらいつもここに来ていたんですよねっ」

「嫌なこと……彼氏に振られたとか?」

「ち、違いますよ時雨さん! まあ、確かに人間関係って言えばそうかも
知れませんが……実は、前線で戦っていた時代、結構ドジ踏んじや
うタイプだったので、作戦を失敗させたりしてたんですっ」

「い、意外……いいえ、失礼しましたッ!!」

「はははっ! 別にいいですよ穴戸中佐、もう過去のことですし。今で
こそ海軍省で兵器開発だのなんだので活躍させていただいてますが、
当時はホントクビになるかと思うぐらい足引っ張っちゃって……」

コミカルにえへへ、と口で言いながらうなだれるポーズを取る明石
次官の過去の話が聞けるなんて夢にも思わなかったが、それ以上に驚
いたのが彼女の経歴だった。明石次官が……いや、別に偉い人が前線
に出た時に強くなぐちやいけなわけじゃないけど、所謂戦力的な意
味での落ちこぼれのような存在だったことは、本当にド肝を抜かれた
ような気分陥った。

「ある日、斎藤長官が書いた本は当時話題にはなっていたんですけ
ど、その本の中に、艦娘の兵器を作るには開発ができる艦娘が必要だ
! って書いてあって、当時大佐だった斎藤長官との交流を作る事がで
きて、彼の取り計らいで私の得意分野である開発に従事することがで
きたんです……すごいですよね!」

多分長官がすごいと言ってるんだろうけど、アンタのほうがすごい
よ。

というツツコミは控えておいて……唐突すぎる告白、そしてその本
は革新派の人達にとつてのバイブルとして色々な人に渡り、俺と保守
派の人を苦しめている。

今や国を上げての国家方針となりつつあるが、まさか明石さんが
持っているとは。

「やはり人気だったんですねその本」

マジで宗教団体だわこの派閥。

「実は訓練で忙しくて買いは行けなかったんですけど、ある日この

公園で、女の子が来て本をくれたんです」

「女の子……」

明石さんはその当時のことを、鮮明に話してくれた。

『ハア……また作戦失敗しちゃった……もう艦娘やめようかなあ……』

『おねえちゃんどうしたの?』

『うわあ!び、びっくりしたあ……』

『おねえちゃんおちこんでるの?』

『え……うん、実はそうなの……仕事いっぱい失敗しちゃって』

『そうなんだ……じゃあこれあげる。ぼく、むずかしい本よめないから』

『え……うん、ありがとうね』

『しぐれおねえちゃん!はやくいこー!』

『うん!いまいくー!じゃあね、淫ピのおねえちゃん!』

『う、うん……いんぴ……?ん?この本……すごいかも!適材適所……私は……この明石は……整備工作艦、明石として……この国の役に立てるんだ……!』

「……もしもあの少女がいなければ、私はどうなってたことか……今頃、あの子はなにをしてるんでしょう……できれば、もう一度会ってみたいですーふふふー……あ、あれ?どうしたんですか?」

「いいえ、なんでも……おい、時雨ちゃん?」

「な、なにかな?」

「……テメエの仕業かアツ!!!」

海軍内部騒動の黒幕……いや発端は、俺の同期だったのか。

お見合い（ガチ） 5

『ほ、本当にすいませんでした!!』

「いいって古鷹。こっちこそごめんな」
レストラン。

古鷹からごめんなさいの電話を貰って、古鷹と一緒にいる親潮からもごめんなさいと言われる。それはあまりにも強引だったお見合いに自分の親のせいで態々付き合わせてしまったことへの謝罪だったが、形式的とはいえ、彼女たちの縁談を断ってしまった自負の念は拭えなかった。

むしろ俺も悪かったと思っていると云って電話を切り、甘いモノの次は辛いものという原理から参上したスイーツ店からレストランの様子を見る。店内は混んでいないが、それ故に俺たち7人の存在が目立つ。

俺の事を見て「まま〜！あれテレビに出てた人〜！」と指さしてきたクソガキに対して手を振ってやる。爆乳お母さんが手を振り返してくれて、俺、満足！

ヒソヒソ話であのクソガキと同じようなことを口走る奴らが大勢おり、つまりは俺がそれだけ有名人だということだ……どれだけ有名かなんて数値は、イッターのフォロワー数が数値化してくれるが、生憎俺は海軍内部の専用アカウントしか持っていない。インターネットを見ればすぐに人気度を確認できるんだが、ハッキリ言ってあの作戦以降俺はネットを見ていない。理由は単純に怖くて、ペディアとかに名前が書かれてあった場合、ガチで悶絶して死にそうになるからだ。

「はいお兄さん！あーん！」

「ははは、あーん」

「おいしいですかあ？」

「うん！おいち！」

「良かったです！おにいさあ〜ん！ぎゅっ」

春雨ちゃんが食べさせてくれたスパゲティは美味しいし、村雨

ちゃんのお口に付いてるトマトソースを拭って「ほらついてたよ、おつちよこちよいさん」ってやりたい気持ちにも駆られて、白露さんは早食い競争じゃないんだからもう少しペース落としてくれればと思ひ、鈴熊と時雨は次食べるメニューを開いている。やめろ、俺の財布はスペランカー並みに脆いんだぞ。

他の客の様子は見てのとおりだが、懸念するのはやはり内心だ。目立ってる奴とかなんとなく気に入らないヤツを、普段は出ない謎の行動力で叩きたがるのは卑しいヤツの性というもんだが、消防士がコンビニで買物してただけで仕事してないと言われるほど、現代人の道徳心が過疎ってることは、誰もが知るところだろう。

つまり海軍軍人がレストランで楽しそうに食事している。シゴトシテナイコイツラゴミーと罵られる状況を避けたいのだが、人気のないラーメン屋に入りたいというほど、この女子軍団は女の子を捨ててない。

「お兄さん……どうしたんですかあ……？ま、まさかお見合い相手の親潮さんや古鷹さんのことをカンガエテ……」

「いや、単純にこのままレストランで食ってて良いのか迷ってただけ……あと時雨、お前は自負の念とか何も感じないの？多分お前、この国を動かすようなとんでもないことしちやっただと思っけど」

「え？…なんのこと？」
キョトンと首を傾げた時雨は本当に分かってなさそうな顔で尋ねてきた。

「国を動かすなんてBIG！お姉ちゃんも応援するために、人肌脱いじやおうかな〜っ」

「なに脱ごうとしてるんですか白露姉さんッ？」

「じよ、冗談だつて！村雨すごい怖い顔やめて！」

「……でも、よくよく考えれば穴戸さんは、あと二週間で逝ってしまわれるんですわよね？寂しくなりますわ……」

「……………」

逝くじゃねえよ行くだよ。

神妙な顔立ちで俺を見るみんなは、とても寂しそうな顔をしていた

が、ほんのしばしの別れだ！と言って宥めるほか無かった。俺の栄達のためには、しなきゃいけないことなんだ。

「……俺の栄達のために、しなきゃいけないことなんだ。舞鶴は最近、深海棲艦の活動が激しくなってるようだし、俺も行かなきゃって思ってるさ」

「で、でも穴戸さんが行く必要は……」

「前線での指揮を任せられる機会があるらしいんだ」

舞鶴は重要拠点であると言われる理由の一つとしては、パワープラントの存在にある。

原子力パワープラントが破壊されれば、国民の生活電気が行き届かなくなるだけじゃなく、フォールアウトの可能性もあるので、あそこは特に気が抜けないのだ。

だから第一鎮守府には俺が会議に出席した時みたいな強力な参謀会議が存在するし、前線指揮しなきゃいけないような状況にあるのかも……と、まあそれはともかくとして、海軍大臣が行けつつたら無条件で行かなきゃいけないにきまつてんじゃん。

「……なあ時雨、俺が提督になったらどうなるって言ったかお前覚えてる?」

「え、なんだったつけ?」

「ハーレム作れるって言ってたじゃん!!時雨の可愛いかわいい妹たちだけの、ハーレム作れるってエ!!村雨ちゃんとか、春雨ちゃんとか、夕立ちゃんや五月雨ちゃんも含めてエ!全員俺にゾツコンで、俺のモノになるつつつてたじゃん!!それを反故にするなんて許さないぞオ!!」

「穴戸くん」

「アアツ!」

「僕、ゾツコンは言ったけど、それ以外の文字列は一ツツツ事も言っていないから」

「アレ?なんでお姉ちゃんが入ってないの?もしかして白露お姉さんはお気に入りじゃないとかツ?」

白露さんが拳をコキコキしてる。

「鈴谷たちも入ってないじゃんツ!!なんでえ!？」

「納得がいきませんわツ！」

「え、な、なんで参入してくるんですか……」

熊野と鈴谷と白露さんは立ち上がり、同じく村雨ちゃんと春雨ちゃんも立ち上がった。

「な、なんで二人まで立ち上がってるんですか？」

「ハーレムなんて認めませんツ!!選ぶならどっちにするか選んでくださいッ!!」

「春雨だけのお兄さん……!」

春雨ちゃんの瞳がダークマターになってる一方、村雨ちゃんのぷくりと膨らませた頬とジト目が俺に突き刺さる。

なんだよお前たち……提督になったらハーレム了承してくれるんじゃないのかよ……ツ!!

(※了承してません)

白露さんに首を掴まれる。

「あ、あの、時雨さん……お助け船とか……どうつすか?せ、千円で……」

「ごめん、諭吉だったら助けたんだけど、僕にとってそれははした金にしかないよ!」

「あ、あのつ、助けてイ!助けて!どっかに引きずられるう!!時雨え!

お願いッ!……オイ助けるヤア!!この資本主義者がアツ!!」

「まあ舞鶴に行く祝だと思って、たっぷり堪能するといいいよ」

「いやああああああ!!」

俺、提督になっても尻に敷かれたままなのだろうか。

「やっぱり古鷹にはまだ早すぎたか……ウグウ!」

斎藤長官と別れた横須賀鎮守府への帰路を歩く蘇我提督、古鷹と加古の三人は談笑を交えながら道路を歩いていった。

脇腹に古鷹のエルボーを食らった提督の顔は顔芸並の変形を見せ

ている。コンビニで買ったアイスを口に咥えながら両手で後頭部を支えながらぶつきらぼうにその光景を笑う加古があの場合にいなかった理由は、単純に興味がなかったからである。

「当然です！私はまだ結婚なんて……結婚なんて……」

「あたしもそう思うけど、古鷹はホントーにそう思ってるの？なんか微妙に引つかかっているような感じするけど」

加古のセリフに驚く古鷹はよくよく思えば、なんで胸がこれほど苦しいのだろうかと気にしていた所だったが、不思議と納得もしている様子だった。

時雨ならば納得がいく、彼女になら負けても仕方がない、そういう感情だった。

しかし、だからといって100%スッキリするとは限らない。そんな複雑な感情を見破っていた加古は自分の姉の肩を叩いた。

提督は若くから迅速な行動には定評があったものの、当然ながら今日のことは家族から褒められるものではなかった。

彼の心には、やはりできる時に自分が知りうる中で最善の男性を娘に嫁がせたいと願っていたが、中々うまくいかないものだど落胆していたが、失敗をしても自分の娘が一番であると自身を持ち、再戦の機会があると信じて疑わなかった。

そしてこれもまた、娘の意思を無視したマキャベリス的思考からではなく、古鷹が好きな相手である事を条件とした縁談申し込みだった。

親潮も同様の気持ちだったが、それよりも明日からどう二人に接すればいいのかという難解な問題に直面していた。

四人が乗る車には助手席で取り乱す親潮と運転する羽黒の姿があったが、黒一色の塗装で覆われた要人用の車は防音であり、視界からも内部の様子を伺うことはできない。

「ああああああっ!!!どうしようどうしよう!?!」

「少しは落ち着いたらどうなんだ？みつともないぞ」

「黙っててください!!!」

「っ」

再び固まった中佐を気にすることなく、また横で悶絶する親潮を宥めることすら諦め、羽黒は長官にお見合いの事についての話題を振る。

「長官、なぜ彼との縁談をそれほどまでに勧めたかったのですか？」

「うん？まあなんだ、彼には提督になってほしいからね……未来を預けられるような、立派な提督に」

長官である自分とも繋がり深いともなれば、彼が若くして提督になることを不満に思う者はいても、表立って口出しはできないだろうーそういう思惑はあった。

上乘せとしても、海軍に対しての忠誠心、そして能力を全力で発揮させる意味合いもあった。

「しかし彼はもう提督なのでは……」

「彼の中で提督とは将官のことらしいよ」

「もちろんそれも間違っていないでしょうけど、なぜそれほどまでに提督になりたいのでしょうかあ……？」

「何れにしても、私は悪くはないと思います。私もそうですが、何れ本物の提督となる日は近いでしょう」

「そうだね」

窓の外を見た長官は思った。

提督への道は険しく、そして長いものになるだろうと。

そして、数週間後。

鴨川要港部最後の仕事、それはみんなへの挨拶だった。

全員を集合させてグラウンドに集合させるほどここでの俺の地位は高くない。みんなは平等であるという自覚を持って接していたため、態々みんなを集めて自分の権威を誇示するような行為はできず避けられたかった意味もあったが、それよりも一人ひとりと挨拶するのが礼儀だという、個人的なポリシーに基づいた行動だった。

傍から見れば舞鶴の参謀員なんて、司令官と比べたら左遷以外の何者でもないが、俺が知っている通りになるとすると警備府の提督とな

るのは大臣直々に約束されている。

一人ひとりは笑顔で出迎えてくれて、俺が司令官で良かったと言ってくれる。浦風や浜風とは最後にハグしてバブみに浸り、陽炎たちとはなんとか和解して以後この要港部でAVの語録を連発しないようにさせて、磯風と谷風からはお守りを貰った。

夕張とゴーヤにはこれまたお守りだが、愛用のレンチを受けとり、綾波ちゃんからもとっておきのラブストーリーを描いたBL作品を渡された。案外面白くて腹立つ。案外有能なストーリーカーくん月魔を含めた整工班の連中からは一人ずつハグされたし、男臭さ溢れるイキ地獄だったが、これぐらいは我慢してやろう。

ゲイ共からは普通に「舞鶴への転勤、おめでとー！」と祝福されたが、咄嗟に囲まれて祝い行事だからと言われながら「中〇し外出〇し」という単語を聞いた途端に全速力で逃げた。ゆく年くる年みたいに言ってるじゃねえよ。

親潮とはあれ以降お見合いをした上、縁談を破棄した相手同士とは思えないほど普通に業務をこなしていたが、

「司令っ……ふっふっ、寝顔かわいいっ。ずっと見ていたいな〜っ」
「……………」

と、たまに激務が重なって執務室の机で寝ている時に、偶々起きていた時に耳元で囁かれたセリフである。とてもいい匂いがして、何より髪がフワツと頬を撫でた感触は忘れることはないだろう。

目を瞑っても分かった、親潮はあの時笑顔だったんだと……そしてなんとなく、諦められていなかったのだと。

難しすぎる問題に直面した人間は野生の防衛本能が働き、逃げるという選択肢を与えるが、人間社会において逃げる事で根本的な解決となる事案は少数であると理解したのは五歳の時だった。

隣に住んでいたクソガキがアメリカ人でゴミみたいになっちゃうかい掛けてきた故に無視していた所、日に日に加速していくちよっかいのレベルが“名前を呼び続ける”から、“物を投げてくる”に昇格した時に、飼っていた虫コレクションをアイツの服の中に入れてやって以降、問題はあったものの、根本的な解決にはなった。

問題を根から叩くという点を知ってはいたものの、それを思い出したのはつい最近のことである。

親潮には時雨と付き合っていないと弁解したが、それが逆に朗報と成ってしまったらしい。更に結婚は俺には早いとも言ったが、それを承認されただけに留まってしまう。

鈴熊、それに白露姉妹は今生の別れではないものの、暫しの別れを惜しむようにハグしてきた。意外にも時雨がこれに参加したのだが、それ以上に度肝を抜かれたのが、春雨ちゃんだった

「ちゅっ」

「っつ!」

頬にキス。

それを見た村雨ちゃんがプクツと頬を膨らませて、キスしてきた。最後は鈴谷が恥ずかしがりながらも唇を当ててきて、その場にいた全員が赤面するほど気まずい空気ができたのは、車の中にいる今でも忘れられないだろう。

東京、渋谷。

とまあ、こんな感じに俺は要港部を出立し、爺さんへの定時連絡としても使える日記の文は、思い出としては最高であると自負する。

ミツビシ系統の車には現在俺一人で乗ってる。

東京でもう一度長官に挨拶に行くべきだと判断した俺は、現在渋滞にハマっている。どの道東京を通る上、舞鶴までは長く、ここから車を取り換えてタクシーか海軍からの運転手を手配してもらおうこともできるが、現実的にはタクシーだろう。

まあどちらにしろ着任は明日の午後までに着けば問題はないので、あまり気にしないでも大丈夫だ。

……でも、流石にこの渋滞は許せない。

東京人だからってバンバン人口密集させやがってよオ？俺が素直に渋滞に巻き込まれているだけの漢やと思ったたら大間違いやぞタコ野郎がア!!なんて吐き散らしても始まらないので、遠回りだが迂回することにした。

ああ、かなり遠回りだが、ここまで来れば渋滞はなくスムーズに行ける。更に迂回して住宅地辺りに回り込み、海軍省の後ろまでスラスタと行くことができた。

でも渋滞に疲れていたからか、停めてあつた黒塗りの高級車にぶつかつてしまう。勢いよく車から出たのは、何故かミニスカ弓道着を着ている和風美人だった。

「降りなさい、免許を持っているんですか？」

「す、すいません」

「早くしなさい」

急かす青道着の女性に要求してきた免許証を提示し、取り上げられて5秒ほどで、免許証をポケットの中に入れられる。

「よし、では車についてきて下さい」

「え」

「頭にきました」

みつちりと説教され責任を背負った俺に対し、車の主、大湊警備府の加賀提督が言い渡した示談の条件とは……。

大本営の一室。

「艦娘提督として武勇を振るうあの加賀提督にお会いできたことは軍人の誉れであると存じます。つきましては、この経験を活かすべく、一刻も早く舞鶴へと赴きたい所存。ご聡明な加賀提督ならば、このお気持ちを汲み取ってくれるものであると信じます」

「ありがとうございます」

……いや、ありがとうございますじゃなくてね？帰ってもいいですか？って聞いてんの。

加賀提督、大湊警備府の艦娘提督として……そして、北方方面の司令官でもある。

彼女には一度会ったことがあるが、敬礼を交わした程度の仲であるため、ほとんど初対面である。印象は綺麗だが無口な人。冷艶という言葉がよく似合い、向かいの椅子に座る姿勢は、さながら熟練の旅館の女将であり、動作一つ一つを見ても完璧であり儂げである反面、完

壁すぎてロボットのようであるとも言える。

そして何より、保守派の影の指導者であるとも聞くが、本当のところはどうかは不明である。事実上、国民からしても少数派である彼らが再起するのは難しい。だから身を潜めるのも分かるが、それがむしろ俺の関心を引いていた。

「車にぶつかってしまったこと、大変申し訳なく思います。弁償はもちろん、始末書もきっちりと書きますので、海軍大臣との面会を許可していただいても」

「始末書の方はいいです、私の物ではないですから」

「……えっと、それでは海軍大臣と面会して来ても」

「はい、結構です」

「なんのために俺をここに呼んだんだ提督？」

俺は立ち上がり、冷ややかなポーカーフェイスで俺を見つめ続けていた加賀提督を無視して部屋を出ようとドアノブに手を伸ばした。

「……東亜の開放は、成功はしません」

「っ!？」

「身構えないでください」

突然の言葉に、俺はストリートファイターのバ○ソンのポーズを取ったが、加賀提督の言葉によりそれを解除する。

「……それはどういうことでしょうか？浅知の身にお教え頂ければと思います」

「あなたは本当に、戦線を伸ばすことがこの国への有益となるとお考えなのですか？」

「小官は、いち軍人としての責務を全うするだけの存在です」

「どのような命令でも？」

「違法な命令、あるいは軍法会議で必ず自分の勝利を確信できるような命令でなければ」

「そうですか……では、精々頑張ってください」

「これまた突然の言葉に啞然する。」

この人は革新派と相對する保守派の艦娘で、彼女としては俺の名前が世に知らしめられ、なおかつ海軍内部が革新派に支配されている現

状はあまり好ましくないはずのだが……諦めてくれたのか？
「では、失礼します」

その言葉を最後に、加賀提督のいた部屋を後にする。

「……期待、しています」

長崎警備府編 覆面ボス

一年後、佐世保第一鎮守府、中庭。

蒼天の下で輝く佐世保鎮守府は1世紀以上も前に作られた海軍要塞であり、所々についたシミは時間の経過を感じさせる。

過去の遺物として扱われるはずの古い建物に敬意を表しても、進み続ける人類社会にとって取り壊しを余儀なくするはずが、あろう事が軍隊という重要な組織によって今なお使われている現状を見る限り、伝統を重んじる心と、人類の歴史を作り続けてきたのが戦争であると改めて思わされる。

中庭には整列した兵士数名、佐世保参謀長、人事部長、そして司令長官である提督、そして大佐への昇進を受ける一人の士官がいた。

階級章と、新たに作られた警備府司令官用の識別章、そして勲章を付けられ、大将と大佐は敬礼を交わす。

形式上の昇進式の作法をするならと言わんばかりに、軽いスピーチも形式張った言葉が並べられた。

「私は一、海軍軍人としての責務を常に全霊を持って果たし、最善をきす事を、天地身命にかけ誓います。親愛なる日本海軍の士官としてこの場に居することこの上ない誉であり……」

『大佐！大佐の同期よりも早い昇進をした件についての心境はいかがですか!?』

『昇進した感想！感想です！感想言えやコラア!』

うるせエ張つ倒すぞメデイ公がア……!』

現実感のないまま大佐、そして明日に長崎警備府の初代司令官として着任予定となっている俺は、熟練は自負するが部下となる熟練のオッサンたちに比べて遥かに若い士官である。前職は二週間ほどだが、セ○キャバでセクハラやらかして辞任した軍需副部長の代わりが

来るまでの臨時副部長である。

結局適任者がいなかったものでその一人が昇進して副部長となる形となったが、昇進したことで「退役して年金ぐらし！計画がパーになっちまった」と嘆いていた。有能な人は一人でも必要なので、そんなの無理な話だ。

報道陣からのカメラフラッシュと「ホラホラこの棒が欲しいんだろ？」と言わんばかりの黒くて太いのおっ……を押し付けられる図はさながら、陵辱系のマルチチ○ポをグイグイ押し付けられているメス男子（オクシモロン）。

インタビュ어가終わった後でも、度々俺に近寄ってくる男子たちはさながら、卒業しちゃう憧れの先輩に近寄ってくる後輩たち。

俺は短い間柄だったが、残された時間を仲間たちとの交流に使っていた。

「穴戸参謀はあの警備府に着任するんですよね!?新しい警備府かく俺たちも行きたいツス！」

「ハッハッハ、だめだぞ。お前たちが居なかったら提督が困るだろ?」「ははは、セク○ヤバ行くような野郎が居るようでしたらもつと困りものですけどね!」

一応自分たちの上司だったヤツに対してその言い方は……まあ俺のことじゃないし別にいいか。

仲間との別れは何時も名残惜しさを感じるが、それでも俺は行かないくちやいけない。俺の新天地……長崎警備府に。

長崎警備府。

九州の主要都市であるこの地は、古くから大陸との貿易に使われていたらしい。発展した土地を守るのは重大科目だが、感情論を捨てて理論的かつ数学的な比較をすれば舞鶴や横須賀ほどの重要性はない。

大阪警備府や横須賀みたいな巨大人口を有しているわけでも、舞鶴やその周辺に密集している要港部を守る核プラントが集結しているわけでもない。

しかしこの九州は幾度も歴史上日本を揺るがしてきており、人口の

少なさもさる事ながら、精鋭揃いと呼ぶに相応しい土地と性質を持っている。

単純な人口増加も狙っているのか分からないが、俺の膝下で深海棲艦の魔の手から国民を守る義務を背負っているのは紛れもない事実である。

その責務を全うするための下準備は、意外にも気さくな挨拶から始まる。

交流を経て、自分を知ってもらい、仲間意識と団結力を高める事こそが肝要。でも今の時代は気をつけたほうがいい。積極的すぎると肩を強張らせる結果となる上「日本社会特有の団結力の強要マジ嫌い」とか思われたら失意どころじゃない。

ここは「フランクすぎる」上司を演じるに限るが、程度を間違えれば、こんなヤツの下で働くの？的な舐められ方をされるため、加減が難しい。

とりあえず着任は明日であり今日は休日なんだけど、俺は一日前行動をわきまえてる有能な士官なので、みんなの顔と警備府の下見を休日を潰してまでする俺マジ提督の鑑だから褒め称えろ。

——俺はこの個人的な企画を——「提督さん、一日限定で身分を隠して警備府に潜入しちやおう大作戦！」と名付ける事にした。

警備府内の装飾や色彩を見て思い立った言葉は「新品」そのもので、佐世保とは色の鮮やかさから異なっていた。警備府の規模は、要港部のワリにはデカイんですけど？程度だが、それでも二、三倍程度の大きさは備えてある。

警備府が二、三倍デカかったら弾薬庫もそれぐらいデカイと言わんばかりに巨大な格納庫から出てくる艦娘たちへと声をかけた。

「や、やあ……ぶ、ブヒー！こ、こんにちわブヒ」

「え？あ、こんにちは……」

「誰あなた？……ここは関係者以外立ち寄り禁止よ？」

おい、俺様の顔見て分からねえのか？礼儀が成ってない駆逐艦には、エッチなお仕置が必要だよだなあ……？なんて言うのは正に悪提督の鑑である。

さつき昇進を受けた大佐と今の俺の姿を比較しても同一人物だとは思えないほどラフな格好であり、肩章を付けていないのはもちろんだが、持っているのは大きな黒いスーツケースだけで、鉢巻を付けてブヒブヒ言ってるのが異物感しかない。

袖を捲りあげて短パン着てたら水兵にも見えなくもないので、まず提督だと思われることは無いだろう。

俺の姿にドン引きしている五人の艦娘は、大正ロマンの体現とい呼べる派手で清楚な和服姿をしていた。予め目を通した所属艦娘の一覧の記憶が正しければ、彼女たちは確か神風とその姉妹たちであると記憶している。

赤、桃、青、緑、黄の配色は正にパワレンジャー。

駆逐戦隊、カミカゼンジャアアア!!!

よし、艦隊編成の際にはこの名前で行こう。

「お、おれ……俺、ブヒイイ！」

「ひい……！」

「旗風、僕の後ろに下がってて」

「は、春風も神風姉も私の後ろに下がってなさい！」

「ひ、ひどいブヒイ！お、俺は、ぶ、ブブブウヒイイ——ツヒツヒツヒイイッ!!……ごめん、着任予定の者なんだけど、整工班つてどこにいるか分かる？」

「あ……あなたは、整備工作班の人、なんです、か……？」

「ああそうだよ」

元、だけど。

「じゃ、じゃあ私達もそちらに行くので、つ、付いてきて！」

「分かった、ありがとう。荷物を運ぶんだったら手伝うよ」

「結構ですツ!!!」

「……………」

男手の拒絶、ジト目で凝視。

一緒に歩いてるはずなのに物理的にも精神的にも距離を感じる。怪しい人を見る目はあるようだが、何故神風たちは自分たちの上官だと気づかないのか？それは、軍装を着用しているもののラフな格好を

している……というのもそうだけど、単純に俺の肩章などが外されて
いるからである。

正体を明かさずに、なるべく一人の士官として警備府を見回るのは
アンダーカバーボスをしたからじゃなくて、気遣っている面もあ
る。みんなは司令官が来るまでになるべく完璧な状態にしようと必
死で走り回って最終確認をしてるんだから、一日早く来たなんて知れ
たら彼らの気が休まらない。

俺の我儘で赴いている以上、これぐらいは気遣わなくちゃいけな
い。

やってることがすでに提督らしからぬと言われるかも知れないが、
実感がなさ過ぎて普通は複数の士官と共に黒塗りの車に護送されな
がら警備府に来場したものを、俺一人だけのロンリーな車旅となつた
んだ。

普通の提督……特に、初代提督として着任するのであれば組織編成
などの人事的なプランやホームページでの挨拶、着任式の挨拶やメ
ディアへの写りを計算したりと色々と考えるべきだと先輩提督方に
言われているが、もう要港部でやった事あるし、既にプランは整えて
あるので、実をいうとここに来た目的は俺の有意義な暇つぶしの念も
あつたりして。

なにはともあれ傍からみれば変人、あるいは不審者な俺。

そういう人に対して身分確認を行わないのはいけないと思う。怪
しいと思うんだったら現役の士官や艦娘は、海軍基地内だったら身分
証明書を見せる権利があるんだからさ。

『……ねえ、なんであの人ハチマキ付けてるの？もしかしてオタク系
？の人とか？』

暑いから汗かいてんだよ。

俺は君たち美少女の舐めたくなるような艶めかしい汗はかかない
んだよ残念な事に。

『僕もサッパリだよ朝風の姉貴。もしも整工班の人として着任するん
だったら、遅刻は感心しないね。新人だったら尚更だけど……でもな
んでかな？なんか普通の士官の人には見えないんだよね……姉貴た

ちはどう思う?』

『わたくしからは、特に何も……』

『春姉さん……神姉さん……』

『だ、大丈夫よ! 私が付いてるわっ! し、しししっぴかり私の後ろに付いてきてえ!!』

おいおいおい、これじゃあまるで小さい大正ロマン女子を付け狙うキモ豚だよ。

しかも後ろって、俺も神風の後ろについて行ってるんですけど。

通り過ぎる士官などからも「なんだこいつ?」みたいな顔されたので、俺の顔を見ただけじゃ提督だと気づかないようだ。というより、ハチマキを深く被りすぎてブルーメランスネック出しそうな顔になっているので、服装とも相まってなお気づかないだろう。

「つ、ついたわ! こ、ここがみんながいる出撃所だから!」

「ああなるほど、デカイな出撃所……やってるのは出撃所の技術的な機能の動作確認か。昔やったことあるから懐かしいわ。ありがとう神風た……あれ? いない?」

出撃所前で確認を取る整工班の連中の一グループの所で息を切らしている。5人が持っていた荷物には艦娘の艦装のパーツが入っていたので、彼らは多分艦装の出撃準備に取り掛かっているだろう。

その彼らが、神風姉妹たちと共に疑心の目を向けてくる。小声で話をされても俺には分かるんだ……遠まわしに「あの人ちよーキモいんですけどーチョコベリバー」とか言ってるんだろ?

ったくよオ? 明日になったらお前たちのその和服に覆い隠されたエツチな身体に、誰が支配者なのか一日かけて教え込んでやりたいぜまったく。

『……おい、アレ誰だ? 新人か?』

『あの顔たしか……あれ、どつかで見たことがある顔だわ。あるんだけど……おい、お前行ってこいよ』

『ふえ!? 私がですかあ!』

『お前新人に教えるの得意だろ? キョロキョロしてて右も左も分から

なそうだし。明日司令官が着任するんだから、最低限の作法とかも教えておいた方がいいんじゃないか？』

『う……たしかに大事な時期だから、新人には付いていてあげなきゃ……』

『いいから行ってこいって！班長には俺から伝えておくからよ！』

『は、はい……』

覆面ボス2

「あ、あのー！」

「ん？どうしたんだい子猫ちゃん？」

「こ、子猫ちゃんっ……？」

小さい身体ながらも、真っ直ぐにこちらを見上げる黒髪ロングとイエローエメラルドの双眼。一見すると初霜と間違えてしまうほど似ている。

「こほんっ……初めまして、私は整備工作班の三日月です。あなたは今日から着任の方ですか？」

「俺は……正式には明日なんだけど、今日は下見……みたいな？」

「なるほど……ですが、例え一日前に来たとしても、来た以上はキツチリと、基礎だけでも学んでいってもらいます！明日は司令官が来る日なので……」

『整工班！全員集合だ!!』

「あ、班長が呼んでます！行きましょう！」

「え、ちよ」

小さい身体ながらもちやんと鍛えられているのが握られる手を越して分かる。ほんのりと温かいおててを握りながら集合と唱えた整工班の班長の下に、さつき案内してもらった神風姉妹もいた。

人数はかなり多いほうだが、これ以上を必要とする任務が山ほどある事を、前職から知っていた。その上で、こういう真面目に部下の世話を焼いてくれる責任感の強く、実際に指揮力があって、機転の効く娘は旗艦としても活躍できそうだが、生憎彼女は整工班のようだ。

三日月の機転は特がいい。

三日月とは身長之差があつて、つま先立ちで「んんっく！」と唸りながら俺の服装を一生懸命直そうとしてくれている。そして俺の服の手足の袖を瞬時にめくり上げ、何処からか取り出した階級章をぽんぽんと肘上に付けて、最後はセーラー服の襟の部分とクソダサ帽子を被せれば、

はい、即席水兵の出来上がり〜!

てか二等兵曹じゃん俺、何階級降格してんだよ?

「今更の上、新しいニュースというわけでもないが、ここには新しい司令官がご来港なさる。この警備府が正式に稼働するのは4日後となっているため、嚴重なチェックが行われる事だろう。特に彼は、我々と同じ元整工班なので、気を抜くなよ」

「ま、マジツスか!?整工班から提督になるんツスか?」

稼働したての警備府は初起動をしくじらない為に嚴重なチェックが行われるのが基本で、そのチェック自体は整工班や技術士官が行う事になり、司令官は“異状なし”という言葉にウンウンって頷いてるだけである。

だが元整工班であれば来訪は気を配る必要がある。自分でチェックする可能性もあるのだから当然だ。

「それになんと言ったって司令官は“前線の龍”と呼ばれているほどのやり手の提督だ。どんな無茶振りにも対応できるように、そして彼の機嫌を損なわないよう万全を……ん?」

そのクツソ恥ずかしい二つ名やめろ。

と目線で訴えようとしたらこちらを凝視してきた。

「……ハ!?!」

そして整工班班長は何か気付いたような表情を浮かべるが、同時に何かを察したかのように、演説に戻る。ば、バレたの!?!いや、あんなに冷静に話し続けられるんだ……俺でも自分の部下の中に提督が紛れ込んでたら、ホア!?!つてなるもん。多分気づいてない。

「……おい、お前新人か?」

横にいた下士官が小声をかけてくる。

「え?あー、そんな所です」

「テレビで見たことがあるかは分からないけどよオ?着任してくる司令官はスゲー若いんだよ」

「そ、そうなんですか」

「ああ。聞くところによると、金とお勉強だけで成り上がったクソ提督らしいぜ?」

「お、それ俺も聞いたことあるな。噂じや艦娘にいやらしい事をしてるって大洗の同僚がラインで言ってたな。すぐに訂正されたけど、それが逆に怪しいんだよなあ……なんか口止めされたとか？」

「お前が言うの同僚って確か女だろ？きつと司令官の極悪大砲で上の口も、下の口も、万遍なく口止めされたんだろ？俺も提督になってみてえわホント」

話の輪が士官たちに広がっていく。

俺の感覚で言い換えれば“伝染していく”だが、そんな中で俺は一言だけ言いたいことがある。

減給するぞ貴様ら。

「うるさいですよー静かにしてくださいー！」

「「ウツス」」

三日月の牽制を受けて数人が黙り込む。

俺に付きっきりの彼女はどれほどの立場にいるのかは定かじやないが、強いリーダーシップと責任感を兼ね備えているのは確かだ。できたての整工班において補佐役は数人規模で存在するが、正式に副班長となるのは警備府が始動してから……なんだが、内定として副班長は三日月に決まりだな。

人事面での収穫はあった。

副班長は若い三日月だが、班長は所謂オツサンである。

だが顔を覆い尽くすシワと傷の跡が歴戦の猛者を彷彿とさせ、口調や仕草、そして上に立つ者としての気質を含めたすべてが“老練”と言つていい出来栄えとなっている。

その班長が「おい、そのバンダナくん」と声をかけてきた。三日月や他の士官は、なんで俺が呼ばれているのか知りたそうな顔をしていたが、班長は俺を誘導して班のオフィスに入る。

当然、二人きりだ。

よく見ると細マッチョの身体がとても刺激的で、多分裸になれば、年下の女の子はイチコロだろうなど、フェロモンを感じさせる……だろう。ああ、言っておくけど俺はノーマルである。

「……無礼ながらお呼び止めしてしまい、申し訳ありませんでした。

私は整備工作班の班長です。親愛なる司令官にお会いできて光栄の極みであります」

「は、はい！……って、気づいてたんですか俺のこと？」

「もちろんです。警備府内組織、警備府司令官たる提督直属の整工班、小官には過分な地位ながらもそれをまとめさせて頂いている立場ともなれば、司令官の御尊顔を知っていて当然です」

「な、なるほど……」

うわ、この人マジカッコいいんだけど。

ナチュラルフェロモンドクトリンでお尻から愛液溢れちゃう……う！

「僭越ながら、なぜここにお越しになったのかをお聞かせ願えませんか？私には長い年月を軍隊という組織に費やして来ましたが、流石の私も部下の中に、明日着任予定の司令官が水兵の格好をして紛れ込んでいた……などとは初めてなもので、少々混乱を禁じえないのです」

「あーそれはなんていうか、一日前に来て、警備府の全貌を予め把握しておこうかと思っただんですが、流石に司令官が来たんじゃないや部下の気が休まらないと思い、こうして水兵として偽装して来ていたんですが……バレちゃいましたね」

「ハハハ、それはすいませんでした、何分空気の読めない性分です……しかし、その格好じゃ流石に動きづらいでしょう？我々の服を着て見回るといのはいかがでしょうか？」

「是非そうさせてください」

では、と言いながら予備の制服を一枚と、階級章を受け取った。

懐かしい装備を身に着けようとするが、懐かしすぎて着るのに多少手こずる。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ……久しぶりなもので、少々着づらさを感じてしまいました」

「ははは、無理もない。どれ、私が手伝ってあげましょう」

そう言いつつ、俺の股間部分と胸板を触り始める。

「ドキッ」

「ん？どうしたんですか？緊張しなくても……大丈夫ですよ」

脳裏に直接叩き込まれたウイスパーボイスに、思わず俺の心とケツが揺さぶられる。股間と胸板に手を入れた理由はもちろん班の軍装の性質上の問題に他ならないが、俺はなんで今いやらしい事を考えたんだろう。横にある細マッチョな身体が俺の二の腕に当たり、後ろにその老練な肉体が密着している。

カッコイイ。そしてオフィスを覗き込む三日月の顔が紅くなっているのが目に入る。

「よし、これで終わりです。これならば気づかれないうでしよう。思う存分に見回ってきてください……無論、バンドナを巻き直してですが、ね」

「は、はい、い、色々、ありがとうございます……」

「ん？どういたしまして……では、案内役はそちらで覗いている三日月に任せましょうか」

「ふえ!? な、なんでわかって……」

「そんなに音を立てたら分かるに決まってるよ。一応、この部屋は防音なのだから」

「も、申し訳ありません！そ、その、覗き見を……」

「ハハハ、素直に謝るのは殊勝な心がけだ。では、その罰として、彼に警備府を案内してやってはもらえないかな？」

「もちろんです！さあ、付いてきてくださいー！」

「う、うん」

ダンディーナイスミドル班長のフェロモンの残り香があるからか、名残惜しそうな顔をしていたと後に三日月は語った。オフィスを去り、三日月の小さなおててに引つ張られながら、警備府の周りを案内されることとなった。

覆面ボス3

三日月の小さなおててマジ暖ったけえ。

丁度手をおける位置にある頭からはアホ毛がこれでもかというぐらい跳ね返ってる。

真面目で、小動物みたいな可愛さを持つプリティーな艦娘。とても可愛く、とても一生懸命。

そんな彼女と雑談を交わしながら、士官たちが行き交う警備府内の廊下を歩いていたら。新設されているだけあつてギンギン言わないのが逆に落ち着かない。

「バンダナさんって兵曹長さんだったんですか!? 若いのにすごいですね……」

「え? ああ……そうなんだよ! HAHHAHA!」

肘にある階級章を見てそう言ったんだろうけど、三日月の方が階級は上である。

二等兵曹から兵曹長、つまり三階級上がったことになる、やったー。俺の軍人生活は少尉から始まったので、それ以下の階級には成ったことがない。

大佐から三階級なんて上がったら世界の終わりやぞ、などと妄想しながら、俺は周囲を見渡した。

施設の具合は良好で、相変わらず街みたいになんでも揃っている所を見ると機能自体は問題なさそうだが、その実情、内面を見てから決めても遅くはない。軍隊でも会社でも、社会を動かすのは常に人であり、彼らのモチベーションや人柄を見ながら人事を決める必要があるのは当然のことだが、その重要性を理解していない奴らは何十億という。

クラスで相性のいいヤツだけとつるむのが悪いと決めつけるオールドタイマーは、輪廻転生してやり直してこい。

できればトラックに引かれて異世界にでも行って一生帰ってくるな。

もちろんこれは風紀の問題もある。

賑やかさやアットホームさの加減もそうだが、艦隊の中に一週間カプルのような現代社会の弊害が生まれることはなるべく避けなければいけないのは、ポリシー以前に艦隊の士気に関わる。

これは当然ながら、統率者たる俺が、みっちりと目を光らせてやらなきゃいけない。

例えばあそこの女性士官は楽しそうに男性士官三人に囲まれながら戯れている。

ブサイクな女に、ブサイクな男。

まるでオタサーの姫かよと思ったが、コイツらも俺の可愛い部下になる奴らだ。パブリックエリアでプラトニック・ラブを突き通すのであれば、俺はクールなイケメン提督としてそれを容認しようじゃないかっ。

「そういえば明日だよな司令官が来るのって。俺たちと同じぐらいの年なんだろう？」

「ああ〜私知ってる〜！なんかあ〜、秋葉原にいそうな顔だっってきたことがある〜！」

「あれ？そうだっけ？それにしても俺たちと同じ年で提督か……偉そうなヤツじゃないといいけど」

「いや、そりや無理だろ。逆に？偉そうだから？提督になったみたいなの？どっちにしても？俺のイケメン顔を見たら？劣等感しか与えない的なの？俺イケメンだし？司令官の顔にマジ轟沈艦？みたいなの？」

「「アハハハハ」」

よし、この四人は監獄行きつと。

「あ、そういえばバンダナさんの名前、まだ聞いていませんでした！お名前はなんていうんですか？」

「え？えつと……萬・丹娜っていうんだ」

「ば、バンダナ……さん？それって本名だったんですか？」

「そうそう、アーイッテオクケドワタシニホンジン」

「は、はあ……」

一発で嘘だとわかるような矛盾。

ジト目でもPrettyだが、そんな目で俺を見るな。

確かに明らかな嘘だけど、面倒くさくなつたのかそれ以上は追求されなかった。

三日月は懇切丁寧にどこの施設がどのような機能するかを教えてくださいましたが、階級からして俺は熟練だろうと思つたのか、ある程度省略しながらスラスラと警備府内を巡回する。

途中で求婚する士官カツプルや、トレーニング施設でレスリングと云うあの汗の吹き合いをしていた兵士たち、男性トイレの中で談合する男性士官が嬌声を上げながら「にくつぽお」と叫んでいたところまで見た俺よりかは、むしろ三日月のほうが疲れているように見えた。カオスな空気に慣れていないのだろうか？それとも俺が異常なだけか？いや、異常なのはこの警備府だ。

ここだけは訂正させてもらうが、今の所、問題は何も起こっていない。

艦娘は当然出撃していないので、街に出ているか部屋に閉じこもっているか施設にいるかの三択だが、出会つた艦娘の絶対数が知らされていたよりも少なかったので、どうやら前者の二択が多いらしい。

と、そこに四人の艦娘が前方から接近してきたので、道を開けて通り際に敬礼する。

通り過ぎるかと思つたが、艦娘の一人が俺を「んん？」と凝視してくる。つま先立ちしてくる黒髪ロングヘアの美少女の顔を直視できずに、向きを逸らした。

「んん？」

「どうしたのじゃ初霜？お、もしや初霜にも、ついにお目当てとなる男子ができたのかのう？」

「か、からかわないでねえさん。ごめんなさいねっ、ただちよつと知り合いの人に似てるなっ、って思つたから……」

「ソ、ソウナンデスカ」

「人違いだつたんだな。早く艤装を見に行くぞ初霜」

「うん！」

三日月と見間違えるぐらい似ているが、彼女は三日月の双子ではない。

あの四人は初春姉妹であり、初霜というのは……俺が舞鶴参謀をしていた頃に会った艦娘である。

正確には高浜要港部の艦娘だったが、元班長課長にお願いして異動させてもらったのをすっかり忘れていた。

というよりダメ元だったので、実際に来てくれるなんて期待していなかった。

アブねえ……！危うく正体がバレるところだったゾ。

姉妹たちとは面識がないが「ねえさん」と呼んでいた事を考えれば、間違いなく彼女が前に言っていた彼女の姉達である初春と若葉と子日だろう。

三日月に促されて再度歩き出す。まさか俺より先に着任してるとは思わなかったぜ。

「初霜さんとは知り合いなんですか？」

「んくまあ……何度か会ったことがある程度だけど」

「え、だったらなんで挨拶しなかったんですか？」

「あ、会ったとは言っても、整工兵として何度か整備しただけですの
で、うん……」

「そうですか……あ、着きましたよ。ここが酒保なんです……説明は必要ないですよね」

説明不必要宣言は、多数の商品や食べ物が出揃い、素人が見ても現金やカードなどで支払いを済ませてそれらを入れる兵士たちの姿と盛況さは、どう見ても売店そのものだからである。そう、ここはみんな大好き売店である。支給される日用品以外のモノが欲しい場合は、ここで買うのだ。

そんな中でひと目を引いたのが、日本酒一升を片手に「うめえ！うめえ！」と騒いでる艦娘だった。

「アレ何？」

「あの人は軽空母の隼鷹さんです。そして制止させようとしているのは姉の飛鷹さんです。警備府の中でも強い艦娘です」

「あの……アレって止めなくてもいいの？」

「いいえ、三日月はもういいです」

虚ろに隼鷹を見る瞳は、既に諦めた人の目だ。

もうお腹いっぱいなんだな、ごめんな三日月そんなにストレス溜めさせて。

警備府はカオスな人材の宝庫というわけではないが、逆にカオスな人材が来るとそれが異様に目立ってしまうというデメリットが付く。酒乱には酒乱を……酒好きならさんとかと一緒にして、島送りにしてしまえばいいと思う。

まあ隼鷹……だっけ？司令官が到着する前に最後の一杯的な感じでやりたいんだろ。

「提督うが来たらあこっやっつてハメ外すこともおできないんだからあタツプリ飲もう飲もう！飲んで飲んで飲みまくって、酒保一面をアルコールで染め上げてやるウウウ!!!」

「隼鷹！お願いだから静かにして！」
「……………」

軽空母という艦種に加えて、その戦闘データと実績から第一艦隊を任せようとしていたんだが、隼鷹は第一艦隊を配属していいものかと早くも悩み始めた。

飛鷹を含む数人が隼鷹を止めようとして、そのまた数人が隼鷹のどんちゃん騒ぎというなのアルコールクーデターに参加する。

……クソオ！俺の要港部同様に、濃い奴らばっかじゃねえかッ!!
司令官が着任して艤装で演習できるまでの艦娘たちは訓練に勤しむのが日課だが、それでも色濃い艦娘たちを見つけたり、艦娘をナンパしようとしている男性士官などがいて早くも夜に差し掛かっていた。

一日中歩き回った中で、ある程度警備府の内情について理解する事ができたが、総じて結論を出すとするなら、この警備府は鴨川要港部とあまり変わらないと言う事ぐらいか。少し濃い人選も、有能であれば使い用はいくらでもあるので、使いこなして見ろという海軍からのお達しだろうか？

この警備府には補給艦間宮という艦娘が存在しており、彼女は補給班と艦隊の両方に所属しているらしいが、戦闘に出ることはまず無い

そうだ。

班長と三日月、そして彼女の姉妹である菊月と食ったメシはとても美味しかった。実は今日ここに来た中で、一番印象に残ったのはそれだったりする。

警備府の司令官たる俺の責任は重大であり、昔以上に気を引き締める必要があると自覚を常に持つ必要がある。

自室。

「疲れちゃ、たア!!!」

と叫びながら書き込んでいた日記のノートを閉じる。自室が質素なのはもちろん来たばかりだから当然だけど、ベッドと机と小さなクローゼットしかない部屋は、今頃最後の夏を謳歌しているだろう平均的なイキリ高校生の部屋よりも狭い。

三日月に今日の案内のお礼を言ったあとは、俺の部屋となる司令官部屋に誰にも見つからないようにして忍び込む。

結局俺が司令官だと気付いたのってあの班長さんだけなんだよなあ……俺の顔ってそんなにモブっぽいのか？

持ってきたスーツケースの中身の殆どを取り出して、最後にノートパソコンを開いて、警備府の初代司令官として着任する俺からの挨拶を考え始めた。

ホームページに載せる挨拶なんて至って簡単なんだが、それ故にくじってはならない。

フランクな提督として、フランクな挨拶を。

とりあえず、“愛する皆様をお守りさせていただくこと、警備府一同の幸甚にございます”と最初は丁寧に始めてから、深海棲艦の事は語らず、行うイベントや模様しと、西九州方面がより強固となった事を簡潔にまとめるところから始めるか。

パソコンに字列を打ち込んでいた時、偶々開けたメールボックスの中に沢山のメッセージが来ていたので、それを確認する。

「……！」

そこには、俺を警備府着任を祝う声がこれでもかというぐらい集まっていた。

一つ一つに個人差があるが、親潮からの長々としたメールや、斎藤大佐からの“おめでとう、気張れよ”と簡潔なメールまで様々だったが、元部下たちや提督方、更には同僚からのメールも律儀にあり、思わず涙する。

俺は人との温かい繋がりを感じると、つい目頭が熱くなってしまうんだ。

少年漫画主人公特有の鼻を「へ！」と擦る動作と共に、一つ一つのメールを開いていく。

“ 宍戸警備府の司令官就任おめでとう！早速だけど、俺兵学校時代からお前の素質見抜いてたから金かしてくれない？あと、横須賀のかわいい艦娘紹介して”

“ 副班長……いいえ、司令官！就任おめでとうツス！俺と同年なのに昇進早くて羨ましいツス皇族かお前ふざけんよ”

“ おめでとう。俺より先に昇進するなんてナマイキな奴だな。テメエ次会ったらブス専キャバクラでOBASANキス地獄に突き落としてやるからな覚悟しろよ”

「……………」

ベッドに潜り込んで泣いた。

白露型全員集合

とある警備府。

ケツアルコアトルをケツマ○コアトルの違いが一瞬分からはなつた今日このごろ、警備府に四人の影が出現していた。異様にして普遍的、偉大にして過小なる存在は、新設された長崎警備府の内部を神妙な顔立ちで歩いていた。その雰囲気には士官等は行き交う度に敬礼を交わし、小声ながら饒舌となっていく。

艦娘も、兵士も、士官も、誰もが彼女たちを物珍しげに見る通り、その四人の艦娘を“見慣れている”と言う者はほとんどいないだろう。

今日着任予定の四人は、緊張の糸が解れないままノックをして、この警備府の統括者である提督の元に馳せ参じる。

一列に並び、敬礼しながら形式上の挨拶を述べた四人に対して、提督は淡白に返す。

「ご苦労だった」

「……………」

ここは通称、悪鎮守府と言われている。

なんで警備府なのに鎮守府なんですかねえ……という総ツツコミを受ける所だった提督。

理由はこの提督がなんかセクハラしまくっているとか、すげークソみたいな作戦で人権人命のことを考えないで威張り散らしているところとか、とにかくそんな感じのクソ野郎って設定である。

その証拠に、先程から舐め回すように、程よく発達した身体を持って余す四人を見る。

四人はとても秀麗であり、美形の例を持ち上げるならば間違いなく彼女たちを上げるだろうと、巷でも評判だ。その内の二人は、世の女性達からすれば敵と見なされても文句を言えないほど我儘な体型を保持しており、その端正な顔立ちと組み合わせる事で、男性をバキュームのように引き寄せる。

提督がヌメつと気持ち悪く立ち上がった。

「君は、村雨と言ったかな？いい体をしているね」

是非その身体を使って、私の疲れもバキュームのように吸い上げてほしいね、と言いつつ肩を触る。

「い、いやあーやめてくださいー！」

「ほう？この私に逆らうつもりかね？噂通り私はいうことを聞かない子へは解体も辞さないのだよお……？」

「ひい……い……わ、私には……村雨には、心に決めた人がいるんですツ！！」

「はツ？誰だよソレツ？……ではなく、誰かなその心に決めた人とやらはツ？私の権限で抹殺できる人間だといいいのだがね……ハハハ！」

警備府の提督というのは、鎮守府ほどではないものの、十二分の政治力も有している。

若き村雨が意中の相手として想う相手は消去法により若年の士官だと断定できるが、海軍の若き士官ならば提督の鶴の一声でどうともできるだろう。その恐怖から、誰も彼に口答えできない。

いやらしい手が村雨の身体の隅々まで侵食して行く中で、隣にいた姉妹の一人が村雨を守ろうとした。

「やめてくださいー！妹が困ってますー！」

「ほう？たしか君はトキアメと言ったかな？なにか文句でもあるのかね？」

「村雨を離してくださいー！あとトキアメじゃなくてし、ぐ、れ、です！学歴低いんですか!？」

「は？ちよつと間違えただけで学歴を疑う大日本学歴主義共和国好きだわクソ。俺お前より学歴高いんですけどむしろ頂点なんですけど？あと俺の肩章見える？大佐なんですけどオオオ!?はい、君は俺に逆らえないバリアー!!!」

「じゃあ学歴と階級と歳に似合った言動してくれない？警備府の提督がこんなうんちみたいいな人だなんて僕たちはともかく部下の人が可哀想だから」

「グルルルルルツ!!!」

「はいカットカット！二人共いつものペースに戻ってる！」

悪代官、悪提督プレイ、見事失敗に終わる。

長崎警備府、執務室。

新設された長崎警備府とともに着任した俺と、同時時刻に着任した時雨たち白露軍団。

正式に警備府が運行開始するのは三日後となっているが、準備、そして最終確認と、予行運行のために一週間前からここに配属された者が多数いることは、昨日確認した。

悪提督プレイを楽しもうとしていたのだが、流石に村雨ちゃんのお腹を触ったのは早計だったか。

「久しぶりだなみんな、元気にしてたか？」

「うん、穴戸くんも相変わらず元気そうだねっ」

「村雨ちゃんのお腹を触ったから元気満タンだよ」

「お兄さんツ？」

「春雨ちゃん怖い……！怖い……！」

「ハハハ！でもいつちばーん元気にさせるのは、この白露お姉さんのボン・キュツ・ボンなセクシーぼーだよね!？」

「はい、もちろんですよ白露さん」

「なんかお世辞っぽい返し方なんだけど」

いつもどおりのみんなの笑顔を見て、俺もついつい笑顔になっってしまう。

変わらない時雨たちと一緒にいて、俺は初めて戻ってきた感覚を得るんだ。これは最早家族、つまり俺は春雨ちゃんの本当のお兄ちゃん、みんなの夫だったんだ。え、錯乱しているって？いや、錯乱じゃなくて、真実にたどり着いただけだよ。錯乱とか言った野郎は警備府監獄行き。

「それよりみんな……」

俺は一人ひとりを見渡しながら、白露さんの頭をなでた。

「ど、どうしたの？ひ、ひさしぶりに会ったから、お姉さんに甘えたいとかっ？さ、流石にいきなりは照れちゃうよあは、あははっ！」

余裕そうに振る舞うが、白露さんは顔を紅くしている。

しかし俺は順番にみんなの頭を撫でていく。

みんな突然の頭ナデナデに恥ずかしそうな、あるいは照れくさそうな表情を浮かべるが、抵抗はされなかった。

最後の時雨の頭も撫で、予想以上に顔を真っ赤にした事に驚きつつも、ちゃんと頭を横にある触覚の感触を楽しむ。

「どうしたのこれ？寝癖？」

「あの、そろそろセクハラで訴えてもいい？」

「NO、ダメエ、俺の question に答えなさい」

春雨ちゃんには無いが、白露さん、村雨ちゃん、時雨には髪の上、それか横？とにかく髪が犬の耳みたいに生えていた。時雨や春雨ちゃんには容姿的な変化は無かったが、白露さんと村雨ちゃんは凄く……そう、メツツツチャクチャ、容姿が変わっている。

白露さんといえば、全体的にボサボサしたロングヘアとなったおり、何時も付けていたヘアバンドがなくなっている。そしてムツチムチの太腿に黒ニーソと、胸が……大きくなっている……だと!?

村雨ちゃんはあるの天女のような美しいツインテールから更に髪が増えて、後ろにロングヘアを残した髪型となっている。見つめたら赤面して目を逸らされたが、瞳が微妙にオツドアイとなっており、胸が……微妙に大きくなっている……だと!?!そして何より黒ニーソなのだが左脚だけであり、右脚は完全にスカートの中にまで伸びたストッキング？あるいはインナー？もう言わなくてもお分かりだろうが、

エツツツツ。

艦娘って、一年ちよつとでこんなに変わるものなの？

白露さんと村雨ちゃん、ホントスケベ。思わず顔を横に振って笑ってしまう。

「実は改二になったんだ僕たち、春雨はまだんだけど……」

「は？改二ってナニ？人体改造計画？」

改二でこんなに容姿が変わるの？鈴谷と熊野なんて服以外はあまり変わらなかったじゃん。艦種が重巡から軽空母になったぐらいの激変ぶりだったのにさ。

「なんで春雨ちゃんだけ改二ないの？差別？」

「い、いや、別にそういうわけじゃないとは思うんだけど」

「白露、いっちばーん最後に改二になったんだー！どう？カッコいい!?」

「はい、エロ……じゃなくて、カッコいいと思いますよ」

「えへへ、やっぱり君に褒められると元気出ちゃうなく！」

「あ、あの……」

春雨ちゃんは更にドスケベとなった身体をモジモジと揺らしながら、欲しがりやさんな顔でこちらを見つめている。そのエッチな服で上目遣いとかマジでただのセ〇クスする前のエチエチ女の子だからやめなさいと言いたいし、どうこう言う前に、他の男の前では絶対にするなど独占欲をさらけ出した気分になったが、持ち前の冷静さを表に出して気丈なまでに面倒くさくない漢を演出することにした。

「どうしたの？」

「あ、あの、その……む、春雨は、どう……でしょうか……？」

熱を帯びた眼が一人の男性を見上げている。これはもうセツク……ではなく、春雨ちゃんは彼女の改二姿が、俺の目からどのように写っているのかを知りたいらしい。

「可愛いよ春雨ちゃん」

「よ、良かったあ……！」

「むう……春雨はどうですか!？」

「春雨も時雨も、相変わらず可愛いよ」

春雨ちゃんは子供のように喜び、時雨は当然だよと胸を張る。時雨も耳みたいな寝癖がついてるけど、何処かで見たとあると思っただら、夕立ちちゃんの耳みたいだ。

「提督さん！白露たち来てるっぽい!？」

「おう、来てるぞ」

「「夕立に五月雨!？」」

「ぽくい！」

「お疲れ様ですみなさん！」

ドアを開けて、直行で姉妹たちに抱きつく可愛らしい金髪紅眼の美

少女夕立ちちゃんと、そして100センチ以上あるんじゃないかと思うぐらいのスカイブルーの長髪を携えたサミー。

この二人は、改革された横須賀鎮守府から異動して警備府に着任したのだが、姉妹たちがここに来ることも含めて考慮されたのだろうか？何れにせよ、今は場所的に大本営にやすやすと顔を出せないのも、その真意の程は電話で聞きましょう……海軍大臣が多忙でなければ。

「ぼーいー！久しぶりの時雨っぼーいー！」

「ちよ、くすぐったいってばっ」

それにしても、時雨と夕立のペアはイイツすね。全員が全員と仲がいいのは当たり前だが、一番仲が良さそうな雰囲気を感じる。時雨の顔に夕立ちちゃんのお顔が擦り付けられて、まるで犬みたいにじゃれ合ってるのは正に喜悅。

五月雨ちゃんも、春雨ちゃんや村雨ちゃんと会えて嬉しいみたいだ。

「ねえ、白露は〜？白露に会えて嬉しいでしょ!？」

「うん、嬉しいっぼい」

「穴戸くん〜！お姉さんが一番疎外されてるキブンなんだけどお〜！」

「あはは、そうですね。ほら、白露さんが俺がよしよししてあげますよ〜」

「うふふ！久しぶりに頭ナデナデしてくれるの嬉しいな〜！」

相変わらずナニかする度に姉妹たちからの視線が痛い。でも仕方がないじゃん、白露さんメツツツチャ可愛くなってるもん。ロングヘアとか反則だろおい。

長崎警備府、これでついに役者が揃った。

長崎警備府幕僚会議

長崎は歴史と戦争と血気盛んな九州男児で構成されている。九州内では有数の人口と、佐世保に近いという理由で賑わいを見せる立派な都市でもある。

色とりどりの艦娘、士官、兵士、そして鴨川要港部に初めて来た時みたいな新鮮さがある。

塗装は新しく、廊下に漂う汗と油とフレツシユナー系統の消臭剤の臭い。

まるで無かった支配者としての威厳も、昨日の今日ではまるで別人のように放つ俺こそ、廊下を歩くたびに敬意を持って敬礼される警備府の司令官である。

しかし大きな警備府となると、堅苦しい空気は慣れない。鴨川要港部みたいなフランクさだけで行ってる基地とは違い、ここは何を隠そうあの佐世保鎮守府の片腕として存在している。

士官は新米から熟練まで幅広いが、誰もが勇敢で、未来溢れる海軍軍人である事は海軍の栄光が保証している。

長崎警備府の会議室。

新設されたから新鮮味があるだけで、特になにも変わった様子はないけど、強いて言えば観葉植物くんが手持ちサイズのサボテンになった程度だが、白い塗装が覆う会議室の中にサボテンがちよこんと置いてあるのは異様である。

「それじゃあ人事についての会議を始める」

「「はーいー」」

学校のクラスじゃないんだからもっと堂々として白露姉妹お願いだから。

会議室に集まってもらったのは、俺が警備府を運営していくに当たって設立した幕僚会議である。偉そうな名前だけど、こういう偉そうな名前と役職を与えていくのは地味にモチベーションとなる……と、大学校で教わった。まあ要するに、幹部会議である。

要員はこれから任命するつもりの艦娘や士官を集めた。

第一艦隊旗艦にして総旗艦の飛鷹と隼鷹。

第二艦隊旗艦白露さん、春雨ちゃん。

第三艦隊旗艦夕立ちゃんと時雨と五月雨ちゃん。

第四艦隊旗艦初霜。

第五艦隊旗艦涼月。

教育担当艦兼軍需部の足柄さん。

補給担当艦の間宮さん。

整備工作班班長と、副班長三日月。

秘書艦の村雨ちゃん。

そして軍医部とか海兵団とか参謀部とか経理部とか施設部とか人数多すぎイ！

任命したのはいいけど、実際の幕僚会議の要員はこれより少ない人数にしよう。この部屋すごく狭いし、何よりアツウイ！狭くて熱気で暑苦しい！クソ暑いんだよお前らよくヘーキな顔してられんな。

ついに俺の正体を明かして提督服を着て廊下を歩いていた際に「いついらつしゃつたんですか!？」と声をかけられる事が多く、司令官が来たこと自体は周知されているが、昨日いた萬・ダナさんが俺だと気付いている人は少数派である。

だが、所々司令官がああのバンダナ男だった事に気付き始めた奴らがいる。ごく数人だが、士官たちは目を大きく見開きながら「え、ウソ……!？」と声が漏れていた。

でも今は第一回幕僚会議なので、それらを見無視しながら佐世保の人事部さんを横に、警備府の人事について話していく。

下士官や兵士たちについては主にまとめられた人事の資料に了承を出すだけだが、その上の幕僚たちについては俺が決めて人事部に送らないといけないので、ここである程度決めておかないといけないんだが、今日の議題がそれだけじゃない。

「この編成って、なんか攻撃的だね……」

「気づいたか時雨、えらいえらい」

「あの、会議中なんだけど……」

頭を撫でられた時雨はちよつとムスつとしたが、流石に会議中は

殴ってこないだろう。

「……みんなも知ってる通りだが、俺たちは東南アジアの諸国を救いに行く方針を、陛下から賜った身である。その第一段階として沖縄諸島の奪還を計画しているのは、全員が承知の上だと思う」

政治的な話をする、政権が変わった。

青天の霹靂すぎて最初、は？となる人が多かったが、一番驚いてるのは海軍士官たちである。

海軍大臣はそのまま中道政権となつてはいたが、中道と指し示す通り独裁国家になつたわけではない。大衆政党を豪語する政権は事実上は海軍支持派の集まりであり、確実に外交的な面では革新的な変貌を遂げた。

一年前の八丈島奪還と、その政治宣伝の効果でナシヨナリズムが台頭する事で、それを汲む大衆政党はナシヨナリスト政権となるのだが……それほど過激ではないし、沖縄奪還を挙げて反対する者は少数派である。

タカ派的な積極性のある政治姿勢は内部だけでなく、外部からもある程度の反感を呼び、それだけでファシズムの到来だの何だのと罵られる形になつたが、第二、第三世界を救おうとしている国に対して、助けようともしていない国がギャーギャー喚くなカス。

日本にとつても、この沖縄奪還はとても重要であるのは、国土回復と資源の調達もそうだが、大陸国の中国を牽制する意味合いも含まれているのは市民も知るところであり、逆に本命としてそつちを支持する者も多い。

反対派に対して、むしろなんで今までやらなかったの？と疑問を投げかける人もいる辺り、全国民の意見を汲むことは不可能だと改めて思い知らされた。

「この作戦は何時になるのですか？」

「正確な時期はまだ大本営から受けてないけど、それまでに作戦案を他の警備府や要港部、そして佐世保鎮守府で協議しろとの命令は下つている。それだけに膨大な準備期間が必要になるから、そんなすくじじゃない」

防衛で死者は出るのは仕方がないけど、攻撃で死者を出したらそれこそ政権崩壊の危機となるので、作戦は慎重に慎重と、それまた慎重を重ね合わせてやれと言われてもいる。

そのために、今までにないほどの大規模な艦隊と、そして艦娘が集結している。新米の艦娘から歴戦の艦娘まで様々だが、規模が規模なので、下手したら東日本よりも多いかもしれない。

ダルいけど逆に考えれば、これを成功させれば深海棲艦を撲滅できるかもしれないだし、そのついでに日本の力を示して、国際的な主導権を得ることができれば万々歳だ。

「まあ急にやれと言われてるわけじゃないんだし、俺たちは今までどおり、どっしりと構えていればいいんだよ、何か他に質問は？」

「あ、あのー！」

「どうしたんだ三日月？」

「み、三日月なんか、副班長でいいのでしょうか……？」

黒髪ロングで、イエローゴールドの瞳が不安そうな、何か畏怖を感じているような上目遣いでこちらを見てくる。昨日の真面目で可愛い頼れるお姉さん先輩的な三日月はどうしたんだと言いたいわ。

「……この俺様がアイイっつたらイイんだよオツ!!ミカア!!」

「ひ、ひいひい!!ご、ごめんなさいごめんなさい!!」

「ヨシヨシ、怖がらなくてもいいよ。僕たちの提督って少し頭がおかしい所あるから、ね？」

「は、はいいい……!」

「はっ。」

時雨貴様アまた俺の威厳を落とすような真似をオ。

「ほっほっほ、しかし宍戸司令官の人選には少し偏りがあるのは事実ですなあ？長年佐世保で主計をしていた私からすれば、多少平均年齢が低いのでは？司令官ご自身が若いからといって自分と近い年齢の士官ばかりをお選びになるのはいけ」

「黙れやアクソバブル世代ガア!!ロボットみてえに同じ仕事しかして来なかった停滞した脳味噌しか持ってねエクセに無駄に歳だけ食ってるテメエらウンコが経験の差とかほざくのマジウゼエんだよオハ

ゲエ!!ナンだったらアテメエの功績と俺の功績比べて見るか!!
カアアアアスツ!!」

「っ」

泣きそうな顔をしないで下さい経理部長。

知ってますよ貴方が有能な中佐さんで、20歳以上も年下の女性に手を出して浮気がバレて奥さんに逃げられた挙げ句子供に口を聞いてもらえなくなった以降、ずっとストレスが溜まってること。

でもね、ストレスを他人にぶつけると、ろくなことが無いんですよ?あとカツラがズレてますよ、ギターの弦みたいですね。

「作戦云々はともかくとしてだ、一応人事的な事はこれで大丈夫だと思う、他に意見は?」

全員、納得した顔で沈黙する。

警備府つて要港部の二倍から三倍ぐらいの人員数だから、参謀部とかも置かれるんだよね。場所によって基地の性質が違うから全部が全部とは言えないけど。

会議が終了して、みんながそれぞれの立ち位置に戻るために退散していく中、残った白露姉妹に加えて、数人が会議室に残る。

一日早く着任したとはいえ、大きな要塞内部の全員に挨拶できなかったのは当たり前だが、それ故にあちらに気を使わせてしまう。つまり、直接挨拶しに来たんだ。直接話したことがない人や、昨日の巡回で見えない人までズラリズラリと近寄ってくる。

「初めまして、私は出雲ま……飛鷹と申します」

「隼鷹でーす!」

「足柄よっ」

「なにフランクに話してるのあなた達!?あの穴戸司令官なのよ!?少しは慎みなさい!!」

「え〜細かいこといいじゃん!なっ、提督?」

「隼鷹の言うとおりだよ。足柄さんだって今は俺の部下だけど、昔は同僚だったんだぞ?だから、もし敬語が堅っ苦しいようなら、俺には敬語なしでもいいんだぜ?そう歳も変わんねえんだし」

「し、しかし……」

「大丈夫よ、彼は敬語を使わなくてもいいとか言っておいて、本当に使わなかったら左遷するような心の狭い人間じゃないわ……懐の深い男の人、流石は穴戸提督ねっ、あなたは絶対に偉くなるってこの私が見込んでいただけあるわ!」

「その後出しジャンケンみたいな褒め方やめてもらえませんか足柄さん。俺はもう、女性から褒められても滅多に動じない不動明王くんなんで」

「素敵ですお兄さん!」

「この涼月も噂はかねがね……尊敬、していますっ」

「フ、ありがとう……グフフフゲへへゴホホオウ!」

「キモすぎる……」

恵比寿フェイス俺。

時雨に白露さんに、夕立ちちゃんまで俺をそんな目で見るな。傷付くんだぞ。

「でも偉い! やっぱり器量のある人は違うなあ〜! どう提督? 酒保、一本開けにいっく!」

「ごめん隼鷹、俺お酒はちよつと……」

「提督ってまさか下戸?」

「意外ね……」

「酒に強くないのは認めるけど、それ以前にこれからちゃんど機能しているか確認するために予行出撃してもらうから、できるだけ後にしてほしただけだ。それさえ終わったら、今日は特別に一本開けていいから」

「ウソマジ!? ダメ元だったけど、提督う〜粹すぎイ! 早速行つてきまーす!」

「あ、こら待ちなさい隼鷹!」

退出した隼鷹と飛鷹は、軽空母である。

鈴谷たちと同じくデカく、陰陽服みたいなのを着た歴戦の猛者なのは、昨日知った。練度もそうだが、航空戦力が彼女たちしかないないので、主力の第一艦隊を任せる事にしたんだが、軽空母と言っても極めて強い。彼女たちならば、艦隊の一軍を任せることができる。

もう一方で目の前にいる涼月だが、ホワイトなインナー着て肌の露出自体少ないのにボディラインが強調された服はいやらしい身体をこれでもかと見せつけてエツロ。女性としての完璧な体型……というのは議論になるが、その中で必ず一例として上がるだろうと思うぐらい、エロい。若干ウイスキーボイスで、整いすぎてるぐらい儂げな顔もまた good。

「涼月は第五艦隊の旗艦で大丈夫か？」

「むしろ、私なんかが旗艦でよろしいのでしょうか？私よりも、戦歴の長い艦は大勢いるのに……」

「涼月ならできる。俺を信用してくれ……君を信用する俺を信用してくれエー！」

「は、はい……！」

「す、涼月さんはともかく、私は……」

「初霜、前にも言ったと思うけどお前には素質がある。それを全力で活かせるのは旗艦にするしかないし、お前自身の姉妹たちを守るのには、お前自身なんだぞ？あまり自信が付かないようだったら、他の艦隊と演習してこい」

「う、うん、わかったわ……」

涼月と初霜をそれぞれの部隊の長にするのは、一重に艦隊をまとめ上げる統率力だが、容姿からくる風格なども考慮している。

リーダーとしての能力があり、人徳があるから……とはすこぶる安直だが、容姿は思っている以上に重要な要素を締めている。

初霜は特に時雨のような性質を持っており、単純に運が良く魚雷の使い方がうまく、そして対空もいける。対空は涼月に目劣りする……というより、涼月は日本有数の防空駆逐艦なので比較するのはナンセンスだが、それを除いても極めて高い作戦遂行能力を秘めている。

初霜は舞鶴にいたときからの知り合いなので、保証できる。彼女の姉である三人の艦娘、初春、子曰、若葉も練度を見れば比較的良いほうである。

「初霜ちゃんや涼月ちゃんはまだ良いほうよ？私なんて……んっ！」「間宮さん、私なんて……なんて、言っではいけませんよ？間宮さ

んは、この警備府だけでなく、軍事戦略上もとても重要な立場にあります。補給艦というのは、確かに戦いには向いて居ないかも知れませんが、艦娘の戦いの場は海の上だけではないのですよ?」

「んっ……は、はいっ……!」

人差し指で唇を塞がれた間宮さんは、火照った顔で俺を見上げる我儘ボディー。

艦娘としては珍しい補給艦という立場にあるが、これは遠征や長期的な戦闘となる場合、海上での補給を可能とした艦種である。もつとも、そんな長期的な戦闘は大規模作戦以外では滅多に発揮されないで、悪い言い方をすれば宝の持ち腐れであった上、彼女自身も、箱入り娘状態で日々海戦で傷つく艦娘を見て自分の存在価値を見いだせていなかったらしい。

が、この沖繩奪還作戦では、彼女は磨いていた自分の力量を嫌でも発揮する事となるだろう。その事を伝えた時、人妻感のある風貌とは裏腹に、少女のような笑顔を見せた。その絶妙なギャップが、眠れる男性器（轟）を呼び起こす。

他にも何人かと挨拶して、仕事に戻るために退出して行った。

「穴戸さん、さっき言っていた佐世保の会議って明日ですよね?」

「ああ。鎮守府と、他の警備府や要港部のトップも来るから、それに備える必要があるんだけど……村雨ちゃん、俺と一緒にしてくれる?」

「はいっ!もちろんです!」

「いいなく村雨だけ。夕立も行ってみたいっぽい!」

「わ、私もできれば、行ってみたいなく……」

「ごめんな夕立ちゃん五月雨ちゃん。でも、その会議ってガチでつまらないと思うから行かない方が良いと思うよ」

「えくなんでえく!提督さん、村雨のことを優遇しすぎっぽい!」

可愛いんだから仕方ねえだろうツ!こんなドスケベ駆逐艦を秘書艦にしてるってみんなに見せつけたいのっ!

「僕もあまり行かない方が良いともうよ、どうせ一回では決まらないんでしょ?」

「そうなんだよ時雨ちゅわあん。作戦会議とか言つて、事実上はダラダラ喋ってお茶するだけの、どれだけ仕事してるように魅せられるかを競うおしゃべり大会なんだよ」

「そ、そこまでは言わないけど……」

佐世保で行われる大会議は、もちろん目的としては作戦を確定させて今後のプランにすることだが、それが一回で成らない可能性が高い。

理由は、沖縄奪還作戦というのは非常に大きな作戦であり、呉までもが参加することになるので、パツパと一回の協議だけで決められない事のほうが大きいんだ。

要港部に居た時のように、軍令部が直々に協議するのであればまだしも、作戦内容の是非、軍令部の許可とその他の整理をしてから、正式に軍令部からの命令が発令されるまで遂行できないというハンデがある。

つまり作戦会議についての事前会議、みたな感じのものだが、最低限秘書艦を連れて行かなくやいけないと言われているのが腹立つ。実際は参謀部なら誰でもいいと言われているんだが、野郎となんて一緒に行きたくないし。

まあ理由はそれだけじゃないけど、夕立ちちゃんはつまらなそうな顔をして納得してくれた。

「なんだ、つまらなそー」

「そうそう、だから主砲の整備とかを妖精さんや整工班のみんなとやってきて。夕立ちちゃんの艦隊は特に重要になってくるからさ」

「了解っばい！時雨、一緒に行くっばい！」

「うん」

夕立ちちゃんを含めた艦隊全員が出ていった。

続いて五月雨ちゃんも参謀部の人たちと出ていき、まだ熱気の残された部屋にぽつんと立つのは俺と村雨ちゃんだけであった。

「……あ、あの、本当に私が行っても良いのでしょうか？参謀長さんとかに出向いてもらったほうが……」

「俺は……村雨ちゃんが良いんだ」

「し、穴戸さん……！」

それに、村雨ちゃんじゃないとダメな理由があるんだ。

佐世保第一鎮守府、会議室。

デカイ割には装飾品が少ないのは、やはり”会議する場所”である故に、いらぬ物はできるだけ排除する魂胆も持っているのだろうか？できればサボテンの一つぐらいは置いてほしいんだけど。

「えーそれでは、えー……なんの話だったっけ？」

「沖繩への作戦についての協議です提督」

「あーそうだったそうだった、ではこれより会議を始める」

秘書艦の言葉を聞いて面倒臭そうに椅子に座る提督を見て、ここに参上した全員も気だるそうな顔をしている。

来ているのは宿毛湾や呉からの参謀部員や、各要港部の司令官などいるが、その中で異色のオーラを放つグループがいる。佐世保第二鎮守府の提督にして歴戦の艦娘として名前を残している赤城提督と、阿久根要港部司令官の結城少佐。

結城が、佐世保に管轄されている要港部としては自分の上司であるはずの赤城少将をナンパしている事実についてはもう知り合いとしては顔を隠すしかないが、そんなことよりも俺は今重要な任務についている。

「あ、クソ！古戦場ミスったぜ！村雨ちゃん頑張れ！」

「分かりました！えいっ！えいっ！」

テーブルの下でスマホを弄りながらRPGに励んでいる俺たち二人の姿は会議に参加する者としてはどうなんだ？と言われるかも知れないが、隣りにいる要港部の司令官なんてノートパソコンを開き、ノートを取るフリして出会い系開いてるんだぜ？

村雨ちゃんは俺の大事なゲーム仲間なんだ、暇つぶしとして参加してもらおう必要があるのは当然だろ。

佐世保（仕事をするフリ） 会議

佐世保第一鎮守府の会議室。

スマホのRPGゲームに没頭している中、聞き逃す事無く提督やその秘書艦や参謀長が話す事を耳に入れていたが、作戦の重要性や作戦の内容を長々と話しているだけのクソ会議である上、入ってきて30分以上、なんの協議も開始されていない。

佐世保第一鎮守府の提督は大将であり、現舞鶴提督と同年齢、及び海軍大学校同期の64歳である。

つまり定年退職される時期が近い身で、見る限りは意欲の欠片もないので、この奪還作戦自体どうでもいいと思っただけの可能性が高く、そんな提督の下で本気になるのも面倒くさい上にメリットも少ない。それにこいつの手柄にしたくないと思う士官にとって、ガチな作戦案を考えるのは骨折り損のくたびれ儲けなのである。

むしろさっさと誕生日迎えるかご逝去なされて、新しい提督が佐世保に着くことをみんな望んでいる。

それはつまり、この提督がいるまでは、形式上は会議に付き合っただけの仕事しているフリをしてやるが、横にいる赤城提督が第一鎮守府の提督になるか、誰か他の有望な提督が赴任してくるまでは、持ってきて一押しで作戦案は保留にしておこう……というのが、ここにいる士官たちの総意である。

少なくとも、俺はそう思っている。

意欲的ではない佐世保の提督が、作戦を強行する姿勢もないが、それ以上に参謀たちが彼の意見を否定し続けていることが救いだな。まあ軍令部から発令がなされていない分、焦るのも馬鹿らしいが。

「以上が、今回の作戦の重要性だ。質問はないな？では、なにか作戦についての進言はないか？」

「……………」

「……………ないなら、まずは各司令官からの意見を聞こうか。阿久根要港部の司令官の作戦案は？」

紙を見て“阿久根要港部”と呼んだ。

察するに、コイツあいうえお順に基地の名前読み上げようとしている？

「適当な作戦をぶつけて却下される新人司令官結城、それがお前の仕事だ。」

「はッ！勇敢なる士官艦娘を総動員させ、随所臨機応変に対処しながら島へと進行。パワレンジャーのようにカッコよく敵を打ちのめし、蝶のように蹂躪する！……というのはどうでしょうか？」

「うん、ではそれで行こう」

「!?!」

「ま、待ってください提督！」

まだゲームの途中なのに、条件反射的に立ち上がってしまう。

「何かな穴戸司令官？」

「親愛なる提督のご裁量に具申意見する事、非礼の限りであります……結城司令官の意見を却下して頂ければと思います。ご聡明かつ老巧なる提督もお考えの通り、曖昧な言葉で締めくくられる作戦には常に失敗が付き物です。新米である結城司令官をお試しになつていた事は、小官は理解しておりますが、作戦案を容易に了承するような言動は、できれば控えていただきたく思います……何分、若輩者は、一度認められると調子に乗るので」

「え？あはは、確かにそうだな、うん、だめだぞ結城司令官、もつとちやんとした作戦を考えねば」

「はっ！精進致しまッスー！」

いや、ダメなのはお前だぞ提督。

アツツブねえ……危うく成り行きで軍隊を動かすような案が佐世保から出るところだった。こんな案を軍令部が通す訳ないとは思いますが、流石に止めなきや軍令部の人たちに怒られちゃうからな。

そんな敵見つけたから潰しに行こうぜみたな海賊並の戦い方して勝てるような敵だったまだしも、エリート艦やフラッグシップの存在も確認が取れている沖縄だ。

あつちの島々にはほとんど住んでいないが、大きな島々には自給自

足をして生活する住民もいるらしい。彼らのように本州への撤退を拒否したような人たちを今更救う作戦つてわけでもないが、米軍基地の存在は非常に大きく、アレを奪還して日本の所有物にできれば国際的な優位を築ける。日本政府はアメリカに、本当に基地を放棄したのかという点についての最終確認をしているため、それさえ吐き出させれば何時でも作戦を開始できる段階にある。

ただ、それまでの道のりには大量にして膨大、迅速にして神速、そして精密にして慎重を合わせた超絶準備と完璧作戦立案が必要なんだ。

あと頭がまだ冴えてる提督もな？

こんな提督の総指揮の下で戦うなんてゴメンだし、作戦が速い段階で開始されれば総指揮官変えられずに、上手く行ったらコレが元帥に昇進されるかも知れないので、そうだったら佐世保も日本海軍もオシマイだ。

我らが偉大なる海軍大臣である斉藤長官によってそれはないとは思うけど、この人の誕生日はいつなんだろう？

「流石はあの“前線の龍”……見た目によらず、提督へあのように具申意見する度胸があるとは……」

「作戦の先鋒は彼で決まりだな！前線の龍、恐るべし！」

そのクツソ恥ずかしい異名を連語するのやめろ。

結城の例を上げればどんなクソみたいな作戦案でも通すような提督になっているため、司令官たちは作戦の進言については慎重になっていた。

村雨ちゃんと一緒に片手でゲームを楽しみながら、会議と、村雨ちゃんのおっぱいに没頭する。かなり大きくなってる村雨おっぱいマジで揉みしだきたいわ。スマホやるためにかがんでると更に北半球が見えてさ……手に収まらなさそうなんだけど、一度は揉んでみたいな。

会議はそれから一時間が経過して、結局は“各提督と司令官は連携を取りながら再案して来なさい！”として結論が出た。

離散する沖繩奪還作戦の会の中、早速数人の司令官がお互いの案を

交換しあっていたが、その中で異常な存在感を放ち続けるミニスカ弓道着がこちらに寄ってきた。

「初めまして……でもないですね。噂はかねがね聞いています。私は佐世保第二鎮守府の提督を務めさせて頂いております、赤城です」

「長崎警備府の穴戸です。艦娘として栄達なされた赤城提督のお名前は、小官が兵学校に在籍している時ですら入ってきたほどの輝名です。無礼な申しようながら、美と武を兼ね合わせた提督であると噂を聞いたことがあります。噂というものを滅多に信じぬ小官でも、現実として証明された今、これからは噂を少しは信じてみようかと思わされる所存です」

「あらっ、そんな褒められ方をしたのは初めてですねっ、ありがとうございます。ございます。しかし私からすれば、お隣にいる秘書艦さんの方が遥かに美人であると思いますが……」

「め、めめめめめっそうもありません!!」

緊張する村雨ちゃんが再度敬礼した所で、行式的な建前を崩して本題に入る。

「赤城提督は、この作戦をどうお思いですか？」

「そうですね……正直に申しますと、時期尚早ではないかと思えます」「自分もそう思います。最大でも一年程度は待つべきだと思います」

「最大で、ですか？それはどういう……？」

「……この人本当に気付いてないのか？」

みんなはあなたに佐世保第一鎮守府、そして佐世保方面の総司令官になって欲しいと思ってるんだぞ。だからあのクソ提督が退役するまで待とうとしてるんだよ。でも流石の俺でもそんなこと直球に言えねえわ。

「えー……年々の深海棲艦の動きは活発化しており、フラッグシップなる新種の発見がされたともなれば、奪還は難しくなるだろうという、ある種の焦りからきた期間です」

「……なるほど」

「赤城提督！ちよつと相談があるんですが……！」

「あ、はい！今行きます！それではまた後ほど」

「ハッ！お会いできて光栄でした！」

赤城提督の後ろ姿を眺めていた村雨ちゃんは、一気に力が抜けたようにもたれかかってくる。前よりも大きな胸部装甲がむにゅつと音を立てて体重が乗った片腕を伝い、血行を良くする。

「どうやら偉い人を見ると緊張しすぎるようだ……帰ったら、俺の血行を良くしてくれた代わりに、体の緊張をいっぱい解してあげなきゃ……グへへへエ!!」

ネタバラシ

夜の長崎警備府の執務室。

「おかえり」

「ただいま〇こ」

「は？」

執務室に座っていた時雨は、同じく隣に座る夕立ちちゃんと一緒に何処からか手に入れた饅頭を食べながら寛いでいた。

流石に司令官の帰りに対して、は？は無いだろおい。最低な挨拶により夕立ちちゃんに一分程度無視されたが、佐世保名物のシュークリームを渡して機嫌を治してもらおう！

「夕立ちちゃん、これシュークリームなんだけどお……たべりゅ……？」
「食べりゅっぽーいーぽーいー！」

へへ、相変わらず単純な妹だぜえ。

時雨と夕立ちちゃんは正常に出撃できるかの確認と、それに伴った軽い演習などを行って疲れているはずなので、甘い物は効くんだろう。

「ぼくのは？」

「名物の豆乳だ」

「え、ぼくあまり豆乳好きじゃないんだけど……」

「お前そんなんだから村雨ちゃんや夕立ちみたいな妹たちに胸のサイズ負けてるんだぞ？見ろよこの二人のボンキュッポオオオオン!!それとも俺が揉みしだいて大きくしてやろうかア？グツへへへへエ!!
タダオンならぬ、タダパイだぜエ!!」

「……………」

姉妹三人が睥睨してきた。

「あ、あの、暴力とかはカンベン……」

「え、何言ってるの？ぼく、暴力なんて振ったことないよねっ？」
「嘘つけ何回もあるゾ」

時雨は平然とした顔で、執務室の横にあつたマイクに近づいた。このマイクは執務室から、設定によって警備府全体に

声を届かせる事ができる。突き出たマイクに向かって時雨は叫んだ。
「い、いやああっ!!提督やめてえ!!痛い!痛いよおツ!!早く抜いてええええ!!」

「!?」

時雨の嬌声……とは到底思えないほどの叫びが、マイクに向かって声を吹き込むことで、警備府全体に広がる事となる。このセリフと演技を聞いたみんながどう思うかなんて馬鹿でも察しがつくだろう。

「……ふっ」

やりきったような顔をして、シャフト角度で顎をクイッと上げながらこちらを見下ろすように振り向く時雨。村雨ちゃんも夕立ちちゃんも、流石に食っていた饅頭を手から落とすほどの衝撃を受けたのは言うまでもない。

「……フ」

「っ!」

俺が得意げに笑い返した理由を、時雨は最初は理解できなかっただろう……実は、このマイクは初期動作だけは特殊な手順を踏まないといけない。

機能そのもので言ったら動作するが、数ある警備府のスピーカーから声が出るのは、執務室のすぐ外にあるスピーカーであり、警備府全体に伝わせるための装置としては全く機能しない。

つまり、時雨の一人レ○プレイだったわけだ。

そのことを伝えたら時雨のアームロックが俺に決まる!

「痛たたたた!!やめてえ!!久しぶりで痛いのお!!」

「キモい声出さないで!生まれつきなの!?気持ち悪い!」

「ハア!?テメエ自分がいい声に恵まれてるからって調子に乗んなよオ!?生まれ持った体を大事にしてる俺にその冒瀆はいけねエよなア!?訂正しろ!死んだ母ちゃんに謝れエ!!」

「天国のお義母さんごめんなさい!!ごめんなさい!!そして穴戸くんも堕ちてエ!!」

村雨ちゃんに助けを求めたが、「プイ!」とそっぽ向かれた。後で五

月雨ちゃんに聞いた話が”時雨の胸を揉みしだく”というフレーズに対して苛立ちを覚えていた様子だ。

俺の腕が再起不能になったところで、時雨たちに俺がここに来た時のこと、今からやる事を話す。

「痛てエ……こほん、実はこの警備府に来るときに、一日早く潜伏してたんだよな、下士官として」

「え、なんで？また何かの試練？」

「チゲえよ、ただ内情をいち早く、そして提督って立場から離れて知りたかっただけだ。んで、まともに警備府を歩いてないから、俺の正体を明かしまわろうかと思って」

「なんでそんなテレビ番組みたいなの……」

「明々後日の着任式でやればいいっぽい！」

「そんなに待ってたら中途半端に知れ渡っておもしろえ反応見れねえだろうがア!!」

提督さん幕僚会議の事忘れてるっぽい？とかドヤ顔でほざく可愛いかわい子犬ちゃんには、たつぷりと俺のお情けを仕込んで黙けないな。

廊下。

夜の警備府の大半は自室待機、もう半分は警備府の施設を回ったり仕事をしていたり、なにかと落ち着きのないのが実情である。

出撃の作動確認についての資料に印鑑を押したあとに、その他の書類をまとめてから執務室を出た俺は、すでに眠かった。

ついてきているのは時雨一人で、夕立ちちゃんは食堂に行っておやつを、村雨ちゃんは自室で肌のチェックをするらしい。

新品同然の床を楽しそうに歩く時雨は、可愛らしく鼻歌を交えながら進む。

若干俺の前に出ている時雨を見ながら歩いていると、早速前方より来た顔覚えのある士官たち四人に挨拶する。

「し、司令官！そ、それにあの前線艦隊のし」

「やあ君たち。どうしたんだ？」

「い、いいえ、司令官がとてイケメンなので、つつい緊張してしまつて……」

「そ、そうなんですぅー。あたしい、とつてもお、かつこいいとおもつちやつたみたいなあー?うふふつ」

「そうかそうか。俺の顔つて秋葉原にいそうな顔だつてよく言われるんだけどなあ……?そこの君みたいなイケメンを見たらマジ轟沈しちゃうわなあ……?」

「そ、そんなことないツスよ!!司令官のほうが絶対にイケメンですつて!!」

「そ、それに何よりフランク!度量の深さ、マジ尊敬しマックスウ!!」
「ハハハ、そうかそうか。でもなあ……?君たちも俺にフランクに接してくれていいんだお……?オレ、ゼンゼン威張らないスウパアカツコイイテイトクダカラア……!?!」

「二す、すいません失礼しますツツ!!」

ヌルヌル動きながら士官の一人に肩タツチしたら逃げられた。

「あれ、宍戸くん正体明かすんじゃないやなかつたの?」

「いや、あいつらとは直接話してない。ただ俺の悪口言つてたから懲らしめただけ」

「そんなことしたら余計心情悪くするよ……」

「ハ!本来なら独房監獄行き・逆さ吊り・市中引きずりの刑なのをアレで許したんだぞ?ありがたいと思えツてンだよ」

「うわ、独裁者がいるよ……」

ケツ!あんな奴らに好き勝手言われてへーきな顔できるかつてんだよ。でも、ああいう奴らがいるのはむしろ安心できる。100%の忠義を向けるよりかは、表面上媚びへつらっている奴らのほうが扱いやすいから。

ここで無条件で俺に従いたいなんて本心から言うヤツは、俺の噂やステータスを見ているだけで、俺自身を知つて言っているワケじゃないので、実際の俺を見て後々失望する可能性が大いにあるんだ。

最初から舐め腐られて、悪印象である方が過度な期待を持たれないでいい。

さらに廊下を進むと初霜姉妹が降臨なされた。

「お、初霜たち」

「提督！」

四人全員の敬礼に対応した。

若干緊張が走っているような顔をしていたが、前にも時雨に話したように、舞鶴で参謀をしていたときから初霜は俺を知っている。

しかし、姉妹たちとはほぼ初対面である。

「舞鶴第一鎮守府の参謀を努めたことのある穴戸だ。あの時は初霜には随分と世話になったんだ」

「い、いいえそんなことないわ！むしろ私の方こそお世話になって……」

「ほう、これがあの前線の龍とやらかのう？初霜が以前世話になった……いや、これから世話になるのかえ？」

「子日たちもこれからお世話になるんだよー！」
的確なツツコミを入れる子日に若葉が頷いた。

間髪入れずに、クールな若葉は俺を見て「ああ」と、なにか納得したような声を漏らした。

「昨日のバンダナ、か」

「え？バンダナ……ああ！あの水兵さんっ!？」

ようやく気付いたのか、驚いて口を押さえた。まったくもって女性らしい仕草だ……時雨はクスッと笑った。多分変装としてバンダナを使ったんだろうな、アホらしツ、とでも思ってるんだろう。

「ほう、昨日の……いやいや、これは気づかなかったのう。まさか今日着任する筈の司令官が、昨日水兵として歩き回っていたとは……」

「一日前に来たなんておまえたちの気が収まらないだろ？変装してでも自分が着任する場所のことをある程度把握しておきたかったんだよ」

「なるほどのう」

……なんかりアクション薄いんですけど。

「昨日会ったせいなのかは分からないけどー、初霜が提督のこと話してたんだよー」

「ちよ、子日ねえさん！」

「フフ、初霜にもついに……」

「や、やめてよお……!」

姉妹たち……いや姉から、からかわれている初霜はとても可愛らしかったが、彼女は第四艦隊の旗艦を務める立場にある。こう見えても、彼女の潜在的な力は測り知れない。この人事がどのように転ぶかは楽しみだが、その真価が発揮されるのも俺の腕次第だ。

手を振って別れるまで初霜は赤面したままだったが、一体どんな話をしていたのだろうか？

……まさか初霜、俺のことを……最高なんですけど。

「痛たた、いたいたい、フフっ、耳引っ張るの痛いからやめて? ねえ、痛いって言うてるでしょおおおオ!?! 耳千切れたらどうすんだアア!?!」

「もうそろそろ演習場に着くんだけど、鼻がお猿さんの倍ぐらい伸びてたからっ!」

漢心の分らない三つ編みガア……!

と言ってる間に着いたのは演習場であり、データを取っていた士官が敬礼してきてこちらも返す。

夜空に浮かぶお月さまをバックに、轟音とともに打ち合う艦娘同士ーカラフルに彩られた和服を着こなす、神風ファイブの姿が見えた。

演習場、兼出撃所。

戦っていたのは通常6隻艦隊編成が二組に分けられた、涼月艦隊同士の3 on 3であり、麾下の艦隊には神風ファイブがいる。つまりは俺たち警備府の第五艦隊である。

「穴戸司令官、データの方はこちらとなります」

「おお、ありがとう」

士官は整列して、リーダー格の一人が取ったデータ資料を渡してくる。

第一から第五艦隊までの資料は上々。出撃の作動不都合などは細かい修正点を除いて問題なく、演習を行ったことで艦娘たちの最新の

戦闘データなどが取れた。

「流石は前線艦隊の時雨大尉ですね。白露少佐とその姉妹は強い！とは噂に聞いていたんですが、これほどとは……」

時雨たちの練度は一応警備府内では最高なので強いに決まっている。

紙を捲つてパラパラパラと流しながらデータを読んだ。俺が整工班だった時代、何時間も取ったデータに対して、提督は僅か数秒で読んでしまう事にイラつとした事もあるが、ある程度は頭に入れておいて、執務室で必要な時にじっくりと読むためのデータなのである。

「て、提督!? な、なんでここに……」

出撃所から上がってきた最初に目に入ったのが俺だった神風は後ずさりする。第五艦隊の全員が驚きながら敬礼したので、ここはフラックに……あくまでモテる提督的なオーラを出して、楽しんでいいと手を下げさせる。

「頑張ってるようだな第五艦隊」

「お見苦しいところを、お見せしました……」

「何を言うんだ涼月！ 強い艦娘ばかりを見続けて目が肥えた俺でもそんなに精錬された動きは見たことがないぞ。無論、神風たちもだ。とても気分が良くなったよ」

「「あ、ありがとうございます！」」

なんだこの和服美少女大正ロマンはビクビク震えながら俺を見上げていた。俺が来たときはオタクとかなんとか言ってたくせによオ……?

「ふむ……ところで神風たち。昨日、バンダナっぽいはちまきを付けたとても気持ちが悪い人、覚えているか？」

「気持ちが悪い……ああ！」

思い出してくれたか!?

「あのオタクみたいな人ですよね！ 知ってます！ とても気持ちが悪かったです！」

「そうそう！ 最初はホント侵入者かと思って蹴り飛ばしそうだったの

よ！まあ生理的にも無理だから蹴り飛ばしそうだったけど……」

「司令がご存知だと言うことは……あのお方は……」

「ほ、本物の、不審者って事ですか!?ま、松風!」

「整工班所属って聞いたから見逃していたけど、それだったら話は別だね。僕の姉貴たちを怖がらせる輩は、この僕が許さないよっ」
「……………」

ここで正体を明かすのはまさに愚策であり、誰もが躊躇すると事だが、俺は上着を脱いで足を捲りあげて、持っていたバンドナを使って額に被せた。

「ぶ、ブヒイイイ!か、神風ちゅわアアん!!!」

「きやあああああ!!!」

「大丈夫!?君たちの安全は、この僕が守るよ!」

「「時雨さん!!!」」

時雨が唐突なヘッドロックをかましてきたので、涼月は驚いた表情を浮かべ、整工班の士官たちは「司令官を止められるのは時雨大尉ぐらい……と」と冷静な姿勢でノートに書き込み、松風は「僕も参加させてもらってもいいかな?」と時雨に聞いてくるが、その必要もなさそうだ。

ぐつたりと20秒程度意識を失ったが再生し、その驚異の回復スピードで神風たちを驚かせた。

「というわけだ、俺は昨日のバンドナキモチワルイ男で、今日から初代司令官として着任する。みんなよろしく」

「え、ええええ!?や、やっぱり夢じゃなかったんですか……」

「司令官様が、あのような格好で警備府にいたなんて……」

「驚いただろ春風?それで、昨日の俺は今日の俺と比べてどう見える?率直な意見としてカツコイイ?」

「まあ……うん、昨日と比べたらえらい違いよねっ」

「あははっ……私もそう思います」

デコちゃんとかハイカラ縦ロールのダブル金髪は直接的な表現を避けていたが、俺は自分がイケメンかどうか聞いているんだよ。

宝塚にいそうな、一瞬だけ美少年に見えた松風の「カツコイイん

じやないかな」というセリフにも「イケメンにイケメンと言われている」感があつて素直に喜ぶことはできなかつた。

時雨は若干うなだれ気味な俺に、ププつと笑いやがった。明日の朝飯に豆乳まで混んでやる。

当然ながら、彼女たちが受けた衝撃は隠せないほど大きなものだった様子だ。まさかアレが提督だったとはと、最低でも三回は聞いたぞ。

そして、提督は基本的にモテモテであるという付加価値に加えて、数度に渡る笑いと他愛もない雑談で、徐々に距離を縮めていく。急接近ではなく、遅くても着実に。

神風たちと、加えて涼月や整工班の笑顔を見れたところで、帰ろうとしたその時だった。

ネタバラシ2 キュイン!

「ハハハ、ご歓談のところ、お邪魔してしまいましたかな？」

「班長!!」

「キュインっ!」

「ん?」

出撃所に入ってきたのは、整工班班長という、この警備府で多分二番目に偉い地位にある人だ。

とは言っても、俺のように実戦部隊を技術的に管理する彼らが最も重要だから整工班が警備府組織内では一位だと言うやつもいれば、士官としてのキャリアや階級を考慮すれば参謀部が一番だと思おうやつもいるので、序列的な順位への解釈は人によって変わる。

ただ一つ言えることは、荘厳さの中に間見える温かさを持った、まさに徳高き理想的な上司であると、数度会っただけで分かった。

彼のキャリアは二等兵から始まり、古い習慣に囚われたアホは彼を特務大尉と呼ぶだろう。

班長の人徳を説明するには、第五艦隊や整工班が敬礼を捧げる相手として相応しいと言っているかのように、誇らしく、そして堂々とした笑顔をしている事に尽きる。

俺も迷わず敬礼したが、漢としてのカツコ良さからケツが締まり、時雨はん?と声をもらした。

そして班長の横で縮こまっている三日月の姿も写ったが、俺を見ると即座に後ろに隠れてしまった。

「どうしたんだ三日月?我らが司令官殿の前でそんな態度を取っていたら、失礼じゃないか?」

「す、すいません……そ、その……萬さん、ですよね……?」

「萬?穴戸くんいつから日本人やめたの?」

「昨日、そして今日帰化した」

「ふふふっ、お忙しいのですねっ」

「フツ、提督とは常に激務と時間外勤務に晒されているものなのさ。しかし、それで少しでも涼月たちの手伝いができるというのなら、俺

は24時間勤務も辞さないさ」

「素敵……！僕、こんな素敵な提督見たことがないよ……！僕に休暇を取らせるために24時間ぶっ通しで働いてくれるなんて……！」

「フフツ、貴様俺がぶっ通しで働いてお前のポジションを埋められると思ってるのか？生憎だが俺は男の分際で艤装を付けて戦える艦息ではないのだよ」

「あーたしかにそうだね。じゃあ僕がちゃんと演習できるように抱きかかえながら戦ってあげるからっ」

「デメエそれじゃ意味ねえだろうがコラア!!？」

時雨とのやり取りが面白かったのか、班のみんなや第五艦隊に笑われている。三日月も、少しは笑ってくれたので、置きやすい位置にある頭を撫でる。

「まあそんなワケで、兵曹長から大佐になっちゃったから、何かと至らないところもあるかもしれないけど、よろしく頼むな、先輩」

「は、はいー」

シャキツとした金色の瞳に孕んだのは、畏怖ではなく、紛れもなく勇気の炎だった。また固いが、これから解していけばいいか……女性を扱うときは、焦つちや駄目だもんな。

「ははは、それにしても流石は時雨大尉すな、我らが司令官の扱いを熟知しているようで。聞けば、二人は旧知の仲なのだとか。失礼な申し上げようながら、微笑ましく思います」

「と、とんでもないです！は、班長からの失礼なんてむしろ望むところですー」

「はっ……そこに反応するの？」

時雨、反応してるのはソコだけじゃないんだぜ？

「ではもう一つだけ、失礼をお許し頂けるのならば……肩章が曲がってますよ」

「ドキィー！」

「………？」

急接近するダンディー（自身が）スケベオヤジが色男を演出してきた、俺、女の子になっちゃう。そう呆れた顔をするなよ時雨、こんな

んどうしようもないじゃん」。

廊下。

ダンディー色気男班長と第五艦隊と別れたあと、俺は数十分程度ぼーっとしていたが、時雨の蹴りがケツに炸裂して目を冷ます。

旗艦である涼月とも相性は悪くはないらしく、カミカゼンジャーは“汎用的に使うことのできる俺の有能な艦隊”となるだろう。汎用的な運用ができる……なんてのは言い換えれば特徴のない駆逐戦隊なのだが、神風たちの実力は性能じゃない、と神風たち自身で言ったので、その所は実戦で示してもらおうことにする。

手元にある端末を片手に、各艦隊への軽い感想文を書き込む。

「ああつ……イツチャイソウダツタ……！」

「逝けばよかったのに」

時雨の暴言はとどまるところを知らない。

「神風たち驚いてたね。まああんなキモチワルイ顔であんな風に言い寄られたら僕も流石に引いちゃうかな」

「俺は寛容だからそんなこと言われても黙ってられるんだぞ？ ゴミみたいなエリート意識と、士官は貴族！ 的な排他的伝統を重んじるクソ提督よりかはむしろ、こんなに素敵で話しやすい提督初めてです！ て神風たちからも言われただろうが」

「素敵な提督は溜まったメールもちゃんと目を通してあげると思うんだけど」

時雨が俺の端末に目を向けて指差すのは、右上に99+と表示されたメールアイコン。これはつまり、メールアイコンを押した瞬間、メールの中にある99通以上の未読メールが表示される事を意味していた。

「フーン！ ほとんど同期とか知り合いからの冷やかしメールが殆どだから放置してんだよ。ほら適当なメール開いても、“今なら30%オフ！ あなたの心に愛をお届け！ 心愛（20）が自宅に訪問ご奉仕サービス！” だってよ？ ……いや、これはただの仕事のメールだったわ、忘れてくれ」

「どんな仕事か分からないけど、とっても心愛がこもってそんなオシゴトだねっ」

最早憐れみの微笑みを差し向けてくる時雨との話題を逸らすためにメールを漁っていたら、一通の見覚えのない送り主からのメールが、ピンポイントというべきか、いま届いた。

開いてみると、独占取材のための時間をくれて、ありがとう!というメールだった。

「あ?」

「独占インタビュー……?…?…つて、また報道陣? 穴戸くんがいなくなつた後も要港部に何度か来たことがあつて、正直面倒くさいのは少し遠慮したいんだけど……」

「インタビューなんて着任式の時にするだろうせ」

報道陣と、観客として烏合の衆……ではなく、市民が集まる大きな催し物の一つは、警備府のオープニングセレモニーだ。多種多様な人たちが集まるこのビッグイベントに当然ながらアポイントなんて必要なく、警備府の一部を一般公開して、都市と警備府との大歓迎会を開くのは、当然のことながら報道陣も押し寄せるだろう。これと共に、俺を含めたみんなの着任式をするのだが、それは指して問題にはならない。

要港部を開いた時は立地的に一般人が立ち入るには難しかったのでやらず、代わりにこちらが出向く形になったが、大都市と……:自分で言うのはメツチャ恥ずかしいが“前線の龍”による警備府運営が始まるとなると、大きな賑わいが期待できる。

俺はセレモニーの時に時雨たちを盾にして報道陣から隠れてようかなと密かに思っていたのだが……:独占インタビューなんて聞いたことがないツス。

「なんだこれ? 俺まったく許可なんて出してないんだけど……:まさか、俺って実は二重人格で、知らない間にこのクソみたいなドクセンインタビューにに応じていたとか? 冗談じゃねえぞおい……:美少女だったらまだいいぞ? でもインタビューアアがオッサンとか、拷問ですかつ、ふふつ。しかもG A I J I Nだし、なんだよアダムって、人

類創世記かよ」

「美少女でも、少し可愛いからって調子に乗ってる！とか言うくせに……」

「H A H A H A、何を言うんだ時雨、俺は紳士だからそんな事言わないうて。それはともかくだな、もしコレが本当だと仮定すれば、海軍の上層部から連絡が来ているはずなんだけど」

「じゃあズベコベ言わずに開けてみたら？」

「うんゴメンね？だからいま仕事用のメールと警備府用のメールを同時に開けてるトコだから黙れよ？」

「グルルルウウウ!!!」

廊下を歩きながら額を擦り合う姿は異様に見えたのか、道行く士官や艦娘たちが目から眼球が出そうならい見開いていた。

しかし警備府用のメールにも無かったので、仕事用のメールを見たら、その中には海軍省にいる班長課長からのメールがあり、概要欄にエクスクラメーションマークがびっしりと埋め尽くされていて、最初はウィルスかと思ったが、確かに課長のメールだったので、元上司のメールを開けてみる。

“ 宍戸！久しぶりだな。 ああんっ！俺の方は元気にやってい、るうんっ！実は、初春以下四隻を異動させた代わりに俺からも頼みが…… ああん！あ、あつてだな……お、お、おま〇こお、くではなく、お前の所にインタビューをしたいというやつが居てだ……だなああああん！応じてやってはくれないか？既に了承を得てしまっただけでは遅いと思うが、彼とは長い友人関係でな。どうしても、お前の取材がしたいと言ってきたんだ。彼とのコネクションを持てば、お前にとっても有益なものとなるだろうから、損をするような話ではないと思う。無理矢理で済まない……いや、俺にとってむしろ無理やりのほうがキモチイ感じちゃう……!”

……全文を読むほど暇ではなかったので要件としては、友人であるジャーナリストへの独占インタビューに応じてほしいとのことだった。

初霜たちを異動させる手回しをしてくれた彼への後ろめたさもあ

るが、既に了承しているような状況であれば、それを断るか否かは度量の深さを試される。

「……やるしか無いじゃないイイイ!!なにこれえ!?なんでメールなのに電話しながらエッチみたいになってんの!?なあオイシグレエ!」

「ぼ、僕に言われても……」

独占インタビューには警備府の奥内部まで侵入させることとなる。警備府のみんなと触れ合う機会を設けたものの、流石に一日だけでは俺の全貌を把握できまい。

しかし知り合いが多い中で、要港部にいた時に行われた取材みたいな俺の悪評が出回ったら……警備府生活終わるナリ。情報統制しなきゃ。

記者さんキシヤサン

アダム・ギルバートはドイツ系アメリカ人として生まれ、大学では経済学部に入るも23歳の頃に徴兵され、その後は記者としての人生を歩んでいた。

自由の国アメリカでの徴兵とは言っても、事実上は深海棲艦からの攻撃にそなえた避難訓練のようなものであり最短一ヶ月程度で終わるが、彼は軍隊に興味を持ち、一年間以上を海軍基地で過ごした経歴を持つ。

彼の記事は“平均的に比べたら人気”だったが、その秘訣は彼が従軍記者としての性質を兼ね備えていたからだ。

それも、前線の基地から軍本部までの内部事情を事細かに書く敏腕記者であり、これが成せるのは彼が築く幅広い人脈あつてこそである。

在日記者としてその人脈構成能力は業界内で優れた評価を受けており、数々の記事やスキャンダルを新聞紙に描いてきた彼は、現在長崎警備府の敷地を踏んでいる。

取材したいと要望を出していたのは、新設された長崎警備府と、名誉ある初代司令官として着任した若年の提督へのインタビュー。司令官の顔はアノニマスではなく何度かテレビに出たことがあり、その名前も民間人の口から耳にするほど有名な軍人だが、直接会うとなれば緊張と興奮が高まっていた。

「開港セレモニーはどうでしたか？」

「Very good!とてもヨカッタよかった！」

警備府側が用意した兵士に案内されていた記者は、先程報道陣として参加していた開港セレモニーの事を思い出していた。

彼が水兵時代を過ごしたというノーフォーク軍港と比べたら月とスツポンの差があるが、それでもこの警備府は機能するんだらう程度の認識しか持つてはいなかったが、それだけに司令官の力量が試される場でもあつた事を、彼は知っていた。

多くの報道陣が囲っていたのは司令官だけでなく、彼とともに戦った前線艦隊、あるいは“私兵”とも呼ばれている数人の艦娘であったが、流石にガードが固く、威風堂々とした顔立ちでマイクを押し付けられていても釈然とした態度で応対しつつも、謙虚な姿勢を忘れないのは流石だと感じていた。

警備府司令官は、大佐に昇進した時も列席者は鎮守府内部の人間がほとんどを占めており、家族などの姿は見られなかった所を見ると、彼はこれ以上の栄達を望んでいるのか……？と、昇進式に報道陣の一人として出席した彼の書いた記事は会社側からも好評だった。

周囲にある建物の構図、そして警備府内で起こる人々の日常的な動作を脳裏に焼き付けていた。

演習場、食堂、会議室、工房、病院……どこを見ても日本海軍は精錬された軍隊であり、これまで彼が立ち寄った国々とは一線を画した艦娘技術の宝庫であると言える。政権交代から、半世紀以上の弱腰外交が行われていた国がいきなりタカ派となるのは各国の目からしても異様な光景であり、国民からすれば、これもある種のパラダイム・シフトであると、後に記者は語る。

施設や組織構図を包み隠さず紹介されたが、彼が受けた印象は新鮮さに欠けており、辺りを紹介する兵士の言葉をジョークで返し、談笑に浸りながら面白い物がないかを探していた。

目についたのは前線艦隊としてテレビに出ていた艦娘だが、彼女たちとの接触は「演習中だから」という理由で控えられた。興味は、彼のジャーナリストとしての人生に欠かせないものであった。有名人を今更取材して何の意味があるのかと言われる事もあるが、逆に有名な人だからこそ彼らの奥深く知りたい好奇心が蠢き、人の柄を知るところからジャーナリズムの全てが始まるというのが、彼の信念だった。

しかし、士官たちの目を掻い潜る行為は危険であり、八丈島での圧倒的な勝利をもたらした秘訣以外、陰謀的な秘密を抱え込んでいるというわけでもない。

どうせこの執務室にいる司令官から聞くこととなるのだし、部屋には前線艦隊にいたと思われる艦娘がいたので、演習を行っている彼女

たちへの突撃取材は保留にすることにした。

「はじめまして、私がこの警備府の司令官の穴戸です。以後お見知りおきを」

「Hello Mr. Commander! Thank you for your time.」
「え」

突然英語を話し始める記者に司令官が驚いたのは、彼は日本語が喋れると事前に知らされていたからだ。

しかし、それは一瞬のことで、冷静なトーンで「Thank you, too.こちらこそ」と英語で返し、数度の相槌で繰り広げられた言語が、この執務室の公用語を英語に変えた。

「You have a great pronunciation! I have to assume that you've experienced an ambassador but, is that correct?」

「Unfortunately not. All I could say is that my birthland does not belong to this country.」

Interesting!と一言鳴らした彼も、事前に調べていた情報に対して驚くような素振りは見せなかった。司令官は物腰柔らかく、そして一切嫌がる様子も見せずに、ただ純粹に「やっぱり英語の方がいいんですか?」と聞いてきた。

彼の答えで納得した表情で「お願いします」と答える。ギルバートが取り出したノートパソコンの中でも小さな形状のものであり、必要最低限の機能が備わったそれはパソコンと言うよりも、電子メモのよくな役割を果たしている。古い文化であるペンとメモを打倒したキーボードを叩き始めてから5秒ほどで彼へのインタビューを始める。

世間話から始めるのは彼の流儀であるが、それと同時に、いかに自分のペースに乗せるかを競っている面もある。30分程度しか面会の時間を用意されていない彼は焦る様子もないが、キーボードに文字

を打ち込んでいく度に、普段の彼とは違い直球的な質問を投げかけるようになっていた。

最初に小笠原諸島奪還の報告を聞いて受けた印象は、現代に蘇った戦国時代でも希有な武辺者。

初めて対面した時の印象は若い司令官であり、知性豊かそうな、それでいて温厚な人物である。

しかし話し始めてから数分間で司令官の印象は、有能だが今なお未知数に溢れる、相当なやり手な軍人、へと変貌していく。

人間の印象とは出会って5秒で決まると言われているが、それが必ずしも普遍的では無いことを、この若き司令官が証明した。

作戦の成功の秘訣、年上の部下への対応、士官たちからの印象について、前線指揮を取れる勇猛さ、艦娘から信頼を置かれる理由、並びにとなりの村雨、春雨には司令官の印象と作戦行動への思いなどから質問が始まり、率直にどうやって奇跡を起こしたのかと聞いたが、彼が納得し得る答えは帰っては来なかった。

色々聞き込んだ司令官の情報は大変貴重であり、これらを一刻も早く明日の記事として仕上げたい気持ちに駆られながら、彼は海軍式の敬礼をして、兵士と共に去っていく。

民間人が海軍式の敬礼や司令官へ個人的な電話番号を聞くのは不躰で生意気な行為だったが、それを快く受け取る度量の深さもまた、彼なりの対象をためす試験のようなものである。

翌日の米国記事と日本語訳された日本の記事に、長崎警備府の写真と共にこう書かれた。

“日本、九州の南も北も熱く、こんな時に必要なのはアイスティーだろうが、私はそれに反してコーヒーを飲む。長崎警備府内にある売店でもこれほど美味しいコーヒーが飲めるのだから、カフェインと砂糖とクリームの塊を出すアメリカのポットとは大違いだが、それがたまに恋しくなる辺り、私もまだまだアメリカ人だということか。

ここの初代司令官として名前を連ね、歴史の一説に名前を残すであろう若き司令官シールドは、なにを隠そうあの前線の龍として謳われた前線指揮官である。艦娘と一緒に海に出て戦ったからと言って彼

が武刃者（ぶへんしや）であり、粗暴でイカツさを覚える典型的な猛将をイメージするのは、一旦やめておこう。ホームページに載っている通り、彼は若いリーダーとしての風格は備わっており、それもが頷くところである。

紳士的で会話は大変有意義であり、それでいて懐の深い司令官であると私は思った。

世間で猛将として讃えられるのはむしろヨコスカのヴァイスアドミラル・ソガであり、ヴァイスアドミラルに会った際に見たその豪快な人柄と、我が国でも羨まれるような肉体の持ち主だったのを思えば、直属の上司であった彼の影響が強いと思われる。

キャプテンシードをアメリカの有名な現代軍人で例えるならば、イギリス系アメリカ人の紳士的な士官であり、雑誌に載るほどのスイートスマイル、若年海外士官のメイジャー・エイジャックス・スペンサー・ベリングハムに当たる。

ここ九州には同じような若年の駐在武官が多く、彼らとの接触をした時に、どのような反応をするのかが楽しみで仕方がない。彼らが対談する時に、再び私は取材をさせてもらうつもりだ”

執務室。

記者のおっさんが出ていった。

「うまく行ったか……」

「お疲れ様ですお兄さんっ、ぎゅーってしてあげますねっ」

「うわあ！ 溺れちゃう！ 溺れちゃう！ 春雨ちゃんに溺れるウ！」

ほんわかと当たるささやかなおっぱいが顔に当たる。

女の子にとつてのスイーツはストレス解消と疲労回復、モチベーションを吐き出させる代わりに、贅肉を付けて、ダイエツトを謳って将来的に運動をする事となるのでその時間と、最終的には楽にダイエツトできる方法や運動方法、更には怪しい商品にまで手を出し、膨大な時間と労力と金を犠牲にする事となるらしい。

俺はこれさ、ハグされる代わりにハグしかえす……二人は利害の一致した共同生命体だ。

独占インタビューのためにした準備は至って簡単で、今日まで数日間何もしない事である。スケジュール帳にはビツシリと警備府にいる人たちとの触れ合い期間を設けていたが、それは神風たち以降、一旦保留にした。

過去の経験から、俺はどうにも自分を曝け出すと悪評が広まるらしいので、俺を知らない人たちにはそのまま居てもらって、話しかけられても大丈夫な状態を作り出したんだ。

自分を曝け出さないようにしながらみんなと仲良くなればいいんじゃないですかねえ……なんて言われても、仲良くしようとする自然と本心が出ちゃうんだから仕方がないじゃん。

訓練や通常任務などを減らしてなるべく悪印象を与えないようにした結果がどう転ぶかは分からないけど、常に気を配って布石を置く事は無駄にはならない。

インタビューなんてもうコリゴリ！

春雨ちゃんにもっと癒やしてもらおう。

「……むう」

「春雨、どうかしましたか？」

「なんでもないわ五月雨っ。さ、資料をまとめましょう」

「春雨ちゃん、そろそろ」

「離れたくないですっ……」

「俺もだけど、出撃はちゃんとしてもらわないと……ね？ 最初の出撃だし、やっぱり最初は大事にしないと、ね？」

「分かりましたあ……」

「では私も行ってきますね！」

「頑張れよお五月雨ちゃん！ 作戦行動は常に堅実を心がけてな！」

「はいー」

元気のいい返事を悪い返事が執務室を出たあと、早速執務と本出撃……とはあまり聞き慣れない言葉だろうが、動作確認の仮出撃と区分けた言葉を漏らして、執務を処理していく。

何気に、正式な警備府着任一日目である俺は仕事に励まなくてはいけない。やることが非常に多い分、これから数日間を執務だけな

く、自ら庶務にも費やす。

何事にも大衆的な好感度稼ぎというのは難しいものだが、有能さ、人柄の良さ、そして平等な気配りが、常に上に立つ者の“柄”を決めてきた。

能力はいつの時代も迅速さという指標がある分マシだが、部下たちに好かれるようにするのは極めて難しい。あまり部下にゴマをするとは舐められて、中途半端にうまくいっても人気取りの名人というレッテルを貼られる。

今回の作戦、というよりは演習に近いものだが、沖繩作戦に向けて少し遠回り、それも1キロごとに艦隊を置く陣形でのなんちやつて連合艦隊を敷いている。

艦娘たちの訓練と練習の一環としても有効だが、俺自身これほどの大艦隊を動かすのは初めてなので、一同に動かした場合どうなるかというテスト的な要素も含んでいる。

ほとんどの深海棲艦は佐世保が倒してるだろうし、長崎警備府の出番はあまりないだろうけど、それがむしろ遠征を安全に遂行させてくれる。というより、リアルタイムで指示を行わないといけないような任務でも場面でもないの、存分に執務ができる。

横からお茶が出されたが、出してくれた当の天使は露骨に「ぶくーう」と言いながらむくれっ面をしている。

「どうしたんだ村雨ちゃん？」

「べつに、なんでも」

「……………」

生理か。

「違いますツツ〜！」

違うと言いながらも頬をぶくつとさせて、豊満な身体を俺に寄せてきた。

「私が、最初にこうしたかっただけです……………」

驚くのも無理はない。

俺の顔を胸に引きずり込んだ村雨ちゃんが、春雨ちゃんに嫉妬していた…………だど!?驚愕するなんて当然のことだ、俺はこんなにも柔らかか

い天使に対して、イケメン提督ぶりを発揮して、それが村雨ちゃんに伝わった結果、俺をオスとして見るようになったなんて思うと、興奮してくるじゃないか……!」

執務どころじゃねエぞコレ!!

「村雨ちゃん!!」

「は、はい!!」

「村雨ちゃん……俺……オレエ……!」

林檎のように火照り上がった瞳同士はお互いを見つめあい、それはまるで、無駄にロマンチック演出を押し付けてくるゴリ押しハリウッド映画のようだと、後に語られる。

抱きしめたいほど愛らしく、女性的な身体とギャップを作り出す、あどけなさ溢れる初々しさだったという。名女優のヒロイン役に相対する男優は、AV出身かな?と思うほど不釣り合いであったと、見ている時雨は語りに付け加えた。

「あのさあ……時雨、着任して一週間も経ってねえのにノックもなしに無言で入ってきて、俺と村雨ちゃんのイチャイチャを邪魔して、その上に不敬罪を犯すつもりか?君のような艦娘を左遷してサーセンザーオン地獄に落とすことも可能だということも忘れてもらっては困るねエツ!」

「そんな事言ってるいいのかな?参謀長さんが来たのにつ」

「参謀長が?」

参謀長……それは、警備府や鎮守府においての副司令官みたいなものである。

幕僚会議では指名、及び空けてあった参謀長の座について誰も咎められなかったが、その理由も、今きた士官がそれを務めるからに他ならない。

俺と同じ若い人だと聞いているが、迎えに行くはずの村雨ちゃん以外その正体を知らない。

人物像や名前を聞いたが、村雨曰く「お楽しみですっ」らしい。つまりは俺が知っている人のはずだ。その参謀長というのも、俺と同じく一日前行動をちゃんと理解しているようだ。

だが、少しでもだけ礼儀を知っているからと言ってつけあがるようなアンポンタンだった場合、俺が直々に教育、指導してやらないといけない。

無論男だったらファISTで。

女でもファISTで。

美少女だったらフィンガーで。

気配からして時雨が立つ執務室ドアの横に隠れていると推測できる。

「オラア出てこいよ参謀長？隠れてねエでここの支配者に頭を垂れろ」

「あ、やっぱり提督って独裁者だったんだ」

善人全開の俺様に向かって抜かしてきた時雨の背中からひよつこりと顔を出した参謀長殿。

「あの、わ、私なんだけど……」

「コホンツ、いやはや、これは失敬！何分この時雨より参謀長は、礼儀を知らない小生意気な艦娘だと聞いていたので、つつい」

「はっ」

イケメン〇ね

ドスケベとは何なのか？

この用語についてのデフィニションは総じてエロい女を指す。所謂ただの持論だが、それに共感してくれる人は必ずこの世界にいる。

あの色々とプリンプリンなプリンツさんが来ること、それ則ち、T
DN、ERO。

「お久しぶり。元気そうで何よりだよ」

「グーテンターク！久しぶりに会えて嬉しい！」

執務室には俺とオイゲンさんしかない。

時雨は予定通りの出撃に加え、村雨ちゃんはその部署からの書類を持ってくるために警備府を歩き回っている。

まさか同期のオイゲンさんが来るとは思いもしなかったが、元は秘書艦として活躍していたのは聞き及んでいるので、仕事が楽になるのは俺にとっていいことだ。

ただ、彼女も一介の要港部を指揮していた身だから、そっちは大丈夫なのか？と心配していた。海軍省の人事に口を出すつもりはないけど、憶測としては西に集めた戦力の増強と言ったところだろうか。

警備府で重大な作戦立案をする時なんかは、頼れる同期がいる事は心情的な意味での負担を軽減してくれる。心の支えは一つでも多くあったほうがいい。

「メールでも言ったと思うけど、昇進おめでとう！シードはやっぱり凄いな。警備府の司令官をやっている間に勉強もしてるんじゃない？」

「うん、毎日三時間程度ね」

仕事の合間にやっていたりするので、一点集中した時間を見れば一時間程度である。

過分な地位を貰ったとはいえ、これに似合う教養っていうものはどうしても必要になってくるのは必然だ。防衛全書はもちろんだが、部

隊や一般的な艦隊を指揮する教育も学んでいる。

将官になるための教養は、整工班の時に軽く蘇我中将からワン・ツーマンで習った事があるが、まさかこの時期になって活かされるなんて思いもしなかった。

教養の中には振る舞いとか社交界でのマナーとか、所謂貴族坊っちゃん達が学ぶような事が多い。

そして実はこれが一番厄介であり、マナーってのは、英検一級とか安全保障学とか艦隊運用学を合わせても到底辿り着けないほど膨大な情報量を含んでいる。

何故なのかと聞かれれば、人生をかけても覚えきれないほどマナーというのは無数にあるからという単純な理由だ。覚えるだけで100を有に超える行事一つ一つにありえないほど細かいルールやら仕来りがあるが、日本は特にそれが細かい。

なんでそんなにルールを作るんだと聞かれれば、二重に上流への礼儀、そして教養があると見せるのに最適なツールだからだ。

○イッターみたいな大衆の場でもフォロワーし返したり、FF外と付ければ礼儀知らずと言われたり、無言フォロワーは大罪だったり、俺が頭にハテナマークを付けるような風習、マナーを強要する文化なので、案外そういう礼儀作法を覚えるのに慣れているのかもしれない。

実際に舞鶴でテストを受けて合格点を直々に貰った俺が言うんだ、間違いない。

「大淀さん越えちゃうかもね！」

「いや、流石にそれはない。それはともかく、オイゲンさんは柱島のみんなどは連絡取ってる？」

「うん、みんな相変わらず元気！アドミラルも元気！」

あの提督まだあんな左遷場所みたいなのところにいるのかよ。任期は満了したんじゃないや……いや、これまた人事が働いてるのかな。

会えたことを本当に嬉しそうに微笑みながら、この金髪碧眼巨乳は自分の胸を寄せるように脇を締めた。

ドイツの胸囲、恐るべしと言ったところか。あれで絞り出される液

は、さぞ濃いだろうなあ……ムク。

相変わらずエロすぎて……ああそうか、このスケベ外国艦に、遠慮なんていらなかったんだ。

『……オイゲン参謀長。服を脱いでもらおうか』

『ふえ!? な、なんで……』

『貴官が敵国のスパイであるかどうか、この私自らがチェックしようというのだ』

『で、でも来る前に武器の所持確認は済んで……』

『いいから脱ぎやがれエこのメスブタがアツ!!』

『ひいー! うう……こ、これで、いいっ?』

『ほう、フムフム、腕よし、脚よし、胸部よ……ん? なんだこれは? 胸部になにか隠しているな?』

『な、なにも隠してないよお! ただ胸がおつき……きや!』

『このイケナイオツパイと身長が釣り合っていないんだよオ!! 随分と男に特化した武器だなア? おん!? これを使ってどんな情報を吐き出させようとしていたんだ? アア——ツ!? 出るのは精液だけだぞこの全身ドスケベ女性器がア! これは、コツチの方も検査しないとイケナイようだなあ!』

『そ、そんなあ……!』

『お、今度は上目遣いか? そんなに俺からイロイロなモノを吐き出させたいとは度し難いロリ巨乳め。そんなエロエロ童顔女スパイは、やつつけないといけないな! 卍ツツ解——醜肉棒二重魂最大直角砲……覚悟しろ、プリケツ・オイゲンツ!』

『いやああああ!!』

佐世保第一鎮守府、会議室。

『どうしたのシシード? 目が三日月形になってニヤニヤしてるんだけど』

『こういう時の穴戸さんは妄想してるんですツ、プイっ!』

口を膨らませる村雨が言うとおおり、いやらしい妄想にふけながら会

議に出席していた俺は、既に前の会議から一ヶ月が過ぎていた。

俺の警備府にはあまり変化はなく、強いていえば参謀長のオイゲンさんが入ってきたせいで一時期とても大慌てとなったことぐらいか。それも慣れてほとぼりが冷め始めるのは約一週間程度であり、一ヶ月ともなれば士官たちの当たり障りは俺とほぼ変わらない。

相槌が随時交わされる会議の内容は言わずもがな、沖繩奪還作戦のことだが……流石に一ヶ月でまた司令官を招集するなんて。

集合した司令官や参謀連中の中には代理として来ている人が多い上、小さな要港部であれば出席すらしていないところもある。長崎警備府は佐世保の右腕である以上は出席する必要があるが、流石にオイゲンさんと村雨ちゃんを連れてくる必要はなかったか。二人はなんか裏でおしゃべりしてるし、他のみんなもやる気ないし。

「ふむ……では、長崎警備府からは何か案は無いかね？」

「ハ、現状では様子を見るのが適切かと思えます」

「おいおいどうしたんだ？前線の龍ともあろう者がそのような息でどうする？」

その渾名つて呪いかなんですかね？事あるごとにその名前を出されるのマジハズいんですけど。吐かれる度に視線がこっちに集まるのマジ落ち着かねえし。

『あの穴戸司令官ともあろう者があのような曖昧な意見を申すとは……これは肩を緩めてもいいと言う暗示……』

『ついでに、我々のおまん……失礼。肩だけでなく、全身を緩めては如何かな？ホラ、こうやって……』

『あ、ダメ……』

おっさん同士は流石にキモい。

あつちにいる提督なんて俺のことを凝視して……あ、違う、あれ多分オイゲンさんと村雨ちゃん見てるんだ。

キモッ。

「ふむ……では海外士官の方々は、どう思いますか？」

「私たちからはあまり……」

「ふむ、なるほど……お前たち、もつとちゃんとしてくれないと駄目だ

ぞ？」

アンタが退官したらちゃんとするぞ、と心の中で暴言を吐いておく。

彼が助言を欲した相手は、佐世保の海外士官たちである。一介の日本海軍軍人として働かせることで、海外経験を積ませる名目で働いている、駐在武官のようなものだが、この人達が働くのは鎮守府などの普通の基地である。

参謀長であるオイゲンさんもそうなのか、あるいは帰化しているのか、そのところは全くの不明であるが、少なくとも一年以上いるのは確かだ。

というより提督、曲がりなりにも海外からは非難を浴びるかもしれない作戦の内容についての助言を海外士官に求めるなよ……まあ、出席を許している以上、対等に扱わなきゃならないのは当然なんだが。出席する理由はもちろん仕事上の経験を積ませる関係もあるが、何より「日本海軍は何もやましいことしてませんよ〜すぐく健全でオープンで外国海軍とは違いますよ〜」という演出的な要素もある。

でも実際に作戦内容はおおっぴらにできない所もあるので、海外士官が出席している以上、決定できないことは多い。

予想通りなにもないまま二度目の会議は離散する。

会議室に残ったのは俺たちと……そして海外士官グループとの交流が、オイゲンさんが声をかけたことで始まった。

帰って神風たちとカルタでもしようかと思っただけですけど。

「はじめまして！私、プリンツ・オイゲン！こっちは村雨！そしてこっちは」

「穴戸です。我々は長崎警備府から来ました」

勝手に俺たち全員の自己紹介をはじめようとしたオイゲンを牽制したら、ぶくうーつと眉毛を曲げられた。本来は俺が紹介しなきゃいけない立場なんだからそのエッチなお尻引っ込めて前かがみになるなスケベちゃんオラア。

「ははは、ご丁寧にもありがとうございます commander 穴戸。私はエイジャックス・ベリングハム、以後お見知りおきを」

イケメンさんと握手を交わした。

直接取材以降、俺の記事が気になって30回ぐらい見ていたが、この人の名前が話題に入っていたのを思い出す。

村雨ちゃんにそれをダシにして言い寄ったら夕立ちちゃんにジャーマンスープレックスホールドされた記憶は新しい。

……確かに、雑誌に出るほどの超美形イケメンクソち○ぽ。表現すればオイゲンさんを男体化したみたいな感じの美形さか？あるいは男体化ビスマルクさんぐらいが妥当か。

どちらにしろ、村雨ちゃんに目隠しさせて視界を独占したい。見ないで村雨ちゃんツ!!イケメンなんて人種はどうせ女食ベまくってるクソチ○ポばかりなんだと啓蒙したい。村雨ちゃんがコイツに興味を持つようなことがあれば焼身自殺で死んでやる。

彼が、「そしてこちらが」と順を追って紹介していったのが、後ろに居る三人である。

G A M B I E R B A Y、T a s h k e n t、G O T L A N D。

ガンビアベイ、タシケント、ゴトランド……名前を聞いて、超筋肉ムキムキマツチョで色々とテカテカした同人誌の竿みたいな奴を想像したのは俺だけじゃないはず。

こんな強そうな名前と並べるヤツなんてジョージとかジャックとかがありきたりでハリウッド映画のキン肉マン役ぐらいだろう。

こんな奴らが女なわけ、

「あ、あの、it, s a p l e a s u r e t o m e e t y o

u…」

「З Д р а в с т в у й т е . はじめましてだね!」

「よろしくお願いいたしますっ」

うわ、なんだこの美人達、ガチエロかよ。

ガンビア・ベイさんはオドオド系のツインテエロボディ。

ゴトランドさんは儂げな艶やかさを持つ泣きぼくろ麗人。

タシケントさん……なんかすごく包容力ありそうでかわいいんだけど。マジで抱きつきてえ。

オイゲンさんを合わせてわけ分かんねえぐらい国がごつちやに

なってるけど、美男美女のG A I J I Nグループには変わらない。

俺と村雨ちゃんの場合の違いは半端ないの言うまでもないが、人種を間違えていても村雨ちゃんだって対抗できるぐらいの美貌は持っている。

俺の感覚から言わせてみればこの会議室は日本じゃなくなっただけから早く出よう。

「お、お待ち下さいコマンドー！実は私、一度でいいので敬愛するコマンドーシンドにお会いしたかったです」

「ほう、貴様は日本での滞在は長いと聞くが、我が階級章を見てコマンドーとなア？英語ではキャプテンではないのかねエ？敬愛しているなら語尾にサーを付けろハンサムボオオイツ！」

「I... I t h o u s a n d a p o l o g i e s, s i r!!」
「ふん、分かればよろしいのだ。俺は懐の深い男だからな、この俺様の寛大さに慄くがいい……ハハハハハ!!」

「二………二」

見ろよ、この艦娘たちが俺に向ける陶酔けいべつの眼差し。俺がイケメンよりに立ったから、多分みんな股間大洪水させてるんだろうなあ。

という冗談はともかく。

「流石です！私ももつと見習わなくては……」

「ベリングハム少佐……俺のケツ、しつかり追えよ？」

「は、はい。〇〇」

妙に頬を染めて強張った敬礼をする少佐。

……後に彼がホモだったと知った俺は、発言を後悔した事は言うまでもない。外交の道具として使われているとはいえ、アナポリスを主席卒業したというだけあって、相当頭もいい。彼が発したイケメンという言葉が、実は正しい使い方をされていた事に気づかなかった。

(※イケメン＝性的にイケる男性を示すゲイ用語)

「ハハハ、しかし間近で見るとなおイケメンですねキャプテン穴戸は」
「テメエ嫌味か喧嘩なら買うぞ？」

「いい、いいえそんな事は……でも、悪い人ではない事は良くわかりました。これで安心して、彼女を見送れますね」

「え」

「図々しいようですがもう一度紹介させていただきます。彼女はガンビア・ベイ、数日後に長崎警備府へと着任するので、よろしく願います……どうかしましたか？」

「え、いや別に？うん……チラツ」

「っ！」

村雨ちゃんは今度は、ヤバツ！って感じでそっぽ向く。つまりアレだ、報連相ができていなかったというわけだな。確かに俺の艦隊に入ることは知っていたけど、“誰が”までは知らなかった。

まさか海外艦とは……村雨ちゃんの体にいっぱい報連相を叩き込みたい。

「なるほど……じゃあベイ、よろしくな」

「Thank you……」

ぎこちない握手を交わしたベイは、気の弱いアメリカ小娘らしい。アイオワさんみたいな奇妙すぎる英語は話さない分、ネイティブな英語で、それでいてとても愛らしい娘が俺の艦隊に加わる事となる。

後にガンビアベイ以外にも、アイオワさんやサラトガさんなどの強力なアメリカ艦がこの作戦に参加するか否かにおいて、問題が生じる事となる。

艦娘が陸で活躍してる……

「ふふふ、お兄さんっ、春雨だけを見てくださいな……?」

「執務の途中だからちよつと離れててね」

「ぷくう〜!邪魔しませんからあ〜!」

対面座位で抱きついてる春雨ちゃんは更に力を入れて抱きしめてきた。これで春雨ちゃんの真ん丸なお目々と髪が視界を邪魔することとはなくなったが、代わりにむにゅつとする感触が体に押し付けられる。

心頭滅却すれば龍もまた鎮まる。

治まれえ……収まれエ……!ハア……ハア……!

「んっ……!お、お兄さん……息、耳に吹きかけられると……!」

「……………」

「ああん……はあ……が、がまんできないです……!」

「……………」

エロ。

「A—admiral, I, m……じやなかったっ、本日から着任する、Gambier Bayです。よろしくおねが……ッ!」

「ッ!」

モゾモゾと上下に動く春雨ちゃん、そして向かい合うように座っているこの状況は正に、執務室対面座位くオラア提督様にご奉仕しろオラアである。

当然のごとくドアを閉めようとするガンビアベイを呼びかける。

「Gambier Bay!! Come over here!! (ベ

イ!こっちへ来いッ!!)」

「っ!!S, sir—yes—sir!!」

緊張した顔でこちらの様子を伺いながら敬礼のまま膠着してしまったベイにもういいと命令したあと、春雨ちゃんが膝から降ろし、何事もなかったかのように挨拶する。

「きてくれてありがとうな、ベイ。改めて、俺はこの警備府の司令官を

しているんだ、よろしく」

「Thank you Admiral……」

「穴戸くん！報告書持ってきたよ……って、お客さん!？」

「ああん!?!お客さん!？」

「白露さん、こちらは今日から入ってきたガンビア・ベイです。護衛空母なので、第二艦隊に編成しようかと思っっているんですが……」

「分かったー!うくん……米国のベイだから、アメリカの艦娘だよね!」

「え?は、はい……」

その間違ってるのに合ってる解釈やめろ。

「じゃあ白露についてきてえ!」

「あ、ちよつと!きゃ!」

可愛らしい声を上げて出ていくガンビアベイ。見計らったように時雨と村雨ちゃん、並びにオイゲンさんが書類を持ちながら中に入ってくる。

「どうしたのアレ?例の新しい艦娘?」

「そう。第二艦隊に編成するけど、ちよつと緊張気味なんだよなあ

……時雨」

「分かった」

彼女に付き添ってくれと頼むと言う前に、時雨は了承するように頷いた。村雨ちゃんも同じく、ペンを出して編成表に改変を加える。

「オイゲンさんはどうここ?居心地的な意味で」

「うん!みんな優しいし、すっごく楽しいよ!」

「そりや良かったわ。でなければ、なにか催事でもしようかと思ったけど、その必要もなさそうだな」

「催事……」

「……え、どうしたんだ時雨?ものの数日で司令官にプロレス技をかけまくって、警備府の影の女王とか言われていること気にしてんのか?」

「え!?!僕、そんな風に思われてたの!？」

「半分は嘘だぞ。でも冗談がらられていても士官たちの間で話題に上がるのは本当だぞ、時雨はモテモテだなあ」

「そんなにモテたいとは思わないけど……」

「は？お前顔が良いからってチョーシこいてんじゃねえぞオイ!?世の中の女の顔面偏差値がどれだけお前のを下回ってると思ってるんだ!?俺の顔を見てえええっ!?!」

「ち、ちよつと、近いからっ……」

顔を一旦離すが、それでも俺の湧き上がる怒りは収まらない。モテたくないだとオ？それはモテ飽きた女がいうセリフだぞボケエ。

「いつも思うけど、相変わらず変わらないねシシードは」

「うん、普遍的で不変な漢だからね……」

「あ、そういうのいいから。それより書類にハンコ押して」

「あ、はい」

プリケツ参謀長め。

書類に印を押す前にチェツクを済ませるが、計算や誤字などの間違いは見当たらない。流石はオイゲンさんと村雨ちゃんというべきか……まあそのための秘書艦や参謀部なのだが、どうにも自分でチェツクしないと落ち着かない面がある。

酒保の書類を漁っていると、計算の間違いはなかったが、明らかに物資の不足を示している数字が表示されていた。付けられたステイッキートでも不足!と書いてあったので、数字を見て判断する必要性はない。

「予想してたけど、思ったより早く物資が不足状態になってるな……マズイ」

「え、でも資材は満タンだつて言ってたよ？この間輸送された分があるし」

「酒保の物資が不足してるんだ。売店は士気に関わる重大な要素だから、見過ごすわけにはいかないんだけど……いや、今回は最悪空になつてもいいか。流石に台風の影響なら仕方がない」

近い頃、長崎警備府にはないが、台風が襲ってきたという自然災害。海軍基地の備品が壊されたから金額が大きくなってるが、それでもかなりの被害額が予測される。

自然災害の副作用で深海棲艦が現れなかったのは資材の備蓄とし

ても良かったが、警備府への輸送が滞ったのもあり、酒保が空になりそうなんだ。

警備府専用の輸送部隊は存在せず、ルートとしては艦娘たちが佐世保からか持つてくるか、海軍の補給センターから貰うか、陸海空共用の緊急補給所から持つてくるのがセオリーだが……既に被害が甚大な地域へと送られている頃だろう。

まあ売店が使えなくなったところで、俺は買うもんじゃないし、被害に遭ってる地域よりも断然優先度は低い。

必要補給物資……食堂に出る夕飯の食材がなくなれば話は別だが。そのシチュエーションなら予備の金か、場合によっては幹部クラスの人か全員が金を出し合って数人がかりで買いに行かなきゃいけない。

使いつパシればいいんだが、今の時期は忙しい上休日の時間は限られている。なんで休日出勤!?公僕だからって休日まで尽くさなきゃいけない奴隷になった覚えはねえぞボケエ!!と文句垂れるやつが多いだろうし、最近は買い物してるだけで炎上するから無闇に行動できないし、心の中でも司令官がいけよみたいな顔されるに決まってる。

酒保はともかく、被害地域と救援をしている陸軍の援助をするために貢献すると周知させた上で、出動隊の支援をするのもいいだろうな。海軍省から密かにそうせよとのお達しが来る可能性が高い。

先手を打って行動を起こすのは御上への目移りがいいし、なにより人脈の構成をすることができる。

不謹慎かもしれないが、台風のおかげで作戦行動は遅れる。遅れる、というのは単純に台風が過ぎ去ってから大規模作戦を実行できるわけじゃない。過ぎ去ってから市民の間でそのダメージからの余熱が覚めるまでの時間を考慮して、大体数カ月から一年つてところか。

海軍が一時的にブラックと化して民間事業介入により復興の手助けをする、みたいな事になればもっと早く行動できるかも知れないが、できればそれは遠慮してほしい。

「できれば警備府での仕事のない日に……って、必然的に休日になっ

ちやうんだけど。あはっ！また俺休日潰されるわ……自主的だから文句言えないけど、クソオ!!」

「明日穴戸さんと休日被るよね？僕も行ってもいいよ」

「そりゃ流石に悪いだろ……確かに、かなり買い込む事になるだろう腕力は必要だろうけどさ」

「うん、僕の腕力は安くないから当然高く付くことになるだろうけど……パラ？パラ？」

商店街のチラシをヒラヒラさせながら、なにかを要求してくる時雨。腕に抱きついてる春雨ちゃんを離してチラシを覗きに行くと“豪華！旬の八味、一万円ツツツ!!”と視界がチカチカするほどのさいフオントで書かれてあった。

相場が下がって、長崎という海に面した主要都市でもこんなに高いのか。

「お前自分だけ一人美味しいもん食べて他のみんなに申し訳ないと思わないのかね？うん？」

「穴戸くん、考えてみて？その美味しいもんを警備府全員に配ろうとしたら、個人レベルじゃ落とせないほどの金額になるでしょ？」

「おう」

「つまり、食べられる人には限度があるわけで、食べられなかった人の分まで美味しく食べるのが、礼儀じゃない？」

「うん？」

「あ、でもそれってつまり、僕がこの警備府のみんなの分のお金と食べ物をとったら、みんなが幸せになるってことじゃないかな？ふふふっ、僕って善良だねっ」

「……………」

独善！

翌日の街のcosco。

冗談だったので俺の財布が死ぬことはなかった。

深海棲艦が来ても大丈夫なように艦隊を配備しているが、勤務中の警備府の士官の約半数を街に出している。主な任務はもちろん非常食と非常用品の買い出しであり、八百屋からローカルにある出店までを物量で押しかけて買い、それを補給センターに集める手筈だ。

階級関係なしに土地勘のある人を班のリーダー或いはサブリーダーにして複数の地域へと買い出しに行かせたので、陸軍の出る幕はあまりないだろう。

既に援助をすると連絡したので、人員不足の陸軍側の出勤人数も使用する車両もかなり浮いたと、ここを取り仕切る連隊長に褒められた。正確には「べ、別に海軍の助けなんて必要なかったんだから！で、でも一応お礼は言っておくぞ！」と言われた。因みに電話の主はオツサンだった。キモ。

空軍も同じく「ありがとう、天気が悪くて俺マジ元氣イ」と言われた。悪天候だと機嫌が良くなるのか(困惑)。いや、仕事がないから内心はウキウキか……支援要請送って仕事増やしてやる。

迅速な編成で戸惑う士官や水兵たちを束ねる俺は随所指揮を取りながら、自らも買い出しを行う。この大部隊、通称“買い出し総隊”には有能な補佐が必要だが、あいにくだがレギュレーションによつてオイゲンさんを警備府に置いておかなきゃいけない。

元司令官なんだからオイゲンさんでも十分にこなせるだろうけど、艦隊指揮権を持たないオイゲンにやらせるのはダメ、というレギュレーションもある。もし深海棲艦が来たら、俺が指揮してたことにしてもらおう予定である。

俺個人は、ひと目をなるべく避けて通りたかったが、それでも混んでる。さすがは大手ホールセール店……いや、大手というより世界レベルだが、それは置いておこう。

「これがJapanの……」

「そう、コースコだ。日本に来たら大抵は一回り小さくなるが、でかいだろ？日本のウェアハウスはアメリカよりデカイ場合があるからな」

「really?」

その分だけ人も多いが。

連れて来たメンバーは俺の両脇を占領している時雨とガンビアベイ、並びに白露さん、涼月、飛鷹、三日月、そして、

「よし、張り切って行くぞお前らア!!」

「おう!!」

陸軍の三人だ。

昨日は三人だけで街に出る予定だったという、流石に足らなすぎる人事に対して同情したもんだ。小回りの効く輸送トラックではなく、大型店舗に運び込むような大型トラックなどを使える事にも喜んでいたので、ここ数日の彼らの任務がどれだけ過酷かを示すいい材料となった。

中型免許までなら持つてるけど、大型は乗ったことがないからどちらにしろ陸軍の人に頼むのは必然だったようだ。2台の大型トラックと横にいる陸海軍がそんなに珍しいのか、客がジロジロ見ている。「改めてお礼を言わせてください!ありがとうございます! 宍戸大佐!俺たちだけじゃやっぱり人手不足で……」

「それは仕方がないし、丁度良かったよ。海軍としても、このまま黙って見ているわけにはいかないからな……な?みんな」

頷いたみんなの目は、やる気に満ち溢れていた。艦娘たちの様子を見た将校達が耳打ちしてくる。

「……ところでえ?あの艦娘たちってえ……彼氏とか?い、居るんっスか?」

「あー……少なくともここにいるのは全員独身だと思うけど」

「マジッスか!?あの茶髪ロングの娘とかマジタイプだなんですけど……」

「あの人はああ見えて強いから、太刀打ちできねえぞ」

それと、白露さんはテメエに渡さねえ。

「じゃあ、あの黒髪ロングの」

「テメエミカアにナニするつもりだこのロリコン野郎殺すぞオ!!」

三日月も渡さねえ。

「あの三つ編みの娘とかどうツスカ？」

「やってみろ、次の日お前とお前の財布は干し物だ」

「聞こえてるよ穴戸くん？誰がデイハイドレーターだつて？」

「っ!?!いやあく今日もいい天気だなあく!」

「そうだね。雨降つてて干し物になる前に穴戸くんを濡らしてくれるから辛うじて潤いを保たせてくれるいい雨だね。うん、建物の中に入ったらジャーキーみたいにならないように気をつけてねっ」

早くも帰りたくなった。

各艦隊の艦娘の大半も買い出し任務に勤しんでる。俺みたいなダサイ漢はともかく、地域宣伝として効果を発揮するのは紛れもなく何時の時代も華であり、艦娘による陸での救助活動は称賛される事になるだろう。

他の地域でも同様に艦娘を使っているため、美少女たちによるサービスは市民を斡旋している事を願う。

陸軍が救助活動に情熱と気概を見せるのはもちろんいい事だが、海軍としてはやる気で負けるわけにはいかない。

「よしお前らパパッと済ませるぞ!できるだけ仕事してる感を演出しながらパパッと商品をカゴに入れ、素早く動いて時間が迫ってるように見せかけるオ!スマホはイジるな、コンビニには入るな、休息を取るなの世間様三条を忘れるなよ!一つでも破ったら仕事していなって叩かれるんだからなア!」

「そ、それは流石にないと思いますけど……」

「ていうか僕たちがここに立ってるのはいいの?」

甘いな三日月、雨の中からでも漂う白露さんのシャンプーの匂いぐらい甘い。公僕として過酷な訓練と任務を遂行して乗り越え、常に命をかけて戦う人たちがあろう事かコンビニに行ったり移動中にスマホ見てたりしただけで冷酷すぎる批判を受けた……という小説を読んだ事があるので、流石にリアルでそんな事は起きようがないだろうが、念には念を入れておく。

まあ時雨と白露さんが突っ立っていれば、前線艦隊としての名前が先に来るだろうから、いじましさからは少し開放されるだろう。

「しかし、宍戸大佐直々に来られるとは……我々の連隊長とは大違いですね」

「お前らの連隊長は指揮と統制を管轄している以上は無闇に外に出れない場合があるから……」

「そんなモンじゃないですってエ!!夜中に執務室から、おま○こおゝゝって聞こえるようなことしてるんツスよ!!これも職権乱用ですよ羨ましい!!」

「お前ノーマルなのかホモなのかどっちかにしろよ」

「え?女性将校と、夜の執務室でヘンタイな事をするのがホモ……?」

やばい、真っ先に浮かんだのがおっさん同士の剣道試合に見立てた衆道試合、先にお尻を貫かれたら負け!なんて想像したのは一生の不覚。

「それにバイかも知れないでしょうツ!」

「可能性を追求するのはやめようか陸軍くん、上司が課長になってるなんて知ったら、一生消えない心の傷として残るんだぞ」

現に今でも細心の注意を払ってノックするくせが治らない。マナー上は良いことだが、部屋に入る時に班長が課長になってる現場を二度と目撃したくない俺は、特殊部隊顔負けのクリアリングをしようと、陸戦訓練を受けた士官に言われた事がある。元上司の業は深い。

「まあウチらの連隊長が竿になってるにしても、おま○こになってるにしても、宍戸大佐はとても頼りがいのある司令官だと言うことですよ」

「リーダーってのは陣頭に立って率先するものだからな。そうでなくても、ここで昨日注文したモノは俺が受け取る事となっているから来る必要はあったんだ」

「相変わらず仕事がお早い……」

「感動した涼月?分かる。でもね、裏の仕事なんてのは誰にでもできて、表に華を咲かせながらする仕事のほうが凄いだぞ?……涼月の美人さには、助けられちゃうな」

「え?あ、あのっ……ありがとうございますっ」

『……ね？提督ジゴロ演出しようとしてるけど、慣れない事しようとしてキモくなってるでしょ？モテない男の人ってだいたいこうなるんだよねっ』

『確かに不慣れな感じはするわね』

『三日月はあんなオトナに引つかかっちゃだめだよ？白露との、お、や、く、そ、く！』

『は、はい！わかりました！』

チツ、どう足掻いても俺にH A R E Mを作らせないつもりだなコイツら？

○○○○

店内。

「Wow! Its so big! (わあく! すごく大きい!)」

「That's what she said.」

「え、なんて?」

咄嗟に口走ったものの、ベイには聞こえなかった様子。

中に入れば騒然とした店内。

人が多い……というより、集まってきたのが正解か。老若男女問わずカメラフラッシュと声を浴びせてくる愚民共。

『アレって警備府の司令官じゃね!?』

『え、ウソ!?あの前線の龍の!?』

『え、本当にいるの!?』

「……こんにちわ、皆さん」

『『きゃあああああ!!』』

イケメンスマイルで更にカメラフラッシュが加速する。見ろよ時雨、俺はもう昔の俺じゃないんだ。

昔ならこの黄色い声が叫び声になっていただろうが、今は嬌声となって現在の俺を持ち上げている。警備府初代司令官、佐世保方面軍幕僚の肩書は伊達じゃないぜエ……!?

『あのヘンタイみたいな顔した司令官がいるって事は……きゃあああああ!!時雨様!!あの時雨様よおおお!!?』

「え?ど、どうも……」

『白露さん凄なお美しい!!綺麗!!素敵!!』

「もつと撮ってもいいよ〜!」

『ヤバイ心臓どまっじやいぞおおおう!!』

そのまま停止しろ。

時雨と白露さんの人気は凄まじく、半ばアイドルのような存在となっていた。知ってはいたがこれほどとは思わなかった……と漏らす飛鷹に同感するみんな。

迷惑になるから時雨と白露さんに外へ行くようにと指示して、俺は出てきた店長が差し出した書類にサインする。これは今日の分もあるが、来週から運ばれてくる物資の分も買う為の誓約書である。

急いでるわけじゃないが、仕事の速さを演出するために2倍速ぐらいのスピードで荷物をトラックの中に入れていくのは、仕事してまっす的な演出のためである事は言わずもがな。いつそのこと店に商品を運びに来るトラックが直で被災地に行ってくれば理想なんだが、ビジネスとして運行している以上、形式を守らないといけないのは本当に辛いわ。

俺たちの行動の一つ一つは○イッターをバズらせる為の道具として使われる事は尺に触るが、それを逆に利用して精一杯の限りを尽くす“姿”を見せるのが肝要。予め、“あくまで自主的な善意”として、警備府のホームページとアカウントに載せた上で行動しているため、誠意は見せてやれた。

それでも「深海棲艦がいないんだから当たり前だろ」とかいふ奴がいたので、住所追跡して魚雷投げつけてやりたい気持ちに駆られたが、もちろん実行には至っていない。

やるとしたら火炎瓶を使うわ。

ほとんどの荷物運びが終わったところで、休憩を挟まずに近隣住民への積極的なコミュニケーション！気さくで元気な司令官を演出するために、パーフェクトコミュニケーションを目指す！という名の印象付け。

「最近の海軍さんはお若いねえ〜……」

「ハハハ！若さを保ち、一日でも長く国民を守るのが、我々の仕事ですからー！」

「最近の若者はあ、節約節約で痩せ細ってるからねえ……」

「まったくじゃ……金使わんと、経済回らん事お知らんのか？」

このクソボケ老人共には日本国の貯蓄が老人に傾いてて若者が使える金は税金で更に摂取されて老人の手に渡ってる事に永遠と気づかないだろうな？

俺のカネも半分ぐらいコイツラに献上されていると思うと……

ツツツウア!!

「穴戸くん、顔、ねえ顔、お顔ヤバイ」

「ん？今どんな顔してた？」

「海外映画に出てきそうな緑のムキムキ筋肉ダルマみたいな形相……って言ったら失礼かしら？隼鷹と一緒にこの前見てたからそれを連想しちゃったわ」

「Greenの……ああ！HUOKですねっ！私の国にいたとき、映画見ました！」

「ははは、日本人に例えるとユウジ○ウ・ハンマーかな？あんなフィクションみたいな顔できるわけ無いじゃん！こんな古典的アジアフェイスの俺がさ」

『深海棲艦を早く潰してはくれないかねえ？この前なんて、急襲された会社の株が暴落したもんねえ……』

『ワシなんて一億失ったぞ！残り10億円……この先が不安じゃワイ』

「……ツツツ!!」

「出来てる！ハンマー出来てるスゴイ！イン○タに載せてもいい!!」

「白露、私が言わなくても分かるとは思うけど提督って結構有名だから肖像権とかの問題に発展しない？」

「大丈夫だよ飛鷹！だってほら！誰だか分からないでしょ!」

「あ、本当ですね凄いです！後で三日月にも写真送ってください！」

艦娘共が俺の形相について盛り上がっているようだが、内心は沸々と煮えたぎる憎悪で、俺自身が深海棲艦となりそうだった。

それを止めてくれた坊主頭のクソガキにサインをする。

「龍さん！サインありがとう!!」

「コラだめでしょ！ちゃんと前線の、を付けなきゃ」

「ハハハ、いいですよ奥さん。いい名前なので、むしろニックネームとして使わせて欲しいほどこです。えく正直に言っつて、その名前は少しばかり照れくさいので……」

「いいじゃん別に。むしろ、僕もそんなニツクネーム欲しい」

「適当に名乗れば？ 幸運艦時雨とか、佐世保の時雨とか」

「佐世保の名前を流石に取っちゃうのはいけないと思うんだけど……でも、結構いいねっ」

「じゃあ私はあゝ日本の白露うゝ！」

「ということは、その上司である提督は世界の……になるわね」

スケールデカすぎィ！そしてぴよんぴよん飛び跳ねる白露さんのおっぱいデカスギィ！

「その名前は俺にとつて重責すぎるし、やるべき事は世界を救うことじゃなくて、まずはここにいる国民の皆さんの安全を確保する事だと思っただ。常に国民への配慮を考えるべし……分かるな？」

「は、はい、 admiral！」

「なんだ分かってたのかベイ？ だったらその開けた胸元を即座に仕舞い、汗と微雨で濡れてしまった服を着替えてくるといい」

「あつ……t-thank you admiral!!」

本人は今更ながら気付いたのか、その傲慢すぎるアメリカ生まれのメロンx2がこれでもかと露出していたのは、彼女をチラチラ見る陸軍の野郎どもを見れば一目瞭然。それが更に汗でビチョビチョとなっているの、ぴっちりして大変えつちである。

指摘したデカ北半球を隠そうともせず、代わりに恥じらいから来た真っ赤な顔を隠し、車の中に入っていく。普段ならば車両内には一般の士官の服が置いてあるはずだが……あ、俺の車の中って俺の上着しかなかった。

車に乗るときはガンビアベイの裸ワイシャツを見ないようにしよう。

「し、宍戸大佐ア……はあ……はあ……あ、あの子の汗まみれの服う……欲しいんすけどオ……！」

「「キモ」」

「なんでツスカ!? 大体ですなえ、エッチすぎるんですよオアレ!? 女性の陸軍ただでさえ少ないのに、あんなの見せられたらア……ハア……ハア……サルになりますよオ……!?!」

「直接交渉を試みる」

しかしガッツがないのか、諦めた様子でトラックに乗り込んで出発の準備をする陸軍さんたち。

それについて行って行って貨物運びの作業を後六回もする事になっている。自主的とはいえキツイぜ……無償の社会奉仕活動なんて何年ぶりだと思っただ腰痛エぞ。

・
・
・

高速道路、コンビニ。

すべて終わり陸軍と別れた後は、当然体中が痛く、肉体労働からデスクワークならともかく、デスクワークから肉体労働をするのは大変な環境の変化である。

丈夫な身体故に、悲鳴は上げていないが、車の中でハンドルを握る俺の体は休息を求めている。

隣に乗る白露さんがコンビニで休息を求めてきたので、道中にあつた適当な店に立ち寄る。かなりの辺境地なので、人に見つかることも無いだろう。

……しかし残念ながらガンビアベイは、上着一丁で下を履いてない凄くエッチな格好をしているので出て来れない。欲しいものはないと言われたが、チョコレートでも買ってやろう。

「ねえねえ！わた○ち買ってもいい!?!」

「うん、いいよ！好きなモノ買ってもいいからね。こくん可愛い要求をするなんて、小学何年生かな白露ちゃんは〜?」

「失礼だよ穴戸くん！私もう立派なボンキュッボンなレディーな大人なんだから!」

「じゃあそのボンキュッボンな身体に合う相應の振る舞いしてくださいよオ!?!要求する食い物がよりにもよってわた○ちツ!?!パチパチ通り越して頭のワタがカツチーンってしてるツス!」

「え、ごめん何言ってるかわからないっ……」

「よし、じゃあ白露さんだけ先に警備府に送り返しますねー」

「ごめんごめん!」

あははっ、と笑う白露さんはその足でコンビニへと向かう。シャセーの合図と共にコンビニ内を物色し始める艦隊のみんな。そして奢るとは言っていないものの、一応財布の中身を確認しちゃう俺。

飛鷹は酒保で切れそうになっているビールを見ていたが、頭を振ったり、睨みつけたりして買うか悩んでいる様子だ。震災に遭っている人がいるのに、隼鷹の為だけに買ってもいいのだろうか? という道德上の問題に悩んでいる様子が伺える。

また、これを杞憂と言って、高速道路の横に立っているような辺境のコンビニの酒を一人分程度買ったところで、救助活動になんら影響はない。その事を伝えたら「それもそうねっ」と笑顔で10升ほどレジに持っていった。

一人分? ビール買うんじゃないの? なんてそんな手慣れた手付きで10升も持てるの? これらの問いへの答えは帰ってこなかった。

涼月に至っては、物を買うこと自体に苦難を示している様だったが、秋月姉妹と同じく貧乏性なのだろうか? 幼少期もこんな感じだったのだろうか? じゃあ一体何があんなエロい体を作ってるのだろうか? 陸海空の兵器開発機関、そして民間の研究機関が研究テーマとして扱うべきはそこにあると、俺は断言する。

白露さんと時雨は自由に選択しているが……三日月は、恒例の雑誌コーナーで紐に縛られた本を見ていた。俗に言う、エロ本である。

「だーれだ?」

「ふえ!? わ、私は別になにも見てません!!」

「それ見てるって言ってるようなもんだぞ」

「だ、だってこんな所にこんなモノが……破廉恥です! 大体、子供が来れるような場所でこんなモノが……こんなモノが……ッ!」

「分かった、分かったらさ」

三日月は顔が真っ赤っかにしている。アホ毛がメラメラ動いてて、今

にも恥ずかしくて死にそう！って表情してて可愛い。

「三日月イジメるのやめてあげようよ、僕たちは頼まれてもいないのに自主的に大規模動員させて支援するぐらい良心的な海軍軍人じゃなかったの？」

「そうそう！あ、それより穴戸くん！私達のお会計済ませてっ！」

「はっ。」

既に買い物を済ませて外に出ている飛鷹と涼月。

残された白露さんがカゴいっぱいを持つクソ高いおつまみであるビーフジャーキーを買うように要求している。

「俺への経済的なイジメもやめてもらえませんかね。要職に就いてるからって年齢的な問題で他の同僚たちや提督と比べれて一番貰ってないんですよ俺。そんな俺にこんな時だけバブル時代の社長さんみたいな扱い……泣いてもいい？」

「ダイの大人が泣くとかキモいからトイレでやってね」

「フーン！泣いてやるもんかよこんなコンビニで。店員さんに迷惑がかかるだろう？それにほら、俺たち以外にもお客さんがいるんだからさ」

『いらっしやいませ』

『おい！ここにあるデイルド全部出せ』

『出しますので刺さないで下さい！』

「……………」

はっ。

コンビニ強盗

レジ前で突如、自分の人生を牢屋に置きたがっているお客さんが喉元にディルドを突き立てて店員を脅している。アレが実はナイフなのか、あるいは「早くしないとケツに打ち込むぞ」的な新手すぎる犯行法なのか分からないが、脅されて奥の部屋へと進んでいった。

コンビニ内に残っているのが俺を含めたこの四人だけで、後は車の中でのほほんと俺の帰りを待っている頃だろう。

「随分物騒なお客様だね……でも、丁重におもてなしするなんて流石は日本のサービスだね」

「お客さんってのは敵とも捉えられるから、あつてるつちや合ってるけど」

「な、なに冷静になつてるんですかあ!?強盗ですよ強盗!?映画の中でしか見たことないような強盗が目の前にいるんですよオ!?すごいです!」

何故か若干嬉しそうにしている三日月を宥め、店長が猿ぐつわのように口にディルドを咥えさせられ、ビニールロープで縛られながら出てくる。そのスムーズすぎる犯行に、俺も時雨も口を大きく開いている。

「宍戸くん! 白露キックお見舞いしようか?」

「そんな事したら最善、下半身麻痺になると思うので却下させていただきます」

「ん? なんで最善? そこ普通最悪じゃないの?」

「姉さんつまりアレだよ、姉さんのキックは良くて下半身麻痺最悪死亡って事……」

「ゴホンッ! まあ止めたり殴ったりした所で、返って問題になる可能性もあるし、ここは警察を呼ぶ程度の協力をしてあげるだけでいいと思う」

我が国の市民は、加害者の守りに入るアンポンタン揃いのクソみたいな国民性だなんて信じるつもりもないが、半ば犯罪者支援団体の如

く彼らの人権を訴えてくる可能性は否めない。

一旦公務を離れれば俺は一般人同然だが、立場が立場である以上は、慎みを持った行動を取らなくちゃいけない……そう、警備府司令官として、な。

金品をポケットにしまう強盗は店員を脅しながら、徐々にコチラへと近づいてきた。

「おい、おいお前エ!! ちよつとこつちに来い!!」

「え、俺?」

「違うツ!! そのロングヘアの黒髪のオ!!」

「え? 指名されちゃった? 流石あたし!」

「お前じゃねえよタコ!! そっちの小せえ方だよオ!!」

「わ、私ですか!?!」

どうやらロリコンな強盗さんのご指名は三日月らしい。

タコと罵倒された白露さんは時雨に抑えられて前のめりになってるので、白露さんが殺人罪を犯す前に俺が弁舌で事を済ませよう。

というより、白露さんって自分の髪の毛を黒髪だと思ってたのか?

「おい、三日月は渡さねえぞ」

「し、司令官……!」

ちよ俺かつこよすぎ。

「ハア!?この店員がどうなつてもいいのかアア!」

「おいおい、身内と他人、お前ならどっちを選ぶ?」

「ひ、ひどい……っ! ひぐっ……!」

店員さんガタイのイイ身体で乙女みたいな泣き方するのやめろ。

「つかそのデイルドなんの役に立つの? 絶対に致命傷にはならないでしょ」

「フツ! それはどうかなア!」

強盗犯が伸ばした腕に掲げられたデイルドはその瞬間、ジリリリツ!! と電流音を鳴らし、覆い纏った雷電は、正にスタンガンのソレだった。

「な、なにに……!?! スタンガンのように弾ける電流を放出しながら、ドリルのように高速回転させる事ができるなんて、イキ地獄の極地を

感じる事ができるスーパートイじゃないか!! 凄すぎて開いた口が塞がらないッ!

「フフフ、そうだろうそうだろう……これを改造するのに百万かかったんだ……」

その頭脳を強盗より発明に回せと思ったのは俺だけじゃないはず。「さっさとその黒髪ロリこっちに寄こしやがれオラア! 殺すぞオ!!」

「フ、外をってみろ」

「あん? 一体なにを……なニイ!?」

……コンビニの外には、三日月が呼んだ援軍の車が立ち並んでいた。俺たち海軍には、有事の際に発せられる暗号のようなコードを渡されている。それを緊急連絡のための番号に掛ければ無条件でスクランブル発進の後に指定された場所に來れる仕組みだ。

俺が指した方向には、パトカーと警察官がこのコンビニを囲う様子伺える……はずだった。

『大丈夫ですか穴戸大佐ア!?』

『輸送部隊だからってナメてんじやねえぞオラア!!』

『まさかあの司令官がこんなところに居るなんて……強盗に乗じて彼を軟禁すれば、彼の尻は俺のモノ♂に……うう! でも俺にはタケシというコイビトがア……!』

「穴戸くん、アレって警察じゃないよね? 陸軍さんみたいな服着てるんだけど……」

「おー憲兵もいるぞアレ。まあアイツが一番ヤバそうなんだけど」

「え、どうして分かるの?」

「え、逆にお前には伝わらないの? あの野獣みたいな眼光。あれ絶対俺のケツ狙ってるよ」

「あははっ! そんなことないって! 穴戸くん、そういうのを、妄言、っていうんだよっ。白露お姉さんからの、う、ん、ち、ち、くー!」

その妄言が現実のものとなり、白露さんのうんちくの下りが失言になった事は言うまでもない。

外にいる陸軍さん、そして憲兵隊は道路を止めるほど大袈裟な行動には出ていないものの、輸送地へと運ばれるはずの陸軍輸送車と、巡回をしていたのか分からないが俺たちの警備府も見回っている憲兵隊も来ていた。人数にして計6人。

突然隣に屈強な男共が来たせいかな、俺たちの車に閉じこもっているガンビアベイが顔をひよっこりと出している。

「……三日月イ！　なんで陸軍を呼んだア!?　少なくとも憲兵隊だけで良かったのにイ!？」

「し、しかしこの緊急用のコール番号は！」

コールは発信とともに、最初は半径5キロ以内にいる軍関係者を呼び寄せる仕組みになっているんだが、陸軍輸送車までくる必要は無かったと三日月も感じていたようだ。

来た理由は多分通りがかったから、という理由でたまたま無線に届いてしまったんだろう。

と思っただんだが、

『こちら十二連隊の第三輸送部隊。例のコンビニで強盗が発生した模様、直ちに応援を呼ばれタシ』

『もう到着まで一分ッ！　連隊本部は連隊長、並びに連隊長附以下10名と複数の戦闘部隊が到着予定！　直ちに第二戦闘配置を取れエ!!』

『単独犯の様子だが、協力者を予想して道路封鎖をするべきだろうか？　応答を願う』

「……穴戸くん、僕、久しぶりに身が震えてるんだけど」

「ははは、俺もだよっ。抱き合おうか、時雨」

「うん」

「あ、ズルい！　白露も混ぜて!!」

俺を含めた三人はぎゅっと抱きしめ合う。

三日月はあわあわしながらどうしようかと混乱していて、なぜか抱き合っている俺たちを見てガンビアベイが「What the f c k?」みたいな顔してるのと、涼月と飛鷹外の様子なんて気にも留

めずにスマホをイジっている姿は異様である。

いや、俺の艦隊はいつも異様か異常かの二択だった。

何はともあれ、なぜ陸軍の連中が警察官が入ってこれないレベルの人員を導入しているのか、理由は2つ考えられる。

一つはここが陸軍の聖地であるかもしれないという楽観的な可能性。

もう一つは、三日月がミスって緊急コールではなく、戦闘中に出す援軍要請を送ってしまった可能性。

いずれにしても、俺は始末書を覚悟した。

そして戦意喪失したのか、龍神のような動きをしていたスタンガンバ〇ブが地面を着き、魚のようにウネウネ飛び跳ねる。

『突入ウウウ!!!』

怒涛の剣幕と、陸軍特有の暑苦しさと、どこかしから来るチンピラ感と共に強行突入されたコンビニは瞬く間に制圧され、啞然とするコンビニ店員と店長と、そして艦娘たちと俺は身柄を確保された。

「おいお前ら海軍だろオ!? ナニしにここに来たア!？」

「ひ、ひいいい!!! ご、ごめんなさいごめんなさい!!」

「よしなさい、彼女たちはただ偶然通りかかっただけだ……宍戸司令官、部下の非礼、謹んでお詫び申し上げます。それと、我々の活動にご協力頂き、ありがとうございます」

「は、はい! 連隊長殿も、相変わらずお元気そうで」

「ははは、何時になっても若きを忘れず……我が家の家訓にもなっているほどです」

何時も若いから、いつも執務室で女をはべらせてたのかこの連隊長さんは……と、輸送を手伝った陸軍さんの言質を心の中で取ったところで、世間話を切り上げて、事務的に事件の概要を説明する。

時雨たちも安堵の表情と共に俺の言葉一つ一つに頷いて、ようやく事件が起こってる事に気付いたのか、飛鷹と涼月が再度コンビニに入ってくる。

面倒な説明を終えた後に、犯人が連行されるのを見届けてから、俺たちは車に戻って帰る事を許され、

「おっと、まだ事情聴取が済んでませんよ？ 宍戸司令官。」

俺の肩を掴んできた憲兵。

「おい、お前はアッチの店員の方を先にやれ。宍戸大佐は多忙な身でありながら有志により援助をして頂いたんだ。我々としては、これ以上彼に迷惑を掛けたくないのだ」

「し、しかし彼の警備府を見回っている身として……！」

「これは命令だ、アチラを先にやれ」

「チツ……あの店員で我慢しとくか」

憲兵の眼光が俺から店員へと移り変わり、それ以降彼には関わらない事を俺は誓った。

「助かります、それと申し訳ありません。このような慌ただしい時にお呼びしてしまって……緊急用のコールナンバーに掛けたと思ったら、まさか連隊長殿が来るとは夢にも……」

「ははは、心配ご無用です。我ら連隊本部は偶々通りかかっただけなので、問題ありません……コンビニエンスストアに対してこの人数の軍人が押しかけるのも、少々無粋かと思いますが……」

いや流石に15人は多すぎだろ。

このとき呟いた心のツツコミは、白露さんと時雨と三日月の全員が合致していたらしい。

「通り際であつた上、数で犯人を威圧できたという事で良しとしましょう。身柄は陸軍の方で保持しても？」

「当然です、我々は何もしていませんから」

「助かります、ご協力ありがとうございます」

深々と頭を下げられた事に、時雨や三日月も恐縮していたが、白露さんはいえいえと畏まる素振りも見せなかったので、さっさと引っ張り出して現場から退散した。

何言ってるんだコイツ？

数週間程度で収まった台風とその後の地域密着、辺境遠征による支援活動は功を奏したらしく、順調に復興が進んでいる様だが、未だにほとぼりは収まらない。

酒保の補給もギリギリ、出撃が再開された分、これ以上の支援はできない状況だが、とあるニュースが警備府を騒がせた。

海軍の艦娘、ボランティア活動の際にコンビ二強盗を撃退！どこまでも国民と任務に献身的な我々海軍は素晴らしいツ！ カイグンサイコオオオオオ!!!

「凄いいじゃん！ 流石は飛鷹おっ！ やつるうっ！」

「いや、私は本当に何もしていないから。やったのは三日月と時雨と白露でしょ？」

「俺も入ってるよっ」

相方と海軍艦娘の活躍に乾杯！ と昼間から食堂で一本開けようとする隼鷹だが、飛鷹が止めてくれた。食堂にいる人数は少なく、俺は書類を片手に白露姉妹、飛鷹隼鷹ペア、そしてちよこんと座る、今回の強盗事件の一番の功労者である三日月の道楽に付き合っていた。

「わ、私はなにも……」

「そうやって謙遜しなくてもいいよ、僕と姉さん、そして三日月の手柄なんだから」

「俺も入ってくるよっ」

「そうだよ三日月！ いつもは私がいっちばーん早く行動するのに、三日月の素早さには敵わなかったなあ」

「凄いいっぱい！ 時雨と白露と三日月凄いいっぱい！」

「い、いいえそんな！」

「俺もいるよっ」

「穴戸くんウザい」

「うん知ってる。でもたしかにね？ 三日月がいたのはすつごく助

かったけど、到着まで俺が犯人と会話を伸ばしていた功績も少しは触

れていいと思うんだ……なのになんだこの記事はアツ!? 明らかに俺の名前だけハブいて、まるで俺がこの世に存在していないみたいじゃないかア!? え、もしかして……俺、忘れられてる!? 君と前前前……」

「分かった、落ち着いて春雨の膝にでもモテない男の人みたいに情けなくすがりつてようね〜」

「うう〜! 春雨ままあ〜!」

「よお〜しよしっ! いい子いい子ですよ〜っ、ふふふっ!」

「あ、やっぱやめてキモい」

自分からやれと言っておいてキモいとは何事……と思いつつも離れてしまうのは、みんながゴミを見る目で俺を見ていたからに他ならない。

これぞ同調圧力。ある意味では真の民主主義と言えるかもしれない。夕立ちちゃんなどはお得意の“ぽい”を付けず、シンプルに「キモ……」と口ずさんだ事が俺の心臓をエグった。

しかし一番鋭く突き刺さったのは、眉毛を歪めながら見下ろす村雨ちゃんの眼光である。

「……何やってるんですかこんなところでツ?」

「む、村雨ちゃん……いや、いや、執務しながらでもいいから時雨たちの休憩に付き合っつてって言われて……」

「え? 穴戸くんがハーレムを味わいたいって自分から入ってきたんじゃないの?」

「し、し、ど、さんツ?」

「はははっ……俺に罪はないのに……ちゃんと仕事もしてたのに……ひぐっ」

「さ、流石に可哀想です! 五月雨たちがここに呼んだんです! 本当です!」

「ていとくう〜……とりあえず、一杯いつとこ?」

「うんありがとう隼鷹……ヴォエツ!! 何だこれ水じゃねエじゃんか!?! マッズ!!」

「今あたしの酒不味いつて言った?」

「っ!? いやそんなわけないでしょ? 香ばしい米の甘みと、何より磯の香り漂う一杯……中国の海の守護神、MAZUに敬礼したくなっ
てしまっただね」

「そ、そうなんだ」

若干引き気味の隼鷹。数秒前に唐突に立ち上がりガチで俺を殺そうとしていた雰囲気を出した人には見えないが、死を逃れられたので良しとしよう。

ちなみに媽祖(まさ)、あるいはマーズーは漁業の守護神であり海ではないという細かい設定があるらしいのだが、無神論者である俺にとっては海関連の神様は覚えやすいように一つに統合してしまえと思うし、隼鷹を含めた艦娘たちは名前すら知らなかった様子だ。

「それより穴戸さん、もう時間ですから、お出かけの支度をお願いしますっ」

「あ、もうか……いやあ、楽しみだなあ!」

「新しい提督に会うのが?」

「それはちよつと不謹慎では……」

「三日月、この世には不謹慎であつても不謹慎をされるに値する人間がいるって事だ……まどろっこしい言い方をしなければ、どうでもいい! あの提督が出て行ってくれてホントサンクスブルグウツ!」

「よほど嫌いだったんだね、分かるよ〜!」

白露さんがウンウンと頷き、その他の全員が呆れた表情と戸惑いを見せる中、俺は一週間前にももらった朗報と、それに伴って行われ、現在ニュースとして流されている佐世保方面総司令官、及び佐世保第一鎮守府司令長官交代式の映像にニヤケ顔を見せていた。

提督は停限年齢を越すとともに退官し、誕生日おめでとうと共に士官らに祝われながら鎮守府を離れていく。

理想としては蘇我提督、赤城提督、或いは佐世保鎮守府参謀長辺りを入れてほしかったが、流石に叶わず、交代して来た提督は艦隊指揮の経験がある元横須賀鎮守府参謀長が参られた。

その新・佐世保鎮守府の提督となる蒲生中将は、勇敢で、ナシヨナリストで、斎藤長官と互角の裁量の持ち主という三拍子揃った提督である。また、現海軍大臣の同期であるとも聞いたので、提督としては申し分ないだろう。

俺が現在佐世保の廊下を村雨ちゃんと共に踏んでいる事実を見れば分かるだろうが、これは作戦会議の為である。

「村雨ちゃんの前だから言うけど……これで会議何度目ッ!? ダルすぎィー!」

「さつきまでウキウキしてたじゃないですかあ……」

「それでも流石に通い続けた会議には、一定の時期から出席したく無くなるモンなんだ。それによくあるでしょ? 来る前は好調だったのに、目的地に着いた途端ダルくなる現象」

「問題 *nothing* よシールド! 私が付いているんだもの!」

「アイオワさんは会議に出席できないじゃないですか……あと村雨ちゃんに抱きつきながら歩くのやめてもらえませんかね!? 俺だつてそんな羨ましいことした事ないのにイ!!」

「あ、あるじゃないですかあ!」

「え、あるの? 流石に *me* でも引くわ……」

やってる本人のセリフじゃねえ。

アイオワさんは柱島の所属だと言うことは知つての通りだが、柱島の使者としてここに遣わされたらしい。推測だと柱島泊地が大規模作戦で何らかの役目をするのか、あるいは一部艦隊を引き抜いて戦わせる時の為に調整を行いに来たのか、何れにしても今会議には出席しない。

そのアイオワさんは会議室の前で会った海外士官たちに連れて行かれ、残った海外士官の数人、そして村雨ちゃんと共に会議室の中に入っていく。

これで三度目だが、できれば警備府か佐世保まで来る手間を省かせ

てもらいたい。ガソリン代だってタダじゃないんだぞ。

中心となる異様な空気を放つ鎮守府の新しい提督と赤城提督が居座る席から、数席ほど離して座る。特に座る場所が決まってるわけじゃないんだが、事実上は序列によってある程度決まっているという暗黙の了解がある。有り体に言えば、序列順に座っていけば問題ない。

昔は……いや、今でも統治者によって司令官レベルの人以外は立たないといけないため、秘書艦は長い会議を直立不動の体勢でいなきやいけなかったが、他の秘書艦達が座ってるのを見る限り、そういう事に厳しい人ではなさそうだ。

数分の内に全員席に座った所を見て口火を切る提督が立ち上がる。

「着任式でも見た顔ぶればかりだが、私は佐世保鎮守府を任された以上は最善を尽くすことを期待されている。この佐世保鎮守府を主導とした沖繩奪還作戦を最良の形で終わらせたいと思っている」

面倒くさくて固っ苦しい挨拶だけは前の提督の方が短かくて良かったと思いつつも、協議している内容は既に話し合った作戦計画概要のリフレーションである。

村雨ちゃんがアクビをかきそうになったり、居眠りしそうになったりする司令官連中や、この後の予定を計画したり、この後の予定としてお茶に連れ出そうとする結城司令官とやんわか断る赤城提督など、前の提督と協議した時よりあまり変わらない様子だが、少なくとも提督本人はやる気満タンらしい。

意外にもあまり時間は経っておらず、ものの30分で話は済んだが、結果として作戦立案までは至らなかった。

「大丈夫村雨ちゃん？ 疲れてない？」

「はいっ、大丈夫ですっ！」

「とか言っつて、こんなに凝ってるじゃん」

「にやあ……！ な、何をするんですかっ！ もうっ……！」

まんざらでもなさそうな顔で「最近いじわるしすぎですう……っ」と頬をふくらませた。

クソ……！ このお！ クソオツ！ この駆逐艦……駆逐艦ツ……のお

分際でエツ！エロオ!!オカスウ!!

「やっぱり仲がいいですねっ、羨ましいです」

「ん？ イケメンさんもゴトランドさんとかいう美人と一緒にじゃないですかア……？ ナメてんじやねえぞベリングハム少佐ア!!」

「は、ハッ！ my apologie s!」

「あはは……」

「ん？ 呼んだか穴戸!？」

「イケメンさんと言ったが貴官ではないぞ結城司令官。というより、イケメンって言って反応するの腹立つな。俺の権限で左遷してやろうか?」

「できれば美女が多い所をお願い……プリーズ？ ズ？ ズウ!」

ウインクしながら近づくな男性器。

他の士官たちが立ち上がる中、俺たちも一緒に立ち上がって会議室を去ろうとした時だった。

「あ、今から指定する士官らは少し待ってくれ。少し話がある」

「へ?」

俺と同じ擬音を発した者は多く、これから村雨ちゃんと楽しいドライブで警備府に帰るところだったのに、まさかのウェイトアミニツト。

指定されたのは合計で十人に満たないが、高級士官ばかりであり、提督クラスが大きな割合を占めるが、それ以外は一部の司令官という、正に幕僚会議の構成員。

無論、俺も当てられた。

「村雨ちゃん、悪いけど待っていてくれる?」

「はい、待ってますっ!」

「この隣にいるイケメンクソチ○ポダケじゃなくて、他に全身男性器な雄が居ても、絶対に目移りしないでね?俺の方が漢前だし、村雨ちゃんの事をよく知ってるし、どうせイケメン野郎なんて行く手数多過ぎて女の子を食べ物としか思っていないうんちだからね?」

「わ、分かっていますからあ!」

独占欲を見せる俺はみんなにどう見えたかなんて言われなくても

分かる。だが、たとえ他の秘書艦たちにジト目を向けられたとしても、司令官連中の変な噂が立とうとも、村雨ちゃんを守れるのは俺しかない。

手を小さく振って出ていく村雨ちゃんを目尻に、再び椅子に鎮座する。

が、あの性転換したオイゲン風爽やかGaijinイケメンと、村雨ちゃんとの距離が妙に近かったのが気になって、俺の特技である地獄耳を発動させた。出ていく間はしばらくドアが開いているので、閉じられるまで出来る限り言葉を拾い上げる。

ここにはイケメンが多く、女性の餌は彼だけではない……海軍イケメン部隊つてのは宣伝になるし、外人もいるともなれば何かと顔を比較して、それからチ○ポの味も比較したがるものだ。

もちろん村雨がそんなヤリチンにナビくような真似はしないだろうが、それでも心配しちゃうのが漢である。

『……私と……しませんか？……』

『……はいー……』

『……彼に……もちろん内緒……お願いします……』

——。

——俺——立ち直れる強い子だって——知ってるけど——少なくとも——この会議中は——死んでると思う。

「……貴様らには、あの件について話しておかないとならない。佐世保鎮守府、ひいては佐世保方面を任せられた身として、そして沖縄奪還作戦の結末を、最善の結果として残すために」

「あの件……とは？」

「なんだ、貴様らなら既に予測しているとは思っていたのだが……誰も理解していないのか？ 沖縄奪還作戦における問題を」

「「……………」」

……あのベリングハム少佐ア。

「沖縄奪還の戦略的な意図を理解してもらわなければ困るぞ貴様ら？」

それに、私は最善と言った……佐世保鎮守府や他の警備府にある現状を見れば、分かるのではないか？」

「……………」

「赤城提督は？その他の提督は？」

「……………すいません、分かりません」

「……………」

「……………まあ、軍令部海軍省から何がきたというわけではないんだが、将官になった以上はある程度政治、戦略における視野を広めてもらいたいものだ……前線の龍たる穴戸司令官などは、この問題にお気づきな？」

外人イケメン士官は他にもいるから、あのG A I J I Nディックヘッドだけじゃない……クソオ。

「……………あの海外士官共めエツ……」

「「っ!？」」

「ほう……穴戸司令官は、どうやらこの誰よりもこの問題にお気づきだった様子だな。そうだ、海外士官及び外国艦は、現在最も心配すべき問題だ。沖繩にある海軍基地が米国が作ったモノである以上、奪還の前に放棄を宣言させる必要があるのは、政治上の話だ」

今佐世保にいるイケメンチ○ポG A I J I Nは合計で20人以上。艦娘はそれ以上に多い……アメリカ艦も、海軍士官もほぼアメリカ人が占めているし、性に奔放な奴らはドラッグマーチでしか満足できない（偏見）。

心配心配心配心配中心中心中心中。

「だが基地を放棄させ、奪還したからと言って我らの手に安々と収まるわけではない。その状況を作り出しているのが、主にアメリカ人で構成されている海外士官と、外国艦だ。現在、数人の海外士官らは「自分たちなら基地の勝手を知っている」と危険を伴う沖繩での駐屯を志願している状況にあり、柱島の外国艦は積極的な支援を願い出ている上、大々的に米国は海軍基地としての沖繩奪還を公表している……それを達成するために送られてきた海外士官やアメリカからの外国艦が、今作戦に参加してしまつたら……詰まるところなんだが、穴戸

司令官は、もうお分かりかな？」

やるってなに？

カフェでその小さなお口でコーヒーを啜る村雨ちゃんの前に、三人のイケメン系デカチ○ポG A I J I N。「そのコーヒー、クリームが足りてないんじゃないですか？僕たちでよければ、極上の一杯を味わわせてあげますよ？」「は、はいっ！」。

なんてことになったら俺殺人事件起こすかも。

いや、もう起こしそうウ……ッ！

「外人武官は排除しなければ……」

「は、排除とまではいかないが、ウム……宍戸司令官の言ったことは大体合っている。今大規模作戦の決行に当たり、我々としては海外士官及び外国艦の参加をご遠慮願う方針で行きたいと思う。アメリカ士官と日本艦隊による合同作戦……最悪、米国の手助けなしでは奪還し得なかった、などとプロパガンダを巻き散らかされたのでは、未だに国勢に弱い風潮のある我が国は押され負けしてしまう」

「そ、それは流石に差別に当たるのでは……」

「我々は彼らを海軍の一役員として置くに当たり、当然ながら怪我を負わせるわけにはいかない。彼らには安全を期してもらおう……増してや国土復興などという民族視点からの、作戦で万が一があればそれこそ国際問題にも成りかねん。その建前がある以上は、無理をしても、辛うじて出しゃばりを抑えられるだろう。理想としては、佐世保方面の海外士官を何処かへと異動させるのがいいんだが、最悪は閑職に付ける必要がある。柱島に至っては、彼ら自体の参加を遠慮願う。元々軍令部からは使ってもいいと言われているが、強要はされていない」

「それを彼らに直接言うのは……」

「聡明な赤城提督ならばご理解頂けるだろうが、無論これはここにいる士官だけに留め、他言無用に願う……特に宍戸司令官は、参謀長として外国艦を指定している様子だが……ドイツ生まれとはいえ、無用な誤解を招かぬためにも、私の言いたい事は分かるね？」

村雨ちゃんハア……！

村雨ちゃんはねエ……!? 俺という、日本

人おチ○ポで、貫かれなくちゃいけないんだおオツ!?

「日本人のお……日本人の手でえエエエ!!!」

「そうだッ！ そのイキだ穴戸司令官！」

「え、な、なんスカ……?」

気づけばなんか肩を叩かれてた。

「どうやら私は君を誤解していた様だよ！ 最初は若さにイキった武
辺者かと思っていたが、ちゃんと海軍士官としての素質を持っている
と見つけたッ！ いやあ、噂というのは何とも頼りない！ その調子
で頼むぞ穴戸大佐！」

「え、あ、ハッ！ 提督のご期待に添える様、尽力致します！」

「ハハハハハア！」

何笑ってんだこの提督？

警備府の屋上でMIKKAI

前回の会議のあらずじ!

俺は全然聞いてなかったけど、要するに沖縄作戦の前提が「日本人の、日本人による、日本人のための作戦」となったらしい。

概要としては、GAIJINはこの作戦に参加できない。つまりアイオワさんが来てたのも無駄足だったのだ!

警備府の屋上。

蒼天がテーブルを熱し、太陽光と海からくる温度の下がった微風がゆらりくらりと秋の静けさを物語るこの頃。

亀甲縛りとなっている外人男性士官と、それに付き添って来た海外艦のゴトランドさんとタシユケントさん、及び警備府の構成員がドン引きした様子を見せながら、外国人イケメンチ○ポにも劣らない司令官が事の重大性を説いていた。

「という事らしいんだ。概要は改めて仲のいい第二鎮守府の参謀長さんから直接聞いた」

「ご報告ありがとうございます……でも、本当に私達に話しても良かったんですか? 内容もそうですが、直接提督から話すと言われていたのでしょう?」

「もちろんゴトランドさん達には話しておくよ。海外士官のみんなとの交友に大きなインパクトを与える出来事だし、何より君たちなら信頼できると思ったんだ」

「ありがとうね同志っ!」

「Thank you admiral……」

ゴトランドさんやタシユケントさんはロシアとスウェーデンだからあまり関係ないとは思ったけど、特に仲の良くなったのが、いつにも増してしょんぼりしているガンビアベイと、亀甲縛りになってるベリングハム少佐の四人で、口が固そうだったからと言う理由もある。

この屋上という天然の密室でこんな話を話すからには、当然俺が呼び出した……かに思われるのだろうが、休暇なので遊びに来たらしい。

「ベリンググハム少佐、始末されるほどのことではないにしろ、状況はお分かりかな？」

「は、はい……というより、何故私は縛られているのですかC p t . S h i d o ! ? 私が何か粗相を」

「黙れ、天使を誑かした悪魔め」

「穴戸さん！ 違うんです！」

男性の性にこれでもかと暴悪な胸をくつつけて誤解だと説こうとする村雨ちゃんの後ろには、時雨と白露さん、それにオイゲンさんが可哀想な生き物を見る目でこちらを見ていた。

「穴戸くん！ 良いから村雨ちゃんの話聞いてあげて！」

「分かりました白露さん……村雨ちゃん30秒以内に簡潔に説明できる？ 俺が聞いた会話についての説明。簡潔に説明できないと俺アタマおかしくなっちゃうから」

「もうおかしくなってる……ブフツ！」

「時雨大尉、旧知の仲であるとはいえ、そのような事を司令官に言っただけじゃないよ？」

班長さんの言うとおりでぞ。

と、俺は亀甲縛りで息を荒げているベリンググハム少佐から距離を置き、聞こえないように村雨ちゃんが教えてくれた。

少佐が「ま、待ってくれ!!」と叫んでいるが、村雨ちゃんは一礼しただけだった。どうやら本当の事を話すのでごめんなさいという意味だろう。耳に甘い息がかかる。

「じ、実は……穴戸さんの好みを聞かれました……」

「は？ なんて俺の好み？ はいあと23秒ね」

穴戸くんってヤンデレの素質あるかも、と時雨が呟いたが、これはメンヘラだぞ。あ、自分で思ってた恥ずかしくなったわ。

「そ、その……ひ、一目惚れされたらしくて、その、何が好きかとか、色々……」

「……………」

俺は後ろを振り向いて少佐を見た。

『キャプテン……はあ……はあ……』

『エイジャックスさん、彼はその……諦めた方が』
『い、いや、何を諦めるだつて？　べ、別に私は彼に近付こうなどと……など……』

「あのゴトランドさんが持つてるのつて、多分穴戸さんへのお土産だと思えます……」

F○c k。

「……分かった、俺信じるけど、もしも嘘だつてバレたら、警備府にある艦船に乗って単独で沖繩に救国無双してくるから」

「できるんだつたらすればいいのに……ブフツ！」

「玉碎宣言だよつ。つかさつきから何笑つてのかな時雨ちゃんは？」

村雨ちゃんのおマタを今すぐにも開いて確認したいつていうのに、紳士な俺は確実的な方法を取らずに、信じるつて言つたんだよ？

俺、英国紳士に負けない超絶紳士だと思うけど？」

「紳士の定義、壊れちゃつたね」

クソオ！

とやりようのない咆哮を発しながら、戻つてベリングハム少佐を開放する。

「ごほんツ……Ms. Murasame。Commaederには」

「え？　あ、はい、大丈夫です、全然何も言つてないです。ひゅ〜ひゅひゅ〜」

明らかに怪しき満点のまま口笛を吹く村雨ちゃん。

「いやごめんね少佐。俺てつきり村雨ちゃんとお近づきになつたと思つて嫉妬しちゃつてね」

「い、いいえ、誤解が解けたようで何よりです。ああそうそう、これは私からのお土産です……Mr. Shishido個人への、ね」

と、ゴトランドさんが持つてた袋を俺に渡して来た少佐。

中身は……何かの映画のようだ。

タイトルは、Mother F○cker！　〜母と子のヒトトキのヤマチ〜。なるほど、シリーズ物なのか……あと、巨乳秘書との禁断会議つてのも入つてる。

なるほどなるほど。

「村雨ちゃん？ 少佐になんて言ったの？ 確かに俺が好きそうなモノは入ってはいる。でも普通に聞かれて話すような内容じゃないよね？」

「なア!? やっぱりあの事を話したんですか!? M s . M u r a s a m e ! ? 」

「ご、ごめんなさい……」

しよぼんとする村雨ちゃんとベリンググハム少佐の秘めたる想いを辱めないために「俺や警備府との交流を深めたいんだな」と付け加えた。

ゴトランドさんは分かっているような素振りを見せ微笑んでいるが、タシユケントさんは頭を傾げる辺り、あまりに複雑なこの状況が理解できていない様子だ。

とりあえず、と言わんばかりに手を叩いて、イケメンホモとのオチカズキの云々よりも、より重大な課題である海外士官の参加規制についての話題を始める時雨。

「穴戸提督の話を聞いて分かったことは二つ。一つは沖縄なんちゃらはとつてもレイシストな作戦で、もう一つは周知されたくない秘密を穴戸くんには絶対に話しちゃいけない事かな。他言無用とか言われやすく話す穴戸くんは信用ならないからね」

「少なくともオイゲンさんには話しとく必要あるだろうがア!? 逆に話さなかったらオイゲンさんの事を信用していないってエ事になるだろうがよオ! ? 」

「話してくれてありがとうンシード……」

何時もながら可愛らしい笑顔を見せるオイゲンさんが、それに反して今日はどんよりした気分になっていた事を知り、時雨と白露さんは押し黙った。ガンビアベイと同じような立ち位置にはいないものの、やはりショックを受けている様子だ。

「まあでも、丁度話すタイミングが良くて助かったよみんな……と言いたいところだけど、なでみんなここにいるの? 」

「ガンビアベイの様子を見に来たんですっ」

「そうそう！ Gambier Bayはオドオドしてるからどうしてるのかと思っただけど、貴方のunderにいるなら安全ねっ！」

「まだ九州にいるんですかアイオワさん……」

「ひどい言われようね!! Meのこと嫌い!!」

「いや、そういうわけじゃなくてですね？ ハア……勝手に入ってきたり出ていったりどいつもこいつもオ……軍の規律をなんだと思ってるんだ？」

「宍戸くん、今世紀いっちばーん！ のブーメラーン！」

「まあまあ……無論、見に来たのはガンビアだけじゃなく、Captainの様子もですが。」

「お、おう、流石だな少佐。こんな大事に対してもドツシリと構えている」

「もちろんですよ。しかし素敵な人を見つけると、少しだけ体勢が緩くなってしまうんですよ。」

熱帯光線並に熱いイケメンの視線に、つい目を逸らしてしまうノーマルな俺。

屋上への見張りをしていた班長が白露さんと入れ替わりながら、輪に入ってくる。

「班長さん、この海外士官らの状況についてはどう思いますか？」

「ふむ……」組織を過分ながら束ねさせて頂いているとはいえ、整班からこのような知恵勝負への具申意見などは、司令官のご一考の妨げにしかならないと思いますが……」

「と、とんでもありません!! い、色々と妨げているのは俺の性別です！」

「ん？」

ベリングハム少佐が何かに気づき、恨めしそうな顔で班長を睨みつけた。おい、班長はオレのものだぞ。

その異様な空気を嗅ぎつけた時雨がハンドサインで、

三角 関係 やめろ

だってよ。

は？ 三角関係？ おいおい俺たちは男だぞ何言ってた時雨。

もちろんこの空気に気づくのは俺たちだけでなく、アイオワさんやゴトランドさん、ベイまでもがジト目を向けてくる。この視線はアレだ、こんな男のドコがいいんだ？みたいな目だ。

モテる漢は辛いぜえ……モテる対象がズレてると地獄だぜ。

と心で呟きながら、屋上に設置されたプラスチック製の安いが広いテーブルに腰掛けた。太陽光と光合成しながら優雅なティータイムとはこの事か、と言わしめる状況。美男美女の立ち振る舞いは絵になり、俺の場違い感が半端ない。

用意されたお茶は自動販売機産で紙コップすらないが、それでも絵になる外国人の皆様。

「オイゲンさんビスケット食べる？」

「うん、食べる！」

「私のもいかがですか？」

「うん！食べ……あ、やっぱりいいや」

「なんでですかあ!? スウエーデンでは好評なんですよツ!!」

ゴトランドさんの手の平には缶詰が……スウエーデン……缶詰……あ、やばいやツだ。

「シユールストレミングじゃないですよ!! 普通の缶詰です!!」

そう言つて細い手で缶詰を勢いよく開ける缶詰に、全員が回避行動を取ったが、地に伏せてから数十秒、悪臭はない。よく缶をみるとブレンス・ピルスネルなんちゃらかんちゃらと書いてあり、中身はただのソーセージのようだ。

流石にソーセージを否定できる血統に生まれていないオイゲンさんは、小さいお口でカプリとソーセージを啜えた。

美味しいものを食べて笑顔を取り戻すと、オイゲンさんは早速本題に入る。

「改めて総括すると、私みたいな外国人は絶対に参加できないんだよね？私、どうなっちゃうんだろ……？」

「いいじゃん別に、仕事が楽で」

「Eugenがそうでも、私達は……」

言いにくそうに少佐とアイオワさんを見るガンビアベイ。

アイオワさんはあまり気にしている様子はなくコーラの三本目を開けていたが、ベリングラム少佐は飲んでいた缶コーヒーを一気飲みし、覚悟を決めたような表情を浮かべて口を開いた。

「実は……我々の方でも、沖縄作戦を支援するようにと言われているのです」

「それってアメリカでの上官的なヤツ？ 海外士官とはいえ、日本の管轄に入っている以上は日本のオフィサーとして、現地の上官の人事に従わなきゃいけないんじゃないの？」

「だから驚いているのです」

なるほど、言質を取って論理的に考えるとつまり、コイツ等が沖縄作戦に参加できるようにアメリカ本国側から日本海軍の上層部への根回しを行っていた事が予想できる。

でも状況を考えるにそれは成功しなかったのか、日本海軍の謀略デイフエンダーが効いているのか、アメリカ側の単なるミスなのか、あるいは……何れにしても、俺は陰謀とか謀略とか策謀とかを好むタイプではないので、そういう汚い事にはノータッチな公明正大系提督を貫こう。

「うん、まあでもね、その……色々と、頑張つてね？」

「え、ここまで話しておいて丸投げなの!? 同志としてそれはどうかと思うなっ！」

「す、すいませんタシケントさん……でもですね、話した理由そのものは、提供した情報を利用してうまく立ち回れるようにさせる為なんです」

「そうですよタシケント？ こんな事を我が身顧みず話してくださいました穴戸提督に感謝しなくては」

「うう、そうだったね……ごめんね、同志っ？」

申し訳なさそうに上目遣いで謝ってくるエチエチボディー外国人美女を見ると「オラア許さねえぞ孕めエツ!!」ってしたくなるのはなぜだろうか？

「それに、Capt. Shishidoは素晴らしい方です。話してくれたからには、我々は同じ秘密を共有するナカマ♂……できる限りの

サポートは、して頂けるのでしょうか?」

妙に厚くて、暑くて、熱いクリスタルブルー色の目線を除けば、自分と仲間の保身の為にちゃんと逃げ口、及び協力者の存在を確認する辺りは流石だ。

「ああもちろんだ、俺のできる限りはしてやる」

「助かります……Captain」

ベリングハム少佐は腰を上げ、男のくせに艶がかった肌と髪をこれでもかと寄せてくる。

ウホッ、いい男。

流石にこの行動が異様に見えたのか、村雨ちゃんが膨れ面をしている。時雨と白露さん以外の全員はHuh?と口を揃えて男子同士の見つめあいを意義を見いだせていない様子だ。

手に触られようとした瞬間、咄嗟に時雨の後ろに隠れる。時雨の甘いシャンプールの匂いを堪能しながら、会話を繋げようと口から言葉を絞り出した。

「ま、まあ流石に!? 提督に直談判して口論を広げたり、上官部下の間にある言質の不平等性がムカつくからって、10月革命を起こしたりはできないけどさ!? うん!」

「呼んだか?」

「「うわお!」」

「「きゃあああああああっ!!!」」

警備府の屋上でMIKKAI2

警備府屋上。

振り向くと、そこのはブリテイツシユパイプを啜えながら煙を燻らすガングートさんがいた。女性のように叫んだ男性陣の班長、少佐、俺に反して、女性陣は、うお！ と薄い反応を示した。

なぜこんな所にいるのか？ と問い詰めた所だったが、外国人に比率が多いせいとか、自然と輪に溶け込んでしまっている上、アイオワさんが驚いている様子を見せていないので、多分アイオワさんの付き添いであると仮定した。

「おいおい失礼な奴らだな？ そんなに驚くことはないだろう。それとも、何か内緒話でも……って、そこにいるのはプリンツじゃないか！ こんなところに居たとは、久しぶりだなあ！」

「久しぶりだねガングート！ 私の事はオイゲンって呼んでほしいんだけど……」

「あツ？ なんだとドイツ人？ では私もオクチャブリスカヤレヴォリユーツイヤと呼んでもらおうか。ガングートでもオクレヴォオでも私には変わりないが、一応後者が正式なんぞな」

「おいおいオクレヴォオって……自分で略しちやってるじゃん。この際だからプリンと GANG でいいじゃん」

「良くないツツ!!」

名前にとことんこだわりを見せるロシア艦とドイツ艦の圧に押し負けして黙り込むが、代わりに傍観していた人が口を開いた。

「同志ГАНГУТ！ урааааааа！」

「同志Ташкент！ урааааааа！」

誰も理解できないような挨拶（ハンドシェイク）を約20秒間に渡るコンボで交わしたタシケントさんと GANG さんは恐らく面識があるんだらう。発音もネイティブで、実にロシア的だが、なんでガングートさんここにいるの？

あと警備府禁煙なんだけど。

「同志 GANG だって名前いいと思うよ！ 呼びやすく好きだなっ」

「同志 Та шке нт にそう言われるのは悪い気はしないな。とても Хорошоだ」

とてもハラシヨード……警備府の流行語にしよう。

「ドイツ語でも道って意味だし、日本人の名前にもいっぱい道って名前の付く人がいるんだよ！ 道三とか従道とか！」

「その名前同列に並べないでもらえませんか？ 前者はゴミクズで後者は一応我らが栄光なる海軍元帥なんで」

「でも GANG だって確か日本語では玩具……つまり、GANG ートはおもちゃって事に……ぷふっ！」

「何!? シシード貴様ア!! 私を侮辱する気かア!!」

ゴトランドさんの吹き出してしまった！ と焦ったお顔が実に可愛らしかった。その反面、GANG ートさんは童顔に似合わず鋭い剣幕と般若形相を浮かべている。

昔の俺ならおしっこモノだが、GANG ートさんが逆レモノに出てる。じっくりシヨタの性通を指導するお姉さん教官。だと思いつめば問題ない。

「お、おちついてがんぐーとさん！ ぼく、そんなにおこられたら、おしっこもらしちゃうよ……！」

「何を言ってるんだ貴様は気色が悪いぞ」

「はあ!? 今の俺かわいいでしょッ!! 迫真の演技に、一同驚愕！」

若手俳優雑誌の表紙を飾るのはなんと、現役の海軍軍人!? 可愛いおとこのこおの演技からダンディズム溢れすぎて通り際の女に洪水を吹かす都市伝説も満載のあの人が降臨！ あれ、俺って最強だった……っ。」

「うわきも、提督きも、キモっ……」

「なんとでも言え、暴言と妄想なしではやっていけないこの苦痛を知らない美少女め」

「お褒めの言葉は素直に受け取ってくけどっ」

ふん、嬉しそうにしゃがって。

「若手俳優雑誌といえば、少佐も確か載ってたような……」

「あはは、頼まれたのでやっただけなのですが、まさか表紙を飾られるとは……」

「同志は明日も撮影に呼ばれてるんだよねっ！ いいなあ〜」

こいつ殴りたい。というかタシユケントさんにとっては全人類同志なのか。

「まあ茶番はそれぐらいにして……どうしたんだこんな所で？ アイオワも参加している催しには参加するようにと提督から言われているんだが……」

「は、はい、実は」

「Okina wa の作戦について話していたのよ！」

「「ツッ!」」

秘密にしておけと言ったのに口を饒舌になるアイオワさんに、驚きを隠せないみんな。

なるほど、アイオワさんは、ここだけの、秘密、という、明確に、発言された、ルールを、理解していなかった、様子だ。

正しい時に、正しい言葉を、正しく使おう。

フア○クツツ!!!

彼女の所属する柱島の提督である荒木提督にこっそりと教えてもらおうかと思っただけだが、彼女が帰り次第、海軍全域に広まりそう。俺終わった。

「あの小さな島のか？」

「そう！ みんながその作戦について考えてたから、私も情報交換していたのよ！」

「なるほど」

と思っただけ、アイオワさんはある程度の常識を弁えている様子だ。後にオイゲンさんから聞く話では、あの爆乳米人は一応彼女の所属である柱島泊地の中でも常識人に当たるとらしい。

俺が思ってた以上に柱島泊地はヤバイ状況になってるんだな……戦力的な意味で作戦に参加させるべきなんだろうけど、どうすっかなアイオワ軍。と、丁度思考を巡らせている間に、ポケットにあるケータイが振動したので、少し席を外す。

「……それにしても、出撃で本土より遠くに出るなんてこれで二度目だよもう……」

「あのOperation八号の時の、ですか……Lt. Shigu re、並びにS Lt. MurasameとLCdr. Shiratsuyuは今でも名高いです。この作戦では、名誉ある先鋒を任される事でしょう……まあ、私が参加するかは分からないのですが、参加できないと明記された場合は、陰ながら武運を祈っております」

「ありがとうございます！ まあ大規模作戦なんて白露パンチでチヨチヨイのチヨイ！」

「白露のパンチって海とか割るの？」

「え？ さ、流石にそれはないかな？あはは！ あ、でもなんかできそうな気がしてきたっ！ 私にかかれば島を沈めちゃうかもね！」

「ムー大陸みたいになっちゃうんだね同志！」

「よ、なんの話？」

「白露姉さんが拳一つで島を奪還するんだって」

「そうか、じゃあ頑張ってください」

「はあ!? もっとWOW！ みたいなリアクションあってもいいでしょ!? 髪の毛引きちぎるよ!」

リアクションを取らなかつただけでハゲにされる俺を誰か可哀想と思え。

「そっちは誰からだったの？」

「陸軍の連隊長さん。支援への礼と、挨拶したいから基地に寄って行って、ってな」

「僭越ながら穴戸司令官。陸軍へ支離的な感情を抱いているわけではありませんが、曲がりなりにも援助を施した我々に対し挨拶がしたいから足を運べと言うのは、些か礼に欠く言い様かと……」

「い、いい班長！ 俺の方が年下ですし、俺もあんな太つちよ豚に尻的な感情なんて抱いていませんっ！」

仮にも、そして軍が違うとはいえ同格の連隊長さんに対して豚という言葉を使う俺はさぞかし異様に見えたんだろう。俺をあまり知らないガイジンは目を見開いてる。

「それで宍戸くん、そのイベリコ豚さんの所にはいつ行くの？」

「難聴なのかワザトなのか知らねえけど、ただでさえ酷い俺の発言を更に酷くするのはやめろ。外回りが必要になった時にでも行く」

「え、日には指定されなかったんですか？」

「いつでも気軽に来ていいって言われたから、俺の都合にあわせていく。スケジュールが滞る場合は休日使って行くしかないけどさ……」

「ニポーンのArmyはSo niceね！ 仲が悪いって聞いたけど、やっぱりただの噂だったようね！」

「いや、今でも悪いらしいぞ。この前に立ち寄ったタバコの店で偶然鉢合わせしたんだが、私が艦娘だと分かると“ベツピンなのにガンナエ”らしい」

「あ、私もそんなのあった！ ほら、呉鎮守府で提督と一緒におつかいした時に、なんかナンパしてきた人を追っ払ったら、海軍ガー！ っとなったの」

柱島組のオイゲンさん達の話題を耳にするに、海軍と陸軍の仲は地域でも差が出るらしい。話を聞く限り呉鎮守府辺りのナカヨシ指数は低そう。提督の話をしているっぽいんだが、提督とはもちろん俺ではなく柱島提督の事である。

そういえばもう俺、あの人と同格なんだっけ？ 昇進してなかったらの話だけど、今度あったら柱島にいた時の文句全部ぶつけてやる。権力者のご子息だからってチョーシ乗ってる奴にはオシオキピーポーマックスだぜ。

「そんな状況で、実は腕力方面では有能だった柱島提督が、一発おみまい！ ってか？」

「あのおときはたしかmeが倒したわね！ Cheesy bastards なんてコテンパンよ！」

さらっと国際問題事案だが、アイオワさんみたいな美人に殴られるなんて光栄だと解釈できれば悪くないか。俺は絶対に嫌だけど。そういうえば戦艦のパンチって受けたことないな……絶対死ぬ。

「女の子を守れなかったのか……じゃあ無能なんだな」

「二なんだと殺すぞニホンジンツ!!」

柱島三外人が一斉に口を揃えて俺に劍幕を浴びせた。殺気が尿意を掻き立てる中、尿路と肛門を必死に締め付けて漏らすのを防ぐ俺。やっぱり人望はあるんだな……と樂觀視してはだめだ、軍閥化の恐れがあるぞ柱島。つかこんなエロい三人に懐かれてるとか羨ま死。それほどイケメンでもねえくせによオあの野郎ッ。

外人率の高いこの場では、なんだかんだで作戦についての立ち回りを話し合っている人が多い。特に外国艦の参戦を拒否する件については、別に問題はないと思っっている。

正直、長い目で考えれば島の利権なんてのは歴史的に見ても立地的に見ても俺たちの物なんだし、どうこう焦る必要性は皆無である……というのが、俺の解釈だが、もちろんそれで作戦と総司令官こと佐世保鎮守府司令長官の意向が変わるわけでもないんだし。

一応海外士官には重要なことなのでまだまだ話し合いは続きそうだが、そんな中でまた電話が鳴る。

時雨達を含めて、みんな俺の電話に気づいてない様子だったので、今度は席を立たずに応えた。

「はいもしもし」

『私だ』

「あッ？ 誰だよ？」

「え、また電話掛かってきたの？ 宍戸くんはモテるな〜っ！ 主に男の人に！」

「そういう冗談やめてもらえませんかね白露さん。世の中にはガチで俺のケツ狙ってる人だっているんですよ？ 本来出すモノにイレタイとかやばいでしょ」

「べ、別に、小官はそのような事♂」

「少佐、貴様の話題を出した覚えはない。慎めエツ!!」

「は、はいいい♂ー!」

「いいの？ もし偉い人だったら今すぐく失礼なことしてるけど」

「ハア!? どんな偉い人が俺のパーソナル番号にかけてくるってんだよ？ そんな偉い人とお知り合いな

覚えなないんですけどお〜？」

『ごちら斉藤だ。返事を頼む』

警備府の屋上でMIKKAI3

スピーカーモードにしていたので、全員がその名前を聞いてカッチコチに固まったで？ 当然この俺もだが、行動力を強みとしている俺がする事は、電話を切ることだ。

「え？ ちょ、今のつて……」

「ああ、お前たちがよく知ってる人だ」

「あの、Admiral Saitoが……Cpt. Shishidoのパーソナルフォンに……!?!」

海外士官の艦娘たちや、柱島の艦娘、並びに我らが班長も驚きを隠せない様子だ。

それもそうだ、なにせ電話に掛けてきたその御名前を持つ人物は時雨が言う偉い人どころか、全海軍士官のトップであり上官に当たる偉人。オイゲンさんやゴトランドさんは可愛らしくオメメを見開いてお互いを見つめ合っているが、その反面アイオワさんやタシユケントさんは一瞬理解できなかつた様子で、はてなマークを浮かべている。多少の無礼も多めに見るダンディー中年とは彼の事だが、流石に即時切つたのはヤバイ。

だからここで俺は、必殺技をつかわせてもらう。

「……奥義」

——リダイアル。

そんなチンケな奥義僕も使えるんだけど？ とか、宍戸くんアホみたーい！ など、俺への貶し方を熟知している白露姉妹の面々を無視して電話を耳に当てる。

『ん？ 繋がったか』

「ハッ!! 出撃所付近にて弾格納整備及び遠隔通信点検を行っていたので、電波に支障が出たのやも知れませんか!」

『お、おう……何をそれほど慌てているんだ？ まさか疚しい行いでもしていたのか?』

「いいえッ！ 小官は誇りある海軍軍人として誠心誠意、尽忠報国、碧血丹心たる志を常としております！ 斎藤長官、ひいては日本海軍の

荣誉に一滴の泥を塗るような真似は、この不詳な身なれど断固の意を持って致しかねますッ!!」

『あ、ああ……勘違いしているところ悪いんだが、私は長官ではないぞ。その息子の……ん、自分で言うのは、少しばかり恥ずかしさが込み上げるのだが』

「では早々にそう申せ七光りがア。親の威を借りる狐めツ」

『何だと貴様ア!? 表に出ろオッ!!』

なんだよ驚かせるんじゃないやねえよ本当さア……今の間だけで俺の寿命三ヶ月ほど縮んだぞ。つかもう表に出てるし。

この場にいる全員がその会話を聞いてホツとした顔を見せているのは言わずもがな。偉い人って点では相違ないだろうが、偉い人にも天と地の差があつてだな……一応同期といえは同期なので、要らぬ勘違いをさせた点でこれ以上彼を攻めるのはよそう。

「久しぶりですねエ斎藤大佐ア!? チョーシどオクツスカア?」

『十全だ』

「チョーシこいてんじやねえぞオラア!!」

『な!?!』

『みんな見たね? あの横暴な態度を。さつきとは比べ物にならないよね? 僕たちの提督は人を見て態度を変えるタイプの人なんだよ?』

『うわ、白露げんめつしちやうく!』

『さ、斎藤司令官は同期ですから! な、なんとか言っておいてくださいプリンツさん!』

『え、そうだっけ?』

『貴女も同期でしょおおお!?!』

白露さんと時雨が何か言ってる様子だが、人によって態度を変えるなんて当たり前だし、警備府内でも露骨に変えまくってる俺を責める者はいないだろう。

正確には気分などで対応を変えることで、あえて親しみやすさを演

出しているのだが、慎重にやらないといけない上、一歩間違えばただの卑しい豚提督なので気をつけよう！

「冗談です斎藤大佐、お久しぶりですねえ」

『ああ、貴様も相変わらず元気そうだな……早速に連絡を入れた理由について話させてもらうが、実はそちらの陸軍の動向が怪しくてな』
「陸軍ツスか？」

『そうだ……そこに誰かいるのか？ できればこの事は内緒にしてほしいのだが……』

「え？ あ、了解です、はい」

少しその言葉に困惑しながらみんなとの距離を離す。後ろに誰もいない事を確認するために、壁際に背を付け皆のいるテーブルの方を向くが……みんなもこっち向いてる。なんか落ち着かないけど、近寄ってくる気配は無さそうだ。

なんか村雨ちゃんか白露さんのどっちが胸が大きいかわからない。男もいるんだからそんなアホな事やってないでそのWパイパイで俺の主砲をズリズリしなさい！ とそれ以上にアホな妄想でリラックス感を得た所で本題に入る。

「離れました」

『応……実は知り合いの陸軍将校から、何やら九州方面の一部から不穏な空気があると聞いてな』

「そりやそうでしょ。こっちの佐世保では前代未聞の超大作戦が繰り広げられようとしているんだから、陸軍の方も緊張が伝染してケツ締まってるでしょ」

『まあ聞け。その作戦には反対派がいる事は知ってるな』

「もちろんです。まあみんなも、多少なりとも抵抗を感じている人がいるとは思いますが……现阶段では、表立って異議をブチかます人はいませんね」

『そうだろうな。まあそちらの陸軍、そして保守派が何の弁論を用意した所で——』

「ちよつと待ってもらってイイツすか？ え？ 保守派ってなんスカ？ え、もう終わったとか、今の政府も落ち着いたとか、俺が頑張っ

てプロパガンダ用の武勇伝を命がけで持ってきたとか、え？ まだアイツら息があるんすか？」

『当然だろう。別に血を流したわけでもなく、事実上不発に終わったようなモノじゃないか。というか何時にも増して過激だな貴様は』

粛清したわけじゃないし、現連合艦隊司令長官や大湊の加賀提督など、今まで黙ってたからもう諦めたのかと思ってたけど、え、諦めていらっしやらない？

思想がどうであれ、足並みを崩す輩は粛清しなきや。

『別に何が起ると言うわけでもないが、もしも、と言うときがある』
『というと……』

『……………』

「……………」

早く本題に入れメガネ後ろで時雨達が聞き耳立ててるじゃねえか。距離を離して電話の音声を耳に近づけて塞いだ。

『少しばかり世迷事とも取れるかもしれないが、私がいた頃より陸軍では隠し財産があると噂されているんだ』

「…………え、斎藤大佐って、徳川埋蔵金ブームでガチになったタイプなんでしょうか？ 何世紀前の人ですか？」

『なんだと貴様ア!? ン、コホンツ、まあ聞け。私も確証があるわけではないが、その頃聞いた話では、その隠し財産は海軍を経済的にコントロールできる……と、噂程度ではあるが、明らかに表沙汰となっていない噂だ。信憑性はともかく、私も幾許かの興味は唆られた』

隠し……財産？

俺は斎藤長官のご子息であり、あの親潮の兄と言われ、なおかつ俺の提督育成プログラムの同期として、彼を人間として尊敬していたつもりだ。

斎藤大佐のメルヘン的なYOMAI GOTOを聞いて、あ、提督になつてだめになっちゃうタイプの人か、と頭を領かせた。

『もちろんここで会話が終われば頭のおかしい奴だと思われるだろう』

「お、俺の心が読めるツスか!? いやあ〜一心同体じゃないツスかア

!!

『やめろ気色の悪い。でもこれを聞いたらどうだ？ 陸軍内部では、今その財産の在り処を移そうとしているらしい……が、その噂が上がった理由が、信憑性を増しているらしい』

「ま、マジっすか……」

聞いている内にヤリスギな都市伝説みたいになってきている俺は、最初はつまらないと思っていた話にドンドン耳を傾けていた。

後ろにはもう村雨ちゃんと白露さんのおっぱいが当たるほど接近されており、そのまた後ろにはガイコクジンがわんさかわんさか。見せモンじゃねえぞお前ら。

追い払う前に、大佐はその真相に迫ってしまった。

『陸軍が隠している財産の在り処が、何者かに攻撃を受けたから……という理由だ』

「「ええええええ!!」」

驚いた時の愚民が放つお決まりの叫び声が耳元で鳴ったせいで鼓膜が破けそうになった。

つかガングートさんタバコクセエツ!! 禁煙だぞオラア!!

と叫びながら室内に逃げる。

「あ、逃げた。みんな穴戸くん追いかけて！ 私達を差し置いておもしろいこと話してるなんていつちばーん許せない事だよね!？」

「はい。話の内容はともかく、話しているカレはCaptainとどのような関係なのか詳しく♂尻たいです」

「あ、もうこのような時間に……では、私は艀装整備に戻らなくてはならないので、これで失礼します」

「あ、うん！ 班長さんまたね！」

一部が離脱する中、白露さんを筆頭に警備府内部まで追いかけてくる。

士官や艦娘が行き来する廊下で全力疾走するのは緊急事態なのかと誤解を招くため、俺は小走りを心がける……が、それじゃ当然追いつかれる。

小さい頃から建物内でのおいかけっこは得意であり、俺は曲がり角

を曲がったら次の曲がり角まで全力でダッシュしたり、ドアを無造作に開けてフェイントをかけたたりと思考を巡らせながら走り、しぶとく巻こうとする。

が、さすがの白露さんは足が早く、そして何より時雨が俺の行動を熟知しているので、そう簡単には巻くことができない。

「クソウゼエ!! 大事な話があるんだから追いかけてくるなア!!
めっツツツ!!」

『めっ! とか子供に言うことでしょ!?!』

『じゃあ合ってるじゃん……あ』

『あツ?』

『し、白露姉さん! ここでジャーマンスूपレックスはまずいわ!』

よし、自爆してくれたお陰で白露時雨ペアと、白露さんの暴拳を止めようとする村雨ちゃんの三人は消えた。

残る外国人勢を軽々と巻きたどり着いたのは使われていない倉庫……の中にあるロッカー。警備府の提督ともあろう者がこんな姿になるなんて……と、言っている場合じゃないが、誰も見ていない状況なら何したっていいんだよね。これは経験上の人生教訓である。

『ど、どこに行ったのシールド!? なんであんなに逃げ足早いのか!?
いつも私と一緒に執務ばかりしてるのにい!』

『Ms. Eugenはなんと羨まけしらかん事を……いいえ、今はそれよりもCaptainを追わなくては。Captain!どこにいるんですかCaptain!? Captain! 俺のCAPTAINエエエ——ンツツツ!!』

『今日はもう諦めてもいいんじゃないですか? また後日伺えばいいことですし……』

『私も同志ゴトランドに賛成かな。それでも話さないようだったらソ連式で尋問すればいいし』

『ん……そうだったな』

あれほど熱狂していたホモ少佐落ち着きを取り戻す声がロッカー越しに聞こえてきて、その話し声は徐々に遠ざかっていく。彼が仲間の制止で我に帰れるほど理性的な思考の持ち主なのか、あるいはタ

シュケントさんの言ってた“ソ連式”が彼を一瞬で安心させられるほどヤバイのかは分からないが、今のところは助かった。

絶対に話そう。ソ連式尋問は絶ツツ対に受けたくない。

遠ざかった話声の中には、アイオワさん達が自分たちの提督の話をしているような言葉も聞き取れた。数秒前まで俺を憲法違反者を追いかける憲兵みたいに俺を追い詰めていたくせに、マイペースなのは流石G A I J I Nだと思った。

『だ、大丈夫か？ ま、まさか敵襲か!?』

「いいえ、大したことはないです……はあ……はあ……!!!」

『息が上がってるじゃないか……まあいい、話の続きなんだが』

この人もマイペースだわ。

『陸軍隠し財産が襲撃によって移動させようとしていることはもう言ったな？ それからの情報は陸軍に居た時の上官から聞いた話であり、これ以上は知らないそうだが……私の推測からするに、この話題が上がったということは、近い時期に何処かで何かが起こったということだ』

「大佐にしては珍しくアバウトツスね……」

『当然だ、この類の話には確証がないからこそ都市伝説と呼ばれているのだからな。しかし、これはオカルトではなく、都市伝説のようなモノだ。世の中に蔓延るリアリティーを孕んだ話には、その規模が大きければ大きいほど、それが真実である可能性が高いと聞く』

「へ、へえ……え、その、イルミナティーとかローゼンクロイツアーとかオーダーオブイースターンスターとかカラムスナンデジヨセイダケナンダとか、そういうのが全部本当ってそれマジ!？」

『少なくとも最後のは本当だぞ。まあいい、それで実は……宝に辿り着くための鍵なのだ』

俺は斎藤大佐の言葉を聞いて、ケツが震えた。

なんだと？

陸軍内部では、奇妙な噂が流されている。

実はかなり前からある都市伝説の一種だが、スケールが大きい陰謀説というのは解明に苦を労する故に、誰もがティータイムの合間の雑談の贅にとどめていた。

運用資金、として何より海軍の経済的な権力を一部掌握する“陸軍隠し財産”。その規模は膨大らしいが、海軍の転覆や完全支配などは当然凶れるわけでもなく、精々嫌がらせ程度の代物だろう。だが、噂されている総額が真実だとして、タイミングと使い方見計らえば効果的な大打撃にもなり得る。

特に、海軍が力量を試そうとしている前代未聞の大規模作戦が発令待ちの状態であれば尚更と言えるだろう。

何はともあれ、財産への道には特殊な鍵が必要であると噂されている。それはなぜか、女性、そして一部の男性が自慰行為の際に使う器具とされるモノで、通称バイブと呼ばれている。

何故それを秘密の鍵として起用したのかがこの都市伝説の最大の謎だが、推測ではただのバイブではないはずだ。改造され、特殊な形をしているはずのそのバイブは、光学迷彩と再帰性反射材の応用で突きつけられると鋭い凶器に見えたり、特殊な電磁波を発して開くとも言われている。

和歌山の白浜警備府。

『バイブ……ですって？』

「ああ、可笑しい話だろう？ 私も最初耳にしたとき馬鹿げていると蔑視していたが、何度か耳にしている内に聞き慣れてしまっただけ。それがこの間に会った陸軍時代の上官との話題として上がったのが面白くてな、ついつい話したくなってしまったんだ」

穴戸大佐は何かから追いかけられていた故に息を整えているのか、あるいは何かを察したように、数秒間を開けてから口を開く。

『それって……なんかその……バイブ？ みたいなものから、えっと、

スタンガン？　みたいにな？　出るんですよね？　なんか武器になるみたいにな？』

「ん？　スタンガンのようかは知らないが、まあ電磁波を発生させるとは聞いたことがあるな。派生として紅蓮を纏うとか、六等分に分裂してベイブレードとなりダビデの星を描くとか、二トログリセリンが組み込まれていて暴発するとか……まあ、噂程度の事だが、そこまで深く考える必要はない」

『突きつけられたら凶器に見えるけど俺から見たら凶器に見えない……？　え、そしてジリリリって電気発生できる……？　え？　えっ？』

「……す、すまない宍戸大佐。混乱させてしまったようだな……まあ、多忙な身から出た戯言として片付けておいてくれ。この類の話はいくらでもある」

「失礼します司令官」

「私も失礼するね！」

「ん、私は執務に戻るの、私も……ではなく、私は失礼するぞ」

『あ、ウイイツスウ！』

補佐官と秘書艦が入ってきたのを切りに、斎藤大佐は通話を終わらせる。

執務室に足を踏み入れた補佐官は、正式な補佐官ではなく整工班の副班長なのだが、作戦時に参謀として会議に参加したり、自身の経歴から憲兵隊の指揮への助言を与えたり、現在のように執務を手伝うなどして、ただの整工兵として扱うには微妙な立場だが、着々と発言力を高めているのは紛れもない事実である。

「誰とお話にな？」

「ああ、月魔さんの良く知る司令官だ」

「兄貴ですか!!　元気にやっているといいなあ……」

「え、兄貴？　って、だれ？　親戚の人？」

「兄貴は俺の兄貴です。姐御もいます」

「だ、だからだれ……？」

「長良、宍戸司令官の事だ。八号作戦で蘇我中将の下で前線に出た」

「前線……ああ！ けっこう前に、艦娘と一緒に戦ったって言うあの!? 生きてたんですねー」

生きているとはなんと無礼だと斎藤と月魔は思ったが、長良が印象として主張する「前線で突っ走る戦国武将みたいな提督」だと聞いた二人は本人を知っているが、誤解する理由に理解を示した。

無礼どころか、ぴよんぴよんはねながらサイドテールを揺らす彼女は、むしろ好奇心を寄せている。

「まあそれはともかくだ……月魔くんはここに来てもう慣れたかな？」

「ハッ！ 斎藤司令官の御指導もあり、順風です。兄貴からの人生教訓として、まずは慣れる、及び慣らせ、と言われましたので。そして次は、なるべく見えるように実力を示せ、とも言われましたので」

「すごい事言うんだねーその前線の司令官さん」

「斎藤司令官、並びにあの結城司令官との同期ですので、ヤバイです」
「あははっ！ 本当にヤバそうですねっ！ 逆にそんな二人でなに話してたか気になります！ なに話してたんですかー？」

「ああ、彼には司令官としての威厳を保たないと、こうして陰口を叩かれる事になるぞと忠告をな」

「陰口など誰でも叩くでしょうに……」

「ん？ では貴官はどんな陰口を私に叩いたのか、詳しく教えてはもらえないかな？」

「あ、い、いいえ！ 自分は司令官の陰口など叩いた覚えはありません！ ただ兄貴が七光りクソ眼鏡の元陸軍お勉強箱と言っていた割には優秀な方だなと思ってはいました！」

「それを詳しく聞かせてくれないかッ？ 場合によっては今度アレに会う時の為に、牙突の練習をしなくてはならないのでなッ」

「お、落ち着いて落ち着いて！」

詰め寄る斎藤大佐は比較的多忙な司令官ではあるが、群を抜いてというわけではなく、世迷い言を態々同僚の司令官に話すような真似をする人物ではない。彼が言ったように、この手の話はどこにでも存在している上、どれも信憑性は多少頷けるレベルで構築されているのだ

が、この話は彼の父である、現海軍大臣もプライベートで言及を漏らした事があるのだ。

このような都市伝説に縋りたくなくなる時期も彼にはあり、また、徳川埋蔵金の発見を夢見るトレジャーハンターの気分で仕事の合間に調べていた時期も、人には言えない黒歴史であると、彼の中では結論付けている。

大佐のように調べた事がある人々は、その度に個々で自分の中での信憑性を増していったが、その度に伝説の規模に目眩みし、キリの良いところで打ち止めにするのがほとんどである。斎藤大佐は資料などを漁った結果、その中でも陸軍創設に関わった者が多く、現代に至るまでの歴史的な革命の立役者たちの聖地である西日本にあるのではないかと目をつけ、そこで断念した経験がある。

近々あつた佐世保方面での台風、そしてそれに乗じた人為的な襲撃もなかったわけではなく、それと彼の陸軍の上司が「隠し財産を移動させようとしているかもしれない」と話題を持ち上げた時期、そして何より海軍大臣が言及していた事実などを照らし合わせ、そこにあるのではないかと……と、錯覚に似た症状が出た。

もちろん確証のないモノばかりで、単なる話題作りの法螺話、あるいは余興とでもいうべき代物だが、陸軍が黙って海軍の独走を見逃す訳がないと思っている故に出た“警告”のような言葉は、現在宍戸大佐を何かに気づかせたことに、彼は気づいていない。

もしかしたら、斎藤大佐は彼に陸軍への抑制をすることを期待していたのではないかと、後に思い始めた。

電話を切ってしまったが、彼が電話した理由は陸軍の都市伝説よりも、もう身を固める準備はできたかどうかと聞きたためであり、もしもできてなければさっさと結婚するか、する気がないのなら妹の親潮をさり気に勧めようかと思っていた。一応妹想いではあるが、同期の結婚相手は誰になるのかがとても気になるという変わったタチの持ち主でもある。

「ま、まあソツチのことなんて気にしないで！ それよりもほら、今日は海外士官の人が来る日ツスよ」

「あ、ああ……確か、アメリカからの士官らしいな？ 最近多くないか？ 大阪警備府でも諸要港部でも、アメリカの割合がやたらと多い気がするんだが……」

「えーそうですかー？ あ、でもあつちのほうが多いから当然かもしれないっ！」

「そんな理由で来られたら我々は人口的に侵略されてしまうぞ……」

「見かける機会が多いだけなのではないでしょうか？」

「そうだといいのだが……まあ、少なくとも廊下で海外士官の大名行列を見ることはないだろうから、その店は安心だな。バブル時代では、米国に行った日本人が数十人規模で屯して道を歩く姿が新聞になったり、アメリカの企業やタワー買収などが重なって、反感を買う事になったと聞く。そうならないといいのだが……」

「バブル世紀をまるでそこにいたかのような口ぶりで話していますが、斎藤司令官は何歳なんですか？」

「野暮な事は聞くものじゃないぞ月魔くん。少なくともその時代を謳歌できた歳ではないぞ。というより、何十年前の話だと思ってるんだ？」

「……バブル、ってなんですかー？」

「……………」

長崎警備府。

オイゲン参謀長を筆頭とした7人グループの集団は、礼儀に則り密集して右側を歩いていた上、人の少ない中庭にいたため反感は買わなかった。というよりオイゲン参謀長は上司なので、状況を知らない人には外国人士官に警備府内部を案内しているようにも見えた。

しかし、行き交う士官や兵士の目のには、思わず一般女性士官が叫んだ「何あの超絶イケメン外国人!？」が、6人の超美人な艦娘に囲われているようにしか見えず、彼らの脳内を過った“ハーレム”という言葉は反感というより殺意を沸かした。

「な、なんででしょうか……こちらを見ている人が多いような……w

hy……?」

「Probablyだけど、ガングートのパイプの匂いじゃないかしら? ニッポーンは基本禁煙だから。まあGambier Bayがビクビクすることはないわ! Youは私達みたいな外様と違って、ここの艦娘なんだから! HAHHAH!」

「うう……案外匂いが散乱するモノなんだな……いや、そもそもこの警備府が悪いんだ。軍事拠点だろう? 軍港だろう? 何故無臭でいられるんだ!?! 私の祖国など匂い以前に生ゴミが放置してあったりしたんだぞ!?!」

「ああ……」

「……ん? え、今のって嘘だよな? なんでタシユケント何も言わないの? その反応まるで本当みたいな……え?」

「あ、少なくともスウェーデンでは大丈夫ですよプリンツさん!」

フォローをするよりロシアから話題を逸らしたゴトランドを見て、オイゲンは察する。

「それよりも、かなり賑やかな警備府ですね。鎮守府にいたときには見られなかった活気と言いますか、楽しさと言いますか……:Freedomな感じがして、私は好きですね」

「Beringhamもそう思うのね! greatな警備府よねっ! Meの大好きなhamburgerが売ってるのが一番好印象だったわ!」

「今は大抵の場所で売ってたりするんだけどね……」

アイオワが所属する柱島泊地は離島のため、酒保の品揃え自体が限られている。要望が多ければ努力するが、外国人が大半を占める柱島においても、日本食がメインである。

「じゃあニッポーンの鎮守府は全部greatね! HAHHAH!」

雑談を交えながら歩く集団は、辺りの士官に挨拶をしたり、艦娘と会えば立ち止まって話し合ったり、女性の士官に会えばベリングハム少佐にサインをもらったり連絡先を教えてもらうなど、警備府内の空気を無自覚に幹旋していた。

集団が向かう先は一応出口だが、所々立ち止まってるあまり、進め

ていない。

少し歩くと、前方で艦装の運用方法、海戦での戦力向上、そして着物の一番手っ取り早い着付け方について議論していたベンチを独占する集団と鉢合わせする。

「あ、オイゲンさん！ こんにちはわ！ そちらの方々は……」

「この人達は司令官に会ってた人たちで、いま出口まで案内してるの！」

「そうなのですか……お客様がいらしたのなら、わたくしがお茶をお出ししましたのに……」

「あ、大丈夫だよ！ 別にそれほど長い間いたわけじゃないし！」

「そうなのですか……」

「……ん？ あなたは……」

旗風がベリングハム少佐をじっと見ていた。

「私の顔に何かついてますか？」

「い、いいえ……ああ、思い出しました！ スタイル・メンで出ていたモデルさんです！」

「え、も、モデル!? な、なんでモデルさんがここにいるのよ!? って
いうか、なんで旗風知ってるの?」

「え!?! い、いいえ……その……」

旗風は頬を紅潮させ、着物の裾を掴みながらモジモジ体を揺らす。
その視線の先には、ベリングハムというゲルマン系超絶イケメンの
骨格きめやかな顔があった。

無意識に松風をチラチラと見てしまい、やがて視線はそちらへと向
いてしまう。

「ん? どうして僕を見てるんだい旗風? そんなに見つめられると
……照れちゃうじゃないか」

「あ、あの……」

「フツ……すまないイケメンさん。僕の妹は少々照れ屋でね。君みた
いな端正な顔をした男性を見ると、つつい固まってしまっんだ」

「はははっ、愛らしいお嬢さんにそのように思われるなんて男性とし
ての光栄に思います。ありがとうございます、Ms. Hatakaze」

「あの……は、はい！」

ニツコリと笑うベリングハム少佐に、同じく笑顔で返す旗風。

実は、男性ファッション誌を見ていた理由も含めて、松風にかっこいい服をプレゼントしようとしたのだが、その中で偶然表紙を飾っていた彼の服が旗風にピッタリだと思い、どこで買えるか聞こうとしていたのだが……イケメンな松風のイケメンな行動を見れて役得であったため、これで良しとした。彼の身長を考えても、まず合いそうな服ではないとも思ったので、プレゼントはこの前目にしたメス男子が着ていた破けそうなくらいピッチピチの執事服に決めた。

その一方、少佐は光栄だとは思ったが、女性に容姿を褒められる事自体に慣れている上、彼の想い人の性質上、股間とケツには響かない様子だ。

「それにしてもイケメンね。松風、タキシードでも着たら？ 一緒に並んで歩いたら街の女の子斡旋するわよ多分」

「はははっ、それもいいかもしれませんね。もしMs. Matsukazeでよければ、モデルの仕事を紹介しますよ？」

「僕は女の子なんだけど……」

「WHAT THE FOCK?」

アイオワと少佐が思わず口をもらす。

松風は極めて中性的な顔立ちをしている。それは女性だと言えば納得はするし、普段から着こなしている服を考えれば初見からそれほど判別は難しいわけじゃない。

しかし今日は休暇。普段着れないようなチャラ男系のボーイッシュな私服を着ているので、超美少年だと勘違いするのも無理はない。

「いや凄い駆逐艦の集団に出会ってしまった。これは今日で一番貴重な体験かもしれません」

「屋上でシールド司令官に縛られていたのは無かったことにするんですか……」

「あ、私としたことが自己紹介を忘れていました……私はA.S.ベリングハムです、よろしくおねがいします」

「あ、ご丁寧にもありがとう！私はこの娘たちの姉、駆逐艦の神風よ！」

「……………KAMIKAZE!? WHAT THE (BEEEEEE EP) (BEEP) (BEEEE)!!!」

その名前を聞いた途端、彼を含むアイオワとガンビアベイが放送禁止用語を連発しながら中庭にある樹木の後ろに隠れてしまう。

当然その奇行には驚いているが、同行していたタシケントやガングートは頭をかしげている。

「Hey did you guys hear that!? Kamikaze! I thought she was a fucking destroyer! (おい聞いたかよ!? 神風だつて！ 駆逐艦じゃなかったのかよ!?)」

「OMG……………OMG……………(嘘でしょ……………こんな事つて……………)」

「Wait, don't tell me you didn't know that suicide attacks were here Gambier!? What are we in!? Hey Gambier!! (ちよつとまって、まさか自爆攻撃があつたこと知らなかったわけじゃないでしょうねえガンビア・ベイ!? いつの時代よここはア!? ねえガンビア・ベイ!!)」

「あ、あの……………」

誤解の氷解は、過剰反応により数分ほど要した。

中庭の近くにある、使われていないロッカー室。

カミカゼ！ スーパーサイイドカミカゼアタックボンバーガールとかクソうるせえ外国人勢が真下にある中庭から聞こえてくる。マジ卍。つかもう帰っていいからみんなのお仕事の邪魔だけはないでお願い……………。

ロッカーの中で、俺は震えていた。

斎藤大佐の都市伝説で言われていた辿り着くための鍵と、コンビニ強盗をしていたヤツの手に持っていたバイブ……………なんか、共通点多すぎやしませんかね。馬鹿でも察しはつくと思うが、これはあのコンビニ

二が、陸軍の隠し財産とやらと、何か関係あると結論付けるしかない。冷静さを欠く2つの理由としては、壮大な都市伝説だと思っていた法螺話が現実味を帯びてきたことと、それが結構近場にある事の2つだ。

近代的な軍隊の構造を守り続けなくてはならない性質上の問題で、陸軍を海軍の傀儡にしたり、解体したりすることはできないが、支配に近い事ができる以上、何らかの報復手段を持つてしかるべきだと言うことは理解できるので、都市伝説が本当だとしても、ある程度冷静でいられる。

持っていたとしても、嫌がらせ程度のことしかできないだろうけど、もしそれが海軍に発覚したら取り上げようとするはずで、もしガチであるのコンビニだったら、近場にいるってことで陸軍に恨まれる可能性がある。

自分で言うのもなんだけど名前が通る方なので標的にしやすいし、暗殺……いや、アニメの世界じゃあるまいしそれはないけど、先を見越して何事にも慎重に行う必要がある。

いつも通り、俺は冷静になる。

一人が息を荒くしててもなんもならない。だから深呼吸をしなければいけない状況にある……目の前にある状況に対しても、心を落ち着かせる必要があるからだ。

財産とかなんとか、ワケわかんねえけど、目先の問題のほうがつつと問題なんだよなあ……今出ていったら司令官生活終わるナリ。

「涼月の胸……おつきい……」

「は？ 私のも大きいでしょう？」

「た、確かにそうなんですけど……足柄さんのより涼月の方が歳が近いから、なんというか……」

「初霜？ 言っつていいことと悪いことがあるって、これまでの人生の中で習わなかったかしら？」

「す、すいませんでしたっ!!!」

「まあ自分でも分かっているのよ……ベージュって結構近寄り難いのよね……はあく……」

ガチで言っってはならない事を言っても寛大な心で許してくれる足柄さんマジ勝利の女神だわ。誰かもらってやれよ。

ここに至った経緯いきさつはともかく、俺は何もしていない。ただ大佐の話
を聞こうとしていたら、必然的に誰も使っていない……と思っ
ていた部屋の、その数あるロッカーの一つを使っ
て話の場を借りていただけである。

通話があちらの都合で切られたと思っ
たら突然、演習から帰ってき
た艦娘たちが汗を拭くために演習場の近くにある部屋……つまり、こ
こに来場って次第。

ロッカーの外には色鮮やかな艦娘の制服ではなく、むしろ肌色の方が多い。

そりやそうだ。彼女たちは体を一時的に拭いてるだから、あられも
ない下着姿をまるで俺に見せつけるかのように脱いで、ここにいても
おかしくない。

再度演習するための一時休息には最適な部屋は、隣の部屋にあるん
だが、なぜここに……陰謀やでこれ。

ロッカーの隙間から覗いたら、自分の胸を触る初霜が見えた。二人
のを見る初霜、落胆する初霜。

格差社会とは正にこの事である。

「ま、まあまあ！ ほら！ 女性の魅力は胸だけじゃないでしょう？」
そうだぞ、と俺も声を出さずに念を送る。

初霜の悩みが解決されてほしいって事もあるが、当然このままクソ
長い女子トークをされては俺もここから出れないから、さっさと行っ
てほしいという念も入れている。

基本的に拭くのは早いし待ってればいいことだが、このままでは俺
の身が持たない。また誰かから電話が来て鳴ってしまふ可能性と、時
雨たちがまだ俺のことを追跡しているかもしれない懸念も含めて、双
方とも来ないことを願う……。

ピロロロッ！

「「え？」」

「なんだと？」

明石次官が、来たゾ

……あ、もしもし！ ぼくのこえ……きこえますかあ？

ぼくう……いまあ……こころのこえで、かみさまにおはなししてるとおもうんです。

みんなのことをいつも見守ってるかみさまなら、とうぜん、ぼくのこころのこえも聞こえてるはずですよねっ！

あのお……おねがいですからあ……死んでくれませんかあ……？
或いは、ご逝去頂いてもお……よろしいでしょうかあ……？

こんなロクでもねエ運命とか試練とか平然と投げつけてくるから、神様なんて信じる気にならねえんだよなあ……ロツカーの外で三人がこちらを凝視しているわよ。

「い、今のって……」

「はい……電話、のような音……」

「普通に誰かが置きキツパにしてたんじやないかしら？」

ありがとう足柄さん！ すごく真つ当かつ妥当な推測をする大人の女性に、今度の合コンに勝てるようにと、エールを一杯送ることを決めた。そのまま無視して出ていってくれ足柄さん……！

「なるほど……では、忘れ物箱に届けてあげましょう」

「それがいいわねっ」

リズム良く、無慈悲に鳴り続けるスマホ音を聞きながら思った。

司令官人生、終わった。

ピー音と共にメツセージを……というところで、ロツカーに近づいていた涼月の整った顔が、俺の視界という画面の半分以上を掌握し、ビクビク震える司令官系男の子と下着姿の女子を対面させようとしていた、その瞬間だった。

『あ、こちら明石です！ 警備府の回線では繋がらなかったの、こちらに連絡を入れさせていただきました！ 明日のヒトキユウマルマル辺りにそつちへ向かいますので、もしよければ来着の準備をお願いします！ それでは！』

「「え？」」

え？ と発した声の中には俺の声も入っている。

え、明石中将来るんですか？ 視察に来ること自体は知ってましたけど大分あとだったような……え、なんで突然？ 抜き打ちみたいな？

俺以上に驚いている艦娘たちは、数秒間ほど固まっていた体を言葉と共に氷解させていく。

「あ、あの……今のつて……」

「明石……それつて、海軍次官の？ と、というより誰の携帯なのかしら……？」

「消去法だったら宍戸司令官しかいないけど、なんでこんなロツカーに……あ、もうそろそろいかなきゃ！ 二人共行くわよ！ ただでさえ休息时间でもないのに演習時間の合間を借りて来てるんだから、待たせたら申し訳ないわ！」

「え、でも提督のお電話が……」

「いいえ、足柄さんの言うとおりに涼月、行きましょう！ それに、いくら彼の電話とはいえ、あの明石次官から直接連絡されるなんて気味が悪いわ！ 触れぬが仏よ！」

「確かに……では、参りましょう」

若干傷ついた初霜の言葉はさておき、三人は再び、演習場に駆けていった。

翌日の朝。

「という事があったのですが……なぜ、あのような所にお電話を……？」

「涼月、余計な詮索をするもんじやないぞ」

「は、はいっ……申し訳、ありません……」

「……ドジっ子よろしく、あんな所に忘れ物をするなんて、司令官として恥ずかしくなっちゃうじゃないか……俺の顔を赤面させたね。いけない娘だ」

「あっ……！」

顎クイ。

整列する士官らが凝視する中、人生最大の危機を乗り切った俺は、司令官が持つ特有のイケメンオーラと立場上の権限を最大限に利用した行為を、この美しい乙女にしていた。涼月も、発熱しそうな表情で頬を染める。

「ん〜これは美女と野獣……」

「は？ 白露さん俺泣きますよマジでうえええええん!!!」

「せめて謝るまで待つてあげて。あとダイの大人が気色悪いからやめてもらえる!?!」

飛鷹の罵倒は、士官と艦娘たちが規律良く立ち並ぶ警備府正面玄関の異様な空気に、再び静寂を呼び戻す。じゃれ合いながらも張り詰めた雰囲気は拭えなかった。

旗艦クラスの三人だけでなく、参謀部から数人と、整工班から数人、憲兵隊も込みで閲兵状態にしており、明らかにVIPが通りそうな人工的な道が構築されている。

小学生が見ても、あー今から偉い人がここを通るんだなーと理解できるし、この張り詰めた空気を吸えば、整列している現在の士官たちのように、汗を垂らしたくもなるだろう。実際みんな緊張している。その証拠に縦横無尽が売りの白露さんだつて口数が少ない。

警備府の正面に停められた三つ車。

全部黒塗りだから正にマフィア映画そのもの。

ドライブバーである士官が真ん中の車のドアを開けて、降りてきたのは、相変わらずピンク髪が目立つ明石次官。

ちゃんと、ありがとうございます！ と言ったあとに迷惑にならない所に停めてください、と言って黒い車はパーキングロットへと姿を消した。

建物の敷地内に脚を踏み入れた瞬間、俺たち全員がお固い敬礼を捧

げる。

「わざわざ出迎えてくれるなんて、ありがとうございます！　と言いたいのですが……流石にこれはちよつと恥ずかしいですね……次からはやらなくてもいいんですよ？」

「ハッ！　明石次官が来られるのであれば、寧ろこの程度で良かったのかと、未熟ながら不安を募らせておりました」

「い、いいえこんな大層なお出迎えはいいですって！　視察するだけなんですから、むしろサーって勝手に入ってサーって勝手に出ていくぐらいが丁度いいと思つていますし！」

御立場に比例しない大変謙虚な方である。

そのフランクさ、そして人柄もあってか、徐々に部下たちの憂い顔が改善されていく。直接会うのは、俺以外は初対面であり、工房に着くまで肩を工事ドリルみたいにガクガクさせていたヤツも少なくな。出迎えるために整列させてたので、着く頃にはほとんど挨拶組は解散させたけど。

明石次官が来られた理由、それは彼女が言ったとおり警備府内部隊にある新型艦装、駆逐艦メインの装備、改良弾薬など、海軍省が開発、及び実用化させたモノの視察である。

これらは別に次官が直々にやらなくてもいいことだし、定時的に回らないといけなくても大抵は鎮守府だけ回つて後は鎮守府にいる参事官とかに任せたりするのが定跡なんだがーこの人は自分の目で見たい人なんだろう。そういう所は素直に好感触なんだけど、遠出なのによく疲れないな……多分アレだ、艦娘だから疲れないんだろう。ざつと彼女のジュールを計算しても2時間程度しか寝てないはずなのにさ。

つまりはこういうことだ、艦娘は人間じゃねえ。

とは言つても、彼女は全ての基地を見て回るわけじゃない。流石にそんなオーバーワークはしなないと思うし、俺の警備府に来た根本的な理由としては、最新型の連装砲の調子を見るためつてのと、艦娘たちの意見、要望を直に取り入れるためである。

俺の警備府では開港から、主に駆逐艦の新式装備などを実用し、試

験する任務も受けているため、その結果報告を見に来たと言ったところだ。

この試験とは、開発段階において必ず行われる、作った装備をオーバーキルするレベルで試される強度チェックとは別に、実際に使ってみた時の問題点を見て、局で行われる試験、予想と比べてどれほどの差が出るかなどの研究データ集めと、装備の最終的な調整を行う為に通るプロセスである。

鉄と油の匂いが立ち込める工房に足を入れる。

同じく敬礼して整列する整工班は、美人なピンクロングを目の前にして心も股間を固くしてやがるぜ。ビビりすぎてチビらないのは褒めてやる。

端っこの新人なんて泣きそうになってるぜ？ まったく肝っ玉がなつてねえよなあ？ 俺ぐらいになると、オムツを濡らさないまま帰らせる事も可能だ。

「お目にかかれて光栄です。私が整工班班長を務めさせて頂いております。早速ですが指名に預かった新装備を並べさせて頂きました。どれも使用期間は三ヶ月前後でー」

ねえ、見て、俺の班長マジでイケメンすぎるな。

あの明石次官を目の前にしてもこの度量、そしてスラスラ概要に移って必要な情報を上げる姿勢。正に整工班の模範を体現しているダンディズム。

抱かれたくないヤツいるの？

「ねえ穴戸くん、キモい。顔キモい。僕が引つ叩いてあげようかつ」

「は？ な、何がどうしたって……？ べ、別に見惚れてなんか……」
「お兄さんのばかつ、ばかばかつ、ばかあつ!! 春雨だって桃色じゃないですかあ……!」

春雨ちゃんが後ろからパカパカ叩いてくる。

春雨ちゃんの可愛いおてでだったらまだ良かったが、俺の背中を叩いているのは小柄なお手ではなく、艷装である。両手に持った単装砲のせいで、野球のバットで背中を千本ノックされている気分だ。

「ということもあり、全体的に強度は上昇したのですが、メンテナンス

が増えてしまう事と、それを怠る事により火力の減少しやすくなった事以外では、我々から申し上げる改善点はありません」

「ん〜……やっぱり資材が限られているとどうしてもだめですね……新素材の開発ともなるとまた費用がかさみますし……穴戸司令官はどう思いますか？」

なるほど、元々は整工班だったから俺に振るのか。

ふざけるんじゃないですよ明石次官ツ!? 直に装備触つてねえヤツが直接関わってるヤツら以上の回答を出せるとでもオ!?

「素材の有無に限らず、やはり装備の改良によつて長所と短所ができてしまうのは仕方がない事だと思います。しかし資材の消費を抑える考案や、強化されても弾薬の使用頻度に影響しないのは確実に進歩している証拠です。特に12.7cm連装砲C型改二は軽量化と火力の面で成功したにも関わらず、反動を抑えているのは素晴らしいと思います。圧式駐退の改良もそうですが、ジェラルミン素材の改良だけでよくあそこまで強化できましたね?」

「あははっ、開発には苦労しましたよ本当に……でも、やっぱりまだ何か足りないような……んんん〜!」

一人で考え込む明石次官。

考えるのは別にいいんだけど、あなたがいる事で少なくともここにいる人の半数は石化しちゃうんだからさっさと視察済ませて帰ってほしいお願い。

かくいうこの俺も、用意したオムツを変えなきゃいけない事態だけは避けたい。何か問題があれば、一番責任を追求されるのは俺なんぞぞ。

時雨ですら緊張する始末だし、旗艦クラスが工房に勢揃いするのは騒然とした光景である。

「えっと、夕立でしたっけ? この装備の使用はあなたがメインだと聞きましたが……」

「っぽい! 結構使いやすくっていいっぽい!」

「だよね! あーでも新装備だからちよ〜っとお高め感があつて、もし壊れちゃったりしたらどうしようって思うことあるかも」

「そう思うっばい？ でももつとこれが増えれば最高に素敵なパーティーできるっばい！」

「口を慎め貴様ラアツ!! 明石次官の御前であらせられるぞオ!! ステキパーティーだがハロウィンアタマイカレだが知らぬが、この御方を何方と心得るウ!? 警備府と白露姉妹の恥晒しめガアツ!!!」

「そ、その姉妹の中に当の白露が入ってるんですが……いいえ、別に敬語とか義務じゃないんですから、楽になさってくださいいいんですよ？

なんなら、宍戸司令官も明石にタメ口でも構いませんけど、いかがですかっ?」

「い、いいえ！ 小官は誇り高き海軍軍人であるが故に、そのような真似は、天地神明が赦し給うたとしても、大淀総長が許しませんッ!!!」
「え、なんで大淀……?」

突然の名前に、明石次官も、周りのみんなも少しだけ驚き、困惑していた。俺の中では多分あの人トラウマになってんだろうな。

しかし敬語を使わないのはイケない。これは俺の言葉に終始領いてた春雨ちゃんの時雨が証明している。夕立ちゃんは頭が幼いのかどうか知らないが、あまり敬語を使わずっばい言ってる印象がある。

それに対して美味しそうな体しやがってよお……白い肌に覆いかぶされた生脚、大きめに育った胸部装甲、エロい顔（直球）。こりや、暇がある時に分からせてやらないとなっ。

明石次官は他の艦娘とも話しているが、話題の軸は装備への不満や、利便さを図るための改良案を集めている様子だが、艦娘の中にもやはり同郷のように話せる娘と緊張して言葉が出ない娘がいる。

全体的に会話は20分程度で終わった。

移動の時間を短縮する為に次々と廊下を歩いていた艦娘に声を掛けまくって、工房が明石次官との握手会みたいになっていたとはいえ、流石だなあ……情報の飲み込みと次に移るペースがシームレスです。

効率良く話せたとして彼女の満足した表情が伺える。

「わざわざお話するためにこちらに呼び寄せてしまったのは少し忍び

ないんですけど……でも、そのおかげで楽ができちゃいましたっ。ありがとうございますねっ！」

「明石次官の為ならば、総員整列できますよ。それが、明石次官のような美人ならば、その意欲も掻き立てられるというものです」

「あ、あははっ、そ、そんな美人だなんて……っ」

「むうくく!!」

春雨ちゃんと村雨ちゃんは、彼女に対抗心を燃やしているようだ。

時雨から始まる艦娘の俺への罵りは公然と行われるはずだが、流石にビッグネームの前ではそれも萎縮してしまうのだろうか、

「明石さん。この人みんなにこういう事言ってるので、あまり気にしないでもいいですよ」

「そ、そうなんですか……?」

いや、そんなことはなかった。

「ははは、自分で言うのもなんですが、小官は常に人へは平等でありたいと思っています。ですので、誰かを特別扱いするのは気が引けるのですが……そんな私でも、特別扱いしてしまう人ができてしまうかも知れませんか……チラ」

「あ、あははっ……ま、まったくもうっ！ お口がお上手なんですからっ……」

「ほんとですよねッ、宍戸さんにはガツカリですっ」

「お兄さん……口が上手いやリ〇んさんですッ」

「去勢エンドっぽい！」

「どーどー貴様ら、一つずつツッコんでやろうか？ いや面倒だから総括しよう。黙りなさい貴様ラアッ!!! 俺のフランクフルト・デカマラーが火イ吹くぞオラア!!!」

「「きやあー!!」」

「あ、あははっ……」

白露さんたちマジでやめて。マジ結構偉い人の前だから。工房内の兵士たちも、班長も、明石次官までもが失笑。

しかし、ここでも陽気な雰囲気警備府を包み込み、整列している整工班はかなり落ち着きを取り戻してきたらしい。

『司令官の野郎マジ美人と仲良くしやがってクソ野郎が……俺も絶倫だったらあの野郎みたいに……!!』

『我がが亜威怒流、村雨チャンならまだしも、明石次官とまで繋がっているとはなッ……暗殺も止むなしか』

『お前ら静かにしろよ。給料さえ貰えればいいだろ？ 後で脅してポーナス巻き上げれば実質警備府は俺たちの支配下に……そしたら春雨チャンは俺のおチ○ポ奴隷……グへへへエッ!!』

気が緩みすぎて本音が漏れて来たか？ ん？ 俺の抑制力舐めるなよ後で張り倒すからなお前ら。他にも『明石さんのスリットに手突っ込みたい』とか『明石次官とパコリアンナイトしたい』とか、単純に軍法会議モノだからやめろ。

一通り視察を終えた明石次官が、次のステップである装備の詳細を求めてくる。

装備に関しての書類は物理的な紙とパソコン内部のデータとして記録されている上、一部の人はアクセスできない情報もあるので、そこにたどり着くには執務室、参謀長室、主計部、或いは整備工作班のオフィスのいずれかを訪れる必要がある。

なので移動するみんなに伝え、敬礼されながら整工班のオフィスに着く。50mも無い距離だが、室内に移動したのは俺、村雨ちゃん、明石次官、そして班長だけである。

艦娘たちや整工班には仕事に戻らせ、他の白露姉妹は解散させた。これ以上俺の監督不足と部下をコントロールしきれてない感を見せるのまずい。

軍需を掌握していると言っても良いぐらいに強い影響力のある明石次官を前にして、平然といられる艦娘はただの馬鹿か、よほど肝が座ってるかのどちらかである。

「ここで良かったのですか？ じつくりとデータを考察するに相応しい場所は多々あれど、わざわざ我々が騒音を鳴り響かせている仕事場の隣などは……」

「私は元々こういう職についていたので、大丈夫ですよっ！」

今も事実上で基地を回る辺り、就いてるようなモノなんだよなあ

……それに整工班の生みの親だし、よく考えたらこの人って偉人？

画面の前に座ってる俺は、右側に明石次官の吐息と、前屈みなってるせいでクツキリと円を描く乳袋を感じていた。村雨ちゃんは左に寄り添い、ただ佇んでいるだけなのだが、俺の視線を察知したのか、まともやぶくりと頬を膨らませた。

距離を離せないままアクセスコードをスパッと入力する。

「んくやっぱり資材の消費が激しいですね〜……」

「あえていつも通りに、資材の消費は原則的に他の装備を均一であると考えた上でこの数字ですが、やはりここだけは払拭できませんね。プリントアウトは一分ほどかかりますので、少々お待ち下さい」

「お願いしますー！」

村雨ちゃんが印刷台の前で書類としてまとめてくれている。班長も手伝いながら、共同作業のように黄色のフォルダーへとまとめていく。

つか楽しそうだなア？ ン？

動くたびに揺れるイケナイ果実と、童顔でピュアで柔らかかそうなポツペでニッコリ笑顔を放つ村雨ちゃん……村雨ちゃんは俺のモノだぞツ!!!

渋くてシブいイケメンフェイス班長は整った前歯を見せて微笑む
ダンディズム……班長は俺のモンだぞツ!!!

……あれ？ どっち取るの俺？

まあいいや（思考停止）、印刷にかかる時間はそれほどじゃないけど、明石次官が見ていないその合間を盗んで司令官宛のメールをチェックする。メール内にも、装備の部分的な詳細が入った情報書類があるので、それもプリンターに送る。

個人メールじゃないので、万が一にでも邪なモノを見られる心配はない。新着5件。一気に開いて次、開いてまた次を繰り返し、メールのチェックも済ませる。

この間、わずか5秒。

「け、けっこうすつ飛ばして見るんですね……」

フア!? なんでこっち向くの!? ピーピー印刷してるのそっちで

しよ!?

「も、申し訳ありません! 明石次官の目の前でまったく不躰な……!」
「別にいいですってっ! でも重要な案件でしたら、私に構わずじっくりと読んでくれていいんですよ? ってほら、いま新着入りしましたよ! しかも重要度たつぷりのビックリマークで!」

明石次官はどうやら俺に気を使ってくれているらしい。

優しい人だなあ……こんなのが上司になったら俺、口説いちやうかも! つかさリットエロすぎウホオ! エロい上司には、弱みを握って執務室で執務ツクスウ!

という要件で、一度同期の結城から警備府宛に送られて来たことがあったので、阿久根要港部全体からのメールを全て遮断した事がある。

一日後には解除したけど、新着として来ているのが阿久根要港部の司令官からなんだよなあ……もうやだあ! なんでよりも寄ってこいつなのお……ツツツ!

背中から100%の善意で「開けてもいいよっ」という雰囲気を出している明石次官は、下の者にとっては「早く開ける」という威圧に変わっている事に気づいていないのだろうか? いや、絶対に気づいてない、断言できる。

変なメールじゃありませんように変なメールじゃありませんように変なメールじゃありませんように変なメールを送ってきたのやら……に……!

「は、はははっ、そ、それでは、お言葉に甘えて開封させて頂きます。み、見た所、送り主はあの変人で名高い結城司令官のようですね! は、はは、まったくどのようなメールを送ってきたのやら……!」

“ 穴戸元気か!? ちよつとマジな情報迅速伝達送信中くなくん つつてH A H A H A! お前の近くの連隊長さん、会ったことがあるっしよ? あの、陸軍の隠し財産の件でお前を尋問しようとしてるみたいだけど、もしも街で陸軍さんに会ったら、逃げて、どうぞ”

[[[.....]]]

W
H
A
T

T
H
E

F
O
C
K
?

阿久根でアクメ

「はうう……い、いけません提督……！」

「ええやないかあ名取ちゅあんっ……おん？ オレっちおて手、気持ちええやろ……？ いい加減なあ、素直にならんと、こっちも実力行使で、ゴッドフィンガーと呼ばれたら連装神指魚雷、発射してまうでー？」

「い、いやあ！ や、やめてくださいー!!」

「は？ そんなエロい体しておいて、オス惹きつけておいて、何やその態度。エロ、おいエロオツ、エロい声しか出せんのかお前」

「提督。私の前で、しかも執務中に、なにをしているのかしらあッ？」
「え、なについて職権乱用ごっこだけど？ 五十鈴ちゃんいい加減に慣れようよ。別にオレっち、仕事が滞ってるってわけじゃないもんねえ〜！」

「じゃあこの書類の山はなに!? 十分に滞ってるでしょ!? いったい何度仕事しろって言えば分かるのよこのバカあ！」

阿久根要港部の執務室は常に賑やかである。

結城司令官の陽気な人柄もあるが、それに対して常に突つかかる第一艦隊旗艦の五十鈴、そして秘書艦の名取とのやり取りは来る者にくちやかにして返す。

二人の大きな胸は男性にとって毒であり、あいも変わらず正直な結城司令官は公然セクハラに及ぶ。

「本当に触ってるワケじゃないでしょ!? 五十鈴ちゃんが言ってからオレっちマジ紳士になって無闇やたらと女の子のドスケベクソエツロイ身体触らないようにしてるんだ〜！」

「それが普通なのよ!?」

「わ、私は大丈夫だから、ね?」

「名取のそういう態度がコイツをつけあがらせるんでしよう!? もつとシヤキツとしてー！」

「そうだよ名取ちゃん、男はそういう、はうう〜！ みたいな女子に興

奮してダンシングペ○スモンキーになっちゃうんだぞ？ マジ名取ちゃんのペペにオレっちのラケティティモをソクソクしたいぜえ……！」

「は、はあ……？」

阿久根要港部はそれほどの戦果を上げているわけでもないが、ミスをした経歴もなく、順調に艦隊運営ができていく状況だが、それでも不満がないわけではない。

典型的なスケベオヤジのような司令官は、波の無い平時の任務では、平均よりマシ程度の指揮でこれと言った功績もないが、部下の間ではどうしても同期である穴戸大佐、斎藤大佐、秋津洲中佐のような司令官と比べられてしまう面がある。

しかしそれでも劣等感はなく、今まで通り穴戸大佐と仲がいいままであるというのは良からぬ噂を呼び、一説では彼らはデキているのではないかという腐カツプリング的な噂が、阿久根要港部では流れている。

これは飛び火して斎藤大佐やその他の士官も例外ではなく、同期が近場に配属されたというだけで、二人は営みにより感染、及び発生させるAIDSという名のリーサルウェポンを開発していると噂が流れたほどである。

「あの穴戸大佐と提督が……ふふっ、いいものですねえ……やっぱりホモが嫌いな女子なんていないんですよっ」

「名取ちゃん？」

「ああなるほど、艦娘にセクハラするのは実はフェイントで、本命はアツチって事ね。うんうん！ いいわねえこれ！ あ、でもそれじゃあ斎藤大佐がハブられて、それに激怒した彼がヤンデレホモになってまさかの三角関係とか!? これは海軍掲示板に載せるしかないわね……」

「五十鈴ちゃんもやめて、お願い」

「ご、ごめんなさい、提督もそんな顔するのね。座頭市の表紙みたいだわ」

「うん、許すから、おっぱい、揉ませて」

「通報」

「クソオ！　なんて生きにくい世の中なんだ……ッ！……って、あれ？　電話鳴ってる？　誰のよおくもう。執務中は携帯バイブにしておいてって、口がバイブみたいになるぐらい言ったのに！　って、俺やん」

「は？　死ねば？」

「めんごめんご、でもちょっと大事な用事だから出るねん」

罵倒暴言を超えてパワハラとも汲める五十鈴の言葉をヒラリと流しながら、結城司令官は廊下に出る。

「……行っちゃいました、あつ、この書類の山どうしよう……!?!」

「ハア……ホントだらしない提督ねアイツ。まあこの書類は手伝うわ。名取にだけ任せるのは流石にブラックだわ」

「え、いいのっ？」

「まあその代わり、この五十鈴の手を煩わせたんだから、その分は整工班の仕事手伝ってもらうことにするわ。もしかたサボったら……うん、殺すわ。名取はどんな刑がいい？　海に一時間沈める刑とか、三日間男娼させる刑とか」

「恥辱の刑、とか……」

「結構むづいこと考えるわね……」

司令官の自室。

自室に戻って、誰も聞いていない事を確認しながら電話に出る。派手な発言と普段の言動からは思いもよらなほど殺風景で、なおかつ荷物が一纏めにしてあるが、これは単に必要な物しか出してないからであり、特別な理由があるワケじゃない。

「もしもーし、誰ツスか!?　今ア執務してたんすけどねエ!?!」

『第十二連隊の連隊長だ』

「連隊ってことは……陸軍ツスか？　陸軍が俺に何の用ナン？　つか、第十二連隊ってどこだっけ……?」

『惚けるなよ貴様、長崎に駐屯する連隊だ。言わなくても分かるだろう』

「な、ナンの用っすか……?」

『貴様の同期が〃陸の資〃のある場所に居たのだ。穴戸龍城大佐だったか? アレが、深海棲艦教とかいうアホ共が襲撃してきたタイミングと一致して、艦娘と共に居た。これはどういう事だ?』

「ど、どうって俺に言われても……ダチとはいえ、プライベートには口出しするべきじゃないって思いますし、偶然じゃないツスカね?」

『偶然なワケがないだろう!? あの警備府の司令官、一説では周りに彼の派閥を構築するほど仲間を取り入れていると聞くではないか!? そんなヤツが偶然、しかも我々陸軍の重要拠点に、襲撃された日に居るなどしてたまるかア!』

派閥というほどでもないが、海軍内でも穴戸司令官と親しい、あるいは同期、または英名に憧れる軍人や元部下などの仲良しグループが組織的に見られる事がある。無論、その大部分の条件を埋める結城司令官も、メンバーとして認識されている。

「お、俺に言われても……つかその日って、警備府が善意でボランテイアした日じゃないですか?」

電話を耳元から離しても聞こえる怒鳴り声を軽くあしらう結城司令官。

“陸の資”——俗に言う、陸軍の隠し財産の事である。

穴戸司令官がそこにいたのは偶然だが、連隊長がヒステリックになるほど重要なものであるという、ある種の暗示でもあった。

深海棲艦教は、深海棲艦出現以来から歴史を持っており、熱狂的な信者が居ることで知られている。各国にも点在しており、“陸の資”を開ける為の鍵を作り出すまでに至った詳細は憲兵隊の尋問でも引つ張り出す事は不可能だったが、発火点の大元は海外にあると、僅かながらに言及された。

「まあ〜でもおなるほどお〜へえ〜ソーナンスねエ! んで、なぜオレ?」

『深海棲艦教の事も、あの司令官の事も含めて、すべて貴様の仕業ではないのか? 海軍に有益な情報を提供する事のできる人間など、貴様しか居らんだろう?』

「そんな事で疑われるオレツチマジ被害者。まあ風俗でナマハメナカ
○シ入れまくるなら横領も止むなしですなア……つか、この辺風俗な
いのホントゴミイ！ 事実上左遷ツスよ左遷ツ！」

『割と真剣な話なのだが？』

連隊長の落としたトーンは、結城司令官を真面目モードにした。

「俺ツチベつに何もしてませんけどお……ってか、陸の資を管理する
事はフィリピン政府、オマケついでにアメリカ政府にとつても重要ジ
コーですしい？ 海外政府がワザワザ株を分け合った企業や個人事
業をスゲー使つて複雑困難にしてまで金の流動隠そうとしてるンで
すから、それに触るなんて俺の国だけならともかく、アメリカとかに
消されそうだし……」

結城司令官はかなり前から財産の事を認知していた。彼の本国に
とつて重要である為、その動きの一部を監視する役目を受けている事
もあるが、隠し財産の存在を知ったのは偶然である。

これらのキャッシュフローの正体は、最終的にアメリカ政府が主体
となっている不特定多数の企業による、日本海軍関連の企業株の“動
向”だった。

原則的に、国が直接軍関連の株の買収を許さない政府の目を掻い
潜つて保持しているものだったが、その中には結城司令官が支援する
フィリピン政府を含めた、数多くの政府が参入していた。

陸軍もそれに参入しており、また彼らも海外からの支援と投資を受
けている。もちろん直接ではない上、各国もまた各国お互いの影響
力を強めるためにしている事なので、ある程度は許容範囲であると、
誰もが理解している。

陸軍は、これらの金の動きの一部の管理を日本国内で任されるほど
の支援を受けているが、売国奴とならないための努力は数十年前から
していた。

トレーダーやファンドマネージャーなどの支援により、少ない資金
運用と節約を数十年かけて海軍やアメリカ企業への投資に使った結
果、ある程度の資産にまで膨れ上がらせることには成功したが、未だ
に海外の流入力が強い。

日本海軍も、空軍ですらやっている事の猿真似を陸軍単体で金を回した所で、それで海軍転覆はおろかサポタージュもままならない……というのが、後の穴戸司令官の感想である。

しかし作戦を遅らせる程度の事は可能である。海外の助力を求めれば、サポタージュレベルにはなる。

連隊長は、元陸軍元帥の従兄弟である事もあり、この重要な任務を任されているのだが、流石にこの時期に深海棲艦教から受ける事は想定していなかった。

連隊長の脳内のスケジュール帳には、長崎にある深海棲艦教のアジトを突き止め殲滅し、同時に重要人物である穴戸司令官を陸軍基地に呼び止め、一連の事件の関連性と、より有益な情報を吐いてもらうという大胆なイベントが書かれてある。

あのコンビニを襲撃した一人の狂信者は、遅れて7人を連れ、地下にあるデータベースにアクセスしようとした計画をだったらしいが、結局逮捕されたのは実行犯ただ一人だった。

その情報から察するに、遅れてくる7人とは、あの艦娘たちと穴戸司令官だったのではないか……沖縄への作戦、軍拡、編成を進めている中で、多少ヒステリックになるのも無理はない。

表には出されない、刻一刻と変わる外部の事情などは、一番近場にいる、それも半ば外国のスパイのような形で所属している結城司令官に聞くのが一番だと考えたのが、今回電話をかけた理由でもある。

「フィリピン政府についても、俺が支持しているのは本国を守ってるフィリピン政府であり、危ないからって事実上中国内陸で亡命政府作ってるようなスカポンクソザコじゃないツスね」

現在、政府はマニラから隣のケソンの内陸部分に移ってはいるが空襲の激しく、議員のほとんどは中国、及び台湾で安楽している。人口が一億を超える国民全員がそれをなせるはずもなく、依然として死人が絶えない状況下においても平然としている権力者に対して、怒りの目を向けている軍人は彼だけではない。

『正当な政府は彼らだ。貴様に金の情報を与えているのも、中国にいる大統領ではないのか？』

「自分たちだけ安全な場所にいる議員等か、危なくても国民のために命張るフィリピン軍か、どっちが正當かなんてのは平和になった後で国民が決めるツス。それに、その金の情報は元々俺が自分で探つて情報仕入れたんで」

『何れにしる穴戸司令官に話してもらえばいいだけの事だ。貴様、自分は何事もないと言つたが、相違があればどうなるか分かるな?』

「ふ、二人きりのヒミツを暴露したセキニンを取るなんて……あ、男同士だとキモいツスねエ！ ヴオエツ!!」

『コツチこそ願ひ下げだボケエツ!!』

電話を一方的に切られた結城司令官はベッドで横たわり、毛布に包まりながら愉悦感を味わっていた。

八丈島作戦中に、作戦の開始による海外の政治、軍事、経済的の動き方を記録し、情報を処理してはいたものの、結局は使われる事になった情報屋としての腕は一流である。

人脈も相応にあり、陸軍少将程度になら軽口を叩けるほど、その人柄は愛されている。

陸軍の内部事情を探る為にホットラインで陸軍少将と、陸軍の隠し財産の事を15分ほど話していた事が、結果的に彼の元部下である斎藤大佐に伝達し、それは穴戸大佐にまで及んでいる事に、結城少佐は気づいてない。

しかし、何れにしても親友の危機であることには間違いなく、彼はパソコンを開いて電報を送る。

連絡先は穴戸司令官の個人メールなど多数あるが、その中でも、以前試しに送りセキュリティ面で盗聴、盗視の可能性が低いのを確認した警備府宛に送る。少なくともそちらのほうが読まれる可能性が高く、そして何より個人メールだと自分が送った同人誌の下書きメールと感想で埋もれるかもしれないからだ。

送信されたメールが彼の目に届く事を願い、結城司令官は再びベッドに寝転がり、瞼を閉じた。

「……ん? え、もう返事来てんの!? 何時もは既読無視とかJKみたいな事してんによオ!? オン!」

長崎駐屯地

聴取は終わった。

気分爽快！ 活気溢れて！ 駐屯地に向かうぞお〜！

そのために俺は警備府の外にある街を歩いているのだが、相変わらず賑わっている。

直接経済を動かしているのは市民だが、その基本となるのが平和であり、俺たちがしている日常的な任務である。そんなのは当たり前で、通り過ぎる市民からは感謝の意を送られた事があるが、そのほとんどはやはり守られる事が当然だと思っている。

税金を払っているんだから当たり前じゃん、なんてのは傲慢な考えである。俺も税金払ってるし、砲撃と爆撃の嵐が目の前に来たとして、それから命を救われるためだったら一億でも二億でも払うだろう……だから今「あ、税金泥棒」とホザいたクソザコは俺の前で頭を垂れるカス。

『きやああ!! 時雨様ああ!!』

『白露様ああ! 愛してるウウウウ!! お、股開いちやうウー!』

「ど、どうも……」

クソ、女子学生の麗しいお見脚がチラホラさせやがって……町中でも痴漢されたいのか? っておもうほどミニスカな女性がレ○プされずに歩いている。メキシコなんて即路地裏モノだぞ? 俺という司令官様が、貴様らおま○こに、権力ち○ぽのなんたるかを伝授させてやろうかアアア!?

と、傲慢な考えを持つ悪代官司令官もいるらしい。

同僚から聞いた話だと、海軍基地の司令官していると、自分がその帝王にでもなったような錯覚に陥るのとか。

「ほーらあ! 早くしないと置いてくっぽい〜!」

「あまり走らないでね〜夕立! あっ、美味しそうなパン屋さん!

ほら穴戸くん! あそこなんてどう? 連隊長さん? 好きそうじゃない!」

「穴戸くんが僕たちのために外に出てくれて嬉しいなっ、荷物持ちは女子にとつて必須だからねっ」

「ねえ、俺、言つたよね？ 俺、連隊長さんに持っていく折り菓子買いに行くだけだつて、言つたよね？ つていうか、今から会いに行くんだから折り菓子さつさと買って持っていくぞ」

「えく？ いいじゃん別に。僕たちだつて休暇使ってるんだからちよつとぐらい付き合つてくれてもく！ チラチラ？」

「は？ 時雨テメエ何を指さしてんだ？ 宝くじなんて買わないに決まつてるでしょ馬鹿かお前!? ロトは悪魔だ。絶対に買わない。俺の金をむしり取つたクソカス悪魔め、数十万がパーだぜ」

「買ったんだ……」

哀れみの目を向ける白露、時雨、そして夕立ちちゃんの三人は、今日の旅路のお供である。

夕立ちちゃんが大胆にもボディータッチをしてこちらに大きな果実をむにゅつとぶつけながらできたてコロツケをおねだり。

多分自分の人生の中で最も妖艶でエッチな顔をしていると自覚しているような挑戦的な表情を浮かべながらビーフジャーキーを強請る白露さん。

そして金を数万倍にするためにと金を使わせようとする時雨は、自分の金で買えと言つても「お財布忘れちゃつたつ」とスカート下の膨らみを見れば丸わりの嘘をついてまで俺に買わせようとする。

なるほど、これが帝王の気分か。

帝王、絶対になりたくない。

つか帝王とか覇者とか支配者とか……もつとそういう言葉に適任な人いるだろ。例えば大よど……いや、やめておこう。なんか殺される気がする。

道行く人々から「きやああ!!」とかけられる声と、「あ、しれいかんのオジちゃんだ!」と俺に近づくと礼儀の成っていないクソガキ共と、ただでさえ妨害が多いのに「我々の物欲を満たせ(貢げ)」と自ら俺の障害になろうとする白露姉妹の三人を遮りながら、俺はやつとの思いで折り菓子を買って、陸軍連隊長のいる陸軍基地……正式名称、長崎

陸軍駐屯地にたどり着く。

長崎、駐屯地。

「たどり着いちゃ……ったあ!!!」

「ここが連隊長のハウスね……てか大きい！ 僕たちの警備府みたいに大きい！ 夕立、こういうところに住みたいね！」

「っばい！」

「そんなご立派な基地に、白露、いっちばんちゃーく！」

「俺が先頭だから二番でしょ……」

「なんか言った？」

「なんでもないでしゅっ……あ、小官は宍戸龍城大佐であります。本日一時より、連隊長殿とのご面談を予定しているのですが……」

「ハ！ 宍戸龍城大佐及び三名を、連隊長の所にご案内します！」

門番的なヤツの一人から、案内役をそのへんの将校が受け継ぎ、敷地から建物に入っていく。

内装は海軍と変わっていて、どちらかと言えば海軍兵学校とかの、職員室に近い場所っぽい感じがする。匂いは鉄分を抜いた海軍基地で一見代わり映えしないと思うが、つまりはとても汗臭い。臭い。

こちらは警備府とは違って歴史的な建物であり、彫刻や肖像画のよくな伝統的な代物が所々出てきている。

歩いている途中の夕立ちちゃんは、少し不安げな表情で見上げてきながら、俺の裾をつまんできた。

「な、なんか緊張するっばい……」

「怖い？ なら……俺に抱きついてもいいんだぜ……？」

「キモ……」

ボソッと呟かれた言葉には、白露さんと時雨の苛立ちが込められていた。

いやあ……俺、カッコつけるのマジ得意なんだけど、いつもキモって言われると流石に泣きたくなるわ。

「う、うん……えいっ！」

「「えい！」」

夕立ちちゃんは、俺の腕に思いっきり抱きついてきた。

先程とは比べ物にならないほど強い圧力胸を押し付け、そして程よく露出した生脚が今にも絡みつきそうな勢いで密着してくる。上目遣いで見上げる夕立ちちゃんは頭を肩に乗せ、顔の半分を俺の上腕に埋める。

「最高」

「は？ 宍戸くんホントウザい」

「うざーい！ 夕立ちがやってるんだから、お姉ちゃんがやる権利アリだよねっ？ ふひひっ！」

そして白露さんも抱きついてきた。

夕立ちちゃんと比べると更に大きく、何処か包容力のある弾力が胸にみにゅつと俺の理性を揺さぶった。

両手に花とは正にこの事。

そして時雨はブツブツ文句を垂れながらも、名残惜しそうな表情を浮かべるが、独占されている両腕には既にスペースはない。

案内役の人もこの俺様のハーレムを見て以降、舌打ちしながら執務室まで送り、ノックをして俺たちを執務室に入れた後、自分の持ち場へと戻っていく。

駐屯地執務室。

ハーレムを作っている事がそんなに腹立たしかったのか、案内役が出た後、曲がり角で壁に蹴りが入られたような音がした。

しかしそんなことは今は気にしてられない、今注目すべきは、目の前にふんぞり返りながら偉そうな顔で王座に鎮座する連隊長殿である。時雨たち三人も、敬礼して顔を引き締めた。

ついでに、連隊長の隣りにいる女性将校に折り菓子を渡して、再度俺は敬礼してそれを下ろす。

正確には折り菓子ではなく、エッグマ○クのパン無し百枚ちよつとだが、情報によると連隊長はこれが好きらしい。ただの円状に構成された卵焼きが好きとか……偏食家って正にこういうのを言うんだよなあ……だからデブいんだよデブ大佐。

「態々お忙しい所をすいませんな、宍戸司令官。そちらは貴官の艦娘とお見受けいたしますが……」

一人で来ると言ってきたので、戸惑っている連隊長は座り直す。

「はい。恥ずかしながら自分は人見知りの癖がありまして、大抵初めの場所に来るときは、家族絡みでの付き合いをしている彼女たちを連れ来ないと緊張してしまいました……それに、この地を長きに渡り守り続けてきた陸軍駐屯地ともなれば、むしろ警備府総員を連れて研修でもさせたいと願っている所存です。先の災害での采配、並びに人員割は、私も教鞭を賜りたいと願うほどです」

「ハツハツハ！ かの穴戸司令官にそう言われるとは光栄の至りでありますなあ。まあ、それでも警備府のお蔭で予定より一週間ほど時間を短縮できましたので、我々だけの功績であると揶揄されるのは、少しばかり顔を顰めてしまいますがな」

「ハハハ、当然のことをしたまです」

「……………」

暫く全員に妙な沈黙が漂う。

この空気を掌握するのはどう考えても、連隊長が口実として俺を呼んだ「お礼をするため」という雰囲気には思えない。まるで何か企んでいるような雰囲気だが、それを裏付ける証拠もないままである。

「……………」

「……………」連隊長殿、俺がここに呼ばれた理由は、確か警備府が行った援助についての謝礼ですよね？」

「ん？ ああそうだったそうだった、貴官ら海軍との、これからの連携も兼ねてと思……………」

「その件はまた後ほど構いませんが、それよりも少し重要な案件……………」ではなく、情報を提供するためにここに参ったのです。陸軍では、隠し財産を保有していると聞いたのですが、本当でしょうか？」

「……………」随分と直球だな？」

目の色を変え、同時に時雨たちが立ち位置を変えた。

「その手の都市伝説は五万とあるのだが、それを探す企画をテレビ番組とでも話し合ったのか？ まあそうには見えないが……………」それで？ その件を態々確認しに來ただけというわけではあるまいな？ 確証があったとしても、それにより貴官らがここに來ること自体が、ど

れほど自分らの立場を危うくしているのかは言うまでもあるまい？」
「はい、実は……お、来たか」

—————

俺たちは、結城からの話を聞いて、その脚で連隊長がいる駐屯地に
向かった。

明石次官と俺に詳細を話す結城が発したのは、衝撃的な言葉だっ
た。

要約すれば、海軍保守派と海外勢と陸軍が、海軍に対しての経済的
支配権を得ようとしており、その金の流動の一部を記録したデータ
を、この連隊長殿が管理しているらしい。

海外勢とか陸軍はある程度発言権を有しておきたいと思うのは当
然だが、海軍保守派は沖繩作戦を止めたいと思っているのだがらめ
ちやくちや面倒くさいし、身内なので反対派の区別がつかないのが難
点だが……海軍保守派は既に虫の息だったはずなのに、まだそんな余
力があるのかと思うと頭が痛い。

しかし、この間連絡を取った蘇我提督は俺を励ましてくれた。

『心配するな！ もうそんな奴らのせいで危険な面倒事は起きない
！ 起きたとしても……この俺が、お前らを守ってやる……ッ』

ちよ、ちよ、ちよ、その上腕二頭筋で俺を抱いて。

だが、陸軍に関して言えば既に解決していたとなれば、陸軍隠し財
産……通称、陸の資とは、なんとも呆気ない。

解決していて、俺の仕事はまだ自分たちが勝ち組だと思っている連
隊長の目を覚まさせるだけだと思っていたので、それを聞いた俺が街
をウキウキしながら歩いていたのは言うまでもない。正に無双状態
だった俺と時雨たちだが、やはり本人を前にすると緊張するモンだな
……だけど、明石次官との側近達が来たとなつては、動揺するのは連
隊長の方になるだろう。

「ノックせずに失礼します！ 私は工作艦の明石です！」

「と、その付添の結城司令官様ですよ〜……あれ、誰も聞いてないっつーか驚いてない？ 五十鈴ちゃん、オレっち影薄い？ まあ今回はそれでもいいんだけど」

「どうでもいいでしょそんな事。ていうか、なんで私までこんな所に……っつていうか、すごい面子ね」

「「っ!？」」

ゾロゾロと入ってきたのは、明石次官を始めとする側近の護衛隊数人、そして結城司令官と……イスズとか呼ばれた彼の秘書艦である。秘書艦が爆乳だとは聞いていたが、こりや……エロいな。

結城の人脈は俺よりも広いと思う。それは陸軍の門を顔パス……或いは何らかの手を使ってスムーズに入ってきたその手腕だろう。何れにせよ、こんな人数で入ってくるなんて非常識だと俺も思う。と
いうか、何これ、完全にクーデター起こす時に占拠される司令室の図じゃん。

執務室の中心にいる俺の立ち位置的に、俺が主犯？ うそおん……時雨が珍しく俺の腕を掴んできた。そして白露さんと夕立ちちゃんは抱き合ってる。俺の護衛すると威張っていた艦娘たちも、この非常事態には啞然とするばかり、ということか。

「何奴!? っつて、工作艦……聞いたことがないな？ なんだ貴様は？ 宍戸司令官の旗下の艦娘かなにかか？」

あの……それ聞く前にちゃんと思い出す努力とか……してくれませんかねえ……？

一応俺たちの上司なんで……正確には上司の上司なんで……その……改めてこの人を紹介するのって面倒くさいっつていうか……まあいいや、教えてやるよ情弱者ツ、キリッ。

「ご存知でいらっしやらない!? ここにおわす方は、海軍省所属、海軍次官明石中将であらせられますツ!! 更に言えば、海軍省軍需局局长を兼任為さっており、日本統合造船の社長も兼任している、言わばスーパー艦娘ですよ!! 知らないはずないでしょう!! アホですか!?! この今世紀最大の大傑作! 大艦娘とはー!」

「あ、あの……もういいですから……」

明石次官は顔を半分隠しながら恥ずかしがっている。

この人、本当にあの大淀総長の友達なのか？

いずれにしても、連隊長は驚きを隠せていない様子で、目が飛び出るぐらい見開いていて、そして隣の女性将校は隣の部屋に逃げようとしている……が、警備隊に止められる。

「な、なぜ……あの、次官閣下がここに……!?!」

「はい、実は陸の資の件について、色々とお話をしてもらって、調べさせてもらったんですけれど……」

「ゆ、結城司令官……貴様かア……!」

「す、スンマセン。あ、でも日和見主義者ってワケじゃなくて、元々海軍派なんでオレっち! あ、でも洗いざらい話したのは結果的に良かったかもしれませんよ?! 感謝ほしいツスねえ!?!」

「陸の資と呼ばれている海軍関連事業の株は、既に我々もデータとして持っています」

「……なんだ……と……!?!」

明石次官の部下……正確には、海軍サイバー防衛軍という海軍大臣直轄の部隊が既に情報を補足していた事にある。

所有権を直接陸軍が保有していない以上、金の行き先をデータ上で観測していれば、操作は容易だというが、俺はハッカーではないのでメカニズムは知らない。

実際に、いくつかは海軍の管理下に置かれ始めており、更に言えば陸軍関連の会社の株を保有しているのは海外勢だけではなく、逆に日本海軍、そして空軍が保持しているらしい。まあ陸軍がやつてるなら海軍も……と言わんばかりだが、比率は断然に桁違いである。

海軍のサイバー軍その金の動きを察知した時、告発ではなく、逆に水面下で奪取を凶ろうとするなんてマジ大淀。陰謀と謀略の交差に巻き込まれ、流されないように俺はあえて平然を装う。

というのが今回の陸軍事件の真相だ。俺は明石次官からこれを聞いて、斎藤長官流石すぎてマジ俺の伊達男上官だわ、一生ついていく事に決めた。というより多分、他にも多方面で何かしら海軍の力を確立しているんだから、もし親潮とケツコンしていたら……いや、そう

いうのは流石に道徳的な問題で駄目だろう。

まあ要は、海外はともかく陸軍に関して心配する必要はなかったということ、俺も拍子抜けすると共に面倒くさい事が起きないで良かったと清々していたところだ。

保守派も陸軍とその情報を共有していたと思えば、彼らの危険についても消されるだろうけど、まだ海外からの圧力が掛かっている。しかし、敵を一つに絞れて明確にできただけでも有り難いと思いつつ、一旦この場で安堵の息を吐く。

連隊長はその真相を聞いて腰が抜けたのか、椅子に項垂れながら、二段腹どころか太りすぎて風船状になった腹を突き出してる。

剃り落としてない毛が汚ねえ。

でも、軍人名家に生まれたとはいえ、彼の實力は決して無能ではなく、明石次官というトップネームと、仮にも秘密を共有していた結城も居ることで、信憑性を理性的な考えのもと、明石次官の言葉ですべてを察したような表情を浮かべた。

「そうか……私が守り続けた……受け継いだモノが……」

相手の気持ちになれば痛感するほど同情することもできる。

俺には権力とかを保持するだけなら、その人生をかけられるような執着性を作る事はできないが、彼は元陸軍元帥の従兄弟らしく、うまく行けば彼も未来の陸軍元帥になり得る可能性もある。彼が受け継いだのは、長い間に渡って陸軍全体が家族一丸となって保持してきた資産であるようにも感じた節もあるのかもしれない。

しかし驚いたのが、その陸軍の財産があつたコンベニの地下にあるなんて……そして、俺があそこにいたとき、襲ったのが深海棲艦教だったなんて……物理的な遺産も含まれているため、完全に陸軍を負かした事にはならないが、場所と、財産の存在と、鍵がなんか教育に悪そうな形をしている事も海軍の一部上層部が知っていたとなれば……海軍を敵に回すなど、陸軍には警告したい。こういう陰謀的な何かが起こると、たびたび大淀総長を思い出すから、彼女が何らかの形で絡んでいる可能性もゼロじゃありませんねえ……人材の宝庫、海軍。

今なら入隊した記念に那珂さんの握手券が貰える！

とアホな事を考えている間に、俺は連隊長に近づいていた。

多分外では、連隊長の側近みたいな人たちも居るのだろうが、それも明石次官の警備隊に牽制されているっぽい。

時雨たちも帰りに何を奢らせようかと思考を巡らせているようだ。おう、考えろ考えろ。俺もう金ないぞ。

「……連隊長殿、顔をお上げください。俺たちは何も、連隊長殿の仕事を貶める為に来たわけじゃないんです。陸軍と今後も友好的な関係を築こうとするために、ここに態々脚を運んだのです。陸軍の隠し財産が、既に我々に見通されている事を知っていることだけを知らせるのであればメールでもできました。それを自分も含めて、あえてこの場まで脚を運んだ結城司令官や明石次官の事を考えれば、海軍そのものとしてはともかく、我々にとっては不利でしかありません」

「俺は……正直に言うと、連隊長殿を尊敬しています。これは本心であつても建前ではなく、陸軍という組織の為に尽力するお姿を見て、同階級の者でも到底敵わないほどの使命感、そして忠誠心を持つ軍人を、自分は他に知りません。有能というだけでなく、有能でありつつ、祖国を憂い、組織を愛す大佐の心意気に……ここにいる一同が、感嘆の思いで、今日ここに馳せ参じたのです」

え、なんのこと話してるっぽい？ とか、私そんな事思ってるんじゃないけど。とか、オシッコ行きたいんだけど、とか小声で言ってる奴ら少し黙れ。

「……しかし、私は結局守れなかったというわけじゃないか」

「いいえ、察知はしているものの、それをどうこうするには至っていませんし、コントロールを完全に掌握していると言えれば嘘になります……ですよね、明石次官？」

「はい！ セキュリティーは流石にすごいですけど……んっ」

実はもう全部破っちゃいましたー、と口に出しそうになったのか、口を塞ぐ明石次官。

「……で、何がお望みなかな？ 海軍省ナンバー2の明石中将閣下、長崎

警備府の穴戸大佐、そして結城少佐がここに居るのは、貴様の言つたとおり、ただメールで済ませられる要件に態々足を運んだわけではあるまいな？ 私の勘が腐っていないければ、なにか他の思惑があると見たが……」

「連隊長殿には、海軍……いいえ、日本軍そのものを一丸とするための架け橋になつてほしいのです」

「とうとう？」

「いくら我々が陸と海とで争つていても、それは外の勢力からすれば共食いの凶にしか見えないのです。わざわざ漁夫の利を得る機会をお与えにならなくても良いでしょうか？ 双方が協力すれば、漁師を威圧することは可能だと、小官は思います」

「……つまりは海外資本の流入を防ぐために協力しろということか？

そんな事が可能なのか？」

「それほど大層なものではなく、協定のようなものです。軍資金の取扱を、自分たち以外の組織を排他し、お互いの権利を強めるために使うのではなく、陸海空が協力し合う方針で進めていきたいと思つております。そうですね……少なくとも、海外資本が抜けても転ばない程度には持ち直したいと思つています。過去の伝統と、それに基づいた陸軍と海軍の半ば感情的な亀裂は、国全体にとつて有害であつても有益にはなりません。貴方ほどの軍人ならば、この意味を理解するのに苦労はしないと思ひます」

「ふむ……」

連隊長は鎮座する椅子に寄りかかりながら、一分程度熟考した。

彼の姿を見て海軍勢の艦娘たちは、時間が経つに連れて段々と顔の表情を歪ませていった。

俺もあと数回ほど言葉をかけたが、連隊長はそれに返答する様子を見せず、口を開いた時には、既に溜息を漏らしていた。

「ハア……まさかこれほど海軍に勢力を確立されていたとは思ひもしなかつた。脅されていると被害者顔をさせてもらば、この場は協力する、としか言えない。お前たちに協力体制を円滑にする方法があるのかという点は気になるが……」

「何れ我々の組織は統合軍として結合されるでしょう。しかし、それまでに我々の連携がグダグダであれば手遅れになります。ですので、少なくとも海軍へのサポータージユは御勘弁を」

「フム……だが、もしも陸軍が損を被るような算段があるのだとしたら、我々と貴様らとの関係修復は更に厳しいものになるだろう。これは脅しではなく警告だ。私の後釜など、いくらでもいる。だからな」

「はい！　ありがとうございます！」

まるで親に結婚を認められた女性のように頭を勢いよく下げる明石次官を見て、彼も動揺している様子だ。しかしその人柄が功を奏したのか、少しだけ連隊長の表情が和らいだ様子だ。

まだ政治的、経済的な計画や算段は決まっていないものの、この挨拶は歴史に残らないが、残されるべき瞬間であることに間違いはない。

と、色々と綺麗事を述べながら本音を隠していたが、本心という名の汚い事をいうと、世論的にもこの場でも主導権を握ってるのは俺達だからコイツら陸軍に選択権はない。

「ハア……言の礼節を損なうようで悪いが、クソ、なんて日だ……まあ、一朝一夕で叶ったモノでもあるまい……私が、甘かったと言う事か……クソ！　寄越せエ！」

そう言いつつ、女性将校からエッグをを取り上げて食べやがった。「俺も食べていいですか？」

「勝手にしろオ！　クソ……どこから漏れていたんだ？　どうしてこうなった？」

―自問自答を繰り返す連隊長。

海軍サイバー部隊は、どこからか情報を察知したのではなく、もう陸軍空軍がそういう隠し財産の存在があることを想定した上で行動していたのだが、その事に気付くのはもう少し後になるだろう。

それよりも問題なのって、陸軍が潰しに行ってる深海棲艦教なんだよなあ。

なんであのバイブみたいなカギを手に入れていたのかとか、完全に

謎だからな……あとで明石次官に彼らの事を話しておこう。

「分かりました……それでは、盃というほどでもないですが、ここは皆さんでこれを食べて、友愛を誓いましょうか。そこで隠れている陸軍の将校さんたちも、そして警備隊の人たちもだ……いや、食べる。俺一応、連隊長と同じ階級だからお前たちの上官だし、食べる、命令」

「「は？」」

「俺達もツスカ……」

俺の発言に驚く人と、俺の発言に理解を示さない人の二種類が、俺を凝視した。

ほとぼりを冷ます方法は2つある。

時間の経過か、ここで有効な、何らかの方法で話題を逸らす方法だ。明石次官や結城からは強引にでもこやかかな雰囲気で去りたいとお願いされており、結城からは特に、この連隊長はエッグを食べて居るときと、執務ツクスをしているときだけが幸せだと言うので、みんな食べる雰囲気を作る。

センチティブな事情には慎重を要するが、時として多少なりとも強引に……これで一件落着、という大団円的な雰囲気完全に作り出すにはまだ少し時間がかかりそうだが、ここで一旦の休息を入れる事は大いに意味がある。

考える時間、ゆつくり話す時間、そのすべてが設けられる。これで海軍の力が更に増すが、陸軍の力も増やすことで更に軍全体を強化できる。

そして驚いたのが、予想以上に陸軍将校が隠れていた事だ。

多分結城と明石次官に援軍要請出さなかつたら、細マッチョな筋肉質な男たちに捕らえられて今頃俺と時雨たちは……いや、時雨たちは別にいいさ、艦娘だし、強いし。でも俺は？ 流石に十数人が俺を拘束したら？ 俺のケツが殺人現場みたいになるぞ。

ソースは自前で持ってきた。

これを餌に友愛の証としてみんなで乾杯の音頭を取るのももちろん俺。こういう強引に仲良し的な雰囲気を持っていくヤツがないと、性格のバラツキと個々の温度差を利用して仲良くなるって方法が

できなくなるから、誰かが調子のいいバカをやらないといけない。これも実は將軍になる為のマナー講座で出たりしたんだが、人間心理学の話は置いておこう。

普通こういうのは結城の役目だが、一応裏切り者として連隊長の脳裏に刻まれるだろうからやりにくいんだろう。部屋の一番端に秘書艦とジツと身を潜めている。

「それでは、陸軍と海軍の未来に、カンパニー！」

「「か、かんぱーいっ……う……？」」

……さつさと食べ貴様ら。

どうでもいい事だけど、みんな同じものを食べる時で別々のソース付けてるのを見ると、なんかみんな個性があって面白いなと思うたりすることがある。

時雨は醤油、白露さんと夕立ちちゃんはブルドッグ、結城と秘書艦ちゃんは塩、明石次官と連隊長はケチャップなど、様々なバリエーションがある。

もちろん俺はこれだ。

「……うわ、何やってるの穴戸くん!」

「は? どうした時雨? ああーまさか俺が卵食う時のソースのコンビネーション見て驚いているんだろ? いや、驚くほどでもないか、これやるの常識だよなあ?」

「「え……?」」

みんなが俺を見てる。まるで化物を見たような表情で。

「マヨネーズと醤油、それだからしだと……? 貴様、正気か?」

「え、な、なんでするか連隊長? 俺、全然変なことしてませんよね?」

「マヨ醤油アンドからし……みんなやるよなあ!」

「穴戸くんキモイ」

「流石にそれは……あははっ。やばい、白露それ見て吐きそうなんだけど」

「それ完全に犬の餌よ」

夕立ちちゃんがつぽいを外した瞬間だった。

「明石次官、五十鈴ちゃん、普通卵には塩だよなあ?」

「五十鈴は普段なにもかけないし、別にかけてもいいのだけれど……あれはちよつと……流石提督のお友達ね、キモいわ」
「き、キモいは流石に言い過ぎだと思えますけど……まあ、ちよつとそれは……」

「宍戸くん、和と洋の融合とか言うつもりだろうけど、正直〝混ぜるな危険〟だと思う。グロい」

……ひどい。

おれの、今世紀最大の発明だと思つてたのを……否定された……俺の……おれ人生を……っ!!

「う、うう——ッ!!」

「あ、宍戸くんどこに行くの!?!」

俺は連隊長の執務室を、両手で顔を隠しながら出ていった。

途中で何人かとぶつかったと思うんだが、外に出るまでどんなルートを通つたか覚えていない。

何より傷ついたので、俺が出ていったのに誰も追いかけてきてくれないことだった……時雨でも誰でもいいから、おれのことを、おいかけてきてほしかったっ……!!

・
・
・

と、面倒くさい女みたいな事を言いに行く為に戻ることもできず、俺は駐屯地の外から300m程度離れた路上まで来て、また泣いた。道行く人が俺を幼児退行した大人だと思つているようだが、そんな事はどうでもいい、マヨ醤油からしをバカにした奴らに俺自らが天誅を加えてやるッ。

「ぶえええええん!!! ぐえええええん!!!」

「ど、どうしたのかね君? 何か困りごとかね? まさか迷子とか

……」

「ひぐつ……うん、僕ね？ マヨ醤油がらしが大好きなの。それをね？ 来世まで崇れるレベルで侮辱した野郎どもがいてね？ 海軍でも陸軍でもいいから復讐してやりたいと思ったの……」

「そ、それは難儀な……ま、まあいいではないか。私もマヨ醤油は好きだぞ？ ……からは入れぬが」

「ほ、本当ですか!?! ……って、あれ？ 貴方は……が、蒲生提督!?!」

「そういう君は宍戸司令官じゃないか!? ど、どうしてここに……?」
「長崎にいるはずの自分より、佐世保にいるはずの司令長官殿とでは、どちらかといえば、それはこちらの台詞だと思えますが……」

とりあえず跪いている俺に手を差し伸べたのは、佐世保第一鎮守府の司令長官を努めている蒲生提督だった。この人とはかなりメールでのやり取りも個人的にしており、一般的な司令官や提督たちと比べても話しやすさは俺が群を抜いている、と個人的に思う。

沖縄作戦を海外士官や外国艦なしでやろうか言ってたレイシストな作戦にしようとしていたことでも、一部上級士官の間では有名である。まあこれは秘密裏に行われている人事的な事で、俺の発言権は、この事を知っている提督たちの中でも最下級なので、懐柔を行って司令長官との関係を良くしても俺の発言権が最上位に行くわけじゃない。

陸軍の資本の次はこれか……問題山積みすぎる。

いつそののと全部斎藤長官に投げてみようか、あの人なら全部できるだろ。

「あーまあそうだな……私用で来ている……といえはいいのだろうか？ 君に、用があったんだ」

「……え？」

「実は……私としても君のような有力な提督に心苦しい願いなのが、頼み、というよりも脅迫に近い命令になってしまふのだが、聞き入れてくれることを願っている」

「な、なんでしようか、それは？」

俺は、ゴクリと息を呑んだ。

「きんしん、してはもらえないだろうか？」

近親……だと……!?

俺の近親って、爺さんだから、つまり、そういうこと……?
ヴオエエエエ——ツ!!!

僕だけがいない警備府

「ねえ、穴戸くん！ 部屋から出てきてよ！ ほら、村雨のちよつと良
いおパンツだよ!? 普段なら頭から被って離さない濃度98%のお
パンツ！ 因みに残りの2%は僕の手だよっ！」

「時雨姉さん、流石にそれ私でも引くわよ？ あと、穴戸さんを貶める
のはやめなさいッ」

「ご、ごめん……」

……穴戸さんは、朝から具合が悪いと言って、今日の作戦立案書と
書類をドアの下から放り投げて、そのまま自分の部屋に閉じこもって
る。彼にとっては休日だけれど、なんだかんだでみんなとお話した
り、仕事の手伝いとか、風邪を引いても助言をしたりして回ってるよ
うな人だから週7日働いていたようなものだった。

いままでこんな事は無かったし、病気だったとしても私達ぐらいは
部屋に入れてくれる。

時雨姉さん、白露姉さん、そして一番心配している春雨と一緒に起
こしに来て、返事が悪い。

昨日、連隊長さんのところに行つて、白露姉さんたちが穴戸さんが
作ったソースを悪く言ったのが原因で、駐屯地を飛び出したと聞いた
のだけれど……それが原因で、彼がこのように部屋から出てこなくな
るのありえない。だって、どれだけ貶されても、一分後にはヘラヘラ
してる人だもの。

だから私は……んんっ、まずは穴戸さんをなんとかしないと。

確かに昨日からしよんぼりとしていたのは事実だけど、絶対に時雨
姉さんたちの言葉が理由じゃないことは、長い付き合いでわかる。

「穴戸くん、今回は白露たちが悪いから！ 出てきてくれたら、なんで
も好きなお願い聞いてあげるから！ お願い出てきてえ！」

「もうソースのことで気持ち悪いとか言わないから！ ほら、昨日当
選番号見たんだけど、僕三等で三十万円だって！ これでみんなと一
緒に遊びに行こう!? ね!？」

「お兄さん……姉さんたちを縛り上げれば、出てきてくれますかあ……？ お兄さんを侮辱した人は、誰であろうとこの世に必要ありませんもんね……!？」

「ひ、ひい!!!」

「……………」

それでも、宍戸さんは出てこない。

私達の思い過ごしであってほしい。

ただヘッドホンでも付けながら、寝てて気づかなかった……みたいに、平然とした顔で部屋から出てきてほしい。

きっと昨日はあんなふうには抜け出してそのまま警備府に帰ってきて、そのまま寝てしまったからちよつと出てきにくいだけかも知れない。

でも、もし彼が本当に私達の事で気分が病んでるんだつたら……私には、彼になにができるんだろう？

どれほどかっこ悪くても、私は……。

でも、本当に、嫌われていたら……？

嫌われる……イヤだ。

嫌だ、イヤだ、イヤだ。

私は……どうすれば……？

—————

秋の空には微々たる酸性雨と、人心を淀ませる暗雲が立ち込めている。

司令官が不在の時は通常、司令官代理として司令官職を兼任できる者、そして階級序列的にその任を自動で継承される者、または司令官が指定した者に限られるが、その全てを満たす者は、この長崎警備府では一人しかいない。それがプリンツ・オイゲン参謀長である。

執務室。

「ふくんふくん！ ……あーあ、天候が悪いと艦娘は気分悪くなっちゃうんだよねー。ね？ 村雨！」

「そうですね……」

「まあ艦娘だけじゃないけどね……シールドって雨になるとお腹痛くなるタイプだっけ？　っていうか、村雨ダイジョウブ？　なんか凄く落ち込んでるけど……」

「うん……っ」

秘書艦席で俯く村雨の心情は正に、心ここに在らざれば視れども見えぬ。

それでも淡々と仕事をこなす姿は素晴らしいと思ったベリングハム少佐は、空気を紛らわすために消えかかった会話を再着火させた。

「しかし残念です。CPT、SHISHIDOがこの場にいないなんて、私はどうしたらいいのでしょうか？」

「あの、なんでBellinghamがここに……？」

「遊びに来てくれたんだけどシールドがなくて暇だから、ついでに仕事も手伝ってもらってるの！　執務室に上げちゃったけど、いいかな？」

「Meは大丈夫……だと思う、Prinz？　大丈夫だよね？」

「手伝ってくれてるんだから、もちろん大丈夫だよ！　それと、私はオイゲンね？」

「ハア……しよんぼりCPT、SHISHIDOの尻に、MAGNUMぶちかましたいデース……ッ！」

眩かれた言葉を一瞬理解できなかったが、三人がその言葉を聞き返すことはなかった。

村雨、オイゲン、ベリングハム少佐の他には、ガンビア・ベイも執務に従事していた。ガンビア・ベイは戦闘を好まないが、ここ最近、穴戸司令官による第一艦隊との訓練方針で着々と自信を付けている。

お世辞にも強力な空母と揶揄されるほどの性能は持ち合わせていないが、自信と、戦闘に出る恐怖を克服したと思う彼女の意を汲んだ司令官が、必要な自信と恐怖に打ち勝つ方法を精鋭の第一艦隊から伝授させる事に特化させた訓練は実となり、仲間との交流も増えた。

日本語を勉強するために執務仕事を手伝っているらしいのだが、外国人の比率が高い部屋でそれは効率が悪いのではないかと、村雨は密

かに思っていた。

「まあいいでしょう。聞けば、卵を食べたと言うではありませんか。ちゃんと火が通ってなかったのではないのでしょうか？ もしそうなら、CAPTAINはSalmonellaにかかっている可能性もある……つまり……軍医が必要ということですね。私も一応Medicとしての経験はあるので、彼のもとに馳せ参じるとしましょうか……」

「駄目！ いっちゃだめ！ 今回は精神的なのかもしれないんだから！」

「離してくださいCDR. Eugen!! 私の愛を邪魔するのですか!?! 私なら精神面でもケアが可能な万能軍医となれますよ!?! SHISHIDO! SHISHIDO! 俺のTATSUKI♂♂♂!!!」

英国生まれのアメリカ紳士が明日の方向へと飛んでいったと確信したガンビア・ベイは、気にする様子もなく整備工作班に渡す書類を村雨から受け取った。

「これをお願いします……」

「Understood!」

—————

出撃所。

「整工班が仕事の合間に、ほんの一瞬だけでもその姿に見とれてしまう。」

それはどれほど嫉妬をされようと、女性として素晴らしい体型と美貌を持つガンビア・ベイの姿だった。白人というだけではなく、全体的に童顔で、保護欲が沸き立てられるあどけない表情の数々は、本国でも虜にしていった事に、彼女本人は気づいていない。

「これが資料、です」

「ありがとうガンビア・ベイ。今日は君の休暇だろう？ 君も休まなくてもいいのかな？」

「いいえ、Gambier Bayも、なにか手伝える事があれば……でも難しい戦闘はあまり……無理かも」

「ハハハ、それは司令官次第だが、君の意見を無視するような事はしないと思うよ。執務室に戻るのかな？ もし良ければ、こちらの書類も渡してきてほしいんだが……」

「Y—yes of course!」

ガンビア・ベイはその書類を持ち、執務室へと駆けていく。

しかし出入りする道は生憎の雨であり、可愛らしく「雨無理ー!」と叫びながら建物内に入っていく様は、整工班の一時の心の癒やしとなった。もちろん、彼女が癒やしを与えたのは整工班だけでなく、戦いから帰ってきた艦娘にも同様だった。

「相変わらず可愛いねえ……ゴクゴクゴクゴクゴクぷはあく!」

「隼鷹、飲みすぎないですよ？ ぶっ倒れでもしたら私が担がなきゃいけないんだから」

出撃所のベンチに、タオルで自分の顔を拭きながら、ガンビア・ベイを見つめていた第一艦隊旗艦の飛鷹と隼鷹の二人は、一時の休息を味わっていた。

「だってこの雨だし、最近酒保の補充なかったじゃん。結構堪えてたんだよねえ……ゴクゴク、ぷはあく!」

「まあいいわつ、次で最後だし。その後はゆっくりできる……あ、第五艦隊もお疲れ様」

「はい、第一艦隊のみなさんも、お疲れ様、です……」

涼月率いる神風ファイブは第5艦隊である。

妖艶な雰囲気醸し出しながら、後ろで悶々としている整工班の男性たちの性欲を沸き立たせている彼女だが、これでも駆逐艦である。一回り小さい神風型を率いている軽巡のような立ち位置にも思えるが、すべて駆逐艦で揃えた編成のため、水雷戦隊ではないが、そう勘違いされることが多い。それを何処かもどかしいと、神風は感じている。

彼女を含めて五人の和服少女は艦隊の戦力としては申し分ないものの、白露姉妹や、初霜の第四艦隊と比べれば練度も性能もイマイチ

劣る事実も、序列的な劣等感を感じるはずだが……神風達が最も前線に出される機会が多いため、虎視眈々とその練度を上げ、艦隊全体の戦力の均一化が図られているが、彼女たちはそれに気づいていない。「勝利してきた!?! いいわね、私の訓練が実となったのね! 間宮もそろそろ前線に出てみたら? 勝つって気持ちがいいわよ!」

「わ、私はあまり前線に出れるタイプではないというか……この前の演習でも、少しやらかしちゃいましたから……」

唐突に入ってきた足柄の自賛は共に来た間宮をも困惑させ、艦隊全員が苦笑いを浮かべている。

しかしそんな所も嫌悪感を感じさせない可愛さを持つ足柄……というのがみんなの本心であり、何故結婚できないのかと更に頭を傾げさせる要因となるばかりだった。

「そんなことよりも、食堂で新しいスイーツを作ったんですけど……もし良ければ作戦が終わり次第、皆さんに味見してもらいたいのですけど……」

「わーいー!」

艦娘だけでなく、その場にいた全員が腕を上げて喜んだ。

—————

食堂は間宮特製のクッキーが焼かれたとしてごった返すかと思われたが、それは仕事を終えた者へのご褒美であり、今日仕事がない者には必然的に優先権が与えられる。

「間宮さんの新作クッキー! やったー! ……あ、いやその……コホンっ! あ、ありがたく頂戴しますっ!」

「フフフツ、別にいいんだぞ三日月。私も嬉しい。甘味は最高だあ……」

食堂には菊月と三日月が相席して糖分の塊を味わっている。

前に、甘い物を食べて可愛くなれるのは女の子の特権である、と足柄に述べられたことがある二人は、それを思い出しながら「食べて可愛くなるとはどういうことだろう?」という話題へと突入していく。

足柄の真意は、甘い物に限らず、菊月や三日月のような見目麗しい女の子が美味しく何かを食べている姿は見る者を癒やすという意味だったが……。

「食べることを極めれば……丸くなり、可愛くなる……ということなのだろう」

「なに……!?!」

後ろから唐突に現れた若葉の言葉に驚く菊月。そして若葉に同行していた子曰が同じくクツキーを片手に同席してくる。

「若葉、どういうことだ……?」

「簡単な事だ。要するに、太れば可愛くなる、そう言いたいのだろう」「ど、どういう事ですか？ 太れば可愛くなるって、男性の方はみんなそういうのが好みってことなんですか?! み、三日月も太れば、司令官も私を……いやいや！ 大きくなるのは胸だけにしてほしいです！」

「あははっ！ そんな都合よくいかないよ！ 大抵はくお腹だもんね〜！ それに、人って球状のものが可愛く見える心理があるから、太るのも案外いいかもしれないよ〜？」

子曰が言った言葉を鵜呑みにしようとしていた三日月がクツキーをあと百枚ほど頼もうと立ち上がったが、菊月と若葉の牽制で座り直す。しかし立ち上がったたり、座ったりする三日月は何かの天啓を得たように身体の関節を曲げ始めた。

「三日月の身体を球状にすればきつと三日月も可愛くなれるはずっ！」

「それ多分違うと思う〜……」

「まあいい……若葉、お前が初霜達といたいの、珍しいな」

「ああ、実は部屋の模様替え、そして整理を初霜と初春がしたいらしくてな……そこで、第21駆逐隊、第四艦隊はやりたい派とやりたくない派に別れたんだ」

「なるほど……」

「でも、整理されるものの中には、若葉さんたちの物も含まれているんですよね？ 任せちゃってもいいんですか？ もしも取っておきた

いものを捨てられたらと思うと……」

「予め捨てないでほしいものは分けてある。それに初霜はそういう所はしっかりしている、大丈夫だ」

「子日も特にないしね〜！ んん〜おいしい〜このクッキー！」

「とは言っても、定期的に初霜が部屋を掃除しているから、今日は大掃除と言ったところなんだ」

「へえ〜」

「この〜日なんの日、今日〜は何の日？ お掃除の日だよお！」

「子日じゃないだ?!」

—————

警備府の廊下。

行き来する士官は参謀部から整工班まで様々だが、比較的行き来の激しい場所を通らねばゴミ捨て場にたどり着けない自分たちの部屋の立地を憎む初霜と初春がいたが、道行く士官たちには愛想よく笑顔を振りまく初霜は、どう見ても童顔で身体的に幼さが残る体型だが、立派な大人な女性としての魅力を兼ね備えている。

初霜自身は恋愛に興味がないうる様子だが、何時しか落としてみせようと思う男も少くない。

『よ！ 初霜ちゃん日曜日に俺とデートいかなーい!?!』

「ごめんなさいっ！ その日は訓練したいからっ！」

『初春ちゃんに初霜ちゃん！ 俺と一緒に街に出ない？ すごい面白いゲーセン見つけたんだけど！』

「すまんもう、初霜はあまりそういうのは好きじゃないんじや……無論、妾もなっ」

『穴戸司令官しらん？ ちよつとエロエロな用事あるんだけど』

「しらんわ」

ことごとく誘いを避ける初霜と初春だが、流石に持っている荷物の量と歩行距離が長ければ苛立ちも増えてくる。間宮特製のお菓子ができていることをまだ知らない二人だが、早く終わらせようと黙々と

ダンボール箱を運ぶ。

「ああもう！　なんで子曰こんなにごミが多いのよ!?　隠れてお菓子を食べるのは百歩譲っていいとしてもごミぐらい捨ててほしいわ……」

「まあその事は帰ってきた時に注意するとして……と、あまり急ぐと人にぶつかるぞえ?」

「心配ないわ!　ここ、これぐらいの荷物……!」

初霜は、自分の目線以上に積んだダンボール箱のごミにある、僅かな穴を頼りに運んでいたが、それが不用心であることは初春の目にも明らかであったが、往復する手間を考えてのことだったので黙認された。なので、ある程度は初春が誘導していたのだが、流石に曲がり角から来る人影を予測する事はできなかった。

「きや!!」

衝突したが、倒れたのは初霜の方だけであった。

初霜は転換が早く、すぐさま露わとなったパンツをスカートで隠したが、彼女の眼の前に居るのは艦娘だったので、少なくとも男性に見られるほどの恥ずかしさはなかった。

手を差し伸べてきた艦娘は、何処かで見たことのある艦娘だったが、なんとなく思い出せないでいた。しかし、この警備府の所属でないことは確かであった。その事に戸惑いながら、その一個艦隊編成の艦娘たちの……緑髪の艦娘の手を掴んだ。

「ごめんごめん!　大丈夫だった?」

「ええ……その、あなたたちって、この警備府の所属じゃないわよね……?」

「うん!　チーツス!　今日からここの艦隊でお世話になる鈴谷だよっ!　こっちはクマのん、こっちは親潮でー、あとバリーでしょ?」

それから綾波と、ゴーヤ。よろしくねん!」

「鈴谷……ああ!　穴戸提督の艦隊にいた……」

「ほう……これがのう……」

初霜と初春は、自分たちのゴミ捨てもそっちのけで、鈴谷たちをマジマジ見る。

これがあの鴨川要港部の前線艦隊として活躍した、攻撃型軽空母の鈴谷と熊野……そしてそれを支えた要港部のみなさん、というイメージで、現実の彼女たちと一緒に照らし合わせながら、徐々に現実感を帯びていく。

「失礼ですが、穴戸さんが何処にいらっしやるのかご存知かしら？ 挨拶にいかないといけないので……」

「司令……元気かなあ……ふふふっ」

それぞれの思惑を抱えた元部下である6人が、斎藤長官の人事により彼のもとに集結したという知らせはまだ彼のもとには届いていない。

「え、でも新しい艦娘が着任するなんて提督は一言も……」

「サプライズでつち！ 穴戸大佐はゴーヤ達と会うのを楽しみにしてるから、サプライズにしたいって親潮と鈴谷と熊野が直接海軍大臣さんにお願ひしたでち！」

「サプライズついでに、穴戸さんに男色への啓蒙をしたいと思っただのですが、来る前にとりあげられちゃって残念ですう……」

「当たり前でしょ……まあそれはともかく、今日は休日だと聞いているから、ここには居ないんじゃない？」

「えっと、穴戸提督なら部屋に……」

「よし、じゃあそこにつちやおー！ 穴戸つち、絶対みんなの前でかっこつけてたでしょ！ 実はね？ 穴戸つちって、鈴谷たちがいないと、夜泣いちやうんだよ？ それに、鈴谷の事が好きすぎて一緒にいないと何にもヤル気が起きないんだよねえ〜！ ふひひっ！」

「鈴谷さん！ 司令の悪口を言わないでください！ 張り倒しますよ！？」

「親潮さん、それは乱暴な気が……って、あれは……？」

鈴谷と親潮、そしてその他の艦娘が注目したのは、腕を組みながら項垂れる穴戸司令官の姿だった。

「え、ちよ、やだっ！ 急に来ちやう感じっ？ もう穴戸つちってば、鈴谷に会いたいからってセンサーでも付けちやってるの……っ？」

も、もう、しょうがないんだからあくあははっ！ 鈴谷のこと好きす

ぎい〜！」

「ゴーヤさん綾波さん夕張さん!? 親潮のお化粧大丈夫ですよね!?
ちやんと可愛く成れてますか!? 今度こそ落とせますか!?!」

「「お、落とせる落とせる……って、あれ?」」

鈴谷たちは大きく目を見開きながら髪の毛のチエツクをしたり、顔の化粧のチエツクなどを再確認したのだが……穴戸司令官は至近距離の艦娘にも目を触れず、腕を組んで俯いたままの状態で、彼女たちの目の前にあつた男性用トイレへと足を踏み入れた。

何言ってるか分からないけどこれでようやく解放される

さーて、と……どうしよう。

ガチでヤバイ状況になったかも。と、トイレで思考を巡らせている。

来る途中でエロエロな要件としてエロDVD貸してほしいと部下に頼まれたんだが、こんなに悩んでるのにクソみたいな要求する部下は左遷してやろうかと思っただわ。

とりあえず俺は優しいので、G A I J I Nにもらった近親相姦もののDVDを渡す事にした。

昨日の午後。

陸軍駐屯地周辺、の路地裏。

話しやすい場所に移動したが、そこはまさにアウトロー的な路地裏だった。見るところ、明石次官のように警備隊を連れているのか、路地裏には誰も来れないようになってる。

コートと帽子を深く被る提督はスパイそのものだが、この際、容姿なんてどうでもいい。

陸軍連隊長との一件があったばかりだというのに、俺への当てつけみために偶然、蒲生提督に会ってしまった俺は、彼から衝撃的な命令を受けた。

「少し落ち着きました。まさか妖怪のように生き続ける小官の祖父と、ハードな事をさせる願いだとばかり思っていました……それで、小官は何をすれば」

「謹慎だ」

「謹慎とは……どういう事ですか？」

「そのままの意味だ。君には、作戦が終わるまで謹慎して欲しいと言っているんだ」

つまり、沖縄作戦には参加すると言うことだろう。明確になんの作戦なのかを聞いておきたかったのだが、司令長官自らが足を運んで頼む折入りの令は、明らかに超大規模作戦レベルー沖縄作戦の話をしているのだと理解した。

「小官に何か不都合な点がお有りだったのですか？　もしよければ、無知なる身にお教えいただければと……」

「あまり言いたくないが……君の事を調べさせてもらったんだ。君の経歴を、とある人物の一言を聞き入れてからね……アダムという記者を知っているかね？」

「は、はい……しかし、小官はこの作戦を不利にさせるような疚しい経歴はなにもないはずです。なのになぜ……ま、まさか……！」

「……理解してくれたかね？」

そう、俺は……八丈島の作戦の時に散々言われた事がある。忍法セ○クス、孕ませ○クス、笑顔セ○クス。それだけじゃない、ゲイ三人衆が俺の執務室に忍び込ませたバディーとか、サムソンとかのゲイ雑誌の事も含めて……俺、傍から見たらただの淫獣やないか。

俺の存在が性欲まみれ、淫欲の塊で、邪淫である。

そういう解釈をされ、それが司令長官のお耳に入るほど露見しているとなれば……俺の人生、ついに終わるか。

「た、確かに小官がれつきとした海軍軍人としての気品風格に泥を塗ってしまった事は否めません。むしろ、然るべき処罰を受けるべきだと思えます……」

「いや、貴官は素行も素晴らしいと聞く。部下の評判もよく、その歳であれば申し分ない程だろうと思ってる……だから惜しいのだ」

「閣下にそのようなお言葉を賜るなど武人としての至りにごさいます。しかし、日本文化の妊法孕ませ○クスが流出したのは、多少の痛手でしたが、元々この国は近親相姦で出来たようなものであり」

「ちよつと待て、何だと？　なんだその、孕ませ○クスとは？　まさか貴様、そのようなモノを保持していたのか!？」

チツ……その事じゃねえのかよ？

「と！　小官の同胞が自らの過ちを嘆いていましたのを思い出し、い

つひかなる時でも、現在では海軍軍人としての行動を厳守しております。しかし、国を憂いる者としては、少子化防止の為に思い部下、更には学校に出向いては子作りの素晴らしさを啓蒙している所存。これらの日頃の行いは御国の為を思えばこそであります。司令長官直々の批難を賜われるのなら、それは武人の本懐として受け入れる覚悟です」

「な、なるほど、ああいや、君を叱ったりはしない、流石は私が見込んだ男だ……しかし、それでも君を作戰に参加させるわけにはいかない。君がこの国の生まれであれば話は別だったのだが……」

「……へ？」

「よりにもよって君が……と、我ながら落胆したものだよ」

一瞬理解できなかつたが、その詳細について聞いたです。

「ま、待ってください！ 確かに小官は生まれはこの国ではないかもしれませんが、国籍は日本としているのは言われなくても分かっているはずですよ！ 日本軍の威光を損なうようなことは無いはず!! なのに何故!?!」

「政治宣伝ではどのような手段も使われるんだ。將軍や提督の出身というのは後世にまで記録される。君もそうだが、米国を中心とした海外艦及び士官を作戰に同行させる事を見かねて、奴らが用意している文句を君は知らないだろう……作戰発令と同時に“我々の国民であつた穴戸司令官を使うのなら、作戰に協力する義務がある”という感じの、烏滸がましいプロパガンダをね。ハハハ」

「そ、そのようなことが……」

中国ならともかくアメリカならやりそうだな……これは例え情報参謀や通信班みたいな管制塔にいる人たちの中に一人だけ紛れ込んでても、その事実で釣り上げそう。中国は事実がなくても強引に捻じ曲げそうで怖い。

「君の近くをうろつく海外士官の件もあるしね……」

俺は一応、従順な方である。

だから、上司にその有意義性を説いた上で行動する。

海外士官との交流は、今後の彼らとの関係を友好的ものにして、か

つ扱いやすくする為の算段である……という俺の方便を認めただ上、司令長官殿には彼らに近づくと承を得た。本当は仲良くなるためという人の人脈構成なんだが、近づいた事実も利用して俺を作戦から除外しようとしている。

これは最初からそう言うためだけに了承したのか……あるいは、ただ危険分子に見えてしまっているほど、パラノイアにかかっているのか。

「出身……そして血統もだ。それを利用され、他国が君に甘い誘惑を持って迫ってきたらどうする？ それを跳ね除けられるかどうかなど、実際に迫られてこなければ分からない。だがもしも君が元々、彼らが送った寄生虫であつたらどうする？ 我々は自由の国ではない、多民族国家でもない、それ故に外国の血が入ってきた事で起こった数々の問題は説明する必要もないだろう？」

……え？ 俺、日本人なんですけど。

え？ 俺って日本人じゃなかったの？

つかパラノイアの方だったか。

「単純に海外の援助を持ってこられては困るんだ、我々の力のみで達成する事にこそ、真価を見いだせる。そしてそれを成せば、海外の勢力が狙う沖繩の利権とやらも問題なくなるんだ……それに、君のお父上もご健在だしね」

「な!! で、ですがそれは政治家の分野であり、いくら司令長官殿といえど、そのような事にまで気にかける必要は……」

「私はね穴戸大佐、この国を愛しているんだよ。その為には、どのような算段、どのような手段を用いても、そしてできる限り、この国が進むべき最善の方向へと導く義務があるのだ」

ウソ……この人、こんな右翼的な人だったの？

絶対提督になっちゃいけない人じゃん。

「でも、君は嫌いじゃない。君のように生まれ育ちは違っても同じ志を持つ提督がいるのは、私としても心強いんだ」

ん？ いつ俺がこの人と同じ志になったのか言ってみろ。

「でも、だからこそ分かって欲しい。君が休職中は警備府に居てもい

いいし、それに作戦が終わったなら司令官職への復帰にはなるべく協力するから。だから、君はただ休職願いを出して、ただジツとしてくれればいいんだ……君だけならともかく、対立するような事があれば、君の近くの人たちも意図せず巻き込んでしまう可能性があることを、十分に考慮してほしい。ここは、ぐつと堪えて、暫くの休暇だと思ってくれ……それではな」

「な……」

「面倒事はすべてこちらで済ませるから……斎藤長官にも、私から言っておくよ」

あまりに衝撃的、あまりに呆然とさせる話の内容に、膝をついたままそれ以上言葉がでなかった。

—————

長崎警備府のトイレ内。

俺は、そもそもこの警備府を任せると言った張本人である斎藤長官に話す義務があった。昨日は忙しかったようで話せなかったが、今日なら大丈夫だろうと腹を括り、プライベート空間が侵されている俺の部屋よりよっぽどプライベートを確保できるトイレを貸し切りにして電話をかける。

新品だが、簡易なトイレの内装はキレイで、一応ウオツシユレットが備えられているので、外部から入る冷たい風を帯びて、キンキンに冷えた便座が俺をショック死させるようなことはなかった。

「カクカクシカジカばつかばかボツコボコのフルボツコでそういうことなんです」

『そうなんですか……困りましたね』

「え……」

電話の相手は明らかに聞いたことがある女性の声。

「お、大淀……総長……？　な、なぜ……？　ま、まさか斎藤長官はもうし、し、ししし死んで……!？」

『……あのですね、確かに私は多少噂される気質である自覚はありま

すけど、流石にそんな直接的な事はしませんよ?』

じ、自分の手を汚さないということか……?』

『電話を拾ったのだから、この部屋に偶々用事があったからで、現在長官は留守です。私を死神や悪魔みたいに見るのはやめていただけませんか?』

「わ、分かりました! で、では今度からは大魔王様として崇め奉りますツ!!」

『人の話を聞いてください、私の個人的な感情で肅清される人第一号になりたいんですか?』

プシャ~~~~…ンギモチイイイ!

ここがトイレで良かった。

「申し訳ありません大淀総長、取り乱してしまいました。しかし説明の通り、沖縄作戦中の小官の立ち居地が危ぶまれている状況であり、この作戦に参加しなかったとなっては今後の作戦参加にも影響が出ることは必然です。齋藤長官への嘆願を果たすこと叶わないのであれば、沖縄作戦での小官の重要性を蒲生提督に、ご迷惑ながら軍令部総長である大淀総長から直々にお言葉をかけていただきたく存じます」

『別にいいんじゃないでしょうか?』

「は? 今なんと?! 自分が参加できないのは齋藤長官にもご迷惑となる可能性が……」

『そもそも貴方自身、作戦に参加したいと思っっているのですか?』

「……へ?」

『齋藤海軍長官は、この大淀が知る中でも特に貴方を気にかけている事はよく知っています。海外遠征など諸外国への外交官としても、深海棲艦を駆逐する現場指揮官としても期待されているのも承知です。しかし、海外遠征ならまだしも、沖縄作戦には態々参加しなくてはならない理由はないと思います。齋藤長官から直々に申し出があったのですか?』

「あ」

……俺はこの時感謝していたのかも知れない。

とても重要な事に気づいたんだ。

長崎警備府という、大都市を守る防衛司令官としての役割を持って
いる俺は、その周辺海域の鎮圧を任されているのであって、沖繩を奪
還するために働いていたわけじゃない。いずれ海外へと進む道が出
来れば繰り出されるかも知れないけど、よく考えたら出しやばる理由
なんてなかったんだ。

つまり、別に俺が作戦に参加しなくても……いいってこと？

俺は軍人人生、度重なる色々上から重大な任務、という名の無茶振
りは有名な事件だけでなく、数々仰せつかった経験がある俺。

いつの間にか、海軍全体がアパート。数々vi+7 やらなきや
と錯覚していたのかもしれない。

つまり

俺

やっと

ようやく

Finally

解放

されるって

ことオオオオオオオ!!?

ヤツホオオオオオオ!!!

「すいませんでした！ いやあく自分が馬鹿でありましたあ！ 沖繩
作戦にワザワザ俺が参加する必要なかったんですね！ あはは！ あ
りがとうございます！」

『栄えある作戦に参加しなくてもいいと言われてそれほど喜ぶのもど
うかと思いますが……作戦の参加は任意ではないですし、明確な理由
がない限りは、作戦参加を拒否することはできませんし、蒲生佐世保
司令長官が休職願いを出せば了承してくれらるというのであれば、むし
ろ貴方にとっては好都合だったんじゃないですか？』

「そうツスねえ！ 最高ツス！」

自分の顔の筋肉の形状を感じ、屈折のない笑顔をしていたことは、
鏡を見ないでも分かった。

俺は面倒事から一気に開放された気がした。海外士官をボイコットするとか、保守派がまだ生き残ってるとか、コンビニの底に陸軍埋蔵金が埋まってるとか、色々と問題が起こっていてその対処のすべてに責任を感じていた辺り、自分で言うのもなんだが責任感が強いのだろうか？

『しかし、もしも不鮮明な点があれば長官の個人メールへ送ってもらえれば見てくれると思います。アドレスを送りますね』

なんでそんなの知ってるんですかね？

「ありがとうございます。しかし海外士官の話は別です。多くの海外士官が蒲生提督の急進的な政治思想により作戦から排除される流れは看過し得難く思います。異分子を排除するかの如く……特に、関係のない我らがプリンツ・オイゲン参謀長、並びに貴重な戦力として柱島泊地を中心とした艦隊を起用できないとあっては、流星に戦力的な問題が生じるのは火を見るより明らかでしょう」

『確かに強力ですが、それを補う以上の戦力を集結させているので、その点は問題ありません。更に言えば、佐世保港湾基地からはイージス艦、護衛艦が随行する予定なので、心配はいらないと私は思います……が、確かに海外士官の件は私の方でなんとかしておきます。では電話を切る前に2つ、貴方に言っておくことがあります』

「は、はいー」

『1つ目は言う……というより、お願いに近いです。斎藤長官が送られたサプライズはどうであったか、あとでちゃんと連絡を入れるように』

「え？ き、サプライズ？」

『知らないということは、まだ届いていないのですか。まあいいでしょう。あとで斎藤長官にメールを送ってください。それから……明石次官を陸軍の隠していた資本の件に引つ張り出したのは貴方です。私が処理しようとしていた案件を片付けてくれたのは有り難いことですが、次に明石の手を煩わせたら、どうなるか分かっていますよね？ では』

プツ、ツ、ツ、と耳元で鳴り響く通話の終了音。

プシュー……そして再びケツの下で鳴り響くオシッコ音。

大淀総長とは二度と関わらない。

つかさつきからトイレの外のコンコン音が五月蠅いんですけど。

「……うるせえぞ！ 今入ってるんだよオ!? それとも俺のオシッコかけられたいのカア!? アアア!？」

そして、次の瞬間。

「フン!!」

「グアアアアアア!!」

座り込んでいたトイレの個室に突然、冷水が降り注いだ。

まるで中高生の激化したイジメのような凶であり、服はズボンとTシャツだけだったので、更に寒い。

誰だよ？ 風邪でも引いたらどうするんだ？ 殺すぞ。と威圧を含んだ正論を吐きながら外に出る。

「誰っすか？ なんか狼藉っばいんですけどく俺マジそういうの正なんでえく……男だったら殺す、女だったら犯す、お前の正体を……つて、へ？」

「むうく……穴戸っち、鈴谷に気づくの遅すぎ！ ふん！ もう知らないっ！」

「す……ず……や……？」

俺の部下であった鈴谷が、俺の目の前でプンスカと腕を組んでいた。

鈴谷の後ろには、俺の元部下、及び元同僚が、列をなして突っ立っていた。

……どういう、こと……？

元部下、艦隊に加わる

執務室。

ここは執務室であって警備府役員や艦娘とその知り合いがワイワイガヤガヤするための場所ではない。

鈴熊、親潮……更には夕張、綾波ちゃん、そしてゴーヤの六人が、ここ長崎警備府にやってきた。鈴谷がここに来れた理由も含めて、大淀総長との会話を思い出して、長官のサプライズとはこの事だったのかと納得する。

目の前で恒例の敬礼を済ませた六人に加えて、司令官の玉座である執務室には秘書艦の村雨ちゃんと、参謀長のオイゲンさんと、並びにガンビア・ベイのほともかく、何故か居座っているベリングハム少佐について未だに誰の説明もない。

あの妙に暑苦しくなる目線を送ってくるから苦手なんだよなあ……ただでさえイケメンって人種は苦手なのに。

「えくつとね？ いま確認したんだけど、やっぱりスズーヤ達はここに着任する予定だったんだって！」

「なるほど、ありがとうオイゲンさん……それで村雨ちゃん、なんで抱きついてるの？」

「なんでもありません……」

なんか凄く不安だったのに安心したが、一気に気が抜けたので、腰も抜けてしまったかのようにしがみついている。わざわざ椅子を隣に持ってきて俺の腕を鷲掴みしてるんだから、相当怖い目にあっただろうな……まさか、イケメン少佐がなにかしたんじゃない？

殺す。

本当に何かしていたんだったら、後ろで酸性雨が小刻みに叩きつけられている窓を突き破って投げ飛ばすところだった。

が、雰囲気からしてそういう感じではないのは俺にだって分かる……ホモは嫉妬深い、あの極重の眼光。

それよりも、目の前で頬をハムスターみたいに膨らませている鈴谷

や親潮にはどう弁解しようか。明らかに怒っているんだが、久しぶりに見る彼女たちを可愛いらしいと思ってしまう。つか、可愛い。なんかブンブン身体揺らしててもツーンってしてるくせに、構ってほしいみたいな。

面倒クセエ。

「あの、村雨さん？ 流石に司令にくつつきすぎなには……？」
「すみません……もう少しこのままで」

「はー!? 鈴谷にだってその権利あるでっしょ!? どかないと右腕い
ただくし!？」

「好きにしてください……」

村雨ちゃんの様子を見て、みんなは引き下がる。

本当にどうしたんだろう？ でも不安そうな表情を浮かべていないのを見ると、今のままが一番良さそう……ついでに、左腕に纏わりつく特盛肉球を堪能する口実となるだろう。

「まあ……なんていうの。来てくれてほんとうにありがとう……多分、作戦のためなんだよな？」

「そうですね、聞けばかなり大規模な戦力になるというではありませんの?。」

国土の一部を取り戻して海外と水面下で利権闘争を繰り広げてる、って作戦目標を聞けばそれどころじゃないんだよなあ。

「微力ながら、わたくしも協力させていただけたら、と思つて参上いたしましたわっ！ トオっつホツホツホ！」

熊野、なんだその笑い。

でも可愛いから許される。

「私たちも忘れないでね?。」

「綾波もいます！ ……お、男の秘書艦さん!? し、しかも外国の方なんて……こ、これは久しぶりにキレイなBLモノの予感が」

「ご、ゴーヤもいるでち！ 穴戸司令官の為に頑張るでち！ 72時間体制でちー!」

「ありがとうなみんな……ゴーヤ、なんで時間増えてんだ？ まさか俺の鴨川要港部がブラック要港部になってたとか？ 疲れて何もで

きないゴーヤにちよつかい出す司令官とか提督とかいるってこと？
ちよつと海軍省に連絡入れるから待っててね」

「だ、大丈夫でち！ 今のはほんの冗談でち」

ゴーヤが言うのと冗談に聞こえない。本来はその冗談で言った数字の十分の一でいいんだから。

相変わらず愛くるしい夕張、綾波ちゃん、そしてゴーヤ。ニツコリと笑顔を作られた俺は、同じく笑顔で返す。

ここにいる6人で艦隊編成できると思うけど、半分が非戦闘員だからもう一つ艦隊を作るより、既存の艦隊に編成する予備戦力として加えるほうが良いか……鈴熊綾波ちゃん一軍入りは確実だけど、今はそれで我慢してもらおうか。

そして、

「お、おつす、久しぶりだな親潮」

「は、はい！ 司令もお元気そうで！」

「もちろん元気さ。みんなの顔が見れてなお元気。すつごくおつきなおっぱいが当たっててなお元気」

「……………」

「冗談だから。意味ありげにポケットに手をつ突っ込むのやめて。俺の冗談って中々通じないよな？ 俺、すげー悲しいんだけど……………」

「す、すいませんでした！」

親潮との会話は少し気だるい。

何時も通りつてのが難しくなるっていうか……………なんか、お見合いの時に俺のこと…………いや、今は考えないようにしよう。

親潮も同様の感情を抱いているっぽい。

俺のことが本当に好きだったのか、それとも単なる場の雰囲気により起こされた錯覚なのか、一年、二年も過ぎれば覚めるはずだが、現時点じゃ判断がつかない。

よそよそしい態度には変わりないので、親潮と普段どおりの会話ができるまで、もう少しだけわだかまりを解消する必要があるみたいだ。

「とにかく、鈴谷達が来たからにはもう安心！ 賑やかな艦隊だから、

鈴谷たちの雰囲気と合うかも！　これで大規模作戦なんてへっちゃらへっちゃらー！」

「……その件なんだけどき、俺多分行けねえわ」

「「え？」」

「……え？」

隣で抱きついていた村雨ちゃんがタイムラグで反応したのを見れば、俺の発言がどれほど衝撃的なものかは想像がつかだろう。オイゲンさんとかひよつとこみたいな顔してるし。俺しおらしい顔維持しようとしてるんだからその顔やめてお願い。

「……村雨ちゃん、ちよつとみんなを呼んできて」

執務室は貸切状態。

今日着任してきた6人に加えて、白露姉妹全員、参謀長プリンツ・オイゲンさん、ガンビア・ベイ、ダンディー班長、そしてまだ居座り続けるベリングハム少佐。

外人は多分他人事じゃないから話したほうがいいと思い、俺はみんなに洗いざらい事情を話した。

「提督が凄くアンポンタンなのは分かった！　それで宍戸くん、その人暗殺してくればいいのか？　（しちや）いかんのか？」

「クツソ重罪なんで、暗殺はNG」

「重罪以前に倫理的な問題があるような……」

「説明でいたい分かったんですけど、では何故司令官が日本人じゃないっておもったんですかあ……？」

「五月雨ちゃんも知ってると思うけど、俺って日本生まれじゃないから、外国人じゃないかって思ったんじゃない？」

「「え？」」

時雨、村雨ちゃん、春雨ちゃん以外の全員が目を見開いてそう言った。

その瞬間、みんなの疑問が一齐に俺へとぶつけられた。

なんで今まで黙ってたの!?　とか、なんで日本にきたの!?　とか、なんで外国人なの!?　とか、とにかく質問のクオリティーが下がって

るのは何故だろう。

「……ごめん、みんなに言つてなくて。時雨や村雨ちゃんは知ってるけど、俺の本名は、タツキ・テラ・ドグソミンなカセイジーン……つまり、俺は火星からきた人間なんだ」

「「は？」」

お前ら、俺がジョークで和ませようとしてるのに、は？ はないっしょ。

「流石に僕も君の名前がそんなのだったなんて知らなかったよ。これからはカセイジーンって呼んでもいい？」

「は？ しばくぞ」

「こっちのセリフだよ!? 自分の名前嫌いなもの!」

大嫌い。

「それにしても、まさか穴戸司令官が外国のご出身だったとは……今でも開いた口が塞がりません。しかし、血統までもご考慮に入れられるなど、司令長官としての尊厳に関わる問題であると、小官は愚考します」

「ホントそれですよね班長さん。純血なんて古代まで遡れば切りないですし、どこまでがいいんでしょうね……」

「日本生まれでも血統を辿られれば駄目、海外生まれでもそれだけで駄目とは排他的ですね……まあそんなの今更ですけどね。それより出身はどこですかCaptain!? じりたいツツツ!!」

「私も知りたーい!」

「Me too Me too!」

ベリングハム少佐、ガンビア・ベイ、オイゲンさんは俺の出身地の詳細を頑なに聞いてくる。

え、何!? もしかしたら同郷かもしれないじゃん!? みたいなキラキラした目で初めてのことに興味を持つ初々しい少女のような顔をする外国艦美少女二人……とゲイロード一人。

いや、みんな同郷じゃん、同じ地球人なんだし。

「穴戸つちがどこの生まれかなんて関係ない! だって今ここにいるのは穴戸つち本人だもん!」

「鈴谷……ギャルキャラのワリにはまともな事言いやがるな」

「でも、それで休暇届だせー！　なんておかしいよ。だって何もしてないじゃん」

「そうですわー！　穴戸さんは何も悪くありませんわー！」

「そうだとコールが鳴り響く執務室。」

一応執務室までの廊下の行き来を封鎖したから人は聞こえる場所まで入っては来ないと思うんだけど、ちよつと静かにしようか。熱くなる冷静な判断できないって、それ一番言われてるから。

「まあというわけで、俺は作戦中は寝ていると思うし、この警備府からも艦娘が参加させられると思うけど、その時は頑張ってることだ」

「そんなー！　穴戸つちが指揮しないんだったら鈴谷も降りるー！」

「夕立も降りるっぽい！　クソくらえのクソっぽい！」

「五月雨ちゃん！！　夕立ちちゃんの言論を抑制するかももう少しキレイにする方法教えて！！　こんな夕立ちちゃんみたくない！！」

「ふえ!?　そ、そんな事言われても、あの、あわわっ」

「夕立姉さん、飴食べてくださーいっ」

口に糖分を投げられた夕立ちちゃんは静かになった。

「というか口の中に何か入っていると喋る気が起きないタイプなんだな夕立ちちゃん。」

……あ、この事実を男が知ったら、絶対夕立ちちゃんの口の中に自分のパンツ食わせてその間にオレの人肉ソーセージを食ってもらおう、とか考えるヤツ出てくるだろ。

妄想を統制する力は持ってないけど、言論として出したら私刑を執行する。

「よし、いいこ春雨ちゃん、よしよし」

「~~~~~！」

春雨ちゃんの頭を撫でて、それを何時も通り喜んでくれている。普段なら、みんなオレのことをロリコンだとか、節操のない猿とか抜かすだろうけど、その時だけは、不安と静寂に満ちた部屋で、ただただ悶々としていた。

“そしてこの一週間後、二度に渡り提督が送りつけてきた” 休暇届けの催促の電話が執務室で鳴り響き……俺は、正式に手紙を出した。

ホリデー

臨時休暇をもらえる嬉しさから、奇行は普段より更にエスカレートする。

休暇中の無敵。

ここ九州では初お披露目となる、入学一年目のイキリ大学生並みのテンションで佐世保鎮守府を訪れ、佐世保第一鎮守府提督の側近である副官殿に、精一杯の手間と時間をかけた手紙を渡す。

「ハッピーイイニューイヤアアア!!!」

「あ、明けましておめでとうございます。宍戸司令官殿、亥年だからと言って猪の真似など……それよりも、例の件の書類は、出せますか?」
「出そうと思えば」

「では、お願いします」

「で、出ますよ多分……ジョボジョボジョボボ! ブツチツパツ!!
はいこれ渡した。ああもう出ないです……」
「きたない」

警備府中庭。

「わーい! までまで〜!」

「あははっ! 捕まえてくださ〜い司令かーん! あはははっ!」

「司令、私はこつちよ! 捕まえてごらんささ〜い!」

「お、朝風〜そんなに鬼になりたいのオ〜? じゃああ、俺え、本気いだしちやおうかなア〜!? グツへへツへへ!!! 待て待て鬼さん俺さん勃起い〜!」

「「きゃー! いやああーツ!!!」」

「「……………」」

宍戸大佐は暫くの休暇を楽しんでいた。追いかけて回されている神風たち、それを見て微笑んでいる涼月、彼女とお茶を楽しむ兵士たちは、和気あいあいとして蒼天の下で、一時の安楽をエンジョイしてい

る。

それぞれが警備府に舞い降りる日光を満喫しながら談笑や遊びに従事している姿を見ると、それほど状況は悪いようには見えないだろう。

同じくしてオイゲン中佐は蒲生提督に促され、休暇届を出すと共に柱島に一度帰省すると言って警備府を出た。

外人粹として捉えられているガンビア・ベイには音沙汰はないものの、少なくともベリリングハム少佐、彼の周りにいる有能な士官たち、更にはダンディー班長までもが作戦と関わりのない主計部補佐、謹慎、または左遷を受けた事実と、その中にも複数の日本人が含まれていた事は、知れ渡っていない。

理論はおかしいんだが、それ以上にあの佐世保の司令長官の行動は不自然だ。

これはきつと何かの陰謀だ。俺を外したものの、外国人とかそんな理由だけじゃない。必ずなにか他の理由がある……そう思考を巡らせているのに、今こうして神風のような大正ロマンの塊と戯れる穴戸大佐の姿を見て、一番心を痛めているのは、長崎警備府に司令官として着任した斎藤大佐である。

「クソ……なんだあの醜態は!? アレは私が知っているヤツじゃないぞ!?! あ、いや、よく考えればそうでもないか……いや、しかしなぜ私がヤツの後釜としてここに連れてこられたんだ? 一体なぜ人事部はこんな暴挙に? アレと交代させられるような状況とは? 何か壮大な陰謀には違いない。だが何故私が作戦に参加させられるんだ? いったい私は誰だ?」

「お、落ち着いてください兄さん……」

穴戸大佐の後釜として着任した斎藤大佐は荒れている。

妹である親潮の前では毅然としている彼が、平気で愚痴と意味不明な自問自答を連発するさまを見ても、その表情に余裕がないのが分かる。

大佐は勉強とデスクワークにこそ真価を発揮するものの、艦隊指揮をする立場としてはあまり評判が良くない。作戦が失敗することは

少なく常に理論的だが、艦隊指揮や艦隊運用において、現場で即決するべき判断や、直接的な戦闘における戦術面での実力を出せないでいる。それは、常に変わり続ける戦況の中での対応力を求められる事に慣れていない……言わばマニュアル人間のような性質である。

それに負い目を感じているフシがあるが、自分ができないことを容易にこなす人物が、今はなぜか和服姿の少女を追いかけ回している所を見ると、非常にぶん殴りたくなるらしい。

斎藤大佐の秘書艦をする親潮も、今の穴戸大佐の醜態を看過できていない。親潮は未だに、彼との過去の出来事を引きずっている。だからこそ、20年ほど精神退化した彼の奇行は見るに堪えないと思っ
ている。

今でも囁かれている……これは、穴戸司令官の“黄金期”であると。あるいは、業務から開放された“無双状態”であると。

何れにしても、開放感という名のバフを全身で味わう彼を止められる者はいない。

「村雨、君はどう思うんだ？ 彼のあのような姿を見てどう思うだ？

私が立派に秘書艦を勤めた人物だと胸を張って言い切れるのか？」

「はい！ だって、あんなに楽しそうなんですよ？ 穴戸さんはやつ

ぱりああじゃないと……私も仲間に入れてほしいですっ、入ってもいいですかー！」

『『『いいおー！』』』

「村雨くん流石に君が……って、行ってしまった。クソ……」

「どうしたんですか兄さん？ 村雨さんの仕事はもう終わってるので、遊びたいと仰るのであれば、遊ばせてあげてもいいのかとおもうんですけど」

「いや、流石にあの短く扇情的なスカートで鬼ごっこに参加するなど……不純すぎるだろう？ 女性ならば、あの大正ロマンのようにロングスカートを履くべきだと私は予予だな……」

「え、スカートの丈がアレぐらいじゃないと駄目って……つまり、親潮のこともそういう風に見てたんですか？」

「なあ!? い、いや、そういうわけでは……」

「不潔です。気持ちが悪いです」

「——ッ」

食堂。

さつき大佐が泡吹いてたけど、どうしたんだろ？

まあいいや、俺にとつてはもうどうでもいいこと。

斎藤大佐は新たにこの警備府に着任し、親潮が秘書艦となつてい
る。

俺は爺さんの実家しかない上に、戻りたくないという強い思いから
この警備府に留まり、今ではあんなことがあつたというのに、おこが
ましくも佐世保鎮守府に入り浸つて参謀長さんとか赤城提督と話し
たりしている。

俺が習わなかつた部分の勉強についてのご指導を受けている他、長
崎にある退役軍人施設などに赴いては、現場での処世術や、勉強では
到底及ばない体験談なんかを取り入れている。上は戦術学や国際学
から、下は軍曹の目を盗んでズル休みするライフハックなど、様々な
情報が飛び交う俺の脳内は、一時の発散を求めるようになる。

そんな時に神風たちみたいな可愛い駆逐艦と追いかけっ子をした
り、涼月をじつと見つめて赤面させたり、お酒はまったく飲めない俺
だが一応宴会みたいになつて飛鷹と隼鷹のパーティーに参加させ
ていただいたりと、かなり充実した毎日を送っている。

たまに幼児退行してるとか言われるけど、逆に幼児退行できないよ
うなヤツが提督になつてなれるわけないだろ！

人生とは、常に臨機応変を求められるものなのだ。それは固っ苦し
い軍隊でも同じ！

「んん〜！ ごはんウマー！ 白露のが、いっちばーん美味しいと思
うんだけど、異存はない？」

「「ないです」」

俺は国際学についてまとめられたノートと万年筆を片手に、白露さ
ん、時雨の他に、鈴熊や初霜たちと休憩をとっている。勉強、人脈構
成、遊び……この3つが俺の人生を支配している今、俺に敵う者は誰

も居ない。

何時も通りのコミュ力を駆使して神風たちと仲良くなれた俺は、帰ってきたらカルタをしようって、みんなで決めてるんだあ〜！

あ、それ死亡フラグ？

「異存なーし、ついでに気力もなーし！ お姉ちゃんに構わない子はお仕置きだつて、子供の頃から教えてるのにー。うん、これはお仕置が必要みたいだね！」

「白露さんやめてください。それより俺にアーンして」

「もう穴戸くんったら甘えん坊っ！ はい、アーンっ……どう？」

「うん！ しらつゆおねえちゃんのたべものおいしいよお〜！ ばぶうー！」

「いいこだね！ よしよしっ、いいいいいい」

白露さんに抱きつき、その胸の感触を頭上で堪能した。

案外まんざらでもなさそうな顔……いや、むしろ母のような微笑みを浮かべ俺の頭を抱える白露さん。母性の塊やで？ 普段あんなにいつちばーん、いつちばーん言つとるくせに。白露さん、作戦中も、いつちばーん！ って使うんだぜ？ 作戦詳報でも一番上に、いつちばーん凄いや戦果上げたよね!? って書くし。

「うわあ……穴戸っち気持ち悪すぎ。てかなんで白露なの？ 鈴谷の膝でいいじゃん!!」

「いいの？」

「う……う、うん！ もちろん！ キーカモン！」

「ヒヤッハアアア!! スズヤはエッチだなアア!?」

「きやああああ!!」

ルパンダイブで飛びかかった俺の顔面に鈴谷のキレイな脚が俺の腹部に直撃する。

「ハア……穴戸くん頭大丈夫じゃないのは何時ものことだけど、それよりどう思う？ 別に悪い司令かじゃないんだけど、提督育成プログラムに参加した人なのに、あまり円滑に作戦が進んでないような……」

「時雨、一応俺の先輩であり同僚であり同期なんだからそうやってイ

ジメるのはやめてさしあげろ。あれでもいいところはある。マニユアル通りに従うのはいいし、勉強は俺よりもうまいし、正直言って非の打ち所がないイケメン提督だぞ？」

「人間って縛りから開放されると奔放になったり寛容になったりするいい例だね穴戸くんの現状は。僕も休暇取ろうかな……チラ、チラ？」

「それ俺にじゃなくて人事部か司令官に言え。今この警備府預かっているのは斎藤大佐だろ」

鈴谷や親潮などは、休暇を取りたいと言っていた艦娘たちは多く、一緒に休暇届けを出そうとしていたんだが、ただでさえ着任したばかりの鈴谷達にその権限はなく、あつたとしても有給か体調不良を訴えてズル休みする程度だ。

しかも有給となれば申請に一月以上かかると言われているので、そう簡単に通るような代物じゃない。

だが俺のはかなり早い段階で申請が通った。流星は佐世保の司令長官殿だ、実に用意周到である。この作戦は全体から見れば気にならないレベルの細かい人事の調整にも見えるが、柱島泊地や俺の謹慎はいい影響を与えないのは事実だ。

つか大淀軍令部総長はなんでこの作戦の人事に賛同しているのかわからねえ……いや、黙認だけど、事実上は賛同に近い。まああの人のことだから、なにか陰謀があるんだろうけど、それを見極められるほど俺は政治合戦に参加しているわけじゃない。

しかし他人事で悪いが、そのことも含めて俺の知ったことではない。

俺は今や、人類が保有する自然的かつ当然の権利である休暇を、これまでにないほど満喫している。24時間365日体制から抜け出せた俺は、利己主義的にこの状況を全力で楽しむ方針にした。

と言いつつ論文や研究も怠らない。

勉強や上官からの教授も、海軍士官たるもの常に勤勉であれという兵学校時代の洗脳から来ているものであり、それに従う事こそが賢い人間のすることである。

軍事学も履修して、通信で博士号でも取ろうかと画策しているんだが……海軍大学校時代の論文そのまま使えないかな？

まあそれは冗談だけど、レポート作って適当に送るか……海軍大学校の戦略研究科とか。教授や上官とのコネクションはまだ続いているからワンチャン行けるかも？

「初霜、ちゃんと食べないと大きくなれないぞ？」

「失礼ね！ 私はまだ大人よ……まあ、そう見られない事が多いんだけどね。白露や村雨が羨ましいわ」

初霜は自分の胸を見下ろしている。

確かロツカーの中でスニーキングミッションみたいなことした時はスポーツブラっぽかった。それはそれで素敵だと思う……いや、センチティブな事にはなるべく関わらないようにしよう。

「えっへへくん！ それほどでもおっく！」

「え、僕は？」

「時雨、お前さ……いや、別に小さいってわけじゃないんだけどさ。その、村雨ちゃんとか？ 白露さんとか？ 比べる対象がそもそも違うっていうか……」

「なるほど、穴戸くんの言う通り胸ってのは大きさはなくて形と色ってことなんだね！ だからいつも僕とお話する時、僕のおっぱいばっかりジロジロ見てるんだねっ！」

「なぬ？ お主、まことか？ とんだ変態じゃのう……」

「初春、変態って言葉の意味知ってる？ 変わってるってことなんだよ？ つまり、俺は、漢として、まったく、正常なの。だから、変態じゃないの。あと時雨お前、誰が胸ばかり見てるだ犯すぞ貴様」

「僕に勝てると思ってるの？ 艦娘様に歯向かうとどうなるか、身をもって知るべきだと思う。あ、でも何回も教えてあげてるのに、一分後には忘れてる穴戸くんには学習は無理かもねっ」

「グルルルルルルッ!!!」

ROUND 1、READY FIGHT!!
DING!

「微笑ましいな。若葉も、初霜とこんな風になりたいものだ」

「え!? こ、これは流石にちよつと無理かも……」

「初春さん達の教育上よくありませんのに、レディーの前で闘牛のようにならな言語道断ですわ……」

「子曰たちは陸上訓練でもこれぐらいしてるから大丈夫だよー!」

「この程度はじゃれ合いだ……」

「しかし見ていて面白いのじゃが、流石に警備府の品格が落ちるのはう……妾たちの提督として、威厳を持ってほしいものじゃ」

「そうね、提督そのへんで……つて、もうボロ雑巾じゃない」

WINNER S I G U R E!

「ボロ雑巾とは失敬な、この警備府の初代司令官であるぞ」

「うあー! び、びっくりした……いきなり立ち上がらないで!」

仰向け状態から腕を使わずに起き上がる動作。普段使わない筋肉を使うため、起き上がる為に多少ビクつきながらも勢い良く、そして何より早くヌメつとした動きになる。やっている本人が言うのもアレだが、ハッキリ言つて気持ちが悪い。

兵学校時代に流行つたんだよなあ……時雨もやつてたし。

女性陣は、夜中の怪談で盛り上がる女子のようにキヤー! とか、キモー! など共鳴している。

「初霜たちつて確か宍戸くん知り合いだったよね?」

「ねえさん達とは会つてないけど、要港部から鎮守府に一時配属された時に、ちよつとお世話になつたの……」

「お世話……?」

初霜が少し頬を赤らめながら発した言葉は艦娘たちの目を歪ませた。睥睨が向かう先はもちろんこの俺である。

「は? また俺何かやつちやいましたあ……? 初霜はお世話つて言つただけなんだよなあ……それで何かいやらしい事を想像した人は、精神の根本がスケベドクソエロマ○コである可能性が114514%。これじゃあ左遷されたあのイケメンホモ外人の方がよっぽど健全つて事になる可能性が微レ存……?」

「いや、さつき神風たちを追いかけ回してた事も含めて、僕たちが目を離したら何するか分からないから警戒してるんだよ? あと今のセ

リフ録音して鴨川のゲイ三人衆に送ったからっ」

「はははっ、時雨？ お前は俺をメキシコシティーの路地裏で転がってる変死体みたいにしてえのか？」

「もしそうだとしたら、どうするの？」

「抜きな時雨……ッ、どつちが素早いか試してみようぜ、というやつだぜ」

「いいよっ、でも相手は僕じゃなくて彼ね」

「Cpt. Shishido、勝負です♂」

ROUND 1、 FOCK!

「おい待てい、何故貴様がここにいる!? そして何だそのフランクフルトは!? 明らかにレギュラーサイズじゃないアメリカ生まれのホットドッグ!? 休暇中だからって軍法会議に持ち込めないワケじゃないんだぞ!」

「でもお、司令官はもうお尻に異物を入れられるのに慣れたんじゃ……」

「誰がそんなコト言ったの綾波ちゃん？」

申し訳なさそうに時雨を見る綾波ちゃん。

俺から視線を外す時雨。

さらに俺から視線を外すみんな。

楽しそうにクソデカソーセージを振り回すベリングハム少佐。

助けを求めてもう一度助けてシグナルを送る俺。

見捨てるみんな。

「大丈夫よ穴戸さん。それただのソーセージだから」

「夕張、お前も加担しているのか……?」

「知らなかったのよ少佐がその……そ、そういう人だって! あ、でもその辺で売ってるお肉と変わらないから。ほら、あむっ」

「あああああああ!!!」

男には痛い一撃だ。目の前で卑猥な造形をしたデザートイーグルが容赦なく齧られ、中身が露出してしまったその惨たらしい姿を見るのは、漢として耐えられない。ホモもノーマルものた打ち回る。

(※ただのソーセージです)

「危うく逝きそうになったぜ。話を戻そう。なんで少佐がここに!? たしか主計部じゃなかったの!?!」

「仕事がないんです……というより、私も休暇を頂いたので、することがないんです」

「誰コイツ警備府内に入れたの?」

「え、少佐さんは顔パスでいいんじゃないの?」

「いいわけないやろ規律考えろ」

それかせめて海外艦とかいう、全身スケベエロスの塊みたいなのに一緒に連れてこい。じゃないとむさ苦しくなるし、このイケメンとカンケイ♂を持つてるなんて噂された日にはレ○プマンになってでも自分がノーマルだって証明してやる。

男とウワサなんてまっぴら御免被りんのスケベイ。

「まー別にいいんじゃない? 鈴谷たちも気にしないし」

「楽しければ何でもいいですわっ」

何でもよくない。

時雨たちと初春たちは、初霜と俺の出会い話に夢中になっている。クソ、味方がいない……だと……? 綾波ちゃんとベリングハム少佐の魔の手から救ってくれる人はいないのか……?」

「あの、大丈夫なのかしら? 提督があのお少佐さんに迫られているように見えるのだけれど……」

「ん? ああ大丈夫大丈夫。穴戸くんああいうの好きだから」

「そ、そうなの? たしかに、本当に嫌なら跳ね除けるはずよね……つまりは、そ、そういうぶ、ぶぶぷプレイねっ!?!」

初霜の閃いたような笑顔が視界から消え、目の前にはイケメン外人一色となった。

男と一緒にいるだけでそんな言われるなんて、この世の中全部ホモじゃん。ホモ・サピエンスじゃん。

食堂という人目に付きやすい公然とした場所で壁ドンされた俺の状況は、半ば同人誌だった。

「C p t . S h i s h i d o」

いや……! おれ……汚されちゃう……!

壁ドンされたのは舞鶴以来かもしれない。

舞鶴参謀時代 その名は天龍

舞鶴に、参謀として着任した頃の話。

「や、やめてください……!」

「いいじゃねえかよ……オレのこと、見てたんだろ?」

「いやあ! や、やめてえ!」

いきなりですが、イケメンさんに言い寄られてますっ!

海軍大将司令官閣下のいる舞鶴第一鎮守府の執務室……そのすぐ隣にある会議室で、まさかの壁ドン!?

黒光りするイケメンさんの服装は、上を見ても下を見ても、片方にある眼帯ですら黒一色! これは正に“俺はソロでしかやらない……キリツ”という感じの雰囲気醸し出し、表現するならば中二病の塊!

黒ニーソに包まれた御足と、第二次性徴期に女性ホルモンが色々成功したんだなくと予測される、所々垣間見えるボン・キュツ・ボンツ! 世の中の女性の半分を敵にしている反面、その殆どを魅了するエロスとイケメン度は、一般男性士官である俺をも包み込んでくれる。息がかかる度に、イエロートルマリン色の美しい瞳が、俺の心を見透かすように突き刺さり、ほんのりと血色のいい赤面の端正な顔がドンドン近づいてくる。

この、舞鶴鎮守府でも一、二を争うイケメン。

その名は——天龍——。

クウウウツ! カツコウウウイイイ!!!

「ふふふっ、もう良いわよ〜天龍ちゃんっ」

「ハア……すんません参謀さん、いきなりこんな事に付き合わせちゃって」

「大丈夫だよ天龍、あと俺に敬語使わないでもいいから」

「それは流石に無礼なんじゃ……」

「CMの練習に付き合ってたんで俺に頼むこと自体が無礼だっけ知っ

てた？ これから会議なのに……」

舞鶴第一鎮守府の参謀として着任した俺は、参謀の1人として活躍している。

参謀長や提督が来る前に、遠征艦隊の旗艦を任されている天龍から出演するCMの練習をしてほしいと頼まれたのだ。

妹の龍田さんが客観的にみた感想として「天龍ちゃんやつぱりかっこいいわ〜フフフっ」らしい。かっこいいかどうかはともかく、演技の出来栄は見えてくれないうですかねえ……？

会議の前にやっているCMの練習、それはもちろん海軍のPR動画の事である。

川内三姉妹をいちいち表に出すのは流石にマンネリを生むとして、日本海軍をPRするため、舞鶴鎮守府から新しい艦娘とその方向性の変更が決定された。乙女系ゲームに出てきそうなイケメンである天龍さんがチェリーボーイ（シヨタ）に壁ドンして「おい、オレんところ（海軍）来いよ」みたいな感じのCMにしたいらしいが、これ明らかに馬鹿にされるよね？

ネットで話題にされるのはコマーシャル的にはこれ以上にならない宣伝効果を生むことになるし、意外性と話題性に関しては随一となるだろうけど……まあ、俺の進言でどうにかなるわけでもないし、方針を覆せない以上は、成るがままにするのは定跡である。

「それにしても、なんで俺なの？ 天龍だったら着任したての俺じゃなくても付き合ってくれる人がいたんじゃない？」

「うっ……そ、それは……」

「天龍ちゃんがね〜？ ここに着任するときにく、ちよ〜つとしくじっちゃったからかしら〜？」

「しくじった？ どういうことツスカ龍田さん？」

「実はね〜」

着任した際に、天龍は意外にも海から登場した。

それは近くの要港部からの転属という形だったため海路の方が早かったから……という理由もあるが、単純に艀装や荷物を一緒に持つ

てくる分、そして何より遅刻してしまったので、着任予定時刻に間に合わせるには出撃する形で来る他なかったのだ。

『おい、お前』

『はい……つて、誰っすか？』

『今日着任する天龍と龍田だ、提督に会わせろ』

『は？ 何言ってるー』

『いいから会わせろッ』

『ひ、ひいいいい!!!』

整工班の首元に突きつけられたのは天龍のKATANA、そして何より龍田さんのNAGINATAが、彼らを恐怖に陥れたのだろう。不思議なことじゃない、天龍さんは時間を厳守する艦娘であり、余裕がなかった時の形相は怖かったと、素でも怖い龍田さんが言うんだ。その上、見たこともない艦娘のウエポンが自分の喉元に入りかかったんだ。オシッコ漏らしても、俺はその兵士を庇うだろう。

無事(?)着任しても、天龍は中二病よろしくな性格なのか、ヤンキー気質なのか、とりあえず舐められないようにと色々な人に眼つけてたらしい。

『……………』

『何見てんだアア!?見せもんじゃねえぞアア!?』

『ひ、ひいいいい!!!』

『……フフツ、怖いか?』

『怖すぎい! 怖い怖い……』

『……ん? おい、これ落としたぞ』

『ひ、ひいいいい!! て、天龍さんだああああ!!!』

『……………』

それ以降、まともに天龍と喋れるのは龍田、提督、俺を含めた参謀部の一部、そして各艦隊の旗艦の一部だけとなっていた。

天龍自身は仕方がないと諦めていたが、他人の助力が必要ともなれば、普段の態度が実となつて返ってくる。天龍自身も強く、その戦い

ぶりと実績は彼女の強さを数値と戦闘詳報が証明しているため「なんだ、ちよつと怖い人かと思つたら別に普通じゃん」とはならないのが正に悪循環。

そもそも実績と実力があるから第一鎮守府の艦娘なんてエリート集団の中に編成されるのであつて、ここに異動になつた事自体、自然と天龍と龍田さんの実力は証明されているのだが……まあそれはともかく。

男相手に練習したいという天龍の思いと、フランクに頼めるのが俺しかいなかった二点を上げれば、必然と人数が絞られ、現在絶賛練習中ということだ。

「は？」

「うう……すまねえ、オレも別に穴戸参謀に迷惑をかけたわけじゃないんだ」

「いや、迷惑なんて思つてないけど……」

男じやなきやいけない理由は、単に天龍が男相手に急接近するといふ行為に慣れていないからつていう乙女ハートが原因だ。着任時の案内役を務めて以降なにかと縁のある俺に練習に付き合つてほしいと頼まれたのが、会議室で馬鹿な事をしている理由である。

練習ぐらいは付き合つてあげるけど、流石に作戦会議前からこれをするのは気が引ける。

「お、穴戸参謀に天龍と龍田じゃないか。もう来ていたのか」

「ハッ！ 今回の会議は重要なものであるとお聞きしたので、遠征艦隊の天龍、龍田と共に対策を練つていた所存です。調整の甲斐もあり、今作戦の期待値は更に上昇しました」

「ハハハ、ジャジャ馬の天龍が作戦にそれほど熱心であるとは驚いたな。まあ今回は丁度いい。遠征艦隊が重要となる作戦なので、天龍、龍田の二人には頑張つてもらおうよ」

「ハッ！」

「口うめえな」と天龍からボソつと聞こえた。

俺を含めた三人の敬礼と共に、彼の幕僚たちがぞろぞろと入つてきて、次々と会議室を占領する。

俺が蘇我提督の代理を務めたときは、俺は末席に座ろうとしたところ、長官の横つていう凄く居づらい位置で聞いていたが、今は堂々と席に座る事ができる。

俺が居た末席には天龍と龍田さんが座り、下から順に第一艦隊から第十艦隊の一部の旗艦、整備工作班班長に加えて、俺と同じ参謀部と参謀長、最後に提督という布陣でテーブルを囲った。

協議するのは、舞鶴で激化しているエリート艦の掃討についてだ。ここで協議するとは言っても、参謀部は既に考えを纏めた作戦案をいつか持って来ている。

それに加えて各参謀と各艦隊旗艦が個人的な意見を持ってきているため、俺の出番は実質的にはないに等しい……はず。

俺の存在はこの鎮守府でも異様なようで、前線で戦っただけでまるで武刃者扱いを受けたり、参謀長の進言よりも意見が通ったりする状況をなんとかかしたいと思っていたのだが、着任二週間ぐらいでもう諦めていた。

最初は形式上の目的を「エリート艦の掃討作戦についての議題を審議する」と明白にして、資料とか、作戦案などを読み込む事から始める。

舞鶴第一鎮守府の提督は、要するに舞鶴方面軍司令官であるの言わずもがなだが、この大将に限っては有能なのだが野心家であり、海軍元帥の座を狙っているらしい。大将にまで登った彼は定年の65歳で退役できるけど、この人は既に64歳なので、個人的には諦めて素直に退役するか、安らかな眠りに付くかしたほうがいいと思う。

未だに元帥のポストは空いているが、定員一人って訳じゃないんだし、誰が元帥になるかとか決めなくても良くない？

全ての情動的な講説を彼の秘書艦が話し終えたところで、本題である「どうやって深海棲艦エリート艦隊を掃討するのか？」の話題に入る。

「参謀長、意見はないかね？」

「勇敢なる全ての海軍士官と艦娘を持って突撃あるのみかと思いません」

「うんダメだね、次」

誰かこの参謀長解任しろ。

「プランCは我々参謀部の総意であると進言致します」

「穴戸参謀、これは君が立案した作戦だね？もう少しこの作戦について詳しく聞かせてもらえないだろうか？」

書いてあるんだからそれももう少し自分で読む努力とか……どうツスか？

「現状で過激化してる深海棲艦の攻撃は、一見すれば無差別な攻撃であると思えるでしょうが、分かっている中で、我々が仮定した深海棲艦の補給線上内に限定された動きです。同じ場所に攻撃を受けず、一定の場所に攻撃が加えられない事を考えれば、資料にある座標1から3の内のどれかであると推測しました」

「つまりこの三ヶ所を守れば、エリート艦を逃がすこと無く倒せる……ということかね？」

「はい。資料にも更に書きましたが、追撃を実行するならば、別働隊として機動力に優れた遠征艦隊、並びに舞鶴第五艦隊の機動部隊で連合艦隊を編成し、側面攻撃の任に当たらせるのが定跡かと」

「だがそれでは敵の本拠地にある補給資源が……」

提督は多分、エリート艦を倒している間に一気に敵の本拠地を叩く魂胆だったんだろうけど、正確な本拠地の位置が掴めてない上に、エリート艦の動きを見るに前哨艦隊はこれだけじゃないと考慮したのだ。

本拠地にすごく強い敵がいたり、たとえ倒してもそこが国外海域だったりしたら国際問題にも発展しかねないので、やるんだったら大本営に進言、了承を得てからにしたほうがいいと、あとで言うておこう。

「この作戦の目的はあくまでもエリート艦の撃滅にあり、敵本拠地の制圧は要港部や警備府などとの連携を持ってして実行に移すべきである、僭越なる具申意見を提督のご裁量にお任せしたく存じます」

「フム……わかった。他に意見はないかな？」

「……………」

「よし、ではこの作戦をプランCと名付けよう。掃討作戦についての協議はこれで終了する」

天龍と龍田だけでなく、参謀部の人たちや旗艦の人たちも俺に親指を立てて「グツジョブ！」とウインクしてきた。功に焦る提督と、クソみたいな参謀長を鎮めることができるのは俺だけという状況に、啞然。それでも有能な提督なので、他の作戦を遂行できるもんなら俺の慎重論を汲まなくても良かったんだけどな。

でも一ヶ月の内に、二回の会議が開かれて、俺の意見が二回とも通った事は、この舞鶴鎮守府では大きな出来事なのである。提督が1人の参謀に負けているみたないメージが下士官たちにまで広がった。たまったもんじゃないし、指揮権のない俺がコントロールするのは悪習である参謀統帥を蘇らせる結果となるので、その後の提督へのフォローの方が正直気だるい。

一重に俺は思った、要港部に戻りたい。
予想以上に早く終わった会議に対して、みんな「帰っていいの？」みたいな顔をしている。

その微妙な沈黙を破るように、提督が口火を切った。

「コホンッ！……それで天龍、コマーシャルの準備の方はうまく行ってるのかな？」

「え？あ、ああ、穴戸参謀に色々お手伝ってもらって、うまくいってるぜ？」

「「「?!」」」

まるで電撃を浴びたような顔で俺を見る士官たち。横にいる参謀部員が話しかけてきた。そして天龍、せめて提督には敬語を使いなさい。

「あ、あの、天龍の事を手伝っているんですか？」

「え？あ、うん。慣れない仕事だからって、リハーサルのちよつとしたお手伝いだけど……」

「す、スゲェ!! 俺でも天龍には滅多に話しかけられねえのによオツ!!」

参謀長アンタは話しかけてくださいよオ!?

そのマイク・タイソ○みたいなカラダはなんのためにあるんっすか!?

つかどんだけ怖がられてんのおく? 天龍ってそんなに怖い娘じゃないでしょオオオ!?

「いやあ、流石は穴戸参謀。あの八丈島では前線指揮を取る勇猛さに加えて、天龍とまで仲良くなるとは……」

「スゲエっすー!」

「作戦参謀バンザイ! ずっとここにいてください!」

俺の作戦が通ったことより、天龍と仲良くなったことのほうがこの人達にはビッグニュースだったらしい。

それを考えると、最初に来たときに俺の案内役として天龍を付けた提督は、俺を嫌っていたのかな? 昇進が早すぎるところなるんだね、別に最年少ってわけでもないのにさ。

天龍は恥ずかしそうにモジモジして俯いてるし、龍田さんはウフフ、と笑っている。なんだよ可愛いじゃねえか天龍。

「しかし大丈夫なのか穴戸参謀? 天龍は多少は男勝りとはいえ立派な女性、君にとってはあまりそぐわない役回りなのではないかね?」

「え、どういう事ツスカ提督?」

「素敵な男を見ると尻軽男になると聞いたのだが……」

それどっから情報漏れたのか教えろ。

「小官はノーマルですツツ!!」

「な、なに!? それはすまなかった……」

「……おい聞いたかよ? これだけ穴があんのに一つもケツを試してねえみたいだぜ?」

「マジかよあの参謀? イケメンに言い寄られてもケツも突き出せねえとか意味わかんねえ」

意味わかんねえのはこっちなんですけど。

「まあ天龍はこう見えてもスジの通った艦娘だ、これからも仲良くやってくれ」

「ハッ! 力の限り、尽力します!」

作戦会議は解散され、退出していく士官と艦娘の中には会議室に残

る者がいた。俺と天龍と龍田さん、そして三人の艦隊旗艦である。

あの金剛の妹で頭脳派火力重視戦艦、霧島。

同じく金剛の妹でバランスの取れた戦艦、榛名。

そして第二鎮守府から昇格した、瑞鶴。

この三人の艦隊旗艦は序列的に他の艦隊旗艦と比べられれば一軍扱いはされないが、三人の力量は一軍と讃えられても差し支えないほど有能な艦娘達だ。

「智謀、感服しました。流石は前線の龍と言われているだけではありませんね。尊敬します」

その名前って永遠に付き纏うのか……メガネをクイツと上げながら、ニヤツと笑う霧島。

「榛名も、尊敬しちゃいますっ!」

清纯派が両手グーからのガッツポーズを決めた。榛名だっけ? その動きのあざときは、正に男食ってそうなイマドキ清纯派食べごろおま○い。

「まさか副班長がこんなエリートだなんて思ってもいなかったわ」

「おいおい、侮ってもらっちゃア困るぜ瑞鶴? 一応これでも、兵学校主席卒なんだぜ? 提督プログラムの大学校では次席だったけど、それだけ有能って事でもあるんだぜ? かつこいいだろ」

「うん、カッコイイと思うー!」

多少ツンデレっぽい瑞鶴の普段は素直なところ好き。

「それより、天龍ってなんであんなに怖がられてんの? 着任時の不祥事は聞いたけど、別にすこぶる気性の荒い性格ってわけでもないから誤解とかは徐々に解消されると思うんだけど……」

「あーまあ、その……本人の前で言うのもただけど、天龍って古今独歩? 一人狼? みたいな感じで、あまり人と関わろうとしないのよ。それならまだいいんだけど、着任した時の出来事と合わせて相乗効果みたいになっちゃって」

「……フツッ」

なに得意げな顔してんだお前の事だぞ。

「じゃあ龍田さんは? 個人的にこっちのほうが怖いんだけど」

「あらっ？ あらあらっ？ それはどういう事かしらっ？ 詳しく問い詰める必要があるそうねっ？」

「そういうトコオオ!! 色々なモノ切り落とされそうで怖いのおオオ!!」

「別に切り落とさないわよっ？ 簡単に落とすちゃったら面白くないものねっ？ ウフフフっ……!」

ぼく、おしっこもらしますねっ。

「龍田ってけっこう面倒見が良くて、遠征艦隊の駆逐艦だけじゃなくて、色々な人からも慕われてるのよ」

「天龍だってエメンドー見イイだろうがア!? なに？ 眼帯差別!?

こんなに素敵な姉御に声かけられて嬉しくないやついるのオ!」

「が、眼帯差別って……」

天龍は怖がられる経験は豊富でも守られる経験は極めて少なく、「も、もういいよ……」と言いなながらも、僅かに嬉しそうなほころびが漏れていた。

「CMの件はともかくとして、このまま第一鎮守府みたなBIGな海軍要塞内が天龍1人を避けてると色々と上手く回らない事も多いだろう。積極的に話題を振って話してこい、俺がついて行ってやるから」

「えっ、い、今からかよ!」

「いいから! 龍田さんもそれでいいよな!」

「強引ねっ……でも、嫌いじゃないかもねっ」

嫌がる天龍の腕を掴みながら会議室を退出したが、何故か後ろには瑞鶴たちもついてきていた。

舞鶴参謀時代 人と関わりなさい！

喫茶店内に推参する六の人影。

舞鶴第一鎮守府内は様々な施設が揃っている事は、何度も来たことのある俺が知っている。

俺が長い月日を過ごした第二鎮守府よりも広いのは当然だが、第一鎮守府の内部には大きな娯楽施設がある。

まあどんな駐屯地や基地にも存在するもんだが、ここのは特に大きい。

一般的に酒保と呼ばれる売店の他にも、小さな喫茶店や床屋、更にはネットコーナーも完備されている。要港部には生憎だが酒保と食堂ぐらいしかないが、やっぱりいつ来ても賑わっているのは当然だろうか？

賑わっていると言っても、非番の連中が数人程度いるだけなのだが、流石にゲーセンのノリで喫茶店に来るのはどうかと思う。

つまり静かにさせるためにーそして何より天龍と、下士官との交流のためにも、そいつらに挨拶しに行かなくちゃいけないのだ。天龍に「話しかけてこい」と肘で突き、天龍が大きく息を吐き、ポケットの中にいる妖精さんを握りしめながら兵士たちに近づく。

お守り代わりに、柔らかい感触がほしいってことなんだろうけど、妖精さん大丈夫かな……？

「よ、よよよう！ 調子、どう?!」

性欲に正直な中高生の童貞くんが初めて女子に話しかける図。

「て、天龍さん!? あ、は、はい、大丈夫です……」

「なんだお前ら、さっきの大学生みたいな元気はどうした?」

「し、穴戸参謀……」

俺に対しては立ち上がり敬礼すんのに、天龍には敬礼してやらないのか……龍田さんを含めた瑞鶴、霧島、榛名の四人は俺たちにお構いなしで売店に行つてなんか買つてるし。

「天龍さんには何時もお世話になってるので……」

「お世話？ エツチなお世話とか？」

「オラア!!」

「うお！ つぶねえなオイ！ 今の蹴りまともに食らったら死ヌゾオ!!」

「知るかア！ テメエが下品なコト言うからだろうがあ!!」

後ろ回し蹴りが半端ないスピードで繰り出されたのもつかの間、俺は仰け反りからのバク転で難を逃れた。天龍って……白いおパンツ履くんだな、グフフ。

「そ、それで、なんの用事ツスか？」

「え？ んく……あ、そうだ、お前ら何の話してたのか単純に興味あつてさ。結構テンション高かつたじゃん？」

「実はコイツが、ここら周辺の基地で開かれる炊事競技会に参加する事になって」

「ど、どうもツス……」

「スイジ……ああ、あの料理のヤツ？」

天龍がいう料理のヤツとは、ただの料理大会である。分かりやすく言えば陸軍の料理大会で、今回は海軍が何故か横槍を入れるようにして参加するらしく、審判は日本空軍側の栄養士と数人の幹部や地元住民が担当する。

海軍 v s 陸軍という再び悪夢みたいな対立が起こる事になるが、元々陸軍同士で競争する部隊単位での対決だったため、鎮守府が作るチームの一つがそれに参加したところで、長年競い合った熟練の補給担当たちには勝てない。

開催の話は知っていた。何故か俺も採点役として呼ばれているからな。

年齢層をバラつかせたいと言っていたが、じゃあその辺の士官にでも食わせろや。なんで俺やねん、これから金剛とティーパーティーでもしようと思つてたのに！ 結論から言わせてもらえば、どんな食い物も金剛のティーには敵わなかった。

「大量に作られるのでお溢れが貰えたりするンすよ！ 今でも調理場の奥で試行錯誤してる別の補給担当がいます……そしてこつちの予

備役、実は栄養士の資格も持ってましてね！　そのために今日はこうやって親睦を深めてるって訳ツス！」

「て、照れますって……」

予備役なのに栄養士の資格があるだけで無駄なプレッシャーかけられている優男くん可哀想。つか訓練に来てんじゃねえのかお前？

「今回のテーマって確か、できるだけ安く、少ない種類の材料で栄養満点の旨い料理……だったか？　天龍、どう思う？」

「え？　……まあ、いいんじゃないか？　具材が少くなるのは寂しけどよ、栄養が取れんだつたら、問題ねえと思うぜ！」

「その息だ天龍。一部のレシピが公開されれば世間様の御食卓が一段と面倒くさくなくて済むんだ。それに軍をあげてコスパを重視した料理を考えてくれるなんて、庶民的でいい事だと思う」

「参謀も天龍さんもそう思いますか……」

ついに軍隊という一番見栄をはらなきやいけない集団が行なう大会でも節約を強要されるようになったか。いや、もとはといえば陸軍の節約は海軍を動かすためのバジエツトカットが原因で引き起こされたものである。

つまり、憎き海軍が入る事で結果的に負けたくないという闘争心を燃やし、陸軍同士で争うよりも張り切ることが出来る……という、地味に陰湿な魂胆があるのだろうか？

炊事競技をしない海軍、と軽く見られたとしてもこちらが勝って海軍の威光を磨くことになる。負けた場合は海軍の顔に泥を塗ることになるが、正直陸軍とのパワーバランスを考えて少しは譲歩した方がいいと思う。

「私達も参加したことあるよつ、試食だけど」

「瑞鶴はよく食うからなあ……」

「ホントのことだけど！　デリカシーって無いの!?!」

「俺にデリカシーなんて言葉は通用しない。あるのは、金、暴力、SE
X」

「全機爆装！　目標は穴戸参謀と彼の部屋！　やっちゃって！　って
いうかシズメシズメ!!」

「ヤメテヤメテ！ 単純に気になるだろうがそのエネルギーがどこに行ってるのかア!? そのスレンダーボディの維持の秘訣は瑞鶴選手!？」

「毎日欠かさずに任務をこなすこと！ そして胸が小さいのを気にしている人に対してスレンダーとか言う人を駆逐する事でーすッ！」

「おいそれ卑怯だろ!? スレンダーって一番配慮した言葉で、それすら奪ったら瑞鶴の体を表現できないだろうがア!? そんなに小さいわけでもないし……あ、分かったわかった！ 引き締まってるとか、スポーツしてそうとか！」

「胸が引き締まってるスポーツブラしてるみたいって……そんなに死にたいんだ……！」

翔鶴ねえ！ どこにいるの!? 早くその暴走空母止めるオ!!

「瑞鶴やめなさい!……すいません穴戸さん、妹がとんだ迷惑を……」
「いいんだよ、翔鶴が止めてくれたなら、それで」

はは、どこからともなく弓が出てきたときは死ぬかと思ったし、射精するかとおもった。

俺だつて死ぬときは、射精するんだよオ……?

「何の話ですか? 盛り上がっていたようなので、興味がありますね」
「榛名、聞いちゃいますっ!」

ハ、瑞鶴が深海棲艦になりかけてただけだよ。

とは話さずに、炊事競技がある事を伝えた。

「なるほど……あ、霧島! こちよこちよ……」

「え? ……なるほど、面白そうね」

ほう、俺の前で内緒話とはいいい度胸だな。

俺は内緒話でも聞き取れるぐらいの聴覚を持っているんだぞ?

そんな風にしてもすぐに拾え……だめだ、全然聞き取れなかった。

「天龍、担当直入に言いますけど、あなたその料理大会に出てみては?」

「は、はあ!? なんでオレが料理すんだよ!? だいたい、料理なんてオレのガラじゃねーし……」

「あ、じゃあそれ俺も参加してほしいな。龍田さんもそう思うでしょ

？」

「ん〜…そうねえ、面白そうかしらあ？」

「はあああ!」

はつきり言おう、君は人と関わらなさすぎる。俺を見る、人生のすべてを人脈作るために使ってるようなもんだぞ。俺みたいに自分のお友達を増やす奴が栄達して、一匹狼はどんどん排除されるのがこの世の原理だ。

日本人の集団行動強要理念を舐めるなよ？

電車でスマホいじってなかったら、あれ？ なんであの人スマホいじってないんだろ？ みたいに思われるからな。

そんな時代という名の電車にすら乗り遅れてしまつては元も子もない。ここで協調性…は元々あるわけだから、後はきつかけを作れば。

「なんでお前らオレを推してるんだよ!」

「天龍が加わる事は、大会としても、海軍側の部隊としても、いいスパイスになるんじゃないか？ 料理だけに」

「……………」

「ここ笑うところなんだけど」

「はははははは……………」

オツケーわかつたつ。俺が悪かつたよ。

だからそのドライアイスのように冷たくて乾いた笑いやめろ。

舞鶴参謀時代 料理大会、もしかして幽霊？

天龍を補給担当として一時的にだが加えるのはもちろん抵抗を呼んだが、俺と、それを支持してくれた駆逐艦や旗艦たちの進言によって辛くも通り、天龍は新しくできた仲間たちと料理に励む。

案外料理の腕前は悪くなく、遠征艦隊の旗艦としての突出した技量、そして燃料燃費の良さもさることながら、料理もできて面倒見もいい。

結婚相手としてこれほどいい条件はない。

現在舞鶴にいる第8師団の駐屯地の一つ。

中には舞鶴にいた頃に見た顔ぶれが並んでいるが、積極性のある海軍に対して嫌な顔をする者も多い。しかし、俺たちは踏みとどまるわけにはいかない。

陸軍師団はよりすぐりの補給担当が、その年月の全てをかけて作った料理を持ってきている。途中参加の海軍なんかには負けるかと気合が入ってるのはいいのだが、審査員として参加する俺や、審査員の人口の殆どを埋める空軍連中の他には、現在の俺の上司である副参謀長と、それに相對するかのよう陸軍の副参謀長とその部下がいる。

調理場から料理が運ばれてきて、テーブルに置かれるはずなんですが、その前に空軍からの審査員で最も階級が高い空軍大佐がみんなの前に出る。

「本日はお日柄もよく、当大会を審査するのに最適な日であると言えるでしょう」

「もう待ちきれないよ、早く出してくれ！」

陸軍の副参謀長は屈託のない笑顔を浮かべてそう言った。

「それでは早速お料理いへと参らせていただきますが、その前に幾つか注意事項があります」

「「ん？」」

俺を含めてだけど、全員はルールというか、審査基準や最低限度のマナーなどを話し合ったばかりなので、師団の参謀さんと、舞鶴の副

参謀長と俺は頭にはてなマークを作った。

「当大会のことは一切他言無用でお願いします。次に、途中退場は一切認められておりません。たとえどのような料理が出てこようとも、全て……完食していただきます。もし残した場合はペナルティとなりますので、そのつもりでお願いします。最後になりますが、先程も言いましたように、ここでのことは一切他言無用でお願いします。もしうっかり口を滑らせるようなことがあれば、その時は命に関わることとなりますので、お願いいたします」

「分かったもう取りあえず待ちきれない早く出してくれえ！」

「!?!」

師団の副参謀長は今日のために朝食を抜いてきたのかと思うぐらいせつかちだった。身体測定を受ける女子じゃないんだからさ。

俺はうんうんと頷きながら、何故か身の危険を感じたので部屋を出ようとした。

しかし、副参謀長に肩を掴まれた。

「待て穴戸、どこへ行くこうというんだ？ まだ料理は出されていないぞ？」

「ハッ、小官にはやはり荷が重く。失礼ながら身を引かせて頂きたい思います」

「何を言うんだ!?! あの前線の龍がそのイキでどうする!?!」

そのクツソ恥ずかしい名前やめてもらえませんかねえみんな見てるんでエ……前線艦隊と、俺のファーストネームから取り——前線の龍。

クウウウ！ もう浸透してるので今更取り消せない。そんなダサイ名前より、フロントラインドラゴンとかカツコイイ名前にしてほしかった。

「は、ハハハ！ 海軍のヤツラアビビってやがるぜエ!?! あは、アハハアア!! で、でも今日は体調が悪いんでウチも帰って……」

「ん？ お前さつき待ちきれないとか言ってたか？」

「そ、それは言葉のイヤってもんツス！ 建前！」

とは言っても元気に反論する姿では説得力に欠けるだろう。ザ

マア見る。

「それでは入りましょう、全班ではありませんが、半数以上の料理は既に仕上がっていますので、きつと気に入ってもらえると思います」

必死に出ようとしている俺の腕を、副参謀長は加齢臭の強い自分の身体と密着させて、拘束しながら部屋の中にはいる。クソ、なんで俺ばかりこんなクソみたいな……いや、仮にも誉れ高き緊急出動隊である陸軍さんなんだ、野暮なモノは出さないだろう。普通に美味しければいいんだし、提督には海軍側の料理に高い評価を与えよと言われているが、俺は公平に行きたい。

今回の勝負はなるべく材料の種類を絞ったの料理がテーマなので、普通のテーマであるよりも断然と勝機があることは舞鶴でも話題となっていた。

部屋に入ると、早速鼻腔を刺激してきたのは漂う夕食の香り。

アロマとはまた別の、人間の本能的な欲を煽るスパイスの連打が成す、脳への訴えが俺を喜ばせた。

そう、このおいしさはDNAに素早く届く。

空軍や陸軍の奴らは慣れているのか、まったく表情を変えずに入っ
ていき、早速食べ始めながらマイ箸と、メモ帳やライティングボード
を出し始める。

ビュツフェ式に並べられた料理はシンプルながらも、どれも美味
しそうで海軍の料理とは若干異なっているのか、新鮮味があつた。
ビュツフェみたいだからといって好きに手を付けていいわけではな
く、話し合いながら班の番号が書かれてあるネームプレートを凝視し
て、本格的な審査を始める空軍連中。

俺も一口適当なのを副参謀長と食べる。

爆発的な自然の風味を引き出す煮付けが口全体にフレグランスを
広げる。

……が、正直もう少し濃い味付けにしたらもつと良かったと思う。
それさえあれば、と思うほど惜しいと思うほど、この料理は美味しい。
口に出しても、美味しいとしか表現する方法はないだろう。逆にパ
ンチがないとも取れるが、テーマがテーマなので、それほど無理強い

はできない。

「なんだ、美味しいじゃないか！　なあ穴戸!？」

「はい、そうですね」

副参謀長はいつたい何が出てくると思ってたんですかねえ……流石はこんな大会を開いているだけあるな陸軍さん、この人たちを異動させられるんだったら、権限使って補給班を鎮守府に呼び出したいわ。

ある程度歩き回り、全員が味見を終えたあと、追加で入ってきた複数の皿が既存の皿と取り替えられる。

運んできたのはどうやら料理を作っていた部隊の人たちらしく、その中には異様な存在感を放つ天龍もいた。

「よっ、結構うまく出来てるじゃん」

「ま、まあな！　オレたちにかかればこんなモノだ！　うん！」

若干引つかかる部分はあったものの、仲間とも仲良くやれている様子だし、天龍の飛び入り参加をあまり気にする必要はなかったようだ。

海軍唯一の参加者である天龍の艦隊の肝心な料理はなんとリゾット……のようなもの。

トマトソースを主体とした混ぜ合わせご飯と、一見インパクトに欠けるが、使用している調味料などはかなり少ないはずだ。そのうえ旨いともなれば申し分ない。

個人的には天龍が鎮守府のみんなと一緒にうまくやれているかどうかの方が気がかりだったので、勝敗なんてどうでもいい。

天龍が最後にお皿の上に岩塩をかけた。

「……よし」

適當すぎる。

空軍の連中はこぞって海軍側の料理を試してみたかったらしく、出された瞬間、一斉にそのリゾットモドキに寄り集まる。

俺たちも口を付けた。

「「……これは」」

美味しいが、実直な感想を言わせてもらおうと、

普通。

「は、ハハツハア!! 所詮は海軍の料理イイ! 海クセえ料理が大地の恵みを授かったア俺ら陸軍にい、勝てるワキヤネエダロオ!? アアアアハハツハハ!!」

「その世紀末みたいな喋り方どうにかならないの? 流石陸軍」

「グルルルル!!」

「やめないか、みっともないぞ」

「すいません」

料理大会は終了し、そのすべて物色したあとでやる事は分かるような? 審査の時間だ。

といつても俺達はそれぞれの料理に点数と感想を書いて、提出するだけで発表は後日となる。偏った感想を避ける為の空軍であり、念密に審査を下すのは彼らの栄養士である。精算して結果を公表するのは当然だが、その他に理由を上げれば、海軍がいると喧嘩になって会場壊れるからである。

結果は陸軍チャンネルで発表される予定だが、海軍の人たちが暴徒と化して乗り込んだりしないか心配すぎる。

結果を見て天龍が泣くような事態になってみる、駐屯地が海軍によって武力制圧されるぞ。

とワイワイ話しながら輸送車の中で補給班との交流を深めていく。

「良かったぞ天龍、あとみんなもよくやってくれたな! すげーうまかったぞ!」

「へ、へへっ、そ、そうか? でもオレは何もしてないし……」

「謙遜しないでください天龍さん! 俺たち一生天龍さんについていくッス!」

告白みたいなセリフ、ロマンチックやん。

「それ龍田さんもついてくるってことだぞ」

「「あ、やっぱいいッス」」

「なんでだよ!? 龍田はイイヤツなのに……」

イヤツと怖い奴は兼任できるって知ってた？

天龍にエツちな事しようとしたら絶対に殺されるじゃん。

「アハハっ！」

だがみんな笑ってる、みんな笑顔で家に帰る。

笑い合い、勝利と共闘を分かち合い、共に人生と言う名の青春を謳歌した皆となら、これからも鎮守府を盛り上げていけるだろう。

と、俺は心の底から思っていた。

・
・
・

と、いかにも海軍同士で仲間割れする展開かと思いきや、そのような惨事は起きなかったし、起きるわけがない。仲のいい海軍士官同士でいがみ合うほど、俺たちは落ちちやいない。

え、海軍派閥争いだって？

派閥争いなんて無かった、いいね？

数日後の舞鶴第一鎮守府の出撃所。

「なんだって俺たちの船にテメエら見てえな陸クセエ阿呆ども乗せなきやいけねんだアア!？」

「ほお、炊事競技大会で負けたからってそんな吠え面かかれてもなア……?」

「お、平気で逆鱗に触れる陸軍将校さんマジリスペクトっすわくあははは！ よしシバくぞお前らア!!!」

「やってみろや海潜りしかできねえワカメちゃん共がよお!? ワカメちゃんがカツオに勝てると思ってるのかアア!？」

出撃所にてもめている数人の集団と、もう一方の集団は人数的に互角だが、ここは海軍基地である鎮守府なので、原則的にコツチが優勢か。

一難去って、また一難。

天龍周りでしていた俺のフォローも少しは甲斐があったのか、補給班との交流を口切りに、その後も順調に組織へと馴染んでいく。

一匹狼から、慕われる先輩になるまでは大した成果だが、それ以上に天龍自身の頑張りが身を結んだ結果だった。

仲良くなったと思った次がこれだよ。

陸海の茶番が最早定番となっているこの頃、いがみ合っている理由は試験段階中の輸送船に陸軍を乗せたくない、海軍側から突っかったからである。フィジカルコンバットはまだ無いものの、いつ第二次舞鶴陸海対戦が起きても不思議じゃない。

第一次陸海対戦（剣道）に参加した身としては、あの惨劇を止めたいと思うのは必定。頃合いを見て止めるつもりだが、今回は完全に私的な感情で乗せたくないと言い張っているこちら側が悪い事は遠目で見ても明らかだ。

実は俺、さつき軍需部に書類渡しに行ったんだけど、この新型輸送船の試験の立ち会いを頼まれたんだよなあ……こういう事態を想定して、未然に防ぐ為に俺に頼んだんだろうけど、既に手遅れとはまげたなあ。

新型兵器の周知と用途の説明のために近くの要港部や警備府からも来るから、本家舞鶴が醜態を晒すのはNG。

「この天龍サンを誰だと思ってるんだオラア!? 陸クセエクソカスも一撃轟沈拳! 飛翔の龍、天龍様だぞオラア!!」

「フ、怖いか?」

颯爽と後ろからやってきた天龍。その異名どこで拾ってきたの?

天龍が仲良くなってるのはいい事なんだけど、反面で陸軍との溝がモーゼの海割りの如くバツサリと別れている。

「ハア!? 天龍だつてよオオオマエラ!? ドラゴンちゃんどうしたんでちゅか?」

「え、何その眼帯? かわいいでちゅね」

「おいおい、よく見たらエロい体してんじゃねえかよ!」
「う……」

流石の天龍もやりチンのな雰囲気キャラ男達に囲まれば乙女

のように怖気づいてしまう。一切顔を変えていないように見えてヘルプサインをこちらに送ってきている。

輸送船に関しての陸海同士の揉め事は過去にもあったが、過去から学ばない以前に俺の目の前で喧嘩起こされるのはたまったモンじゃない。立会人を任された以上は任務を全うする。

止めよう、海軍の為に……そして何より、天龍に突つかかる事で龍田サンというリーサルウェポンが飛んできて恐怖から絶望の底へと落とされる事を知らない愚かな陸軍諸君の為に。

その思いを胸に前へと踏み出した俺よりも、先に歪み合っている集団へと歩み寄ったのは、小さな艦娘だった。

「申し訳ありませんでした！ 我々が失礼な事を言ってしまったのなら、一時の失言ですので！ この場合は……どうかお願いします！」

「お、おい初霜」

「黙ってて！」

天龍から初霜と呼ばれた艦娘の剣幕で、双方が黙り込む。しかしそれで立ち止まるような陸軍じゃない。

「お、この娘も可愛いじゃん。ソッチが悪いと思うんだったら、誠意つての？ 見せてもらわなくちゃねえ？」

「そうそう！ 例えば初霜ちゃん、だっけ？ 君のパンツ見せてくれるとか」

「ハア!?」

流石の海軍兵士諸君もこれにはブチギレる。天龍は今にも腰に添えた剣を振りかざしそうな勢いであり、初霜も要求を受け入れそうな雰囲気だったので、ようやく俺が登場する。

「あのおく、もうそろそろ時間押してるんで、そのへんで手打ちにしてもらえませんかね？」

「「穴戸中佐！」」

「は？ テメエ何言って……って、え？ 穴戸……？ おい、まさかあの人が……」

「ま、間違いないえ……艦娘と己の肉体だけで海上を切り抜けたあの前線のりゅ」

「そうそうそうそう！ その小っ恥ずかしい名前のヤツ！ あ、口に出さなくてもいいからね？ 俺あの名前気に入ってないから絶対に口に出すなよ」

時間が押してきたのは事実であり、他の要港部や鎮守府にいる艦隊も続々と集まってきた。それは出撃所を埋める勢いで入ってきており、その中心でギャーギャー騒いでいる俺たちに視線が集まる。

「って事は、元連隊長の斎藤大佐の同期……？」

「それマ？ あの陸軍裏切った奴の同期とか……」

「は？ 斎藤連隊長は理想の隊長だろうがア!？」

……よし、形はどうであれ、海軍への敵意は逸らせた。天龍や他の艦娘たちにも今のうちに彼らから退散させて、彼らの連隊長と整工班長が来るまで待つ必要がある。その間に仲間割れを仲裁すれば、すべてが上手く行く。万事解決ってやつだ。

輸送船の試験をさ、難しくしないでほしいってのが俺の本音。その意を汲み取ってくれなかったので、こいつらを黙らせる方法として使ったのが、脅しである。

陸海空同性愛掲示板というディープな場所へのアクセスをゲイの紳士方から手にしてしまった俺は、何に使うのかとずっと迷っていた。まさか「いい加減やめねえと、テメエらの名前使って、エイズになりてえ！ って掲示板に書き込むぞ」と囁くのがこれほど効果があるとは思ってもよらなかった。

俺の説得もあり、退散して整列する陸軍を見届けたあと俺が探したのは、あの勇猛で可愛らしいバンダナの艦娘だが、既にみんなと同じように整列している様子だ。

諫めようとしてくれてありがとうと、後でお礼を言っておこう。そう思って食事に誘おうとしたんだが、試験が終わった後、数分ほど彼女の姿を探し回ったんだが、初霜はどこにもいなかった。

……もしかして、幽霊？

大昔に、アクシデントで大破着底して終戦してしまった駆逐艦の彷徨える舞鶴の亡霊説。

俺、スピリチュアルなモノは大ツキライなんだけど。

舞鶴参謀時代 初霜ふもふ

もしもこの舞鶴に、幽霊、亡霊、悪霊、守護霊がいたら、俺のところに来なさい！ 以上！

って、いるわけないやろボケ。

幽霊なんてこの世に存在しない。ウィンチェスター・ミステリーハウスは創作で、ヴァンパイアなんて存在しなくて、この世にあるすべてのオカルトは実在するものではありません！

幽霊でもなんでもなく、俺が見た勇姿は実在する艦娘のものである。

それは俺たちは輸送船試験を行った数日後に証明された。

「この度、遠征艦隊に臨時編成された初霜です！ よろしくお願いします！」

「おう！ よろしく頼むぜ初霜！」

「ふふふつ、元気な娘ね〜」

食堂に近い廊下で、遠征艦隊の旗艦天龍や龍田さんと話しているのは、紛れもなくあの黒髪のバンダナ少女である。

初霜はどうやら要港部所属らしく、鎮守府への研修として一時的に配属された、言わば選ばれし精鋭艦娘である。

艦娘として、要港部から鎮守府に研修としてやってくるのは鎮守府側としては珍しくない。だが、選ばれる艦娘は相応の実力を備えている証拠でもあり、艦娘、そして要港部として言わば榮譽を賜るレベルである。

一般的な感覚で言うのならば、大学受験せずに、大学側からのスカウトを受けている、みたいな状況だ。一時な編成だが、惑うことなく、彼女の将来は期待されている。

何よりも、初霜は美人可愛い。

俺好みの黒髪ロングで、先端を縛ってるのも個性的で素敵だ。ちゃんとした大人の女性としての魅力も兼ね備え、少女のような愛らしさがある。天龍と龍田さんも表情を和らいでいる様子で、彼女に声をかける者は誰であっても好印象を残して去っていく。

たまに、不安げな表情を浮かべる時がある。それは刹那で起こる出来事で、瞬きをすれば、普段どおりの真面目な顔に戻る。

しかし、それは硬派な彼女が見せる一瞬の油断なのかも知れない。そんな、何処か奥ゆかしさのある彼女の後ろ姿を、いつの間にか追いかけていた。

研修期間である三週間が半分ほど過ぎた頃、個人的な忙しさと部署が違うことから、まともに話す機会を設けられないでいた。

そんなある日、酒保で初霜を見かける。

「んん〜……天龍さんにはこれと……龍田さんにはこれ……それとみんなには……」

酒保と言う名の売店では様々な物が取り揃えてある。日用品、スナック菓子、戦闘糧食、ポーカーとかの玩具などなど、要はコンビニだが、昔の名残からこう呼ばれる事もある。

一般的に酒保は軍人が働いているように思われるが、副業禁止なので一般人が店員をしている。今日も笑顔で接客するオバはんはんに挨拶してから、初霜に近づいた。

「し、穴戸中佐!？」

「ああ敬礼はいいから。今日オフだし、初霜もオフだろ?」

「は、はい……」

ルビー色の色彩を放つ瞳は、少し警戒心を孕んでいた。

初霜の経歴は仕事の合間にちよくちよく聞いていたので、ある程度彼女の事は知っている。

高浜要港部のいち艦隊の旗艦として成果を出していた。個人の対空戦術の強さもさることながら、練度を伸ばせば確実に一軍入りを果たすだろうと予想していた。運の良さもあり、夜戦のお供としてはこれ以上ない艦娘だと、遠征艦隊からも、一時的ではあるが、信頼できる仲間として親しまれている。

ぎこちない間合いを取る二人。距離を狭めるために、俺は一步前へと踏み出した。

「遠征艦隊のみんなに何か買って行くつもり?」

「は、はい。日頃お世話になっているから、何かついでに買っていこう

かと思つて」

「なるほど、絆創膏と消毒液、ジッパー袋に、サプリメントか……実用的なものばかりだけど、お土産的な物はいいの?」

「私がもらつて嬉しものを選んでるのですけど……変、でしょうか?」
「いや、その中には初霜の分も入ってるんだろ? それに、天龍はウチラの提督みたいな物欲の塊じゃないんだから、何もらつても嬉しいと思ふよ」

「それならよかつた……え、あれ? お財布……」

お会計を済ませようとレジ前に立とうとした初霜が手をつ込んだポケットをモゾモゾさせてから呟いた、お財布、という言葉は、衝動的に俺の胸ポケットから小型の財布と、たまたま中に入つてた諭吉を出させた。

「二万円お預かりしまーす」

「え、そ、そんな! いいです宍戸中佐! つていうか、なんで中佐が払う……んっ!」

「俺、可愛い娘見ると格好付けたくなる体質なんだ……ドヤア?」

人差し指を押し付けられた初霜は赤面した。

こちらも顔が爆発するほど恥ずかしい。

店員のオバちゃんも「キモッ、コンビニで奢るのがカッコいいと思つてるクソ勘違い男乙」みたいな目で見てるのは理解しているの、あえて視線を合せないまま、初霜を引っ張りながら店を出ていく。

初霜のレジ袋を俺から受け取つたのは、広場にあるベンチに座つてからだった。

比較的ゆつたりとした空間が楽しめる広場は休憩時間によく使われるが、午前10時を回るここが埋まるのは二時間後となるだろう。

俺が知る中でも真面目な性格をしていることは知っているんだが、まさか財布を忘れちゃうなんてドジっ子を踏むとは夢にも思わなかつた。

「あの、ありがとうございます、その……買つてもらつちやつて。お財布を忘れた私へのフォローだつたんですよね?」

漢はここで「え？ 何のこと？ 俺はただカッコつけたかっただけ。財布忘れてたの？ じゃあ、なおさら俺の株上がっちゃって、かえってラッキーって感じ？」「素敵！ 抱いて！」「初霜……」「穴戸さん……」とロマンチックへの強行突入を果たすだろう。

その展開が臭すぎるんだよなあ……一旦保留にしておこう。

「俺の諭吉はエ○ゲー買うための諭吉くんだったのになー……」

「す、すみません!! 明日必ず返すので、それまで待ってもらえれば……!」

「ははは、ごめんごめん。ちよつとからかって見たくなっただけだよ。初霜みたいな可愛い娘に奢れて光栄だったよ」

「可愛い……なんて」

わずかに表情が曇った。

軽蔑として受け取ったわけじゃない。自分の容姿に自信が無かったわけでもない。この時の初霜は、俺が想像するよりも、遥かに違う事を考えていた。

可愛さで仲間を守れるのか？

彼女なりに突っ張った感情を抱いていた事を知ったのは、ずっと後になってからだった。

「奢ってあげた代わりに、少しお話でもどうかな？ あまり時間は取らないからさ」

「うん……分かりました」

コンビニで買ってきたボトルのお茶を開き、潤された喉から最初に声を出したのは俺だった。

「噂に聞く初霜は、すごく真面目で整理整頓な艦娘だと聞いたから、お財布を忘れるなんてドジは踏まないと思っただ。こういうミスをよく繰り返すわけじゃないんでしょ？ ここ最近、ちよつとしたミスが増えてるんじゃないの？」

「な、なんで分かるんですか……?」

「なんとなくだよ。でも俺の予想は命中してたみたいだし、その報酬として、なんで調子が悪いのか教えてもらってもいいかな？」

銃に見立てた指を天に突き、ウインクで初霜に笑顔を向ける。「あ

ははっ」と笑顔を返してくるが、すぐに曇りのある表情に戻る。

「天龍たちと上手くいつてない……つて事はないな。俺が見ても、十分な成果を發揮していると思うし、初霜からは良い噂しか聞かないし、任務そのものに支障がない以上とやかく言うのもなんだと思うけど……俺も舞鶴に初めて来たときはそんな感じだったし、表面上よく見えても、慣れない環境だとストレス感じるよな。初霜もそう?」

「まあ……そんなところです」

俺たちが座るベンチの後ろには天龍がいる。

実は、お茶をちよびちよびと飲みながら、遠くにある出撃所を眺める初霜の様子を見てくれと頼んだ天龍は、少し心配していた。

自分の艦隊に所属している艦娘が活躍の場を……ひいては戦場を自ら望んでいるのは、世界中を探しても少数派だろう。

精神状態に異常があるのか、自殺願望を持つほど追い詰められているのか、あるいは彼女をそうさせる何かがあるのか……何れにしても初霜が提督に、もつと出撃させてほしいと直談判した光景を見た天龍は、俺に初霜がどんな心情なのか聞いて欲しいんだと。

まさか、この真面目そうな顔の裏には戦闘狂としての素質があるとは……それはともかく、天龍自分で聞けや。腹割って話すのが怖いかフフ怖の名が廃るぞ。

上官よりも赤の他人に話す方が楽な時もあるので、初霜が何故出撃したいのか、何故時々曇った表情を見せるのか……生理ってわけでもなさそうだし、家族内の問題だったら聞き出せねえぞ。

まあそこまで個人的な話だったら、せめて天龍や龍田さんが心配していた事だけは伝えておこう。本人たちは嫌がるだろうけど、一時的でも艦隊のメンバーとして不満や問題を解消したいと思う辺り、天龍たちもまた、仲間想いだなーってね。

ついでに、初霜と二人きりでベンチ。

イイ感じに見えなくもないので、俺がバイだとかゲイだとかいう噂を解消するいいチャンスにもなる。定期的に通りがかる人々よ、噂が広まるのは原則的に嫌いだが、今だけ是可以るだけ多くの人に広まっ

て欲しい。俺とこの可愛いはつしもふもふはお似合いであると。

「宍戸中佐は……珍しく前線で戦った経験があるんですよね？ 八号作戦で……何故中佐は必要でもないのに、最前線で戦おうとしたんですか？」

「え、ああ、アレね……まあ、その、うん……前線艦隊の一部である哨戒艦隊は、俺の船を含めて深海棲艦のデイテクターに入らない程度の電波指数な上、航空機を捨てる覚悟で索敵機を小まめに発艦させてたら、敵が散乱している状態だったからそれを俺の指揮のもとで撃破していったら、そして誰も居なくなつた……状態になつてみたいな」

俺はこの嘘を生涯に渡つてつき続けなければならぬとなると、地獄に落ちそうで怖い。

「そ、それはすごいですね……」

「別に俺が凄いわけじゃないさ。俺の艦隊が、俺の言うとおりに動いてくれたからっていうのが大きいんだ。艦隊のおかげで、最終的に前線の艦隊は小破で済んだ、みんなの命を守れた、って点では、自分の中でもかなり誇りに思つてる事だけだ」

「私も、そこは誇つて良いと思います。やっぱり貴方は凄い人だと思います」

「え、そう？」

グへへへへへエエエ！

「……宍戸中佐のように、艦隊を指揮できる立場になれば、私も仲間をちゃんと守れるようになれるでしょうか？」

「ん？」

意外な質問だった。

初霜は、他人に興味がないわけではないだろうけど、仕事と私情をキツチリ区分けするドライさがある。それは仕事態度としては悪くないが、反面厳しさを感じさせ、仲間とのコミュニケーションが円滑に行えない時がある。

そんな初霜の表情は、何時になく不安そうに、そして何かの答えを探している。

仕事のスキルを向上させるための質問じゃない、これは彼女自身の

私情から来ている間だ。

俺は、身体と顔の向きこちらに寄せた初霜を見て、直感でそう感じた。

お茶が零れそうなペットボトルを気にも留めず、ベンチの上に手を置いた初霜に注意を呼びかけた。我に返ったように再度出撃所を向いている間、その質問への言葉選びを慎重にしてから、初霜に俺が思ったことを投げかける。

「初霜は艦隊を指揮する提督になりたいの？」

「い、いいえ！　そういう事を思ってたんじゃないよ」

「いや、初霜の気持ちは分かる。仲間を守りたいって気持ちは、俺も同じだからね。だからもつと出撃したいって気持ちはわかるよ」

「え？　なんでその事を……」

「一応は幕僚だから、色々な情報が耳に入ってくるんだ。艦娘個々の性格とか、整備現場での愚痴とか、参謀長の妻の浮気で家庭内と参謀長の機嫌がシユラバヤみたいな情報をね」

「す、すごいですね……」

「でしょ？　色々なデータを頭に入れて、その情報を精算して、作戦と基地や方面軍全体の動きを円滑にするのが仕事なんだ。多少パーソナルな事を聞いたりして、その不満や問題を解消するのも、提督……ひいては、その分身としての役割を受け持つ参謀のお仕事なんだ。今はまだミスがないかも知れないけど、頭の上にモヤがあると、未来の失敗の要因を作っちゃうから……俺の言いたい事、分かるでしょ？」

「……………」

「どんなことでも良いんだ！　俺に話してくれ！　誕生日だったのに誰も気づいてくれなかったとか、舞鶴の仲間たちと話してる時に所々会話を途切れさせちゃったとか、最近お通じが良くなって、通常時は100cm以上繋がってるはずなのに、昨日はタネマシンガンだったとかッ！」

「汚いです、本当に汚いです」

「すんません。でも一人で抱え込むより、吐けば楽になる事もあるぞ？　初霜ってさ、他人に頼った経験とか、自分の本心をさらけ出した

事と違ってあまりないんじゃない？ ほらほら、聞いてあげるからさ、話してみなよ。仲間を守る事について、真剣に誰かに話せるのって、俺ぐらいしかないぜえ？」

「なぜ貴方に限定されてるんですか……ふふっ」

思わず頬を和らげた初霜は、自然体だった。紅色の瞳は細められ、手を口に添えて微笑む姿は、そうそうとした軍事拠点には似つかわしくないほど麗しいものだった。

感情から来た顔の動きは、同時に彼女自身の警戒心も説いてくれたのか、微笑み合う二人の会話を再開させたのは、初霜の方だった。

「……私は仲間を守るために、強くなりたいんです。出撃の件も、そんな安直な理由から来ているんだと思います」

「初霜は十分に強いよ。でも一人でできる事に限りがある以上、初霜だけが強くなっても意味はないんじゃないかな」

「そう思います……でも、やっぱり仲間を守るためには、強くならなくちゃ……」

……初霜という艦娘は、みんなを守るために戦っている。

戦う理由なんてそれで十分。そう断言できるほど、彼女の中では最優先事項であり、それを真つ向から公然と否定できる人間なんて限定的だ。その為ならどんな戦いにでも繰り出し、あらゆる任務を遂行する事でその練度と仲間との協調を高めていた。

初霜の強さの真髄はそこにある。

しかし、その強さの軸が裏目に出てしまい、要港部で一度トラブルを起こしてしまったらしい。

味方の艦隊が窮地にあり、それをいち早く察知した初霜が、出撃中で、しかも補給が必要だったにも関わらず、独断で艦隊編成から離脱し救援に向かった……というものだった。しかも一人で。

幸いにも轟沈をささずに済み、その状況を整理して、少なからず初霜の活躍も評価されて然るべきだったが、司令官は初霜の命令無視を咎めてしまった。

高浜要港部の司令官は俺の提督育成プログラムの同期であり、ルーには厳格な態度を取るヤツだったが、良い結果を出した臨機応変な

対応に「ありがとう」を言えない阿呆じゃない。

司令官としては彼の気持ちはわかる。独断での行動は危険であり、少なくとも艦隊が任務を終えてから全員連れて行くべきだった。何より、初霜のような艦娘が知らぬ間に轟沈してしまう状況は是が非でも避けたい。初霜の姉妹、そして彼女を慕う仲間のためにも。

注意を呼びかけ、心配した意を初霜に伝えられれば良かったが、時として人間は情報伝達をうまく行えない状態がある。流石に司令官の怒鳴り声と一週間の謹慎は初霜に堪えたらしく、それ以降は出撃回数も減らされた、と言っている。

が、それでも普段どおり任務をこなしていた。

普段どおりとは言っても、周りの皆もたまに感じる双瞳の暗雲は、潜在的に彼女が秘めている「戦わなきゃ」という使命感と、それから受けるプレッシャーと……勘違いからくる劣等感を抱いていた。

「戦わないといけないのに、鎮守府の皆さんとても強くて、多少自信を持っていた私でも付いていくのがやっとで……私なんか足元にも及ばないレベルだなんて……」

「まあ重ねた年数も違うし、正規空母や戦艦も居るから、海戦技術的な問題はあまり気にしなくても良いんじゃないかな？ 鎮守府みたいな王道的に拠点制圧や大規模作戦を指導する艦隊の一翼になるより、要港部の後方支援の方がはるかに重要だったりするし、そんなのは比較の対象に入らないよ。もちろんレベルの差がありすぎるからって意味じゃなくて、分野が違うからって意味だね」

「でも、それでも私は……この手で、一人でも守りたいんです」

今まで仲間の命のためだったら自分が犠牲になる事すら惜しまず、戦いとは味方を守ることだと信じて疑わない艦娘は、今その考えを変えながら、より効率的に仲間を守るためには、どうしたらいいのか？

そんな、彼女の力量内では答えなど、到底見つけようのない問題に真っ向から挑んでいる初霜を見て、俺は実直に言葉を出す。

「初霜がもっと強くなって、それで提督にもなったらサイキョーだし、救われる仲間は増えるかも知れないけど、正直言っておすすめしない。理由は、どれほど自分一人が頑張っても、救われない仲間がいる

事に気づくから。そして、仲間を守る方法をまた考えてしまう。でも、考え続けるのは良いことだ。一人ではどうしようもないレベルの問題は、頼れるその仲間と一緒に考える……これじゃ駄目かな？」

「仲間と、一緒に……？」

考えすぎると人は盲点を作ってしまう。それはどんな事でもそうだが、意外な点をつかれた、と物語る初霜の瞳は正に良い例だ。

「出撃を減らされる事はへこむ。でも、何も出撃だけが守る方法じゃない。まずは遠征艦隊のみんなに相談でもして、仲間を守る方法について話し合ったり、模索したりするのはどうかな？ 探すために出撃を増やしてほしいって言うんだったら……いや、やっぱりこの鎮守府や初霜が所属してる要港部だとちょっと難しくなってるかも知れないけど……」

初霜は黙り込んだ。模索という言葉の響きに揺さぶられたのか、元のペットボトルを遊ばせながら、真剣な眼差しで地面を見つめている。心内を整理しているのが顔の筋肉の動きでわかる。

心の整理に言葉をかけて邪魔をするのは、彼女の今後に関わってくる問題だと十分に承知しているが、ここはあえて俺が後押しする。

「……なんなら、俺の警備府に来ない？」

「え……？」

そして現代へ

「実は俺、長崎警備府に着任する予定なんだけど、初霜さえ良ければ。初霜の事情も聞いたことだし、俺も警備府の司令官として全力で協力させてもらえると思うんだけど、どうかな？ もちろん、姉妹たちと一緒に異動してほしいだろうから、そこもなるべく調整する」

事実上のスカウトだった。

有能な艦娘だが、少しフォローを求めているタイプの彼女は、俺が構想する理想の警備府像を作るための構成要員としてぴったりな艦娘だ。

仲間を守る方法を探したい。その、非常に仲間想いな初霜の秘めた心内を知り、俺は彼女に協力したいとも思った。初霜にとっても、彼女の要港部内にいるよりかは遥かに過ごしやすく、そして戦いやすくなるはずだ。少なくとも俺がそうしてみせる。

「ま、待って待って！ 警備府の司令官って、貴方がなる保証なんて……」

「実はあるんだよね、海軍省直々の内定だから。あの八号作戦の功績のおかげかな？」

驚きを隠せずに呆けてた顔でこちらを見上げる初霜は、今度こそペットボトルのお茶を落としそうになったので軽く俺が手を添えた。

「危ないじゃないか……初霜」

「す、すいません！ で、でも、たとえ警備府司令官でも指揮する艦娘は選べないんじゃない……」

「俺、ある程度コネがあるから人事部に問い合わせられるよ」

とは言っても、元教官とかの三人程度しか直接知らないが、その中のひとりが俺の元上司であるカマホモ班長なので、多分この程度の人事をコネるのは難しいことじゃないはずだ。なんなら海軍長官に直談判してもいいんだぞ。

その事を聞いた初霜は、今自分がどんな人物に話しをしているのかようやく理解したような面立ちで、小さい身体を更に小さく縮ませ

る。

滅多に見せないスキをさらけ出してしまってる姿は小動物のようで愛らしくもあつたが、そこまでさせるのは申し訳ない、と思つてそんな表情で口を開こうとした唇を指で塞いだ。

「初霜、仲間を頼るんだつたら、まずは俺を頼ることから始めてみてくれ。一番難しいキツクスタートを、今ここで済ませても良いんじゃないかな?」

「んっ……穴戸中佐……」

誰かを頼るのにまだ抵抗がある、だがそれを破ろうとしている。

俯きながら沈黙した数十秒が終わった頃、俺の目に映る初霜は、そのころの曇天を軽く吹っ切ったような表情を浮かべながら立ち上がり、一言だけ発した。

頭を下げながら、シンプルな一言。

「お願いしますっ!!」

「おう! 任せられたぞ!」

『……フフ』

ベンチの後ろにそびえ立つ樹木。

その後ろで微笑んだ天龍の「フフ」という声が聞こえたが、見つめ合う二人を邪魔する者はいない。

「初霜……」

「提督……」

熱を帯びた視線は、血色の良い頬から来ている。

輪郭の柔らかな、あどけなさが残る少女のような真白の肌に、ゴツゴツとした手が乗る。容姿からは想像もつかない大人びた艶声が漏れた。

「んっ……」

「初霜って……結構オトナな声してるよね」

「いやっ……聞かないで……」

「かわいいよ」

パツチリと開いていた目を細め、漢の手の甲に自分の手を添え、ぬ

くもりを堪能している。自分が生来からの甘え上手だとは、彼女自身も知らなかつただろう。漢の手に頬を擦り、たおやかな微笑みが妖艶な眼差しを乗せて理性を逆撫でする。

「そんなにイヤイヤ言っていると、俺、やめちゃうよ?」

「あつ……うう、いじわるっ……」

上目遣いをされる。

漢にとって、この初霜とかいう艦娘を抱くにはもう十分すぎるほどのエロスだったア……サイツコウ。

そして通りかかる誰もが思った、この二人は理想的なカップルで、艦娘の方は凄く可愛くて、漢の方はこれでもかかってぐらいの超絶スーパーイケメンの将来有望系カツコイイアルティメット美男ー。

という妄想話を繰り広げていた、一年後の長崎警備府、時雨たちの部屋。

「うんうん……! ひつぐ! 初霜、すごい仲間思いなんだね……!」

白露感動しちゃった……!」

「鈴谷もカンドーした! スーツごくナミダ! うええええん!!」

「そうだろ? 感動したんなら俺の拘束解いて痛い痛いイタイイ!

おいッ、現行犯でもこんな拘束のされ方されねエぞッ!」

白露ポストンクラブと鈴谷ゲイ♂バーホールドによる四肢コアドリプルロックをかけられている俺は、いま一番ホットでグレートな話題の種となっている元提督である。とは言っても、ここ数ヶ月間は勉強と遊びまくりな日々を過ごしている。

隅っこの天井にあるモニターにパソコン繋げてみんなで恋愛映画を鑑賞しましょう! と言った五月雨ちゃんの提案で、みんなで映画鑑賞をしていたこの頃。初霜、そして他の艦娘も映画鑑賞に参加していて、俺との馴れ初めの話題になったから素直に話したらコレだよ。確かにちよつと恋愛要素入れた感じで話したけど、だいたい合ってるから。

「なんか穴戸くんが初霜とイイ感じになったみたいにはぎいてたけ

「いや私のよッ!! 落ちた穴戸さんの気分が落ち込んでるのを見て村雨がよちよちして墜とすのが定番なの! 散々ネックロックとかコブラツイストとか胸押し付ける口実作れて不公平でしょ!？」

「村雨姉さんに皆さん、それは春雨の役目ですッ……」

頭上で俺というモテモテハーレム系漢を取り合う可愛い天使たちと、丁度終わった恋愛映画のスタッフロールを見ている二派。

「ひっぐ……最後……二人が、いっしょになれて……よかったです……! 五月雨……すっごく感動しちゃいましたあ……えっぐ……っ! グスン……皆さん、どうでしたかあ……?」

「これ見るぐらいだったらポリウツド系の映画見てるほうがマシ、僕の時間返して」

「夕立は面白かったっぽい! ヒロイン追いかける男の転び方とか、絡まれてる時に不良殴るシーンとか爆笑っぽい! 一発殴ったら気絶するとかありえない、っていうかそんなに強かったら就職するよりプロボクサー目指したほうがいいっぽい」

「そもそも男性と女性が一目合っただけで惚れて、いきなり話しかけるのはあまりにも不純ではなくて? 目があっただけで電話番号を交換するような文化なんですの? 熊野でしたら、一目惚れでも聞いてきたその時点で酔が覚めますわ」

「桜が咲いてないのに、桜が舞うシーンが頭からずつと離れなかったわ……あ、みんなもそう?」

「「分かる〜!」」

「お前たち辛辣スギイ! 五月雨ちゃんの純粹すぎる涙を悲しみの涙に変えたいのかボケカス共ッ!!」

五月雨ちゃんは辛辣すぎる皆の暴言をこらえた。よしよし、よくやった。これ以上の無用な涙は、彼女には似合わない。

「それにしても、いまだに警備府の司令官みたいに、今の司令官に助言したりしてますよね? 三日月がとやかく言える事じゃないと思うんですけど……いいんですか? 一時的とはいえ、三日月には穴戸司令官の方が権限を持っているように見えますっ」

「いいんだよ三日月。日本文化ではね? ポジションを譲った方が偉

くなる場合が多いんだよ。 関白を譲った太閤しかり、社長を譲った会長しかり、天皇陛下が讓位あそばされた後の上皇陛下しかり、一番権力持つてるポジ譲つても終身、元老院みたいに老人が権力持ち続ける年功序列を根本から変えるのは難しい、儒教の呪いだよなあ……」

「そこまで言わなくても……第一、そんな事を言ったら司令がその老人になってしまいますよ?」

「俺? あははっ、ただの例えだよ親潮。 たかがいち警備府の司令官職を降りてその帝王になったところで、面白くもなんともないぜ?」

「そうですねっ! 司令に帝王なんて似合いません! 似合うのはポジポジの実を食べて男色という名の大航海へ乗り出すGAYの意志——」

「真つ黒そうな海だなア綾波ちゃん!! いい加減にしねえと俺の権限でここの警備府だけBL禁止にすんぞオラア!」

「ひ、ひいいいい!!! そ、それだけはあ……! そ、それだけはお勘弁をおお!!」

見事な三つ指で土下座する綾波ちゃんを見て軽く引いた俺。そもそもどんな経由で本を買っているのか分からないので止めようがないんだけど……つか、土下座するほどのことじゃないでしょ。

「そうだなア……綾波ちゃん、そろそろ改二改装される頃でしょ?」

「ふえ……? は、はい……」

「白露さんとか村雨ちゃんとか見てると、やっぱり改二になるとクツソエ口くなるんだなあ〜って分かったから、改二になったら真つ先に俺の部屋に来なさい……この俺が、直々に整備してあげるから……いやあくエッチな娘が多すぎてたまりませんなあこの世の中はアハハッハハア!!!」

「……………」

「あ、ちよ、みんな、なんで精神混入棒なんて持って……え、俺のお尻は違うよ? そうやって使いもんじゃないよ? 野球のバットぐらゐある極悪棒が工事現場のドリルのようにフル回転させればキツキツに締まったケツも開いちやうとかそんな事ないから俺はまだ

ヴァージンロードを歩きたい乙女のままでもいいか——ッ」

沖縄作戦編

Progressive

とある民泊。

「……では以上だ」

「「ハー」」

提督は一時間ほど話し込んだ口をお茶で潤していた。彼に従う幕僚達も、固く閉ざされた瞳を開き、会議室として使われていた民泊を出ていく。

何重にも包まれ、隠かくされた提督の心情は難解。

されど、その痛みに理解を示す者が殆どである。

彼の覚悟は誰にも止められず、彼自身も自分の止め方を知らない。正しいこともわからない。

蠟に付けられた火は数枚の紙を燃やした。只々不完全燃焼によって出来た黒焦げの燃えカスが出来上がるだけだが、情報という物理的な実体を持たない物を隠すには十分な行為だった。そこに書かれてある内容は、未来永劫だれの目にも触れられる事はない。

提督が部屋の玄関を閉め、目の前にある公園のベンチに座る。タバコへ着火する動作は何十年も繰り返され、見る者からはハードボイルドだと心中で賞賛される事もあるが、消えかかっていた心を燃やすように付けられた火は、今の提督が浮かべる表情と同じぐらい弱々しく見えた。

「……………」

——今になって強い国として威厳を見せているみたいだが、こんな国がどうなろうと知ったことではない。

嫌っているヤツなんて大勢いる、こんな民族がこの島国から出るなぞ片腹痛い。また災難を引き起こすだけだ。

願わくば外の支配……私の力では海軍すら変えられない。だから、私にはこれぐらいしかできない、全てを成し遂げ、後は未来を奴らに

託そう。

「……………」

俺が休暇を取ってから三ヶ月が経ち、付き合い映画鑑賞や学業に専念しているこの頃、色々あるけど主に3つのビッグイベントが目先にある。

綾波ちゃんの改二実装。

才号作戦ー沖繩作戦が実施間際。

俺が海軍大学校戦略研究科の通信授業を受け始めた。

一つ目は案の定だが、二つ目は本当に大きなイベントだ。外国と利権について話し合った結果、日本側は独断で“ 自国領土を取り返しに行く ” と言つて作戦実施。正にタカ派。

海外からはインペリアルジャパンとかベリコスジャ○プなどと呼ばれたりもするが、同時に一般的な意見としては“ 人に迷惑をかける事を極端に嫌うブシドー精神 ” と称賛、或いは皮肉られる事もある。正にカントリー・オブ・ライジングサン。

しかしこれも戦略の一つなのかもしれない。

そもそも沖繩奪還の話し合い自体が米軍の了承なしにできないわけじゃないけど、米軍基地の問題や、深海棲艦出現当時に米軍が守ろうとした沖繩で眠る英霊の数は見過ごせない数だし、国内でも口だけデカイ少数派が沖繩を米軍管理下に置きたがってる保守派の人多いし。

沖繩は日本のものであり、米中が抵抗を見せている以上、他国の領土に関して強欲な姿勢を見せる諸外国を国民に見せつけ、反感情を呼び起こす……感じにしようとしてる解釈もできる。

本音としては少し強引すぎる気もするけど、外交政治は専門外なのでこれ以上触れないでおこう。

実際にあんな超大国が寄ってたかったら島国なんて人たまりもないんだよなあ。

沖繩奪還作戦に参加しているのは大規模な数であり、間接的に作戦関わっている人数を見ると一万人に上るらしい。一各地域でドネーションしてくれた民間企業、間接的に支援を行っている海軍役員も含まれている数だが、それでも巨大である事には変わりない。実際に現場に赴く動員数を聞くと白けるかもしれない程度だが、作戦内容と戦力的に見ても大規模作戦以上であることは明白だ。

斎藤大佐が管理する長崎警備府の一部の艦娘……と言われているが、実際にはかなりの数の艦娘が作戦に参加していない。

動員数に比べたら問題じゃないし、代わりはいると鎮守府司令長官からの直々のお言葉を受けての休暇だ。有給無休問わず、数日から数週間の休日なので建前上は休暇扱いだが、事実上参加を拒否している艦娘を上げるよりかは、作戦に参加した名前を上げる方が早い。

神風姉妹率いる涼月の第五艦隊、そして新たに警備府に編成された名前すら覚えてない艦娘たちが行つてた気がする。航海に向け、アツチの鎮守府指揮下でうまくやっているだろうかと心配を募らせる俺。

恋愛映画を見ていた艦娘たちも休暇や家族の急病などを理由にして休んだ娘もいれば、そもそも整工班みたいな作戦に参加する義務を持たない艦娘や、編成名簿に無かった艦娘がいるからこんなに少ない数になっちゃったんだな。

行く前に俺と時雨がミツチリ鍛え、変則的な戦い方もできるようにして、なおかつ必ず生き残るための戦術的訓練を作戦内容の予習よりも多く覚えさせた。この訓練には我らが白露姉妹や初霜を直々に教えに当たらせていたので、大丈夫だろうと信じている。

生き残るといふ単語は重要であり、基本的には司令官の命令には聞くようにと言っているが、アツチの司令官が100%正しい指揮を行うとも限らない。あのレイシストアホ提督がセーフティファーストを忘れるような指示を出してきたらNOと言ってやれとも伝えてある。

クソレイシストな鎮守府の提督嫌い。作戦内容も一応聞かされて

いるから問題はあまり無かったし、日本人の手で、辺りの政治的、民族主義的な考えはどうしても引つかかる。

他にも長崎にある深海棲艦教の残党狩りを陸軍さんがやっていたり、月魔が長崎警備府に着任してたり、迫りくる海軍将官会議で斎藤長官が元帥に押されるかも……と、海軍掲示板で話題になってたりと、色々俺の周りの世界では面白い事が起こり続けているが、正直それらはどうでもいい。

三番目のビッグイベントが、今の俺にとって最重要だ。

警備府の司令官の個室は、現在の司令官である大佐に使われているため、後輩の月魔と相部屋である。

パソコンの画面に映される大学教授の言葉を聞きながらノートパッドを開いてメモを取っている俺は、将来有望な海軍士官である。

勤勉であり、熱心な勉強家である俺は、着実に向上の機会を狙うイケメン士官って、それ一番言われてるはずだから。

そう、だから講義を聞きながらエロゲなんてやらない。

『即時性のある盗聴防止システムには利便性と頑健性のある高度な統制通信情報能力を実現しなくてはならない。これらには、地理的範囲の搜索、作戦本部とのリアルタイムでの情報伝送、及び司令官または指揮官などの作戦を指導する立場にある意思決定者からの応答性を含める必要がある』

『お兄ちゃん！ もう朝だよっ！ 早く起きないと、アスナのおまこがお兄ちゃんのご立派朝立ちおち○ぽを食べて、孕ませ妊娠ベイビーになっちゃうんだからっ！』

『大本営、及び海軍省内の戦略技術においての優先順位は、最優先技術、可能技術、及び台頭技術である。最優先とは最も普及している技術のことであり、可能技術とは急速な進歩をもたらす可能性のあるもので、台頭とは応用に至っておらず、検証が困難な技術のことを指す。これらの生産は、国家安全保障においての向上の課題となるモノで、基本的にこれらの優先順位は作業グループによる判断で決められている』

『ああん！ ダブルなアナからダブルファ○クう！ オジ様ち○ぽが

アウト・イン・アウト・イン・ワンダーランドおおおおうおうおう
!!!」

「何やってるの穴戸くん？ 遊んでる暇があったら来航した時雨艦隊に補給物資（おいしい食べ物）供給でもしたらどうなの？」

「突然通信もなしに入ってきたから敵だと思ったわ。つか、俺は今大学の講義を聞いて勉強しているんだよ。見て分かるだろ時雨艦隊」

「朝起こしに来る定番妹からお父様にダブルな穴をイン・アウトされる展開までちよつと理解できなかったんだけど？ え、まさか海軍大学校って、そういうことを習うところだったの!? 穴戸くんは、勉強熱心なんだねっ」

「仕方がないじゃん！ もう全部知ってる事しか話さないんだから！ でも学んでないこと言うかも知れないじゃん!! だから見逃せないじゃん!! 入学しなきゃ良かったかも……」

「でも通信だからここでも受けられるって、すごく便利でいいと思うなっ。それで、僕への貢物はまだー？」

「その可愛くないおねだりはなんだ？ もつとアスナちゃんみたいに猫なで声を上げながら、俺専用肉のおトイレになりなさいっ！」

「は？ パソコン潰すよ？」

「パソコンはやめろオ！ 国費から捻出した給料で買った大切な10万円相当のパソコンだぞオ！ 血税をなんだと思ってるやがる!？」

「よく考えたら毎日出撃してる艦隊のみんなって、絶対10万円以上消費してるよね……」

「姐さん、物の価値は相対的に決まるものです。一方が十萬円の値札を上げればもう一方が値段を下げ、競ります。しかし、軍隊という国内に競走馬のいない場所では、その価格は入手難度とモノの原価とその他の付加価値が加えられー」

「クソストーカー野郎の分際で僕に指摘するなんて凄くいい度胸だねっ。ドーナッツ食べたいなあ……チラツ？ あ、これ買って来いって意味だから」

「は、ハッ！ すぐに持ってきます!!」

ルームメイトを平気でこき使う時雨さん流石ツス。アイツが言っ

てる事は全然間違っていないんだよなあ……大量生産されているレーションですら原価や輸送費とか考えてもオークションのはクソ高いし。ダイアモンドだってデアビス社が独占販売してなかったらあんなに高くはないだろうに。

「まあまあ、あのストーカー野郎の事は許してやれって」

「穴戸くんだって言ってるじゃん」

「ちよつと定着しちやった感はある。でもアイツ提督育成プログラムに入るから馬鹿にしたられないぞ」

「へっ!？」

大きな瞳をパチパチ開けたり閉じたりする時雨は「うっそお……」と小さな声で呟いた。当然だ、俺もまさか通るとは思わなかったから。

提督育成プログラムは、新たに提督科――正式には、艦隊総合指揮課程と名付けられ、正式に海軍大学校、そして兵学校でも一部だけ、試験的に取り入れるらしい。

そこで、その提督科に入学する士官の人選を各鎮守府、そして一部の警備府とする為に、俺にもお声がかかったというわけだ。

鈴谷たちを連れてきてくれたサプライズのお礼メールへの返事を送ってきた斎藤長官が「選んでくれないか」と頼んできたんだ。

月魔は頭も良く、海軍士官として立派な精神や堅実さなどポテンシャルが高いため、俺も推薦した……が、何より現在の司令官である斎藤大佐も強く推薦したのは驚きだった。あの二人は俺の近くを離れた拍子にデキてしまったのだろうか？ 大問題すぎるぞそれ。相部屋なんだからエイズに感染は勘弁だおお……。

「それにしても、こうして穴戸くんと二人で話すのって久しぶりだねっ」

「確かにな……人が多いと、それだけ賑やかになるんだよなあ……やっぱり、これが俺の人徳かな？ ドヤ?！」

「んんっ、これはキモいねっ。ドヤ顔凄くキモい」

「キモイだと? ハッ、どうせイケメンだったらかわいいとか素敵とか何してもイケメンなんだろう? ルツキズムはアジア人にとって最

も触れてはいけない事項の一つでな？ 一番付き合いたくない人種では黒人が続いて二位なのは知ってると思うが、白人と比較しなくてもいいだろうか？ おん？ 顔面劣等舐めんなよ」

「それって僕も含まれてるのかなッ？」

「イタイイタイイツ!!! し、しぐれママやめてえ……うるうるっ」

「う……か、かわいい……？」

その通りだ。ベイビーフェイスと呼ばれ、凹凸の少ないアジア系の顔には他の人種には存在しない”可愛さ”というのがより引き立つんだ。その理論上、顔面黄金比的にはともかく、アジア系が最も可愛いという事実が成立する。だからアジア人が積み重ねてきた歴史の中で美の象徴として君臨してきたお目々パツチリ系ゆるふわ童顔おま○こがモテるのは仕方がない事なんだ。

かのBitchは通称”ロリ”と呼ばれ、それを好むとロリコンとなる。

DNAに刻まれた楔。

逃れられる(逃れられない)カルマ。

「いや、やっぱりキモイ」

「分かった、俺がキモいのは認めよう。だが分かって欲しいこともある。俺はどっちかと言えばロリはあまり好まないタイプだけど、アジア人の血統に刻まれた童顔ゆるふわアバズレおま○こに惹かれるのは本能的なナニかであり、ロリ巨乳たる白人もアジア人も好みそうな、戦場の船上で俺を扇情させるここ警備府の駆逐艦は統計学的に見ても俺に襲われやすい。QED」

「あ、頭が痛くなっちゃう……っ！ しよ、少佐さんと呼ばなきや……！」

「ホモ連れてくるのやめろっつってんだろオイッ!! いい加減にしないと俺のケツが殺人現場になるぞオ!!」

俺の叫び声を聞いたオトコが、扉の向こうから顔を覗かせた。

「姐さん買ってきたツス」

「ありがとう、気が利くじゃんっ」

「時雨。気が利くってき、自発的な行為を称賛するときの言葉であっ

て、要求したらそれは良く出来ましたになっちゃうからさ」

「あ、そうだったね、良く出来ましたっ」

『聞いているのかね穴戸大佐!? 私は依頼料を貰って仕事をしている分、君が講義を聞こうと聞くまいと構わないが、必要な知識を身に着けてくれないと私の講義が悪いみたいに見えるから聞いてくれるとありがたいのだが!』

画面越しに怒鳴ってくる教授が聞いてほしいのか別に構わないのかブレブレの主張をするが、本心では聞いてほしいんだろう。時雨と月魔は黙り込んで買ってきたモンブランを頬張っている。

聞いている途中、俺が雑談したりするもんだから不貞腐れたのか、教授は講義を早くめに終わらせようとしている。予習で覚えたことばかりだし、同じ事を言い回しを変えて二度言うタイプの人だからちよつと苦手である。

講義の途中、相槌を交わしていた時雨が興味深い事を聞いてくる。

「穴戸くん、この作戦についてはどう思ってるの?」

「姐さんのいう作戦……沖縄作戦ツスか?」

「まあ今のところ一番大きな作戦だとそれしかない……作戦内容の詳細は触れてないから分からないけど……」

「利権とか、国家間の争いとか……僕はそういうことについてはあまり詳しくないけど、本当に成功するのかなくって思ってる」

「もう一般認識として外国と日本が沖縄の利権について争っているという情報は浸透しつつありますが、成功を収めたらと言って我々の勝利で万々歳といくのか。微力な士官の端くれとしては、俺も知っておきたいです」

「頑張ればできるんじゃない? その辺は外交官じゃないからわからないけど。まあもしも俺が指示できる立場だったら、まずは海外との連携を前提に話し合うけど」

「連携……とは、合同作戦の事ですか、兄貴?」

「そう。合同作戦を取ること前提の交渉をして、主にアメリカだろうと思うけど、アッチが要求するのはもちろん残骸と化した海軍基地を含めた島の一部の利権だと思う。それを蹴って資材とか代用可能な

類のモノを提示する。島の利権には指一本触れさせない方針で行く」
「もしもそれで連携が取れなかったら……」

「その時点で交渉決裂して終わり。コッチの海軍だけで沖縄を奪還する口実が出来上がる。その際にマスコミは、海軍が後押しなくても勝手に諸外国が協力してくれなかった事実、そして合同作戦交渉が失敗した事を大々的に報道すると思うし、そこまで行けば公然と海外士官を起用について話し合える。作戦への参加義務を持たない彼らが作戦に従事していようが、彼らの貢献度は彼らの所属国ではなく、彼ら自身に向けられる。少なくとも利権争いを、コッチの方針で行ってたら有利の状況で進展してたと思うんだ」

もつとも、この程の度口遊びは外交を行う前に専門家が考慮に入れないわけがないし、最初にそうやって交渉から始めずに“独自路線で行くもん！”って駄々こねて始めた以上その手を打つことは不可能……はじめの一步、それがどれほど重要であり、それを理解できていても、行動に移すのはやっぱり難しい。

つか元々は日本のだし、中国とかはあそこに立てた中国系企業の土地がく云々を口実にしている。

現在の日本は昔とは違って、海外からの土地買収を厳格化しているから、正直ビル一個分程度の土地だけ手に入れてもあまり意味ないと思うってどうか……それにアメリカに至ってはグアムすら取り戻してないし……。

あ、だめだ、アメリカはグアムに行っちゃだめ！

俺の過去の策略が暴かれちゃう！

何はともあれ、資源が見つかる度に、色々正当化を図って奪おうとする悪魔みたいなやり口好き。

「お兄さん！　ぎゅー！」

「おっほ！　春雨ちゃんよしよし、いい娘だねえ君はく。お姉さんも春雨ちゃんを見習ったらいいのにい、チラっ……ハ!?　なんで春雨ちゃんがいるの!?　親潮や村雨ちゃんもいるだと……?　俺の部屋にはプライバシーというモノが無いのかね!？」

「司令、相部屋ですからプライバシーはあまりないかも知れません

……司令、春雨さんの次は……」

「というより何をやっているんですか穴戸さん？ 講義があるから部屋に戻るとか言って村雨を放置ですか、そうですか、ふうん」

「君たち、そんな事ないよ。俺はみんなを幸せにしたいんだ。だから、いつぺんに相手してあげるよ。おいで……My angels……」

「……………」

「うん。分かった。講義に戻るからジト目は勘弁」

「講義？ それって今、開いてる画面に写ってるメガネのオジサンの講義なのか、突然歴史女体化モノになったエロゲームの、男の快樂についての講義なのか、どっちなの？」

『現存するイージス艦船のように、殆どは複合素材、信号技術、フォトニクスなどの最優先技術が使われているが、艦娘にはバイオテクノロジー、ロボット工学、高感度レーダーが使用されている。艦娘技術そのものには非常に強力な伝送線、コイルなどを行った極々単純かつ一般的な部品も設計に関わっている。コンデンサを含め、それらを支える技術はマイクロ波管、中性粒子電送装置等による艤装維持を可能としているが、それらは既存の情報通信技術に支障、または無効化させてしまう』

『男としての快樂ですかあ……？ それはあ、ぽかぽかな春のお空でえ、お馬さんに乗ったりい、鷹狩することですう〜』

『違うツツツ!! お前のような雌豚プリプリおマ○コをこの分からせズボズボチ○ポで孕ませる事だツツ!!』

「……………」

こりやもう弁解できないツスね。ギラギラとした四人の眼光は、画面内であられもない姿を晒す（女体化した）英雄たちをも退けるであろう。

誰か助けて。

と願った矢先、携帯電話の音が鳴り響いた。神は俺を見捨ててなかったんだ。

「…………おっと、こんな時に電話だあ！」

「……………」

「流石に電話来るときは止めて!? 重要な内容かもしれないじゃん!! ……はい、もしもし」

『こちらは長崎駐屯地だ』

『はい? 連隊長さんどーしたんツスか? まさかまた俺と行きつけのフランス料理店に行きたいんですか?』

陸軍との交流も決して怠らないのが俺だ。

だから連隊長とか、将校たちと数分の雑談でもいいから話しまわったり、食事にでかけたりしていた俺が連隊長に勧めた店にはもう二回ぐらい行ってる。

大変気に入ったらしく、既存の腹に油を上乗せしていた印象しかなかった彼が、今まで聞いたこととはないような声で訴えかけてきた。

『違う! 要件だけを先に言おう。まだ掘り下げないといけないんだが、実はあの提督——』

「穴戸いるかッ!? 緊急事態だッ!!」

最後まで言わせてあげて、あの人は少なくとも遠分は仲間だから。

突然開けられたドアが耳元で鳴る電波音を阻害するように勢い良く開けられる。開けた本人は珍しく帽子を被ってない斎藤司令官だが、これまた珍しく動揺している。

「なんスか? 斎藤大佐がそんなに慌てるとかヤバイじゃないっすか。こりゃ、大規模作戦が失敗したとかそういう類のものですかね?」

「知っていたのか!? なら話は早い!」

マジかよ、笑えるぜ。

まさか、沖縄作戦のことじゃないよね?

バトルの前談

沖縄作戦が失敗、か……あんなに戦力投入したのにさ。

失敗だなんて、俺の勘、鋭すぎ……？

連合艦隊を追ってきた深海棲艦大艦隊が一斉にコツチに向かってきて俺たちの国を火の海にするところまで想像できた。

「よし、逃げるぞお前ら。最早この国は終わりだ。深海棲艦が迫ってきている今、オトコもオンナも世紀末レ○プし放題な治外法権国家ニッポンと化すんだ……あ、でもそこだったら俺ハーレム作れー」
「な、何を言っているんだ穴戸……？ この国は関係ないだろう？」
「え、どういう事っすか？」

「……？」

親潮と夕張も入ってきて、イロイロとキツキツのお部屋。全員がクビを傾げる中、なにかとんでもない誤解を生んでしまったのかもしれない……と、斎藤大佐は申し訳なさそうにしながら彼の真意をスマホで表した。

「すまん、これの事を言っていたんだが……」

「ん〜？」

俺の双肩に朗らかなで、穏やかで、柔らかなむにゆむにゆの球体を乗せてきた村雨ちゃんや親潮たちと共に、液晶が表示するニュースサイトの記事を凝視した。

一応、勉強モードを発動して読解力が冴えていた俺は一秒ぐらいで理解し、海軍技術戦術論の本に視線を戻した。

驚愕する村雨ちゃんたち。時雨も興味を唆られたのか春雨ちゃん
の肩からスマホを覗き込み、夕張はその反面、俺の教科書に視線を集
中させた。

やっぱり夕張メロンちゃんは技術者向きなのかな……世界情勢よ
りこつちに興味そられるとか。

「中東にて民主革命が成功……？」

「サウジアラビアの王族であり提督だったムアンマル・アッバーン少

将……現在は国家指導者という御立場の方だが、大規模作戦を反故にして革命作戦を実行し、成功したらしい」

「す、すごい……」

「本当にすごいわね。あ、宍戸さん、この通信システムの理論についてなんだけど……」

夕張もつと世情に興味もって。

俺は海軍大学校の講師が画面でくっちゃべってる事を夕張に解説しながら、心底安心してた。沖縄作戦が失敗なんてするはずがないのは戦力的に見ても明らかだし、失敗したらそれはそれで海外士官や外国人に有利な状況となるだろう。

「……え、よく見たらこの革命のリーダーって」

「ああ、海軍大学校時代、貴様によく話しかけていた彼だ」

「知ってるの宍戸くん？ え、斎藤さんも？」

「兄さんと司令の秘密のお知り合い……ま、まさか！ 噂に聞く司令と兄さんと三人でい、いやらしい関係を持ったっていう、あの……!？」

ああ、俺という、警備府を支配する立場にいても、噂というのは制御が効かないのか。

何故か俺と斎藤大佐とあのタリバン……じゃなくて、ターバンヘッドが、まさかの3p!? 名付けて、男子の3p!? そんなネーミングセンスなさ過ぎる噂は俺様が、海軍大将に代わってオシオキよお！

「親潮、ガチでドコ出の情報なのソレ？」

「同期にそうなつてると言われたのですが……え、まさか、嘘だったんですか!? 親潮は司令がエイズでも治療に付き合って行こうって覚悟していたのに……」

「エイズじゃないしラブトライアングルSOSでもないに決まってるでしょおおおおお!! 俺の司令官ピチピチの肌を見て分からのかえエ!？」

「バミウダみたいに深そう……ぶふっ!」

「時雨姉さん……トライアングルで例えるんだったらピンク・トライアングルの方が……」

「話の盛り上げ方、なにか違うね、悲しいなあ……てかなんでアラビア

ン1×ジャパニーズ2なのツ!? アジア最終予選かよツ!? 親潮、その同期にはちゃんと口を酸っぱくして言ってやりなさい。穴戸司令はイケメンでハンサムで優雅で華麗なのに勇猛かつ最強な提督だつてな?」

「は、はいっ! い、いわれなくても、司令はかっこいい人だつて、みんな分かつてますから!」

「当然だぜグツハハハア!!! 分かったかみんな? 特に時雨、お前なんで無反応なの? あ、まさか俺がイケメンだつてついに認めちゃった感のある反応ですなぁ……」

「え? あ、ごめん、違和感ありすぎて逆に気づかなかつた。言葉つて虚空だねっ」

「は? 勝負ですツ」

ROUND ONE, FIGHT!

「待ってください兄貴、姐さんツ! 俺の部屋で暴れないでください!」

「月魔くんの言うとおりだ。いや部屋を荒らす分には構わないんだが、それで困るのは月魔くんと貴様だぞ。部屋の清掃、管理はすべて使用者が請け負うのが原則。貴様の上官に当たる者はここには居ないが、清潔を保たねばどうなるかなど私が言わずとも分かるだろうに……」

「え? 清潔に保たねばどうなるかって……ま、まさか、俺のお部屋にバイ菌を撒き散らす気じゃ……! こ、この変態大佐! 俺のお尻はまだまだピチピチの処女なのに……!」

「兄さん、司令にそのようなコトをしようと企んで……?」

「村雨、そういうのはイケないと思います。というか最低です。一応私たちの提督である大佐が穴戸さんにそんなコトをする人だとは思いませんでした」

ジョークだったのにこのフルボッコ感半端ない。

「なるほど……貴様、私を愚弄しただけでなく周囲にまでそのような戯言を撒き散らすとは……勝負だツ」

齋藤大佐、参戦!!

「え、やばっ。春雨、この部屋にいたら駄目よ！　すぐに逃げないと提督たちのバイキンが伝染って死ぬわよ!!」

「駄目です夕張ちゃん。お兄さんを救うために……私がこの醜い争いに、終止符を打ちますッ」

春雨、参戦!!

—————

中庭を囲う賑わっている。

その中心で司令官と、元司令官と、警備府のエースである二人の計四人が壮絶なバトルを繰り広げている光景は、ここでしか見れないレアな海軍士官の日常であり、これを見るために仕事と中断して野次馬と化した者も多い。

その最前列にいる鈴谷を筆頭に止めようともせず、いけいけ！　とヤジを飛ばす者が多数派であり、少数派の止めようとしたが諦めた派は、横で雑談タイムに入っていた。

「いっけー！　シグシグと穴戸っちチームがんばれ〜！」

「鈴谷？　これはタッグマッチではなく、バトルロイヤルですわよ?」

「正にスマッシュブラーズ！　あ、白露的にはシスターズ？　まあ

いいや！　白露も参加したいけど、四人が上限だから、とりあえず

観客に徹するね！　サドンデースっ！　ファイー！」

「どっちかと言えば○ルティメットストームっぽい！　穴戸さんと春雨の取っ組み合いが最高にハイっぽい！　そしてサポート役として春雨と提督さんが何故か横で戦ってるっぽい！　ド派手な忍術がこの狭い面積内で激突っぽい！」

「何をやっているのかしらあの四人は……組手？　いや、ダイナミックすぎるし、そもそもこんな所でMMAなんて非常識にも程があるし……陸戦訓練、かしら?」

「冷静に分析している場合じゃないツス初霜さん!!　それに皆さんも！　四人を止めようとは思わないんですか!?　壁蹴りからの空中戦なんて、これじゃ海軍は肉体言語で深海棲艦を倒してると誤解が広ま

りますッ!!」

月魔の一言一句は至極当然の事……と断言はできないが、確かにこのような事をしてしている場合ではない。少なからず皆が止めるべきだと思っっているのは、彼の後ろに続く彼の後輩が頷いているのを見て分かる。だが同時に興味を示した、誰がこの戦いを制するのかと。

そもそも誰と誰がなんの為に戦っているのかなど状況を全く把握していない野次馬には、映画ばりのアクションを見せる四人の近接格闘戦術を見ながらヤジを飛ばすぐらいの事しかできない。

飛翔する正拳突き、腕に押し掛かる脚撃、繰り出す技が放つ疾風。

当然のように、そして何時も通りの展開だが、勝利の栄光は拳を高らかに上げる時雨に委ねられた。

「うおおおおお!!」

「シグシグかつこい!!」

「ねえ、次白露行っていいよね!? 時雨を倒して、姉の威厳、勝利の二文字、宍戸くんの領有権を一気に勝ち取れるってことでしょ!」

「は!? 宍戸つちと一日デート権!? そんなの聞いてない!! 鈴谷も入る!」

「っ!? 親潮も参戦します!」

「ファッ!? 元司令官のケツかけて勝負!? いいつすね〜」

こうやって、一人のふざけた発言から噂やデマが作られるのだ。

「俺の人としての権利がドンドン剥奪されているんですが……」

「春雨はまだ戦えます! あの三つ編み倒して春雨がお兄さんのすべてを手に入れるんですッ! 下がっててくださいいお兄さん! 春雨が……ここで決着をつけます!」

「姉である僕のことを外見的特徴で呼ぶとはたまげたなあ……かかってきてっ、サドンデスだよッ」

春雨ちゃん、そして時雨の圧倒的オーラに立ち向かえる相手はそうそういない。例えこの戦いに、誰が勝利しても俺の権利は誰にも渡らないし渡らせないけど、とりあえずボコボコにされた斎藤大佐を引つ張りながら親潮に手伝うよう要請する。

「親潮! 早くこの戦場から彼を退場させてくれ!! さもないと殺さ

れるぞ!!」

「え、嫌です、触りたくありません」

「なんで!? え、まさか大佐が感染力の強い病にかかっているとか!?

何だそれは!? 梅毒!? エイズ!? HIV!? クラミジア!? ヘ

ルペス!?! 性病性のなにか!?!」

「いいえ、ただ触りたくないんです」

「――」

意識を保っていた斎藤大佐が轟沈した。

「分かった二人共! 俺が悪かった! だからその牙突みたいな構えをいまずぐ解いて、俺と一緒にケーキを食べよう! 訓練をいつも頑張ってるみんなを労うためにサプライズとして買ってきたやつなんだけど……もうすぐ警備府に着くはずだから、訓練用コンバットナイフより、フォークを持とうぜ! ……それとも、俺のおち○チンの方を持ちたいのかな? なんてっ」

「「はッ??」」

攻撃の矛は俺へと向けられた。え、ダメージ999ぐらい食らってんのに、もう場外一発アウトなのに、Shigure WINなのに、もう疲れてるのに、強制参加ってアリなんですか?

「穴戸くん、それはどうかと思うなっ。僕が君の言う漢だったら、貴女方の奴隷になるのでこの場はどうかその御美しいお手をお収めください! ぐらいは言うかなっ」

「ん? それ言うぐらいただったらパラシュート無しでスカイダイビングしたほうがマシだぜ」

「北の国の訓練かな? え、は? こんなかわいい女の子に向かってなんてこと言うの殺すよ?」

「は? 理不尽なこと言っておいて殺すなんてお前いつもより酷いんじゃない? ま、まさかお前、あの日じゃ……や、やだ怖いっ! ぼ、ぼくっこなか弱い(笑)女の子の金銭的隷属奴にされちゃおっくす!」

「あ、xxすっ」

あ、死ぬ。

――

蹂躪される穴戸大佐。

それを2階の窓から密かに見守る外国人がいた。

「ああ……！ CPT. SHISHIDOがあんなカタチに!!! この私が助けに行かなくては……！」

休憩中に、突然立ち上がったベリングハム少佐がこの休憩室に来たのは、数十分前のことだった。

外国の方々が集まる由緒正しきティータイム

警備府は静けさを欠いていた。

多くの士官が忙しなく警備府を駆け巡り、規定の仕事を終わらせようと粉骨碎身を心がけていた。

艦娘や士官が、通り際に感じた違和感に、ついつい首を横に曲げる。100人いれば99がその美術的造形に眼を奪われるソレは、既に異様だと言われるここ長崎警備府に……いや、あるいは元々この国にはない独特の雰囲気、警備府に新たな風を巻き起こしていた。

廊下を颯爽と歩いている彼の横を通れば、女性のほとんどは振り向くであろう。知性的なスマイルに、白人特有の色白肌を持つ9頭身。金髪碧眼の美少女はしばしば日本人男性の憧れと揶揄されるが、それを転換させたような美青年に対して、女性士官らはうっとり顔をほころばせていた。

「きゃあああああ!!」 ギャアアアアアアアア!! グアアアアアアアアグアウアウアウアウアア!! あ、あの、サインいいですか!」

「私……ですか? はは、いいですよ。しかし、なぜ私のサインを?

ゲイノウジンになった覚えはありませんが……」

「そんなことはないです!! 超イケメンな海軍の外人モデルって有名ですよ!! 雑誌、全部持ってます! 感激です!!」

「ははっ、お世辞でも嬉しいですよ、ありがとうございます。嬉しい気持ちにさせてくれたお礼として、何かお礼ができればとおもったのですが……」

「お話出来ただけでも光栄ですう……あ、じゃ、じゃあサインをお願いします! 毎朝ペロペロイクイクしますのですっ!」

「さ、サインはまた今度にしておきましょう。そのようにされるのは、流石に恥ずかしい気持ちがおこみ上げてきますので……でも、もしよろしければ、これを貴女たちに」

女性士官二人の手を握るベリングハム少佐。

握りしめた手元には紙切れがあった。それは、ベリングハム少佐を

起用しているモデル事務所が勝手に作った名刺であり、裏には手書きのサインと、電話番号が印してある。

女性士官の間で有名な“殺人イケメンスマイル”を放射して、彼女たちに投げキスをしながらその場を立ち去る。

「い、イケメン……あ、私のOMATA、いま大洪水……っ」

『クソ……あのイケメン野郎、またココに来たのかよ？ また穴戸司令官に会いに来たとかか？ アイツらデキてんじゃねえのか？』

『いやそりゃねえだろ、だってあんなに女にモテて、それでオンナ好きじゃねえとか世の中狂ってるぜ？ 男好きだとしてもバイだよきつと』

そういう問題ではないような……と、心の中でツツコミ、腕時計に目を光らせながら歩くスピードを調整する。彼がいつも向かう先は穴戸大佐の居場所だが、今日は別件でこの警備府に足を踏み入れている。トモダチに会いに来きました、と言えば大抵は彼を通してくれるこの警備府のセキュリティ面を心配しながらも、通してくれるのは穴戸大佐の口利きあつての事だと理解していた。そう思うと、ケツは絞まる。

途中、何度も女性士官や艦娘に声をかけられては止められ、いい加減に待ち合わせの時間を過ぎてしまうことに危機感を覚え始めた少佐は、少し小走りで目的地へと向かう。

その目的地を閉ざす扉にノックをかけ、ドアノブに手をかけた。

「失礼、元気だったかなSaratora? Bayも元気にやっているようで何よりだよ」

「お久しぶりですねBirmingham、今日は私のために来てくれてありがとうございます」

「Brimingham、コーヒーと紅茶あるけど、どっちがいい？

あ、聞くまでもないって顔してる……」

ガンビア・ベイは少佐のコップに紅茶を注いだ。

エイジャックス・スペンサー・スコット・ベリングハム少佐はイギリス系アメリカ人の家庭であり、アメリカ育ちだが親の影響で英語が

若干イギリス訛りである。そのため、アナポリスを通称とするアメリカ海軍兵学校では、その品格と立ち振舞いから、見た目だけでかなりの優等生に見られていたという。しかし嫉妬も買うハメとなり、彼のフルネームをイニシャルで略し、ASS（ケツ）、B（UTT（ケツ））と陰で呼ばれていた事も彼は知っている。

イギリス家系に生まれたからと言ってコーヒーを否定するタイプではないが、少なからず彼自身の血筋を誇りに思っている節があり、コーヒーと紅茶という二択では紅茶を選ばざるを得ない宿命を背負っている……というのが、彼の持論である。

「相変わらず紅茶がお好きなんですね……コーヒーも悪くはないのですよ?。」

「確かにそうだね、でも好んで飲むのであれば断然、紅茶だ。この風味、この舌触り、この安心感……コーヒーも飲んだことはあるよ、でも紅茶がない環境であれば、水の次ぐらいの優先順位だ」

「BirminghamってSt*bucksとか行かないの? Mc*d*a*ldsとかは? JapanのやつはFrickin gおいしいよ! あのSakuraFrappはすごく美味しかった!。」

「はははっ、良かったねBAY。でもね、BucksもMc*d*a*ldsも、著名な企業のすべてはJEWsが世界を経済面で支配しようとしたブランドだよ? そんなモノに口を付けたら口が汚れるよ」
「アメリカ生まれとは到底思えない発言ですね! アンチセミティズムはイケないですよ? それに貴方はただのコーヒー嫌いじゃないですか」

「違うんだSaratoroga。だがどうにもコーヒーが泥水だと親から教えられて育った境遇から、少し膠着した概念を残ってしまっているのかも知れない。ほら、下痢になった時にでー」

「その先は言わないで。やめてください。少なくともSaraが飲んでいる時はやめてください」

「すまない、君も長旅で疲れている身だろうに……」

少佐の旧友サラトガは、日本海軍へと派遣されているアメリカ艦娘

だが、第一陣を率いる戦艦としてだけでなく、海軍士官として知識と教養を身につけるために、兵学校や技術学校も転々としている。

士官と戦艦を両立させようとする艦娘は、基本的にデスクワークという比較的に安全で楽なデスクワークに傾き、前線から退くか、向いてなければ前線に出る事がほとんどである。しかし彼女のように士官と艦娘を積極的に両立させようとし、実際に成功している艦娘は珍しく、そのクチで有名な外国艦としてはオイゲン中佐ぐらいしかない。

現在は呉から佐世保へと移動してきた身だが、蒲生大将の元で行われている人事によって戦闘も勉強もできないことから、休学中の身であると自称せざるを得ない状況にいる。そのため佐世保第一鎮守府では居心地が悪く、今回少佐の手引きで警備府に身を寄せてきた身でもある。

斎藤大佐には連絡を取っているが、穴戸大佐はサラトガがここにいるどころか、彼女の存在すら知らない。一応穴戸大佐からの口利きで警備府司令官である斎藤大佐への要望を通りやすくする魂胆だったが。

「ッ!? い、今のは……!?!」

外からは歓声、窓を見れば壁を蹴りながら空中で蹴り合いと殴り合いをする人影が通り、少佐は思わず立ち上がった。危うく落としてうなったコップを片手で支え、ゆっくりと窓に近づいた少佐の報告をサラトガ達は待っている。

窓の下には多くの人が集まっており、その中心で格闘を繰り広げていたのは穴戸大佐と時雨であり、その横では春雨と斎藤大佐が参戦し、そこは正にバトルロワイヤルのスマッシュする兄弟たちのように熱い戦いが繰り広げられていた。

そして戦いの結果は、時雨の勝利という形で終わりそうな展開を迎えていた。

「な、何がおこっているのですか?」

「く、クレイジーだ……こんな場所でSMASH BROTHERSをするなんて、イカれている!! CPT・SHISHIDOにCOM

MANDER SAITOが、まさか艦娘と戦うほどの個人戦闘能力を秘めていただなんて……!」

「え、あ、あれが……シシード!? ……なんですか? あ、いいえ、噂には聞いていますが、流石に中庭であのように艦娘と組み手を交わすような人だとは……え、しかもお隣のは基地司令官ですか? え、嘘ですよ?」

「No, its true」

ガンビア・ベイも窓に近づき様子を見たが、あまりの激しさに目を見開いたまま固まってしまった。二人の様子を見て間違いないと確信しているが、サラトガは周囲を圧巻するこの戦闘を目の前にして、未だに半信半疑な気持ちがちぢ込めている。

「ああ……! CPT. SHISHIDOがあんなカタチに!!! この私に助けに行かなくては……!」

「え? 流石にあの中に飛んで入るのは少し気が引けますので、Saraは関わらない事をおすすめします……」

「なにを言っているんだいSARATOGA!? 確かにあんなのはCAPTAINにとって甘噛程度なのかも知れないが……!」

「あ、あれで甘噛……?」

一度離れた視線を再び窓に向けると、空中コンボ三発目で浮遊する穴戸大佐を目の当たりにし、サラトガは思わず口を塞いだ。数々の戦場を潜り抜け、アメリカ海軍でも一流とも言われた正規空母サラトガをしても、あのような訓練は見たことがない。これが世界に胸を張れる日本の海軍力の源か……と、驚きは次第に納得の感情へと変化していった。

(※訓練ではありません)

「あの中に入るとかマジムリ……ねえ、お茶、続けない? 少し綺麗な世界に浸りたい……」

「そうだね、やめておこうか。CPT. SHISHIDOならなんとかなると信用していますし、ね」

「え、そんなに早く諦めていいんですか? え、どういうことですか? アレが例のシシードなんですか?」

思わずFUCKEN CRAZY ASS SHIT……と口に出しそうになったSARATOGAは、二人と共に席に着き、一度自分が見たものの整理を付けようと試みる。ベリングハム少佐は奮い立っていた体を椅子に戻し、飲みかけの紅茶に口を付け、アメリカ艦娘たちも同様に“休暇”を楽しんだ。

ガンビア・ベイのコーヒーは冷めていたので、一気に飲み干し、再度淹れなおして飲んだら、今度は熱いと舌を出した。それを見て微笑ましそうに、少佐とサラトガは笑った。

うふふつと天女のような微笑みを見せるサラトガの笑顔は妖艶さを含んだ色気を感じさせるナニかを持っており、このスマイルで何人もの日本人男性を虜にしてきた。彼女の外見的評価は後に宍戸大佐をして“このさあ……あどけなさのある顔と髪型なのに胸デッカ、今ふわつてロングスカートが捲れた時に見えたガーターストッキングとかただの性癖じゃん”と称されたほど美しい女性がここに来たのは、比較的気を楽しめる場所だから……という、安直な理由からではない。

「まあ確かにクレイジーに思う所はあると思う。しかし、現状では彼以上に信頼できる男♂はいない。私の目利きに間違いはない。だから信用してもいいと思うよ。そして多分、彼はバイだ」

「最後のどうでもいい情報以外、感謝しますBirminghham。しかし、あれがああシードですか。噂を知る彼と照らし合わせても……うーん……元気な方のようにですが、あの方にどう説明したらいいのか……」

「ん？ 言っておくが彼は渡さないぞ」

「なぜそうなるのですか……いいえ、先々で聞く彼の噂は屈折が激しくて、どういう人物なのか気になっていたので……」

「やっぱり気になっているんじゃないか……ッ！」
「そ、そういうわけではありません！ ただ、勇猛、勇敢、勇士の三勇を持つ海軍軍人の誇りであると聞いたたり、はたまた女性には紳士的ですが男の人には容赦がないとか、中間管理職の天才とか、いやそんな事ない提督として威厳を持っていないとか、下ネタを常習的に嗜んで

いるとか、艦娘に悪事を働く変態糞司令官であるとか、実はホモだから男に容赦がないのは自分の理性を抑えるためだとか！ とにかく内容が一致しないんですよツ!! 気になっちゃうじゃないですか!!」

「確かにクソみたいな司令官だって、ここに来る前は何度か聞いてファ○キンオドオドしたことあるけど、実際は優しい人だと思うし……噂ってやっぱり信用できないね」

「ははは、ベイは今でもオドオドしているんじゃないか。でもCPT.がナイスマンで本当にファ○キンゴッド・ブレスだよ」

(※この空間の公用語は英語なので、談笑はすべて英語で行われている)

「あのナイスマンを通せば、君はここで悠々自適に過ごせると思うし、もしかしたら学校見学にも助力してくれるかもしれない」

「そこまでしてもらうのは、少し申し訳ないと思います。彼も一応は学業に専念している時期ですし」

「ん、そうだったのか？ しかし、彼のような良き先輩がいてくれるだけでも心は軽くなるだろう。君はよく頼りにされるタイプだが、頼りにできる人物が隣にいる事ほど安心できることはないぞ」

「そう、ですね……」

サラトガの言葉に少し濁りを感じつつも、三人は再び飲み物へと口を付ける。

本日の主目的である宍戸大佐への手引きは済んだ所で、士官と二人の艦娘はお互いのこれまでに体験してきた事を話題に華を咲かせていた。

母語で話し合うのは親しみやすさを生み、それが相槌の連鎖を加速させる。やはり生まれや言語というのは、意識せずとも差を生んでしまおうと改めて認識したサラトガ。

個人的な事からニュースに取り上げられた話題まで様々な情報と感想が時系列順に交わされ、そののちに必然と辿り着いたのは、現在最も大きな出来事として挙げられる沖繩作戦の事だった。

「Okina waの作戦は成功する……そう耳にする事が多いのですが、実際はどうなのでしょう……？ Sara個人の感情として

は、被害さえなければ、どんな風に傾いてもいい思っているのですが……」

「私は成功すると思うよ」

「あ、わたしもそう思う！ うん、だってあんなにいっぱい艦娘がいたんだもん……うう……なんか思い出したら気持ち悪くなってきたあ……私人混み苦手なのに今の提督が見学のために行けって言うからあ……」

「いい経験ですので、提督の判断は悪くはないと思いますよ？ でも今の提督、ですか……本当にシシードはこの提督ではないのですか？ 司令官は彼であると未だに言う人が多いので……」

「影響力が強いのは確かだね。ここに居残り続けている事実も、インフルエンスを膨張させている要因になっているのかもしれない。あの能力、カリスマ、空気を我が物にし、他人の考え方も変えてしまいたいような彼……いい、いけない、考え始めたら私の股間からアドレナリン分泌物が吹き出しそうだ……っ」

「だ、大丈夫!? ま、まさか病気なんじゃ……!?!」

「大丈夫ですよBAY。いいえ、大丈夫ではないのだけれど、少なくとも身体的な病気じゃないのは確かですっ」

「そ、そう……?」

体を三節昆のようにクネクネ振り回す彼を見れば、少佐をモデル雑誌の中でしか知らないような人の誰もが、そのギャップに驚愕し、幻滅した感情を抱くだろうと、二人は思っていた。あと頼むから紅茶もちながらそんな風に仰がれて気色悪いダンスをするフライガイズ風船人形みたいな動きやめろ、とも思っていた。

少佐を押しつけ窓際に近づき、サラトガは穴戸大佐を見つめながら思いこふける。

「……あれが、あの方の……ですか」

「SARA? どうしたの?」

「んんっ、なんでもないですっ。さ、コーヒーを楽しみましょうっ。

あ、BAY、よろしければそこで寝転がっているBERMINGHAMを起こしていただけないでしょうか?」

彼女はサラトガ、股間に来る

警備府のラウンジ。

燻らせるコーヒーの風味はなんて香ばしいんだろう。

満点の空、美しき仲間たちとの談笑、そしてテーブルに並べられたクツソ多い菓子類。これらがあれば大抵の休日は過ごせる。とは言っても、さつきやったりアルスマッシュユブラザーズの残傷のせいで、俺の体はもうボロボロで、体を休めないとイケないだけだ。

つまり、俺は強い子。

「ふんふーんふーん！ あー素晴らしいねっ！ 穴戸くんのオゴリで、僕のお腹は満タン！」

ふんふーんふーん。 あー悲しいねっ、時雨のせいで、俺の財布はスツカラカン！

「ひぐつ……えつぐ……！ 時雨姉さんに……コブラツイストで負けちゃいましたあ……！」

「春雨ちゃんがあんな凶悪な技を繰り出すなんて……そして、まさかコブラツイストをかけられている最中に脱出する必殺技があったなんて……いや、あれはただの力技か。ゴリラにしかできないぜあんなの」

「ん？ いま僕の事をゴリラって言った？」

「時雨、よく考えてみてくれ。ゴリラってのは体脂肪率が5%ぐらいしかなくて、一日何回も体を整える綺麗好きであり、男を立てようとする超絶優秀な女性なんだ。ゴリラってき……女性にとっては褒め言葉の代名詞的なナニかになってもおかしくないと思うんだけど、どう思う？」

「穴戸くん……も、もうやだよっ、褒めすぎっ」

時雨のヤツ本当に照れてやがるぜ、ちよろいつたらありやしねえ、ヒヤッハッハッハッハ!!!

「あ、あの、警備府への滞在の件なのですが……」

「ああごめんサラトガさん、もちろん俺としては許可したいんだけど、

生憎この司令官じゃないんだ。着任してきた参謀長のオツサンのアドバイザーとかはたまにしているけど、一応待命の身だから特定の職についているワケじゃないんだ。通信で学校の勉強をしている分、学生であると自称しているけど……俺はこれだけでも手一杯なのに、君みたいにも士官と艦娘を両立させようなんて、俺がやったら何日保つか……人として尊敬せざるを得ない、そのうえ美人ときた。ニュースに載せていい？」

「あ、あははっ、あ、ありがとうございますっ」

照れくさそうに両手で口を隠すサラトガさん。ベリングハムホモ少佐の知り合いである事もあり、正規空母サラトガさんはこの警備府に滞在したいと願い出てきた彼女は、現在白露さんや夕立ちちゃんと彼女を含めた計6人でお茶を楽しんでいる。

本当は佐世保鎮守府付の海外士官として来ているのだが、沖縄作戦中ということもあり、ピリピリした雰囲気であるのと、強い言葉で、外国人を排他的に扱っている提督の下では何かと居づらい……だから、ここに来た、というわけなんだろう。

おい、ここは外国人の観光旅行先じゃねえんだぞ。

あの少佐のせいで何かと海外の連中が出入りしてる。その数、顔覚えられねえぐらい多すぎイ！　ゲイパブにでも行ってきなさい！

と一喝してやりたかったが、サラトガさんのあどけない笑顔を見てその気も失せた。つか、このさあ……あどけなさのある顔と髪型なのに胸デツカ、今ふわってロングスカートが捲れた時に見えたガーターストッキングとかただの性癖じゃん。こんなのが鎮守府みたいなエリート意識だけ高い肉欲汚職に塗れた無法地帯(ド偏見)にいたら、絶対に机バックでやられるじゃん。

想像したらずげーエロいじゃん。俺もやりたいじゃん。そしてその気があるみたいにコツチをジツト見てるじゃん。エロ、うわ、エロ……アメリカ艦エロツ。

ムスツとした顔をした白露さん達が、俺の体の隅々を攻撃してきた。

「痛い、え、時雨って俺に痛覚がないと思ってる？　知ってる？　弁慶

の泣き所って、骨に直撃なの、カカト蹴りしたら痛い。もつと直球に言うかね？ 折れるツツ」

「いやだなあ、穴戸くん！ 穴戸くんがそんなひ弱なわけないじゃん！ ……さつき、あんなに白露たちと激しいコトして、いっぱい補給してくれたのにな」

ん？

「うん……僕も、穴戸くんの補給、嬉しい、かなっ……」

は？ あ、このテーブルの上のお菓子のことかあ……サラトガさんは別の意味で受け取ったらしく、頬を染めている。ハッハッハ、日本に駐在する時間が長いのも考えものだなあ。必要のない日本語の揶揄にまで精通なされているようだ。

「言っておきますけど激しい運動ってのは組手の事であって、補給ってのはこのお菓子のことですからね？」

「し、知ってますっ！ 見てましたから……」

「でも穴戸さん、あのあと夕立といっぱい運動して、いっぱい出して、すごく気持ち良さそうにしてたっばい！」

「っ！」

いっぱい運動（スマ○ラROUND2）して、（疲れ切った体に僅かながら残った力のすべてを）いっぱい出して、（一定時間あの世を見ていたので）気持ち良さそうにしていたんだ。同じ言語で話してる中なのに、なんでこんなにネジ曲がった方向に解釈されるんだろう？

「よし、一旦落ち着こうかみんな。夕立ちゃんの言葉足らずで口下手なセリフに一々惑わされて、抜けている言葉の情報を補強しようとするとか奇的にエロいセリフに聞こるのは、君たちが普段からそういう発想を生み出しているスケベニンゲンであると自ら言っていることと変わりないんだよ？」

「誰がスケベニンゲンなの!? 白露、そんなエッチじゃないもん！」

むにゅ。

豊満で柔らかい球体が俺の頭にのしかかり、これまた肌触りのいい二の腕が、俺の首周りを独占するように絡みついてくる。春雨ちゃんはそのれに対抗するように腕を引っ張り、時雨は俺の足を蹴り、夕立

ちゃんは……まさかのドン引き。こんな男の何処がいいんだ？ みたいな顔してる。クソ……俺に催眠アプリがあれば……この艦娘たち全員、俺の思い通りになるのにイ……！ ボディータッチだけしておいて、その気がないとは言わせねえぞこのエロ艦娘共ガア!!

「それでサラトガさん、これからどうするの？ 俺の方からサラトガさんの滞在の警備府滞在の件は話しておくし、理解ある現司令官様なら多分承知してくれるだろうから、行き当たった悩みは解決しているし、次にどうやって暇を過ごすか悩んでいるはずだ」

「そ、そうですね……警備府に来たはいいものの、ここには海軍関連の学校と呼べるものはないですし、執務や任務をお手伝いするのもいいですが、部外者の私がお手伝いするのは色々と問題があると思うので……」

俺は後学のためを思つて時雨たち艦娘や、一兵卒の兵士たちには暇な時に、士官の業務内容や、デスクワークなどを見せる事がある。実際にやっている事をチラホラ見せるのは、学校で勉強して覚えるより100倍効果的な教育だと思つている。海軍という巨大組織の構造をまた一步理解できるし、早い段階で色々なことを覚えるのはいい教育だと思つている。かくいうサラトガさんも、行く先々で色々と自分が学んだことを教えていたりしていたらしい。

「有能な部外者はむしろこの警備府では歓迎されてるんだよね。少なくとも俺が司令官してた時は、色々な人たちが出入りして執務とか業務を手伝ってくれていたんだ。色々な人と関わって、その人の知識と知恵を無償で分け与えてくれるって言うんだから、かなり得なことだと思っただよね」

「私もそう思います。色々な人と出会って、色々な人の経験を語り合いい、人は成長していくと思うんです。前に一度、ハシラジマで出会ったプリンス・ユージンなどは、私にとって大きな成長を与えてくれた恩人だと思つています」

「ユージン？ EUGEN……え、オイゲンさんに会ったの？」

「はい、結構前のことですが……」

アツチに戻つてるって聞いたから何してるのか聞きたかったんだ

けど、サラトガさんがオイゲンさんに会ったのって多分参謀長解任される前だと思うから今現在どうしてるのかは分からないか……クツ！ あんなひ弱な提督の下に戻りたいなんて……ツ！ クソ……！！
クソ……！！ 俺の魅力があつて提督に劣るとでも言うのかア……ツ！?

時雨は俺の悔しそうな顔を見て、頭を縦に振っている。まるで“そうだよ”とでも言いたげな顔で。そしていい加減蹴るのやめて、いい加減白露さんと春雨ちゃん俺から離れて。

「提督……少しお聞きしたいのですが、この作戦の事を、どうお思いですか？」

「サラトガさんも心配なんだねこの作戦。まあ戦術的には成功するんじゃないかな。膨大な数の動員数で勝てなかつたら、日本海軍終わるナリ」

「あははっ、確かにそうですねっ。戦術的な勝利は揺るぎない……でしょうね」

少し歯切れの悪そうな口ぶりのサラトガさんが、コーヒーに口を付けた。動作気品風格は、正に名家のご令嬢を思わせる。アメリカ生まれだと侮っているが、アメリカでは稀にこういう何でもできる完璧超人が平然と居たりする。艦娘として文武両道。現在ティータイムを優雅に過ごす彼女を記憶と照らし合わせても、ティーマナーだけは完璧なウォースパイトさんに匹敵する礼儀正しきである。

「……しかし、時には失敗もありえます。何事も、作戦計画内容書の中身と同一の結果をもたらすとは限りません」

「そうだね……だから俺も、最低限みんなが無事でいてくれて、ある程度の成功だけを期待しているんだ」

「随分と謙虚なんですね……」

「おりやいつも謙虚だよ？ ほら、こんなにイケメンで超がつくほど優しい漢ってそうそういないくない？」

「穴戸くんの自分から矛盾していくスタイル、今日も健在だねっ！」

「は？ 俺がいつ矛盾したって言うんだよ？ 俺が謙虚じゃなかったら、イケメンで優しいだけじゃ済まないぞ」

「そうですよ時雨姉さん！ お兄さんは世界一なんですから！ そんな褒め方じゃ足りないほどです！」

「なんでも肯定してくれる春雨ちゃんしゅき……」

「キモいっぽい……」

ボソッと呟かれるほど突き刺さる事ってなくない？

「じゃあ時雨、俺とサラトガさんは斎藤大佐に滞在の件、話しつけてくるからゆっくりしてくれ」

「うん、分かった……あ、穴戸くん！ 戻ってくる時にコーラお願い！」

「クツ……分かった。例え俺の財布に残された最後の五百円玉を犠牲にしても、勝者である貴様を労うため、買ってきてやろう……」

「じゃあ白露はアメリカカーノのホイップ増々のヤツ！」

「夕立はフラツペのエクस्पレッツソ入りが良いっぽい！」

「スタバ行ってこい」

・
・
・

人気のない廊下をテクテクと歩いている元部下たちの横を通り過ぎながら執務室に向かう。

少し遠回りになるルートを通っているが、みんなが行き混じってるスクランブル交差点ばりの渋滞を見せる近道ルートを見て、俺の判断は正しかったと思つた。とは言つても流石に人がいるので、会釈をしながら突き進む。

「本当に慕われているんですね……あの駆逐艦の皆さんといい、すれ違う皆さんが貴方を見る時の顔といい、その秘訣はなんでしょうか？」

「あはは、サラトガさん。ビジネス成功の秘訣は、誰も知らないことを知っている事にある……だよ？ でも、サラトガさんには特別に教えちゃおう……実は俺、洗脳能力もつててさ、瞬時に俺への好印象を持

たせてハーレム状態にするのが、警備府支配への第一歩なんだ」

「あ、あははっ、持っていないSaraには、あまり役に立ちそうにありませんねっ」

このサラトガさん、出会ってから少しだけ違和感を感じる接し方をしてくるのだが、それは彼女の特色なのだろうか？ なにか妙なんだが、奥めかしさのあるエロスと、リズムカルに鳴る耳触りの良いヒール音で、微かに億劫をもたらししていたナニかが吹き飛んだ。

彼女は勉学に精通しているだけあって、俺との会話はだいたい世間話に交えたスケールの大きい国家間の話や、理論や理念の話になる。これも知識の共有を図ろうとする本能が、二人の会話を弾ませる。こりや俺の人種が違えば即交尾だったな、理性的な人種に生まれてきた事に感謝するがいいぞサラトガさん。

司令室までは長道だと思っていたんだが、体感時間でもせいぜい5分程度でついってしまった。後味スムーズに、艦娘の編成理論についての話を切り上げて、司令室へとノックをする。

すると、呼ばれてもいない司令官殿が突然ドアを開けて来た。

「し、しし、シシシ……」

「ど、どうしたんっすか大佐？ 口の動きがバグってますけど大丈夫っすか？」

「し、ししし、ししし司令……」

斎藤大佐ならまだしも親潮までバグってる。

「現警備府司令官のサイトー……提督と、サウジアラビアからの留学生と共に男子根性龍……と呼ばれた、あの……」

一人でブツブツとつぶやいているサラトガさんは、日本を回っている途中で様々な人々と出会い、無数の噂を耳にし、俺の噂も良いモノから、発信源を抹殺したいと思うぐらいヤバイモノまである程度は聞いたことがあると言っていた。

また一人誤解を説かなければいけない人物が増えたということか……いやあ、噂って怖いな。

「あの、口を陸に上がった魚みたいに痙攣させながら見つめてくるのやめてくれませんか？ 怖いんですけど……」

「た、大変なんだ……さ、作戦が……」

「作戦ってあのターバンヘッドが王朝殺った奴っすか？　もうその話なら聞きましたけど……」

「ち、ちがうんです……司令、た、助けて……」

……ん？

まだ慌てるような時間じゃない

ホッホッホ……慌てることはないんじゃないよ……みんな、お茶でも濁そうじゃないかあ……親潮もお……大佐もお……サラトガさんも……落ち着けえ……？

いや、一番落ち着いていないのは俺かも知れない。

俺は、自分の口で“作戦が失敗した”という一行未満の言葉をいち早く警備府のみんなに知らせるのを忘れていたほど、頭が動転していた。思い出したかのように俺は斎藤大佐に指示を出して、まずは警備府内、次に諸港に情報が伝達されているかを調べるように仕向けた。

これは、かなりヤバイ状況にある。

「司令！ て、敵駆逐艦隊が目の前にいるそうです！ ど、どうしましょう……！ 神風さんたちが……！」

「焦らずに、冷静に、いつもみたいに……落ち着いて単縦陣で迎え撃てば突破できる。目的は撤退だから、敵の艦隊にタックルするようにして全速前進。突き抜けたらそのまま真っ直ぐ行って連合艦隊の後ろについて……って伝えてくれ。周辺海域は安全が確保されているんだったら遠回りでも脱出ルートとして使う」

「穴戸、まだ撤退命令が出ていないんだが……」

「出すタイミングを伺ってるのか指揮系統が滞ってるのか、何れにせよ長崎警備府の艦娘だけはなんとしても轟沈させずに戻します。我々の艦隊を人命はこの際、軍令軍法を凌駕するものと考えてください」

「えっと、他の要港部の娘たちはどうしましょう……？」

「サラトガさん、俺は今自分の権限を逸脱した行動を取ってるんです。その最大限の逸脱でも、俺にできるのは斎藤大佐のお手伝い程度なんだ。まずは警備府の艦隊を全力で支援する。サラトガさん、本当に急で悪いけど、もしよければ大佐と一緒に諸港への連絡役を頼めないかな？ 彼がすべての責任を背負うからさ」

「え」

「はい、わかりました！」

執務室が一気に司令室へと変貌し、無数のボタンとモニターが本棚の横にある。それを操作する親潮の姿と、何故か司令席を俺に譲って補佐官的なポジションについて大本営兼諸海軍基地との連絡役に甘んじてる斎藤司令官様。警備府幹部を含めて、総力を上げて艦隊撤退へのサポートを独断専行する。

佐世保鎮守府も撤退に賛成している様子だが、デカイ鎮守府なだけあって“撤退支援”以外に具体的指令が下っていない以上は、こちらで何とかするしかない。

万が一、こういう時に備えた撤退訓練はしてある。斎藤大佐には感謝しなくちやいけない。心配性なのか、ちよくちよく艦隊の様子を親潮と伺っていたら、偶然にもこの悲慘的な現状をいち早く掴むことができたのだから。不幸中の幸い。

いやあ……しっかし、作戦がこんな風に失敗するとは思わなかった。

与論って場所で戦うはずだった深海棲艦の連合艦隊と交戦。

予想以上の数は、それでも40隻程度だったらしいが、それ以降の情報が途絶えて今のところ詳細はつかめない。今起こった事だから仕方がないけど、少なくとも大まかな情報は手に入れた。

総司令官である蒲生提督と側近や副司令官が重傷を負い、多くの幹部の中には行方不明者までいるのは決定的な敗北であり、現在の状況を混乱に陥れる原因である。

正に出鼻をくじかれたってところ？

ホントどういうこと……？

いやあ、ホントに失敗するとは思わなかった。

あの戦力だと下手な命令出さない限りまずあり得ないし、熟練の提督である総司令官が艦船に乗っていて、わざわざ敵の的になるはずがないと信じていたのに。

でも、なんで失敗したかとか、その他の疑問は後でいくらでも追求

できる。今は要因なんて考えていられないほど重要なことがある。中破している俺たちの艦隊を無事にその場から離脱させる。ダメコンを積んでない以上、大破まで追い込まれたら厄介だ。

この手の指揮がうまい斎藤大佐じゃないけど、パニックになると更にポンコツになるからなこの人。

これならうまく行きそうだけど、まだ油断は禁物だ。

とりあえず乱戦となっている敵艦隊と味方大連合艦隊の後方まで離して、先に戦線離脱できるように仕向けた……というより手配した。

俺ができるのはここまで。あとは総司令代理となるはずのーそして何より、何故かクソ遠い海域にいる赤城提督への情報伝達及び総撤退命令を待っている。

「赤城提督より！ 全艦隊、総撤退とのことですよ！」

「よし！ さっさとみんなを撤退させる！ 阿久根要港部の艦隊と密集体制を取るように伝えてくれ。既にアッチの司令官には話をつけてある！」

「わ、分かりました!!」

今回、俺と同じように前線で指揮を取っていた赤城提督もこの作戦に消極的であった理由は、この失敗を見越してということなのだろうか？

神風達は中破しているが、敵さえ出現しなければまだまだ大丈夫だ。

親潮も斎藤大佐も、彼女たちの無事を祈っている。

親潮が、俺たちの艦隊を含めて、俺が知っている中では轟沈者はいないが、出向いていた司令官や艦娘は少なからず重軽傷を負っているのは確かだ。

安全海域に突入しました！ という言葉は一段落の合図だった。俺たち四人は安堵のため息をつき、それと同時に執務室の扉を破り開いた時雨たちが、目を見開いて俺を見つめていた。

「し、穴戸くん!? どうなってるの!?!」

「鈴谷たち出撃したほうがいいよね!? 早く助けに行かなきゃツ!!」

「いや、神風たちはもう大丈夫だそう。既に出撃してる艦隊をアッチの救援に向かわせたから、あとは警備府まで戻せば一件落着だ」

「そ、そうなんだ……よかった……」

時雨たちを含めた、駆けつけてくれた鈴谷たちも床に膝をつく。それでも不安げな表情を拭えない時雨たち。通常警備任務で出撃していた艦隊を神風たちの護衛として急遽目的変更を加えるように命令して、次に色々と警備府内の連中に指令を加える。

「じゃあ最後に整工班、艦隊が帰還するからその準備をしてくれ。念の為に次の出撃整備と、高速修復枠を作るようにしてくれ」

『分かりました!!』

何時も通り元気のいい三日月の声を最後に基地内通信を切り、親潮へまだまだ油断してはならないと注意を促す。

命令と各艦隊と人員の行動記録の処理を参謀部に願い出て、その他は斎藤大佐がなんとかしてくれる。艦隊の任務目的変更内容はもちろん、作戦に参加していた艦隊の援護と出迎えのためであると書いてもらって、後で鎮守府参謀長に伝えて承諾を得よう。これらを先にする事で後の面倒くさい書類上の問題を無くす。

撤退の指示は正しかった。

休日中の人もいきなり叩き起こしちゃったみたいで、みんなには申し訳ないけど、これが仕事だから仕方がないよね……クソ、俺も休暇返上して正式に復帰しなきゃいけないなくなったね。それに、どうしてこうなったか洗いざらい説明してもらおうからな佐世保鎮守府の責任者共。

「助かったぞ穴戸。そしてすまない、突然巻き込んでしまった。任務に専念できる立場ではないだろうに……突然のこと故、気が動転していたのかもしれない」

「いいえ、むしろラッキーだったかも知れません。こんな状況で昼寝なんてしてたら絶対に後悔してましたし、何より大佐に根掘り葉掘り聞く手間が省けましたよ……じゃあ、時雨たちは警備府近海で緊急防衛態勢を取ってくれ。旗艦は鈴谷で頼む」

「う、うん！ 鈴谷、いっくよー!!」

「では私も司令官として迎え……」

「あのさあ……こんな状況で、警備府司令官が、司令室から出ていくとか、不在とか、シヤレにならないんで、ここに居てもらってもイイっすか？ 司令官代行として俺が迎えに行きますから」

「あ、ああ分かった……」

それぐらいの常識を理解していない斎藤大佐じゃないし、既に状況そのものが常識の度を超えてるから無理もない。

そして鈴谷たちと入れ替わるように、ドンツ！ と司令室の扉を叩き開けた連隊長がドサドサと入ってくる。

「おい穴戸大佐、何故電話を切ったまま出ない!? 急用だと言っただろう!？」

「あ、すいません、ちよつと指揮するのに忙しくて」

「貴様は謹慎している身だろう!?!……まあいい、それでだ、人払いはできるか？ 少し他言されては困る内容でな……」

デブ連隊長が周りを見渡した。

「……ええ、ここにいるみんなは俺の信頼に値する人たちなので、情報漏れの心配は無用かと」

「し、司令に信頼され……つ、つまり実質はし、司令の身内……! つ、つまり私は……お、お、およ、お嫁さん……つ!」

「なんだ……何だかんだ言っつて、やはり最後に勝つのは我々の一族とということだな？ ハハハ、それにしてもツンデレとは、食えないヤツだな貴様は！ アハハハハ！」

親潮が頬に手を添えて喜んでいる。

体をくねらせながら「あ、そこだめですつ……!」と呟いているので、妄想の世界にプラグインしてしまっただか……大佐も同様……いやさ、どうなったらそうなるの……まあいいや（諦め）。

「で、では手短に話すぞ。あの蒲生提督とやらは知ってるな?」

「はい」

「彼は——」

緊急会議

三週間後、東京、海軍省会議室。
緊急会議。

海軍大臣のもとに招集をかけられた海軍士官は、海軍内外から名前を轟かせるビッグネーム揃いだ。

海軍大臣、斎藤大将。

海軍次官兼軍需部長、明石中将。

軍令部総長、大淀中将。

連合艦隊司令長官、荒木大将。

佐世保第一鎮守府司令長官代行、赤城中将。

大湊警備府、加賀少将。

横須賀第二鎮守府、蘇我中将。

その他、秋津洲中佐などの軍令部職員や彼ら提督等の副官、並びに『信頼』されている司令官クラスの士官数名、そして長崎駐屯地の陸軍連隊長が同席している。

総勢合わせると30人以上になり、俺にとっては、ほぼ顔見知りだが、生憎この壮大すぎる会議に出席できるのは重臣の幕僚たちだけ。

ほぼ専属副官状態の俺の村雨ちゃん、長崎でおかえりのちゅーを全裸待機しているはずだ。

司令官クラスの人を挙げれば、俺と斎藤大佐、そして外国艦鎮守府と呼ばれた柱島泊地の王ー荒木連龍大佐がいる。

こんな会議に参加させてもらえるなんて光栄だあ……と、一部の人間は唾を飲み込んでほしがる席だろう。でも考えてみてほしい、俺を含めたこの人たちは後に全員、チョー危険な最前線を取り仕切る事となるのだ。出席できて当然。

ともあれ、こんな海軍を幹旋……というより、事実上支配している偉大なる幹部連中を集めたのには、さぞかし面白くて素敵な理由があるんだろう……と思われるだろう。

そうそうたる方々の目の前で、最初に口火を切るのは一番偉い海軍

大臣である。そして彼と言葉を交わす事になったのは、副官でも副司令官でもなく、陸軍の連隊長だ。

「聞かせてくれないかな？　君が集めた情報を」「はい」

連隊長が言っていることは俺たちが三週間前に聞いたこととあまり変わりなかったが、作戦の結果と補足を交えた会話により、事件の全貌が明らかとなる。

「あ、あの……ノート取ったほうがいいよね？」

「荒木大佐、お静かに。お勉強会じゃないんですよ？　後で掻い摘んで話しますから」

「う、うん……」

今回ばかりは静粛を保つ……というより、極めて上流階級の海軍士官達が頭を悩ませるこの出来事。ボソボソ喋ってる荒木大佐と俺が一番五月蠅いという始末。

連隊長は、結論から話す。

蒲生大將は深海棲艦教だった。

それが何だ、と聞かれれば説明は難しくなる。

一般的に深海棲艦教は、敵対する勢力に加担するオカルト集団だという認識が強い。密輸、選挙操作などに関わっていると噂されていた過激派集団の資金源は政府内部でも物議を呼んでいた課題だったが、その素性そのものは謎に包まれていた。反日本主義的な発言も度々見られていた。

隠し財産を探られた陸軍でも潰そうと目論んでいた組織だが、上層部がいる事を突き止めた。

それは下部が認知できないほど巨大な存在であり、ほぼ上位組織としての機能していた彼らには名前はない。その深海棲艦教の親玉たる組織の一人……あるいは、リーダーであり可能性が高いのが、あの蒲生提督らしい。

作戦失敗と、彼が深海棲艦教の主格である事の関係性は現在突き止めているところだが、不自然な失態を晒した彼らへの調査を本格的に始めたい……と、連隊長は結果を報告してくれた。

一連の提督の素性は今の所世間には伏せてあるが、大本營の失敗というよりかは、提督本人の力量不足である風潮……そして何より、ここ最近で深海棲艦教という言葉がトレンドに乗せられるなど、昔ならとつくに総辞職しているメンツがこの場に居座り続けている。

この人達のせいじゃないし、やめられたら悪影響しかないからいいんだけど。

最早それを気にしていられるほど事態は樂觀視できない状況まで来ている。

蒲生提督が何故、深海棲艦教徒だったのか、依然として不明だが、理由と責任の追求を本格的に考え始めたのか、頭が痛くなる内容を聞かされた提督たちは額に手を携えた。

甚大な被害、これで何回目だと囁かれてるが、艦船も沈められ、既に艦娘主義化していた海軍も更に艦娘技術に手を入れるだろう。艦船派は多分、時流によって排除されるだろうから問題ないとして、沖縄作戦の失敗は相当ヤバイ。

肝心の蒲生提督は奇跡的に救い出せたものの、意識不明の状態で佐世保の総合病院にいる。意識が戻り次第尋問と、それを使って軍事法廷を開くために、彼の隣には常に憲兵隊、及び海兵団を含めた警護隊がいる。

後に、深海棲艦教は共産党政府……あるいは、合衆国政府の息がかかってきた事が少し分かるが、それを裏付ける確証を得るのはかなり先の未来になり、また彼の幕僚たちからの証言は得られない。彼らからの情報は、奈落の底で眠り続ける事となる。

一時作戦は中断する形だが、諸外国がこの失敗を大々的に報じた上、日本本国、本州を守るために、これ以上の侵攻を防ぐ名目で“同盟国への支援”を名乗り出たアメリカと中国を主体とした国際連合艦隊が結成されつつある。

彼らは、最初からこれを予想していたのか準備していたようで、早ければ一週間、猶予を持って二週間ほどで反抗作戦が開始できる……これは、海軍と空軍のサイバー軍の予想なので、これ以上に信頼できる情報は今の所ない。

作戦が失敗するのは本当に痛手だし、成功を前提としていたものを、まさかこんな形でしてやられるとは誰も思わなかっただろう。

色々は人が頭を抱え続けている。

「我々駐屯地連隊……いいえ陸軍は、本格的な深海棲艦教の摘発に乗り込もうと計画を立てております。それは私が担当する県境を越え、全国に広まっている根を潰さねばならないという共通の認識があればこそ、迅速な行動が成るものです。陸海が協力し合えばこそ大義を……いや、双方の仕事が楽になるのは、言わずともご理解頂けるものと思います」

「酷いですね……許せません。私は宗教に疎いんですけど、自分から命を落とそうとするなんて……増しては周りを巻き込もうとするなんて、許せません！」

うん、現在の海軍の成り立ちが半分ぐらい宗教じみてるのはさておき、訳のわからない理由でこんな状況に追い込まれるのはただのフア○ク。今すぐ責任者である“治療中”の提督殺しに行きたい。これは時雨たちの本音でもある。

久しぶりにゲイ三人衆へと連絡を取ったところ、「ああ狂いそう……！」と静かな怒りを表しながら穴無限拡大の刑を執行したいと言った。今回ばかりはそれを止める気はない。

「アカシタン……ツツ！……私の方からも、空軍にも協力を要請します。これは軍部だけの問題ではなく、国全体を脅かす問題となり得ます。敵を賛美する反発分子に対しての人権云々を口実とされて動けませんでしたが、実害が出たとなれば話は別です。即刻な対応をさせていただくため、陸海空軍の協力を強める方針で行きます」

連隊長は「なんでアンタが仕切ってた……？」みたいな顔してる。おい、ここおわすのは大淀軍令部総長——海軍全体の作戦命令を出す総本山であるぞ。しかも立場そのものを通り越してどこまでの影響力を持っているのか未知数な部分が多い人だぞ。怖いんだぞ。

「……状況は整理できてきたようですが、問題は今後どうするかです……斎藤長官、そして荒木提督。即決とまでは行きませんが、今後の方針について何かお考えは」

「赤城提督が言った通り、私が緊急招集をかけた理由は、今後の方針についてだ。今後の課題となるのは、海外の連合艦隊に対しての対応、才号作戦の処理――そして深海棲艦教なんだが、それはもう決めたから、前者の2つを決めよう。異存はありませんね？」

「……ウム」

荒木連合艦隊司令長官の領きに続くように、全員が頷く。

「私と赤城さん……赤城提督は、海外への進出には反対ですので、作戦の撤回を提案します。そうすれば2つの問題は解決します」

「なに言ってるかも!?! 秋津洲たちの作戦は完璧だったかも! あのと二式大艇ちゃんのプロペラに絡まって跡形も残らずただの誇り汚れかと思ったらハエの胴体だったバツチいゴミ以下の提督が、その深海なんちやらじやなかったら成功してたかも!!」

「かも? それは多分ということですか? 軍令部はもう少し人選に配慮したほうが良いと思います」

「頭にきましたア鎧袖一触かもオ!!!」

「私の真似ですか? 頭にきました」

やめてくれよ秋津洲さん、加賀提督って確か凄く強い艦娘だから鎧袖一触だぞ。

会議室はその雰囲気に乗せられて、副官や秘書艦たちがわんさかわんさか喋り始めた。斎藤長官は頭を抱えているが、多分会議に対してじゃなくて、自分の同期を憂いているんだろう。

「久しぶりだな穴戸……できれば、もっと良い再会の仕方をしたかったものだ」

「俺もそう思います、蘇我提督。総司令官が不在で、その副司令もまたいない……代理としてなんとか赤城提督を立てたのは良いものの、状況そのものは正に最悪。多少のことではビビらない俺でも、今は不安と恐怖を感じています」

「ハハハ、誰だってこんな状況にいれば恐怖を感じるさ、現に私も怖い……だが、二人だと怖くない」

隣に座る提督の上腕二頭筋が、俺を包んだ。

「あつ……」

「二人で恐怖を受け止めれば、怖さが半分になる。それだけでも、だいぶ楽になるんだぞ？」 皆で抱き合えば、怖さは……言わずとも分かるな？」

「は、はい……！」

隣に座る荒木大佐が、蘇我提督の乱交宣言（※違う）に居心地悪そうにしているのが、逸した目の泳ぎ方で分かる。

「なんですか大佐？ やましいことじゃないですよ？」

「お前には古鷹と結婚してもらおう必要があるんだ……しつかりさせる為に、私はなんだったって協力するぞ？」

「な、なんでもスル……!？」

「ああ……私たちの家族は、いつでもお前を歓迎する」

「て、提督は……タチ……！」

「ん？ 私はタチ……？ どういうことだ？」

知らなくても良いことだと思います。

「というか、古鷹との縁談は断つたはずなのに、まだ強引に結婚させようとしているう!? 結婚相手に困らない俺って、案外モテてる……? いや、俺はハーレムを築くことに全力を上げてきたんだ。でも古鷹に限ったことじゃないけど、人の本心つてのは建前と区別がしにくいから、場の雰囲気で流されていたのか不明なんだよなあ……加古はたしか「古鷹はアンタのこと好きだと思うよ」とか言って適当っぽいし。」

「父上、羽黒、そろそろ意見が纏まってきた所だと思いますので、聞いてみてはいかがでしょう？」

「そうだね、では静粛に。今後の方針として一番飛び交った意見が“連合国と合同作戦を提案する”というものだったのだけれど、それは散々、独りよがりにならぬ一國で戦おうとしていた我々が恥知らずにも申し出るの承知で、ということかな？」

「無理を言ってしまうえば、我々がなんとかせねば、沖縄の上で人民元とドル紙幣が飛び交うことになります」

「蘇我中将に賛同する人は多いようだね……もう一方は、作戦そのものを撤回して沖縄を捨てろ、という意見なんだが……分かっていると

は思うけど、この国全体のイメージを壊すだけに留まらないと思うんだ。その点を、加賀提督や赤城提督は考慮しているんだね？」

「二択にまで選択を絞り、一方を取ればもう一方を失う所まで来てます。しかし、既に一度失った領土を無理に取り返しに行く理由なんてありません。資源云々は置いておき、戦略的な重要拠点として着目するべきではないと思います。この国は、思っている以上に大きいのですから」

「……賛同する」

おいおい、ここで革新派と保守派の争い繰り広げるのやめて、もう終わったことでしょ。

「なるほど……では、若い子たちにも聞いておくべきかな。宍戸大佐、斎藤大佐、荒木大佐、秋津洲中佐。君たちの意見を聞かせてくれないかな？」

今の海軍長官のいいところその一、年齢別け隔てなく意見を聞こうとする。

「戦争かも！ 未来に向けた攻勢をかけるために準備するかも！」

「最も重視するべきは未来。内部に遺恨を残す物の少ない秋津洲中佐の意見に賛同します」

「ぼ、僕もみんなと同じで……」

あれ？ この部屋クーラー効いてる？ もうちよつと温度下げないと熱と血が昇って諸外国を侵攻しようなんて言いかねないぞコイツら。

「宍戸大佐の意見はどうかな？」

「ええ〜つと……そもそも連合軍が領土を占領しても、沖縄という領土そのものの利権は日本国に帰します。たとえ国際的には放棄した国土として認定を受けていても、完全な支配権を置くなどできることでは無いと考えます。どれほど資源がほしいからと言っても、国際法の範囲で行動するはず……」

「甘いぞ宍戸大佐！ 領土だと尖閣諸島を奪おうと画策し、レーダーを照射され、過去には空母を建造しただけで侵略準備などと揶揄され、いいように言われ続けた長年の過去を、我々は覚えているはずだ

！ 奴らは国家間の戦争さえなければ国際法など無視してもいいと考えているゲスだぞ！ 鬼畜無常のハイエナ共を駆逐し、今こそ我々の国を、世界の第一軍へと昇華させる時！ その、いつまた訪れるか分からない絶好の好機を、みすみす逃そうというのか!？」

「そうだそうだ！ と、誰が過激派で、誰が穏健派なのか分かりやすすぎる図は流石にどうかと。」

もつとも、沖縄に近づくに連れ、深海棲艦の数が増え、エリートやフラッグ湿布など強くなって行ったのを見て、戦術的にまず勝てるか疑問に思っていた。だからこそその大戦力……まあ、首脳部がクソだったり、意図的な失敗を目論めばそれで負けるのは簡単だ。だけど、それ以上に、あの島に何かある予感がする。目に見えない存在としてじゃなく、実在する何か……みたいなの。

そうでなくても、近くの島に拠点設置を行おうとした矢先、深海棲艦が突然現れた……という、奇襲には絶好のタイミングで来た深海棲艦に疑問を覚えている。

固定概念に囚われる事なく、少しの勘と、論理的な推理を入れる場合——深海棲艦には、前線で指揮を取る何者かがいるような感じがする。記録通りに動いたんだっただけの話だが、今までの深海棲艦とは統制力の面で違う。

一部の軍令部職員も俺と同じくそんな事を考えていたが、妄想と一蹴されたらしい。

「小官如きの具申が功を奏するとは思いませんが、このような状況になった以上は順当な対応をする事が最善です。かの国々にはこのまま支援を断り続ける一方で、反攻作戦の準備をするべきであると進言します。しかし今回は、佐世保第一鎮守府司令長官殿が毛嫌いしていた、外国艦や海外士官、並びに柱島泊地の荒木司令官にも参加をしていただくのが最良かと」

「若い子たちも反攻作戦を提案か……荒木大将、どう思われますか？」

「ウム……パパは、期待しているッ」

「あ、は、はいパパ！」

初めて聞いた荒木親子の会話である。

うわ、キモ、え、なに？ え、おっさんが、おっさんに、パパって呼ばせてるの、え、新事実、え、キモ、本当の親子でもキモ。司令官クラスになると更にキモ。

「分かった。穴戸大佐には申し訳ないけど、待命を返上してもらおうよ。長崎警備府には斎藤司令官がいるから、君には副司令官……並びに、長崎駐留艦隊司令官として再着任してもらおう事になるけど、いいかな？」

「ハ！」

駐留艦隊司令官……？ そ、そんな役職あったっけ？

「みんな、方針は決まった。我々は先立って反攻作戦の準備に取り掛かる。外交上の問題、及び作戦の最終的な許可は政府に任せよう。我々が決した意は、ある程度は汲み取ってもらえるように努力するから」

こうして、海軍緊急会議は幕を下ろした。

俺たちの警備府も、後に誰もが想像していなかった、誰もが困惑するだろう試練を跳ね除ける為の準備をする。

ギアアップ

斎藤長官は自分の息子の居る艦隊をどれだけ増強したいんだろうと思っただけらしい警備府には艦娘がなだれ込んできた。

陽炎、不知火、黒潮、浦風、磯風、浜風、谷風……は俺の部下だった艦娘だ。

その他、龍田さんと天龍も加わり、俺が会ったことがない艦娘は省くが、とにかくそれぐらい多くの艦娘がいる。佐世保の鎮守府勢より断然数は少ないのは当然だけど、いよいよ司令官を二人置いた理由が分かったわ。(艦娘)多いッス。

警備府の副司令兼駐留艦隊司令官兼参謀長、つまり実質ただの参謀長に降格処分となった俺は、それでも司令官だった時より忙しい日々を送っている。

出撃所、小型管制室。

「艦隊行動を取る時、フォーメーションAからBは発令から最低でも15秒以内で変形できるようにしてくれ！ おれがかんがえたさいきよーのふぉーめーしょん、だ！ 必ず役に立つ！ 臨機応変性を高めるための訓練でもある！ 実際にこれらの戦闘態勢は既存のものにある欠点を埋めることとなり、戦闘詳報にバツが付くか、花丸が付くかの差があるんだ。リラククスしながらやればできる！ 整工班は引き続き必要装備の点検を進めてくれ！ 幸い佐世保艦隊の一部施設装備は俺たちで利用できるようになった！ 島に拠点を作る時の基本は絶対に忘れるなよ！ 駐屯地の陸軍連隊長がバツクアップしてくれているから、こっさり余分に浮遊橋やパネル橋を使えるぞ！ 使い方は説明書を読めば簡単！ 反抗作戦での使い方は応用を入れるから使い方を覚えたら俺の戦闘詳報に目を通せ！ 他にも色々支援を要請中だが、海軍本部には、内緒だぞ！」

『海軍本部に内緒って……そんな大声で叫んでたら聞こえちゃうじゃん……』

「なんか言ったか時雨!? 貴様はこのような状況下でも上官への礼儀というものが成っていないようだなあ!? 俺のようなイケメン頭脳

明晰チ○ポがカッコ良すぎて貴様から女の子を取ってしまうからと言って、嫉妬することはなからうお？　のお時雨!?　おん!？」

『『イケメン……?』』

新米の艦娘たちよ、俺をジト目するな。

は？　お前から誰と比べてんだよ？　容姿って相対的なんだから、流石に俳優や雑誌のモデルと比べられると誰でもブサメンになるぞ？

『それよりも、なんで僕が女の子を取り上げられると嫉妬しちゃうみたい言われてるの？　それじゃレズビアンじゃん』

「し、時雨……お前……艦息……じゃなかった、のか……?　主人公って……たいてい……男なんじゃ……?」

(※主人公が男だとは限りません)

『ひ、ひどい……!　ひつぐ……し、しぐれ……おんなのこ、なのに……えつぐ……ふえええん!』

『全艦、あの小さな管制室に砲撃構えっぽい!　あの小さな粉的を粉微塵にするっぽい!　時雨のイジメ方が何時もより酷いっぽい!』

『若い司令官は成った途端に粋がつてゴミになるってのはホントだったようだな!?　龍田ア!　あの管制塔への接近戦はオレたちでやるぞオー!』

『うふふつ……天龍ちゃんがこんなにも楽しそうにしてるなんてえ……ふふ、ふふふふつ……!』

はい反逆罪。

何時も虐められているのは俺だし、こんな大規模な艦隊に砲撃されたら警備府が崩壊するし、龍田さん絶対に俺のこと楽には死なせてくれないよね。

俺は準備を怠らないミスター万全だ、オムツは履いているので、ズボンを濡らすことはない。

「それより第五艦隊の神風たち!　連携や作戦内容に問題はないか?」

『問題ないです!　だ、大丈夫……大丈夫……』

「後でやる初霜たちとの演習は、俺が直々に指導するから体力は温存しとけよー!」

『『はい！』』

神風たちはあの大失敗した作戦に参加させられて心的ダメージが深いと思っただが、そうでもないらしい……あるいはただ強がっているだけなのか。ここは俺の判断や推測だけじゃどうにもならず、俺より立場に近い初霜たちにメンタルケアを任せる。

手元にあるセーフティチェックリストにペンを入れて、最後に俺がサインする。この天候と準備された艦装、装備での艦隊行動には異常なし。好天候で作戦に臨む予定だが、悪天候に備えたプランも用意してある。

一息つけるために、演習を行っている艦隊へ一時帰還命令を出した。

「艦隊指揮の方は順調のようだな宍戸大佐。流石だが、このフォーメーションの意味はあるのか？ 陣形自体は既存のモノがある以上は必要ないと思うんだが……」

斎藤司令官殿、参謀兼整工班の月魔、並びに軍令部から視察に来ている秋津洲さんもこの小さな管制塔に来ている。管制塔って言うても小さな港のオフィス程度の大きさしかないんだから、四人入るのはちよつとイヤイヤイヤア！ むさ苦しい！ 男二人は出てって！

「既存の単縦陣などは基本的であるため、汎用的ではあるものの、どうしても最良とまでは行きませんので、状況に応じた最善の陣形を練習させる必要があるのです。まあフォーメーションと言っても2つだけですので、あとは既存の陣形のおさらいと射撃訓練だけですな」

「ですがこの陣形の使い所なんて兄貴以外に有効活用できる人間なんて……ま、まさか兄貴また前線に行くつもりじゃ……!?!」

当たり前前だろ、みんな行くんだから最前線に行く必要があるのは必然だし……よくよく考えたら、艦隊司令官と副司令官と参謀長兼任している時点で、このクソ偉そうな司令官必要なくね？

陣変形そのものはただの訓練であり、いかに慌てずに実戦へと臨めるか、それを体に覚えさせるのが本来の目的である。

「それにしても、宍戸大佐の要望が全部通っちゃうなんて凄いかも！ 海軍長官に対しても発言力があるなんて、尊敬するかも！」

「ありがとうございます秋津洲さん……と言いたい所なんです、こちらの司令官は長官殿の身内なので、俺の力ってわけじゃ……」
「だが要望は悪くはなかった。これで我々の長崎警備府にも箔がつくというものだ」

俺が願いだした3つの要望は奇跡的にすべて叶った。

その一つが、柱島艦隊の作戦参加だった。

ただ問題もあった。

ここは他の警備府よりある程度大きく作られている。これは佐世保鎮守府の補佐としての役割を果たすための構想があるためだ。

原則的に司令官レベルじゃないと個室は許されない中で、4〜5人が入れる部屋を何個か有事の際に開けておく事が義務付けられているためである。

これを全部埋めて、更に柱島艦隊が来るとなってはもうスペースがないので、誰かがテント張って寝ないといけない事態を避けるために、個室や倉庫を改装している最中である。

細かい人事面の仕事は齋藤司令官が担当してくるんだが、外国艦が五月蠅いというクレームは未だに相次いでるからアイツら民泊行つてくれないかな？

つか、なんでコッチに来るの？ 佐世保鎮守府に行けよ。警備府多すぎるんだよ艦娘。明らかに俺が指揮できる艦娘の総数超えてるだろ。

だから俺と齋藤大佐や荒木大佐みたいな司令官クラスが三人も居るんだよね？ 一応俺たちの艦隊と警備府は赤城中将お預かりということになってるんだけど、いつそのこと誰か昇進させて警備府そのものの統制を取ったほうが良いと思うんだけど……ここで一番権限持つてる人を決めないと意思決定が滞るぞ。形式上は齋藤大佐だけだ。

だから後に齋藤大佐は昇進した。

俺を昇進させろ。

二つ目は新装備と設備装備の増強——に合わせて、明石次官から試験を頼まれていた装備の実戦使用許可。試験品とはいえ強力な武器

を得ている我が警備府とそれを試験する艦娘らは、それだけで他を出し抜くほど大きなメリツトを持っている。

そして三つ目は、

「一時補給、整理がおわったので、みてくださいっ！」

「ああ、ありがとう大鯨中佐」

後方支援担当として大鯨さんをこっちに召喚することだった。

俺が八号作戦を早く終わらせることができたのは、少なからずこの人のおかげであり、海軍省に入れてほしいぐらい有能な人なんだが、未だに地方要港部の司令官をしていたと聞いたので、総司令には直々の申し出をした上で、佐世保鎮守府の参謀に編入してもらった。

補給と準備に関してのスペシャリストで仕事が早く、そして何より可愛い。

このはわわ艦娘が入れば艦隊の士気も上がる。俺のモチベーションは最高潮へと達する。よし、イケる。

反攻作戦を取ろうとしているのは、全世界が注目しているところだ。もはや極秘作戦でも何でもない。

だからアメリカ海軍を主体とした、人民海軍、大韓海軍、露海軍の連合艦隊は、日本が来る前になんとしても沖縄を占領したいと思っ
ているはずだ。だから、今頃はもう進行しているんじゃないかと思っ
た。進軍開始して、沖縄が目前！ っとなった時にメディアで公表す
るみたいないな？

頭を抱え始める。

その場合この反攻作戦自体が白紙に戻されるから嫌なんだけど、どんな状況にも対応できるように艦娘たちの指導だけは怠らないようにしよう。

ひとまず、佐世保に行っている柱島艦隊にも指導したいんだけど、まだ帰ってきてない。

時間かかりスギイ！

—————

佐世保第四鎮守府。

ここに在るすべての艦娘は、第二鎮守府に戻った赤城提督の指示で行われている作戦内容の確認と、実技演習に勤しんでいる。赤城提督の個人的な感情はどうであれ、彼女は任務を全うしようとしている。

柱島艦隊、並びに阿久根要港部が出撃所に帰投する。

彼らのみでの作戦演習は、同海域での作戦を行う者との連携を重点的に練習することで、作戦効率を上げる名目で行われている。彼らは最終的に、長崎警備府の艦隊司令官の下で指揮される事となるが、この人事には「こんな扱いづらい艦隊使いこなせないから、穴戸に任せよう」という一佐世保方面総司令官、そして佐世保第一鎮守府の提督として着任した蘇我提督の判断によるものだった。

準備は着々と進んでいる中、古鷹と一緒に眺める出撃所を見て、その気持ちが高まると高まった。

絶対に穴戸に任せる。こんな奴らを統括できないし、アイツが頼んだんだから、アイツが面倒を見るべきだ。

「やあ、帰ってきたねえ君たちい……見てたよお……ハア……ハア……オレっちの結城艦隊と、外国艦の皆さんの連携は……まあその……ナオキです。君たちは噂に聞くぐらいキレイだから、深海棲艦も魅了されちゃうかもね……今のオレっちみたいに」

目を三日月形に変えた結城司令官が、隣で立ち尽くしている荒木大佐を差し置いて、外国艦を口説き始めた。

「Thank you! Handsome boyにそんな風に言われると、照れちゃうわねっ!」

「ハハハ、思ったことを言ったまでだよ。もちろんオレっちの艦隊の五十鈴や名取、そして最近来た長良も可愛んだけどさ……やっぱ顔の整い方がだいぶ違うんだよねえ……!」

「だくんけ!」

柱島艦隊旗艦となったオイゲンの胸がユサユサと揺れる様を見て、薄ら笑いを浮かべた。

「オイゲンも、ビスマルクも、アイオワも、ウオースパイトも、リットリオも、リシユリユーも、オクチャブリスカヤレボリユーティヤも、全

員、おっぱいがデカイときた！　これは、エッチエチなスケベおま○こだという証拠だね？　その男から精液を摂取し続けなきやま○こからエロエロイロイロ垂れてきて生命活動に危機を及ぼす欲情子作り塊魂みたいなカラダをしているのが、どれだけオレっちの理性を狂わせるか分かるかい？」

「あツ？」

「うんうん、安心して。オレの鬼頭指揮棒は、作戦完遂率を19%上げるんだ。君たちとはもつと作戦の連携を取らなきやいけないから、後で全員、オレの部屋に來なさい。みつちりと連携して、連結して、孕ませベイバー砲、発射だおっ」

「いいわよ」

「え、マジ!?　ねえ聞いた五十鈴!?　オレっちというイケメンち○ぽがようやく理解された瞬間だぞコレ!?　やつぱり世の中イケメンですわあ……」

「もちろんよ。そのF, KING FACEを粉微塵にできるなんて、日頃のSTRESSを有り難く解消できるCHANCEじゃない！　ね？　みんな」

「「異議なし」」

「え、ちよ、ま、助けて五十鈴。いや名取、いや長良でもいいから。オレっちはまだ死にたくない！　死にたくないんだ！」

「し、司令官……」

「見ちゃ駄目よ名取。それに長良も、アレの存在自体が教育に悪いんだから。それよりさっさと入渠済ませちゃいませよ。長崎警備府に帰って穴戸司令官の下で演習させてもらおうわよ」

「う、うそ……嘘だよねえ……？　嫌だよお……！　こんなの絶対おかしいよオ！　そうは思いませんか荒木司令官!?　オレっち、なんか悪い事しましたカア!？」

「え、そ、その……不純なのは、良くないと思うよ？」

「は？　ウツソだろお前!?　こんな、王道を征く、スケベーエロスに手を出してないとか、何やねんお前。金玉ついとんのか!?　中○しの申し子ことインキュバスと搾精の申し子ことサキュバスは惹かれ合う

ナカなんだお!? あ、やめて! や、や、やめろオ! 海の上を歩くなんてできない! オレ艦息ちやうねん! できないつてイツてるでしょおお!? あ」

一部地方の基地からの艦娘達、そしてその司令官達は一癖も二癖もあることに頭を悩ませている蘇我提督は、軽いため息を吐いた。

「二人は公然猥褻、もう一人は……まあ、艦隊運営指揮を得意としていない、か。彼らを長崎警備府に預けようとは言ったが……警備府に入るのは流石に厳しいか……? 宍戸は彼らを手懐けている様子だしな……ハハハ、流石はあの宍戸先生のお孫さんと言ったところか。いっその事宍戸をこちらの第四鎮守府の提督にでもすれば……いや、そうしよう。古鷹もこれで夜這いができ——ウアアアア!!」

「パッ!! い、いくらなんでも怒りますよ!?!」

「ク……すまんすまん。だが小さな艦隊の司令官等を束ねる司令官として、彼が適任なのだから視野に入れてないワケではない。結城も多少アレだが有能な故、文句を言えないしな……この作戦は、あまり乗り気ではないな」

「ど、どういうことですか?」

「連合軍の艦隊は、既に動いているのではないかと思つてな……」
「え、なんで分かるんですか?」

まるで知つているような素振りを見せる提督に対して古鷹が首をかしげ、蘇我提督は瞳を閉じる。

情報通として有名だが、それ以上にスパイとして国際的な情報にも精通している結城司令官が、フィリピン亡命政府から連合軍の動きを聞かされていた。連合軍の艦隊の作戦が既に遂行されている事を知った結城司令官が真っ先に話した相手は、反攻作戦の総司令官となつた蘇我提督、そして宍戸司令官だつた。

この情報を聞いた二人は別々の考えを持つていた。

蘇我提督は、連合軍が出しゃばるのであればどうすることもできないので、無闇に反攻作戦を実行しなくてもいいと思つている一方で、宍戸司令官などの若手士官らはむしろ戦力と作戦遂行能力の向上、そして確実な作戦成功への準備に乗り出している。

先方が、主力とされる深海棲艦もほとんど撃破していないので……その上、連合軍の連携が取れる確証がないと、各幕僚が語っていた。主にアメリカと中国で構成される軍だが、参加国は互いに利権を取るために戦っている故、自国領土ではないので、士気も低い。

そんなのは無視できる。

どう転んでも、発令すれば確実に沖縄は外国の手に渡ってしまう艦隊であるのは確かである。

被害をある程度緩和できたとはいえ、作戦が失敗するあまりにもレアなケースとは違い、普通に戦って負ければ損害が甚大となるのは必須である以上、海外連合軍の失敗を願うような人物ではないが、今はただ与えられた命令をまっとうする事に専念する。

準備段階である以上、反攻作戦そのものは発令には至っていない。佐世保鎮守府主導のもと本格的なギアアップを行っており、作戦開始時刻まで数週間。

絶え間なく続く緊張感——海軍だけでなく、陸空軍ですら息を呑み、汗を拭う。

「はあ……穴戸さん、私は……」

「ん？ お前やっぱり穴戸のことを？ うん？」

「だ、黙って仕事してくださいっ！」

「ぐお——ツ!!!」

「溺れる！ 溺れるウ！ ああもうやだああアツツツ!!!」

「もつといい声で泣きなさいよ！ Come on！ アハ！ アハハハハ!!!」

「OMG……何してるのよWarspite？」

「え？ だ、だってBismarck、あなたがQueenみたいにしろって……」

「言っただけど流石に引くわねその女王様っぷりは。これでBritish艦の本性は容赦のないサディストだって分かったわね皆？」

英国紳士は英国淑女(女王様)を誇りに思っていると豪語するけれど、一体どんな性癖してたらそんな事が言えるのか、怖くて近寄れない

わっ。ね？ アドミラル？ ビスマルクのほうがあなたの女性として相応しいと思わないかしら？」

「え？ うん、うん……うん？」

「The f*ck did you say? Wana Boss ton Tea Party? (なんつったお前？ ポストンティーパーティー始めたるか?)」

「なるほど、Meのcountryにまで飛び火させるなんて……これは改めて誰がこの艦隊のFLAGSHIPか決める必要があるよ
うね」

「ぎゅ……大丈夫ですよっ、提督は、リットリオのお胸に埋もれて
いましようねっ」

「り、リットリオ……苦しい……！」

柱島提督が同人誌で見る性通教えられる系ハーレムシヨタ状態と
なっている姿を見て嫉妬心を燃やし、それを隠そうともせず、一応上
官である大佐に対して心の叫びを浴びせる結城司令官は、出撃所の水
面で溺れていても元気である。

「ハア!? フザケルナヨお前!? 何が悲しくてお前みたいなヤツの
ハーレム見せつけられにやあかんのや!? ぶっ殺すぞオラァ！」

「「なんか言った？ 本当に溺れ死にたい？」」

「イギだいでずツツツ!!!」

ギアアップ2

執務室。

警備府は失敗した才号作戦の実行をする前よりも格段に忙しく、人員も増えて、本格的な反攻作戦の準備をしていた。俺の影響も少なからずあるかも知れないけど、長崎警備府はあまり作戦に関わらず忙しくなかったから、いきなり仕事ができ忙しく感じるのかも知れない。

艦隊司令官とかいう、警備府司令官と何が違うのか訳のわからない役職は副司令官として認識しており、佐世保第一司令長官ーつまりは佐世保方面軍総司令官であり、俺の直属の上司として返り咲いたムキムキイケメンダンディズム提督こと蘇我中将は、我々に前面海域という名の海域を指定し、そこを全任する案が浮上した。

これはつまり、大本営が作戦実施を発令して進行する際に、前線の取り仕切りは全部我々に丸投げという事でもある。そこでの細かい指示や意思決定も、大きな進路変更も、すべて斎藤准将の思うがまま……そして、当面の人事なども含めて、手中の範囲内の柔軟さが飛躍的に増す。

しかし取り仕切るのは俺、総指揮権を持つのは先に昇進しやがったクソメガネこと斎藤准将。

当然ながら相応にして責任が増える。

あとで改変を要求していくが、蘇我提督の俺たち若手士官や、一等星と名高くなるほど練度をあげられた艦娘達への期待は大きい。

補給面、陸軍開発の走行橋を大手を振って使えるが、これまた当然、スムーズに行くように管理をするのも俺の役目である。ベリングラム少佐もいるので、ある程度負担が緩和されているが……いやあ、やること多すぎてストレス溜まりますね。

「うっぎ、え、なに？ 警備府への物資の輸送が滞ってるって？ 陸軍のはもう届いてるのに？ 空軍基地なのに陸より遅い？ ジョーダン？ マイケルのジョーダンなの？」

「は、ハ！ 申し訳ありません!! 空軍基地一同を総動員させている……と飛行隊長からも連絡を頂いたのですが、何分この非常時、その上書類の申請や空軍省との連絡系統が滞っているらしく……」

「あん？ 空軍省って、大本営にある小さなお部屋のこと？ ハッ、設備が整ってなければ組織も整ってねえと来たッ！ 九州の危機が迫ってるんだから、ソッチはファイターパイロットの一人でも出撃させるのがスジなんとちやいますかねェ!？」

「も、申し訳ありません宍戸大佐!」

「今なんつったお前？ 海軍では『だいさ』言うんやでエ!? そんな事も知らずによく空軍士官学校卒業できとるなアおん!」

悪態をつきながら足を机上に乗せた。

「はあくつつかえ、ほんまつつかえ。やめたら？ この仕事。猿、おいサルウ！ すいませんしか言えんのかオラア!? おりやお前のケツの中から前立腺全部引っ張り出してエ内蔵ぶちまけてもええんやぞオ!？」

「も、申し訳ありません!!」

「CPT. SHISHIDO、彼は悪くはありません。ここは一旦TEAでも飲みながら落ち着きましょう」

「アメ公がイイ気になってんじやねえぞオラア!! 2つ選択肢をやる。今俺に差し出した熱々のお茶を一気飲みして黙るか、俺のDOC Kを啜えて黙るか、どっちが良いんだよ?」

「後者でお願いします……」

「ひ、ひいいいい!!! こ、コイツらデキてやがるウ!? うあああああ!!!」

逃げていく士官を追うことなく、俺はベリングハム少佐の差し出した紅茶をふてぶてしく飲んだ。キッツ、濃ッ。なんだこれ？ ブリテイッシュティー？ クリームかミルクをデフォルトで入れろと言いたいんだが、このホモ少佐にそれ言うところろしい事になりそうなので控えておく。

ここにいる少佐。コイツは外国艦艦隊や海外士官との連携を取るために、俺と蘇我提督の下を行き来している。男を取っ替え引っ替え

してるなんて、とんだ尻軽男もいたもんだ。頼むからさっさと俺以外の男を見つけてくれ。

「空軍の人だからって威嚇しすぎ。流石に苛つきすぎじゃないのかな？」

「時雨は分からんだろう、いち組織を運営する時にかかる負担。それを維持するだけでヤバイのに、これだけ動かそうとするとね、なんかミス一つでも許せなくなるよね」

当然、飛行隊長さんとは既にお知り合いの仲だ。

何度か警備府にも訪れて、軽空母鈴熊や、旗艦の飛鷹、副旗艦隼鷹の艦載機などの視察をしていた。

「つていうか穴戸くん、自分で悪評広めてどうするの……」

「大丈夫ですよ白露さん。ほら、人格評判が奈落だったらこれ以下になることつて滅多にないじゃないですか。ていうかですね、知ってるんですよ白露さん？ 綾波ちゃんに協力していたこと、ぜくんぶ、知ってるんですよ？ 村雨ちゃんと五月雨ちゃん……それに時雨、お前も」

「「え……？」」

白露姉妹は頭をかしげながら、本当に分かっているような素振りを見せる。とぼけるのが上手いなア。隣りにいる春雨ちゃんは本当に知らなそうにしている。

「綾波ちゃんがコミマケで出した同人誌に、俺とベリングハム少佐の耽美物語を描いたとつても純愛物なクツソ薄い本書いたの手伝ったんですよね皆さん？ なんでメ○ンブックスに上がってるのか疑問なんですけど、どういうことなのか、ここにいない綾波ちゃんのために、ご説明いただける和有り難いのですが？ んッ？」

全員が目をそらす。

ベリングハム少佐が驚愕すると共に、手元の端末で俺が言及したサイトにアクセスしようとしている。

そう、ある程度名前の通るリアルな二人の……名前は変えてるけど、俺とこのガイジンがモデルなのは一目瞭然。

「だって綾波の創作意欲を失わせたくなかったんだもん！ 仲間のた

めに、そして何よりお礼にくれたギフトカードのために……！ 僕たちは、やらざるを得なかったんだよ!!」

「ほう、現金のためにやったと……？ 多分ほかの皆は善意だと思うからいいとして、すぐくエグいシーンがあったんだけど、アレはなに？」

「え、そ、そんなシーンありましたか……？ 五月雨は、告白のシーンで終わったと思ってましたけど……あつ、ちなみに告白のお花のトーンは私が描いたんですよっ！」

なるほど、純粹な少女のような笑顔を振りまく純粹無垢ムクな天使たる五月雨ちゃんには、あのいきなりすぎる拡張からの人体内部開発事業始動からのアクメ空中天昇曼荼羅を見せていないと？ そこだけは褒めてやるよ。

「みんな、純愛物を書く時は素直に純愛にしよう。俺が何故かブツダに話しかけてるシーンなんて頭痛がしたぞ」

「逆になんで最後まで読んだんですか穴戸さん……」

「ご、ごめんね穴戸くん？ 白露お姉さんは別にね？ そういうつもりで描いたわけじゃないの！ ただ穴戸くんがいじられてる所みたいたくなくて思ってただけでっ、それ以上でもそれ以下でもないから！」

「今世紀最大級に悪い弁解……なるほど。春雨ちゃん、今度俺と一緒にデート行こうね。この裏切り者共は、ぜーったいに連れて行かないから！」

「あ……お、お兄さんとデート……二人きりで、デートオツツツ!!」

ヤバイ、春雨ちゃんが超サイヤ人みたいになりそう。

執務室でこれでもかかってぐらいの人口密度は、部屋の湿度そのものを上げる。一時のお茶は人の心を和ませるというが、流石に人の出入りが多いと蒸し暑く感じ始める。

「司令！ 遠征終わったわよ！」

陽炎三姉妹が入ってきた。資源を取りに行ってもらおう為の遠征は往復で何度もやる必要があるのでそれに当たってもらっていたんだが、当の本人達は“退屈”だと述べた。

最も重要で、最も面倒くさく、最も楽しくないミッションとして挙げられる例えが遠征任務なんだが、これは資源が少ない国にとっては必須。

今となつては雀の涙程度の収支しか得られないだろうが、それ以上に、作戦前なので各々の要港部で有り余るほど貯めておきたい……んだけど、流石に重労働を強いるのは心苦しく、効率の良いルーティーンで、なるべく出撃回数を増やさない方針で行っている。

休暇は無いけど、こつちも休暇返上ブツ通しで仕事しているから勘弁して。

「ありがとう陽炎。お前たちもどうだ？　ここにいるクツソイケメンな英国紳士系アメリカンが本場の紅茶を入れてくれるそうだぞ？」

「CPT. SHISHIDO、照れます」

「え、いいの？　つてうわつ、本物イケメン!?　しかもよく雑誌で見る人じゃん！」

「こんにちわ、LITTLE KITTIES(かわいい子ちゃんたち)」

「「きゃあ〜!!」」

「あはははっ!!　驚いたわ、司令はんが言うイケメンは信用ならんからなあ。じゃあ、ちよつとお邪魔させてもらうでっ」

「本場の……と言いますが、米国の本場はコーヒーなのは？　スターのボックス……は確か、米国の企業だったと不知火は覚えています」

「おいおい、勘違いしてもらつちやア困るぜ？　アメリカが本場に行っているのはユダヤ人が作った経済的な昇華とファストカルチャーによる優等文化の積極的な取り入れだ。濃厚かつ歴史ある文化つてのはイタリアとかドイツみたいなヨーロッパ諸国各地に根付いた物を言うんであつて、アメリカは安さとカフェインの効率的な摂取を世界へと広めたに過ぎない」

「そのとおりですCPT. SHISHIDO。流石は私の……いいえ、私が見込んだ人です」

ベリングハム少佐も賛同しているようだ。

俺の理論に基づけば、世界の各地に存在する文化なんてのは、資本

主義格差社会で勝利した大企業による戦略で強引に取り込まれたり、フラツシユアウトされる。

そんな社会の汚すぎる現実を知らないような純粋な百合のお花ちゃんたちが、お茶を飲んで顔を少ししかめる。紅茶が濃いのは正に本場っぽいから、これにミルクやクリームで薄めると苦味が滑らかになり、味による抵抗を感じなくなる。

「ん〜美味しいわねこれ！ 今度からコーヒーよりも紅茶にしようかしらっ」

「おいおい、コーヒーをハブんなよ陽炎。俺はこれでもコーヒーには少し五月蠅いぐらいに好きなんだ。飲めば種類が一発で分かるほど……っつて言っても過言じゃない。ドヤア」

「え？ そうだったの？ わさわさっ」

「お、おとおおう！ もし当てられなかったら、警備府二週走ってやるよー」

二週というラクラク走れる程度の距離に留めて保険かけてるのホント可愛いっ、と白露さんが褒めてくれた！ ワーイ！

「じゃあ穴戸くん！ これ飲んで何のブランドが当てて！」

「……なんでそんな早く用意できるの？」

「良いからいいから！」

！
本当はコーヒーの事なんてこれっぽっちも知らないんですう……

って言えばギリギリ許され……るわけねえだろアホか。

少佐が持つてきたティートレーの中には、コーヒーも作れる道具が揃っている。銘柄って言えばインスタントのこと？ 作り終えるまでの時間からしてそうだけど、それともブルーマウンテンやキリマンジャロみたいな味わっても何が違うか分からないタイプのコーヒーだったりして？ もういいや飲もう。

悠長にティータイムを楽しむ執務室内の全員が俺に視線を向ける。

口に含んだスプーン一杯程度のミックスには既にクリームが加えられて、後味は若干ねっとりしている。だが飲みやすく、悪くないチープ風味である。インスタントの比如说は大丈夫だろう。

「インスタント！」

「うん、それで何のブランド？」

「鬼畜時雨姉貴オツスオツス……」

「なんか言った？」

「なんでも……ザ・ブレンドの百十四だな」

「え、当たった？　ほんとに？」

「「うっそ!」」

ハ……俺を見くびるなよ時雨？　俺は予めどんなコーヒーがここに運ばれてきたか少佐から知らされているんだ。情報を制する者、世界を制する。真理であり原則。

「え、嘘?!　ホントにあたったの!?　すごい！　流石白露が認めた人なだけはある！」

「司令はんすごいやん！　やつぱ司令はんぐらいになると、なんでも知ってるんやなうって、改めて思うたわっ」

「はは、褒め過ぎだよみんな。高級士官は一応上流階級の人も話さないといけないから、知識は持てるだけ持っておいたほうが良いって思ったんだ。一応、これぐらいの銘柄を区別できるまでにならないと、真の提督とは言えないからね、あははは」

「流石ですCPT. SHISHIDO……ここで申し上げるのもなんだと思いますが、それはTHE・BLENDではなく、私がポケットに忍ばせていたNESCAFEの方です。申し訳ありません」

「はーいつ、では今から、オチヨくられ系可哀想副司令官様が、行き来混雑諸行無常状態警備府を二週ぐらいしてきまーす。はいすいませんね、味通じやなくて」

「味通じじゃないのが駄目なんじゃなくて、無理に背伸びするのが駄目なんじゃ……」

「お兄さん！　春雨も行きますー！」

「駄目だよ春雨ちゃん。俺はね、自分に厳しいんだ。だから絶対に警備府を走る。そして俺が有言実行する漢だって証明するためにね。じゃあ……行ってくるから。うん、分かった行くから、みんなしてドアに向かって指ささないでいいから、分かっているからイジメナイデ

エエエエエ!!!」

警備府玄関前。

二週走ってくるとは言ったけど、この二週にはちゃんと意味がある。

出撃所で作戦演習と実技訓練をしている集団への指導、斎藤司令官との進歩報告、艦隊の小まめな再編成や細部に渡る整工班の人事とか装備とか、第四鎮守府にいる大鯨と連絡をとったり、倉庫の物資確認。

この目で見てから指示や司令を出す。

最終的に警備府全体を回り、往復しなきゃいけないのを含めて数時間ってところか。長い罰ゲームだけど、備えあれば憂いなし。自分が今できる最善の行動をすることで、未来の要因となる現在を正しい方向へと導ける。

と大言壮語を吐き続けながら士官らの士気を上げ、なおかつ警備府の艦隊を見回る。中には、当然ながら反攻作戦に不満を持つ人もいる。そして何より、反攻作戦が開始される時期にも疑問を持つ者が多い。

疑問点を付けるのが、中破した艦船――失敗した作戦の撤退戦で大いに活躍したイージス艦の数隻は、動けない状態だ。損傷が酷いわけじゃないけど、ちよつと損傷しているからメンテナンスと検査が必要だ。

艦船は確かに強力だけど、うまく使わないと当然浮かぶ鉄の塊になつちやうし、深海棲艦の撃退に成功した数より、世界的に見て破壊されて多数の死傷者を出した例の方が多いんだよなあ……艦娘の壁として使うには人件費バカにならないし。

そんな扱いづらくても随行すれば陸での戦車みたいな役割を果たすかも知れない……そして何より物資を大量に輸送できる船が直らない事には、まず作戦の発令はないと思ってもいい。

武装していない輸送船の指揮も俺に任されているんだけど、この警備府には入らないから、艦娘が佐世保港湾に向かって実技演習をしなきゃいけない状態。

そんな疑問も持たずに働いてくれる妖精さんマジリスペクト。

「ほら妖精さん、お礼の金平糖だ。みんなには内緒だよ?」

っ! っ! と喜んでくれている。しやがみ込んで少し話す。

「人はストレスを備蓄する生き物でね、愚痴とか、喧嘩とか、色々起くるかもしれないけど、その時の感情ってだけで、本当はみんな、みんなのことが大好きなんだ。もちろん俺もね。だから、溜息をつきたくなる時があるんだ……ああやって、理由もなくいがみ合いが起きる時は特にね」

「ハア!? Meがぶつかっただすって!? ハッ、寝言は寝てから言っで頂戴って、いつも口がピクルスになるぐらい言ってるわよね?」

「ザワークラウトじゃないかしらそこは? ……っっていうかアドミラルはどこにいるのよ!? プリンツもいないし!」

「……………」

「は、早く止めないと……い、五十鈴ねえ、長良ねえ……」

「これじゃ作戦演習のための戦術訓練が進まない……」

「というよりアイツはどこよ!? 電話に出るにしても外国艦の司令官が戻ってきてからにしないよ!? ホントアホ!!」

出撃所の近くで騒いでいるのは柱島泊地と、合同演習のために来た阿久根要港部のみなさんだ。何故か司令官の二人がいないので、俺はさらに近づいて様子をみたんだけど、指揮権のある人は誰一人としていないみたいだ。

いや、指示通りに動けば問題ないと思うんだけど、司令した通りに行動、そして演習するはずの肝心の艦娘たちが……まさか……喧嘩、ですかあ?

ほほおー、これはこれは。

この俺が口をザワークラウトみたいにして喧嘩はだめだお? っ
て言ったのに、そういうことですか。え、喧嘩だめって、ジャパニーズだから通用しない? いやいや、だから英語でもドイツ語でも言っ
たさ(ドイツ語翻訳はオイゲンさん担当)。

でも、あれだけ言っても、意味なかったんですかあ……?

ふーん。

「Hey」

「ナニ!？」

「……Fightingはあれほどnichetったやろうがアツ!? おん? 怨ツ!? いいか今から貴様らそのケツ海上に戻さねえとバリストイックFucki ngミサイルが○○○を○○○して貴様らの○○○を○○○ばりに○○○して○○○を○○○て○○○——
——して貴様らのFuck” n社会保障番号剥奪してやるからな
オラアアアアツ!!」

「二——ひ、ひいいいッ!! ぐ、ぐごめんなさいい!!」

ハア……はあ……!」

よし戻ったな、言えば聞くではないかあの外国艦たち。

この調子で、本来ここにいるはずで、今は何処かへと消えている司令官たち二人にも説教をせねばな。

「ありがとうございます! 宍戸司令官はやっぱりすごいですね〜! 流石です!」

「ははは、そう褒められると悪い気はしないな! でも俺の不手際もあつたし、ごめんな長良、五十鈴、名取、そしてその他の阿久根要港部の艦娘たち」

阿久根要港部のみんなも、いえいえと手を振る。

「宍戸司令官が悪いわけじゃないわよ。柱島の提督はともかく、司令官が一人しかないのに私たちの提督がフラフラどっか行っちゃるのが悪いのよ。ホント信じられない!」

「それは後できつちりと言っておくよ……そりやもう、ベッドの上で泣いちゃうぐらい、キツイおしおきも兼ねてね」

「!」

びっくりしている長良たち。

はは、恐怖しているんだろうな。

同性愛掲示板というリーサルウェポン、そして龍田さんというタクティカルウェポンがこちらにはある。尋問と辱めの連撃を耐えきれるかな結城は? 躲すのは得意だろうけど、そうは行かないからな。

地の果て、いや、海の果てまで追いかけて絶対にホモ共とサデイス
ティックタツタサンに罅られるようにしてやる。

「……穴戸司令官って、やっぱり提督とデキてるのかしら……?」

「でも斎藤司令官ともデキてる可能性が微粒子レベルで存在してるー
?」

「ねえさん達、冬の同人誌を見なかったんですか!? 穴戸司令官と外
国人の方がお互いのカラダの構造を知り合い、探究心溢れる研究をす
る愛し合う二人がそれぞれのグランドライン（スジ）を探し求めて快
楽のシャンバラへと身を投じてた、あのお姿を見ていないと!?!」

「ハハハ、生憎だけどデキてないよみんな。俺じゃなくて、俺の尻合
い♫に少し彼の処理を任せようって思っただけ。あと名取、その口ぶり
だと俺が表紙に描かれてある薄い本、買っちゃったんだよね? 今
ね、俺が持つてる権限のすべてを行使して耽美的な題材をテーマにし
たアートを排除しようと尽力してるところだからさ」

「い、いくら提督でもそれは駄目ですっ!! 創作への冒瀆です! 人
権侵害です! 意味もなく文化を排除するなんて一人の権限でどう
かできるような問題ではないと思いますっ!!」

いつもオドオドしてるタイプの名取が今日は一段と語る。

別に俺は特定のジャンルにホロコーストをしたいわけじゃない。
どんな作品でも愛が込められていれば、素晴らしくなると思うし、そ
れは尊重したい。

ただ実在する個人の人権が脅かされているとなっては話は別だ。
名取とか、あと綾波ちゃんとか……ついでに自分達の提督である荒木
大佐と、その直属の上司である荒木大将による親子丼とか重い拷問み
たいな内容の耽美創作を描いたザラさんは少し考え直したほうが良
いと思う。

「それはいいとして……ちよつと見てもいい?」

「ハ!」

近くに居た記録係から演習成果の詳報に目を通す。

彼らと数回ほど相槌を交わして、五十鈴たちの艦隊とオイゲンさん
……今はアイオワさんの艦隊がどのように連帯を取っているか、並び

にそれぞれの性格、どうしても生じる問題点や摩擦などを考察して、頭の中で処理する。

「五十鈴たちの艦隊は与えられた命令をこなす精密さがある一方で、予想外の事をされた時に陣形が乱れたり、再編成がちよつと遅いな……まああの外国艦たちが突然進路や陣形変えたりすれば流石にそうなるのはわかる。臨機応変性に乏しいとは言わないけど、弱点になつてたりする？」 柱島泊地とは真逆なタイプみたいなの……」

「そうね……確かに突飛な事が起こると少し指揮が乱れてしまうのは何度かあつたわね。心がけてはいるんだけど、これだけ大きな作戦となると、ちゃんと任務を遂行できるかどうか……致命的な欠点よね」これは緊張の意味を大きく含んでいる発言だろうと思つた。彼女たちの記録や演習を見ても、特段と臨機応変性に欠けてるとは思えない。

「だけど万が一、危機的状況に陥つた場合の対策を上手く取れない、なんて事になつたら遅いから、何とか払拭……いや、克服してほしいな。」

「そりゃ欠点じゃないよ。この条件下で行われる海戦が君たちの実力を最大限に発揮してくれるんだ。そして柱島はアレでいい。世界の海軍を見てもあの柔軟すぎる動きは真似できるものじゃないから、君たちにはない物は彼女らが支えることになるし、その逆もある。臨機応変性はなくても、マニュアルを忠実にして任務を遂行する能力も、決して凡庸つてわけじゃないんだからな？ 自信を持って任務に当たるだけでいい」

「穴戸司令官……うん、ありがとう。ちよつと自信が付いた気がするわ。でも、もし良ければあの外国艦たちとどうやって連携を取るのか、少しアドバイスがあると助かるわ」

「そうそう！ どうしてもうまくいかない時はとりあえずくみたいなのもでもいいですから！」

「んん……普遍的な法則はないけど、それ以上に必要なのは、アレを喋る暴風みたいに捉えるのがいいんじゃないかな。君たちは形式上だとしても随伴艦として扱うには惜しい艦娘たちだけど、あつちは艦

種がほとんど揃ってるから必然的に柱島艦隊が目立つ。服装の目立つけど」

「アハハ、確かにキラキラしてるわよねっ」

と言いつつ、自分たちの服を見下ろし始める五十鈴たち。そんなデツカイおっぱいしてるんだから見えるのはスマホ乗せられるぐらいデツカイおっぱいだけでしょっ！ そのエッチなおっぱいで、俺の執務室の下でパイオリしなさいっ！

いや、俺は彼女たちの司令官じゃない。俺は真の女性を真に労る事のできるイケメン系提督である。雑談を交えたコミュニケーションで場を和ませながら、親身に彼女たちにアドバイスをする俺……自分で言ってる恥ずかしくなってきた。

「それ言うと君たちが地味みたいに感じちやうかも知れないけど、その反面、敵の的になりにくいってのが案外一番の強みになったりもする」

対人戦っていう演習での話だけだ。

「作戦中は支援艦隊と言われるかも知れないけど、事実上は君たちが主体だ。敵艦隊をランダムに撃沈してくれる暴風流を纏う艦隊……仲間として戦う暴風と一緒に行動するのは心強いけど、無理に連携を取ろうとなんてしないでしょ？」

「確かにそうね……」

「勝手に敵艦隊が目の前から消えたらそれ以上に良いことはない。最低限のコミュニケーションはとってほしいけど、彼女たちは君たちが思っている以上に役立つってくれるはずだ。君たちのその意気で、この基礎訓練と一緒にやってほしいんだ」

「分かったわっ、任せてちょうだいっ！」

阿久根要港部総旗艦の五十鈴。

おっぱいがデカく、態度もデカイ。

初対面だった時にいきなりタメ口きかれたのは驚いたけど、予想通りの自信と向上心を持っているようで、何よりおっぱいがデカイ。長良が向けてきた笑顔をニツコリと返して、おっぱいを凝視する。

長良のおっぱい、そして五十鈴と名取におっぱいを交互に見るが

……こりや、格差的だな。

次女のおっぱいがデカイ艦娘が多い気がする。そうでなくてもエロい気がする。

これはまさか……何らかの法則!? 如月、照月、春風、那智お姉ちゃん、龍田さん、神通ちゃん……セクシー……エロい!

「おい穴戸ちよつとこつち来い! 見せたいものがあるんだよオ!」

五十鈴たちとようやく雑談をする機会を得たと思ったら、今度は彼女らの司令官様が俺を呼んでいる。演習場に通じるドアから半分体を乗り出しながら手を振っている。

「あなた今までどこに行ってたのよ!? 柱島の司令官が帰ってきてないんだからフラフラどっか行ってるんじゃないわよ!? バカなの!」

「ひ、ひい! メンゴメンゴお! ただもうちよつとだけ電話サセテサセテ! あとその穴戸ちよつと借りたいんだけどイイ!? いいよね!? ちよつと孕ませ〇クスの素晴らしさ啓蒙とかア〜どおうつスかア〜!」

「アイツ懲らしめてくるからちよつと待ってて」

「分かったわ」

「ちよ、スパナ持つのはノーノー。コームダウン。ドードー。大丈夫だって! オレっち、言った事はちゃんと果たすからさ……男として、ね?」

「は?」

五十鈴の怒りが頂点に達したのか、ドアからはみ出している結城に近寄ろうとしている。俺も害虫を駆除する事に躊躇いはなかったが、ヤツの後ろから出てきた時雨が俺を論じた。お馴染みのハンドサインは五十鈴には理解できなかったようだが、異様な行動をする時雨と立ち止まった俺を見て何かを悟る。

ちよつと待ってて、と言ったら素直に待っててくれる五十鈴は一先ず結城から距離を離れた。時雨がちよいちよい、と手招きして俺を呼んでいる。

ハンドサインは、明確に何かのメッセージを伝えているわけじゃない。

少し真面目にならないといけない時に使い、実際に使う事は殆ど無い俺と時雨の間だけでなく、白露姉妹と結城や他の同期連中も使っていた軽い警告メッセージ。

海軍兵学校時代に、夜抜け出したり、職員室に忍び込む時など、幾度となく使用し、同期の間だと最早それだけで会話が成り立つようになっていたのは懐かしい思い出だ。

時雨と結城がいたドアの向こうは工房への近道でありよく使われる道だ。もしも込み入った話だったら執務室で聞こうと思ったんだが、どうやら緊急な用事らしく、珍しく二人共マジメだ。

「すま〇こ穴戸、ちよつと緊張感を持たせないといけない話でな、執務室まで歩きながらでもいいか？」

「ああ、ふざけたお前のその謝り方でどんな緊張感が持てるってんだ？ あッ？！」

「今回は結構マジらしいよ。結城くん、単刀直入に言ったほうが良いんじゃない？」

「そうだね時雨ちゃん。オレっちの国からの情報らしいんだけど……海外の連合軍艦隊、沖縄奪還に失敗したらしいぜ？」

「……は？」

結城の情報の出処は不明だし、俺が取り扱えるレベルの情報じゃないから聞いているだけだったけど、俺は連合軍の艦隊が失敗する可能性がある事を結城から知らされていた。それはショッキングな出来事ではなく、一部の海軍士官にとっては願ったり叶ったりな状況な訳だが、だからと言って反攻作戦を実行するのが正しいとは限らない。

順応して俺たちが今度は沖縄を奪還する羽目になるんだろうけど、総司令官となった蘇我提督にこの事実を知らすべきなのは承知の上だろう。いち早く俺に知らすのは悪くないし、いよいよ俺たちが前線に出る羽目になるのかと思うと気ダルさが倍増するだけなんだけど、それでもこの焦り様はなんだろう。今までこんな顔したこと無いぞコイツ。

時雨もだ、凄く焦ってる感じ。無理もないだろう、こんなスケールのデカイ作戦に参加するなんて今まで無かったし、俺としても手に汗

を握らないと言えば嘘になる。

「安心しろって時雨、俺たちはあの八丈島を攻略した前線艦隊なんだ。俺たちにできなくて、誰にできるんだよ?」

「う、うん……そうだね……」

俺たちだけじゃないが、思いつめる場面に直面しているのは確かだ。

見つめ合う美男美女。

「おい！ オレっちというイケメンさんの前で、プラトニックラブコメですかあ……? クソオ！ 時雨ちゃん！ オレっちと一緒に、ハードラブかまさない!?!」

「地獄に落ちて」

「F〇CKツスねえ！ まあいいや、急ぐぞ！ 俺達には時間がないくのおく！ 沖縄に根城張ってた深海棲艦がコツチに進行しに来てるって言うんだからなあ!?!」

歩くスピードを急かそうとする結城と時雨が、サラリと、とんでもない発言をしたのはその時で、その重大性を理解するのに数秒かかった。

そして司令官のいる執務室に着いた頃には、蘇我総司令に対して、各司令官へ緊急招集をかけるように進言していた。

ギアアップ3

何十時間前の海域。

そのまた何十、という数では効かない兵士を乗せ波を仰ぐ艦船と、それに随行ように走行する艦娘たちの群衆がいた。俗に言う連合軍艦隊は、現在南を向いている。

その大まかな規模と目的は、既に世界中に知れ渡っているが、国際的に結ばれた艦隊である事と、日本の“元”プリフェクチャーへの武力をする任務以外の事の詳細を伏せているプロジェクトは、オペレーションCSと名付けられていた。CSー沖繩の中国語読みから取ったものである。

「我々がオキナワを攻略したところで、ジャパンは黙っていないでしょう？　なぜこのような遠征をしてまで……」

「艦娘を起用するための資材が溜まってるのを確認できたからだろ？」

その他にも、アルミや鉄、石油まで出来てるって言うじゃねえか、こりや発見した衛生技術班は表彰物だな」

「資源もそうだが、あの国は度々領土問題を黙認している。領土をあのようにな奪われて取り返さないのは黙認と同意義だ」

「しかしオキナワは流石に大きすぎます。避難民も本州にいるらしいですし、現政権は強健であると認識しています。いくら中立地域であるグレーゾーンに認定されているからと言って、指を啜えて島の統治権譲るとは……」

「あちらが何を言ってるかというと、国際社会では放棄地帯として認識されている。深海棲艦が支配する海面放棄地帯の確保は、制圧能力のある軍隊と、その後の保護が可能な国家に判断を委ねられる……それを悪用した過激な例を出せば、サウジアラビアがUAEやオースマンに援軍を出し、恒久的な安定を条件に、そのまま保護国にしてしまった事例もあるぐらい、現代の状況は変わってしまったんだ。深海棲艦がいなかった、あるいは出現当時に一致団結していた時代が懐かしい」

「領土権を揉めてる間に資材がっばらって行けばイイって寸法ですな

？ アメリカサイコー！ チャイナへの圧力としても使えますし、少しでも我々の基地を取り返せれば、なおのことサイコー！」
「人民軍だけじゃない、ジャパンも海外へと手を伸ばそうとしている今、オキナワを国際拠点とし、牽制を効かせる必要がある」

参加するために臨時結成され、訓練を施された連合軍艦隊——アメリカ側の俗称であり、Combined Fleet of Provisional International Commitmentの略称として使われているCFは、人民海軍と合流できたものの

「……こちらはUSPF、DDデヴィジョン5。モセウルポ湾から出港して一時間、チャイニーズフリート及びラッシャンフリートとの合流を果たしました……しかし、奴らは煽るように我々の先頭を陣取りました。これは我々をバカにしている行為とみなしましたので、攻撃許可を頂いてもよろしいでしょうか？ H A H A H A」

「H A H A H A!!!」

艦上の司令室では笑い声が轟く。

世界情勢や緊張が特に際どく迫っているわけではないが、近年、水面下で行われるロシアと中国大陸からアメリカ合衆国防衛省への攻撃が激化していたこともあり、それを悪びれるどころか当然の権利のように振る舞う各軍の緊張は高まっていた。それは訓練中での不祥事や、ほんの小さな出来事も含めて、本番での連携を損なっている事に上層部は気づいていた。

連合軍上層部もある程度、互いへの嫌気が伝染し続けており、パトリオティズムとナショナリズムが高ぶる現在の海軍において、少なからずお互いへの悪感情が高揚していた。

当然、この演習には強国同士の団結力を確かめ合い、固める目的もあった。しかし、様々な試行錯誤を繰り返しても、国内で起こっている人種が引き起こしている問題などにより、阻害されている。

言葉と文化の違いやイントネーションの誤差が起こすコミュニケーションの障害も、大きな要因だと言える。

軍隊、政府機関、大企業以外の国民が軽々と海外旅行にいけなくな

り、深海棲艦到来以前よりも海外へのインターネットアクセスに少なからず制限が掛かった状態は、文化の多様化に歯止めをかけた。

『何を言っている、これは演習ではなく実戦である。ジョークはほどほどにしておけ』

「了解……なっ!?」じ、人民海軍が速度を上げている模様！ 速度維持を要請していますが、止めません!!! 我々USPF、そしてUSIPCを愚弄する行為です！ ラッシュヤンの艦隊もそれに随伴していくようです！ 我々も速度を維持していれば離されます!!!」

『もう少し待て!! USIPCのドグソドルジ元帥の許可を取らなくてはいけない！ 辛抱が足らぬ奴らを追っていく必要はない!!』
「しかし……!」

大海原にて巨大な鉄塊の上に乗艦する艦長が唇を噛み締めていた。

艦に随行するように海上を滑る艦娘たちは、一部の外国艦隊から急接近されたり、速度を上げられたり、または正面を陣取られたりと煽り行動を受けている。

一部は慢心からくる行為であり、ロシア海軍の艦娘たちがアメリカ艦隊が定めたと決めた深海棲艦を横取りして撃沈し、更には「ロシア艦隊サイキョー!!!」や「人民軍に敵うものなし!!!」など、定期的に聞こえてくる無線から自分の国が一番だと遠回しに挑発する言動が、アメリカ艦隊も若干の苛立ちを覚えさせていた。

この一連の出来事を収めたカメラ、及び一部が記録していた動画が後に世界中でリークされ、その全貌が知られる事を予め知っておけば、彼らは冷静さを保っていられただろうと後に語る。

団結を欠くCFに必要な連携強化から目を背ける理由はただお互いの事が嫌い……などと、安直な理由からではない。

沖繩で戦う事となるのがより強大な敵深海棲艦であればまだしも、CFの戦力的な強さと、日本海軍が沖繩の深海棲艦に負けた真の理由を知る上層部にとって、戦術面での戦いには目を触れる必要すらなく“約束された完勝”であると信じていた。

また、日本海軍の負けた理由として各国のメディアが上げたのが“日本海軍の戦術的観点からみた脆弱性”を信じ切り、特にそれを矯正

されなかった下士官や艦娘たちにとって、ウサギ狩りに行くようなものだった。

ただ、作戦の意図を理解しないほとんどの下部士官や艦娘たちにとっては「作戦を失敗した日本軍の尻拭き」であり、なぜそんな作戦にわざわざ出なくてはならないんだという、士気低下も見られていた。

これらの悪感情は今に始まったことではなく、近年から各国の人種による国内問題や経済状況から来ており、それが軍隊にも波紋を及ぼしている。

それらを払拭するための軍事外交の一環、という面を有していたが、かえって関係を悪化させるまでに至ってしまった。

共産党政府はこれらの行為を黙認した背景には、少なからず米国からの関税政策や、大手中華系企業の幹部の逮捕などが挙げられる。

他にもロシアからは富裕層が米国に根城を作り、中国系移民同様、ロシアタウンを作ってしまった、英語という言葉が若干危ぶまれている事が、米軍艦長や司令官にとっては腹立たしいらしい。

更に取り上げれば、地元フットボールチームが、ロシア系オーナーとロシア人で構成されたチームに州大会で負けたのが許せなかったらしい。もしも俺が艦長だったら、目の前のファッキンラッシュャンフリートにバリステイックミサイル打ち込んでやりたかったと語っていた一部兵士も居た。

「クソオ!!! 我々が目的を駆逐すると言ったのにまた砲撃したぞアイツラア!? しかも我々の艦娘に当たりそうになった! 忠告だけで済む相手じゃない!! ここは多少威嚇してでも……」

『待て!! 今は指示を待つんだ!!』

「チツ、了解ッ……艦娘たちも引き続き随伴行動を取るように……クソオ!! 指揮系統どうなつてんだよコレエ!? ヴァージンでも口説くのこんな時間かからねえぞ?」

『こちらDD5のサードフラッグシップ! それは女性への冒瀆と受け取っていいんですね!? 裁判で訴えます!!』

「うるせえぞクソアマア!! だいたいお前がもつと早く攻撃しないか

らFU“KEN CH”NKやIWANに取られるんだろがア!!」
『それは聞き捨てならないです! 艦娘だけじゃない、女性全員への冒瀆とみなして、裁判にかけます!!』

「うわ面倒くせえ、艦娘フェミニスト多すぎだろ……」

小さな事が、すべてを狂わせる。

CFの統制でも、その原則は変わりはない。

「USPF本部より通信! 上海艦隊が撃破され撤退中とのことです!!」

「ハッ! ざまあみろ。言われてるほど艦娘技術がないのか、軍の統制が整ってないのか、何れにせよ深海棲艦に負けるなんてなあ?」

「まったくですね、それで数は如何ほどですか? 人民海軍の艦娘を10倒すのに10を必要とするかも知れませんが、そこから敵数予測ができる我々も、一応正確な情報は聞いておきたいので」

「「H A H A H A!!!」」

遠回しに「アイツら弱い」と言っており、この無線はアメリカ艦の無線を傍受していた人民海軍とロシア海軍の耳にしっかりと聞こえていた。この反感によって、特に艦娘と下士官たちの反感が伝染して飛び交い、また彼らもそれを意図的に無線の傍受を阻止しようとは思わなかった。

「そ、それが……未だに情報交換に時間がかかっていると……」

「同盟軍なのに情報の交換ができねえってのか? やっぱ敵は敵か。分かりあえねえ奴らってどうしてもいるんだよなあ……俺の今の上官もゴミクスだしよオ? それに艦娘たちの中にはフェミニストがいると来た! 楽なミッションだが、反面楽しくない航海になっちまいそうだなあ……ん?」

「て、敵艦隊発見!!! これより警戒態勢に入ります!!!」

「チツ、クソガア!!! 目の前の艦隊が退かねえから部分的にしか敵情報把握できねえじゃねえか!!! 砲撃準備!!!」

「え、う、撃つつもりですか!? チャイニーズの艦隊が目の前にいるんですよ!?!」

「敵艦隊が近づいたら深海棲艦だけを狙って撃つ! あくまで自衛の

ために撃つ！ 煽るだけ煽ってきた艦隊は今俺たちの盾になつてる。だが、同時に敵艦隊倒すのに邪魔な存在になつてる。退けて言つても退かねえんだつたら、このまま戦うしかねえだろ！ 一応、当たるかも知れねえって再度忠告をするぞ！」

「は、はい！ ……あ、あれは……!?!」

「どうした!?!」

「あ、あの数は……!?!」

・
・
・

佐世保第一鎮守府、会議室。

佐世保方面軍にいる、各基地の意思決定ができる高級士官を全員招集した。

俺を含めた警備府の三大司令官はもちろん、秘書艦の村雨ちゃん、それに旗艦の飛鷹と隼鷹を連れてきたんだけど、流石に酒瓶を持つような場所でも雰囲気でもないの、若干緊張しながらも静かに話を聞いている。

「それでは結城司令官。今作戦情報参謀として、説明を頼む」

「ウィイイツス！ まあ要はアメリカ、中国、韓国、ロシアの外国海軍が即席結成した連合艦隊をぶっ潰した沖縄の深海棲艦の大群がコッチに向かっているって事ツス。確認できるだけで100隻で、その内半分以上はエリート艦以上と断定はしているんツスけど、これ以上来る可能性もフラッグシップがいる可能性も大ツス」

「二百、隻……?」

九州防衛作戦

ほぼ全ての士官が呆け顔を晒す。

俺も驚いている。村雨ちゃんを含めて数人の秘書艦がメモ帳を落とした。隼鷹が一瞬理解できなかつた様子を見せ、タイムラグで驚き、その後固まってる飛鷹を叩いて、逃げるか？ と提案している。

俺の予想は正しかつたのかもしれない。

あの島には何かある……いや、今進軍している深海棲艦の大群がその何か、なのか？

ってかさ、え、深海棲艦って日本大好きなの？ 俺たちがいる場所にいちいち困難なシチュ持って来やがって面白いと思ってるの？

ウザ、海軍抜けるわ。

なんて言ってるかーい！

精神状態がこれほど迷走するぐらい今の状況はホントクソ。今まで直面したことのない大事に、自分が立たされてるという不安。

理解に苦労は必要ないが、最も厄介な状況にそれぞれ思考を巡らせざるを得ないというところか。

会議に参加しているのはモブ顔の司令官達がほとんどだけど、第一軍として目立ちまくり、なおかつこの中で俺と深い知り合いなのが大鯨中佐、結城少佐、斎藤准将、荒木大佐、オイゲン中佐、並びにそれぞれの秘書艦や副官と、そして強制出席の赤城提督と蘇我総司令官だ。

歴戦、熟練、秀才たちが、権力を握る頭脳として集まり、なおかつ戦力的に申し分ないはずの現在の佐世保方面軍が勝てるかどうか分からないって顔してる。

当然だ、戦力的に申し分なかつたのは連合軍がやられた。この事実の重さに、自然と頭を下ろす佐世保海軍首脳部。

ここから推測できるのは、仮想敵国同士で構成されている軍に連携なんて取れなかつた……ということなのか、海外連合軍を撤退に追い込んだヤバイ深海棲艦がいたのか……または、両方なのか。

数的にはかなり多い艦船が用意されたのはしつている。艦船は確かに破壊力的には強力だけど、深海棲艦つて船の底に穴開けて戦闘不能にしたり、急接近されたり、横転して沈んだりしたら深海棲艦の盾みたいになるから絶対に攻撃受けちゃだめなんだよね。

憶測なんて意味ないけど、今はこの緊急会議から、最大限にここを守る為の作戦を立てることだけしかできない。

記者さんがいるけど、これは後に大淀総長の指示で招き入れ、記事を書いてもらい、連合軍が敗北した事をいち早く世間に知らしめさせるためだったと言っていた。根回しが早すぎる。

「ゴツチも緊急会議してますけど、アツチの連合軍も緊急会議っぽいッス。出席者はロシアの元艦娘のスケベなペトロパブロフスク中将さんと、これまたスケベエロスな元艦娘提督の利綏中将さんと……あとは韓海の李大将と、USIPC司令官のジャック・ドグソドルジ元帥ですかね。あ、後者はオツサンですね」

「オツサンかオツサンじゃないかは聞いていなのだが……」
「……………」

これだけ面倒事持ってきてくれたんだ、報復としてみんなで砲撃を半島方面に向けて、司令室にありつたけの大砲ぶちかまして、大惨事を起こそう。

もうこれ戦争だよ戦争。

「あと、同盟軍として救援信号を受けてる状態ですが、どうしますか？」

「そんなのは私の独断で判断できる問題ではない。勝手に作戦を遂行しておいて、しかも戦っていた艦隊がこちらに攻め寄せている……その上こちらに救援を求めるなど片腹痛い。繰り返されてきた異国の兵士たちには悪いが、我々も自分の身を優先させてもらおう」

「了解ッス、俺のプレゼンはこれで終わりッスかね」

「ありがとう結城少佐。では次に、深海棲艦の群衆をどう退けるかだ。君たちの動きが早かったおかげで、住民を即刻避難させている事に成功した。佐世保方面軍全体に非常呼集をかけ、全要港部は防衛態勢を敷いているはずだが、補給物資並びに準備が必要な基地はあるか？」

「今のところは問題ありません」

赤城提督の答えに頷く蘇我提督は、順を追ってマニュアル通りの第一防衛態勢についての軽いおさらいと、深海棲艦を迎え撃つ作戦案を説明していく。俺の隣で可愛らしくメモを取る村雨ちゃんも、緊張した面立ちで秘書艦たちと情報を交換し合ったりしている。

緊急招集をかけられた近場の司令官や提督たちは切り替えが早く、眉を寄せた真剣な形相を浮かべ、作戦内容を耳に入れている。

現段階では深海棲艦が佐世保に進行してきている事と、連合軍が敗北した事実は世間一般には知らされてもいないので、避難は深海棲艦による攻撃とだけしか伝えていない。が、国民保護措置として全域に避難命令を出すのは稀。混乱がないようになんとか留めている。

その一方で追撃され、残存の艦隊は中国の上海港湾、または釜山まで撤退したものと思われる。どれだけの被害が出たかなんて現段階で知る由もないが、被害の大きさは既に全世界がこの沖繩奪還戦争を知ることとなるだろう。

深海棲艦の数も、結城と諜報部と情報参謀たちが集めてきたモノで、実際海軍が管理する諸島周辺のレーダーで察知したのは20隻程度だ。衛星写真ではなんにも写らないし、写真でも若干臃気なんだよなああの深海棲艦たち。幽霊かよ。

「今防衛作戦は、ここ佐世保に来るという情報しかわからない以上、要請した陸海空の三軍が持つ防衛設備を惜しみなく使う方針で行く。三軍の通信情報は常時オープンにしておけ。こんな状況である以上、彼らも協力を拒むような事はしないはずだ」

「「ハ！」」

オープンにすることでリアルタイムに情報交換ができる一方で、重要な情報が流出する危険性はある。軍隊同士の通信だから特段と不利になるような事はない……陸海の、お互いの技術が流出することを除いて。

陸海空の三軍を使うとは言ったが、形式上は海軍の仕事であり指揮系統は蘇我総司令のもとに集まる。その理由からか、陸空はサポート扱いである。

「本格的に防衛作戦を立てるのは陸空の司令官が集まってからだ、現段階での作戦としては、すべての基地が臨戦態勢を維持のまま、各基地からの遠距離攻撃、及び空軍の波攻撃を逃れた深海棲艦を各基地から迎撃。指定海域の制海権を確保した艦隊は50%の戦力を所屬基地に残し交戦中の諸港、艦隊、及び敵残存艦隊の排除を行うよう、近場の基地同士で連携を取るようになってくれ。質問はあるか？」

「……………」

「無いようなら解散するぞ。必要以上に会議を長引かせるわけにはいかない」

応！ と男らしさ溢れる気概で、各々が自分の要港部へと戻ってく準備をするが、その大部分は自分の近場にいる基地のみんなと地方レベルでの詳細な戦術案を話し合っている。

頭を抱える蘇我提督を支える古鷹。こういう娘がいるのはパパにとって一番の救いとなるだろう。隣の窓の下では、佐世保のいち艦隊の旗艦として指揮をとっている加古がいる。強そう。

「ハア……しかし、とんだ時期に配属されてしまったな。配属、などという言葉を使える立場では無くなった今の私は、赤城提督にどう映るのだろうか？」

艦隊を指揮の準備をするために幕僚と話している赤城提督を目尻に、再度ため息をついた。彼を含めて、大多数は赤城提督が佐世保方面の総司令になると思っていた為、まさか自分が抜擢されるとは思っていなかっただろう。それだけ有能であり勇猛な提督として知られている蘇我提督が彼女を差し置いて総司令に置かれるのは、少なからず彼女から反感や嫉妬を買うものだと思念していたが、赤城提督はそんな事を気にするような艦娘じゃないのは誰もが知っている。

「いいのではないのでしょうか。第一鎮守府司令長官代行は、単なる埋め合わせの代理に過ぎません、何も赤城提督が正式に第一鎮守府を任せねばならない、というわけでもないのでしょうか？」

「宍戸……ああ、そうだな。ところで宍戸、古鷹をもらう気にはなったか？」

「「な、な……」」

「も、もう！ パパやめてったらあ！」

『な、なに!? 古鷹ちゃんをもらう……だと!? 俺たちのラブリーエンジェル古鷹ちゃんを!? 許せねえよおオイ……って、あのイケメンは穴戸サン!? あの超イケメンで将来有望で強くて仕事ができカッコ良くてイケメンでイケメンの、あの穴戸サン!?』

『あつ、わたしの艦娘型子宮がイケメン惚れして痙攣しそう……!』
『この作戦はこの人がいれば間違いない！ バンザイ!』

「おっと！ 俺の正体がバレちゃったぜ。隠し通そうとしたのに、耳の早え野郎共だぜ」

「むう……穴戸さんは村雨のです！」

むにゆつ。

「「ええええええ!!? ま、まさかあの超絶大天使村雨ちゃんをも虜にしてるのかア……!?!」」

「おつといけねえ！ それもバレちゃったか！ まったく罪な漢だぜ俺は」

「あ、ず、ずるい！ 私だつて穴戸さんのこと……あの、その……え、えいつ！」

むにゆつ、むにゆ。

「穴戸さんは渡しません！」

「わ、私だつて……!」

「まったく、とんだ不幸体質だぜ」

パリーン！ カチャ。

「動くなア！ この鎮守府は我々が占拠したツ!! 大人しくしねえと撃つぞオ！」

突然窓からテロリストが入ってきた。そして一斉に向けられたアサルトライフルAK47バイポッドとレーザー付きナンチャラカンチャラ以下省略。

ざつと十人か……フ。

「ほら男はここ、女は俺たちがたっぷり楽しませて……ぐああああ!!!」

「フツ、フツ、フツ——！」

「「ぐああああ!!! く、くそ！ 何者だコイツ!?」」

「現役で大佐と呼ばれている者だ、お前たちは俺には勝てないことがこのCCCで分かっただろ、大人しく降参しろ」

「「ま、参りました〜!!!」」

「すごい!! 穴戸さんがまさか陸戦も得意だったんなんて!!! 抱いて!!!」

「これは総司令官の座を譲らざるを得ないな！（謎理論）」

「凄いです穴戸さん！ ちゅっ」

「グツへへへエ！ おっと！ 俺が大佐だってバレちまったか！ くそお！ あ、でも俺は彼女を作るつもりは今の所ない」

「「KAKK OIIIIIIII!!!」」

長崎警備府。

「つてことがあつてさ……いや、まさかあんな緊急招集の場で俺の正体が明かされるとか不覚すぎて……」

「肉弾戦最強な大佐つてコマ○ドーじゃん……あ、ここにいる天龍や龍田たちは穴戸くんのことを多少知つてるとは思うけど、この人つて事実と妄想をぐっちゃにして話すから信用ならないよ」

「そうだったのか……カッコいいと思っただけだなあ……」

「「え?」」

「あ、い、今のなし!! 何でもねえつて！ つかコツチ見んなよ！」

天龍、俺の妄想をカッコいいと言ってくれるのか。

俺の執務室は何故か最低でも一人は関係ないヤツが居て、俺がいると普通は二人きりの執務室が、まるでお泊まり会のような雰囲気ですワイワイワイと……。

実際あのとき、蘇我提督が訂正を入れたのだが「俺のほうがイケメンなのに……」とか「俺のほうが可愛いのに……」とか「俺のほうが階級高いのに……」とか抜かして、最終的には古鷹は渡さないとか言い出す所存。

この非常事態に随分と悠長な……まあそれだけリラックスできて
るんだっただいいんだけど、基地から見える範囲にでも来られたらた
まったモンじゃないぞ。実際に来られた防衛戦を何度か経験してい
る俺が言うんだ。

基地の防衛と本土防衛圏は今更教科書を取り出すまでもないし、一
番肝心な国民の避難を済ませた後、やるべきことは全軍をもつての連
携を取ることにある。

長崎駐屯地連隊長、及びその上司だがコネクションの深い師団長に
は既に話しは付けてあり、空軍の協力も微力ながら受け取れると言わ
れた。

「穴戸さん、連隊長さんから支援弾道ミサイルなどを配備完了したと
の報告をもらいました！ 提督へは……」

「陸軍、空軍共に準備完了って伝えておいて。空軍って戦うだけで深
海棲艦の艦載機攻撃によるパイロットの死傷者が出る可能性が高い
んだけど、国土守るためだから仕方がないよね……まあ命と100億
相当の戦闘機は無駄には出来ないからガチでヤバイ状況だと思っ
たら出撃してもらおう」

そろそろ安価な無人機でも作ってほしいところだけど、技術に回す
資金が足りなすぎるし研究費が膨大すぎる。アメリカ辺りはやって
たような気がするけど、未だに戦闘効率は悪く、随時更新中なんだと
か。

「あん？ じゃあオレたちが前方で戦ってる間アイツらは高みの見物
かよっ！」

「戦闘効率を考えて航空支援は陸軍と一緒にやってもらうのが一番な
んだ。海戦時の作戦も用意してあるから、詳細は作戦資料の他軍連携
欄を読んでくれな。まあ大したこと書いてないから、普通に戦ってる
だけでいいんだけど。空軍にはそのためのデータを送信してあるか
ら問題はないはず」

「仕事が早いわねっ」

「そりゃ早くなきゃ駄目ツスよ龍田さん！ コツチには司令官クラス
が三人もいるんですから、指揮が滞っちゃ駄目なんです」

「つつても一人はあの柱島の提督だろ？ あとは正式な司令官と、お前と……てか、よく考えたらなんでお前が執務室で仕切ってたんだよ!？」

副司令官だろお前!？」

「ほら、適材適所って言うでしょ、俺は全体を仕切るのがうまいからここでふんぞり返ってるし、みんなもまだ俺のことを司令官って呼ぶ。一方で正式な司令官は斎藤司令官で、あの人はデスクワークと準備、そして細部に渡る人事調整みたいな後方支援に特化している。パワーバランスが崩れてても、それが一番良い形で立っていれば問題ない」

半分嘘だお。本当は自ら艤装の視察に行っている司令官の代わりにここに座ってるだけ。

「そういうものか……?」

首を傾げる天龍と龍田さんに、遠征をしてきた経験を活かすため、万が一に備えて長距離任務と奇襲作戦を担当してもらうための準備命令とその詳細について話した。各部門を担当する士官たちや艦娘たちに基地内無線で命令を出しながら、大まかな書類の修正、及び作成を行う。

大規模な防衛作戦が始まる……が、作戦そのものは簡単だ。

要は遠距離ミサイル攻撃を行って数を減らして、残った敵艦隊が基地に迫ってきたら艦娘たちが出撃して倒す。

迫ってきている数と質、そして突然進軍してきた……という点を除けば、大したことはないし、実際に勝てる戦いである。

だけどそれ以上に失敗が許されない戦いでもある。足並みが揃わなければ駄目になるし、反攻作戦のために募っていた艦娘やミサイル艦艇が無様に敗北する結果はどうしても避けたい。連合軍の敗北は単なる欲張りの失敗例だが、コッチは本土決戦なんだ。すなわち、敗北は国家そのものへの大打撃を意味する。

「分かったか時雨？ 俺たちは国土と国民とその意思を守る勇敢なる戦士であり、お好み焼きチップスみたいな邪道非道菓子を食べるアホじゃないんだよ。分かったらその脂肪の塊をさっさとこの執務室から除去して、みんなと一緒に深海棲艦と戦う準備をしてお」

「は？ 最高に美味しいし、宍戸くんの味噌は塩と砂糖の判別しなきゃいけないの？」

「提督さん、まさか関西風と関東風の違いが分からんとか……ないよね？」

「いや！ 谷風は味噌がない可能性に一票だね！ 提督は忙しすぎてたまたまに丹精込めて作られた艦娘からのお菓子を「ああはいはい、うまいうまい」と！ 乙女が一番傷つく無関心系の返事をしてしまった経験があると見て間違いない！」

「ほ、本当ですか提督？ 最低です。ご老人でも不味い美味しいの区別はつくと思います」

ほっほっほ、いつの間にか第十七駆逐隊が来て俺に罵声の嵐じやわい。司令室に入ってきた途端に司令官をイジる事を許す寛大な心を持つのは海軍広しといえど俺だけ！ 俺の沸点……高すぎ？

「なるほど、だからこの間、この磯風が焼いた秋刀魚を不味そうに食べていたのだな？」

「君は味見をしてから料理を出す努力をなさい間宮さんもいるんだから……おい、なんでお前ら俺の事をそんな最低男を見るような目で見るとんだ？ お前ら磯風が焼いた秋刀魚食ったことないのか？ 炭の味がしたんだぞ」

「うちらが食べた時は普通に美味しかったけど……」

「あ、それオレも食べたことあるな。うまかったぜっ！ 龍田も食わせたろうまいって言ってたしー」

「文明の進歩は素晴らしい。パッケージに書いてある通りに焼いたらとても美味しくできた……」

「はッ？ なんで俺の時だけ文明の進歩を使わず七輪焼きなの？ なんで俺のときだけ我流なの？ なんで俺のときだけ焦げてたの？ 怒らないから教えなさい」

「だって……司令には……私の手作り、食べてほしかったんだもん……」

……は？

え、なに恥ずかしそうにスカート掴んでるの？ なんで頬染めて俯

「いってるの？　なんでそんなに可愛い喋り方してるの？　イソカゼちゃん……？」

「「じー……」」

「穴戸くん？　分かってるよね？　ここで突き放したら、磯風は病んで一生男の人を嫌う男性差別主義女子になるか、いま阿修羅になつて穴戸くんを殺すかの二者一択なんだよ？」

「……ごめんな磯風、俺が悪かったよ。俺ってちよつとツンデレな所あってさ、女の子の手作りなんて食べ飽きてるぜー？　みたいに反応、歳甲斐もなくつい言っちゃうんだ。悪いと分かっているけど、カツコつきたいのが漢だし、かえってそれが裏目に出ちゃうのも、また漢なんだ……もし、こんな俺を許してくれるんだったら……もう一度、俺に磯風の手作り秋刀魚、食べさせてくれよな？　今度はちゃんと、俺の本心から、”美味しい”って言うからさ……」

「ああ……私こそすまない。私らしくない反応を示してしまつてつ。実は、丁度司令に秋刀魚を焼いてきたんだ……もちろんオーブンを使わず、七輪でっ」

「あ、うん、結構用意がいいんだね……うん、食べるよ」

防衛作戦は既に始まっていると言つても過言ではない状況。いつ作つたのかわからないが、最悪始末書を書かせる必要性を念頭に入れながら、丁寧アルミホイルで巻かれた秋刀魚を開け、割り箸で中身を解す。

食べれる部位を箸で掴んで口に運ぶが、

これ、どう見ても焦げてるよね。

「……………」

「ど、どうだ司令？　美味しいか？」

「中身のゴリゴリした感触と程よい炭の味が絶妙にマッチしてオイシイ」

「提督、それ素直に美味しくないと思います」

「だから言ったでしょうツツツ!!!?　なんでこんな焦げてるの!?　七輪で焼いたほうが美味いとか老害が不定期に発信する迷信だからツ!!!」

「今度は絶対にオーブンで焼きなさいツ!!!」

「ば、バカな!? オーソドックスな手法で焼くものは古来の味がして大抵はうまくなると聞いたの!!! 現代技術は簡単に作れるから科学の味がすると私は……………」

「古来か、未来か、それを選ぶのは磯風、お前自身だ。科学や技術というものは時代を重ね、不承ではなく必然的な進化によって塗り替えられていくものなんだ。オーブン時代に生まれた俺はオーブンで焼いた秋刀魚の方が受け付けやすい。ごめん」

「ば、バカな……………単に司令の味蕾には未来がないだけなのでは……………」
「うまいこと言ったつもりか秋刀魚食わずぞ。つか何しに来たんだ? こんな非常事態にわざわざ秋刀魚を俺に食わせて地獄を味合わせるために来たわけじゃないだろう?」

深海棲艦の大群が来るまで残りいく数時間!

こんな所で油を売りに来ている第17駆逐隊は遊撃部隊として設置した。これはね? 暇だから何処に居てもいいってわけじゃないし、一般的には一番難しい立ち回りを任されているようなものなんだからお前たちは準備運動や精神統一でもして、深海棲艦とたたか

おーねー?

と言っている間に警報が鳴る。

「っ!? テメエらこんなところで秋刀魚売ってる場合じゃねえぞオイ!? さっさとイけ!! 行かないと俺とキスして交尾させるぞオ!! あ、それはむしろご褒美になっちゃうか、あはは。あ、恥ずかしかつたらハグとか、手を繋ぐだけでもいい——」

「『第十七駆逐隊抜錨ッ!!』」

「……………」

……………。

「天龍に龍田さ」

「いくぜえ龍田あ! ここが腕の見せ所だ!」

「張り切っちゃってえ……………天龍ちゃん、かわいいわ〜っ」

……………。

「ねえ、時雨ちゃん」

「時雨、いくよ！」

「……………」

俺のセリフの三秒後には部屋を飛び出しているみんな。

一人取り残された俺。

鳴り響く警報。

そうか、そんなに嫌なのか。

ふーん。

深海棲艦を皆殺しにして憂さ晴らしだ。

九州防衛作戦2

出撃所前の指揮管制塔。

さーて、急すぎて名前が安直すぎるが壮大すぎる九州防衛となった戦いに強制的に繰り出された俺。

攻勢に出るはずだったが、まさかの防衛!?

こんな面倒くさい事を押し付けようとする連合軍とかいうクソザコも、面倒事を持ってくるクソカス深海棲艦も、皆まとめて葬るわよオオ!!!

少なくとも第四鎮守府並に増えた長崎警備府の大規模艦隊を満足に出撃させるスペースを確保出来なかったが、これは警備府増築以外に方法がないので仕方がない面もある。

しかも俺はちゃんとこれを考慮に入れて、普通は出撃困難な場所から出撃させるための臨時出撃所を浜辺に予め作ったりしたんだが、予想以上に同時出撃を執行する艦娘が多かった。しかもこの数に合う整備工作班がないので、彼らには普段以上のハードワークを強いる上、ローテーションを整えるのが困難だったが、各部署から経験のある者を整工班に回したりしていた。が、今度は俺の直轄の部下がいなくなった。

既に防衛作戦に参加する艦隊を出撃させている。

諸事情から、必要以上に予備戦力を温存している状態だが、これ以上出撃させるのは流石に整工班へのプレッシャーに関わるので、彼女たちの出撃はこちらでコントロールさせてもらう。

出撃中の艦隊が帰ってくる時に混雑する可能性もあるんだから、細心の注意を払っておく。

一番心配なのは敵戦力の数についてだ。

責任転嫁を図るわけじゃないけど、もし万が一この状況の説明を要求されたら、俺のせいじゃないと言い張るだろうし、どうにもできないことではあるが、言われれば、出撃する艦隊をもう少し増やしていたはずだ。言い換えれば、そのための備えはもう少し整えられたのに

……。

敵の数、ざっと数えても200隻以上。

予想の倍。

しかも“以上”と付いているので、正確な数字じゃない。希望的に見てもその数を下回ることはいない。

連合軍の艦隊を追っていたのか、五島周辺海域から迂回して来ているため、赤城提督麾下の精鋭艦隊率いる佐世保主力艦隊に、敵本隊が当たるとはなっていないらしい。

戦力が集中している所に来てくれるのは奇跡としか言いようがない。

佐世保鎮守府は陸軍、空軍のバリステックミサイル、対艦ミサイル、誘導ミサイルなどなど、ミリオタが見たらさぞお喜びになりそうなラインナップを配備している。

当然、大砲なども完備しているが、並べられたミサイルに比べたら焼け石に水である。

佐世保鎮守府に駐留するイージス艦もミサイルを打つ準備を万全にしている。民間に被害が及ばないように、一匹残らず蹴散らす必要がある緊張感の中、ようやく大型兵器を使用する機会が来たと喜びに叫ぶ陸海空の全軍。

ミサイルなどの類は深海棲艦に、建造費と維持費の割には命中率の面で効果が薄い。だが、これほど一辺に使用する事ができれば、かなり数を減らせると予測している。何より爽快感があるはずだ。

そして一番の理由は在庫処分。

ミサイルには消費期限があるため、それに合わせて深海棲艦に向けて発射するなど、効果的に使用されるケースは少ないが、こんな大作戦で本来の使用用途を最大限に活かすのだから、喜んで協力を申し出ているのも頷ける。何より、深海棲艦の大群が迫っている今、ミサイル活躍の場としては絶好。

見せてくれよ、お前らの実力を！

『あ、着弾した!! あ、ガア〜対艦は外したあ〜! あ、いけ! お、そこ、そこそこそこそこだ!! あ、クツソ〜また外れたよ。あ、アツ

チのヤツまた外れたわくクソ!」

「こちらは長崎艦隊副司令の穴戸大佐である。競馬グルイのオツサンがよくやる今世紀最低級に下手な実況やめろ」

『す、すいません。競馬は行ったこと無いんですが、本当にこんな感じなんですかね? よく言われるんですが』

「正しくそんな感じ、それより状況報告を求ム。さつきから求めているんだけど、早くしねえと絶海の孤島に左遷するよ?」

『は、ははいッ! 陸軍と空軍合わせて、かなりの数を撃っているのですが、撃沈できたのは23隻ですね。3隻ほど中破で、5が小破です。やっぱり遠距離から倒せるのってイイっすよね……もうミサイルが空っぽになりそうですけど』

「かなり撃つてると思ったのにその程度しか撃滅出来ぬのか貴様ラア!!!」

『ひ、ひいいいい!!! お、俺はただの連絡役で、陸軍と空軍関連の兵器運用には一切関わっていないので……』

「すまん、冗談だ。俺たちの近くだけで23隻だから、佐世保鎮守府周辺はもっと撃破されてるはずだし、こつちに向かっている分の深海棲艦は弱体化できたってことか……ありがとう、指示があるまで一時待機命令を願いたい。そう連隊長と大隊長には伝えておいて」

『ハ!』

隣にいる荒木大佐にさつきと状況報告を佐世保鎮守府に送れとケリを入れて、本隊として配置している前方の艦隊の旗艦、飛鷹に合図を出す。前進する艦隊は、機動力に自信がある天龍や初霜たちを奇襲艦隊として配置し、ヒットアンドアウェイでちよくちよく攻撃しながら島から離すように誘導して、佐世保本隊が敵艦隊の側面を攻撃するだけで、深海棲艦は撃滅できる。

現状、敵艦隊全体の動きとしては、ほとんどが佐世保に向かっていくと予想している。

外国艦のみんなには更に迂回させ、遊撃部隊と同じような立ち回りをさせながら、フラッグシップがいる深海棲艦本隊を攻撃するのを目的とさせている。

200隻以上の深海棲艦だが、その旗艦を探し出して倒せば殲滅までの工程をスムーズに行える。

外国艦には危ないが、臨機応変性を求められる任務に付かせた。彼女たちが曰く、それが最も戦いやすい任務であり、旗艦も元参謀長のオイゲンさんが戦闘にいる。オイゲンさん自ら申し出た前線指揮官の役だが、俺的には司令官として俺の側にいてほしいなっ。なんちゃって。

「穴戸さん！ 第八艦隊、第九艦隊の遊撃部隊は敵艦隊を撃滅したようですよ！」

村雨ちゃんは司令室から走ってきたのか、若干息を切らしながら報告する。

「ありがとう村雨ちゃん。そろそろこの管制塔じゃ無線が届かなくなる距離にいるだろうし、俺たちも執務室に戻りましょう。荒木大佐。斎藤司令官と一緒に司令室で朗報を待ちましょう。月魔と整備経験のある連中は引き続き整工班のサポートに付いてくれ。戻ってくる艦娘たちの帰還をなるべく円滑に行いたい。残った参謀部からきた補佐役は通信班と一緒に書類作成を急いでくれ。デカイ仕事な分、事後処理っていう面倒くさい後仕事はできるだけ楽にしたいからさ」

「「ハ！」」

「う、うん……」

数人の士官は各自、持ち場に飛んでいった。

村雨ちゃんが持ってきてくれた人事詳報、必要資材状況を読みながら執務室に戻っていく。

執務室。

「穴戸か、たった今深海棲艦の本隊と交戦しているとの報告を受け取ったぞ。うまく敵を囲んで居るようだな……」

司令官は忙しく通信を試みている親潮を傍らに戦略地図に顔を向けている。状況を把握し、先、そのまた先を読んで判断を下す……これこそ、未来の大艦隊を統べるに相応しい提督の姿である。

まあ彼自身は軍学校で優等を取るほどの秀才なので、佐世保周辺海域の各艦隊の状況なんて写真を見るようなもんだらう。

彼は今、所謂、“忙しい状況なのは分かっているけど、この合間はやることがなくてそわそわする”状態。

大本営から送られてきた補佐官は黙々と大本営との連絡をとつてみたいだが、特に無線が混雑しているとか、口を動かすのに忙しきを感じてる様子はない。

何もかも順調に思えるが、この状態の維持は大変である。強いて問題があるといえば、市民を避難させないといけないことだけど、早めに打たれた手によってかなり早い段階でシエルターに避難させることができた。

こんな簡単な敵になんで連合軍の艦隊が負けたんだろう……いや、これ以上の深海棲艦の艦隊がいた可能性もあれば、陸上支援や海軍の陸戦基地攻撃隊がいなければより戦況は悪化していたはずだ。

いま向かっている数以上の深海棲艦も予想できるため、警備府は俺の指示で整工班や基地に待機する艦娘に攻勢準備をするようにと命令している。現状を見るに、敵艦隊は効率的に倒されてるけど何れは防衛圏を突破される。

一生懸命、可愛らしいお口を動かして秘書艦としての通信役をこなす親潮が嬉しそうに報告してきた。

「司令！ 艦隊の八割が壊滅したそうです！ もちろん、敵艦隊の！」
「よしッ、外国艦はテンション上がってるはずだから一匹残らず撃沈してくれとみんなに伝えて」

「わかりました！」

「あー穴戸、手持ち無沙汰というわけではないが、流石に私だけ何もしないのは気が引けるので仕事を……」

それ俺に聞く？

「他の要港部からの援軍要請がないかを随時チェックしてください。要請がない場合でも手が空いている事を諸港に知らせておけば自然と連絡が入ってくるはずですし」

任務に無頓着な准将じゃないんからもう連絡は入れてあるだろうと俺は思ったけど、司令室から出て行ってもらっても困るし、余裕を持てるのはいい予兆だし。

さて、次は報告の時間だ。

膨大な数の深海棲艦を相手に、我が艦隊は圧倒的練度と集中訓練で磨き上げた驚異的な戦闘効率特化により敵艦隊を撃破。余る戦力は即時他港へと救援に向かわせる……フツ、これぐらい書けば、この警備府の重要性は更に知らしめられる事となる。

補佐官さんや秘書艦ちゃんたちが各方面に俺の言葉を書き記し、各基地に向けていった。

「というより、司令とその席代わったらどうですか？ ハッキリ言つて司令がそこに座つてるほうが士気が上がると思います。主に私の」
この親潮、司令官に対してなんて辛辣な事を……。

「し、しかし私はここ長崎警備府の司令官として、この席を離れるわけには……」

「邪魔です、司令の雑用でも手伝つてください」

「」

あ、司令官のメガネ曇つてる。この人泣きそう。

親潮ハッキリ言い過ぎイ！ 軍人としてのキャリアも、存在そのものを否定されてた斎藤准将。モフモフした髪の補佐官はジト目。多分この部屋にいる全員が思っていることだろう、闇落ちしませんように、と。

「仕事を奪つてしまい申し訳ありません。しかしここまで来てしまつた以上、誰が指揮してても関係はないです。なので、心苦しくはありませんが、司令官の成すべき事をされるのが吉かと。あ、じゃあできれば、俺があまり知らない第7から第10艦隊の指揮もお願いします。彼女たちが今回の主力なので」

「分かった、そうだな。ついでに後処理が楽になるように書類作成でもしているぞ……荒木提督、手伝つてくれるか？」

「え？ ぼ、僕はあまりそういうの得意じゃないと思うけど……が、頑張るよ」

じゃあ、お前何が得意なんだよ？

と心の中でツツコミを入れ、部屋の隅にある通信機器を二人で弄り始めた司令官二人。

まったく、誰がトップなのかは知っているくせに俺が未だに司令官だと思ってるヤツが多すぎる。だがそのクセ、持つ威厳の差は、下っ端ら捧げられる敬礼と態度の違いから、誰がより畏れを得ているか一目瞭然である。

このみんなは顔見知りだが、一人だけ俺が名前を知らない人がいる。

一段落して水を口に含む補佐官さんに近づいた。

「俺は副司令官の穴戸です。よろしくね補佐官さん」

「叢雲よ、噂はかねがね……よろしく」

なんかドライな人だな……しかしそのミニスカ黒ストは良し。

適当なパイプ椅子を引つ張ってきて、村雨ちゃんは俺の隣に立つ。

さて、副司令官は制度上存在するだけで今やほとんど見ないタイプの役職。ここにいたところで俺の指定席なんて存在しないから、外を回って斎藤准将への連絡がスムーズになるようにするぐらいが限界だが……村雨ちゃんも、准将たちと一緒に連絡を取っている。

クソ……村雨ちゃんが……他の男と喋ってるなんて……！ クソ

……あんな親密そうに……！ あのデカパイは俺だけのモノなのに……！

「穴戸さん、天草要港部と荒尾要港部が苦戦していると言っています
が、どうしますか？」

「は？ アッチは防衛作戦に参加してないでしょ!? それに大牟田警備府は何してるの!？」

「……今拾った情報なのだけど、防衛作戦で阿久根要港部が戦った敵の分艦隊が、そっちの方面に逃げていったらしいわ。6隻の機動艦隊だけど、エリート艦も編成されているから苦戦しているんじゃないかしら」

「流石は大本営から送られてきた叢雲さんだ。地域情報にあまり詳しくなくても、あちらには深海棲艦があまり来ないから練度と経験が低い事を瞬時に理解してしまうなんて」

「こちらに来る時、資料を読んだのよ。それに、艦娘の数そのものがないってのもあるのかも」

いやあ、デキる女って感じでエロいわ。
格好がエロい。

ホント目の付け所に困るぜ。

「そのとおり、戦ってない分練度が低い。そして艦娘が少ない。逆にこっちの警備府は多すぎる。ワケ分かんねえこの人事……神風たち向かわせてくれ村雨ちゃん。軽空母も含まれてるんだっけ？ 涼月なら防空は完璧だろうが、念のために天龍たちに編成されてる艦隊も連れてって。高射砲付けてる駆逐艦何隻かいるでしょ」

「はいっ！ あ、白露さんからです！ え、穴戸くん、まだ出撃しないの？ ですって」

「そろそろ行くのでおとなしく待っていてくださいね、って伝えて」「りようかーい！ あと、なんで赤ちゃん言葉なの？ とのことです」

「警備府内にいるのに電話使わないの？ って返しておいて」「じゅうでんきれてる、だそうです」

相変わらず緊張感のない白露さん。

「あ、今度は隼鷹さんからです。防衛圏なんちゃらからはみ出そうなんだけどいい？ です」

「防衛圏なんちゃらってなんですか？ 普通に第二防衛圏だからそれぐらい覚えて……あと、そこからは絶対にはみ出ないで、出たらイージスミサイルとか陸上支援ミサイルの標的になって最悪死ぬ。艦娘が戦うのは第二防衛圏内まで」

防衛圏の構築もまた、俺たちが有効に戦える要素の一つである。先人たちが地の利と戦闘情報と研究成果を最大限に活かして何年もかけた戦闘指南書は、連合軍の艦隊が来て人間同士の撃ち合いになったとしても負けない、負けるはずがない。

「ノック無しですが失礼します穴戸副司令官。我々整工班は攻勢準備を終えました。鎮守府から授かりました輸送船は、輸送船団へと変貌を遂げています。〃行け〃の一言で、我々は出港できます」

なんて仕事が早い人なんだダンディー班長……！

「ありがとうございます班長」

「攻勢の準備とは……まさか、貴様前線に行く気か!? 我々はこので戦っていけば大丈夫だろう!? なぜ前線なんか……」

「あくまで準備だけです。現状では有利ですが、物量で防衛圏が危ぶまれる可能性があるので、行動可能範囲の拡張とその補給線を確保するための準備を指導するためですが……当然、出撃中の艦娘も多いです。艦隊同士が近づきすぎて万が一、電波障害で指令が出せなくなつたなどの対処でもあります。もちろん彼らを前線に出さないのが一番良いのですが、動ける時に使える物を配置しておきます」

「そうだったのか……ん? そこにいるのは、ベリングハム少佐か?」

ドアの方を振り向くと、班長の隣でドア付近に手を置きながら呼吸を整えるベリングハム少佐の姿が。参謀部と連絡役を一挙に遣わされているので忙しいはずなんだが、何をしに来たのか尋ねる前に要件を叫んだ。その挙動に全員が彼を振り向いた。

「た、大変です!! ぼ、防衛ラインが破られました!! 現在鎮守府付近まで敵艦隊が迫っています!!」

「もう破られたのか……整工班と待機中の艦娘には悪いけど、早速出撃準備だあ……ほとんど置いていくから、来るのは指定した最小限の艦隊、かつ航海中は適当な要港部を拠点とする事になりそうだけだね。長崎警備府のプランBの発令は斎藤司令の判断でお任せします。その通りに艦隊を動かしますので、それじゃあ村雨ちゃん……いける?」

「はいっ! みんなが戦ってるんですから、私も戦いたいです!」

「よし! 斎藤司令官、例の反攻作戦の件は……」

「ん? ああ、反攻作戦を計画した艦隊の編成の事だな。ほぼ済ませているから心配はするな。だから、警備府の一部が休んでいるのはその為だと、皆にも触れ回ってる……」

「了解ッス! じゃあレッツゴー!」

—————

「あ、ちょッ!! ……行ってしまったわれましたか……って、足早!? 相変

わらず行動が早い人ですね。私の腰捌きに勝るとも劣らない」

「ははは……」

穴戸副司令官と秘書艦村雨の俊足を前にして驚くベリングハム少佐と、苦笑いを見せる洪班長。斎藤准将は引き続き警備府内の情報管理と意思決定……更には防衛作戦のせいで破棄されていたと思われる反攻作戦の計画準備も執り行っていた。

これは他の主要な要港部と鎮守府でも成されている事であり、防衛作戦を成功させた後、反攻作戦が行われる事を意味していた。

班長は、少佐の神妙な顔を見て違和感を感じているように思えた。彼らが交わした二度の相槌にあまり関心を持たなかったのか、誰もその会話を聞くこともなく、また彼ら自身もそれを重要視するような素振りを見せなかったが、ベリングハム少佐が感じていた“何か”は的中していた。

「どうかなされたのですか?」

「いいえ……今まで順調に進行を阻止していた我々の攻撃をこうも容易く貫かれるのに対し、少々疑問を抱いていただけです。敵艦情報の詳細が確認できなかった事も、少し違和感があります……接近している敵艦隊には、何かあると思うんです」

「確かにそうかも知れませんが……しかし、どのような敵がこようとも、今できることは迅速なる対応、それのみです。穴戸副司令も、最小限の損害を望んでおられます。そのためには、最短での殲滅を要します。我々も彼の指示に従い、全力を尽くしましょう」

「そうですね……では」

走っていく班長の後ろ姿を見送るベリングハム少佐。

「クツ……ああいうイケメンアジア人男性が好みなのですか? 私もそうですがね? クツ……CPT・SHISHIDOオオオ……」

「Birmingham落ち着いてください! 彼はもう出撃所に行きましたよ! それに今はそんな状況ではないでしょう?」

「ああ……って、何をしているんだいSara? ここは君の所属ではないのだし、緊急事態だからとはいえ、防衛作戦に参加する必要は

ないとCaptainにも言われたらどう？」

「ですがSaraだけなにもしていいなんて、我慢できません。私も、何でもいいのでお手伝いしたいです……」

「なんでも、か。それをCaptainに言っただけで喜んでくれるかな……私の権限でどうこうできるものではないが、もし良ければ通信部を手伝ってくれ」

「はい……」

執務室から出ていく二人の外国人を尻目に、齋藤准将はこう思った。

「すぐ隣にその権限を持つ私がいるのに、何故私に許可を取らなかつたんだ？ 私は司令官として相応しくない人間だと思っっているのか、或いは司令官として認識していないのか……」

「り、両方だと思う……」

「荒木大佐、貴様にだけは言われたくはない。晴れて貴官の上官となったこの日、貴様には言うことが山ほどある。丁度連絡と第10艦隊への指示も終わったところだ。貴様を一流の提督となれるようにみっちりとしごいてやる」

「ひ、ひええ……」

「ぎ、ザラです、失礼しますっ！ 参謀部から資材情報を持ってきました！ そして、提督が齋藤司令官にどうしごかれるのか見に来ちゃいましたあ！ ザラ、すつごく気になります！ わくわくどきどきっ」

「資材情報ありがとうございますザラさん！ でも司令と荒木大佐の絡みは見なくてもいいと思います。いい年した男の人が絡み合うなんて気持ちが悪いです。身内だと3倍ぐらい増してキモいです」

「親潮、この私を泣かせたいのか？」

「え、私が気にするとも思ってるんですか？」

「――」

仕事をしている最中に冗談の言い合いや、絡み合いが発生した執務室の中、一人モフモフと大本営や通信部との連絡と書類作りをこなす叢雲が呟いた。

「……今って、防衛作戦中なのよね……噂通り、イカれた警備府だわ

⋮

九州防衛作戦3

京泊要港部。

九州に点在するすべての要港部、また警備府は、佐世保鎮守府の管轄下に置かれている。表向きの格は要港部と警備府で決められているが、地理学的な要素を含めることで、その重要性は増減する。

要は警備府だからこつちより大きくて偉い！ とは限らない。

こここの要港部だつてそうだ。

長崎警備府と同様、長崎という重要な拠点を死守する重大な役目を任されている。

長崎警備府と位置が近いので、長崎警備府の臨時拠点のような役割も持っている。

そんな京泊要港部だが、建築費を削られ、海軍が建設した出撃所や工房以外は、民間施設を利用してようやく要港部としての機能を保っている状態である。

だが、警備府の艦娘や士官を入れ替えしたりしているので、機能としては立派な海軍基地と言える。職員の半数以上が警備府にいるのを除いて。

俺が乗る艦船を囲うように航海する艦娘たち。現在の状況で使えるところしたら、艦娘たちの羽休め、簡易な補給所。通常出撃などにも使われている中間地点。

深海棲艦共に関防衛圏が破られたのを見て、「念の為」と前に付けながら、別働隊の配置を改めて命令した蘇我総司令に従い、俺は現在ここにいます。

状況なだけに、呑気にはしてられないが、準備は十全を心がけている俺にとって、待機する場所の確保と細かい準備作業の完遂は何よりも大事だった。

司令艦船に乗っている俺が、彼らの周波数に合わせて寄港要請を出す。

「こちらは長崎警備府駐在艦隊司令官の穴戸大佐である。一時補給の

拠営地点として我が艦隊を入港させたい」

『こちら京泊臨時拠点基地。貴官の艦隊の入港を拒否ス。針路の転針を要求する』

「こちら長崎警備府改第二連合艦隊、及び海陸上揚陸部隊を束ねた佐世保別働艦隊総指揮官の穴戸大佐である。京泊要港部を開港されたシ」

『こちら京泊臨時拠点、だからそれはできない』

「こちら佐世保の右腕にして前線の龍、長崎警備府艦隊総司令の穴戸大佐である。この艦隊には前線艦隊として名を馳せた6隻を全員編成しており、最新鋭試験装備の高射砲、15・5センチ砲、12・7センチA型改二、そして烈風など、現時点で最高性能を誇る搭載を施してある。これは、航空攻撃を行ってきたとしても我々はほぼ無傷で貴様らの基地航空を血祭りに上げ、更に無防備になった裸体を舐め回すも犯すも自由であるの言わずとも分かるな？　すぐに明け渡せッ、さもないと……」

『だから狭すぎるからできねえつつつてんだろオラア!!　え、ちょ、冷静に考えてみ？　ここの規模見ろ？　乗ってる船が入れるスペースあると思う？　え、むしろ、この基地がそっちの船に入っちゃうみたいな？　あと、京泊要港部じゃなくて臨時拠点つてんだろオラア!!』

○○すゾツ!!』

「す、すいません……」

常設すると決まったから一応は要港部扱いなんだけどなあ……まあいいや。基地の大きさ自体は俺たちの船とどっこいどっこいだが、船を形だけ入港させる程度なら問題ない。船と言ってもただの小さな輸送艦だしだが、そもそも京泊の基地自体が小さすぎるのがいけないんだよなあ……常設するならこんな派出所みたいなサイズじゃないほうがいいと思う。

ほら、今みたいに巨大艦隊が攻めてくる時とかこの人たちが死ぬじゃん？　まあそのために俺たちがいるんだけどさ。

艦船から降りず、俺は現在状況を近くの艦娘や京泊要港部と確認し合う。全体の状況把握に務めているが、そろそろ深海棲艦の本隊へと

総攻撃を仕掛ける準備をしている事以外は対して重要じゃない。

「それにしても、通信が混雑してるなんて普通ある？　白露はあまり無線とか聞かないタイプだから、普段からこんなに聞こえないものなのか分からないけど」

「ちよつと耳がビリビリするのは分かるけど、村雨的にはちゃんと聞いたほうが良いと思うわよ？　特に今は旗艦の立場でしょ？」

「えー、白露、面倒くさいのいやいやっつー！」

「鈴谷も気持ちわかるー！　まあ、流石に聞かないなんてことはないけど……」

「どうやって今まで戦ってたんですか白露姉さん……」

「ははは、白露さんならゴリ押しでもなんとかなるんだと思うよ春雨ちゃん……よし、指揮能力の欠如を理由に、今から旗艦白露の第二艦隊指揮権を駆逐艦春雨に継承ッ！　駆逐艦白露は直ちにこの要港部での全裸謹慎待機を命じるッ!!」

「じよ、冗談だから!!　落ち着いて穴戸くん！　ていうか、全裸待機なんてえつち！　白露のことそんな目で見るなんて、サイテー！　そんなエツちな穴戸くんなんか、男好きな男の人に男にされちゃえー！」

「やめろオツ!!　ただでさえ毎日危険な状態なのに、そんなこと言われたら絶対ホられるッ!!」

「別にいいじゃん一回や二回ぐらい」

「時雨、お前それ自分の身体にも言えるのか？　迫られれば一回や二回ぐらい肉体的御奉仕を辞さないと？」

「え、駄目に決まってるじゃん。え、つていうか、今作戦中なんだよ？　穴戸くん、そんなセクハラする暇があつたら僕たちが頑張つたあとのお礼でも考えたらどうなの？」

ふふふ、と悪戯つ子っぽさを含む笑顔を見せる時雨。そして隣で時雨の言葉を真に受けて、ガチで考え込むベアーフィールド（熊野）。

「お礼……お願いでできるのであれば、お寿司かモスがいいですわ……いいえ熊野、淑女たるもの、常に謙虚を心がけて、二度は断るモノ……いいえ、仮に一度目を断つたとしても『オイオイ遠慮スルナヨクマノオンオレトオマエノナカジャナイカー』と言われでもしたら、再

度断るのは無礼というもの……それに、“遠慮はするな”と言うからには、遠慮してはかなり失礼に当たる可能性が……」

「おいベアフィールド、そのクツソ可愛い声との間に聞こえたクツソブサイクな声って俺の真似？」

「か、可愛い声だなんて……も、もう穴戸さんだったら……」

「「ジー……」」

艦娘だけじゃなく、船の中にいる数人程度のムサ苦しい整工班も俺を凝視していた。

ははは、モテるな俺、すつごく幸せだよつ。

「は？ 夕立ちちゃん？ 五月雨ちゃん？ え、初霜まで？ 貴様ら恋愛に興味なかったんじゃないのかい？ っていうか、こんなことしてる場合じゃないんだお？ 第二防衛圏内に入ってる深海棲艦と戦うつてことは陸空支援を受けれない上、艦娘だけで戦うから戦力全力全軍全開な数動員して、そのせいですつごく混雑していて、だから鎮守府との無線が繋がらないと思うのはさつきも話したよね？」

「ここで待機命令出されて、そこから通信が途絶えたから、ここでジツとしていられないっばい？」

「もどかしいけど、そういうことなんだよね」

「つまんなーい」

白露さんの言葉に全員が同意しているわけじゃないとは思うけど、全員が落胆した表情で、寄りかかってうなだれる。

鎮守府は待機命令以降、命令を出してこない。

なんでだろう？ と考えれば二つの可能性が出てくる。ヤバイことになって通信途絶か、好転してるから命令出すの忘れてた、テヘペロっ、である。

「おいおい、お前らそんなことで良いのかよ！ 高確率で近い将来、反攻作戦で沖縄旅行が実施されるんだぜ？」

『し、穴戸くんかい!!？ ち、鎮守府が、た、たまった大変なんだ!』
急に割り込むな。

「どうしたんですか荒木大佐……？」

「ち、鎮守府が……鎮守府の艦隊が大変なんだッ！」

荒木大佐が大変しか言えない大変ロボットになって、大変大変を連語しまくってくるなんて予想外にもほどがある。

「だから大変大変ってなんすかアツ!? 内容は手短に、そして概ねの状況を分かるように説明してくださいって何回も言ってるでしょおやおおおおおおうおうおうおう!!!」

「宍戸さんまたわたくしの真似ですよ!? いい加減やめてくださる! その声真似のせいで巷で熊野のイメージが変な声を出す淑女になつてますのよ!? どう責任取るおつもりかしらア!?」

「合ってるから問題ないんじゃない?」

「キエエエエエエツ!!!」

「お、新しい雄叫び。まあそれはともかく荒木大佐、まずは指示をお願いします」

『う、うん! 今は、佐世保に向かってほしいって、斎藤准将が言うてるよ!』

この人指示もできないとかどうやって提督してるの?

「了解です……みんな、佐世保鎮守府やバイからアツチに向かえと命令を受けた。これより最大船速であちらに行くぞ!!」

「了解!」

—————

警備府。

「た、たたたた大変大変……!」

「落ち着け荒木大佐、お前が正気を失ってどうするんだ? ほら、貴様の秘書艦であるザラを見る。一心乱れぬ佇まい、明鏡止水の心を弁えている」

「ポカーン……」

「ザラさんは気絶してるんだと思います。妄想が捗りすぎたとか何とか……というか、なんで司令はメガネを逆さまにしているんですか?」

「は? ファッションに決まってるだろう!? 私は流行に疎い方が、

今の流行は逆さメガネだ!! これで佐世保鎮守府も救われる!!」

歯ぎしり、足踏み、フルスイングゴルフ素振り、ラリアット、宙返り、反復横飛び、ジャンピングジャック……落ち着きのない二人の司令官の奇行は親潮の目にも余った。しかし、無能な司令官と罵られるような行動をする前に、やる事はちゃんとやっている。

斎藤准将はすぐさま警備府の残存艦隊を宍戸艦隊、並びに柱島艦隊、そしてその他の長崎警備府艦隊へと合流させると共に、佐世保鎮守府への集結を命じた。この命令は警備府に留まらず、鎮守府との連絡が途絶えたと訴えていた遠方の要港部にも発せられた。

親潮や、補佐官として臨時着任した叢雲、並びにサラトガやベリングハム少佐も、この迅速かつ的確な行動には流石だと感銘を受けていた。

だが当の本人は、数人の力を合わせてもその程度しかできない事に不満を抱いており、同時に不安も抱く斎藤准将の現在の姿がこれである。宍戸大佐に任せることしかできない不甲斐なさにも、不満を持つ要因でもある。

「佐世保鎮守府からの要請は捌きましたし、これ以上できることはないのは事実です。ここで待っているのが定跡でしょう。全てはCaptain Shishidoがなんとかしてくれるはずです。ね、Sara?」

「そうですね、のんびり待ちましょう……しかし、なぜGottlandとTaskentがいるのですか?」

「のんびりすると聞いて。あと今の状況だと役職を決めてもらえなさそうなので、暇を持て余してるの」

「そうそう、役職外されてから同志たちとお茶ばかりしてたら水腹になりかけたんだ」

「ハハハ、なるほどね。じゃあみんなでゆっくり彼らの帰りを待ちましょう」

「宍戸に毒されすぎているぞ貴様らア……こんな状況で慌てないなど、人間の常識を超えているとしか言えん。あれとて時には危機的状況に陥る事だってあることは、貴様らも十分承知であろう?」

「そうですね……Captainはイケメンなので、常にお尻を狙われるお立場にあるのは重々承知です」

「ソツチの意味ではない」

「大丈夫ですよ。司令なり、きつと……」

どこか胸騒ぎを起こしていた親潮だが、そう信じたいがために、祈るように言葉を絞り出していた。

—————

鎮守府付近海域。

「……………」

「……………なにあれ？」

温度の高い海を切り裂き、佐世保鎮守府正面海域に近い場所までやってきた俺たちが見たのは、深海棲艦の残骸に加え、ところどころに散りばめられた鉄の人工物。

多分、大破して壊された艦装の数々だろうが、それ以上に佐世保鎮守府正面海域に侵入しようとしていた艦隊を見て、漏らした言葉だった。

『……………！』

幼い子供のような人形の深海棲艦が、不気味な瞳をこちらに照らしながら、笑みを浮かべて敬礼している。

九州防衛作戦4

佐世保鎮守府正面海域――佐世保湾中央。

俺は連れていた整工班とともに庵崎に艇駐。通信設備の準備も終える。

補給進路を確保し、敵本隊は迫っていると時雨が通信を傍受したのでそつちに向かい、途中で合流した柱島艦隊と遠征艦隊を再配置でそれぞれ24隻になるように再編成する。別働隊を率いるのは合流したオイゲンさんで、それぞれが敵本隊がいると言われている場所に向かったんだが。

『……！』

人形の深海棲艦が、10隻あまりの深海棲艦を引き連れていた。それぞれはエリートと判明した。先端にいる人形の深海棲艦は、多分旗艦であると思われる。

佐世保鎮守府艦隊の一部、及び防衛に入っていた諸港の艦隊を撤退させた敵本隊。

それでも、あまり傷を負っているようには見えなかった。

「あれが旗艦だ、絶対そうだ」

「……穴戸くん？ あれ、のこと？」

“あれ”に対してなんのレクチャーもなかったが、何に対して言っていたのか理解していた俺は黙って頷いた。

人形の深海棲艦は空母ぐらいしか知らないし、他にいるなんて聞いたこともない。だけど、その二隻は、その旗艦を挟むようにして編成されている。

遠くの、双眼鏡の向こうの、ほぼ一隻の深海棲艦……敵目標に対して、俺は“倒さなければ”という、ある種の使命感に駆られていた。それぐらい、先にある敵に存在感があった。

気持ち悪さを感じていた。

あちらも同じような感覚を持っているような気がしたが、俺とあの旗艦の間に言葉なんて要らない。会話ぐらいはできるのかと、本能的

な感覚がそれを感じさせたが、冷静に考えたら、ただただ気持ち悪いだけ。

佐世保鎮守府艦隊の有無や、規約の命令に反していないか、周囲やその先に敵艦隊、あるいは味方艦隊がいないかなどを確かめる前に、ただ目の前の敵を排除する目的で指令を出していた。

「オイゲンさんは周囲の敵艦隊を殲滅してくれ！ 俺の艦隊は、敵本隊との空戦準備に取りかかれ！」

『あ、うん分かった！ みんな砲撃準備して！』

「こつちも砲撃準備ツ！ 敵目標は深海棲艦群を指導する立場にあると思われる！ これを叩けば、佐世保鎮守府及び周辺地域への被害を消化させることができるツ！ 全員気を引き締めて行けよ!!」

「了解！」

斎藤准将と、柱島艦隊の士気を上げるために荒木大佐へ伝令を出した俺は、目の前の敵……少女のような容姿をした深海棲艦を一点に捉え、指揮を行う。

コツチには指揮もできる凄腕艦娘であるオイゲンさんもいるから、どちらが優勢かは明らかである。佐世保に被害を出す可能性がある以上叩かなければならない。そして、それが強い敵であればあるほど、ここで仕留める重要性は大きい。防衛作戦をS勝利で終わらせる為に、そしてコイツをこのまま佐世保湾の奥に進行させることで発生する面倒を先へと持っていかないために、ここで決着を付ける。

――深海棲艦群旗艦――

レ級

海軍省。

廊下は静かだが、心の燦りには今まで以上の慌ただしさを秘める士官たちは、海軍の中核を担うだけあり、名だたるエリート揃いの人物たちが受動的に組織の管理の一翼を司る場所である。

外部の、事実上は隷下の組織として誕生した軍令部は今でも海軍省

を支えており、実質的な動きを司る彼らは防衛作戦の過程を見届けていた。

「防衛作戦は順調みたいですね」

大淀軍令部総長の言葉に、少し違和感を持ったのか、片眉毛をピクツと上げた斎藤海軍大臣は、冷然な質問を投げかけた。

「確かに順調に数は減っているけど、敵艦隊は第二防衛ラインを突破しているし、敵の主力艦隊が佐世保に近いじゃないか。作戦全体の過程は順調と言える段階なのかな……？」

「主力艦隊の位置を海軍大臣自らが把握しているとは……いやはや流石と言わざるをえませんか。大淀も頭が下がります」

「流石ですね、長官！」

「いや明石次官も大淀総長も一緒にこの通信部で作戦の過程を聞いていたじゃないか!? 把握できないほうが可笑しいとは思わないのかね!? というより、若干馬鹿にしているように聞こえるのだがきのせいかなア!？」

「ははは、そうです、気のせいですよ。あ、ほら、第一防衛ラインの深海棲艦の殲滅を確認したみたいですよ！ これも作戦を立案した我々軍令部も鼻が高いと言うものです」

長髪を掻き上げながら誇らしげに、しかし爽涼な眼差しでモニター……その先までも見据えているような表情を浮かべ、決定を求める士官らへ命令、決断を下していく大淀総長。

斎藤長官にも同様に士官らが押し寄せてきたが、その中で一つ気になる案件が、海軍トップらの後ろ髪を引っ張った。

「連合軍の艦隊から小島に残された将兵らの救援を求める声が上がっている、か……連合軍からの救援だと言ったが、諸国政府から声は上がっているのかね？」

「いいえ！ 人民海軍と米海軍の一部艦隊からの通信であると認知しております！」

「そうか……」

士官を退出させ、指を顎に付け悩ましげにする長官。

「軍人として唯一政治に関わる事ができる私でも、海外の将兵を救出

するかどうか、それまでは一存で決定しかねる……人道的に救いたい気持ちはあるが、どうしたものか……」

「ホント勝手ですよね！ 自分たちで勝手に出撃しておいて、失敗したらその尻拭いを私達に頼むなんて！」

「明石さんの言うとおり！ ……しかし、これは使えるかも知れませんが。大艦隊の到来のせいで、反抗作戦の準備に多少遅れが入ったとはいえ、佐世保艦隊と長崎警備府はかなり戦力が温存されている様子ですし、予め各方面には反攻作戦を防衛作戦が終わってから行うとの通告も済んでいるので……ふふふ」

薄ら笑みを浮かべた大淀総長。

“ 無様な敗北を見せた海外の将兵らを救出し、連合軍でも叶わなかった沖縄奪還を果たした日本海軍 ” というシナリオを作り出す絶好の機会であり、大淀総長はこれを実現する段階にある。

ただ、これだけのトップが集まっても、名目上の理由で政府の許可、あるいは指令がなければ、本心から助けたいと思っても、勝手に海外の兵士を救出するのは許可が必要となる。

救出への例外は多くのあり、その方面軍司令官に判断を委ねるのが一般的だが、圧倒的な数に加え、現在の政治状況から、中々判断を下せるものではない。

しかし、この人が加われれば成せる。

「邪魔するで〜！」

「首相!? な、なぜこのような場所に!？」

「おう！ 大淀に呼ばれたから来てやったんや！」

「いや、私はただ頼み事をしたかっただけであって、直接赴いてほしいとは一言も言っただけですよ？ 龍驤総理」

「はあ!? 忙しい身でわざわざ来てやったのに、そんなうちに対してなんて言い草や!? それに、なんやその口の聞き方ア!? 年上敬うのが日本の流儀つちゅーもんやろオ!? もっとうちを褒めんかい!!」

めんどくさい人ですね……と零した大淀総長。

突然スーツ姿で海軍省に入ってきた低身長な女性。彼女こそ、現政権のトップであり、元艦娘の龍驤。元艦娘の首相は過去にも居たが、

彼女はよりキャラクター性とカリスマ性が目立つ存在であり、頭の回転の速さも備わって人気である。また裏手には海軍の権力が強まったと批判を受ける身であり、事実、海軍が提案したプランの数々が円滑に動いたのは、首相の存在が大きかった。

「それでなんや？　深海棲艦の攻撃から防衛成功したら反抗作戦するんやろ？」

「大淀……最初からそのつもりだったの？」

「うん。防衛が終わったら反抗作戦を実施する計画を立てていたのですが……」

反攻作戦は敵艦隊の到来で遅れたとはいえ、作戦そのものが撤回されたわけではない、と付け加え、周囲を納得させていた。

この時点で作戦実施の正確な時間、日付は未定となってしまったが、大淀総長は防衛作戦直後を予定していた。

「外国の将兵らは日本領海内に取り残されており、一刻も早い救出が懸念されています。作戦中にでも予備戦力を投入して助けるべきか、待つべきか……準備のため、それを蘇我提督に伝えるべきか、など、悩んでいたところですよ」

「行ったらええやん、救出作戦も大規模作戦も、準備が万全やったら行けばええと思うんやけど……」

「分かりました。そのために、総理には政府側を納得、及びそれらに纏わりつく諸問題の解決と抑制に臨んでほしいのですが、よろしいでしょうか？」

「あいつ変わらず人遣い荒いなあ……まあええわ、うちに任しとき！」

「流石です龍驤さん！」

「へっへっそうやろそうやろ？　もつと褒めて〜！」

小柄な身体でそんなふうにされると余計に子供を彷彿とさせますね……と、他愛もない事が明石次官の脳裏を掠めた。

「残る敵の本隊と交戦しているのは……警備府の宍戸副司令の別働隊ですか。流石に突出しすぎていると思いますが、まあ彼なら問題ないでしょう」

「ンン……しかし、敵の本隊はかなり手強いように見えるのだけれど、それでも勝算はあるのかな？ あの外国艦達も含めている艦隊だから、連携が取れない等の不具合が起きては彼らの方が損傷を受ける場合もある」

後に、連帯を疎かにしたせいで海外の艦隊が崩壊した事実を聞いたとき、長官はこの時の会話と戦況を鮮明に思い出すこととなる。

人事を怠っていればどのような惨事となったであろうと。

「他の艦隊のみなさんも戦ってたと聞いたので、かなり戦力は削がれてると思います！ 穴戸提督以外の艦隊は撤退しちやいましたけど……」

「その柱島にはプリンツ・オイゲン中佐もいます。二人は海軍大学校時代から仲が良いと評判でした。実技演習も教授方の目に高く止まっていましたので、これ以上のコンビは他にないかと思えます」

「……まあ、言ってみてるだけだよ。部下を心配するのは当たり前だからね」

「そうですね。しかし彼らだけで敵艦隊を討伐するわけではありません。佐世保鎮守府の艦隊も合流する様ですし、明石が言ったとおり戦力は削がれてるはずなので、その間だけ耐えていただければ大丈夫でしょう……では総理、裏方のお仕事の件、お願いできますね？」

「裏方とか直球やな。うちはもつと派手で、自分が目立てる活躍がしたいんやけど……まあ、こういう役もたまにはやらんとなっ」

防衛終わり

敵艦隊の親玉は、佐世保湾の底に沈む。

『シールド！ 敵艦隊はこれで全滅したよ！ っていうかオーバーキル……』

「アブナイ感じがしたし、何艦隊もコイツに倒されてたって聞いたからどうなることかと思っただけど……なんとか佐世保に付く前に倒せたのは、みんなのおかげだ！ ボーナスは期待していいと思うぞ！ 俺の金からじゃないから分からねえけど！」

『は？ 宍戸くんが貰ったボーナスで焼き肉食べに行くのが美味しいんじゃない？』

「鬼ですか？」

『あの、焼き肉はいらないので、帰ったら宍戸提督から借り物をしたいのだけれど、いいですか……？』

「初霜が俺に借り物？ 珍しいじゃん、なに借りたいの？」

『宍戸提督がいつも部屋でやっている……えろげー？ とやらを、貸してほしいの……いいかしら？』

「え」

『海軍大学校の講義を通信で受けながらやってたのを見て、それで、色々な戦術について語ってたら、どんなものか興味があつて……』

多分、初霜がチラ見したのは多分、“守護る”というタイトルが入った、ただのバ○ズリ多めな抜きゲーだ。胸部挟撃戦術・キトウ一点集中とか、初霜ができるわけないだろ。

初霜がそんなの見たら初霜の中の俺は、カッコいい有能な提督から、淫獣へと変貌を遂げてしまうだろう。

……いや、それとも主人公がハーレム作って女の子をオーバーパワーパーナな異能で守ったり絶倫の限りを尽くすほうのエロゲーかな？

どっちもダメじゃねえか。

『それって宍戸くんがやってる女の子が無理矢理いやらしいコトされて、でも何故か喜んでるゲームのこと？』

『』……………『』

え、時雨、俺そんなゲーム持ってないよ？

ヒロインはみんな合意だったぞ。

『時雨さん！　いくら穴戸提督でも、講義中にそんな事するわけないじゃない！』

「……………おう！　初霜、あれは売ってしまってもう手にない……………が、代わりに書いた論文資料をあげるから、それで許してくれ。艦隊と、ひいては国民を護るために、どうすればいいかと熟考して数年の歳月をかけて作ったものだ」

『え、そんな貴重なもの、いただけるの？』

「ああ、なんかテーマが変わって別のものにしたから、資料は持つてっ
ていいぞ」

『ありがとうございます！』

防衛作戦成功の報を鎮守府に送る。

村雨ちゃんが言うには、鎮守府司令部は佐世保への寄港を命令しているらしい。敵艦隊主力撃破の成功を伝えたら、全域の敵艦隊情報と照らし合わせて、後は弱い残党殲滅任務に勤しんでいる、との事で、防衛は終わった。

成功を祝った報告に全員が歓喜し、俺も喜ばしいと胸を張って佐世保鎮守府への移動を艦隊に命じた。

佐世保鎮守府、司令部。

執務室とは違い、かなり大きな司令部が、第一鎮守府にはある。

ここみたいに、膨大な数の艦娘達と士官たちが入り浸る鎮守府では、俺の艦隊も含めて勝利を祝うと共に、各々勝手に休息を取っている。村雨ちゃん、オイゲンさん、そして柱島艦隊副旗艦を努めたアイオワさんを連れて司令部に来た俺は、蘇我提督に別働隊の報告を行

う。

「ありがとう皆、主力が佐世保に来る前に撃退できたお陰で、損害は最小限に留めることができた。既に放棄されていた漁場数カ所と、怪我をした艦娘や将兵を除けば、被害は最小化できた。よく頑張ってくれたな」

「「ハ!!」」

古鷹や赤城提督も嬉しそうにしているぜ、へへへ……最後に敵艦隊の親玉を、まるで映画のヒーローみたいに倒した俺、マジかっこいいぜ。

「あ、いたいた!」

十人ほどの屈強な男たちが俺たちを囲う。大防衛という緊迫した中で走り回ってたのは分かるけど、その汗臭さと言ったらクツセエツ!

いやさ、今にも汗が飛び散って俺の目に入ってきそうじゃん。

「きやつ! し、穴戸さんっ……?」

村雨ちゃんを少しこちらに抱き寄せる、男たちの汗から守るためにな。

驚いた顔で頬を紅潮させ俺の顔を見上げる村雨ちゃん。少し膨れっ面になってジト目を向ける古鷹。そして微笑ましそうに笑う赤城提督。

どうだ? 強いし頭もいい副司令官様とお前らでは、太陽とウミガメぐらいの差がある事を、その女を狙ういやらしい目に焼き付けて置くんだなア……!

「流石はあの穴戸提督ですが、何よりプリンツ・オイゲン提督が凄いです!」

「……は?」

「艦隊を指揮するだけではなく、自ら戦場に立つその度胸と勇氣! あの手のつけられない柱島艦隊をも操作できるほどの力を持っているなんて……! もしも機があれば、貴女の麾下に加えて頂きたいと、小官は思うほどです!」

「あ、あははっ、私いま提督じゃないんだけど……」

「何をご謙遜なさるのですか!? 小官一行、プリンツ中佐の指揮下に入る準備も子宮に入る準備も整っています!!」

「その通り! もしも提督職を賜る機会がございましたら、是非我々にお声をお掛けください!! あ、これ小官の連絡先です」

「え、あ、ありがとうございます……私プリンツよりもオイゲンて呼ばれるほうが……」

「フンツ……小娘がア、今年で50代となる私よりも先に提督になるなどオ……! クツ……! こんな小娘に負けるなど……! 悔しい……悔しい……! あ、これ小官の連絡先ですもし機会があつたら叩き上げである私を推薦してくれるとありがたいというか私を子宮に入れてほしいというかバブル時代ならぬバブル時代に戻してほしいというか……」

「あ、あはは……ちよつとこわい……」

クツ……! 流星に今の俺では、男たちの性根からオイゲンさんまで守り切るには力不足だ……! 村雨ちゃんだけでも守る……!

「宍戸さん、そういえば敵艦隊と交戦する前に艦隊旗艦だと確認していたみたいですが、なんで艦隊の旗艦だつてわかつたんですか?」

「スゲー強そうだったから」

「そ、そんな理由で……?」

古鷹も困惑してる様子だけど、事実そうなんだから仕方がない。村雨ちゃんもココココと頷いている。

「しかし、事実主力艦隊は強く、進行を阻止しようとした数艦隊は無力化されたほです。そして、宍戸提督の艦隊の何人かは軽傷を負われたと聞きましたが、その方々は問題ないでしょうか?」

「攻撃型軽空母の鈴熊は大破しましたが、本人らは奇跡的に軽傷で済みました。他の艦娘も艤装の中、小破で済んでいます」

軽傷と言つても双方ともに、太ももの掠り傷程度だし舐めとけば大丈夫らしいが、一応そう報告しておく。

「そうですか……その鈴熊さんには、どうかお大事にと伝えておいてください」

赤城提督、どうやら鈴熊を一人の人間だと思つているらしい。巨乳

とチツパイの差がある事を伝えていなかっただ俺も悪いけど、赤城提督直々に劳いの御言葉を頂いたと二人に伝えておこう。

「旗艦と断定した要素は、小官が見たことがないタイプの深海棲艦だったから……と言うこともあります。他の証言どおり、隊列が確認できないほど入り乱れていましたが、同型が一隻だったので」

「見たことがないタイプ……ですか？」

「はい、人形の深海棲艦ですが見た目は小型。戦艦と同威力の主砲を放ちながら空母のように制空戦にまで参加してくるタイプの深海棲艦です。赤城提督はご存知ないですか？」

「いいえ……戦艦でありながら航空戦力としての機能を有した深海棲艦……まるで、航空戦艦のような……」

「新型か、厄介な敵に遭遇したものだ……後で、お前と主力艦と戦った艦娘全員に事情聴取を行うが、いいか？」

「もちろんです」

事情聴取って結構長いからいやなんだよなあ……。

その事情聴取を受けるオイゲンさん達はその前に、男たちから別の事情聴取を受けてるといふか。

「H A H A H A！ モテモテねオイゲン！ うん、モテモテすぎて jealousy 感じちゃうけど、仕方がないものね！ というわけで、admiralはこの秘書艦であるIowaがもらっておくわね！」

「それはだめ！ いくらアイオワでも殺すからね！」

ははは、オイゲンさんも物騒な言葉を使うんだなあ。

……え、なに？ オイゲンさん、え、違うでしょ？ admiral 1つて、俺のことだよ？ あの弱々しいザコ提督のことじゃないよね？

指に力が入る。

「あ、あの、宍戸さん……いい、いつまで村雨を抱き寄せてるんですか……？」

「お、ご、ごめんね村雨ちゃん。村雨ちゃんをあのち○ぽたちに触れられたくなくて、つい……」

「そ、そうなんですか……えへへっ」

村雨ちゃんその笑顔は反則……ッ！

「コホンッ、まあ私の前だから男女の戯れ合いを許容しても構わないのだが、それが穴戸というのがなんともなあ……？」

「穴戸提督だから引つかかると……つまり、蘇我提督は穴戸提督にご興味が……」

「ち、違いますよ赤城提督!? 古鷹をもらってほしいと言ってやったヤツが、このように目の前で仲の良さを見せつけられてはたまらないと思つてまして……!」

「失礼します! 相浦駐屯地より戦闘詳報書を受け取りに来た者です! あの勇敢と謳われた蘇我閣下が男色主義だと聞き及び、中の良さゝを確かめる為に馳せ参じた所存! 付きましては、小官の小型拳銃を突きまして、濃厚な詳報の作成に励みたいと願つております!」

「聞き及びつて貴様今聞いたただけだろうッ!? おいやめろ、死ぬぞッ!!」

「では蘇我提督! 小官はこれで失礼したいと思います!」

「おいまで、いや待つてくれッ! 貴様はこの類を退けるのは得意だと聞いた! 助けてくれえ!!」

「パパ、もう穴戸さん行っちゃったみたいですよ」

「穴戸オオオオ!!!」

食堂。

防衛作戦大成功を祝つてるみたく、補給をするためにかなりいっぱい人が入り浸っている。他の士官やら将兵やらも、他の部署と資料作りとプチミーティングを開いたりするために食堂が使っているけど、やっぱり補給の目的も兼ねてるのか、艦娘が多い。

というか、厳戒態勢だというのに休みを入れている人が多い。反攻

作戦の件を考えてみれば当然か。

「……例の反攻作戦決行はいつになるのかわからないけど、俺もまた前線に行くことになるんだろうな……いやあ、人遣いが荒い！ それに佐世保鎮守府まで敵が来なかったからここの艦娘たちは拍子抜けしたってわけだ」

「僕たち警備府ですつと寝てても良かったんじゃないの？ この人たちにあの深海棲艦任せてれば……」

「いや人口が多い佐世保鎮守府の近くで戦闘が起こるとそれだけで被害が出るから、これが最善の結果じゃないかな。佐世保鎮守府が攻撃を受けるって事実だけで、威と品質が落ちるからって面もあるし」

まあ無理に倒す必要はなかったかもしれないけど、艦装小破で済んだんだから結果は上々だよね……と思いつつスマホで書類整理を行う。

「アイツなにスマホ弄ってんの？ シゴトサボってんの？ 提督にチクろつと」みたいな顔されたので、俺は宍戸様だぞ崇めろオーラを腰振りダンスで詰め寄った。

「やあ」

「「きゃあああああああ!!」」

逃げられた。

「宍戸くん、確かにジロジロとイヤな視線送られてたのは知ってるけど、流石にパンツ下ろそうとするのはやり過ぎ」

「いや下ろしてねえだろ、ほら、フェイントだよ。学芸会でやったことあるの知ってるだろ。まったく……近頃の若いのってなんで礼儀が成ってねえんだよしばくぞ」

「れ、礼儀は大事だけど、し、シバクのは、良くないと思うよ……」

「っ!? あ、荒木大佐!? な、なんでテメエみてえな半端モンが……」

「「……っつ」」

とても美人な外国人の方々に睨まれてる。

あれれー？ しかもイタリアの方々、お食事に夢中だと思われていました、自分たちの提督が侮辱されたとなると、睨み効かせてイタリアンマフィアになってしまうのですかー？

「……ではなく、万物を超越セシ偉大なる柱島総督閣下。尊敬すべし御方が、その御御足を御運ばれに御成ったのは如何ほどの御要件が御座つての事でしょうか？」

「あ、うん。実は齋藤提督に急遽ここに来るようにつて送り出されて……」

「ハハッ、そうなんだア？ オイゲンさんのほうが何倍も提督らしいし有能で何より可愛いんだから、さっさと柱島の席をオイゲン提督に渡したらどうなのこの人？」

かのプリンツ・オイゲン提督をも麾下に加える、荒木提督を派遣なさるとは……いやはや、齋藤提督もお人遣いが荒いですな。

「はっ。」

本音と建前が逆に……あ。

—————

釜山海軍基地。

各祖国の思惑を胸に秘めた士官等、艦娘等は小さな会議室を出た。

薄暗い部屋の中で、一人呆然と、頭を抱えるアメリカ軍の総司令官がため息をついた。

「はあ……なんでこんなにもさ、うまくいかねえんだろ？ 確かによ

？ 過去の貿易摩擦と外交戦争の延長線みたいに、中国系移民が反米化した時期に中国系企業の買収で起こってる人種雇用差別問題が表面化してさ、中露マフィアの活動も活発化してコッチもかなりヘイト溜まつててさ、便乗してアラスカ返せ言い続けてるロシアとかさ、演習はアホみたい成功してたのに、実戦では子供レベルで連携取れてないとかさ……ああもうメチャクチャだよ」

横で構える士官と艦娘の二人も、うんうんと頷く。

「中国系マフィアが流した合法麻薬の影響で、私の故郷も、一時期はとも悩まされました。実家がチャイナタウン化した街の横にあるのが接触の原因でしょうし、人種差別は、自由と平等を愛するアメリカ海軍軍人としてはいけないと思います……正直、我々と彼らでは住

む世界、重んじる文化が乖離していると感じたのは事実です」

「お前も大変だったんだな……あ、言つとくけど、俺は中国系じゃないからな？ 顔はアジア人でも中国とはあんま関係ないから」

「分かっていますよ、ドグソドルジ元帥」

太平洋方面艦隊総司令、ジャック・ドグソドルジ元帥。

上下ともに人間関係を円滑にして時勢を進める処世術、政界から大企業の重役まで届く人脈構成、ライバルを蹴落とす謀略、策略に長けた人物であり、一見陰湿なイメージを持つプロフィールとは裏腹に、持ち前の人柄からか、異常なほど人を惹きつける能力があると言われている。東アジア系としてアメリカ軍の元帥となった唯一の人物でもある。

とある日、プレイボーイとの噂を聞いた部下が畏れ多くも関係を持った女性の数を聞いたら「お前つて今まで会った女の数覚えてるの？」と冗談半分に返された。

「ロシアの艦娘たち、ゼーんぜん海路譲ってくれないだもん、頭にきちやう！」

ぷんぷん！ と頬を膨らみますサミュエル・b・ロバーツ。可愛らしい見た目からは想像も付かない行動力を有し、駆逐艦という艦種の限界点、狂戦士並の立ち回りを幾度となく見せつけた。

「そうだなサム。韓海軍は日本との摩擦を加速させる目的だったから正直結果は気にしてないらしいし、後方だったから被害は一番少ないし……」

「ロシア海軍の艦娘が血気盛んなのは、個人的な武勲を立てる事で得る令聞冷望が多いからでしょう。勲章の授与による賞金も付くのに加え、ボーナス支給が簡単にできる体制が原因らしく、まるで中世に戻ったかのような狂乱の時代に連邦は居るようです。嘆かわしい」

頭に手を添え頭を振る士官。

「元帥、個人的に得た情報なのですが……中国海軍は、意図的に我々の軍との連携を損ねた可能性があります。この作戦自体もそうですが、オキナワを奪還する一方、本命は直接的な干渉による関係悪化を加速させる目的であつたと」

「記憶に新しい対中関税の報復、強硬姿勢の誇示、軍事力を見せつける一環でもあったのかもしれないねえが、今となっては失敗に終わった。アイツらの考える事は自分らの利益につながる事だけだ。今更どうしようとしたか、なんて考えるだけ無駄だぜ。そういうのはペンタゴンの秀才たちに考えさせよう」

「はい……あの国を牽制するという同じ目的を持った我々とチャイナが、日本海軍のガモウや彼の作った深海棲艦教と協力関係にあったというのに、やはり敵はどうあがいても敵なのでしょうか……」

「……え、え!? 提督たち、そんなことしてたの!?!」

「サムはしらなかつたのか……しつかし、アイツも可哀想なヤツだよな? 理由はどうあれ、心が病んでたからこそ協力できたし、ヤツ自身ナシヨナリストみたいな顔して隠してたらしいけど、すげー日本のこと嫌いだったらしいぜ?」

「謀の類は好みではありません……」

「まあ、一番ひでえのはコツチの作戦が失敗した事だがな。まったくどうなつてんだあのオキナワって島は? あんな強い深海棲艦、俺のキャリア全部通しても見たことねえぞ?」

サムは同意するよりかは、前方にいた味方の証言を頼りに想像した悲惨な戦線に対し、多少の恐怖感を憶えていた。あんな大きな艦隊でも倒せないのか……と。

とはいえ、規模は連合軍が交戦し沈めた深海棲艦や、九州に来た大規模艦隊を合わせたら、歴史上最多となる数だが、総合的なデータを取るにはまだ早い。

「ここにいた各国幕僚の会議でも何度か繰り返された言葉だが、まさかこちらが撃破されるとは俺も思ってたぜ……確認した通り、新型の深海棲艦がいるようだが、それも一匹だけじゃねえってのがまた厄介だな……」

「二隻はジャパンに行ったみたいだけど、もう一隻の強い方は上海に行つてそのまま行方不明になったみたい! 帰つたのかな?」

「え、つまり人民海軍は撃破できなかったつてことかよ!? ウソだろ……深海棲艦相手じゃ、最早艦船なんて邪魔なのかもしれないねえな。大

火力主義の我が国では、動く海上砲台のミサイル艦をこよなく愛するが、常識の改変は徹底しなきゃな……ハア」

サムが発言に驚きを隠せない元帥は、更に深々とため息をついた。「元帥、ご存知の通り米軍将兵はジャパンの島々に漂流したと暗号文をいただきました。総合的にみて少人数とはいえ、同胞を島々に放置してはおけません。四力国の軍部首脳はこの会議で、我々が日本海軍に援軍要請をすると認知した以上、艦隊を再編成しなくては……」

「はい！」

「うん！」

二人とも返事した。

「……あの、サミュエル・b・ロバートの方に聞いたんですけど」

「私の名前はサミュエル・b・ロバートであります！」

「えー！ 私と同じ名前なんだよ！ 同姓同名なんだね！」

「え、可愛い女の子と40越しそうなオツサンが、同姓同名……？ キモッ」

「私はまだ27ですッ!! それに同姓同名で悪いですか!? ぶんぶんッ！」

「うわキモ」

「あ、あははっ、でも提督に言われたとおり、結構前から援軍要請は送ってるよ？ でも、国際的手順を踏んだ上で要請してください、つて返ってきたんだって！」

ぶんぶん！ とまた怒ってる。

「……彼らは国連に参加しているだけで、軍事同盟には参加していないし、正直なことを言えばごもつともな指摘だ。援軍に来るとしても、早々に駆けつけてくれるわけでもない。まあそうなる前に我々自身で救援に向かっている頃だろう。未だに作戦が失敗したのが信じられん、私のキャリアにおいては最悪な一日だ……こうなった以上は、一刻も早く同胞らを救うことに専念したい」

多少の国際問題覚悟で救援に向かう事もできるが、救出要請を許可する前に行けば、侵略行為と囃し立てられる可能性が浮上した。

更に中国政府がアメリカ批判に便乗し、日本側に付く可能性もあり、最善の結果を残すには将兵救出要請を受け入れてもらう他なかった。

「実は、オキナワをダシにして軍事同盟を結ばせるって手も考えてあったらしいが、それも今となつては……だな。沖縄にいた敵は強敵だ。ここは、私自らが佐世保の提督に話をしようじゃないか。既に政府同士での折り合いはついてるらしいし、一応、挨拶はしておかないかな。必要つてワケじゃねえけど、日本は礼節を極度に重んじるからな。アイサツとか空気読まないだけで虫みたいな扱いされるし」

「まあ総司令官ともなれば、政治家のような振る舞いが仕事の90%を占めます。Our Great Americaを代表する象徴としての一角を担う以上、挨拶は元帥にとつての実戦です。どのような状況下でも、疎かにするのは得策とは言えません」

その他にも、日本上級将校と対面した時の正しい振る舞い方や、念頭に入れておくべきことを事細かに……ドグソドルジ元帥の感覚としては、口うるさく諭されていた。

「ああ、うん、そうだな……つて、え、お前何者？　なんでそんなに俺がやってる仕事の内容とか理解してるの？　いや合ってるんだけどさ」

「私の母は海軍省で働いていたんです。祖父も将官で、今日本で働いている従兄弟のベリングハム少佐も含め、家族関係のせいで実は海軍の人脈が広いんですよ。だから上から下まで海軍についての情報が入ってくるんです」

「はへええ〜ローカルの軍人家庭なんて羨ましいい〜！　俺もな、親父と息子の所属国がバラバラなだけで軍人家庭なだけどさ、一人ぼっちで、まっサラの状態から始めなきゃいけなかったからホント苦労したぜ……」

「所属国がバラバラ……とは、これまた奇天烈な……お父君は、元帥のデイセントから、蒙古であると推測しますが、ご子息の方は……」

「今交渉中のJapanだよ」

「へえ〜……つて、今ケンカしてる国じゃん！」

「いやケンカってほどじゃないんだけどな？ ハア……Sarato gaにドレイクの様子を伺わせてるんだが、そういえば最近あまり連絡取れてないな……まあ、楽に海外電話できるような時代じゃなくなっちゃったから仕方ないか……」

「……元帥？」

「あ、いやなんでもない。それよりアツチの提督に連絡を入れないとな」

「そうですね。佐世保は現在防衛作戦中であると、あちらに派遣した士官が言っていましたので、司令室に通信許可を入れます」

三人の後ろの大画面は、数分ほどでブルースクリーンから佐世保の司令室、そして佐世保鎮守府総司令を映し出す。

『何をする貴様流行らせコラ！』

『抵抗しても無駄ですア！』

『ドロヘドロ！』

『……………』

荒木大佐が投入された。

『なんだお前!?!』

『三人に勝てるわけないでしょうア!』

『馬鹿モン貴様私は勝つぞ貴様!』

『フル焼きそばッ!』

「「「WTF」」」

我々は今度こそ勝つ。それを見せてやる。

佐世保鎮守府司令部。

画面越しに映るアメリカ海軍の元帥はなんとも言えない顔で蘇我提督を見つめていた。

「先程は失礼しました、私は佐世保方面総司令の蘇我です」

『失礼って……むしろそちらの陸軍の方々が失礼をなさっていたような……』

僕は助けようとしたんだけど……と、荒木大佐はボソツと呟いた。

「コホンツ！ ……アメリカ太平洋方面軍総司令とのリアルタイム通信など、私にとつては夢のような状況ですが、早速本題に入りましょう。そちらから通信を頂いた件については、例のアメリカ軍将兵救出、についてですか？」

『お察しの通りです、お耳は早くて助かります。何分急を要するものですから、アメリカ大使館にも既に連絡を入れ、日本国首脳にもこのお話が行き届いてるはずなのですが……国家間の意思疎通というのは、度々誤解を生んでしまうものですから、急な事に加え、各方面で強く駆り立てるような無礼な言動や行動があったことを、我が祖国を代表してお詫び申し上げます』

「頭を上げてください！ 私個人としては最善を尽したいのが本音です。今にでも自らの足を運んで救出したいと思っております」

『かの蘇我提督からそのお言葉を頂けただけでも嬉しいです。あなたのような提督が日本に居てくれることは我々としても頼もしい。それに、私の日本語も通じるようですね』

「ははは、日本語がご堪能な閣下のお陰で円滑に話し合いが実現されています。外交上手と噂される閣下はマルチリンガルでもあると、外交官がこの場にいれば、聞かせて勉強させたいものです」

『彼らがいたとしたら、私は英語を話さなければなりません。翻訳者と外交官の仕事を奪ってしまう事になりますから』

「ははは、確かにそうですね」

総司令部前の廊下。

嵐が去ったあとの静けさとはこういうものだろうか、不思議と廊下は、俺と白露さんたちが立ち止まれる程度のスペースが確保されている。

「……クツソツ!! 今にも美人外人たちに殺されそうな状況だから、柱島だけ置いて帰れるかどうか聞きに行こうとしたのにさ、来てみればコレだよ。え、なになにアメリカの将兵の救出? いや、俺帰って事後処理全部、斎藤司令官に任せて寝るつもりだから」

「アメリカ海軍の偉い人と話してるだけじゃん。入ったら?」

「時雨、お前俺のこと空気読まなくてもやっていける無敵人間だと思ってる?」

「こんな大きな司令室なんだし気づかないよ、僕なら入っちゃうけど」

「お前無敵?」

「でも宍戸さん、別に人払いをしているわけじゃないんですし村雨たちは入っていいんじゃない?」

「そうなの? ねえねえ警備兵さん、鈴谷たち入ってもいいの?」

「宍戸提督とその艦隊の皆さんの出入りは制限されていませんが扉前を大勢で囲むのは他の方々の邪魔になりますので、入るのなら早めに入ってください」

警備兵さんがすごく迷惑そうな顔してたので勢い余りに入ろうかとも思ったが、予想外の展開が司令室で起こっているのです、物怖じしている。

「つていうかお前らなんでここにいるの!? 俺挨拶だけしようとしただけだから来なくてもよろしかったのよオオオ!」

「宍戸くんが行くところ、常に白露たちがいるんだよー!」

「でも、早く入ったほうがいいと思いますよ? 宍戸提督がご挨拶しないと、私たちも帰る準備ができないですし」

初霜の言うとおりで……クソツ、でも入りたくねえ。

「いや、でも、せめて……あのアメリカ軍のおち○ちんみたいな顔したお偉いさんの話が終わってからにしよう。みんな、終わるまでここでトランプでもして遊んでようね！ ……俺は隠れるけど」

「はーいー」

「いや、入らないなら別の場所に行ってください……」

—————

数分の話し合いの中、度々各方面から通信があった中で、日本列島付近で遭難した将兵らの居場所を特定したところまで話が進んでいたのは、一秒でも早く救出したいという気持ちの現れだったのだろうと蘇我提督は思った。

海軍省の海軍大臣から、救援を受けるので出撃準備が整った後、すぐに攻撃するようにとの司令が下っていた。

「……どうやら、我が国の首相が正式に、あなた方のご要望を受け入れると発表なされた様です。我々は全力をもって彼らを救出しましょう」

『ありがとうございます』

「……しかし、アメリカ海軍以外の同盟海軍はどうなされたのですか？ 大打撃を受けたのは分かったのですが、相応の被害を被ったと受け取ってよろしいのですか？」

『人民軍は上海まで撤退し、露海軍は我々以上の被害を被り、韓海軍は被害を最小限に留めたものの、新型深海棲艦の大群の襲来を懸念してデフコン3を宣言してほとんどの戦力を国防に当たらせています』

『A, admiral! You shouldn't mention about those…』

『It's alright man, it's all good……救援要請の必要性は、国防省からも認められた通りです。我々の太平洋艦隊も速やかに編成を整え、再出撃を計画しています』

「分かりました。では我々は防衛作戦終了の後、速やかに救援へと向

かわせます」

通信を切った蘇我提督、深く息を吸った。

「……よし、じゃあ宍戸を呼んできてくれ。アイツに話がある」

「え、宍戸提督……ですか?」

「そうだ。救援任務もだが、アイツには別の任務を引き受けてもらう必要があるんだ。事は一刻を争う」

「宍戸提督でしたらすぐ外にいますが……」

「なに!? ツ……おい宍戸! って、何をやってるんだ貴様は!? なぜダンボールに隠れながらトランプなどしているのだ!?!」

「え!? あ、これには個人的な事情が……って、何ですか急に!? いきなり出てこないでくださいよビックリしたせいで神経衰弱の位置がわからなくなつたじゃないですか!?!」

司令室でゴヤゴヤ話し合ってたと思つたら急に出てきた蘇我提督。

並べられたカードを見て村雨ちゃんが勝ってるんだが、俺は初霜とスチールメイトしてる。

ここで勝たなくちゃ威厳が見せられないし「三位以内に入らなかつたら全員に飯奢つてやる!」ってカツコつけた以上はなんとしても勝利を掴まなくちゃいけない。と、結局柱島勢も提督と戯れてる事に集中したおかげで俺は難を逃れたワケだ。

「お前達には重要な任務を、軍令部総長及び海軍大臣から直々に頂いている」

「え……まさか、防衛作戦終わつたらすぐに反攻作戦するっていうアレですか?」

「え、今やるの?」

時雨たちを含めた、多分反攻作戦に直接関与しそうな人たちには事前に言つてた事がある。

大淀総長から頂いた「反攻作戦は、防衛作戦後に実施する可能性有り。佐世保鎮守府、可能なら、長崎警備府も戦力を温存した上で、反攻作戦をする準備に取り掛かるように」という命令である。

大淀総長の言う通りにするとても良い子な俺は、その通り整工班はほとんど置いて行つたし、ここに来た方法は司令艦船ではなく、小型

輸送艦船で、しかも言われた通り警備府の戦力はまだ温存しているし、結果的に他の要港部は打撃を受けたけど、佐世保艦隊は戦力を温存できている。

反攻作戦するのはしばらく間を置いてからだと思った。

「話が早くて助かる……いや、個人的にはあまり命令したくはない。だが、軍令部の命令である以上は……」

「え、実施命令が下ったんですか!? え、いや冗談でしょ、いくら大淀総長そんな防衛作戦直後やるなんてトンデモジョーク過ぎですよ。防衛作戦がうまく行ったから気を良くしてるんでしょうね？ アハハハ」

ポケットの電話が鳴る。

「あれれ、これ見たことがある番号だなあ……もしもし」

『私が冗談を言っているんです？』

………

「……あの、俺の番号って、最近変えたばかりなんですよね。え、電話番号、なんで知って……」

『そんな事はどうでもいいです』

怖いね、俺じゃなかったら可愛い艦娘たちと上司の前で大洪水してた所だよ。

まあ電話番号は変えたらすぐに海軍個人情報資料の更新を義務付けられているし、トップともなれば簡単に調べられるから分かっちゃうのは当然か。

いや、一番怖いのはこのタイミングで電話してきた事だよ。日本海軍ってホント人外みたいな能力持った人多いッスね。

『それよりも、反攻作戦の件についてですが、再び前線指揮官として……今回は、彼らのまとめ役を買っていただけじゃないでしょうか？』

「え……ま、まとめ役というのは……というか、前線指揮官って、沖縄反抗作戦前段艦隊の、ですか？ 規模からしても流石に小官がそれを担うのは……というか、前線は佐世保鎮守府の士官に任せる予定だったのでは？」

『その担っていた方が防衛作戦で負傷されたので、代わりに斎藤准将

が前線を取り仕切ります。ですので、少なからず穴戸副司令の指揮権限を広がりませう』

「小官には荷が重い役目かと……てつきり参謀に徹するかと思つたのですが……」

『前段と後段の艦隊、作戦に参加する各司令官、参謀、指揮官を取りまとめられるのはあなただけなんです。斎藤司令を始め、オイゲン中佐や大鯨中佐、特に秋津洲中佐と佐世保鎮守府の参謀や整工班とのコネクション。数え上げたらきりがありませんが、その中心で関係を円滑にすることができるのはあなただけなんです』

つまり、司令官としては斎藤准将がいるけど、実質的にそれらの司令官連中とのパイプになれと？

司令官の横の副司令官にそういう人を置く場合はよくある。寡黙な司令官と、陽気で人気者の副司令官みたいな。

でもなあ、あの人を侮るなよ？

あのひとも人並みにはリーダーシップあるんだぞ。

それより、そんな俺を信用してくださっているんだつたら俺を昇進させて提督させろや。

『貴方を昇進させてもいいですが、海軍省にも少なからず貴方の事を良く思わない定年間近の士官が多くいます。早すぎる昇進を重ねた穴戸副司令を更に昇進させる事になれば、その人数は増すと思いません。あなたの今の立場を考えると、特に』

「この穴戸、十分承知しております。しかし、元はほんの一翼を担う立場だった小官が異例の抜擢など光栄の至で……」

『回りくどいことは結構なので聞きたい事があるのなら早めにお願ひします』

「拒否権ってありますか？」

『軍令部、ひいては海軍省の命令を聞かないとどうなるか今更説明しなくちゃいけないんですか？ あなたの警備府に海軍よりすぐりの強力な慰安師たちを数人余り、あなたの専属として送ってもいいんですよ？ 彼らは確かあなたもよく知る拡張好きの調教師だとお聞きしま』

「了解しましたアツ！ 軍令部、海軍省……この日本海軍と日本国の
榮譽に掛け、任務を引き受けましょう」

『ありがとうございます。反攻作戦の詳細は蘇我提督から聞きてくだ
さい……これはあなたにとっても一大勝負です、ご武運を』

電話が切れる。

総司令官も、時雨たちも、電話の内容を聞いていたわけじゃないけ
ど何となく理解した様な顔をしている。

「……蘇我提督のご命令を後押しする内容でした」

「了解した……君たちも異存はないかな？」

蘇我提督が今度、視線を向けたのは時雨たちだった。

事前通達があったとはいえ、あまりに急な任務に対してそれを命令
する事に抵抗を感じているんだろう。

「白露さんはいつでもオツケー！」

「え、即決するのはまだ早くないかしら……？」

「いや、村雨も分かっているとは思うけど、どの道断れないでしょ!? で
も、こんな戦いに繰り出されるんだからいつちばーんイイ装備を要求
しなきゃフェアじゃないよね！」

「フェアじゃないって……そもそも、この作戦をこのタイミングで実
行する方がフェアではありませんわ。なにゆえ防衛が終わった後で
すの?」

「考えがあるんだろうけど、流石に終わった後に沖縄旅行つても鈴
谷あまり好きじゃないかな」

「すまない……」

他にも初霜みたいに「仲間を傷つける諸悪の根がそこにあるのな
ら、徹底して叩かなくては!」と言いながら反攻作戦にノリノリな白
露さんたちと、「面倒くさい」の一言で蹴散らした時雨たちで半々つて
ところか。

作戦そのものがキャンセルされたわけじゃないから、反攻作戦の実
施は戦力が多少削がれてる以外の問題はない。

沖縄を早急に叩く必要がある、そんな意見が海軍省で出てもおかし
くない。

今度ばかりは事前準備の賜物。なにより連合軍の敗北をインテルとして受け取ったからS勝利で終わったものの、またそんなのが沖繩を拠点に生まれたら、いちいち大規模作戦級を出さなきゃいけない。あんな深海棲艦の大群がまた現れる前に、あの島ごと叩く必要がある。

戦闘準備はできている、そう分かっている、やっぱりデケエ攻撃を受けたあとのデケエ作戦は不安だ。

「作戦成功の暁には、特別待遇として二週間の有給休暇を与えると云われているが流石にそれは即物的すぎると……」

「僕やります」

「は?」

は? 時雨お前……は?

なにやる気出しちゃってるの?

「だってここで頑張ったら、二週間はダラダラできるんだよ!」

「時雨さんの言うとおりですわ、最近忙しくて行けなかった神戸にやっも行けるなんて……!」

「お兄さんと一緒に休暇取りたいです! そのためだったら世界も攻略してみせます!」

「は、春雨ちゃんそれは無理だと思うけど……クソ、こんな安直な……!」

で、でも一ヶ月か……二週間、二週間……いや、よく考えたらこれは勝てる戦いだよな。

勝てば得る報酬は、休暇、武勲、本拠地を叩くことではばらく活動が大人しくなる事による安全、そして何よりも重要なことだが、人脈を増やす絶好の機会だ。そのために行動できる条件は上々であり、それを得るには作戦の成功以外にない……ということなのか?

チツ……仕方ねえなあ。

「やってやるかつ、ハハハ」

「もともと拒否権なんてないでしょ?」

あとで分かったんだが、有給にボーナスは出ないし、少佐以上の高級士官には適用されないとのことだった。

当然、俺には適用されない。

騙された、日本海軍※ねと掲示板に書き込んだのは数週間後の話である。

超緊急会議

「よく思うんだけどなんで俺がクソみたいな前線に出なきゃいけないの？ 別に危険がいっぱいファ○キン前線が好きだから出てるわけじゃないんだぞ？」

「秋津洲も前線に出されてるかもツ！ 文句言うのは無しかも！」

「最初からその予定だっただろうに……というより、宍戸は急に率先してやりたいと張り切り始めただろう？ どうしたんだ急に……」

「だって仕方がないじゃないですか!? 調べたら俺の代わりって、特攻弾正少将とか一億玉砕少将とか聖戦完遂大佐とか本土決戦准将とか、絶対に前線任せちゃいけないタイプの人多すぎるんですよエツ!? 俺が頑なに拒否したら、ソイツらが俺の可愛い艦隊を指揮するつてエ!? できるわけ無いでしょうガア!! 本当は武闘派を人事編成からなるべく退けたかったですが、ちよくちよく編入されている所を見る、左遷は間に合いませんでしたねツツ!!」

「特攻とか聖戦とか、それは彼らの本名じゃないんだが……」

「で、でも宍戸さんが前線に出るって宣伝した甲斐もあって、今度は勝てるかもしれない！ って雰囲気になってるので……」

「俺は祭り神じゃないんだから……古鷹、俺が前線に出てそんなに嬉しいの?」

「え? ち、違いますちがいます! ……本音を言えば、危険な任務には行ってほしくないです」

「はは、大丈夫だよ。前線なんて俺の辣腕を振るえば危険でもない。古鷹は……何も心配しないで。ただ、俺の帰りを心待ちにしてくれれば、それでいいんだ」

「は、はいっ!」

「お前ノリノリなのかそうじゃないのかハッキリしろ」

まさか結城司令官にツッコまれるとは。

司令室の隣の会議室。

出席しているのは軍令部から特別に前線指揮官として出撃する秋

津洲さん、兵站担当の大鯨さん、柱島艦隊の外国艦を束ねるオイゲンさんと荒木大佐、阿久根要港部でなんとノーダメ防衛に成功した結城司令官、赤城提督、俺と秘書艦たる村雨ちゃんと、その他。

「決行時刻は最速で明日の早朝としたいのだが、異論はないか」

「参加する艦隊の整理は終わってますが、近くに漂流した海外の将兵の方々はどうするのでしょうかあ……？」

「それ秋津洲も聞きたかったかも！ 秋津洲たちには関係ないけど、命に関わるんだったら善は急げかも！」

「いいえ、厳密にはうちら関係ないワケじゃないみたいツスよ？」

「どうということなのユーキ？」

「美人な皆さんに説明させて頂くと、漂流先は主に端島や下甕みたいな日本列島の一部なんです。地理的にコッチが救出に向かうほうが何倍も早いですし、人は住んでいないですが、沖縄みたいな放置地区ではなく、コッチは規定防衛圏内の島ですから……」

「その件だが、もう救出艦隊が向かっていると鹿児島警備府から連絡を受けたから問題はない。君たちには、ただ沖縄作戦に集中してほしい」

予定していたとおりの編成を組んで行う反攻作戦。

人員導入数はかなりの数で、正に第二次攻撃と称してもいい。

蘇我提督から既に聞いたことのある詳細を再度頭に叩き込み、作戦実行の早朝まで休むのが、今回の目標である。

前線では秋津洲さんとオイゲンさんという、スーパータッグがいる。俺達の前線に隙はない。

「では、反攻作戦発動までに基地へと戻り、疲れを取ってくれ。この事は長崎警備府始め、参加する諸港に私直々の命令として触れ回っている」

「ハッ！」

明日へ向けて各々持ち場に戻る中、赤城提督は浮かぬ顔をしていない。彼女はこの作戦に参加していない。

彼が行った人事ではないが、蘇我提督は氣負いした表情で赤城提督に伺う。

「……本当に、よろしいのですか赤城提督？ 先の作戦では撤退戦を指揮を振るわれた観点から見ても、大淀総長が貴女に謹慎を言い渡すなど、あまり得策ではないと思いますが……」

「いいんです蘇我総司令。軍令部からの命令とあつては、こちらも従わなくてはいけませんから……というより、そもそもこの作戦には参加するつもりはなかったんですが」

「赤城提督が保守派であるのは百も承知です。この作戦には批判的であると理解した上で、失敗した前作戦に参加なされたのではないですか？ 今回の作戦は返上の機会であると私は……」

「……いいえ、私は一次作戦、艦隊編成、防衛の指揮を休まずに行ってきました。そろそろ休んでも、文句は言われなと思います。私たちの部下が、そう海軍省に進言したとなれば、致し方ありませんね」

本来、赤城提督が外されるのは艦隊の士気に関わり、また部下から慕われている故に、反発を食らうはずだが「赤城提督は第一次作戦、撤退戦、防衛戦をしてお疲れだから無理させるな」という一部、部下たちの進言と流言が幸いして大きな反発を呼ぶことはなかった。

蘇我提督は当然知っているが、赤城提督の部下たちを説き伏せたのが穴戸大佐の一行だった事は後で分かる。

「そうですね……赤城提督の艦隊も反攻作戦には批判的だったのは、確かに覚えていますが……」

「何れにせよ、私個人としては氣乗りしない作戦です。何事もない成功を祈っています……加賀さん、ごめんなさい」

長崎警備府の寢室。

戻ってきた時はもう夕方になっていた。全員自室に籠もり、明日の

大規模反攻作戦の為に疲れを癒やしている。

「穴戸、明日の大規模作戦についての詳しい説明はオイゲン中佐から説明を受けた。それでどうだった？ 私一人のけ者の会議は」

「なに不貞腐れてるんですか、同期の中で一人だけ出席してなかったぐらいで。急だったんですよあの会議は。俺が行かなかつたら斎藤准将が来てたんですよ？」

「私は一行に構わなかったぞ」

この人、面倒くせえ。

元々やるつもりだったのは知ってる、だが、まさか俺が前線のフィクサーとなるように、総長自ら念を押してきたのは意外だった。

言われずとも、命がかかっている以上は最善を尽くするのが道理だが、ある意味この作戦の不安定さを示唆していた。

いや、蘇我提督はかなり自信を持っていたし、一連の作戦について驚くような素振りにはなかった。明日にでも出撃し、作戦実施できるようにと、常に体制を整えろというのは軍令部からのお達し……クソ、楽できない。

「オイゲンさんから聞いたんだつたら作戦計画内容と艦隊編成は理解してますよね？ 前線は斎藤准将が指揮を取るんですからもっとシヤキつとして下さいよ……ていうか、早く自室に籠もって寝てください。丁度そこにいたからつてもあるけど、休ませるためにわざわざ出席したんですよ」

「何を言っているんだこんな時に引きこもって寝れるわけないだろう！ 私には後処理があるし、本番となつたら意思決定が主とは言え、貴様のほうが手腕を振るうだろう？」

「そうですよ司令！ 親潮も、司令に司令してほしいんです！」

「親潮、親潮、司令、ソツチ、俺、副司令、オツケー？ いい加減にしないと准将泣くぞ。つか昇進したのに祝の言葉ぐらい送ったあげて」「え、親潮はちゃんとおめでどうって言いましたよ？」

「ああ、一言だけな」

不満そうな顔してるから明らかに言葉が足りなかったね親潮？

一応、俺が目指す提督にはなったんだからもっと喜んでやれよ。

「この人の提督は約束されてるみたいなんですからあまり驚かないというか……」

「僕もそう思うな。海軍大臣の息子さんなんですよ？ 肩書だけで大企業への就職決まりそう。平社員でも出世は間違い無しみたいな」

「ソレソレ！ 白露もそう思うけど、最終的には顔で決まっちゃうんだよねー！」

「白露姉さんが言うのと説得力あるわね」

「え、酷くない村雨!? 白露がいつちばーん可愛いからって、それで得したことってあまりないと思うけど〜！ ね？ 穴戸くん？」

「白露姉さんお兄さんに近づきすぎです!! 離れてくださいただでさえ激務で疲れてるのに大きなお尻で潰しちゃうつもりですか!？」

「大きくないよッ?」

白露さん真顔で言わないで。

そんなに気にしてるのか、お尻が大きいのはステータスなんだぞ。

「みんな明日は早いんだからさっさと寝て……」

「兄貴、自分は多少うるさくても寝れるので大丈夫ですよ」

「俺が寝れないんだけど」

「私もうるさくても寝れるタイプです」

「奇遇ですね！ 三日月もそうなんですっ」

ベッドの上で談笑する二人は、体が小さいからそのまま毛布の中に入れば気づかないだろう。だから、一晚一緒に寝てしまっても、不可抗力だろうと妄想を数秒ほど捗らせた後、再度さっさと寝るように伝える。

「綾波、第二改装の調子はどうかしら？ 少しだけ艤装点検を担当させてもらったけど、操作性や安定性に問題とかは……」

「問題ありません！ すごく調子がいいと思ったら夕張が艤装整備してくれてたんですね！ ありがとうございます！」

「あ、熊野そこのお菓子とって」

「足元にあるのだから、いつもみたく足指を器用に使って取ればいいではありませんの」

「ちよ、それみんなの前で言う!? 鈴谷のはしたないプライベートな

全貌、乙女の裏事情バラされてちよつと傷ついたかも」

艦装とかギリギリ明日の作戦に関係する事話してんだつたら許したけど、ポテトチップス取るとらないとか、クツソどうでもいい事まで持ち込みやがってこのメス共ガア……！　ここは作戦前夜祭会場じゃないんだぞ。

え、まさか、みんなそんな物あると思って来てる？　残ねーん無いんだなそれが。

っていうか、ここ人口密度半端ないぐらいクツソ狭くなってるんだよね。俺の寝床も占領されてるし。優しく言わなきゃ聞かないのか貴様らは？

「あの……おねんね……しよお？」

「はい今の可愛いセリフを言うCaptain撮れました。今晚のオカズですね」

「お、Okazu？　これを見ながら、ご飯食べるの……？」

「多分Gambierの思ってる事とは違うと思いますし、今度からはあまり近寄らないようにします」

「な!!　Sara君はオカズと聞いてなんて不純な事を考えているんだこのエロ艦娘め!」

「艦娘は全員エロいだろうが!!　つか寝ろって言ってんのに聞こえてねえのか貴様らア!!　この部屋、狭いんだよオ!!　早く自室で精神統一でもなさい朝早いんだからアツツ!!」

「……………」

……え、まるで俺が悪いみたいにコツチ見てくるの、なに？　え、俺が悪いの？　まさか俺の許可なしに部屋で作戦前夜祭開催が決まってたとか？　首謀者晒せ。

「……宍戸、この際だから言うが、みんな明日の作戦が不安なんだ」

「…………え」

神妙に、深く息を吸いながらこちらを見つめてくる斎藤准将。みんなも同様に。

「ここにいる全員……いや、来ていない者も含めて、皆成功は疑っていない。ただ、大掛かりな戦いに無事で帰ってこれる保証などどこにも

無い……貴様一人を除いてな」

「え」

「穴戸くんといると何故か全部丸く収まるような感じがして……」

「それ分かる！ だからってわけじゃないけど、鈴谷たちもなんとなくここに来ちやっつたんだよね」

「そうです！ 司令官の加護があれば、親潮たちの前に敵はありませんー！」

「我々日本海軍の誇りであるF a p t a i n……もとい、C a p t a i n S h i s h i d oの前ではこのような試練造作ありません」
「我々って……貴方はこちら側ではないですか……でも、あなたには、どこかそういう、人を“安心”させる力があるのでしょね」

同じような事を述べて、ここに留まりたがるみんなの表情には、何かを求めているようなものがあった。

そして、ここにはそれがある……そんな雰囲気。

「……ぼくもそう思う、かな」

「時雨……」

珍しく素直に認めた時雨。

みんなと同じような不安を抱えているのだろうか。

白露さんや鈴谷みたいにはしやぐ奴らや、村雨ちゃんや春雨ちゃんみたいに静かに寄り添う娘たち、上司として信頼してくれる初霜たちも、なんだかんだ不安なんだろう。俺も全員無事に任務を達成できるか不安だ。

そして、みんなは俺といればなんとかなると思ってるのか。
なるほど。

「……作戦は成功させるさ、もちろん全員無事でね」

「………」

「って言いたいけど保証できるわけないじゃん！ 准将、俺をなんだと思ってるですか！ 戦神……軍神ツ！ もしかして俺……もう死んでるウ!? キミトゼンゼンゼンゼン……」

「いや、お前が参加した作戦はだいたいどうにかなってるから……」
「曖昧スギイ！」

「ははは、すまないすまない。大丈夫だ、貴様にばかり重荷は背負わせ
ないさ……私の背中も、案外広いんだぞ?」

「さ、斎藤提督……?」

椅子に座る俺の後ろを陣取った斎藤准将。

半ばあなすろ抱きのような形になりつつある体制で、ゴツゴツとし
た手を肩に置いた。

「……フッフ、案外、私のより硬くないじゃないか。この背中に余る分
は、私が引き受けると言っているんだ……私も、貴様に負けないよう
に、少しぐらい格好を付けないと、な?」

「さ、斎藤提督……!」

「……面白くありませんね、f※ckデスツ」

男同士の三角関係!

これに魅了されない女子はいない。

「み、見てください初霜さん! し、司令官と司令官のお顔があんなに
接近してます……! こ、これはもう付き合っていると見て間違いない
のでは……!?!」

「三日月さんあんな不純なモノを見てはいけ……」

「フオオオオオオオオツツツ!! 綾波、今日は寝られませんかツツツ!!」

皆さん絶つたいに触らないでくださいねっ!! あの中に入るの
ではなく、観葉植物になるんですよ!! わかりましたかあああ!!」

「綾波、抑えてちょうだい。目の毒よ……あ、でもベリングハム少佐と
なら意外とイケるかも……?」

「むむ……穴戸さんが提督と……たしかに、女として村雨は、この雰囲気
気を崩してはならないという感覚がフツフツと……」

「何を言ってるんですか!? ただ気持ち悪いだけですよこれ!」

「でも親潮は斎藤提督だから気持ち悪いと思ってるんであって、これ
がもしベリングハム少佐だったらどう思うの?」

「え? 何を言ってるんですか時雨さんそんなの気持ち……ん……き
もち……気持ち、いい?」

「ヤメロオ!! これ以上腐女子を増やすな死ぬぞツ!!」

「ハハハハハ!!」

明日作戦なのにコイツら体力寧猛化してんのか？

「ふう……じゃあ盛り上がった所で、明日の作戦について一言頂けるかな穴戸？ みんなも、激励を望んでいるようだよ」

クソ狭い部屋は大勢の艦娘と士官で賑わっている中、ここの部屋主である月魔はもう寝ており、この突然始まった前夜祭に対して司会っぽいセリフを望んでいる様子だ。

外を見てみると、夕立ちちゃんと五月雨ちゃんも部屋を覗き見している。

……形式張ったセリフしか吐けない司令官殿に代わり、副司令官として気の利いたショートスピーチを出してほしいのだったら……文字通り一言、それも明日の作戦に向けて、最も必要な言葉を、君たちに贈ろうじゃないか。

「寝ろ」

第二次沖繩作戦　み、みんな！　進軍激しくしないで！

『うるさいですかも……』

「キヤアアアアアアア!!」

深海棲艦の悲鳴が無線越しで聞こえた。

『はい、徳之島周辺海域終わり、お疲れ様でした』

「あ、ありがとうございます……」

準備が整い、いよいよ反攻作戦が発動されたのだが、『早く終わらせないと二週間の有給休暇の元が取れない上に、長引かせると深海棲艦が増殖して海戦が泥沼化してしまうのでは』という懸念の声があり、結果、俺と同期たちは予定よりも素早く前線を押し進める事に決め、見事成功した。

しかし大艦隊を殲滅された深海棲艦たちはなんだか弱体してるみたいで、主力部隊のみんなの緻密に計画された連撃は敵艦隊にイタイイタイなのだった。

俺の出番がない。

俺の出番がないんです。

楽できて最高です。

普通は一つの島に駐留して、そこから慎重に、その時の状況に合わせて戦術計画を立てながら進行するのがセオリーだが、秋津洲さんやオイゲンさんと、二人が指揮する艦隊や色々な所属の艦娘たちが、止まらずに周辺海域を制圧しに行ってるから尋常じゃない速さである。主要な奄美に臨時拠点を設置して、俺はここから報告を待つだけの存在となっていた。当然、前線の総指揮を取る斎藤准将も同様である。

一度だけ止まった諏訪之瀬島にも艦隊を配備しており、後方支援艦隊は突出している前線の艦隊が止まらないように、更に広範囲の海域で守りを固めている。

あの二人ってあんな攻撃型だったんだな、知らなかった……やっぱり、やらせてみないと発見しない才能って多いと思う。

でも勘違いしてもらっては困る。彼女たちは本来、俺と同じ提督であり、これは一時的に彼女たちの艦娘としての力が必要だっただけであり、二人も手を貸すのはまったく惜しまなかった……少なくともそう聞いている。

そして、沖繩に駐留する陸軍部隊の輸送も既に準備中である。

俺も艦隊全体の調整とまとめ役としてみんなを取り持っているが、そんなのは普段やっている事と変わらない。

進行は盤石だった。

『沖永良部島制圧かもツ!! ていうかほとんど敵いないかも!!』

あそこまで行って8隻つてまあ普通にいい数なんじゃないですかね？

というかなんでこんなに張り切ってるんだろう？

あと島の安全を確保する哨戒だからそこまで行かなくてもいいんだけどなあ……。

「りよ、了解です、すぐに駐留艦隊を設置します……トホホ……みんな強いからって張り切りすぎなんだからあ……どうにかしてあの熱を冷ます事できないかなあ……」

「別にその必要はないのではないか？ 順調に進んでいるのであれば、我々の艦隊が出しゃばる事なく任務を終えることができる。親潮、陸軍沖繩駐留部隊をこちらの島に移動するよう伝えてくれ、今なら大丈夫だろう」

「了解です！」

「ハア……ん？」

もうすぐで夜なのに、一人の艦娘から眩しさが漏れている。

「よいしょ……よいしょ……」

た、大鯨さんが後方支援艦隊参謀なのに、主砲を上げ下げして砲台運用練習してる!?

「ふう……こんなものでしょうか……大鯨も、皆さんのお役に立てるように頑張らないと……」

「大鯨ちゃん！」

「ひゃあう！」

「た、大鯨ちゃん！ ごめんよーッ！ 大鯨ちゃんは毎日俺たちのために後方支援頑張ってくれてるのに謎の負い目を感じさせちゃって……ッ！ ハフッ！ ハフッ！ 大鯨ちゃんの汗だく黒ストふとももいい匂い！」

「に、匂いを嗅がないでくださあい！」

「ご、ごめんね大鯨ちゃん……！」

「べ、別に、艦娘が主砲の訓練をするくらい普通です……。それが艦娘のお仕事なんですから……。それに、私は主砲の扱いが下手で、あんまり戦い慣れてないから……」

大鯨さんはもう艦娘として戦う必要ない地位にいるんだよなあ……まあいいや。

「そ、そんなことないよ！ 大鯨ちゃんのその気持ちだけで、ワイや艦隊のみんなは十分嬉しいんだよ！ あつ、そ、そうだ！ 大鯨ちゃん両腕でオツパイ挟んで！」

「こ、こうですか？」

むにゅ。

「そう！ それじゃあ今からその隙間にオマジナイするからね！ 大鯨ちゃんのやわらかおっぱいにドツピユするからね！ ちゃんと受け止めてね！」

「えっ、えっ？」

「ウォーッ！ 大鯨ッ！ ぷにぷにおっぱいに出すぞ！」

「あ、宍戸くんだめええええええ!! 大鯨さん両手を勢いよく突き出して宍戸くんの事を止めてエエエエエ」

「あ、あ、はいいい！ え、えーいつ！」

「クツフウ——ツツ!!」

大鯨双掌打ッ!!

どっからこんな力が来るのか、死んでなかったら教えてほしい物理力最大特化の当て身が腹に炸裂する。

吹き飛んだ俺に寄り添う一部の部下たち。

大勢が作業の手を止めてこちらを凝視し、再開するようにと心配無用の合図を送り、村雨ちゃんの手を借りて立ち上がろうと努力する。

「す、すごい（攻撃密度が）濃いのが出たあ……！」

「ほ、ほんとうですう……で、でもなんでえ……？」

「それはね……大鯨さんの気持ちだが、穴戸くんに伝わったからだよ！」

大鯨さんの気持ち悪いつて思いがね！」

「私の気持ち……あ、じゃあそろそろ整備品の輸送船団を発進させるようにと提督にお伝え下さいっ！」

「「ハッ！」」

ふざけててもちゃんと仕事はする大鯨さん。

「そうー。だから、テクニクなんて、二の次なんだよ！ 指揮は上手い人にやってもらうより、好きな人にやってもらうのが一番気持ちいいんだよ！」

「す、好きって……はわわっ……あ、あのお……じゃあちよつとだけ、練習に付き合ってもらってもいいですかあ……？ し、穴戸……さんっ」

「もちろん！ ……え、そこ僕じゃないの？」

その後、とりあえず僕と一晩中、大鯨さんのおててに砲台の持ち、撃ち方を仕込み続けて次の日の朝は起き上がれないほど疲弊していた。

前衛部隊なのに余計な事に気を回して体力を消耗するとは何事か？ なんて意見もあったけど、でもまあ、その日以来、お小遣い搾りをするとき穴戸くんの耳元で「大鯨さんをレ〇プしようとした」とつぶやけるようになったので、結果オーライ！ 終わり。

「ハア!? 俺ただ任務中だから必要以上の糖分補給できない状況下の大鯨さんのために頑張つて隠し持ってきた水飴あげようと思っただけなのにツ!!」

「それ隠語？ 君が持つてるその白いネバネバしたモノ完全にアレだよね……なんか、その……エッチなやつ」

「時雨さあ……水飴ってね、こういうものなの。古くは大和国時代から作られてた伝承もあり、今でも和菓子とかに使われている、正に人類史に刻まれた榮譽ある調味料兼糧食だ。気持ち悪くもアイドルに

送り付けるために無駄に精製され排出された廃棄物とは格が違うというものだ。世界を支配してきた液体に敬意を表するがいい」

「は？ それだったら子供作るために精製される液体は人類史そのものを作ってきたみたいなものじゃない論破」

論破だけなんでお前が精液を肯定してる方なのかとか、単純に美味いものを汚物でマウントするのやめろとか色々言いたい今日この頃。

「お兄さん、春雨も……お兄さんの真っ白なの、欲しいですっ……だめ、ですかあ……？」

「は？ あげるに決まってんじやんはいどうぞ」

「わーい！ ありがとうございます！」

「あ、村雨もネバネバの欲しいです！」

「わ、私も司令のを……ください！」

「いいぜ、思わせぶりぶりなセリフでしかおねだりできない君たちのためにたんまり持ってきたからね。あとみんな見てるからエロいセリフやめろ俺が変態みたいだろ」

……おい、誰か否定してくれよ。俺が変態なのが通常運行みたいな顔してんじやねえよお前ら。お前らの分も持ってきたのに敬意払わねえとやらねえぞ。

茶番を終えて部下たちに指示を出しながら、正式名南西方面艦隊第一艦隊、通称前線艦隊の総司令こと斎藤准将と状況整理をし始める。

常設を目的とした臨時拠点は沖繩に続く三点の要所に設置し、陸軍の駐屯部隊を常設するための艦隊はこちらに遅れる形で移動しており、衣食住を整えるための兵站も輸送ルートの確立を大鯨さんと一緒に計画している。

大鯨さんは相変わらずの裁量に抜かりの無さを上官たちに示した上、お手伝いした俺も褒められるというダブルボーナス。元々計画されていただけあって入念な準備が功を奏したみたいだが、彼女の指導力と経営力があってこそだと俺は思った。

一方戦闘面では先程言ったとおり、秋津洲さんとオイゲンさんが戦線を牛耳っている。

これも元々計画されていた戦術スタイルだが、長崎全艦隊には戦闘よりも秋津洲佐世保艦隊とオイゲン柱島艦隊の支援をするようにと命令を変更した。それが結果的に相乗効果を生んだのか、あるいは必然だったのか、深海棲艦側の戦線は瓦解している。

元々あんなバケモノに統率なんて言葉が存在してるとも思えないが、戦闘備品の消耗は抑えられ、数字が浮いた。

柔らかい土と森林の香りが漂い、無数に放棄された建造物はすべて蔭で覆われており廃墟的だ。それが輸送船から出されるテントや海軍基地設備数式と並ぶ光景は異様、同時に幻想的。今から行く沖繩は更にこんな雰囲気なのだろうか。

攻略よりも、これからあそこで拠点を構えなきゃいけないと思うと気が滅入る。

「順調に行っているとはいえ、いつ死者を出すか分からない。しかし、出すとしたらかなりの人数になるだろう。だから、細心の注意を払う必要がある……本当に良かったのか？ 何があるか分からない人生、婚約ぐらいならしても良かったんじゃないのか？」

俺……帰ったら、結婚するツス！

みたいな死亡フラグを立てる前に告白、結婚してしまえば、因果を回避できるみたいな、的外れな魂胆を作戦中に論じていた。

「どんだけ結婚させたんですか……俺は生涯独身主義を貫いて生きていくと決めているんで、結婚だけはしたくないです」

「何故それほどまで結婚を拒むんだ!? 海軍軍人として恥ずかしくないのか!？」

「デメエも独身だろうがア!? 海軍男児は妻帯者よりステータス低いみたいな固定概念の押し付けやダア〜ツ!!」

独身貫きたい主義の俺にとっては、公認のハーレム以外は眼中に無いことを教えてやらねば。

「ハア……しかし、長崎艦隊には戦闘ではなく支援をしろというとはな……知っているとは思うがな宍戸？ 司令官とは隷下の中に自分が指揮する艦隊がいれば容赦なく優遇するものだぞ？ 一番活躍させたいと思うし、それ以外はどうしても優先度が下がる……私は度量

が深い男だと思わないか？」

「そう……ですね」

……え、なに？

え、あ？ 貴官は年下に褒められたいのか？

キ、キ……。

「キモツ」

「ツ!? 私のどこがキモイというのだ親潮!？」

代わりに言ってくれてありがとう親潮。

前線艦隊司令のいうことは合っている。俺も艦隊の一翼の方針を変えるのは気が引けたが、こうするのがベストでありうまくいくと思っただから……なんて曖昧な説明を聞いた途端に方針を変える行動力と実行力はやはり海軍大臣譲りか。

「阿久根艦隊も指定海域を制覇してみたイッス！ いやあくスゲー勢いっすねえ！ これなら作戦成功は間近って感じっすかア!? 俺、帰ったら艦娘パブに寄るんだあ……」

艦娘パブー現役の艦娘が接客してくれると言われていたが、もちろん海軍がそんな事を許すはずもないので、アングラなお店として、一部で知れ渡っている。

もちろん実情は艦娘適正どころか年齢適正に引かかったようなB Aばかり出現するデイストピアダンジョンである。

「簡易な死亡フラグはやめてもらおうか結城。しかし、まさか柱島艦隊があれほど従順となってくれるとは思ひもしなかったがな……穴戸、貴様なにかアイツらに言ったのか？」

「え、なんで俺!？」

確かに前の柱島ならフリーダム航海で位置情報すら怪しくなっていたかもしれないと多くの士官が口を揃えて危篤していた。

「提督たちは穴戸司令を信用しているのよ。あなたならなんとかしてくれるってね……ま、まあ私もなんだけど……ふ、ふん！ この五十鈴の信用を得たんだからありがたく思いなさいよねっ!」

自分の司令官よりも信用になる俺ってかっこよくない？

「軽く秘書艦寝取られてる気分だぜエ！ まったくイキにくい世の中

だよ、これで俺様つちのおまん候補が810から1919になっちまった」

「なんで増えるのよ!？」

「お前ほど自由に生きてる人いるの?」

「穴戸くん!」

元気よく指し示した白露さんの指の先には俺がいた。

「俺をこのスカポンと一緒にしないでくださいよ」

「は? プツタングエナモオ!」

「まあ元々荒木大佐とお前には素直だと聞いている。うまく行っていればそれでいい」

作業中の士官たちを含めて、斎藤司令は俺がなにかしたと思ってるみたいだ。荒木大佐もいつも以上に余所余所しいし。別に何もしてないのに。

ただ、知り合いの海軍省人事局第一課長や呉鎮守府の幹部や、来ていた参謀補佐連中の口から「作戦を成功させないと全員散り散りに左遷させて敗因を押し付けて社会保障番号剥奪してフロリダ再集計を一人で延々とするような地獄の任務に着かせるぞ」と……ここまでキツく伝わったかどうか分からないけど、とにかく脅してなんとか成ったんだったら結果オーライ!

強いのに事情多々ある柱島艦隊にとっても、ここが正に見せ所なんだ。そのせいか、艦隊の指揮を取っている荒木大佐と彼の参謀たちはとても熱心だ。

「まだ気を抜くなよツ! 成功と帰還までが我々にとつての勝利となるツ! 機を逃すは愚だが、最善の結果は滞りのない全軍の冷静さが生み出すツ! そして冷静さはキツチリとした休息からしか生まれないツ! 本日の進軍はここで終わり、明日からは沖繩に上陸する……修学旅行だからと言って夜ふかしは厳罰対象だぞツ!!」

「ハッ!!」

斎藤司令の激励を聞いた後も変わらず、各々がテキパキと自分に課せられた任務に勤しむ。終わった人たちは手をふり上げながら任務を終えた事を上官らに伝えると、テントの中に入る。

流星群が見えそうなソラの色に照らされながら、秋津洲さんたちの帰還を待っていた。

鈴谷たちは女子らしくヌメヌメした土に座るのが嫌だったから艀装を展開したまま物資の上に尻を休ませている。

他にも索敵任務に出ている艦隊と周辺海域の警戒を怠らないために編成された常備哨戒が島をうろついている。

「……秋津洲さんたちまだ帰ってこないの?」

帰還命令を出したからもうそろそろこちらに帰って来てくるはずだけど、周辺海域にいるという報告があちらからこない。こつちからも状況報告を呼びかけているが、それでも応答は耳障りなノイズだけだと、村雨ちゃんは言っている。他にも親潮を含めた数隻が艦娘との通信を行っているが、哨戒艦隊が順調であることと、輸送艦隊が推定より40分早く到着すること以外は有益な情報はない。

時雨たちを始め、彼女たちの戦闘支援を行っていた長崎艦隊のみんなは不安げな表情を浮かべる。

「穴戸さん……どうしますか?」

「こういうときはあとこういふときはあと何時間か待って、だめだったら現場の判断で見に行くかどうか調べるんだけど……どうしよう?」

この島に着いてから小休止を入れていたから疲労している様子はないけど、時間的にもう休ませなきゃいけないし、それ以外だったら活動中の艦隊と哨戒任務に付く予定の予備艦娘以外しかいないしな……どうしよう。

「僕なら行けるよ」

「いや、みんな疲れてるだろうしここはもう少し待ったほうが……」

「……………」

艦隊のみんなは上目遣いで行きたいと可愛さで訴えてくる。

「フフ、そんな顔をされては断れないのではないか穴戸? 行って来い、私が命令する」

「斎藤司令……了解しました。じゃあ行ってきます……その代わり、休息中の飛鷹と隼鷹も連れて行きます」

「え〜!? 一本開けたばっか……じゃなくて、休憩入ったばっかなのに!」

「ははは、これも前線艦隊司令官のご命令だぞ? あとね、そのご立派な一升はどっから持ってこられたのか是非聞きたいから後で尋問するね」

「そ、そんなあ……だ、だってポーラさんが持ってきたからさあ……」
「お、犯人が特定できたな。連帯責任で荒木大佐には始末書を書いてもらおう」

「そ、それだけは勘弁してツ! 私とポーラさんは飲み仲間なんだよおく私のせいでいいからさあ〜!」

「それぐらいにしてやれ穴戸、酒ぐらい大目に見てやってもいいじゃないか。そんな事より、前線を自らの目で確認したいのなら、艦隊出港準備は整えてあるから行っていいぞ」

「良くないよツ!」

自然と俺を最前線に出そうとするのも良くないよ!?

—————

佐世保鎮守府の一室。

アメリカ太平洋艦隊総司令、ドグソドルジ元帥と佐世保方面軍総司令の蘇我提督、海軍大臣の斎藤司令とその秘書艦らが出席している。

護衛艦隊数十隻を連れ釜山から来たアメリカ艦隊に、報道陣も鎮守府外部におしかけている中、鎮守府内のスタッフも何が起こっているかわからない状況である。

「こうして直接お会いできること、心より嬉しく思います。そして、突然の来訪にも関わらず快く許可してくださった日本国にみなさんには感謝が絶えません」

「いいえ、こちらこそお会いできて光栄です……我々日本国首相と、国務長官閣下との会談は二週間後のはずですが、これまた随分と急ですね」

「我々の士官を勉修という形で、身に余る重職を提供していただいて

いる他、この度は我々の将兵を救っていただいた件についても、お礼を申し上げたかったです。これほど日本国にはお世話になっていくというのに、日頃のお礼を述べないのは不敬に相当します。この度は日本海軍を含め、多くの方にご迷惑をおかけしたこと、改めて感謝を述べたいと思います」

深々と頭を下げるドグソドルジ元帥の態度に、引き締めていた頬の顔も緩んでしまう蘇我提督と古鷹。羽黒はまだ彼の素質を見抜こうと睥睨に近い眼差しを送っており、彼もそれに気づいている様子だった。

この来訪には心象改善の意味合いが強く、イレギュラーな事をしていくようだが、今までのアメリカ海軍上層部とは打って変わった態度を示す事で好印象を与える算段を踏んでいた。国務長官からは日本まで行けとは言われずとも、穏便に関係回復に望めと無茶振りを被ったため、彼は自分なりのやり方でそれを実行しているに過ぎなかった。

実際に会ってみると、なかなか憎めないものだ。と齋藤長官は思いつつも、一貫した彼なりの謙虚な態度で対話にのぞむ。

「アメリカ将兵の安否を保証していただいた事、本当にありがとうございます。ご迷惑をおかけしては申し訳ないです。彼らは今どこに……」

「気にされますな……まあ、可愛い部下の安否は全員が気にするところですが」

「そのとおりです蘇我提督、部下は身内、危険な目にあっているとすればなおさらです」

「身内……え、救助者の中に子供いたの提督？」

「な、なんと!? そうなのですか？」

「違いますよサミュエル、蘇我提督。てか、息子をそんな危険な任務に付かせるわけないでしょ。日本海軍が発令した八丈島の攻略作戦ではドラゴンと呼ばれるほど活躍したらしいですが、そんな自慢の息子は今頃、佐世保鎮守府で命の危険とは無縁の参謀任務についているはずですよ……That's why I made him out

of operation」

「す、すごいよ穴戸くん……!」

「ま、まさか穴戸つちにそんな力があるなんて……」

「まったく、どんなチートだよ、オレ」

沖繩……そしてその先の周辺海域の島、そして戦闘周辺の海域を俺一人で圧倒してしまった……島が一つ吹き飛び、深海棲艦は俺の名のもとに、人類に降伏した。

「モ、モウシマセン〜!」

「ははは、いいよ。君たちが俺の下僕になるなら許してあげる」

「ハ、ハハー!」

こうして、俺は次に大陸とその先のシルクロードを制覇し、かの偉大なる指導者、チンギス・カーンをも凌駕する巨大帝国を築き上げ、世界中の美女を孕ませて未来の人口の数パーセントを自分の血統で統一するに至った。

終わり。

「……って感じですかべて万事完結するのはどうだ？ 長崎艦隊の意見を聞かせてくれないかな？」

『『『○ねツツツ!!!』』』

深海棲艦のボス

「すいません」

現実逃避をしていた俺に「そんな場合じゃねえだろ！」と目を覚まさせてくれたみんなの無線は脳を揺さぶるほどのささかった。

現実を見るために周囲の状況を頭で整理する。

島の裏側に不時着している佐世保艦隊の中には着底寸前の艦娘もいる中、柱島艦隊も中破と大破が大多数だ。それを護衛していた阿久根艦隊もかなり損傷を負っている。連れてきた艦隊は24隻、司令艦船の周りには時雨と村雨ちゃんがいる。

柱島艦隊が相当頑張ったらしく、お陰で敵艦隊にも相応のダメージが与えられてる様子だが……肝心の親玉として登場した旗艦らしき深海棲艦は、余裕そうな表情を浮かべている。

『フッフ——次カラ次エトヤツテクルツ——』

一瞬だけ、瞳を奪われる。

その美しさからか、既視感からか、あるいは幻想的な“何か”があるのか。

人工的に作られた美しさは数多くあれど、人生の中で……いや、人類ですら見た者は数少ないだろう、異種の造形。

世界中で多くの伝承を残す、人魚。

人魚、それは美しい。

それは時に人の心を奪い、海の底へと誘ってきた。

時には嵐を呼び、時には災いを呼ぶ。

伝承の多くは、その歌声を賛美し、その姿を美麗であると讃えてきた。

『艦隊総員、戦闘態勢に入ったわ！』

飛鷹を含めた軽空母群は既に艦載機を展開し始めていた。

『穴戸くん、指示して』

「よし、アレはさっさと消さないとな。艦載機を飛ばせッ！」

俺はそう思わなかった。

みんなは聞こえていなかったようだが、脳に直接響くような、無線越しだが綺麗な笑い声。美しいかもしれない、知っているかもしれない、だが俺は、本能的にこいつらが嫌いだと自分に言い聞かせている。俺は遠くにいる人形の存在に対して、とてつもない嫌悪感を抱く。あれが深海棲艦だから、なんて単純な理由からではない。本能的、遺伝子に刻まれた何かが、俺に咆哮する。異物、反物質、俺の目の前に在ってはならない。真つ黒な空と、真つ黒な雨、禍々しい、早く元に戻さなきゃ。

――深海棲艦――

戦艦棲姫

先手は我々が請け負った。

この戦いの目的はアレを沈めることじゃない。

秋津洲さんたちの撤退を援護する事だ。

夜のため、整工班と持ってきた夜戦装備は夜偵、探照灯、更には照明弾を綾波ちゃんに持たせている。夜戦と言ったら初霜と時雨だが、照明弾の扱いに関しては彼女のほうが適任だと思った。

艦載機を飛ばした先は、残り10隻ほどに減った深海棲艦の群れ。何時も通りに戦っていればすぐの終わる。

深海棲艦は旗艦を守る習性があるから、狙い撃ちは相当に困難である。

鈴谷たちの艦載機は防空で半数ほど撃ち落ちされるが。

「先手必勝って、穴戸さんに教えてもらったっばい！」

「攻撃よ攻撃！」

夕立ちちゃんの艦隊6隻が一気に突っ込んで、両翼には更に二艦隊を配置する戦闘フォーメーションである。一気に突っ込んでいく仲間とそれを支援する形で陣形を組んでいるが、とても陣形とはいえない。

しかも夜、そして敵がこちらより少数であることを限定とした体制なので局地的すぎるが、今なら使用できる。これぞ練習の成果であ

り、俺たちの連帯のおかげだと言える。

『ク——イキナリカ——!』

必殺技は温存しておいても罫が明かないのは長年の経験で知っている。演習のような、見世物としても解釈できる戦闘をより魅せたいと思った時以外は、最初から封殺する勢いと思いを忘れない。

一気に放射する魚雷は彼女……ではなく、深海棲艦の親玉に命中したが、浸水も沈没もさせなかった様子だ。

「鶴翼陣形を作って一点集中砲火しろ」という命令は撃沈を確認できなくてもやれと命令を下しており、艦載機での攻撃を實行しろと言っている。

所謂、行動の隙を与えない構図を實現させようとしている。

無敵と最強と密かに呼ばれているオイゲンさんの柱島艦隊と秋津洲指揮官。この二人がやられたレベルの艦隊に対して、考えなくても、あの歪すぎる化物じみた艦装と統率力から、当然恐怖を抱く。

戸惑いの表情が所々溢れているのはみんなの顔を見て理解でき、それをうまく利用する、あるいはやるべき事を諭すのも、提督としての役目だと思っている。

あの深海棲艦にはあくまで、いつもに通り戦うように心がける必要がある。

だが、

『ッ! 黒潮大破!』

『黒潮さん大丈夫ですかッ!』

『へ、平気へいき! で、でも横脇掠っただけやで!』

弾道の残像が見えた瞬間、黒潮の艦装が破壊される。

その深海棲艦は、艦装と本体が完全に分離しているが、その艦装は忠実に彼女に尽くしているような素振りを見せている。揺れる船の上で見る双眼鏡の中にある世界。

他のイ級などの深海棲艦は同様に、当然のように、そして主を守るかのように盾となったのだ。

それは正に、姫のように。

「あの深海棲艦に攻撃させるなッ!! 攻撃は最大の防御だ! 敵旗艦

は随伴艦に守られるのであればそれも良し！ 旗艦に対して一点集中砲火を浴びせろッ！」

『旗風小破!!』

「クツソつええ！ オイゲンさんに秋津洲さんの艦隊はどこ!? 戦える艦娘いたら来て!? コイツまじ強いんだけどツツツ!!」

『秋津洲自身は戦闘力皆無だからだめかも!』
は？

『し、ししーど、さん……? ユーちゃんと……Z1と……Z3なら……行ける、よっ』

誰？

「艦種 what!？」

『え、えーつと……せ、潜水かんと……くちくかん』

「じゃあ潜水艦は下からこんにちわしてあのマッククロクロスケな女の形した深海棲艦直撃攻撃してねッ?!?! くちくかんの子は、俺の護衛についてー！」

『お、女の人の形……? う、うん、分かった……!』

クソ……早く倒さなきゃ……!

「綾波ちゃんとガンビアベイ！ 連携攻撃の準備しろ！」

「は、はい！」

綾波ちゃんの周りをガンビアが操作する艦載機が旋回して、火力特化の主砲と魚雷を近距離まで詰めて雷撃するペア技。

一人だけ立ち回りがバーサーカーだが、遊撃部隊でもない旗艦の夕立ちちゃんも少しアレだし練度的にできるはず。こちらの艦隊に気を取られている隙を狙って放った攻撃だ。果たして成るか……おお！

駆逐艦一隻、撃破！

『食ラエー!!』

「ホッホオー今の砲弾当たると思ったの？ え、当たると思った？ 横角度15度ぐらい外してたぞ可哀想にねえ!」

『クツ——陣形ヲサイヘンセイ——!』

「あーだめだめ、再編成できてない。生憎お前の練度はコツチの艦隊より低いらしいなア!? 基礎的な性能が強いだけで経験が足りてな

いのか？ それとも連戦疲れ？ どちらにしてもお前たちは詰んだな」

『ナンダト——！ 何度モ湧イテクル虫ガア——！！』

「ブーメラランツスよ姫様ア!? 深海棲艦は量産する自分たちの艦隊の生態を自らご理解いただけてないとオ!? 傑作デスナア!!」

「し、穴戸、さん？」

敵の砲弾はデカイ。

俺の艦船は当たれば即死モノだ。だから必死に当たらないように逃げまくってる。それだけに専念していれば、あとは勝手にみんなが攻撃してくれる。

クソ、疲弊しているはずなのに、なんて強い艦隊だ。

深海棲艦のクソ共、あの艦隊を分裂させて各個撃破に乗り出すべきか……？

「第一戦隊は全門をあちらの艦隊に向けて発射しろッ!! 距離を保って動きを合わせる!! 早とちりで近づこうとするなよ!? アレは口マンチックな言葉をかけてハリウッド映画みたいに戦いやめるタイプでも、ポリウツド映画みたいにダンスと一緒に踊ってくれるようなタイプでもないんだからな!」

「深海棲艦って全部そうだと思う白露！ こんなワリに合わないよお〜!」

「あの邪悪な生き物をこの世から削除できれば幸いだが、完全S勝利はみんなが怪我なしで初めて成る!! 分かったな!? 絶対に、アレにだけは近づくなよ?! 綾波ちゃんがやったからこれ以上の奇襲は難しい!」

敵艦隊は数字だけなら壊滅まで追い込んでいるが、それでも親玉はまだ健在だ。

オタサーの姫かってぐらい下僕共に守られてるあの深海棲艦を倒さなきゃいけない。その一心で俺は必死に指揮を取って戦闘効率の昇華に努めているが、それでもアレはデカイ主砲を放ってくる。

『クツ——ゴザカシイ——!』

「お前みたいなバケモノには小賢しい戦い方で削るのが一番効果的ナ

ンダヨオ!!」

「え、どうしたの穴戸っち……!? つていうか、もう鈴谷たち艦載機ないんだけど!」

「艦載機がある艦は偵察機でも出して混乱させてやれ! 完全にゼロになった軽空母は艦隊の後方に下がれッ!」

単縦陣から横縦陣へと変更し、連帯した横移動で直撃は防いでいるが、強力な主砲を放ってくるアレには決定的な一撃を与える必要がある。

かと言って、あの個体の近くに突撃させるわけにはいかない。それこそ死ぬことになる。

秋津洲さんたちが駐留する島からは離れた。

その数十秒後には撤退を開始したらしい彼女たちの艦隊を、目視で確認する暇はなかったが、無事を祈りつつ深海棲艦への攻撃を繰り返した。

だが、俺が指揮する艦隊だけでどうするか……もちろん、逃げるしかない。だけどここで逃げても追ってきてきそうな感じがするし、かといって追ってこなくても後々面倒な事になりそうだし……だが、あくまで俺は秋津洲さんたちの様子を見に來ただけであり、それだけの装備しか整えていないのが現状だ。

ここで倒せないのは致し方ないけど、せめて最後の1撃ぐらいは食らわせてやろう。

『クッ——フフッ! モウ貴様ラニハ武器ガナイダロウ、分カツテイルゾ——!』

「え、すいません全然分かってないですね。よし俺の合図で敵艦に集中砲火を浴びせろ!! そうすれば尻尾巻いて逃げる!! はい行くぞー! 3、2、1。発射アアアアアアアア——!!!」

船が揺れるレベルの衝動が波打ち、それぞれが放った主砲と酸素魚雷は深海棲艦の方に向かう。

当たったか? 正解は半分半分である。

姫の一部が爆発したように思えたが、やはり撃破には及んでいない。

しかし一撃は与えた、ここからは理想的な撤退戦を……

「し、穴戸さん！ 敵艦隊の後方から何か来ます！」

「ハ!!」

双眼鏡のピントを遠くの方へと合わせる。

村雨ちゃんが言った通り、黒づくめの大規模艦隊が見えた。

艦種も確認できず、数も不明の大艦隊が迫っている。言われなくても分かる増援の報告。

それを聞いたみんなは、流石にヤバい、って顔をしているのがガラス越しで分かる。無線でも敵情報の確認を急ぐと言っているが、情報よりも防衛体制を敷くことに尽力してほしいとみんなに通告した。

艦隊のみんなは未知数、未確認の敵に対して既に体力と装備を消耗している。こんな状態で来られたら秋津洲さんたちを救出するどころの話じゃなくなる。

「穴戸くん、もしものときは僕がなんとかするから……」

「だめだぞ時雨ッ!! いくらお前がラッキーガールだからって、危険な事をしてなんとかなるわけじゃないッ! みんなで生還するッ!! 俺は人間ッ!! 人が人のために犠牲となる行為はあの深海棲艦とかいう動物と同じだッ!!」

「穴戸さん……」

とはいえ、深海棲艦の増援は本当にまずい。

こういう時、普通の人だったらどうするだろう?

もちろん、自分を犠牲にするに決まってる。

全艦隊に撤退命令を出して、ちゃんと逃げられるように俺の艦船が囨になれば……そうすれば、助かる可能性が高くなるかもしれない。

時雨に言った手前、乖離した思考だが、やるときはやる。

と思った瞬間。

『ナ!? キ、キサマラハ——ッ!!!』

「て、敵旗艦に主砲が命中ッ!!」

深海棲艦の姫様が後ろから攻撃を受けた。

数十秒後にそう判明する前は、後方の艤装が爆発したように視認していた。

先程まで驚異として捉えていた一隻の深海棲艦が、一発、また一発と、こちらの砲弾が着弾したような様子もなく、自爆のように……あるいは、裏切りを受けたかのように、後方から来た艦隊の弾頭を受ける。

『主砲……発射！』

『ク、クソォ——ナ、ンゲ——』

謎の艦隊から発せられた巨大な弾頭がクリティカルヒットした。動体視力が鋭くなっていた故に確認できたが、そうでなければ二箇所がタイムラグで爆発したような光景が見れただろう。

その後、追い打ちのように数発が命中し、敵旗艦に大爆発を起こした。下から魚雷を発射したユー511という外国艦が当ててくれたおかげで、スムーズな追い打ちが深海棲艦に炸裂したのだ。

跡形もなく海に立ち込める痕跡の煙、そして乗っている司令艦船の横を掠めた弾丸のような破片が、その凄惨さを物語る。

みんなに怪我がないかを双眼鏡で確認したあと、支援してくれた艦隊を確認する。

『な、なんですか……あれ？』

艦隊のみんなの無線が混雑し、あちらへの無線も周波数が中々合わず、双方共に聞こえなかったが、艦娘たちは心を同じくするように、戦闘態勢を整える。

が、鈴谷と熊野の残り少なく、損傷していた偵察機が艦隊の存在を確認した。

「し、穴戸っち！ あ、あれ！」

「分かってる！」

俺たちは白旗を揚げた。

コイツらと関わるとロクな事が起きない

親潮は心配していた。

「無線が途切れている……司令……」

結城司令官は心配していた。

「どうしよう……地味に俺のデスクのパソコン開きっぱなしなんだよなあ……シモ系の履歴しかないの見られたら司令カン人生終わるナリ！ ああくそういえば送金するためにバンクアカウント開いていたんだ……やべえ、電話も今は使えねえし、何かあったら経済的に終わるナリ！」

浜風は心配していた。

「トイレの順番待ちきれなくて……つい茂みの中で、足してしまった……だ、誰にも見られてない……ですよ？」

「安心せい、だあれも見とらんよ」

「そうだといいんですけど……」

磯風と谷風は穴戸提督の連れて行った艦隊に編成され、二人は呑気に艦隊の帰還を待っていた。

「おつと……こんな所に、柔らかそうなお餅ちゃんたちはっけーん。もう整備は済ませたかな？ もしまだだったら……オレサマが、トクベツな、セイビ？ してあげよっかア……？」

「邪気の多い人やね……浜風、下がっこれ」

「ちよ、俺けっこうマジメにしてあげようと思ってたんですけど……ほら、さつきそこの浜風ちゃん？ が用を足した後からずっとお腹おさえてるでしょ？ ぽんぽん良くするクスリとか、どう？」

ただでさえ警戒していた相手が意味深な発言を連発するので、第一警戒態勢を敷いた。

「結構ですし凄く嫌です。司令に報告させていただきますね」

「は？ この結城司令官様が直々にご指導するつってんだろオラア！？」

それがよりにもよって報告するウ……？ あ、もしかして、君もうソッチの提督がOMATAセイビ担当なの？ 我慢できずに茂みで

やっちやいましたあくイケない私に天罰をおく？　みたいなの？」

「……ッ」

「あ、ごめん。オレっち、実はちよつと自分の艦隊と連絡取れない状況でイライラしてて、外国人の艦隊を護衛していたから心配でさ……だから許してほしいナ」

結城司令はいつもどおりだったが、二人はあまり彼の事を知らないので、どこからか取り出した展開寸前の12センチ砲塔を収めた。

「これ、本当に危ない状況だったりとか……しませんよね？　提督も見に行つたつきり戻ってこないですし……」

「大丈夫！　あんなアホな提督が死ぬはずないって！　このオレが保証する！」

「保証できるといいんだけどね……」

「うお、いきなり割り込んで来ないでくださいよ荒木司令……」

荒木大佐も自分の艦隊の行方を心配していた。

自分の艦隊を心配するなど言う方が難しい。しかし、艦隊と連絡が取れない時のプロトコールに従うべく、艦娘と通信班に任せなければならぬ。

むず痒さのあまり、若干“覚醒”し始めている提督は、秘書艦ザラとともに事態の状況把握、周知、そして指揮統制の厳密化に努めている。

一応これは斎藤前線総司令官の命令だが、彼ならば言われずともやっただろうと、後にオイゲンに語っている。

「い、今分かつてるのは、艦隊の無線が途絶えているってことだけ……でも、予想はできるよ。僕たちの艦隊が、無線を阻害するほど強い電波を発する深海棲艦に遭遇した……とか。まあ、これは斎藤前線司令が言ったことなんだけどね」

「お二人もそう思いますか……いや、実は俺もそう思っていました。そのための対策なんてのは打ってるんですか？」

「うん……一応、一部の哨戒艦隊を援軍に向かわせたって聞いてる……」

「提督、大丈夫じゃろか……」

「……………」

浜風と浦風、そして一生懸命任務に取り組んでいる親潮も、本当に心配している。

それに気づいた結城司令官は、極めて珍しく、冷静に、そして不安を和らげるように、彼女たちに諭す。

「心配ないよみんな、宍戸は人心掌握術と処世術と場の空気を支配する能力以外にも、特別な能力があるんだ」

あはは……と、少し引きつった笑顔を見せる荒木大佐。

「随分いっぱい能力あるね彼……それで、どんな能力なんだい？」

「アイツはガチでヤバイ時は、必ず大成功させて戻ってくるんですよ！ 兵学校抜け出してエロ本買いに行って教官に見つかりそうになった時は、逆に泥棒捕まえて褒められましたし、前線勤務長くて深海棲艦との遭遇率高いのに生き残ってて、悪運の強いというか、単純に運が強いというか……」

「ど、どういうことですか……？」

「つまりね浜風ちゃん……アイツに任せとけば、大丈夫ってことだよ」

「結城司令……」

見つめ合う浜風と結城司令官。

「……今、オレたち、結構いい雰囲気だね。これ、多分セ〇クスの序章だね」

「憲兵さんちよつといいですか？」

「ハッ！ 自分は整備工作班補佐部隊所属、反攻作戦現在は憲兵としての能力を兼ね備えています！ 何か問題でしょうか？」

「提督という立場にありながらセクハラしてきました。ブラックな司令官として拘束してください！」

「艦娘にセクハラとは……って、イケメンで有名な結城司令官ですか……へえ」

舐めずりを見せる憲兵に対して恐怖を感じた結城司令官。

「オレっち、艦隊の様子見てこなきや……」

「お待ち下さい結城司令官。艦娘へのセクハラ行為は重大な犯罪行為です。あちらのテントでゆっくり話しましょう……おや？ 司令官

は既にテントを張られているようで……まったく、もう何をされるか分かつている様子ですね……」

「え、ちょ、ちがうちがう。それは浜風ちゃんに対してで、貴様に対してではないぞい！ あ、ちょ、マジでやめて、こういうの穴戸の役じゃないの!? ねえ助けてよそつちで隠れてるザラちゃんツ!!」

「あ、あの……お、お手伝いしても、よろしいでしょうか?」

「いいですよ、尋問には最低でも二人は必要だと言いますしね」

「グラツチエです!」

「あ、詰んだ」

・
・
・

「そして俺は屈強な憲兵と金髪ロリ巨乳に犯されるのだった……なんて展開あると思つた? うん? そんなわけないだろ何のために頑張つて指揮と部隊編成考えて忙しすぎる指揮がんばつたと思つたの!? もしもこういう状況になったときに、そんな場合じゃない!

つて感じの展開作るために、一刻も早く穴戸をコツチに戻す手筈を整えていたんだツ! このタイミングを間違えなかつたオレつちは偉い! あとね、できればザラさんだけ、俺のOmAtaを犯して……ね?」

まったく違うけど、結城が艦隊を動かすのに尽力していたのは確からしい。

「ただいま、みんな」

「し、司令っ! ご無事だったんですね!! 心配しました……あ、あの、そちらの方は……」

「……………」

ごく一部だが、驚いた表情で連れてきた艦娘を凝視するみんな。

知っている人も少ない……というより、かなり前の事で記憶が薄いのだろうか?

彼女をひと目見たことある人でも、まるで幽霊が出現したような目の前の状況に、頭が追いついていないのだろう。

「斎藤司令官、今から沖繩までご同行願えないでしょうか？」

「え？　だ、だが、まだそこまで行ってもいなければ、今はもう夜であり就寝時間で……」

「そんなガキみてえなコト言っつてねえでさっさと来いっつてんだよオラァッ!!!」

「き、気でも違ったか穴戸……!?!」

だが、司令官は俺を信用している。

その証拠は、次の一言で証明される。

「……だが分かった。荒木大佐、不本意だがここは頼めるか？」

「うん、大丈夫だよ……多分」

すごく不安定な言葉だが、今ここを任せられるのは彼しかない。念の為に補佐として大鯨さんを付ける。

負傷した柱島、及び秋津洲さんの艦隊は既に到着していたらしく、けが人はいるが轟沈が出ていないのは流石は秋津洲さんだと感服したと同時に、安心した。

俺たちは斎藤司令官、夜間哨戒艦隊数隻と、海軍の陸上上陸部隊の一部を借りて沖繩に向かう。

・
・
・

沖繩。

歴史的な濃度の高い場所であり、散りばめられた岩石には随所、資源が吹き出ている。

これの理由を深海棲艦出現による地殻変動と生態変化が原因と暫定的に決定づけているが、当然詳しく調べないと本当はそうかは分からない。そうだとすれば、さつき戦った強力な深海棲艦が根城にしていたのも少なからず関係していると思われる。

通常、こういう資材を確保するために遠征を行う。

それはすべての海軍軍人が理解しているところだが、普通は基地を設置できないような不規則な場所にあったり、遠征を繰り返した方が経済的であるという理由で基地を作るのは珍しい。だがこれほど大規模な資材があれば、恒常の海軍基地を建設しても理にかなった資材収入が見込めるだろう。

これぐらいの資材が島全土にある、という条件が付きモノだが……米中も欲しがっていたワケだと、ここにいるみんなが納得した表情を浮かべている。

今はそれどころじゃないが、後に沖縄周辺を周った際に、米軍基地の比較的まともな状態で残されていたのが見つかった。

非常糧食はもちろん、初期の艦娘整備システムや、インフラ、古い米軍機密情報などが存在した。この基地なら、少人数であるなら衛生問題をなんとかすれば生きて行くのには困ることはないだろうと頷けた。

「ま……ま、まさ……か……れ、連合艦隊……司令、長官……!？」

斎藤准将の言葉に、連れてきた艦隊のみんなが目を飛ばす勢いでまぶたを開けた。

「君は確か斎藤中将の……顔が似てるからすぐ分かったよ」

「な、なぜですか?! あ、あなたは確か鎮守府を強襲され、死亡したはずじゃ……いい、いや、そちらの艦娘たちも……な、なぜ……?」

——永原元帥。

元連合艦隊司令長官であり、俺がグアムまで追いやった人でもある。

追いやったって言い方、なんか悪者みたいだからお連れしたでいいや。

「宍戸くんなに勿体ぶってるの、そろそろ説明してあげたら？ つてか俺だけ事情を知ってるんだぜ」みたいな顔キモい」

「ほっとけ」

「斎藤司令、すごく困惑していますね……親潮さんなんて顔がムンクみたいになってますし……」

「あ、し、司令の前ではしたない……!」

「宍戸つちの前だったらどんなヤバい状況でもソツチ優先なんだね……」

「し、宍戸……どういうことだ!?　せ、説明しろ!!　さ、30秒でツ!!」
「そんな早く説明できるワケないでしょ……まあいいです。しかし、これはとても陰謀と業の深い話を含むので、しっかりと情報統制をお願いしますね?　もちろん、いま野営地を設置中の人たちも、状況が整うまで他言無用でお願いします……もし話したら、命に関わるので、そのつもりで」

「は、はッ!!」

そして、回想と共に、洗いざらいを斎藤司令官に話す。

それは、あの親玉深海棲艦を倒した後のことだった。

—————

「宍戸提督……です、か?」

元帥艦隊は驚いている。

「いかにも、小官は反攻作戦前線副司令の宍戸です。元帥閣下の右腕として数々の辣腕ぶりを見せたと噂されるあの大和さんにお会いできるなど恐悦至極に存じます」

艦隊のみんなにも聞こえるようにスピーカーを広げて挨拶をかまします。現状を艦隊のみんなに、薄く広く伝えるための手段としては最適である。

あの黒ずくめの艦隊は前に元帥の艦隊が使用していた艤装迷彩だと記憶していたのが幸いし、艦隊が主砲を発射する前に中断と降伏を行えた。彼女たちも前に使った司令艦船の白旗を見たお陰なのか、お礼と対話の無線を聞き入れてくれた。

「大和……?　あの、戦艦大和……?」

「れ、れれれれ連合艦隊の艦娘とか……な、なんてこったあーい!」

磯風と谷風は聞いた情報を精算し、放った言動が現状と一致した。それを聞いた艦娘たちは驚愕する。

「連合艦隊の……艦娘……た、たしか行方不明で……え？」

涼月も……いや、艦隊全員が困惑する。

落ち着けと言ってもそんなの無理だろう。

時雨もどうなってるのか知りたい様子で、鈴谷たちは俺の陰謀の全貌を知っている。けどなぜ、今になってこの人達がここに居るのか？ という点についてはまだ未知数である。

何より俺が一番困惑しているから、みんなに分かるように質問をしなきゃ。

「や、大和さんはなぜここにいるのですか？　そ、それに何で沖繩方面から……」

「……提督と私達は今、沖繩にいるんです」

「「!?!」」

・
・
・

……あれから大和さんたちはグアムにいたが、グアムでは限界だと察したみんなが決めた移住先が、豊かとは程遠いが、放棄された土地として有名な沖繩へと向かったらしい。

どうやって？　小笠原諸島経由で？　お前達やっぱりバケモノ

じゃん？　あと、いつからどこでどうやって何時何分何秒？　HOW

!?! と、かなり質問攻めをするべき事案だが、元帥も生きているし、みんなも辛うじて出撃できるレベルである事と、質問だけで丸一日かかるから、そこらへんの質問を後日に回して現状の説明だけを受ける。

しかし、今話さなきゃいけないような重要な事だと思ったのか、加賀提督から反攻作戦を実施する艦隊の撃退をお願いされていた……という事実が確認された。

これは前の沖繩作戦の話で、蒲生提督が指揮を取っていたときのことであったので、今実施中の作戦の話ではない。

元帥艦隊の装備は比較的新しい……多分、物資供給や出撃ルート

確保などを行っていたのは彼女なのでは？ 大湊にいる彼女からは無理だから鹿児島周辺の警備府か要港部もそれに加担しているのではないか？ あるいは……赤城提督も、保守派に加担しているの可能性が非常に高い。

一旦、仮定は胸の中にしまっておくが、今の状況を精算するための質問は最小限にとどめておこう。

いやあ……すげえわ。

よりにもよって一番会いたくない人に出会ってしまった。

「な、なぜ加賀提督が……？ ど、どうして我々を倒そうと？ 我々を陥れようとしていたのか……？ いや、この作戦自体が我々を陥れるための作戦だったり……？」

目の前の状況が信じられない司令官を引っ張るように話を進める。

「それよりも！ 永原元帥、小官を信用してくれたことは心からの感謝で絶えません。しかし、加賀提督の命で我々を打倒する算段を打っていたのならば、我々は一応、敵艦隊という事になりますが、なぜ小官らを迎え入れてくれたのか……元帥の艦隊が相手ならば、このような策をろうせずつとも、容易く撃退できたはずです。未熟なる小官の浅知恵から察するに、誠に無礼ながら」このまま全艦反転させて帰ってくれ”……ということですか？」

斎藤司令官は目の前の状況にかなり参っている様子で、俺も彼の質問を遮って質問をする。

「そこまでは直球に言おうとはしていなかったけど……まあ、合っているかな？ 実際私は、かなり疲れているんだ。私だけじゃないけど、みんなもね。加賀提督から、沖繩に進行する艦隊からここを守る代わりに物資供給をしてもらって条件だったけど、度々艦隊がここを攻めてくるものだから、人間を相手にするのは辛くてね……特に、国を同じくした同胞らと戦うのは……言わなくても、分かってくれるよね？」

後々、彼が本州に足を運んだ時に聞いた話から精算すると、彼の艦隊が実際戦ったのは、おそらく海外の連合軍との連携を無視して先に沖繩に行こうとしていた上海からの艦隊と、一部沖繩に近づいてきた

蒲生提督の艦隊と、連合軍の一部の艦隊と……ここにいた深海棲艦だけ、らしい。

ここにいた深海棲艦はさきほど倒された深海棲艦よりも強力で、それに随伴していた強力な深海棲艦が逃げていった。その逃げた深海棲艦こそがあの姫で、蒲生提督は不意打ちを食らったのだろう。その他で被害を被った艦隊もみんな、逃げていった強力な個体が原因だとみて間違いない。

もちろん元帥の艦隊からも攻撃された可能性はあるが、なぜ蒲生提督を攻撃して、なぜ加賀提督たちがこんなことを……？

まあ二派閥に分かれていたぐらいだから、考えるだけ無駄かもしれない。

とうかこれ終わったことじゃないの？

俺、自分の手をかなり汚して元帥たちの居場所作ったりして陰謀巡らせていたんだけど？

元帥が生きていたなんて……生きた人間には口があるし……俺の計画が全部……あーこりやだめだ。とうか下手なこと言ったら殺される。元帥の艦娘たちコツ凄いい形相で睨みつけるもんだから、ワンピース履いてない俺に、いったい何をさせようとしているのか……いや、俺は強い子、おもらしなんて絶対しないもん！

なんでコイツらはいつも俺を陥れるような状況に追い込もうとするんだ……ツ!!

時雨、村雨ちゃん、春雨ちゃん、白露さん、鈴谷、熊野……助けてエツ

！

「コブルブルブル……」

あ、コイツらもなんか震え上がってる。そうだよな？ お前たちは俺の陰謀に加担した艦娘だもんなっ？

『え？ なんで司令と元帥が前から知ってる風に話してるの？ え、まさか司令って……す、すごい人だったりしないよね？ し、不知火、黒潮、怖くなってきた私……』

『大丈夫ですよ陽炎さん……涼月たちの提督ですから、どんな人だったとしても……いい、いいえ、急に怖くなってきました……』

『何震えてるんですか皆さん、というか、この状況を整理できるのは提督の二人以外いないのですから話していて当然でしょう?』

『初霜の言う通り! みんな飲もう!』

他の艦娘はまだ状況が飲めてないが、ここにあるわけがない酒を飲む準備は万端だし……クソ! 俺がナントカしてやるよオ!!!

「……まあ、加賀提督一行の思惑には察しはついていましたが……しかし永原元帥。元帥は反攻作戦、我々第二次沖繩作戦艦隊の実施する進軍行動に対しての攻撃は言及されていなかったと見て間違いはないでしょうか? 外国の艦隊が襲来したのも、攻撃されたから……という理由であり、撃退を命令されたのは蒲生提督の沖繩作戦艦隊だけであると推測しますが」

「い、いや、来た物資の中にあつた手紙からは、反攻作戦が実施されるから戦つてつて言われたんだ。まだ艦娘と戦つてなかったけど、戦いそうになった相手が穴戸中佐……いや、大佐の艦隊だったから、大和が任意で止めたんだ……穴戸大佐なら、話を分かってくれると思つて……」

「ははは、元帥相手に信用を得るなど、小官にとってこれ以上にならない幸福です……不躰かつ不愉快な質問かと思いますが、加賀提督と小官、どちらが信用における存在か……など、今聞く質問ではないと思いませんが、お聞かせ願えないでしょうか?」

「こ、こんな時に質問するような内容ではないだろう貴様……」

「ははは、たしかにそうだね斎藤司令。本人を目の前にして答えなきやいけないのも、なんか卑怯だと思うけど、それでも穴戸大佐と答えるかな……加賀提督とはギブアンドテイクの間柄だったけど、穴戸大佐は本当に私たちを心配して逃してくれてたからね」

「二に、逃がす……?」

俺たちも一応ギブアンドテイクだったし、非情な事を言うとは八丈島の作戦を成功できれば元帥バケモノ艦隊なんてどうでもいいと思つていたので……まあそう思つてくれてるんだつたらいいや。

「かの元帥閣下にお手を差し伸べるのは部下として、一人の士官として、なにより世紀の偉人である閣下への敬意として当然。我が名誉の

極みでございます……信用を頂けるなら、愚考いたしました推測をお聞き願えればと思います」

「うん」

「加賀提督からは日本海軍が行う作戦についての言及はあったものの、既の上層部では周知であった海外連合軍の大規模遠征についての言及はなかった。永原元帥もご存知の通り、加賀提督も主目的は日本海軍に沖繩を占領を阻止させ、本国の防衛だけに集中させる……というのが、狙いだったわけです」

「……どういふことだい？」

「ありのままを話してしまえば、加賀提督は元帥を含めた艦隊が海外の大艦隊に撃破される事を望んでおり、最初から捨て駒として使うことが目的ではなかったのでは？ 加賀提督が理想とする沖繩の外国支配を実現した上で、結果として日本海軍を本国に閉じ込めることができる……更には、この陰謀を共に巡らせた同志を葬れる。死人の口は開きません」

大和さんが一歩前に出る。

「……それは私も考えていました。しかし、もしもこのままこの島を私達で守る事ができれば、続けて支援を受けることができ、その上で別の協力者を探す努力もしていました……」

しかし公式には死んだ身分として既に片付けられている人たちが、このまま隠れて協力者を探すなんて事は難儀だ。

っていかこの状況そのものが無理。

九州南部に幾つか隠れられる拠点はあるらしいが、そこも大淀総長にかかればすぐに特定されるらしい。匿う人は抹消されるし、生きる事がおおっぴらになったら大変だ。

保守派は元帥が生きている事実を公表すれば良かったと思っただが、よく考えたら日本の政権を握る官僚潰したのこの人たちなんだよなあ……大淀総長も言ってたわ。「万が一、元帥の存在が明るみになれば、彼らは全員、軍法裁判で死刑が確定するでしょう」ってね。

世間では元帥がなにかしたなんて話は浮き彫りになっていないが、大淀総長の手にかかれれば起きた事実を再調査させることだってでき

る。

怖すぎ、死んだ事になつてる人間にも起き上がらないように追い打ちをかけようとしているのか……まあ生きてるのは知ってたんだから、それぐらいは用心するべきか。

物資の問題も米軍基地の弾薬などを使っているらしいが、物資がなきや満足な戦いはできないだろう。

沖縄に元々ある保存食料の在庫があるから、無人島としては好条件だとしても、いずれ見限られるに決まっているしなあ……。

この人達も色々とあつたんだな……率直に言えば、すごく関わりたくないのに、もうここまで来たらスポスポだよ。計画された邂逅じゃない、ただ偶然ね、居合わせただけ。

「しかし、公式に死んだ人間に物資を送り続けるなど生産的ではありません。単刀直入な物言いをしてしまえば、元帥は現在、窮地に立たされている……ということ、間違いないでしょうか？」

「……そうだね」

瞳を閉じて本音を言い放った元帥。

助けを求めているような素振りはある。

だけど、このまま撤退すれば国家の威厳と俺のキャリアに関わる事となり、必死に積み上げてきたこれまでの準備計画がすべてパーとなる。

穏便に済ませるにはやはり撤退がいいけど、それでも待ち構えるのは大淀総長の陰である。彼女が沖縄にいる事実を知っていて、あえて野放しにしている場合もある。

よくよく考えれば、俺を前線艦隊に配属したのも、この元帥の存在があるからではないだろうか？ 総長の“今度こそ殺してこい”あるいは“また追い出してこい”という暗に秘められたメッセージなのか。考えすぎるのは悪くないクセだが、時には悪手を引く可能性もある。

勝手に撤退して俺たちが無事で済むかどうか……いや、そこまでは考えすぎだとしても、少しでも仲間たちの安寧が脅かされるのであれば、どちらにしても穏便には済まされまいだろう。

だから元帥には降伏を勧告し、海軍省及び大本営へ出向いてもらうのがベストで、それ以降の事は俺たちにとつては関係ないこととして扱える。あるいは、またここから立ち退いてもらう。

任務は無事に達成され、沖縄も無事に手に入れ、そして参加した主力メンバー株も上がる。

元帥以下艦娘たちを犠牲にするような真似かと罵倒と批判を受けるかもしれないが、多くを救う為に少数を捨てる選択は、この際許される行為であると思う。

さて、艦娘のみんなにも考えてみてほしい。

俺たちが撃破した深海棲艦のボスは多分元々ここにいたと思うんだ。強力だったとはいえ、かなり弱体化していたので、そう推測したんだが、秋津洲さん、オイゲンさん、俺の艦隊が束になってかかつても劣勢になるぐらい強力なフラッグシップ深海棲艦の艦隊だった。

それを追い出してもピンピンしてる元帥艦隊。

国に守られてても殺される自信ある。

この人たち守っても国に殺される自信ある。

どうする？ Life Card.

「……宍戸くん、ちよつと」

「お、おい何すんのお前!?!」

時雨は俺の胸ぐらを掴んで聞こえないところまで俺を誘導した。

「私もそのひそひそ話に参加してもいいか？ 状況把握の為にできるだけ多く情報を集めたい」

「ん〜この際だから、いいよ」

「ありがとう」

「斎藤司令、時雨、一体なんなの？ 今ね、元帥に重大な話を持ちかけ

ようとしていたところなんだよ？ まさか君たちは俺が彼ら上手く

大本営に行くようにと言いくるめてここを明け渡すように算段する

計画をまんまと見抜いたというのかね？ 流星は俺が信頼する二人

だな、話は早い、早くアイツらに話させろ。あの人達と一緒にいると

ロクな事が起きないんだよオツ!!!」

「そこまで考えてたの？ 僕は大和さんたちを救いたいと思ってたん

「だけど……」

「私も時雨に同意しているが、宍戸の言うことには賛成だ。何か良からぬ陰謀が渦巻いているのは承知している。だが、元帥閣下がご存命ならば、一応救出するのがセオリーだと思うが……」

ああ、斎藤司令は大淀総長と元帥の間で壮絶な戦いがあったこと知らないんだ。

だから救出しても大淀総長が彼らにどんな事をするのかって俺でも想像が付かないけど、決して彼らが望んだ結果にはならないのは確かなんだよなあ……だから救出にはなっても救済にはならないって、一番よく言われてるから。

でも、時雨は救済を望んでいる。

そんな無茶振りは……いや、できるか？　でも、俺これ以上変なことしたら最悪歴史の教科書で暗躍者として名を残す事になるんだよな。

「二………二」

俺のくあわいい艦娘が、つぶらな瞳でこちらをみている……!?

こんな膿溜めよりも汚らしい事を強要されている俺に対して、世界の深淵とか人間関係にまつわる色々汚い事情を知らないような顔で、こちらをみている……!?

「宍戸……」

斎藤司令お前はコツチみなくてもいいから。

「……分かった。じゃあ斎藤司令、アンタも加担するんだぞ。時雨も、司令も、俺と運命共同体だぞ。怖いことになったら反抗戦争も是非も無し、分かったなツ？」

「な、何がなんだかわからないが、承知した」

とはいえ、元帥のところに戻るまでの数十秒は相当長い気がした。俺はこのまま、長崎警備府を中心に、赤城提督と加賀提督を担ぎ上げながら保守派を名乗るのも一つの選択だと思っていた。

大湊警備府という一つの大型警備府の提督である加賀提督がまだ粛清されていないのは、相当力があるからだと言っていると解釈している。それで保守派で再び革新派を変えて行き、長い政治闘争に持ち込む作

戦は……いや、どうだろう。

そして元帥閣下の元へと戻る。

艦娘みんなが俺をみている。俺みたいなかっこいい提督、他に居ないよね？

わかりみ。

後で絶対に貴官らのOPPAIとOMATAで採算取らせるからなッ。

「永原元帥、我々としてもできるだけ戦闘を避けるべきという孫氏の教えは習っていないわけではありません。しかし、永原元帥が目指す安定と安寧を思えばこそ、何かと万事解決を目指すのが人間の道理というものです。つきましては、小官にまかせて頂きたく思いますが……よろしいですか？!」

「う、うん……一応、聞くよ」

Bringing Work Home

“ 連合軍は敗北し、日本軍は勝利した。

この一文はジョークのように思えるが、斜度を変えればそう見えてくるのもやぶさかではない。

実際に多くの日本人は、“ 連合軍が損傷を与えた深海棲艦を尾撃して沖繩を取り返した” よりも、こちらの一文を信じる者も多いだろう。

放棄されたが国土としては健在だったという、グレーゾーンにあった領土にはジャパンの国旗が掲げられ、国際社会では連合軍として参加した国は依然として批判的だが、それ以外は友好的な態度をとっている。特に旧サウジアラビア、現アラビア共和国の大統領はとても好意的なコメントを日本語で残している。

「スゲーデースー！ オメデトウ！ 今度、遊び、イクウ！」

しかし、何よりも驚かせたのが、公式記録では既に死亡が確定していた、元連合艦隊司令長官である永原元帥と以下の艦娘たちが帰ってきたことにある。失踪中の人間は、法律関係上の身分を確定させるために7年もの歳月を待つ必要があるが、過去に起きた深海棲艦による官僚襲撃事件を元にし、特別失踪として扱ったのが死亡の認定を加速させた。

大本営からの発表は未だになく、安否とコトの全貌については、“ 元帥は深海棲艦と戦っている中、島を転々として沖繩の島群の一角で救出を待っていた” 発表した以外は“ 現在調査中” との返答しか帰ってきていない。

その一方で、現在入院中の蒲生海軍大将に関しても“ 現在調査中” と述べている。

現在、九州に駐留するアメリカ太平洋艦隊総司令、ドグソドルジ元帥は“ 不本意ながら、事態の混乱を招き、今もそれを加速させていること、本当に申し訳ない” とコメントしている。方面軍の司令官が、正式に外交官を招いて会談を行う前にこのタイミングで訪問するのは非情に珍しいことだが、ドグソドルジ元帥の時代からは、人柄に似

合った礼節として通っており……”

海軍省、軍令部総長の部屋。

前伺ったときと全く同じような表情なのに、今までにないほど怖いのは、多分、オーラ？

「……話は大体わかりました。加賀提督と蒲生大将の事はこちらで調べますが……元帥を正式に海軍へと復帰させて、沖縄駐留軍の司令官に任命しろと？」

「せ、僭越ながら、意見具申を申し立てるのは大変恐縮ではありませんが、我々海軍にとつて、現状、最も良い選択かと……」

作戦を終了させた俺は、大本営への連絡と資料護送を斎藤司令から承った。長崎警備府の艦娘がつかの間の休息を堪能している頃、副司令たる俺が、しかもあんな大規模作戦のすぐ後に、なぜ軍令部に足を運んでいるのか？ もちろんそれは、元帥と交わした約束にある。

「……分かっているとは思いますが、元帥は我々の邪魔をする存在だという事は、あなたも知っているでしょう？ それを知った上で生かして連れてくる上に、更に司令官職まで与えろと？ ……たしか、北方の島々に行動が激化した深海棲艦が住み着いたので、その司令官に任命する方を探していたと、長官が言っていましたか……」

その手には乗らないぞ大淀総長さんよオ……？

パンパースを三枚重ねに履いている俺は無敵だぞ。

……蒸れるゼクソオ、ムーニーマンにしとけば良かったか……？

もつと高いオムツあったけどアツチのほうが肌触りが良かったのかもしれない。セールで安売りしてたのを大人買いなんてするんじゃないやなかつた。

「……戦略的、戦術的観点からしても、元帥の艦隊以上に沖縄を守る提督はいません。彼自身もそれを望んでおり、平穏さえ取り戻せれば、元帥閣下も、艦娘たちも……どの道、大淀総長の邪魔立てはしないと言っています。”余計なちよっかいさえ出さなければ、沖縄を守ることに専念したいです”……とのことです。友情の証、そして行動の信頼を得た小官が、和解の重要性を説いた結果です」

「そのお言葉は信用に値するものだとお考えですか？」

信用もなにも、個人的に話してみても、あの人が政治的にも軍事的にも大淀総長を阻害するような人には思えないし、そもそもただの行き違いなのでは？ と、本人の前では言えないし、そこまで踏み入りたくない。

「信用、ですか……元帥はお疲れの様子でした。身分を隠して逃亡する生活は、尋問よりも厳しかったのでしょうか。一重に、喧嘩をして、頭を冷やした……と言ったところです。不躰極まりない言動を発するのは大変心苦しく思います……そろそろ大淀総長も、頭をお冷やしになり、冷静に彼の利用価値を見定めてはいかがですか？」

「……………」

凄い失礼だ。股のモノがまた暖かくなった。

あの睥睨を直に浴びればパンパースのヌクモリティーが上昇するに決まってる。

しかし、これは俺にとっての一世一代の大勝負と言ったところだ。海軍への、一種の反抗とも言っていい行為。

——元帥を海軍に復帰させ、大淀総長を味方に付けるという、難題であり、複雑であり、俺以上に改善をしようと努力できるものは、現状居ない。斎藤長官も総長とグルかも知れないけど、こうなった以上は文句言ってられない。

問題の重大さを理解し、問題の存在すら知らない者が殆どの窮地に立たされている俺は、ハッキリと、そして明確に、元帥を革新派へと転身させる説得を行った。

元帥にとしては所謂思想の捻じ曲げだが、革新派が海軍内部の派閥闘争に、不戦勝のような形で勝ってしまった過去を思えば、現流に身を任せるのが最善であり——俺と、斎藤准将が、責任を持って大淀総長を説得すると言い包めた結果、彼は了承してくれた。

なので、残る問題は総長だけだ。

「小官は、我々革新派へと転身なざる様に促しました。あのよう政争を繰り返した間柄、非常に信じられない事だとは思いますが、元帥も、そして配下の艦娘らも、これを承諾して下さいました……しかし、

これは大淀総長の庇護下にある事を前提としております。軍令部長の一存で、海軍の未来が決まると言っても過言ではありません」

「……………」

あの軍令部の長が悩んでいるぞ。
要は、元帥の存在を認知しろと言っているのだが、頼む、仲直りしてくれエ！

海軍がバラバラになるか、一丸となって、新たなスタート——強く
てニューゲームとなるかのどちらかなんだ！

よし、そろそろトドメの一撃だ。

「元帥にその提案をしたのは、すべて小官です」

「知ってます」

「が、正確には言えば伝令に過ぎません……明石次官が、元帥とその艦隊が沖縄居てくれれば資材のやりくりがうまいから絶対に沖縄を守らせてください！ と妙案を承った次第で、どうしても仲直りして欲しいと……」

「アカシタ……ではなく、明石次官が？ 何故あなたに……？」

「それは直接お二人に話される方が懸命でしょう。元帥閣下の本心も含めて」

「二人……？ え」

総長ノ部屋にノックもせずに入ってきて来れる人って明石次官ぐらいしかいないよね。彼女の後に続いたのは永原元帥と、秘書艦と自称していた大和さん。

「な……ど、どういう、事ですかこれは……？」

「どういう事じゃないよ大淀！ 聞きましたよ永原さん達が襲撃事件には関与していないって！」

「え……」

呆然とするのも無理はない。

俺が連れてきた明石次官には内密に、彼が官僚襲撃事件の首謀者である事を打ち明けていたらしく、俺と元帥が誤解を説いたんだ。

誤解じゃないけど、誤解という事にしておこう、そしてすべてを穏便に済ませようと言ってるんだ。

「ひ、久しぶりだね大淀くん……も、もしよければ、海軍に復帰したいんだけど……」

「大和に永原ア……」

「い、色々君とはあったけど……私は助けられた恩はキツチり返す方なんだ。お互いのためにも、そしてこの海軍の為にも、協力し合いたいなって思ってる」

「……ッ」

これが本当の睨むって言うんだぞ、写真に撮って教科書に収めた
い。

「大淀！ 誤解だったんだからもう大丈夫なんだよ？ 大本營の資材がなくなっていたり、国家転覆の容疑とか、そういうのには一切加担してないって話してくれたから、永原さんは悪くないんだよ！」

「お互い、勘違いでいざこざを生んでしまったのは否めません。しかし、提督も私も、今は仲直りをするべき時だと考えました。この大和、提督はもちろん、今後は大淀さんと明石さんに従うと心に決めました」

「クッ……大和さん……明石たん……ッ！」

海軍省内の一室で、重い沈黙と言葉を交互に挟みながら総長の決断を待っている時間は非常に長く感じた。

なかなか掴まらない明石次官と元帥の仲を先に取り持ち、快く全てに承諾してくれた明石次官と共に、最終決戦の場である総長ノ部屋で決着を付けさせる。

やはり頼れるのは明石次官しかいないと思った俺が最後に放つ最終兵器。何かと話す機会も多かったのが幸いして顔も覚えてもらっていたから本当によかった。

これが、全てを丸く収める方法。

元帥を沖繩司令官にさせて、仲直りさせて、沖繩奪還という作戦に成功する。

大まかな現状だけなら、これでカタが付くだろうが、

今後のマイクロマネジメントに関しても、斎藤准将……そして、頼れる俺の上司こと蘇我提督や、情報通の結城……そして色々疑惑は

残るが、赤城提督にも助力を申し込み、元帥復帰で発生する諸問題の解決をすれば、風化までの道のりをスムーズに進められるはずだ。

このビッグネーム達の中核を占める俺。海軍は、今や俺の計画の手の中のことだア……！

「……これも穴戸大佐の一考ですかッ？」

「僭越ながら、明石次官との会談を元帥同伴のもと、させて頂いた次第で……」

「……なんでテメエミてえな半端モンが明石さんと話したんだよオラアツ!!」

フツ……そんな怖い顔で脅しても無駄ですよ？

もう出すモン全部パンパースに出しましたから。

「大淀総長……この永原は、このときより、あなたの下で采配を振るう所存です。力不足の目立つ私ですが、少しでも閣下のお役に立てるならば本望です」

頭を下げた元帥と大和さん。

「フウウウウ——分かりました。しかし私は海軍の人事権を持っているわけでも、行方不明者が生存していた時の法律上の関係を修復する立場にもありません。こういうことは海軍省の長である海軍大臣に話されてはいかがですか？」

元帥を殺そうと躍起になってた人が何を言うんですかね。大淀総長には話さなきや俺の苦勞が台無しになるんだよ全部。

それにあの人忙しいんですよねえ今。

アメリカとの会談に出席するからとかで直接会えないし多分メールは見ないし……一応、明石次官経由で人事局局长には話しを付けてあるし、元帥たちに関しての資料の構想ぐらいは考えてくれるだろう。

「大淀、いい加減に永原さん許してあげよう？　ねっ？　あとで一緒にごはん食べに」

「許します、というか最初から許してましたから」

嘘付け100人ぐらい殺せる眼光振りまいてたくせに。

事実上これで、元帥の身柄は一応だが保護されたということだ。油

断は禁物で、まだまだ仕事は残されているが、内部でもつとも脅威である彼女が、敵じゃなくなる。この意味合いはとても大きい。

俺のお腹が四次元空間ぐらい捻れて時空雷雲に飲まれることも無い。

「そ、それでは、小官はこれで、失礼いたします。突然の来訪にもかかわらず、貴重な時間をくださり、ありがとうございます」

「いいえ、こちらこそ聞きたい事があったので、わざわざ足を運んでくださりありがとうございます。永原元帥をここに連れてきて頂いたことも、感謝します、流石はあの穴戸大佐ですね」

初めて本気で褒めてもらえたような気がした。

うれションものだが、あいにく膀胱は空っぽだぜ。

「かの大淀総長にお褒めいただくなど……五臓六腑に染み渡る至りです。思い返せば、大淀総長からそのお言葉をいただくために、鉛のように鈍っていた体を粉骨していたように思えます」

「嫌いじゃないですよ、その言葉」

「フフフ……」

不敵に笑う二人の策士……かつこうい!!

「……そういえば穴戸大佐、作戦前にも色々と柱島泊地や赤城提督の件で、各所に連絡を入れていたと聞きました……特に、赤城提督の部下を説き伏せてくれたのはありがたいですが、何故そのような事をしたのですか?」

「は、はい?」

突然の質問だが、そういえば聞きたいことがあるって言ったな。なんのことか分からないと三者三様に首を傾げたが、大淀総長は多分、佐世保鎮守府の赤城派との対談の事を言ってるんだろう。

「私が口に出さずとも、我々の状況、意向を察知し、最善の行動を尽くす……素晴らしいと思います」

「き、今日はヤケにお褒め下さいますね……小官に、また何か任務をお与えになる前兆とお見受けしてよろしいのでしょうか?」

「いいえ、それほど赤城提督たちの部下は厄介だったと言うことです。しかし、何故参謀長らを説き伏せたんですか? 私以外の誰かから命

令でもされましたか？」

「め、命令はされておりません。大淀総長、海軍大臣に忠誠を誓う小官自らの意思により、保守派の牽制をするべく、僭越ながら行動に移させていただきました」

嘘をついた。本当は、荒木大佐を含めた士官たちと一部の艦娘が迷惑メールみたいに奴らからボイコットやサポータージュのお誘いを受けていたから直談判しに行っただけなのにね。

参謀長を含めた、自ら赤城派と名乗っていた人たちがいたんだけど「沖繩への領土拡大なんて望んでない！」と抜かすもんだから「既に実行段階の作戦でイッパイ人死んだら赤城提督悲しむでしょッ!!」

と言い返して、更には「お前たち自分たちが作戦外されたからっていい気になってんじゃねえぞオラア！ こちとらお前たちが出ないもんだから前線に出なくちゃ行けないんだぞオ！」と強い罵声と共に、赤城提督は連戦でかなりお疲れだから少しは休ませてやれ、と締めて部屋を出ていったつきり、あの人たちには会っていない。

佐世保第一鎮守府の参謀長、副司令官に任せたので、ソっちで何とかしてくれたんだろう。それに加えて艦船派や荒木連合艦隊司令長官も革新派に加わったと曖昧な所だが嘘をついてやった。そのせいで赤城派の内部で喧嘩になったらしいが、作戦中の封殺には成功した。

フザケてるぜ、自分たちがあんな面倒くさい作戦に参加しなかった事を涙してありがとう。

「ふふふ、そうですか……あとそれから宍戸大佐、オムツは変えたほうがいいですよ」

「自分の事は……自分が一番分かっていますよ」

「フフフ……」

「……宍戸大佐は普段からオムツを履いてるんですか？」

「断じて違います明石次官」

これぞ通常業務

「フツ……国家の危機？ 内部闘争？」

そんなの、俺がぱぱっと国の重要人物掻き集めて、話し付けさせて、俺の人脈があれば未然に防げて、全部丸く収めるなんて簡単だ。

というか、簡単すぎる。

最早歴史に名を残してしまうだろうな、俺。

なんて言うと思った？

簡単だと思った？

とんだ間違いだよ。ただ俺が奔走してクソ忙しい明石次官の居場所と元帥を秘密裏に大本営まで持っていく算段を企てたと思ってるんだッ!?

必要な情報をあらゆる方向から掻き集めてね、明石次官の居場所突き止めてね、それで彼女のスケジュールキャンセルさせるまで頑張つてね、元帥と大和さんを一般人の目に付かないように東京まで連れて行くのに軍用車まで佐世保の軍需部部长から借りるお願いしてね、すつ飛ばして来たんですよ。

それで大淀総長との会談にピッタリ合うようにしないといけないし、俺がこれまでやってきた努力を見ずに、簡単だと抜かす輩は俺のFISTを食らう権利を得た。

なおかつ大淀総長に殺されないように元帥とのやり取りを実は記録してて、ボイスレコーダーを持ってくるのがめっちゃくちゃ大変だった。今後これを使うような事態にならないことを願う。

海軍省の局長は明石次官が言えばなんとか協力してくれたので助かったが、ここまで入念に、かつ迅速に計画を立てなきやいけなかったのは生まれて初めてだ。

やったー勝ったー軍令部総長に勝ったッツ!!!

この勝利はメリハリがなさ過ぎて気づかないし指摘しても「え？」としか反応されなかったのを見るに、この大きさを理解する者は少な

いんだろう。

だが、一度でもリードを勝ち取る事で、俺の実力と言う名の爪痕を残すことができる。

つまりは面倒事増加とマークされる頻度が高まったのだが、ポジティブに考えよう、海軍という巨大組織の中で出世街道を歩むのに十分な存在感を出すことができたんだ。褒められてもいい。

あとこんなクソみたいな用事を片手に海軍省に足を運ぶ事は二度となくなつたはずだ。

意気揚々としなないといけないといけない、全部これで丸く収まつたんだから。

俺は、今や絶頂しそうな顔で執務に励んでるぞい！

大淀さんはね？ 俺ですら尻込みする、追隨を許さない権力を持つてるあの人には当分の間、敵いそうにないし、相手するつもりもない。

一応、大淀さんには一定の信頼は置いているつもりなんだよね。加賀提督？ 赤城提督？ 荒木連合艦隊司令長官？ 究極召喚みたいな反乱分子たちを抑え込めるのはあの人だけだと思うし。

長崎警備府の執務室。

「いやあく〜凄く怖かつたですよ〜！」

「オムツは替えてきたか？」

「何日前の話だと思ってるんですか当たり前ですよツ!! はあくでも久しぶりにS A N 値削つた気がする。知ってる？ 大淀総長が俺を褒めてくれたんだぜ？ これってつまり『あんまチョーシこいてつとテメエのケツと顔に決して落ちることのない泥塗るからなツ?』って意味だと思うんだ。みんなの意見を聞かせてほしい」

「普通に褒めていたのでは……?」

親潮は分かかってないな、日本語という言語に隠された秘密のメッセージを。何もかもストレートに言うような人が海軍のトップになるわけないじゃないか。

「親潮は純粹で可愛いね」

「し、司令……! で、では私を司令の専属秘書艦にし」

「ゴホンツ!! 仲良きは大変結構だが、勤務中だという事を忘れるほ

ど仲がいいのは些か問題かも知れないぞ？　織姫と彦星の御伽話を知らぬわけではあるまい？」

「も、もう司令！　司令と親潮が織姫と彦星だなんて……え？　でも最終的には離ればなれになる……し、司令！　私を置いていかないですよね!？」

司令呼び、俺と斎藤司令を指してらしいんだが、ややっこしいから、もう名前で呼んでくれないかな。

作戦の成功は待機組だった警備府の連中だけでなく、日本中の話題の種となっている。

沖繩で発見された資源は予想を超える量で、日本国としてはこれを手に入れないのは損をするのと同じであり、我々はこれを手に入れた――資材の備蓄を高め、行動範囲の拡大を可能として、なおかつ輸出も可能にするかもしれないと鮮明に発表した大本営の好感度は第一次作戦失敗からグンと上がった。

主力は秋津洲さんの艦隊と柱島外国艦艦隊だったけど、怪我をした艦娘もいる。適切な治療が行われており、近々後遺症が残らないまま復帰できるようになるとも発表したので、作戦は成功したと言って間違いないだろう。

だが、それらを凌駕する事故というか神隠し事件というか……流石に元帥が沖繩で生きていたなんてとんでもないニュースは作戦の成功よりも、そもそも元帥を助けるために行った作戦なのではないか？　という推測も出てきている。そりゃそうだ、通常ではありえないが、現実起きている出来事の実態関係を繋げるために推測を巡らすなんて人として当然。

“助け出した”本人である俺は佐世保鎮守府に帰ってきてから拷問級の尋問を食らったが、俺が知ってるすべての事実を話すことややしくなる以前に俺の立場がバイコトになるので、とりあえずあそこにいる、だから連れてきた、以上！　と説明して事なきを得た。それを伝えるためだけに3時間以上の拘束されて質問攻めなんてクソみたいだと思う。

元帥の事を知っている人は多く、みんなも心配していると思うし、

何より今後、彼が安心して海軍に復帰して勤務できるようにするためには周りの協力が必要だと思った。

だからワザワザ海軍省と周辺の知り合いの提督方や士官たち、兵学校にも赴いて校長に話したりと、佐世保で待機命令を出されている元帥の様子を教えて、彼のバックアップになれないかと密かに協力を仰いでいたのに、それも大淀総長に筒抜けだったとは思わなんだ。は、マジコワッ。

交渉で島を明け渡すように言ったのはこれで二回目だ。

国から追い出した一回目とは真逆で、二回目は海軍への復帰を取り図る。

永原元帥が沖縄に来なかったら蒲生大将を沖縄に送っていたらしいから、結果的にはいい方向に持っていていく事ができた。

まだ事後処理よろしく、作戦の精算作業に取り組んでいる斎藤司令と親潮の執務室を訪れていた。まだ副司令官なので、横に置かれたテーブルが俺の指定席となっている。

「元帥が復帰できるようにと散々私も出回っていたが……それほど心配するような事なのか？ 精神肉体に異常が無ければ、連合艦隊司令長官だったお方を無碍に扱うような真似はしないだろうてに……」

斎藤司令には悪いが、大淀総長に殺されそうだったとか、俺に彼らの始末を命令していたとか、そもそも無理だったから彼らを逃して、その因果が巡ってこうなってるわけで……という諸事情を彼に説明する気はない。

だが彼と、海軍大臣には、永原元帥を守る盾となってもらわなければならない。彼の復帰を全力で応援してもらおう。

一方で長崎警備府の艦娘たちは、俺と同じく新型の深海棲艦が出現し、敵の情報などを佐世保鎮守府からきた情報参謀たちに話したので、作戦よりもそちらのほうがお疲れのご様子である。作戦のボーナスとして有給をもらっている艦娘たちだが、一部の艦娘はもらっていない。当然だが緊急時には戻らないといけないので、特別休暇でもない限りは警備府近くにいることを推奨される。

少佐以上の艦娘は代わりに給料ボーナスをもらったらしいが、あま

り多くないから喜ばなかったし、ほぼ詐欺なので暴れていた白露さんをみんなで抑えるのが大変だった。無論、俺は有給どころかボーナスすらもらっていない。

俺は各地の同期に連絡し、志を共にし、時間を過ごしてきた艦娘たちと俺を慕う将兵たちにクーデターのお誘いをしようとしたが、公文書と声明文を作っている最中に今度は鈴谷が暴れだしたのでそれを抑える。

そもそも前線に参加してた下士官と一部の連中はもらってるらしいから当然だろう。

また、全員が一齐に休暇を取ると大変なので、交代で休暇を取っていくスタイルになっている。

適用される人たちも含めて、年に決められた日数の休暇を取れる人の意見要求も取り入れ、ただでさえ面倒くさい制度を作っている海軍だが、それより更に細かい管理が必要になってくる。

「シフト管理は進んでいるか？」

「もちろんですよ……ハア……」

そして、実を言えば、その休暇の管理任されてるの、俺なんだよね。

こういうのを管理する適任者がいるのに、俺がまだ副司令を解任されてないからって理由で任せるなんて、クソ！

「それができたら私に報告しろ。一応、修正が必要な箇所は言ってやるが、なるべくミスのないようにな？ 今日一杯で大方片付けてほしい……まあ、私なら今日の夕方ぐらいには終わらせられるだろうかな？ ははははははー！」

「そうですねははははははッツッ！」

テメエの方がうまいだろこういうのッツツ。他の事で勝てないからってマウント取ろうとしやがってこのクソメガネがアッツツ。

あと外回りから帰ってきたばかりなんだよコツチはッツツ。

反攻作戦からの、沖縄国土復帰の事後処理、新型深海棲艦の情報提供、そして、行方不明者リストで最も謎だった元帥とその艦隊の奇跡の帰還……をしてからの暗殺とか謀殺を防ぐための外回り仕事。

全部カタを付けたと思ったら今度はシフト作りかよ。

俺にこんな面倒くさい上に負担の大きな仕事を押し付ける司令官に、内心悪態を付きながら執務に励む。一応、元帥の件を穩便かつ海軍大臣や彼の知り合いにも、元帥と大淀総長との間に必要なクツションとなってくれと頼んだため、個人的な頼み事ならまだしも業務上の仕事はちやんとこなすつもりだ。

「失礼します穴戸副司令、現在休養中の者を含め、警備府構成員からの有給適用者すべてから要望を入手し、言われたとおり暫定書類を作りました。ご確認ください」

「ありがとうございます」

「もう出来たんですか司令？ やっぱ警備府内放送の力は絶大ですね……」

警備府各施設や人通りの激しい廊下には超量産系薄型テレビを設置してある。これは俺の要港部でもあった奴だが、警備府だけあって人員に比例して多い。

そして何を隠そう、海軍産である。

とても画質が悪いし原価と製造コストを限界まで削ったタイプだが、壊れにくさと設定のややっこしさを重視したデザインとなっている。

沖縄にいる陸軍との連絡系統を資料としてまとめている参謀部も使いたがっていたが、自分たちの休暇に関する事なので、先に使わせてもらった。

資料に目を通し、ミスがないか確認する。

「……おい、神風と旗風は逆じゃないのか？ 神風たちと話したんだが、確か神風のほうが最初だったような気がするぞ？」

「あ、しまった!! 多分新人が間違えたのかも……す、すいませんー!」
「あと……この時間被ってるし、この時期は余裕がないから予備ができるぐらいまでは人員ほしいし、っていうか鈴谷の名前まで入ってるじゃん……鈴谷は適用できないぞ」

「す、すいません! 鈴谷さんが部屋に寄られた時、あまりにも自然に『鈴谷の名前入ってないんだけど』と指摘されたため気づきませんでした……あと、短いスカートからパンツが見えたので……我ながら不

覚……ッ！」

無意識に短いスカートの中を見せてしまったのは致し方ないとして、鈴谷というギャル風スケベ艦娘に唆されるとは些か根性が足りてないのでは？

俺は寛大だ、ミスぐらいは許してやらんこともない。

「いや、ミスぐらいは誰にでもあるよ、だから俺は許したる」

「さすが司令です！ ミスを口うるさく咎めない優しさを——」

「だが俺のイチモツは許してくれるかなッ!？」

「「え……?」」

あとで親潮がいなくなったときに斎藤司令を驚かせようとして待機させてた、股間からまあご立派ア！ マジックバルーンが勢いよくここにちわさせる。

「いいか？ 今から10数えるうちに、その汚ねえケツを、ここから特務参謀室に持っていきやがれ！ さもねえとナマモノぶち込むぞ!!

ワン……ツウ……テンツツ!!」

「あああああああアツツツ!!!」

わりとガチ目なダツシュに対して、ガチの逃走を図ろうとした士官は一転びしてから持ち直して出ていったのを確認した。

「……穴戸、それはやりすぎだぞ」

「今は俺が預かってる部下です、教育方針には口出し無用でお願いします」

「アレは教育だったのか……?」

「あ、あわ、あわわわわ……し、司令の……が、あ、あんなに大きくつ……は、入らないっ……! あ、し、萎んだ……」

風船にしてはホンモノ似で勢いがあつたもんだから、どうやら親潮は本物だと思ってるらしい。性教育は済ませてあるはずだし、ムツツリな親潮なら“こんなデケエのあるわけない”って分かっているはずなんだけどなあ？

まったく、とんだスケベに育ってんな親潮。どんな教育したら黒い下着なんて着てくるんだよ。

ちゃんとした性教育は、俺がきっちり済ませてやらねえとな。

ほわほわほわあ〜……。

『んっ……し、司令……は、入らないですう……』

『いや入ってんじやん。こんなに濡らしやがって……え、これでハジメテなの？　こんなんで排水量駆逐艦ってマ？　戦艦の間違いいじゃないのか？　色々浸水が激しいみたいだけど、演習だからって容赦しないよ？　このまま成されるがままでいいの？』

『だ……だめですう……い！　は、はやく、だめこんをお……！』

『おいおい、自分からダメコン（意味深）欲しがってるぜコイツ？

とんだ欠陥を持った艦だなあ？　おん？　んじやそろそろ俺のダメコンを親潮の船底に開いた穴にぶち込んでやるか……』

『だ、だめですう！　そんな激しくしたらあ……なんか飛んじやいますう〜っ!!』

『艦載機も搭載できねえのに何が飛ぶってだよアア!!　おいおい自分からダメコンに食らいついてやがるぜ？　艦船整備課程甲種の俺でも手に負えねえよ。　オラア！　管制塔ハートマークにしてんじやねえよオラオラオラオラオラオラオラ!!』

個人教育もたまにはいいもんだ。

「し、穴戸……提督っ？　悪鬼のような顔になられてますよ？」

「言っちゃ悪いかも知れないですけど、深海棲艦みたいな顔ね」

「す、涼月？　そ、それに初霜も、いつの間に……」

涼月、それに初霜。

警備府のエースたる両旗艦が、俺の顔を覗いていた。

「あ、そうだ。穴戸大佐ってこういう顔する時は、だいたい如何わしいことを考えている時なんですよね……」

「な、何の言いがかりだ急に!!　俺の頭の中急に覗きやがって……テメエらもダメコン積ませてやろうかあ!!」

「お、落ち着いてください穴戸提督！　こちらに赴くときはそう言っ
てやれと、時雨さんに言われただけです……」

なんだと、あの時雨め。

こんな動揺してたらまるで本当に妄想していたみたいじゃないか！
二人共、ジト目を向けなくてくれ。だいたい俺が本当にやましいことを考えていたとかなんで分かるんだよ？

時雨には後で、アイツの布団の下に蛇のおもちや仕込んでやる。

「宍戸大佐……勤務中なのに……流石にそんな事を考える人だとは思わなかったわ……」

「親潮さんもいらつしやるのに……ひどいです」

ひでえのはコツチの台詞だよ。

なんでこんな軽蔑されなきゃいけないんだ（逆ギレ）。

「……なんの用かな涼月くんに初霜くんツ!? 俺は今、君たちみたいに前線で戦っていた娘たちがスムーズに休暇を楽しめて、なおかつ警備府にも負担がかからないように人事を取り計らっていたところなんだよ！ 更に出撃する艦娘によって資材の減りが変わるし、練習、演習目的で使用する在庫とかも再計算する必要もあるし、部下たちのミスを直している最中に、そんなくだらしない妄想を考えている暇が今の俺にあると思うのかねツ!?」

「そ、そうだったの宍戸大佐……?」

「そうだよツツ!! それなのに……それなのに、言いがかりみたいにな」如何わしい事を考えていた」……だとお!? あわよくばジト目で時雨の狂言を信じ切っていると暗に俺に見せつけ、俺を軽蔑するなど何たる所業かね!? あー分かった、もうね、やる気なくしたわ。あれ? まだこの書類オレの目の前にあるの?」

「し、司令おちついてください!」

「ふーん、俺の中のやる気ゲージ、破壊、報酬、功一級業務放棄勲章、部屋直行ダラダラ砲、キラン、キラン、キララララン、キラン……俺、宍戸型一番艦の龍城! 感謝もされねえ罵倒軽蔑の嵐の業務なんてやってられねえから! よろしくねっ!」

「し、宍戸、いいから落ち着け、な? 話せば分かる」

「なに暗殺された総理みたいなコト言ってるんですか貴様ア!? ぜーんぶ、初霜と涼月のせいなんだからね! あと時雨!」

「も、申し訳ありません宍戸提督！ 言われたとはいえ、軽率でした……」

へえ、申し訳ないと思ってるの？

涼月、その涼しげな顔してさ、表情あまり変わらないけどさ、頬が結構赤いしさ、逆にエツチだよ。そりゃパコりたくなるに決まってるしさ、まあ、なんていうの？ 二度と上官に対してそんな口のきき方とか、軽蔑できないようにね、教育する必要があるんだよ。

『ふふふ……さつきまで威勢はどうしたんですかつ？ じょう、かん、さんつ？』

『くッ……い、み、見くびるなよ駆逐艦の分際で……！ せ、整備された重雷装で、前と後ろを交互に直撃させて、挟撃して、俺をナメた事を後悔させてやる……！ う、うお！』

『ふふ、そんなこと言って、涼月が動いたら可愛い声で鳴いちやうじゃないですかあ……提督、どうされたいか、ちゃんと素直にお口に出不ないと、止まつちやいますよ……？ ふふふ……』

クソ……！ なんで負けてるんだよ俺……！

涼月お前！ ……く、駆逐艦の分際で……！

「……？」

なに首かしげて分からないみたいなのフリしてんだよ涼月お前……！

表情が変わらないから一段とエロさが際立つんだよお前はア!!!

「コホン、まあ冗談はさておき、本当にどうしたん？ 見ての通り俺は休暇の採算で忙しいから、手が必要だったら他のクチを当たって……く、口……!?! お、俺は負けねえぞスズキッ！」

「し、宍戸提督は、な、何を言っているのでしょうか……？」

「分からないわ、でも私たちが来たのは、提督にお客さんが来ている事を伝えに来たからです」

「H U H ? お客さん!?! 誰?」

「にわかには信じがたいですけど、アメリカ太平洋艦隊の総司令官……と名乗っていました。本当かどうか分からなかったけど、穴戸大佐に話せば自分から来るはずだから、伝えてくれと言われたわ」

アメリカ太平洋艦隊の、総司令官……？

「なるほど、可哀想に……」

「ど、どういうことだ穴戸？　な、何故貴様をアテにして太平洋艦隊総司令官が来ているのだ？」

そんな度肝抜かれた顔するなよ二人共。

「長崎警備府の分艦隊はアメリカ将兵救出にも貢献し、更に沖縄では秋津洲さんたち程ではないものの、沖縄開放という偉業を最前線の艦隊として武勲を上げました。その警備府の司令官にお会いして話したい……ということなのは？　多分まだ俺が司令官だと思って、俺の名前を上げたんでしよう。アメリカ海外士官のスターたるベリングハム少佐や、他の海外士官も出入りしていますし、もしかしたらその事で目をお付けになられたのかと」

「な、なるほど……貴様が呼ばれたのだから貴様が行くべきだろうが、そういう事情であれば、二度手間をする必要もあるまい。ベリングハム少佐もここにいることだし、行くついでに声をかけておこう……しかし、やはり副司令と司令がいるのはややっこしいな。参謀総長を解任してお前をそこにつけるか？」

「い、いや、確かに不鮮明な役職ではあるものの、後先のないオツサンを解任する必要はないかと……あ、じゃあ俺はこの資料を精算し終わり次第、参謀部に向かって詳報書類の最終確認も行うつもりです」

「分かった、では行くぞ親潮」

「あ、はいー」

残された涼月と初霜は何もすることがないのか、ソファアに居座り、俺も司令席を占領する。

執務室つてさ……エツr。

「執務室つて……やっぱり、少し寂しい気がしますね。何時もは二人きりで、でも半分以上の時間は、一人で過ごす……提督や司令官になると、こういう時間を過ごす事が多い……のかしら？」

「俺が執務室で一人に成れた事って稀だぞ」

「ふふ……穴戸提督の周りには、いつも、いろんな人が居ますものね……」

君たちみたいに、ね。

初霜は寂しいと言ったが、全然そんなことはないぞ？ 一人でできる……あるいは二人、いや三人でできるアソビはたくさんある。

現在俺が鎮座する席に、俺一人がギリギリ肩を竦めて入れるレベルのスペース。

足元を見せないという、ある種の緊張感と威圧感を彷彿とさせる心理学的構造になっているため、もちろん、誰が入っていたも見えない。とはない。

股間のビッグフットが、机下フ○ラ任務に励む涼月の雪山みたいに長くて白くて綺麗な髪と肌を穢す。

それをゴミみたいな目で、あるいは妬ましそうにみる初霜だが、無意識にパンツの中の定期メンテナンスを行う。

これほど楽しいアソビある？

「……グへへへエー！」

「やっぱり如何わしいこと考えてるんじゃない……」

「なんだと初霜、俺が何時如何わしいこと考えていたというんだ。証拠でもあるのかねッ!？」

「鳴ってる電話に出ないぐらい脳内の世界に浸っていたのが何よりの証拠なのでは？」

「今取ろうとしてたんですウ——ツツ!! はいこちら長崎警備府執務室ですが……え、斎藤長官!? 失礼しました、現在斎藤司令は執務室を離れております。入用でしたら、この穴戸めが責任をもって伝言を承る所存です……ん? 小官を含めて、佐世保鎮守府のパーティーに……ですか?」

マジロ

佐世保鎮守府第一鎮守府、控室。

そういえばコツチの問題忘れてた。

……特に加賀提督相手には手こずっているが、俺のツタを伝って、後から聞いた情報などを精算すると、蒲生提督は最初は深海棲艦教だったという最初の仮定は半分当たっていて、半分当たっていないかった。

深海棲艦教の上層部というのは元々、共産党政府から多額の資金を受けていたと結城から聞いている。だからわざと失敗して日本海軍を陥れる算段だと俺は思っていた……だが、

「そのような自殺行為をするわけがないだろう？ 私は本当に沖縄作戦を成功に導こうと思っていたんだ……だが、まさか新種の深海棲艦に加えて、元帥の艦隊と交戦していたとは……」

保守派と革新派、両方の顔を併せ持つ蒲生大將は、表では愛国心を謳いながら裏では沖縄と佐世保鎮守府を使って日本海軍にクーデターを起こそうとしていたなんて……誰が想像していたんだソレ？

しかも、高尚な野心はなく、政治的構想のため……でもなく、大雑把に言えば、共産党政府に売り飛ばすためだったらしい。

正確な最終目標は、政権を新米親中寄りの団体にすることだったらしいが、同じことだ。

それを知った加賀提督が、強引ながら元帥の艦隊を使ってそれを阻止した事となった。

元帥に装備の供給を行っていたのは紛れもない加賀提督だが、それに加担していたのは保守派に協力的な一部の鹿児島基地と、赤城提督だ。海外の連合軍が攻撃をかます時に連絡を入れなかったのも、口封じと用済みとなった艦隊を抹殺するため……って筋はほぼほぼ合っていると思う。そんな状況から生き延びたあの艦隊のバケモノポイントが倍増する。

蒲生大將は、俺を含めた数十名の海外士官を抜けさせた理由も、彼

を動かしていたのが外国政府の一軍だったから……らしい。

加賀提督が何故元帥と知り合ったのか？ などは不明のままだが、現状ではこれが全貌と言えるだろう。

俺はとりあえず物資の横流しと、故意に軍を動かしたという事実は弱みとして握ぎれるので、今後俺のキャリアを積み上げる重要な武器となるだろう。

部屋には斎藤長官、羽黒さん、蘇我提督、古鷹、村雨ちゃん、そして憲兵隊に連行されてきた蒲生大将がいる。

「蒲生大将……いや、蒲生、何故なんだい？ 君の家族の事は知っている、だが、自暴自棄になってそんな野心を心に芽生えさせることはなかっただろう……」

「……君には分からんさ、息子を失ったことのない人間には」

彼の息子は優秀とは言えず、極度に内向的な子だったらしいが、決して自分の親の地位を鼻にかけるような子ではなかったらしい。国民性だから仕方ないとはいえ、この国で見かける超陰湿系のイジメ。親が社会的地位がある人物……当時はそれほどでもなかったらしいが、社交的だったら人気者だが裏で妬まれたり心の中では嫌われ者になったり、内向的だったらイジメの対象。どの道、スポーツ万能成績優秀なイケメンタイプじゃなかったらしいから、それが災いしたんだろうな。

当然それだけではなく、海軍軍人の日本男児なら弱々しくするな、と突き放してしまったらしい。その自責の念が重く、今でもものしかかっているのだろう。妻もストレスによる浪費が原因で離婚してしまい、要はよくドラマとかでみる家庭崩壊の一種だ。

彼はそれ以前に、本当は愛国心溢れる活気ある軍人だった。性格も成り立ち相応に真面目一本。深海棲艦出現当時の日本を見ていた事もあり、価値観や思想が俺たちとは異なる。

性格上、信念を曲げられないタイプの人間で、それが結果的に、彼の行動を壊してしまった。

……と、家族内容については後で大淀総長からこっそり教えてもらっただけなのだが、この二人の間にこんな濃密な関係があったなん

て……まあ、俺としても、こんな話を村雨ちゃんや古鷹の前でされちゃ困るから、にらめっこで済ませてくれたのはありがたい。

どう考えても息子一人のせいで全て狂ったとは思えないけど、彼なりに国を思ってた事だと信じておこう。

これに懲りた様子を見せている大将。

良かったな、改心して。

大丈夫だ、今の日本海軍は責任を追求されたからって、クーデターでも起こさない限りは死刑に処されるわけじゃない。

すべて未然に終わった。ただ作戦に失敗しただけ。しかも失敗した理由もこの人のせいじゃない。

今後は、海軍と社会のために力を振り絞って、一層尽力してほしいな。

「……昔の日本は良かった……深海棲艦の到来とともに、多くが生死の彷徨い、平和ボケとくだらない些細な争いがなくなり、確立していた独特の排他的風習を協調に変え、老人を半ば公然と見殺しにでき、国家を守り強くするためならば手段を選ばずとも、どれだけ批判を受けても執行できた。いや、そもそも批判などは執行の障害にすらならなかった。そんな素晴らしい国となった日本のために必死で働き、今度は良き方向へと導こうと思ったのに……この体たらくはなんだ？

貴様らのような時代の逸材が台頭できる状況になり、それが成したことでも急速な回復を遂げたこの国は、いまや元のくだらない国に戻ろうとしている。もう一度、大きな打撃を与えないと目を覚まさないのか？ あるいは、民族そのものが腐り落ちてしまったのか？」

全然そんなことなかった。

サラツとんでもない過激派的な事を言い出した蒲生。

こいつレイシストだって分かってたけど、それが海外の指示なんだなーって分かって実はフェイントだったって分かって、その裏で実は自分の民族に対してガチでレイシストなんだって分かってやっぱりそうじゃんってなったのは他のみんなも同じだろう。

コイツは絞首刑でいいな。

パァン！ と突然テーブルを叩きつける蘇我提督。

「だからと言って！ 自国を陥れるような算段を企てるなんて！ そんな……！」

「……………」

古鷹も村雨ちゃんも、抜け出せるならここ出ていきたい……みたい
な顔してる。いや、顔に出てなくても俺には分かる。俺が一番そう
思ってるし、それと同時に俺は「なんでここにいるの？」って思っ
てるもんね。

ガチでなんでいるの俺？

蒲生大将も、この後何回か投げかけられた質問ガン無視してるし、
もう解散でよくない？

「……………これ以上、話してくれる気はないのかい？」

「……………すまない」

「分かった……急に来てもらって悪かったね。こんなところに出向く
予定なんて入ってなかったのだから、疲れているんだろう。彼を連れ
て行ってくれ」

「ハ！」

直で会うのはこれが最後だと思ったのか、出ていく蒲生の後ろ姿ド
アが閉まる寸前まで見つめていた。これほどの騒動を起こしたのだ
し、公式には作戦失敗しただけだから軍法会議ではそれについては軽
く見られるだろうが、深海棲艦教と外部組織とのつながりについて
ゆっくりと尋問を受ける事となるだろう。

これが、あの提督の真相……現実的を知るというのは、こうもアツ
サリとしている。正直、本人にはもう興味がなかったという点もある
が、後ろにいる黒幕は雲のような存在である……その事を理解してし
まった時点で、この件について俺がこれ以上追求できることはない
し、掴もうとする意味がない。

二人の提督はため息をついた。

彼らも、蒲生が大罪人だという事実以外にも、個人的な感情として
思うところがあるんだろう。

彼らの一休止の合図を聞いた秘書艦たちも、それに連座し、ため息
をついた。

村雨ちゃんが肩に寄りかかってくる。

「大丈夫村雨ちゃん？」

「す、すいません……少し疲れちゃって」

「まあ、目の前の緊迫感つたらなかったよね……」

「来てもらって悪いね宍戸大佐」

「い、いいえ、戦勝パーティーに参加させていただくなど、むしろ小官がお礼を申し上げたいほどです。我が秘書艦の村雨以下長崎艦隊も、嬉しくて涙が溢れ出ている頃でしょう」

「佐世保鎮守府の戦勝パーティーはにぎやかなモノにしたからな。一部の施設は地方人に開放して大いに賑わせている」

蘇我提督はこういう行事を盛り上げるのがうまく、これも彼が人気である所以だと言える。

対して海軍大臣は面を伏せていた。

「本当にすまない、君も一応、彼から作戦の参加を拒否された身だから、謝礼ぐらいはさせておくべきだとおもったんだが……まさかあそこまでペラペラ話始めるとは思わなくてね……」

「お心遣いに感謝します。次いで佐世保鎮守府に報告書を提出しにくるのが本命かと思ったのですが……小心者ながら、彼の陰謀に加担しているとお思いの斎藤長官が、まとめて話を聞こうと画策しているのかと勘ぐりを入れてしまっていたこと、お詫びせねばなりません」

「そんな魂胆は微塵もないぞ宍戸、貴様を取って食ったりするような真似は、誰であろうとこの私が許さない」

「そ、蘇我提督……！ あ、でも取って食ったりしないんですか……？

そ、そうなんですか……そうですか……」

「……宍戸さんっ、なんで少し残念そうなんですか……ツ？」

い、痛いよ痛い村雨ちゃん……そんな太ももを抓らなくても、俺は逃げたりしないよ。

俺がむしろ村雨ちゃんみたなエンジェルを捕まえて取って食ったりしそудももんね。まったく、俺の主砲を最大直角させるような服着やがって村雨ちゃん……クソオ！ 好きイ……！

「まあ、わざわざ君をこんな……若者流にいう、萎える話を聞かせるた

めに呼んだわけじゃないんだ。君に会いたいという人が居てね」

「だ、誰ですかそれは……」

「ん……一人の人物というよりは、大勢かな。君は……ああほら、あそこにいる永原くん、ではなく、永原元帥を最初に見つけたのも君だし、色々話を聞きたいんだろう。それに、赤城提督も活躍談などを聞きたいと言っていたしね」

じゃあ、わざわざ長崎警備府の艦娘を連合艦隊分連れてくる必要はなかったのでは？

と思っただけけど、下で士官に囲まれてる斎藤司令官の護衛だとも思えばいいか……戦勝パーティーというなの無礼講は警備府に戻ってもやるつもりだし、下にいる艦隊もはしゃいでる。

「あの柱島艦隊だって、本当は呉所属なのにこちらに来てるんだ。連れてきて損はなかったんじゃないかな？」

渡航代損しましたなんて海軍大臣に面と向かって言える愛すべきバカいる？

いたら俺の代わりに言っかけてやってくれ。いや、下で時雨たちとモノ食ってる親潮がいればもしかしたら……？

見えるだけで柱島艦隊のみんなも、秋津洲さんや大鯨さんもいるぜ。すげえ顔ぶれだ。

下にいる奴ら……ホント楽しそうだな。

この控室から見下ろす特等席からは、パレード……という名の、沖縄作戦を祝う正式な音楽隊によるパレードと、所々宴会のように、仲のいいグループがポットトラックで騒ぎ立てる集合群。広範囲に散らばる艦娘たちと将兵の群衆が沸き立っている中、俺の艦隊はやたら目立つ。

斎藤司令と親潮は士官に絡まれてるし、隼鷹と飛鷹は酒飲んでるし、時雨たち五人は食ってるし、初霜、涼月、鈴熊も鎮守府のみんなもなんか艤装の一部を使って一発芸してる。あれは……像のマネ？

組体操みたいなコトしてんのに良く出来てるな。スカート短いんだからやめろ、エロいし、鈴谷たち無意識にパンツ見せてるのクツソ

エロいぜ。男どもがみんな見てるでしょ？ やめなさいエツチな女の子たちっ。

「ははは、面白い事をやるね君の艦隊は……そう思わないかな古鷹くんも？」

「は、はい……」

気になってたんだが、さつきから目線を向けるとそっぽ向いてしまいう古鷹。

こんなにラブコールを送ってるのに……痛い痛い、村雨ちゃん、読心術でも習った？

「め、面目次第もございませぬ……」

それにしても、クソオ……海軍大臣と総司令が来てるから恥ずかしい真似やめろつったのに……ッ！

俺の艦隊だけ見れば、宴の場を斡旋しているように見えるが、一番目立ってるのは佐世保鎮守府に居候している元帥本人と彼の側近の艦娘である。当然だし、報道規制をしているから元帥の近くには近寄れないけど、遠くからカメラが殺到しているのが分かる。

「君もそろそろ行ってきたらどうだ？ あそこにいる人達に君を会わせるのが、君を連れてきた理由なのだから」

「我が艦隊を矯正するお時間を頂けるなど、斎藤長官のお心遣いには感謝しても、しきれません。あのような催し物を公然の場でやるなど公然猥褻に匹敵する所業です。副司令官たるこの小官が、自らの艦隊を制御できないなど末代までの恥。海軍大臣のお目を汚させない様、小官自らが直々に指導を行う所存です。では我が秘書艦たる村雨、行くこうではないか。教育の成ってない艦隊の恥晒し共をシバキに行くぞッ」

「分かりました！」

「いや、そういうことじゃなかったんだが……ああ行ってしまった。足が早いな彼は」

「いいのですか？ 宍戸に彼の事を伝えなくても」

「まあ普通に言っても逃げるって言われてるからね……」

「古鷹、お前も行ってきたらどうだ？　愛しの宍戸が大人数との会話で疲れた所を狙うんだ」

「わ、私は、その……」

「聞き捨てなりませんな、彼は親潮と結婚を前提としているのをお忘れですか？」

「お、おやめください二人共！　そのような事を娘の前で話すのはいかなるものかと思えます！」

「すまない羽黒……申し訳ない蘇我提督、また熱くなるところだった」「私も軽率な発言でした、申し訳ありません……しかし古鷹、下の連中と遊ぶことぐらいはできるぞ？　最近是我的補佐であまり羽を休める暇もなかっただろう？　たまには羽目を外してもいいんだぞ……ついでに、宍戸をその目で見定めてこい。この意味は分かるな？」「パパ……は、はい！　古鷹、いきます！」

・
・
・

……ハア、齋藤や蘇我の前でとんだ愚痴を口走ってしまった。過去、我々は多くの部下を無くした。

深海棲艦の出現で、一時期は人類の存亡だのを国連が議論していたほどだ。艦に乗り、国を精一杯守り抜き、艦娘技術が確立するまで、後輩らの教育と、国家のあるべき姿として先生から教えられた”強い国”の実現に向けて奮闘した。

我々の国は、弱かった。

他人には全体主義を求める個人主義者の群衆。

献身なき愛国者たちの治める国。

どんな善行も偽善として片付ける国民性。

批判中傷は被災地に赴いた慈善団体はおろか、彼ら国民を守る軍隊にすら向けられ、頭のおかしい集団に”共感を覚える”と錯覚する有

象無象が次々と湧く。

“奉仕の精神は死ぬ直前まで持て”と言わんばかりに、非常事態でも子供より自分の生命を優先しようとした老害には手を焼かされたが、非常事態なだけあり、消えていくのも静かだった。

国は新たな希望である艦娘技術に力を入れるために、国民全員が尽力していた時期があった。それはもう、互いが互いを信じる、素晴らしい世界であり、まるでエデンにいるような風景が、私には見えた。

技術は確立され、平穏と復興に力を入れ、斎藤や荒木や、他のみんなとともに、先生のもとで強き国とは何か……精神的、知識的に事を教えられた事を、この国に適用しようと尽力した。

そして、成功した。

だが、再び国民は軍隊への批判と、怠惰な精神を表にした。彼らは、日々の感謝を忘れ、前のような横暴な人種へと変貌を遂げてしまった。

息子は確かに亡くなったが、それは決め手でしかない。一致団結を忘れ、排他的な社会に―――学校に馴染めなかったあいつを、ただただ叱ることしかできなかつた私は、今でも後悔しているのかもしれない。

この国の本質を見誤っていた私にも、責任がある。

この国は腐っている。

人を人として思っていない。

いや、民族そのものが病気なのだ。

浄化するべきだと今でも考えている。

「随分としょぼくれた顔してんじやん」

「ドグソドルジ元帥……」

蒲生と元帥は人払いを済ませた廊下で会った。

連れていた憲兵は、彼が来るのを知っていた様子で、二人が話せるように一旦距離を置いた。

「昔は本当にナシヨナリストだったがミスター蒲生。真面目すぎる性格が災いして、心に悪鬼を芽生えさせてしまった……みたいなの？ 古典的な悪役じゃん？ でも、生憎お前みたいなの取り締まれば全部丸

く収まる、なんて筋書きは存在しないんだよなあ……」

「それに近い事はできたでしょうか……それで、この国に何か変化を及ぼせれば、私はそれで満足なのですが……」

「かなり自暴自棄だな」

蒲生は一応、拘束されている身だが、どこか満足げな表情を浮かべている。

海軍に務めていること自体が、彼にとって重い枷だったんだろうと、元帥は納得していた。

「深海棲艦教つて組織……蒲生は日本嫌いになっちゃったみたいだけど、お前が掲げた理由だったらどんな国でも同じような問題あるぜって話。だから、本心では人間そのものを信じちやいなかった……だから、深海棲艦教。つてことだったのか？ 正直、なんで組織作るのに深海棲艦教つて名前にしたのか不思議だったから、そこだけ聞きたかったんだよね。俺たちも、組織に資金提供とか協力とかしてた仲間だから、それぐらいは知りたいんだよなあー」

「人間を信じていない……そうかもしれない。深海棲艦には、ある種の感謝をしていましたから……日本という国が強大な敵に向かい、一つの家族となり、団結力の塊となったあの輝きを見せてくれた、好敵手に」

あ、怖、コイツガチでヤバイやつじゃん……と寒気を感じた元帥は、一笑する。

「海外士官を作戦から避難させてくれたのはありがたいから、その礼だけ言いに来たんだ。我々が放棄地域である沖縄を奪還して基地を取り返してもいいし、君が作戦を成功させてもいいって、そういう作戦だったのにさあ……まさか、あのナガハラ元帥が相手だったなんてな。まあ事前に得ていた情報とは違った、新種の深海棲艦が俺たちにとって一番厄介だったんだけどさ、それにしてもスゲーよなああの元帥の艦隊。よく生き延びていたなって俺も思ったぜ」

合衆国側はまだ、この遠征を援軍行為として示しているため、日本側の完全勝利であるとは言い切れない状況である。

「……永原元帥は、ここでは生きていけないでしょう」

「え、なんで？」

「永原元帥は、大淀中将から恨みを買っていました。何かと反発する間柄だった上、保守派、革新派問わず、提督たちや官僚たちからは、尊敬する者と反感を抱く者の半々と言ったところ。態度は横暴ではありませんが、馬鹿正直に何でも思った事を口にしてしまう人柄なんです。その後のフォローもあまり無かった様子で、連合艦隊司令長官でありながらあまり顔を表に見せず、若い事もあり、調子に乗っていると思われていたのでしょう……まあ、艦娘らも、反感を持つ士官らに対して態度があまりよしくなかつたのも、それらをエスカレートさせた原因かもしれませんね」

「永原の事は知っていたが、まさかそんなコミュニケーション障害の持ち主だったなんて……そんな政治力のない奴を元帥にする国。一応これも嫌っていた要因なのか？」

「別にそういうわけではないのですが……まあ、反感を覚える者も多い分、好かれる時はとことん好かれる様でしたが」

へえ……あれがね？ と、窓から少しだけ見える人混みに見え隠れする永原元帥の姿を見て、少しだけ納得するドグソドルジ元帥。

大淀総長が実は官僚たちをあの場合に内密に招き入れ、艦娘らが襲撃を企てていたのを知っていてあえて何もしなかつた事を告げると、驚愕した表情を見せた。

これはつまり、当時の内閣を崩壊させるために、大淀総長が仕組んだ罠である事を意味している。蒲生も協力関係にあり、度々革新派として保守派の排除を行ってきたが、最終的には自分も排除される運命だと、深海棲艦教の話題が海軍内部で持ち上がった時から薄々気づいていた。

そう暗に告げ、邪魔な政権と、反対派の軍事力の両方を一辺に片付けた現軍令部総長に畏れすら感じ初めていたドグソドルジ元帥。美人だけど怖え……と口を零した。

という推測を話していたが、総長本人は襲撃計画を知らずに攻撃された上、官僚たちの半数は独立戦力と化していた元帥の排除よりも、私募ファンドに関しての総長からの“密談”という甘い響きに釣ら

れてやってきたただけだった。

元帥は平和主義者であり、元帥なりに内部闘争を緩和しようと努力していたが、かえって闘争初期の火種をエスカレートさせてしまった。以降何もしないという選択をとったが、それが保守派として認識されてしまったのである。

彼の性格と、艦娘たちの忠誠心を知っていた大淀総長は、まさかあんなタイミングで武力行使という野蛮な手に出るとは思っていないなかつたのである。

「聞いていた通りだな。元帥艦隊は忠誠心の非常に高く、艦娘達は最早、元帥以外の命令は聞かない状況だった……それが保守派で、内戦もあり得た状態だったから、万が一勃発した時、元帥艦隊が保守派に付かないために……あるいは、未然に防ぐために、一刻も早く排除する必要があつたみたいいな？」

「その線で合っています」

「まあ何にしても、すべて失敗に終わったって事だな。蒲生、お前の役目は終わつたが、軍法裁判にかけられて、万が一、刑罰に処されても軽くなるように手は回してある……お前的には、正直休みたい気持ちもあるんだろ？」

蒲生は真面目すぎる性格から、少し行き過ぎた思想に達してしまい、それを邁進し続けて止まらなくなつてしまつたが、彼自身、ここで諦めれば楽になる。

使命感から来てる行動はいずれ疲れ果てる……というのは、元帥の体験談である。熱狂的な愛国心も、恋と同じく三週間しか保たない。

今後、彼が自分が選んだ道を諦めるか、あるいは暗躍し続ける道を選ぶか、その選択肢の分かれ目に、彼はいる。

「蒲生、今後どうするかはお前次第だが、俺的には新たな人生スタートさせてもいいんじゃないかって思うんだ」

「……それも、いいかもしれませんね。それを選択する権利を与えるか与えないかは、大本営が決めることです」

「作戦は失敗に終わつたが、いずれにせよこの国は、我々の国がもらつたも同然なんだがな？ 日本海軍には、海外士官の他に、将来的にこ

こを支配する人物が現れる」

「ご子息のことでしょうか？」

「そう、その通りだ！ 俺がお前の daddy だ。と言ってやって、ハグすればアイツも思い出すだろう、父親の温もりを、本来自分が何処にいるべきかを……というわけで、Son に会ってくる。会って愛しの daddy と共に国を支配しよう！ って提案して、『うん！ パパ大好き！』って言うんだ、これが本来の筋書きだ」

「随分と楽観的ですね……まあ、ご武運をお祈りしております」

戦勝祝

佐世保鎮守府の庭。

村雨ちゃんが俺と腕を組んで歩くのは仕方がないことだ。

なにせ人が多いんだ。一般人が入り浸る場所から、時雨たちがいる軍人オンリーの場所に行くには、このルートを使うしかない。

つまりこれは離れないように、子供によくいう、手を繋ぎなさい！的な命令であつて、勃起を催す胸部を俺の腕にぶにぶに押し付けなさい！的な命令ではないのだ。

村雨ちゃんの顔を見る？ すごい二ヘラ顔だぜ？ 嫌がつてもな

いし、このままでも、別にいいか、みたいなの？

「デートみたいだね、村雨ちゃん」

「えへへえく、そうですねえく……えへ、えへへへ……」

とろとろした顔しやがつてよお？

俺がその気になれば、違うルートに行つて、誰にも見られない場所につれていく事も可能なんだぞおく？ そうすれば、ベテラン整備工作兵たる俺がどんな手を使って整備をすうかなんて知ってるくせにさ、そんな無防備な顔しちゃつて。

幸い、海軍の人もちよこちよこエリアを出入りしているからすんなり抜かれた。

「ほら村雨ちゃん、もう着いたよ。俺の腕に掴んでいたいんだつたら、時雨たちのところに行くまではこのままでもいいけどね」

「そ、そうですね……？ な、ならこのまま……えへへつ、こうしてると、みんなに勘違いされそう、ですね……つ」

村雨ちゃんツツツ!!!

ぐへつへへへいつか犯したるつ。

「うわ、猿みたいな顔してるかも……」

「誰が猿ジャイ!? いくら秋津洲さんでも許さないぞ!? ……あ」

村雨ちゃんが離れて髪を整え始めちゃった……流石にそんな顔真つ赤にしてたら、ごまかせないと思うけど……あわあわしてる大鯨さんと、相変わらず俺に興味なさそうな初風が秋津洲さんと行動して

いる。

「秋津洲さん、体の方は大丈夫なの？」

「別に負傷したわけじゃないから大丈夫かも！ 秋津洲が指揮してた艦娘たちも全員ピンピンしてるかも！ ……でも、来てくれなかったらちよつとヤバかったから、それだけはお礼言いたい、かなって……」
かもを外した秋津洲さんがモジモジしてるぞ？

雨降ってない？

「当然だ、仲間を救うのは義務だし、秋津洲さんたちの活躍が結果的に作戦を早く終わらせたんだ。本当に電撃作戦みたいだったって、それ世界中が言ってるから。事後処理の方が時間かかってさ……」

「事後処理の方が手間を取るのは当然だと思いますう……」

黒スト大鯨さんの仰るとおりである、俺のペ○スも、彼女の前では亀頭を下げてしま……おい、なに上がろうとしてんだ、やめろ、俺のパンツに貴様の存在感を隠すほどのスペースはないんだぞ！ やめろッ!!

「素晴らしい活躍だと聞いているわ……村雨さんも前線に立ったんですよね？ 私もあんなのような艦娘を目指したいと思います」

「そ、そんな、私はただの随伴艦で……」

おい初風、なんで俺にはタメ語で村雨ちゃんには敬語なんだ？

あまりチョーシ乗ってつと、いくら大鯨さんの秘書艦でも口にご立派フランクフルトぶち込むぞ。

「HEY！ SHISHIDOたちも来ていたのね！ 食べて飲んで踊る！ こういうわかりやすいPARTYは好きよ！」

「アイオワさんも来ていたんですね」

作戦中に救出した艦隊のみんなは、一応大本営では大丈夫だと発表されていたが、本当に大丈夫なようで一安心した。どうやらオイゲンさんと荒木大佐は来ていないらしいので、アイオワさんとリシュリュウさんとリットリオさんだけで来てるらしい。

人数が少ないが、ワリと存在感があるのは逆にそれだけ目立つということだ。

特にアイオワさんはエロアニメのアメリカ人が着るエロ服を着用

しており、常にセークス状態。

雄共がこちらを凝視してるが、俺の顔を見て納得するあたり、俺も有名になってきたということだ。

「それにしても、何故あんなに張り切っていたんですか？ 外国艦は頭のリミッター外したようなテンションでどうにかなつてた、と言えば納得できるんですが、秋津洲さんも軍令部勤務だったのに、いきなり前線とか……ま、まさかとは思うのですが、上官に敬語使わなくて左遷されたとか……」

「そんなわけないかも！ っていうか、ちゃんと敬語使ってるかも！」

「じゃあかもかもうるさいから反感買って左遷……」

「左遷から離れるかも!!!」

「あの、Meたちが頭おかしいみたいというのやめてもらえない？」

海外艦隊、例の艦隊、ヤバイ艦隊といえはあそこしかないわけで……秋津洲さんたちは、かなり念密に戦闘計画を立てていたらしく、攻略スピードが早すぎてそれを追いかけてようと作戦を早めるのが大変だったのは覚えている。

だけど、結果的にその計画は他の参謀や司令官が出した案を軽々と超える成果を出してたのは事実であり、功績のおかげで佐世保鎮守府でも名前が上がっている。

これも俺たちが死にももの狂いでバックアップをしたおかげで感じですね。

「ま、まあその、軍令部も第一次作戦の失態を取り返すのに必死だったかも！ だから秋津洲が頑張っただけかも！」

なるほど、そして成功したら軍令部に戻るらしいから別に気にする必要はないのだとか。

未来にて、秋津洲さんの口から話されることだが、大淀総長と話した事で得た仕事だと言われている。

大淀総長から将来的にも海軍でやっていけるように、盤石なコネクションを作ってもらおう手伝いをしてやると言われたのだとか。作戦計画が順調にコトを運んだのも、秋津洲さんの貢献が大きい、上手く行き過ぎたのが災いして、流石に熱くなりすぎたと反省する事とな

る。

彼女は実は一人の艦娘としての実力こそあまりないらしく、端的には弱いらしい

得意とするのはこういう大規模作戦の超大艦隊の総指揮や、大局面での戦術、戦略研究。しかし所謂、大器晩成型で、秋津洲さんは最初は艦娘として入隊したらしいので、見出されるまでは機会がなかったらしい。

彼女にとって沖縄大規模作戦は名を上げる絶好の機会だったのだとか。今後、幾度となく功績を上げ続け、有数にして優秀な艦娘として海軍に名を馳せる事となる。そして、何気に料理が得意。独身。

秋津洲、艦娘准将への昇進パーティーで漏らした真実である。

「なるほど……でも元気で良かったよみんな、本当に心配したんだぜ？」

「あ、ありがとうかも……」

目的地まで歩きながら、時折、秋津洲さんがサインを求められたり、大鯨さんがナンパされたり、アイオワさんがナンパされたり、初風がナンパされたり、村雨ちゃんが告白されたり……え、俺は？

「随分と凄い顔ぶれを連れているね宍戸大佐」

一通り歩いたところで永原元帥の一団と巡り合った。一団と言っても、彼の隣りにいるのは武蔵さんと大和さんだけである。

この二人……というより、彼の艦娘たちは海軍のリーサルウェポン。

46センチ砲、51センチ砲という、ひと目見たことがあるがとんでもない艦装を装備しており、戦艦っていう珍しい艦種ながら、あれは圧巻の一言で、絶対に相手したくないタイプの艦娘である。

もう一度言うが、演習でも絶対に相手したくない。あんなの装備できるのはこの大和武蔵ペアを置いて他に居ない。

……そういえばアイオワさんも戦艦だったよな？

もしかしたら載せられるかも……？

元帥は一応、海軍のトップとして君臨していた人であり、俺たちとしてはいち早く敬礼をする以外に敬意を示す手段はない。アイオワ

さんはみんなに釣られるように、少し遅れて敬礼する。

「永原元帥！　」容態のほうはいかががでしようか？」

　　というか大淀総長に殺されなくて良かったですね。

　　元帥や大和さんがあれから無事な様子を見て初めて安堵できた。

「容態……つてほどでもないけどね、別に病気でもないし怪我もしてない、祖国に足を踏めて、体が喜んでいるかな、ははは……君には、感謝しているよ」

「ハ！　ありがたきお言葉！」

「永原元帥！　海軍には復帰するのですかも？」

　　そんな敬語使ってるから左遷されるんだよ。

「ああ、実は沖縄の統括を任せられるらしいんだ……でも僕は少将に降格するつもりだから、元帥じゃなくなるよ」

「「え？！」」

　　ま、まさかの告白……衝撃的すぎて顎が外れるかと思ったわ。

　　そして、アイオワさんは遅れて「Oh my God！」といかにもアメリカ的な反応を見せた。

「そ、それは本当ですか!?　で、でも何故……」

「まあ、元々死んだことになっていたし、今更戻ったって、役職なんて沖縄基地の司令官ぐらいしかないだろうからね……それに、年齢的に考えても、それぐらいの待遇でいいんじゃないかなってね」

　　沖縄の司令官として正式に着任する意思はあるようで、彼も、大和武蔵さんペアも、安堵の表情を浮かべていた。

　　後で彼に、降格処分願いの真意をメッセージで聞いたが「ケジメ……かな」と一言だけ帰ってきたので、空気的にはなんとかなったのかなと、俺の苦勞が報われた気がした。

　　その方がいい、大淀中将の下になるのは自分が無抵抗な人間である事を示している。正にケジメ。

　　どちらにしても沖縄みたいなクソ危ない場所に行きたいような人居ないだろうし、司令官として着任させるとしたら……誰を指名してたんだろう？

　　俺じゃないよね？

それにしても、未だに彼が大淀総長はともかく、他の人たちから狙われていたのが謎だ。それを今問いただすことはできなかったが、のちに電話でこう言われた。

『私は平和主義者であると同時に、面倒くさがりなんだ。誰も傷ついてほしくないし、海外に進出なんてしたら、国内でも問題はあるのに、問題をどんどん増やしてしまう。だからやるべきじゃないって思った。鎮守府に籠もって、ただただ、ママたちと一緒に生活するよいうな環境が良かったのに、海軍の人たちは邁進を選んだんだ。そのせいで僕の仕事を増やすなんて、僕のバブリティーが許さない。ぼくの仕事が増えるのも嫌だし、ぼくがいる環境を脅かされるのは、死ぬほど嫌だ』

なるほど、イケイケの現海軍、革新的に進出と強き日本と、東亜の団結を実現させるために勇往邁進する現在の海軍では……特に元帥みために偉い立場の人が、比較的若いのに何もしたがない老人みたいな事言つてるとムカつかれたり、反感を買う可能性は十分にある。資源や貿易力をもっと増やしたい国、特に今の風潮では、保守的な発想なのかもしれない。

個人的には悪くないと思うけど、俺みたいに波に乗る事も、時には大事である事は、ご理解いただけただろうか？ 強力な上、独立軍と化している元帥艦隊を排除したがるのは、統合運用のコントロール面では理にかなつてるだろう。

でも、話していて分かった、あの元帥なら、ちよつかいさえ出さなきゃ問題ない。俺がそうさせる。

ただ、俺がケツを持ち続けるのは無理なので、そのための環境を整えなきゃ。

このまま沖縄に引きこもってくれますように。

「……海軍では降格処分を受ける士官は歴史的に見ても稀ですが、永原元帥自身がお決めになったことであれば、人事局……ひいては、海軍大臣もお断りすることはないでしょう。では、ご武運を！」

「ああ……ありがとうね」

再度敬礼し、元帥に対して背を向ける。

秋津洲さんたちは元帥と対面して話したのは初めてらしい。元帥から離れるまではロボット歩きみたいな動きをしていた村雨ちゃん
と初風。

「秋津洲さんと大鯨さんまでカチコチになる必要ないんじゃないですか？」

「逆に宍戸大佐はなんであんな自然に話せるかも!? 元帥かも！
トップかも！ 降格するにしても恐れ入るかも！」

ははは、どうやら俺を凄い人間だとようやく理解したようだなみんな。

「H A H A H A！ でもPRESIDENTじゃないんだから、そんなにビクビクする必要ないわよ！」

「それぐらいの肝っ玉、秋津洲も欲しかったかも……あ、宍戸大佐、齋藤准将かも！」

気づけばかなり近い場所まで来ていた。

「あ、本当だ、おーい来たぞ……え」

そこには、見事なドラゴン。

かつこいいいやねえか……組体操とは、一人ひとりの練度と絆の強さを、全体的な形状の美しさで表す、正に軍隊の奇跡の競技だと言える。

一人ひとり近くで見るとエチエチな女の子がやってるって、はつきりわかんだけどね。パンツ丸見えの状態でやるなんて、ホントダメダメな艦娘たちなんだからあく……司令なら止めるよ齋藤司令……ッ

「おい！ なにやってるんだお前ら！ パンツ見えちゃうでしょ！」

「え〜大丈夫だよ〜！ ほら、今日このためにスパッツ履いてるんだよ〜！」

「し、白露姉さんやめてください！ お兄さんにそんな卑猥なもの見せないでくださいー！」

白露さん分かってんのか？ スパッツでも男はOMATAがONATAになるんだぞ。

あと白露さんが履いてるサイハイソックスとスパッツが被り合わさって、村雨ちゃんが履いてるようなストッキングみたいになってるから、どちらにしてもただエロすぎるんだよなあ……配色わざとそうさせてるでしょ。あとでふとももスリスリさせてもらおうかなッ。

「お兄さんみてくださあーい！ どうですかあ〜！」

龍の頭を演じている春雨ちゃんは空いている両手を無邪気に振ってるのは素直に可愛い。

「可愛いぞ〜！」

「ありがとうございまあ〜す！ ん〜……ちゅっ！」

投げキスとは、オトナなコトしてくれるじゃないか、ええ？

時雨は春雨ちゃんの足を抱えるというポジションに居て、すごいきつそう。

思わず吹き出す。

「今僕のこと見て笑ったでしょ!? あとで殺すから！」

「おいおいおい、言いがかりはよしてくれよ……この仰々しい龍の姿を見て、俺のために作ってくれたのかと思うと健気で笑っちゃうだろ？」

「穴戸くんのためじゃないよッ!! 成り行きでこうなっただけ!! やるならアジア系の龍の方が楽そうだが良かった!!」

「それただの蛇じゃねえか!!」

表現には限界があるんだから、これぐらいやってくれねえと何してんのかわかんねえよ。

大勢のギャラリーが騒ぎ立てる、あの前線の龍が来た！ 沖縄に参加し、またもや成功に導いた！ そう、一回目の作戦に参加しなかった俺が、二回目に参加して成功したんだから、大規模作戦成功ジンスクとなるのは必然！

今なら俺の髪の毛が入ったお守り一枚千円でどうだ!?

「さあ張った張ったあ!!」

「……………」

なんか言えよ。

「はいはいはい!! 春雨20枚でお願いします!!」

「買おうとしてんじやねえよ。」

「ありがと春雨ちゃん！でも髪の毛なんて汚いもんより別のものあげるね！金もいらなから！流石に良心が傷んできたから慰めなくていいよ！はい！俺様お守り廃止ね！」

「残念です……」

「っていうか、いつまでこの組体操やらせてんですか斎藤司令!?そろそろ解散させてやってくださいよ親潮と隼鷹がヤバそうですよ!」「だ、大丈夫です……!さ、最近鍛えてなかったから……うう……これぐらい……ッ!」

「飲みすぎた……運動してる……吐きそう……ッ!」

「あ、ああ、皆解散しろ!」

そして言われるがまま段取りを踏んで解散し始めるドラゴン。

時雨が最初に離れたから、春雨ちゃんという頭が外れて、首が飛んだドラゴンが一瞬だけ完成したのは芸術的だと思った。

「っていうかなんで眺めていたんですか斎藤司令官、女の子をスカートであんなコトさせるなんて常識にもほどがありますよ!」

「わ、私が指導をしたんじゃない、彼女たちが勝手にやり始めたんだ……」

「テメエは保身にしか興味ない責任転換系クソ将校かよ!?止めるのも司令官の役目でしょ!?それでも止めなかった上、甘酒に浸っていたということは、斎藤司令もパンツ丸出し女子たちを眺めて股間の青春開放男子になっていたということですよ!?ちゃんと理解しているんですか!?!」

「し、しかしパンツはこういうときは見世物として一興だと言われたが……」

「誰が!?!」

「五月雨が……」

「え?でもよくコミマで、パンツをチラチラ見せびらかすコスプレイヤーさんたちがいるから、パンツをお見せしたら盛り上がるかなって……」

「盛り上がるよッッッ!!!でも見せる時は俺と二人きりのときにしな

「やい！」

「「はッ!」」

全員が俺に敵意を向けてきた。

「すまん言葉のアヤだ……何はともあれ、そういうときは最低でも時雨や鈴谷みたいにスパッツを着用するように！」

「どう解釈すればパンツを見せろからスパッツ着用しろになるっばい……?」

「え、でも白露も履いてるよ? ほらほら!」

白露さんの説明がしにくいんだよなあ……クソ、この公衆の面前で股間のヴィーナスがピーナスを呼び起こそうとしてるぜ……!

「あれ? 穴戸くんに会いたいわって言ってたあの人どこにいったの?」

「あ、ほら、彼なら今こちらに向かってきているあの……って、穴戸!?! どこに行った!?!」

俺の正体も見破れなかったくせによく言うよ

人々の注目を集めるほど騒ぎ立てていた士官が護衛と秘書艦と参謀等連れてやってきた。

「穴戸は!? ドコ!?!」

「先程ぶりですねドグソドルジ元帥。穴戸なら今そのダンボールに――」

「し、穴戸くんなら、あちらに行きましたよっ」

時雨が一般人に開放している場所を指した。

「それは本当か三つ編みベイビー!? ベリンググハム少佐、サラトガ、君たちはここに来て穴戸の匂いを覚えてはいるはずだッ! 追跡を頼む!」

「Saraたちを軍用犬か何かと勘違いなさっているのでは……」

「問題ありません、このBirminghamが必ずや、FaptainをFleet Admiral Dogsdorjの元へ誘つて見せましょう」

「頼りにしているぜ」

「ワオオオオオオツツツ!!」

サラトガさんと少佐がアメリカ軍の元帥の前に立ち、匂いを頼りに時雨が指した方向へと向かっていった。イギリス系の嗅覚を巧みに起用した彼の先導により、人混みへと姿を消した。やられていたのは味蕾だけじゃなかったのか。

誰の目にも映らずに、すぐそこにあつた大き目のダンボールの中に隠れるのは困難だ。

時雨のナイスアシストでなんとか押し切ったはいいものの、不自然な行動を取る俺を見た艦隊のみんなは一斉に俺を疑問視する。

突然の来訪者、そして異国の海軍のトップともあろう御方が、何故俺なんかを探しているんだ?

アイオワさんは目が点になつてる。アイオワさんのこんな顔初めてみたぞ。

「い、いきなりどうしたんですか提督？ 隼鷹ですら少し緊張したぐらい偉い人が来たのは分かるけど、提督を探していたんだつたら会うべきじゃないの？」

飛鷹……それどころか、この場にいるほとんどは事情を知らないんだ、そう思っても仕方ないだろう。初霜や涼月……親潮ですら、俺に注意するぐらいだ。失礼だったかも知れないけど、今の俺はこう応えるしかない。

「そ、そうだね……」

「穴戸さん……」

今到着した古鷹も、一連の出来事を見て、静かに声を漏らした。

・
・
・

警備府、俺の部屋。

「なんであの時隠れちゃったの？ 白露さんに話してみなさいっ」

パーティー参加という業務を終え、部屋でくつろぎ初めた白露さんから五月雨ちゃんの姉妹ら、鈴熊、初霜、親潮やアメリカ元帥と一緒にいたGAIJIN男女二人組。佐世保方面軍司令官の業務に支障が出ないのか心配だけど、何故か古鷹もいる。

詰め寄る白露さん。おっぱいを押し付けてくるが、漢という生き物として「え？ 何を押し付けてたって？」と肌の神経に異常があるようなセリフを吐きながら気丈に振る舞う。

「アレはですね、太平洋方面総司令官という、非常に高い地位にいる人なんです。怖いし、会いたくないですよ」

「というより、何故そんな人が司令をお求めになっていたのですか？」

「……夕立の推測を入れるなら、穴戸さんはアメリカ軍のスパイで、その元帥さんの愛人……っぽいッ」

「「え!?!」」

とんでもない推測を言い始めるぽいぽいちゃん。俺がスパイで愛人だつて……？

夕立ちちゃん、君みたいな元気な娘は腐らなにとばかり思っていたが、それは間違いだったようだな。

「ソレ以外に考えられないっぽい！ この情報を抜き取るために送られた穴戸さんがあのオジサンに接触。ついでに得た日本海軍男色指南甲種、という未知なるプレイを楽しむために、情報をリークしていた……っぽいッ。絶対そうっぽい！ これは、名探偵夕立ちが考えた完璧な推理っぽい！」

「さ、流石にそれはないと思いますけど……」

「五月雨は知らないっぽい！ 男同士の世界を見ても友情の一言で片付けちゃう子供な五月雨にはッ！」

「そ、そうじゃなくて、仮にそうだとしても、隠れる理由にはなっていないような……」

夕立ちちゃん甘いな、五月雨ちゃんの方が一歩上だぜ。

「ふん！ そんなの、ソコのにいるイケメン少佐さんとデキちゃったから罪悪感で逃げちゃったに決まっているっぽい！」

「ははは、Y u d a c h i は聡明ですね。しかし困りましたね、私という存在が、F l e e t A d m i r a l との仲を引き裂いてしまった、だなんて……我ながら、罪深さに押し潰されそうです。」

「貴様らはそんなクソみたいな推測しかできんのか！ もっと他にあるだろ！」

少しため息を漏らす。

全員の耳が答えを聞く準備ができたのを見計らい、俺は自分の口から真実を打ち明けた。

「……実はあの元帥、蒲生と繋がっていたかも知れないんだ」

「………？」

きよとんとしてる。

深海棲艦教との繋がりは現在調査を進めているらしいが、結果として企みは失敗に終わったんだから良しとする。何より、本格的に驚異となり得る組織を壊滅させるために、警察も動いている。俺の道を遮

らない、ただただ壊滅を待つ組織にこれ以上労力を費やすのは無意味だし、何より……後ろにある影が、そんなにデカイ存在ならば、立ち回りを気をつけるほか立ち向かう手段はない。

分かる、俺も少し話を飛ばしすぎたし、多分この事を知っている人は本当に少数派だと思うし、陰謀云々には関わらせないようにしよう。

「ようするに、極力関わりたいくない人なんだ。米国は、俺の事を驚異に思っていて、俺の事を殺そうとしているとか、引き抜こうと企んでいるとかさ……色々あるでしょ?」

「そんな理由で何回も警備府に足を運んで訪問してくるものなのでしょうか……? 借りにも総司令ともあろうお方が自らの足で来るのは、相当な理由があるからなのでは……」

「そういうもんなんだよ親潮。斎藤司令官には、俺がアレに会いたくないって旨を、ちゃんと伝えておいてねっ」

「わ、分かりました」

「それからみんな、今日はもう遅いからおねんねしよ? さつさと行かないと月魔が寝れないでしょ?」

「寝てるみたいですけど……」

コイツ、こんなにうるせえのにグースカ寝やがって。しかしパーティーの影響で眠たくなつたのか、散々推測を口にしてた夕立ちちゃんと五月雨ちゃんは戻っていく。

「……おい、戻れと言ってるのが聞こえなかったのかね!」

「だって気になるじゃん! 余計目が冷めちやつた……穴戸つちのせいなんだからね!」

「穴戸くん、ここみんなにだったら、話してもいいんじゃないかな」

「時雨……?」

何時になく真剣な眼差しを送る時雨……それに村雨ちゃんと、春雨ちゃん。

時雨からは一応聞いている、古鷹辺りは、俺の口から真実を聞きたいのだそうだ。

「身の上話って嫌いなんだけど……おまえたちには、特別だお?」

「む、息子!?!」

「し、司令、本当なんですか? し、司令が……あの米軍の元帥の……」
親潮は言葉に詰まる。

「勘違いしないでくれ、俺はれつきとした二ホンジン、海外から来た訳わかんないヤリチンとは違うんだよ。血縁関係はあっても、もう縁を切った者同士だ。市民権も違う、パスポートも別国、俺は息子でもなければ、あの元帥様とはなんの関わりもない」

「……………」

「まあ時雨と村雨ちゃんと春雨ちゃんはこの事を知っている」

「え!? ずるい!!」

「わたくし達にも知る権利がありましたわ! なんて言ってくださらないのですの!?!」

そういう反応なのか鈴熊……。

俺の正体も見破れなかったのに……。

いや無理か。

「大方話したとおりだ。それでベリングハム少佐、貴官は俺の監視を任されていたのかな? あのクソ野郎に? 近づくためにホモ宣言をするなど極めて悪質だということを知りなさい。貴官には失望の念を抱いている」

「わ、私は違います! Saratogaとは違い本当に知らなかったんですツ! Sara、どういうことなんだ!? 君は Admiral と Shidshido の関係を知っていたのかい!?!」

「……正直に言えば、そうです」

素直に認めやがってこのスケベ艦娘が。

「留学のついで程度でいいから近辺情報を探ってほしいと連絡が来まして、本当に Shidshido が彼の求めている人物かを特定してほ

しいと言われたのですが……年齢や出身地からして、間違いなくそうだと確信して……でも、まさか Shishido がそれほど嫌悪されている方だとは思いませんでした……」

「俺とは無関係だと貫いてくれるんだったら大丈夫だよ。でもそうだと知れたら俺の立場危うすぎるじゃん!? 何考えてるの!?! 俺が大淀さんとか、軍令部総長とか、明石次官の親友とか、その辺りの人にスパイ容疑かけられて謀殺されたらどうするの!?! セキニン……取ってくれるんだよね?」

「ど、どちらの意味で……でしょうか……っ」

このサラトガとかいうアメリカ艦、俺が言わんとしているコト分かってるみたいだぜ? まったくエロスケベすぎるにもほどがある。

「全部の意味でだよ!!! 追われる際は俺の擁護、金銭的に困ったら俺の養護を、性的に困ったら俺の Y O U G O を……とにかく、養ってほしいー!」

「「サイテー……」」

「最低じゃない!! 俺の計画が……提督になる俺の計画が……アメリカ出身で、しかも旧姓がドグソドルジなんていう、文字通りクソみたいな名前だなんて知られたら……完全に俺、詰んだよね」

「でも大淀さん辺りにはもう知られてるんじゃない? あの人、情報に関して是世界トップクラスだし、海軍大臣の人も知ってるんでしょ?」

時雨は的を射抜いているし、多分なんだろうけど、サラトガに罪悪感をまんべんなく与えて俺の性欲補助ペットとして飼う作戦も台無しになるからやめろ。

「ん、それなら問題なくない? 白露は別に気にしないよ!」

「白露さん……」

「そうですわ! 今の穴戸さんの人が変わるわけじゃないんですもの! スパイの線で少し疑ってしまいましたけど、わたくしは穴戸さんを信じます!」

「熊野……」

「お金持ちなんでしょ? いままで穴戸くんにいっぱい酷いことされ

たからって和解金せがんだらお金くれると思う？」

「時雨ちよつと黙つてろ」

……しかし、みんなは満場一致で別に俺が誰であっても受け入れてくれると言っている。

最も恐れていた事態は避けられ、改めて絆の深さを確認したところで、最後に古鷹へ話を伺う。

古鷹は知ってしまったて、それがずっと気がかりだったらしいが、それを伝えられなくとも古鷹の不安げな表情から汲み取れる。

「古鷹……やつぱり、怖い？」

「い、いいえそんな事は……」

「いや、本音で話してもらっていい。人間ってのは固定概念で生きているもんなんだ。それも悪くはないけど、それがある以上、俺が同じ日本人じゃないって思ってしまうのは当たり前だと思う……俺のアンセスター遺伝子データ見るか？ 99%モンゴロイドだ」

「それって日本人じゃないですか……」

「そういうことだ初霜、血統は完全に日本人。名前が少し違っただけ。それに、アメリカとのコネクションなんてない。俺はこの先、日本で死ぬ。日本に尽くして、ここと、お前たちが俺の家族だ。古鷹も家族だ」

「宍戸さんは、やつぱり優しいですね……ふふふ」

古鷹が笑ってくれた。

「……実は、ただ心配だったただけなんです。宍戸さんが他の国に行っちゃわないかって……」

「古鷹……」

「でも、その言葉を聞いて、安心しました……今夜は、多分ゆっくり寝れます」

「俺のベッドでか？ 狭いから体をくつつけて寝ようなっ」

「ふえ!? い、いっしょにですかあ……!? ど、どうしましょう……」

本気で考えるな古鷹、そういうの軽く躲せないと思いい男に引っかかるぞ。

「ず、ずるいです！ じゃあ今日は親潮も一緒に寝ます！」

「ズルいのはどちらかな Oyashio? 私も一緒に寝ます!」

「よし、みんなが言ってる間に便乗すれば……あ、ああ〜! す、鈴谷も宍戸つちと寝たあ〜い!」

「じゃあ白露さんも寝る〜! 宍戸くんと寝て、籠絡するんだあ〜!」

「お兄さんと寝たら殺しますからね? お兄さん! 春雨を含めた5人の中だったら誰と一緒に寝たいですか!」

「消去法で男は除外するかな」

「な、なんですと!」

「ははははは!」

仲間たちと笑い合う感じ……そう、ここが俺の家なんだ。

「じゃ、じゃあもしも班長がいたらどうするんですツ!? 男を除外するんですか!」

「当たり前だろお前、何が悲しくて男と……」

ぼわぼわわわ。

——漆黒の黒天から射す月明かりの夜。

海軍警備府、毎日の忙しい業務を終え、只々、疲れを癒やす為に、寝床に付く。艦娘の艦装整備に肩こりが絶えず、10分程度の軽い柔軟を入れて睡眠に入る。それが何時もの日課だった。

言い換えれば、何時もと変わらない、繰り返しの毎日。

だが、今日の夜空はちよつと違った。

『我ながら些か、困惑を極めますな。司令官殿と寝床を共にするなど、海軍に長い間身を置いた小官であつても特殊な事例でして……こういう場合、どのようなお言葉をかけるのが正解なのか、士官昇進課程の際に書いて頂ければ、完璧な対応ができたというもの……無知な自分を、お許してください』

『そ、そんなあ! ぼ、僕も、初めてなので……』

『ははは、それでは、我々は共に、初体験を奪い合った仲、という事になりますな……司令官殿、お手を』

『は、はい! あ、あの……』

『ん? ……いやはや失敬、枕を抱いていては、小官のお手を掴むこ

となどでできないと分かっているながら、少し意地悪をしてしまいましたな。配慮の足らぬ小官は、またしても失態を犯してしまいました……ですが、今度は失敗しません、よつと！ ……こうして抱きかかえられるのは、お嫌いですか？』

『いい、いいえ！ そ、そんなことはあ……はう……！』

『ははは、今夜は、何時も以上に疲れが癒えるでしょうな……今夜のベッドは、特別仕様ですので』

抱きかかえられたまま、ベッドの中という深淵に、のめり込んで行くのだった。

「誰これ考えたやつ？」

「わ、私です宍戸大佐………すみません、宍戸大佐が女体化したらそうなるかなって……」

「初霜オ！ お前だけは常識人の砦だと思ったのにツ!! あと誰だよ初霜にTS覚えさせたの………おい、時雨、なんでそっぽ向いてんだよ。お前だろ絶対」

「ひ、ひゅ〜ひゅひゅ〜ひゅひゅ〜……ぼ、僕じゃないよ？」

へツタクソな口笛吹きやがって……。

「姐さん口笛静かにしてください……」

「なんだ僕の口笛で起きるの!? ストーカー野郎の分際でナマイキだね?! 僕は根に持つタイプだって知ってるでしょ!？」

「ひ、ひい！ ご、ごめんなさい姐さん！ で、でも明日は早いから早く寝てください！ みなさんも早く寝たほうがいいと思います!!」

「「え〜!」」

不満を一言で述べるみんなだが、俺が解散を呼びかけて各々の部屋に戻っていく。

俺も明日は早い。

海軍大臣に少し身の上話を含めた文句を付けてやらないと。

俺はやつと提督に……

かなり昔、蒙古国という日本の息がかかった国が短い間だが建国されていた。

そこから来た将校は、日本に留学した後、日本が気に入り、日本人の妻を娶ったという。

大戦中、いち早く国を見限った彼は、妻と渡米を決行し、そこで小さな雑貨店を開いたという。

大戦後ということもあり、日本から来たことも隠し、妻の名も変えさせて暮らした。

……というのは、既に他界した本人たちから聞いた話ではなく、父から伝承として語られたので、本当のところはどうか分からない。

ただの日本人で、名前を偽っていただけかも知れない。

だが、その子供はモンゴル系の名前のまま市民権を得て生誕した。

その子供であるアメリカ元帥は後に旅行してきた、美しい女性と出会い、結婚した。

んで、俺が生まれたってわけ。

しかし親父はゴミで、異性関係に極めてルーズなクズだった。代々妻を大切にできない血統なのか、祖父の二人も度々浮気をしていたらしい。

結果的に離婚する事になったが、親権は母に渡って、ついでに日本に渡る。

日本に来てからまもなく母は深海棲艦の攻撃で命を落とすと祖父に言われた。その母方の祖父と一緒に暮らし始めたが、この爺もかなりのスケベ爺で、教育者だったとか言ってるけどまったくその面影がない。

だが、爺には感謝している。

提督という、彼がなりたかった夢を俺が叶える為、昔から勉強だけできた俺が猛勉強を重ねて兵学校を卒業するまでの道のりは、あまり楽しくなかった。

とにかく自分の手を汚さないタイプだった俺は、客観的に見ても嫌

なヤツだった。卒業後はある程度勤務してから政界にでも転身しようと考えてたけど、その道を辿ったところで、本当の意味で仲間だと思えるヤツなんてできっこない。

時雨と出会ってからは路線を変えた。

時雨とは最初、当然ながら他人行儀な付き合い方をしていたが、昔はもっとおとなしめで、控えめで、物静かな雰囲気だったんだけどなあ……村雨ちゃんも、結構意味深な事ばかり男どもに言ってるね。

正体が分かってても、俺自身を見て納得してくれる仲間がいるのは本当にいいことだ。

「そうか……いや、ある程度理解はしているつもりだったんだが、君も辛い思いをしてきたんだね……」

「辛い思いなどは、今生きている全人類が乗り越えている課題です。自分が望んでいる場所に辿り着けた自分は、幸運であり幸福だと言えるでしょう」

佐世保鎮守府の控室で、まだ斎藤長官と話し合う。

昨日は挨拶もないまま行ってしまったので、それについてのお詫びと、ドグソドルジ元帥についての話についてだ。

彼からも話があると言われたので、ちょうどタイミングが良かった。

「……………」

そして、親潮もいる。

「すまないことをしたね……まさか、君がそれほど彼を嫌っていると……」

「そういうわけではないのですが……まあ身の上話はこれぐらいにしましょう。親潮さんを連れてくる予定はなかったのですが、大丈夫ですか？」

「構わないよ」

「ありがとうございます、長官……」

「じゃあ、今度は私から話す番だね。君が心変わりをしていないのなら……の話だが、君のキャリアについて話そうか。もちろんこれは好意的な話であって、君がアメリカ軍高官のご子息だからとか、そう

いう理由じゃないよ。その情報だって、あのお方から最近聞いただけだしね」

長官が指したテレビ画面に映る女性を親潮と見る。

あ、あの御方は………！

日本海軍のトップなんて目じゃない……絶大な発言力と影響力を本当の意味で持っていると言っても過言ではない。官僚襲撃事件から、長らく代理政権が任されていた頃、台頭してきた一頭星として名高く、海軍勤務当時でも、かなりの武勲をお立てになられたという。

「り、龍驤首相?!」

「まあ、大淀総長とも付き合いが長いらしいしね、大淀総長なら、結構前から知ってるんじゃないかな?」

お、驚いた……まさか俺の名前が、あんな人にまで届いているなんて……！ あんな素敵で気さくで美人な人に………！

「すごいです司令! 凄いですよね、長官!」

「そうだね、でもだからこそ、君にしてほしい事があるんだ」

「な、何でしょうか……ま、まさか」

「ああ、君が目指すのは……」

……よくよく考えてみれば、俺は沖縄作戦を成功させて、長官なら知ってると思うが、永原少将との仲を取り持った形跡も見過ごせないだろうし、そんな中、俺という存在は、多分海軍のパイプとして絶大な影響力と力そのものとなっているのでは?

と、自画自賛してみたり?

でもね、俺はこれまで、ヤバい内部事情を幾つも見てきた。

だから、そろそろ佐世保鎮守府の一、提督とかになってもいいんじゃないかな?

あるいは、永原少将の沖縄副司令官とか………?

または、どこか他の鎮守府の司令官………?

どちらにしても……昇進? 進級? 任?

やべえ、好意的に受け取りすぎて汗が出てきた。

「宍戸大佐、もし君が良ければ……」

「ようやく、俺は提督に……！」

「アメリカ海軍戦略大学に入学してくれないか？」

「……は？」

「……え、俺、てつきり、昇進して提督になるとか、そういうのだと……」

「いや、もう君は十分早く昇進してるし、これ以上はちよつと……」

「司令、私もどうかと思います……」

天下に名高い齋藤長官も昇進こんなになせがまれたら困り顔にもなるわな。でもコツチもいきなりすぎて困るんだよ、なんでまた急にそんなこと……？」

「お見苦しい事を言いましたすいません。しかしなぜ突然アメリカの大学などに……」

「昨今の情勢からも見てわかるとおり、今は外国との摩擦が生じて、国際情勢が極めて敏感になっているんだ」

そんな状況で俺を送るなんて普通の人の思考回路じゃないぞ。だが、ある程度予測はできた。

「……つまりは、米国に赴き軍人外交をする必要があると言うことですな？」

「話が早くて助かるよ」

俺が助からないんですけど。

「まあそれは目的の半分と言ったところなんだ。もう半分は、海軍戦略大学に入学させることそのものだ。海外での経験が多くても、軍教育のために海を渡る人が少なくてね……一人でもそういう人間が海軍にいると助かるんだよ」

俺は後に、入学の件はアメリカ元帥からの推薦……オフアールであったことが判明する。あちらとしては意地でも俺をアメリカに引きずり込みたいらしい。

「失礼な物言い大変恐縮なのですが、外交はそれに似合った人物が

もつと他にいるのでは？」

「何を言うんだ！ 君はあのアメリカ海軍元帥の息子で米国生まれ、学歴もキャリアも申し分ない、現状を考えても外交官としてこれほど適切な人材はいない！ それに、君はこういうのには専門的だろう？」

専門どころか専門外なんですけど。

「し、しかしあちらに入学するにしてもかなり先の話になると推測しますし、何より入学に際しては……」

「両国の高官の推薦がなきゃだめだと言いたいのかい？ それこそ何を言っているんだ?! 私とあちらの艦隊司令長官がいるんじゃないか!?!」

よくよく考えたらこの人たちって本来気軽に話していいタイプの人たちじゃないんだよなあ……人脈つて多ければいいと思つてたけど、こんな面倒ごと頼まれるんだつたらいつその事ここで親潮にセクハラして断つてやろうか？ 軍人としてあるまじき行為、絶対幻滅するから。

それに、よりもよつてアメリカかよ……ホームタウンに帰つてこいつてこと？

断らないと。

「小官にそのような大役が務まるかどうか……いささか、不安でなりません」

一応断っているつもりなんだけど、長官はどうやら俺が謙遜をしているように見えたらしく、強く押してくる。

「大丈夫だ。あつちで取るコースは君が選んでもいいし、何より入学は早く済ませてくれるそうだよ？ 君の父君は『入学する時は言つてくれ！ ウエイティングリストにいるヤツをユナイテッドエアラインみたいに引きずり下ろしてやるから！ コツチに直接お土産渡しに来てくれるんだつたら下したい人種も選ばせてやるぞ！』と言つてくれたからね」

余計行きたくなくなった。

あと艦隊司令がそんな権限あるわけないだろ。

「……実を言うとね、私の倅も入学させようとしているんだが、現在の情勢のせいで、何かと心配でね……」

「え、斎藤司令が行く学校の下見をさせたいってのが本音ですか!？」
「ち、違うんだ、それはほんのおまけ程度だよ。まあ、入学する時期が重なり合う可能性もあるから、その時はよろしく頼みたい」

「……………」

……キャリアアップと学歴向上と任務の達成ができて、俺個人としても万々歳な提案だが……これも提督までの道のりの一つとして数えればいいのか？

日本を離れるのは辛い、でも、斎藤長官としては、これが一番いい選択だと思っているんだろう。

元々は学歴志向主義だった海軍じゃないくても、学歴は大事だし、今後、日本海軍でやっていくに連れて、海外の大学で勉強してきたというのはかなり大きなメリットで、歴史的に見ても、実はかなり昇進に関わる。だから、いち早く提督を志すのであれば、学校とキャリアを交互に積み上げるのが最も早いはず……俺のは多少、例外があったけど、海軍から金が出るらしいし……だが。

「……………」

斎藤長官、ガチで俺に行かせたいらしい。

かなりキラキラした目だ。

国内での俺のアメリカ軍高官との関係性はなんとかして誤魔化すから！ と付け加えた辺り、なんとかしてくれるんだろうと信じている。アメリカに行ったら卒業まで帰ってこれないというわけではなく、何ヶ月間かの休暇と、定期的に帰る事ができると言っているので、俺のキャリアにとってはこれ以上にうまい話はあるか？

しつつかし、アツチに行くとなると、しばらく帰ってこれないのが本当に難点だし……このままだと外交官としての道を歩みそうで怖い。
「……もしかして修了後の役職を気にしているのかい？ 大丈夫だよ、その頃にはちゃんと用意しておくから」

「え、ほ、ほんとうですか……!?!？」

て、提督、とか？

「ああ、日本大使館の駐在武官、帰ってくるのであれば、時期的には軍務局か軍令部の課長職とか、大学の戦略研究部の職員とか……君には苦勞をかけるんだ、これぐらいは融通を効かせないとね」

「……………」

俺が提督になる日は、まだまだ先のようだ。

事なかれ主義とは、先手を打てる者に与えられた称号だ

退出した親潮と穴戸大佐の後ろ姿を見送った斎藤長官。

数分後、彼らと入れ替わるように二人が入ってきた。

「長官……連れてきました」

「いやあ〜ホントスケベな艦娘じゃなア!? 歩くたびにケツがプルプルと……ワシを誘っていると見た、ワシの目に狂いはない。良い教育をしているのお斎藤?」

ヤツれた顔で案内を終えた羽黒は力なく、だが速やかに斎藤長官の斜め後ろに立った。

「ははは、多少誤解があると思いますが……久しぶりですね、穴戸先生」

穴戸龍源は90代の老体で、海軍長官に会いに、佐世保へと足を運んだ。

海軍大臣も、塾教師であった彼には敬意として、先生と呼んでいる。

しかし、羽黒と途中で行き交っていた艦娘たちに重度のセクハラを行っていたので、彼が海軍将官らにとってどのような人物かは分からず、内心、ただのスケベ爺として片付けていた。

「おう、それでワシの孫はどうじゃった? 提督になれそうかの?」

羽黒ちゃんは、絶対に成れると言っていたがのお……」

「このまま行けば成れると思いますが、それを決めるのは彼次第の今後の活躍次第です」

「十分活躍したじやろうがあ!! まあその様子だと、确实だと言って良いじやろうがな」

「そうですね……穴戸大佐は、結構頑張っていますもんね。長官も、そのためにアメリカへの留学をおすすめたことと聞いています」

「アメリカか……まあそろそろ過去の因縁と決着をつける、いい機会じやろ。それよりも他のヤツは元気かの? 荒木や蒲生、永原……結構な数の生徒が提督に成れて、ワシは嬉しいぞい」

「ありがとうございます。会う機会は減りましたが、みな壮健だそうです。将官としての哲学を学んだ龍源塾のお陰で、我々は海軍で一定の力を得ることができたと、学友や後輩に会う度々、穴戸先生の指導経験話を話していた所存です」

「フオッフオッフオ！ 流石にここまで力をつけるとは思わなかったが、うまくやれたなら、ワシのお陰じゃな！」

「もちろんです。気楽に、だが楽観はするな……先生の教えは我が人生の教訓です。穴戸大佐にも、人を見抜く素質はありますが、一応、彼なりの方法で提督としての道を歩み、力をつけています。彼と親しい士官は中央の海軍省にも多く、問題はないかと」

「これも海軍大臣様以下、ワシが育てた生徒等が、龍城をバックアップしてるからかの……」

「それは……違うかもしれません。穴戸大佐は自らの力でここまで上がってきました。私が提督にならないかと誘った事も、彼の素質を見抜いてのことです。彼自身の立ち回りでコネクションを広めている今、たとえ我々がいなくても、提督への道はまっしぐらだったでしょう。穴戸先生が直々に教えたお孫さんとはいえ、流石の私も少し驚きました。……しかし、何故このご時世に穴戸大佐をあそこまで提督にさせたがっているのですか？」

少し沈黙を置いてから、ヒゲまみれの口を静かに開いた。

「我々の海軍は、今でこそ最強と名高い海軍を誇っているが、昔は酷いものだった。有数の海軍力を持っているとはいえ、内部は直視できなかった。内蔵がボロボロの人間はベッドの上なら生きてはイケるだろうが、どれほど威勢を張ついても強者に立ち向かえば全てが崩れる。それは表に出たのがあの大戦じゃ。ワシがもつと早く生まれ、力を持つていれば、少なくとも多くの犠牲を強いるような真似は阻止できたかも知れない……とは自惚れかもしれぬが、戦争をせずに、平和に、海軍とこの国を強くするには、ちゃんとした判断ができる人間が上に立つ必要があるんじゃない。才気あふれる者が国を強固にし、それを引っ張るリーダーは、必要不可欠じゃない」

「それが、血を分けた先生のお孫さん……ということですか？」

「そうじゃよ羽黒ちゃん！ 生憎娘とは血が繋がつとらんかったし、メリケンの阿呆の息子だという事実がちとム力つくがのお、分かつとるのお羽黒ちゃんは！ 今度ワシと飲みに行かぬかあ？ 気持ちよくできるぞい！」

「業務があるので遠慮させていただきます……」

「しかしなるほど……まあ、いずれにせよ我々の後釜となる人材の育成は整っています。あとは、この連鎖の継続のため、海軍の教育制度などを見直すだけです」

「じゃな、しかしここまで早くこの国が強くなるとは思わなかったわい。おまえたちのおかげかも知れんが、それ以上に深海棲艦のお陰でもあるのかの」

「敵を肯定する時代にはまだ程遠いですが、少なからずその節はあると思います」

「人型の深海棲艦はどうやら綺麗だと孫から聞いておるからの！ 見ている分には嫌悪感はない。エロいならチンチ○遊びは不可避じゃな」

「き、きれいかどうかは関係ないかと……」

「おん？ エロいと連想すれば何かって？ そりやオツパブに決まるとるわボケ。よし、これから皆で飲みに行くぞい！ 孫の金でオツパブは最高だということを、貴様らにも教えてやらねばな」

「ははは、程々にしてくださいね、先生」

うわあ最悪。

結局断れなくてさ、結構先の話だけど、あんな国に行くことになってさ、みんなとも離れ離れ？ みたいな？

昔とは違って通信技術は深海棲艦のせいで弱体化してしまった今、国外からは、スマホのボタン一つで容易な通信ができなくなった時

代。

手段はある。でも日本海軍の軍人である以上はアッチも警戒して
るだろうし、もしかしたら一般人以上に面倒な手順を踏まないと駄目
だろうと予測してる。

海軍や陸軍でも、深海棲艦教の事を調査している所だし、赤城、加
賀両提督に関しては、やはり手がかりが掴めない状況。俺個人は十分
に役目を果たし、次の留学という名の遠征に向けて準備を整えてい
る。

警備府はまだ慌ただしく、廊下の床を足跡まみれにしてるが、作戦
時よりは落ち着きを取り戻してるみたいだ。当然、副司令官の役職は
解任されて、代わりの閑職へと移されるのを待ちながら、勉強に励む
日々を送る事となる。少なくとも、しばらくは。

「時雨は出撃しなくてもいいのか？ 俺の部屋でダラダラ漫画なんて
読みやがってこんちくしょう」

「いいの、今日の出撃は控えてるから」

時雨は足をパタパタさせながら、ベッドの上でくだらん少女漫画を
読んでる。

ノートパソコンに向かって業務……という名の勉強に励んでいる。
アメリカ海軍戦略学校の情報は国内ネットでは少ない情報しか載っ
ていないので、アメリカのサイトにアクセスする必要がある。アメリ
カ海外士官のベリングハム少佐などに話を聞いても行ったことがな
いから分からないの一点張りだが、やることは海軍省から送られてく
るので、それさえやっつけばいい。

アメリカ上級士官へのマナーなどは日本とは違うので、そちらも勉
強しなきゃいけないし、マナー講座は軍人に対してのマナーに留まら
ないのがまた厄介で、面倒くさいのはもちろん、外交官やスパイとし
ての活躍を見せなきゃ大淀さんに殺されるナリ。

「……穴戸くん、何か隠してない？」

「なんで？」

「さつきから僕の顔見ないから」

「……先にお前には言っておくが、俺、アメリカに行くことになった。

まだ先の話だけど、しばらく帰ってこない」

「……そうなんだ」

一分ぐらい沈黙が続いたが、漫画を置いた時雨の質問がそれを破った。

「……帰ってくるんだよね?」

「帰ってくる。でも、結構長い事アツチにいる。だから、少しの間だけ、お前たちとは会えないんだ」

「……秘書艦とかは、付いていくの?」

「学校のために行くから秘書艦は連れて行けない。でも、確か妻帯者の場合は、家族を連れて行くことができるのかなんとか言ってたな」
「そうなんだね……」

俺たちはまた、お互いから目を逸してしまった。

二人きりの空間でこの空気は非常に重い。

勇気を出して、僕は穴戸くんの隣に座った。

「……穴戸くんは、結婚する気はないの?」

「え……」

一瞬驚いた顔をした穴戸くんだった。

口をモゴモゴさせながら、僕の目を見てはつきり言った。

「ない。時雨も知ってる通り、俺の家系は代々女性を大事にできない。母も不幸になった、祖母も不幸になったと聞いている、父方の祖母も諦めてたけど、遺伝的にこういうのは移りやすいんだと」

「……寂しいよ、穴戸くん」

僕も素直に認めた。

「時雨……」

僕の頭を撫でてくれた。嬉しい気持ちがかみ上げる。

彼は誰からも好かれる才能がある。

ある種の異能。だからみんなは彼の周りに集まって、笑いあって、バカやってる。

穴戸くんの人間としての能力がそうさせてるんだと思うけど、彼はそれをあまり良くおもってなかった。彼は昔、自分の道を邪魔する人

には容赦がなかったし、自分の人生に関わらないような人が苦しんでいても、どうでもいいと思っていた。見えないから、目の前にいないから——そう、彼は言ったことがある。

彼の生い立ちと、頭の良さと、彼の冷たい血が、そうさせるんだと、今でも思ってるけど……。

でも、そんなのはみんな同じなんだと、僕は一度論じたことがある。そして穴戸くんは、なるべく普通の人なろうと努力して、みんなから本当の意味で好かれる努力を積み重ねて……間近で見てた僕は、細やかに光を帯びた紅い瞳の色が、徐々に薄れ、落ち着きを見せて、成長するのをずっと見守ってる。

それが、自分の使命であるかのように。

——この提督は、心を和らげる何かを持ってるんだらうと、僕は理解していた。

これは多分、実績で得た信頼なのかも知れない。だけど、それだけじゃないと思う。

「俺は、ヒトとして成長できたのかな……」

「……成長、できたんじゃないかな？ まだまだエッチでだらしないところはあるけど……僕は、穴戸くんなら、お嫁さんを大事にできるって……そう、思うなっ」

「時雨……」

……二人はお互いから目が離せなかった。

真剣な想い打ち明かした男女の間に、もはや言葉は不要だった。

火照り合う眼差しは、お互いの瞳を奪い合い、心と心が通じ合っているんだ。

可愛らしく、力いっぱい彼を見つめる時雨は、答えを求めている。

頭に手を置いたとしても、柔らかい頬をさすりながらも……唇を奪いに行っても、今の彼女は決して、否定はしないだろう。第三者から見ても分かる、二人の距離は、これ以上近づぐことはできない……漢の答えない限り。

今、我々が見ているのは、恋する乙女と、恋する漢の、花道の終着点。

結婚ができないならば、婚姻なしで、仮の結婚をすればいい。

——さあ兄貴！ 今こそ、ケツコンカッコカリをする時です！

「……いいい、何時からソコに居た月魔!? なんて、お前……!?!」

「ずっと二段ベッドの上にいましたよッ!!! ていうか俺の部屋でもあるんですよ!? なのに姐さんと兄貴が、急にランデブー始めるもんだから、出るにでれなくなりまして……それに、気配からして、ドアの向こうにも数人います、盗み聞きしている人が」

「ッ!?!」

ぞろぞろと出てきたのは、白露型駆逐艦等のカワイコちゃんたち。

「ぬ、盗み聞きしてたの……?」

「そ、その……ごめんさい、でも村雨ね? 扉に猛突進してフロントガラス女になる所だったのよ? それを抑えて聞いてたんだから、褒められてもいいと思うわっ!」

「うんうん! 春雨なんて、目が戻らなくなるぐらい瞳孔開いてるでしょ? もちろん、白露もね!」

「ツツツ!! だ、大丈夫ですよツツツ。春雨の心配は不要ですツツツ! でも時雨姉さんにはMMAの再挑戦したですツツツ」

「ぼ、僕はいま疲れてるから遠慮したいかなっ、え、えへへ……」

「んで穴戸つち? どう答えるつもりだったの? ねえッ」

「熊野は別に知りたくありませんけど……ま、まあ、気になりますわね」

クツ……こいつら、そんなに俺にケツコンしてほしくないのかア……?

まあいいさ、俺の当初の目標としては、ハーレムを作ることだ。

これ以上のハーレムが俺にはあるだろうか?

楽しい仲間、親しき友、エロエロなカワイコちゃん。

これらが周りにいるだけで、幸福だと言える。

提督への……ハーレムへの道は開けたも同然。

ありがとう時雨。

ありがとうみんな。

俺、多分アメリカでもうまくやっっていける気がする。

—————

警備府の屋上。

「盛況……というのとは日本語として正しくないかな？　正しくは、いつもどおり？　それとも……」

「大団円が相応しいと思うぜ」

「そう来ましたか……流石ですFADM. Dog sodor j!」

警備府の職員は誰でも出入りできるが、稀に出入りを許さない時期がある。

屋上は前にも一度、密談に使われた経歴があり、秘密の会話、内密なティーパーティーをするのにはもってこいの場所である。

屋外でティーパーティーを楽しむ時はベリングハム少佐か、あるいは穴戸大佐が用意をするのが通例となっているが、アメリカ海軍元帥、サラトガ、ガンビア・ベイ、タッシュケント、ゴトランドの面子を見る限り、誰が用意をしたのかは明白である。

部屋から廊下に飛び出てきた穴戸大佐らの微笑ましい光景を愉しみながら、レモンをテーマにした紅茶を口に運ぶ外国人の一行。

「Cpt. Shishidoには、Saraとしても、これぐらい盛り上がりしてくれたほうが、華があつていいと思います……やっぱり美味しいですね、Birminghamの淹れる紅茶は」

「同志の紅茶もいいけど、午後の紅茶も美味しいよ！　保存も効くからすぐ助かってるんだ！」

ゴトランドとタッシュケントは、保存の面と、冷たくても飲める即席性を気に入っていた。

そしてガンビアベイも同じく美味しいと賛同していた。

みんなはアイステイーを初めて飲むわけじゃないが、初めて飲んだ時の、あの味の衝撃が忘れられないらしい。

アメリカや一部の西洋諸国では、アイステイーの種類に乏しく、普通に店でアイステイーを頼んだ場合、ただの冷たくなった紅茶が出てくる場合がある。安い上に、クリームと砂糖と多々に渡る香辛料を加

えた飲料水は数少なく、実は週に一度は飲んでいられない。

「確かにアレは美味しいですが、伝統の味を凌駕する事は不可能です。Mcd. やStarb. のような企業がアイステイーの生産に挑戦しているようでしたが、これがまた不味いのなんのって……マナーゲームが得意なようですが、私の鼻腔を制覇するには至らなかった、ということでしょうね。あの”””” W W W W S !!!」

「アンチセメティズムはイケないですよ」

「分かっているさSara……それでどういたしますか元帥？ 例の計画を実行に移す好機であるとお見受けしますが」

「そうだな、計画するのは少し大げさだが……俺が逃げ回ってるDrakeの前に立ち、俺がDADDYだ！ と叫び、俺を見て感動して泣き崩れるSonを抱きしめ、アイツは俺を抱きしめ返す……そして、アイツはこう言うんだ。『ぼ、ぼくは、Daddyのために日本の頂点に立って、Daddyと一緒に世界を制覇するために、いままで頑張ってきたんだね!! 嬉しい！一緒に世界を目指そう！』ってな。H A H A H A !!!」

「……………」

そこまでうまく行くのか疑問だったが、少なくとも感動の再会をするのは確かだろうと適当に頷く外国艦たち。サラトガと少佐は穴戸大佐の心情を知っているため、苦笑いをする他なかったが、元帥としての頼みなので、協力する他なかった。

しかし、元帥本人の紅く発光する瞳の中に“失敗”なんて言葉はなかった。太陽に照らされて無駄に白く見える肌を擦り付ければ、遺伝子という名の情報がすぐに伝わると確信している。

「ククク——我々の覇道、此処に始まるツ!!」

「あ、あの！ 協力者を連れてきてるんです！ Admiralがあまり会いたくないさそうって話を聞いたから……」

「珍しいじゃないかガンビアベイ、君がそれほど積極的に協力してくれるなんて……いや、すげー有り難いんだけどな？ どんな人？」

「あの……実は私から話したんじゃないかって、彼らから申し出たというか、なんというか……あ、あの人たち！ あの人たちです！」

ベストタイミングで屋上の扉を開いてきた三人は、近くの基地へと配属となったので、先輩だった穴戸大佐に挨拶をするためにここへ足を運んできた。

「あ、やつと探しましたよ、元帥さん。そのための、配属、そのための、人脈」

「元帥、拘束、セエツツックス！」

「……あれ？ 反応がないみたいだぞ。兄ちゃん……（悲壮）」

ゲイ三人衆……色々と問題があり相殺されるが、穴戸大佐が見てきた整工班の中では最も優秀な人物たちだと内々評される三人が、野獣の眼光で元帥を見定める。

「か、彼らが協力者か？ そ、そうかそうか。な、なんで無言で詰め寄ってくるんだコイツらは？ 三人はどういう集まりなんだっけ？」

「え？ わ、分からない……」

「ありがとうね、ガンビアベイちゃん。実は俺たち、副班長……じゃなくて、大佐に頼まれて、そこにいるケツの締りがとても良くて、デカ太マラを差し込むとおま○こになって太すぎるツピ！ になるオツサン、俺の代わりに食べてこいって言われたんだよね。いやあく太っ腹アー！」

三人衆が元帥に近づき、元帥は一步下がる。

元帥側に立つ外国艦娘たちは、一応防衛する素振りを見せるが、軽く躲される。

女性として男同士の混ざり合いを見たい、大佐が会いたくないなら仕方ない、そもそも関わりたくない、という三種の思考が、結果的に彼女たちの行動力を弱めてしまった。

一人がカメラを回し始め、不穏なbgmと共にカメラの前で語り始めた。

「皆さん、ご無沙汰しております。海軍中年専属調教師の高橋と申します。今回の、海軍中年大全集第一巻は、いかがでしたでしょうか？」

海軍中年初期作品は、比較的オーソドックスなオンナノコプレイがたくさん盛り込まれていたかと思えます。これからお見せする撮り下ろし映像も、基本的な開発プレイをお見せしたいと思います。今

回調教する中年はジャックつ。ハンサムなマスクと、均整のとれた美筋肉。まだ現役のこの中年は、私の調教に耐える事が出来るでしょうか？ それでは、ご覧下さい」

元帥の野望を知っていた大佐は、先手を打っておいたのだ。

「大佐の頼みじや断れねえよなあ？ とんでもねえこと企んでるらしいじゃん？ まあなにより、大佐が会いたくないって言うんだからお前もう生きて帰れねえな。 あ、乳首感じるんでしたよね？」

「な、何をいきなりワケの分からん事を言ってるんだお前ら!? アイツは俺がここにいる事を知らないはずだ！ ……ま、まさかアイツ、俺の魂胆を知っていて先手を……？ あ、な、何をするんだ君たちツ!? 私は男には興味ない!! 離せ! おい助けてくれ! やめろ、あ、やめてえ……」

……キモツ。

後日談番外編 デート大作戦！

近年、警備府という一介の海軍基地で働きながら勉強に勤しむ今日この頃。アメリカの戦略大学に向けての勉強の名目で閑職に付けられている俺は、ほぼなんでも屋みたいな立ち回りで警備府の人間関係やら佐世保鎮守府のお仕事やらを取り持っていた。

当然これは自分の意思でやっていることであり、誰かにお願いされてやっているわけじゃないし、たとえお願いされたとしてもやる義務なんてない。

色々あつて、やつと落ち着いたが、人生そのものが落ち着いたとは言い切れない。

アメリカへの留学が緊張は予想以上に中枢神経を刺激していた。俺個人としてはやりたくないのが実情。日本人の言葉足らずな姿勢は所謂、空気を読め、という独特な文化があり、海軍大臣の野獣の眼光は、圧力のそれを示唆していたに違いない。

了承してしまったからには最善を尽くすのが日本海軍軍人としての、大和魂を持って臨む。

未だに国際情勢は緊迫しており、沖縄の奪還は報道されるが利権の争いはまだまだ続いている。米軍基地の権や、中華系移民が暮らしていた地域の領有権の主張をはじめとする動きが各国で見られるが、沖縄方面軍総司令官の永原少将管轄のもと、日本海軍の管理下にある。

前々から外交を行っていた首相により、国連でも領有権と基地問題は当然の如く日本に帰属するものだと言う国も多い。

こういう出来事もあり、海外士官は若干嫌げな感じで見られている中、アメリカ太平洋艦隊総司令グソドルジ元帥も日本に何故か駐留し続けている。これも外交の一環なのか、あるいは「どうせ作戦失敗させて免職食らうだからその間は好き勝手にしよう」という事なのだろうか？

退屈しない毎日に少し疲れを感じ、同時に癒やしを求めていた俺に對して、とんでもないモノに参加しろと言ってきた y a g g y を追い払おうとしていた。

「佐世保開催、海軍運動会か。それって当然ギャラ出るんだよね？俺、そんな安い尻軽男だと思われてる？」

「お願い出てえ〜！ このままじゃ提督と知り合いだからヨユーで領かせて見せるよ〜って軽々と了承した陽炎の面目丸つぶれなのお〜っ！」

「なるほど、事前に許可も得ないまま、行き当たりバッタリで何とかなると思う……という、人を振り回す行為を楽観視していた、と……女の子のお顔を潰すのは忍びないけど、一回ぐらい顔潰してもオツケーだよ〜！ 教育教育！」

「い、いやだあ〜！ お〜ね〜が〜い〜！ 宍戸さんにしかできないことなのお〜！ このままじゃ私『え……は？ 宍戸大佐と知り合いだったとか言ってもできないじゃん。え、ていうか部下として覚えられていたかも怪しくね？ マジウケンだけど。え、ていうか、部下だったの？ 見栄はるための嘘？ へえ〜……明日からアンタのことクラス全員で無視するから』みたいな事になるかもしれないじゃんんん〜……!!!」

「そういうお友達は友じゃないし、そもそもクラスじゃないし、そのクソビッチが俺を海軍の運動会に誘いたがっている理由は？ 艦娘？

普通科？ 何れにしてもなんで勉強中の俺を運動会なんか誘うんだ？ まったく検討がつかないぞ」

「古鷹って娘なんだけど……」

「お前俺と古鷹の関係知らないはず無いでしょおおおおッ!!? は？ むしろなんで俺に直接言わなかった古鷹？ え、ていうか古鷹そんな娘だと思ってるのお前？ へえ〜……明日から警備府全員で陽炎のことパワハラするから」

「酷くなってる!? お〴〵ね〴〵が〴〵い〴〵ッ！」

そろそろ涙目になってきそうな陽炎は何故かそれでも食い下がる。不知火はどうでもよさそう……部屋を見渡したりして暇を潰してる

感じすらあるので、関係ないのに陽炎に連れて来られたんだろう。

「まあまあ穴戸はん、そんなぐらいにしてあげてっ。別に陽炎に悪気はなかったんや！ 司令はんの娘って肩書持つとる古鷹の言うことやから、ちよつとテンション上がったっていうか……」

「なるほど……人を社会的ステータスでしか見れなかった故に見栄を張ったと？ へえ……明日から海軍全員で陽炎のこと無視するか
ら」

「え……」

陽炎のこんな絶望した顔見たことない。

「正確には、不知火たちは本人から聞いたというより、彼女を慕う取り巻きの女性士官の方々から聞き及びました」

「まあ本人もそこにいたんやし、ほぼ本人から聞いたみたいなものやけどな？」

「なるほど……その場の集団圧力に負けた、と？ へえ……明日から未開の地に左遷するから」

「オツケー不知火と黒潮。むりやり連れてきたのは悪かったから、お願いだから少し口塞ごっかつ？ これ以上喋ると死刑になりそうだからっ」

「懸命な判断だよ」

「でも穴戸さんはなんだかんだ言っつて面倒事いつも引き受けてくれるっばい！ だから安心していいっばい！ っばおいっ！」

「「ほんまか夕立!? 流星は穴戸さん！」」

意気揚々と廊下からひよっこ顔を出してきた夕立ちちゃん。

チツ……もう少し引きのばして、取引に持ち込もうと思つたのによオ絶妙オにイ邪魔アしてくれるじゃんツ？

「夕立ちちゃん……俺をそんな風に思っつてくれてるなんて光栄だよっ。でも、俺も別に暇してるっつてわけじゃないんだ。ほら、俺、通信で甲種卒目指してるからさ。めちやくちゃ頭がいい同期たちは仕事で忙しい今、卒業できれば絶対首席は間違いないから、運動会なんてものに出てる場合じゃないんだよう……」

「もう卒業してなかったっばい……っ？」

なんで知ってるんだ夕立ちちゃん。それとも提督育成プログラムと勘違いしているのか？

「つていうか、宍戸さん警備府の仕事とかも手伝ったし、艦娘たちとも遊んでたっぽい！ あとパソコンで直視できないぐらいエッチなゲームしてたっぽい！」

「は？ いつもそんなの見たの？ 少なくとも夕立ちちゃんの前では見せてないと思うよ？」

「時雨に聞いたっぽい！」

時雨エ貴様アツ!!

「夕立ちちゃん……時雨の言ってること、丸呑みしちゃダメだよ？ ほら、陽炎たちも引いてるじゃん」

「いや、宍戸さんならありえるかな〜って思っただけ。妊法提督だし、エッチなゲームやってるとか、うわあくサイアク〜って、女性士官の人も言ってたわよ？」

「あのねエツ!? 俺もオトコだから仕方ないし全く問題ないコトだつて、何回もイッてるのに、どうしてそう過去のあやまちを掘り返そうとするのかなア!? 良くないよそういう日本の i k i t t e r 別名 m o u n t t e r でよく見る特有のセンスのないマウンティン グウツ!!」

「あやまちつて……認めてるじゃないですか」

「じゃあ分かったよオ！ Lookしろッ！ このPC画面をオ!! クツソ難しい英語で書いてあるから分からないとは思うけど構想中の下書き論文なんだよコレッ!? あくもうこれは俺がちゃんと仕事も勉強も両立してるスーパーマンだつてはつきり分かんだね、はい勝ちイ〜ッツツ!!」

「し、宍戸さん落ち着いて、分かったから、顔がでんじやらすにーさんみたいになってるわよ……」

「あ、これ知ってるっぽい！ ええっと、エッチなゲームしてるときに、きんきゆうかいひもーど……? ってやつっぽい！ たしか時雨がキーボードのボタンを押すと……」

夕立ちちゃんは俺の背中に無防備な胸部装甲を押し付けながら、肩越

しにその無邪気な細い指で容赦なくキーボードのF12ボタンを叩いた。

『んっ……あつれ〜？ センパイもう出しちゃったんですかあ〜？ 後輩に後背位して、背徳感が勝っちゃったんですねっ？ かーわいつ』

『く、クソオ！ こ、後輩の分際でえあひいん！ た、食べられる……たべられちゃううう〜！』

「……………」

沈黙は十数秒続いた。

「……ハッ、笑えよ」

「いや引いてるんだけど。さつきから矛盾だらけの発言連発しまくってる穴戸さんをセクハラで上部に報告してもいいかしら？」

「分かったすまない。夕立ちちゃんが言ったように俺は警備府の仕事も手伝っていて、役職にはついていないけど閑職だしそもその報酬も少ないタイプの仕事のわりにはハードで責任が重いけど、一応貰ってるからには最善を尽くすのは人間だと思ってる。だけど、最近はホントに寝れなくて疲れてるんだ。斎藤司令官には別の仕事頼まれてるけど、一旦断って出てほしいっていう運動会には出てみるよ」

「わぁーい！ さーんきゅっ！」

ぴよんぴよん跳ねながら喜ぶ陽炎とは対象的に、心底軽蔑してるような眼差しを向ける不知火。黒潮は顔に出してないが、この二人にはアフターケアが必要だな。ご機嫌取りを装わず自然な形でなにか奢ろうってやろう。

「それにしても夕立ちちゃん、勝手に人の部屋に入っちゃだめって、いつも言ってるでしょ？」

「でも時雨たちはみんな入ってるっぽい！ 夕立だけ除け者は嫌っぽい！」

「いやね？ みんなにも勝手に入るなって言っただけで聞かなくて……」

「それに夕立は古鷹さんが困ってるから、穴戸さんに相談しに来たっぽいー」

……なに？

「奇遇だね、実はこの三人も同じ理由でここにいるんだ。古鷹から運動会に出席してほしいんだと。本格的助っ人として出てほしいのか、まだ何をどうしてなんでってのが全くわからないから今聞こうとしてたんだ。でも陽炎たちは伝言役って感じだし、夕立ちちゃんの方が詳しくそうだから説明してくれないか？ 古鷹が、何に悩んでいるのか」「うん、でもその前にパソコンのゲーム消してほしいっぼい。耳障りな喘ぎ声がさつきからBGMみたいに流れてて煩いっぼい」

「ご、ごめんね、すぐに消すから……あ、クリツクしちゃった」

『きゃー！ せ、せんぱあい、そんなに甘えたいんでちゆかあつ？ ふふっ、密輸ルートを探ってるわけじゃないんですからあ、そんなに一生懸命にならなくてもお……』

『ご、この……！ う、ううゝバブロ・エスコバブルちゃん、エツチすぎるお……！』

『ふふっ、ファミリィと先輩のいる誕生日って、最高ですね！ このまま日を越して……』

『コロンビアン治安警察だツ!! 今すぐキメ〇クをやめろツ!』

「消せって言うてるのがわからないんだったら夕立ちが画面壊してあげるけどツ？」

「はい消した、ダメだよ夕立ちちゃんツ！ 大事な論文のデータが入ってるパソコンを壊すなんて、イケない娘だなあ！」

「単純に続きが気になったのホント悔しいわ……」

陽炎はこのあと密かに続きを見せてとお願いしてくるが、それは夕立ちちゃんをここから追い出した後の話である。

まったく、エツちなゲームの続きがみたいだなんて、とんだスケベ艦娘だぜ。

「じゃあ夕立ちちゃん、説明してくれるかな？」

「分かったっぼい！」

……古鷹が、口説かれてる。

近衛竜也という、士官としては比較的新しめのおち○ちんがいるんだが、これがまた厄介な人物である。

現代でも一応ネームバリューだけはあり、養子らしいが名家を名乗っている士官がいて、兵学校は首席卒業、スポーツ万能。屈強な肉体を見せびらかすイケメンであり、またイケメンの名に恥じないほど紳士的で、婚活、就活問わず、女性にとっての徳川埋蔵金である。

ま、俺もなんだけどねツツ？

「嫌なやつ」

「穴戸さん露骨に機嫌悪くするのやめて……それで、みんなが憧れる王子様が、古鷹さんに目をつけた、ってことでもいいの？」

「それなら問題ないのでは？ 不知火も名前だけなら知っています
が、悪い噂は聞きませぬね」

「でも古鷹さんは乗り気じゃないっぽいッ！ だから、穴戸さんから
ビシー！ っと言ってほしいっぽい！ 『おい、俺の女に触つてん
じゃねえよ、最高に素敵なパーティーに招待するぞ』とか言ってキメ
てほしいっぽい!!」

「もつといいセリフなかったの？」

夕立は説明を続けた。

演出上手のイケメンさんは運動会にて壮大な告白を計画している
と、正に「どこ情報だよそれ」だが、種目で一位を取ることでは取れる
マイクに向かって、一般人もいる中で盛大な告白をする……みたいな
？

時雨たちも姉妹も、このイケメン&古鷹接触阻止計画に一枚噛んで
おり、更に周知なのは恋愛マスター（恋愛に限る）足柄さん、ワーキ
ングブルドーザーのゴーヤ、ロットエンガール綾波、メカニック夕張な
ど、大勢が意見を出し合った結果「俺vsイケメンって感じでぶつけ
て古鷹を庇わせる」作戦に乗り出したのだ。

再三いうが、長時間集まって捻出される作戦はロクなものじゃな

い。

「あの、それだったら俺が直接行って話したほうが良くない？」

「別にそれでもいいけど、その人の所属は大湊警備府っぼい。穴戸さんは絶対に行ったことが無さそうな場所っぼい！ だから危ないっぼい！」

「一応あるんだけど、それより俺をはじめてのおつかいに赴く新人士官みたいな扱いしないでくれる？ じょうかんぼく未開の地に行くのこわい、とか言って赴任拒否するようなヤツじゃないから」

「いや新人でも行ったことのない場所に行かせたくないとか言わんやろ流石に……」

まだツツコむとしたら途方もない遠距離恋愛って点だ。無論、海軍省人事局の意向次第で、将兵の異動が年に百億回から数十年に一回まで幅広く適用される軍隊の本質として、家族を遠くに置いて数力月の出張もまた珍しくない。

第四鎮守府……現在の横須賀第二鎮守府にいた頃に会ったとか？ 遠くについてもアプローチをしてくるって相当だな……余程イケイケなヤツなんだろう。

そんな彼が有給を使って運動会にワザワザ遠征をしてくるというのだ。

今のところの人物像は“イケイケでクソ面倒くさい青坊主”って所まで固まった。

「夕立的に、まだこの作戦はまだまだ構想段階だからただの暫定っぼい！ 時雨たちとはまだ作戦会議中だけど、結局穴戸さんを頼る方針に決めたっぼい！」

「なんでも屋はタダじゃねえんだよッ……そろそろ金請求しようかな……」

「でも原価比率を考えたからお金かかってないからゼロ円っぼい！ 加味したら1円ぐらいならあげてもいいっぼい！」

『や、やめてえ！ トロツキツキツオマ〇こ変になっちゃう……！』

『うふふ……すたーりんちゃん言うことを聞かないトロツキストは、全員シユクセイだおっ？』

「その変なゲームやめてって言うてるでしょオ!? 分かった謝るからマジメに聞いてほしいっばい!」

俺としてはかなりマジメに聞いていたはずなんだけど……?

「……古鷹さん、本当に困ってるみたいだから……だから、少し力になってあげたくて……」

「夕立ちちゃん……」

しょんぼりした夕立ちちゃんの頭をポンポンする。

「大丈夫だよ夕立ちちゃん。俺に任せろ」

「っ! うん!」

こうして、まだ古鷹本人から事情の詳細すら確認できていないまま、佐世保海軍運動会へと時を進めるのだった。

デート大作戦！2

運動会の数日前。

司令官から別の仕事を頼まれていると言われていたが、その詳細について説明を受ける形で突然執務室に呼び出しを食らった俺だが、内容を聞かされて呆れほうけていた。

「なるほど、つまりクーデターつてことでいいですね？」

「飛躍しすぎだ……違う、艦船乗組員総意のもと決められた意義申し立てだ。良く見る労働組合との議論会のようなものだ」

運動会行こうとしたら、佐世保鎮守府で議論が行われるとかなんとか言われた。

うぜえ。

斎藤司令官の言う艦船乗組員とは、従来の船であるイージス艦や護衛空母などの艦隊に所属する人たちである。

隣にいた時雨は「そんなに労働環境悪いの？」と当然の疑問を投げかけたが、首を横に振った親潮によると、議論の内容そのものは労働環境云々にはないらしい。

「かなり前から問題になっていたので穴戸は知っているとかが、艦船とは端的に、金がかかるのは知っているな？」

「え、あ、はい。勤務したこともありますし、一つの街ぐらいデカイ海上の陸地を動かすのは、さぞお金がかかってるんだろーと我ながら思っていたりもしました。しかし調べれば、調べるほど金のかかり方が尋常ではない事が明らかになっていったのは記憶に新しいです。昔ならば納得はできたでしょうが、艦娘がいるので資金を使う価値に変化があるのも理解してはいますが」

建造にも、そして維持費にも莫大な予算が必要となる。現代の効率的な防衛の要は艦娘で、言い過ぎれば大飯食らいの役立たずを養ってただけでもありがたいと思えと思っていた。実際にそれらの経費は削減されて、艦娘技術に投資されている軍事費は……と、ここで何かを察した。

「……ま、まさか、ソイツらの意見って……」

「察しの通り……直球な物言いはないが、彼らによると、もつと起用してほしいと言っているらしいんだ。我々の個人的な意見からすれば“黙れ老害”の一言で済むだろうが、生憎軍隊というものは、他のどんな組織よりも過去から受け継がれた誇りを大切にするものでな……」

「老害って、平均年齢が高いだけで別に爺ばかりってわけじゃ……まあ言いたいことは分かります。一隻執っても船は船って良く言いますもんねアイツら。デカイのが問題なんだよと言いつた返したくなりますよまったく」

「まあこの問題は世界各国で起こっている問題だ。英国では古い歴史を重んじて艦船の起用に成功しているが、それほど効果的ではないらしい。反面艦娘を積極的に起用したがる米国などは裏目に出ているな。米国軍というのは、歴史が短く装備更新をこれでもかというクセにやたらと伝統をかなり重大視する傾向にあるからな……挙げればキリがないが、この件もその一つだ」

「面倒くさそうな会議に出るんだね斎藤司令官……心中お察しします」

時雨すら同情を禁じ得ない様子で唸り声をあげる。

要はそういう事だろう、佐世保の右腕こと長崎警備府は、その会議に出席する義務を催促された。

「いや、私ではなく穴戸、お前に行ってほしいんだ」

「huh? 今なんて? 佐世保には運動会しに行くんですけど」

「分かっている、面倒くさいのは重々承知の上、私からの頼みだ。艦船乗組員……いわゆる艦船派と、我々艦娘派の因縁はかなり深い、だからこそ、お前に行って欲しいんだ」

「俺、運動会出るんですけど」

「お前はイージス艦に勤務した事があるんだろう? であれば経験量、知識量の面でも、議論力にも長けていれば、また相手を納得させるレベルの経歴を持っている。一番適任だと感じたんだ。それに、私は第二鎮守府と共に、沖繩への物資輸送任務、及び補給体制の確率化

に務めなければならぬのでな」

「運動会出るって言って言ってますよね」

親潮はため息をついていた。

全て終わった、というのは作戦中の戦闘云々が全て終わったというだけで、それからの事後処理と体制の維持が最も大変だって、それ一番大鯨さんに言われてるから。

気苦労の多い時期だが、親潮には司令を頑張って補佐してもらおう必要がある。根気をつけるために、後で差し入れでもしておこうと思う。参謀部もかなり気合いが入っているから、それに付いていけるようにしないと警備府全体の効率が悪くなるからな。

「正確には貴様か私かが行くよう提督から促されてな」

「沖繩の件もまだ済んでいないというのに、蘇我総司令も気苦労が絶えないですね……各方面軍でもよく聞く話だと伺っています。説き伏せるのには苦労はしないでしょうが、運動会が俺の本題なので、そちらに注力させて頂きますが、よろしいですか？」

「それで構わない、頼んだ。一応、提督直下の組織からの要望であるからして、正式に秘書艦を連れて行く必要があるとも聞いているが……」

副司令官の俺に秘書艦だと？

役職柄テメエの第二秘書艦みたいな立ち位置なのにか？

「そ、そくなんですね〜！ お、親潮は、秘書艦として相応しい艦娘が、司令の補佐をするべきだと思います！」

親潮行きたいのか？ クソ面倒な会議に。

というより、運動会を見たいんだろうけど、あいにく親潮は司令官の秘書艦という大事な仕事がある。

何より後日行う古鷹との計画がバレたら怒られそうだからあえてその事は言わないでおこう。だが一日開けるから一応斎藤司令官には電話で了承を得ておくか。

「そうだな。だけど補佐は艦娘じゃなくてもいいと思うし、親潮は斎藤司令の秘書艦で忙しい時期だからまず頼めないな」

「しよんぼり……」

そんなあざとい動作でわざとらしくしょんぼりしても、俺の股間が
膣探索を始めるだけだぞ。

「……あ、ぼ、僕はちよつと忙しいかな！ うん！ 最近入ってきた新
入りの艦娘に手ほどきをしないとだしね！」

時雨コイツ、当日一緒に行くくせに面倒くさそうだからって暗に断
りやがって。

「元々頼むつもりはなかったけど、先立って断られるのもなんかムカ
つくなツ。新入りって陽炎や浜風たちの事？ 昔一緒に戦ったんだ
から顔見知りだろうがア!! もつと良い言い訳考えろ、そうしたら見
逃してやる」

「おんなのコの日」

「張り倒すぞ」

「ひどい！ 穴戸くんは生理中の女の子に対して過度なストレスを与
えるのが仕事!? あ、これでももしかして、ハッシュタグ、パワハラ
？ 上官に報告してもいい？」

「おう、そこで執務に励みながら事の全貌を聞いていた上官に報告し
てもいいが、一週間前も同じ口実で俺に日用品パシらせてたよな？

お前が忘れててもこのレシートは忘れてないぞ」

「こ、今回は長いんだ！」

「まだ言うか貴様ア！ その翌日ピンピンして出撃も絶好調だった記
録を、俺が知らぬとお思いかツ!? 艦娘一人ひとりの体調を気遣う事
を半ば強要されている提督という職業の日本男児にとってなア、実は
全員の生理周期の把握は必須なのだよツツ!! 1, 2を争うぐらい大
事な事項なんだよツ!! 艦娘それぞれの性格も把握して『あ、今日か
ら数日はこの子との会話を控えよう』とかしなきゃいけないんだ
ぞツツ!!」

「「え……?」」

「……え? つてなに? 司令官もまるで隕石落下を目撃したよう
な顔してるが、知らないはずないよな? じゃないと要港部、警備府、
鎮守府など、共同生活を要いられる場所であまく立ち回れないもんな
?」

みんなやってる事じゃないの？

「き、き、き、キモオ——……！」

「……穴戸、少なくとも私はやっていないぞ。そのようなプライベートな情報をどうやって仕入れるかも、私の至らぬ知恵では検討すら付けられない」

「し、司令……そ、それは流石に……つてことは、私のも……ひい!!」
本気で引かないでくれよ。

「は？ 女の子は記念日を覚えてるの凄く喜ぶのに、なんで生理周期は引くの？ ある意味『ハジメテデートシタヒ』とかよりずっと実用的な情報じゃない？ 期間中はなるべく本人の気持ちになるよう努力して、できる限り優しくするとか、こういうのわりとガチで大事だから」

「え、斎藤司令がやってないみたいだけど、他に誰がやってるの？ 結城くんとか？」

「アイツにとっては死活問題だから必要らしいけど、他には大鯨さんとか、後輩の月魔とか」

「キツツツツモ!! 月魔キツツツツモ!! 僕やっぱり変だと思ったんだよね！ 穴戸くんと同じぐらいのタイミングでナプキン渡してきたしー！」

「おい時雨、俺、大鯨さんの事も言及したよな？ なぜ彼女には触れない？ 女性だからいいとかありえないこと言うなよ？」

「だって大鯨さんといると、幼稚園の保育さんを彷彿とさせるんだ」

「時雨さん、それすつつつつつごく分かります！ 司令が言っていたいわゆる、バブミ、ですよね！」

「俺がいつそんなくだらしない情報を親潮にいつ言ったか是非聞かせてほしいが、分からないでもない。人妻感はないし若々しさがあるのに、どことなく“母”という単語が浮かんでくるんだ。斎藤准将もそうは思いませんか？」

「何故、保母のようだから生理周期に関する個人情報を知っているのは納得がいくのか理解に困るが……ああ、分かるな……もし彼女の寵愛を受けれるのだとしたら、こんな感じになるだろうな」

……え？　今なんて言ったこの人？　寵愛？
え、つてか、妄想するの？

『ぼふ、ぼふ…』

『ごらっ！　真くんまたパソコンをイジってえつちなサイトに行こう
としましたよね！　だめですよっ！　めっ！』

『ち、ちがうよママー！　僕はただ海軍大学校戦術研究科の戦闘公式
記録と戦術研究論文を見ようとしていただけなんだおー！』

『いいワケ無用ですっ！　いつても聞かない子には、この大鯨がじき
じきに、おしおきしちゃいますっ！』

『うわー！　だめだおママー！　そこは入るんじゃないやなくて出るところ
だおー！』

『もー、おしおきるときはしずかにつ！　うるさいお口は、大鯨のぱふ
ぱふでふさいじやいますっ！』

『ゴツッゴフツツフブツツゴフツツガハアア——ツ
!!!』

おっぱいの降りが妙に生々しい。

「」
「」

「すまない、司令官たるもの、このようなキモい言動を発するとは」

もうキモいとか通り越してんだよ。とんでもない性癖暴露しや
がって、明日からどう接すればいいんだ。

「あと僭越、意見具申をお聞き頂ければ幸いです、そろそろお辞めに
ならなければ、最悪司令官殿の親潮秘書艦が艦娘をお辞めになる可能
性がありますので。つかさつさと黙れェ!!」

「グアツ!!」

ここで頬を叩かなければ、退職願の上にペンを走らせる親潮はその
手を止めなかっただろう。

「何のためにここに来ただっけ……ああそうだ、艦船派との対談と
運動会についてだ。秘書役は誰でもよろしいのでしたら、適当に暇な
のを探してきます。運動会の件についても、その日は休暇として頂け

れば幸いです」

「ああ、艦娘を選ぶ場合はくれぐれも生理周期の近い女性に気をつけるようにな」

「もうその話はやめてください」

そして俺は、新たに増えた派閥、通称“艦船派”と名乗る集団に関してのデータを集め始めながら、運動会に向けてのウォーミングアップを開始した。

俺にとって本題は古鷹の方だ。こんなクソしようもない議論はさっさと終わらせなきゃいけない。

デート大作戦！3

佐世保鎮守府。

秘書艦村雨ちゃんと共に行った会議では艦船派がアーだこーだ言ってた。

掻い摘めば、艦船勤務の軍人が少なく新人に限りある演習をさせたりする教育的な面に欠点がある為、実戦では力を発揮できないのは当たり前だと言う。

更に対空対地は良いが、対艦ミサイルに関しては艦娘寄りの技術が発展しすぎてる上、船の新型装備が更新されない点も挙げられたが、正しくその通りである。

教育演習に関する事でもあるが、物資の配給が足りていないからそもそも演習がかなりやりにくくなってる現状と、海の配線を守る深海棲艦探索特化型の潜水艦だけには物資が良好に行き届いている不平等さも取り上げられた。

艦娘と艦船が共闘して戦える戦術論などもあったが、これらはすべて塵と化した。

これほど急に話を持ち上げたのは、多分八丈島作戦でも、沖縄作戦でも、一次作戦で使われた艦船が、深海棲艦にあっけなく撃沈されて「大規模作戦で艦船が出撃すると大失敗に終わる」というジンクスが出来上がってるからだと思う。今更遅いし、双方ともなんだかんだ永原少将のせいだから、この人たちが悪いわけじゃない。

当たり前だがこれらの文句は大本営レベルの人たちを動かさないと解決には至らない上、そもそも数十、数百レベルの海軍軍人を危険に晒す上、効率的な代用兵器、兵士である艦娘が居るのだから無理にそれらを起用する必要はない。

それに第一次大規模作戦でも沈黙した艦の救助に艦娘が多く使われた件も行動を滞らせた原因になったので、艦娘研究に尽力している国家はよほどの問題に直面しない限りは起用に積極性を見いだせないと結論づけた。

そしてみんな仲直りして、幸せになったとき。

ちゃんちゃん。

って簡単に行くわけねえだろ。

そんな簡単に行ったらここまで苦労しねえんだよ。

佐世保鎮守府の廊下内にはリアルグループチャットが開かれていた。

「俺たちを……整備工作班補給科に……？」

「簡単な仕事とは言わないけど、艦船勤務ほど閉鎖された環境じゃないし、何より陸！ 別に出航するわけでもないのに、形だけ出航状態にするために船に閉じ込められる心配もない。この補給部隊にはボーナスもあるんだ。これ以上、艦船に関しての問題起こさなかったら今までどおり艦上勤務でもいいし、君たちから教官への転属の推薦をしてやってもいい。こういう問題起こすんだったら少し海軍省に掛け合っただけで変な所に転属しちゃうけど……」

「い、いいえやりやります!! やらせてください!」

「流石は穴戸大佐ツス！ 正直艦長に乘せられただけなんで、金さえ良ければどこでもイイっす」

「そうかそうか、当然だな。あとスマホ貸せよ会議中に村雨さんのパントリー撮ってただろクソ野郎」

頼まれてやっているわけではない。

ただ、忙しい時期にこれ以上蘇我提督の負担とならないようにしなければいけないのは、部下として当然の役目であり、何より俺に火の粉が掛かったんだからこれ以上未来に問題を持って行くわけには、いかないのだ。できる範囲で問題を削除するのが、俺の流儀である。「貴様ら何をしとるんじゃ!? おん!? ワシの部下を丸め込もうなどと、そうはいかんぞい!!」

白髪の老いぼれクソジジイ風艦長は今年で40になるらしい。拡大解釈すれば30代で大佐。すこぶるエリートなんだけど、明らかに年齢サバ読んでるよねこれ。絶対70歳ぐらいだろ。昇進した理由、たぶん風格があるからとか有り得そうで怖いわ。

「あ、艦長もこれ以上問題起こしたら駄目ですよ？ 実は斎藤長官及

び次官へ、警備府が試作運用してる新兵器についてレポートを提出しに行くのです。その際、艦長のご不満を大淀総長も含めて言及してもいいですが、いかがですか？」

「い、いやあく最近耳が遠くてのおくふおつふおふおふお……」

「艦長、実は海軍省に艦船不要論というものが上がってしまして、小官は必要派なのです。もし小官や小官の尊敬に値する上司である蘇我提督を煩わせる問題は、早急に対処するべく中央へ……」

「わ、分かった分かった！ もうこのような事はしない！ それでいいんじゃない?！」

「そうじゃ」

遺恨は残さない、戦いとは戦う前後が大事なのだ。

しかしどうしても戦略だけでは勝てない戦いもある。それが筋肉と反射神経と運動センスだけで競う公平な戦……通称スポーツである。

ただスポーツと言っても多種に渡るため、どうしても苦手な分野が出てきてしまい、それをよりシンプルに、より公平にするために設けられたのが、運動会の種目というわけだ。

艦船派の一部を丸め込んだ後、運動会の臨む俺は、今後の彼らの処遇について考えながら、いち選手として直立していた。

佐世保鎮守府運動会場。

『この度、佐世保鎮守府、主催、海軍、運動会を、開ける事を、とても嬉しく、思います——』

活気に溢れ満ちた兵士たちが参列している。

遠目で見ても佐世保方面軍司令長官殿の威厳は五臓六腑に染み渡る。

「蘇我提督ってあんなにキョドった喋り方してたっけ？ あんなにムキムキなのに人前が出るの苦手だったり？」

「いや違うだろ時雨じゃあるまいし。ちゃんと分かりやすく喋べらないと一般人に伝わらないだろ」

お日様が見守る運動会会場。

音楽隊と選手の足踏みは観客席にまで届いていた……というのは、村雨ちゃん談である。

時雨は長崎警備府所属として、俺は個人として選手枠を担っている。

観客席には一般人がほとんどだが、見物人の中には少なからず軍人が混じっている。その中には、村雨ちゃん、夕立ちちゃん、陽炎三姉妹と……古鷹がいる。

代表とされる選手が宣誓を行い、開会式を終えた運動会が開始された。

『『『きゃあああああ!! リユウヤサマアアアアア!!』』』
『来てくれてありがとうございまあッス!』』

観客席からR Y U Y Aの文字が応声と共に掲げられている。それに堂々と応えられるのは、リユウヤとか言うイケメンクソち○ぽ以外にいない。ここをなんだと思ってるんだエキストラは？ 普通の運動会じゃないんだぞ。

「へえ、あれが古鷹を狙いやがる竜也さん……もとい、近衛少尉か。一応後輩だけどあんな人気集められるなんて羨ましいねえまったくクソツツ」

「落ち着いて穴戸くん、やることはわかってるでしょ？」

「ああ、整形レベルまでアイツの顔面偏差値を下げるって寸法だよな？ わかってる、楽勝だから」

「いや違うから」

彼は近衛竜也と言って、兵学校首席のエリートでありながら、芸能人としての顔も持つ、川内三姉妹に続く海軍を代表する広告塔だ。人気の理由は多々あるも、恋愛に関して“誠実と一途”のモットーを貫くタイプであると公言している。

だが、そんなち○ぽがイ○ぽらしく古鷹に迫ってるのはみんなと話した通りだ。佐世保まで運動会に参加した理由はなんと古鷹目的であり、彼のSNSでも「とある艦娘に愛に……いや、会いに行く」と、これまた大胆に公言している。

きも。

作戦ってほどでもないが、艦娘たち公認で俺に片思いをしている古鷹……という構図をこれでもかと思せつけるのが、諦めさせるベストな方法だとみんな賛同した。

しかし実はこの運動会の後、「実は古鷹と俺はみんなに内緒で付き合っていた」という二重構造を作り、信憑性を得るために二人でデートをして、時雨たちが彼の手を引き、ラブラブな姿を見せつける算段だ。

それじゃ運動会へ参加する意義はあまりないのではないかと、と斎藤提督にも聞かれたが、そんなことはない。諦めさせるには、彼を上回る要素を兼ね備えている事を示さなきゃいけない。

運動会で勝負するなんて古いラブコメぐらいでしか思いつかないだろ。でも、それでも古鷹のためとあつてはやるしかない。何よりタイミング的には素晴らしいので使わない手はない。

個人的な事を言えば、軍の行事、特に運動会なんて群雄割拠のイベントで優等を刻む事はプロフィールのアップデートを意味する。異色だが有用なステータスは取っておくに越したことはない。人事で地味に有効打となるモノはなんとしてでも勝ち取りに行くスタイルだ。

だから、あの陽キャな陰莖……ではなく陰系男子にそれを取らせるわけにはいかない。結構年下の後輩だとしても一度キツクをお見舞いするぐらいは必要だろう。

「グルルルルル……」

「落ち着いてください captain、野獣のようになっていますよ！」

「お前なんでここに居るの？ アメリカに帰ったんじゃないのかよ？」

「酷いです captain!! 確かに一連の出来事はありましたが、だからと言って帰るなどと…… captain、もしかして香水変えましたか?」

「ちよ、やめろってお前! そんな乙女心を燻らせる気付き方するなよお……」

「ははっ、可愛らしいですよ、captain……」

『チツ、アイツら運動会の選手同士でイチャいちゃしてやがるぜエ……？ ベンチプレス200キロ代の俺様が直々に寝取りレ○プしてやろうかア……？』

『おいやめとけって！ アレ確か穴戸提督だぜ？ 艦娘と互角に組み手やってたとか言う……』

『マジかよ!? チ○ポがウズウズするぜえ……!』

「ほ、ほらあ、お前のせいで皆に見られてるだろく？」

「haha、良いじゃないですか、見せつけてあげましょう！ 私たちの、愛をオ！ ほらShigureも！」

「女の僕がこんなに居づらい空間ってある？ やめて穴戸くん。第一にキモい、第二に穴戸くんがガチムチだってわかったらこの後のひっそりデート作戦が台無しになっちゃう、第三に準備時間中に接触して話すって作戦が既に台無しになってる」

「すまん時雨、じゃあおれイグツツ」

「普通に行ってきます言えなんだね？ あ、僕が直々にその汚い口の中改造して言えるようにさせてあげようかつ！ 口裂け男って一度見てみたかつたんだよねっ」

「本当に申し訳ない、任務に取り掛かる」

「選手たちはそれぞれの科目に応じて、準備をするか、暇をするかの二者択一。」

「これは学校の運動会とほぼ同じだが、ガチで暇そうにしているのを見つかりと上官に怒られたり、手伝いを強要される。」

「しかしイケメン士官さんはどうやら、御通り御過ぎる度に艦娘や女性から御声を御かけになられる事が多く御られるらしく、無条件に沸き立つイラツキを抑えながら自然と彼に近づくこうとした時だった。」

「あ、す、すいません！ 穴戸提督ですか!？」

「あ、ああ、提督ではないんだけど……君は、近衛少尉、だったよね？」
「じ、自分の名を穴戸提督……いいえ、穴戸大佐に覚えていてもらうな」

んて、光栄です！ 自分は大佐を尊敬しています！」

「そ、そうなんだ……いや、君も中々に有名な士官だ。海軍として逸材を手に入れたのは誇らしい事だ、と上部の先輩方もお喜びになっていたよ」

「じ、自分がそのような……いやあ、今日は来てよかったです！ 穴戸大佐にも、まさか会えるとは思っていなかったので、本当に良かったですー！」

「そ、そうかそうか！ 今日楽しんで、頑張ってくれ！」

「はい！」

・
・
・

「どうだった穴戸くん？」

「穴戸さん計画通りツバ吐き付けてやったっぽい！」

「いやあく意外と話せる奴だった」

「あ、これ多分何も言ってこないまま帰ってきたヤツだ。夕立、やるよっ」

「オツケーっぽおい！」

「うああああああああ!! やめろやめろやめろオ!! ここはIMMAF公式会場じゃないんだぞオ！」

ボディプレスをかけられる前に引き止めてくれた村雨ちゃんたちには感謝する。陽炎たちはとても残念そうな顔をしているが、内心しやうがねえやつだなあくとか思っただろうな。

そして、肝心の古鷹は皆の陰に隠れている。

「あ、あの、穴戸さん……やっぱり私なんかのために……んっ！」

俺の人差し指で古鷹のプルつとした唇を塞いだ。

「古鷹、私なんか……なんて言葉使っちゃだめだよ？ ここにいるみんな、古鷹のために来てくれてるようなもんなんだから。みんなの好意を素直に受け止めるのも、立派な役目だと思うよ」

「んっ……は、はいっ……」

「「うわあ……」」

おい、こういうの好きなんだろお前らツツ？

「……でも、やっぱりこれは私の問題です。宍戸さんたちにご迷惑をかけるわけには……」

「古鷹さんは、あまり自分の意見を表に出さないけれど、こういうときぐらいいは本音をぶつけても、村雨、いいと思うわよっ？」

「……………」

少し塞ぎ込んでしまった古鷹。

そんな古鷹の頭を撫でる。

「宍戸さんっ……」

「大丈夫だ、あんなヤツ俺という上官様が劣等感と敗北感と色々俺の実力と実績を混ぜた劣弱意識まみれにしてギットギトのべっちゃべちやにしてやるからな」

「は、はいー！」

「もう少し言葉選べないの？」

「というより、劣等感を感じているのは司令なのでは？」

「何言ってるんだ不知火貴様？ この俺が、あんな学校卒業して間もない青臭いガキに、劣等感を感じていると？ キャリアも年数も圧倒的にコッチ優位の俺が？ ハッ！ 冗談じゃねえんだよあんなのに嫉妬してて海軍やってられつかつてんだよオ!!」

「そ、そんなにムキにならなくても……村雨は、村雨だけは、宍戸さんの方が素敵だって、分かってますからっ」

「あ、心のギトギトシットシン消えちやっつたっ！」

「わっかかりやすい司令はんやなあ……」

『次は、男子短距離走です』

そうこうしている内に俺の出番がきた。

「よし、あの近衛とかいうイケメン野郎の顔に土方のモノをドバーっと体中に塗りたくってやる」

「体なのか顔なのかどっちなの……」

「ウルセエゾツ!! 全身にね、くまなくね、すごいことするから、見て

てね？」

「穴戸さん、イケメンさんの前だとこんな風になるっばい……？」

夕立ちちゃん、今更だよっ。

・
・
・

彼が出場するのは短距離走、そして個人として目玉である障害物レースだ。

一列に並ぶ屈強な肉体を持った海軍マツチヨたちの中には、もちろん俺が倒さなきゃいけない相手である近衛少尉もいる。

一斉に並び始めた軍人の中には、俺を見て驚いてるやつもいる。

そりやそうだ、この大会に出場している中で二番目に、それも他と比べてずば抜けて階級の高い人物がいれば普通目を疑うだろう。

因みに一番高いのは佐世保方面軍総司令官の蘇我提督で、屈強な肉体を使った綱引きのアンカーとして出場するらしい。

接待プレイはゼロ。手加減はなしだぞ？　と意思を伝えるため隣の選手たちにウインクとサムズアップをキメる。

そして、隣に並んだ士官が声をかけてくる。

「お、同じ競技だったんですか穴戸大佐?!　奇遇ですね……」

「ああ、滅茶苦茶奇遇すぎるオーマイゴッド。上官だからって手加減はなしだぞ？　手を抜いていると思ったら、それこそ厳罰モノだからな？　本気で戦って勝ったモノにこそ、価値があると俺は思う」

「は、はい！　自分も、自分の意思を示す為にここに来ている！　お互い、全力を尽くしましょう！」

「そのイキだー！」

開始前にある数十秒ほどの時間を使って、観客席に手を振ったら、陽炎たちが手をふりかえしてきた。

少し陰になって見えないけど、古鷹もちゃんといるはずだ。さて、ここが正念場……結構走り込みをサボってしまった俺は、果たして勝てるのだろうか？

『では、位置について……よおーい！ スタートオ！』

デート大作戦！4

優雅なお昼時間を過ごすには快適な佐世保鎮守府の運動会会場裏。お空は満点の笑みを浮かべ、選手たちに太陽エネルギーという、ささやかな安らぎを与えている。

「はいはいはいはいはいはいかっこいいかっこいい一位になれてよかったですちゅね〜すっごおーいイイイ！ 俺をぶち抜くなんて大したヤツ！ ツツツ!!!」

「お、落ち着いてって穴戸さん!」

「お、おちちゆいてりゆうううううツツ!!!」

「こりや駄目っぽい。っていうか、あのイケメンさんには勝ったから結果オーライっぽい?」

「でも一位取れないの悔しいじゃんツツツ!!!」

格の違いってのを見せつけてやる算段は成功した。

一位筋肉、二位俺、三位イケメン。

俺が目指したのは一位獲得という、人助けも個人的目標も達成するsランク完全無欠勝利だ。同族の海軍仲間だからと言って手は抜かなかつたが、全力全開でも負けた。

やっぱり若い佐世保鎮守府直属の体力バカがその特化した肉体を見せつけ合う場では、俺みたいなのは弾きものにされる運命なのだトホホ……!」

「あの……司令、本当にお気になさらなくても良いのでは? 二位じゃだめなんですか?」

なにツ? ははは、不知火面白いこというじゃないか……それはね?

「駄目に決まってるよオツ!! たとえば、ほら例えばよツ? 不知火が知らない艦娘たちのリストの中でイツチバアアン! いい娘選べって言われて、何を基準に選ぶ? もちろん成績とか練度とか色々数字が高いヤツ選ぶよねツ? それがさ? ランキング形式で一位、二位って明確に順位が決まってるモノに、ワザワザ二位選ぶヤツい

るウウウツ??? 海軍省みたいな中央は何を基準に選ぶウウウ??? 大
学校首席選ぶに決まってんじやん秋津洲さん裏山ツツ
ピイイイツツ!!」

「分かりました、不知火が間違っていました」

俺の完璧すぎる弁舌に恐れを成した不知火はさつさと弁当箱を開
けて「いただきます」してしまった。

「Shiranui、それに皆さんも、teaはいかがですか?」

「あ、ありがとうございます……」

「「いただきますーす!」」

自然と混ざってくるベリングハム少佐。コイツがいると俺の存在
価値薄れるから近くにおいてほしくないんだよなあ。

古鷹は蘇我提督と一緒にいる。

一応秘書艦として、そして妹の加古の有志を見届ける為に。

村雨ちゃんと時雨が会場から戻ってくる中、高らかに上げた時雨
フィストは優勝した事を意味していた。また、短距離走に出場した加
古に勝利したという合図でもあった。

「いやあ、帰ったら警備府のみんなに褒められちゃうんじゃないか
なっ! 僕の勇姿をみんなに見せて、僕こんなに頑張ったんだよ?

って言ったら絶対にボーナスモノだよねっ」

「加古に勝利したのか。加古って結構脚長いし見た目運動とか余裕そ
うだったからもしかしたら負けるかと思っただけだ」

「ふふ、僕が強すぎただけ……あ、お茶もらっついていい?」

「私ももらっついてもいいですか?」

「もちろんですShigure、Murasame」

優雅にティーセットから茶葉を入れ替え、マジックポットから熱湯
を注ぐ。まるで執事のような規律正しく美しい動作にスタジオ騒然
! モデルを凌駕する白人イケメンが尽くしてくれるシチュエー
ションに、女性陣歓喜! 金髪碧眼の執事はいかが? みたいな?

は? 俺もできるし。

今のおれ、阿修羅フェイスだし。

「穴戸くんさつきから色んな方向に嫉妬心向けてて疲れないの?」

「疲れるさ……誰か俺を解放してくれ」

「あ、あの……私で良ければ、何か力になれますか？」

「ふ、古鷹!? なんでもここに……っっていうか、こんな目立った場所にいちゃだめじゃないか……」

「いいえ！ 私のためにしてくれていることなんですから、なにかしない……気がすまないんです！」

相変わらず古鷹はマジメだなあ。

広げられたドデカイ重箱からは、手作り弁当特有のバライティに富んだラインナップがズラリと出てきた。みんなの為に持ってきてくれたのは大変素晴らしい、飲み物も持ってきてくれたようだ。

飲食類は既買ってあるんだけど、古鷹の好意を無駄にするわけはなく、艦娘たち一同はガブガブ食べ始めた。

「おいしいー！ ありがとう古鷹！」

「いえいえ、し、宍戸さんも、どうぞ……」

「!?!」

もぞもぞと古鷹から後ろから取り出したのは、一般的な中高生が持つてくるお弁当箱。

中からは、愛情がミシミシと感じられるハート型の海苔を乗せたお米、10種類にもものぼるかわいらしいおかず一覽、古鷹の愛。

古鷹は、俺のために、みんなとは別に作ってきてくれた……ということになる。

その事実には、全員が驚きを隠せない……もちろん、俺も。

「あの……私、こんなことしかできなくて……」

「何を言ってるんだ、古鷹がいるだけで天使フルタカエルの圧倒的加護を付与されている人々が大勢いるんだ。俺を含めてな？ だから、ありがとう古鷹、俺はあの競技で二位になってしまった負け犬野郎だが、古鷹のお弁当はありがたく受け取るよ」

「はいー……どうぞ……あ、あーんっ」

「!?!」

周囲の有象無象を更に驚愕させたのは、女子の男子必殺、重巡古鷹の先制攻撃。

顔を真っ赤にしながらも、一生懸命自慢の手料理を食べさせようと、プルプルと震えたお箸で唐揚げを差し出してきた。漢は黙って応える。

「……………」

「ど、どうですか……？ お口に、合いますか……？」

「……………ほら穴戸くん、お口に合うかどうか古鷹が聞いてるよ。早く答えてあげるのが、漢だと僕は思うなっ」

「おひひい」

「お口に物入れて喋っちゃいけません！」

「テメエが答えを急かしたんだろ!? ゆっくり手料理を味わってたのに、今度はイケません!? ワットアファツクだよッ!!」

「……………」

俺と時雨の会話を、あまり面白くなさそうに見つめる天使古鷹。

「ごめん古鷹、本当に美味しかったよ」

「……………えへへっ、ありがとうございます」

今度は時雨が一瞬だけ嫌そうな顔した。

他人から見たら特に変化はないように思えるが、長い付き合いの俺にはわかる。

だが古鷹は畳み掛けるように、頬を紅潮させながらもお弁当を食べさせてくる。一人で食べれると言っても「いいえ！ このあとも運動を控えているんですから、穴戸さんはゆっくりしててください！」と、普段は大人しい彼女も、今日は珍しく頑固だ。

そんな健気で美しい女性を独り占め……いや、ハーレムを築きし俺を独占する古鷹に、嫉妬して針よりも鋭い眼光で牽制しようとしても、古鷹はそんな卑しい感情には動じない。

どうせ総司令官に何か言われたんだろうが、若干楽しそうにしている古鷹にそれを聞くのも野暮というものだ。

漢は黙って愛を受け止める、漢憲法第二条だ。

それにしても、これだけの美少女艦娘たち侍らせて目立っているのに、あのイケメン後輩士官が来ないなんて、おかしいと思った。辺りを見渡しても近衛少尉の姿はない……と思っただらあそこにいた。

『兵学校を首席で卒業し、今はあの北部方面軍の中心である大湊警備府に勤務しているとの事ですが、海軍の生活はいかがですか!?』

『少尉任官したばかりの自分をここまで見込んでくれたという思いで一杯です！ この日本海軍、ひいては国民の命を背負って、守っているようになりたいです！』

『蘇我提督は近衛少尉と初めて会うそうですが、未来の明るい海軍士官を前にした今、どのようなお気持ちですか!?』

『貴様に古鷹はやらんツ』

『え、えええ……』

なるほど、報道陣も今回の運動会には全力を持ってかかっていることが伺える。一応俺は有名人である自覚がないわけじゃない。当然、前線艦隊で活躍したエリート艦娘たちもこちらにいて、更には雑誌モデルのベリングハム少佐もいる。

しかし近衛少尉の熱愛の方に気を取られるのは当然だろう。経歴を見たが、子役として活躍していて、今人気なのはただドラマに出るからとか、それだけが理由じゃないのが伺える。

子役タレントが兵学校で首席卒業、更には女性を追いかけているともなれば、一連の衝撃的な時流をリアルタイムでみたいと思うのは市民として当然。

それは何かと出動していつでも会える国民的英雄とは、時事的な話題性の格差は大きい。つまり、俺よりもアッチに目が行くのは当然だが、こちらにこないのも情報統制の一環なのだろうか？

そして提督も古鷹への接触を食い止めるのに関与しているのだろうか？ えらく敵対心を持っているように見える。が、古鷹が言うにはどうやら違うらしい。確かにエリートだが地方人まで巻き込んでエンターテイメントのように過度な膨張をさせて古鷹に近づきまくるアレが、単純に気に入らないらしい。

そうは言うけど、過度な演出で迫らなくても提督なら近づく者すべてに睨みを効かせかねない。舞鶴鎮守府にいた頃、古鷹に近づいてすごい睨みを効かせてきた事がある。

それ以上に参謀長のオツサンとか、提督の幕僚たちが過度な接触を

抑えていたイメージだったので、ある種の不可侵領域のような存在だった。

当時は、「参謀部のモテなそうなオッサンならともかく、結婚して子供もいるって話には聞く提督が、自分の秘書艦だから独占欲を見せてるなんて、クツソ小せえ提督だなアおい」と内心悪態をついていたのが懐かしい。

「ゴツホっつっつ——!!!」

古鷹が詰め込んだ料理が口の中を詰まらせた。お陰で吹き出したじゃんか、悪い子だ、今度は俺のを詰め込んでー

「す、すいません宍戸さん！ あ、あわわ飲み物のみもの……！」

「こちらをお飲みくださいcaptain」

「ゴックウウンツ——!! なんてテメエが古鷹より先に用意してんだオラア!!」

「飲み物必要なかったみたいですね司令」

「必要なかったがな不知火、危うく死にそうだった上、口の水分奪われてんだよツ。こういうときに飲むモノなにか知ってる？ コーラ以外美味しいモンねえぞオラア!!」

「こ、c o k eですって!? それはイケませんcaptain。ユダヤの侵略がまさかcaptainの血液にまで進んでいるとは……」

「少佐ちよつと黙ってる。古鷹、分かってるね？」

「は、はい！ 今買ってきますー！」

勢いよく立ち上がった古鷹のパンツ……ではなくスパッツの奥のエッチな場所が見えそうになる彼女を追いかけたのは、自動販売機に走っていったのを確認した数分後の事だった。

遠回りをしてなるべくひと目につかない所を選んだのが幸いしたのか、彼女の周りには誰もいなかった。

あまり使われていない場所みたいで、3種類もある指定飲料のチョイスに若干戸惑っている様子だ。「こ、これかな？ それともこつちの方が好みなのかな……」など、あわあわしている古鷹をこのまま眺

めているのも一興だが、迷わずに古鷹へと詰め寄る。

「し、穴戸さん!? ど、どうしてここに……」

少しハッキリさせたい事を思い出した。

「少し聞きたい事があるね、みんなが居ないところで聞きたかったから、丁度いいタイミングなんだけど……いいかな?」

「は、はい……」

「……古鷹は、本当はアイツのことどう思ってるの?」

「え……」

「古鷹は優しいし、物静かだから、周りの勢いで押されちゃう所があるのは知ってる。だからこそハッキリさせておきたいんだ。あの近衛少尉って、結構なイケメンで、将来有望で、女性を大事に出来そうな感じするし……」

「……」

「だから、最初は戸惑って否定しちゃって、それで周りが古鷹を守るために躍起になっちゃった……そんな、周りに任せちゃって、自分の本心を話せた事って、結構少ないでしょ?」

「……そう、ですね……」

「古鷹、本当は、あの近衛の事……どう思ってるの? ただ邪魔な虫つてわけでもないでしょ?」

正直、まだまだ古鷹の本心が分からないでいた。

俺が縁談した時のアレはTDNヤケだったのか、というよりほぼ100%蘇我提督の強引さが招いた結果だけど……古鷹は、俺の事をどう思ってるんだろう? 迷惑この上ない奴ならまだしも、古鷹は優しいからそんな事思わないし、そもそもどういう経由で彼に出会ったのかが疑問だったから、それがとても気になる。

「古鷹、彼について、聞かせてもらえない?」

「そ、その……な、内緒に、してもらえませんか?」

「もちろん」

内緒にしなきゃいけないぐらいヤバイ内容だったらケース・バイ・ケースで蘇我提督に話すことになるけど。

——横須賀第二鎮守府所属の頃、彼が少尉候補生として着任した。

兵学校卒業者らしい人事だなと思ったが、最初はあまり海軍に馴染めなかったらしい。

当然、芸能界で生きてきたヤツが、兵学校を卒業したのが驚きだが、やはり学生の頃と勤務している頃とじゃ大変さが違うし、芸能活動も兼任しているともなれば非常にハードで、首席卒業者にかかる期待の圧力は大きい。

そんな所に舞い降りたフルタカエルが、色々とアドバイスをする。というより、教育係の一人の担っていたらしい。

なんやかんや、好きな人への恋愛相談役も兼任し。そして古鷹に惚れちゃう。

ありがちすぎて腹立つが、こういう人生謳歌王道コースを歩むクソ野郎ほどベタな人生送ってるんだよな。よくアニメとか映画とか小説とかよく見るタイプの登場人物は、一般人が見て見栄えのある人生を送っている事が多いのは当然だ。

……恋愛相談とか言っていたが、つまり古鷹より好きな人が前にいたって事か。

こりゃ許しておけねえな。

一途でも途切れちゃ意味ねえんだよ。

「首席の素性はわかったけど、肝心の古鷹の心の声はまだ聞いてないな。彼と付き合うのって、想像できない？」

少し考える間を置いた古鷹は絞り出すように答えた。

「……逆に宍戸さんは、私とあの人が、お付き合いしても……いいんですか……？」

「そりゃイヤだよ。古鷹があんなヤリチンとケツコンカツコカリしたら俺、一応アイツの上司になるかもしれないし、そしたらアイツの昇任枠取り消す」

「そ、そこまでしなくても……」

「古鷹も、俺が見知らぬドスケベボディのお姉さんと付き合っちゃったらどう思う？ 女優、国家公務員、話題沸騰、全国にファンクラブ、そんなステータスのある人と付き合ったら？ うわ、コイツ逆玉の輿狙いじゃん、て思うじゃん」

「そ、そんな事は……っっていうか、宍戸さん古鷹の事をそんなふうに思ってたんですか!？」

「誤解だよ誤解。でも、古鷹の本心に問うべき質問を、俺の感情や他のみんなの感情で判断しちゃだめだと思うんだ。古鷹の本心が知りた……古鷹は、本当はどうしたい?」

「……………」

……………。

障害物レースのスタートラインは選手たちの熱気で既に溢れかえっていた。観客席からは主に近衛少尉の応援団、海軍専用席からは……音楽部隊が来ている。俺個人への応援は彼らの音響によつて阻害されている。

全選手が、各々のスタートラインを温める。

「宍戸大佐! またお隣に立ってるなんて光栄です! 短距離では負けてしまいました、今回も正々堂々とー」

「近衛少尉」

「え、は、はい!」

「貴官には意中の相手はいるか?」

「な、なんででしょうか突然……い、いいえ! います! 彼女も今、俺の活躍を見てくれて……はずです」

「なるほど、君が公言していた片思いというヤツか。しかし近衛少尉、君は前にも片思いをしていたと噂で聞いたんだが……今、貴官を見ている彼女は、前の想い人よりも、さぞ素敵な女性なんだろうな」

「く、詳しいですね……はい、俺が彼女と出逢つて……いいえ、邂逅(であ)つてしまつてからと言うもの、俺の毎日はある人の事でいっぱいです」

「なるほど……好きになるのに理由が必要じゃないように、好きじゃなくなるのにも理由は必要ない。その瞬間を一途に愛せば、人としての道理を果たせる……だから、心変わりには仕方ない。貴官はこの論についてどう思う?」

古鷹が少尉から聞いたセリフを上手く使わせてもらった。

「お、俺もまったくそう思いますツ!! 流星はあの穴戸大佐ですツ!!

尊敬がさらに深まった気がしますツ!!」

「おうそうか、俺もこれでテメエのコト心置きなくぶっ潰せるわ」

「え」

デート大作戦！5

障害物競争の結果に驚く者がほとんどであり、途中から一位予想をやめた物もその割合に含まれる。また、海軍士官の各グループの間だけで行われていたトトカルチョでは倍率的にも2倍以上は行かなかったため、いい儲けにはならなかったと嘆く者もいた。

圧倒的ツ……一位ツ……！

ガッツポーズで拳を天に突きつけたまま、漢はヴィクトリーロードを歩く。

他の選手を素通りする、強者の姿勢。

称賛ツ……圧勝ツ……最強ツ……圧倒的、最強ツ！

真っ先に向かう、古鷹の場所ツ。

圧倒的っ……漢感っ……圧倒的っ……彼氏感っ……！

オス共っ……劣等感っ……漢に対しっ……嫉妬っ……!!!

ベンチに座る艦娘……感嘆……神……降臨……OMATA……濡れるウ……!!

「勝ってきたよ、俺の古鷹」

「俺のツ？　じゃ、じゃなくて、凄いです穴戸さん！　ちよつと怖かったですけど……」

村雨ちゃんが今チラつと見せた顔のほうが100倍怖いよつ。

「穴戸くんって障害物競争すごく上手いよね、僕でも勝てないよあんなの」

「障害物って避けるの楽しくない？　目に見える障害物を身体で避ける安直さと、それをいかに早く避けるかを考えながら、その先にある障害物を避ける計算をして、スピードを図る……奥深さがある。金になるなら障害物競争世界大会選抜選手になるのもやぶさかではない」

「調子にノリすぎっぽい」

「いやいや、あの走りならちよつと練習すればスグなれるんじゃない

!？」

陽炎の言う通りだ、俺は最強、圧倒的なんだ。

昔から地味に好きでこれだけは常に一位を取っていた覚えがある。まるで人生みたいな競技であり、足や棒で玉遊びする競技より断然オリンピックに相応しいと思う俺だが、金の集まりは良くない。金メダルよりも金(Money)が重要って、はつきりわかんかね。

「司令が置いていった爪痕は深い様子ですが……」

『な、なんでだ……!? 穴戸大佐はあまり運動してないと想定してたのに……! いや、短距離走でも俺に勝ってたんだから運動能力は問題ない……だが、この俺が得意な種目で敗れるなんて……いや、流石は大佐……いや、でもこれじゃあ古鷹さんへのアピールが……いや、でも……って、古鷹さん!? な、なぜ大佐と一緒に……!』

『フッフ、安心してください。あの方は特別です。Shigureも含めて、この佐世保鎮守府開催の運動会を圧巻させるのは、あの二人と決まっているのです』

『だ、誰ですか貴方は……』

『私はAJAX。色々な意味で、Faptainの右腕です。ふむ、貴方も中々……クツ! クソツ! 悔しそうにケツを突き出しやがつてツ! ……いいえ、私は誇り高きBritish American! 紳士たる行動を信念とする者! 惑わされませんよこのIncubuss!』

『は、はあ……?』

2位との圧倒的差、これはもう立ち上がれないだろう。更に俺が古鷹と接点がある様子を見せつける。

だが、完全なる勝利とは、考えられるすべての要素に“勝ち”を得てから貰える称号であり。完全勝利には時間と何らかの犠牲が伴うのは必定。少尉みたいな一途と言いつ張りながら目移りの早い尻軽男の子には、少なくとも仲間としての古鷹を譲れる気がしない。

「夕立ちちゃん、明日の計画は順調に進んでるよね」

「っばい! とは言っても、穴戸さんが古鷹とデートするだけなんだ

けど……古鷹はスケジュールを開けておいたっぼい？」

「あ、うん！ 問題ないですっ」

「じゃあ夕立艦隊、一旦帰還っぼい！」

金メダルの授与と閉会式を終えた直後、古鷹は鎮守府内の廊下に呼び出されていた。人気のないスペースは普段からあまり使われておらず、通るのは巡回中の警備兵か総司令に用事のある古鷹ぐらいだ。均整の取れた肉体と人々をテレビ越しに惹きつける甘いマスクで多くの女性を惑わしてきた海軍士官、近衛少尉。

今日来た理由はその意中の人の下へと馳せ参じる為であり、運動会で彼と、大湊警備府の実力を見せつける為でもあったが、彼にとって所属云々は塵よりも意識価値が低かった。

「古鷹さん……俺の活躍、見てくれてましたか？」

「あ、は、はい！ とつても良かったと思います！」

「ははは……出場した全種目で穴戸大佐には負けてしまいました、それでも俺は……大湊のために、何かできたんじゃないか、って思いました。貴女に、この想いを伝えるためにも……」

「……銀賞、おめでとうございます。では、そろそろ行きますね」

「ま、待つてください！」

「きやー！」

「あ……」

不意に手首を掴んでしまった事に気づき、すかさず離れた。このよくな所で乱暴な真似をしたら、誰にも気づかれない以前の問題である前に、紳士的な態度で臨んでいた彼の一貫性が崩れるからだ。

「す、すいません……でも、俺の気持」

「す、好きな人がいるのでっ!!」

「……え？」

「す、好きな人がいるんです……だから、ごめんなさい!!」

「あ！ ……行ってしまった」

赤面してしまった古鷹は彼の返答を待たないまま立ち去ってしまった。

この時点で既にフラれた事になっているのだが、今まで一度もフラれたことの無い彼にとって、プライドの許しがたい事案だった。一度だけ落胆をするも、あと一日だけ佐世保にいる間、必ず落としてみせる……総司令官の娘という肩書は羨望的であり、彼女本人の魅力以外に惹かれた部分があった事は否めない。

彼の人生の中で一、二を争う大きな獲物は、なんとしても愛したいと思っていた。

廊下のだ真ん中で盛大に立ち往生していたので、顔を見ずとも彼が近衛少尉だと言う事はひと目でわかった。

夕立は気さくに肩を叩いた。

「うお！　ど、どうしましたか？」

「どうしたもこうしたもないっぽい！　廊下の真ん中で立ち往生なんて邪魔っぽい！」

「す、すみません！　すぐに退きます」

「違うでしょ夕立、あなたに話があつて来たんです。明日、予定はありますか？　もし良ければ村雨たちに付き合ってくださいませんか？」

「え、予定はありますけど……」

「そうなんだ、ならキャンセルしてね」

「え」

デート大作戦！6

翌日の昼頃、古鷹は秘書艦の仕事に目を瞑ってもらい、宍戸を鎮守府の外で待ちわびていた。鎮守府の敷地外なので、一通りは多く、ドレスアップした古鷹は、白のロングスカートとブラウンニットと言う秋服を思わせるコーデに仕上がっている。性的。

一方、夕立たち姉妹は、古鷹とのデートの様子を見せつける作戦のために、近衛少尉を呼び出していた。茂みの中に彼を閉じ込めた村雨、時雨、夕立の三方包囲で見動きが取れなくなっている。

「な、なんですか急に!? 古鷹さんの事をお聞かせ頂けたのは大変嬉しいのですが、このように拘束されるのは窮屈で……」

「いいから静かにするっばい。古鷹を狙っているのは知ってるけど、古鷹にはもう、好きな人がいるっばい」

「き、聞いてますよそんな事！ 本人から！ でも、恋って、諦めきれないじゃないですか。今は貴女方に拘束されてますけど、俺の心は……ずっと前から、古鷹さんに拘束されてます」

「……………」

クツツツツツツサ！ と言いかけたが言葉を飲み込んだ三人。あとずっと前とか言っておきながら結構最近の事だと記憶している三人は、彼に対しての疑心感を更に高めた。

「っていうか、変装までさせてなんなんですか!? いい加減に話してください！ そしてできれば離してください！ マネージャーには用事があると言って誤魔化しましたが、つまらないことだったら承知しませんよ!？」

顔にメイクを施し、目立たないように変装させているが、当然夕立、時雨、村雨も整工班の服を着て変装させている。メディアやファンとの接触は控えさせ、その間に茂みから古鷹を監視するという、まるでスパイ映画にでもいるかのような感覚に襲われた夕立は少し興奮している。

陽炎やベリングハム少佐は人数的な限界点を考慮し、長崎警備府に

て待機……と思われていたが、実は経過が気になって遠距離から双眼鏡を覗かせている。

「いいから静かにするっばい！ このカイリキイ時雨の腕にかかれ少尉は声も出せずにミンチカツになるっばい」

「……………」

「ひ、ひい…………!!」

時雨は夕立を睨んでいたが、少尉は時雨の形相に震えていた。

「しッ、静かにして三人とも。穴戸さんが来るわ」

「し、穴戸大佐が…………？ ……ま、まさか、やっぱり…………？」

「流石はロマンチスト脳な事ばかりSNSで発信する頭フワラーガーデントっばい。古鷹が好きなのは穴戸さんっばい。運動会の翌日に筋肉痛無視でデートできるぐらい古鷹とラブラブっばい」

「な…………!?! う、嘘だ…………ふ、古鷹さんは何も…………」

「なんなら直接話を聞くっばい。これは穴戸さんの服に付いてる軍用ピンマイクから聞こえる音声っばい」

村雨が取り出したスマホから、無作為に服が擦れる音が聞こえるが、走りながらも吐息と発声はちゃんと聞き取れた。極小高性能マイクは警備府内の通信機器扱いとなっているが、ごく一部の人間にしか使用は許されていない。

「な、なんでそんなモノを穴戸大佐に付けてるんですか…………？ っていうか、そもそも何故あなたたち三人は隠れて二人のデートを覗き見なんて…………」

「そ…………それは夕立たちは穴戸さんの妹だからっばい！ だから穴戸さんが古鷹と一緒にデートする様子を見たい！ 安直な理由？ こんな大掛かりなことをして三人でデートの様子を覗き見るのは非常識？ エチケツトに反してる？ そんなの関係ないっばい！ 恋は戦争、諜報もスパイも外套も短剣も時には必要で、少尉にも古鷹ラブの精神があったからこれを見る資格があると夕立は確信して参加させてやってるっばい！ 悪い!? あと、言っただけで夕立たち三人は一応少尉の上官っばい！ こんな可愛い上官には敬意を払うっばい！」

「は、はッ!! うん……?」

本当に妹なのか、何故恋と関係するのかなど色々疑問が湧いてしまったが、夕立の勢いに押される。が、それ以上にシヨツキングな言葉聞いて、目の前の現実がそれらの疑問視を阻害してしまう。

『遅れてごめんね……俺の古鷹』

「「ッ!」」

『い、いいえ……あ、あなたっ』

「「!?!」」

『は、早かったですねっ……』

『ああ……今日は一週間ぶりのデート。久しぶりすぎて、古鷹の事を想ったら、朝から古鷹の名前ばかり呼びながらラジオ体操して……いつの間にか、ここに居た。着替えなんて、古鷹に早く会いたすぎて、早着替えが神着替えになっちゃったよ……古鷹の事を想うの、マジ俺のチートだから』

「「ッ!」」

「ブッ!」

時雨たちは予想はしていたが、イチャラブカップルを演じる為に何が必要かを研究した結果、歯の浮くようなクサイ台詞を言い続けなければいいんだ、という結果になった。

時雨は思わず吹いてしまったが、村雨や夕立は引いている。少尉は現実に叩きのめされ、遠くから双眼鏡を覗かせる陽炎達は何を言っているか分からないので、順調に進んでいる事だけを願いつつ、双眼鏡の取り合いを初めた。

『あ、あ、あ、あなたっ! う、運動会で疲れてるんですから、わざわざ大会の直後にデートしなくてもいいのに……』

『え? そんなの無理。古鷹と、24時間月火水木金金デートしたって、俺のハートビートが騒いでるんだ。俺のトキメキを止められるのは……目の前にいる君だけなんだよ? My Sweety Honey』

しかし、予想以上に下手なクサイ台詞を連発している穴戸。演技力

には一定の自信を持つ穴戸大佐は内心「古鷹の為ッ！ 古鷹の為ッ！」と連語している上、既に赤面している古鷹よりもこつ恥ずかしい思いに打ちひしがれていた。

時雨は、穴戸の発言のキモさで腹と口を抑えるので必死になっている一方、村雨は今にも持つている音の発信源を壊しそうな表情でスマホを握りしめている。

「ど、どうということですかこれは……え……ふ、古鷹さんと穴戸大佐は……もうすでに……付き合って……？」

「あーまあーうん……夕立たちは、ただただ見守るっばい。ほら！

移動するっばい！ ついてきてー！」

「は、はいッー！」

一方で陽炎たちは双眼鏡を持ちながら、聞こえない会話の内容を予測しながら、夕立たちから更に50歩ほど離れた場所監視していた。

「あ、移動するみたい！ 両舷全速！」

「チマチマ歩いとるなあ……あ、古鷹に歩幅合わせとるんやな、何気に男子力高いやん！」

「少佐は司令のこういう所にお惹かれになったのですか？」

「はい♂本格的♂気遣いのできて仕事♂ができる上に何気に我々海外士官の立場維持に協力してくれるなど、ソツチ♂方面での気遣いもできるイケメンですので♂」

「オスオスやかましいわッ！ まあ司令はんはたしかにあんな感じでも、ちゃんとうちらの事も気遣ってくれてるのは嬉しいけどなあ……」

「古鷹と楽しそうに話しちゃって……『その服かわいいね』『い、いいえ！ 穴戸さんこそ可愛いです！』『古鷹より可愛くなれる娘なんていないよ』『し、穴戸さん……』『みたいな会話してるに決まってる！この陽炎の推測に……狂いはない！』」

「いやいや、多分アレやろ？ 『それじゃ、今からホテル行く？』『ええ、ええ!? そ、そんなことできません！ え、演技……ですよね？』『演技かどうかは……ベッドの上で確かめてみなッ』とか言っていたりし

てッ!？」

「きゃあー!!!」

「落ち着いてください陽炎、黒潮！ 司令がそんな事を言うような胆力があるとお思いですか？ 『古鷹の為に早く着替えて来たよ、古鷹を思ったら、自然と着替えが終わってた。無意識に早着替えをさせるなんて、いけない子だ……My Sweet Honey』は、はわわ……!」程度の発言だったと、不知火は推測します」

「うわあ……」

苦虫を潰したような表情を浮かべるほど引いていた二人。

「な、なんですか?」

「いや、別にいいんだけどさ……不知火って、もしかしてここにいる誰よりもロマンチストだったりする？ そんな臭いセリフ私でも吐けない」

「な……!?! し、不知火はただ宍戸司令の言いそうな事を口に出したまでです！ し、少佐はどう思いますか!?!」

赤面しながら話題を逸らすために使われた少佐は顎を指に当てながら口に漏らした。

「ふむ……私なら『遅れてごめんね、ベリングハム少佐の事を思ってたから、早着替えになってた、いけない漢の子だ……』だと思えます」

「それ少佐が言っただけじゃん。ていうか、さつきからなに見てるの?」

「いいえ……私やYudachiたちの他に、Captainを見張っている人がいます」

「え……?」

ビルの屋上は便利である。

お天道様がニツコリ笑顔見下ろして日光を無差別に放射するが、三人が見る先はその下にある。

加古、足柄、そして新任士官の御手洗少尉が更にこのデートを監視している。

彼女たちの本当の目的は、屋上で密会をしているアメリカ軍元帥と、佐世保鎮守府第二鎮守府参謀長の護衛という口実だが、動向を監視する名目も兼ね備えている。個人で連れている護衛を含めると数はかなり多い。

保守派の全体的な減退の流れ、そして自分たち以外の勢力の呼称である“蘇我派”の勢いに押される。必然的に仲間を求め、友好的かつ有効的な勢力である外部の……アメリカ軍との接触を図るのは必然である。

「私としては、国軍を防衛軍として固めるのが最も良いと考える所存です。アメリカ政府を含めた国際社会も国土防衛に専念する必要性を表明している事は明らかであります。我々に、再度山良き友人となる権利をお与え下されば、友好関係は必然的に築かれるでしょう」

「俺別に政治家じゃないから何とも言えないけど……いや、この際政治家もアリか。イイ身体した赤城さんに手を差し伸べるのもやぶさかじゃないけど、正直あまり気が進まないんだよなあ……流れを止めて、その先に我々の利益があるのか、それが数百年続いた我が祖国の歴史を作ってきた。それは承知しているな」

「重々承知の上です。しかしながら、損益を被るのを阻止してきたという事も理解しております」

「分かってるじゃねえか、だが考え方次第では利益にもなるぜ？ 交渉するならちゃん材料を用意するんだな」

「な!? あ、貴方がたは我々と協力関係にあるのではないのですか!」「そんな非公式な関係はない……そういう事にできるからこそ、回りくどい支援を行ってたんじゃねえか。第一、なんでそんなに躍起になる? たしかに赤城提督は美人だが……」

“赤城派”の参謀長は、赤城提督の前線現役時代は護衛艦船の乗組員幹部を努めており、航海中に奇襲を受け、遠征任務の途中だった彼女に救ってもらった経験があり、恩を感じている。

「クツ……穴戸大佐、斎藤准将、大鯨中佐、秋津洲中佐……若手革新派の面々が保守派を取り込もうとしている今……我々が生き残る手段は、果敢に抵抗する以外無いのです……!」

「いや考え方変えればいいだけじゃん。つか、コツチにカコヤアシガラみたいなのが艦娘もいるんだし、もう少しこういう話控えない？」

「艦船派が急に消極的になり、我々の勢力は減退の一途を辿るばかり……！　そもそも第二次沖繩作戦で宍戸大佐等が我々を止めなければ……クソオ！」

「話聞けよ」

佐世保総司令から直々に命令を受けて行動してる加古だが、そのサポートとして指名したのが、イージス艦新任幹部の御手洗少尉と、たまたま佐世保鎮守府を彷徨っていた足柄。

この三人は、イージス艦幹部であり艦船派の御手洗少尉は当然だが、加古と足柄には保守派への転換を思わせるような素振りが度々見られていた。

実は流言だが、保守派への二重スパイとして大淀総長、明石次官、宍戸大佐が仕組んだ罠だったが、これは彼女らの数ある策謀の一つでしかないのです、期待はしていなかった。

事実、三人の興味は政治的な戯言になく、早くも眼球の細胞をフル稼働させ、大勢が集う広場にいる、一組のカップルに注視していた。「なぜ俺がこんなことに……」

「どうせイージス艦の勤務なんて暇なんだろう？　それよりも古鷹のデート見守るミッシェンの方が何倍もいいって！　ほらほら！」

パンパンと背中を叩く加古だが、二人は初対面と言ってもいいレベルで面識が薄い。

フレンドリーな加古はこういう事をやってのける度胸がある事を高く評価されていた。艦船派の中で特に舌戦を極めていた御手洗少尉と宍戸大佐は、因縁という程でもないが、苦手意識を持つに十分な要素を作ってしまった。

「若いっていいわね……へ？　今、誰か私の事オバサンって言わなかった？」

「言うわけ無いでしょそんな事……でも古鷹と宍戸大佐はなんでデートしてるんだろ？　付き合っていないと思っただけ……」

「え、普通はデート数回ぐらい挟んでから付き合うものじゃないかし

ら？ 面白そうだから付いてきたのだけど、馴れ初めなら尚更面白くなりそうね！」

「え……告つたら付き合うみたいな感じだとばかり思ってたけど、そうなんだ……少尉も知ってた？」

「し、知らないですよ……でもまあ、大佐が尾行されているのを見るに、ただのデートじゃないって事だけは確かです」

「え、私たち以外に見てる人がいるって事？」

「はい、アレはたしか海外士官のベリングハム少佐と三人の女性……他には、前線艦隊で活躍なされたと噂される時雨大尉、村雨中尉、竜也……近衛少尉と、他一名居ます」

「え、そうなの!? なんで分かるの？」

「目が良いからです」

「そんなに目が良いなんて羨ましいわ……私なんて最近、本を読むときもメガネをかけて……え、だれ今私のこと老眼って言ったの？」

「だから言っていないって。んでも、やっぱり人気だね〜古鷹は！ 多分レズだよアレ。古鷹取られたくないからデート尾行してるんだよ」

「ハハハ、その発想はなかったです。護衛なんてつまらない仕事にも華が咲いたようですし、俺はこれで失礼してもいいですか？」

「駄目」

「ですよ、すいません……」

デート大作戦!・7

今のご時世、映画館の足を運ぶのは新作推しアニメの劇場版を見に来たオタクか、適当な映画で建前上の関係を延長させようとするカップルか、親に連れて来られたクソガキぐらいである。

映画館の中は盛況では無さそうだが、カップルやグループで来ている人が多い。

『アケミは何にするウ〜?』

『ハヤトが食べたいものならなんでもお〜。でも、アケミポップコーンがいいな〜』

『うんうん、じゃあそれ食べよっか!』

なんでも、とはなんだったのか(笑)。

目の前にいるクソカップルはウザさの擬人化だが、今回はこういう知能レベルの低い奴らの真似事をしなきゃならない。古鷹と共に列に並び、じつくりと目の前にいる回収者待ちの粗大ゴミらを観察する。

『あ、ポップコーン、大きいので』

『かしくまりました。お味は何にしますか?』

『塩で』

『かしくまりました、少々お待ちください』

『あ、私そんな食べれないから』

『そうだよね! アケミうわあ〜少食う〜? だもんね。おい店員、ミディアムにしろ』

『あとお〜わたしい〜キャラメルがいいい〜』

『はは、甘いもの好きだもな! 店員さん、塩キャンセルで、キャラメル』

『は、はあ……』

店員さん! は、はあ……じゃなくてそこは、チツ、カス共が、だろ? お店のマニュアルに書いてないの?

「ああいうのにならないようにしようね、古鷹」

「は、はい! もちろんです!」

少し声が大きかったのか、ヤンキー風チンピラクソカスが振り向いてきた。

「あ？　もしかしておニイキン？　俺たちン事言ってる？」

当然俺は理性ある海軍軍人としての行動が求められている以上、高級士官としての礼節と責務を職務外でも行う。

「平和的に行きましょう」

「は？　おい、あんま俺ン事舐めてると殺すよ？」

胸ぐらを掴んできた。

「あ、あなたっ……！」

心配そうな古鷹だが、当然ながら俺は理性ある海軍軍人及び高級士官としての礼節と責務を果たす。

「ああ〜アンタ死んだわ。彼つてここらじゃ有名なヤンキーだったんだよね〜。あと、リクグン？　に入ってる？　なんか体育のセイセキ？

一位だったんだよね〜」

「そうそう、お前俺にケンカ売ったのが？　運のツキ？　みたいな？　今からお前の顔面に突き、みたいなの？」

拳を構えられた上、ビチクソ女も笑っているの、当然ながら理性ある海軍軍人及び高級士官としての礼節を――

「黙れクソガキィ――ツツツ!!」

「ガァ――――ツツ!!　う、腕がア……ツ!!」

「すまないねえ今手加減したつもりだったんだけどネエ!!　まずそのクソ女なんでもとか言いながらちゃんと要求する所とか店員にタメ口聞くなとかオーダー変えまくるなとかそもそも割って入ってくるなとか色々あるけどね、典型的な環境型災害なんだよお前たち!!　何!!　神様にカス人間になれとでも言われてるのかなツ!!　折れても居ないのにそんな痛がるなんてリクグンはひ弱な人を採用したもんだねエ!!」

「な、なにコイツ……!!」

「言っとくけど俺は知らない女だったら平気で殴り殺すからなあ!!　テメエもそのキャラメル尽くしの脳天モノホンのポップコーンみたく爆発されなくなかったらコイツが頭が犯されるトコロミテロオ―

「ッツ!!」

「ひ、ひい!!」

「クツ……ここ、こんなことしてただで済むと思うなよオ……! 俺の後ろには、陸軍と所属してたチーマーの仲間たちが居るんだぞオ……!」

「ウルセエ!! 陸軍相浦駐屯地連隊長とは陸軍長崎駐屯地連隊長経由で知り合いなんだよ既にツ!! あとチーマーだと舐めんなよちとら既に鴨川で同じような奴ら潰してんだよ」

「な!?! お、お前は……」

「俺の名前は穴戸、長崎警備府で司令官をしていた者だ。佐世保でこっちに来ることはあまりないと思うけど、時間があつたら長崎警備府にいつ別れるかわからないような彼女さんも一緒に連れて遊びにきてね……才前タチドノミチノコトコロスカラア——ツツツ!!」

「ひ、ひいひいひい!!」

クソガア……あ。

「……………」

豪華に彩られた館内の客共がこちらを見ている。

が、特に咎められるような事はなかった反面、一応有名人として名を残している穴戸様に近づくこととする者はいない。

畏怖と、スカツとニホンカイグンを同時に受けたから感謝しても近づきたくはないんだろう。

「よし、古鷹は何食べる?」

「あ、えつと……では、アイスクリームで……」

クソ、古鷹のテンションが下がってる。

裏では夕立ちちゃんたちが聞いている以上、臭いセリフを連発し続けなきゃいけない。が、このままじゃレパートリーが少なくなってしまう。映画館に歩くまでの道のりですでに使果たしてしまつた以上、ラブラブカップルの極意をあのバカ共から拝借しなきゃいけない。

「ウンウン、古鷹は甘いもの好きだもんね、全く俺の嫁は可愛いなあ」

「これは気色悪い」

「でも古鷹凄く喜んでるっぽい！ これはもう決まったっぽい？」

「クソ……俺もアレぐらいの事なら幾らでも言えるのに……ッ！ あんな初な古鷹さんを言いくるめるなんてエ……！ 正直に聞きますけど、穴戸大佐はヤリチン女性関係に緩いんじゃないですか？ 女性慣れしてますし」
「そう見えてるだけで中身は心臓バツクバクだと思うよ、あと君に言われたくないな」

「俺はヤリチンではないです！」

「チンピラ陸軍に絡まれてもへつちやらな穴戸さん、でも古鷹みたいなかわい子と距離を縮めようとするのとヘタレになって、今みたいな感じになるっぽい。普通の女子はよほどイケメンじゃないとあんな言葉で落ちないっぽい」

「ははは、照れますね」

「今のどこに照れる要素あったの？ イケメンって君の事言ってるわけじゃないから。あと穴戸くんに今の発言チクったら君殺されるから気をつけようねっ」
「す、すいません!!」

—————

——完璧なまでの理想の男・穴戸大佐との出会いは彼女らの人生を大きく狂わせてしまった。淫欲の谷間に墜ちていく駆逐艦春雨、第二艦隊旗艦白露、警備府秘書艦親潮、ルームメイト月魔……せめぎあう欲望と理性のはざまを最高のモデルで描ききった、長崎警備府。

出撃中、穴戸の事を想った春雨。

尾行しようとしたが、俊足で逃げられた。

自然と足が向かったのは、大佐の部屋だった。

ベッドの中に潜り込み、枕を勢いよく吸い込む。

「……すう……」

「あれ、司令の部屋に電気がついてる？ 外回りに行ったはずじゃ……は、春雨さん!? 何をしてるんですか!?!」

「すいません！」

日々ボディーガードもこなす秘書艦仕事の親潮は自然と身体が動いていた。

うつ伏せの春雨に馬乗りとなり、瞬時に拘束状態に入った。

「じつとしてください春雨さん！ 何が目的ですか!? お金ですか!?

仮面ライダーですか!?

「すいませんっ！」

「すいませんじゃ済まないですよこれ!? 白露さんに通報してやりま

すからね春雨さん！」

「すいません！」

たまたま部屋の前を通ってただけだが、部屋があまりにも騒がしく、自分の名前を呼ばれて入ってきた白露は勢いよくドアを閉めた。

「白露だ!! 何が目的だ!? モノか!? 金か!?

「ちえーん——」

「部屋に異常はない!?

「今の所ないですけど春雨さん、布団の上でえん又枕抱えて……多分変態だと思っんですけど……」

「じゃあ白露、権限ないけど地区憲兵隊のところまで連れてくね!

立て！」

「大丈夫ですか一人で?」

「立て! 外に出ろ！」

部屋の外に連行される春雨。

俯いたまま前を進む春雨は当然手錠も縄も付けられておらず、並行して歩く春雨のお姉さんこと白露は、一瞬で妹の考えている事を理解できた。流石は長女と大佐や司令官に言わしめさせただけの事はある。

「お金目的で入ったんじゃないんだ?」

「……………くっ」

「じゃあ、一体何のために入ったの? って、いまさらだよねっ……………こんなことが職場にバレたらまずいでしょ?」

「……………くっ」

春雨は一応頷いたが、ここが既に職場だと言うことと、多分バレてもあまり影響がないだろうと思っていたが、彼女へのツツコミは控えた。ちゃんと腕を組めていない白露の不器用さも気になっていたが、かなり真面目なトーンで話しているので、これも抑えた。

「お姉ちゃんの言うこと聞く?」

「はい……」

「よし、ミニカーやるから白露についてきて!」

春雨を引っ張りながら東郷Uターンのごとく旋回した白露、春雨艦隊は、大佐の部屋に戻る。

「はあ! はあ! 司令の布団! 司令のベッドお! ゲツホゲツホ

……な、なんですかあなた達!」

「おらあ春雨押さえろお!!」

「なにするんですか流行らせコラ!」

「シメサバア! 抵抗しても無駄です!」

「ドロヘドロ! あなたたち、あなたたち二人に勝てるわけなしよ! (敗北宣言) 流行らせこら! 流行らせこら!」

大佐のベッドの上でじゃれ合っている三人。

ルームメイト月魔は彼の上で寝ており、有給休暇を自室での勉強に有効活用していた彼は、シビレを切らして二段ベッドから飛び降りてきた。

「だ、誰ですかあなたは!」

「月魔です、流石にベッドを揺らされるのは邪魔だと思いましたツツ」

「ストーリーそっち抑えてください! 三人に勝てるわけなしよ!」

「馬鹿野郎あなた私は勝ちますよあなたツ!! (秘書艦無双)」

—————

「みたいなことがあったんだよねえ、佐世保鎮守府の総司令さんと初めて通信したトキ。いや、いきなりプロレスが始まっているから何事かと思った。あんなに驚いたの深海棲艦出現以来かも知れないぜ」

「そうなんですか……」

隣同士に座る、アメリカ元帥のドグソドルジ提督、そして大湊から佐世保まで直接出向いてきた加賀提督。

ドグソドルジ元帥にとっては二度目の密会を行うようなものだが、計画された会合ではない。

加賀提督は諸問題の解決と第二次沖縄奪還により激化した海軍全体の動きに対応していた。彼女が指導する保守派は、永原少将を利用した目論見が大淀総長にバレた事で弱みを握られている状態であり、動きを封じられている間に派閥そのものが揺らいでいた。

名目上は「沖縄を管理下に置く佐世保鎮守府の視察、及び佐世保総司令との面会」だったが、赤城提督に会いに来たのが本音の七割ほど占めている。普段は現役時代を思わせる改造された青白の弓道着と、提督用常装を組み合わせたような制服を着ているが、町中を歩くときは一般人のようにカーディガンとロングスカートという私服を着こなす。

アメリカ元帥に偶然遭遇し、ノリで誘われたのは計算外だったが、彼女の本音としては話してみたかった相手だったので、いい意味で想定を裏切ってくれたと感じている。

二人の立場上の問題から、各々の側近やボディガードが合わさって、若干居心地が悪くなっているが、元帥は意気揚々とコーヒーに口を付けた。

「保守派って、やばいんだっけ？ ミス加賀が頭目だったって聞いたんだけど」

「その話はこういう所ではないほうが懸命だと思います」

「ははは、確かにそうだね。でも立場的にヤバイんでしょ？ 俺と手組まない？ 組んだほうがいいと思うよ？」

「お誘いに利点を見いだせないわ」

「俺、アメリカ海軍元帥、偉い、ユダヤ協会と政治界とコネある。そんな俺が持ちかければだいたい乗るし俺だったら乗るね。行く？ イク？ はい！ 交渉成立ウゥ」

「勢いには押されませんが……貴方の目的は何ですか？ 単刀直入に言

います、貴方は別にアメリカの為に辣腕を振るいに成られているわけではないのでしよう?」

「え、そう思っちゃう? 俺が利己主義のOur Americaを崇拜しないカスみたいなの?」

軽くあしらうドグソドルジ元帥だったが、加賀提督はどうにもこの質問を投げかけずには居られなかった。彼女は前線勤務から提督になった艦娘提督であり、相応の経験を積んでいる。

「度々見える瞳の紅い光……隠そうとしても無駄です」

「ずいぶんとロマンチックな事言うね加賀ちゃん」

「人間が出せるものじゃありません……最後まで言わないと駄目ですか?」

「ハア——ハハハ! ナルホド、流石ハ加賀提督!」

「まだあなたがたの正体については理解しかねている所ですが……人類を、内部から支配しようとしているのですか?」

「とんでもない! 所詮は個々の判断を持つ動物なんだよ。だから普通に攻撃されるし、はぐれは淘汰される、人類と同じさ。少なくとも俺は、自分は100%人間だと思ってるね。生まれも育ちもコーラを飲んで育ってきた。正直に言うとお船の上って気持ち悪くなる」

彼が言うことに嘘偽りが無いのは目を見て理解した。しかし安堵は、彼個人への疑念を振り払うまでには至らなかった。護衛からすれば別次元な会話中二病でしかないが、二人が話しているのなら特別な会話なのだろうと納得しながら聞いていた。

「合衆国大統領も俺には夢じゃないんだよなあ、軍人だし出身も合衆国だし。人種問題はともかくとして、大企業のバックアップがあればなんとかなる!」

「軍のコネクションではなく?」

「政府より企業が偉いのが民主国、企業より政府が偉いのが独裁。民主かつ政府直下の軍隊つてのは下の下なんだよ。日本は知らないけど、教養のある軍人が政治家や企業重役に転身する人が多いのは確かでしょ? もっと媚びてもいいのよ、うつつうくん」

「気持ちが悪いです」

加賀提督の立場を考えれば彼との人脈も悪くはないが、彼をどうにも好きにはなれなかったのは、多分性格からだろう。あり得ないぐらいにフランクであり、部下たちには好評がある人柄だが、対等の人間として話すならば、少なくとも最初の内は節度を求めるのは大人として当然である。これならば穴戸提督のほうがよほど好感が持てると……ドデカいスクリーンを見上げて思っていた。

「それにしてもこの映画いつ始まるの？ ソナタみたいな映画だよね？ 俺の隣で恋愛映画見るなんて……イケない子だ。近場にホテル街あつたっけ？」

「はいッ？」

「ごめんなんでもない」

映画館の中は混んでいなかったもので、当然ながら席は空き放題であり、座れる場所は数多かった。

一番真ん中に座るのがベストかと思われたが、そこも数多のカップルたちに占領されていたことと、古鷹が右側の列の後ろを所望したのでそちらにした。

アイスクリーム二人分とカップル用クソダサハート型ストロー付きXXLジュースなるものを買ったが、肘掛けの穴に入らない。デザインした奴はアホであり、これはレビューに星1を付けてSNSに載せないといけない事案である。

後方に時雨達の艦影確認、行動に入る。

「古鷹が恋愛映画好きなんて、少し残念だな」

「え、なんでですか？」

「俺たちより恋愛してるカップル、いる？」

「わ、わたしたちは！ も、ももう熟年夫婦の粋だから……！ た、たまにはこういうのもいいかな〜って！」

「ははは、そうか……じゃ、学生みたいにプラトニックに、手、繋ごっか？」

「は、はいっ……んっ！」

ふふふ、柔らかくてあつたかいお手でだな、食べちゃいたいぜ。コイビトらしい事をする度に顔まっかつかにする古鷹のほっぺも食べたいぜ。

と言うのはコイビトらしい台詞だろうか？

実は恋愛映画を片手で数える程しか見てない俺はゲームやアニメの知識を使って会話している以上、リアルな恋人的な会話ができないのがネックである。

誰かのプライベートな会話を録音するわけにも行かず、かとその場にいればそういう会話が聞けるとも限らない以上、多少ドラマチックな映画でもこういうところからも学べる。

人生とは勉強の連続なんだ。

イチャラブカップルがど真ん中に座ってるのにキスしまくりのエロ漫画かよ展開繰り広げてる。

アツチの老若男女チームは多分家族だろうが、入る場所を間違えたとかで高齢の婆を出口まで誘導し始めた。

最前列から中央手前までダイアモンド席を占領する団体客はなんだろう？ 制作スタッフか何かが興行収入貢献のためにでも来てるのか？ あるいはVIPの護衛？ 何れにしても禍々しさを感じるから近づきたくはない。

だいたい流行だった映画いつまでも流すなんてあまりいい傾向じゃない。地方の映画館だからって東京都部の流行が遅れて流れ着いたようなラインナップは流石に勘弁してほしいぜ。最近国内の映画があまり作られなかったのも要因だけど、近年客足の伸びが悪いから仕方がないけど、それでも映画業界は頑張っしてほしい。インターネットで違法に見るのも良くない。

待ち時間の間にCMが流れてるが、これも映画館の収入の一環を担ってる事を忘れてはならない。だからちやんと見てやるんだ。チョコレートCMなのに濃厚な恋人シーンが流れるのには少し気が引けたが、これも教訓を得るチャンスだと思えば、カップルを演じる男優の行動を真似して古鷹の肩を抱いた。

「あつ……あ、あなた？」

「嫌だったら、いつでも拒絶してもいいんだよ？」
「……………」

なされるがまま、頭を俺の肩に預けてきた古鷹の頭からシャンプーの匂いがした。磯臭エ俺にこんな密着するなんてイケない子だ。古鷹も恥ずかしながらもリラックスした表情を浮かべてる。お互いの温もりを感じながら有限の時を使い愛を確かめ合う。正に恋人だな。

海軍軍人としての節度をわきまえてる俺は、人生イキって公然とキスを始める畜生レベルの人間ではない。股間の正直さに耐えながら、柔らかな古鷹を、映画が終わるまで抱き続けた。

夕立は目の前にいるカップルの行動に対して放つ黄色い声をあげ損ねた。隣にいる村雨の指がコップを原型を留めないレベルでミシミシと丸め始めたからである。

「こわいこわい、村雨落ち着くつぽい」

「え、落ち着くつてどういうこと？」

「その開いた瞳孔なんとかして閉じろって言ってるんだよ夕立は。気持ちは分かるよ？ あのまま映画過ごす気？ いくらなんでもやりすぎじゃないの？」

「時雨大尉、恋人ならアレぐらいは当然かと……………」

「近衛少尉くん、君にツッコミ入れる権利を与えた覚えはないと思うけど」

「酷い……………」

「冗談じようだん、でもアレ見てどう思う？」

「クツ……………！ 俺なら公然キスぐらいはしてあげられるのに……………！」

「古鷹が望んでる事を察してあげられない時点で負けてるんだよね君……………」

デート大作戦！ 8

長崎警備府執務室。

部屋に不法侵入した親潮と春雨は白露によって連行され、二人の異常性愛事件の処理を懇願した。

「ご苦労だった白露少佐。確かにこれは解決すべき事案であり、警備府司令官の範囲で処罰をしなければいけないのは誰の目から見れも明らかだ」

「ぎ、聞いてください司令！ 親潮が司令の部屋に侵入したのは春雨さんが司令のベッドをクンカクンカしていたからであって、それがなければ入らなかったです！」

「でも親潮もやってたよね？」

「うう……た、たしかにそうですけどお……し、司令ならわかってくれますよね!? 司令のお部屋に入ったのはそういう目的じゃありません！」

「その前に司令というのは私の事を指してるのか宍戸の事を指してるのかどっちなんだ。いい加減に決めてくれないと私の方がバグリそうだぞ」

「じゃあ今からは宍戸司令を龍城さんと呼ぶ事にします！」

「ならんツ！ 婚約していない男女が下の名前で呼ぶなど破廉恥極まらないッ！ たとえ海軍大臣が許しても私が許さん」

「感性古すぎ……」

「何か言ったか白露少佐？」

「なんでもなーい！」

腕を白露級の腕力で拘束されている親潮は結局、宍戸司令と呼び名を改める事を警備府司令官の前で誓い、改めて事実確認を行う事にした。

経緯はすべて白露が話してくれた。ここにいない月魔も当事者だが、そもそも事件というにはあまりにも馬鹿馬鹿しいと思っていた斎藤司令官は面倒くさかったので呼ばなかった。白露の代わりに憲兵

としての資格を持っていた月魔を召喚すべきなのは百も承知だが、目の前にある書類を終わらせる為にさっさと済ませたいのが本音である。

「というより、秘書艦の親潮がいないと困るのだ。」

「今回は不問にするが、穴戸の部屋に入るときは彼がいる時にしなさい」

「はッ！」

この程度で済むのは警備府全員がお祭り騒ぎの見知り同士だからである。例えば巨大な佐世保、あるいはそれ以外の四大鎮守府という、巨大さ故に各々のコントロールの効かない場所ならば、この事件は正式に憲兵隊から事情聴取を受け、海軍省法務局へ書類が送られ法的措置を取られるのがオチである。そこから発せられる様々な問題は、基地の威厳、秩序、風情を損なうだけでなく、場合によっては上官が責任問題を追求される可能性もある。

穏便に済ませる場合は、当事者に何らかの処罰を与えるのがセオリーだが、何れにせよこういう処置は顔と事情を知られているから“次は気をつけろよ”の注意一言で済ませられる。

「彼は入出を頑なに拒否しているわけでもないが、あそこは月魔さんの部屋でもあるのだから、もう少し自重を心がけてほしい」

「すいません……」

「そういえば穴戸くんってドコにいるの？ 用事とか言ってたけど……」

「ああ、彼なら佐世保にいる。たしか古鷹秘書艦と会う約束があるとか……」

「「なんですって!?!」」

デートの件を知った三人は見開いた目で司令官に差し迫る。

「ど、どこですか?! あ、いや、古鷹さんなら佐世保鎮守府にいるはずだからそのへん……で、でもおかしいですッ!! なぜ穴戸司令は私達にそのことを知らせなかったんですか?!」

「そうやって感情高ぶらせ、阻止される可能性があったからではないか?」

「阻止なんてしませんツツ!! 秘書艦より大事な要件ができるだけで
すツツ!!」

「お兄さんが……デート……ツツ」

「いや、会う約束があるで行っただけでデートとは言っていないが
……」

「甘いよ斎藤司令官くん! 男と女が会う約束……それ!! アイビキ!

現代社会では常識だよ!」

「そうなのか……しかし穴戸の動向より業務を優先してもらいたい。
特に白露少佐、佐官になった以上は指揮の勉強や佐官としての基礎教
養、知識ぐらいは付けておけと穴戸からも言われているだろう?」

「ちや、ちゃんとしてるよ! でもね、勉強って頭イタイイタイする
んだよね! だから穴戸くんの部屋に入って昔の書類とかちよこ
くつとコピペしたりすると、すぐ勉強になるんだよコレが!」

「高等学校の宿題じゃないんだぞ。まったく……まあ確かに、先人か
ら知恵を借りるのは良いことだが、この調子だと鈴谷少佐も気になる
な……」

「鈴谷はやる時は意外と勉強熱心だから大丈夫だよ!」

「正直に言えば意外だが、失礼に当たるので心に留めておこう」

「言葉に出してゐる時点で失礼です」

「とにかくツツ!! お兄さんがこの春雨を置いてデートなんて許され
ざる所業ですツツ!! 今にでも最速で到着する為に出撃をするのも
やぶさかじゃないですけど春雨は成長しました! この際は、時雨姉
さんたちの動向を探るためにお兄さんのパソコンを開かせてもらい
ます!!」

華奢な少女の姿は一変、毘沙門天と化す。

「ま、待て春雨少尉! 先程部屋に入る事について気をつけるように
と言ったばかりではないか! 多少の素行には目を瞑るが、目の前で
宣言されたとなつては止めなければならぬだろう!」

「お兄さんが没にした国際防衛理念と連邦体制の意義についての論文
を司令官にあげますから!」

「じゃあ仕方ないな、私も部屋に付いていくとしよう」

「兄さん!?! い、いいえ司令何を言ってるんですか!?! 自分の欲に動かされて業務を放棄するなんて、それでも司令官ですか!?!」

「親潮、お前には言われたくない。あとこれは立派な業務だ。司令官直々に部屋の抜き打ち検査をする事は度々あるだろうに……」

書類管理は既に終わっているので、斎藤司令官が残す所は人事部が提出予定の休暇願いの書類だけだが、滞っているらしいので事実上の小休止である。

落ちぶれた司令官は部下に仕事を押し付けて、小休止を休暇にする場合がある。正式な休暇ではない為、仕事をしているようにして一日中エロサイト巡りをする、言わば窓際社員のような現象が起こっていた時期がある。

斎藤司令官はもう仕事を終わらせている。空いた時間でも先の仕事や兵員に至るまでの問題、状況の把握に努めている。一度ぐらい自分の欲を出して、しかも海軍関連の事であるから、穴戸大佐の部屋に出入りする彼を見た人々が彼を咎めることは無かった。

「というわけで穴戸くんの部屋に着いたよ!」

「な、なんですか白露さん!?! 春雨さんと親潮さんを司令官の所に連れてったんじゃないんですか!?!」

「邪魔をしてすまない月魔くん、話が変わったんだ……春雨少尉、資料は私のアドレスに送っておいてくれ」

「はー!」

今度は堂々と侵入した団体が先に目を付けたのは穴戸大佐の使い古されたノートパソコン。パスワードは緊急時に他人が開けるようにと時雨や一部の信頼できる部下に教えているため、容易に中身を開くことができた。

春雨は最初、論文ドキュメントをコピペして斎藤司令へ警備府内通信を使って送り、秘蔵フォルダーの中を調べた後、メールアカウントの中にある文章を調べていた。

斎藤司令官は最初、何故デートしている事がバレたら穴戸の部屋に行くのか疑問であったが、その答えは開かれた文章列を見て察しがついた。

「これは……」

「そうです！ お兄さんがデートに行くとき、必ず計画をデータ共有型のドキュメントに記しておくんです！」

過去の計画書類の中には村雨とのデートの際、行く場所、行つてはならない場所、使う金額の上限、各々に合わせたマナーや好き嫌いなどが書いてあった。名前の横に書かれた優日や劣日などの造語は多分、生理周期の優劣を意味しているんだろうと斎藤司令は察した。

中には時雨と出かける際に必要ものや、民間、海軍関連に分けた緊急時の対処方法、お見合い時のマナーの一覧表などが事細かに書かれており、物事に対する用意周到が垣間見えていた。それだけならいいのだが、備考欄に書かれた、さしずめ論文のような文章の数々は四人を引かせるのに十分だった。

当然ながら最新のフォルダー内にはデートプラン表がある。名前は書かれていなかったが、古鷹とのデートだと確信した面々は、そこに書かれていた内容に驚いていた。

「My Sweet Honey……？ き、ききき……」

「まさかここまで用意してるとは……」

臭いセリフ集。ド直球なネーミングの下に書かれた備考欄の言葉の数々は口が裂けても言えないような恥ずかしいものばかりだった。状況に合わせた、実用的な臭いセリフをネットや周囲の部下から掻き集めていた彼は、デートの最中に度々スマホを開いていた。

共有フォルダーの中にあるセリフは、多分今なお使われているんだろう。忘れた時に開いてセリフを見る作業をリアルタイムで繰り返し返しているのは、横にある使用済みのチェックマークを見て理解した。

「これはキモい」ここにいる全員の総意だった。

「春雨少尉、これを消すつもりか？」

「いいえ！ 変更するんです！ お兄さんが理由もなくこんな汚いセリフを用意してるとは思えないですけど、流石にきも過ぎます！」

「なるほど、穴戸の名誉を守るためか。出来た部下を持ったな穴戸……いや、確かにこのようなセリフを数ページ分用意しているなど後世の恥となる事案だが……親潮はどう思う？」

「宍戸司令がこんなに周到にデートを……お見合いの時だって、私にこんな台詞言ってくれなかったのに……やっぱり古鷹さんの方がいいんですかあじれええええ!!」

「聞くべき人を間違えたな、白露少佐はどう思う?」

「キモいの一言だね、これは事案じゃなくて事件」

「そうだな、早急に対処しよう。しかしどうするつもりだ? 恥をかかせないために改変するのはいいが、美化させるわけでもあるまい」「改変じゃなくて改悪するの」

夕方の時間帯。運動会の後ということで、後日激痛に襲われないようにと古鷹がデートスポットに示したのは、鎮守府近場のカフェ。近所に構える小さな店だが、静かすぎて逆に死んでいるとまで言わせるカフェは事前情報により得た憩いの場所である。

こんな小さな店の中では確実にバレるはずだと少尉は指摘したが、宍戸と古鷹はラブラブになると周りが見えなくなる、と強引に店内へと誘われる。地獄耳でなくても聞こえる店内で、二人は一番角の席をとった。

『あ、あなたつ、一位、おめでとうございます!』

『ああ……誰かさんが応援してくれたからかなつ。この金メダルをもらったもの、全部その人に捧げるためだった……そう思ってたら、勝手に一位を取ってた』

『そうなんですか? ……あ! そ、その誰かさんも……あなたのお役にたてて、嬉しいなって、おもってるはずですよ』

『そう? でも、やっぱりこんな金メダルじゃ、俺満足できないよ……』

『え!? だ、だって、佐世保鎮守府を挙げた大きな運動会だったんですよ!? それなのに……』

『違うんだ古鷹、俺もう、大きすぎる金メダル貰ってたからさ、感覚が肥えてるんだと思う……俺の感覚を狂わせた、人生で一番の金メダル……』

古鷹の手を握り、見つめる。

『古鷹っていう、俺の、人生の金メダル……』

『あつ……』

「……ッー」

時雨は「キッツキッツキッツキッツモー」と口の中で爆発しそうだった。夕立は村雨の貧乏ゆすりを止めるために、彼女の足の上に自分のを置き、ガイアの目覚めを鎮めていた。

せっかく佐世保まで来て演出まで完璧にこなした少尉は今までの努力を踏みいじられたように抜けた顔をしていた。

「……あのく、ご注文はなにになさ」

「ブツ!! ……こ、コーヒーで」

「フラッペっぽい!」

「アーモンドミルクグラノラフラペチーノオネガイシマスッ」

「お、俺もコーヒーで……」

『そういえば頼んでなかったね、古鷹といると、時間まで忘れちゃうな、ははは、時間泥棒な古鷹っ』

『す、すみません……』

『うん、許す。でも時間泥棒古鷹はその分、自分の時間を俺に尽くしてくるから、好き。これって、エデンの法則じゃない? 学会行けちゃうかもね、俺』

『ふふふっ、学会に行ったら、あ、あなたという時間が少なくなっちゃいますねっ……』

『いや、そうはならないね。なぜなら、発表は二人ですからだよ。これは、二人の研究なんだから。時の神クロノスでも、俺たちを引き裂けない……おっと、また立証しちゃった。愛の神アプロディーテーも、俺たちにだけ愛の力を分け与えるなんて、世の中不公平だねっ』

「離して、宍戸さんの言う通りアレは周りを不幸にする、村雨が保証するわ、だから、村雨の、ちよつといい教育ッ、付けてくるわッッ」
「落ち着いて村雨! 大丈夫! 大丈夫だから!」

ハア……時雨たちが暴れているが、俺たちは他人などアウト・オブ・眼中を貫くカッパルを演じなければいけない。古鷹は可愛らしい笑顔でデートを楽しんでいる。あのイケメンを諦めさせるといふ当初の目的を忘れているぐらいだが、度々放ち続ける気持ち悪いセリフにも機転の効いた言葉で返してくれるから助かる。

そろそろ記憶容量が限界に達したので、スマホを開いてセリフの一覧表に目を通す。最初、言葉を放つ事を意識していたが、途中で作業的になり淡々とした感じで喋っているが、コレが逆に自然さを生む。アドリブを含めてセリフを放っていたが、それだけでは限界があるので用意させてもらった。普遍的に何も起こらない上、観察材料も少ないカフエでは用意した文章だけが頼りだ。

ドラマの俳優とかも、特に感情を入れずに、ただどんな人物を自分が演じているかを理解しつつ、淡々と演技するのだろうか。セリフに対しては特に感情を持たないまま、怒ったり笑ったりしてるのかな……と思いつつ、時間を見ているフリをして作業的にセリフを読み上げるため、テーブル上にセリフ集を開いたままカンペ読みする。

こういう計算されたセリフって女子は喜ぶもんなのかな……後で時雨たちに聞いてみよう。

「愛の神様アプロディーテって言えば、神話見ると分かるけど倫理観に乏しい男の愛という名のセクロスに飢えたクソビッチだよね」

「え」

『『え』』』

「他のイケメン野郎と寝まくるチ○ポ大好きマ○コで近親ともやるといふ今だったら法律という名のオリュンポスに裁かれるよね」

……どうしたんだ古鷹？ 返事してくれないぞ。

「あと陰茎から生まれた神もいるらしいじゃん。ソイツの子供の頃あだ名絶対チ○ポでしょ」

「っ」

古鷹、なんでそんな顔で俺を見るんだ……まるで俺が変な事言ってるみたいじゃないか。

「俺の硬化二重二刀が火を吹くぜー、宍戸司令なんでデートなんかに言ってるんですかねんで言ってくれなかつたんですか……宍戸この論文誤字があるぞ、古鷹さん！俺は視姦よりアオカンのほうが好きですぜーヒヤッハー！兄貴！ここにあるセリフはもう使えません！春雨さんたちが妨害してーお兄さん帰ったら説明してもらえるんですよツ？ちよ、待ってくださいまだ司令に書きたいことがだだだだぐぐぎぎかかかかあああうううしししぎじぶくききき……」

「あ、あなた……？」

……はは、なるほど、そういうことか。

俺のパソコンの中にあった共有ファイルがハックされている。多分俺の部屋に侵入したんだろう。

クソオ!! 邪魔しやがって!! 帰ったら誰がボスか、分からせてやるウ!!

「ふう〜、美味しかった……古鷹、飲み終えてないの？」

スマホを閉じたあと、何事もなかったかのように戻るが、完全なるアドリブで乗り切らなきゃいけないのは厳しい。考える俺、今までの教訓の全てを古鷹にぶつけるんだ。

「すいません、私ってば、いつも飲むのが遅くて……」

「いやいや、そこは”どういたしまして”だよ？」

「え？」

「古鷹が飲むところ眺められる……多分俺の中のクロノスが、そのために時間を早めたんだと思うな、ハハハ、粋な事をする神様たちだなっ」

「え？」

飲んでいたコーヒーが対になる少尉の顔に拭き掛かりそうな勢いを何とか唇の筋力で止めた時雨は「聞き返されてるじゃん！」と今にもツツコミを入れそうだった。

レベルが低いのか高いのか判別できないようなセリフを吐きまくる宍戸。夕立もいい加減に笑いそうになっている状況であり、これ以

上のぶっ飛び発言がない事を祈るしかなかった……が、幸いにもお互いを見つめ合う、手が触れ合うなどの行動が目立つだけで、目を背けていればギリギリ爆笑を耐えられるようなモノばかりだった。

デート大作戦！9

夜のロマンチストが選ぶ場所と言えば必ず候補に上がるのが公園である。一組の男女……古鷹と穴戸大佐が大勢の尾行部隊を連れて入るが、それを阻む者も居た。

二人の半径百数十メートルの所に、とある集団が跋扈していた。人気の少ない公園への出入りは、その規模から一般人でも阻止されていた。

「ほう……ベリングハム少佐、これはどういう事だ？」

「申し訳ありません F a d m. ……元帥、貴方の頼みでも、ここを通すわけにはいかないのです」

陽炎三姉妹とベリングハム少佐はドグソドルジ元帥の行く手を阻んでいた。加古、足柄、御手洗少尉、更には加賀提督とその護衛を合わせた大勢に立ち向かう形で、公園への道筋を断っている。

「俺の細胞がここにいて知らせてる以上、マイサンはここにいて見て間違いねえ。ただ会いに行くだけ。その絶好のチャンスが今あるのに、今まで協力的だったお前が何で阻む？」

「事情を知っているからです。彼と貴方を会わせるべきではないと、そう確信しているからです……K a g e r o u たちもそう思つて、今私に協力してくれているんです」

「え、いや、別に個人の事情とかは知らないけど……でも、古鷹とのデートは邪魔させたくない！ アメリカ軍の偉い人でも、二人の邪魔するんだったら容赦しない！ 黒潮と不知火もそうだよね！」

「正直お偉いさんに歯向かうんは、ちよおくと抵抗あるけどなあ？ でも、うちらもこんぐらいはせーへんと、古鷹はんに協力した事にならへんし」

「司令と古鷹さんがここにいる理由は私達にあります。すべて上手く行くまでは見守る義務があると、不知火は思います」

古鷹本人にとっては役得であった本心を知らない陽炎たちにとっては、

「クク——イイ仲間をモツタもんだな——加賀提督、この四人は強敵

だぜ。ここを突破するには、護衛だけじゃ無理だ。力を合せて一緒に突破スルゾオ！」

「は？ 何故私が協力しなければいけないのですか？」

「え……」

加賀提督は呆れた顔をしながら部下と共に去っていく。もともと、赤城提督が待っている佐世保鎮守府に行く道が同じであっただけで、隣同士で歩いていた彼を疎ましく思っていたのが本音である。

「クソオこれだから艦娘はア……！ こうなったら……加古！ 足柄！ S i t . 御手洗！ この不屈き者たちの相手をしろ！」

「え、やだ」

「え……」

弾丸を腹に食らったような顔をする元帥。

加古、足柄、そして少尉は陽炎たちの方に寝返る。

「個人的な事で悪いけど、姉ちゃんである古鷹のデートの邪魔はさせられない！」

「同じ個人的な事ならいいんじゃないかしら？ この足柄も力を貸すわ！ まあ私だけじゃないけど」

「……え、俺もっすか？ 俺としてはどうでもいいっていうか早く帰って砲術の研修に備えたいんですが……加古さんが上官に説明してくださいるのでしたら協力もしますが……」

「心配御無用！」

「了解です」

「なるほど……俺の前に楯突くか……いいだろう、相手してやるツ——死又気デカカツテコイツ!!」

「「オラアアアア!!」」

公園は噴水による月下光の反射で幻想的に彩られ、夜な夜なカップルたちのアオカンが目に見える絶好のデートスポット。

公園の外には若干の騒がしさがあるが、愛し合う二人にとってそれは蚊の囁きのように聞こえた。至近距離にいても話し声は二人に届

かないだろう。

月も照れるような美男美女が手を繋いでいる。

お互いの体温を感じ合うプラトニックさ。

いい加減ウザさとキモさの二文字が隠れる時雨たちの脳を支配しつつある。イケメン少尉を消沈させる為、公園のど真ん中でキスをするといい難題が残されていた二人。

噴水を眺める為に設置されたベンチで古鷹は段々と慣れてきたのか、頭を肩に乗せた。この一日で詰められた距離を考えてみれば、古鷹にとっては役得であり、終盤はニコニコしていた……真後ろにいる四人の気配も気にせず。

「これは完全に穴戸さんに惚れてる、夕立の恋愛センサーに狂いはない……少尉はどう思うっぽい？」

「見ててキツイです。疑問に思ったのですが、大佐は護衛を付けなくてもよろしいのですか？ 普通彼ぐらいの地位にいれば兼任の秘書艦か、専任の護衛がいるはずだと思うのですが……」

「穴戸くんだから大丈夫だよ、ああ見えて普通に強いから」

「真後ろにいるのにも関わらず気づきもされないのはあまりよろしくない傾向かと……」

「それは……ほら、僕たちが護衛だからっ」

他にも妹設定を続けるなら何故名字呼び、さん付けなのか問いただきたいところだが、近衛少尉は既に気付いていた。これは多分、自分を諦めさせるために仕組まれた演出であり、算段なのだ。

誰かと付き合っている事よりも、ここまでして自分を否定されたのは彼の人生で初めての体験となり、覚悟を決めるように、息を大きく吸い込んだ。

「やはり、自分では足元にも及ばない、ということですか……いや、清々しい」

「え、ちよー！」

茂みの中からこんにちわ、近衛少尉は時雨が牽制する前にベンチの横から出てくる。

「こ、近衛?! な、何故君がここに……」

「古鷹さん、お騒がせして申し訳ありませんでした……自分は、素直に身を引かせていただきます」

「こ、近衛さん……？」

長いデートを満喫していた俺と古鷹。

それ以上の事は言わず、突然出てきて、去っていった少尉。聞きたかった言葉をそのまま言ってくれたので、こちらとしては楽なんだが……アツサリとしてるな。そのためにここまでして計画立てたんだから、駄々こねられたらコツチが困るので、計画を立てた甲斐があったというもんだ。このまま大湊まで帰って二度と戻って来ないで。

「ご、ごめん穴戸くん、急に飛び出して行ったから……」

「いや、この結果を引き出すためにここまでやったんだから、これでオツケー……古鷹は、これで問題ないよね」

「は、はい！ えつと……はい」

「よし！ これで、このデート見せつけ作戦は成功に終わった。飯でも食って帰るか！」

「そうですねエツ」

「村雨まだ顔がブルドッグになってるっばい……」

「誰がブルドッグ!? グギギギツ……!」

どちらかと言えば般若だけど……せつかくの天使の顔があんな事に……。

「……………」

「……古鷹どうした？ あ、なにか食べたいものもある？ 男女平等の俺様はおごらないのが主義なのに結果的に奢ってしまうイケメンムーブな俺は、古鷹がいる今、トクベツな奢りムーブしちゃうから」「かわいい女の子に奢る事がイケメンムーブだと思ってるなら黙って奢った方が効果300%ぐらいあがると思う。あ、これつまり言うだけで効果激減って意味だからね？ 人によつてはマイナスムーブになっちゃうかもっ」

「俺よりボーナスもらってるかもしれないのに奢りムーブで喜ばない艦娘様降臨!? 俺に奢られて感謝しろ時雨」

「二グルルルウ!!!」

「……………」

イケメンが帰っても俯いたままの状態にいる古鷹。

一言も発さず、かと言ってなにか言いたげな様子ではない。時雨とドンパチやっている隙に、古鷹はゆっくりとした手つきで、俺の腕を掴んだ。

「…………古鷹？」

「っ！」

「あ、ちよ——」

強引に引つ張られた。

突然の移動で千鳥足になりながらも、古鷹が誘導する方向へと引き寄せられ、立ち止まったのは公園の中枢を意味する噴水。

「古鷹こんなところで何を——っ！」

「んっ……………」

「…………え？」

顔を勢い良く近づけた古鷹の柔らかい唇が、俺の頬に当たった。

桃色の、甘い匂いがした。

胸元に手を置かれ、何十秒間——現実時間では、5秒ほど固まってしまった身体が、変な体制のまま古鷹の体重を受け止めていた。

唇が頬を離れ、これでもかというぐらい真っ赤になった火照り顔を俯かせたが、手は離してくれなかった。

「…………デート作戦の、最後のキスシーン」

近距離から聞こえる小声。

古鷹は、上目遣いでこちらを見上げた。

「計画通りに終わり、ですねっ…………えへっ」

「ふ、古鷹…………？、こ、これはもうやらなくても良かったんじゃないっ…………」

「…………私の気持ちも、これで伝わればいいなっ」

「村雨しっかりするっぽいッ！ 暗くて見えなかったかもしれないけど、アレほっぺたっぽい！ マウスツーマウスじゃないっぽい！」

「だ、大丈夫よ夕立つ、少し貧血気味で…………」

「……面白くない」

—————

一旦帰る素振りを見せた近衛少尉。

あのように潔く引き下がれるような人間は存在しない。

彼は少なくとも、古鷹と大佐の関係性を確認したいと思い、髪を引っ張られるように立ち止まったただけなのだが……結果的に古鷹の行動が、本当の意味でトドメを刺してしまった。会話を聞き取れない距離にいたのも要因だが、キスシーンがとても印象的に残ってしまった。

「……演出だの何だのと自己完結して出てしまったけど、やっぱり彼女の心は……クソツ、俺の恋路は、どうしてこうもうまく行かないのか」

不貞腐れながら数十分程度、近場のコンビニに寄り、テーブルにのたれかかる。

だがすぐに出て、適当な道を歩きながらスマホで明日のスケジュールを確認していたが、今日を休日にした分の仕事が、マネージャーからミツシリと綴られていた。自分の人生には、恋以外にあるのだと、今の気持ちだけでも抑えるように、近場にあつた石を未練と共に蹴り飛ばした。

しかし、飛んだ石が向かった先には人がいた。

幸い当たらなかつたが、ボクシングポーズを構える彼は石よりも目の前の敵を見下ろしていた。

「いよいよ、来いよ」

余裕を見せる元帥に、ベリングハム少佐は引きつった顔を見せた。

「クツ……私でさえも、貴方には届かないという事ですか……!」

少佐率いる陽炎軍団は激闘の末、護衛は倒したが、ドグソドルジ元帥一人には及ばなかつた。戦闘能力で言えば最も長けている足柄でさえ膝をつけてしまう中、一行は窮地に立たされていた。

多勢に無勢状態の元帥だが、優勢に立っているのは明らかであり、

膝をつく集団の中には同期の御手洗少尉の姿もあった。独特な倫理観を持つ彼だが友人に關しては人一倍気をかける性格であり、体が勝手に動く……かに思えた。

「フフフ——貴様ラには、我ノ足元ニモ及バナイトイウコトヲ、そのカラダニモツト教工込コミ……ん？ この気配！ まさか——」

「フンツ!!」

「ギャアアアアア——!!?」

ドグソドルジ元帥は後頭部にハンマーパンチを受けて倒れ込む。唐突に倒れ込んだ事に驚愕するが、その感情は間もなく救援への感謝へと変わる。

「「穴戸さん!」」

「何やってんだお前たち……」

穴戸大佐は殴った手を痛々しそうに振っていた。

すぐに彼へと詰めかけたベリングハム少佐と足柄。

「だ、大丈夫なの？ アメリカ軍のお偉いさんを殴ったりしたら国際問題になるんじゃない……」

「大丈夫ですよ足柄さん、俺が殴ったって言えばいいですし、一部始終を記録してたんですから、どちらが悪いかは明らかです。コレの監視、ありがとうございます」

足柄は穴戸大佐から内部調査を頼まれていた。元帥に同行していたのも、動向を監視するために行っていた。何かあれば牽制も頼んだのだが、予想以上の戦闘力に苦戦してしまった事に、足柄は不甲斐なさを感じていた。

「流石ですCaptain。窮地を救っていただきありがとうございますました」

「いや、この公園の近くにいたって事は俺に接触する可能性が高かったってことだ。それを止めてくれたんだろうから、礼を言うのはコツチだ……けど、なんでここにいるかはちゃんと説明してくれるだろうか?」

「は、はい！ もちろんです！ 気になって後をつけていました」

「貴様素直に言ったら怒らないでも思ってるのかオラア!! 陽炎た

ちもその口だね、匂いでわかるよツ!？」

「なんで匂いで分かるのよ……あ、いや、ごめんなさい、確かに軽率な行動だと思う」

「まあ来るなどは言っていないし、それにコレの粛清にも尽力してくれたみたいだしな、むしろ助かったよ」

「じゃあなんで怒鳴ったし」

「ごめん、丁度時雨たちと古鷹の口論から抜けだして来たところだからテンションがね……」

「古鷹が!? あたしも参加する!」

加古は勢いよく艦船派の士官を引っ張って行った。

「作戦は失敗したのですか?」

「いや、成功したからというかなんというか……まあ、別に問題ないからいいだろそんなこと。それより帰ろうぜ。俺たちの警備府に」

「……………」

公園にいる古鷹たちに目を向けたみんな。

『なんでキスしたんですか!? 簡潔に説明してください!』

『で、でも最後までやらないといけないって思ったので……』

『そういう行動が男を勘違いさせるんだよ古鷹っ、別に怒ってないけどねッ』

『ま、まあまあ二人とも落ち着くつぽい! 古鷹も別に損してないし、

宍戸さんも鼻の下伸ばして喜んでたし、万事オツケーつぽい!』

『『良くないツツ!!』』

「……………」

古鷹たちの会話はこちらから聞こえるような距離で話されてなかったが、戻ってきた加古が「宍戸さんが古鷹にベロチューしたんだって!」と膨張を甚だしい報告を入れてくる。

「……帰ろうか、我が家へ」

事情を説明しながら帰投する俺たちの艦隊は、今日も平和に、そして楽しく、お祭り気分が抜けなまま、夜を越すのだった。

とは簡単に行かないのがこの世の常である。

警備府の一室。

「さて穴戸くんここで問題です、なんで白露は怒ってるのでしょうか？」

「怒ると老けますよ、いだだだだイタイイツイツ!! 何するんですか!? っていうか、なんで拘束されてるんです!? 親潮! 春雨ちゃん! 理由を知っているのなら無知な俺にお聞かせ願えない!」「ふんっ、知りません! 私達に内緒でデートに行くような人には特に!」

「フフフ——」

恐怖である。

帰ってきて早々に尋問を受けることになった俺は、両手を縛られて拘束されている。

理由は親潮が述べた通り。

これが作戦だった事は当然ながら考慮に入れてもらうべきだが、それを話さなかった事に対して怒ってる以上、俺からは何も言えない。

村雨ちゃんはへそを曲げ、時雨は面白そうに笑い、夕立ちちゃんはそもそも関わりたくないから早々に退場してしまった。

「ごめん……言わなかったのは悪いとおもってる。でも言ったら任務放棄して来そうじゃん。陽炎たちにも待機命令してたのに破りやがったじゃん。そういうところだぞ」

「放棄しませんって! 親潮たちをなんだと思ってるんですか!? だいたい、デートが古鷹さんを助けるためだったとしても一言ぐらい声をかけてくれるのが筋じゃないんですか!? 司令には言っておいて私に言わないなんて……代わりに、私もデートを要求します」

「な、なに言ってるの!? 白露もデート行きたーい!」

「春雨ちゃん、この人たち止めてくれたらデート行ってあげるよ」

「了解ですっ!」

殺気の波動に目覚めた春雨ちゃんやんは白露さんたちを追いかけ回し、その後鈴谷たちが参入してバトルロワイヤルになった事は言うまでもない。

その後パソコンの中にあつたファイルが三人に改ざんされていた事を知ると俺が優位に立つ。斎藤司令もそれに参加していたことを知ると俺は謝礼として艦船派を懐柔する手助けを頼み、なおかつ月魔の他に、白露さんと鈴谷、そして異動が決定した初霜の提督科への編入を推薦させる。

アメリカに旅立つ前に大まかな仕事を処理し

俺を取り合う天使たちに見送られ

この身を

アメリカに旅立たせた

愛しい人たちを残して。

・
・
・

数十年後

白い一軒家。

テーブルを介して子供と対になるダンディイケメンが、どうでもいい昔話にふけていた。

「というのがね、むかし、パパがアメリカに行く前にあつた事なんだ。帰ってきてからもね、沖縄とかフィリピンとか色々な所に行つて、その都度、女を無意識に落としまくった記憶があるよ。もちろん、今はお母さん一筋だぞ？ でもなあ……いやあくあの時はモテたモテモテまくリングの俺様って感じでき！ まあ、今もモテまくってるんだけどね。ハハハ！」

「……ねえ、ママ」

「どうしたの？」

「この人だれ？」

「っ……」

男は絶句する。

「この人はね、お父さんだよ」

「ちよつと顔覚えてない……」

「っ……し、仕事ばつかでめったに帰ってこれないのは悪いと思ってるけどな？　で、でででも、パパだってこれでも国家の重役として……」

「ふんっ」

そっぽ向かれる。

「……っ！」

「ちよ、あなた！」

涙を流しながら、自分の家を飛び出した。